

火守女と灰と高校教師(完)

矢部 涼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校で教鞭を取っている戸水貴樹は、ある時夢にまで見た世界で目覚める。憧れの彼女にも会えることだし、完璧だ。と、彼は考えていた。

——彼の担当するクラスの生徒全員が、一緒になければ。

*原作との矛盾、ずれが著しいです。

*誤字・脱字報告は大いに助かります。

目次

起：火守女の灰

1.	狂喜の男	1
2.	審判者の洗礼	23
3.	貴樹、逝きかける	44
4.	使命	56
5.	シモダアキヒロ	71
6.	ぺちやくちや残り火	97
7.	室内訓練	112
8.	屋外訓練	137
9.	集団訓練	153
10.	初陣	171
11.	薪	192
12.	イリーナ	216
13.	下田隊の受難	235
14.	結束のために	256
15.	深みの聖堂	279
16.	転換点	296
17.	祭祀場襲撃	315
18.	誓約を結ぶ	338
承：薪の王達		
19.	貴樹 対 火継ぎ肯定派	366
20.	訪れた別れ	385
21.	姉妹との心理戦	408
22.	法王の試練	429

2 3.	貴樹 対 火継ぎ否定派	449
2 4.	使命を遂げる	471
2 5.	落伍者の追想	497
2 6.	シフィオールス	520
2 7.	代償と逃走	540
2 8.	仲間	559
2 9.	絵画世界の出会い	586
3 0.	ありえない再会	607
3 1.	姉弟の微笑ましい交流	638
3 2.	禁忌	660
3 3.	脱出と代償	680
3 4.	再遠征	708
3 5.	罪の都	726
3 6.	実家訪問	748
3 7.	翻弄される下田	768
3 8.	天使とゲルトロード	787
3 9.	崩壊、降臨	814
転：下田の一週間		
4 0.	取るに足らない六日間	837
4 1.	あがく	862
4 2.	憎悪	887
4 3.	下田 対……。	902
4 4.	勝利条件	931
4 5.	数的不利	953
4 6.	自己分裂	977

47.	下田 対 ジークバルド、シリーズ、フオドリック	999
48.	理不尽ゲーム	1020
49.	双月光	1051
50.	死にゲーの魅力	1072
51.	ヨルシカの実力	1101
52.	白光と雷光	1130
53.	悲劇	1166
54.	喜劇	1194
55.	火守女の灰	1228
結：暗い魂（ダークソウル）		
56.	反逆者達	1259
57.	合流	1283
58.	死闘	1300
59.	下田 対 オーンスタイン、スモウ	1325
60.	人間性を捧げよ	1354
61.	撤退戦	1376
62.	トリオ	1403
63.	下田彰浩と高原ちとせ	1420
64.	家族喧嘩	1439
65.	女関係の整理	1467
66.	真実とこれから	1490
67.	輪の都会談	1510
68.	結着、そして婚姻成立	1533
69.	母親	1548
70.	戦争準備	1579

7 1. 存在を賭けた戦い

7 2. 深淵の主

7 3. クリア

終. 火守女と高校教師

1684165816341611

起：火守女の灰

1. 狂喜の男

今日、私の隣にいた子が捧げられました。

耳を澄ますと、その子と御神体様の声が聞こえてきます。体をさらに丸めて、耳を塞いで。そうして私は、聞きたくないものから逃げようとするのです。

「いいねえ、いいねえ……。アナタは中々良い肉をしているよ」

「ああ、ああ」

「特に良く育った乳房。ほら、見てごらん。こうして開いて見ると……、おお、なんと素晴らしい。歯応えのある脂肪だねえ」

あふれんばかりの叫び声が、耳の中に飛び込んできます。塞いでも塞いでも、入り込んできます。体の震えは止まらず、爪を噛みながら、私は生きたまま食べられています。あの子の悲鳴を聞くのです。痛みで恐怖を紛らわす段階は、過ぎ去ってしまいました。爪を啜えて無理やりはがしても、薄汚れた髪を何本か抜いてみても、上と下の奥歯がぶつかりあい、がちがちと鳴り続けています。

そのうち、あの子の声は止まりました。

肉が裂け、骨が咀嚼される生々しい音。

時折御神体様がもらす笑い声を聞きながら、必死に祈りました。

これで、満足するように。

あれが、もう二度と食事を望まないように。

「エルドリツチ様」

「ふうむ、味は申し分ない。しかしこれではまるで足りない」

「今日の予定分は、全てなくなりましたが」

「だめだよ、だめだめだめ。ソウルだ、ソウル。もっとね、ソウルがないとだめなんだよ。これでは、火にくべる薪となるには不十分だ。わかるかい、使命が果たせないんだよ」

「ならば、明日の分を追加して、持って来させましょうか。火継ぎは何よりも優先すべきことです」

「じゃあ、あのコ。ロスリックの気狂い共の落胤がいい。ああ、光を受けて輝く銀糸。すすってみたら、どんなにいい食感がするだろうねえ」

私。

もう綺麗だった頃の姿とは一変してしまったけれど、贅の中で銀髪を持つのは私だけでした。姿さえおぼろげな母が、とても優しい手つきで梳いてくれた髪。記憶の中で唯一、暖かい風を吹き込んでくれるもの。

視界の先で扉が開かれるのを見て、そんな思い出も醜い憎悪に塗つぶされていきました。こんな、目立つ髪ではなかったら。まだこの先も、生きていられて。

「出る。特別にお前も今日、尊き犠牲者に加わるのだ」

もしかしたら、この運命も変わったかもしれないのに。

当たり前の後悔を味わえたのは、ここまででした。あとはもう、狂ったように喚いたのか、連れて行かれまいと抵抗したのか、それさえもわかりません。

次にはつきりと憶えているのは、御神体様の前に出た時です。

「おやあ、随分と痩せ細っている。もう皮と骨だけの食事は飽いたよ。大丈夫、怖がらないでえ。ゆつくりと、そう、焦らずに目を開けてごらあん」

背筋が凍りつくような、美貌。

一度その姿を視界に入れてしまったら、呼吸さえも忘れてしまいうでした。その口の周りが真っ赤に染まっているのも、暗い魅力を引き立てています。女として以前に、人間として当たり前の情動をほぼ壊されていたのにもかかわらず、心の中でさざ波が立ったような気がしました。

白く、陶器のように精巧で滑らかな胴体。しかし、そこから下は全て黒く蠢めいている大きな膿の塊に覆われています。その姿は、やはり、異形と呼べるものでした。

「どうぞ、お召し上がりください。じきに、御尊を移っていただくことになっていきます」

「不快だねえ。暗月の粘着共め、奴らも一人残らず食ってやりたいものだ」

御神体様は妖しく上唇を舐めると、私の方へ近づいてきます。

「……アナタ、ワタシの目を見なさい」

やつとの事で指示に従うと、少しの間沈黙が続きました。そして、御神体様は口の端を吊り上げます。

「うふふふう、なるほど。面白い瞳をしているんだねえ。決いめた。アナタのことは食べないであげるから、代わりにその可愛い目玉を貰うよ」

長く、筋張った両手の指先が私の頬に触れます。鋭く伸びる爪が探るように目の周りをぐるりとなぞり、二つ同時に、一気に中へ突き入ってきました。

痛いのかどうかは、よくわかりませんでした。体温のない指が私の眼窩がんかを掻きまわし、眼球へとつながる神経を一本ずつ丁寧に切断していくのが、不思議と感覚できました。

視界が歪み、緑色へと変わり、何かを取りだされる異物感とともに、私は、光を失ったのです。



目を開いても、まだ暗かった。

鐘の音。

体の奥底に響くようなそのせいで、目が覚めた。

まだ起きる時ではないと理解して、再び寝ようとしても、やけに冴えた意識が何かがおかしいと脳に警告を送ってきている。

彼は自分の体の感覚を、何よりも信頼している。生活リズムはほぼ完璧に整えているし、就寝前の酒など絶対に嗜まない。体が目覚めているというのに、まだ朝ではないというのはおかしかった。

それに、自分の部屋はこんな墨をそのまま塗りたくったような暗闇にはならない。深夜だとしても、街灯の光が窓から入ってくるはずだった。

(なんか、カビ臭くねえか)

手を横に伸ばそうとしてもできなかつた。どうやら固い壁のようなもので、体の周りが囲まれている。

(閉じ込められてんのかこれ。は、ふぎけんなよ……。どこの糞野郎がやったんだ？ 今日はやりたいことたくさんあるんだぞ。死ねよ。それとも、まだ夢の中にいんのか？)

今度は上に向いてみれば、また固い感触に突き当たる。力を入れると、ほんの少しだけ何かがずれる物音がした。そこに希望を見出し、さらに押し上げて行くと、左側の端に開いた隙間から光が入ってきた。同時に誰かの話し声、しかも大勢の声が伝わってくる。

(うるせえな。もしかして、俺をこなくつせえ所にぶち込んだ奴らか？ だったらまず下手に出て、隙を見て通報だな。貴重な休日を台無しにしやがって。十万は請求してやる)

石造りの蓋が次第に横へとずれていく。広がっていく視界には、薄く靄のかかった空が広がっていた。

この時点で、既に事態はそう単純ではないことに、気づき始めた。自分はこの棺桶の中に入れられたうえ外にまで運び出された、だけではないということに。

眺めていてどこか不安になる空だった。いつも見ているものとは何かが違う。雲の小さな間から見える太陽も、やけに色彩が暗い。

(いや、太陽じゃない？ なんか見覚えが)

半身を起こし、自らの体を見下ろすと、さらに疑問は増した。昨夜風呂に入り、その後着替えた愛用している寝着が消え、身につけているのは紺の下着だけになっている。いつ脱いでいたのかどうかは一且置いて、完成された自分の腹筋に見とれている時だった。

「先生？ 貴樹先生ですか？」

職場でしか呼ばれない敬称を耳にして軽く混乱しながらも、貴樹は顔を上げた。長い黒髪を垂らし暗い青のローブを着た女子がほっとした表情をして、すぐ横に座り込んでいた。

「新宮？」

「やっぱりそうだ。他の皆もここにいるから、もしかしたらって思っていたんです。先生が一緒なら、安心できますよ」

「皆だつて？」

なかなか上手く働かない頭を回転させて、状況把握に努める。周りには彼が入っていたものと同じく、石造りの棺が三十一個置かれていた。その全てが開かれた状態で、中身だった人間達が全員、彼の方を見てきていた。

彼らに共通するのは、どれも覚えのある顔ということだ。

「クラスの全員がいるみたいです。どこなんですかね、ここ。高校の近くに霊園がありますけど、雰囲気が違う気がします。かなり不気味、ですよね」

新宮の話を、貴樹はほとんど聞いていなかった。心に浮かんできた推測が、徐々に大きくなっていった。本人としては推測と呼ぶことすら馬鹿らしいものであったが、幾度となく繰り返した記憶の中に、この風景は強く残されていた。

（これは、まさか、嘘だろ）

元より小さかった現実感が、なくなっていく。

（この場所は、灰の墓所だ）

「とりあえず、落ち着こう。僕だつてわけがわからないんだ。普通に考えて、こんな人数が全員同時に連れ去られたなんていうのはありえない。けど、今は逆に冷静になって、これからどうするべきか考えるんだ。起こったことは起こったこととして、ちゃんと受け止めよう」

男子はほぼ全員、金属作りの鎧を身に付け、女子は黒の混ざった青か白色のローブを着ている。男子十六名、女子十五名、担任教師一名

「貴樹せんせ、その格好どうにかしないと、全然締めまらないですよ」
「寒くないんですか？」

「うん、まあそうだな……」

自分の下着一枚のみという外見は、確かに真面目な空気にさせるのを阻害している。どこへやらいなくなった寝着はたった数千円の価値しかないが、教師の威厳が乱されているのは容認できないことだった。

「え、でも私、たかにいの体かっこいいし、このままでいいと思うけどなあ」

「芳野。その呼び方はやめなさいって言ったんだけど。僕は君達の家族じゃない。わかるね？ 戸水先生と呼びなさい」

「ちよつとさあ、写真とらせてよ、ねえ。一枚だけでいいから」

（てめーらいちいち馴れ馴れしいんだよビツチが。俺が、一度でも、名前呼びを許しましたかあ？ はああ——、これだから最近のビツチは）

芳野恵美、高原ちとせ、久慈朱音の三人は、学校に喋り倒すためだけに来ているようなものだった。教師の中で一番若く、人気も高い貴樹にいつも絡んでは、ない胸を張っている三人衆だ。

「これ、もしよかったら着てください」

苦笑いして新宮が立ち上がり、自分の身に付けているローブを脱いで貴樹に差し出してきた。

「いいの？ 寒くはないから、別に大丈夫だけど」

「いいんです。その、こつちが見てられないってこともありますし」

目を伏せ、ほのかにはにかんでみせた後、新宮はローブを彼の胸に押し付けた。

「ありがとう。本当に助かるよ」

（ありがとな、清楚ビツチ。癩だが、貰える物は貰つといてやる。これで借りができたなんて思うなよ）

その態度のでかさがどこからきているのかはわからないが、もはや小物以外の感想を抱きようがない。

貴樹がローブを手を取った所で、一人の男子生徒が呆れた様子で割

り込んできた。

「ちよつと待って。先生と新宮さんじゃサイズが合わないんじゃないかな。俺のアンダーウェア二枚あるみたいだから、それでいいと思うよ」

鎧に着られている男子が多い中で、国広祐馬くにひろゆうまという生徒は実に嫌みなく、ほぼ完璧にそうした格好が似合う。西洋風の甲冑を着た騎士と呼んでも違和感がない理由は、ほとんど顔に集中していた。

「あ、国広君……」

「新宮さんのそういう優しい所は良いと思うよ。でも、君さつき少しだけ震えてたじゃないか。自分の体も気遣わないと駄目だよ」

「ありがとう」

「俺の意見というより、男子の総意だから。クラスのマドンナは、大事にしないと」

「照れるよ、そんなこと……」

貴樹は、心の中で唾を吐いた。

（はい、こういう寒い会話が様になってしまうほど、こいつはイケメンということですね。マドンナって何だよ。今どき誰もそんな言葉使わねえよ。か、見つめ合っちゃってま——、爆散しろ蛆共）

人の親切心を理解できない奴には、言われたくないものである。

新宮が友達の方へ戻った後、国広は衣服を手渡してきた。

「じゃあ先生、どうぞ」

「ありがたい」

（うえっ、男から貸してもらった服とかないわー。絶対雑菌まみれだろ。臭そうだし、汗ついてたらやだなあ）

先ほど使っていないスペアがあることを言っていたはずなのに、この男の耳はどこに付いているのだろうか。ここはむしろ耳鼻科というより、精神科に行くことをお勧めしたい。

内心はどうあれ、嫌な素振りなどおくびにも出さずに、黒一色の肌着を広げる。ばれない程度に臭いをかいで、一応の安心を得てから、彼は裾口に頭を突っ込んだ。よく売られている綿布の服とは感触が異なっている。慣れないものに多少の不快感はあるが、肌をさらしつ

念のため試してみたが、案の定、同じ結果となった。今度は男の部分にも痛みが走ったので、高い奇声を上げてのたうち回った。あまりに刺激の強い痛みだったため、生徒達が嘔き出しそうになっていた事には気がつかなかった。

「お前ら、なに呑気にしてんだよ！ 状況わかってんのか！」

貴樹の呼吸が整った時、一際大きな声が、墓所内に響き渡った。皆が、朽ちた墓の上に立ちあがり、顔を真っ赤にしている男子生徒に視線を向ける。

「こ、このまま時間を潰してたら、確実に死ぬぞ！ い、いい生きたかったら、お俺の話聞けえ！」

脂っこくぺったりとしている伸びきった髪と丸く膨らんだ顔。その中に埋もれている糸目。さらに鎧の上からでもわかるほど前にせり出た腹が、その生徒の性質をおおよそ表していた。

（ん——と、誰だっけこいつ。何で学生の中にキモデブがいるんだ？ 性犯罪者か？）

お前は名誉棄損罪である。全国のデブに謝れ。

近くにいた男子達が、嘲笑を浮かべて囁き合っている。

「丸戸まるどがまた何か言ってるよ」

「あいつを黙らせた方が安全だって、言ってるやろうかな」

（解説おっつ。こんな奴いたわ）

仮にもこの教師は二年間、同じクラスを担当している。というか先ほど全員の顔を確認したはずなのに、すぐに忘れる畜生である。

「丸戸？ あんまり騒がない方がいいぞ。何か言いたい事があるなら」

「だ、黙れ！ 先生、あんたは何もわかってない。そんなんじゃ、すぐに死ぬぞ！」

貴樹は瞬き一つして、平常心を保った。

（あ？ んだと糞デブ。てめーの粗チンひき肉にしてやろうか）

「いまいち要領を得ないな。丸戸、お前は何か知っているのか」

「ああ、そそうだ。俺は、ここがどこなのかはつきりとわかるんだよ」

丸戸は一旦間を置き、今この瞬間自分に集まっている全ての視線を

味わうようにして目を閉じた後、非常にもったいぶりながら言った。「いいか、お前らは信じないかもしれないが、この場所には見覚えがあ、あるんだ。ここは日本でも他の国でもない、そもそも地球にすら存在しない。ここは、俺がさき最近買ったゲームの」

悲鳴が、全員の関心を中断させた。

向かった視線の先で、女子生徒が腕を抑えて倒れている。上腕に深く切り裂かれた傷があり、大量の血が草木を濡らしていた。それだけでも異常だと言うのに、各々に戦慄を与えたのは、その怪我のことはなかった。原因だ。

女子生徒の目の前で、紺色のターバンを巻き、ボロボロに擦り切れた布を着こんだ、半裸の男が立っていた。構えた短剣の先からは血が滴り落ちている。その顔は痛々しいほどに頬が削げ、皮膚色に乾いた唇の端からは涎が垂れていた。

「も、亡者だ」

明らかに正気ではないとわかる呻き声を上げ、男は女子生徒に、再び剣を振り下ろした。その間、まともに反応できたものは誰もいなかった。ただ一人を除いて。

全速力で走り込んでいた貴樹は、亡者に体当たりし、そのまま倒れ込む。同時に剣は離れた地面に落ちたが、なおも亡者は彼を食べようともがいた。

(こいつ、近くで見ると本当にキモイな。くそ、暴れんな。涎汚ねえ！
近くで生徒殺されると、あとあと責任問題とかでめんどいんだよ。
余計なことするな)

しかし、亡者の腕力は体格に似合わず、強かった。抑え込もうとしても、完全に動きを止めることはかなわない。

「おい、どけよ。邪魔だ」

背中に悪寒を感じて、反射的に貴樹が身を引くと、淀みのない軌道で亡者の顔に長剣が突き立った。濁った色の血が彼の顔に飛び散り、眉をひそめる。

亡者は幾度か痙攣した後、剣で地面に固定されたまま動かなくなつた。あつという間に分解が始まり、体が小さな光の塵となって消えて

いった。

「馬鹿じゃないのか、先生。素手で何とかなるわけないだろ」

背の高い茶髪の男子生徒が、地面から剣を引き抜いた。

「宇部、お前、その剣」

「鎧の鞘に収まっていた。ロングソード。初期装備、ってことだ。な、丸戸」

知らぬ間に墓石から転げ落ちていた丸戸は、崩れた態勢のまま目を泳がせた。みっともない呼吸を何とかして整え、座ったまま叫ぶ。

「み、皆見ただろ？ あんな人間現実にいるわけがない。俺達は、異世界に来たんだ。それもゲームの」

宇部がにやりと笑う。

『「ダークソウル」の世界にな』

他の生徒が啞然とする中、貴樹は欠伸をこらえながら、顔に付いた血が取れないかどうか思索していた。

（今更かよ）

ダークソウル。

コアなゲームを作ることで有名なフロムソフトウェアと、ソニーが協同して作り上げた、デモンズソウル。その流れをくみ、三つに渡るシリーズとして打ち出されたゲームである。新作が発表されるごとに売り上げが伸びて行き、最新作にして完結作である「ダークソウルⅢ」はシリーズ最多の売り上げを記録した。

その人気の要因の一つに、世界観の独特さにある。火が陰り、暗闇に覆われようとしている世界を救うために、主人公が王の薪を集めるというコンセプト。不死の人間が精神を壊して欲望のまま動くようになった亡者や、人食いを繰り返して異形化した聖職者など、とにかく絶望的な世界観、そして他のどのメーカーも成し得なかった絶妙な難しさとアクション性が今までにない衝撃をユーザーに与えた。

貴樹達が目を覚ましたのは、ダークソウルⅢのスタート地点である灰の墓所だ。ここから、主人公は、世界存続のための旅へ出ることになる。

「でも、そうそう信じられる話じゃないな」

国広が言うと、宇部は鼻で笑う。

「現実を見ろよ。どうやってだなんて問題じゃねえんだ。実際に起きたんだからもう切り替えろ。くずくずしてたら、さっきの奴がまた出てくるぞ。他にも、亡者なんかとは比べ物にならないほどやばい化け物がたくさんこの世界にはいる。俺はこのゲームでラスボスまで倒した。だから絶対に正しいことだ。丸戸なんか、三周したらしいぜ。な、おい、そうだよな？」

クラスの中でも目立つ二人の輪に加わっている丸戸は、変な汗をたくさんかいていた。

「そ、そそそそうだ。だから俺の知識は絶対に役立つ」

「俺達、だろ。そこ間違えたら駄目だろ、なあ？」

「わかってるっ！……てます」

宇部はクラスの中でも一番の問題時だ。学校内で直接事件を起こしたわけではないが、外で他校とつながり、良くない噂がたくさん流れていた。最近は、ほとんど登校していなかった。

(こいつ、もし俺がよけられなかったら、どうするつもりだったんだ？
いつか絶対、事故に見せかけてあの世へ送り込んでやる。調子に乗ったガキが一番嫌いなんだよなあ。お仕置きが必要だよ)

調子に乗っている大人は、目も当てられない。

貴樹は、イケメンと不良とデブの会話に早くも興味をなくし、別の方の人ばかりへ向いた。

「先生、先生。こっちへ来てください。駄目です。血が……」

襲われた女子生徒が、幾人か分のローブが敷かれた所に寝かせられている。傷口は衣服の破れ端で巻かれ、一応の応急手当がなされているものの、滲みだした血液が絶えず滴り続けていた。切られた場所が悪すぎた。流れ出す勢いはそれほど強くないが、このままでは十分もたないうちに失血死してしまうだろう。

「手首二巻き分、布を貸してくれ。圧迫止血する。新宮、ありがとう」

傷よりも数センチ肩口側の所に、生徒から貰った布を巻き付け、肌が白くなるほどきつく縛る。鼓動のリズムで嘔き出していた血の勢

いが、相当小さくなった。

(つつても血だけが問題じゃねえ。皮膚下二センチつてところか。傷口を清潔に保っておく環境が乏しい今、処置は気休めにしかならない。すぐに雑菌が入って、数日もしたら壊死が始まる。それまでに生きて祭祀場へ行けたらいいが、無理だよなあ。ここで一人でも足手まといができれば、難易度は跳ね上がる。囿にでも使い捨てるか)

腐臭のする思考をしながらも、彼の顔は苦しむ生徒への心配で完璧に塗り固められていた。目の端には薄く涙もためている。このあざときは、幼少時からすでに学んでいることだった。

「先生、みおり実織みおりどうなるんですか」

外道の演技を完全に信じ込んだ友人の新宮は、本当に目を潤ませて尋ねてきた。その手を握ってやり、貴樹は安心させるように微笑む。「心配しなくていい。絶対になんとかする。生徒は僕にとって大切な存在だから。死なせやしない」

「でも、でも、もし万が一のことがあったら。実織、あれに襲われそうになってた私を、かばってこうなつたんです。全部、私のせいだ……」
「新宮は悪くない。誰だつてとつきに体が動かないことがある。悪いのは、俺達をこんな所に連れてきた奴だ。誰も君のことなんか責めてないよ」

(おい、くつついてくんない！ つたく、シチュエーションを利用しやがって、お前がこいつの心配より俺とのスキンシップに関心があるのはモロバレなんだよ。は——、面がいいのもめんどくさくてかなわんな——)

自意識過剰もいいところである。

「あの、もしかしたら、治せるかも……」

そう言つて近づいてきたのは、白色のローブを身に纏つた、男子の中では小柄な方の生徒だった。ほとんどの男子は鎧姿だが、例外的に一人だけ違っている。それが恥ずかしいのか、フードを目深にかぶり辛気臭い印象だ。

「それは本当か、しもだ下田」

「はい、その、言つてもあまり信じてもらえないかもしれませんが、

さつき……」

「とりあえず、今実織に試してみてください。とても痛そうで、見られないんだ」

「あ、わかりました」

包帯代わりになっていた布が取れ傷口が露わになると、下田はうろたえたように表情を固めた。しかし、動きを止めていたのはほんの少しの間だけで、軽く深呼吸すると、痛々しい切り傷の真上に両手をかざす。目を閉じ、何かを思い浮かべる数瞬が過ぎた後、変化は訪れた。
(ふーん、意外だわ)

白く発光する球体が下田の手から生じ、傷の中へ吸い込まれていく。そして一呼吸の間に、裂けていた皮膚が逆再生するように治っていく。正常な状態へと戻った。荒かった実織の呼吸が落ち着く。

「これは」

「わー、すごい……」

「ここに来てちよつとしてから、できるようになったんです。その時、棺の淵で手の甲をすっちゃって。痛いなって撫でてたら、いつ間にか治ってて」

「自分の意思で、治せるのか」

「それも、少し時間がかかりましたけど」

「まるで魔法だな。いよいよ、ここが現実とは違うってことの確信が強まったわけだ。とりあえず、本当にありがとう。お前は実織の恩人だ」

「い、いえ、そんな。大げさです。その、戸、あ、実織さんには僕が助けたなんて言っても、困ると思うし」

「うん？ 別にそういうこともないと思うけど」

「じ、じゃあ、失礼します。他の人にもこのやり方教えないといけないので」

下田が走っていく先には、同じく白ローブをきた女子達が大勢待っている。そこでも実織救命の感謝をたくさん言われているが、真っ赤になって謙遜する。

(ああいう童貞臭いのが、女子人気出るんだな。マスコットのポジ

シヨンだろうが。虚しいね)

本当にどうでもいい情報を挙げるが、この男も童貞である。

「新宮、多分すぐに実織が目覚めるだろうから、見ててやってくれ。あっちの会議もそろそろ結論が出そうだ。俺も加わりに行く」

「行つちやうんですか?」

「あとは友達同士で。まあ、そいつのことだ。お前の悩みなんて笑い飛ばしてくれるに決まってるよ」

「先生……」

爽やかな笑みを残して、貴樹はその場を去った。内面を知ると実に白々しい表情だ。

ダークソウルには、素性システムというものがある。初めのキャラクターエイトの段階で選択する必要があるもので、そのキャラクターのスタート時における特性を決定づける。礼を挙げるとするならば、戦士と騎士は近接に適し、魔術師、聖職者などは遠距離での戦いに適性がある。しかしゲームにおいて戦士が魔術等を使えないということは決してなく、ステータスの条件を満たせば可能になっている。要は、ステータスの初期値が違うだけなのだ。王道はバランスの良い騎士から初めて、レベルが上がってきたら魔術、呪術、奇跡を取り入れるというパターンだった。

生徒達の内訳としては、男子がほぼ戦士か騎士、女子は全員魔術師か聖職者で、その中に例外的に下田が含まれている。前衛職と後衛職は大まかに男女で分けられ、その中でおそらく性格的な違いから二つにすみ分けされていた。下田の存在の曖昧さが良くわかる結果だ。

「先生、もう少し内側に寄ってください」

「急に何か飛び出してくるかもしれませんから、ちゃんと下がって」

「私達を守るからね」

貴樹は集団の中心、最も安全な場所で歩いていた。

(そうだ、お前らは俺の肉壁になって守るんだな。ちゃんと犠牲に

なつてくれや)

もちろん素性は他にもたくさんある。盗賊、狩人、庶民、貴族など種類は二ケタに及ぶ。その中でもっとも初期ステータスが貧弱で、もはや玄人が縛りにしか使われないネタ素性があつた。

持たざる者、である。

恰好で素性を判断するのなら、まさに貴樹がそれに当たつた。

(マジでふざけんよ……。確かに今度の周は、久しぶりに全裸脳筋プレイで行こうと考えてた。それが反映されたってだけなら、二〇〇〇歩譲つてまだいい。けどなあ……)

装備できないのは衣服だけではなかった。生徒達の中で唯一何も武器を持っていなかった彼は、倒された亡者の短剣を貰おうとした。しかし、柄を手に持った瞬間、あの痺れる痛みが走り、持っている間はまともに立つことができなかつたのである。

(持たざる者つて、そのまんまかよ。武器もなしにどうやって進めばいいんだ。さすがに素手で戦う理不尽さは求めてなかつたわ。とりあえず、こいつら全員利用してでも生き残らなければ)

わが身しか考えていないクズとは違い、彼の優しい担任像を信じ込ませられている周りの生徒達は、彼を守ろうと必死になつてあたりを警戒していた。

とはいえ、そうして過剰に緊張しているのはゲーム未体験者がほとんどであり、先頭に行く宇部とそこに付き従う男子生徒の一部は、笑い合う余裕すら見えていた。今の所、進む道の構造も、敵の配置も全てゲーム通りだったために、丸戸が事前に指示し、男子生徒達が数で一体を囲んで倒す戦法が通用していたからだ。

「丸戸、右に何かいたっけ」

「ええ、えつと、亡者と犬が二匹。犬は盾を構えた数人で囲って、動きを殺させよう。その間に亡者を早めに狩る」

「ははは、言うだけなら簡単そうだな。お前、もっと痩せて動けるようになれよ」

「へへへ……。その通りで……」

「じゃあ、やるか。おい、国広お前本当に参加するのか」

剣先に残る血を見て喉を鳴らしていた国広は、額に脂汗をにじませながらも頷いた。

「ああ、やるよ。俺も、クラスの皆を守りたい」

「は、ダクソやったことないくせに頑張るぜ。どっちでもいいけどな。おい、女子ども。お前らはこの先のボス戦で役立ってもらおうからな。俺達男子が守ってやってるんだから、借りくらい返せよ」

何かを言い返す者は一人もいなかった。現状、女子生徒の中で戦力として機能するのは五人にも満たず、魔術関連を使いこなせていない者がほとんどだった。使える者も一つの術が限界らしく、さらには下級の威力しか出ていない。ゲームで使われている名で挙げるなら、「ソウルの矢」「火球」「回復の施し」だ。ただし、本来の威力に到達しているとは思えない出来である。矢は一本しか出ず、火球はかなり小さい。唯一下田の回復が、実用的な効力を持っている。

（意外なのは、男子の落ち着きようだ。普通なら、女子達の反応が当たり前前なんだが。上二人が比較的受け入れているからか、どうにも緊張感がない）

「今の所女子がほとんど役立たずなのもそうだけど、一番酷い誰かさんは、その役立たず共に守られてるわけだ。情けねえ恰好してなあ、みつともねえにもほどがあるぜ、偽善者」

（あん？）

宇部の矛先は、貴樹へと向けられた。指摘するのを今までずっとこらえていたように粘つく笑みだった。それに追従して、丸戸や他の宇部と同じグループに属している男子達が冷やかしの笑いを漏らす。

貴樹の人気は、どちらかといえば女性に偏っていた。おまけに彼は外面だけは本当に優しい。優しすぎて、勘違いする女性も出てくるほどだ。告白された時の断り方も自然なもので、女性側は押ししていけば何とかなるのだと思ってしまう。それが余計、熱を高める要因になった。

男子側からも一定の支持はあったが、偽善野郎だとやつかむ輩も当然出てくる。特に生徒指導などで多く関わってきた宇部には、良い感情を持たれているとは言えなかった。

「ちよつと、宇部。そんな言い方ないでしょ！ 先生だって、ちやんとみんなのこと考えて」

「考えるだけじゃ、駄目だな。実際に役に立つてもらわないと。いいか、足手まといが一人でもいるだけで、どんなに苦勞が増えるかわかるか？ 高原、お前も早く魔術を使えるようになるといいな。皆が生き残るために」

反論する声はなく、貴樹もまた何か口を挟むことはしなかった。俯いてしまった高原の頭にそつと手を置き、耳元で囁く。

「ありがとう、高原。僕のために発言してくれて。でも宇部のいうことは正しい。お前達の命が最優先だ。な」

「でも、あんなこと言われて、悔しくないんですか？」

「事実だし。僕は僕のできることを、考えてみるよ」

（さて、笑ったのは宇部と丸戸と、新野、桧垣、高坂に、砂川か。よし覚えた。俺を虚仮にした奴らは死刑と太古から決められている。全くひどいガキ共だ。いつかなるべく苦しみながら死んでくれると最高なんだけど。ファツツツツク！）

この男が偽善者であるのは、的を得た指摘である。

灰の墓所はそれほど広いエリアではない。丸戸の知識に穴はなく、驚くほど呆気なくエリアほとんどの敵を倒すことに成功した。残るは、エリアボスとあともう一匹。

「多数決を取る」

宇部が石壇の上に座り、生徒全員を見回す。すっかり仕切りを取られてしまった丸戸は、一歩下がった所で悔しそうに頬をひきつらせていた。

「お前から見て右手にある小道を進んでいくと、結晶トカゲという少し強めのモブ敵がいる。危険かもしれないが、そいつの落とすアイテムはかなり貴重だ。この先を考えても、挑戦する意義があると思ってる。賛成の奴は、手を挙げろ」

全員が、周りの顔色を伺いながら挙げた。この空気で反対票を入れるのは困難だ。

しばらく協議した結果、トカゲは囿役が引きつけ、上手く小道に落

とし、大人数で一斉にタコ殴りするというハメ技に近い案に決まった。囀役は意外にも宇部が引き受けた。一番危険な役だが、これで宇部に対するクラスの悪感情がわずかに弱まったのも確かだった。

しかし、立てた作戦は全くの無意味に終わった。

「何だ、これはよ。拍子抜けだな」

宇部が側にある岸壁に剣を突き立てる。きよとんとしていた丸戸を引き寄せ、襟元を締めあげた。

「どういうことだ。ここに、トカゲがいるんじゃないのか。そう言っただよな、丸戸お」

「し、しし知らない！ 確かにそうだったんだ。俺は三回戦った。う、宇部だってそうだろう」

「俺は寄り道なんかしねえからな。すぐボスの方へ行っただよ。くそが、余計な緊張だったぜ。てめえ、次間違った情報教えたら思い知らせてやるからな」

「そんな」

貴樹は、結晶トカゲがいるはずの場所で、細かく観察していた。

（丸戸の言ったことは事実だ。配置された敵は、常に移動している？

そもそも、こうして実際にこの世界を体感している時点で、ゲームそのままだと思うのは危険かもな）

相違点は他にもいくつかあった。

まず、このエリアには落ちていないアイテムが一つもないこと。ゲームならレベルアップや買物に必要な「ソウル」がいくつか配置されているのだが、確認できたものはなかった。

さらに、スタート地点からまっすぐ進み、崖の側に出てすぐ置かれている、篝火がない。篝火とは、一度でも触れれば死亡した時の復活地点になるし、生命力の全快や別の場所にある篝火への転送など、拠点になり得る大切なシステムだ。それが無いとなると、先へ進むにあたって重大な障害となる。

（篝火なしの、徒手で持たざる者縛りとか、俺でもしたことないわ。何だこの無理ゲー）

暗雲たる気持ちになりながら、何か落ちているものはないかと岩の

間の隙間を探る。貴樹としては、消費型の攻撃アイテムが欲しかった。ペナルティの基準はまだ曖昧だが、装備しないものなら平気かもしれないからだ。火炎瓶や出血効果を狙えるククリナイフなどは、プレイ時によく愛用していた。

(ん？ これは)

指先が、暖かい何かに触れた。感触からいって、木の枝のようだ。少しずつずらして取りだすと、それが何なのか彼にはよく理解できなかった。

(これは、残り火じゃねえか)

小さな木の枝に、ささやかな火が燻っている。火の部分に掌を当てても、全く熱くなかった。この残り火というアイテムは、使用者の生命力を一時的に増加させる効果を持っている。その量は一・五倍ほど。彼が何度もお世話になった、ダークソウルにおける重要アイテムである。

貴樹は周りを伺い、誰もこちらを見ていなことを確認した。

(いいぞいいぞ、ここにきてようやくツキが回ってきやがった。早速使用だ。少しは安全になるだろう)

何度も見た事のある残り火使用の際のモーションを真似て、それを胸に押し付ける。何の抵抗もなく、体内へ残り火が入り込んでいった。

(おお、おおおお、微妙に温い)

やがて、その柔らかい熱も消えた。胸を高鳴らせて十秒待った。

何も起きない。

新宮が、側に近付いてきた。

「移動するって、宇部君達が言ってます。先生？　どうかしたんですか？」

「いや、ちよつと動く心配があつたから」

「まだ、何かがあるかもしれませんね。早く行きましょう？」

「そうだな」

(おい、どういうことだ。何一つ変わった実感がないんだが。まさか別のアイテムだった？　それにしたって何も起きてねーじゃねえか。

ふざけんな。俺の期待を返しやがれ！)
このエリアに残る障害は、ボスを残すのみとなった。

2. 審判者の洗礼

「あれが見えるな？ お前ら」

さすがに、宇部の顔にも緊張が見てとれた。全員が注視する先は、大きな門の先にある広場の中心。そこには、銀色の甲冑を身にまとい、王冠を模した鑄鉄の兜を被った大男が屈みこんでいた。すぐ横には巨大な斧槍が立てられている。

灰の審判者グンダ。

ダークソウルⅢにおける最初のボスであり、多くの初心者プレイヤーを餌食にしてきた。斧槍モーションの速さや軽快な体術は、慣れるまで苦戦を強いられる。さらに、体力が半分を切ると変身し、人の膿と呼ばれる怪物になり、広範囲の攻撃を繰り返してくる。

「女子の皆は、門のぎりぎりの所まで離れてて。下田君が中距離で待機。接近戦をする男子に怪我人が出たら、すぐに対応してほしい」

国広が指示を出す。彼はアクションゲームをほとんどしたことがないそうだが、早くも戦い方を飲みこんできている。クラスで一番成績の良い彼だからこそ、先の見えない状況でも対応していけるのだろう。

作戦がまとまりかけたように思えたが、宇部が首を振った。

「駄目だ。それだけじゃ完璧じゃねえ。奴の注意を攻撃役からそらししておく必要がある。ヘイト管理ってやつだ。そうだな、新宮それに実織。お前ら二人がソウルの矢と火球で最初にグンダへ攻撃しろ。その後は適度に注意を引きつけながら逃げ回れ」

「えっ……」

「私達が？」

指名された女子生徒二人は、未熟ながらも遠距離攻撃のできる人員だった。

「危険すぎる。そんなことしたら」

「こいつらに攻撃は届かせねえ。そのために俺ら前衛がいるんだろ、国広。幸いなことに奴の体力だけはそれほど多くない。戦士か騎士職の男子十五人で一斉にやれば、短時間で片がつく。お前のあやふや

な指示より、よっぽど成功しそうだろう?」

新宮が、納得のいかない様子で手を上げる。

「でも、ちよつと待つて。実織はまだ意識が戻つてからそんなに経つてない。負担が大きいよ。やるなら、私一人でお願い」

「そう言つてるが?」

「大丈夫。血もちゃんと足りてる。心配には及ばないから」

新宮の肩に手を置き、実織はあまり血色の良くない顔で笑つてみせる。

「宇部。本当にこの先に、安全地帯があるんでしようね」

「确实だ。そこには、亡者どもも他のどんな化物も入つてこれない」

「わかつた。紗奈、私にもやらせて? ここで踏ん張れば、私達は助かる。多少の危険くらい、乗り越えないと」

新宮はしばらく逡巡した後、肩にかかっている実織の手を握つた。

「うん……。そうだね。でも、絶対死なないでね? 万が一のことがあつたら、私、私」

「あ、うん。わかつたわかつた。気をつけるよ。だから、もう少し離れてね」

二人の仲の良さは、妙な噂が立つほどだった。見栄えがいいので、男女共にその説を支持する層がいる。丸戸がその筆頭であることはよく知られている事実だ。ちなみに貴樹は欠片も興味を持っていない。

宇部が手を叩き、全員の意識を集める。

「これで打ち合わせは完了だ。残りの女子も魔術の練習は続けろよ。できるようになった奴から、攻撃に参加してくれ。その分、かかる時間は少なくなる。じゃあ、行こうぜ」

おお、と男子の方から掛け声が上がつた。生徒達の中で、明るい空気が満ちていった。他のクラスから文句が出ていたほどに、このクラスには人材がそろつている。もしこのメンバーではなかったらとつくに全滅していたことは確かだろう。

その担任教師といえば、

(この、嫌な予感しかない展開。まあ、俺が生きてれば万事オツケー

なんで。どうでもいいや。せめて役立つてから死んでください
安定のゲス思考である。

グンダは初め、どれほどプレイヤーが近づいても行動することは
ない。その胸に刺さっている螺旋形の剣を抜かなければ、動き出さな
い。ならばそのまま攻撃すればいいのだが、抜かない限りグンダがダ
メージを負うことはない。さらにその剣は後に必要となる重要アイ
テムだ。

故に、誰か一人この危険な仕事をやらなければいけなかった。

「本当に大丈夫か、丸戸」

この時を待っていた男がいた。やりこんでいたゲームの世界で、普
段の扱いから脱却しようと思息を荒くしていたデブ。あれよという
間に宇部に株を奪われ、未経験の国広にすら水をあけられてしまつて
いる状況で、こんな美味しい場面を逃すはずがない。

「ぬ、抜くだけだろ。それに、あいつが動き出すまでにかなりのタイム
ラグがあるんだ。その間に、二撃は、い入れてやるからさ」

「あんな、それじゃあお前にヘイトが向かって、作戦が台無しになるん
だよ。余計なことはすんな」

「ふ、ふん。俺に偉そうに命令す、するな」

「なんだと？」

宇部の声を聞きもしないうちに、丸戸は小走りでグンダのもとへ近
づいていった。何となくしまらない形だが、これで戦いは始まる。男
子達は武器を構えて丸戸の後をついていき、下田、新宮、実織の三人
はその少し離れた所で待機した。貴樹は最後尾の女子集団に囲まれ
る形で、鼻をかきたい衝動を我慢しながら立っていた。

丸戸が恐る恐るグンダに近づく。彼も脂肪のせいで体格はかなり
ごつい、グンダの偉丈夫ぶりには敵わない。膨らんだ両手で、螺旋
剣の柄を手に取った。

「いいか、抜くぞー」

言い終えたと同時に、丸戸は剣を一気に引き抜いた。暗い色の血
が、グンダの胸から飛び散っていく。誰かが唾を飲み、ほぼ全員の緊
張が高まった。

丸戸は呼吸を荒くしながらも、振り向いて走り去ろうとする。

「おい、今だ！ お前ら魔術をはな、げっ」

タイムラグもなくでもない速さで、グンダの左手が動いた。その硬く握りしめられた拳はいつも簡単に丸戸の頭を潰し、胴体を割いて下半身にまで到達した。ゆつくりと手が上がると、もはや原形をとどめない死体が残るのみ。しばらく血を吐き出すシャワーの役割を果たした後、死体は存在が霞んでいき、やがて霧のように消え去った。

誰一人、声を出せなかった。

(おい)

クラスメイトが目の前でグロテスクに殺された実感はなく。

脅威は戦慄に身を任せる間もなく悠々と立ち上がり、己の斧槍を握った。

「ひっ」

誰が挙げたのかわからない悲鳴。内心の叫びたい気持ちにはだれもが同じだっただろう。生徒の中で最初にまともな声を上げることができたのは、宇部だった。

「新宮、実織、やれ！」

この状況で指示を出せる者は、なかなかいない。そして、憶えただての術を対象にちゃんと当てることのできる者も。彼らはそれができただけ、褒めるべきだっただろう。

二人の放ったソウルの矢と火球は完璧なコースで、グンダに向かった。そして体に直接当たる直前に、グンダの空いていた片手が動き、それらを受け止めた。起きた煙が晴れると、少しも傷ついていない手が現れた。

「そんな」

全く効いていない。

「ふざけんなよ、こんな、こんな聞いてない！ 勝てるんじゃないのかよ！」

男子の一人がパニックになって叫び、回れ右をして逃げ出した。その横腹に斧槍の刃が食い込み、呆気なく体が上下に分かれた。二人目の犠牲者が出た事で勝利ムードも何もかもが崩れ去り、男子達は我先

にと逃げようとする。

「ぐぎゃっ」

「助けて助けて助けて」

「死にたくない。こんな所で嫌だああああ、ぐえ」

「くそ、くそくそくそくそくそ、が」

グンダは機械的に武器を振り回し、離れて行く肉体達を切り裂いていった。

（おいおいおい）

「くそがあー！」

グンダの背後に運よく回れた数人が接近して剣を突き刺す。しかし、刃は鎧に虚しくはじかれるだけだった。グンダは体を瞬時に回転させ、呆然としている彼らにタツクルをかます。倒れ込んだ彼らは、立ちあがる間もないまま巨大な刃の餌食になった。

「あ」

貴樹はすぐ隣で水音を聞いた。女子生徒の一人が失禁している。腰が抜け、彼女はそのままへたり込んでしまった。

グンダは斧槍を数回扱うだけで、男子のほとんどを葬っていた。辛うじて盾で防いだ宇部と国広も吹き飛ばされ、離れた岩壁に激突する。

固まってしまった女子生徒達の方へと、グンダは体を向ける。武器を下げ、低くしゃがみ込んだ。

（やば）

それを攻撃の予備動作だと判断した貴樹は、一応体面を保つために周りへ逃げるよう声をかけた。しかし、反応するものは誰もいない。この光景を現実だと受け止める気力すら投げ出している女子が大半だった。

グンダが、全身のバネを使って飛び上がる。貴樹は冷や汗を大量にかきながら、女子の集団から離れていた。

巨体が落ちてくるのを呆けた面で見えていた女子達の大半が、押し潰されるか直後のなぎ払いで命を落とした。先ほどよりも甲高い悲鳴がこだましましたが、すぐに沈黙が訪れる。

(おいおいおいおい、ちょっと待て。いくらなんでも、これは。うっ)
血に濡れたグンダが、貴樹の方へ突進してきた。動き自体は単調なものだったので、横っ飛びに避ける。そして、予想通り追撃の振り下ろしがやってきた。

必死の思いで体勢を立て直し、後ろに飛んで逃れるも、彼自身の知識がまだ最大限の警告を送ってきていた。グンダの攻撃パターンの一つ。下ろした斧槍をさらに踏み込んでからかち上げる。彼はさらに後方へと転がる事で、回避に成功した。そこで安心してグンダを目に捉えたまま後ろ向きに走る。

(い、いくらなんでもお前ら、役に立たなすぎだろおおおおお！
あつという間に死にやがって、恥を知らえええええ)

コントローラーを握って操作するのは、実際に体を動かすのとはまるで違う。画面からは敵の威圧感や武器の重々しき、そしてこちらへ向かってくるという真の恐怖は伝わってこないのだ。そこを理解していなかった時点で、何もかもゲームと同じだと決めつけていた時点で、宇部達の試みが成功するはずがなかった。

予想に反し、グンダは追撃をしてこなかった。頭に突如として火が立ち上ったからだ。

「み、実織、逃げようよ！ もう駄目だよ」

「私が時間を稼ぐから、走って。戻っても敵はいないから」

「やだっ、一緒じゃないとやだ。ここに残ったら実織も死んじゃうよ！ 私、実織がいなかったら生きていけないよ……」

「あなたの、そういう誤解を招く言動は直してほしいかな。私も紗奈に死なれるのは絶対に嫌だから、ね？ 今くらいお願い聞いてくれたっていいでしょ」

新宮の頬を優しく撫でるその手は、小刻みに震えていた。涙をこぼすのを瀬戸際でこらえている表情をして、何とか元気づけるように微笑んでみせる。新宮はそれでも首を振り続けている。

できた隙を、グンダは見逃すはずがなかった。

「危ないっ、実織……」

とっさに出たソウルの矢が、実織の胸に直撃した。未完成な魔術

は、彼女の着ているローブの耐性によって貫通力をほとんど殺され、残った魔力圧だけが作用し体を飛ばす。

「あ……」

親友を庇えた事で新宮は安堵するように目を閉じ、そのままグンダの斧槍で両断された。痛む間もなく絶命した彼女は、苦悶で顔を歪ませることもなく、ただ満足そうに前へと倒れた。

「うそ」

その死体が消え去った瞬間、実織は自失や悲嘆で思考を放棄することを選択しなかった。真つすぐに片手を上へ掲げた。その掌から火が生じ、球状に形成されてグンダへと投げつけられる。到達するのを確認する前に、次の火球を作り上げる。

「この、この化物！ 許さない、絶対に許さない！ 私達が何したつてこのよつ。訳もわからずこんな所に連れて来られて、前に進むしかなかったのに、あなたには何にもしてないでしょう！ 紗奈を、よくも殺したな化物っ！」

グンダは立ち止まり、火球を受け続けた。感情に任せ、実織は絶え間なく炎を投擲していたが、やがてその勢いは弱まり、最後に爪の先程度の火の粉を作り出すと、胸を抑えてうずくまった。

そんな進退きわまった場面を遠巻きに見ながら、貴樹は墓所へと戻る入口近くに到着していた。左側は高い岩壁、右は崖になっていて、入口の方にしか活路はない。

（ギリギリつてとこだな。注意がそれているおかげで楽に移動できた。これは戦略的撤退だな。敗因は単純な戦力差。あとはもうどうにかして、グンダを迂回できるルートを見つければいい。死んだら元も子もねえからな）

へへへと、心の中でほくそ笑んでいたら、頬を鋭い何かがかすめた。
（何だ？）

答えはすぐ正面に数をなして用意されていた。入口の門下に、亡者の群れが待ちかまえている。十を優に超える数で、弓矢を持つ一匹がこちらに狙いを定めている。

（倒したはずの雑魚が復活してる？ 突破するか？ 駄目だ。武器持

ち複数人とか絶対に殺される。つまり、なんだ、逃げられねえってことじゃん。いやあああああああああああ

クズは置いといて、実織は徐々に強まっていく疲労感で身動きが取れなくなっていた。

「なんで、もう力が」

グンダの迫る足音は聞こえている。しかし、もはや逃げる力さえもなくなっていた。歯を食いしばり、爪が白くなるほど拳を握り、悔し涙を流した。

「死にたくない。いや、死にたくない……」

斧槍が振り上げられる。もう何も見たくない彼女は、うずくまったまま最後の瞬間を迎えようとしていた。

小柄な影が走り寄り、実織の体を抱え上げた。彼女は運ばれ、グンダの攻撃は空振り、土埃だけが辺りに舞った。

「……下田？ どうして」

「運だけは良いんだ。他の人治そうとしたんだけど、その前に消えちゃって。こんな情けない僕じゃなかったら、きつと」

「違う。私は、そんなこと責めたいんじゃない。紗奈が、死んじやったの。これ以上頑張ったってどうせ」

下田は被っていたフードを外し、抱きかかえている実織に顔を近づける。長い前髪の間から、澄んだ瞳が燃えていた。

「ぼ、僕は、死にたくないんだ。君だってそうだろう。なら生きようよ！諦めちゃいけない。無事に現実へ戻って会いたい人だっているんじゃないのか！」

「だけど、もう私力が出なくて……え？」

彼女の背に触れ、手から白い光を放った。それだけで、彼女の顔色は劇的によくなっていく。

「気力も、回復できるみたいだ。実織さん、君の炎で少しは足止めできるはずだ。僕はその間に入口に向かってくれてる先生と協力して、他の敵を倒す。そうしたら逃げ道ができるよ」

(げ、見られてた)

「私」

「迷ってる暇はないんだ。う、動きたくないなら君を抱えてでも逃げるけど、僕は運動なんてできない。そしたらあいつにすぐ追いつかれて、二人も殺されるよ。いいの?」

実織は目を見開いたまま、ぼうつとした表情で首を振った。そして目に光が戻り、ぐつと口を引き結ぶ。

「わかった。全力で放てるのは多分十発くらい。それで助けになるのなら」

「十分だよ」

下田から離れた彼女は、深呼吸をしてから冷静にグンダの頭を狙って火球を作り出した。下田は側に落ちていた誰かの剣を拾い、貴樹の方へと駆け出した。

(下田なんか加わったって、突破できるわけねえだろうが。かくなる上は、あいつを囷にし、やられている間に全力疾走だな。決まり)

しかし、肝心のグンダは再び動きを止めていた。攻撃をしている実織へ接近することも、逃げ出そうとしている貴樹に注意を向けることもなかった。その沈黙に不審を感じたのか、実織も火を作る手を止めた。

グンダはその場に佇み、斧槍を横の地面に突き立てた。空いた両腕を組み、何かを逡巡するように呼吸を置く。

「ふうむ……、頃合いかな」

そして、驚くべきことに声を発した。

「聞いていたよりも、随分と数が多かった。対して粒なのはこの程度か。ンンン……かなり手加減したはずだがな。我輩、予想外であった。救世主たり得る存在と聞いていたからこそ、期待し過ぎていた部分も否めないが。難儀なものである」

漏れる声はくぐもり、不自然な重低音が混ざっていたが、れっきとした人間の言葉だった。

(我輩? この人、我輩なんて言っちゃってるよ……)

ゲームの中でグンダが喋ることはない。王達との戦いの前に見ら

れるようなイベントシーンもなく、淡々と戦いは始まり、やられる時
も黙って消える。

(き、きき)奇跡が起きたあああああああああああああああああ！
グンダの声なんて、他のどのプレイヤーも聞いたことなんかねえ。
この場に立ち会えたこの俺は、つまり、この上なく特別なんだ。ふお
おおおおおおおおお

危機感はどこへやら。貴樹は強烈な歓喜、この世界に来たと知った
時と同等のものを感じ、小さく肩が浮き上がっていた。内心をそのま
ま表に出すことはほとんどしない彼にとっては、類をみないほどの感
情の昂ぶりだろう。

だがもちろん、他の者は少しもこれで助かったとは思っていないよ
うだった。

「くそ、こんなの知らねえぞ。周回プレイ時の別ルートか。丸戸の野
郎、肝心なことは黙ってやがった」

「宇部、他の皆がない。どうしたんだ、逃げ出せたのかな。記憶が曖
昧だ」

国広と宇部が、崩れた岸壁から身を起こす。受けた盾はどちらとも
ひびが入り、道具としての機能は死んでいた。

「阿保か。この、飛び散った血の量を見ろ。今ちらほら立っている奴
以外、やられちまったんだよ」

国広は口を半開きにして、周りの光景を見回した。死体はとうに消
えているが、宇部の言った事や、グンダの全身にかかっている返り血
で察したのだろう。膝から崩れ落ち、うめき声を上げ始めた。

「残ったのは、五名である。お前達は我輩の攻撃に多少なりとも対応
し、あるいは立ち向かおうとする気概を見せた。見込みはある方だと
言えよう」

「なら、見逃してくれませんか？ 僕ら、いきなりここへ連れて来られ
たんです。これ以上、そちらへは何もしませんから」

話を通じた事で希望を持ったのか、下田がそうお願いをした。しか
し、グンダは首を振る。

「引き返すことは許されぬ。我輩が承った使命の一つは、お前達火の

無き灰を試し、そして殺すことだ。すまないが、死んでもらわなければならぬ」

「そん——」

下田の言葉が、途中で消失した。顔の上半分とそれ以外に分断された体が、投げ込まれた斧槍の勢いに流されて、後ろの岩壁に湿った音を立ててぶつかる。グンダはいつ間にか武器の柄元に取り付けられた鎖を引き、己の手元へ斧槍を戻した。

実織が、力が抜けたように座りこむ。

（ハルバードを、投げた？ しかも虜囚の鎖を利用している。こんな攻撃の仕方、見たことがねえ。いや、むしろ）

この世界は、グラフィックソフトのテクスチャーで作られた集合体ではない。裸足で砂利を踏む感触も、吹き下ろす激しい風も確かな現実味を持つて感覚できるものだ。つまりそれは、グンダにも言えることではないのか。プログラムされた人工知能の塊ではなく、確固たる意志と知恵を持った真つ当な生命なのだ。

今まで何とか対応できたゲーム通りの攻撃も、グンダが相手を早めに殺しつくしてしまわないよう対応を容易にしたものにすぎないとしたら。あの巨体、あの巨大な武器が能力を最大限に生かした戦略で振るわれるのならば。

（勝てるはずがねえだろ。こっちは生身で、普通の人間で、一発でも食らえば終わりだ。ダークソウルなんかよりもずっと鬼畜な無理ゲーじゃねえか。喜んでる場合かよ。早く逃げないと。グンダと比べたら、亡者共なんて小さい障害だ）

貴樹が覚悟を決めた所で、轟音が鳴った。

実織のいた場所に斧槍が突き立っていた。

「残り三名。苦痛はない。即殺である」

グンダは、国広と宇部の所へ歩み寄っていく。武器を握り直し、二人まとめて両断しようとして振り下ろした。

「ぎげんなー」

「う、宇部？」

蒼白な顔つきで吐き捨てた宇部は、国広の腕をつかみ、上に向かっ

て放り投げた。放心したままだった国広は何の抵抗もなく飛び上がり、頭から股下までをいつぺんに寸断される。

「友を盾としたか」

地面に刺さった斧槍を足場にして、宇部がグンダの顔面に向かって跳びかかる。剣先は兜の目の部分にある隙間を狙い、狂いなく突き出された。

「死ねっ！」

「武器がなければ、無力だと思うのか？」

グンダの上段蹴りが、宇部の腹部に直撃した。彼は声もなく大量の血を吐き出し、背骨の折れる音を響かせ上空へと飛んでいく。そして地面に落ちた時には、その全身の骨が粉碎され、壊れた人形のような悲惨な姿の死体となった。

「残り一名」

貴樹が決心し、入口へ特攻するまでのわずかな間の事だった。彼もはや途中から亡者に挑むのも忘れ、呆然と生徒が全滅する様を眺めていた。

（え？ 終わり？ もう終わったの？）

「お前は、見た所あの中で最も年長のようにだ。他の者がやられ、苦痛と憎悪にあふれているだろうが、安心するといい。すぐに、同じ場所へゆけるぞ」

（う——ん、これは死んだ。終わった。あんなこと言ってるし。こうなるなら、まだあいづらが生きてるときに、見せ場作って死んどけばよかったわ。痛みないらしいし、受け入れるのも手だな。どちらにしろ、この先に行けた所で——）

体の内奥で、何かが熱を持った。

（いや、待て）

鎖が鳴る。宙を舞う斧槍が落ちてくる。

貴樹は自分の体が勝手に反応して動くのを感じていた。受け身の体勢を取りながらも横転し、降ってきた刃を避ける。

（違うだろ。ここで死ぬ？ ありえない。駄目に決まってる。馬鹿げた選択だ。思い出せ。俺がもしダークソウルの世界に来られたら、一

番したかったことは何だ)

「なかなかの身のこなしである。さらされている肉体を鑑みても、相当鍛えているな。何かしらの武にうち込んでいると見た。前の回避も読みは完璧だった。お前は最も見込みがありそうだ」

グンダが攻撃の体勢を取る。まぐれもどれだけ通用するかわからない。あれだけ殺しても涼しい様子のお知らせに比べ、貴樹は全身に汗をかいている。いつかそう遠くないうちに、その広い攻撃範囲に捕えられるだろう。

(死にたくない)

四十五回。

貴樹がダークソウルⅢにおいて、最終ボスである王の化身を倒した回数だ。

このゲームは周回プレイ用のやりこみがいくつもあり、ボスも回を重ねるごとに強化されていく仕様だった。しかし、それは八周で限界を迎え、アイテムのレートアップや得られるソウル量の増加も止まる。大抵のプレイヤーは、そこで十分やりきったと満足し他のソフトへ向かうだろう。

ただ、彼はこのゲームを勧められやり始めた時から、異常なほどはまった。それはもう、仕事以外の全てを注ぎ込んだ。今まで取ろうともしなかった有給を使い、たった二日で一週目をクリアした。そして本筋だけを追っていた初回のスタイルを改め、全NPCイベントおよび全エンディングを自力で進めていった。

集められるアイテムもすべて網羅し、存在するやり込み要素を全て終えても、彼は満足しなかった。むしろ、そこから本番と言えた。(死んでたまるか)

その時点で、彼はその世界自体に惚れこんでいたのだ。今まで心から何かに好意を抱けなかっただけに、尚更どっぷりと浸かってしまった。各エリアの様々な風景に見入り、一つ一つの敵のデザインにすらつぶさに観察し、ボス戦では毎回違った縛りを加えて楽しんだ。もはやゲームとしてではなく、己の生活リズムを保つためには欠かせない習慣となっていた。

彼がなによりもダークソウルⅢにおいて愛したのが、登場するキャラクター達である。さらにその中でも心酔の域に達し、あらゆる画像、グッズ、二次創作に至るまでを漁ったあるキャラクターがいる。(俺は、絶対に、この先の祭祀場にたどり着かなきゃならねえ。どんなことがあっても、どれだけ大きい壁があろうとも)

体の芯が、熱くなつた気がした。初め彼はそれを極度に興奮しているからだにとらえていた。しかし、自分の拳を見て、間違いだと気が付いた。

拳から、炎が出ている。目を凝らしてやつとそれだとわかる程度の幼火は腕へと燃え広がり、一瞬にして全身を覆った。

(全然熱くねえ。まさか、これは)

途端、炎の色は薄まり、貴樹の体内へと吸い込まれていった。元の肌色に戻ったが、体にあふれている充実感が今までよりも段違いに高まっている。

「今、お前の体が……。ム、気のせいかな。それにしても」

グンダは持っていた斧槍を横に放り投げる。誰もいない所に落ち、これでグンダは素手になった。

「どういうつもりですか?」

「思ったのであるが、お前のその格好。鎧も着ず、武器も持たずに挑もうとする無謀はなかなか尊敬に値する。我輩とて戦士の端くれ。あえて苦難の道を進もうとする若人に対して、有利な条件で相対する無粋は犯さぬ。徒手で戦うのは久方振りなので、よろしく」

(いや、さっきの蹴り見たらそれほどハンデにならないと思うんですが。むしろ当たったらよりむごいことになりそうです……)

右足を引き、左の拳を前に突き出す構えを取り、グンダはこちらを見据えてくる。そこから伝わってくる言い表せないほどの迫力を感じ取り、貴樹は半べそをかいていた。

(投げるのは無理。受け流すなんでもつてのほか。それだけで腕が折れるだろ。こっちが本気で殴ったって、虫が止まった程度のものにしかならない。体格が違いすぎる。どうにかして、逃げる算段を付けな
いと)

「油断をした。鍛錬が足りないのである。まさか全員が貧弱なわけがなかったな。その気配にすら気付けないようでは、まだまだ我輩も未熟者である。だがこれで全て——何？」

グンダの兜から漏れる赤い眼の光が驚愕を表すかのように点滅した。己の体重も加えて本気で叩きこんだ打撃が、どう考えても受け切れるわけがない小さなその腕で止められていたからだ。

（止められたし。全然痛くねえし。うそん。何がどうなつて。……まさか）

まだわからないことは多い。しかし、やはり先ほどの炎が貴樹の体に何らかの強化を施したのではないか。つまり、前に拾った残り火というアイテムが、その効果を発揮した。

（それにしたつてあれは生命力を増やすだけのはず。こんな馬鹿げた力、ありえねえ。けど、まあ、そんなことはもうどうでもいいんだ。げっへっへっへっへ）

この男、自らがある程度追い込まれると弱い。必死に勝とうという気持ちは一切なくなる。しかし、逆転できる目ができた以上、調子に乗るのもあつという間だった。

グンダはすぐさま拳を引き、もう片方の腕を貴樹へ叩きつけた。彼はある確信を抱き、構えすらせずに受ける。

結果貴樹はそのまま押し込まれて地面にめり込んだが、それだけだった。生徒達のように潰れて肉塊となることはない。足が地中へと埋もれ、自力では動けることすらかなわなくなったが、彼の高揚は止まらなかった。

「うぬう」

グンダは呻きをあげても、攻撃の手を緩めることはなかった。さらに足で踏みつけそれでも効果がないとわかれば、貴樹の体を引っこ抜き、宙に放つて、岩壁に向かって殴り飛ばした。さらに落ちていた斧槍を再び手に取り、貴樹の飛んで行った方向へ投げる。そのまま動かないでいた彼は、うなる巨大な刃をその身に受ける前に、右の拳でそれを打撃した。

鈍い金属音が、辺りに響く。

「——なるほど。お前の本当の力は、それほどなのか」

今度こそ、グンダはしばし固まらざるをえなかった。

長く共に歩んできた相棒とも称すべき斧槍の刃が、部分的に割られていたのだ。今までその攻撃をかわした者は数あれど、破壊に至った瞬間に出会ったのは初めてのようだった。しかも、一見して生身の人間が、何も持たない素手で。

「ふ」

グンダは感嘆とも呆れともとれる溜息をついた。何かをこらえるようにして肩が震え、自然と両手が持ち上がり、指を絡めて己の額に当てた。

強い、感謝の祈りだった。

「フハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！　こんな役割、弱者を屠るだけの汚れ仕事など、嫌で嫌で仕方がなかった。だが、このような僥倖に出会えるとは。あの曲者に感謝をしなければならんな。これほど時が経つてもなお、武には未知の領域があると知った！　感謝するぞ、若人よ。名は何という？」

「貴樹、です」

「ではタカキ。これから吾輩、このグンダの全力を持って、お前の驚異的な身体能力に抗って見せよう。では、よろしく頼む」

グンダは華麗な所作でお辞儀をしたあと、立っていた岩盤が砕けるほど強く足を踏み込んで突進してきた。巨体にまるで似合わない、冗談じみた速度。一呼吸の間に、貴樹の目の前で腕を振りかぶっていた。

それらの全てを、貴樹ははつきりと知覚した。

（見える。すげえ……。あいつの動きが予測できる。さっきまで、俺はこれにビクビク怯えてたのか？　笑えるぜ）

刹那の間で彼は最小限の動きを選択し、グンダの打撃をかわしている。自分の体が異常なほど軽くなるのを感じた。ちよつと跳び上がる程度の力で、グンダのはるか頭上に到達する。空中にいる時を狙ってくるグンダの拳と真正面からぶつけあい、受け流すことも容易だ。間隙を縫ってその胸に巻きついて鎖を破壊した。貴樹の腕の二

現実でもダークソウルにおいても、超高所からの落下は即死判定がつく。プレイヤーの中でもノーデス挑戦の時、敵全てに完璧な対応をしたのにもかかわらず、たった一つのミスで転落死、泣きを見る羽目になった例がたくさんある。

貴樹は今、崖の底へ落ちようとしていた。来るもの全てを飲みこむような闇が眼下で大口を開けている。深さは百メートルでは済まされまいだろう。加速度的にも考えて、地面に激突した時の衝撃は人知を超える。強化された体でも、人の形すら成さない細かい肉片へと弾けるのは間違いない。

(ああ。終わった。ついに)

頭の中で、今まで過ごしてきた人生の思い出が閃光のように駆け巡る。

今思い起こせば、なかなか涙を誘う生涯だった。

両親は健全だったが、彼の上つ面の優しさにころりと騙され、一度も本性に気がつくことはなく。彼がぎりぎりでも負担にならないように上手く理由を付けては彼らの仕送りを催促し、そのほとんどを冷やかに半分競馬で使い果たしたのは切ない思い出だ。酒に溺れることなく、学業も申し分なく修めて就職が決まった際にも、立派な腕時計をプレゼントしてくれた。すぐ質屋に売って得た万札でパチンコに全額投資したのも捨てがたい。これでギャンブルには飽き、仕事でこそこそ不正をするスリルに目覚めたのは記念すべき人生の転機だった。自分を目の敵にしていた先生や生徒を、大事にならない程度に評判を貶め、まさか彼が犯人だとは気が付かずに、必死になって相談してきた時の気分は最高だった。そして最後には、ダークソウルというゲームに出会えた。

本当に誰かが知ったら、胸が締め付けられ涙を流しそうな来歴である。

(体が、浮いていく。天国へ行くのってこんな感じかあ。いい気持ち) これで天国行きだと思っているのが、貴樹の貴樹たる所以かもしれない。目を閉じると共に、にこにここと笑う女性の顔が浮かんでくる。

——いい？ 貴くん。私は遠くに行っちゃうけど、ずっと家族だからね。連絡、忘れないで。

薄ら目の縁を赤くさせ、両手を広げ抱きしめてくるその人の幻影を見て、彼は胃袋ごと吐きそうになった。

(よりにもよって何であんなゴミクス女の顔が浮かぶんだ。どこまでも俺の人生を邪魔しやがってええええええ糞がああああ死にさせええええええええ！)

呪詛を叫び続けていると、自分がまだ意識を保っている事に気が付いた。

おかしい、何かがおかしい、と慎重に目を開ける。すぐ前にそびえたつ岩壁があり、足は空中を蹴っている。自分はなぜ浮いているのかと不思議に思い、腕の引つ張られる感触で上を向いた。

何やらでかい銀色の手甲が、貴樹の腕を掴んでいた。

「間に合ったようで、重畳である。このようならまらない決着のつき方はないであろう?」

(グンダ、ナイスプレエエイ!)

引き上げられた貴樹は、さりげなく距離を取りグンダに問いかけた。

「再開しますか?」

彼の脳は再び快樂物質を分泌し始めた。先ほどの無双状態にドハマリしたようである。特にグンダのような体格差のある者を手玉に取る快感は、形容が難しかった。すっかりドラッグを求める中毒者の心境で、彼の頬は期待で紅潮した。

グンダは彼の全身をじつと観察し、考えごとをした後、何かに納得した様子で笑い声を洩らした。

「いや、もう十分である」

「はい?」

「お前の実力ははつきりと証明された。このまま打ち合っても、徒に長引くだけである。我輩の拳も、あまつさえ武器ですらほとんど通用しないとあっては、やがて負けるのは明白。殺すなどと恐れ多いことを言った。お前ならば、ふむ、他の者達も納得するだろう。我輩に付

「いてくるがよい」

数秒考えて、ようやく今の状況を理解した。

ダークソウルⅢで言う所の、最初のボス戦が終了したのだ。

3. 貴樹、逝きかける

気分はまるで遠足前夜の小学生のような、あるいは下世話だが初体験直前の童貞のようなものだった。

「苦勞、苦勞。お前達も街へ戻っていいぞ。この男は既に実力が認められている」

グンダに言われて、墓前の前で寝そべっていた亡者達が、立ち上がり去っていく。ゲームとは明らかに矛盾した光景を目にしても、貴樹は気にすら留めていない。心臓が痛いほど鳴り、胸を割いて飛び出してくるのかと心配になるほどだ。

（ああ。最高だ。最高の気分だぜ。生き残ったのは俺一人。ということとは、もうどこにも鬱陶しい砂利共はいない。純粋な気持ちで、この世界を満喫できる）

彼は片手で顔を覆い、涙をこらえていた。それがまたグンダにとっては犠牲になった生徒達の死を悼んでいるように見えて、この男の評価を勝手に上げてくれるのだった。

グンダが押し開いた門の先には、また少しばかりの墓地が並ぶ坂道と、その先に古風の建物が存在している。火の祭祀場と呼ばれるその建物は、プレイヤー達がグンダをヒューヒュー言いながら倒した苦勞をねぎらう、安全な拠点だった。そこでは役立つ道具を購入できたり、武器の強化をしてもらうことができる。

（あれ、ていうかこんなに祭祀場って大きかったっけ？　なんかゲームのやつよりも三倍は大きいような。ま、どうでもいい。今は、早く、中に入ることが先だ。くうううう、ついについてい）

どこかに差異を感じても、彼にとっては些事に思えた。

やがて荒くならされた坂道は石の階段へと変わっていき、ついに祭祀場への扉が目の前にやってきた。グンダはあえてそこで止まり、傍らの貴樹を見下ろす。

「タカキよ。お前のその悲しみは尊い。どうかこれから映る光景に魂を抜かれないでくれよ。さて、その顔が歡喜にあふれる様が楽しみだ」

(はよ、はよ！ グンダ親分、焦らすのは無しでっせ)

彼もはやる気持ちを抑えられずに手伝い、固い入口が一気に開いていった。

中は想像通り、地下の方へと作られた洞穴のような広間が最初にあった。彼はふらふらと進み、やがてあるものを目にして、膝をついた。

高原ちとせが彼を見つけ、飛び上がらんばかりに叫んだ。

「先生？ 先生だ！ 皆、やっぱり先生も無事だったよ」

広場中央には大きな篝火があり、その周りを囲むようにして、死んだはずの生徒達がいた。ある者は状況を理解できないのか寝転んだままぼかんと宙を見つめ、またある者は親しい友人と抱き合って、互いに生還を喜びあっていた。

「ふふ、どうかな？ 実を言うのだな、我輩の殺すという言葉は少々本来の意味と異なっていたのだ。お前の大事な部下達は一人も死んではいない。よくわからないだろうから、説明するとだ……」

「ああ——」

グンダは得意げに話そうとして、貴樹が何かに耳を傾ける精神状態ではないのに気が付いたようだ。その感激のしように微笑ましいものを感じて、これ以上言葉を添えるのは無粋だと考えたのか。自分はどこかに消えた方がいいと言わんばかりに、端の階段から下りて行く。

だが当然のことながら、貴樹は生徒達のことなど少しも見てはいなかった。やかましく何かを言ってきたいるチンカス程度にしか思っていない。真に意識が向いているのは、彼らの集団から少し離れて階段のふもとに立ち、慎ましくグンダへ頭を下げた女性のことだった。「審判の遂行、感謝いたします。戦士様。これで火の無き灰の方々が全て集まりました」

ゲームにおけるキャラクター名を、火守女という。

祭祀場では道具をそろえることや、武器の強化をすることができ

る。しかし、それ以上にソウルを使ってレベルアップをさせてもらうという行為が、攻略において不可欠なものだった。

その担当をしているのが、火守女である。毎シリーズに必ず登場し、ほとんどの場合プレイヤーと最も多く関わることになる、いわばヒロイン的な立場だった。それぞれの作品によって外見は異なり、ダークソウルIIIにおける火守女はかなり人気の高い方だ。

背中まで伸びた豊かな銀髪を緩く三つ編みにし、頭には目元全体を覆うティアラらしきものが取り付けられている。色素の薄い唇は整った形をしていて、細い曲線を描く顎、火に照らされて白くぼんやりと照る肌は、黒のローブやゆったりとした長いスカートとのコントラストで、神秘的な印象を与えてくる。どんな瞳をしているのかはわからなくても、申し分なく美しい人だった。

「それではこの方だけが、まだ一度も死亡していないのですね」

「全員殺しておけると言われはしたが、彼の強さを見て、我輩はその必要なしと判断した。問題ないか？」

「戦士様が判断なされたのなら、よろしいと思います。まもなく総会が始まりますので、ご準備を」

「うむ」

貴樹はじつと息をつめて、二人のやり取りを見ていた。正確には彼女の横顔だけを食い入るように見つめていた。グンダが去りかけた所で、はっと我に返り、内心焦って声をかけた。

「グンダさん、ちよっと」

怪訝そうに振り返ったグンダに近寄り、彼は小声で話す。

「これから他の誰にも、僕の力のことは言わないでください。実は自分でも、どうしてここまでの強さを手に入れたのかわからないんです。事情がはつきりするまで、黙っていてください。生徒達を、あまり不審がらせたくはない」

「ム、そうすると我輩がお前を残らせた理由について、他の者に説明が困難になるのだが」

「そこを何とか。お願いします」

「…わかった。自らの実力を簡単に広めたくない気持ちはわかる。努

気づかれる。ああ、くっそくっそくそくそくそくそくそ。くっそ可愛いなちくしょおおおおおおおおお！ ひもりん可愛いよひもりん。わあああああああああああ！さつき会話したよな？ 俺、ひもりんと話したあああああふおおおおおおおお（おおお）

うるさい。そしてあだ名が気持ち悪い。

（はああはああはああ。よし、オーケーオーケー。一旦クールダウンだ。話が頭に入ってこねえ。静まれ、俺の下半身！）

火守女は楚々とした動作で集団の前に立ち、丁寧にお辞儀する。そして淀みなく語り始めた。

「篝火へようこそ、火の無き灰の方々。

私は火守女。

篝火を保ち、貴方達に仕える者です。

玉座を捨てた王たちを探し、取り戻す。

そのために、私をお使ください」

貴樹には、この瞬間が輝いて見えた。

（きたきたきたきたきたあああああ！ この台詞、全く同じだ。ゲームの時は音声英語だったけど、これもまたいい声してんな。そもそも、まず纏う空気が違うね。今にも、ひもりんの呼気が混じったフローラルな香りが漂ってくるようだあ…）

これで外面は真剣にしているのだから、超人の領域だと言ってもいい。

さらに何かを続けようとする彼女を遮って、国広が手を挙げた。

「ちよつと待ってください」

（は？ おいカス野郎、このまま天使の声を聞かせろよコラ。塵になりてえのかクズ）

「すみません、いきなりそんなこと言われても、わけがわからない。灰？ 玉座？ それよりも、俺達は自分の意思と関係なくここに来てしまったんです。できれば一刻も早く現実に戻りたい。帰る方法を何か知りませんか？」

「帰る…とは」

「えつと火守女さん？ か他の誰かが俺達を呼び寄せたってことなんですよ。ならきつと、反対に戻る方法も知っているんじゃないかと」

火守女は控え目に首を傾げ、少し戸惑ったような声を出した。

「申し訳ないのですが、私は貴方達がどこからやってきたのかは知りません。最初の火が陰り、王たちが責務を放棄した時、救済のため遣わされる存在とだけ理解しています」

「では、帰れないんですか？ 俺達は」

「灰の方々には果たすべき使命があります。決して投げ出してはいけない使命が」

「何なんだ…。意味がわからないよ」

国広が二の句を告げなくなつた所で、新宮が手を挙げて質問をした。

「あの、それよりも。私達、確かに死んだはずですよ。不思議でしょうがないんです。実織を助けられて、ほつとして、すぐ後にあの大きい斧が私の体を割いて…」

語尾が震え、実織が彼女の肩を励ますように抱いた。

「それで、上手く言えないんですけど、意識が一瞬で途切れた感触があつて、死が確かに自分に訪れたみたい。そんな実感がわいたのに。これは一体どういうことなんですか？」

何人かが思い出したように自らの体をさすつた。今でも身に染みついている恐怖があるのだろう。新宮の話によれば、意識がなくなつた直後には、この祭祀場で目を覚ましていたらしい。そして彼女より後に死んだ宇部や国広、下田、実織が突然現れるのを目撃した。

「それは、貴方達が不死だからです。一度失われた命も、この篝火により再生され、復活が可能となります」

「不死、ですか？」

生徒達の間でざわめきが広がった。現実離れた言葉にどう反応しているのか困っている様子の者もいる一方で、宇部や丸戸は事情は全てわかっていると聞いたげに頷いている。

「体が朽ちることはありません。どれだけ破壊されようとも。ですが

灰の方々といえど、不死の力を生身のまま完全に制御することはできません。故に死亡し、復活するたびに相当の精神力が必要となります。：貴方達の中にも、そういった負担を感じている人がいるのではありませんか？」

（…！ 本当だ。胸が苦しい。ドキドキが止まらねえ。おかしい、俺は死んでないはずなのに。この感触は何だ？ ひもりんを見てるだけで感じるこの、息子が下着をばっつんぱっつんに押し）

基本的に、貴樹は性欲に忠実だった。ひどかった。最低だった。時と場所を選ばない。

火守女の言葉に、幾人かが納得した様子だった。比較的普段と変わらない生徒もいるが、顔色が悪かったり、苦しげに呻きながら横になってる者もいる。後者の占める割合が最も多かった。

「二度の復活にどれほど負担がかかるかは、個人の素質によります。体がいくら不朽であろうとも、心は違います。滅びぬ苦しみに、精神を苛まれない者はいません。よって貴方達が復活できる回数には上限があります」

宇部が、眉をひそめて口を開いた。

「おい、それじゃあ不死って言えないじゃねえか」

「そう思われるのは、当然かと思えます。……では、少しお待ちください」

彼女は踵を返し、複数ある大きな洞穴の内の一つへ入っていった。生徒達が何かを話す間もなく、車輪の音を鳴らして出てきた。

「なるほど。こいつらが予言の。子供ばかりじゃないか」

火守女と、薄い赤色の装束を被った老婆が、木製の荷台を運んできた。老婆は広場に集まる一人一人の顔を見て鼻を鳴らした後、荷台にかけられた覆いを外す。

貴樹は思わず唾を飲み込んだ。

上に置かれていたのは、人数分揃ったガラス瓶だった。その中には山吹色に発光する液体が入っている。

（エスト瓶じゃねーか。やべえ本物だ）

ゲームにおける回復アイテムが、それだった。火守女が一本手に取

ると、皆に見えるよう少し高めに掲げてみせる。中の液体が揺れ、篝火の明かりに照らされて光が散った。

「灰の方々には、これを飲んでもらいます。そこにある篝火の一部が成分として入っていますが、害はありません。飲むことによつて復活における負担を消し去ることができます。つまり、本当の意味での不死になれるということです」

（ん？ ゲームとは違うのか。むしろずっと重要なアイテムになつてんじゃない。つーか祭祀場の侍女つてやつぱりババアだなー。そこくらいマイナーチェンジしてもいいのに）

各々にエスト瓶が配られる。早くも訪れた火守女と接近できる機会に興奮したものの、彼女の方へ配りに来たのは老婆だった。もちろん失望は表に出さない。

「あんた、そんな恰好をしているのはどうしてだい？ おかしな趣味だね」

「駄目なんですよ。着ようとしたら、痛みが走つて。どうにも着れないんです」

「…そうかい。まあそういうこともあるだろうね」

何かを含んだ目つきで貴樹を一瞥してから、洞穴の奥へ戻つて行つた。彼女は攻略に役立つ道具を売る役割を持っている。後で見に行つてみようとは彼は決めた。

「ではお飲みください。ただし、一度飲んだならばもう後戻りはできません。…全てを賭して使命を全うする覚悟を決めてから、決断することを勧めします」

火守女の言葉に、意識のある生徒のほとんどが困惑気に顔を見合わせた。彼らからすれば、状況はいまだに不明だ。この奇妙な飲み物が本当に安全な保証はない。まして一体今から何をすればいいのか、何を目指していけばいいのか皆目わかつていないのだ。使命という言葉に、強いられる不安しか感じられない。

そういつた者達を代表して、国広が再び尋ねた。

「その、使命というのは一体何なんですか。僕たちは、今まで戦いなんてろくに経験した事のない一般人です。それで何かをやれと言われ

ても、説明が足りないとしたか」

「何をすべきなのかは、わかっているぜ」

宇部が立ちあがり、優越感に満ちた笑いをこらえた表情で皆の前に立った。傍らの火守女に遠慮のない視線をやり、貴樹の感情を乱す。(尊い火守女様に対して何だその態度は？ お前は五体投地でもして地面を舐めてるのが相応なんだけど?)

「要は、四体いる王達を殺して、薪をくればいいんだろ？ それでゲームクリアーだ」

「はい。やはり灰の方々は、すでに使命を了解しているのですね。私がお話すまでもありませんでした」

「気にすんなって。お前はお前で役に立つ部分があるんだからよ」

そう言つて慣れ慣れしく彼女の肩を叩く。それを見て、貴樹は口元をわずかにひきつらせた。

宇部はエスト瓶を手に持ち、気の進まない様子の者達を嘲笑った。「何びびってんだよ。いいか、これはゲームでも登場したアイテムだ。こいつの言うとおおり、害のないことは保証されてる。そんなに心配なら、見てろ」

誰かがあつ、と叫んだ。宇部が瓶を傾け、口の中に輝く液体を流し込んでいく。あつという間に一本分飲みほした。しばらく周りは口を閉じ、宇部の様子を眺める。喉仏が動き、全て体内に入りきった後、彼はつまらなそうに肩をすくめた。

「特に味もない。強いて言うなら、ちょっと暖かいつてことくらいか。水に近い感じだな。ただ、何だか力が湧き出るみたいだ。何の異常もねえよ。丸戸、お前も飲んでみる」

「え、あ、ああ」

丸戸も、そのだらしなく垂れた顎を突き出して、エストを飲んだ。

「ほ、本当だ。何ともない！ ははは」

「あん？ 何だその言い方。俺の言葉信じてなかったのか？」

「い、いや。そんなことは…」

こうして安全性が示されたのもあり、他の生徒達も続いて飲み始めた。立ち上がれなかった者も、それを摂取した途端回復していく。こ

の世界に來た時から気分が休まらず、顔色の優れなかつた一部の生徒達は目に見えて元気になつていた。

「それでは、もう間もなく総会が始まります。貴方達の使命について、さらに詳しい説明がなされるでしょう。最後にもう一度だけお許しください。どうぞ灰様、私を使命のために役立ててください。それが、私の全てです」

火守女は再び丁寧な礼をした後、少し後ろに下がった所にある、石造りの段差に腰かけた。それ以上彼女が話し出す気配がなかつたため、話が終わったのだとようやく皆が理解した。

ざわつきが戻り始める。早速国広が自分達がやるべきことについて、宇部達と話しあっている。貴樹の近くに座っていた芳野、久慈、高原の女子三人組もエストを飲んだ。静かに座っている火守女をぼんやりと眺めていた貴樹は、話しかけてくる声で我に返る。

「先生は、飲まないんですか?」

「うーん。ちよつとね。火守女さんと話すことがあるから」
(今すぐにでも味わつてみたいけど、まずはひもりんの事だ。一歩ずつ夢を叶えていこうかあ)

芳野がここぞとばかりに大きく手を挙げる。

「せんせ、私も付いてっていい?」

「ごめん、できれば僕一人で行きたいんだ」

「えー、ならしやうがないけどさ。ぎーんねん」

(てめーが付いてくると、さすがに夢もぶち壊れるわ。ぶってんじやねえぞガキ)

皆がエストの効力に驚いている中、貴樹はさりげない風を装つて火守女へと近づいていく。できればもつと離れた別の場所で二人つきりになりたかつたが、この段階でそこまで積極的になるのはなおさら目立つだろう。彼女へ向けている気持ちが生徒達に伝われば、この世界の事を何も知らないようにふるまっている貴樹へ、疑惑が生じかかない。

火守女へ近づいていくほど、謎の浮力が全身にかかる。既に自重の感覚はほぼ消失していた。まずは一言でも話すこと。たつたそれだ

けの目標はずなのに、今はそれが重大な意味を持つ気がした。人間としての次元が、一段階上がるような。

内心はトキメキであふれている。

(にや、にやにこれえ…。緊張しすぎて、頭がフットーしそうだよおつ…………!)

不気味である。乙女心を持った貴樹など、もはや冒流的何かである。長期間放置され蠅のたかる生ゴミの方が、いくらか良心的だ。

彼女がようやく熱視線に気が付き、顔を向けてきた。目線が合った事で、異常な鼓動は、突然死の恐れがあるレベルに上がった。どことなく知らない場所で不安を感じている表情を作り、会釈して話しかけようとする。

(まずは握手だ。スキンシップは大事。これ万国共通。はわわわわ、ひもりんの手ってどんな感触だろ。ん？ ハグするのも挨拶だっけ。やべえよ、自然な流れであの胸を感じられるじゃねえか…)

しかし、彼の望むあわよくばスケベ展開は、途中で断念せざるをえなくなる。

肩を誰かが掴んできた。オラつきたくのをこらえて振り返り、すぐ後ろにいた女子生徒の顔を見た。

さらに苛々が増す。

「先生？ ちょっと話があるんだけど、いいですか？」

距離感のつかみづらい言葉で、実織がおずおずと尋ねてきた。

「待ってくれないか？ あの人に用事が」

実織の顔が、不安そうに曇る。貴樹の腕をすがるようにつかむと、震える声で言った。

「ごめんね。たかにいに色々話したい気分なんだ。少しだけでもいいから、時間くれないかな？ 吐き出さないとやっていけないの」

「実織…」

貴樹は周りを見回した。誰もが仕方がないという反応をしている。自分の願望を指示してくれそうな者が一人もいない。完全に断れない空気になったので、彼は胃のむかつきを我慢して領いた。

「遠慮なんてしなくていいよ。何でも相談してくれ」

「ありがとう…。ここじゃ話しづらいから、移動しよう？ あんまり時間を取らせないから」

反転して笑顔になった実織は、彼の手を引いて洞穴の一つへ向かう。さつきまで貴樹と話していた三人組が、羨ましそうに二人を眺めている。

「やつぱり絵になるね」

「まあ正直、たかにい」を使う資格があるのは実織だけだよ」

「いいなあ…。私もあんなお兄ちゃんがほしい」

(そんなこと言ってる暇あったら、俺をフォローしろよ貧乳三人衆が。

あーあ、ひもりんが離れていく…)

遠ざかっていく火守女の姿を、視界から消えるまで未練たらしく見た。

点々と壁に照明が掛けられ、ほど良い明るさに保たれた洞穴を進み、角を曲がって誰の声も聞こえなくなった段階で、実織は彼の腕を乱暴に離れた。両手を丹念に、嫌そうにこすり合わせ大げさに舌打ちをする。貴樹もまた彼女が握っていた腕に部分に息を吐きかけ、岩の壁に擦りつけた。

実織は彼の方を見もせず、ため息交じりに言った。

「ずっと思ってたんだけど、演技するのって苦行なんだけど。どうしてあんたなんかと慣れ慣れしくしないといけないわけ」

「…」

彼は下に唾を吐く真似をした。

相手も不快そうな表情で言う。

「あのさクス兄」

4. 使命

貴樹は、目の前の女子に面倒そうな視線を向けた。

「……どうした、腐れ妹よ。俺は大事な用があるんだ。火守女さんの五億分の一の価値もないお前にかまつてる暇なんてないんだけど」

「はん、そういえばずっとあの人のこと見てたね。ああいうのが、好きなんだ。わかりやすいねー。従順で、清楚そうで、いかにも男好きのする感じが。気持ちわるーい」

尖った感情をそのまま顔に出し、貴樹は実織を睨みつけた。

「は？ 殴るぞ」

「男としてどうなの、それ」

「は？ 犯すぞ」

「兄としてどうなの、それ」

親指で首をかき切るポーズをとった彼に対して、実織は中指を立てる。外にまで声が漏れないよう二人の距離はかなり近く、下ではお互いに足を踏み合っていた。

戸水家におけるこの兄妹の仲は、最悪だった。家ではほとんど会話をせず（両親の前以外）、目が合っただけで舌打ち（両親の前以外）、メソンの切り合いは挨拶がわり（両親の前以外）。貴樹の男のプライドもあつてさすがに殴り合いの喧嘩とまではいかないが、代わりに見苦しい悪口のぶつけ合いはよくあることだった（略）。

「私だって、性格不細工のゴミなんかと話したくないんだよ。ただね、どうしても確かめたいことあるから、仕方なくこうするしかなかったの」

「ふーん。じゃあ早くしてもらいますかあ？ 妹がかまってちゃんだと、色々苦勞が多いんでねえ」

「死ね童貞」

「お前こそ消えろ処女」

「ええ、きつも。妹の経験の有無把握してるとか、変態でしかないんですけど」

「別にそうじゃなくてもいいけどな。大抵の女はビッチか、清楚ぶっ

たビツチか、喪女ぶつたビツチしかないからな」

「あれれ。その理論で行くときー、非処女ばかりの周りに対して、童貞貫けてるあんたが奇跡的存在になるんだけど。すごいすごいすごい、マジ尊敬だよ」

「んんん、ちよつと意味わからないかな。あつ……、ごめんな俺が悪かった。処女がこういう話題に頑張つて乗ろうとする涙ぐましい背伸びを汲んでやれなかったわ。俺お兄ちゃん失格だなー」

「そのまま人間からも落第してしまえ」

「残念！ 上下関係的に、俺がお前を落第させる権利を持つてるのでしたあ。おつとおつと？ いいのかなつ？ 高校卒業できなくなるよん？ どうどうどうつ」

教師失格である。

「は、はあ？ そんなことできるわけないじゃん。クビに決まってる」
「当たり前じゃん。ただの例え話だったの。おやおや？ もしかしてちよつと本気にしてた？ 素晴らしい。その素直さ、素晴らしい！」「うぬぬぬ……」

「どうしたどうしたどうした。もつと来いよオラア！ こんなもんかあ？ 昔のお前なら、もつと食い下がってきたぜ。ふふん、老いたな。戸水実織じゆうななさい、その年にしてババアっ！ うううう、お兄ちゃん悲しいです……。涙が止まらないよう。わあああああん」
実織はぶつつんした。

その口から言葉にならない何かを発し、彼の股間に蹴りを入れようとする。その攻撃は素早くそして文句のつけようがないほどの鋭さを持つていたが、読んでいた貴樹は半身ずらしてかわした。さらにかわされることを予測していた彼女は顎狙いの拳を繰り出し、それもまたやすやすと止められてしまった。

「お前の敗因はただ一つ。なあに、俺よりもガキだったつてことよ」

この兄妹の喧嘩は、煽り合いを軸とする。互いにヘイトを高め合い、先に感情に流された方が負けというのが、暗黙の了解になっていた。貴樹は唇を吊り上げ、鼻の穴を広げて実織を見下ろす。実の妹に口先で勝った男の顔が、これである。

「クズゴミカスアホマヌケ！ うんと、バカ！ それにバカっ！ お前なんか一生チエリーのままでもいい！ えと、アホ！ つうぶ」

怒りのあまり語彙力が減退している妹の口を無理やりおさえる。

「やかましい。静かにしろや。他の有象無象共に気づかれたらどうすんだ」

「……死ねカス」

「うんうんうん。ちゃんと老衰で逝くから、安心してね。ま、それより前に、お前は優秀な兄と比べられるのに疲れて自死するけどな」

「地獄行けクズ」

「よちよち。あのな、お前に割ける時間なんて無いって言ってるだろ？ 早く本題に入れよ面倒くせえ」

と言いながらも、実織が呼吸を整えている間に、舌を出し顔の横で手をひらひらさせながら全力で彼女を煽るのが、貴樹という粗大ゴミである。この男の家族というだけで、十分同情に値する。彼女の気苦労は底知れないだろう。

実織は眉間を指で揉みながら、くたびれた調子で言った。

「疲れた。普通に会話することすら困難だなんて。こいつは人間じゃないわ」

「はよ言え生理周期二十五日」

「キモいつての！ ……じゃなくて、そう、訊きたい事ね」

彼女は興奮でうつすら頬を紅潮させたまま、見据えてきた。

「あんたさ、ゲーム、持ってたでしょ。これの」

「ああダークソウルね。正確にはⅢだけな」

「何で、言わなかったの……？」

実織の声は、明確な憤りを含んでいた。

「あん？」

「だから、あんたはこの世界の事、知ってるんでしょ？ 他の誰よりも！ だったら、どうして何も口出ししないのよ。さも、自分は無知なふりして」

「寝ぼけてんのか。宇部や丸戸がいるだろ。どうして俺まで動く必要がある」

「とぼけんなよ。私、知ってるからね。お姉ちゃんが電話で言ったもん。そうとうやりこんでるんでしょ？ 他の誰よりも」

「ち、あのアバズレ。べらべらべらべらと」

「あんたの方がよっぽど最低よ！ 他の皆は全員やられたのに、あんなだけ一人、あの化物とここに来た。何か、あつたんだ。あいつを切り抜ける方法が何か。汚い裏技とか。それを事前に言ってくれれば、もっと」

「皆、無事だったじゃねえか」

「結果論よ。本当どうしようもないね。自分だけが助かればいいと思ってるさ」

貴樹は思わずといった形で、笑った。

「何よ」

「それだ。それなんだよ。だから話したくなかったんだ。初めっから頼ることしか考えてない害虫なんて、死んでなんぼだろ」

「は……」

「だからお前は何を見てきたんだ？ 確かに、途中までは順調だった。宇部とかの知識とやらでな。けど、その後はどうだ。あんなの、どれだけのものを知っていようと、乗り越えられるレベルじゃなかった。そもそも、てめーらが勘違いしているのは、ここがゲームの世界だつてことだ。笑えもしねえ。そんな他人事みたいな認識、さっさと捨てろよ。これで不死になったとしても、役立たずのゴミになるだけだぞ。今この足で立ってる場所が現実だ。間違えんじゃねえ」

「じゃ、じゃあ、あんたはどうやってあの化物に殺されなかったのよ」「グンダさんって言え。うん、そうだな。単純に俺の実力、だけではなく、顔、性格、運、全てにおいて俺は生かされるべきだと判断されたんだろう。つまり世界の意志だ」

実織は、無言で突進してきた。彼の胸元に飛び込むと、両腕を振り回してくる。言葉で戒める気すらなくし、ただ湧きおこる鬱憤うっぷんを晴らすためだけに直接的行為に出た、哀れな姿である。

「にににに」

「気持ち悪いな、くつつくなつて。お前は相変わらずブラコンだなよ

しよし。攻めるのは良いけど、そんな隙だらけだとほら、頭が大変なことになるよん」

彼女の真つすぐ整えられたショートボブの髪型を、悪意ある手つきでくしゃくしゃにしていく。傍から見れば、お前らやつぱり仲良いだろみたいな感想が浮かぶだろうが、二人は大真面目に嫌い合っているので安心してほしい。

「かみつ、さわんな」

「で？ それで話終わりか？ ったくお前つてすぐ手が出るよな。この貴重なエスト瓶が割れるとこだったぜ」

「……私も」

実織は懐から瓶を取り出す。まだ液体が満杯にまで入っていた。

「まだ飲んでないのか。他の奴らはもう全員めでたく不死になつたぞ」

「あんだだつて。何となく、嫌なの。こんなマンゴージュースもどきを飲んだだけで、死なくなるって……。速効性の何かがあるわけじゃないみたいだから、別にいいけど」

「うっわ、実織さんつたらマジ鬼畜。大事なクラスメートを実験台にしたんだあ」

「うるさい！」

「んだよ、実は怖いんだろ。全く理解に苦しむね。俺なんか試してみたくてうずうずしてるぜ？」

「やってみなさいよ、そんなに言うなら」

「おー、見てろ」

貴樹は期待感でにやけた面のまま、エスト瓶をぐいとあおつた。

（まずは口内で感触を確かめる。んー、確かにほとんど味はしないな。でも水よりは舌先に抵抗感がある。ふむ……。けどわずかな甘さ。さすが回復アイテム、味わい深いな。では、いよいよ喉に流し込んでいくとしましょうか）

『飲まない方が、身のためだぞ——？』

「げほげほげほっ！、うえ」

突然頭の中に男の声が響き渡った。と同時に口の中に痺れるような痛みが走り、たまらずむせてエストを全て吐き出してしまった。手から瓶が落ち、下の石の凹凸に当たって割れる。

「きたなっ。ねえちよつとやめてよ。おっさんじゃないんだからさあ」

実織が顔を歪めて飛びのく。彼女の文句にも反応せず、貴樹はきよろきよろ辺りを見回した。

「おい誰だ。どこにいる。さっきの言葉、どういうことだ？」

「うわ……。もしもし精神科ですか？ここに頭のイツた可哀そうな兄がいるんですう。ええ、いない誰かと話し出して。ええ、ええ、私としてはマントルの底に隔離がベストかと」

（実織には聞こえてない？ 確かに声があったんだが。気のせいのはずが。いや、それよりも）

貴樹は深呼吸をして、壁に寄りかかった。思わせぶりに目を閉じ、彼女が押し黙るまで静かにしていた。頭の切り替えは早い方だと自覚している。今自分が欲しい物が何なのか。把握している彼は、ゆっくりと目を開く。

「実織……」

憂いを帯びた眼差しで、彼女を真っすぐ射抜く。少し俯き加減に、やや上目遣いで。彼が過去、鏡で研究し完成した決め顔だった。気遣う動作で実織の顎を撫でて、耳元に作った低音ボイスで囁く。

「エスト、分けてくれよ……」

「あ、ごつめーん。あんたが目つぶってる間に全部飲んじやった。

てへ♪」

「くたばれビィイチ！」

貴樹は彼女に組みついた。

「は、ちよ、おい胸っ！」

「CよりのBなんぎ、ほぼ無価値だろうが」

「はあっ？ BよりのCだし！ これからもっと成長して、お姉ちゃん超えるもん！」

「あんな乳牛目指す意味ないわ。むしろ胸削って絶壁にしろよ。それはそれでウケる」

「は、な、せ！ ほんと死ね！」

「何かあるはずだ。お前、余分に二本貫ってないの？ 実は隠してんだろ、なあなあ。このローブ、いっぱい物入りそうだもんなあ。めくればぼろつと」

教師を失格になったただけではなく、この男犯罪者にまで身を落とすようである。

「このつ、バラすよ！ 全部。あんたの本性全部、クラスの皆に言いふらしてもいいの？」

「じゃあそのお札に、お前の身長体重スリーサイズ生理周期のデータに、お前がでつかい欠伸あくびした寝起き写真を付けてクラスの男子共に一斉送信するよ？ さて、ダメージが大きいのはどちらでしょう？」

「どこに、妹のそんな情報を、知ってる兄がいの！ 変態め！」

「お互い様だろ。お前だって、前に俺の……」

「それは未遂で……」

そこで、二人は全く同時に口をつぐんだ。そういう時だけ、仲良く息びったりだ。罵り合いながらも、どちらも近づいてくる気配には最大限の注意を払っていた。

曲がり角から、下田が姿を現した。

「あの、総会が始まるみたいです。一旦広場に集合してほしいって」
「そうか。わざわざ呼びに来てありがとうな」

ちらりと、下田は貴樹の胸に顔をうずめている実織に目をやった。

「えつと」

「ああ、……ほら実織、見られちゃってるぞ。もう落ち着いたか？」

「ん……」

彼女は首を振ってさらに貴樹の体に密着し、鼻水をすすする音を出した。

クラスメイトが泣いている姿など、そうそう見る光景ではない。下田は言葉を失い、所在なげに立ち尽くした。

それを苦笑して眺め、貴樹は言った。

「ごめんな。集合はわかったから、先に行つていいよ。すぐに僕達も行くから」

「はい……」

（あーあ、飲んでみたかったなあ、エスト瓶。あれ？ ていうかこれつてすごくやばい気もするけど、いてっ！ あ、こいつ背中の皮膚ひぶねじりやがって。オラツ小指踏んでやる。本当に俺より早死にしてくんねえかな、この！）

広場には、既に他の生徒達が、祭祀場の中で最も大きな鉄製の扉前に集められていた。貴樹と実織が歩いてくる音に何人かが気づいて振り返ったものの、大半は扉の向こうに待ち受けている何かに緊張しているようだった。

「この先で、貴方達と使命を同じくする方々が待つています。私の拙い説明よりも、はるかに実のある話が聞けるでしょう」

（うーん。こうして見ると、この糞妹とひもりんが同じ人間だとは思えん。本当の価値は、意識しなくてもわかるもんですなあ）

貴樹が実織の踵をこっそり蹴ると、新宮にしつこくどんな話をしてきたのか訊かれていた彼女は冷え切った目を一瞬向けてくる。

「扉が開きましたら、すぐには進まないでください。列席場までには、あらゆる仕掛けが作動しています。全て機密保持のためです。それらを停止するために、案内人が必要です。扉が開いた後、私の方を呼ぶまで待つていてください」

そして、何の前触れもなしに鉄の扉が開き始めた。歳月を感じさせる錆びた蝶つがいかぎが軋み、不気味な音を立てて動いていく。

（しかし、どうにも謎だな。祭祀場の広さといい、ゲームと比べるとあれだが違いが多いな。こんな仰々しい扉なんて一つもなかったのに。それにここが外敵に備えるための罠を設置してるなんて、ちよつと状況が怪しくなってきた。今考えても意味ないけど）

開き切った所で、火守女がすぐ横にある何の変哲もない岩壁を二回ノックした。すると上から下りてきた縄を引きながら、岩に顔

を近づけた。

「お願いします」

どんだんどん、とやや乱暴な音が三回帰ってきてから、少し先で何かが持ち上がる物音がした。それから数秒もたたないうちに、扉の開いた先からくたびれた男が出てくる。

「……ふん、こいつらか。全員奥に連れて行けばいいんだらう?」

薄汚れた青いマントと暗い色の鎧を着た、どこか表情に諦観の見える、外見が三十代の男だった。

(おおつ、ホークウッドじゃん! ニートだニート。なにこいつ、こんな雑用任されてんの? 笑える)

ニートのあだ名通り、彼は拠点である祭祀場からほとんど外に出ることはないNPCだった。火守女と同じく、初期にしかも必ず出会うことになるので、ネタ的に需要があった。

「はい。大事な使命を持つ方々です。列席場までお連れ願います」

「わかった、わかった。大事な使命か。それはそうだろう。ちゃんと案内するさ」

皮肉気に言った後、ホークウッドは全員を見渡し、扉の奥を顎で示した。

「さあ、ついてくるがいい。俺よりも先を歩くと、死ぬぞ。まあ、お前達はもう永遠に死なない体になったんだらうが。フツ」

先を進み始めた彼の後ろで、生徒達は気まずい顔で囁き合った。皆反応に困っている。

列席場までの道は何の変わり映えもない洞窟だった。ただホークウッドはこまめに立ち止まっては、傍目ではよく意味のわからない操作をしていたので、何か仕掛けられているのは本当なのだろう。

貴樹はホークウッドに話しかけたかったが、生徒の目もあって難しかった。

「お前達も災難だな。王達を連れ戻せたと? 簡単に言いやがる。奴らは全員、かつて薪を継いだ化物だ。俺達が敵うわけがない」

「はあ」

「あのエルドリッチなんざ、話を聞いただけでも震えあがる奴もいる。

人食らいにわざわざ近づく方がどうかしているだろう。ロスリックの兄弟も、弟は弩級の奇跡を使い、兄は火の纏った剣技を操ると聞く。ヨームは戦う以前の問題だ。巨人になど、一体どこに勝てる理屈がある？ ……深淵の監視者共は、まあ単純に強い。剣筋の読みにくさで言えば、圧倒的だ」

「そうなんですか」

（くっそ。国広め、ちゃんと返事しろよ。嫌ならそこ俺と代われや）

「それに比べ、お前達は子供しかいないじゃないか。見た所、戦いに無縁な人生だったんだろう？ 使命など、くだらない。上が勝手に決めたものだ。向いていない奴は辞めていいんだ。そうだろ？ 特にお前は、不死街で体を売っている方がまだましな生活を送れるぞ。あそこの女は飢えているからな。フツフツ」

国広は軽く引いていた。

（二トを必死に正当化しようとするホーさんマジ最高。大好き。挨拶したいのに砂利共が余計だ……）

ゆっくり進んでいたのが長く感じられたものの、道自体は短く、先ほどと同じくらい大きな扉が見えてきた。ホークウッドが脇にあるレバーを引き、開閉音が鳴り響く。

「可哀そうに。これでお前達も囚われの身だ。使命という枷に囚われ、酷使される哀れな存在に成り下がるわけだ」

「————ホークウッド。あまり意地悪をしないでやってくれないか。無暗に彼らを怯えさせるのは、褒められることではない」

開いた先から声が響いてきて、生徒達はざわめいた。

「……わかっていますよ。だが俺の戯言など、誰も本気にしないでしよう」

「ご苦労だった。君は戻りたまえ」

「ええ、仰せの通りに」

これ見よがしに鼻を鳴らしてから、彼は去った。

「さあ、火の無き灰達よ。入ってくるといい」

ほぼためらいなく踏み出した宇部と丸戸に続き、全員が扉から中へと入る。列席場の名の通り、開けた部屋の中、木造りの椅子が整然と

並べられている。それらに直面する形で、三つの石の玉座が設けられていた。

ちやうど中央の席に座する小男が、穏やかな笑みで木椅子を指し示した。

「遠慮なくかけてくれ。席は足りているはずだ」

(お……)

ダークソウルを未プレイで、何の備えもできなかった者達の反応は特に大きかった。

まずは一人目。声をかけた男は生徒の中で最も小柄な者よりも一回り体が小さく、左脚の先がなくなっていた。他にも所々に痛々しい傷が刻まれ、そのほとんどが焦げたように赤茶けている。

その右の玉座に座るのは、純白のドレスに薄いケープを被った華奢な女性だ。露出している腕は触れれば簡単に折れてしまいそうで、全体的に儂げな雰囲気を持っている。女子生徒の何人かがうつとりと見とれるほど、吸い込まれるような美しさだった。

残るは、もはや人ですらない。全長五メートルを優に超える巨大な狼だ。その分だけ大きく作られた石座の上で体を丸め、深い緑の瞳を静かに向けてきている。

全員が座つたのを確認した後、中央の小男が再び話し出した。

「私はルドレス。これでも、かつて薪を継いだ王だった者だ。君達を統括する地位に付いている。よろしく願おう。では、君達に課された使命を伝える前に、左右の二方を紹介させてもらう」

狼が身を起こし、低く吠える。

「この御仁は、シフィオールス。原初より血統が続いてる大狼の末裔だ。とても大きい体をしているが、君達を取って食うようなことはない。優しい方だ」

立派な牙の生え揃う口を開く。

「歓迎する、火の落とし子達。呼ぶのならシフと、略してくれてかまわない」

「まあ、かの大狼と同じ名は恐れ多いと言っていたではありませんか」
可笑しそうに、女性が口を挟む。

「言わない約束だろう。現にお前達もそう呼んでいるではないか」

「そうね。貴方の名前は言いづらいと、常々思っているもの」

そうして、女性がふと気付いたように生徒達の方を向く。それだけで、男子のほとんどが生睡を飲んだ。彼女の挙動の一つ一つに、気品とかなりの魅力が詰め込まれている。

「あら、ごめんなさい。紹介が遅れてしまいましたね。私はヨルシカ。希望の象徴たる皆様と会えて光栄です。この中の誰が暗月の一員になるのか、楽しみにしていますよ」

「それはまだ先の話だろう。これから彼らが決めていくことだ」

「フッフ、そうでしたね。皆様の意志が一番大切ですから」

（何だこれは。ここまでできたら、もう別物だ。ルドレスはともかく、どうしてヨルシカがここにいる？ 狼に至っては、存在自体がよくわからん。本当に状況が読めなくなってきた。まさか、俺が何度も想像した、夢のあれが実現しているなんてことは）

貴樹がゲームとの違いに驚愕している間に、ルドレスの説明が始まっていく。前に実織に対してドヤ顔で現実がうんたらと話してたくせに、こうした事態には呆気なく動揺する男である。

「聞く所によると、既に己の成すべきことを理解している者もいるようだが、大半は途方に暮れているだろう。一言で言うなら、君達は我々の世界を救うために呼び出された。今、この世界には暗闇が迫っている。全ての明かりを司る、最初の火が陰りを見せているからだ。本来ならば、ロスリック王子が薪の王と成り、火の勢いは取り戻されるはずだった。しかし、彼はその責務を投げ出し、城のさらに奥、大書庫の中へとひきこもってしまった。愚かな行動だ。生まれてきた時からそうあれと言われてきたというのに。」

偉大なる火の発見者、初代薪の王、グウィン様がある言葉を残している。次の薪が現れない時、どこからともなく鐘が鳴り、過去の薪の王たちが蘇り代わりを果たすと。

深淵の監視者。

巨人ヨーム。

神食らいのエルドリツチ。

そして、私。クールラントのルドレス。

だが、ここでもまた予想外の出来事が起こった。私以外の蘇りし王達が全て、ロスリックと同じように玉座を放棄した。彼らは各地に散らばり、火継ぎの儀を終わらせようとしている。

グウィン様の言葉には続きがある。さらにかつての王達までもが、己の使命に背を向けたのならば、最後の救済措置が発動し、異界より我々の常識を超えた戦士達が呼び出されるであろう。彼らの総称は火の無き灰。不死身の体の可能性と特異な能力を持ち、逃げ出した王達を狩り、その薪をくべるだろうと。それが、君達の事だ」

ルドレスが一拍置いて、生徒達をぐるりと見回す。

「私達は火継ぎ遂行のための組織を作り上げ、君達の出現を待っていた。あの、得体の知れない液体を飲まされただろう。あれは君達にしか適合する事のない、特別なものだ。さらに不死身だけでなく、君達是我々よりもはるかに良質なソウルの器でもある。その所は、火守女に後で教えてもらうといい。これから戦っていく上で、とても貴重な話を聞けるだろう。ここまでで、訊きたいことがある者はいるかな？」

すつと、国広が手を挙げた。

「あの、俺達がその使命を果たせば、元の世界に帰してもらえんという事でしようか」

「断言はできないが、おそらくそうだろう。やるべきことを全うした灰達には、救いが訪れると言い伝えに残されている」

ほつと彼は息をついたが、まだ不安の色を隠せない者も多かった。

「でも、皆がいた場所では、武器を持って戦うことなんて全くなかったんです。そんな俺達が、果たして役に立てるかどうか……」

「心配はしなくていい。何度も言うが、君達は死ぬことはない。戦闘に関して、明日からしばらく、この組織に仕えてくれている者達を指導にあたらせよう。彼らの紹介ができるのは、まだ先の事だ。君達は戦い方が各々違っていろいろだから、分かれてそれぞれ専門の者に教えを請うことになる」

「なるほど、わかりました」

「なあ、言つたら。ゲームとまるつきり同じ。いくらでもリトライできる」

「ああ、うん……」

宇部に対して、国広は複雑な表情で頷いた。少し怖がっているようにも見える。グンダの時に囷に使われた事を考えれば、無理もない反応だった。

「はっ、最高じゃねえか。死なねえ体、強くなる可能性。楽しみだな」
宇部の言葉に賛同するように、丸戸もにやりと笑った。男子達は自らが不死身という反則級の性質を備えた事で、不安よりも興奮が勝っているようだった。

困ったのは、貴樹の方である。

(おい……、どうするよこれ。俺だけ例外じゃねえか。くそ、実織の奴が分けてくれればよかったのに。だが、それほど焦ることもねえ。あのグンダを圧倒した力さえあれば、殺されることなんてなくなる。むしろ俺が最強だ！ はははは)

一番己の可能性にテンションが上がっているのは、この男だった。「さて、最後にこれはさらに先の話になるが、君達は修業期間を終えたのち、特定の誓約せいやくをかわしてもらうことになる。つまり我々火継ぎ肯定派には三つの軍団があり、そのうちの一つに配属されるということだ。

一つは太陽の戦士。君達が既に会ったグンダの他三人が所属している、遊撃専門の少数精鋭。代表者は訳あってこの場には出席していないが、なかなか愉快な男だ。さほど身構えないですむだろう。次に、二つ目は」

巨狼シフィオールスが、前足を折って頭を下げる。

「団長シフが統括する、狼血ろうけつの騎士。主に諜報を担当している。人数は六名。全員、初めは気難しげに見えるだろうが、仲間意識は強い。親身になって君達の助けとなってくれるだろう。何より、長であるシフは誰よりも慈悲深い」

「お褒めにあずかり、光栄なことだ。私は君達に期待している。できることなら、何でもやろう。共に火継ぎを成功させるのだ」

「では最後に、暗月の剣。人員は最大を誇る。他二つの支援や戦いにおける主軸を担ってもらっている。女性が多い団だが、誰もが本物の戦士だ。魔術、奇跡、呪術師の層が厚く、それらを修める者ならば参考になることも多いだろう」

ヨルシカが立ち上がり、微笑んでからお辞儀した。

「総長を務めさせていただいています。まだ使命を知らされてから間もなく、不安を抱いている方も多いでしょう。私もシフと同じくできる限りお役に立ちたいと思っていますので、よろしくお願いしますね」

はつきり言って、この時点で大勢の心が傾いたのは確かだろう。特に男子の。ヨルシカという存在と、女性中心という言葉に多大な魅力があつたのは言うまでもない。

「長くなってしまったが、これで一通り説明し終わった。最後に、まだ腑に落ちない点があるという者は？」

誰も、挙手することはなかった。ある程度自分の置かれている状況が把握できたので、満足している者がほとんどだ。貴樹にとつては数えきれないほど尋ねたいことがあつた。しかし、生徒達の目もあり、深く突っ込んだ質問ははばかられた。

ルドレスが手で玉座の端を叩き、締め言葉の言葉を口にする。

「では、今日は各自ゆつくりと休むことだ。部屋はそれぞれ個室が用意されている。火守女が案内してくれる。明日、広場に集まる時間は、中央の篝火が教えてくれる。その時までは部屋の中で待機しててくれ。——ああ、その君。君だけは、まだ残っていてほしい」

誰に言ったのかいまいち示していないので、帰ろうとした全員が立ち止まった。

(うん？ 俺の方を見てきてない?)

5. シモダアキヒロ

ルドレスの視線は、真つすぐ貴樹をとらえている。

「君は、この中で最年長らしいね。少し話をしたいから、留まっ
ていてくれ」

「…はい、わかりました」

内心ガツツポーズを取りながら、彼は生徒全員が出ていくまで待
た。

（望んだことがすぐ実現だなんて、さすが俺。この機会を大事にせね
ば）

多人数がいなくなり、がらんとした列席場の中、貴樹は早速話しだ
そうとした。

「ああ、少し。少しだけ、こちらから話をさせてくれないか。色々と言
いたいのはよくわかる。ただ今は我慢してくれ」

（ここで焦らすなんて、もうっ！ テクニシャンねっ）

本当に気持ち悪い。

「まずは君の、その格好はどうにかならないか。下着一枚というのは、
かなり不便そうだが」

「僕も困っているんです。ここに来て最初に何か着ようとしたんです
けど、そうする度に激痛が走る具合でした。実は、武器すら持てない
んです」

「ほう、それは災難だな」

「治す方法とか、何かありますか」

（素手で無双も良いけど、でかい武器も振り回してみたい…）

「すまないな、君のそれが、呪いの一種であることは推測できる。だ
が、今までに例がないものだ。方法を探すにしても時間がかかりそう
だ」

「不思議と体温管理とかできてるので、一応問題ないですけど」
「探させてはみよう。次に、これが最後だが、訊きたいことが」

ヨルシカが手を伸ばし、ルドレスの玉座に触れる。

「ルドレス。そのことは、証人がいた方が早く進みます。他にも戦士

達の印象を聞いておきたいのです。全員に見てもらって、判断しましょう」

(判断? どういうことだ)

貴樹の目で見ても、前方の二人と一匹はどこか緊張しているようだ。自分にそれがはつきり向けられているとわかるので、尚更不可解だった。

ルドレスが先ほどよりも張った声で、場の全体へ呼びかけた。

「皆、出てくることを許可する。当面の安全は確認された。全員集まってくれ」

天井から、複数の影が音もなく下りてくる。その直後に奥の方にある扉からも続々と人々が姿を現した。かと思えば、それぞれの玉座の背後から突然現れる者もいて、最終的には二十名近くの集団が貴樹の前に形成された。

「他の者より少し早めの対面になってしまったが、彼らが今外に出払っている者を除いた、全ての戦力だ」

(Oh……。アンビリー—バブオオオオオオオオオオ！ おっほおおおおおおおおおおおおおおおおおお)

貴樹は失禁しかけた。が、辛うじてこらえ、ふらふらと後ずさってから、何とか木椅子に座り込む。この世界に来てから多々、自分の表面にまで素の感情が漏れ出てしまうことがあるが、この瞬間のものはこれまでに最大だった。

そこにいる人達のほとんどを、彼は既に知っていた。

「君達の印象を訊きたい。この男は、どれほどの力を持っているか」

「ウーム、このほぼ全裸の男をか?」

(ジークバルドさああああああああああん！ きゃああああああほんものおおおおお)

「そうですね…。体は相当鍛えていると思います」
「……」

(アンリちゃああああああああん！ ホレイスううううううううううう。マジか、さいこうおおおおおおおおおおおお)

「初対面で、実力を判断しろ？ 無理だ。私は別にその方面の専門家じゃない。これだけなら、ただの変人にしか見えない」

「…同意見だ」

「できれば、ちゃんと服を着てほしいんですが…」

「俺はこのためだけに呼ばれたのか。ならもう帰っていいかな。腐るほど研究しなければならんだ。君達のためにね」

(カルラさあああああああああああ、ユリアさああああああああああああん！ はあはあ、やべえよマジやべえよ。オラもう我慢の限界。抑えないと、とにかく抑え、んあああああああああ、オーベックうううううううう！)

鼓動の音で、頭が痛くなりそうだった。これだけの顔触れの前で粗相だけはしないよう、あらゆる自制心が働いている。有名な絵画の中に入り込んでしまったような、不思議な感慨が彼の高揚を維持し続けた。

坊主頭で、目尻と口が吊り上がった、いかにも悪人顔の男が胡散臭げに貴樹を見据えた。

「他の灰達は皆鎧を着てるのに。怪しいぜ。こいつ、勝手に紛れ込んだ亡者じゃないですかあ？」

(パッチは死ね)

貴樹は平静を取り戻せた。

改めて見てみると、明らかに場にそぐわない集団がいることにも気が付いた。その者達は全員同じ装束を身に付けている。上に尖り、ちようど目上あたりで周りに裾を広げた鉄兜に、片側に赤いスカーフを留めた年季の入っている鎧。手甲も足甲も細身に作られていて、機動性に優れていそうだった。

(なんで、ファランの不死隊がここに?)

またの名を、深淵の監視者。

(皆さん、手ごろな薪が側にいますよー。いや、待て。こいつらが狼血の騎士っていう事か。不死隊の中の、火継ぎ肯定派って所だな。こいつらまで味方に加わっているのか。面白い)

騎士達は、特に言葉を話そうとしなかった。貴樹という存在に一切の興味を抱いていないようだ。

「ミレーヌ。彼の所見を教えてください」

シフが騎士の一人に呼びかけた。その中で最も小柄であるものの、貴樹に迫る身長の人だ。兜を脱ぐこともなく、ミレーヌと呼ばれた者は答える。

「……この男からは何の力も感じられない。とてもグンダが認める程の男とは思えないわ」

くぐもつていても、女性の声だとはわかった。

「これなら、隊の六人の誰でも、苦もなく殺せる」

「クク、おい七人の間違いだろ？ 騎士様」

パッチが割り込んできたが、狼血の騎士全員が同時に見下ろしてきたので、両手を挙げながら後ずさった。

「口を閉じなさい、薄汚い泥棒が」

「おうおう、わかったよお」

（やっぱりこいつは嫌われてるようだな。ぷぷぷ、ざまあ。お前なんか他の方々に近付くんじゃねえ。特に女性陣）

ルドレスが列の一番端に立っているグンダへ目を向けた。

「君の意見と、随分食い違っているようだ。単純な近接戦闘において、この中で右に出る者がいない君に匹敵する実力があるとは、私も信じられないでいる」

「我輩は、己の目で見たままを言っただけである。だが、ンン、すまなんだタカキ。結局ごまかしきれなかったぞ」

（やけに隅で落ち込んでいるかと思えば、俺との約束を気にしてたのか。やだ、ちょっと可愛い）

「あー、いえ。僕の言い方が少しまずかったですね。この場にいる人には、別に知られてもいいんですよ。ただ、生徒達には黙ってほしいだけで」

「ム、そうなのか。何だ、別の理由をどうしようか考えるだけで精一杯だったが、心配は杞憂だったな。よかった」

「ええ、おかまいなく」

二人で笑い合っていると、ルドレスが気を取り直すように言ってきた。

「つまり、グンダの言ったような力は、君になかったということかな」「そうじゃないです。グンダさんの言葉は正しいんです。だから僕一人だけ、何とか生き残れたというわけです」

「ヨルシカ、シフ。彼の言葉を信じるか？」

「確証がない」

「あまり、信じられませんね」

一言で片づけられて、貴樹は少しむきになった。興奮自体は落ち着いてきた代わりに、この人達にちゃんと認められたいという欲求が湧いてくる。

椅子から立ち上がり、彼は集団の視線にたじろぐことなく言った。

「グンダさんの証言だけじゃ足りないなら、誰か僕と戦ってみてください。それを皆で見れば、本当かどうかわかります」

「ふむ。そこまで言うのなら、納得のいく形で収めたいと思うが。誰を相手にすればいい。やはりグンダともう一度戦ってもらうのがいいかな？」

「はい、それで」

「——私が」

決まりかけていた所で声を上げたのは、漆黒の長いスカートに甲冑という奇妙な出で立ちをした、白髪を背中に流している女性だった。

「ユリア、君が？」

「はい。確かに灰は、これからの可能性に富んでいます。しかし、今はただの捨て駒にしかありません。それをまだ理解していないこの男は、正直気に入らない存在です。今のうちに実力差を理解させるのが必要でしょう。グンダを出させるまでもない」

（え？ ちょっと）

貴樹は予想外の展開に戸惑った。

「すみません、それはやめていただきたいというか」

ユリアは、冷たい眼差しを向けてきた。

「何だ。ここに来て嘘をつくのが怖くなったのか」

「いやー、というより、その、心配なのはそうじゃなくてですね。えっと、まだ僕は手加減できないというか、グンダさんくらいなら思いつきりやれるんですけど」

ユリアの周囲が、青白く光り始めた。それを見た周りの者がさりげなく彼女から遠ざかる。ヨルシカが仕方がないという表情で、首を振っていた。

「…それは、つまり、私が貴様よりも劣っていると聞いたいわけか。使命を伝えられただけで舞い上がった弱者め。その驕りが身を滅ぼすことになるぞ」

（あれ？ ユリアさんってこんな性格だったっけ。初めて会うときは必ず好意マックスのはずなんだけど。私の全てをあげるって言うてくれるのに。ヨエルから暗い穴を貰ってないから、あんなツンツンしてんのか）

「違うんです。優劣とか、そういう問題じゃなくて。ただ、ユリアさんの体が心配なだけで」

「気安く名を呼ぶな」

ユリアから放たれた小さい光球が、貴樹の眼前で弾けた。思わず目をつぶったが、体には何の衝撃もない。

目を開ければ、いつの間にか他の皆が一斉に、周りの椅子を部屋の端へとどかし始めていた。そのぽっかり空いた中央の空間で、貴樹とユリアが向かい合って立つ形になる。彼女と戦う準備は万端なようだった。ユリアが木剣を手に持った所で、ルドレスが説明を始める。

「勝敗がつくのは、どちらかが降参した時か、続行不可能と認められた時だ。ユリア、灰といえど彼を殺すのは禁止する。味方同士でなど無益だ」

「わかりました」

「タカキといったな。君から望んだこととはいえ、初日からこうなっってしまったのは私としても遺憾に思う。何か望むことを言いたまえ。勝敗に関係なく叶えるよう、尽力しよう」

その言葉に、貴樹は己の意識が切り替わるのを感じた。

（マジツすか）

「じゃあ、一つ、いいですか」

「できることなら、何でもいい」

深呼吸してから、望みを口に出した。

「皆さんと、握手させてくださいっ！」

(わわわわわわわ、言っちゃった言っちゃった)

固唾を飲んで見守るような空気が、一瞬停止した。

「…握手？」

「ええ、その、記念としてですね。ここにいる全員に挨拶しておきたいんです。互いに手を握るのが、僕のいた国での挨拶でして」

「挨拶…」

何となく拍子抜けした雰囲気になった所で、ユリアが剣の先を貴樹に向けてきた。

「貴様も剣を握れ。口だけの実力があるか、精々示して見せろ」

「できません。さつきも言ったと思うんですけど。武器は持てないんです。だから、このままで」

彼女の目が、さらに鋭くなった。

「どこまで侮辱すれば気が済む。私だけは、貴様などと手を握ることはしない。己の力を過信し際限なく凶に乗る矮小な男など、挨拶する価値もないだろう」

(ぶっつーん)

初めの方はなるべく慎ましくして行こうと考えていた彼は、早くも予定を変えることにした。表情筋を一段階緩め、仕方なしと息を吐く。

「ルドレスさん、条件の追加をお願いします。僕が勝った場合、さらにもう一つ望みを叶える権利をください」

(ツンだらけのユリアさんも可愛いけどさあ。いやほんと。兜の下はブスとか書き込んでた奴らに見せたやりたいよ。でも、ちよつとねえ。さすがにここまで言われちゃったら、俺の実力を見せてあげられないよね)

「内容は」

今この瞬間の貴樹の思考は、下心満載だった。

「ユリアさんの全てを、僕にください」

「何」

ユリアが驚いた様子で木剣を下ろした。

「タカキ、それはどういう意味かな」

「まんです。まずは僕に対する呼び方を貴公か、貴樹様に変えてもらいます。他に僕のどんな指示にも、従わなければならない義務が彼女に発生します」

（決して、これは浮気ではない。ひもりんが一番なのは決まってる。でも、ちよつとだけ。この人のスリーサイズを調べるくらいなら、許されるはず。ムッフ、鼻血でそ）

変態である。

「ふざけるな！ そんな下卑た要求など」

「まだ、追加条件があります」

貴樹は内心ほくそ笑みながら、ユリアの元へと近づいた。彼女の剣が届くギリギリの場所まで行くと、目をつぶって両手を頭の後ろに組んだ。

「最初の一撃は、あなたに譲ります。こうして僕は無抵抗でいますから、遠慮なく叩き込んでください」

彼女は文句を言いかけた口を止め、再び剣を握りしめた。

「何だと…」

「一番納得できるやり方になって。これでその後も続けるべきか判断ができるでしょう。ここにいる皆なら、実力差を測るのは簡単なことです」

「無抵抗の相手を、攻撃しろというのか」

病的にまで青白いその頬に、朱が昇ってくるのを彼は見た。躊躇う言葉とは裏腹に、挑発に上手く乗っている。もう一息で動かせそうだと判断した。

手加減しようと思いながらも、貴樹は得意技を繰り出す。

「あっ、すみません。これじゃあ対等じゃないですね。僕が負けた時も、貴方は何かを要求できることにしましょ。それがいい。何かありますか？」

「…」

「何と、望みがない。それは無欲で見上げた人ですね。でもでも、このまま自分から名乗りを上げた勝負から降りるっていうのは、どうなんすかね。これじゃまるで、負けた時のことが怖いから辞退したとしか考えられないな。う——ん、悩ましいです…」

そうして、眉間に指を当てて大げさにポーズを取る。薄ら目を開けて、彼女の剣がピクリと動いたのを見た時、勝利を確信した。

「…私が勝った時は、二度と視界に入らないことを約束しろ」

「ユリア、本当によろしくて？ 一度冷静になった方がいいのではないですか」

ヨルシカが半分くらい面白そうにして止めに入るが、貴樹の虫唾が走る煽りを受けたユリアは、もう引き返せない所にまで来ていた。慣れている実の妹ですら耐えられないのだから、仕方のないことである。

「総長閣下。これは一種の教育です。哀れな男に、現実を教えるためのものですから。問題ありません」

ユリアが構えた所で、ルドレスが開始の口上を述べた。

「ではまず、ユリアが一度攻撃を行った後に、両者の戦いを始める。これで皆異議はないな」

（はい勝った。獲ったわ。早くも一人ゲツチユ。本当はちゃんと忠誠を勝ち取りたかったけど、力で屈服させるもの悪くないね。さっそく息子がビンビンだよ。いやあ、これからの生活が楽しみだなあ…）

定められた勝利に、貴樹は天狗に成りきっている。グンダの拳でさえ平然と受けられたのだから、あの木剣で叩かれたとしても何の痛みもないと思っている。そして全く効いていない様子に呆然としたユリアを、優しく紳士的に気絶させるといのが、彼の考えだった。意識の断絶方法は幾通りも習っているので、相手の体を傷つけることなくこなすのは容易だ。

目をつむったまま、先への渴望をたぎらせた。

「始め」

ルドレスが言い終わると同時に、ユリアの木剣は風を切った。

その剣先は正確に貴樹の顎へと直撃し、脳に多大な衝撃を与えた。何かしらの反応を示す間もなく、彼の意識は消失する。女性とは言え熟練の戦士の一撃を受けた体は、一瞬でバランスを崩し、剣撃の流れた横方向へと転がった。地面についてもまだ勢いは衰えず、側面を擦りながら、端に寄せられた木椅子に突っ込んでいく。盛大な音を立てて、彼は椅子の中に埋もれた。

また性質の違う沈黙が流れた後、グンダが首を傾げた。

「おかしいな。こんなはずでは」

直前まで、散々自信のある素振りを見せていた貴樹は、口の端から涎を垂らしながら伸びきっていた。少しだけ幸せそうに見えるのは、勝った時のあれこれを想像していたせいだろう。

勝敗は、確かにすぐついた。

ルドレスが一度咳払いして、言った。

「とにかく、この者を個室に運んだ方がいいだろう。ユリア、すまないが頼む」

言われた彼女は頷き、すっかり呆れ果てた様子で、転がる貴樹を見つめた。

「弱い」

それは、この場にいる全員が思っているに違いない。

自業自得である。



「おい、気のせいかもしれないけど、実織さんお前の事見てないか？」
誰もが、先ほど聞いた説明で浮足立っている時だった。広間に戻ってきた生徒達は、それぞれいつものグループに固まって、盛んに話し合っている。そこだけが普段の学校生活と変わらない。下田は、何となく不思議な感慨を抱いていた。

目の前の篝火は、一向にその勢いの衰えを見せない。ぼんやりと火にあたっていると、自らが一度死んだということが、嘘みたいと感じ

られた。

「彰浩くーん？俺の声届いてる？」

「大丈夫、聞こえてるって」

「お前やけに落ち着いてんな。その冷静さを俺にも分けてくれよ。さつきからトイレに行きたくてたまらないんだ」

下田はもの思いを断ち切って、横にいる友人を見た。

「場所、訊けばいいじゃん。あそこに立ってる人に」

「いやいやいや、さすがにそこまで度胸ないよ。あの人仮面みたいのかぶってるけど、絶対美女だろ。緊張しちゃうんだよね、そういう人の近くって」

「わかるの？目って結構重要な部分だと思うけど」

「わかってねえな。美は、体を表すんだ。見てみるよ、あのいい感じにくびれた腰、あれは絶対脱いだら化ける」

「そんなことばかり考えてるから、モテないんじゃない」

「お前もな。女子にぬいぐるみ扱いされるくらいで喜んでるようじゃ、その先なんて一生たどり着けないぜ」

「身長は、伸びてるから」

「ほ、そうでございますか」

草野とは、中学からの付き合いだった。環境の変化に戸惑って馴染めずにいた所に初めて話しかけてくれた、なんてありきたりなきっかけなどなく、席が隣だったからとか、偶然同じ委員会に入ったとか、そうした接する機会が増えるうちに話が合い、仲良くなった。他にも緩い関係の友人はいるが、一緒にいて何の気づまりがないのは草野だけだ。

そんな、彼も。

下田は思い出す。

そんな彼も、逃げ惑っているうちに、あの鎧の戦士に殺された。その表情が苦悶に歪み、首から下がなくなった顔が宙を舞うのを、はつきりと見た。見てしまった。自分もひどい恐慌状態に陥っていたはずなのに、そこは明瞭に記憶している。子供の頃、指の隙間から母の借りてきた戦争映画を見た時よりもずっと、凄惨な光景だった。

自分は、まだましな方だと思う。目の前に刃が迫って、気がついたら死んでいたのだから。しかし、違う人もいたはずだ。周りがほとんど殺されていく中で、嫌だ嫌だともがきながら、潰された人もいたはずだ。あれは夢だと言いついても、心に深い傷が残るに違いない。なのに。

「そうだそうだ、話したかったのはそれじゃないや。すぐ脇にそれるわ、ほんと。…真面目に聞くんだけだよ。お前、実織さんと何かあったの?」

「えっ、なんで?」

「だから、さつきからずっと見てきてんだって。俺の方かと思って手振りかけたけど、よく考えたらお前だった」

振り向くと、確かに一人の女子生徒がこちらを見てきていた。下田と視線が合うと、実織はかすかに笑って、近づいてきた。

「ちよ、ちよ、マジで? 隣にいるの新宮だよ。やっべ、クラスのツートップビュー―ティー―が来る…」

「その変な称号、聞いてる方も恥ずかしいよ」

興奮する草野を諫めようとするものの、自身も緊張していた。実織は、担任である貴樹の妹だけあって、大概の男子が魅力を感じる容姿をしている。髪は思わず触ってみたくなるほど綺麗に手入れされていて、完璧な曲線を描いた柳眉の下には大きな瞳が宝石のようにいつも輝いている。絶えず多くの人に囲まれて、いるだけで教室の雰囲気が出るようになるような存在だ。

どちらかと言えば、そんな彼女を離れた席から眺める立ち位置にいたのだが、今の特殊な状況では少しだけ違った。

「ちよっという? 話中だったら悪いけど」

「全然全然大丈夫。むしろ暇すぎて吐きそうになってたところ」

彼女に付いてきた新宮が、可笑しそうに言った。

「草野君に用があるわけじゃないよ」

「え、そらあないっすよ。俺も会話にまぜて!」

「相変わらずだね。いつも元気」

「それは、健康な男子として当たり前です」

「？」

新宮が不思議そうに瞬きした後、実織が溜息をつく。

「はいはい、あんたはもう黙って。話が全く進まない」

「難しいな。美人との会話って、できる限り長く味わっていたいだろ」

「はいはいありがとう」

下田は、黙って三人の会話を聞いている。この友人は、グループの垣根を気にしない。どんな人でもある程度上手く会話をこなすことができる。その社交性は素直に尊敬でき、また羨ましくも思っていた。

実織がこちらに向き直り、真つすぐ見てきた。

「急にごめんね。遅くなって自分でも酷いと思うけど、お礼を言いたくて」

「お礼？」

彼女はやや気まずそうに、斜め上に視線を向ける。

「ほら、あの時。私がやられそうになってたのを、助けてくれたよね。その後かけてくれた言葉も、すごく勇気が出たんだ。ありがとうね」
つつかえるな、と念じて、口は上手く回らなかった。

「僕は、えっと、その時は何も考えてなかったし。偉そうなこといっぱい言ったかも…」

否定してみせると、さらに真剣になって返してきた。

「そんなことない。私、びっくりしたんだから。下田が、その、あんなに度胸があるなんて」

「でも、結局僕は殺されちゃったから。礼を言われることなんて」

「けど私は、本気であれで感動して」

「はい。ちよつと声大きいよ二人とも」

新宮が間に入り、二人の胸を手で押した。その顔は楽しそうにやけていて、放っておいてこのままどうなるか見てみたいという、少し悪戯っぽい感情も含んでいる。

「実織、焦っちゃ駄目だよ。それだけじゃないでしょ？ 下田君にしてもらったこと」

「わかってるよ」

草野が、好奇心丸出しの様子で下田に説明を求めているが、答える余裕はない。少し強い口調で言い返した彼女の横顔を、何となしに見つめていた。鼻筋の通り具合が、お兄さんと似ているなと思う。

彼女がこちらを向いてくると、微妙に視線を外した。

「それで、あー、紗奈が話してくれたんだけど、私の腕の傷も治してくれたんだって？　すごく深く斬られた感じだったのに。血なんかもいっぱい出てさ。私の炎と同じように、下田も不思議な力が使えるんだね」

「それでも、み、実織さんも結局死んじゃって…。だから、意味がないと思う」

彼女は苦笑する。

「言ったらおしまいだって。謙虚だなあ。それでも、私の命を二度も救ってくれたことには変わりないから。——本当に、ありがとう」

「あ、私からも。感謝してるよ」

新宮にも言われたので、いよいよ彼は言葉に詰まった。普段なら、彼女達と話して何かに感謝されることなど、絶対がない。むずがゆい感じがして、どうしようもなくなった。

実織に後ろから抱きついた新宮が、その頬を指でつつく。

「何だか実織、いつもどおりになったね。ここに飛ばされたばかりの頃は、ずっと無口だったのに」

続く話題がなくなるのを恐れた下田は、その話に使乗した。

「きつと、お兄さんのおかげだよ。すごく仲良い雰囲気だった。抱き合ったりして」

「待つてそれ以上——」

失言に気づき、慌てて言葉を止めるも、既に遅かった。

「ねえ、それ、詳しく聞かせてくれない？」

両肩を、目を爛々と輝かせた新宮が掴んでくる。心地いい香りが鼻を包んで、くらりときた。

「抱き合ってたって、先生、下着だけだよ。この子の体が、あの筋肉質な胸に受けとめられたってことだよ。きやあつ、どんなこと話してた？　下田君、聞こえた範囲だけでも教えて」

教室内での優しい様子とは違っている。実織のこととなると、冷静さを失うのは本当だったらしい。実織と並んでよく男子達の話題に上る顔が目の前に迫っても、怖いという感情が先に立った。

「大げさよ。そんなに大した話はしてないから。ちよつと相談を聞いてもらっただけで」

「でも、二人で一緒に洞窟の奥に入っていく所は、かなりそれっぽかったよ。日ごろから観察してて思うんだけど、きっと先生の方は家族として実織のこと好きだとは思うんだ。けど、逆となるとねえ。ブラコンを超えた何かがあると、思っちゃうよねー」

「は、はあつ？ あんたって勉強はできるけど、馬鹿なんじゃないの？

そんなわけっ…。そもそも、別に仲良いつてわけじゃないし。あんな奴なんか」

え？ と見事に下田、草野、新宮が同時に疑問の声を上げた。

「いやー、それはないと思うっすよ」

「家族が仲良しなのは、良い事だと思うけど…」

「ふふふつ、実織は可愛いなあ。そんな典型的な照れ方しなくてもいいよっ。」

実織は頬を紅潮させて、叫んだ。

「だから、違うって言うてるでしょ！」

ちなみに、この顔が赤くなっているのは、指摘が凶星だったからではなく、ただ憤慨のボルテージが上がっているだけである。むきになればなるほどまともに取り合ってもらえないとはわかりつつも、あんなおぞましい兄的汚染物質に好意を抱いていると誤解されるのは、拷問に等しい。普段の演技が完璧すぎるのも、考えものである。

そうした悲しい彼女の姿を、下田は素直に可愛いと思つた。新しい一面を見れた気がした。誰だつて、家族に真正面から好きと言うのは恥ずかしいものだ。そう、納得している。

「違うのに。あんな奴、あんな奴…」

「うんうん。そうですねえ。じゆるっ、もうほんとに可愛い。食べちゃいたい…。ちよつとむこう行って、落ち着こうねー」

肩を抱き、頬と頬をほとんど密着させた何となく友情の壁を超えて

いような姿勢で、彼女達は篝火から離れて行った。新宮がさりげなく実織の腰を撫でているが、本人は上の空だった。

カツと目を見開き、その様子を凝視している草野は、しみじみと言った。

「距離感の近い女子って、いいな」

「…うん」

否定できないのが、何となく悔しい。

彼女達二人は、戻った先ですぐに目立つ男子達に囲まれる。その瞬間から別の世界の間人間になった気がして、下田は安心したような、少し寂しい気分になった。これが当たり前だと言いつつ聞かせて、考えが余計な部分に及ぶのを防ぐ。

それから間もなく、沈黙を保っていた火守女が、生徒達の集団の中心に近付いてきた。まるで合図だったかののように、話し声が小さくなっていく。彼女自身、押しが全くない控え目な印象だったが、どこか不思議な存在感があった。

火守女は、ここにいる人全員の顔を一つ一つ確認するように見回して、

「今日はもう、体を休めるように言われていると思います。ですが、その前に、一つだけ確かめておかなくてはいけません。あります」

と言った。目が隠れているのに、健常者とまるで変わらないのが不思議だ。彼女は、誰がどこにいるのか正確に把握しているようだった。その認識の世界はどのようになっているのだろうか。

「火守女には、貴方達の内に宿るソウルを操る力があります。伝承ではこのソウルによって、火の無き灰は成長を遂げるされているのです。灰の方々、どうか私が貴方達の器に触れることをお許しください。現時点で宿るソウル量を測ります」

「あの、そのソウルって」

生徒の一人が尋ねようとしたが、宇部が舌打ちして早口に遮った。

「このゲームの、金とか、経験値みたいなもんだよ。それでレベルアップしたり買い物するんだ。そんな初歩のことわざわざ言うなよ。進まねえだろうが」

言われた男子生徒は、委縮して黙った。さも当たり前のように宇部は話しているが、知らない人の方が多いだろうと下田は思った。下田もこの世界に来て初めて、ダークソウルの名前を聞いたのだ。しかし、はつきりと反論する人は現れない。

国広が、礼儀正しく手を上げて尋ねる。こういう時、躊躇いなく発言できる彼は貴重だ。

「ソウル量をはかって、一体僕達に何の意味があるんですか」

「申し訳ありません。私からも詳しいことは言えないのです。灰達はソウルの扱い方を自然と理解するという節しか伝わっていません。：一人ずつ、私の側に来てください。できれば頭を手の届く位置まで下げていただけると、助かります」

またわからないことが出てきた。その他大勢と同じく、下田はその曖昧さに躊躇し、なかなか足が出ない。このような場面で行動できるのは、やはりゲームを経験している者だった。

宇部は真つ先に火守女へと近づき、その後を慌てて丸戸が続いた。「やってくれ」

怖がるどころか不敵に笑みさえ浮かべて、宇部が片膝をつく。クラスで女子人気が一番なのは国広で変わらないものの、彼女達の好みによつては、宇部の方が騒がれている時もある。大胆な所は確かに、真似できないと思う所だ。多少柄が悪くても、女子にとつてはプラスになることもあるのだ。交友関係も幅広い。

「失礼します」

火守女が右手を宇部の頭上にかざし、意味の取れない言葉を唱え始めた。すぐにその周りが発光し始め、光の筋が彼の全身を覆っている。異常な現象にも慣れ始めていた生徒達は、そんな様子を黙って眺めていた。

やがて輝きが収まると、彼女は一步下がって淡々と言った。

「貴方には300ソウルが宿っています。では、次の方お願いします」
「おい待てよ。それだけか。レベルアップはできないのか？」

宇部に問いかけられた彼女は、やや間をおいた後、頭を下げる。

「申し訳ありません。他の全員が終わるまで待つていてください。変

化が訪れるのに、多少の時間がかかることもあります」

「ちつ、わかったよ。いまいち要領得ない奴だな」

火守女から離れて行く宇部に、並び始めている生徒達が道を開ける。じつと息をつめていた丸戸が、そそくさと彼女の側に向かって行った。

「あいつ、なんか機嫌悪そうだな」

「そう？」

草野が言ってくるも、下田は別の事に気を取られていた。国広と女子二人が前後で会話している。新宮が笑っているのが見えるが、実織の表情は見えなかった。

「見すぎ。お前、見すぎ」

「あ、いや。まあそうだね。むしろ、いつもどおりにいられる人の方が少ないんじゃないかな」

「流しといてやるか。それもそうじゃね。こんな体験、なかなかないよ。映画みたいだよなあ。正しくは、ゲームの中らしいけど」

「うん…」

草野の弾んだ声に、どうにも納得できない部分を感じた。並んでいる他の人々を見ても、だいたいが友達と期待の隠さない様子で喋っている。まるで。下田は思う。まるで、皆で遊園地のアトラクションの順番待ちでもしている雰囲気だ。

「うげえ、なにあの手。グロくね」

「腕の方もさ、包帯取ったら傷だらけなんだろう。あんまり近づきたくね——」

中には火守女の体の特徴を揶揄している者もいる。宇部と良くつるんでいる、高坂と砂川だ。場所が変わっても、誰かの陰口を言っているのは変わらない。

火守女が伝えるソウル量は、人によつてかなりの違いがあつた。男子の方が平均的に多かったが、それでも最初の宇部に匹敵するのは、国広くらいしかいなかった。女子達の数値は、もっと低い。一番多い実織でも、二百に届かないくらいだ。火守女は途中で、ソウル量はその人の精神力に大きく影響されると言っていたが、この結果は何とも

不思議だった。

「下田」

呼ばれて見てみれば、実織が案外至近距離にいたので飛び上がりそうになった。

「な、なに？」

「そんなに身構えなくていいよ。さっきの話はもう終わり。下田のソウル量はどれくらいだったの？ 私は196」

「えっと」

そこで死体を嗅ぎつけたハイエナのごとく、草野が加わってくる。

「俺234。これってマジ戦闘力みたいだよな」

「あんたには聞いてないけど」

「こいつの数値、凄いぜ。なかなか記録に残るレベルだ」

「やっぱり」

期待のこもった視線を向けられると、さらに口が開きにくくなった。にやにや笑っている草野の脇腹をつねってから、ぼそぼそと答える。

「…23」

「えっ」

実織にくつついてきた新宮が思わずと言った形で声を上げた。

「私、下田君に八倍差つけちゃったよ。ごめんね…」

男女の傾向を無視した例外の内、下田は悪い方のそれだった。

「別に謝らなくても」

「ここまでだと、ギャグだよな。普段からヘタレな部分はあると思ってたけど、まさかクラス最下位を勝ち取るとは思え」

実織に睨みつけられ、草野は口を閉じた。彼女はそのまま下田と正面から視線を合わせてくるので、彼は無意識に半歩下がりがけた。

「精神力がどうだのは、当てになんないみたい」

「実織、そこまで言っちゃおう？」

「そうでしょ。だって下田がこうで、他の男子が皆高いなんて、おかしいもの。散々威張っておいて、普通に逃げ回ってた連中が、精神力うんぬんなんて笑っちゃおう」

聞いていた周囲の男子が聞き捨てならない様子で注視してくるが、言っている本人が彼女だとわかるとその反応は緩和された。美人つて得だなと、下田は自分の目線とほぼ同じ高さにある彼女の横顔をこっそり眺める。ただ比較に出された自分は、かなり肩身が狭い気分だ。

「厳しいっすね」

「本当の事だもん。結局実際の行動でしか人の能力なんて測れないの」

初めから打ち合わせしていたかのように、草野と新宮が顔を見合わせた。

「おやおや」

「やけに下田君を評価するね。もう、ひどいっ！ 実織は私とお兄さん二筋だと思ってたのに」

「二筋って何よ。だから、あいつは別に普通だって。あんたのことも友達としてだからね。それに、私は別にそんなつもりで下田を」

揺れていた視線が、何かを見つけたように、一点に固まった。

「何これ」

急に変った彼女の様子に、尋ねようとする者はいない。彼らもまた、自分の視界に起きた変化を発見していたからだ。

下田も、突然現れた浮かぶ文字に、目を奪われた。

・インベントリ

・固有能力

印刷されたような角ばった字で、二つの項目が設けられている。「インベントリ」の上には、様々な器具がはみ出している道具袋が、「固有能力」の上には非常口の看板にあるような、白く型抜きされた人型の図形が表示されている。頭を左右に動かしても、それらはぴったりと付いてくる。

ならば触れられるのかと、インベントリの文字を指先でつついてみた。

「わ」

触れた部分が青く反応し、目の前の文字列が一斉に切り替わる。

- ・石 : 二ソウル
- ・ボールペン : 三ソウル
- ・三十センチメートル四方の布 : 二ソウル
- ・釘 : 一ソウル
- ・ライター : 七ソウル
- ・輪ゴム : 二ソウル
- ・水半リットル : 九ソウル
- ・木板 : 八ソウル
- ・握り飯 : 十二ソウル
- ・白紙のメモ帳 : 五ソウル

このように、日常に存在してもおかしくないような物が何の規則性もなくずらりと並んでいる。指で縦方向に文字のあたりをこすると、どンドン下へとリストが流れて行った。かなり長いリストだったが、最後の物は「洗面器具 : 二五ソウル」とあまりぱっとしないものだ。試しに「石」に指を置くと、全ての文字が円を描いて回転を始め、すぐ中心に寄り集まって、ぱん、と何かが弾けた音を出し、本物の拳程度の石が空中に現れた。周りが同じような音であふれる。やることは皆同じだった。

リストの中にある物を、指定して手に入れることができる。下にあら数字は、必要なソウル量だろう。先ほど言われた自分のソウルの総量から、この分だけ引かれる。本当に魔法のようだと感心しながら、今度は「固有能力」の方が見ようと思った。するとその思考に反応して、再び二項目の所に戻った。同じ操作を繰り返し、文字列が切り替わる。

「火の安寧」

概念的な火に触れている間、自身以外の全ての物体が動きを停止

する。常時発動。

*固有能力の強化には八千五百四十ソウル、進化には結晶の古老のソウル及び双王子のソウルが必要です。

固有とついているのだから、内容は人によって違うのだろう。

「概念？ 停止って…」

彼は自分の能力についてあまりピンとこなかったもので、草野の方を向くと、うんざりしたように指で空をはじいている。

「どうだった？」

「待て。今確認作業に追われてる」

実織と新宮も、同じ動作をずっと繰り返していた。それ以外の生徒も、同様だ。

「そんなに時間かかるの？」

「インベントリとやらのな。量がおかしいんだ。とりあえず最後の方だけ見ようと思ってるんだけど、終わりの気配がない」

下田は疑問に思い、自分のも確認してみた。確かに多いが、数回スクロールするだけで止まったはずだ。

ようやく操作を終えた草野が、指を揉んで血を通わせる。

「これで、食料と水の心配はないな。銃があったのはさすがにびびった。弾薬を別売りにしてるのが、リアルだよな」

「銃なんてあったの？ また嘘ついて」

「なわけねえだろ。二人もあつたよな」

下田の予想と違い、彼女たち二人は肯定した。

「ほんとだ。200で手に入れられるみたい」

「よかったあ。リンスもあるよ。髪長いと少しでもケアサボるのも駄目だから。心配が一つなくなった」

「そうなんだ…」

どうやら自分よりも、周りの方がリストが長くなっているらしい。

「ちなみにお前の一番下の物なんだった？」

「洗面器具」

「うわ、それかなり最初にあつた奴じゃん。あれなんじゃないの？」

自分が貰える範囲の物しか、表示されないとか」

「ええ…」

これでは、彼はかなり制限されてしまっていることになる。不公平だ。

「ま、必要になったら分けてやるから安心しろよ。火守女さんが途中で言っただけど、外のモンスターを倒せば、いくらか得られるらしいし、そんなたいした問題じゃないだろ」

人間も含めて、この世界のあらゆる生物にソウルは宿っている。それを搾取することができるのだという。ただし、その生物の命を奪わないといけない。生徒同士ではもちろん、味方側の全ての存在にそういった行為をするのは固く禁じられている。厳罰もありうるらしい。

「じゃあ、固有能力の方」

「シンプルな奴だった。相手の武器の軌道を把握しやすくなるとか何とか。実際にできるかどうか怪しい所だな。新宮達は？」

「呪術に高い適性を持つ。まず呪術は何っていう話だけど」と実織。

「私は、相手の詠唱を奪う？ よくわかんない。強化ってあるけどまだ能力に伸びしろがあるってことかな」と新宮。

草野はああと頷いて、自分の所を確認した。

「必要なソウルって、これも個々で違うんだ。俺は2391。お前は？」

下田は首を傾げた

「8540。でも、強化って何だろう。強化とどう違うのか」

「進化？ 何だそれ」

「だって書いてあるよ。しかも、ソウルも何かおかしい。名前付きで…」

下田の言葉に疑問を示したのは草野だけではなかった。実織と新宮もまた、強化だけしか表示されていないらしい。自分の能力の事を説明すると、微妙な反応が返ってきた。

「概念的な火って、えらくわかりづらいな。そこらにある火じゃないってことか？」

「それって、とりあえずこれのことじゃない？」

実織が何気なく燃え盛る中央の篝火に手を突っ込んだので、下田は呆気にとられた。

「…燃えてない?」

「これ、多分私達が知ってる火じゃない。熱はある程度感じるけど、触っても火傷しない」

「怖がらせないでよ。白魚の手が台無しになると思った」

「その表現は少し気持ち悪い」

女子の掛け合いを満面の笑みで見ていた草野は、さて、と話を戻した。

「しかし使いどころがわからん。要は時間停止ってことだろうけど、篝火に触れてないと駄目なんだろ。うーん、あんましエロいことには使えそうにないなあ」

「するつもりなんかないよ」

「進化つてのも気になるけど、ソウルがかなりレアっぽいよなあ。ゲームでいう、ボスを倒さないと手に入らない奴だ」

「そうなのかな」

「うーん、何となく、システムがわかってきたぞ」

曖昧に、下田は相槌を打つ。他でも同じような話がいくつも聞かされてきた。互いに能力を見せ合って、まだ何も始まっていないのに優劣を付けようとする空気。彼は正直、能力の内容などどうでもよかつた。この高揚した雰囲気に乗れない自分がある。じりじりと落ち着かない焦りが大きくなってきている。

四人へ、男子生徒の集団がやってきた。宇部や国広、その横で無駄に胸を張っている丸戸など、墓地で中心になって亡者を狩っていた人達だ。国広が相変わらずさわやかな笑みで、新宮と実織に話しかける。

「全員、能力が覚醒したことを報告したら、部屋を決めることになったよ。君達も集まってくれ」

「うん、わかった。わざわざありがとう国広君」

その国広の横で、宇部が面白い冗談を見つけたような顔でいる。「変な組み合わせだな。おい女子二人、ふさわしい奴と行動しろよ。」

もしかしたら、俺達と部屋一緒になれるかもしれないぜ」

実織が無感動に言い返す。

「有り得ないでしょ。普通は男女別だったの」

彼女たちの体を無遠慮に眺めながら、宇部は口元を歪めた。

「俺の能力が何か、言つてやろうか。身体能力が三倍になるんだ。しかも、強化していったらどんどん倍率は上がってくらしい。守つてほしいなら、今のうちに媚びとけよ」

「紗奈、もう行こう」

素っ気ない実織の対応に、肩をすくめてみせた後、突然宇部は草野の方を向いた。

「お前の能力は？」

「…」

「あ、さつき聞いたな。剣筋が読めるとかだっけ。まあまあ使えそうだし、覚えといてやるよ。それで、そのの、あー、なんつったけ。下山？」

待つていましたと言わんばかりに、取り巻きたちが一斉に笑った。

「下田！ すげえ、俺良く思い出せたよ。てゆーかお前だけ女子と同じ服装とか、うける。別に聞くまでもねえな。どうせ能力しよぼそうだし。本人と同じだ」

また、嘲笑が湧く。国広が辞めるように言っているが、声はかき消されていく。草野は小さく舌打ちをし、新宮は虫けらでも眺めるような目つきで男子達を見て、実織は前に出ようとする足を宙ぶらりんにして、期待するように下田へ顔を向けた。

だが、肝心の下田は、疲れたように溜息をもらし、草野に声をかける。

「じゃあ、先に部屋案内してもらつてるから。おやすみ」

「おい、」

引きとめる声も無視して、火守女へと歩いていく。その姿を、さらに宇部達は笑い合っていた。実織の軽く失望した視線が、実は一番堪えている。背中越しでも感じるほどに。言い返さないのかと。

一応怒つてはいる。ただ、それは宇部達に対するものではなく、自

分だけが周りから切り離されたような、やり場のない憤りだった。

変わらない。何一つ変わっていない。何でもない平日に、教室で感じることと何一つ。皆一度は曲がりなりにも死んでいるのに、どうして平然としていられるのか。流れた血は本物なのに、どうしてゲームのような感覚で楽しんでいるのか。家に帰りたいたとは、少しも思わないのか。

自分は、狂おしいほどに思っている。こんな馬鹿げた悪夢から早く抜け出したい。いつも通りの朝を迎えたい。そして。

「母さん」

眩くだけでも、焦燥感は募った。今じゃなくてもよかったのだ。数年前でも、二、三カ月先に起こってもよかった。現実でも同じように時が流れているのだと思うと、たまらない。今いる生徒一人一人の目を覚まさせてやりたい気分になる。

さらに考えが実織の事に行きついた時、そこで疲労感がどっと出てきた。今日だけで色々なことが起こりすぎた。今ここで何ができるということもない。とりあえずの決着をつけて、彼はここの寝場所の柔らかさはどれくらいか、考えることにした。

6. ペちやくちや残り火

何も言わずに握ってくれる、女性の手は暖かい。

「貴方の選択を、信じています。己に自信を持ってなくなっても、私が支えます。ですから、どうか、ためらわずに。大業を成してください。ずっと、側にいますから……」

温もりはあるが、ざらざらとした感触だった。女性の体の半分は、白く輝くような鱗で覆われている。もちろん、愛しい気持ちには見た目の差異など関係なかった。

徐々に色を失っていく彼女の顔を、撫でてやることしかできない。自分が何かを間違えたとは考えたくないが、目の前の、妻の死に顔だけは決して忘れないと心に誓う。使命を途中で諦めることを禁じる、楔として。

しかし一つだけ、我慢できずに言葉が漏れた。

「お前は」

「はい……」

「お前は、俺と一緒にいて、本当によかったのか。後悔していないか」
彼女は笑顔で亡くなった。



(ユリアたんのおむねええええええええええっ！)

『起きての第一声がそれかよ』

貴樹の復活である。自分が簡易なベッドに寝かせられていることを知った時、彼の興奮が否応なく高まった。

(うっそ。ちよつとちよつと、いくらなんでも早すぎだろお。確かにユリアには命令遵守って言ったけどさあ。いきなり体を求めるのは俺やりすぎ)

『違うぞ。お前、普通に負けてここに運ばれたんだ。逆に清々しいほどの負けっぷりだった。そういうえば、おれの自己紹介がまだ済んでなかったな。頭の中に他人の声ができるのは気持ち悪いだろうが、まあ事情を』

(うーん、何か夢を見てた気がしたけど、きれいさっぱり忘れたわ)

『おい』

(祭祀場の中なのは間違いない。こんな個室もあるのか。というか、一瞬喜んだけど、ユリアが掛け布団に潜り込んでる気配はない。待てよ、そういうえば記憶が曖昧だ。まさか、俺は負けたのか……?)

『だからそう言っただろうが。おい、聞こえてるんだろ？ 無視するんじゃねえ』

貴樹は半身を起し、痛みが残る顎のあたりをさすった。徐々に何が起こったのか鮮明になってくる。ユリアの木刀が目の前の迫った後から、何も憶えがない。

(やられたってのか。たった一撃で。どういうことだ。俺は無敵の強さを手に入れたんじゃないのか)

『その疑問に答えてやるから、話を聞け。ナチュラルに無視するその態度、傷つくんだからね』

(ま、いつか。とりあえずは、全員に挨拶をしないと。あ、うまく傷の痛みを訴えれば、ユリアに貸しを作れるかもしれない。それを種にして……、へへへへへへ)

彼がベッドから立ち上がると同時に、入口の扉が開いた。

『ねえ……、ちよつと……』

(あああああああ！)

部屋に入ってきたのは、火守女だった。

「お体は大丈夫ですか？」

「は、はい。ぴんぴんしてます」

口が一瞬回らなくなる。しかし、前よりも緊張は少なくなってきた。これは彼女との距離が縮まっている証拠では、とにやけるのが抑えられない。ゆっくりと近づいてくるのに何となく押されて、彼はベッドに座った。火守女の腰辺りにちようど目線が合って、幸せな気

分になる。

(うふふ、このくびれだけで三杯はいけるうー)

「急な話で悪いのですが、今から私と広場に向かってもらいいます。他の灰の方々も、全員集まっていますので」

「僕はどれくらい眠っていたんですか?」

『ふうん、そっか。ふうん。ま、そっちがその気なら、いいぜ。別におれはぜんぜん寂しくなんかねーし。一人で喋り倒してもいいわけだし。永遠にな』

「半日ほどです。もう間もなく、貴方達を師事することになる人々との顔合わせが始まります。何か、準備なさることはありますか?」

(うーん、ひもりんと添い寝できるサービスはないんですかね。おつとと、危うく本音が。ここは冷静にだ)

『何の脈絡もない本音だな』

「その、お互いこうして出会えたわけだし。まずは俺の自己紹介からしないと駄目だね」

『一人称がもう崩れてんぞ。はいキモいキモーい。そして話の流れが早くもおかしいよ』

「あの……?」

少し戸惑った様子の彼女へ、貴樹は手を伸ばした。

「記念に、握手してください。俺の世界では、一般的な挨拶なんですよ」

(すーはー、そうだ深呼吸だ。やはり、初めてはひもりんだな)

かつて、彼が白い歯を見せて友好的に差し出した手を握らない者はいなかった。中身は酷いが、ルックスだけは男女問わず引きつけるものがある。外面の良さを前面に押し出した、詐欺師の手本のような男だ。

火守女は数瞬彼の手に顔を落として、ゆっくりと首を振った。

「……申し訳ありません。私のような者が、無闇に灰の方の体に触れるわけにはいきません。対等に扱ってもらえるような存在ではありませんから」

「そんなことない。ひもりんは、俺の中では最高級です!」

女らしくて綺麗だ」

(ちよつとこれ、もう取り繕うの面倒くせえな。ひもりんの前くらい自然体でいよう。欲望のままに)

『触り方気持ち悪いぞ。彼女、引き気味じゃねえか』

強い麻薬みたいだった。彼女の肌は、呼吸とか、瞬きとか、命とか、天体の運行すらどうでもよくなる効果がある。頭の芯がぼんやりしてきて、多幸感がどつとあふれてきた。

しかし、彼女が本気で恐縮していることは伝わってきたので、名残惜しく手を離す。そのままやや気まずい空気を破るように、貴樹の口がよどみなく動いた。

「結婚しよう」

この男はついに正気を失ったらしい。

『お前どうかしてる』

「結婚、ですか」

「そう、つまりひもりんはずっと俺の側にいなきやいけないってことだ。悩める時も、健やかなる時も、一緒に感情を共有しようね。きやつ」

羞恥を抑えきれず、貴樹は両手で顔を覆った。知る人が見たら、十字を切りそうな光景である。

『さすがにコメントすらないわ』

「わかりました」

「え?」

『え?』

彼女は確かに、はつきりと頷いた。

「えっえっ、本当の本当の本当の本当に?」

まさかの成立に、驚きの方が先に来る。夢が叶った瞬間というものは、案外呆気ないのかもしれない。もつと壮絶な浮き沈みがあった後に、固く深く結ばれると考えていた。

何やら納得がいったような様子で、彼女は再度首を縦に振る。

「はい。私は火守女。灰の方に仕えることこそが自らの使命です。責務を放棄し、貴方の側から離れるようなことはいたしません。どうか

大業が成されるその時まで、私をお使いください」

(……うん?)

微妙に意味合いが違っている。

『なるほど。あれだ、お前の言いたかったことは何一つ、こいつに伝わってねえな。ぶふっ、ざまあみろ！ やーいやーい』

(ふむ。とにかく言質をとれたということは、晴れて俺達は夫婦となったわけだ。子供の名前、何にしようかなあ。その前にひもりんは受けか攻めか訊かないと。どんな性癖があったとしても、受け入れるのが夫だ。どちらかといえば、攻められる方が好きです。新しい扉が開けそうだあ)

あえて現実から目をそらす、犯罪者の思考である。

『ちなみにそろそろおれは泣いてもいいかな？ 実は聞こえてないんじゃないかって、思ってきたよ……』

妄想が加速して止まらない貴樹は、

「と、とりあえず、ベッドに座って。触れ合いから全ては始まるから」
完全にやらかそうとする気になっていた。頭の中は既に火守女の服の下を完全再現するために加熱している。自分の隣りをとんとん叩いて催促する様子には、隠しきれない欲望が表れていた。それっぽいいことは言っているが、煩惱だらけである。

「そろそろ、広場に向かっていたただかないと……」

「うん、ひもりんがどんな用事で来たかは知ってる。でも、焦らないで。近くで目を合わせて、深く語り合うことも人生だよ」

こいつの口から出る人生という言葉ほど、軽いものはない。

「皆様が待っていますので……」

「俺はこの時をずっと待ってた。ひもりんは胸と腰と尻のサイズ測ってる? 。とても重要な情報なんだ。教えて。あ、俺が測ってあげてもいいよ、ふふ。メジャーがないから、手を使うことになるけどいいですか、いいですか!」

「いえ」

『おれの存在って……』

気が逸って前かがみになってきている貴樹のたたみかけられる言

葉に、火守女も途方に暮れていた。本来の口調よりも気持ち悪くなっているのは、もはや彼が下半身で声を出しているからである。押しに弱そうだと見るや、目の前に迫るチャンスをものにしようと思死だ。

彼は童貞だが、肝心なところで尻ごみするようなタイプではない。学生時代も教師になってからも異性と話す機会は多々あったので、度胸だけは余計なほど大きくなっていった。

もう抱きしめちゃうくらいは良いのではないかと思ひ込みが加速し、なかなか近づこうとしない火守女を引き寄せようと、蛇にも似た俊敏な動作で彼女の腕を掴みかかる。あわや捕食という所で、女性の声が割り込んできた。

「何をしている」

いつの間にか戸口にいたユリアは、火守女の前で妙な姿勢のまま固まっている貴樹を見て、全てを把握したようだった。流れるような早足で彼に接近し、欲望のままに動こうとする腕を捻じり上げた。

「あたたたた」

「貴様は盛りのついた獣のようだな。だから火守女を呼びに行かせるのは危険だと言ったのに。他の者達が待たされている。早く支度をしろ」

（うぎゅううううう、わりと痛い、間接キマってるうううう！ んあん、でも、何だか目覚めそう。はあんっ）

何かしらの悪寒を感じたのか、ユリアはすぐに貴樹の腕を離した。目を少し潤ませて息を吐く彼に対して、珍獣でも見ているような顔になっっていた。

「……先に行け。この男は私が連れて行く」

「よろしくお願いいたします」

火守女は彼の顔を一瞥した後、一度も振り返ることなく部屋から出て行った。もう少しのはずだった夢の瞬間が消え去るのを、貴樹は無言で嘆き、ベッドに顔をうずませた。が、ユリアの手が間隙なく走り、彼の首をつかんで無理矢理起こす。

「ぐええ」

「支度をしろ、と言ったはずだが？」

「も、準備万端、でずう」

被虐趣味の扉が開かれる前に、彼の体は床に投げ出された。

「その格好のどこがだ？」

「言ったじゃないですか。鎧どころか、服も着られないんですよ。呪いみたいなもので」

「貴様がくだらない嘘を作り、人前で肌をさらす理由付けにしようとしているのはわかるが」

元氣よく立ちあがった貴樹は、思わせぶりに下着の裾を掴む。

「あなたの前なら、全裸になってもいいですよ？」

ユリアは頭痛をこらえるような表情になり、片足を半歩下げた。

「……行くぞ。それ以上余計なことを喋るなら、今度は急所を潰す」

その足が貴樹の股間をかすり、玉二つがひゅん、と縮こまった。風圧で少し興奮してしまっただが、それを口に出して言うのは彼女の様子を見て断念した。歩き出したユリアに付いていく。

『ぼくはここにいますか……』

扉の先は、室内よりも薄暗い廊下のような場所だった。岩壁に埋め込まれているランプが点々とあるだけで、明るい照明に慣れていた目では、足元の確認でさえ一瞬おぼつかなくなる。既に気持ちを切り替えた貴樹は、ユリアの横に並んで歩こうとした。

「貴様は後ろにいる」

肩を押される。

「照れることはないです。変なことはしませんよ。精々横から体のラインを」

「黙れ」

「はい」

「前の勝負で、貴様は負けた。条件を覚えているだろう」

「もちろん。俺がユリアさんの奴隷になればいいんですよね」

「潰すぞ」

「はい」

「私の視界に入るな。口だけの男など、目に入るだけで不快だ」
「了解しました。そうします」

『お、ま、え、のせいだ！ あの二十数年間を味わったら、誰でも影響受けるわ。お前みたいな捻じ曲がった奴はそういない。あんなの常人だったらノイローゼになる。もともと希薄だった意識が丸ごと引っ張られて、喋り方もお前よりになったんだ』

(あんなの？ お前、全部見たのか)

『……あつ。ちちがうよ。その、印象的な出来事をピックアップしてな。その中でランダムにいくつか選んで追体験した。他は全部流し見だ。だから、偶然というか、まさかあんな』

(中学二年夏)

『お姉ち』

(やめろ)

『……』

(……)

『すみません』

(全て忘れろ。いいな)

貴樹がユリアの背中を眺めていると、話が再開した。

『さて、おれが長々と話すより、お前の疑問に答える形の方がわかりやすいだろ。わからないことがあったら、何でも答えてやる』

(ふうん。じゃ、前のあれは何なんだよ)

『ん？』

(エスト瓶がどうとかっていうやつ。意味わかんないんだけど。俺だけ味わってないとか、不公平にもほどがあるぞ。どうしてくれるんだよ)

『何を言ってるんだ？ おれはずっと記憶を見てたって言ってるだろうが。お前に話しかけたのはさっきが初めてだ』

(はいはい。いきなり嘘ですか)

『……ちよつと待て。その話もう少し聞かせてくれ。具体的に』
(別にいいや。特に問題ないし。一番大事なのはあの力の事だ。どういう仕組みなのか、どうして使えなくなったのか教えろ)

一呼吸あいて、

『とりあえず便宜上、お前の言葉でこの力を残り火と呼ぶ。が、効果は

まるで違うのはわかってるな。いわばこれは、この世界での経験を全て引き出す力だ。びんとこないだろ。おれだって、恥ずかしながら全てを知っているわけじゃない。ただ、お前に対しては特に絶大な効力を発揮するのは間違いない』

(つまり?)

『まず、視界の左上の所に赤色のゲージが見えるだろ』

(は?)

『え、いや、だから赤色のゲージだよ。それが耐久値を表している』

彼は目を凝らして確かめる。そんなものはどこにもない。

(ドラッグでもキメてんのか。ゲームと現実の区別くらいつけろよ)

『ぐ……一番言われたくない奴に……。どうやら本気で見えてないんだな。まあおれが逐一伝えればいいだけだ。説明を省こう。いいか、この世界での経験というのが何を指しているか。厳密に言えば、それはお前自身のものじゃない。お前がプレイヤーとして操作していたキャラクターのものだ。画面越しとはいえ、お前は既にこのダークソウルの世界で戦ってきた。おれに宿る火は、そんな間接的な経験も抽出し、使用者に全て反映させる。つまり、最終プレイ時のキャラのステータスが、お前の能力値となるわけだ』

(なるほど。ということとは)

『ああ、単純な身体能力でお前に勝てる奴は存在しない』

特に経験値稼ぎをせずにエンディングを迎えた場合、そのキャラのスキルレベルは六十から七十の間になることが多い。オンライン対戦における強さの基準とされているのが百二十台だ。ダークソウルⅢにおける最大レベルは八百二である。

貴樹は四百五十二レベルだ。微妙な数値だと思う者もいるかもしれない。しかし、留意しておいてほしいのはあくまで彼の作ったキャラの中で、最大がそれということだ。他にも素性或戦闘スタイルを変えて四つのデータを回している。それらのレベルの平均は百八十。必要な経験値が百レベルを超えた辺りから著しく増加していくことを考えると、はつきり言って仮にも公務員である者が到達してはいけない領域である。

レベルが四百五十二ともなれば、近接系のステータスをほぼ限界まで上げることができる。最後にプレイした時は、そのデータで四十六周目を始めようとしていた。

(つまり、今ここでユリアの胸を触ったとしても、何ら問題ないわけだ)

『落ち着け、早まるな。お前がなんで個室で目覚めることになったのかを忘れるな。こんなに都合の良い力、何の制限もなしで使えるわけがないだろうが』

(大いなる力には大いなる責任が伴う)

『まず、残り火を宿した状態ではあらゆる攻撃が効かない。打撃だろうが斬撃だろうが無効化する。だが、その量には限りがある。耐久値が設定されているということだ。グンダ戦の時、お前は調子に乗ってあいつの殴打を受け続けた。最後に崖の方へ吹き飛ばされた時に、ちやうど限界が来ていたんだよ』

(限界が来たら、どうなるんだ)

『ただの人間に戻る。しかもお前の場合武器も防具も持てないから、余計にたちが悪い。生徒達と違って、不死というわけでもない。ここから先、この耐久値は第一に考えて行動するんだな』

(その口ぶりだと、また力は使えるわけだな。では早くよこしたまえ)

『無理だ。一度解除されたら、一週間は効力を発揮しない』

(はああつ?)

立ち止まった貴樹を、ユリアはゴミでも見るような目つきで睨んでくる。人の良い笑みを浮かべ、再び歩き出した。

(あと六日も待たないといけないのかよ)

『それだけ反則級ってことだ。さらに忠告しておく、残り火の数も有限だ』

(そこ忠実にしなくてもいいだろノミ野郎)

『全部で二十個。既に一個使ったから、残り十九個だ。ご利用は計画的に』

(くそ、しばらくは安全に過ごすしかないな。外には出られん)

『その間どうすんだ?』

(そうだな……)

火守女に会えた。その瞬間だけは、自分が死んでもいいくらい嬉しかった。一生分の満足を味わったような気分は、今も残り続けている。しかし、それはそれだ。もっと先へと欲が膨らんでいくような人間が貴樹である。

(ひもりんと、一緒に過ごしたい)

ゲームのストーリーは基本救いが無い。マルチエンディングが用意されてはいるものの、主人公が人柱となりただの延命処置を世界に施すか、火継ぎ自体を終わらせ火守女に看取られて死ぬか、火を奪い己の私欲に溺れる結末しかない。貴樹にとって我慢ならないのが、そのどれにも火守女が明確に救われたという描写がない事だ。

(あの人を、まずは笑顔にさせよう。幸せを積み重ねていって、自分が自分でよかったと思えるような人生にする)

『たいそうなこと言ってるが、火継ぎが成されるまで数カ月ってところだ。日本に戻るまでに、一人の価値観をどれだけ変えられるやら』
(あ？ お前何言ってるの)

『だってそうだろう。簡単じゃないぞ。彼女はなかなか難しいと思う』
(そこじゃねえよ)

『え？』

次第に、周りが明るくなっていく。広場に近付いてきた証拠だ。生徒達が雑談をしている声も聞こえてきた。

(日本に戻るって、何？)

『何って、ルドレスが言ってたじゃねえか。お前らは使命を終えたら、帰ることができるみたいなニューアンスで』

(俺の故郷はどこだ)

『ええええええええ？』

(思うんだ。自分の居場所は、自分で決めなきゃいけないって)『待って待って。思うに、ほぼ強制だと思っただけ。おそらく全員が同時に日本へ送還させられるはずだ。そこで駄々をこねてもしょうがねえだろ』

(わかってるよそれくらい。だから、使命なんて果たさせなければい

いだろ)

『……今なんて?』

(要は最初の火だ。あれを完全に復活させなければいい。とはいえ、消すんじゃないだめだ。闇の時代、もとい深海の時代が来ても無事に生き残るためには、多分必要なものだ。だから、薪が全てくべられたタイミングで、奪う。たとえ世界が滅んでも、必要な奴が生き残ればそれでいい)

それは、つまり。

『ま、おれはお前の意志に従うだけだが。いいのか? それは、最後の最後で、帰ることを望んでる生徒達を裏切るってことだぞ』

広場への出口付近に来ると、心底嫌そうにユリアが振り返った。

「私はここまでだ。まだ灰達と会うわけにはいかない。いいか、余計な真似はせずに、実力相応の態度で、じつとしていろ」
「わかりましたよ」

優しく笑い差し出してきた彼の手を無視して、彼女は奥へと消えて行った。肩をすくめてみせてから、広場へと踏み出す。何人かの女子生徒達が目ざとく彼の姿を見つけ、ほっとした様子で駆け寄ってくる。

「先生、倒れて運ばれたって聞きました。大丈夫ですか」

「ああ、ちよつと体調を崩してね。この人に治してもらったから、もう大丈夫だ。心配してくれてありがとうな」

「せんせ、聞いてください。私、すごい力を手に入れたんです。それが」

「あ、ずるーい! 私も」

「おいおい、一人ずつ頼むよ。でもその話は後でな。これから何か始まるらしいし、静かにしておいた方がいい」

しつこく話しかけようとする集団から離れ、篝火の側の空いたスペースに座る。すぐ側に実織がいたので、大きく頷いて見せた。押し殺した舌打ちが返ってくる。その隣にいる新宮とは、実は実織と友達になった小学生の頃から、知っている仲でもある。クラスの生徒達にはなるべく嫌われないように、上手く立ち回ってきたつもりだった。

大きく伸びをし、顎の痛みが完全に引いていることを確かめる。これからどんな事が待ち受けているのか、胸の高鳴りが止まらなかつた。

(知るかボケ)

7. 室内訓練

『なあ思うんだが』

貴樹は火守女の姿を眺めていた。

(どうした)

『これから、おれはお前と一蓮托生なわけだ。相棒だな』

(下僕の間違いだろ)

『どちらにせよ、おれにはしかるべき名前が必要だと思わないか』

(無いのか?)

『ああ。おれはもともとちゃんと実体をもった存在だったらしいが、あいにくその記憶がない。お前の目的にはもちろん協力する。でもおれは自分が何者なのかも知りたい。まずは自意識を養うために、名前が必要だと思うんだ』

(ほう)

『かつこいいいの、頼むぜ』

(うーん……、あつ！ ノミっていうのは?)

『さも、良いのを閃いたみたいなお態度なのは意味不明だが。ただの悪口だよ。しかもさっきの会話から流用したろ、なあ』

(でもバカとかカスとかアホじゃありきたりだろ)

『お前の語彙は罵倒しかないのか。頼むから普通のにしてくれよ』
(お、始まるみたいだ)

昨日も通った、列席場への大扉が開いていく。篝火の周囲に集まっている者達の注目を一斉に受け、一組の男女が出てきた。

男の方が生徒達を眺め、豪快に笑う。

『全員集まっているな。ハツハツハ、広場がこれほど人であふれるのは初めてだ。若々しい気が、こちらにも伝わってくるようだな』

丸い凹凸が重なる、まるで三段腹のように膨らんだ鎧を着た珍妙な姿に、生徒達は反応を返せなかった。太い眉、彫の深い口に添える程度の髭、少し赤茶けた肌。この男の方こそ、周りを圧倒するエネルギーにあふれている。

「私はジークバルド。カタリナのジークバルドだ。不肖ながら、太陽

の戦士の長を務めさせてもらっている。君らとは、近接戦闘を師事する面で関わる人が多いだろう。よろしく頼む。ところで、酒の類は楽しむかね？ よかったら今度の歓迎祭で一緒に飲み明かそうじゃないか。故郷の酒を私なりに改良したものなんだが、これがまたなかなか…」

まだまだ続きそうな話を、女が前に出て遮った。

「その話はまた別の機会にしたらどうだ」

エナンと呼ばれる円錐形の黒帽子を目深にかぶり、見るからに魔女然とした人だった。彼女が帽子を上げてみせると、蒼色の瞳で血のように濃い唇をした情熱的な顔が出てくる。

「カルラだ。主に呪術、魔術の担当をする。全員がこの男のように口数が多いとは思わないでほしい。貴公達の才能に期待している」

生徒達の反応を確かめた後、ジークバルドがまだ開いている扉の方を手で示した。

「実は、これは予定のなかったことなのだが。話をしたいという、男がいる。既に君らにとっては面識がある。まあ、ちゃんと聞いてやってくれ」

次の瞬間、巨体が姿を現した。

「ひっ……」

女子生徒の一人が、押し殺した悲鳴を上げた。ほとんどの生徒が、恐怖で固まり、無意識に半歩後ずさっていた。

(ちっ、ガキ共が。気に入らねえな)

『まあまあ、無理もないだろ』

怯えた多くの視線の先で、グンダは真つすぐ前を向いて歩いてくる。猛威をふるった斧槍は持っていない。生徒にはもう死ぬ心配もない。それでも、殺された時の感情を無視できるほど、彼らは場慣れているわけでもなかった。

(やられたのは、自分がカスだからだろ。まだ命があるだけ感謝しとけよ)

『おれがいなかったら、お前もそうだったんだけどね』

(ノミ、お黙り)

『その名前で確定なんだね…』

グンダは篝火付近まで来ると、その場に座りこんだ。胡坐をかき、腕を組んで、何の害意もないことを示した。その周囲はぼっかり空間ができ、男子の中には剣を抜いている者もいる。

「許しを請うつもりはない。お前達を殺す命令を受け、我輩は納得した上で行動した。だが、ある種の決着をつける必要があると感じた。互いにわだかまりをなくしたいのだ。今からしばらく、我輩は何もしない。この体勢のまま一切動かないと約束しよう。好きだけ、攻撃をされるといい。かまわないな、ジーク」

「友の決めた事だ。口出しはすまい」

それだけの会話が交わされ、場に沈黙が落ちた。

(真面目すぎ。むしろ一時でもゴミ掃除してくれて感謝したいくらいだ)

なかなか一步を踏み出そうとする生徒はいなかった。近づくことすら嫌だと考えている者もいるはずだ。たとえグンダが無抵抗を断言しても、彼らの中で報復を恐れる心はある。またそれ以上に、誰が最初にやるのか、牽制し合っている部分もあった。

(自分で手を下すこともしない。フワフワした精神の塊みたいだな。グンダが少しでも傷つくのは、避けたい事態だからいいけど)

『いや、一人やるみたいだぞ』

集団の中で一本、伸びた手から青白い光の矢が飛び出し、グンダの腕に衝突した。それでも彼は顔を微動だにせず、目の赤い光を横に向ける。今度はその顔に矢が刺さり、鎧に包まれた肩が上下した。

驚いて振り返った生徒達の間をかき分け、新宮が前に出てくる。

「確か、」

「あなたは何という名前なんですか」

普段のいつも微笑んでいるような緩い表情は消えている。

「グンダだ」

「グンダさん。確認ですが、あなたは先生以外全て殺したんですね」

「そうだ」

「この、私の後ろにいる子も…」

実織を指差した。

「最後まで我輩に抵抗する意志を示していた。勇氣ある女性だ」

「そんなことを訊いているんじゃないやありません」

新宮がかざした手から、何本もソウルの矢が発現する。それらはいつぺんにグンダの鎧に殺到し、傷一つ入れられずに消滅した。カラが感心したような表情で息を漏らした。

はつきりとした怒りを宿し、新宮はグンダにどんどん近付いていった。

「これで、おあいこになるわけない。いくら本当に死ぬことはないとかわかってても、実織を殺したことは、絶対に許さない。他の皆だって、苦しんでた。もう戦う気すらなくして逃げる人達をわざわざ追いかけて、当たり前みたいに殺したあなたと、わかり合えるとは思えません！ こんな自己満足するためのだけの場を用意して、私達が納得するとも思っただんですか？」

彼女の言葉と矢をどれだけぶつけても、グンダは無言で座していた。

「そうだよ…」

ぼつりと、生徒の一人がつぶやく。新宮の訴えが引き金となり、本心をせき止めていたものが決壊する。

「これでチャラになるわけがねえ」

「そうだ。俺達が逆らおうとしたら、また躊躇いなく殺すに違いない」
「騙されるな！」

「今なら、やれるぜ。手にした力があれば、こいつに負けることはない。全員でかかれば楽勝だ」

「ていうか、今ならここから出て行くこともできるんじゃないか。死ぬことはないんだし」

「その前に、そいつを殺せ」

「好きに攻撃していいんだろ。遠慮なくやってやろうじゃん」

血気盛んな男子達に影響されて、離れていた女子達もグンダへ疑心の目を向ける。ジークバルドはどうしたものかを腕を組んだ。

「流れがおかしくなってきたな」

カルラが面倒そうに、掌を生徒達の方向へと向ける。

「落ち着きのない子供だ。黙らせる」

その彼女の手を、貴樹が遮さかった。

「少し待っていてください。何とか収めてみます」

「遅れてきた奴だな。誰だ？」

カルラによく見えるように腹筋を割り、精一杯格好つける。白く輝く生え揃った歯を見せ、人の良い笑みでアピール。なぜか彼女は一歩下がった。

「彼らの担任です」

貴樹は浮足立っている生徒達の間を通り抜け、さらにソウルの矢を放とうとしている新宮の手首を掴んだ。それだけで、周りは静まる。

「先生…」

「もう十分だろ。やめなさい」

「でも」

「この人は、進んでやったわけじゃない。僕達を試そうとしていただけなんだ。こんな、リンチまがいのことをしていいはずがない」

「み、皆あれに殺されたんですよ？ 先生だって、見ていたはずです。むごたらしく殺されたのを、全部無しにしろっていうんですか」

宇部が、唾を吐く真似をする。

「偽善者め。自分だけ生き残ったから、そんなこと言えるんだよ」

グンダへの悪感情は、一転して貴樹へと向かっていった。優しさも、場合によっては臆病とも捉えられる。この担任教師に対して失望した空気が広がっていた。

新宮が信じられないという顔で、彼を見つめる。

「先生は、これを憎いとは思わないんですか？」

「今騒いだところで何の意味もない。グンダさんも含めて、ここの方々は僕達を曲がりなりにも保護してくれたんだ。目的と、住む場所を保証してくれた。無暗に反抗しては、互いに溝が広がるばかりだ」
「だからなかったことにしなきゃいけないなんて、おかしいよ。先生は、私達のこと、そんなに軽く考えてたの？ 仕方ないですませるよ
うな、存在だったの？」

瞬間、貴樹は彼女の体を引き寄せた。それから周りで聞いている生徒達をぐるりと見回し、目を潤ませて叫んだ。

「そんなわけ、ないだろうが！」

担任として、何よりも大人として、常に冷静に対処しなければいけなかった彼でも、思う所はある。異常な状況でも何とかやってこられた精神が、今揺らいでいる。という設定で、彼は全力で演技していた。「僕は教師だ。お前達の担任で、二年も過ごしてきた自負は当然ある。それ以上に、照れくさいけど、守ってやりたいとか、そういう情がわいてる。平気なわけないだろ。お前達が酷い事になっていくのを見て、どんな気持ちになったか。想像できるか？」

「あ…っせんせ…」

新宮の頭を、両手で思いっきり撫でてやる。こぼれそうになる涙を、彼女の肩口で拭うふりをする。鼻をすすって、ゆっくりと彼女の元から離れた。

「グンダさん、立ってください」

静かに、座っている巨体と向き合う。

「この子の言うとおりです。あなたの気持ちはありがたいですが、何の解決にもなりません。自分の身を差し出すのはやめてください」

グンダの手を掴み、立つように促した。貴樹達の三倍近くある図体が上がる、新宮が圧倒されたように固まる。彼女を安心させるように肩を叩いてから、貴樹は決然とグンダを見据えた。

「正直、あなたを完全に信用するのは、まだ時間がかかりそうです。それでも、僕達に対して何か思う所があるのなら、一つ約束してください。彼らができる限り、守ってやってほしい。本来、それは僕の責任なのですが、今の僕には何の力もない。だから代わりに、あなたにお願いしたいんです。わだかまりをなくしたいのなら、行動で示してくださいませんか」

淡々としているようで、かすかに悔しさを滲ませる。自分にスポットライトが当たっているイメージで、表情と声の調子の上げ下げで些細な感情も表現する。大げさな身振り手振りはいらない。伝わる人にだけ伝わればいい。

「了解した。我輩は、灰達が危機に陥れば必ず助けると誓おう」

グンダは屈み、貴樹に向かつて大きな手を差し出してきた。その圧力に動じることなく、貴樹は頷いて握手を交わす。その光景で、毒気を抜かれたように生徒達は落ち着いた。少なくとも彼に対する尊敬の念は保てたどころか高まったと言えるだろう。

まだ葛藤がある様子の新宮には、もちろん忘れずにフオローを入れる。

「昔から、紗奈は妹と仲良くしてくれたもんな。納得できない気持ちだつて、すごくわかる。申し訳ないけど、ここは抑えてくれると助かる」

下の名前を呼ばれて、新宮は瞬きし、それから懐かしそうに笑った。「ずるいよ。先生が我慢したなら、私もそうしなきゃつてなつちやうよ。久しぶりに、名前呼んでくれたね。昔みたいに貴樹お兄ちゃんつて呼んでいい?」

「先生と生徒の距離感は大事だ。駄目に決まってるだろ」

「は——い」

(うーん。この笑顔ぶん殴りてえ)

『あ、お疲れ様です』

無駄に長い茶番は終わったようである。

(このメスガキ、グンダさんを攻撃した罪は重いぞ)

『でもお前もグンダに殺されかけたよな。そこはムカつかないの?』

(俺とあの人は戦いで絆を結んだ。俗人共の尺度で考えるでない)

『そうすか』

(それにしてもイラツとくるわー。ガキ共邪魔にしなければならんから消えてくんねえかな)

『というか、あそこまで格好つける必要あったか?。嫌いなら、放つとけがいい。自滅してくれたのに。生徒達と組織側が対立してもお前一人が後者に付けばいい話じゃん』

(確かに、あいつらの存在は塵以下だ。だがあいつらからの賞賛は別だ。俺の価値をさらに高みへと押し上げる礎となる。端的に言うと気持ちいい)

『うわあ、見栄張るのもここまで来ると清々しいな』

(こういう印象付けはすげー大事だぜ？ 日々の積み重ねが生きてくる。それは自尊心のためだけじゃなくて、自分はこういう人間ですよ、と周りに先入観を与えられる。これから先この人間像を正直になぞるか、裏切るかは俺の自由だ。上手く利用すれば、さつき言った目的の完遂に大いに役立つ。痴呆共を翻弄するのは快感すぎてハマるんですよ)

『うん、結局一つ前に言った事と同じだね』

(ノミ、おすわり)

『実行する体すらないわ』

彼が脳内でくだらない会話をしていると、ジークバルドが呼び止めてきた。

「待ってくれ。貴公にはやってもらうことがあるんだ」

「何ですか？」

(わ、ジークさんと初会話)

火守女に次いで好きなキャラクターとの絡みに、生徒達に対する不愉快も薄まった。まさに夢見ていた所にいるのだから、それを全力で楽しもうと心を入れ替える。

「昨日の件のせいで、タカキだけソウルの器を見ることができなかった。今一度この場で確認するために、時間をいただきたい」

(呼び捨て：。おい、もう距離が縮んだよ)

『お前が名前しか教えてねえからだろ』

「構いませんけど、そのソウルの器というのは？」

「説明する前に、やって見せた方が早いだろう。火守女のそばにひざまづいてくれ」

ついに再び彼女と接触する機会がやってきたと、貴樹は既にマークしていた火守女へと、軽い足取りで近づいていく。

「先生もあれするんだ」

「ソウル量、どれくらいになるだろうね」

「絶対、多いはず」

(生徒達はもう終えている様子。それに、さつき高原が話していた凄

い力って言葉を考えると、やっぱりゲームと同じく火守女がレベルアップさせてくれるのか？　あるいはまた違う何かを得られるんだろうか)

あれこれ考えながら、火守女の前で膝をつくついでにそのボディラインを舐めるように視線で確認する。本当はもつと直接的な行動に出たくてたまらないが、さすがに人目が多すぎる。本能を優先させて、ジークバルド達の印象を下げるほど、愚かでもなかった。

「…もう少し、離れていただけると」

「こうですか？」

貴樹は顔を上げ、火守女の口元を見た瞬間、それに触れてみたいと強烈に思った。好奇心旺盛な子供の気分で、右腕が動く。もう片方の腕は、実に自然な動きで彼女の腰を抱こうとしていた。

カルラが彼の両肩を抑えた。

「妙な動きはするな。全くユリアの言った通りだな」

(はっ)

否、彼は本能をまるで御しきれていなかった。

「指示に従って、もう二、三步離れるんだ」

「ああ、すみません。ぼうつとしてて」

そして位置についても、カルラは手をどけない。

「あの、」

「カルラ、そう警戒するな。彼が危険でないことは、もう確認されただろう」

「いや、私が言っているのはそういう危険ではないんだが。何かあったら、責任を取ってくれるか？」

「ハッハッハ、大げさな。離してやれ。困惑しているぞ」

ジークバルドに諭され、渋々貴樹から身を引いた。

(えっと、カルラさんは俺に惚れているのかな)

『おれが全部ツッコむと思ったら大間違いだからな』

衆人監視の中、頭を垂れて膝をつく彼に、火守女が手をかざす。これは、ゲームでもよく見られた光景だ。彼女がプレイヤーの中にあるソウルに触れ、強化を行う。画面上で散々してきた作業だとしても、

実際に体験するとなれば感慨もあった。

彼女がぼそぼそと詠唱し出す。それから貴樹の体に光が現れるであろうことは、生徒達も彼自身も当たり前のように予測していた。はずだった。

古いブラウン管のテレビの電源が突然消えた時のような、短い切断音が響き、次の瞬間には貴樹と火守女両者が互いに正反対の方向へと弾き飛ばされていた。何の前触れもなく、またあらゆる抵抗を無視する強い力だったので、彼は受け身すら忘れていた。が、素早く反応したジークバルドが着地点に走り、衝撃を完璧に殺す形で受け止める。

「あ、ありがとうございます」

「危なかった」

一方の火守女は、飛んでくるとは予想もしていなかった一人の男子生徒がクツションとなり、怪我を免れていた。

「申し訳ありません…！ お怪我はありませんか？」

「こ、こちらこそ。すぐ離れます」

（下田アアアアアアアアアアアアアアアアア！ 貴様なます切りにするぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお、ひもりんの体を全身で味わいやがってえええええええええ）

『いや、そこじゃなくね？』

始終を見守っていたカルラが、どちらともなく投げかける。

「何が起こった？」

「急に見えない力で押されたような。よくわかりません」と貴樹。

「器自体を見ることはできたのですが、測ろうとした途端に同調自体が拒絶されました。原因は未熟ながら検討がつきません」と火守女。

「再度、試すことはできそうか？」

火守女は貴樹を一瞥した後、首を振った。

「おそらく同じ結果になると思います。私自身、こんなことは初めてで」

「確かに前代未聞だぞ、これは」

（あれ？ あれ？ 嫌な空気になってない？）

『他の皆はできたみたいだしな』

紆余曲折あったものの、訓練と称されるものは始まった。男子はジークバルドとグンダに連れられ、外へ。女子に加えて下田は、カルラの案内でさらに地下にある広大な練術場に向かった。貴樹は直前まで迷ったが、女子達の方へ付いていくことに決めた。その理由は、至極単純なものだ。

「話があると言われてみれば、それは一体どういうつもりだ？」

カルラの呆れた視線の先で、彼は頭を地面に付け、相手に対してあふれんばかりの誠意を示そうとしていた。土下座である。生徒達の目がない場所で話しているので、保つべきプライドなど存在しない。

「お願いがあります。僕を、貴方の弟子にしてくださいませたいのです」「断る」

「もう少し考えてみては？ 即断はいけませんよ。あの子達と一緒にの粹で構いませんから」

「教える相手を選び好みするつもりはない。全く素養のない者を、他者のための時間を割いてまで相手をする必要を感じないだけだ」

彼は土下座を解き、立ち上がって彼女の目を覗き込むように顔を近づけた。今までこういった行動に対しての女性の反応は照れながら目をそらすか、緊張して魅いられてしまうパターンしかなかったが、カルラはどこまでも冷めた様子だった。

「そんなの、どうしてもわかるんですか？ もしかしたら、才能に満ち溢れているかも」

「実際に目で見て納得したいんだな」

カルラは短い一音を口から発すると、指先を貴樹の肩に当てた。そこから青白い光が灯り、掌へと移動する。

「呪術、魔術、奇跡の全てに通じる素を、無理矢理体内に入れた。その光っている手を上に向けて、一本の矢を想像しろ。明確な形ができたら、放てと念じろ。三術に共通するのは、後天的に素養を得ることがないという点だ。できなければ、一番初歩の術でさえ習得は不可能になる」

いよいよ体験できる期待で、彼のテンションは否応なく高まった。

(ふう…)

高校の、弓道部で使っている練習用の矢を思い浮かべる。なるべく殺傷力のあるものだから、そんな欲は抱かない。木作りの、矢先が丸まっている、最も身近な矢を目の前に浮き出るほど念入りに想像した。

深呼吸し、鼓動を落ち着けてから、裂迫の気合いで心中叫ぶ。

(でやああああああああああ放てええええええええええええええええい！)

『楽しそうだな』

百八十後半に届く長身を一本の糸のように伸ばし、さらに上へぴんと張った腕の先、震えるほど限界まで広げた掌からは、残酷な無反応が返ってくるばかりだった。

カルラは冷静に、その哀れな姿を眺めている。

「納得したか？」

「そうですね、ちよつと魔力の素が足りなかったみたいです。今度はたくさん注ぎ込んでくれませんか」

「問題はそこじゃない。そもそもお前の場合穴が閉じているんだ」

「確かにまだそういう経験はないですし、したいとも思いませんけど」

「そうじゃない。精神的なものだ。これが開いていないと、師事する以前の問題だ。つまり、才能がない」

「意外とそういう知識は持つてるんだ。今の話で察したということには」

「…尻の話から離れる。戻るぞ」

踵を返そうとする彼女に向かって、彼は悲痛な声を上げる。

「お、お待ちを。どうか、どうか機会をください。後生ですう！」

姿勢を低く、甲子園決勝点を賭けた球児のヘッドスライディングを凌駕する見事な飛び込みで、彼女の足につかまった。膨らんでいるローブの見た目とは裏腹な、モデルのような細さをついでに堪能する。

「離せ」

「せめて、たった一言、一言で良いんです。俺を、馬鹿弟子と罵ってく

ださい。少し悪戯っぽい表情でお願いしますっ」

「何なんだ、お前は。ジークとグンダはなぜこんな奴を」

(これ、下のひらひらで顔が包まれて、エロくていいな)

カルラに触れられて舞い上がり、当初の目的すら忘れた彼は、彼女の焦った蹴りを股間に受け、転げ回る羽目になった。そんな彼の姿には目もくれず、彼女は足早に生徒達の待つ区画へと向かっていく。

(なんでや)

『がつつきすぎじゃね。引くことも覚えろよ』

(非人間的存在に言われたくないんじゃないやボケえええええ)

カルラ以外爆散してくれないかなと願いつつ、貴樹は隅で悲しく訓練の始まりを見るしかなかった。

「既に紹介はしたが、カルラだ。まず初めに言っておく。貴公達は敵の刃にかかって死ぬことは許されない。そんな状況になるということは、前衛の戦士たちが崩れたか、己の役割すら理解できずに前へと出ようとした馬鹿がいるからだ。私達は、後方での援護、治療を担う。自分の力で敵陣中へ飛び込みたいのなら、今すぐここから出て行くといい。私達が崩れれば、戦う者達は窮地に陥る。何よりもまず、自身が生きることが優先しろ」

と言われても、一般的な女子高生が何かしらの反応を返せるわけがない。戸惑う空気の中、それを気にする素振りも見せずに、彼女は続ける。

「グンダの報告で上がっているが、既にいくらか使える者がいるそうだな。心当たりがある者は、前に出てきなさい」

初めに実織が、少し遅れて、新宮と下田も続いた。下田はこの場では貴重な男成分だが、横に並ぶ二人の女子のすらりとした体型のせいで、あまり変わらないのが切ない。

「なるほど。ちょうど綺麗に分かれている。呪術寄りがお前で、その隣が奇跡、最後に魔術というわけか」

当てられて、実織が驚いた様子で目を見開く。

「よく、わかりますね」

「経験だ。得意不得意は、その者の雰囲気判断できる。例えばその

白いローブのお前は、私のよく知る奇跡の使い手の女性と似ている。おおらかな女だと言われたことはないか」

少し得意げに話しているカルラに、下田が申し訳なさそうに手を上げる。

「僕は男です」

「そうなのか？ フードを取ってみろ」

言われたとおりにした下田は、いきなりカルラが近寄って来たのでうろたえた。頬を触られたり、前髪をかきあげられたりしても、なすすべなく黙っている。

「本当だ。すまない、よく顔が見えなかったから、勘違いをした。珍しいな、男で奇跡使いか」

「ええ、その、あの」

ぷにぷにと唇まで撫でられ、さすがに下田は固まった。そんな様子を見かねて、実織が止めに入ってくる。

「困ってますけど。やめてあげたらどうですか？」

その言葉を見無視し、十秒ほど彼の頭を撫でてから、カルラは話を再開した。

「では、そうだな。女二人、名前は？」

「実織」

素っ気ない挨拶の後、新宮が頭を下げた。

「紗奈です。よろしくお願いします」

「ミオリに、サナか。独特の名だな。二人には、今から自分の全力の一発を私にぶつけてもらおう。もっと正確に言えば、この的にだ」

カルラの指先から、内側へと振り返った半透明の板のようなものが発現した。極小さなサイズから瞬時に拡大され、ちょうど彼女の全身を覆う大きさになる。

「別々にするのも面倒だ。同時でいい。狙いくらいはつけられるだろう？」

「いいんですか？」

新宮が尋ねても、平然と頷いた。その防壁の層の厚さは数ミリしかない。指で突いただけで穴が空きそうだった。

「躊躇わなくていい。まさか私が怪我をすることででも思っているのか？
絶対にならないから安心しろ」

「じゃあ、遠慮なくいきます」

右手に火をともした実織に続いて、新宮も構えた。炎の塊と光の矢が完璧な軌道を描き、同時にカルラの魔力盾へと直撃する。

（改めて、お粗末な呪術と魔術だよな）

『わかんの？』

（ゲームのエフェクトと比べてだけど）

貴樹の予想通り、カルラは相も変わらず佇んでいた。その防壁には、傷一つついてはいない。

「こんなものだな。次は、お前だ。奇跡と言っても、種類はある。何が使える？」

実織が悔しそうにしているのを気にしながら、下田は答えた。

「傷が、治せます」

「回復系だな。どう試そうか。では、こうしよう」

彼女は右手をもう片方の手の指先に当てた。何をするつもりなのか訝しがる下田は、次の瞬間叫び声をあげた。

当たり前のように、その人差し指と親指をを針ほどのソウルの矢で削ぎ落とし、下田に向かって掲げて見せる。少なくとも量の血が石造りの地面に落ち、彼女の頬には跳ねた返り血がついていた。一步後ずさった下田に遅れて、女子達がざわつく。

「治せ」

「え、え？」

「指も残っている。接合できる条件は揃っているぞ」

一度実織の傷を治している経験を持っていたとしても、血に染まる欠損した手を見せられて、彼は混乱に陥っていた。

「僕、そんな、治せるかどうかなんて」

「かなり痛いんだかな。早くしてくれるか？」

「だ、誰か、人を。人を呼ばないと」

助けを求めて左右を見回した後、腰が抜けたのか糸が切れたように座りこんだ。カルラはそんな下田の様子をしばらく眺めていたが、や

がて溜息一つつくと、取れた二本の指を元の部分に押し付け、無事な方の手でゆつくりと撫でた。

白く、淡い光が丸く広がり、以前下田がやってみせた時とは二回り以上も大きなものとなり、痛ましい傷を包み込んだ。皮膚がかすかに泡立ち、継ぎ目が塞がれていく。そして光が消えてから、くつついた指をぎこちなく動かし、彼女は小さく頷いた。

「二応、成功はした。二、三週間もすれば、調子よく動かせるようになる」

「すごい。本当に治った」

「何を言っている？ お前はどのくらいのことでもできないのか？」

「わ、わかりません。傷を治したのは少しだけで」

「私に言わせれば、こんな粗末な奇跡など恥だ。実際に治療に赴いている者達は、片腕がもぎ取れても、数秒で治し、通常通りの機能を取り戻させる。私の専門は奇跡ではない。応急処置程度にはなればいいと、片手間で身に付けたものだ。これ以下の代物など、回復と呼ぶのもおこがましい」

重い沈黙が下りた中、下田と、後方で集まっている白いローブの集団を見据える。

「今、訳あつて奇跡を担当するはずだった者がいない。門外漢の私が断言するのもはばかられる。が、これだけ言っておく。能力的に足りないのはまだいい。実戦において最も足手まといなのは、怖気づいた者だ。血をいつまでも恐れるな。これから先嫌というほど見ることになる。治す側の者は、どんな陰惨な傷でも向き合わなければならぬ」

生徒達は、神妙に聞いている。ただ、全てに納得しているわけではないようだ。学校で、教師の説教を受けている感覚。適当に相槌を打っていればそれで終わる。と考える者もいるだろう。それだけ彼女の語った価値観が、今まで触れてきたものと離れているのだ。

どこか真剣ではない空気は、当然カルラも感じ取っていただろう。彼女はあえてそこを突く真似はしなかった。たつぷりと黙って間を空けてから、むしろ、薄く笑顔を浮かべる。

「初回から、刺激が強かったか？ 色々と偉そうなことを話したが、伝えたかったのは一つだ。今の段階で貴公達の実力はほぼ変わらないということ。この三人は、偶然とつかかりを掴む機会があったにすぎない。私は、全員の能力向上を任されている。自分に自信が持てなくなったら、周りの仲間や、もちろん私にも気兼ねなく話していい。私達は同胞だ」

出るタイミングを失くした貴樹は、カルラという人物の印象を決めかねていた。

(なーんか、違和感があるんだよな)

『何がよ』

(カルラは、こういうことを言える人だったかなと。確か足が不自由で、立つことすらできなかつたはずなのに。今は健常者だ。顔から受ける印象も、随分と違う)

『ゲームとごっちゃにするのはやめにするんじゃないのか』

(いや、こういう感覚は大事にすべきだと思ってる。この世界が創作とどう違うのか、一刻も早く全貌を理解しないと。情報が乏しい今は、推測を広げていくしかない)

『妙に意識高い時あるよなお前』

(元々、有能な人間なんで)

『ほーん』

(ん？ 何だ？)

カルラが手招きしているのに気がついた。ようやく出番が来たかと、髪を思わせぶりに撫でて向かう。

「僕に、手伝えることでも？」

「あまり気乗りしないが、お前ならかかりやすいだろう。これから皆に教える呪術、魔術は実に多岐に及ぶ。その中には、ただ敵を葬るためだけではないものもある。これからこの男と、誰かもう一人に体験してもらおう。危険ではないから、安心してくれ」

(都合の良いモルモット扱いつすか。興奮するわ)

「もう一人の方は誰にしますか？」

尋ねられると、彼女は思わせぶりに口元を緩めた。

「できるなら、この男と親しい奴がいい。誰か、我こそはと思う者は？」

この時、目を光らせた大勢の女子の誰よりも早く、新宮が手を上げた。

「この、私の隣の子がいいと思います」

「は？ ねえちよつと」

「ミオリ、だったか」

「実はこの子、貴樹先生の妹なんです。これ以上の適任はいないですよ」

「なるほど。家族ならいいかもな。面白い」

「私、やるって言ってないんだけど」

実織の文句は全て無視され、貴樹と彼女二人だけが、皆の前に立たされた。なぜか少し、カルラは楽しそうだ。

「これは、精神操作系の呪術だ。多少、様子がおかしくなるかもしれないが、変に騒ぎ立てることはしないでくれ」

言い終わると同時に、彼女は貴樹をまっすぐに見つめてきた。目と目を合わせ、少しもそらすことなく近づいてくる。口は何かの文言を刻み、瞬きを一切しない。

（ちよつと勃起してきた）

『変態か』

（いやでもこれ、絶対キス待ちだろ。やっちゃっていいよね）
『もがれるぞ。さっきの指みたいに。どこがと言わんが』

（それは嫌だ）

鼻と鼻がくつつつきそうな距離のまま数秒経過し、カルラは笑みを消して顔を離れた。

「終わりですか？」

「お前、なんともないのか」

「えつと？」

「私に対して、何か思う所は」

妙な質問だったが、貴樹は胸を張って即答した。

「素晴らしい女性だと思います」

「…」

「…」

カルラは困惑を隠しきれない表情で、首を傾げた。

「効いていない？」

「何がです」

「そういう質問ができる時点で、私がかげようとした呪術が失敗に終わったという事だ」

「えっ、何かしたんですか」

「もういい。お前は下がれ」

（ちよっ、もう終わりかい）

貴樹の代わりに、同じ男という点で下田が選ばれた。全く覚悟もしていなかった彼は、直立不動のままカルラを顔を合わせる。

「あの、近」

「そう緊張するな。力を抜け。そう、ゆっくりと。息が荒いぞ」

吐息がかかるほどの近距離で、カルラは優しい口調を崩さない。下田の童貞らしい反応も、どこか微笑ましそうに対応している。

（俺の時と態度違うくない？）

『純粹さが透けて見えるんだな』

「この呪術は、対象の目を見なければ発動できない。だがそれだけ、かかれば強力だという事だ。では、いくぞ」

先ほどと同じように、カルラの口が動く。その直後、下田は脱兎のごとく彼女から離れた。呼吸はさらに荒くなり、頬に赤みが差している。最も特徴的なのは、彼が自身の高揚にまるでついていけないことだった。

「あれ、顔が熱、なんで」

「どうした。照れるな。もっと近づいてこい」

両手を広げ、下田を促す。少し内股気味になりながらも、まるでカルラの言葉が抗いようなものであるかのように、一步、また一步と足が動いていく。耳まで真っ赤になり、彼女を見つめる視線は完全に潤んでいた。

「思いつき飛び込んでこい」

「は、はい」

何かに突き動かされ、下田はカルラに抱きついた。女子達の間から、きやあと歓声が上がる。肩元に顔をうずめている彼の首筋を優しく撫でた後、彼女は講義のように淡々と話した。

「この魅了の呪術は、対象に自分の存在を強く認識させて、愛情、忠誠心等の感情を引き起こさせるものだ。上手く敵にかかれば、どんな命令でも聞く。同士討ちさせることも可能だ」

下田の顔を両手で包みこむと、愉快そうに尋ねる。

「私のことを、どう思っている？」

「好きです！ あ、えっと、違、僕初対面の人になんてこと、い今すぐに離れます」

「んー？ この手を離してほしいのか？」

「嫌だ。ずっとこうしててくださいっ！ 大好きです、愛しています」

「よしよし」

（くっそ、こいつまたしても。こういうことなら、かかったふりしとけばよかった）

『お前がああいう醜態をさらしてたら、さすがに吐くわ』

下田の変わりように呆気にとられていた実織は、自分の結末にも思い当たったのか、半笑いで後ろの集団に戻ろうとする。

「よくわかりました。試すのは一人で十分ですよね。うん、参考になった」

「この呪術の良い所は、間接的にもある程度効果があることだ」

カルラの手から、淡い桃色の細い光が伸びる。残像が出る勢いで実織の頭に殺到し、その中に入り込んだ。途端に彼女の動きは止まり、ぼうつとカルラの方を向いた。

「お前も、側に来ていいぞ。もう一人分くらいは空いている」
「で、でも」

実織は既にカルラにくっついて下田を気にする。

「なんだ、まさか二番目だから遠慮しているのか。安心しろ、平等に相手してやる」

もじもじと指を合わせていた手を解き、実織は満面の笑みになっ

た。いつもは少し吊り気味の目尻がだらしなく垂れ、童心に還った声を上げる。

「わあい」

さらに女子達が騒ぐ。一番大きく喜んでいたのは、新宮だった。自分も混ぜてほしいと、必死にカルラヘアピールしている。

「ちよつと、もつと端に寄つてよ。くつつけないじゃない」

「実織さんこそ大きい顔しないで。ぼくが最初に、この人に求められたんだから」

「順番は関係ないもん。平等だつて、言つてましたよね？」

「もちろん」

「ほらあ。そつちこそいばんないでよね」

「そんな。か、カルラさん、ぼくはぼくは？」

「何を言つてる。お前も大事だよ」

「ぼ、ぼくもカルラさん以外の事は考えられません」

「えー、ねえわたしは」

「フフフ、可愛いよ」

「やったあ」

新宮が鼻血を吹き出しそうなほど真っ赤になっていた

(何だこれ)

人間二人に抱きつかれながら、カルラは説明する。

「これだけでも十分恐ろしい術だと理解できるだろうが、実はまだ応用の仕方がある。経験を積み、魅了における感情の方向を操作できるようになる。私は二人から好意を向けられ、大変困った状況だ。だが、こうすれば上手く解決に至るだろう」

もはや心も体も陥落した二人の頭に手を乗せる。そしてまた意味の取れない呪文を呟き、それぞれの頭から桃色の光糸を取り出し、一つに混ぜ合わせた。

直後、強くカルラにしがみついていた彼らは、我に返つたように離れた。

「え、あ」

「二人共、やっと落ち着いたか。暑くてかなわなかったよ」

「すみません。ど、どうかしてました。僕、」

言いかけの言葉を飲みこんで、下田は固まった。まるで初めて出会ったかのように、隣の実織を見ている。彼女もまた、胸を抑えてちらちら下田の方を確認していた。

「大丈夫？ 実織さん、苦しそうだけど」

「よ、寄らないで！」

彼の伸ばしかけた手を、強く払う。あ、と二人は同時に辛そうな声を上げた。片方は拒絶されたことに対して、もう片方は拒絶してしまっただけに対して、傷ついているようだ。

(だから何だよこれ)

「ごめ、んなさい。その、急に来たから、びっくりして」

「う、うん。別にいいよ。それは、つまり照れたってこと？」

「…言わせないで」

「いや、可愛いよ。すつごく。なんだろう、今までもそう思ってきたけど、今が一番可愛い」

「やめて。恥ずかしいから。皆見てるし」

下田が実織の手を掴み、ゆっくりと立たせた。彼女は小さく抵抗しているが、まんざらでもない様子だった。もうすっかり立ち上がっているのに、二人は絡んだ指を解こうとしない。

「どうして、こんな気持ちになったのか、よくわからないんだ。でも、やっぱり」

人差し指が彼の口に当てられる。しー、と実織はほとんど泣きそうな目で微笑む。

「私、私ね。こういうのって、自分から言いたいタイプなんだ。普通は男の人から言うべきだって、わかってるんだけど」

「うん」

「きみのこと、すごく好き。気持ちがどんどんあふれてくる」

「僕もだよ」

「ほんとに？ 証明できる？」

「どうやって？」

「じゃあ、こうして」

両目を閉じ、彼女は唇を少しだけ前に出した。その意図を理解はしたようではあるものの、なかなか思いきれない下田は、彼女の両肩を掴んだまま途方に暮れた。すると急に実織は彼の首にしがみつき、顔を近づけた。鼻先同士がかすかに触れ、また元の位置に戻る。

「今のが練習。ちよつとは慣れた？」

「何というか、あー、実織は可愛いだけじゃない。とても綺麗だ」

「お世辞は終わり。ほら、行動で示してよ。彰浩」

先ほどカルラが指を落とした時よりも、ある意味重い静けさが辺りを包んでいた。野次馬達は息を飲んで、二人の間にできあがった世界を注視している。一方の貴樹は、耳をほじくりながら斜め上を眺めていた。

（ガキ同士が乳練り合うのを見ても、何の生産性もないな）

『あれほど強力なら、お前に効かなかつたのは尚更不思議だ』

（俺はひもりんを一番に愛しているからな。でも正直、さっきはカルラがかなり魅力的に思えたぞ）

『まさかあれか。勃起のことか。それですませられるのも、なんだかなあ』

（勘違いされたくないから、ここで言うておく。俺は別に出てくる女性キヤラクターなら誰にでも欲情してるわけじゃない。そりやある程度のスキンシップはしたいけど、本気で抱きたいと思うのはひもりんだけだ）

『なるほどなるほど』

十分アウトである。

例の二人は、ほとんど体を密着させ、徐々に互いの顔の距離を縮めていた。本当にするのか、しないのか、妙な緊張が高まってくる。女子の中には両手で顔を隠している者もいたが、指の隙間から抜け目なく見ている。

そして唇が重なる寸前で、カルラは柏手を打った。

「と、例のようにこれは耐性の低い者なら、簡単に操り人形にしてしまう恐ろしい術だ。貴公達に教えるつもりは毛頭ない。こうして見せたのは、相手が使ってきた時のために心構えをしておいてほしいから

だ。自分の中で最も愛する者をちゃんと認識しておけ。強くその人の事を考えれば、惑わされる可能性は格段に減るはずだ」

下田と実織はそれを合図にして、その場に座りこんだ。惜しい、と誰かの声が響く。二人は周りの反応を気にすることなく、まだ意識が現実に戻ってきていない様子で宙を眺めていた。

「あの、これって大丈夫なんですか」

興奮の残滓なのか頬を薄く染めたままの新宮が、不安そうに尋ねる。

「術後はしばらく強い疲労感が伴うだろう。お前、二人を個室にまで連れて行け。今日は休ませる」

暇そうにしていた貴樹が指名された。

(ゴミ二人の世話とか、こりゃあご褒美がないとやってられないよなあ)

「わかりました。で、カルラさんは僕に何をしてくれるんでしょうか」

「お前の一物に矢でも刺そうか」

「冗談です。さっそく連れて帰りましょう」

(こんなやり取りでも興奮できる俺は天才か)

『筋金入りだな』

実は体のいい厄介払いを受けたとしても、彼の一日はそこで終わるわけではない。前後不覚の実織達に彼らの部屋をやつとの思いで聞き出し、ベッドに放り込んだ後、意気揚々と今度は屋外に向かった。

8. 屋外訓練

祭祀場から外に出ても、男子達の姿はなかった。どうやらかつてグンダがいた広場でやっているようだ。確かに祭祀場周辺も広い敷地が広がっているものの、墓が並んでいて気軽に走り回れる環境ではない。

それでも、貴樹は周囲を一通り見て回った。

『何をそんなに探してるんだ』

（確認だ。亡者もアイテムも全く見つからない。構造自体は変わんないが、広いな。見張り台も新たに建てられてる。やっぱりちゃんとした人数が結束すると、環境も整うわけだ）

『楽しいか？』

（それなりに。だが、段々と怖くなりつつある）

『なんで？』

（自分で考えろや）

嫌な予感を言葉にすることはせず、細部にまで記憶している光景との相違点を確認していった。しかし、祭祀場横の塔は探索しなかった。単に入口が錠で閉じられているだけなのだが、今は無理にこじ開ける必要はない。中に何があるのかは知っていたし、それを見たいとも思えなかった。

訓練場に着くと、まともに立っているのはグンダとジークバルドに、顔を見るのは二度目になるシリーズだけだった。彼女に会釈をすると、やや戸惑いながらも礼を返してきた。その素直さに癒される。「皆、すごく疲れてるみたいですけど。何をしていたんですか？」
「鍛錬の前の、準備運動といった所だ。単なる走り込みだよ。彼らの基礎体力も見るともりではあったんだが、どうやら課題はあるようだ」

ジークバルドは苦笑して、周りの惨状を見下ろした。

男子達は着ていた鎧を脱ぎ、汗だくで地面に転がっている。誰もが呼吸するだけで一苦労のようだった。最も見るに堪えないのは丸戸で、頬をはち切れそうなトマトにしなながら、滝のような汗で肌着を

コーティングしている。こいつの側にだけは近付かないと、貴樹は固く決めた。

「ちなみに、どれくらい走ったんですか？」

「この周囲を六十周ほどだな。私達のように前線に出なければならぬ戦士たちは、毎日していることだ。灰達の中には脱落者も出たが、ちゃんと全員達成させた」

(えげつねえな)

「持久力は、一番重要だと言ってもいい。私とグンダはまだしも、並走していたシーリスにも大差をつけられるようではまだまだ」

(なに？ シーリスちゃんも走ったって？)

思わず彼女に目を向ければ、刃先を潰した刺突剣を握っている姿が映る。そこから鋭敏な突きの形に移行し、とてもハーフマラソンを超える距離を走った後には見えなかった。

(つまり、今近づけば汗の香りを堪能できるってことかな)

『キモすぎかな』

たぎる煩惱を抑え、貴樹は隅で見学することにした。喘いでいた男子達はまともに話せるようになった所で木剣を配られ、グンダとジークバルドの前に並ばされる。彼らの顔は、これから二人と模擬戦をすると聞かされて、さらに白くなった。

「そう怯えるな。もちろん一対一ではないぞ。この、私の伸ばした手より左の集団はグンダと、残りは私と戦ってもらう。時間内に貴公達がこちらに膝をつかせれば勝ち。そうでなければ、三十周追加だ」

それに対する反応は二種類に分かれた。絶望と歓喜。グンダを前にした生徒達が前者で、ジークバルドの方が後者だ。グンダの実力は、嫌というほど知られている。一方で、ジークバルドの印象は珍妙な鎧姿のせいで、玉ねぎでしかない。

始めの合図で、勢いに差があるものの、それぞれの集団が二人の戦士に向かっていった。

貴樹は主にジークバルドの動きに注目している。

(カス共が蹴散らされてく光景は見てて飽きない)

『こうして外から見ると、笑えるほどの実力差だな』

(当たり前前だ。あいつらはまるで連携ができてない。波状攻撃が基本だつてのに、ただ闇雲に数で攻めてるだけ。あれじゃただの乱戦だ。ジークさんからしたら、一対一の時よりも楽だろ)

『よくあの重そうな鎧ですいすい動けるもんだな』

(それでも限りなく手加減してるだろ。苦笑いしてるよ。有用な情報は取れそうにねえな)

グンダの方は、そもそも近づこうとする者がほとんどいない。国広だけが突出し、もはや集団という前提が消失している。グンダから向かおうとしても、背を向けて逃げる者もいる始末だ。

『お、でもやる奴もいるじゃん』

ジークバルドが時折振るう剣に唯一対応できているのは、宇部だけだった。

(目で追ってるだけだろ。少しでもフェイントを入れられたら、ほら)『あらら』

見るに堪えない一方的な光景に興味を失くし、彼は立ち上がる。

(祭祀場に戻って、ひもりんと話してる方がいいな。初日はこんなもんだろ)

『あの中に混ざれば?』

(あほか。まだ残り火の力も戻ってない内に、目立つ真似なんてできるわけねえだろ。これから数日は、ひたすら裏方に回るんだ。雌伏の時だよ…)

立ち去りかけた時、澄んだ女性の声で呼びとめられた。

「少しよろしいですか?」

長身が揃っている祭祀場の女性陣の中では比較的小柄で、まだ少し幼さを残している。抜けるような肌の白さとは対照的に、耳の上にかかるほどの髪の毛の少し汗に濡れている所が、健康的な爽やかさを感じさせた。

「えっと、確か一度」

「はい。列席場で初めて会いました。私は薄暮の国のシーリス。かつて神に、仕えた者です。お互い使命のある身、そして使命とは孤独なもの。私達は関わり合うべきではないのですが、火の無き灰の

方々に一度は挨拶をと思いました」

「丁寧にも。貴樹と言います。これからよろしく」

例によって手を差し出すと、シーリスはじっとそれを見つめた。

「手甲の上からでも構いませんか？」

「大丈夫ですよ。ただの挨拶代わりだから」

「国の宗教の関係上、異性とみだりに肌を触れ合うことは禁じられているんです。こればかりはどうしようもないので、すみません」

（それ、完全に男慣れしてない前フリでしかないよね。興奮するうー）

軽く握手して、貴樹は手ごろな岩場に座った。自然な動作で、シーリスがそのすぐ隣に腰掛ける。

「灰の方々にも、それぞれ名があるのですね」

「どういう意味です？」

「火の無き灰というのは伝承で何度も触れられているのですが、抽象的な記述ばかりで。国によっては姿形もバラバラで、名無しの不死人とも表現されていることがあるんです。だから、私達とそう変わらな部分もあると知って、純粹に驚きました」

「伝承って、それはまた大きく出たな。僕があまり言えたことじゃないんだけど、あれを見れば、そんなに大きな存在とは思えない」

苦笑いして男子生徒達があしらわれている様子を指差すと、彼女も追隨して小さく笑みを浮かべた。

「あの人達は、完成された戦士です。祭祀場の誰も二人の経験と力量に信頼をおいていますから。たった一日で超えられるとは思えません」

「でも、ルドレスが火の無き灰は常識を超えた力を持つて言っただけだ。それを聞いてからのあれじゃ、話が違うってならないかな」

「灰の特性は、亡者になることのない不死性と、ほぼ無尽蔵のソウルの器だと聞いています。つまり、成長の速度が私達とは桁違いになると思います。もう少し長い目で育てていくのではないのでしょうか」

「なるほど。そのうちあいつらも、ジークさん達に匹敵するようになる

るのか。想像がつかないな」

「…貴方が言うのですか？」

含んだ言い方に横を向くと、シーリスが覗き込むように見つめてきた。

(シーリスちゃん、想像の三倍くらいグイグイ来るな)

「グンダさんと互角以上に戦ったのは、貴方ですよ」

「その話、信じている人はほとんどいない」

「そうですね。おそらく、単純な力勝負ではなかったんでしょう。武器を持たず、まともな防具すらつけていない人が抗し得るとは、私でも信じられません。それでもあの人を認めさせる何か、貴方にはあったということ」

(とりあえず、良い感じに誤解してくれてるな。助かるわ)

『悔しくならないの?』

(もつと考えて質問したまえ。今の段階では侮られるくらいが丁度いいんだよ)

『へえ。お前はもつと、自尊心の塊だと思ってたよ』

(場合によっては謙虚になるさ。そうすることによって大きなアドバンテージを得られる時とかな)

「それで、過ごし辛くはないのですか？」

「えつと?」

「ずつとそういった格好だと、不便も大きそうだと思いますが」

(ああ、これね。慣れたわ)

『露出狂の誕生である』

シーリスは貴樹のさらされた肉体を直視しようとしていない。彼女の貞操観念が躊躇わせるのだろう。現代日本においても異常なのだから、彼女が受けるカルチャーショックたるや想像につくし難しい。彼女の反応に内心興奮している貴樹もまた、救い難い男だった。

「正直困ってるんですけどね、不可抗力で」

「何かを着ようとする、激痛がはしる呪いでしたか。聞いただけでは信じられないものですね。自分の常識で貴方達をとらえてはいけないと、わかっています。灰の方には試練も同時に課されるという

「ことでしょうか」

「僕だって、治せるならそうしたいよ。こうして真面目な話をしている、傍から見れば別の意味に思われがちになるから」

一瞬話がわからなかったのか、彼女は不思議そうに瞬きした後、気まづく咳払いをした。

「…例えば、何かを羽織るだけでも駄目なんですか？ 普通の衣服ではなくて、ただの布を巻いてみるとか」

「実は、もうあらかた試してはみたんだ。二度と味わいたくない体験だったよ」

「難儀なものですね…」

(うーん)

『どうしたん？』

(シーリスちゃんの様子がおかしいような。本題に入ろうとしてできない奴特有のもどかしさを感じる。彼女、今までの会話の内容なんて心底どうでもいいと思ってるな)

『そんなにわかるもんなのか。エスパーかよ』

(ふっ、経験の賜物だよ)

とはいえ彼の方から踏み込むことはせず、何となく会話がなくなっ
て生徒達の方を見ると、既に追加された三十周をこなすべく必死に走っていた。体力的に限界を超えた彼らの激励をしていたジークバルドが、歩いてくる。

「もう話をする間柄になったのか。私から紹介しようと思っていたんだがな。タカキ、貴公もなかなか隅に置けんな」

「彼女みたいに若い戦士もいるんですね」

「歳だけなら灰の者達とほとんど変わらないだろうな。だが一人前の戦士だ。あらゆる心構えにおいても、敬意を表するにふさわしい」

シーリスは大きな瞳をさらに見開いて、何度も首を振る。

「ジークさん、私はそのような」

「そして何よりも、若い女性の存在は我々の心を癒してくれるのだ。真に素晴らしい」

いくらか気恥ずかしげだった彼女は、すぐに冷めた表情になった。

「：結局それですか。前にも同じことを話してましたよ」

「ワハハ、そうか？ 酒の席でのことは、何もかも曖昧になるな」

「貴方の事はもちろん尊敬していますが、その酒とやらの趣向だけは理解できません」

「手厳しい」

口髭を一撫でし、ジークバルドは不思議そうに貴樹を見た。

「何か、嬉しいことでもあったのか。口元が緩んでるぞ」

「そうですか？」

（やっぱり、感動だよなあ。一切関わり合いがなかった人達がこうして話してるのは。これからも珍しい組み合わせがたくさん見れそうでわくわくする）

ゲームでは味わえなかった新鮮な気分を楽しんでいる貴樹と、シリーズを何度か見比べて、ジークバルドは何かを思いついたように手を打った。

「シリーズ、そろそろ貴公と模擬戦をする時間だが、たまには相手を変えて行うのもいいのではないか？」

彼女は貴樹を一瞥して、やや困惑気味に頷く。

「ええ、いつも貴方の時間を取らせるのは申し訳ないと思っていますが、まさか？」

（は、いつの間にか、変な方向に話が）

「タカキと一戦交えてみてはどうかかな。私としても、彼の實力だけはまだ正確に推し量れていない。ユリアとのことは、条件が特殊だったからな」

「しかし、彼には呪いが」

「相手と同じ条件に合わせれば、成立するものではないかな？ 徒手での戦いを知らぬわけではあるまい。貴公の師は、どんな状況にあっても最後まで戦い抜く技能を叩き込んだと聞いている」

ジークバルドの後半の言葉で、シリーズは表情を引き締めた。自らの中にある誇りを刺激されているようだ。帯びていた模擬剣を置き、身軽になるよう鎧を脱ぎ始めた。

あまり望んでいない事態の進行を、貴樹は少し焦って止めにかか

る。

「待つてください。僕の意志も聞いてくれたら嬉しいんですけど」

「見るに、貴公は相当鍛えこんでいる。当然、徒手のおぼえもそれなりにあるんだろう？」

「そこを否定はしませんが、僕にはそんなに大それた力はないんですよ」

「ウーム、もつと奮い立たせる何かが必要だということか。では、こうしよう。先日、貴公が言った願いとやら。もし勝てたら、彼女に効力があることにしてもいいぞ」

(ほ?)

思わずシーリスを見やると、彼女は逡巡してから、俯き加減に頷いた。

「何かを賭けて、ほど良い緊張感の中で行うのは良い事です。ただし受け入れられる要求にも限界があるので、そこを配慮してくださいさるなら…」

ユリアに言った、自分のものになれという願い。それがシーリスに対して向かうということになる。早くも訪れた二度目のチャンスに貴樹は、

「なるほど、模擬戦はどんなふうにするんですか」

乗らないわけがなかった。

生徒達が空を仰ぎながら足をただ前に出す機械と化している中、かつてグンダが座していた中央の草地で、両者は向かい合う。

告げられたルールは簡単なものだった。腹か背中が地面につく、あるいは円状の草地から外に出てしまったら負け。首から上と、急所への攻撃は無し。そんな条件付けをされていなくても、貴樹はシーリスの顔を殴る等の行為は決してしないだろう。過去に本気で顔パンしたくなった女性は、実姉と実妹の二人だけである。ゴミである。

「ところで、対価を払うのがシーリスだけでは公平な勝負とは言えない。タカキが負けた場合のことも考えなければ」

「当然の意見ですね」

ジークバルドは底の見えない笑みを浮かべた。

「貴公が負けた時には、死んでもらおう」

数秒の間があった後、貴樹は頷く。

「わかりました」

「やけに物分かりがいいな。恐れがないのは、不死が見せる余裕か。この条件はただ貴公を追いつめるためだけのものではない。私も既に二回、命を失くす場面があった。復活できる回数が定められている。我らの不完全な不死性と、灰達のそれを比べるまでもないが、どちらも共通するのは、初めての死が、最も印象深いということ。他の灰と同じように、貴公にもそれを乗り越える機会を与える必要がある」

「死に、慣れるということですね。僕らの価値観とはえらくずれてますが」

「気が乗らないのなら、もちろん降りてくれてもいい。これは貴公が選ぶことだ」

「やりますよ。一つだけお願いしたいのは、痛みのない介錯です」

問題ない、とジークバルドは大口で笑みながら離れていった。

「あなたも、遠慮はしないでくれると助かるよ」

「無論です」

シーリスが、初めの礼をした。貴樹も返し、とりあえずは一番慣れ親しんだ柔道の構えを取る。

『おい』

(んだよ)

『まさか、忘れてんのか。お前は不死になつてない。エスト瓶を飲み損ねたんだろ。最悪、一度死んだらそれまでの可能性だつてあるんだぞ』

(わかつてる。リスクは大きいな)

『だったら、今すぐに事情を説明して終わらせた方がいい。お前が死んだら、おれもそこでお陀仏だ。一蓮托生の身なんだから、無茶は困る』

ジークバルドに条件を出された瞬間は、彼もそう考えていた。

(いや、駄目だ。周りには、俺がエスト瓶を飲んだと思わせておく)

『おいおい、また見栄張りか』

(何となく、違和感があるからだよ。今はとにかくそつち方面の話題は掘り返さない。嫌な予感がする)

『お前の勘で、全て上手くいくとは限らないぞ』

(あのな、俺が死ぬのはシーリスに負けた時だろ。なら勝てば全部丸く収まるじゃねえか)

『勝算があるのか？ 今のお前は、残り火の力を使えないただの一般人だぞ』

(二つ、根拠がある)

貴樹はもはや、内心勝ったつもりでいた。

(一つ、シーリスは登場するキャラクターの中で、最弱に位置する。祭礼場の中で最年少であり、女だ)

『ゲームの情報ではな。二つ目は？』

(おいおい、俺の記憶を見たお前なら、わかってんだろ?)

貴樹は腰をさらに低く落として、頭の中にあるいくつもの型を総ざらいした。

(徒手の経験は、それなりどころじゃねえんだよ)

まずは互いに距離を取り、出方を探る段階だった。ある程度ルールで縛られた環境の中、相手を倒すか押し出せば勝利が確定する。道場で習う類の武術にとって、まさにおあつらえ向きの条件である。さらに彼は数種類の武術を修めていたので、攻め方、あるいは終わらせ方を何通りにも組み立てることができた。

「さあさあ、積極的に行け。大事になったら、暗月の術士を呼ぶからな」

ジークバルドの一言で、シーリスが動いた。真つすぐに距離を詰めてくる。

(ああああ、そんなに近付いていいのかな？ 投げちやうよ投げちやうよ?)

『おお、なんかおれも行けそうな気がしてきた』

シーリスの上着の、手ごろな襟へ狙いをつける。相手の側面に回り込み、腰を起点にする回転投。柔道の技の一つである大腰を選択した

のは、過程で相手の体と密着できるからだ。そんな下心満載の動きで、まずは襟を掴もうと彼も前に出た。

彼女の足が、こちらのバランスを崩そうと動く。先読みしてかわした貴樹は、さらに肩へと向かってきた拳をいなして、予定通り彼女の薄い生地でできた肌着の襟を、そして脇下の両方を掴むことができた。

そこからは、彼にとって無意識でもできる動作だった。相手の重心を見抜き、体を前後にゆすぶって崩し、早いというよりも滑らかに身を翻す。彼女の一瞬驚いた顔が目の前を通り過ぎ、次の瞬間にはその体が彼の腰に乗せられていた。左で握る脇の方を外し、後は投げ下ろすだけという段階で、彼女は両手を強く貴樹の肩について逆立ちの体勢になる。襟の拘束も無理矢理剥がし、曲芸じみた動きで一回転して、地面に降り立った。

「面白い技術ですね」

右手をさすってから、貴樹は再度構え直した。

『惜しいな。でも大丈夫だろ。まだ他に打てる手はあるんだし』

(……)

『タカキさん?』

(あれ? これ無理かも)

『おいおいおい』

今までであった彼の余裕は、跡形もなくなっていた。

いつもの展開である。

『一体お前に何があった』

(うんとね、柔道の技って綺麗に決められちゃうと、途中で抜け出すなんて芸当は不可能なのです。まして五段の俺の大腰を、柔道のじも知らない状態で、完璧に崩されたのにも関わらず、それをやってのけたシーリスちゃんは、どんな身体能力してんだって話なんだよちくしよおオオオオオオ!)

達人に技をかけられた素人は、必ず何をされたのかわからないという感想を抱く。貴樹のそれも、限りなく洗練されたものだった。

(これを初見でかわされたということは、もう他の技も対応される。

出の早い崩しならまだ通用する可能性もあるかもしれないけど、不安要素がまだある)

『まじかよ』

(いなした右手が、まだ痺れてるんだ。シーリスちゃんの腕、細いけどパンチがゴリラ並みだ。頭おかしいだろ、もうやだ)

『つまり、頼みの腕力も負けるってことか。いくらなんでもそれは』
(思うに、異常なのは俺の方だ。この世界に来てから、どうにも動きが鈍く感じる。残り火状態の時との落差を考えると尚更だよ。明らかに全部の筋機能が低下してる)

『え…やばくね？ シャレにならねえ。やっぱり事情を話して降参するべきだ』

(いやだ。みつともない姿をさらして俺の評価が下がるくらいなら、死んだ方がましだ)

『どっかの武士かおめえはよおおおおお！ わかる？ だからお前が死んだらおれも消えんの。こんな何でもない場面で終わってたまるかあああああ』

(まあ待て。まだ起死回生の策がある)

『信用できませぬ』

(こうなったら、ある程度の恥は偲ぼう。要は、彼女の動揺を誘い、集中を乱して、勝利をもぎ取ればいい)

『それで？』

(あのおっぱいをつかんで揉めば男慣れしてないシーリスちゃんのことだ、絶対に)

『おい前に注意しろ』

脳内会話に夢中で動かない貴樹に向かって、シーリスは再び接近してきた。先ほどの投げを警戒してか、彼の手が届きそうで届かない範囲で立ち止まる。脇をしめ、両手を前に構えた、防御態勢だ。積極的に攻めて来ない様子に安心し、貴樹は代案を考える。

(くそ、見れば見るほどつけいる隙がないように思えてきた。不用意に相手の懐に入るのは下策だな。ちくしよう)

『頼むから下半身で物事を考えないでくれ。お前、ただ胸触りたいだ

けだろ』

(なら、一番やりたくなかった作戦にするしかない。素早く俺が下着を脱ぎ、息子をさらす。初々しいシーリスちゃんのことだ、目の前の光景に思考が停止し、うおっ)

彼女の姿が視界から消えたかと思えば、左の脛に衝撃が走った。骨にまで響く痺れでバランスを崩し、さらに腕を掴まれて半回転させられ、膝から折れるようにうつ伏せに倒れる。

(あ)

背中をつけまいとその時点で反応し、身をよじろうとするも、シーリスがすぐさま組み伏せにかかってきて、彼女の腕が首に回る感触に力が抜けた直後、貴樹は草むらの上で仰向けに固められていた。

(……ふう。シーリスちゃんの髪が頬に擦れてこそばゆいな)

『ぎゃあああああああ！ てめえふざけんなあああああ』

流れるようなローキックと、崩し技に、貴樹は現実逃避も込めて心の中で称賛した。

ジークバルドが、どこか納得がいかない様子ながらも、終了を宣言する。

「随分と呆気ない幕切れだったな。だが、興味深い技もあった。後で、教えを乞いたいものだ。シーリスも良い動きだったぞ。やはり新しい刺激は必要だな」

貴樹から離れた後、彼女は気遣うように手を差し伸べてきた。その手を借りて、貴樹は清々しい表情で立ち上がる。

「少し、本気になってしまいました。痛めてませんか？」

「大丈夫。すごいな、これでも結構自信あつただけど」

「途中から、集中が途切れているようにも見えました。まさか手加減を？」

「逆です。攻める手立てがなかなか見つからなくて。完敗だよ」

「私の修練に付きあってくれて、ありがとうございます」

「こちらこそ、ためになりました」

腕を軽く回し、祭礼場の方を向くと、ジークバルドがその視線を遮るように立ちふさがった。

「では、賭けの件だが」

「ええ、もちろん。ジークさんがやってくれるんですか」

「それくらいの責任は果たさせてくれ」

「じゃあ、お願いします」

既に準備していた真剣を抜き、ジークバルドはその場に座るよう、促してきた。

（おい、おいノミ。命令だ。今すぐ残り火をよこせ）

『無理でんがな』

（一週間のクールタイムが必要だとか、そんな建前は良いんだよおとおお、俺が、この俺が死ぬとか、ないないないない。早く適当に覚醒してよこせやああああ！）

『男らしく、誇りに殉じろよ。ま、巻き込まれるおれは可哀そうな被害者ですけどね』

（他人事みたく言いやがって。誇りだの、プライドだの、そんな豚にでも食わせとけ。自分の命が一番大事にきまつてんだろがあああああああああ！）

『言ってること無茶苦茶じゃん。あれだな。結局お前を選んだおれが悪かったんだ。まさかこんなくそどうでもいい所でゲームオーバーとは。困っちゃいますね（諦）』

（諦めんなあああああああ、お前はまだやれるぞおおお！）
自分で掘った墓穴にもぐりこもうとしている彼は、グンダの時とは違い人生を振り返る余裕もなかった。首筋に当てられる刃を感じても、逃げることや、説明することを選ぼうとしない。見栄か命かの選択を、この期に及んでもせず、どっちつかずを保つ男であった。二兎追う者云々という言葉がふさわしい人生の終わりを迎えようとしている。

ここで声を上げたのが、シーリスだった。

「待ってください。賭けは、双方対等であるべきではないですか」

ジークバルドが、剣を下ろした。

「どういう意味かな？」

「タカキさんが勝ったら、私に何でもお願いできるといふことなら、逆

に私が勝った時も、貰えるのは彼の命ではなく、そのお願いの権利でもいいと思います」

「ウム」

「死という経験は、確かに貴重です。でも今である必要はどこにもないでしょう。この方は、他の灰達の信頼を多く集めているようです。私は、彼らと不用意な衝突はしたくありません」

「一理ある。彼女はこう言っているが、どうかね」

ふられた貴樹は、しばらく口を小さく開けたまま固まった後、力が抜けたように微笑んだ。

「あ、じゃあ、それをお願いします。正直、頭真っ白で」

「ハハハ、よかったな。私もできれば同胞を手にかけることはしたくなかった。彼女に感謝しているなら、その願いを真摯に聞いてやることだ」

何でもなかったように剣を鞘に収め、ジークバルドはへばっている男子生徒を起こしにその場を離れていった。現実感を失った感覚でその後ろ姿を眺めていた貴樹は、シーリスに手招きされる。

「頼みごとを話したいので、墓地の方へ戻りませんか」

「ええ、もちろん」

表情をどことなく引き締めた彼女の横に付いて、人気のない場所へと歩いていく。

『これぞ都合主義。何とかなったな』

(いや、これは、うん。ハメられたな)

『ん?』

(多分、これから話すことが、彼女の本題だったんだ。今の方向にもっていくために、ジークさんが協力していた可能性が高い)

『おいおい、最初から仕組まれてたってことかよ。なら普通に話せばよかったじゃねえか』

(そこまでは知らん。俺が断るとでも思ったんだろ)

祭礼場近くの、名前すら刻まれていない欠けた墓石群のさらに端の方、切り立った崖の縁で彼女は立ち止まった。

「手間を取らせてしまつてすみません。ですが、これから話すことは

できる限り秘しておきたいんです。共に私の祖父、フオドリックを捜してほしい。それが、お願いしたいことです」

貴樹は強張りそうになる顔をごまかそうと、やや俯きがちになった。

「祖父は私が最も敬意を抱く戦士であり、掛け替えのない家族であり、頼もしい師でもあります。しかし、十日ほど前に不死街へ向かったとき、帰ってくる気配がありません。捜索の許しを何度も得ようとしたのですが、祖父に限って大事はないと皆言うばかりで。私一人で捜しに行くにしても、恥ずかしながら単独行動ができるほど周りに実力を認められたわけではありません。そこであなたの協力が欲しい」

「…具体的には？」

「今より五日ののち、灰の方々の鍛錬の一環として不死街に巢食う亡者の掃討及び呪腹の大樹の討伐が計画されています。その時、貴方だけは別行動を願ひ出て、その護衛に私を指名して欲しいのです」

「与えられた職務の上でなら、納得してもらえらるってことですね」
「少々、というよりかなり無茶を強いてしまう形になってしまいますが、どうか私の助けになってくれませんか？」

継るように言われて、彼は内心焦りに焦っていた。

(くそ、このタイミングでこうなるのは非常にやばい)

9. 集団訓練

もちろん、内心を面に出すことはしない。

『そんなにまずいのか』

(いいか、シーリスちゃんにじいちゃんがいるのは知ってた。イベントでも登場したからな。ただ、そいつが関わるのは、彼女のイベントの中でも一番最後のはずなんだ。つまりだ、)

『つまり?』

(亡者化した祖父を、彼女は殺すことになる。間に合わないんだ。場所さえ先にわかってれば、まだ正気を保った状態のフォドリックに会うことはできる。でも、おそらく彼女がこうして話してきてる時点で、手遅れになつてるだろう)

通常の不死人は、精神の摩耗まもうによる亡者化の危険が常に付きまといている。当然、長い間戦い続けている者ほどそういった消耗が激しい。フォドリックとシーリスの結末は、その性質のせいだ、決して後味が良いとは言えないものになってしまう。

(いつか来るとは思ってた。覚悟もしていた。だが早すぎる。フォドリックを正気に戻す方法が見つかってない以上、この問題は対処のしようがない。おまけに、五日後でも残り火はまだ戻ってないんだ。割に合わなすぎる)

『じゃあ、断るのか』

(それも駄目だ。フォドリックは、彼女と比べ物にならないほど強い。たとえ亡者になつていたとしても、彼女だけでは良くて相討ちだろう。だからプレイヤーに助けを求めてくるんだが、今回はそうもいかない)

『誰か、ジークバルドとかに助けを頼んだらどうだ。事情を理解してるふしなんだろ』

(そう単純なことじゃない。フォドリックを殺すのだけは絶対に駄目なんだ。それをしたら、シーリスちゃんはそれ以上生きる意味を失くす。亡者になつた祖父を楽にしてやることが、彼女の使命だからな。フォドリックをどうにかして正常に戻すことが、彼女を生かすことに

もつながる)

『…亡者って、元に戻せるものなの?』

(俺が訊きたいわ)

放っておけば、シリーズはほぼ確実に死ぬ。厳しい世界観をなぞるように、明確な救いを与えられるキャラクターは少ない。それら全てを解決して、なるべく多くの味方キャラクターを生存に導くことも、彼の目標に含まれていた。

「僕で務まるなら、喜んで」



もう何度目になるかわからない。

「今が一番可愛いよ」

「君は可愛いだけじゃない。綺麗だ」

顔。どうしてこんなに整っているのかと感心してしまう顔が、だらしなく溶けて、目の前に迫ってくる。

自分はそれにどう言葉をかけたのだろう。

どうして、あんな事をしてしまったのだろう。

「きみのことすっごく好き。ぷぷっ、これが練習。ちよっとは慣れた? だって。きやあっ」

「照れてる君も、ぶっ、可愛いよ」

「彰浩…」

「実織…」

楽しくて仕方がないという様子の新宮を、真似されている実織が締め上げた。

「ねえ、本気だから。それくらいにしないと、本気で窒息させるから」
「ふふ、そうやって構ってくるのが何よりのご褒美だって、知ってくるくせに」

下田役を担っていた草野が、物欲しそうに見ていた。

「いいなあ。俺も締めてくれよう」

「黙って。あんたは一生口閉じろ」

「照れんなって。カーワーイーイー」

「うるさあああいいー!」

下田は好奇の視線が集まる中、耳を塞いで縮こまっていた。本当は訳もわからず叫び出したくてたまらない。慣れた枕に顔をうずめて、布団の中にももっていられたらどんなにいいだろうと考えていた。

案の定、あれが起こった次の日には、ほとんどの生徒に話が広まっていた。あの頭の隅が痒くなるような台詞の全てが、漏れなく伝わっている。女子達の拡散能力は驚異的だった。

どうかしていた、と片付けるなら非常に簡単だ。魅了と呼ばれる、妙な術に惑わされた結果だと言えば、納得できる部分もあるかもしれない。始末が悪いのは、術中にはまっている間の記憶も、しつかり残っていることだった。

特別な感覚。まるで彼女と自分だけしかない世界に取り残されたような。彼女しか、目に入らない。彼女のことしか考えられない。恋焦がれるよりも強烈な、妄執に似た感情の名残が、何度も何度も、目を薄く閉じ唇を寄せてくる彼女の顔を思い出させる。

よく考えれば、その前にもカルラに躊躇いもなく飛びつくという醜態をさらしていたのだった。

「わああああああああつ」

ついに許容量を超え、叫びが口をついて出た。違う違う違う。あんなのは自分じゃない。自分じゃない。誰か自分と瓜二つの人間が、勝手にやらかしたただけだ。そうに決まってる。ずっと自分は眠っていたのだ。そうなのだ。

草野が真面目くさった顔で、立ち上がった下田を眺める。

「壊れたな」

「も、もうやめてよ。僕だって、あんまり憶えてないんだ。心当たりのない事掘り返されたって、どう反応していいかわかんないから」

「ほう。では、こちらにいる実織氏と目を合わせてみてください?」

余裕でしょ?」

「あ、う」

実織の方をどうしても見れない。どんな表情で、彼女に接すればいいのかさっぱりわからない。

「完全に憶えてる感じじゃん。なあ、気持ちはわかるぜ。どんだけ居たたまれないかは理解してるつもりよ。でも、何というか、ああ！俺も生で見たかったあ。ってか羨ましいにもほどがあんだろ」

「全然わかってない！」

「じゃあお前はあれか。彼女とのそれこれが嫌だったと。それほど嫌いってことだな」

「そ、そういうわけじゃ」

「正直に言っちゃまえよ。悪い気はしないんだろ」

「だ………」

草野のペースに乗せられているとはわかっていても、上手く受け流すことができなかった。

「下田、いい？」

実織が彼の両肩を掴んで、落ち着かせようとする。

「まともに返してたら、こいつの思うつぼだから。相手にしないのが一番。昨日のあれは、そう、事故だったの。実際の私達にやましいことなんて一つもない。わかるでしょ」

焦って動く唇の動きを凝視してしまう。その感触がどんなものなのか想像すると、どうしようもなくなくなった。

「ね、ねえ、なんでそんな。顔赤くし過ぎだって。こ、こっちまで恥ずかしくなってくるから。落ち着いて！深呼吸すれば、何とかなるよ」

「そのまま人工呼吸しちゃえよ——」

「黙って！」

「ひゅーひゅー」

「紗奈、後でおぼえててね」

「やったあ！」

「ほんとどうしようもないこいつら」

自分は、一体何をしているのだろう。

唐突に、下田は心の中が冷やされていくような感覚に陥った。こう

いう、盛り上がっている空気を台無しにしたくはないので、繕っているものの、段々と意識の外に追いやつていたものが浮き出てくる。

本当なら、今頃病院にいたはずなのだ。

こんな、わけのわからない事態にならなければ。

「さて、話はそれくらいにしてもらえるか」

昨日と同じ扉から、カルラが既に姿を現していた。その隣に、同じくジークバルドがついている。

「その二人は、あくまで私に協力してくれたただけだ。本人達にもどうしようもないことを、後から色々言うものではないぞ」

目が合うと、カルラは片目をつぶってきた。明らかに楽しんでいる様子に、早くも彼女に苦手意識が湧いた。ただただ気まずい。

「今日も早速各々修練に励んでほしいが、その前に灰達でいくつかの部隊をくんでもらう。三十一人いるから、六人の隊が四つ、七人の隊が一つだな。実は、もう既に昨日の様子を参考にしてこちらで決めてある」

ちらほら文句の声が上がる中、カルラの指示によつて計五つのグループが出来上がる。

「いや、うん。まあ別にお前と一緒にするのはいいよ。言いたいことはあるけどさ。ていうか、男子側は全くもって不満ないんだけど」

下田がいるのは、男子三人、女子三人のグループだった。草野と同じだったのは、少しだけほつとしている。

「ちよつとそれどういう意味？ あたしからしたら、草野も不満要素なんだけど」

「確かに――」

「これで祐馬君がいなかったら、マジボイコットしてたからね」

男子メンバー最後の一人である、国広は困ったように笑っている。

「なあ、おい彰浩。お前もおかしいと思うだろ？ 普通さつきまでの流れだったら、実織と新宮が来るはずだよな。何でそれがギャル三人組になるんだ？」

「ギャルじゃねーし」

「文句ばっか言つてんじゃねーよ。萎えるわ――」

「言葉をどうにかしろよマジで。喧嘩売ってんのか貧乳共」

「キモ」

「切実にキモい」

「ねえそのキモさは才能？ マジ鳥肌」

「あああ！ ムカつく」

草野が身をくねらせる様子から視線を外し、さりげなく実織の方を見る。彼女は新宮と一緒にだが、どうやら宇部のいるグループに入れられたらしかった。

「えと、下田」

深みのある低音で呼ばれ、彼は国広の方を向き直った。

「とりあえず、一緒になったということ。よろしく」

「ああ、うん、こちらこそ」

人の良い笑みで握手してきた国広に、下田は半分見惚れながら応えた。普段の学校生活ではあまり接点がなかったが、もちろん彼の人気は知っている。確かに人を変に緊張させない雰囲気は持っていた。

高原が、それを見つけて近寄ってくる。

「祐馬君、私も握手して？」

「あ、ちとせ抜け駆けは駄目だって。あたしが先だから」

「ちよつと二人ともミーハー過ぎてヤバイよ。ドン引きだよ、それ」

と言いながらも、芳野は前二人を押しつけようと全力だった。

そのがつつきように一歩引いて見ていると、広場の上で突然光が弾けた。今まで盛んだったお喋りが、それで無理矢理消えていく。

「これから、逐一注意しなければならぬのか？ 私語を無くせとは言わない。その、少し行動しただけで騒ぐ癖は直せ」

手を下ろしたカルラが、ぐるりと生徒達を見まわし、鼻を鳴らす。反対に、ジークバルドは笑っていた。

「賑やかなのは、良いことではないか。灰達が来てから、私は楽しくて仕方がない」

「それで鍛錬が滞ったら、意味がないだろう」

「あまり引き締め過ぎるのも、どうかと思うがな」

カルラはそれに言葉を返さず、眉間を揉んでから、再び説明に入っ

た。

「不満のあるなしに関係なく、隊の者同士で協力していくことになる。今日からは、各々の専門訓練だけではなく、隊としての連携も覚えてもらうからな。では解散」

午前は、あつという間に過ぎた。

どうやら下田が昨日術後の副作用で眠っている間に、それなりに進んでいたらしく。初めの方は実織と一緒に隔離されて、集中的に教えを受けることになった。もちろん、その間に会話はほとんどない。何かを話す勇気など、彼は持ち合わせていなかった。

カルラは奇跡を専門としていないために、当面は魔術を覚えて、自衛する手段を増やすことになった。既にある程度の傷を治せる実力はあるそうなので、後は心構えの問題だという。

魔術は、主にソウルを扱うものだ。矢のように鋭く変形させたり、球状のまま強く射出して相手にぶつける。攻撃だけではなく、盾を形成したり、速効性の罠を作ることができたりと多岐にわたっている。

下田は奇跡という、違う系統の術に適性を持っていたので、いきなり新宮のように光体を形成しろと言われても難しかった。しかし、カルラが彼の体に触れて何かを唱えると、掌から青白い球体を出せるようになった。

「小さい」

指先だけで包んでしまえるような慎ましいソウル。手で掴もうとするも、すぐに消えてしまった。微妙な気分になっていると、カルラはむしろ感心した様子で言った。

「灰は格が違うものなんだな。魔素を具現化するのも一瞬か」

「え、これってすごいことなんですか」

「私はここにたどり着くまで半月を要した。フフ、これからの成長が楽しみだ」

なぜか頭を撫でられる。一体この人は自分の何なのだろうか。彼女の方が背が高いので、傍から見ればそう違和感はないだろう。昨日のことも全く意識していないようなので、無駄に緊張している自分自身が情けなく思えた。

「すみません。こっちも見てもらえませんか」

実織にやや強い口調で呼びかけられて、カルラは離れて行った。

しばらくは、球体の形を維持し、サイズを拡大する練習の繰り返しだった。案外、それだけの作業にかなり没頭した。試せば試すほど、上達が実感できたからだ。拳大の大ききで、数分間維持できるようなった時には、カルラが終了を告げた。

貴重な手持ちのソウルを消費し、具の入っていない塩味のおにぎりを食べて、外の男子達と合流した。

「ちよつとタンマ。ほんとに。ぜえ、水をください」

「汗臭つ。草野、寄らないでよ——」

「祐馬は許す。むしろ、至近距離まで来て」

「めぐ、変態すぎ」

草野と国広は、息を荒げて地面に寝転がっている。

「そんなにきついの？」

「いいよな。お前の方は楽そうで。おまけに周りは女子ばつかかよ。ちつくしよう」

全く疲れていないわけではない。頭が重く感じるのは確かだ。カルラによれば、魔術、奇跡、呪術のどれを使うにしても、回数には制限があるらしい。限界が来ると、相当な疲労感が来て、腕さえ上がらなくなるそうだ。

ただ、ジークバルド達にしごかれていた男子達の惨状を見ると、下手なことは言わない方が良かった。

「こちらの調子はどうだ？」

カルラが尋ねると、ジークバルドは楽しそうに答える。

「目に見えて良くなるというのは、教える側としても誇らしいよ。少なくとも昨日の彼らはもういない」

「最初は正直どうかと思ったが、才能は素晴らしいものがある」

生徒達がそれぞれの隊に固まったのと同時に、ジークバルドが前に出た。

「さて、集団訓練だ。これからの戦いで、単独では突破が困難な局面が

いくつも出てくる。基本的に相手が一人であっても、こちらは複数で対するのだ。一糸乱れぬ連携ができれば、薪の王にさえ抗し得るだろう。今日がその第一歩というわけだ」

端の方で待機していた、三人の女性が立ち上がる。その様相で生徒達をざわつかせながら、ジークバルドの横に並んだ。

「もちろん、私とカルラだけでは人手が足りない。そこで協力してくれる者達をここに集めた。私達二人と彼女らがそれぞれの隊に一人ずつ付き、様々なことを教えるつもりだ」

最初に、鎧を着込んだ柔らかい雰囲気的女性が頭を下げた。

「アンリです。この身でどれだけのことを教えられるか自信はありませんが、灰の方々の役に立てれば幸いです」

次に挨拶したのは、白髪の鋭い目つきをした、甲冑に漆黒のスカートという奇抜な出で立ちの人だ。

「ユリアだ。貴公達には重い期待がかかっている。手加減はしない。覚悟をしておくといい」

最後の女性は、もはや顔すらわからない。上に鋭く上がった兜にほとんど覆われ、目だけが空いた穴から覗いている。背も高く、ジークバルドの言葉がなければ誰もが男性だと勘違いしただろう。

「ミレーヌ。今の所はそれだけ。はつきり言わせてもらおうと、まだ貴方達を認めていないの。しかるべき実力を示すことを願ってるわ」

三人に共通するのは、下田達に対する期待だった。

そこに、彼は言いようのない不安を覚える。戦えと言われても、一体自分は何と戦えばいいのだろう。前に聞いた、ルドレスという男の説明はあまり理解できなかった。結局、敵は何なのか。

ジークバルドが手を打ち、全員に向けて言った。

「さあ、我々は五人、隊も五つ。誰がどの隊を最初に担当するか、お楽しみだな。決め方には少し趣向を凝らした。カルラ、頼む」

彼女が手を上に向け、光の球体を出す。それは一瞬で五つの塊に弾け、ジークバルド達の頭上に移動する。そして、異なった色と形に変化した。

「既にこれらのソウルは、カルラの操作から離れた。しばらく不規則

に動いた後、貴公達のどれかに向かうだろう。では、散開」

それぞれのソウルが、生徒達の上であちこちに揺れ動いていた。

「アンリさん来いアンリ来いアンリ来いアンリアンリアンリ」

草野が目を閉じ、合掌しながらつぶやいている。素直に気持ち悪いと思つた。高原、久慈、芳野の三人はユリアのプロポーションについて感心したように話している。

「まあ確かに、あの人が一番優しそうだよね」

そう言った国広に対して、下田は疑問を投げかけた。

「そうかな。ジークバルドさんもなんか、面白そうな人だと思う」

「うーん、まあ、そうなんだけどね。普段は」

ソウルの動きは次第に収まっていき、一旦高く上昇してから、生徒のそれぞれの塊に向かって真つすく飛んでくる。

「頼みます。そう、あれだ。来い来い来い来い。どうか、どうかジーク先生だけは。あの人だけはやめてください。せめて女性をください。うわ、おいくな。やめろ。なぜ、なぜですか神様。ああああ」

下田達の方へは、酒瓶のような形をしたソウルが降りて来た。

「はっは。なるほど。クサノとユウマの所か。よろしくな」

ジークバルドに肩を抱かれ、顔を手で覆い泣き真似をしている草野に続いて、隊ごとに決められた場所へと移動する。祭祀場の中に入っていくグループもあるようだが、下田達は墓地が並ぶ丘の下、ちよつとした草場になった。

「この二人以外は、あまり関わりがなかったな。改めて、よろしく頼むぞ」

「よろ——」

「ム？ その手は何だ」

高原は、ジークバルドの手を取って、自分のと打ち合わせる。

「ハイタッチってやつですよ。挨拶」

「そうなのか。興味深い」

芳野と久慈も、それに続いた。

「よろしく、おじさん。イエーイ」

「何だか楽しくなってくるな」

「ノリ良い人はもう仲間みたいなもんだよね。しくよろ」

「はははは。イエーイ」

その流れで、下田もハイタッチをすることになってしまった。早くも仲が良い様子に、ついていけない気分になる。自分は異常なのだろうか。おかしな雰囲気としか思えない。

「話をするのもいいが、訓練を始めなければな。他の所がどうやるのかは知らない。私は単純な方を好むから、実戦形式を中心にするぞ」
おええと、草野が地面に手をついた。

「そう興奮するな。とにかく、隊として私を認めさせてみる。ちゃんと装備も整える。遠慮はしなくていいぞ。まず少しの間お互いに話し合う時間を設けよう。上手い作戦を考えてみてくれ。私を打ち負かすような」

ジークバルドが離れた所で待っている間に、輪になって話し合いが始まる。

「で、結局何をしたらいいわけ」

高原の疑問に、草野が億劫そうに答えた。

「あの人をボコせばいいんだよ」

「た、戦うの？ あっちは一人なのに」

六対一はさすがに不公平に思えた。

「そう思うよな、最初は」

「実際に見てないと、信じられないかもね」

草野と国広が、意味ありげに目を合わせる。

「あの人はな、控え目に言って化物だ。六人どころか、男子の半数が同時にいかかって一撃も入れられない。だから、今このメンバーでどうにかできるとは到底思えねえが」

信じられない思いで、ジークバルドの方を見た。笑って手を振ってくる。あまり強そうには見えなかった。

「でも、魔術だっけ？ 遠くから攻める手段があるのはいいかもしれない。それに、俺と草野以外の固有能力次第では、糸口は見つかるよ」

「じゃあ、彰浩のはもう知ってるから、他三人、教えろよ」

「は？ 何でお前に命令されないとはいけないの」

「頼むよ、芳野」

国広が真剣な顔で言うのと、

「わかった。私の能力はね」

「うっぜ」

高原の能力は、生物を拘束できるロープを作り出せるというものだった。これがただのよくある材質のロープだったら大した役には立たないかもしれない。だが、彼女によれば、絶対に破れないという特性がついているらしい。つまり、上手く相手に当たれば、確実に無力化できるという強力な能力だった。

芳野のは簡単に言って、探知系の能力だった。自身の半径百メートル以内の生物反応を詳細に把握できるという。ただ、今回に関しては使うことにはならなそうだった。

久慈の能力は、実際に見せられて驚いた。自分と瓜二つの分身を作り出したのだ。これもまた役立ちそうな力だが、どうやら扱いが非常に難しいらしく、今はただ歩かせることに全神経を集中しなくてはいけないようだ。

それぞれのできること、できないことを照らし合わせて、かなりの頻度で脇にそれながらも、一応の作戦が決まった。同時にジークバルドが時間切れを伝え、本格的な訓練が始まる。

結果から言うと、散々だった。

草野と国広でジークバルドの注意を引きつつ、芳野、久慈、下田の三人はその援護に周り、高原はできた隙について彼を拘束するというのが理想的な流れだったが、初めから立派な連携などできるはずもなかった。

芳野の放った魔術が草野に直撃し、陽動が崩れた所で、慌てた高原が出したロープが国広の足を絡め取って、前衛二人は呆気なくジークバルドに面を打たれた。残された者達の方へ彼が向かう前に、久慈が手を上げて降参を宣言した。あつという間の出来事だったが、下田はその間何もしていない。

「初めはこんなものだろうな」

「ジーク先生、手加減してくださいよ。頭滅茶苦茶痛いっす」

「なかなか、上手くないかね」

「草野だつき。なにすつ転んでんの」

「お前がやったんだろうがああああ！」

「祐馬君、今ほどくから」

「あ、ゆつくりでいいよ」

「二時間くらいかけて？」

「そ、それは困るなあ」

「ずるーい！」

数回繰り返し返したものの、芳しい結果は出なかった。全員、最後まで余裕のあったジークバルドは除いて、くたくたになって祭祀場に戻った。

それから五日間、訓練だけの毎日が続いた。高校ではサッカー部に入っていた国広でさえ泥のように眠るといふのだから、やや運動部側気味だった下田には過酷な日々だ。さらには、既に一週間近くも過ごしてしまつたという実感もある。ただ、それ以上のことは忙しさで意識が回らなかつた。考えないようにしていた、と表現した方が正しいかもしれない。

何とか続けて来られたのは、誰よりも多くの雑用を請け負つた担任の存在が大きい。

彼は、まともな服すら着れないという呪いを受けている。自分なら恥ずかしくてまともには動けないが、先生は違つた。なるべく積極的に祭祀場の人間と関わり、彼らの仕事の一部を手伝うようになっていく。それはもちろん、彼が信用を得ることで生徒達の安全を確保しようという意図なのは、皆が理解していることだった。実織の兄だということも納得できる行いだ。

だが、一つだけ、先生が自分の感情だけで動いていると感じる所があった。最初に、下田達に色々と説明をした火守女。彼を見つけると、彼女も一緒にいることが多い。というより、先生が彼女を常に探しているような節があつた。火守女を見つめる、彼の視線はいかにもという感じで、気がついていいる者は大勢いた。高原達は信じられない

思っているようだ。実織に確認の声が相次いだが、ちゃんとした答えは返って来なかったらしい。

この世界に来て、六日目の朝はいつもと違う目覚めになった。目を開けると、枕元にそれがいた。

彼でも、彼女でもないのは、おおよそ人間らしい見た目をしていなかったからだ。薄汚れたぼろぼろの布切れを幾重にも身にまとい、背には大きな甲羅のようなものを背負っている。そのせいか腰が折れ曲がり、骨の浮いた細腕で杖をついた様子は老婆を連想させる。しかし、顔の部分が布で覆われて、表情が全く読めないのが、どこか異質さを感じた。

恐怖で、声すら出なかった。

それは下田からゆっくり離れると、背筋のざらつくようなしわがれた声を出した。

「おかしい。確かに、深いソウルの鼓動をこの辺りで感じたのですが。おや、あちらにも反応が。間違えたようですね。おお、おお、主よ。長い時を仕えてもなお未熟なこのヨエルをお許してください…」

「なんだ、こいつ」

草野も起き出して、鞘に収まった剣を取った。下田と同じく、引きつった表情でそれを睨んでいる。

「わかんないよ。起きたらもういて」

二人の反応にようやく気がついたかのように、ヨエルは後退し、両手を下についた。

「重き使命を背負った哀れな灰人よ。お目もじ叶い、光栄に思います。これは、私の心からの警告でございます。貴方達は騙されている。あの思い上がった大王は、数多の犠牲もいといません。我々と共に歩む道を考えなさい。ロンドールの再興を」

「何言ってるのか意味わかんねえ」

「だ、誰か呼んだ方が」

二人が具体的な行動を起こす前に、ヨエルは杖を掲げた。

「今はまだ、無知な赤子よ。賢明な判断を待っていますよ」

一瞬にして、その姿が消えた。

だがまだこの場に何かが残っているような気がして、草野としばらくそのままの状態で固まっていた。

「もう、いないみたいだな」

「ど、どうする?」

「最後まで、わけわかんなかったな。…とりあえず、集合場所に行こうぜ。頭が回らん」

下田は頷いた。ヨエルの言った言葉がまだ響いていたが、その意味を深く考えることはせずに、篝火の広場へと向かった。

集まっていた生徒達の雰囲気は、どこかいつもよりも沈んでいた。座っていた新宮と実織が、こちらに気がつく。

「おはよ、下田」

「あ、うん、おはよう」

実織と話したのはかなり久し振りだ。ようやく緊張がましになっていたので、少し安心する。

「何かあったのか」

男子は口数が少なくなっている。女子の方は怯えている者もいた。明らかに異常だ。新宮が気味悪そうに答える。

「ここにいる全員が、同じ夢を見たらしい。それも、すごく不気味な夢で」

「どんな?」

「こう、みすぼらしい布を被ったおばあさんみたいな人が、耳元でお前じゃないって話してくる夢。怖いよね。草野君達も見えない?」

思わず、草野と顔を見合わせた。

「夢じゃないけど、俺らの部屋に出て来たぞ、そいつ。よくわかんないこと話して、消えたけど」

「嘘、実際にいるの? やだ、本当に気持ち悪い」

「…それ、もう一回言ってみて。俺を見ながら」

「え、本当に気」

「紗奈、相手にしなくていいよ」

「くそう」

「で、その人何か言ってなかった?」

実織が訊いてきたので、下田は自分の懸念も交えて話そうとした。が、正面の大扉が開き、中途半端なまま話が中断される。

「灰の方々、またお会いできて嬉しく思います」

そこから最初に出てきた人物のおかげで、生徒達の間には漂っていた暗い雰囲気が一掃された。

「きたああああああ、ヨル様ああああ」

草野がオーバーに彼女へ手を振る。ヨルシカはすぐに気がつき、微笑んで相槌をしてみせた。

「うわあ、綺麗」

「同じ人とは思えないね」

初日でも皆の前に登場し、鮮烈な印象を残した彼女は健在だった。暗月の剣という一団をまとめているヨルシカは、騎士というより姫の言葉が似合う。少し離れている所で眺めるだけでも、強く惹きつけられる何かがあった。

後から出てくる人々は、ジークバルドにカルラ、グンダ、アンリ、ユリア、ミレーヌとここ数日で知った面子に続き、かなり若い、下田達とそう年齢の変わらなそうな少女もいた。

「誰だろう、あの人」

草野が得意げに説明する。

「シーリスちゃんだ。たまに俺達男子側に混ざって鍛錬してたな。彼女がいたからこそ、地獄のようなしごきにも耐えられたんだ。はーかわええ」

シーリスはかつてエスト瓶を運んできた老婆と言葉をいくつか交わしている。草で編んだ花飾りを老婆にあげていた。

それから、彼女は緊張しているのか、かなり硬い表情で一点を見つめていた。その視線の先には、貴樹がいる。彼は何度か頷いていた。二人は既に知り合っていたのだろうか。

生徒達が静まるのを待って、ヨルシカが話し始める。

「数日の間、貴方達はよく頑張りました。なかなか直接見に行くことはできませんでしたが、報告はたくさん届いていますよ。今日は、その成果を試す時です。そう、記念すべき貴方達の初陣が間近に迫って

います」

下田には、いまいち実感が湧かなかつた。それはつまり、本当の実戦だということだ。しかし、何と戦えばいいのかわからない。

「これから、この篝火の力によつて不死街と呼ばれる場所に移動することになります。私達の第二の拠点となる所ですが、定期的に亡者が大量に発生する危険な地でもあるのです。その掃討が、最初の任務です。素晴らしい働きを期待していますね」

言い終わると、ヨルシカは開いたままの大扉に向かって歩いていく。生徒達に言葉をかけるためだけに出てきたようだ。惜しむ声がかかる中、端で影のように立っていた火守女が篝火に近付いた。

「皆様、篝火の周りに集まってください。不死街への転送を行います」生徒の誰も動こうとしなかったが、ジークバルド達や貴樹が躊躇いもなく指示の従つたのを見て、ようやく集まり出した。

火守女が燃え盛る火に手をかざす。

彼女の口が動くのを見た直後、周りの景色が一変した。

朽ちかけた、家の中だ。中心に小さなたき火が揺れている。その周囲に、下田達が現れる形になっていた。

「外に出るぞ。話はするな」

カルラが呼びかけ、張り詰めた空気の中で生徒達は家の外に出た。

「すげえ。全然違う場所だ」

草野が小声で言ってくる。

視界が一気に開け、祭場周辺とは全く異なった風景がそこにあつた。確かに街の体裁は整つてはいる。どの建物も木造で、どこかしらが破壊されている。遠くに見える石造りの橋が草木に浸食されている。普通に生活してはあまり見られない、不思議な光景ではあつたが、得体の知れない不気味さもあつた。

「問題の亡者共が集まっている場所まで、固まって動く。何かが襲つて来ても、下手な行動を起こすな。我々が道中の安全を確保する。では——何だ？」

カルラは言葉を止めて、真つすぐ上がった手の方を見た。

「僕はどうすればいいんですか」

貴樹は困ったように尋ねた。

10. 初陣

確かに、と下田も思っていた。彼には戦う手段どころか、自分の身を守る力さえ備わっていないに等しい。ここまでついてきたのはいいが、これ以上彼のやれることはない。

「どうしろと言われても。お前は、なぜついてきた？」

「なるべくぎりぎりまで見送りたいもので。もう戻っても大丈夫ですか」

「いや、こちらが指定した時間が経つまで、火守女は篝火をつながない。今家の中の火にもどっても、何も起こらない。どうしたものか」

カルラが溜息をつくとき、ユリアも嫌そうに言う。

「おとなしく祭祀場にいればよかつたものを。他の灰達の足を引つ張るつもりか」

「余計な行動は慎んでほしいわ」

ミレーヌまで非難したので、下田は意外に思った。どうも、貴樹は彼女らからよく思われていないらしい。一体彼のどこが気に入らないのだろうか。

「皆の荷物になるのは嫌だな。この場に残った方が良いですね」

「ここも安全というわけではない。誰か、彼を護衛する者を置いていかなければ」

ジークバルドが自分を指差す。

「駄目だ。貴公は不死街の掃討に一番慣れている。灰達を指導する役割に不可欠だ」

「ウーム」

誰がやるか、議論が硬直しかけた時、ずっと黙っていたシリーズが声を上げた。

「私が、残ります。責任を持って彼を守りましょう」

「大丈夫か？」

ユリアに訊かれても、彼女は意志を曲げない。

「はい。一人を守るくらいの実力はあると自負しています。どうかやらせてください」

「貴公の能力は当然認めているが…」
「いいではないか。彼女ももう一人前の戦士だ。任せてみては」
ジークバルドが賛成したのを皮切りに、シーリスと貴樹の二人を残して出発することになった。何となく流れに違和感を感じたが、何も根拠はない。彼が何を考えているにせよ、自分達生徒を思いやっていることは伝わってきたので、邪推するのは良くないと考えた。



「どうなることかと思いました。タカキさんが戻るって言い出した時は」

「何とか上手くいったって感じた。半分賭けだった。僕の意志を汲んでくれて助かったよ」

「かなりわかりやすかったですよ。もう少し彼らが行ってから、始めましょう」

貴樹は、肩を揉んで大きくなりつつある切迫感を紛らわしていた。

『で、だ』

(あん?)

『もう一度訊くが本気なのか？ 本当に成功できるかどうか、怪しいもんだぜ』

(いいか、俺がやれるかじゃない。お前だ。全責任がお前にかかっている)

場面は、彼の起床時にまでさかのぼる。

シーリスの祖父を救う方法を何一つとして思い浮かんでいなかった。この日が来なければいいと、何度も思ったほどだ。逃避行動として火守女と距離を縮めにかかったものの、彼女は貴樹含めた灰達を完全に仕えるべき対象としか考えていないようで、満足な会話すらできなかった。

気の進まないまま起き上がると、それはいたのである。

「ようやく、見つけましたぞ。貴方からは膨大な力を感じます。間違

いない、貴方こそ我らの王となるべき存在。どうか、ロンドールに栄光を取り戻してくださいませ……」

（ヨエルじゃん。へええ、このタイミングで接触してくるわけね。こっちから見つけに行かなくてもよくなったな）

『この、気色悪い奴はそんなに重要なのか』

（そこそこ。こいつから暗い穴をもらって亡者に近付けば、ロンドール側とコンタクトが取れるようになるんだ。これで、ユリアの態度も柔らかくなるな）

既に滅びているロンドールは、亡者を集めた国だった。精神を病み不死身の殻だけが残る忌むべき存在を統制し、最初の火を強奪しようとする目論みがある。その上位組織である黒教会で指揮を執っていた三剣士。内一人が、ユリアだった。彼女がどうして現在暗月に所属しているかは謎である。

『でも、明らかにやばそうじゃね。こいつらに協力するつもりなのか』
（そこなんだよ。暗い穴を貰う時に、亡者化が進行する。見た目が気持ち悪くなるのは避けたいんだよなあ。無効化できる?）

『問題ない。お前に悪影響を及ぼそうとする異物は全部浄化されるみたいだ。カルラの魅了が効かなかったのも、おそらく残り火の作用だな』

（おつけ）

恭しく頭を垂れたヨエルに近付いた。

「わかった。協力しよう」

「おお、おお。我らの未来は今、保証された。さき、その御手をこちらへ。私から、祝福を与えましょう」

（気持ち悪っ。さっさとしてくれ）

ヨエルは貴樹の手に自分の杖を当てる。その先から黒い靄が出てきて、彼の体内に入り込んでいく。その光景は不安にさせるものだったが、体に変化は起きなかった。

（お前の言う通りだな。ん?）

『おい、ちよつと』

異変は、ヨエルの方に起こった。

杖はいつの間にか赤く発光し、ほとんどが溶けていた。そしてその熱がヨエルの体にまで及び、炎が発生する。瞬きをする間に全体へ広がり、不気味な風体は鮮やかに彩られる。

ヨエルは隠れている顔を抑え、枯れた声で呻いた。大きくもがいて消そうとするも、炎の勢いは衰えない。彼の末端は既に灰へと変わり始め、見ているこちらが胸の悪くなるような姿をさらしていた。

「おのれ、おのれ」

ぴたりと動きをやめ、憎悪を呟いた。

「謀ったな。貴様、大王の手先か。どこまでも小狡い^{ずる}手を使いおつて。覚悟しておくがいい。貴様はこの瞬間から、我らの敵になった。楽には死なせんとぞ、小僧めが。ぐううううう、ああ、ああユリア様。哀れなヨエルをお許しください。使命を果たすことはいそいで叶いませんでした。この男は危険です。どうかお気を付けを」

残りは意味のつかめない呪詛になり、ヨエルは灰になった。溜まった灰はやがて消えていき、何も残らなくなった。年季の入った石の床だけだ。

『え、え?』

(おいおいおいおいおい。何だこれ。ヨエル死んじまったじゃねえかああああああ! しかも、これでロンドールと敵対したくさいぞ。どうしてくれんだよノミ)

『待て。おれにもよくわからん。あ、あれ? おかしいぞ。残り火の数が一つ減ってる。十八個しかない』

(はあ?)

『何となく、わかったぞ。あいつの亡者の呪いはかなり強力だったんだ。だから、防衛反応として、残り火が勝手にヨエルの体に入って、浄化したんだ。亡者にとっては苦手どころの話じゃないから』

(これ、洒落になつてないんだけど。つーか残り火つてそもそも譲渡できるものなのか)

『知らなかった。おれも今、初めて見たんだ』

(くそ、ただでさえ問題が山積みだつてのに)

ひらめきは、突然降りてきた。

文句しかなかった頭の中が、即座に切り替えられる。ヨエルの問題はとにかく、シーリスのことを解決できる糸口が見つかったのだ。

(残り火は、亡者を浄化できるんだよな)

『そうだけど』

(つまり、亡者になりかけている人間に使えば、正常に戻せるんじゃないか)

『あつ…。いやでも、おれが自分の意志で他人に残り火を与えられるとは限らないし。それに下手したら、フォドリックを殺すことにつながるんじゃないか』

(やれ。他に手はないんだ。死ぬ気でやれ。成功以外は認められないからな)

『そんな無茶なあ』

こうした事情で、貴樹はどうか解決法を見つけ出し、今に至っていた。

集団が橋を渡っていき、瓦礫の陰に消えていった所で、シーリスは剣を抜いた。先の細い、レイピアに通じる形状のもの。エストツクという名前の刺突剣だったはずだ。

「祖父のいそうな場所にはいくつか心当たりがあります。順に回っていきましよう。私の側を決して離れないでください」

再び家に入り、反対側の出口から抜ける。貴樹が記憶にはない道がいくつもある。プレイヤーが歩く範囲は、ほんの一部でしかないのだ。さすがに街と言われるだけあって、人探しには苦労する場所だった。

見たところ、敵はいない。亡者があふれているイメージだったが、さきほどのカルラの言葉からもわかる通り、ある程度の掃除はされているようだ。せめてあと一日遅かったら、無駄な緊張はしないで済んだだろう。どんな怪物が出てこようが、何の脅威にもならない。

道は、下りが多い。かなり急勾配の斜面もある中、シーリスは鎧を着ているのにもかかわらず、すすい進んでいく。草が肌に絡んで苦勞している貴樹は、己の体力の明らかな衰えを痛感していた。

(もう、息が上がってきたんだけど。ただ歩いてるだけだぜ？ 何だ

(この貧弱さ)

『こんな状態で敵に襲われたら、ピンチどころじゃねえな』

(やめろよ。そんなこと言うもんじゃ)

何かが崩れる音がした。

振り向くと、欠けた木材の溜まり場から起き上がる影。汚れた赤の布切れを被り、背に大きな壺を背負った二メートルを優に超える巨体の男だ。血の滴る出刃包丁を握り、貴樹の存在を認めたと途端、突進してきた。

「伏せてっ！」

反射的に従い、彼は身を丸めて、坂を転げ落ちた。その頭上を、ソウルで形作られた矢が取りすぎ、敵の足に当たる。そこで動きが止まったものの、まるで正気を感じられない叫びを発してからすぐに体勢を立て直していた。

(あつぶねえええええ！ 死ぬかと思ったんだけど)

『あれ強そうだな』

(そこらの亡者なんかよりは、ずっとやりづらい相手だ。慣れないうちはそこそこやられたな。シーリスちゃん、大丈夫か?)

彼女は地面にうずくまる貴樹を跳びこえ、あつという間に坂を駆け上がると、相手の武器の届くぎりぎりのところで一旦止まった。男の方はすぐに接近し、彼女の首をかき切ろうとしてくる。

その華奢な体を一撃で割いてしまいそうな規格外の包丁を、一瞬だけ細身の刃で受け止め、貴樹の眼にはとらえきれない速さで下に弾いた。地面に刺さる出刃包丁の上に乗し、掴んでこようとする男のもう片方の手をかわしながら、その肩の上まで一気に登った。短く息を吸って、彼女は男の脳天を一撃で刺し貫く。倒れかかる相手の体から飛び上がり、既に空中に発現させていたソウルの矢を一斉に放つ。男の首が裂け、どす黒い血を伴って転がった。

剣先の血を一振りで払ってから、シーリスは慌てたように近づいてくる。

「大丈夫ですか？ 怪我は？」

「う、腕を少し擦りむいた程度で」

「治します。見せてください」

指先から白い光を発し、貴樹の擦り傷は瞬時に元通りになった。
(つつよ)

『やっぱ実戦になると段違いだ。お前との組み合いでは本気出してなかったな。これの師匠だつていう、フォドリックは何者だよ』

(なににせよ、接近して残り火を流しこまないといけないんだ。ある程度の怪我は覚悟しないと)

『おれが失敗したら死にますよね』

(だからお前が全てだ。一蓮托生なんだろう?)

『頑張ります…』

同じ姿の敵が、進んでいくごとに何度も出てきた。中には農具を持った亡者と同時に相手をしなければならぬ場面もあったが、シリスは特に危なげもなく処理していく。虫も殺せなさそうな風貌だというのに、襲いかかる相手に対しては容赦なかった。貴樹にとって返り血でどんどん汚れていく彼女の姿にも興奮できたので、どんどんやれという思いだ。そうして、失敗が許されない状況が迫ってくる恐ろしさを和らげる。

斜面も、終わりが来た。亡者達の転がる橋の下の河川に突き当たった。一見澄んでいるように見えるが、端の方で鼠が走りまわり、衛生面では非常に難があるようだ。

シリスは迷いなく水につきり、岩壁に備え付けられた鉄格子を外しにかかる。開いた先は下水道のようで、長く続いていそうだった。

「ここから行けば、近いです。多少汚れてしまうことになりましたが、構いませんか?」

「フォドリックさんの安否を確かめる方が大事だよ。行こう」

「…そうですね」

彼女の諦観のこもった笑みを、貴樹は見逃していなかった。

中はかなり暗い。シリスが魔術の灯りを常にともしていなければ、歩くのもままならない。途中、熊よりも大きい鼠の集団に出会ったが、彼女は貫通性の高いソウルの太矢で一気に蹴散らしていった。一体どこが最弱NPCなのだろう。ゲームでは使っていなかったは

ずの技も、次から次へと出てくる。

段々と異臭のする環境に辟易^{へきえき}してきた所で、彼女が立ち止まった。一見どこにもおかしな所はない壁を入念に触り、規則性のある軌道で手を動かした。作動音が小さく響き、彼女の前の壁に入りこめそうな穴が現れた。

「凄^ひい仕組みだな」

「私と、祖父だけが知っています。この先は、大樹の地下にある空洞になっています。よくあそこで、稽古をつけてもらいました」

懐かしむ声音とは対照的に、シーリスの顔にはあえて感情を抑えている気配があった。そこに隠しきれない悲壮感があるのは、近くで見ている貴樹にもわかった。

「行きましよう」

貴樹は確信している。

（亡者の穴倉か。予想通りだ）

『じゃあ、いるんだな』

（ああ、彼女が最初からここを目指していたんだろう。他にも心当たりがあるなんてことは、嘘だ）

ただ一人残った肉親を殺めようとする、彼女の覚悟の重さは想像できない。だが、貴樹は彼女が自身の命を燃やしてまで使命を遂げることとを、認めるわけにはいかなかった。

穴を進んでいく中、彼女がそつと話しかけてくる。

「ここまで付き合わせてしまって、すみませんでした」

「僕は勝負に負けたから。当然のことだ」

「いえ、それでも、私の、私達の約束を支えてくれて、言葉もありません」

そこは、水が薄くたまるかすかに明るい空間だった。中でもろうそくが並べられ、淡い光が集まっている場所に、誰かが立っていた。

かつては、黄昏色に輝いていたであろう鎧は、所々塗装がはがれ、生の金属部分が露出している。腕甲や足甲もその大部分が破壊され、もはや意味をなしていなかった。胸元から顔にかけて乱雑に巻かれている布のせいで、顔立ちはよくわからない。が、唯一露わになってい

る目は焦点を結んでおらず、真っ赤に充血して、滲む狂気を感じさせる。

シーリスは薄く目を閉じ、エストックに手をかざしてソウルを纏わせた。貴樹も見ただことのない属性付与だ。

「私は、嘘をつきました。祖父が手遅れであることは初めから知っていました。あの人は、もう、味方と敵の区別もつきません。今すぐに貴方は逃げてください。道中の障害はできる限り排除しました。転送されてきた場所まで戻れば、安全です。…こんな小さな、私の使命に巻き込んでしまって、申し訳ありません」

歩き出そうとする彼女の肩を、貴樹は掴んで止めた。

「シーリス。死のうなんて考えるな」

「え……？」

彼女とフォドリックの間に立ち、彼は拳を構えた。

「君の家族は、僕が救ってみせる」

(あー、くそ。始まつちやった)

『やれる。おれはやれる…やれるぞ……』

パンツ一丁という締まらない格好で、歴戦の戦士に向かっていくのだった。



早くも下田は、この街が嫌いになりかけていた。

そもそも、ここが街と呼べる資格があるのかすら疑問だ。まともな形を保っている家屋は一つとしてなく、住人は正気を失った亡者と生きています。

奥へと進んでいく途中で、何度も襲撃を受けた。墓所にいた、ただの亡者だけではない。細身で見るからに非力そうな普通の亡者達よりもずっと大柄で、両手ノコギリといった武器を振り回す敵も出てきた。

恐怖はもちろんあったが、自分の身に危険が及ばないとはわかった。

きつっていた。奴らが生徒達にまで到達することなく、ジークバルド達に殺されていたからだ。

特にジークバルド本人は、真正面から立ち向かい、大剣を振るって襲いかかる者達を屠っていた。どうして、あんな動きにくそうな鎧で戦えるのかはわからない。その謎は、数日ずっと隊で手合わせしても解けなかった。

「すごいすごい。反応がどんどん消えてく。無敵じゃん」

「結構数いるの?」

「んー? まあ、私達目立ってんだらうね。最初は囲まれてたけど、もうすつかすか」

芳野の能力は、思った以上に精度が高いようだった。彼女の感覚を他者と共有することは叶わないが、情報が入ってくるだけでも段違いだ。彼女がいれば、不意をうたれることはなくなるのだから。

特に誰かが傷つくような場面もなく、彼らは目的の場所へと到着した。

周りの木々よりも高い、金属の建物だった。蔦に覆われて細かい判別はしにくい、宗教的な絵がいたるところに描かれている。かつては聖堂だったのだろうか。栄華を誇ったであろう内部は崩れかけ、中庭までの道が開けている。

そして広い庭では、吹き抜けを通り越し、幹もふくよかに育った大樹が鎮座していた。

「なんだ、あいつら。祈ってるのか」

草野が驚いたようにつぶやく。

そのふもとは、大勢の亡者達が集まっている。皆が一様に大樹を見上げ、崇めるかのように両手を合わせていた。

「奴らを全て討伐することが、貴公達の役目だ」

あれだけ動きまわって息一つ切らしていないジークバルドが、生徒全員に向かって言う。

「我々は、ここから動かない。よほどのことがない限り、手出しもしない。貴公達だけで、やってみせるのだ。隊の連携も形になってきた。敵ではないはずだ」

「それと、」

アンリが、彼の言葉を引き継ぐ。彼女の教えはまだ受けていないが、聞こえてくる話によると、見た目にそぐわず、相当厳しいものであったらしい。でもそれは、他の皆にも言えることだ。

「あの亡者達の中には、手ごわい個体も混ざっています。赤目を見たら、用心してください。動きが他よりも俊敏です。連携を密にして、落ち着いて対処すれば大丈夫。健闘を祈ります」

「ここまで守ってくれていた彼女らは脇に下がり、生徒達だけが残された。」

「おし、一番乗りだ。走るぞ」

草野が剣を抜き、下田の肩を叩く。

「え、そんな誰かと競うわけでもないのに」

「でも、誰かが踏み出さないといけないしね」

国広も続き、他三人の女子もおーっと叫んだ。その声で、一番近い地点にいた亡者が振り返る。これは駄目ではないだろうか。後ろからそつと近づいた方が良かったに違いない。

「何してんの、下田。あんたも大事な役目あるんだし。誰かが怪我した時は、頑張ってもらおうかね」

「それは、うん。任せて」

高原と一緒に、既に走り出した草野達を追う。怯えて足が動かないなんてことはない。散々ジークバルドに教えられて、隊としての技術を磨いてきたという自負もある。

自負？ ただの学生が？ こんなのもるで、ゲーム気分じゃないか。

頭の中に響いた冷笑は気にしない。今は、そう、仕方がないのだ。祭祀場の者達の言うことを聞くしかない。駄々をこねても、どうにもならないのだ。現実に戻るためには、まず、自分が無事であることを考えなければならない。

亡者達の大部分が近づいてくる生徒達に気づき、立ち上がる。置いていた短剣やら熊手やらを手にし、唸り声を上げて走ってくる。

「数が多いな」

「囲まれないようにしないと。一体一体、確実にいこう」

前衛である草野と国広が、一体の亡者を同時に相手取る。一方が相手の得物を、もう一方が腰を切りつけ、崩れた所を、草野がとどめをさした。

「うわ、えっぐ」

分断された顔の切り口から、黒い血があふれる。枯れた体を切った感触がまだ残っているのか、血に汚れた剣を嫌そうに見る彼に、国広がたしなめるように言った。

「訓練の時とは違う。相手はこつちを殺そうとしてくるんだ。覚悟しなきゃいけない」

「よし…」

「高原達は、援護を。俺と草野が対応しきれない奴をやってくれ！」

草野の脇から抜けた亡者が、迫ってくる。下田は落ち着こうと努めながら、青白い光の矢を射出した。同時に三つのソウルの矢と、呪術の炎を付けた亡者は人の形を失って、地面に転がる。

「わあ、オーバークル。グロい」

「私達全員で一体狙ってどうすんの。めぐ、周りの数は？」

訊かれた芳野は、飛びつこうとしてくる亡者に炎を投げつけていた。

「十とかそんなくらい！ 目で見た方が早いつて。もう力解くから、こつちに集中させてよ」

高原が、ロープを出現させ、かなり接近していた一体の足に絡ませる。目の前に倒れてきた亡者の頭に、下田は夢中で魔術を叩きこんだ。ただの球体から矢の形状に変化させることにはもう慣れた。

確かに気持ち悪い。自分の手で直接行ったのではないにせよ、動いていた者の命を取るの嫌な気分だった。ただ、見た目が普通の人間とかけ離れているせいか、その感情はすぐに次の準備に切り替わる。

「祐馬君、危ない！」

亡者の攻撃を受け止めていた国広の背に、もう一体が斬りかかる。向き直るほどの時間は残されていなかったが、彼は冷静に対処した。

国広の腰に刺されていたもう一本の剣がひとりで動き、鞘から抜

けて亡者の腹を貫いた。まるでその剣は自分の意志を持っているかのように、亡者の腹部を横薙ぎに裂いた後、国広の横に浮かんだ。そして彼の正面の亡者に向かい、上から頭を叩き斬った。

彼の固有能力は、不可視の第三の手を生やせることだった。いわく、体のどこからでも伸ばせるらしく、死角にも対応することができるといふ。隊の中では、一番実戦に向く力だった。

「いったん下がろう。他がどんどん前に出て、こぼれた亡者がこっちに集まり始めてる」

「くそ、雑な仕事しやがって」

「あの大樹、嫌な感じだ。なるべくあれからは離れた所で戦おう。下田を中心にして、円陣を組むんだ。高原は俺の隣りに来て、目について亡者の動きをどんどん止めてくれ」

さらには、周りも良く見えている。国広が司令塔になっていくのは自然なことだった。

この数日で、自分達の連携が劇的に良くなったとは思わない。初めの醜態から抜け出すのは、困難だった。それぞれのやるべきことをはつきりと決め、お互いに邪魔にならないよう立ちまわることだけを意識してやってきたのだ。だから、それなりにやれている。迷いなく引張ってくれる、国広の存在も大きかった。

それでも慣れない多数の敵との戦闘では、消耗も激しい。ほとんど攻撃をしていない下田でさえも、息の詰まるような状態に疲労が高まっていた。

嬉しいことに、亡者の数は確実に減っている。今も草野が一体打ち倒し、自分達の周りがぼっかり空いた状況になった。

今まで誰かが怪我をしないかずっと見張っていた下田は、他のグープのことが気になり始めた。

危険な状況に追い込まれている所はない。やはりというか、一番動きがあるのは宇部の隊だ。丸戸と砂川、高坂の男子に加え、新宮、実織、そして下田と同じ奇跡使いである小柄な女子、上島がいる。彼らの周りにも亡者はほとんど残っていないく、全員で一体を相手にしていた。

「あれって」

「赤目だ。速いな確かに。他のトロい亡者とは大違いだ。でも、余裕そうじゃないか？」

実際には、宇部が一人で圧倒しているようなものだった。確かに、赤目の亡者は他よりも明らかに違う。両手に鋭くどがつた短剣を持ち、軽い身のこなしで動き回っている。だが、その上を行くのが宇部だった。赤目が攻勢に全く出れないほど、絶え間ない連撃を加えていた。

片腕が切り落とされ、胴体に刃を突き入れられた赤目は、呆気なく息絶える。それを最後に、中庭で動いている亡者はいなくなった。

「終わりか」

草野が息をついて、剣を収める。

「彰浩、頼む」

座りこんだ彼に、下田は近づき、手をかざした。回復の光が草野を包み、その疲労を癒していく。ただ傷を治すだけではない。回復の奇跡は最初の印象以上に、役立つものだった。

「下田、こつちもお願いー」

高原が手で顔をあおいでいる。

「お前は、そんなに疲れてねえだろ。無駄うちさせんなよ」

「うっさいな。見た目以上にきついんだって。ずっと集中してたしさあ。ね、下田ならわかるよね」

「う、うん」

「おい、お前最近、女子達に甘くなつたよなあ？ 関わりが多くなつたから、慣れましたか。昔の彰浩はどこに行ったんだよ！ 女には媚びないって、誓い合つたじゃねえか…」

そんな記憶は一切ない。

「下田とアンタを一緒にされてもね」

「むしろ草野のがつつきようが引くし」

高原に奇跡をかけた直後、後ろからいきなり抱きつかれる。どこかほっとする甘いにおいと、わずかな膨らみを背中に感じた。

「な、なにっ？」

久慈のにやけた顔が間近にある。

「ほら、顔真つ赤。草野にも、これくらい可愛げがあったらね。ま、そうだったとしても見た目との落差で吐くけど」

「あ、の、離れて」

「睫毛長いよねー。女の子みたい」

「う、羨ましいなんて思わないんだからね！ そんな胸ない女子に抱かれたって、何の感慨もわかねえし。彰浩、冷静になれ。そいつは実織じゃねえぞ」

「意味、わかんないから。なんで、そこであの人が出てくるの！」

「やっぱあ。顔、トマトみたい。ういうい、ほっぺたもやわらかーい」

「触らせてよ、朱音」

「マジ天然記念物」

彼女たちの玩具にされそうになった所で、国広が切羽詰まった調子で叫んだ。

「皆、樹が」

がさがさと、葉同士が擦り合う音が、大きく響いた。生徒達全員が、その元の方へ注目する。

常識では考えられない光景だ。それまで奥の方で静かに植えられていた大樹が、動きだしていた。ゆっくりとではあるが確実に、立ち上がろうとしている。

なぜ、今まで気がつかなかったのだろうか。よくよく見てみれば、それは植物としての外見を大きく逸脱していた。幹の中心に白い卵のようなものがいくつもこびりつき、そこからおぞましいことに、人間の手が飛び出している。四方向にのびる太い枝もまた人間の四肢に酷似していて、今まさに両の足で立っていた。

「こんなのがいるなんて、聞いてねえぞ」

「亡者だけのはずじゃ」

下田は聖堂の入口の方を見やった。ジークバルド達は、一向に助けに来る気配がない。彼らにとっては、あれの存在も織り込み済みだったのか。それはつまり、生徒達だけであの大樹もどうかしななければならぬのだ。

大樹は鈍重な足取りで庭の中央に向かってくる。生徒達は端に寄って、その進行から逃れていた。それは彼らに危害を加えようとはせずに、やがて立ち止まった。

「意外と、のんびりしてんな。もしかして、いける？」

徐々にその巨大な足を曲げ、大樹は腰を下ろそうとしてくる。

国広は大樹の姿と、下の地面を見比べ、何かに気がついたように息を呑んだ。

「いや、駄目だ。今すぐに、ここから離れるんだ。早く——」

その速度とは裏腹に、大樹が座りこんだ衝撃はかなり大きかった。離れていても地鳴りが伝わり、下田は転びそうになる。しかし、危険なのはここからだった。

枯れていた地面に大樹の周りからヒビが広がっていく。あつという間に中庭の全体にまで広がり、ついには決壊した。下田は突然の浮遊感に襲われる。

既に足場がなくなっていたのに気がついた時には、落下が始まっていた。



(無理)

『なんだって?』

(無理だろこれ。お前が成功するしないとか以前に、確実に殺される) 格好つけてフォドリックの前に立ったものの、貴樹は冷汗を大量にかいていた。

フォドリックは今にも力尽きてしまいそうな容貌だ。どこもかしこもぼろぼろで、全盛期の頃の面影は、おそらく何も残っていないだろう。

それでも、接近して目的を果たせる未来が浮かばなかった。つけこめそうな隙が全くない。異常なほどの威圧感で、こちらの方が集中を保てなくなる。

(こ、怖いよおおおおお、捕食者だ、あれは。食われるううう)

『多少の痛みは我慢する覚悟だろ?』

(そういう次元じゃないって。だめだめだめ。はい無理。一撃で首がとばされるだろ)

『じゃあ、逃げろよ。元はと言えば、お前がシーリスを助けたいからここまで来たんだろうが』

(くっそおおおおお! そう言われると、やらなきゃいけないんだよなあ。見栄張る場面でもねえ。シーリスの協力が必要だ)

「何を、何をしているんですか」

シーリスが彼の前に出てくる。フォドリックへ剣を向けながらも、貴樹を睨んでくる。

「灰の方々を、傷つけるわけにはいきません。それに、これは私と祖父の戦いです。邪魔をしないでください!」

「諦めるな。まだ彼を元に戻せるかもしれない」

「そんなことは、あり得ません。私が、何の手も打たなかったでも思っているんですか? いくら探しても、亡者に心を取り戻させる方法は見つかりませんでした。だから、もう、彼を楽にさせてあげられないんです。祖父のこともよく知らないのに、貴方に何ができますか?」

「聞いて!」

詰め寄る彼女を落ち着かせるために、貴樹は大声を上げた。フォドリックがそれに反応し、武器を構える。刃の長い大剣。ゆっくりと近づいてくるのを一瞥して、早口でシーリスに説明をする。

「君は、あの人の動きを止めてくれ。どんな手を使ってでもいい、たった数秒、それだけでいいんだ。あとは、僕が何とかしてみせる」

「無理です! どうか祖父は、私に殺させて」

「彼は死なせない。頼んだから」

彼女の両肩を強く叩いてから、貴樹は腹をくくって、フォドリックに接近した。片手で持った大剣を振るってくる。あえて、彼は避けなかった。シーリスの行動に、期待していたからだ。

フォドリックの武器を握る手に、ソウルの矢が命中する。連続で三

つも炸裂し、その手から大剣が吹っ飛んだ。

(よっし、いまだあああああああ！)

貴樹は突っ込み、フォドリックの体に組みついた。その首筋に手を押し付け、いちかばちかの賭けをしようとする。

当然、フォドリックはおとなしくしてはいなかった。片腕を振り上げると、籠手のついた部分を向けて、貴樹の腕を殴りつけた。正気を失った状態でも健在の並み外れた膂力で、その骨を叩き折る。

激痛に顔を歪めながらも、貴樹は決して離そうとしなかった。

(いだあああああああああ、畜生、完全に折れた。ノミ、はよやれえええええ！)

『おおおおどうにでもなれええええ』

無事な方の腕に、ほんのかすかな炎が灯る。勢いは弱くとも色鮮やかな炎は、フォドリックの胸に吸い込まれるように消えていった。

再度貴樹へ叩きつけられようとしていた拳が、止まった。しがみつく力も失せた貴樹は、フォドリックから離れ、地面に倒れる。そこに血の気を失って駆け寄ったシーリスは、自身の祖父の変化に、目を見張った。

その体に一瞬、大きな火柱が立ち昇る。それが消えた後、フォドリックはしばらくの間静止し、それから彼女の方を見た。

「…シー」

轟音が鳴り、地下空洞に光が差した。開いた大穴から大量の瓦礫と、気味の悪い姿をした大樹が降ってくる。

(もう、呪腹の大樹が起動したのか？ ふ、ぎげんな。間が悪いにもほどが)

逃げようにも、折れた右腕の痛みで立ち上がることすらできない。シーリスも、迫ってくる危険に対応しきれずにいるようだった。

当たれば無事ではすまない岩の塊が視界に広がる。今度ばかりは、彼も覚悟をした。せめてあと一日遅ければ、という後悔を噛みしめる。覆いかぶさってくるシーリスの顔を、最後の思い出ししようと心に刻み込んだ。

だが、運は彼に味方をした。

迫っていた岩が急に止まり、真横に放り投げられる。状況を理解する前に、シーリスと共に抱え上げられた。

「事態はよくわからんが、さっさと脱出するのが先か」

巻きついていたりした布が取れ、髭を蓄えた老人が上を見上げた。

（ふおどりのいいいいいいいっつく！　ぶらぼおおおおおおお）

『奇跡だ…奇跡が起きたで…』

二人分の体重がかかっているのにもかかわらず、彼は軽々とした身のこなしで落ちてくる瓦礫に乗り、次々と飛び移りながら上の出口へと向かった。

（忍者かよお前はあああああ！）

『見たか、おれの力を！』

（やばくね？　俺、最強じゃん。奇跡を起こしたぞ）

『おいしいいいいいい』

老人とは思えない脚力で登り切り、崩壊した地面に端から外に上がった。そこには先客が大勢いる。

「何じゃ。お前達も来ていたのか。とすると、いつもの大樹狩りだな。おかしい、儂はどうに正気を失ったのではなかったか…」

「お爺ちゃん……い」

「こらえきれなくなったのか、シーリスが彼に抱きついた。

「信じられない。本当に、本当にお爺ちゃんが戻ってきた…。もう二度と、帰ってこないと思ってたのに」

「おお、孫娘よ。悪いがそろそろ下りてくれ。腰が辛くなってきたわ。それに、このけしからん格好をした男は？」

はっと彼女は気がついたかのように息を呑み、貴樹を抱きかかえてゆっくりと下におろした。上腕の折れ曲がって紫色に腫れている部分に手を向け、奇跡での応急処置を施し始める。

「これは、驚きましたな」

「ジーク。そやつらが灰というわけか。記憶が定まらん。儂はどれくらい亡者の穴倉にいたんだ？　なぜ、元に戻れた？」

「それは、まさか、タカキが……？」

「誰の事だ」

「そこで倒れている男ですよ」

注目されている貴樹は、シーリスの治療を受け、痛みが和らいでいくのを感じていた。

「何が、何だかわかりません」

頬に、彼女の涙が落ちてくる。回復を促す両手は震え、泣き笑いのような表情で貴樹をじっと見下ろしている。

「貴方は、貴方は一体？ 亡者を人間に戻すなど、灰の方でさえ、不可能なことだったはずですよ。未だに、受け止めきれない自分がいます」

「よかったよ。成功して」

「：初めから、こうするつもりだったんですね？ 私の覚悟も、全て見通した上で」

貴樹は答えない。残り火の力のことを、どう説明すればいいのかわからなかったからだ。自分でも、フォドリックを救えたのは幸運としか思えない。彼女は口元で小さく笑うと、すっと顔を近づけてきた。「もしそうなら、事前に言ってくだされればよかったのに。これでは、私の格好がつかなくなってしまうです」

「うん：それは」

「フフフっ、嘘ですよ。話せない事情があるなら、それでも構いません。：貴方は、とても、優しき方ですね…」

見つめてくるシーリスの瞳の輝きに、貴樹はようやく、自分がかなりやりすぎたことに気がついたのである。避けられなかったことはいえ、既に展開を動かしたことは変わらなかった。

残り火は、これで十七個となった。



大樹は、初め生徒達の手で討伐される手筈だったらしい。祭祀場に戻ってから、聞いた事だ。

だが、ジークバルド達にとっても中庭地下に巨大な空間が存在しているのは、予想外だった、だから、下田達が落ちるのを、すぐに助け

に来た。

アンリとカルラ、ユリアがそれぞれ魔術で足場をいくつも形成し、ほとんどの生徒達を受け止めた。ほとんどという表現を使ったのは、下田だけはカルラに直接引き上げられたからだ。

「想定外だったな。予定が狂ってしまったが、灰達をこんな所で死なせてしまうわけにもいかない。大丈夫か」

「は、はい」

「お前の隊は中々良い動きをしていた」

「ありがとうございます」

「これからも精進しろ」

また頭を妙に優しく撫でられて、下田は聖堂の外に着いた。そして、女子生徒の人だかりの方に目を向ける。

どういうわけか、自分達の担任がいた。しかも大けがをしている。高原達が心配そうに見守る中、前に貴樹と残ると言っていたシーリスという少女が治しているようだ。謎なのは彼らが崩壊した穴の下から出てきたことだった。しかも、新たに出てきた老人が一緒だ。

「何があっただらうな」

「さあ」

貴樹には貴樹で、何か考えがあっただのか。いつも皆の先生という立場で動いているわけではない。彼なりに、この世界に馴染もうとする努力をしているのだらう。ただ、怪我だけはしない方がいい。心配する人がたくさんいるのだから。

ぼうっと、下に落ちた大樹に上空から攻撃しているカルラを見やる。彼女の手の感触は、まだ頭の隅に残っていた。自分の頭を撫でてくるような人間は、彼女を含めて二人しかいない。そのせいだろうか。寂しさが、また込み上げてきた。

あの人を、母さんに重ねるのは失礼だ。

下田は溜息をつき、雲のかかった薄暗い空を眺めた。

いのですが」

「うん。おかげさまで完治に近いよ。凄いね、骨折がたった一日で治るなんて」

「いえ、そんな…。私ではまだ力不足で」

まだ、腕を離そうとしない彼女に周りもざわつき始めていた。

（やばいやばいやばい。シーリスちゃん、完全にやられてるよ。くそ、面倒くさいことになった）

『最低だなお前』

（俺はひもりんとくつつきたいんだ。超絶イケメンで性格が最高峰な俺に惚れるのは仕方のないことだが、シーリスには応えられない。てへへ、罪作りだよな俺）

『股間が腐り落ちればいいのに』

最低軽薄男の本性を知らずにいるシーリスが哀れでならない。彼の普段の思考がもし伝われば、幻滅し相手にもしなくなることは確実だろう。だが、ここでばれるようなら、今の貴樹は存在していないのである。過去に騙されてきた人全てに謝れと、この男に言いたい。

「まだちゃんと感謝を伝えていませんでした」

「いいよ、僕がやりたくてやったんだから」

「いいえ。貴方のしてくださったことは、私の一生を捧げても、お返しできるものではありません。お願いがあるのですが、どうか、貴方に騎士の誓いをさせてくれませんか。忠誠を誓うにたる人を、ようやく見つけた気がするのです」

彼女の視線は、純粹な憧れに満ちていた。貴樹の手を尊いものであるかのように握り、膝をつく。掌の甲へ唇を近付けた。最後に確認するため、遠慮がちな上目遣いをしてくる。

「誓いを、許してくださいますか？」

（可愛いなこのヤロウ。もう許すう）

『こいつ絶対浮気するな』

貴樹が許可を出す前に、フォドリックがほとんど強引に二人の間に割って入った。

「待った。シーリス、待ってくれんか」

「なぜ？」

「少し落ち着け。周りを見なさい。皆、ついていけないぞ」

そこでやっと注目されているのがわかったのか、彼女は恥ずかしそうに目を伏せた。

「タカキとやら。あちらで話をしよう。そんなに身構えるでない。話によれば、儂を助けてくれたそうじゃな。お礼も言いたい」

亡者の時とは対照的に、笑顔で貴樹と肩を組んでくる。だが有無を言わさぬ迫力を、彼は感じ取っていた。半ば引きずられるようにして、洞窟の奥へ向かう。

そこには、祭祀場の侍女も待っていた。

「何じや婆。お前が出る幕はないぞ」

「うるさいよ。あの子を見てきた身としては、気になるじゃないか。主人となる男がどんな奴か」

「まだ決まっておらんわ」

フオドリックと老婆に挟まれる形で、貴樹は壁に寄りかかった。

さて、とフオドリックが顔を向けてくる。もう既に、とつてつけたような笑顔は消えていた。

「まずは礼だな。どうやったのかは知らんが、儂はもう、人に戻れることはないと思っていた。最大限の感謝はしよう。が、それとシーリスのことは別問題だ。わかるな」

「はい」

「わが孫娘には、一通りの教育はしてきたつもりだ。だがどうしても、生き抜くための力を磨くことが中心になってしまった。そのせいで、なんだ、あいつは少々、常識が欠けている所がある。普通は、あんなに軽々と騎士の誓いを立ててはならんのだ。わかるな」

「はい」

(目が怖い)

「薄暮の国では、誓いは大変重要なものだ。一度忠誠を捧げれば、言い方は悪いが、その相手の奴隷になることと等しい。男女が婚姻を結ぶ際にも、使われたという記録もある」

「そ、それはかなり重いですね」

「だろう？ 家族として、簡単に認められるものではない…。お前のその格好も、こちらの常識では到底考えられないほどひどい。それでも、あえて訊こう。シーリスをその命を賭けてでも支え、守り通す覚悟があるのか」

「えっと、そこまでは」

「そこまで？」

フォドリックはさらに目を剥いて、顔を寄せてきた。

「あの素晴らしい子には、そこまでの価値がないと？ いくら恩人といえど、シーリスの侮辱は許さんぞ。さあ、はっきりと言葉に出せ」（え、これ、イエスしか選択肢ないんですか）

『はい、ざまあ』

追いつめられた所で、助け船がやってきた。

「やめてください！ タカキさんを困らせないで」

ろくな話にはならないと予感していたのか、シーリス本人が姿を現す。

「しかしじゃな。お前はもつと冷静になるべきだ。本当にこの男を好んでいるのなら、別の方法があるはず」

「なっ…」

整った目を大きく開いてから、フォドリックを睨んだ。

「何を、何を言ってるの？ 私はそんな邪な気持ちで彼を見ていません！ それは彼にも、私にとつても失礼なことですよ。お爺ちゃんが何を考えているかは知らないけど、私はただこの人を尊敬しているだけ」

「本当かねえ」

「お婆ちゃんまで…。からかうのはやめてください」

「そうですよ」

貴樹は自分の発言ができたことにほっとして、続けた。

「シーリスさんは確かにいい子だと思います。他にこれほどできた女性を、僕は知りません。でも、彼女に協力する上で何かを期待するよな思いは少しもありませんでした。信じてください」

嘘をさらつと吐けるのは、一種の才能である。

「君も。そこまでの思いを抱いてくれているのは嬉しい。でも、まだ僕達は会って間もないんだ。僕が、忠誠を誓われるほどできた人間かどうか自信はない。だから、これからも見ていてくれないか。僕のいろんな要素を理解した上で、それでも思いが変わらないなら、喜んで誓いを結ぼう」

『こいつ性懲りもなくよくほぎけるな』

シーリスはきらきらとした目で、貴樹に向かって頷いた。

「わかりました。そこまで言われるのなら、今は我慢します」

フォドリックが安心したように言う。

「思いとどまってくれて助かったの。少々長くなってしまった。戻ろうではないか」

「つまらないね。結局現状維持かい」

「これでいいんじゃない。黙つとれ」

「フン。じじいにもなって過保護とは嘆かわしいねえ」

侍女とフォドリックの会話を聞きながら、広場に向かった。

既に生徒達のほとんどはいなくなっており、宇部と丸戸を含めた数人の男子達がジークバルドのもとに集まっていた。アンリと珍しいことにホレイス、グンダ、そしてヨルシカが篝火の周りに並んでいる。「何かあったんですか」

緊張した空気を感じ取り、貴樹は尋ねた。

「ことが起こるとしたら、これからだな。不死街の掃討も終わったことだし、ロスリックへの足がかりを作る時が来たのだ。この場に集まっている面々で、高壁の入口へと向かう。灰達の中からも有志の戦力を加えた」

「戦いになるってことですか。ヨルシカさんも、行くんですね」

彼女の戦う姿は一度も見ることがない。そもそも、それだけの能力があるのかすらわからなかった。

「あら、私だってまだ現役ですよ。暗月の総長として、皆の前に出て戦うこともあります」

細腕でこぶを作ってみせるヨルシカに、宇部が見惚れていた。貴樹は愛想笑いをして、何気なく一歩下がる。

「ミレーヌ達からの情報によれば、厄介な門番がうろついている。イ
ルシールの戦士だ。集団でかからねば、苦戦は確実だろう」

(ボルドね。このタイミングでか)

ロスリックの高壁と不死街を訪れる順番は、本来の逆になってい
た。つまり、祭祀場から直接ロスリックの高壁に転送され、そこから
不死街に向かうというのがゲームでのルートだ。通るエリアの順番
が変わっているというのもまた、注意しておくべき変化だろう。

(自ら志願して、か。どうりで糞ガキ共の中でも、さらにゴミみたいな
奴らしか集まっていけないわけだ)

宇部を筆頭として、残っている男子達は高校でもあまり貴樹と絡み
のない生徒ばかりだった。つまり、それだけ素行が良くないというこ
とだ。

「で、もう出発するど?」

「間もなくだ。今度ばかりは、危険も大きい。悪いがタカキはここに
いてくれると助かる」

「もちろんです。健闘を願ってますよ」

『お、珍しく素直だな』

(アホ。なわけねえだろ)

全員が転送されるのを待ってから、少し時間を置く。周りに人がい
ないのを何度も確かめた。シリーズとフォドリックは、鍛錬のために
外に出ていったようだ。

(あ、こいつの存在忘れてた)

広場の上部には、五つの玉座が並んでいる。復活した薪の王達が座
るはずだった場所だ。埋まっている唯一の玉座には、ルドレスが常に
いた。視線が合うと、深い笑みを向けてくる。

「灰よ。私は何も見ていない。望むままにするといい」

(じゃ、お言葉に甘えて)

戻っていかこうとする火守女に話しかける。

「ひもりん、げ、元気?」

彼女は振り向くと、深々と頭を下げた。

「はい。務めはつつがなく果たさせていただきます」

「そうなんだ。えっと、あ、握手いいですか？ ははは」

『何だその中学生みたいな話し方』

ここ数日で火守女との距離が全く変わっていないのは、彼女との意識のすれ違いだけが原因ではなかった。貴樹は、少しも慣れていなかったのである。話しかけたのは良いが、あまりの緊張で続かず、その場から逃げてしまうのがほとんどだった。普段の傲慢さは一体どこに行ったのだろうか。気持ち悪いにもほどがある。

またか、と嫌な顔をすることもなく、火守女は遠慮がちに手を伸ばした。

「ありがとう、ありがとう！」

食いつくように火守女の手を握り、上下に振る。それだけで何かを成し遂げたような気分になった。彼女といるだけですぐ満足してしまうのも、関係性が発展しない要因の一つを担っている。

(はっ、違う違う。危うく本筋を見失う所だった)

「できれば、俺も不死街に転送して欲しいんだ。ジークさん達を追いかける」

「しかし、灰の方に危険が及ぶのは」

「頼むよ。今の俺は最強だからね。余裕だぜほんと」

「貴方達にお仕えしている身として、その意志は尊重します。ですが、どうかお気をつけて」

「う、うん」

『おえ、きつも。なに照れてんねん』

(うるちやい)

前回と同じく、小屋の中に貴樹は現れた。すぐさま外に出て、遠くにジークバルド達の集団を認める。

(へっへ。生ボルドを拜めるチャンスだ。逃すわけにはいかねえ)

『その好奇心が命取りにならないと良いけどな』

(言ってる。今の俺は無敵だろうが)

『まあな。それじゃあ、解放するぜ』

うのか、興味があつた。未来のためにも、戦力の把握は重要である。味方になるしろ、敵になるにしろ。

中には、予想通りボルドがいた。もはやほとんど獣へと意識が変わっているその甲冑姿からは、冷気が漂っている。なぜロスリックと敵対しているはずのイルシールの戦士がここで侵入者を狩っているのか。その真意はわからないが、既にボルドが正気を保っていないことは明白だった。

そこまでは、よかつたのだ。

押し入ろうとしていたグンダが、歩みを止めた。続くジークバルドも、そこで初めて、大きな驚きを顔に表した。

ボルドの上に、得体の知れない膿が乗っていた。それは彼の体の中に入り込んでいるようで、不気味に蠢いていた。

その膿の中心に人のようなものがある。透き通るような肌を持ち、おそらく美貌を誇るであろう顔は、金の太陽を模した兜で隠れていた。

(なんで、こいつが)

本来ならば終盤のエリア、アノール・ロンドで戦うことになる敵。人食に手を染めたかつての聖職者、そして薪の王。

入ってきたジークバルド達を認めると、妖しく唇を吊り上げた。

「おや、いい顔ぶれが揃っているねえ。貴重な時間になりそうだ」
「エルドリッチ」

真つ先に声を上げたのは、アンリだった。その声にはつきりと憎悪を込め、走り出そうとする所を、ホレイスに止められる。

「人食らいの怪物め。生きて帰れると思うな」

「アンリい。久方ぶりだ。ホレイスも、元気そうだなにより」
「…ウウ」

ホレイスも、戦斧を振り上げ、相手を威嚇する。

「いかん。今すぐ灰だけでも不死街に退却させなければ。こんな事態は想定していなかった」

ジークバルドが下がろうとするその横を、宇部達が通り過ぎた。
「な」

「は、なにびびってんだよ。こいつは、そんなたいしたボスでもねえ。丸戸も初見で勝ったんだよなあ」

「そ、そうだ。特に威力の大きい攻撃もないし、弓矢さえ気をつけてれば問題ない」

「それに、俺達は今不死身だからな」

ボルドの振るったメイスを、大きく飛びあがって回避する。宇部は身体能力だけで言えば、この世界の戦士に匹敵するものを持っている。その姿に触発され、他の男子生徒達も続いていく。

「やめろ。戻りなさい！」

「俺達が薪をとってきてやるよ」

ボルドの体に組みつき、宇部はエルドリッチのもとまで登ろうとする。ジークバルドの制止も聞いていない。そして案の定、横から飛んできた炎に焼かれた。

「ぐあああああつー！」

じたばたともがき苦しみ、地面に落ちた所をボルドに踏まれる。全身が潰れた醜い姿で、彼は絶命する。いつ間にか現れていた法衣を着た男に、他の男子達も同時に呪術でやられていた。

「もう死んじやったよ」

「エルドリッチ様に近付く権利すらない、軟弱な者達ですね。これが例の灰だというのなら、何と期待外れなことか。不死身だけが取り柄の存在です」

全員の死体が消えた時、グンダが一番前に立った。

「戦うしかあるまい。エルドリッチに、主教のマクダネルがいるとあつては逃げるのも困難だろう。灰達を守れなかった、我輩の責任も果たさねばなるまい」

「同感です」

ヨルシカが、ソウルの光球を同時に十個出して、自らの周りに漂わせる。決然とした表情でエルドリッチに向き合った。

「人食いよ。今こそ、わが兄の仇を討たせてもらいます」

「可愛いヨルシカ。グウィンドリンの体を、傷つけるのかい？」

「兄様の名を、口にするのはやめなさい！」

戦いが始まる様子を、門の陰に隠れて、貴樹は見ていた。

『どうすんだ』

(嫌な予感的中した。祭祀場の奴らが結束してるんだ。敵側も共闘しない理由はない)

一つ二つの例を除いて、基本的にボスは一対一で戦う。それでもなお苦戦を強いられるゲームバランスだったので、今の状況は非常に危険だと言えた。

(とにかく、様子見だ。ボルドだけなら入っていったんだが。ある程度相手の情報がわかるまで、動くわけにはいかない)

『慎重なのは良い事だ』

(自分の身が何よりも大事なんでね。このまま隠れていよう)

マクダネルの周りに、新たに聖職者の集団が現れる。深みの聖者達だ。もとはエルドリッチと敵対する関係にあつたらしいが、何らかの洗脳が施されたのだろう。ただ命令に従う存在になっている。

彼らは寄り集まって、杖を上に掲げ、黒い靄を形作り始めた。呪死の結界である。

そうはさせないと、ヨルシカが大量のソウルの矢を打ちだした。一本一本が彼らの急所に当たり、その数を減らしていく。が、彼らはマクダネルの発する渦に飲み込まれると、再び這い出してきた。彼女は眉一つ動かさずに魔術を維持し続け、皆の命を守っている。

グンダとジークバルドは、ボルドに対していた。その正面に立つことはせず、常に動きまわって、鈍重な攻撃をかわしている。

アンリは、ホレイスと共にマクダネルの背後を取っていた。

「よくも、エルドリッチ様の面前に出て来れたものですね。裏切り者と、ただの贄が」

「言葉は必要ないでしょう、マクダネル。貴様の行いは到底許されるべきものではない」

「自分の物差しで正義を語るとは。何たる傲慢さよ。…そんなものだから、お前は自分の命すら守れないのです」

マクダネルの姿がどろりと崩れ、地面に呑み込まれた。アンリが走り、そこに剣を突き立てるも、既に消えている。この時、彼女は冷静

でなかったのか。背後に現れた敵の姿にも反応できなかった。

「ぐっ…」

アンリが振り向く隙も与えず、マクダネルは杖先から光の輪を出し、彼女を拘束する。ホレイスが助けに行こうとするも、ボルドのメイスで横ざまに吹き飛ばされた。

「楽には殺しませんよ。貴方にも、エルドリツチ様の膿を埋め込んであげましょう。自身の内奥を貪られていく感覚を味わいなさい。…お似合いの最後だ」

その右手に、蠢く膿が握られる。彼女がもがけばもがくほど、光輪は締まっていく。

「ホレイス、ホレイス…」

「安心しなさい。あれはちゃんとエルドリツチ様に召し上がっていただきます。もう、味も随分落ちていてでしょうがね」

大きく、打ち鳴らすような足音が響いた。

横を見たマクダネルが捉えたのは、急接近してくるほぼ全裸の男だ。

どれほどの衝撃だったかは、察して余りある。

振り抜かれた拳が、見た目以上のパワーでマクダネルの頬に炸裂する。ほとんどの顔組織を破壊されて、建物奥の壁へ激突した。拘束が解かれ倒れそうになったアンリを、貴樹は掴んで支える。そして大きく息を吸うと、飛んでいったマクダネルに向かって叫んだ。

「アンリちゃんに何してんだああああああー！」

『あつ、もう自分で言ったこと破るんですね…』

マクダネルは、既に息絶えている。やがてその体が黒い膿で覆われると、跡形もなく消え去った。と、同時に、周りの聖者達の動きも一気に衰えた。呪いのこもった靄が次第に晴れていく。手を止めたヨルシカが、目を見開いて貴樹を見た。

（ゲームでは既に死んでる分際で、粹がつてんじゃねーぞ？）

拳についた返り血を、ごしごしと拭う。

『なあ、お前の計画とやらが、早くもおじやんになつてないか』

（あ？ 知るか。つまり敵は全部ぶち殺せばいいんだろ？）

『この人感情に流されすぎなんですから』

側まで這ってきていた聖者の残党の頭を踏みつぶす。脳漿の足に絡みつく感触は、最悪の部類だ。それでも、彼には倫理的忌避感が薄い。敵対する者は、人間だととらえていないからだろう。

アンリが我に返ったように 落ちた剣を拾った。

「大丈夫？ あのハゲ頭に何かされてたけど」

「貴方は、確か」

「直接話すのは初めてですね。どうぞよろしく」

握手しようと思ったが、彼女の反応が遅いのを見て、やめた。

「その力は一体…」

「今は駄目です。後にしましょう」

貴樹はアンリの会話もそこそこに、倒れているホレイスを助けに行った。背に抱えると、その息遣いが聞こえる。生きてはいるが、意識はないようだ。

「こちらへ。彼を治すのなら、私に任せてください」

すでに周りの聖者達を全て処理していたヨルシカが、出口の扉付近で待っていた。下ろすと、すぐに奇跡を施し始める。

「訊きたいことがたくさんありますが、ありがたい戦力です。あちらの援護に加わってくれと助かります」

「はい」

動揺や疑問をすぐにしまっってしまったまえるのは、さすがと言うべきだ。戦場が停滞したのは一瞬だけで、アンリも既にボルドのもとに向かっていた。その横に、貴樹も加わる。

(まだ、まだ挽回はできる)

『とうとう?』

(俺の力の全部までは知られていないってことだ。これからは上手く手加減して、全力を悟られないようにしないと)

ボルドが吸い込むような動作をして、その口から冷気が吐き出される。貴樹とアンリは立ち止まり、グンダとジークバルドも素早く避難した。全員がボルドと一定の距離を取った所で、エルドリッチが、興味深そうに貴樹を見てくる。

「見ない顔だね。なるほど、灰の中にも面白い者がいたものだ。マクダネルが殺されることなんて、本当に、久しぶりだよ」

「久しぶり?」

「…エルドリツチの守り手たちは、その汚らわしい力で不死を得ているのです。今頃マクダネルは敵の本拠地で再生されているでしょう。それに対抗する意味でも、灰達は重要な存在です」

（きりがねえな。祭祀場の人達も、よくこれまで持ちこたえられたものだ）

おそらく、一番大きいのは祭祀場にまでいたる道が限定されていることだろう。火守女の転送によってしか、あそこには行けない。最後の砦には敵が一切入って来れないことになる。

「うふふふ。今回はたくさんいいものが見れた。これで、懐かしいあの子とも再会できたら、言うことはないのにねえ」

その言葉に反応して、アンリが睨みつけた。

「よくもそんな口が叩ける。彼女の何もかもを奪っておいて…」（ん?）

エルドリツチの捧げられた子供たちの内、生き残りはごくわずかしかない。名前まで明かされているのはアンリとホレイスだけだ。もう一人が誰なのかは、どこにも触れられていない。好奇心を抑えきれずに、貴樹はアンリに尋ねた。

「彼女とは、誰のことですか?」

「貴方もよく知っている人です。祭祀場の火守女。彼女はエルドリツチの陣営に捕えられている間、酷い拷問をされたばかりか、エルドリツチに直接瞳を奪われました。ルドレス様の提案で火守女として保護されなかったら、何もできずに死んでいたでしょう。だから、あの化物は絶対に——」

今。

今、アンリは、何と言ったのだろう。

「は?」

アンリの言葉を遮り、貴樹は無意識に声を上げていた。

エルドリツチが、くすくすと笑う。

「そうかあ、それは可哀そうだ。あんな使命に囚われるくらいなら、ワタシのお腹の中に収まった方が幸せだろうねえ」

「この、」

アンリが出ていこうとするのを、貴樹は止めた。

ふっと表情を消して、エルドリッチを見上げる。

「ちよつと待って。え？ あなたが言っているのは、銀髪の、可愛い女性のことか？」

「おお、そうだそうだ。あの髪。一度でもいいから、口に入れてみたいと思っていた」

「死ねよお前」

目をつぶって高まる熱を感じた後、貴樹は走り出していた。他の生死すら耳に入らない。瞬時にボルドまでの距離を詰めた。

『タカキさん、さっきの言葉を思い出してみては』

（予定変更だ。全ての力をもって、このクソをぶっ殺す。ああああ、久しぶりにキレちまったよ。敵だこいつは。肉片の一つにいたるまで粉碎してやる）

自分が行動することで将来どんな影響が出るか、そんなことは全て消え去っていた。知らなかった火守女の過去の一部が明らかになったこともどうでもいい。彼女を傷つけ、障害者にした元凶が目の前にいる。それだけだった。

「二人で、突っ込んでくるのかな？」

エルドリッチが微笑み、ボルドの巨体が動いた。その体に相応の大きさである凍りついたメイスを、貴樹に振り下ろしてくる。

彼はそれを、ろくに見もせず殴りつけた。大方の予想とは違い、メイスの方が破壊される。さらにはその衝撃で、メイスを握っていたボルドの手が折れ曲がった。

獣じみた叫びを上げ、ボルドは彼に向かって突進する。その流れに完璧に合わせ、貴樹はボルドの太い首にしがみついた。歯を食いしばり、両腕に力を入れる。

（雑魚ボスふぜいが、邪魔してんじやねえええええええ！）

覆う装甲が割れ、皮が破れ、肉が裂けて、骨が折れていく。とどめ

とばかりに彼が全身を動かさず、ボルドの首をもぎ取った。漂っていた冷気が急速になくなっていく。

エルドリツチの方を見ると、既に少し離れた所へ移動していた。
(逃がすか)

接近しようとした所で、周りの異常に気がつく。

彼の周囲を囲うように、紫色の光球が大量に浮かんでいた。それらは全て、エルドリツチの指先から出ている。隙間はほとんどなく、逃れるのは不可能と言ってよかった。

貴樹にとつては、見たことのある技だ。

『どうする?』

(逃げるのはよくねえ。ホーミング性が強い技だからな。無理やり突破すんぞ)

エルドリツチが何かを掴むように手を握り合わせると、光は一斉に彼に向かって収束してきた。顔の前に両腕を交差し、真つすぐ通り抜ける。

光球は貴樹の皮膚に衝突し、そのまま消えた。表面上は何の痛みもない。だが、もしこれを普通の生身で受けていたら、無事では済まないことはわかっていた。

抜けた後も、当たっていない残りの光が追い掛けてくる。

(どれくらい耐久力が減った)

『残り九十三%つてところだ』

(十%区切りでクールしろ。二十%以下からは五%区切りで)

『はいよ』

エルドリツチが発現させた光の槍をかわし、次の詠唱がなされる前に、貴樹は膿の体を駆け上がった。右手でエルドリツチの首を掴み、地面に押し倒す。同時に、背後に迫っていた光球が消失した。

「アナタ、出鱈目だねえ。これは、かなり、予定が狂ってしまったよ」
貴樹はちらりと、状況についていけない他の人達を見て、顔をさらにエルドリツチへ近づけた。注意を払い、小声で言う。

「一つ、質問に答えろ」

「ふふふ」

エルドリツチの本体、不気味な膿が蠢き、貴樹に絡みついでくる。
「何してんだ」

「おや、平気なのか。まるで効いていない」
(ノミ)

『大丈夫だ。耐久力は全く減ってねえ』

無理やりエルドリツチを持ち上げ、再び地面に叩きつける。

「酷い酷い」

「余計なことはするな。いいか、火守女の目は、一体どこにある？」

「もう食べちゃった」

「そうか。死ね」

「おつとと、冗談だよお。そうだねえ、確か、深みの聖堂に保管されているはずだ。ロイスに守らせてあるから、まだ無事だろう」

「ロイス？ ああ、主教の一人か。そんな奴いたな」

「興味深いねえ。アナタのこと、もっと知りたくなってきたよ。どうだい、ちゃんと質問には答えたから、解放してくれると嬉しいなあ」
「お前に生きる価値はない。死ね」

頭に向かって、貴樹は本気の拳を振り下ろそうとする。エルドリツチは、火継ぎをしない世界を生きる上で、極めて重要な情報を握っている可能性が高い。ちゃんとアノールロンドで出会っていたら、戦う前に話し合うことを選んだかもしれない。だが、火守女を害した者を見逃すほど、我慢できる状態でもなかった。

「待ちなさい」

いつの間にか、ヨルシカが側にまで来ていた。

「それは、僕に言ってるんですか」

「これは大事な薪でもあります。体を深く損傷させてしまうと、上手く機能しなくなるかもしれません。だから、こうするといいでしよう」

ソウルの太矢を生み出し、エルドリツチの胸元に突き刺した。少しだけ体を震わせた後、膿も綺麗な体の部分も凍りついたように動かなくなつた。

「死んだんですか？」

「ええ。これを祭祀場にまで運んで、薪として捧げます。：貴方には深く感謝いたします。私の兄も、うかばれることでしょう。ですが、もう一度だけ、兄の声を聞きたかった」

色の失ったエルドリツチの顔を愛おしそうに撫でる。その直後には、踵を返して他の負傷している者達の治療に向かって行った。

(ふう、少し落ち着いた)

『呆気なかったな。まさか薪の王の一人を、こんなにも早く倒せるとは』

(……)

『どうした?』

(こいつ、鎌もグウインドリンの弓も出してこなかった。初めから、本気でやるつもりがなかったみたいだ)

『偵察だったんじゃないか。でも、お前の存在が全部ぶっ壊したみたいだけど』

(事前に、俺達がここに来るのを知っていたのか)

『わからんな。ロスリックへ入る道はここしかないようだし、いくらでも予想できたはずだ』

(それもそうか)

どすどすと大きな足音がした。振り返ると、グンダとアンリが近づいてくる所だった。

「フム。これを持って帰るとなると、相当の数のデーモンが必要になるな。しかし、タカキよ。こうまで巧妙に力を隠されると、我輩まで騙されそうになったぞ。また、手合わせできる日が待ち遠しいな」

「あはは。そうですね」

「本当に、平気なんですね」

アンリの方に向き直る。彼女はエルドリツチの亡骸を複雑そうに眺めていた。

「この化物は、私の、私達の仇。とどめを刺したのはヨルシカ様ですが、ほとんど貴方のおかげと言っていいはずです。ありがとうございます。ました」

「本当は君自身で手を下したかったんじゃないか?」

「確かに。それが私とホレイスの使命でした。それでも、ついに果たしたという感慨は変わりません。それにまだ、主教達が残っています。ここで立ち止まるわけにはいきません」

「応援しています」

心からの思いで言うと、アンリは顔を見つめてきた。

「何か？」

「いえ、正直言うと、貴方の印象は最初あまり良くなかったです。ユリアさんやカルラさんから、警戒するように何度も言われてましたから」

(とんだ風評被害だ)

『事実だけどな』

「フフ、そんな顔しないでください。おそらく、その格好で誤解されてしまったんでしょうね。貴方自身はとても紳士的な方だと思います(そんなこと言うと、抱きしめちゃうぞ)

『こいつ浮気する気ですよ火守女さーん』

吹き抜けの建物から出ると、既に白いデーモン達が待っていた。エルドリツチの体は、ヨルシカがソウルの杭を四肢に打ちこんで、そのまま宙に浮遊させている。その様子を認識して、さらにデーモン達が集結し始める。

「それにしても、よくタカキはここまでこれたものだな」

「旗が落ちていたので、何とかなりました」

「ジーク。貴方が持つていく手筈ではありませんでしたか？」

ヨルシカに訊かれたジークバルドは、悪気もなく笑っている。

「ウム。かさばるものだから、ついな」

「はあ…。拾ったのが味方だったからよかったですよ。気を付けてください」

「努力しよう」

特にその後何かが起こるわけでもなく、祭祀場にまで戻ることができた。

篝火の周りで宇部達が座りこんでいる。他の生徒達はまだそれぞれの修練に励んでいるらしい。今の所、彼らに脅威を感じることはな

い。固有能力がなんなのかは気になる所だが、宇部達の醜態を見るに気にするまでもないことのようにだった。ただ、この世界観を台無しにする要素ではあるので、その存在を認めるわけにはいかない。

「なんで、お前が…」

宇部が貴樹を見つけて、立ち上がる。言葉づかいを注意をしようと思った時、グンダが先に歩み寄っていた。

「な、なんだよ」

「無闇な先行は、己の命を縮めるだけだぞ。次からはもつと考えろ」

「は、お前らと違って、俺は不死身なんだ。そんな心配いらねえよ」

「そんなこと、言わないでください」

ヨルシカが宇部の手を握る。彼女からの視線に囚われた彼は、二の句がつけなくなっていた。

「貴方達も、大事な戦士の一員です。命を軽く扱うことは許されません。私からもお願いします。もう二度と、あのような無茶はしないと」

「あ、ああ。わかったよ。だから、少し離れろ」

「フッフ、約束ですよ」

彼女の輝くような笑顔に、さすがの宇部も黙って頷くしかなかった。

横で展開されている状況に少しも関心を見せず、貴樹は辺りを見回していた。

「タカキさん。よかった。急に姿を消したから、心配しました」

少し息を切らして、シーリスが階段から下りてくる。彼女は貴樹をぼうつと見た後、浮かんでいるエルドリツチに視線を移した。啞然としたように息を飲む。

「これは、あの人食らいですか」

「それより、火守女さんがどこにいるか知らない？ いつも広場にいるはずなのに」

彼女はすぐに答えず、言いにくそうに目を泳がせた。

「皆さんが戻って来られるように転送の準備をしていた所までは今までどおりでした。でも、

それから急に苦しそうにうずくまって。私が部屋にまで運びました」

(何だと)

「…すぐに、その部屋まで案内してくれないか」

「はい、構いませんが」

エルドリツチの話が頭をよぎる。何だか無性に、火守女の姿を確かめたい気分だった。話したいことも、たくさんある。訊きたいことも。

「もうそんな時期ですか」

ヨルシカの漏らした言葉が、やけに耳に残った。

火守女の個室は、アンドレイの鍛冶場から左に降りた、あまり光の届かない洞窟の奥にあった。ちなみにアンドレイというのはなかなか重要な存在で、武器の強化や変性などをしてくれる人物だ。貴樹にグンダの斧槍を壊した件について文句を言いたがっている様子だったが、相手をしている余裕はない。

古びた扉の前に立つと、その隙間からかすかに荒い呼吸音が聞こえてきた。躊躇うこともなく、部屋の中に押し入った。

火守女は、薄い敷布の上でもがいている。元々白い顔がさらに色を失い、頬には汗の玉粒がいくつも垂れていた。しきりに包帯の巻かれている手を抑えて、襲ってくる痛みを耐えている様子だった。

さらに一歩足を踏み込んだ所で、誰かが腕を掴んできた。

ヨルシカは、静かに首を振る。

「彼女の苦しみは、彼女だけのものです。痛みによって、自らに課せられた責務の重みを改めて実感する。火守女となった時点で、覚悟していた事でしょう。他者の安易な同情など、一番求めていないはずですよ」

当たり前前のことにすら気付かないのか。怒鳴りたい気持ちを抑制する。

(綺麗な言葉を並べて、まるで自分のことのように言うよな。この女は)

「苦しんでいるなら、誰かが側にいてやらないといけないだろ」

そんなことを早口で言つて、ヨルシカの手を払う。彼女は溜息を吐いて、その場から去つていった。

足音で火守女を刺激しないように、ゆっくりと近づき、膝をつく。すぐ側に手布があつたので、慎重に彼女の汗をぬぐつた。

(生きているんだな)

『急にどうした』

(何というか、ただゲームの中にいた人物が、そのまま実際に触れられる存在になっただけじゃない。その人にも、その世界での生活や、過去がちゃんと存在してるんだ。俺は今までそれを強く意識してこなかったかもしれない。まだ、自覚が薄かったみたいだ)

貴樹の行動に対して、火守女は明確な反応を示さなかった。体を丸めて、震えを必死にこらえている様子は、どこか、慣れている気配もある。

彼女が過去にどれほど苦しい目に遭つたのか、想像するのもおこがましい。だが、苦しみを受け入れ、納得しようとしているのは、どうしようもなくやるせない。人食らいに囚われて、そこから救い出されても、火守女の使命に囚われている。何よりも他の誰でもない彼女にそれを強いる状況に、怒りが湧いた。

そう、貴樹は怒っている。珍しく、真面目に感情が乱されているのだ。

ほつれた銀髪を、申し訳ないと思いつつも手櫛で整え、頭を優しく撫でる。不思議と緊張はなかった。彼自身でもつかめない、保護欲にも似た感情だけがあつた。

背中もさすつてやると、不規則な呼吸が落ち着いてくる。

ほら、やっぱり。誰かがいた方が彼女も楽なのだ。

黒衣の上からでも感じられる、浮いた背骨の感触。わけもなく抱きしめそうになったが、すんでのところで我慢した。どうも、エルドリッチ戦の時から冷静さを保てていない自分がいる。

何となしに火守女の顔を眺めていると、自然に言葉が口をついて出た。

「ひもりんは、目が見えるようになりたい？」

沈黙が答えだった。

声が聞こえないほど、意識が混濁しているのか。それとも。

貴樹にとつては、それで十分だ。

(深みの聖堂に向かうぞ。瞳を取り戻す)

『わかった。それと、大事な話がある。後で聞いてくれ』

彼はその後、ずっと火守女の側を離れなかった。

丸一日経って、火守女が回復するのと同時に、全員が広場に集められた。

生徒達は、玉座の一つに安置されたエルドリッチの死体を気味悪そうに見ている。

「火継ぎへの第一歩です。これより、薪をくべる儀式を行います」

灰の全員に加え、ほとんど人前にでてこなかったオーベックもいた。彼は自身に与えられた部屋で、魔術等の研究をしているらしい。誰とも話そうとせず、面倒そうに篝火の方を眺めていた。

ミレーヌ以外の監視者、そしてシフィオールスもいる。

貴樹の記憶しているものとは違い、五つの薪をいっぺんに処理することはないらしい。最後のボスがいる場所へと向かう前の印象深いイベントだったために、少し残念な気分だった。

「まずは火守女が、遺骸から薪を取り出します。それを灰達が受け止めて、中央の篝火へと注ぐのです」

ヨルシカが言うと、火守女が動いた。その途中、偶然視線が合ったが、貴樹は気恥ずかしさが込み上げてきて、逸らしてしまった。相手の意識があるとなると、途端に緊張してしまう。大胆なのか、臆病なのかよくわからない男だ。

火守女はエルドリッチに近付くと、少しの間静止した後、手をかざした。何かを唱えている。貴樹ははらはらしながら見ていたが、彼女がエルドリッチに対してはつきりとした反応を示すことはない。

だが、その声は戸惑いを含んだように小さくなっていった。

長い間の開きに、生徒達もぎわつき始める。

「何か、あつたのですか」

ヨルシカが尋ねると、火守女は自分の言葉に自信が持てないかのよう
に、途切れ途切れに言った。

「薪がありません。隅々まで探りましたが、どこにも存在していません」

それは、誰もが予想していない事態だった。

言葉を失くした数瞬の後、ヨルシカが言う。

「確かなのですか」

「はい…。器の中に、ソウルが充満しているのはわかります。しかし、
肝心の王の薪は感じ取れません」

「貴方の腕を疑うわけではないのですが、困りましたね」

ヨルシカはルドレスと二言三言言葉を交わした。それから、皆の方に
顔を向けてくる。

「儀式は中止です。灰の皆さん、わざわざ呼び立てをした上で申し訳
ありませんが、普段の鍛錬に戻ってください」

そして、貴樹を手招きしてきた。

(全く、退屈させてくれねえな)

『これは、どういうことなんだ。エルドリツチは薪の王じゃなかつ
たってことか』

(そこまではわからない。普通なら、有り得ないはずなんだ。これ
じゃあ、まるっきり状況が変わってくる)

『まさか、偽物ってことは』

(どうだろうな。表面は複製できても、中身のソウルまで再現できる
とは思えない。だが、これが本物のエルドリツチとするとだ。当然の
疑問が出てくる)

火継ぎに必要な、薪の資格をもつ者は五人。

その中の一人、エルドリツチに薪がないとすると。

ヨルシカの方に向かいながら、貴樹はその意味の大きさに身震いす
る思いだった。

では、その薪は一体どこにあるのか、正確に言えば、一体誰に渡つ
てしまったのか。

12. イリーナ

「イリーナという女性は、この祭祀場の中で最も奇跡に長けていると言ってもいい人間です。ですが今は、情緒が不安定になり、不死街の奥で閉じこもっています。いよいよ、彼女の力が必要となる時が近づいてきました。貴方には、彼女を連れ戻しに行って欲しいのです」

ヨルシカの話は、単純な頼みごとだった。

イリーナ。もちろん、知っている名だ。

「僕が、ですか」

「力があるとわかった以上、相応の働きはしてもらいますよ」

「その人とはまだ一度も会った事のない僕が、役に立てるかどうか」

「それが、良い方向に作用することもあるのです。貴方は、火守女に対して同情的になっていく所が多々見られます。イリーナも火守女です。助けたいという気持ちが真なら、彼女もきつと救われることでしょう」

火守女は、誰か一個人を指した言葉ではない。この世界の過去にも、そういった存在は何人もいた。イリーナは、自分から望んで火守女になった一例である。

(ひもりんへの気持ちは同情じゃねえけどな)

『じゃあなんだよ』

(愛情です)

『はい』

(それにしても、奇跡か)

貴樹は、思った事をそのまま尋ねた。

「一つ訊きたいんですけど、人の感覚機能を完全に取り戻すことは、奇跡の回復で可能ですか」

ヨルシカはなぜそんな質問をするのか不思議そうに、目を合わせてきた。

「できないことはないですが、少なくとも私では不可能ですね。それこそ、イリーナほど熟達した使い手でなければ、逆に悪化させてしまうことにもつながります」

(決まりだな)

貴樹は了承し、不死街へと向かった。

案内ということ、アンリがついてきた。

「魔力防護の施された鎧を着ていないのに、エルドリツチの魔術に対抗できたのは、不思議としか言いようがありませんね」

彼女は貴樹の力がよほど信じられなかったのか、移動している最中にも質問をしてきた。

「原理は、僕にもよくわからないんです。そういうものだとだけ、理解しています」

「貴方は、灰の中でもさらに異質ですね。貴方さえいれば、火継ぎの使命もそう遠からずに果たされるかもしれません」

「大げさですよ」

アンリは貴樹の方を一瞥した後、しばらくの間黙っていた。やがて、息を深く吐くと、苦笑の混じった調子で言った。

「駄目ですね。どうも、上手く訊き出す言葉が見つかりません。私は、こういうことは苦手です」

「それは、どういう？」

「ヨルシカ様から、貴方の力について、探るように言われていました。強すぎる能力は、扱いにも注意を払うべきだと。貴方には失礼なことですが」

「無理もないですよ、自分でも怖いくらいですから」

(ち、もう警戒されてるか。当然だわな。本当は、火継ぎを邪魔するその時まで、ばれないのが一番よかったんだが)

『というか、やっぱり生徒を裏切るだけじゃないよな。お前がしようとしていることは、火継ぎ肯定派の奴ら全員を敵に回すことだ』

(そこは、これからどうにかすんだよ。思うに、全員が火継ぎを望んでいるかと言えば、そうでもない。上手く懐柔して、徐々に味方を増やしていくんだ。何千年も続いている古びた形式に、皆が賛同しているはずがない。システムは常に更新されるべきだ)

『それと、火守女の幸せは両立するのか？ 彼女は、使命を第一に考え

てるんだろ』

(そこも、何とかするんだよお！)

『この人色々ガバガバ…』

人気のない不死街を進み、深く切り立った川の上にかかる橋を渡っていく。ここはシーリスも倒していた下男亡者が何体も配置されていた場所だったが、既に掃討が終わっていたので、スムーズに進むことができた。

その先は、高い塔がそびえている。中にあるリフトで下に向かえば、次のエリアに着くことになる。今回用があるのは、塔の手前にあるさびれた家屋だった。

悪魔にも、獣にも見える兜をした男が、その家の前の大岩に座っている。

「懲りずにまたやってきたか。あの女がよほど貴重のようだな」

「イーゴン。彼女を閉じ込めて、良いことなど一つもありません。それに貴方自身も、必要な戦力です。戻ることはできませんか」

アンの頼みに、イーゴンは鼻で笑った。

「あいつ次第だな。その鉄格子から覗いてみるといい。相も変わらず、情けなく苦しんでいる。不本意な事だが、自害しないように見張っていないければならない」

「なら、直接手を差し伸べればいいでしょう」

「これはあいつが選んだことだろう？ 火守女になることがどういうことか、理解したつもりになっていたのが悪い」

(イーゴンとイリーナ、か)

二人は、同じ国の出身である。カリム。太陽を信仰している国。この二人の結末に、やりきれない思いを抱いた経験がある。安易に割り込むべきではないのかもしれないが、目的のために、貴樹は行動した。「その中に、イリーナさんがいるんですね」

今気付いたとでも言いたげに、わざとらしくイーゴンは彼の方を向いた。

「お前は、誰だ。暗月はいつからこんな変質者を入れるようになったんだ？」

「彼は灰の一人です。それに、まだ所属は決まっています」

「ほう。なるほど、新参者をよこしたのか。それで、あいつが元に戻るとは思えないがな」

貴樹は鉄の扉を押した。予想通り、鍵がかかっている。

「無駄だぞ。あの女が閉めたんだ。まずはそこから声を張り上げて、入れてもらうように頼む所から始めないとな」

イーゴンの嘲るような声を無視し、拳を握って振りかぶった。

(ノミ)

『どうぞぞ』

ただの真つすぐな殴打で、補強された扉を破壊した。イーゴンが武器を取って立ちあがったが、その時には地下へと続いている階段を下り始めていた。

『無理矢理だな』

(本来は別のルートがあったんだが、ま、別にどうだっていいよね)

地下は、石造りの床のあちこちにカビが生え、光もほとんどない牢獄同然の場所だった。その奥の壁に寄りかかるように、一人の女性が座っていた。扉の破壊された音で身を起こしたものの、今にも崩れ落ちてしまいそうだ。

貴樹の立っている方向に顔を向けてはいるが、瞳の焦点はほとんど合っていないかった。

「誰、ですか…?」

イーゴンではないと、判断はついていらしい。薄汚れた修道衣を身にまとい、フードを目深にかぶっている様子は、敬虔深い信徒そのものだった。

「貴方を助けるように言われて来ました。イリーナさん、祭祀場に戻りましょう」

彼女はそれを聞くと苦しそうに口を歪め、頭を床に擦れるほど下げた。

「申し訳、ありません。責務を果たすべきなのはわかっています。でも、虫が。たくさんの虫が暗闇から這い出てくるのです。私を苛もうとしてくるのです。名も知れぬ方、どうか私に触れてくれませんか。

きつと今よりはましになるかと思えます」

彼は、そこで迷うような愚行は犯さなかった。イリーナに近付き、脇の下に手を入れて抱え上げる。不安になるほどの軽さだった。

「首に、つかまってくください。そうすると安定します」

イリーナは、可哀そうなくらい動揺している。

「その、ここままでしてもらうのは。ただ触れてくれればそれで」
「どうですか。落ち着きました?」

背中を慎重にさすっていると、彼女はおずおずと首に手を回してきた。そして、少し驚いたように言ってくる。

「服を、着ていませんね」

「話すと長いんですが。事情があつて」

「お気になさらず。：ああ、不思議です。あれだけいた虫が消えていきました。貴方の側にいると、なぜかとても安らいだ気持ちになれます」

「じゃあ、とりあえずこのまま祭祀場に運んでもいいですか?」

「はい、できれば…」

彼女の容態が落ち着いたのを知って、ほっとする思いだった。

『いつもと違うな。ここで下半身に直結するのがお前だろ』

（うーん。これがひもりんだったら、そうなるんだけど。俺の中で、真にこの人を助けるべき奴が決まっているというか。何か変な罪悪感があるんだよ）

『それって』

階段を上がり、外に出る。アンリがすぐに駆け寄ってきた。

「落ち着いたみたいですよ」

「よかった。誰が治そうとしてもできなかつたのに。やはり、貴方はどこか私達とは違う存在なんですね」

イリーナが、手を探るように伸ばしてアンリの肩に触れる。

「お久しぶりです。ご迷惑をかけてしまつて」

「貴方が元気な姿で帰ってくるのを、皆が望んでいます」

「ふん。ようやく俺も祭祀場に戻れるというわけだな」

岩から、イーゴンが立ち上がる。貴樹達の方を見もせず、歩いて

行こうとした。

「待つてください」

イリーナの声で、億劫そうに立ち止まった。

「貴方にも、大きな負担を強いてしまいました。本当に、申し訳ありません」

「全くだな。自覚しているのなら、もう二度と惨めな姿を晒さないことだ。義務とはいえ、俺にだって我慢の限界があるからな」

「…はい。感謝いたします、騎士様」

「ち…」

小さく舌打ちをしてから、今度は貴樹に向かって言ってくる。

「灰。その女に構うのはやめておけ。どれだけ無駄な時間になるか、いずれわかるようになる。共にいて、何の感慨も抱かないつまらない女だ。ククク…」

「その言葉で、本当にいいんですね？」

「…何だと？」

貴樹は、視線をそらさずにイーゴンを見た。

「それは、貴方の本心かと訊いているんです」

イーゴンは不快そうに吐き捨てる。

「口には気をつける。貴様に、俺を押し量る資格はない。何もかもを知っているような態度をとるのはやめろ。気に障る」

「なら、イリーナさんは僕が庇護してもいいんですね？」

「勝手にしろ。俺に許可を求める意味があるのか？ これ以上、くだらない会話には付き合わない。精々、その吐き気がするような偽善で己の心を満たすといい」

去っていくイーゴンの姿を、イリーナがじっと見つめている。静かで、何の感情の揺れもない。貴樹が眺めているのに気がつく、どこか澄んだ表情も消えた。控え目な笑みを浮かべる。

「私達も、戻りましょう」

祭祀場に着くと、イリーナはゆっくりと貴樹の腕から降りた。

「歩けますっ？」

「そこまで心配していただかなくてもいいんですよ。見えなくたって、この構造は手に取るようにわかります。お優しい方、貴方はまるで、英雄のようですね」

「僕が？」

「失礼ながら、少しだけ、移動中に貴方の器を見せてもらいました。きつと、大業を成されるに違いないでしょう。それだけの可能性があるように思えます」

(ひもりんと言っていることが違うな)

『今は残り火状態だからだろ。力が充満している』

これで、火守女に視覚を取り戻させるための手段は得た。あとは、瞳を取りに行くだけだ。もちろん、次の行動はすぐに起こすつもりだ。彼女の幸せ以上に優先すべきことなどない。

「アンリさん、僕は不死街に戻ります。少し、用事があるので。生徒達が僕を探しているようだったら、教えてあげてください」

「はい？ いえ、しかし」

篝火に手をかざそうとすると、音もなくヨルシカが横にいた。

「お待ちください。残念ながら、許可を出すことはできません。今は、攻勢に出るための大切な準備期間。いくら実力があるとはいえど、単独行動は控えてくれませんか」

彼女は貴樹を案ずるような口調で言う。が、実際はどうかわからない。単に彼が勝手な行動をする状況を許すわけにもいかないのだろう。敵陣営に寝返る、とまではいかないにしても、万が一だ。どんな強者でも、一人では不覚を取る可能性もある。

だが、貴樹には多少の危険を冒してでも向かう理由が既に出来上がっていた。

「それでも、行かなくてはいけないんです」

「その意志は汲んであげたいのですが。火守女に転送の指示は出せません。納得していただけませんか」

貴樹はそつと篝火に触れる。わずかながら、その火が揺らめいた。

「いえ。そもそも、貴方達に伺いを立てる必要はないんですよ。もしかしたら長い時間がかかってしまうと思いますが、まあ、探さないで

ください」

「何を——」

ヨルシカが尋ねかける。その直後、彼の姿は消え去った。

不死街に出現した貴樹は、成功を知ってひとまず安心した。追手が来るかもしれないので、すぐに移動を開始する。

(本当にできたな)

『だから言っただろ』

(ボルドのカスみたいなのソウルで、よくこんな力を得られたもんだ)

ボスクラスのソウルを吸収することで、あらたな能力を扱えるようになる。ノミによれば、ボルドを倒した瞬間、そのような内容が急に事実として認識できるようになったらしい。

おかげで、火守女なしでも篝火間を自由に移動できるようになった。これからこの世界を踏破していく上で、かなり重宝するだろう。

(つまり、他のボスを倒していく楽しみも増えたわけだ)

『どんな力を得られるかは不明だがな。エルドリツチのソウルを逃がしたのはもったいなかった』

(ヨルシカがとどめをさしたからなあ。あんな奴のソウルなんて欲しくもないけど)

彼の目指す深みの聖堂は、まだ先だ。おそらくそこで待ちかまえているであろうボスの存在も気にはせずに、幾分楽観的な気分で不死街を走り抜けていった。



身の丈に迫るほどの槍を、彼は軽々と振り回していた。少しも先がぶれることなく、体と水平になったところで止め、再び頭上まで振り上げる。一連の動作は、機械的に行われているように見えたが、ひとつの作品のように、精巧さの中で惹きつけてくる何かがあった。

「また、見ておられるのですか」

側に仕えていた侍女が、同じく彼を見つめる。その瞳には呆れるような光が宿っていた。

「よく飽きないものだわ」

こぼれた言葉に、侍女も頷く。

「ああいった人達の行動を、理解する必要はありません。己を磨き上げることしか考えられないのです。あまり見ていると、相手も迷惑でしよう」

彼女は、なぜあんなものに興味を示すのかという思いも込めて、言ってくる。そうして初めて、敷布の上で組んでいた足が痺れているのに気がついた。どれほどの間、あの光景に魅入ってしまったのだろう。

「そうね。ただ、目に入ってしまうだけ。これ以上眺めていても意味はない」

「あちらの椅子にお座りください。まだ縫物が残っています」

「もちろん、貴方も手伝ってくれるのよね？」

「言わせていただくと、奥様の腕には未だ不安がありますから」

軽い足取りで歩いていく侍女に続こうとした所で、ふと、彼の方を振り返った。

槍を振る手を止めている。少しの疲労の色もない顔が動いて、目が合った。

すぐに視線をそらす。何だか悪いことをしてしまったようで 胸の内が締められているような感覚に陥った。

いや、違う。これは、本当に、自分の胸だろうか。自分の抱いた感情なのだろうか。

「ちよつと、下田！ あぶな」

高原の声で、びくりと頭が動いた。いつの間にか閉じていた目を開けると、光球が迫ってきている。手で防ぐ間もなく、顔にまともに食らってしまった。衝撃が伝わり、のけぞってそのまま背中から倒れる。

「うわ、ねえ、大丈夫？」

下田は半身を起こすと、自らの顔を触った。それほど大きくもな

く、速度も抑えたものだったために、痛みは残らない。ただ、頭の芯が定まらないような感覚は続いていた。

立ち上がった彼を確認して、高原は息を吐いた。

「鈍くさいにもほどがある。今の、反応できない速さだった？」

「ううん、ごめん。ぼんやりしてたみたい。とりあえずあの人に謝らないと」

「は？ 誰に」

「気が散ったと思うから、あれだけ頑張ってたみたい、だ、し…？」

自分の言っていることがわからなくなって、口が止まった。一体、誰のことだ？

「下田さあ、ちゃんと寝てんの？」

高原は、病人でも見るような顔になっている。

「それなりには」

「あんた最近ずっとそんな調子じゃん。目の方も、それ、隈できてるよ」

「ごめん…」

「責めてるわけじゃなくて。一応、ほら、同じグループとして、ね？」

「気をつける」

相手の加減した魔術を、同じく魔術で作り上げた盾で防御する。そんな単純なこともおろそかになるほど、彼には精神的疲労が溜まっていた。

母の手術日はとつくに過ぎている。結果がどうなったのか、心配で仕方がなかった。重大な局面で自分がそこにいられないもどかしさ。それが収まるどころが強くなってきた。

加えて、亡者の夢をよく見るようになった。不死街での掃討では、初めほとんど拒否反応が出ることはなかったのに、後になってから、あの萎びた体が四散する光景が何度もフラッシュバックするようになったのだ。おかげで眠れない日が続いている。

揺れる意識を何とか奮い立たせて、各々の専門の鍛錬は乗り切った。

自分の頬を叩いて、外にいる草野達を合流しに向かう。

「わっ」

「ひ」

いきなり背中を押されて、下田は情けない悲鳴を上げた。振り返ると、笑いをこらえている様子の芳野と久慈がいる。

「な、なにをするの」

「下田が、期待に込めてくれるのがいけないんだよ。良いリアクションだね」

「ていうか、途中ちとせにやられてたけど、大丈夫？ いじめるなんて最低な女だよな」

「私のせいじゃないし」

この三人の賑やかさで、幾分無理矢理ではあるが、目覚ましにはなった気がした。学校で彼女達と話したことはほとんどなかったのにも関わらず、こうして元気づけようとしてくれるのはありがたい。ただからかいたいだけかもしれないが。

さっきの光景は一体何だったんだろうか。

白昼夢にしては、やけにはつきりしていた。確かに言えるのは、あれは自分が経験したことではない。誰か、別の人の中に入り込んでいくような感覚だった。では、なぜ？ 自分がそんなものを見る理屈が、どこにあるのだというのだろうか。

うんうん考え込んでいると、前から歩いてきていた女性にぶつかってしまった。

「す、すいません」

慌てて手を差し伸べると、彼女は何かを探するような間をおいた後、ゆっくりと握ってきた。初めて見る人だ。教会でずっと祈りでも捧げていそうな格好で、何となく見ているだけでも落ち着く雰囲気がある。

「こちらこそ。よく前を確認していなかったものですから。あら……？」

ぐっと、女性は顔を近づけてきた。突然の行動にどぎまぎした下田は、やがて別の意味で気まぎさを覚えた。フードから出てきた彼女の目は下田をとらえてはおらず、わずかに白濁している。

彼の感情に気がついたかのように、彼女は薄く笑った。

「お見苦しいものを見せてしまいましたね」

「あの」

「火守女である以上、視覚を失うことは必然です。お気になさらず」

その言葉に、引つかかりを感じた。あの、銀髪の女性と同一人物とは思えない。火守女というのは固有の名前ではなく、役柄の意味合いを持っているということだろうか。

「貴方の器に、何かがよぎった気がしたのですが。思い違いましたか。灰の方々、初めてお目にかかります。奇跡使いの指導を任せられました。イリーナと申します」

どこかで聞いた名だった。確か、カルラが奇跡の専門者の不在について言っていたような気がする。目の前の女性がそうなのか。

「どうやら、貴方も奇跡を修めているようですね。至らない所もあるとは思いますが、よろしくお願いいたします」

下田のような奇跡に適性を持つ者も、今までは魔術を磨いていくしかなかった。しかし、彼女が来たということは、ようやく重要な治癒の力も鍛えることができるのだ。

「今から、鍛錬をつけてくれるんですか？」

「いいえ。これから、外に向かわれるのでしょうか？」

「じゃあ、明日から」

彼女は申し訳なきように首を振る。

「そもいかないのです。しばらく、貴方達は祭祀場に戻って来られないでしょうから」

どこか、気の毒そうな様子でそんなことを言った。

「それは、どういう意味で」

「これからわかると思います。健闘を祈りますよ」

一緒にいた高原達にも頭を下げ、イリーナは歩いていった。

高原が、首を傾げてその背中を見送っている。

「何があるんだろ」

外へ向かう途中、広場で異様な物をみた。

人なのか、そうでないのか定かではない見た目をしている。上半身は綺麗な人の姿をしているのに、下半身は気持ちの悪い黒々とした塊に飲まれていた。その姿を前に先に行っていた女子達も大勢眺めていた。

その中心にいたヨルシカの説明によれば、薪の王の一人であるらしい。下田はそれを聞いた時、少しだけ気が楽になるのを感じていた。つまり、目標の一つが既に片付いたことになるわけだ。あと三つか四つ薪を集めれば、使命とやらを果たし、現実に帰ることができる。自分の知らない所で、いつ間にか全て集まっていればいいなとひそかに願った。

外に出ると、既に男子達の集団が集められていた。その中で草野と国広を見つけ、近づいていく。

「なあ、見たか」

いきなり、草野が尋ねてくる。

「玉座にあるもののこと？」

「どうやら、ロスリックの城壁に向かった奴らが遭遇したらしい。宇部達がさも自分で倒したかのように話してたけど、どこまで本当のことやら」

「目的が達成されるなら、何でもいいよ」

「しかもそのことで、ジークがありえないことを言ってたんだよ」
「何？」

正直、ほとんど興味はなかったが、草野の楽しそうな様子につられて訊いた。

ジークバルドがいる所では先生と呼んでいる一方で、こうした会話では親しそうに呼んでいる。草野の距離を縮めようとする積極性が表れていて、悪いことではないのだ。しかし、下田はどこか気に入らなかつた。どうせ日本に帰るのに、わざわざ仲良くする必要があるのであるだろうか。勝手に戦えと言ってきている人達なんかと。

「あれを倒す上で一番貢献したのが、タカセンらしいんだ」

「…戸水先生が？」

「ボッコボコにしたらしい」

失礼かもしれないが、どうにも信じがたい。仮にもこの世界で戦うための力を与えられた下田達とは違って、貴樹には何の能力も持ち合わせていない。柔道や空手の有段者だということは聞いたことがあるものの、それだけであるの化物をどうにかできるとは思えなかった。「おかしいね」

「ああ。あの人、たまに冗談言うからな。話半分に聞いておいた方が
良いだろ」

「なるほど。困った男だなそいつは」

ジークバルド本人が、草野の肩を叩いた。

「いやあ、本当に。彰浩、お前の発言には重みがねえ」

「え……」

すぐさまごまかした草野は、取り繕うようにジークバルドに顔を向けた。

「で、今日も模擬戦ですかね」

「いや。残念ながら貴公達の担当はもう私ではない。言うのを忘れていたが、定期的に指導者を変えた方がいいという結論になってな」

目に見えて、草野の表情が明るくなった。

「じゃあ、次は誰になるんすか。まさか、待望のアンリ」

静かな声が、二人の間に割って入った。

「さっさとしてくれるかしら。時間が惜しいわ」

下田達の前にやってきたのは、特徴的な兜で顔のよく見えない高身長
の女性、ミレーヌだった。

「げっ」

「何か？」

「い、いえいえ」

「ジーク。貴方の指示を待っている灰達もいるわ。行ってあげたら
？」

「おお、そうだな。では皆、達者でな」

ジークバルドが去っていくと、重い沈黙が流れた。ミレーヌは一人
一人をじろりと見つめた後、無造作に背中を向ける。

「ついてきなさい。不死街の外れにまで行くから、少し歩くことにな

る」

「あの、あたし達は何をするんでしょうか」

高原が丁寧尋ねたが、ミレーヌはにべもない。

「質問はしないで。到着するまで無駄な会話は禁止よ」

「はい、了解しました」

そのまま下がってきた彼女は、他の女子二人に小声で、こわ、と呟いていた。

「なあ、あれ、国広よりもでかくね」

「うん。多分あの人先生くらいはあるよ。凄いね、モデルみたいだ」

ミレーヌが振り向くと、草野と国広はおとなしく口を閉じた。

針のような人だ、と下田は直感的に思った。ジークバルドもあれでいて、前衛二人が一度もまともに勝たせてもらっていない。彼女も、自分達とは隔絶した技術を持っているのだろう。素人目で見ても、付け込める隙はどこにもなさそうだ。

祭祀場に戻り、火守女に転送させてもらって、不死街に着いた。

小屋から出た瞬間、下田は遠くの方で人が動いているような気がした。だが、もう一度見てみると、もうどこにもいない。錯覚だったのだろうか。

ミレーヌはすぐそばの橋から横にそれ、森林の方向へと歩いて行く。正直、下田は軽く走らないと追いつけない。それほど、彼女はすいすいと進んでいく。

感覚で、数キロほど歩いた頃。周りはずっかり緑に覆われ、うつそうと茂った植物たちが、澄んだ空気を作り上げていた。そこまできてようやく、どこか噛み合わないような違和感の正体に気がついた。動物の気配が、ほとんど感じられないのだ。小さな虫くらいはいてもよさそうなのに、動くものはない。

息の詰まる静寂の中、木々の間隔が不自然に広くなった場所に出た。その一帯だけ、草が踏み慣らされている。

「ただいま戻りました」

ミレーヌの雰囲気祥和だ。彼女の呼びかけと同時に、寝そべっていた大きな狼がのそりと動き出す。

「よくぞ来た。灰人よ。ここらは狼血の騎士が訓練のために使っている場所だ。このシフィオールス、心から歓迎しよう」

狼が近づいてくるのを見て、下田は後ずさっていた。何しろ四足で立っている状態でも、彼の背丈を優に超えている。害意はなくとも、迫力を感じるのには仕方のないことだった。

一方で、女子三人は興奮したように寄っていく。

「すげー、おっきい」

「あれだよあれ。ジブリみたい」

「すごいふさふさだよ」

芳野が前足を触った所で、ミレーヌが言った。

「やめなさい」

「いいのだ。親しみをもって接してくれるのは悪い気分ではない。それにミレーヌ、いいかげんその兜を取ったらどうだ。ここまできたらもういいだろう。無駄に人を怯えさせるな」

「はい。そうおっしゃるのなら」

周囲に広がって傘のようになっていく縁の部分に手を賭け、ミレーヌは兜を脱いだ。中でまとまっていた黄金色の髪が流れ出し、背に薄くかかる。あんぐりと口を開け、草野はその顔を眺めていた。

「お、お姉さん……」

その行動原理は全く持って理解できないが、彼は抱きつかんばかりの勢いで彼女に走り寄っていく。腕が彼女の肩に接する直前で、素早い蹴りが草野の脇腹を直撃した。彼の体は近くの木にぶつかり、そのまま地面にへたり込む。

「ミレーヌ、何をしている」

「この場合は、あちらの方が悪いでしょう。：貴方、今度同じことしたら手加減はしないから」

「ひひっ、これはこれでいいかも」

草野は、ぼうつと宙を見ていた。この状態は、前にインフルエンザで一週間学校の女子に会えなかった時にも見たことがある。一体、どれだけ欲求不満なのだろうか。高原達も、汚物を見るかのような視線を彼に向けていた。

美しさはそれだけで、ある種の壁を失くさせることもある。兜をしていた時ほど怖がついていない自分に気がついて、下田は自らを戒めた。この人達は、自分の家族でも、仲間でもない。違う世界の人間だ。この、慣れ合いに近い空気に吞まれてはいけない。

ミレーヌの瞳が、そんな彼の感情を見抜いたかのように向けられる。そこで初めて、彼女はふっと笑った。己の何もかもを見通されたような気がして、下田は俯く。

シフィオールスが久慈の頬をぺろりと舐めて驚かせた後、言った。「さて、無事初めの戦闘もこなし、少々勝手もわかってきた頃だろう。鍛錬も、次の段階に進めていかねばなるまい。お前達にはこれから――」

「失礼を」

ミレーヌが話を遮った。彼女は下田達の背後の方を睨みつけて、声を上げた。

「出てきなさい。ずっと私達の後を尾けていたのはわかっている」

草をかき分ける音がして、下田も驚いて振り返った。誰かが後ろにいたことなど、少しも考えにのぼらなかつた。

姿を現したのは、くたびれた様子の方だ。ろくに洗っていないさそうな鎧を見に付け、傷のついた剣と盾を携えている。口周りの無精髭のせいで老けているように見えるが、顔に目立った皺はなく、ある程度若いことは予想できた。

見覚えのある男だ。ルドレスより説明を受けることになった列席場まで、案内を務めていた。その時はやけに卑屈そうに構えていたのが印象に残っている。

「武器を、下ろせ」

ミレーヌに命令されて、男は剣を鞘に納めた。

「そう警戒するなよ。これは、自衛のためだ。絶対に安全と言える場所なんてないだろ」

「黙りなさい。何を企んでいるの?」

彼女の表情は、再び固く引き締められていた。むしろ、最初の時よりも固い。男に対する明確な拒絶の意志が表れている。

男は肩をすくめた。

「大げさな。ただの見物だ。世界を救ってくれる灰とやらが一体どれほどのものか、確かめることくらい許してほしいものだな」

「どの口が言っている。貴方は、ここへ来る資格すらないということを理解しているの？ この、恥知らずの裏切り者…」

「なぜ、お前の許可を得なくてはならないんだ？ まさかこんなしけた場所に俺が喜んでやって来ているとでも思っているのか？」

「やめろ、二人共」

シフィオールスが動き、ミレーヌの前に出る。そして、男に向かって低いうなり声を上げた。

「我々を侮辱しないことだ、ホークウッド。ここは我ら狼血の騎士が己を磨く場所。血を拒否したお前が、近づいていい場所ではない。我々の忍耐を試すのはよせ」

威嚇ともとれる言葉に臆するどころか、ホークウッドは急に苦々しく顔を歪めて、吐き捨てるように言った。

「…お前と、話しているわけじゃない。俺の視界から消えろ、くそつたれのけだものめ」

「貴様…」

ミレーヌが耐えきれずに一歩踏み出した所で、再び無理矢理笑っているような表情に戻った。

「おいおい、味方同士だろう？ やめてくれよ」

じりじりとホークウッドは後ずさりし、両手を上げながら木々の間に入っていく。どこか哀れみさえ感じられるその様子に、ミレーヌも毒気を抜かれたのか、抜いていた剣を収めた。

「もし、また私の前に姿を現したら、殺すわ」

「難しい頼みだな。お前の行動を予測して、鉢合わせしないようにする努力が必要になる」

「その脂にまみれた舌を斬り落とされたくなかったら、今すぐに消えなさい」

間に挟まれている下田は、胃が痛くなり始めていた。静かに憤って

いる彼女に逆らおうという気はまるでなくなる。女の人をこれだけ怖いと思ったのは初めてかもしれない。自分達は蚊帳の外だが、早く終わってほしいと願っている。

ホークウツドはこちらの視界から消えるまで、ミレーヌを真つすぐ見つめていた。その視線だけは、並々ならぬ力がこもっているように思えた。

13. 下田隊の受難

「邪魔が入ったわ」

すっかり委縮した様子の生徒達を見て、ミレーヌは困ったように溜息を吐いた。

「巻き込んで、ごめんなさいね。とりあえず、あの男は信用しないように。妙なことを言ってくるかもしれないけど。何か困ったことがあったなら、協力は惜しまないつもりよ」

草野が、控え目に拳手をした。

「実は、脇腹がまだ痛いんですけど。ちょっと優しく撫でてくれませんかね」

「刃で？」

「この通り、俺はぴんぴんしてまーす」

シフィオールスが可笑しそうに目を細める。

「なかなか、個性的な男だな」

張り詰めていた先ほどまでの空気が、いくらかましになった。こういう時に、彼の気配りのありがたさがわかる。

「本題だが、お前達の鍛錬はより実戦的なものになる。かなりきついものになるが、乗り越えてみせろ」

「具体的な、内容は？」

国広が尋ねると、ミレーヌが周囲を見渡しながら答える。

「これから十日間、貴方達はここの区域で生活してもらう。何をすべきなのかは細かく指定しない。こちらが提示する条件は、ただ一つ。期日が来るまで生き残りなさい。単純でしょう」

「えっと、つまり祭祀場に戻れないと？」

「安全な拠点で体を休めることはもちろん重要だわ。でも、薪の王達の中にはここからはるか遠くにまで逃げている者もいる。いつ敵に襲われるかわからない状況下で、長期間活動する必要も出てくるの。今回は、それを体で覚えてもらおうと思ってね」

「正直言つて、ぬるくないっすか」

草野が能天気な笑いを浮かべて言う。

「いままでずっとジーク先生にしごかれてきた俺達にとっちゃ、ただ生きればいいだなんて課題は楽勝ですよ。もう少し、やりがいのあることがしたいですね」

楽なら楽で、それはいいことではないだろうか。下田は何か無理難題が追加されるのではないかとひやひやしていた。が、ミレーヌは何か含みがあるように笑う。

「そう思う?」

直後、シフィオールスが顔を上げ、大きく吠えた。高く、それでいて芯のある声が響き、下田は思わず耳を塞いだ。それでも鼓膜をかなり揺さぶってくる。何かの資料映像で聞いた、狼の吠え声よりもはるかに迫力がある。仲間を呼ぶための行動のはずだが、なぜ今そうしたのか、疑問だった。

「手加減をしない性格なの。これから先、貴方達には存分に苦勞をしてもらおうから。まずは最初の課題を、こなしてみせることね」

ミレーヌは兜を被り直すと、シフィオールスに会釈をしてから、走り去っていった。

「一体、何をしたんですか」

シフィオールスは国広の質問に、首を振るだけだった。

「私としては、あまり気が進まないのだ。もう時間がない。お前達武器を構えろ。奴らはすぐに集まってくるぞ」

この大狼もまた全てを語らずに立ち上がると、四本の足を軽快に躍らせて、森の奥へと消えていった。

残された下田達は、ただ途方に暮れるばかりだ。

「おい、これから何が起ころってんだよ」

「わからない。警戒はしておこう。皆集まるんだ」

「はい」

「あーあ、もつとシフちゃんに触ってたかったな」

高原と久慈が指示に従う中、芳野だけは動かない。下田は不思議に思っ、その顔を見た。

「どうしたの?」

彼女は、青ざめた顔で、ぞつとすることを言った。

「やば、やばいって、これ。なんか凄い数の反応が、全方向から向かってくるんだけど」

ほぼ同時に、そう離れていない所から大勢の呻き声が聞こえてきた。

草野の剣が、突進してきた亡者の胸を貫いた。すぐに引き抜くと、国広と向きを入れ替え、突き出された熊手を正確に受け止めて横に弾き、倒れかかってきた亡者の首を飛ばした。飛び散る血に最初は辟易していたものの、もう、誰もそんなことは気にしていない。

「これ、何体倒したんだろうな。ソウルが溜まるのは、ありがたいんだが。くそ」

「亡者だけなら、なんとかかなるんだけどね。まだ、追いかけてきてるよ。移動しないと」

下田は話さない。話せないという方が、正しいかもしれない。誰かが怪我した時のために、できる限り気力を温存しなければならない。闇雲に魔術を放つわけにもいかず、嫌な緊張が続いていた。

あの場に留まるという、選択をしなかったのは正しい。囲まれているとしても、相手が来るのを待つ方が愚かだ。亡者達が集中して手がつけれなくなる前に、一つの方向へ突破する考えのもと、全員が走っていた。

だが、その作戦は早くも崩れている。国広の言う通り、これは敵が基本的に鈍い亡者だけという前提があつてこそのものであった。

木々が倒されている音が、断続的に響いている。もちろん、亡者にそんな力はない。シフィオールスが呼び寄せた中には、大きな鋸を持ち、大釜を背負った大男もいた。前にジークバルド達が似たような者を倒していたのを覚えている。だからといって、自分達も容易に立ち向かえるとは思えなかった。避けるために方向転換を何度もし、自分達が進んでいるのか戻っているのかすらわからなくなっている。

ろくに後ろを見もせずソウルの矢を打ちこんだ高原が、殿を務める草野に叫ぶ。

「やつちやえばいいのに。もう、体力が限界なんだけど」

「あれ一体だけなら、挑む気もあつたよ。亡者がわらわらいる中で、ろくに知らない奴と戦えつて？ それとな、お前の魔術がかすめたぞ。危ねえんだよビッチ！」

「はあ？ お前こそいちいちキモいんだよー！」

喧嘩する元気があるのが不思議だった。

幸い、重傷を負っている者はいない。草野と国広の頬や手に浅い切り傷があるだけで、下田と女子三人は無傷だ。

「あ、また死んだ」

久慈が胸を抑えると、下田の方に寄ってくる。倒れてしまわないように、彼女の腕を掴んで自分の肩に回した。

「大丈夫？」

「ごめんごめん。ちよつと使ってもらえる？ さすがにそろそろ限界」

久慈の顔は血の気が引いて、白くなっている。額から流れ落ちる汗の量もかなりのものだった。下田は右手を彼女の胸に近付けると、白い光を発して回復を始めた。

「私、汗臭い？」

「え？ いや、そんなことは」

「胸触ったら、罰金だからね」

「ぼ、僕はしないよ」

何とか多勢に対抗できているのは、彼女の能力のおかげでもある。芳野の探知を聞いた直後、久慈は自分の分身を作り出し、反対方向に走らせるといふ機転を見せた。それにつられて、亡者達の一部が追跡から抜けてくれたのだ。ただ、感覚はある程度共有しているらしく、分身が殺される度に久慈は吐きそうな顔をしていた。

下田の奇跡によって、その顔色は多少回復した。それでもまだ油断できないと続けようとした所で、彼女は首を振って下田から離れた。「ありがと。自分で走る。貴重な回復役を、無駄に疲れさせるわけにはいかないから」

「でも」

「いいからさ。結構酷い顔してるの、自分で気がついてる？」

疲労は当然溜まっている。温存すると言っても目の前にまで敵が

迫ってきたら魔術を使わざる負えなくなる。そんな場面がもう何度もあった。そして今の奇跡だ。感覚で言えば、そろそろ限界が来てもおかしくなかった。

そして、素直に言葉では表せないもやもやとした感情も、膨れ上がっている。どうして、自分はこんな思いをしているのだろうか。知らない土地で、しなくてもいい苦勞をしている。そんな気がしてならない。

帰りたい。帰りたい、帰りたい…。

思いがあふれそうになって、下田は口を抑えた。駄目だ。今は駄目だ。気をそらしたら、殺される。不死身だと、祭祀場の者達は言っていたが、それで恐怖がおさまるわけではない。

「森を抜ける…」

国広の言葉で、前を見た。辺りが明るくなってきた。木々の切れ間から、崖をつなぐ木作りの橋が見えた。

「女子を先頭に、あれを渡るんだ」

その時、起こるであろう事故がはつきりと予想できたが、彼の考えていることはわかったので不安を口には出さない。確かに、大量の敵を振りきるには効果的な手だ。

初めに、高原が何度も後ろからせつつかれて渡り始めた。それで平気なのが皆に勇気を与え、続々と並んで橋を進んでいく。老朽化した橋が渡っている途中で切れるなどという不幸は起こらず、全員が渡りきることができた。

「早くやってよ」

「ああ、わかってる」

草野と国広が大急ぎで橋の基幹部分を斬りつける。数度の試みで外れ、追ってきた亡者やお男の重みであつという間に崩れていった。底が見えない奥底へ何体も落ちていく様は、強烈な安心感を与えてくる。残った敵も、崖の縁でこちらに向かつてうなるだけだった。

最初に、草野が倒れ込んだ。その横に国広、そして高原達も腰を下ろし、下田はその場でうずくまった。

自分や誰かの荒い呼吸音を聞いているだけの時間がいくらか過ぎ

その後、草野が言ってきた。

「絶対に、今度会ったら、ミレーヌさんの胸を揉んでやる」

「こ、殺されるよ」

「全力で抵抗するね。それくらいは許されてもいいだろ。うう、汗が気持ち悪い」

「しばらく、ここで休もうか」

国広は芳野に目配せをすると、彼女は首を振った。

「すくなくとも、周囲には何も無いよ。あ、今ちよつと反応が」

「どれくらい離れてる?」

「有効範囲のギリギリだから、百メートルくらい」

「なら、まあ、大丈夫か」

用心深い方の国広でさえ、今回は参ったようだった。

「だいたいさ、不死街は掃討されたんじゃないかねえのかよ。取りこぼしが多すぎるにもほどがあんだろ」

「あの掃討は、定期的に行われていると言っていた。おそろくだけど、あれらは根絶できる類じゃないかもしれない」

「はあ、どれだけ終わってんだよこの世界は。やってられねえよ。なあ、彰浩」

下田は空を見つめていた。

「おいって。起きてるか?」

草野に目の前で手を振られて、ようやく我に返る。
「何?」

「お前、疲れてんのか」

目もとをぐしぐしこすって、下田は俯いた。

「当たり前だよ。皆だつてそうでしょ」

「そりやあなあ。鍛錬の域超えてるよ。まさか強引にピンチに陥らせてくるとは」

無意識のうちに、大きな声が出てしまっていた。

「そっちの方じゃない!」

言ってから、冷静さを取り戻す。こんな所で音をたてたら、どんな敵に嗅ぎつけられるかわからない。馬鹿なことをした。

草野は頬をかいている。

「どうした、急に」

「いや、ごめん。ちょっと自分がコントロールできなくなってる。休まないよ」

「ちゃんとしろよ。お前は俺らの生命線だからな」

それがやけに無責任に聞こえて、言い返そうと口が動いた。だが、寸前になってこらえる。草野には、何の悪気もないのだ。今の自分は冷静ではない。些細な事で苛々したり、急に気分が落ち込むことが多い。集中を見出せば、ここでは命を失うことにもつながりかねないのだ。

命。心に自嘲的に響き渡った。ただの高校生のはずなのに。何で、そんなものの心配をしなければならぬのだろう。

何気なく、下田は横を向く。高原と視線が合う。彼女は口を真一文字に結んで、目を細めていた。どことなく機嫌が悪そうだったので、すぐに別の方を見た。

全員が落ち着いた所で、今日寝床にするべき場所を確保することになった。外は女子達が反対したので、ボロボロの家屋の中で一番ましな所を選び、中に入る。亡者が何体がいたが、どれもほとんど動かず、草野と国広が頭に剣を刺すとうまく身じろぎして、息絶えた。

「何だったんだろうな」

「寝てた、とか」

「こいつらが？ 冗談言うなよ」

安全を確保した所で、このまま次の日まで待機することに、全員が賛成した。すでに普段の鍛錬以上に動いていたし、皆血に汚れてなかなかひどい状態だった。これ以上下手に動くのは危険だ。

男女交代で、家の一室で体を洗う。今までは、祭祀場の篝火に備わっている浄化の力で、汚れは瞬時に取れた。お風呂に入るのとは違う感覚で戸惑ったが、はるかに効率よく全身を荒えたので、結構便利だった。しかし今は、従来の通り水を使って洗い流すしかない。

半リットルの水をインベントリから取り出すのに、九ソウル必要になる。体をちゃんと洗うのに必要なのは、二リットルほどだ。下田は

現在、五十二ソウルを持つている。前の掃討戦の時と、先ほどの戦闘で、それなりに稼いではいる。しかし、食料も必要になることを考えると、十日間を乗り切れる見込みはまるでない。亡者を狩るにしても、危険を極力抑えるためには、不自由を強いられることになるだろう。

かつては家族が集まって穏やかな時を過ごしていたかもしれない、暖炉付きの部屋に集まる。そして草野が、呆れたように言った。

「待てよ、お前らの恰好は、何だ」

高原は茶髪をゴムで後ろにまとめて、棒付きのアイス舐めていく。爽やかな水色で上下統一した肌着には、大きく英字がプリントされている。

久慈は真ん中分けされた黒い長髪を櫛で梳きながら、携帯式のドライヤーで乾かしている。格好はシンプルに紺のジャージだ。

芳野は肌に優しいと書かれた化粧水を顔に塗り、時折頬をぺちぺち叩いていた。半袖の白いシャツと黒のスパッツを身につけ、高原のアイスを物欲しそうに見ている。

「いや、何が？」

柔らかなようなルーミングチェアに寄りかかり、高原は首を傾げる。

「何もかもだよ。どこから言ったらいいのかわかんねえ」

国広も目を丸くして、三人を眺めていた。

「ここだけ、日本と変わらないみたいだ」

「全部、ソウルで交換したやつだよ。どうせこれからきついのが待ってるんだから、少しくらい贅沢してもいいでしょ」

芳野の露わになった足の曲線に目が行ってしまい、下田は居心地が悪かった。最近、実織と話していないこともなぜか同時に思い返して、その場に座りこんだ。自分は草野じゃない。溜まっているとか、そういったことは考えないようにする。

これからどうするべきか、話し合いにおいてもまず女子達の行動について詰問が始まった。

「お前ら、危機感はないのかよ」

「えー、だってロープも血とかでぬるぬるしてキモかったし。新しい

服用意するくらい当然でしょ」と高原。

「肌も、ちゃんとケアしてあげないといけないし」と芳野。

「髪は大事にしないと。長いと、手入れに時間がかかるんだよ?」と久慈。

「知るかアホ。それでよくソウルが無くならないな」

「え? もうゼロだけだ」

「あたしも」

「石ころすらもう実体化できないでーす」

草野は頭をかきむしった。

「ふざけんなよ…。明日から、どうすんだ?」

「頑張つて亡者達をやっつけるしかないっしょ」

「俺としては、安全に行きたいんだよ。できれば、ずっとここに閉じこもつて日が過ぎるのを待っているのがベストだった」

「あ? それでも男かよ。ホーケイ野郎」

「俺の息子を侮辱するなアアアアア!」

草野が、挑発してきた久慈に飛びかかり、見事に股間に膝を受けていた。悶絶している彼に女子三人が群がり、罵倒しながら何度も蹴っている。途中から草野の顔に笑みが浮かんでいるのを見て、下田は眉間を押さえた。これでいいのかと心配になってくるが、気分が晴れたのは事実だ。

苦笑いしている国広と一緒に、サンドバックになっている草野を見てすかつとする。

「面白いね」

「いつもあんな感じだと、疲れるけど」

「でも楽しそうだ。草野ともっと早く友達になっておけばよかった」

「と、」

疑問が口に出そうになって、すぐに止める。だがそんな下田の気持ちもわかっていたように、国広は真っすぐ見てくる。

「もちろん下田も」

「そ、そうかな」

「一緒にいて楽しかったら、それで十分じゃないかな。俺はこのメン

バーで行動できてよかったと思ってるけど、違った？」

「そんなことないよ。うん…。安心はしてる」

何かに気がついたかのように、国広は手を伸ばしてきた。

「ひゃっ」

「あ、ごめん。睫毛、何となく触りたくなつたから。長いよな。下田つてよく、可愛いとか言われたい？」

「や、んん、どうだろ」

何でもないタイミングでスキンシップを凶ろうとしてくるのは、とても真似できない

い。国広の警戒心を薄れさせる笑顔で言われたら、きつとどんなことも信じてしまうだろう。

あれ、と思った。どうして、自分は恥ずかしがっている。違う、断じて違う。確かに小さい頃は女の子によく間違われはしたが、心まで染まっているわけではない。自分は正常だ。女性が大好きな一般的な男子だ。

「？ 耳赤くなってるよ」

アブノーマルじゃない、アブノーマルじゃないと心の中で何度もつぶやく。

いつの間にか騒ぎが収まっていたので前を見ると、草野達は興味深々で顔を向けてきていた。

「おえ、彰浩、マジか」

「下田、乙女みたーい」

「あ、なんか、いいかも」

「同性同士って、避けてたけど。捨てたもんじゃないね」

耐えられなくなつて、下田は自分の顔を両手で覆った。

だからだら過ごしていると、辺りが暗くなつてきたので、次の日に向けて眠ることになった。芳野の呪術で暖炉に火をつけ、その明かりの周りで頭を並べている。床は所々穴があいていて、木のくずで背中がちくちくしたので、結局下田も寝袋をインベントリで交換することになった。寝ることだけは、ある程度快適にしなければ次の日に影響が出してしまう。

全員が同時に寝るわけにもいかない。男女で交代して見張りを続けた。能力面だけで言うなら芳野だけで十分すぎるほどだったが、彼女だけに任せるわけにもいかない。

特に何が起こるわけでもなく、彼らは二日目の朝を迎えた。

「起きろー」

薄目を開けると、久慈が覗き込んできていた。毛先のまとまった髪が、かすかに頬にかかっている。

億劫そうに呻いて、彼は再び目を閉じた。微妙に頭が痛い。あまり満足に睡眠をとることができなかった。何か長い夢をたくさん見た気がしたが、何も憶えていない。

「眠いの？ 皆とつくに準備終わってるけど」

「も、もう？」

「下田が寝坊したんだよ」

「わかった。起きるよ」

半身を起こすと、芳野の姿も視界に入った。彼女は下田の頭を見ると、櫛を取り出した。

「ちよつとちよつと、寝癖すごい。せつかく良い髪質してるんだから、労わってやらないと」

「うん」

後ろに回った芳野が櫛を入れていくのを受け入れる。傍から見れば完全にされるがままになっているが、彼は半分寝ぼけていたので抵抗する気も起きない。

「こうなると、着せ替えもしたくなってくるよね」

「んー、前髪切った方がいいよ。くりくりした目がいいポイントなんだからさ」

戸口から、高原が姿を現した。

「早くしなよ。自分のことは自分でやらせればいいじゃん」

「もう終わるって。なに、ちとせ怒ってんの？」

「別に、そういうわけじゃないけど」

気に入らなそうに下田を一瞥した後、彼女は外に出ていった。何だか、高原は昨日から自分に対してそんな態度を取っている。下田とし

ては、溜息でもつきたい気分だった。ただでさえ苦勞の多い状況なのに、これ以上気が重くなるようなことにはならないでほしい。

とりあえずはこの家を拠点にすることにして、ソウルを得るべく捜索が始まった。ここで再び役立つのは芳野の探知能力だ。これだけで不意を打たれることはなくなる。敵の位置だけではなく、その数もわかるので、比較的小規模な亡者の集団を狙っていくことで、最初の方は限りなく安全にこなすことができた。

多少の選択を迫られたのは、あの、大男を発見した時だ。

「でっけえな。グンダほどじゃねえけど」

「力も相当強いだろうね。直接盾で受け止めたら、大変なことになりそうだ」

前の時と違うのは、それが単独で行動しているということだ。亡者数体程度で得られるソウルはたかが知れている。冒険をしてでも、大物を狩ることも必要だった。

全員で作戦を擦り合わせてから、まずは久慈の分身が敵の前に出る。生身の彼女に比べれば、動きはかなり単純だった。走り、手を相手に向けて、魔術を行使しながら距離を取る。それしか、行動を組み込まれてはいない。

一本目のソウルの矢は外れ、二本目が腰に当たった。大男は少しも揺らぐことなく、分身に向かって突進してくる。

そのタイミングで本物の久慈が家屋の二階から男の側面に、矢を放った。それは頬を抉り、黒い血が流れ出す。ちゃんと傷はつくようなので、望みはつながつた。

「こつち、こつち向けのつぽー！」

本物の久慈の方に男が向き直ったと直後に、高原がまた別の方向から飛び出した。さすがに三人同時に相手取ると、本能的な思考にも迷いが生じたらしく、その場で立ち尽くす。その隙を見逃さず、高原は何の変哲もないロープを出現させると、男に向かって投げつける。

まるで生き物のように、ロープがひとりでに男の両足に巻きつくと、一気に締め上げた。

「よし、今だ」

バランスが崩れ、巨体が倒れた所で、待機してた草野と国広が向かっていく。芳野は、敵が集まって来ているどうか、見張っている。下田はその護衛を任されていた。

草野が武器を持つ太い腕を斬りつけ、多少手間どいながらも切断する。国広は、男の首に剣を突き刺し、刃を回転させて穴を開けた。

静かになった。全員が男の体を注視する。鋸が、体から滑り落ち、大釜の中身がこぼれていく。待っても再び動き出すことはなく、その気配すら感じられなかった。

「死んだ？」

体の端々から実体が無くなり、薄い靄のようなもの変わっていき。それは下田達の体に吸い込まれていき、やがて地面に広がる血も消えていった。もう何度も目にした現象だ。

ソウルが二十ほど増えた。それを確認して、ようやく一息つく。

「完璧じゃねえか」

「うん。万全を期せば、体格差があっても対抗できることがわかった」
達成感があるというよりも、緊張から解放されてほっとしたような雰囲気か漂っていた。誰もオーバーに喜んだりはない。これは、亡者よりも幾分か人間らしかった。肌は萎びていなく、盛り上がった筋肉が生命を感じさせる。

下田と芳野も近寄ると、国広が尋ねてきた。

「異常はない？」

「数体の亡者が、急に動きを変えてこっちに向かってきてる」

「うん。何回かやってみてわかった。たぶん、奴らもまたソウルを求めているんだ。だから、倒されたのを嗅ぎつけて、集まってくる」

草野が警戒するように見回し、言った。

「どうする？ そいつらもついでにやるか？」

国広が答える前に、久慈が地面に膝をついて苦しそうに口元に手をやった。

「朱音？」

同時に分身が消える。彼女の集中が極度に乱された証拠だ。下田は慌てて駆け寄る。見るとその顔は真っ白だ。昨日もそんな様子は

あつたが、一夜明けて回復したものだと思っていた。魔術などを使い続けるための気力は、十分な休みを取ることでも元に戻る。

下田が手を伸ばそうとすると、久慈は首を振る。

「大丈夫、だから。そう何度も世話になるわけにはいかないって」

「いや、駄目だ。下田、使ってあげてくれ。どう考えても大丈夫じゃない」

国広が強い口調で言う。

どうやら、久慈の能力にはかなりの制限があるようだった。毎日気軽に使えるものではなさそうだ。汎用性が高いので、つい亡者狩りの効率のために多用したのがいけなかった。

回復が終わってもまだ気分の悪そうだった久慈は、国広に背負ってもらおう。他の女子二人が、羨ましそうにそれを見ていた。

「戻ろう。少し早いかもしれないけど、今日はもう終わりだ。最低限のソウルは集まったし」

国広の意見に反対する者は誰もいない。そうだ。自分達は何かを倒せと言われたわけではない。ただ生き延びればいいのだ。ならばいくら慎重になっても足りないくらいだと、下田も思った。自分達のまとめ役が同じような考え方でよかった。

警戒して来た道に戻っていく。集まってくる亡者に追いつかれないうよう、かなり急いだペースだ。戦闘自体は上手くいっていたものの、もし久慈が分身を出現させる前に倒れていたらと考えると、ぞつとする。あの大男に挑んだのは、実はかなり大きな賭けだったのかもしれないなかった。

「え？」

突然、間の抜けた声が上がった。芳野だ。

「どうしたんだよ」

「ちよつと待って。有り得ない。わ、私達の前方に反応がたくさんある」

草野はぼかんとしていたが、徐々に口の端をひきつらせていく。

「それって……。俺達の拠点周辺ってことか。何で？」

「知らない。だけど、いるのは事実だし」

実際に近付いて行くと、亡者の集団や先ほど倒した赤い頭巾の大男が確かに徘徊している。しかも肝心の家屋はさらに破壊されていて、とてもじゃないが利用できる状態ではなかった。

瓦礫の陰で隠れている草野が、奥の方に目をやって、信じられないと呟いた。

「おい、橋が元通りになってんぞ。夢か、これは」

それが、亡者達が現れた原因のようだった。今も、草野と国広が壊したはずの橋を渡って来ている亡者の姿がある。

「誰かが直したんだ」

「ふざけんなよ。私のお気に入りの椅子とか、服はどうなんの」

高原は、少し心配する点がずれているような気がする。

「一体、誰が。どんな理由で…」

そこで何かに気がついたかのように国広が言葉を切った。下田も、何となく想像がついた。でも、本当にそこまでするのだろうか。

ほぼ同じタイミングで、芳野が焦ったように小さく叫んだ。

「うわ、一体がこつちに向かってくる。何これ、凄く早」

言い終わる前に、下田達の所へ人が到着していた。身につけている鎧姿は、完全にミレーヌと一致している。しかし、彼女よりも頭一つ分背が高い。肩もごつごつしていて、男なのは間違いなかった。

国広と草野が剣を構えても、全く動かない。男が兜を少し持ち上げると、髭の濃い口元が露わになった。

「すまん。これも隊長の命令だ。許せ」

止める間もなく、男は指笛を高らかに吹いた。さらに腰に下げている短剣の一本を亡者の一体に投げ、頭に命中させる。

全部の注意が、こちらに向いた。

「健闘を祈る」

男はすぐ横の瓦礫を駆け登ると、あつという間に家の屋根に飛び移った。次々と足場を移っていき、姿がどんどん小さくなる。ごくわずかな接触であったが、その印象は強く刻み込まれた。主に負の方向でだ。

その軽芸に感心している暇はなく、全員が既に背を向けて走ってい

た。後ろから足音がいくつも響いてくる。

「どど、どうすんだよ。戻っても、亡者がいるだろ」

「じゃあ、あの数を相手にしろって？ あたしとしては戻りたいけどね」

「命より服とかの方が大事なのかよ」

「振り切るしかない。走って！」

久慈の体重がかかっているにも早い国広の背中を、下田は必死に追いかける。もう休めると思っていた時にそれが覆されるのは、かなりダメージが大きかった。

ちりちりと、背中が総毛立つような感覚がした。今は前だけを見て進むべきなのはわかっているが、予感に突き動かされて後ろを振り向く。

亡者の一体が、何かを構えている。遠目ではつきりとは見えないが、明らかに、弓であることはわかった。先が燃えている矢をつがえ、十分に引き絞ってから、真つすぐ放ってくる。

あれに、当たったら。

「み、」

警告しようとしても、遅かった。

下田の耳元で風切り音が鳴る。斜め前を走っていた芳野の肩に矢が突き刺さった。彼女は足をもつれさせ、地面に転んだ。

「恵美、だい」

高原は、途中で言葉が見つからなくなったようだった。

何だろう。こんな時なのに下田は思っていた。香ばしい香りがする、肉が、焼ける時の。

「あづ、あつい、熱い！ だれか、誰か抜いて」

刺さった所に、火が移っていた。ローブの布が焦げ、煙が上がっている。息が詰まって、下田は一瞬何も考えられなくなった。

「何、ぼうつとしてんだ！」

草野が彼女の方に近寄ると、矢を一気に引き抜いた。痛そうな声で呻いて、芳野は歯を食いしばる。彼は掌で何度も叩き、無理やり火を消した。皮が裂け、中の肉がさらされている状態で、徐々に赤い染み

が広がっていく。

「ちよつと…」

「俺が抱える。彰浩、移動しながら奇跡使えるか？」

いつにない彼の瞳と相對して、下田は反射的に頷いていた。その反応をほとんど見ず、草野は芳野を肩に腹を乗せる形で、運び始めた。荷物を運ぶようなぞんざいな扱いで、かなり上下に揺さぶられているが、彼女は反応していない。ショックで気を失ったようだった。

「弓を持つ奴がいる。真つすぐ走つたらやられる！」

国広はすぐに右に曲がった。家屋の間を縫うような進路に変える。見晴らしが悪く、鉢合わせのリスクが高い。下田は既にどこに行くべきか、思考を放棄していた。目の前に一番に考えなければならぬことがある。

芳野の傷口に手をかぎす。なかなか奇跡が発動されない。深呼吸をした。後ろからくる恐怖も、これからの不安も考えない。治すことだけに集中しなければ。

なんとか白い光が出て、回復が始まった。かつて実織の腕を治した時よりも、進行はゆるやかだった。遅い、遅すぎる。一秒が何日にも思えた。自分は今、ちゃんと呼吸できているだろうか。

「あの、あの塔を、あそこを直指そう」

何の保証もない。逆に追い詰められるかもしれないが、国広の言葉に皆が従っていた。彼の言うことは正しいと、下田はなぜか確信していた。そうではないにしても、このまま当てもなく走った所で、終わるのは目に見えている。

瓦礫の陰から突然、亡者が飛び出してきた。国広の首筋に向かって短剣を振り下ろしてくる。

彼は止まりかけたが、先に亡者の方が急にのけ反った。顔の皮膚が殴られた後のようにへこんでいる。国広の能力がその身を守ってくれたようだ。

「だいじょう、ぶっ！」

「気にしないで。喋ると疲れるから」

緊迫感は、何倍にも跳ね上がったようだ。芳野がどれだけ策敵に貢

献していたか。敵が側まで迫っていても、実際の目で見なければわからない。それがどんな奴で、どれほどの速さでやってくるのかも。

そんな場面が、三度やってきた。その度に、臓器がひっくり返されるような衝撃と恐怖を味わうことになる。そうした近距離の敵は、倒していかなければならなかった。背を向けた方が危ない。走りが中断される時はいつも、追いかけてきている集団がすぐ後ろにいるのはという心配がよぎった。

気がつけば周りに家屋は少なくなり、左右にはとても登れなような崖が見えるようになった。大きくそびえる塔の姿はすぐ側にまで来ており、中へと続く大扉が視界に入る。

「入るんだ」

草野と国広が、その扉に手をかけ、押した。その後には高原と下田も続き、全力で開こうとする。初めは重いように思えた扉も、徐々に動いて開き始めた。

一人分の隙間が開いた所で、すぐに背中を押されて下田は中に入る。そして残りも全員無理矢理体を押しつけるようにして、扉の内側に入った。

中はそれほど広くない。先は階段になっていて、鎖のつながった床に続いている。階段にはいくつもの蠟燭が並べられ、薄暗い室内に仄かな明かりを灯していた。

音を立てて扉が閉まっていくのを背で聞いて、下田は絶望しかけた。もう行き止まりだ。ここで耐えるしかないのか。

「国広…」

草野が彼の顔を見る。国広は、扉を押さえながら階段の先をじつと観察していた。

「あれは、何だろう」

指を向けたのは、床の中央にある四角い突起物だった。そこだけ不自然だ。誰かが躓いて、転んでしまうかもしれないのに。

「知らねえよ。それより…」

亡者達の気配が迫って来ている。すぐにでも扉へと到達し、開けようと叩き始めるだろう。あの萎びた体といえど、大勢で押されたらそ

う長くはもたない。

「いや、皆、俺が叫んだらあれに走るんだ。あれは、多分、エレベーターに似たものだと思う」

「本当かよ。あれが？」

国広は一瞬黙った後、一人一人と目を合わせるように静かに言った。

「今まで、言ってなかったけど。実は、親戚に、ゲームを持っている奴がいて。この場所であの床に乗って、下に降りていくのを見たことがある」

下田もまた、驚いて彼の顔を見た。

「ただ、俺は興味もなかったし、記憶も曖昧だった。だから、ずっと黙ってたけど、やっぱり、皆を騙すも同然みたいで、いけないことだとは思ってたけど」

「そんなこと、どうでもいい」

草野が申し訳なきような国広の言葉を遮る。高原も頷いた。

「じゃあ、祐馬君はちゃんと考えがあつてここを目指してたんだね。安心した」

「ど、どうするの。行くならすぐに行かないと」

下田の催促で、国広も覚悟を決めたようだった。むしろ良かったのだ。この世界を題材にしたゲームの経験者は、隊に一人もいないと思っていたから。

「よし。今だ。行こう！」

国広が久慈を抱え直し、声を上げた。一人も遅れることなく、階段を必死に駆け上がり、例の床にたどり着く。

「草野、踏んでくれ」

「おう」

草野が中央の突起物を足で蹴りつける。何かの駆動音が聞こえ、上に伸びていた鎖が動き始めた。床が沈み、下に向かって降りていく。ほぼ同時に、大扉に叩きつけるような音が鳴った。

天井が、どんどん遠ざかっていく。

「奴らが、上から降ってきたらどうする」

「いい的になる。ただ剣を上にも構えていさえすれば、勝手に刺さってくれるかもしれない」

「はっ…」

「後は、下田と高原も迎撃を頼む。落ちてくる前に仕留めれば危険はない」

「う、うん」

高原は下田とは違い無言で顎を引いていた。震える手を庇うようにして抱きしめている。その目尻には、溜まった滴がこぼれ落ちようとしていた。自分だって、泣きそうだ。汗なのか涙なのか、わからない。なくなってはきているけど。

降りていく速度は、ゆっくりと言ってもいい。だが下にたどり着くまでに、幸運なことに亡者が降ってくることはなかった。

「誰もいないな」

降りた先もまた、階段があった。右に緩やかにカーブし、開けた部屋まで続く。何か動く気配はなく、静けさが漂っていた。

進んでいくと、右手の方に扉が開いているのが見えた。立ち止まるわけにも、ましてや戻るわけにもいかず、下田達は歩いた。何かの講堂だろうか。薄い蝋燭の光が壁にいくつも並んでいる。

扉の先もまた同じ広い部屋だったが、太い柱が何本か建っている。高い天井にまで伸び、荘厳な雰囲気伝わってくる。

「一体ここで、何が起きたんだ」

奥の方の壁は、大きなヒビが入っていた。まるで何か大きなものを、とてつもなく強い力で叩き込んだ時の。柱の方にも鋭い刃でつけられたような傷がついているものもあって、色濃い戦闘の痕跡が確かにここにはあった。

さらには、一部の床がやけに光を反射している。近づいてみると、汗だくの身には心地いい冷たさを感じられた。凍っているのだ。よくよく考えてみると、この部屋だけ気温がかなり低いように思える。

ここに何かがあった。そして、また別の何かと戦って、どこかへ消えたのだ。それだけで十分だった。

「亡者達は？」

草野が芳野を高原に預け、エレベーターの方へ走って行く。それほど時間が立たないうちに、拍子抜けしたような顔で戻ってきた。

「奴らの声が全然聞こえないし、姿も見えない。どっかへ行ったみたいだぞ」

「本当に？ 嘘だったら、許さないよ」

目を拭った高原が、草野に言う。彼はそれに返すことはなく、どつと座り込んだ。

「何にせよ、もう無理だ。これ以上走れねえ」

下田は自分の残した仕事を思い出す。

「あ、の。高原さん。あと少しだけ治させて」

その瞬間きつ、となぜか睨んできて、彼は語尾を小さくした。

「え？ あたし、どこも怪我してないけど」

「えと、そっちの」

芳野を見て、高原はこほんと咳払いをした。表情が柔らかくなり、薄く笑いかけてくる。

「あー、ごめん。なにイライラしてんだろ。凄いな、もうほとんど治ってる」

「でも、まだ火傷の所が」

「傷は？ 残りそう？」

「大丈夫だと、思う。完璧ではないかもしれないけど、目立たなくするのは何とか」

「ありがとう。やっぱ下田がいて安心だね。恵美、自分の肌凄く大事にしてるから、良かった」

こうして下田が治している間にも、亡者が現れることはなかった。追跡をようやく振り切ったということだろうか。だとしたら、本当に、良かった。じんじんと痺れる頭で、心の底から安心した。

「くそ。まさか、昨日よりもさらに動く羽目になるとはな。ミレーヌさんのご褒美は、さらに追加だな」

「一体何のことが、とても興味があるわね」

14. 結束のために

全員が驚いて、声のした方を向いた。ミレーヌ本人が、柱の影から姿を現す。

「エレベーターは、下にあった。上に戻った音もしなかったのに。どうやって」

「あれくらいの高さなら、降りることくらい造作もないわ」

草野は口をひきつらせる。

「結構な数の亡者とかがいたはずなんすけど…」

「そうなの？ 普通に通って来られたけど」

彼女の剣からは、血が滴っていた。兜や鎧は綺麗のままだ。返り血をどうしたら、浴びないでいられるのだろうか。

ミレーヌは兜を脱ぐと、下田の横まで歩いてきた。そして座ると、目を閉じたままの芳野と、蒼い顔で黙っている久慈を一瞥した。

「隊の状態は、いいとは言えないみたいね」

「そっちの仲間が色々としてくれたおかげでな」

草野が皆の気持ちを代弁する。

「ええ。言ったでしょ？ 今、自分達が苦しんでいると思うのなら、本物の苦労はその何倍も辛いことを意識しておきなさい」

「貴方は、これからも邪魔をしてくると？」

国広が剣柄をいじりながら言うと、ミレーヌは微笑んだ。成長途中の子供を見るような笑みだった。

「本当なら、貴方達はここで死ぬ予定だった」

「それは、」

言いきる前に詰まらせ、国広は周囲を見回す。下田は声すら出なかった。では、この人は自分達を殺すつもりだったということだろうか。ほぼ無意識に芳野をミレーヌの視界から隠すように動いていた。「そう警戒しないで。予定は、もう崩れた。ここにいた敵は、今の貴方達では到底かなわない。私でも、おそらく無傷では済まされないような相手だった。でも先客がいたようね。おかげで貴方達はこの先の区域に足を踏み入れなければならなくなる」

「そんなことする必要があるんすか？」

床に大の字で寝転がりながら、草野が半笑いで言う。

「しばらくは、ここで過ごさせてもらおう形で。二日くらいはソウルも余裕があるんで」

「いいえ、許さない」

ミレーヌの雰囲気が一変する。腰に携えている剣の刃を指の先で叩いている。一番近くにいる下田は少しの間、亡者に追われていた時よりも重い緊張を感じた。

「進まず停滞を選ぶなら、私が全員殺す。矢を受けた子が目を覚ますまでは、猶予をあげる。それ以降はここから出て、先へ進みなさい。決して、楽はさせないから。絶対に」

「じ、条件は特に指定しないって、言ってたじゃないすか」

「それを言った時点では、ということよ。ただ安全に敵を狩り、一つの場所に隠れて、時間が来るのを待つのは誰でもできる。これは、鍛錬なの。追い込まないと意味がない」

それ以上、反論しようとする者はいなかった。

押しつけがましい。下田は、心の中で思う。自分が、やりたいわけでもないのに。本当なら、こんな大変ことは投げ出してしまいたい。なぜ苦しまなければならぬのか。

芳野が、身じろぎをする。薄く目を開き、注目されている状況をやや困惑したように見た。

「あれ…、ここは？ 一体、どうなったの……」

ミレーヌは立ち上がり、来た方向へと踵を返した。下田達に向かって、ゆつくりと手を振った。

「気をつけて」

講堂から出た先は、再び豊かな自然が広がっていた。すぐ近くに太い幹の大木が生え、蔭が幾重にも絡みついている。

久慈の体調は下田が何度か奇跡を施したことで、自分で歩けるほどには回復していた。ただし、もうしばらく分身は使えない。魔術の行使も多くはできない。

一方で芳野は意識が戻ったものの、具合がおかしかった。顔が熱を持ち、汗がなかなか止まらない。奇跡を使えば多少呼吸が落ち着くが、根本から治っているわけではないようだった。

「下田、大丈夫？ 運べるの？」

前衛として大きな役割を持っている男子二人には負担をかけまいと、芳野を背負うことを提案した。別に気を使うわけでもなんでもなく、彼女は軽い方だった。これなら、すぐに奇跡を使ってあげることもできる。

新たな区域は、不死街とは雰囲気が変わっていた。道が狭くなり、そこから外れればただでは済まないような崖になっている。

助かった点は、こちらを襲ってくる存在がないことだった。不自然なほどに敵がない。今までに比べれば、呆気なさすぎるほどだ。途中道が途切れ、下に飛び降りなければならぬ場面もあったが、インベントリにある物を重ねてクッションにしたりして、て何とか切り抜けた。

上下に入り組み、何度か同じ所を行き来する場面もあった。それでもこれといった危険にさらされなかったのが力になり、円状の砦のような跡地にまでたどり着くことができた。あちこちが破損しているが、一応は出入り口が制限されている構造だったので、ここで夜を明かすことになった。

「恵美、ほら水。飲んで」

高原が、ペットボトルを芳野の口に向けて傾ける。飲み始めたが、それだけで精一杯という様子だった。

「高原さん、残った水はこっちに」

渡された後、下田は白いタオルを濡らしていく。十分に絞ってから、芳野の額にそっとかけた。彼女の熱は下がらないままだ。

「多分、毒だ。あの矢に塗ってあった」

国広が断言する。剣を腕に抱え、外の方を眺めている。

「ねえ、下田。毒は、治せないの？」

「ごめん。今のところは無理だと思う。奇跡なら、それくらいできるんだらうけど、やり方が…」

せめて、イリーナに色々教わってから、鍛錬を始めてほしかった。下田の奇跡は、初めから何一つ変わっていない。ただ、傷を治すだけだ。

「でも、やってみるよ。諦めるわけにはいかない」

「おい、あんまり無理すんなよ」

草野が横たわった姿で言ってくる。見張りじゃない時は、基本的に体を休めている。

「うん」

昨夜とは違い、無言の時間が流れていた。皆がくたくたに疲れている。明日もまた同じことが続くかと思うと、肩が重くなる。今日だけで何度も奇跡を使っているの、不快な息苦しさも続いていた。

「明日になったら、ここを出よう。ミレーヌさん達が何をしてくるわからない。留まるのは、危険だ。ソウルも足りないし、ここから先を調べていこう」

国広が言つて、下田も頷いた。

「恵美は？ どうするの？」

「彼女をあまり動かすわけにはいかない。でも運んで行くしかない。誰かが一緒に残って、他がソウルを稼ぎに行くっていう考えもあるけど、俺達が分断されるのは良くないと思う。全員で固まって、行動するのが一番だ」

「じゃあ、僕が運ぶよ」

下田は言った。それで何となく話すべきことが終わって、見張り以外の全員が体を横にした。固い地面で、あまり寝られる気がしない。寝袋もあの家屋においてきていたし、さらにもう一つ取り出せるほどソウルには余裕がなかった。

それから二日間は、何とか過ぎていった。見つけた亡者は不死街のものよりもやや大柄で、持つ武器も非常に長い木の太枝と特殊だったが、高原の能力と前衛二人が連携して、確実に仕留めていった。複数と戦闘にならなかったのも大きい。集団ではなく、単独で歩いている亡者しかいなかった。

周りに生えている木の数が増え、空気に湿気が多く含まれるように

なってきた。下田達はやがて、浅い池の広がる地帯に着いた。そこを渡る選択肢はない。なぜなら、あのシフィオールスに匹敵する大きさの蟹が、多くの子分を連れて闊歩していたからだ。

表面は泥で覆われ、動きはそれほど速くない。だが、巨大な鋏は容易に人体を破壊できそうで、挑むのは得策ではないということ全員が理解していた。蟹達の動きを常に警戒しながら、池の縁に沿って先へと進む。

ミレーヌ達が、何かをしてくる気配は一向にない。それはそれで安心するべきことなのだが、別の問題が大きくなり始めていた。

「芳野、何か反応は？」

「…何も」

彼女はそれだけ言うのと再び下田の背中中で目を閉じた。彼の懸命な介護のおかげか症状の一番重い段階は過ぎ去っていたが、自分から活動できるような状態ではない。だから、体力をつけさせるための食事が何よりも必要なのだ。

彼らのソウルは、もうほとんど残っていない。一番消費の少ない食べ物でさえ実体化できないほど。それなのに、狩る対象の亡者はずつと姿を消していた。不死街では、あれだけの数がいたというのに。

芳野だけではなく、他の者も空腹を耐えている。あと一日でもこんな状態が続けば、何かがあっても対応できなくなってしまうだろう。休みもほどほどに、下田達は奥へと目指していた。一か所に居過ぎると、歩くことすら拒否してしまいそうだった。この先に何かがあると信じるしかない。

五日目の日が沈もうとした所で、芳野が急にもぞもぞと動いた。下田は朦朧としていた意識を払われ、前を見る。

「何か、いる。一つだけ、反応がある」

そこで久しぶりに歩みが止まった。横に池がまだ広がっているが、前方には城塞の跡のような景色が見え始めている。

国広が、期待を滲ませた調子で言う。

「どれくらい離れてる？」

「うんと…、60メートルくらい。ここまで、気がつかなかった。寝て

たせいで」

「お手柄だよ。周りには他に何もいないんだね？」

「それは、確か。大きくもない。私達と、同じくらい」

下田は、草野とほっとしたように目を合わせた。亡者か、そうでなくとも戻ってあの蟹の集団を倒すよりは楽そうだ。

「動きはある？」

「ゆつくりだけど。私達には気がついてない」

「よし…」

国広が頷いて、他の皆に目で確認した。反対する者は誰もいなかった。

崩れている石造りの壁などを利用して、慎重に隠れながら近づいて行く。かつてはここで戦いがあったのか、上へと登る階段は途中で壊れ、壁にも穴があちこちにあいている。複雑な構造になっていたが、そのおかげで相手にも気取られることなく配置に付くことができた。「ものすごく、やばそうじゃないか？」

草野が小声で言う。

それは、顔だけで言えば萎びた亡者のものだった。無造作に伸びた髪が背を覆い、金属が幾重にも編み込まれた甲冑を全身に纏っている。握る剣の刃は黒い靄のようなもので隠され、まるで生きているかのように蠢いていた。

下田は、一瞬だけしか見られなかった。ただの亡者とは明らかに違う、離れていても伝わってくる威圧感。これまで相手してきたどんな敵よりも、強いとだけしかわからなかった。

「変更はない。体もそんなに大きくないし、俺達全員がやるべきことをしたら、すぐに終わる。普通の亡者が少し武装しているだけだ」

国広に言われると、大丈夫のような気もしてくる。怖いのは数の暴力だ。個の力と、連携による集団の力は比べるまでもない。そのはずだ。早まる鼓動を、落ち着かせる。

まずは、草野と国広が前に出た。彼らは剣を構え、亡者の左右にゆつくりと広がっていく。

それに対しての反応は、薄かった。二人を交互に一瞥した後、一歩

ずつ後ろに下がっていくだけ。普通ならば、目についたものにすぐ飛びついていく。その時点で下田は悪寒を感じたが、もう止められる段階ではない。

国広が一步前に踏み出し、接近しようとして動きを見せた所で、久慈が壁から飛び出してソウルの矢を放った。亡者は呼んでいたかのように事前に剣を上げ、飛んできた矢を斬ってかき消した。

それも、予想の範囲内だ。

直後に国広が亡者に向かって切りかかる。受け止められた後はすぐに下がり、今度は草野が側面から腰へ一閃する。亡者は後ろへ下がって、それもかわした。俊敏な動きだ。

そこへ待機していた下田がソウルの光球を二つ顕現させ、前後に並んだ状態で亡者に向かわせる。彼は同時に二つの光球を維持することができるようになっていた。同時展開できる魔術の数は、その者の力量にもつながる。例えば新宮は、すでに四つのソウルの矢を同時に操っていた。

初めの一つは剣で処理し、少し遅れてきた二つ目はそのまま刃の腹で受けた。そこでようやくよく、亡者の注意が逸らされたようだ。そこを狙って国広が大きく叫んで突進していく。

もちろん、それで攻撃が通るとは思っていなかった。真の狙いは、別の方にあつたのだから。

ほぼ同時に、亡者の背後の壁にまで移動していた高原が、ロープを放った。国広の剣と彼女の術、一度に処理することはかなり困難なはずだった。相手にまだ、方法が残っていなければ。

鎧の亡者は急に体を回転させると、飛んできたロープを断ち斬った。真ん中から分かれて二本になったロープは、消滅していく。

「なんで、」

高原と同じく、下田も驚きを隠せない。前に一体の亡者に巻きついたそれを別の個体が斬りつけた時があつたが、少しも傷はつかなかったのだ。

「これで——」

だがそれで、国広の攻撃に対してほぼ背を向けている状態になっ

た。彼の刃が通れば、少くないダメージが与えられるだろう。

その目論見も、失敗に終わった。

亡者は手で、剣を止めていたからだ。いや、違う。正確にはその手に突然現れた半透明の盾によって。丸く比較的小さい盾にある赤黒い文様が光ると、そこから靄が噴き出して、国広の武器を吹き飛ばした。

大きくのけぞり、国広はたたたらを踏んだ。その隙をついて、亡者は剣を振る。彼の腰に差していたもう一本の武器が浮き上がり、防ごうとする。

「ぐっ…」

亡者は刃をずらし、浮かんだ剣より少し奥の何も無い空間を斬った。それだけで、国広の体は硬直し、動きが止まる。どうやら、彼の透明な第三の手が深く傷ついたようだった。なぜ亡者にそれが見えていたのか、わからない。

何も理解できないまま、国広の首に斬撃が食い込んだ。ほとんど抵抗がないように、下田には見えた。

司令塔を失った体はその場に崩れ落ちる。亡者は彼の頭部を掴むと、不要なものであるかのように近くの石壁へ投げつけた。当たった後、ずるずると地面まで落ちていく。赤い血筋を残しながら。

高原が、溺れるような声を出した。その喉には短剣が刺さっている。亡者が投擲したもののようだった。

耳に痛いほどの静寂が訪れる。

「お前ら、走れ…」

最初に我に返った草野が、亡者に斬りかかっていく。

「逃げるんだ、早く！」

彼が二、三度亡者の攻撃を受け止めた所で、久慈に肩を叩かれた。

「あいつの言う通りに」

そんな彼女も、何が何だかわからない顔をしていた。どこか夢見心地だ。下田も同じような気分だった。何だ、やけに現実味がないと思っただ。酷い内容だ。早く醒めてほしい。

足に、力が入らない。

それでも走った。

途中で振り返ると、ちょうど草野の腕が飛ぶ所だった。彼は膝をついて、剣を落としている。下田は急に呼吸が苦しくなったような気がして、前を向いて足を動かすことに努めた。

ふと、隣に久慈がいけないことに気がついた。彼女は下田から少し離れた後ろの方でうずくまっていた。地面に吐いているようだ。

助けようとした所で、彼女の背後から亡者が姿を現す。下田が何かを言う間もなく、彼女の体は二つに斬り裂かれた。

「あか、ね」

背負っている芳野の声で、固まっていた足が再び動き出す。甲冑の軋む音が追いかけてくる。舌を噛みそうになる。胸が詰まるような感覚。

「下田、下ろして」

「嫌だ」

「私を置いて行けば、一人で」

「い、いいいやだっ!」

まるで、歯が立たなかった。そんな圧倒的な力が、迫って来ているという恐怖。下田は自分が今、どうやって前に進んでいるのかすら認識していない。一瞬逃避しようとした事実はさらに重みを増して戻ってきて、くじけそうになる。

どうして、自分はこんな目に遭っているのだろう。

死ぬ。もうすぐ死ぬ。確実に。

すすり泣く声が背中から聞こえる。自分も今、恥も外聞もなく顔をぐちゃぐちゃにしているのだろう。涙や鼻水を垂れ流して。

お腹の辺りに衝撃が走った。下を見ると、剣が貫通している。

芳野と折り重なるように倒れた。徐々に広がっていく血の溜まり場を、亡者は静かに見下ろしている。恐ろしい、顔だ。くぼんだ目、皺が多く刻まれた頬、渴ききって色を失っている唇。

意識が暗く沈んでいく過程を、じつくりと味わうことになった。早く早く早く。そう願っても、死は遅く迫ってくるだけだ。

もう二度と。

もう二度と、こんな目には遭いたくない。
何日も経ったような気持ちで、下田はようやく楽になった。

「ちょうど半分を残して、鍛錬は失敗に終わったようね」

気がつけば、祭祀場の篝火の近くにいた。この、大事な過程が飛ばされたような感覚は、前にも味わった事がある。グンダに、殺された時だ。

でも、違う。

これは、あの時とまるで違う。

周りにも、まだぼうつとしてしている様子の草野達が座っていた。その中の、芳野と目が合う。彼女は気恥ずかしげに咳払いをすると、髪を指で巻きながら目をそらした。その反応に、下田はまた大きくずれを感じる。

「すっげ。本当に俺、不死身になったのか」

自らの体を触り、草野が言う。

それが、最初に言うべき言葉なのか。

ふう、と息を深く吐いて、国広は目をつぶった。

「判断を、誤った。焦りもあつたと思う。ごめん」

「祐馬は悪くないよ。あいつが、強過ぎたんだって」

「そうそう」

わからない、わからない。どうしてそんなにすぐ、いつも通りみたいに話ができるのだろう。まるで何かの試合に負けたみたいなの雰囲気だ。

そうじゃないだろう。さつき、確かに、自分達は一度死んだというのに。

石段に座っているミレーヌが、首を振る。

「貴方達が戦ったあれは、ダークレイスという、亡者化した人間の一種よ。正気である頃にある程度の武を修めた者は、亡者になっても技だけは忘れない。中の上という所かしら。私の見立てでは、貴方達全員が万全だったら、倒せていたはず」

彼女に対して、下田は寒気にも似た感覚を憶えていた。話の通りなら、自分達が無残に殺されていく光景を、彼女は見ていたということになる。見ていて、何もしなかったということになる。

「…もう一度、挑戦させてくださいよ」

その声が出た時、ついに耳がどうにかなってしまったのかと思っ
た。

草野が真つすぐ、ミレーヌを見ている。

「あいつにリベンジして、残り五日も乗り切る。一回くらいで諦めるわけにはいきませんよ」

「へえ。逃げるのかと思ってた」

「ご褒美のためなら、負けられないっす！」

「そんな話、聞いたこともないけど」

またお得意の冗談だ、そう思っただけを見た下田は、期待を裏切られた。国広も、女子三人も、なぜか前向きな表情だ。今すぐにでも出発しそうな空気まである。

ミレーヌは、ふつと笑う。

「元気なことは素晴らしいわ。でも、一日間を空けなさい。復活がどれほど体に負担をかけるか、人によって様々だから」

「え、この通りもうすぐにも走れそうっすよ」

「よく、周りを見てみることをね。誰もが貴方みたいに整理できるわけじゃないから」

下田の方を一瞥した後、彼女は踵を返し、去っていった。

その後ろ姿が完全に見えなくなると、草野が振り向いて皆に言うてくる。

「大丈夫だろう？ お前らだって、やられっぱなしじゃな」

それとかぶせるように、久慈があつと叫びを上げる。胴体を斬り裂かれ、内臓が飛び出した姿が重なる。

「マジ？ ソウル、全部なくなってるんだけど」

「えー、うっそ。あたしもだ」

「何か食べようと思ってたのに」

国広が、納得したように頷く。

「これが、ペナルティってわけだね。僕達が亡者のソウルを奪ったように、奴も僕ら全員のソウルを得たんだ」

「だったらなおさら、リベンジしないとな。取り戻そう」

それぞれが喋り出す度に、それぞれの死に方がフラッシュバックして、下田は耐えられずに耳を塞いだ。腹から飛び出す刃、広がる血だまり。萎びた亡者の顔。頭がふらつき、血がせき止められて、全身が冷たくなるような錯覚。

「おかしいよ…」

気がついたら、口に出していた。

全員が目が、下田の方へと向く。

「みんな、みんなおかしい。あの人も、どうかしてる。おかしい、おかしいって。変だこんなの。間違ってる」

「おい、彰浩。どうしたんだよ。落ち着けて」

「落ち着け？」

自分が、弱いだけなのだろうか。ただどうしても、普通でいられる彼らのようには、絶対になれない。なりたくもない。

「これで、どうやって、落ち着けて言うの？ 死んだんだよ？ 僕達は死んだんだ。あの亡者に殺された！」

「生きてるだろ、俺達は今こうしてさ」

一度話してしまったら、止めるのは困難だった。膨れ上がった様々な感情が待ち望んだかのようにせきを切ってあふれだす。

「不死身とかどうだとか、そんなの関係ない。僕が言いたいのは、何でそんなに皆、平然としていられるかってことなんだよ。そもそも、最初からおかしかったんだ。無理矢理こんな世界に連れて来られて、勝手にあれをやれこれをやれって言われて。僕達がなんで、しなくちゃいけない？ あんな怖い思いをしてまで、この人達のために働く意味なんてあるの？ あるわけないだろ！ 帰りたいんだよ。現実に帰りたい。皆だって、そう思ってるよね。なのに、どうして。なんでこんな、戦いの真似事をしなくちゃいけないんだ！」

言い終わった後、下田は荒くなった呼吸を整えようとした。あつちで活動していた時は常に空腹で、体の疲労もかなり溜まっていたはず

なのに、今は充実した感覚が充満している。それすらも、不気味にしか思えなかった。

「ふーん、わかった」

誰もが黙り込んだ中、さらつと言ったのは高原だった。どこか失望したような顔で、

下田を見ている。

「あんたはさ、結局、自分が一番苦しいって思ってるんだ」

「…え？」

「そうでしょ？ かわいそうかわいそうって、勝手に自分を追い込んでいる。あんたの言い方だと、まるであたし達が平気で過ごしているみたいだよ」

「そんな、ことは」

「戻りたいかって？ なにそんな、当たり前のこと訊いてんの？ あたしがいつ、ここが好きだなんて言った？ はあ？ ふざけんなよ。あんたに言われるまでもないんだよ。こんな気持ち悪い世界、誰が好きで」

「だったら」

「だったら、なに？ あんたが、日本に戻れるような凄いなにかでも作ってくれんの？ 無理でしょ。今は、どうにもならない。よくわかんないけど、使命ってやつを果たせば戻れる可能性はある。それを早く達成するためには、頑張るしかない。あんたみたいに、今になってもぐだぐだぐだぐだ悩んで一歩も進めないまま他の人の足を引っ張るような奴が、一番きらい。悩むのは自分だけみたいな、そういううざい態度はやめろよ」

「高原、それは言い過ぎだ」

国広が割って入る。

「下田は、誰かの足を引っ張ったことなんて一度もない。むしろ、いなかったら俺達はもっと早く崩壊していた」

それから、下田に向かって言ってくる。

「気持ちをよくわかる。でも、高原の意見も正しい所はあるんだ。誰だって、帰りたいと思ってるさ。それに、俺も怖い。正直、あれにま

た挑むなんて本当はやめたいくらいだ。誰かに任せてしまえばいいって、何度も思った事がある。草野だって、そうだろう?」

下田と高原を見比べて、彼は答えた。

「あ、ああ。俺のはさ、ほら、空元気みたいなものだよ。実際、あの時は最後の方ちびつてたし。って、何言わせんだよ!」

沈黙。

草野はすぐに笑いを引っ込める。

薄々わかっていた。高原が、自分の態度を前からよく思っていないことは。我慢をしてくれていたのだろう。今までは、一応、上手くはいつていたから。

「でもさ、これからはわからないかもしれないじゃん。下田が甘ったれたままでいたら、近いうちに絶対ろくでもないことになる。あたしはそれがいやだから言ってるの。先のこととも考えてよ」

「そ、そんなに割り切れるものなの? 僕は、できそうにない」

「だ、か、ら。あんたが悩むのは勝手。でも、他の奴にまでそれを押し付けんなってこと」

「押し…、そんな言い方しなくても」

「あー、もう。いらつく。もつとちゃんと喋れ。あんたの事情は知らないけど、こつちだって帰りたい理由くらいあるっつもの。そのためにも、頑張ってるんだろ」

「僕達が、それをやる必要なんて」

「他人任せにしたって、何も進まないし。実織を助けたとかいろいろ聞いてたから、意外と勇氣あるんだって思ってたのに、なんだ、別にそんなこともなかったんだ」

「二人共、やめろ!」

国広の怒鳴り声で、応酬は止まった。彼は長く息を吐いてから、鎧を脱ぎ始める。

「今日はもう、休むんだ。口喧嘩をしたって、何もいいことはない。…明日、ちゃんと話し合いをしよう。皆で。解散だ」

いつになく淡々とした口調で、下田と高原を見てから背を向ける。当たり前のことかもしれないが、一番精神的に疲れているのは国広だ

ろう。この世界に来て、皆をまとめようと頑張っている。

「行くうぜ」

草野が言ってくる。もやもや感情をもてあましたまま、下田はそれに従った。最後に高原の方を見たが、彼女は既に他の女子二人と一緒に歩き始めていた。怒りを含んだ早足で、久慈と芳野は慌ててそれに追いつこうとしている。

完全に怒らせてしまった。

それでいちいち気後れしてしまう自分が、嫌になる。勇気なんて言葉は似合わないことくらい、自覚している。彼女のように、納得できない境遇も現実として受け入れようとする気概は、なかなか持てそうにないだろう。

元々、高原は自分と話すような種類の人間じゃない。明日からはどこなくなるだろうが、多分、それが自然なことなのだ。

嫌な方へと考えてしまう思考にもうんざりして、下田は部屋に戻っていった。

白い、女の人？

下田は目を覚まし、珍しくまともに眠ることができたのを知った。一度不満をぶちまけたおかげだろうか、少しだけ胸の重さが取れたような気もする。

暖かい、何かを抱いていたような感触が残っていた。抱かれていた、という方が正しいか。

それはひどく郷愁を誘うものだった。家族に、無性に会いたくない。知らない女性の面影が瞼の裏に残っていたが、もちろん、母には全く似ていない。

「おう、水でも飲むか」

草野がストレッチをしながらこちらを見た。彼はかつて朝のホームルームでいつも寝ているような男だったが、今は生活のリズムを整えているらしい。

「うん。おはよう」

冷たい水を喉に流し込み、伸びをしながら体を覚醒させると、ちょうど扉を叩く音が聞こえてきた。

「いいぞ、開けて」

草野が言うのと、扉が開いた。中に入ってきた人達を見て、下田は寝起きの状態の自分を恥じた。もう少し、早めに起きておけばよかった。

国広に続いて、女子三人も部屋を見回している。高原は、下田の方を見ようとはしていなかった。ここに来たのは自らの本心ではないことを、表情ではつきりと伝えてきている。集まることは知っていたものの、まさか、この部屋でということとは予想していなかった。

「あんな女子の方と変わらないね」

「草野さあ、早く上着ろよ。お前の乳首なんて誰が得すんの」

「俺のファンである、全ての女性かな…」

国広は床に座り、笑いを収めて言った。

「こういう改まった感じで集まるのは初めてかもしれない。俺達は同じ隊として、正面から話し合うべき段階になっていると思う」

冗談を言う雰囲気ではなくなり、全員が思い思いの場所で国広の言葉聞いた。

「で？ それはつまり、皆で下田を慰めようってこと？」

高原は、面倒そうに一瞥してくる。反感よりも申し訳なさが先に立って、俯いた。

「違うよ。そもそも、下田と高原がどっちが正しいかなんて、どうでもいい。二人共、当たり前前のことを言っているからだ。そんなことを話し合ったって、実りが無い」

「でもさ」

反論しようとした彼女を。静かに国広は見つめる。それで、続く言葉はなくなった。

「痛感したのは、俺達はお互いに知らないことがたくさんあるってことだ。このメンバーが集まったのは、何のためかな。現実には、戻るためだ。なら皆で目的をちゃんと共有する必要があると思う。これから、一人一人、帰ることができたらまず初めに何をしたいか、言っ

ほしい。それだけでも、きつといい影響があるはずだ」

そう言われても、すぐに話そうとする人はいない。結局、これは、話し合いではないのだ。ある種儀式めいた、結束を高めるだとかそういうことのためのもの。

下田は、何をしたいかななどとつくに決まっていた。ただ、それをこの場で話すかどうか。進んでしようとは思えない。半端な同情を買って、楽になるとは考えられない。

「って言われても」

「うーん」

久慈と芳野も、微妙な顔で首を傾げる。

皆の気が進まない様子を認めた国広は、何でもないことのように口を開いた。

「俺は、なによりもまず、会いたい人がいる。家族よりもだ。実は、もう四年くらい付き合ってるんだけど。他校の先輩で、なんていうか凄く一緒にいたくなる人なんだ。早過ぎるだろうけど、結婚も考えてる。同じ学校の人に言うのは、これが初めてかな」

これに対する反応は劇的だった。

まず、芳野が叫んだ。それに連鎖して久慈も甲高い声を発し、高原に至っては心配になるほど血の気が引いている。

「ええええええええええ？」

「きゃあああいやあああああつ！ うっそおおおおお」

「おーおー、初めからとんでもねえ爆弾だな」

「なんだあたし、まだ寝てたのか。早くさめろ、さめろこんな悪夢」

国広を狙う異性には、枚挙に暇がない。また彼が告白されたなんて情報が、関わりのない人間にも入ってくるくらいだ。誰と付き合うことになるかは、なかなかの関心事だっただろう。それが今、全てまやかしだったと証明されたわけである。

「こんな感じで、皆も頼むよ」

「うん、まあ」

「ねえ祐馬君、嘘だよ、ね？」

「そういう冗談も言うんだ。いがーい」

るのは知ってる。できれば、教えてくれないか」

状況に納得できていない思いがどこかにある。だが、今までの自分の思考があまりにも後ろ向きであったことは理解し始めていた。誰だって帰りたいとは思っている。その感情を押し殺し、今の立場で前に進もうとする人にとっては、自分の態度は気分の良いものではない。それこそ、この先皆の足を引っ張ることにもつながりかねないのだ。

「う、うん。話すよ」

気を遣われるのはいい。話すことで、負担も軽くなるのではないか。下田はこの時初めて、彼らを仲間だと認めた。知らず知らずのうちに己の殻に閉じこもろうとしていた。それではきつと、育ててくれた人も悲しむ。

「僕は、帰ったら、病院に行く。そこにお母さんが入院してるんだ」
そこで、高原がやっと顔を上げた。その反応も置いておき、下田は自分のことを話し始める。

高校に入った年の、六月だろうか。彼が幼少時に父を失くしてからずっと、女手一本で育ててくれていた母が、倒れた。その時はすぐに救急車を呼んでことなきを得たが、問題はこの後に起きた。

検診で胸のしこりを訴えていたので精密検査をしたところ、かなり大きな腫瘍が見つかった。

乳癌です。末期に近い。転移するのも時間の問題でしょう。すぐに入院の手続きを。

そう医者が言った時、母が心配したのは自らのことではなく、費用のせいで下田の進学が危うくなることだった。泣きながら何度も、自らの不甲斐なさと、片親であることを謝ってきた。

違う、と下田は思った。母は年に一度の健康診断を、ここ数年受けていなかった。毎日休みなく、仕事に追われていたからだ。彼の学費などを稼ぐために、副業のパートをいくつも入れていた。彼がいなければ、もっと早い段階で癌を見つけれれば済むのだ。そんなことを言うと、今度は凄惨な剣幕で怒られて、最後にはまた泣かれた。

「その腫瘍を取り除く手術は、かなり難しいらしくて。失敗すれば、命

も危ない。成功しても、その後の再発の可能性を失くすものではないんだ。…きつと、もう、その手術は終わっていると思う。僕は、どうなったのか知りたくてたまらない。一刻も早く帰って、お母さんの無事を確かめたいよ」

なるべく、事実をそのまま述べるように淡々と話すつもりだったが、最後の方は語尾が震えるのを押さえられなかった。麻酔で朦朧もうろうとした中の、弱々しい笑みでもいい。顔を見て、手を握り、その日起きた他愛のないことを話すだけでも、十分だ。母が生死の境をさまよっているのに、側に居られないのはどうしようもなく辛かった。

下田の話に、まともな反応はしばらく返ってこなかった。感情を落ちつけてから周りを見ると、彼は驚いた。他の人も全員、彼女に注目している。

ひ、と短い呼吸音がした。

「こ、これは違うから。そんなんじゃないのっ」

「ちとせ、泣いてんの？」

「くしゃみ、くしゃみしただけ」

高原が、一番何かを揺さぶられたようだった。言い訳は苦しく、目の縁を赤くして、顔を歪めている。頬には滴が流れ、口元はローブの袖で隠されている。嗚咽がときおり耐えきれずに漏れていた。

「どうしたの？」

国広が尋ねると、久慈が泣いている彼女の頭を撫でながら答えた。

「んー、まあ私と恵美も最近聞いたんだけどね。ちとせ、母親亡くしてるんだ。下田の母さんとは違う病気だけど。中学生くらいの時だったらしいよ。それからずっと、父親と二人で暮らしてるんだって」

「あ、あかねっ。余計なこと」

「どこが？　ここに聞かれて嫌な人なんていないっしょ。ティッシュあげようか。ちよつと鼻水出てるし」

「うん…」

意外な思いで、下田は彼女を見た。失礼かもしれないが、傍から見れば、高原は何の不自由もない暮らしをしてきたかのように思える。

そこだ。すぐに彼は反省した。今考えてみれば、自分は彼女たちを

表面的な観点しか捉えていなかった。先入観を持たれることは嫌がるくせに、自分がそうすることは無意識のうちに許してしまっていた。

「し、ししもだ」

高原は涙をぬぐって鼻をかむと、這うようにして近づいてきた。

「は、はい」

「その、ね。昨日は、ちよつと、言い過ぎたかも shouldn't。あたし、そういう所が、駄目だからさ」

「ぼ、僕の方も。色々と迷惑を」

「同情をしてほしくないのは、わかる。でも、でも辛いね。あたしもママが亡くなった時にはたくさん泣いたよ。もつといろんなこと話したかったってずっと思ってた。下田の母さんは、絶対に大丈夫。手術は成功してる。信じてる」

「ありがとう」

彼女の瞳はいたって真剣だった。

何が、自分とは違う人間、だ。

彼女のことを少しも理解していない段階で、決めつけるのは愚かだった。自分以上に繊細で、思いやりのある一面も持っている。

その後湿っぽい空気が落ち着くまで、また静かな時間が続いた。貰い泣きしてしまったのか久慈と芳野も目を潤わせていた。

「ママって、呼んでたのか」

「あ?」

「黙れ」

「お前には話してないからな。その耳潰しとけよ」

「本当に、俺が、悪かったです。許してください」

流れるような罵倒を浴びせられている草野が、さすがに可哀そうだった。

高原が、溜息をついてから話します。

「もうなんか、ほとんど話しちゃった感じだけど、あたしもまずは家族に会いたいかな。うちのパパ、だらしないやつだから。早く帰ってやらないと」

「この見た目でファザコンってのがウケるよね」

「そんなんじゃない！」

「はい。じゃあ次、私ね」

久慈が手を上げる。

「家族もそうだけど。部活も気になるかな。バスケのセンターって大事なポジションだからね。先輩たちにも迷惑かけてるだろうし。またボールいじりたいなあ」

三人の中では一番背が高く、確かに向いていそうだった。そして、これは絶対に口には出せないが、見た所一番胸が大きいのも久慈だ。どنگりの背比べ程度の差でしかないとはいえ。

「スポーツやってる女子も、いいもんだよな。それに、胸もお前ら三人の仲じゃあましな方だし」

一名、実際に言ってしまった、再び蹴られている男もいる。

草野の脛を踏みつけた後、芳野が話した。

「私の夢って、美容師なんだ。二人は知ってるだろうけど。だから、今も誰かの髪を切りたくてたままないの。こう、人の身だしなみを整えるって達成感があるじゃん」

「サイコパスじゃねえか……」

「もう、喋らない方が良いと思う」

高原が、自分の髪を触って満足そうに頷く。

「あたしも恵美に染めてもらったからね。下田と祐馬君も切ってもらいなよ」

「え……俺は……？」

「そうだね。仕事だから、全力でやるよ」

一人一人、戻るべき理由がある。それを知っただけでも、何かが違うって見えるような気がした。

自分がいつもいる所とは違う、別の世界に行けたらなんて想像する人はきつと多いだろう。でも、結局、居場所というのは初めから決まっているのだ。見たこともない光景に胸を躍らせるのは最初だけ。自身が慣れ親しんだ場所を恋しく思うのは、当然のことだ。

「皆、最後に言っておきたいことがある」

国広が全員の顔を確かめるようにして見ていく。

「ここは、俺達の常識とは違うことがたくさん起きる世界だ。それでも、惑わされちゃいけない。俺達は、あつちの人間なんだ。例え不死身になったとしても、命を一番に考えよう。価値観まで、ここに染まったらいけないと思う。互いに足りない所は補い合って、いつか帰るとその時まで、無事でいよう」

そして、拳を前に突き出した。

すぐに草野が合わせ、女子達も続いた。

落ち着かなくなるような、気恥ずかしさを感じる。だが今はそれも、悪くはないと思える気分だった。

全員で手を合わせ、互いの思いを確認する。下田も自然に笑顔になっていた。思いを共有できる者達がいるだけで、こころも、違うものなのか。

「まずは、あの亡者を倒そう」

肩の重みは、もうなくなっていた。

15. 深みの聖堂

億劫おっくうになっても、自分の首を狙ってくる刃はかわす。側面に回りこもうとすると、もう片方の手に持っている半透明の盾が迫ってきた。

(おい、ノミ)

『どうした』

(何か面白いことでも言えよ。俺を退屈させるな)

盾から黒い霧が噴き出すが、それをものともせず振るわれた拳が、相手を簡単に吹き飛ばしていく。

武装した亡者、ダークレイス達は、警戒するように下がった。

『うーんと、じゃあ、しりとりでもしようぜ』

(いいぞ)

『さいふ』

(ふとん)

『…』

(…)

『終わっちゃったじゃねえか』

(は？ 俺が、なんで、お前如きに付き合っつてやらなきゃいけないんだ？)

『糞野郎にもほどがあんだろ…』

真ん中の一体に向かって跳躍し、剣ごと蹴りで体を貫いた。鎧に食い込んだ足を抜こうとしている間に、残った二体のダークレイスが同時に斬ってくる。

それを両手で受け止めて、刃を握り、ぶち折った。向かって左はひじ打ちで顔面を砕き、残ったもう一方は、すぐさま背後に回ってから、背中に手を突っ込んで内臓を引きずり出した。

(バックスタブ)

『相変わらず凄い力だ』

(こいつらも雑魚だし。集団で向かってこようとするのがいい証拠ですわ)

最初に殴り飛ばしたダークレイスの手から落ちた、太い刃の片手剣

をしげしげと見つめる。その柄を掴んで拾おうとすると、神経に直接響くような痛みが走った。

（おぐつ、これも駄目かよ。ダークソードは使ってみたかったんだけどなあ）

『いちいちそんなことばつかしてるから、ここに来るまでにアホみたいな時間がかかったんだろ』

不死街を抜け、生贄の道を走り、清拭せいふの小教会に至るまで六日経っていた。火守女の瞳を取り戻すという目的を持っていた貴樹だが、ダークソウルの世界を自由に探検できる機会を貰って、浮かれないわけがない。

途中で遭遇した敵をちゃんと観察してから、一体一体倒していった。特に不死街の塔の地下にいた、イルシールの外征騎士はそれなりに時間をかけた。倒して手に入るイルシールの直剣も拾えなかったので、腹いせに粉々に砕くことになったが。

とはいえ、それだけが時間のかかった理由ではない。彼の体感では、ゲームであつた時よりも、この世界は数倍ほど広くなっている。記憶にない道や、操作の関係上行けなかったルートも選べるので、あまり考えずに進むと、予想以上に日数がかかるのだ。

気になるのは、教会へ向かう途中で絶対に出会はずのボス、結晶の古老がいなかったことだった。ファランの城壁にいたはずのダークレイスがかなり広い範囲を動き回っていることを考えても、やはり、敵の配置についての知識は意味をなさないようだ。

教会内に入ると、貴樹は誰もいない空間の中で立ち往生した。

（ゲール爺もいねえな。アリアンデル絵画世界にも、絶対に行きたいんだが）

篝火もない、どこか物足りない光景を見てから、左の方にある大扉に向かった。手で軽く押してもびくともしない。固く施錠されている。

だが、扉自体を壊してしまえば、何の問題もなかった。貴樹としては、深みの聖堂に正面から向かうつもりは全くない。この扉の先はショートカットになっており、聖堂内につながっている。これで道中

の障害を大きく減らすことができる。

こうして、聖堂への侵入に成功した。

『瞳の場所は、わかっているのか』

（主教の部屋だろう。ロイスが守ってるらしいからな。そいつをぶつ殺して持ち帰ればいいだけよ）

『勝てんのかよ』

（余裕余裕）

内部の構造自体は既に把握しているため、進むのは容易かった。主教に侵入を気づかれると面倒なので、徘徊している聖職者や騎士を静かに処理していく。聖堂の騎士はその身丈に匹敵するほどの大きさである長方形の盾を構えていて、攻め手に苦労した記憶があった。が、今の彼だと力押しで十分だ。防御ごと粉碎できる。

やがて、大きな広間に出た。床の一部が黒い泥に覆われていて、その中を腐れナメクジが蠢いている。周りの壁には、蛆虫が巨大化し手足の付いたといった姿の生き物が張り付いていた。

そして何よりも目を引くのが、両端に配置された二体の巨人だ。足を鎖でつながれ、さらされた肌も所々が傷ついている。今は微動だにせず、どうやら眠っているようだった。

深みの主教達の居場所は、この広間を渡った先にある。今すぐに向かつてもよかったが、動く人影が目に入り、彼は足を止めた。

横にある階段を上り、さらに進んだ所に、妙な鎧を着た人物がいた。兜もまるで、玉葱のような形になっている。

貴樹はその人に気づかれないうちにゆっくりと近づいていき、偶然を装って声をかけた。

「ジークバルドさん、何してるんですか」

ものすごい勢いで振り返り、男は剣に手をかけたまま貴樹を見た。

「ん？ おお、タカキではないか。なに、敵状視察だ。こういった潜入も、太陽の戦士で担うことが多いんだよ。貴公こそ、どうしてこのような場所へ？」

「探し物です。どうやら主教の部屋にあるらしくて」

難しそうに、腕を組んだ。

「ウム。手伝ってやりたいのは山々だが。こちらも今、困っていることがあつてな」

「何ですか？」

貴樹が言うと、ちようど反対側の場所に指を差した。

「あそこへ渡りたいのだが、手段がないのだ。この仕掛けを作動させることも考えたのだが、罠の可能性もある。どうしたらいいものか」
近くにあるレバーを動かせば、向こうへ行くための道が出来上がる。それは確かなことだ。だが、口で説明はせずにあえてこう言った。

「僕がやってみましょう。ある程度の危険は仕方がないですよ。まずかつたら、すぐに逃げればいいだけの話です」

「なるほど。それもそうだな。では、お願いするでしょう」

貴樹は前に出て、レバーに近付くと、屈んだ。用心するように観察した後、取っ手の部分に両手をかける。

『おい、タカキ』

ノミの警告を聞くまでもなく、既に彼は動いていた。瞬時に後ろへ向き直ると、肩を叩き斬ろうとしていた大剣を弾き返した。怯んだ相手の懐に潜り込み、籠手を掴んで前に投げ飛ばした。

カタリナの鎧を着た男は初め何が何だかわからない様子だったが、己の窮地に敏感に反応し、何とか着地には成功する。

「くっそ。てめえ、何しやがる」

兜を投げ捨て、出てきた顔はジークバルドとは別人だ。

「殺そうとしてきたら、やり返すだろ」

「滅茶苦茶だ。くそが、どうしてばれた。この間抜けな姿をしてれば、誰だって油断するだろう」

パッチというのが、この男の名である。荒廃した世界ではよくいる、自分の生存を第一に考えて行動する人間だ。ジークバルドの真似ははつきり言って完璧だったが、展開を知っている貴樹にとっては茶番でしかない。記念すべき一週目で騙された時から、このキャラクターだけは次に見つけたら即殺す対象にしていた。つまり、
『クスってわけだな』

(俺はこういう、人を騙したり、不利益を被らせるような野郎が大嫌いだ。見ているだけで吐きそうになる)

『あ、うん』

自分のことを棚に上げて他人を批判しているクズには言われたくないものである。鏡を見るたびに嘔吐しなくてはいけないとは、なかなか困難な人生だ。

鎖が擦り合う、耳障りな音が鳴った。見れば二体の巨人が立ちあがっている。

(やつべ。ノリでやったけど、後のことを考えてなかった。あいつを囮にでもすつか)

そんな貴樹の思惑もすっかりと伝わったのだろう。パッチはだみ声で色々と汚い言葉を並べ始めた。

「糞め！俺を見捨てるつもりか。はっ、何が灰の英雄様だ。俺以下の畜生だな。てめえなんか泥にまみれて死に腐りやがれ！」

(はいはい。勝手に死んでてね)

まともに相手をする気すらせずに、貴樹は巨人を避けるようにして進み始めた。幸いにもパッチがみつともなく騒いでくれたおかげで、敵の注意は全て逸らされている。主教達にも騒ぎは伝わっただろうが、逃げられる前に追いつけばいいだけの話だった。

ここで、一つの事実を失念していることに彼は気がつかない。聖堂の上層部を本拠地とする、ある集団の存在を。

「止まるがいい」

気がつけば、眼前にまで巨大なソウルの奔流が迫っていた。顔の前にとつさに両腕を出したが、その勢いの強さに押され、吹き飛ばされてしまった。

広間の床に、落下する。受け身を取ったものの、その必要がないことに遅れながら気がついた。これくらいの距離なら、頭から落ちてても大丈夫だ。身体の強化は著しい。

「ヒヒヒヒ、ざまあみろ、てめえも道連れ、だ……」

パッチもまた同じ方向を見て、顔を青くした。丸見えの頭皮から冷や汗が流れ、一歩二歩と後ずさる。

貴樹に攻撃した者は、常軌を逸した格好をしていた。その被り物は黄色い布が幾重にも巻かれ、上に高く伸びた茸のような形を取っている。ちょうど顔のあるあたりには二つの小さな穴があいていて、そこから静かな瞳が覗いていた。

「侵入者は二人か。一人は、見た顔だな」

そして話しているのが、その横に居る男だ。黒のハットをかぶり、顔は演劇にもでも使うような仮面で覆われている。

「やべえ、やべえ……。くそ、暗室の奴らに見つかっちゃった」

前者が、黄色指のヘイゼル。

後者が、薬指のレオナルド。

どちらも、ロザリアの五本指と称される集団のメンバーである。生まれ変わりを是とする考え方で、火継ぎという世界共通の使命に囚われることを嫌っている者達。立場だけで言えば、今のところ確かに、敵と言えるかもしれない。

『八割を切った。もう食らわないようにしろよ』

(痛いな。あの魔術には警戒しねえと)

あれだけで、耐久値が十三%以上も削られてしまった。

押さえるようにしても、動揺は大きい。レオナルドはゲームでは祭壇場において、イベントを進めなければ敵対することはない。そしてヘイゼルはというと、そもそも生きた姿で登場はしていないのだ。白霊という、サポートキャラで戦いは目にしたことがあるとはいえ、どんな手を使ってくるかは予想できない。

レオナルドが、不快そうにパッチを見下した。

「盗人。またお前か。許可もなく侵入を繰り返す」

パッチは両手を擦り合わせて、はいつくばるように頭を下げた。

「へへ、へ、私のような者は毎日生きるだけでも大事でございました。物資を得ることは最低限必要なことなんですよ。貴方がたが気にするような存在ではありません。どうかお目こぼしを」

「火継ぎの祭祀場に寄生している分際でよく言う。小者でも、敵側の小者だ。潰しておくのに、躊躇う理由はないだろう」

追いつめられたパッチは、隣にいる下着だけの変態を指差した。

「わ、私めがここに来たのは、この見るからに怪しい者の動向を探るためでございます。見逃してくださるのなら、こいつを差し出しましょう。これでも灰の一人です。意味は大いにありますとも」

レオナールが、今度は貴樹の方を向いた。

「ふむ。お前、何の用でここに来た？ 服でも欲しいのか」

いくらでも、選択肢はある。

しかし力押しでこの場に居る全員を殺そうとしても、そうなる前に鎖につながれている巨人が解放されるだろう。主教も現れるかもしれない。ヘイゼルの魔術にも気をつけなければならぬことも考えると、無駄な消耗を強いられることは確実だった。

一度問答無用で襲われはしたが、冷静になろうと彼は努めた。

「欲しいものがここにあると思いい、やって来ました」

「それは何だ」

正直に言うことにする。

「火守女の瞳です。深みの主教が守っているらしいので、どうにか突破したいんですが」

予想外の答えだったらしく、レオナールは顎に手をやった。

「これは、珍しいものを求める。一体何に使うつもりだ？」

「持ち主に返すだけですよ」

可笑しそうに、目を細める。

「ほう。物好きな奴だな」

（どこが？ その幼稚な頭じゃ、ひもりんの愛らしさを理解できないのもわかるけどよ。そういう脳足りん共は全員死ねばいいと思うぜ）
おおよそ、火守女のこの世界における扱いは理解していた。彼には全く納得できないことではある。

「ですから、貴方達と戦うつもりはありません。目的の物を得られたら、すぐにでもここから出ていきます」

レオナールは半分も聞かないうちに鞆に納めている剣を抜いていた。その先を貴樹へと向けてくる。

「そうか。ではお前が神食らいを下した奴だな。わが主より抹殺の命令が出ている。死んでもらおうか」

(ち、結局こいつらもエルドリッチとつながってんのか)

誠意を持って話したのが仇になったようだ。この二人に関しては、特に思い入れがあるというわけでもない。倒しても、問題はなかった。

「れお、なるううううう」

レオナルドが前に出ようとする、ヘイゼルがそれを止めた。

「何だ」

あーだの、うーだの言葉以前の何かを発してから、ヘイゼルは首を振った。まるでまとわりつく何かを振り払うようなしぐさだ。

「まじゆつが、きいていない。あのおとこには、なにか、か、とくしゅ。じゅつが、かかってる、る」

「そうだな。用心しよう。仮定するならば、目には見えぬ魔力防護といったところか。なに、物量で圧倒してしまえば、限界は訪れる」

その言葉で、がこん、と大きく鎖が外れる音がした。貴樹の予想通り、巨人たちが解き放たれる。目を両方とも潰されているようで、がむしやらに真つすぐ中央に向かって突進してきた。

『どうする』

(いけそうな気もする。でも慎重が一番だ。できればもう少し聖堂を探検してみたかったけど、この場は逃げて、さっさと瞳を回収するにかぎるな)

目の前の壁を飛び越え、回廊に入ろうとすると、パッチがしがみついてきているのに気がついた。

「おい、おい俺を見捨てる気か？ お前が巻き込んでるんだぞ。助けろよー！」

(離れるこのハゲ。誰が野郎の命なんて拾うか)

腕力で無理矢理引き離すこともできるが、パッチの着ている鎧の事に考えが及んだ。

「その鎧は一体、どこで手に入れたんだ？」

「な、何でこんな時に」

「答える。ジークさんから盗んだのか？」

「そんなこと、しねえよ。やるわけねえだろ。複製だ」

心配は無用だったらしい。

(じゃあ、いいな。こいつは死んでもいいや)

自分が見捨てられようとしていることに勘付いたのか、パッチは耳元で何度も叫んでくる。取るに足らない人間の戯言だと切り捨てるのは簡単だったか、その中に火守女を侮辱する内容が含まれていたの、一気に頭へ血が昇った。

本気ので、パッチの体を投げ飛ばす。それで死んでくれればよかった。しかし、そこに悪運が作用したのか、飛んでいった先は巨人でもレオナルド達の方でもなく、真上の天井だった。さらにそれすらもぶち破り、パッチは外へと消えていった。

(おお、人間ホームランって気持ちいいいい)

爽快な気分浸っている場合ではない。巨人の足が迫ってきたので、貴樹は瞬時に回廊へと駆け登った。そして振るわれる強大な拳もかわして、主教の部屋がある方向へと走る。

その行き先を、低く笑いながらレオナルドが立ち塞がる。

「なるほど。魔術だけではなく、身体能力にも秀でているようだ。だが」

(いや邪魔なんで)

何やらさらに言葉が続きそうだったレオナルドを、横へ殴り飛ばす。反応はできていたようで、剣で受け止めてはいたものの、その刃は砕け散っている。力の全てを殺しきれず、下へと落ちていった。

「なる」

ヘイゼルがソウルの太矢を発現させ、貴樹へと疾走させる。日本に居た頃の彼だったら何もできずに食らっていた程の速さだ。銃弾にも匹敵する。しかし、実際は全ての矢を掴んで、真つ二つに握りつぶしていた。

「ありえ、」

顔の中で唯一さらされている二つの目が驚愕で開かれる。接近してくる彼に気がつき、我に返って巨大なソウルの盾を顕現させた。それを素早く、何層にも重ねていく。

(俺の知らない魔術を使ってんじゃねえよ。盾盾盾ってチキンかおめ

えは。きのこめ)

ただ無心に、全力で頭から突っ込んでいった。おそらくグンダの攻撃でさえ半日は持つような防壁が、紙きれのように破壊されていく。その常識はずれな光景に動けないまま、ヘイゼルは吹き飛ばされて、巨人の頭に激突した。

普段、こき使われている恨みが出たのだろうか。もはや巨人たちは貴樹を狙うことはなく、新たに落ちてきたレオナルドとヘイゼルに執心している。彼らもその対応で意識を割かれているようだ。今が機会だと、貴樹は大広間を走り抜けていった。

主教達の部屋の前には、大きな祭壇がある。本来は、そこへ行くのに大きく回り道をしなければならぬのだが、プレイヤーとしての制限を受けていない今は、そびえる段差をよじ登る選択肢もある。

祭壇へと続く道に顔を出した途端、炎が飛んできた。すぐさま横に転がる。顔を上げて正面を見ると、歓迎の準備が既に万端なことを理解した。

(うわ、めんどくせえ)

聖堂の騎士が前を固めている中、その後ろに深みの聖職者たちが並んでいる。中心に居る、最も立派な装飾がなされた僧衣の男が、憎々しげに睨んできた。

「現れましたね、卑しい灰。よくもエルドリツチ様を。貴様の五体を引き裂いて、その臓物の全てを捧げるとしましょう」

「僕としては、ただある物を取りに来ただけなんですけど」

主教、ロイスは薄く笑う。そして、懐から透明な容器を取り出した。「このことですね」

中は液体で満たさされていて、二つの丸い物体が漂っている。遠めだとそれ以上はわからなかったが、火守女の瞳で間違いないようだった。

「渡すわけにはいきません。そもそも、求める意味すらないではありませんか。ここで捕えられ、死ぬ運命が待っていますよ」

その言葉を合図として、大剣を持った騎士たちが迫ってくる。貴樹は拳に手をかぶせ、ぼきぼきと指を鳴らす。苛々が抑えきれないよう

飛んできた炎を掴み、近くの手ごろな顔に押し付ける。その聖職者はのたうちまわり、全身を痙攣けいれんさせた後、消滅した。自分達の呪術で殺されるのも、可哀そうだ。彼らのしてきたことを考えると、むしろ当然の報いだとも言える。

呪死が効かなく、さらには手駒がほとんど倒された今、ロイスは進退極まっていた。

「な、何だ貴様は。なぜ、平然としていられる。この化け」

続く言葉は、肉が潰れた音にかき消される。勢いよく吹き飛んだ聖職者の体がぶつかってきて、そのまま祭壇の方に全身を打ちつける。

「やば、」

焦ったように、貴樹が寄っていく。直前まで火守女の瞳を持っていたのがこの男なのだ。今ので壊れてしまったら、目も当てられない。

動けない様子のロイスの首を掴み、引っ張り上げた。

「瞳を渡せ。ん？　ってか奪えばいいだけだな」

気色の悪い男の懐をまさぐるのに気が進まない思いで、手を突っ込む。瞳の入った容器はすぐに出てきた。意外に丈夫らしく、割れていない所もない。

「化物、め…」

ロイスは圧倒的存在を前にしても、闘志を絶やしていなかった。貴樹の知ったことではないが、主教達は、エルドリッチにかなりの忠誠を抱いているようだ。

（こいつも、不死身なんだろうな。後々面倒になってきそうだな。ここで、そのからくりを聞き出す必要があるか）

「フフ、ここで敗北しようとも、いつか必ず我らは貴様を葬り去りましょう」

『お、おい、タカキ』

（んだよ）

『悠長にすんな！　残り火の耐久値がゴリゴリ削られてんぞっ！　やばいって』

（それを早く言えやあああああああああ）

「憶えておきなさい。これが我らの力の全てだと、おも」

ロイスの顔が握り潰される。と、同時に漂っていた呪いの霧が晴れていった。

祭壇の周辺は、欠けた椅子の破片などが散らばっている。血のあちこちに飛び、凄惨な光景ではあるが、死体が全て消えている所はまだよかった。ソウルは全て、貴樹の中へと集まってくる。

(一体どういふことだよ)

『あの呪死結果は、ちゃんとお前にも効いていたってことだ。耐久値は三割を下回った』

(はあああああああ？ あれだけの時間で？ もう三十%しか?)

ならば、常人ではおそらく触れただけですぐに正気を失い、死んでいただろう。その中でまともに動いていたのが、残り火の常識から外れた力をさらに強く印象付ける。しかし貴樹からすると、聖堂の攻略でここまで消耗したのは、完全に想定外だった。

(くそ、これからはもつと慎重に行動しなきゃいけないな。残りの三割で、最終目的達成まで状態を維持したい)

『そこまで?』

(俺の予感では、次に残り火状態の終わった時が一番の正念場だ。どうなるにせよ、あらゆる危険が高まる)

『わざとダメージを受けてから、一週間祭祀場の中にこもってればいいじゃないか』

(負け犬の思考だな。後手になんか回るわけねえだろ。この俺が)

大きな物音に振り返れば、巨人が呻いて、頭を押さえている。ヘイゼルだろうか、そこへさらにソウルの矢が何本も刺さっている。

(頃合いだ。もう交戦は控える。さっさとおさらばだ)

『どこから外に出るんだ?』

(馬鹿正直に出口を目指す必要はない。適当に壁をぶつ壊してここから離れる)

火守女の瞳が入った容器を大事そうに抱えて、貴樹は走り出した。

なんとも乱暴に聖堂から出た彼は、そこから少しも休まずに帰路を急いだ。行きとは違う。一刻も早く火守女の元へ戻りたい彼は、途中

で会う敵も無視して進み続けた。

そのおかげか、生贄の道の中ほどまで、二日で到達することができた。

ここで、剣戟の音を耳にした彼は、足を止めた。ちようどこの辺りは城塞になっていて、ダークレイスを一体見かけた記憶がある。あまり強そうではない個体だったので、相手にする気にもならずに通り返すだけのだ。

「し、縛った。やった！」

近づいてみると、紺のローブをきた女子が叫んだ。高原の声だ。その周りに居る者達も全員、彼の生徒のようだった。ダークレイスに対して、六人で挑んでいる様子。皆は一様に、酷く消耗している様子だ。下田と芳野は端の方でへたり込んでいる。

ダークレイスは盾を持っていて腕と、胴体が縄で括りつけられていた。それでも、国広と草野は攻めきれずにいるようだ。

「分身が、突っ込むから、お願い！」

久慈が二人いる。かと思えば、片方が何の工夫もなく突進していき、ダークレイスの剣で貫かれていた。そしてすぐに消えていく。本人ではないということか。匣が作り出した隙に乗じて、草野がダークレイスの腕を斬り飛ばした。これで、盾はもう使えなくなる。

「皆、頑張れ。もう少しだ」

追い詰められているのを悟ったのか、ダークレイスが急に暴れ出す。欠損した腕の根元から黒い霧を大量に出して、相手を近づけないように張り巡らした。警戒して動けない国広達は、しばらくその場にとどまっていた。

遠くからでも攻撃できる手段は残されていないようだ。魔術や呪術を使える者は疲弊している。今の状況に至るまでに、相当な時間戦闘をしていたらしかった。

「仕方ない」

国広が目の前の空間を指で触れる。すると、彼の手元に黒い何かが出現した。良く見てみれば、拳銃の形をしている。それを構えると、息を止めてから、引き金を引いた。

銃声が響いた瞬間、貴樹は顔をしかめる。

ダークレイスの頭に穴が空き、前のめりに全身が倒れていった。霧も晴れ、その体が消滅していく。その事実を呑みこむような間があったから、最初に草野が叫んだ。皮切りにして、歓喜が他の者にも伝染していく。

『すげー喜んでるな』

(興醒めだわ。何だあれ。世界観に合わない物出しやがって)

『お前以外の灰には、いろんな能力が与えられているみたいだな』

(カスに何を上乗せてもカスだよ。雑魚に勝って調子に乗る雑魚とか、滑稽でしかないわ。さすが凡人共、予想を一切超えてこない)

しかし、多少面倒になったことは否めない。前に、生徒達を食べ物を自在に出しているのも見たことがある。もしそれが万物を創造できる力ならば、敵対した時に障害となり得るだろう。

(こっちの不死身に関して、対策を考える必要があるな。いくら潰しても湧いてくる虫とか、俺の純情な心に悪影響与えること間違いないし)

どの口が言っているのかは置いておき、貴樹はもう興味も失くして、城塞から離れた。意識は既に火守女にしか向いていない。彼女の反応を考えるだけで、来た道に戻る面倒さを忘れることができた。

さらに一日半ほどかけて、祭祀場にまで戻ってきた。

幸い生徒達の姿はない。外か、地下の修練場にいるのだろう。

「その手にあるのは、彼女の瞳か」

石の玉座から、ルドレスが言ってきた。・

貴樹が透明な容器を前に出すと、少し身じろぎをする。

「本当に、聖堂に行ってきたのか。深みの主教がそれをさせなかっただろうに」

「殺しました。また蘇ると思いますか」

瞳の方から、貴樹自身へと視線が移る。

「灰達は、皆それぞれの目的があるということとは理解している。だが、君だけはどうにも掴めない。一体それを、何のために使うつもりだ？」

(またこの質問か。当たり前のことすらわざわざ確かめようとしてくる輩ばっかだな)

『それだけ、火守女に構う奴が珍しいんだろ』

(見る目のない奴しかいないな)

呆れる思いを隠して、事実をそのまま述べるように淡々と彼は言った。

「実際に目で見て、互いに感情を共有することが、どれだけ素晴らしいかわかりますか？」

「何の話だ？」

「彼女はきつと、今のままでも不自由を感じないでしょう。これ以上の人生はないと、満足している可能性もあります。でも、僕はそのことがもどかしくてならない。もっと幸せに生きる価値があるのに、受け止められない彼女の境遇が。初めの一步として、彼女には視覚を取り戻してほしいと考え、行動したまでです」

「その思いの源泉がわからない。出会って間もない相手に、奉仕する思いが向けられるのか」

「愛に時間は関係ないって言葉がありますよ。大事な人の幸福を願うのが、そんなにおかしいですか」

ルドレスは、思いがけない言葉を聞いたように口を閉じた。

「愛ときたか…」

宙をしばらく見つめた後、その顔には笑みが浮かんでいた。

「私は、止めはしない。己の声に従わないのは、自らを蔑ろにするようなものだ。だが、あまり火守女をいじめてやるな。彼女も火継ぎの使命に囚われた一人だ、自分ではどうしようもできないことが、たくさんあるだろう」

「僕が支えます」

「その言葉、憶えておくよ。きつと、どんな者にも、味方は必要なのだろう」

まるで貴樹を憐れんでいるようにも聞こえた。それに対して何かを言い返すという気はない。そもそも、ここで会話をしていること自体が、時間の無駄だからだ。軽く会釈をしてから、貴樹はその場から

離れた。

ルドレスは目を閉じて、玉座に背を預ける。

16. 転換点

残っていた五日間を乗り越え、下田達は祭祀場に戻ってきた。互いに話したいことはたくさんあったものの、溜まりに溜まった疲労を癒すために、解散の言葉すらおぎなりにして各自の部屋に戻った。

再び集まったのは、その翌日だ。ミレーヌに呼び出されて、篝火の側で話を聞いていた。

「これで及第点。貴方達なら、もっと上を目指せるはずよ」

「それだけですか」

草野が、何かを期待するような目で彼女を見た。

「何？」

「いや、なんていうか。頑張った見返りが欲しいなって」

「これは鍛錬の一環に過ぎない。当たり前前のことをこなしたくらいで、褒めると思う？」

「でも、ほら、いろんな人間がいるんですよ。厳しく締め上げるよりも、適度にごほうびを上げた方が、効率が上がることもあるんです」
彼がなぜ、そこまで食い下がっているのか下田は初めわからなかった。だが、前に言っていた事を思い出し、呆れた気持ちになる。あまりがつつかない方がいいのではないだろうか。

ミレーヌも同じく何かに思い当たったようで、目を細めた。

「そういえば、貴方そんなことを言っていたわね。胸を揉むだの」

「それか頬に接吻つすね。両方でもいいですけど、むしろ」

女子の目が冷たくなる。そんな中でも彼の目は期待にあふれていた。もしかして、ずっとそれを糧にして頑張ってきたのか。その執念に対し、下田はある意味尊敬の念を覚えた。自分は、さすがに彼ほどの欲求は抱けない。

腕を組んで、ミレーヌが草野の方に近付いて行った。見下ろされる威圧感に、草野もやや緊張して見える。長々と溜息をつき、彼女は無表情で言う。

「両方って、それは欲張りよ。だいたい、貴方達は一度途中で失敗しているんだから」

「はは、は。ですよ。冗談ですよ。言ってみただけで」

「どちらかにしなさい。いえ、私が決めるわ。接吻でいいわね？」

「これからも誠心誠意、精進していきます。…え？」

草野が間の抜けた声を出したのと、ミレーヌが腰を曲げたのはほぼ同時だった。髪が降りて来ないように耳の上にかけて、顔を草野の方に近付ける。唇が皮膚に触れた後、あっさりとし、彼女は元の位置に戻った。

「このくらいで何かが変わるなら、安いものね。で、他の人もしてあげればいいの？ 時間が惜しいわ」

残った他は、全員が断った。というか、何が起こったのかすら理解するのに時間を取られた。草野は寝起きの時のような顔で固まって、頬を手で触っている。

反対にミレーヌは事務的な口調で言った。

「しばらくは、各々の訓練に専念してもらおう。特に術士の人達は大事なことが待っているらしいわ。それも終わったら、貴方達は太陽の戦士、暗月の剣、そして狼血の騎士の内の一つと誓約をかわすことになる。私達の所に来てくれたら歓迎はするけど、覚悟もしておいてね。容赦はしないから」

もう用事は終わったと言わんばかりに素っ気なく踵を返すと、火守女に指示をしてから篝火に触れる。そしてその姿が消えた後も、彼女が与えた衝撃はまだこの場に残っていた。

「お前ら、どこと誓約するか、決まったか」

草野が静かに訊いてくる。

「うん、まあ、暗月の剣つてとこでしょ。私達魔術とか使う人間にとつては、最適だって聞いているし」

高原の言葉に、他の女子二人も頷いた。下田も、そうするつもりだ。国広に関しては、まだ決まっていなかった。迷っている段階らしい。

「俺は、狼血の騎士にするぜ。もう確定だかな」

普通なら茶化す話ではあったが、誰もそれはしなかった。ただ、心の中で無理だろうという意見が一致しているに違いない。草野の前

途に、幸があることを祈るばかりである。

その後は、下田と草野の部屋に集まって、皆で食事をした。ミレーヌの鍛錬をこなしていつてからは、何となく互いの距離が縮まったような気がする。自分には合わないような人種だと一括りにして敬遠していた女子三人のことも、それぞれの思いや長所を汲んで、理解できる段階になっていると思えるようになった。

「にしても、ずるいぜ国広。いつの間に拳銃なんか持ってたんだよ」
ダークレイスにとどめを刺した銃撃。今まで、彼が銃を使っている場面など見たことがなかった。

国広は左手に拳銃を出現させる。おお、と草野が息を漏らした。素人目ではあるが、本物らしい重厚感がある。触るのさえ躊躇われるような。

「弾、入ってるのか」

「うん。だから、扱いには気をつけないと」

「でもさ、おかしくないか。最初から弾があるのって」

草野と同じく、下田も疑問に思っていた。インベントリでは銃と弾は別の項目に分けられている。つまり使用するためにはそれぞれを出した後、弾を込める動作が必要なはずなのだ。しかし、あの場面では出現させてからいきなり撃っていた。

「俺も、最近気がついたんだ。一度インベントリから出した物って、またしまうこともできるんだよ。しかもそれは別の枠になって、ちよつとの操作ですぐに取り出しもできるんだ」

「マジで?」

国広の言う通りに、下田達も試してみた。石ころを出して、それをじつと見つめると淡い光を放ち始める。触れてから、収納するという意思を頭の中で浮かべると、一瞬で石ころが消える。それからインベントリを開き直すと、手持ちというタグが新たに追加されていた。

「へー、これは便利だね」

高原が食べかけの食事を何度も出し入れしている。もしもつと大きなものも収納することが可能なら、物資の運搬等に関して大きな恩

恵があることになる。食料や飲み水の貯蔵も可能になり、緊急時に役立つだろう。

国広は、つまり事前に弾を込めておき、その状態のままインベントリに収納したことで素早い銃撃を可能にしたのだ。

そうしてダークレイス戦の反省などをして、全員が食事を終えた。今日はもう、訓練の予定はない。暇を潰すために皆がこの場に何となく留まっていた。

「なんかさ、このメンバーでカラオケとか行ったら、楽しそうだよね」
久慈が下田のベッドに転がりながら言う。それに反応して、高原が面白そうに下田の方へ笑いかけてくる。

「確かに。祐馬君と下田が、どんな曲歌うのか気になるし」

「俺は？　ねえ」

「あんたはミレーヌとデュエットでもしてろよ」

「はあ？　な、なななんであの人が出てくるんだよ。頭おかしいんじゃないの」

「似合わなすぎてうけるー」

「うるせえ」

国広も、楽しそうに頷いた。

「帰ったら、すぐに行こうよ。駅前、えっと、どこだったかな」

下田も、仮定の話ではあるが、戻った後のことに思いをはせた。母のこともそうだが、他の人達はどのような反応をするだろう。クラス分の人数が丸ごと消えてしまったのだ、今頃あつちでは大騒ぎになっているかもしれない。

「ずきり、と頭が痛んだ。何か一瞬映像が視界をちらついた。しかし、理解する前に消えてしまう。」

カラオケの店を思いだそうとして考え込んでいる国広に向かって、芳野が言いにくそうに尋ねた。

「あのさ、祐馬君の彼女って、どこの学校なの？　詮索する気はないんだけど、やっぱり、気になってしょうがない」

「滅茶苦茶幸せな人だよ。羨ましいわあ」

高原が嘆いてみせると、久慈がその脇をつつついた。

「ちとせだつていたじゃん。より戻そうとは思わないの」

途端に、彼女は嫌そうな顔になる。

「ほじくり返さないでよ。あー、今思い出しても吐き気がする」

途中で別の人の恋愛話が掘り起こされていく中、国広はまんざらでもなさそうに頷いた。

「別にいいよ。今までは黙ってたけど、皆になら話してもいい。確か、あそこの…」

そこで、言葉が途切れた。他の者は、ついに彼の事情が知れると思いい注目している。国広が続きを言おうとしないのは、ためているだけだと最初の内は思っていた。

彼の口が、何かの言葉を形作ろうとし、その途中で閉じた。幾度かそれを繰り返して、次第にその顔から血の気が引いていった。

妙に空いてしまった間を補おうと、草野が突っ込みを入れる。

「おい、どうしたんだよ」

「わから、ない」

「は？」

「わからないんだ。彼女の、姿は、はっきり覚えているのに。どの学校にいるのかも。名前すら、わからないんだ」

国広は今までにないほど動揺していた。いつも冷静だったはずの彼の変貌に下田は、初めは疑いの方が強かった。まさかとは思うが、その彼女というのは妄想ではないのか。そうだとしても、他の大半の女子が喜ぶだけだが。

そんな下田の思考を呼んだかのように、国広が肩を掴んできた。

「答えてくれ。俺達の学校の名前は？ 場所は？」

「え、そんなの…」

すぐに答えようとした時、そもそもその答えすら持っていない自分に気がついて愕然とした。登校する途中の風景や、学校の姿などは明確に思い出せるのに、それがどんな名だったか、どのクラスに所属していたのかさえ、思い出せなかった。記憶には、間の抜け落ちた空虚さだけが残っていた。

それどころか。下田はぞっとする。自分がこの世界に来る直前、何

をしていたのかさえ思い出せない。母のことは幸いにもしつかりと覚えているが、中学生以前に関してはほとんど頭には残っていないかった。

手術。そう、母の癌の摘出手術が次の日まで迫っていたのはわかる。だが、それがいつなのか、具体的な日付がわからない。カレンダーにチエツクを付け、その日が来るのをじりじりと待っていたのは覚えているのに、春なのか、冬なのか、季節がいつだったかとも思い出せなかった。

「体育大会は、もう終わってるよな」

「違うでしょ、まだ新学期が始まったばかりで」

「確か後期の中間テストが終わったすぐじゃなかった？」

「まだ夏休みだったっけ」

互いに記憶の齟齬が大きかった。共通しているのは、普通、忘れるはずのないことを、忘れてしまっていること。両親や兄弟の名を思い出せない。唯一下田だけが、肉親のことをはつきりと覚えていた。

それぞれの動揺は大きかったが、最も取り乱しているのは高原のようだった。亡くなった母親の姿すら、微塵も思い描けないらしい。その不安と罪悪感の大きさは、他人が想像できるものではない。

「もしかしたら、一度死んだからか…」

ぽつりと、草野がつぶやいた。その意味することに気づいた下田は、呆然と言う。

「それって、死ねば死ぬほど、記憶がなくなっていくってこと？」

嫌な事実だ。つまり、不死身でいることに、リスクが付きまとうことになる。肉体が減びることがなくても、もし何もかも忘れて、自分が何者かさえ分からなくなったら、それは死んでいることと同義ではないだろうか。

「そうとは、限らないかもしれない」

恐怖で沈む空気を断ち切るように、国広が言った。彼は何かを考え込んでいるような顔をして、一語一語確かめるように言葉を紡いでいく。

「気づくきっかけは前にあったんだ。ダークレイスに負けてから、一

度話し合う機会があったよね。記憶に抜けがあるなら、普通そこでわかっけていてもおかしくないんだ」

その時は互いに自分のしたい事について言い合った。家族の話もたくさん出てきたのだ。確かに、死が記憶を持っていくのなら、あの時点で異常に気がついててもよかった。

「つ、つまり、どういうことだよ」

草野が理解し難い様子で尋ねる。記憶がなくなっているという現状を受け入れるだけでも困難なのに、さらに何かがあるなどという事実には、下田も戸惑いしかない。

「俺達は今まで、忘れているっていうこと自体にすら気がついていなかったってことだ。もしかしたら、記憶の欠落は、もつと前からあったかもしれない。死のせいで忘れてしまったと考えるのはまだ早い」言葉を着ると、国広は周りが話を飲み込む状態にはないことを理解したらしく、首を振って、ベッドに寄りかかった。

「ごめん。余計な推測だった。実際はどうなのかはわからない。一つ言えるのは、この世界が普通じゃないってこと。あつちに戻ったら、全部元通りになるよ」

それが確証のない慰めだとしても、国広の言葉ならと他の者達も落ち着いた。結局は、気を抜いたらだめなのだ。不死身とはいえ、死のペナルティがソウルを失くすこと以外ないとも限らない。命を第一に行動するのは、変わらなかった。

「この話は俺達の間だけにしておこう。無理に混乱させるのも可哀そうだ。あと、俺が銃を使った事も黙っておいてほしい」

「なんで？」

「そうだな、強いて言うなら、本来ここにあるはずのない技術を広めるのは、良くない気がするんだ」

下田は、その時の国広がどうにも気になった。言葉自体はもつともらしいが、彼はあまり本気で言っていないように聞こえた。それに、なぜか一瞬何かに怯えるような表情もしたのも、印象に残った。大切な人を思い出せない恐怖とは、また違うような。

一体、何を考えたのだろう。

◆

灰達になされている説明を、貴樹はそわそわしながら聞いていた。「右の手の甲を見れば、誓約印があるのがわかるでしょう。それを誓約主に示して忠誠の言葉を捧げれば、誓約成立となります。暗月の剣の場合は私ですね」

ヨルシカが皆の前に姿を現した段階から、その印は現れていた。貴樹にもだ。炎の中に、大剣が突き立っている模様。一人一人それは異なっているらしく、見た目のいい印が現れたと喜ぶ幼稚な生徒の姿を内心こき下ろすのはなかなか楽しかった。

大事な話をしているが、今祭祀場にはほとんど戦士が残っていない。ミレーヌの隊や、アンリとホレイス、フォドリック、シーリス、ユリア、ジークバルドが不死街の方にまで出かけている。エルドリッチ勢の残党や、他の対立勢力の警戒にあたっている。

『お前は、どれにするんだ』

(太陽の戦士一択だな。迷うまでもない)

『へえ。意外だ。てつきり暗月かと思った。女多いし』

(あのな、俺が本能だけで行動していると思うか？ むしろ暗月は一番近寄りたくないね。不確定要素が多すぎる。ロンドン側はユリアや、本来ならアノールロンドの塔に閉じこもっているはずのヨルシカがいる時点で、面倒にもほどがあんだろ。これは論外として、狼血の騎士もよく知らねえし、残った一つしかないんだよ。ジークさんとグンダがいるってのもやりやすそうだしな)

他には、生徒の希望も集まらないと見越していることもある。ジークバルドは彼らにも受け入れられている傾向があるが、グンダとの溝は未だに深いようだ。邪魔な存在がないというのも、ありがたい話だった。

誓約の儀式は、明日行われる。それを最後に言って、ヨルシカは戻っていった。

解散という形になった所で、貴樹はすぐに歩き出す。地下の修練場に向かい、イリーナが奇跡の指導を終えるの待ってから彼女と話す予定だった。かなり忙しい身分らしく、時間を取るのも、二日ほどかかってしまった。

(ひもりんとともに話せてねえし。焦らしプレイは大嫌い)

『火守女の方は、お前がコミュニケーションを取れなかったただけだよな』

(おだまり)

相変わらず、彼女と話すのは慣れない。

イリーナの指導が終わるまで、ただ待つだけの時間が過ぎた。エスト瓶がない状況下で唯一の回復手段であるためか、基礎的なものから丁寧に生徒達は教えられていた。一番上達が早かったのは、下田だ。傍目からは奇跡の進歩など具体的には理解し難かったが、周りの反応で何となくわかった。

そうして退屈極まりない時を耐えた後、イリーナが修練場から出ていったので、それについていこうとする。

歩き始めた貴樹の背に、声がかかった。

「ちよつと」

聞こえないふりをして、そのまま進む。慌てたような足音が追いかけてきて、腕を掴んできた。案の定、振り返ると実織がいる。

「話したいんだけど、いい?」

周りの生徒は気を遣ったのか、誰ひとり残らず去っていった。それをしっかりと確認して、貴樹は舌打ちを連発した。実織も不快そうな表情になる。

「せめて何か言っよ」

「なあ、今俺は最高に忙しいんだ。糞ガキにかまってる余裕があると思うか」

「私のことはどうでもいいから。他の人達と話してあげて。あんたずっとどっかに行ってたみたいだけど、それでさびしがってる子もいるから」

貴樹は呆れを通り越し、可哀そうな思いで彼女を見下ろした。

「無理。じゃあな」

実織の腕を振り払い、足早に立ち去ろうとする。彼にとっては、自分の存在が他人に大きな影響を及ぼし得ると自覚はしている。だが、そのことを尊重し行動するかと言えば、馬鹿らしいにもほどがあると考えている。

「また、あの人の所に行くの？ あんたって本当に意味わかんない…」
最後にそんな声が聞こえてきたが、立ち止まらずに修練場を出た。

「話とは、一体何ですか？」

ついにイリーナを呼びとめることに成功した貴樹は、すぐに事情を説明した。

彼女の反応は、困惑がほとんどを占めていた。

「確かに長い時間がかかりますが、瞳が良好な状態であるのなら、視力を取り戻すことはできます」

「よし」

拳を握りしめ、喜びの声を上げる。エルドリツチがなぜ火守女の日を大事に保管していたのかはわからないが、この時のためと思えば感謝の念さえ湧いてくる。

そんな彼の様子を、イリーナは複雑そうに見ていた。

「ですが、火守女が視力を取り戻すということが、どういう意味かわかりますか？ 私も、篝火に仕え守る身となるために、自分で両目の神経を切りました。貴方の行おうとしていることは、彼女に自身の使命を放棄させるのと同義です。どのような思いがあるにせよ、よく考えてください。彼女が、本当にそれを望んでいるのか」

裏切り、と、ゲームでは評されていた。複数あるエンディングの一つ、「火継ぎの終わり」を見るためには、火守女に瞳を渡すことが条件となっていた。それが使命に背くと知りつつも、プレイヤーの決断に全てを委ね、最後には火を絶やした彼女。

しかし、実際の火守女はどこかゲームの彼女とは違うようだ。自らの使命に対し、より強固なこだわりを見せている。ただ瞳を持ってきたと言った所で、やんわりと拒絶されてしまうだろう。では無理矢理

にもとなっても、貴樹自身の気持ちさが許さない。彼女にはちゃんと納得して幸せになつてほしいのだ。

「僕も、そう思います。しっかり彼女と話してみます」

「互いに良い結果となるのを願っています」

貴樹は早速火守女に会いに行こうと、篝火の広間の方へ向かつていった。

その後ろ姿を、イリーナはじっと見ている。

本当に不思議そうな顔で。

貴樹はものすごい緊張と戦っていた。

「き、きききききき」

『どうした。落ちつけよ。深呼吸しろ』

何とか、火守女を自分の部屋へ呼ぶことに成功した。彼女は従順だから、ただ頼むだけで何の障害もないと普通は思うだろう。しかし、それだけのことも貴樹には一大事なのである。

呼ばれたものの何の指示もされない火守女は、静かに立って彼の言葉を待っている。

(き、今日は、ちよつと暖かいね。ひもりんは大丈夫？ その衣装暑そうだけど)

『おれに言つてどうすんだよ…』

一時的なコミュニケーション障害に陥っている彼は、何とか絞り出すようにして声を出した。

「こん、こんにちは」

銀の髪を揺らし、彼女は頭を下げる。

「はい。務めはつつがなく果たさせていただきます」

「う、うー」

唸りだした貴樹。完全に情緒不安定だ。

「どうかしましたか。何か、私に不都合がありましたら、遠慮をせずにおっしゃってください」

「違うんだ。そうじゃなくつて、うんと。頼みたいことが、あつてさ。ひもりん、その、それを外してみてくれないかな。本当の素顔を見て

みたいんだ。そうすれば、二人の距離は縮まる。そうに違いない。そうだ、まずは互いに全てをさらけ出そう！ 俺もこの下着脱ぐから、あますところなくお見せしますっ！」

『お前変態みたいになってんぞ。あ、もともとか』

話しているうちに段々興奮が高まってきて、最後には訳がわからなくなつた。例え外見が良くても大半の女性が逃げ出すに違いない言動だが、火守女は話を真摯に聞いていた。

「これ、ですか」

彼女が、自分の目元を隠している銀の頭冠を手で示す。

貴樹は、いきなり本題から入ることを選択しなかつた。まずは遠回りに話題を振っていった、彼女に自分の目に関することを受け止める準備ができたなら、瞳を見せるという考えだ。結局は体の良い理由に過ぎず、要は彼が臆病なだけだった。それと純粹に、覆いの下がどのようになっているのか気になっている。

「うん、大丈夫かな」

「はい。そう望んでおられるのなら。ただ、お見苦しいものでしかないとします。灰の方が、ご覧になる価値などありません。覆いが必要なのは、醜いからです」

彼女の、自分を卑下する態度にもどかしさがつものつた。彼は反射的に彼女の両肩を掴んで、大きく首を振つた。

「ひもりんの体で、醜い所なんて一つもない。むしろ全部綺麗だ」
(なめなめしたいです！)

『お前のキモさがどんどん記録を更新していくな』

彼の発言に、はつきりとした感情を火守女は見せなかつた。少し顔を上げて、貴樹の顔を観察している。理解できない相手を疑問に思うかのように、首を傾げた。

(よく考えた距離近くね？ 死ぬううううううう)

悶えそうになりながらも、貴樹は切に頼み込んだ。

「だから、外してみてくれないか。大丈夫。俺は醜いなんて思ったりしないよ」

「わかりました」

予想していたよりもあっさり火守女は承諾し、頭冠に手をかけた。その様子を、唾を飲みこみながら見守る。秘められてきた彼女の素顔が、ついに明かされるのだ。頭が熱で朦朧としていき、膨れ上がる期待が胸を痛いほどに叩いた。

興奮しているが、この時貴樹はある程度の覚悟をしていたのだ。彼女の言う通り、その覆いの下は何か人を不快にさせるものがあるかもしれない。例えそうだったとしても、決して嫌悪を表に出すことはない、心に決めていた。

しかし。

彼は、一気に全身が冷えた心地になった。

(なん……だ、これ)

瞳が取られているから、目の部分には虚ろなくぼみがあると思っていた。彼の予想は外れ、火守女のそこには、既に先客がいた。

黒い、膿のようなもの。絶えず細かく動き、小さな触手を、貴樹に向かつて伸ばそうとしていた。見る者が本能的におぞましさを感じてしまうような光景だ。火守女の顔にあるものとしては、あまりに不気味だった。

「ありがとう…」

最初、それは火守女が言ったと思っていた。しかし、その声はざらつき、男とも女とも取れない不協和音の混じったもので、別の誰か、いや何かが発したものだとすぐに理解した。

膿は瞬きする間に火守女から飛び出し、貴樹の体を覆うほどの大きさにまで広がった。そして、その膿から、嬉しくてたまらないといった笑い声が聞こえてくる。

「ワタシを助けてくれて、本当にありがとうねえ」

衝撃で動けないまま、眼前が闇で覆われていく。

『おい、タカ——』

何の声も聞こえなくなり、意識が沈んでいった。



下田は、草野と腕相撲をしていた。

別に何か特別な意味合いがあるわけではない。草野がやろうと持ちかけてきたので、それに応えただけだった。それに、自信もあった。大抵の場合、下田がいつも勝っていたからだ。虚弱そうに見えて、案外彼は腕相撲がそれなりに強かった。草野が弱すぎるだけかもしれないが。

「はい、勝ったああああ」

だが、ものの見事に完敗する羽目になった。まるで、歯が立たなかったのだ。それこそ別人を相手にしているかのように、少しの抵抗もできなかつた。

「なんで？」

悔しさよりも、不可解という感情が勝っている。

「だから、言つたら。成長してんのか。レベルが上がってるってやつ」
国広も、同じことを経験しているらしい。前衛の役割を持つ男子の大半が、身体能力の向上を実感していると話には聞いていた。しかもそれは腹筋が割れたとか、そんな些細なものではなく、それこそ今まで叶わなかつた相手にも力で圧倒できるほどの成長なのだ。例外は下田で、自分の体が軽くなつたとは、とても思えないでいた。

「ここに来た時の、格好が影響してるのかもしれない。男子のほとんどが戦士みたいな恰好をしていたから、腕力が高まる傾向にあるのかもしれない。多分、前衛と後衛の差はこれからどんどん広がっていくと思う」

「僕は違うんだね」

溜息をつくとき、草野が言ってくる。

「お前は女子の間に混ざる特権があるだろうが。それで満足しとけよ」

隊の全員が集まって、溜まったソウルのやりくりをしていた。必需品もそうだが、皆が望んでいたのは、自身の固有能力の強化だ。

草野はより相手の振るう武器の軌道が読めるようになった。その成果は、ジークバルドとの打ち合いに何とかついてこられるように

なったのが一例だ。聞いている以上にその能力は役立つらしく、国広も素では全然かなわないと言っていた。

その国広はというと、透明な手をさらにもう一本出せるようになっていた。これでさらに彼の対応力が上がるだろう。

久慈の分身は、強化したことで本物のようにふるまえるようになった。つまり話したり、表情を作ったり、他の細かい様々な挙動が可能になったのだ。条件をそろえれば、きつと家族でも見分けがつかなくなっているだろう。

芳野の探知能力も、さらに精度が向上した。範囲も広がり、五百メートル以内ならどんな生体反応も感じることが出来る。隊の安全も、より保証されるといふわけだ。

一番ありがたいのが、高原の何でも縛ることのできるロープが、同時に二本出せるようになったことだ。おそらく、前衛を支える点においては彼女が一番役立っているだろう。両手と、両足を同時に拘束されてしまえば、どんな強敵でもたまらないに違いない。

では自分は、となるのだが。強化に必要なソウルは他の者よりもはるかに多く、食事等の面を考慮せずに全てつぎこんだとしても、到底届かなかった。そして、進化という下田だけにしかない項目。気にはなっていたが、今までそれ以外の事で手一杯だったので、考える余裕もなかった。

火の安寧。篝火に触れている間だけ、周りの時間が止まる。一度も試したことはなかった。やる意味も、必要もなかったからだ。何か邪な用途に使うなど、もつてのほか。得体の知れないもののような気がして、手を出しあぐねていた。

下田は固有能力の欄を開き、強化の文字へ指を触れる。すると、一気に項目が切り替わった。

「火の安寧+10」

概念的な篝火に触れている間、自身とその体に触れている他者以外全ての物体が動きを停止する。常時発動。

※強化に必要なソウルが足りません。

強化したらどのような内容になるのか、事前に確かめることもできる。国広から教えられたことだった。変わっているのは対象が自分だけではなく、複数になっていることだ。これでどう便利になったのか、下田にはよくわからなかった。どちらにしろ、強化には何千ものソウルを消費しなければならぬので、実現するのはかなり先の話になりそうだ。

目の前の篝火を何となしに眺めていると、生徒の集団がやってきた。

「お前ら、一回死んだんだってな。国広、お前がいてそのざまかよ」

宇部達の隊だ。下田達とは違う課題を課されていたらしいが、見事に乗り越えてみせたらしい。高坂も追従して笑い、丸戸は仏頂面のままでいる。

あしざまに言われても、国広は落ち着いて答えた。

「確かに、俺の力不足が原因だよ。でも、それよりも前にしくじった誰かは、そんなことを言う資格があるのかな」

「んだと」

驚くべきことに、宇部は剣を抜いた。国広の傍らにいた草野も同じ行動をし、場の空気が緊張に満ちたものになる。

「ふん。聞けば、お前らはそこらへんの雑魚に負けたっていうじゃねえか。俺の場合と、相手が違いすぎるんだよ。ロスリックの城壁に行こうともしなかった臆病野郎がほざいてんじゃねえ」

「…まるでゲーム感覚だね。じゃあここでずっと暮らしてみたらどうだい」

「てめえ、ふざけ」

宇部が走り出そうとした時、その前に炎が落ちてきた。ギリギリで後ろに下がり、彼は斜め後ろの方を睨みつけた。

「何すんだよ」

「いい加減にしてよ。少しは落ち着きをもつたらどう？」

実織は指先で火花を散らせると、下田達の方を向いた。久し振りに彼女を見た気分だ。最近は高原達と鍛錬をすることがほとんどだっ

たから。

「ごめんね。この馬鹿がつかかかって」

「いいよ。苦勞してるね」

宇部は不満そうに鼻を鳴らして、彼女の方に近付く。そしてロープの襟に手を伸ばし、掴もうとした。その手を、側にいた新宮が弾く。

「何しようとしてるの？ 実織を傷つけたら、許さないから」

「くそ…」

周りを睨みつけてから、宇部は高坂と丸戸を連れて、外に出ていった。最初の方から心配していたが、やはり隊の結末は良いとはいえないようだ。自分の所と比べて、よくないとは思いつつも、優越を感じた。

彼らの姿がいなくなったのを確認して、実織は肩をすくめた。

「あいつらと一緒に居ると本当に疲れる。下田、そっちは楽しそうでもいいね」

自分の方へ話しかけてくるとは思っていなかったもので、反応が遅れた。もう忘れかけていたあの醜態が脳裏に浮かんできて、何とか落ち着こうと心がける。

だが、下田が答える前に高原が言った。

「宇部とか、前も酷かったけどどこに來てから磨きがかかってるよね。私だったら初日でギブアップしてた」

下田の方を一瞥してから、実織は頷く。

「耐えるしかないけど。段々嫌になってきた」

「じゃあ、こっちに入れてもらえばいいんじゃない？」

新宮が、良い思いつきをしたとばかりににやりと笑った。

「うーん。それならそれでありがたんだけど、でも……」

実織も悩んではいるようだが、まんざらでもなさそうだ。下田の横で、草野が何度も頷いていた。彼も大賛成らしい。自分はどのようなのだろうか。人数が増えてくれるのはありがたいかもしれない。と、そこまで考えた時、高原が首を振った。

「いや、こっちもこっちで色々あるからさ。とりあえずはこのままでいいんじゃない。祭祀場の人達が決めたことだし」

「合わない人とやっつけていても、危険が大きくなるだけだと思う。もちろん、無理にとは言うつもりなんて全然ないよ」

「おっけー。じゃあそんな感じで」

「でも、一応考えてくれてもいいなって」

「えー、それじゃあどつちかわかんない」

下田はどこか背筋が浮き上がるような感触を覚えていた。二人のやり取りはどこかぎこちない。そういえば、学校に居た時に彼女らが話をしていた場面はあまりなかったような。さらにその言葉の全てが自分の方に向いている感じがして、胃のあたりが痛くなった。

新宮と目が合うと、彼女は笑みを深くした。話題を出した本人は、初めからこれを楽しむつもりだったらしい。

なんとも言えない微妙な空気を変えたのは、芳野の一言だった。

「何これ」

本人としてはちよつとしたつぶやきのつもりだったのが、大きく響いて全員の注目を集めた。彼女は生徒達の居住区へ続く横穴の方を見て、気味が悪そうに後ずさる。

「こつちに何か来る。しかも、これ、人間の動きじゃない」

実織と新宮が戸惑ったように固まる中、下田達は一斉に武器を構えた。芳野の探知は絶対だ。その能力に幾度となく危機を救ってもらっているので、信用するのは当然のことだった。

しかし、警戒はしたものの、その事実が明らかにおかしいことにも気がついていった。あの穴の向こうには休んでいる生徒くらいしかない。あとは、担任の貴樹が火守女を連れていったのを見た限りだ。一体、何が来るといえるのだろうか。

やがて、音もなくそれは姿を現した。

複数の人間が丸ごと入りそうなほどの不定形な物体。黒く、所々が独自に蠢いている。想像したあらゆるものよりも不気味で、誰も動くことすらできなかつた。

時間が止まったかのような奇妙な空間の中、それは秀敏な動きで篝火を見下ろす石の玉座の一つに這い上った。そこには、エルドリッチという名の薪の王の遺体がある。

下田は、戦慄を覚えた。何か、よくないことが起こる。確固たる予感。

その行いを止めるには、しかし、あまりにも遅すぎた。

黒い流動的な物体はエルドリッチの下半身部分にある気持ちの悪い膿の中へと入り込んでいく。直後、上の人間の姿をしている部分が跳ね上がった。

「おいおい…、まさか、嘘だろ」

まだ声を出せる分、草野は凄いなと素直に思った。彼の言わんとしていることを、おそらく、全員が考えていた。

白い手が持ち上がり、指の一本一本を確かめるような動作をしながら、顔がぞつとするとする笑みを作った。

「エルドリッチ」

先ほどからずっと別の玉座に座っていたルドレスが、静かに言った。彼ですらも、状況についていけない様子を見せていた。

神食らいと呼ばれた怪物の口が、ゆっくりと開く。

「身動きの取れない哀れな薪の王、そして灰の子供達。実に素晴らしい。アナタ達の全てが、ワタシのものになると考えたら、たまらない。精一杯、抗ってみせてねえ」

17. 祭祀場襲撃

エルドリッチは玉座から降りると、石の地面に手を当てる。そこから、黒い渦が広がった。煮立った湯のように不規則に泡だつてから間もなく、複数の人影が這い出てくる。まるで地獄の使いのごとく。

細かい装飾が施された法衣を着る、頭を丸めた聖職者の見た目をしている男が三人。

異様に大きく太い、斬るといふより叩き潰すための刃を持つ剣を肩に抱えた騎士。

着ている鎧の全てに隙間なく棘が生えて、その武器もまた刺々しい男。

そして、最後の一人はおもむろに手をかざすと、青白い光が一瞬点滅した。

かふ、とすぐ隣で誰かが息を漏らすのを、下田は聞いた。横を見ると、高原が自身の下腹部あたりにあいた大きな穴を、呆然としながら触ろうとしている。その穴から腸や血液が流れ出すのと同時に、後ろへ倒れ込んだ。

「この程度、防げるとばかり。つまらないわね」

黒のローブを着た、赤い髪の女。目ははどこか蛇にも似た光を放っている。挑発的な表情を浮かべ、唇は紫色に毒々しく色づいていた。言葉から、魔術による攻撃だとわかった。ただ、いつ貫いたのかまるで見えなかった。

何してるんだ。治さなきや。

未だに事態を受け入れられていない頭とは別に、体は彼女の治療へと動く。

「余計なことを、今殺しても意味はないでしょう」

法衣の男の内の一人在、魔術を放った女に忠告する。それに対して、彼女は舌を出してみせた。

「情けなく殺された誰かに、言われたくないわ」

「貴方…」

特大の剣を持った男が、大笑いをする。

「ちげえねえな。おい、マクダネル。この中にお前を殺した奴はいるのか。俺はそいつ目当てで来てやったんだ」

「いえ、いませんね。そもそも、一瞬の話でしたから。ロイスの方が良く知っていますよ」

同じく色調の暗い法衣を着た、マクダネルよりも細身で背の高い者が鼻を鳴らした。

エルドリツチが彼らの前に出ると、大げさなほどに手を横に広げた。

「どちらにせよ、アナタ達にはやるべきことがある。カーク、アナタは他の灰達を探しなさい。ロイスをつかせるから。いいね、余計な灰達の一つの例外もなく、できる限り残虐な方法で殺しなさい。例の二人は部屋の一つで倒れている。回収するんだ。五本指の実力を見せてくれよ」

「フン、言われるまでもない」

棘の鎧を着た男が動いた所で、ようやく全員が危機を認識したようだった。

下田は高原の傷を治そうと試みている。血が次々とあふれている。普通ならあつという間に失血死するほどの重傷だが、奇跡の光を当てることで勢いがおさまってきている。もちろん、予断は許されない状態だ。

それに、このまま治療に専念できる状況が続くとは、とても思えなかった。

「皆、固まって。俺と草野の後ろに入るんだ」

カークとロイスが横穴に消えていくのと同時に、国広が指示を出した。訓練や、不死街よりも先の区域で何度もとっていた並び。陣形と言うには少し単純かもしれないが、これでいくつもの戦闘をこなしてきたという自信が、安心感につながっていた。今までは。

大剣の男と、魔術師、そして三人目の坊主頭が下田達の方へ歩いてくる。彼らは、周りを適当に見回していた。

「これが祭壇か」

「案外、しけた所ね。暗いし、じめじめしてる。絶対に住みたくない。」

こんな場所にいたらこつちまで性根が暗くなりそう」

「もう少し、敬意を向けたらどうです。仮にも火継ぎの本拠地ですよ。これから無残に崩壊するのだとしても、だからこそ哀れみ、祈りましょう。くだらない使命に囚われている者達を」

実際に戦つてもいないのに、下田は彼らを退けるのが不可能だと瞬時に理解していた。ダークレイスを初めて目にした時よりも、はるかに酷い悪寒が背筋を這い上ってくる。勝てない。そう思い込まされた。

助けを呼ぶしかない。ヨルシカや、ジークバルド達ならば、対抗できるだろう。しかし今の段階で誰も姿を現さないことに対して、不吉な考えばかりが浮かんでくる。外になら、グンダがいるかもしれないが、そこにたどり着くのが限りなく遠い。

エルドリツチは、いつの間にか広場の中央部へと移動していた。そして下の膿の部分を広げると、篝火を包み込んでいく。その膿の一部が燃え、焼けただれていくのが見えたが、やがて柔らかい火の光は全て黒く埋め尽くされた。

「不死身だから、最悪の事態にはならない。なんてことは、思わない方がいいよ」

薄く笑いながら、エルドリツチがこちらに向かって言ってくる。

その意味を飲み込む前に、悲鳴が聞こえてきた。

生徒達のいる穴からだ。苦痛の入り混じった叫びと共に、物が壊れる音や誰かが走って逃げだす足音がしている。

「ほらほら、ハニ」

エルドリツチの指先が、篝火を覆っている膿を差す。その一部から突然何かが飛び出してきた。人の手だ。もがくようにして腕を何度も振っているが、どんどん奥の方へと引きずり込まれていく。

「やはり、ここが灰達の復活地点になっているようですね」

マクダネルの言葉と共に、次々と人の体が現れては膿に飲み込まれていった。下田達は、その光景をただ見ていることしかできない。明らかに、他の生徒達の体だった。

自分達は、死ねば篝火の下で復活する。それを利用された事実には、

恐怖が広がっていく。もし今殺されれば。考えるだけで目の前が暗くなった。

「この調子で灰を捕えていこうかあ。そこにいるのもね」

最後に付け加えられた言葉で、三人がゆつくりと下田達の方を見た。国広と草野が剣を構える。それを、大剣の男が囃し立てるように拍手をした。

「こいつら、戦う気だぞ。面倒だな」

魔術師の女も欠伸しそうな顔で言う。

「わざわざそうしなくてもいいわ。これで十分」

その体の周囲に、ソウルの光球が現れる。その数は七つ。ちょうど下田達の人数と同じだ。

矢の形に変化すると、一本一本がそれぞれの頭に狙いをつけた。

先ほどと同じ速度で放たれたら、到底かわせない。下田はとつさに高原ごと自分を魔術の防壁で覆った。続いて久慈が分身し、二人で国広と草野の前に出て、同じく盾を張る。

女は、それを滑稽そうに眺めていた。

「なーにそれ。お粗末ねえ。そんな薄くて脆い防護で、防げるわけないでしょ。拍子抜けしたわ。さようなら、もう死んでいいわよ。あらら？」

彼女は顎に指先を当てて、周りを見回す。一瞬で、浮かんでいた光球が無くなっていった。既に放ったのかと下田は警戒したが、当人も不思議がっているのを見てその考えを改めた。

そして、女は魔術の行き先を確認すると、面白そうに笑みを浮かべた。

「やだ、私のよ。返して」

新宮が、矢を四本ずつ二回に分けて女の方へと飛ばす。それを軽々と消してから、女は追加の矢を作り出した。しかし、それもすぐに消失し、新宮の側へ現れる。もうたまらないとばかりに、女は腹を抱え始めた。

「ねえ、この子おもしろーい。私の魔術が盗られてる。どうしたらいい？ これじゃあ、もしかしたら負けちゃうかも」

その隙に合わせて新宮が再び矢を放ったが、片手で作り出した小さな防壁に全て防がれてしまった。

詠唱を奪う。それが新宮の固有能力だと、下田は記憶している。この場面を見れば、その強力さは明らかだ。これなら、魔術等を使う人間に対して大きなアドバンテージを得ることになる。

女は何度か魔術を展開させ、新宮に奪われるのを繰り返した。次第にその笑みが消えていき、不愉快そうに目を細める。

「んー、違うわね。盗られる、というのは正しい表現じゃない。貴方、私の真似をしているだけね。しかも随分と劣化させて。それは侮辱行為よ。最低だから、本気を出してあげる」

「させない」

新宮の横から、実織が飛び出す。掌から火の玉を作り出した。下田は、目を見張る。グンダとの戦いで見せた時よりも、かなりサイズが大きくなっている。あんなものに当たったら、人間の上半身が一瞬で消し炭になってしまうだろう。

放たれた火球は敵に向かって飛んでいく。女は、何もしいままその場にとどまっていた。まるで助けが入ると確信しているかのよう

に。

「思い切りのいい呪術だ。それだけです」

坊主頭の男が手に持つ杖を振るい、その先を炎に当てた。あれだけ勢いのあった実織の炎が、一瞬で小さくなり、消えていく。

「灰の方々、私はクリムト。エルドリツチ様に仕える深みの主教の一人として、どうかよろしく願います。まずは、呪術の手本をご覧にいられましようか」

杖を独特な揺れる軌道で動かし、あっという間に巨大な炎を作り出した。実織の、何倍もある。見る目にまで熱が伝わってきて、周りの気温が一気に上昇する。下田は治療する手を止めないようにするのが精一杯だった。

「それ、こっちにまで被害がきそうだけど」

「問題はありません。この程度防げないようでは、エルドリツチ様の守り手は務まらないでしょう」

新宮が、手を炎に向けた。

クリムトの頭上にあつたそれが消失し、彼女の方へと出現する。

「生徒達を、解放して」

呪術まで奪えるという事実には、下田もほっと安心した。あれが放たれたら、絶対に無事では済まなかつただろう。

だが、敵側は余裕の態度を崩してはいなかった。

「フッフ、ねえ、無理しない方がいいと思うわ。ほら、もう消えそう」
新宮に疲労が現れているのを、この時初めて気がついた。炎が急速に衰えていき、呆気なく消失してしまう。

「凄い能力だと思う。本当よ。術士にとつては天敵に近いのかもね。でも、限界はある。どこまで耐えられるかしら？」

矢を作り出す、新宮がそれを奪う。直後間をおかずに、女はさらに太いソウルの矢を放った。追加して、十数個のソウルの光球をそれぞれ異なる軌道で飛ばす。それで終わることはなく、大きなソウルの塊を下田達の上に作ると、そこからいくつものソウルの矢が降り注いだ。

「盾の中に、早く！」

久慈が叫んだと同時に、全員がより固まって防御の姿勢を取った。魔術で作った防護を突きぬけて、いくつかの矢が落ちてくる。下田は目をつぶり、高原の体に覆いかぶさった。背中が抉られる感触に、気を失いそうになる。だがここで耐えなければ、失ってしまう命を考え、歯歯を食いしばって意識を維持する。

長い攻撃が終わった後、目を開けると、無傷の者は一人もいない。本当に、盾はほとんど機能しなかった。受けてみてわかる、魔術の差。「なるほどねえ、そういうこと」

一番酷かつたのは、おそらく魔術のいくつかを無効化しようとしていた新宮だ。ローブが破け、両腕が血まみれになっている。意識がほとんどないのか、その場に座りこんで頭をがっくりと落としていた。「奪えるのは、一度に一つまで。こんなふうなたたみかけてあげれば、対応しきれない。何だか弱い者いじめしてるみたいで、気が滅入るわ」

その話が事実なのは、実織の反応を見てわかった。彼女は何とか立ち上がろうとしているが、足を痛めているようだ。

「誰か、外に行って助けを呼ぶんだ…」

比較的軽傷の国広が、背中を向けたまま言う。剣を相手側に向けて、言葉を続けた。

「俺が、何とか時間を稼ぐから。このままじゃ絶対に勝てない。祭礼場の人達の力が必要だ」

「おっと、それはよろしくないな」

国広は言われる前に横に飛んでいた。彼のいた場所を、豪快な風切り音をたてて特大の剣が振り下ろされた。刃が叩きつけられた瞬間、その振動が下田にまで伝わってくる。その男の身丈とそう変わらぬ、出鱈目な大きさの剣だった。

「逃げるな。後ろ向きなのは駄目だ。もつと気楽にいこうぜ。このゾリグに殺されてもらえるんだから、喜べ」

「ちくしょう…」

ゾリグの背後から、草野が斬りかかろうとする。が、その直前で彼は後ろにのけぞった。上すれすれに、刃が横切っていく。

「お？ いい勘してるじゃねえか。俺に潰されるまで、精々楽しませてくれよ」

草野と国広の二人ががりでも、このゾリグという男はつまらなそうにしていた。その光景は、彼らがジークバルドに軽くあしらわれていたのを思い出させる。違うのは、相手が本気で自分達を殺そうとしていることだ。二人の振るう剣と同じかそれ以上の速さで、ゾリグは特大剣を扱う。信じられない腕力だった。

初めに国広が吹き飛ばされて、それから間もなく粘っていたかのように見える草野も武器を破壊されて、岩のような刃に打たれた。二人は壁に激突し、立ちあがれないほどの痛みでうずくまった。

「興醒めだぜ。これが灰か？ どこが世界を救う戦士だ。期待したのに、とんだ無駄足だったな」

「そうね。飽きてきたし、さっさと殺しましょ」

下田は、自分でも気がつかないうちに治療をやめていた。抵抗をし

ようとも思ったが、何もかも無駄になる行動をする意味も感じられなかった。自分達は、まともに戦えてさえない。ただ一方的に、負けたのだ。これから死に、あの膿の中に飲み込まれるという恐怖を実感できないまま、最後の時を待っていた。

ゾリグと魔術師の女が近づいてこようとした時、横穴の方から棘の鎧の男とロイスが出てきた。

「戻ったかい。うん、ちゃんと回収したね」

貴樹と、火守女が抱えられていた。では、目的とはあの二人のことなのだろうか。両方とも意識はない。実織が、顔を上げた。なぜ、と彼女の口から言葉が漏れる。下田も同じ気持ちだ。なぜ、よりにもよって彼らが。

ロイス達はエルドリツチの言葉に応えることなく、走って、篝火の方に到達した。それから、棘の男の方が来た道の方を振り返って、吐き捨てる。

「あの女共は容赦がない」

直後、芳野がはつと男と同じ方向を向いた。その顔をは今までと一転して光が差したような表情をしていた。

穴から、ソウルの矢が飛び出す。矛先を向けられた魔術師の女は、初めて防ぐことはせず、億劫そうに横にかわした。それから、突然大声で笑い始めた。

「カルラあ、久しぶりね。会いたかったわ」

三人の女性が、姿を現した。

それを見て、下田は一気に脱力する。助かったという思いだけで、涙が出てきそうだった。

清らかな鈴の音が、場違いなほどに響き渡る。下田達の周りに山吹色の光の円が広がり、皆の傷を癒していく。聖鈴を掲げたイリーナが、下田の方へと走り寄ってくる。

「一番重いのは彼女ですね。よく、持ちこたえてくれました。貴方の頑張りの成果です」

その隣に付き従うカルラが、下田の顔を触ってくる。

「大丈夫か」

いつもなら戸惑うばかりだったが、今はただただ安心感の方が強かった。俯き気味に、彼は頷く。

「はい」

「そうか、よかった」

最後にヨルシカが手を上にかざし、味方全体を包むような膜を張った。そして下田達の方を見ると、申し訳なさそうに目を伏せる。

「気づくのが、遅れました。貴方達と外にいる灰以外は皆、あれに飲み込まれました。完全に、私の油断が故です。情にかられて、あの人食らいを処分するのを怠ってしまった。ですが、もうこれ以上の狼藉は許しません。あれを滅ぼし、灰の方達を救い出しましょう」

その言葉には、光が宿っているような気がした。

彼女らの後に続いて、赤みがかっている肌の巨男と、老婆の侍女も円の中に入ってきた。

「どうなってやがるんだ。まさかこんな事に巻き込まれるとは思ってもいなかった」

侍女の方は何度か会ったことがある。男の方も、一度だけ草野と国広の武器を研いで

もろうために会ったと話に聞いていた。アンドレイという名の、鍛冶職人だ。

「ええ、確かに異常事態です。どうか、ここから離れないようお願いします」

それからヨルシカはその美しい顔に怒気を孕ませて、エルドリッチ達を見据える。

「マクダネル、クリムト、ロイス。それに神食らいの守り手達と五本指の一人ですか。本気で、ここを落とすつもりなのですね」

「それだけじゃないよ。ワタシは、彼に興味があるんだ。できることなら、こちらの戦力として加えたい」

貴樹の顔を、エルドリッチの指が撫でる。

「ふうん、これが、噂の灰ね」

魔術師の女が彼に近付くと、全身を舐め回すように眺めた。

「いい体してるじゃない。それに、顔も好み。エルドリッチ様、これは

私に任せてください。ちゃんと洗脳して、仕上げますからね」

「それを、許すと思いますか」

ヨルシカが、続けて四本のソウルを放った。それらは途中で弾けて、鋭い針のような形状に成り、一斉に女に向かって収束していく。ゾリグが横から飛び出してきて、半分を叩き落とし、残ったもう半分はクリムトが半透明の盾で吸収した。

「さてさて。このまま続けてもいいんだが、まだ一人、隠れている誰かがいるねえ。早く出てくるといいよ」

エルドリツチの指先から放たれた紫の光弾が、脇の石階段を上った先にある岩陰へと向かう。それと同時に、そこから人影が飛び出して、下田達の方に駆けてきた。

「くそ、ばれていやがった」

不死街の森で、ミレーヌ達といざこぎを起こした男だ。彼は錆びた長剣と盾を構えながらイリーナの奇跡の円の中に入り込むと、一息つく。

「ホークウッド、貴方いつから」

ヨルシカの質問にも、億劫そうに答える。

「あの人食らいが復活するより前からだ。こんなことになるなら、もっと早く逃げとおけばよかった」

つまり、下田達が危機に陥っていたのにもかかわらず、陰でずっと見ていたのだ。その時点で、何となくホークウッドとは上手くやれそうにないと感じた。かつてはミレーヌ達と共に活動していたらしいが、何かしらの衝突があったのだろうか。確かに性格的にも合いそうにはない。

「他の奴らはどうしたんだ。ちっとも助けに来る気配がないようだが」

「ほとんどが別件です。危機を知らせることはできましたが、あの篝火が占拠されていては戻って来られません。この場の私達で乗り越えなければなりません。貴方も、協力してください」

「協力、だって…?」

ホークウッドは地面に唾を吐くような動作をした。

「どいつもこいつも反吐が出る。俺は、お前達とは違う。命を大事にする。勝手にしろ」

信じられなかった。こんな状況だというのに、どうして拒絶するのだろう。彼の侮蔑の眼差しはエルドリッチ側だけではなく、下田達の方にも向けられていた。

「どちらの味方ですか？ ホークウッド」

ヨルシカの問いは静かだった。だが、それで何かを察したのか、途端に彼は卑屈そうな表情になり、肩をすくめた。

「ああ、わかっているよ。俺は死にたくない。だから、手を貸せと言われてたらそうするしかない。何をすればいい？ この期待外れな灰共の尻拭いをすればいいのか」

答えようとした時、ヨルシカは何か気がついたかのように一歩下がった。その視線の先は、杖を掲げたマクダネルの方を向いている。「ヨルシカ。アナタにはここで死んでもらえると嬉しい。邪魔な火継ぎ肯定派の終わりは近いよ」

その杖から、黒い霧が噴き出していく。ダークレイスが使っていたものと似ていたが、その危険性は明らかに段違いに感じた。

「いけません。皆もつと近くに寄ってください！」

ぐいっと、ローブの襟が引つ張られる。そのままの勢いでヨルシカの体にぶつかってしまい、下田は謝りかけた。しかし、彼女の緊迫した顔を見てそれを思いとどまる。草野と国広も何とか立ち上がり、ヨルシカの張った膜内へと入りこんだ。

霧はすぐに周りを侵食していき、エルドリッチ達の姿も見えなくなる。イリーナの光る円だけが視界を確保し、まるで暗闇の中に取り残された状態になった。

「呪死の結界です。触れてはなりません。主教の三人だけは、早めに倒してしまいたかった」

下田は、自分の隊の全員の安全を確認した。男子二人はイリーナのおかげか、元気を取り戻している。久慈と芳野は無傷だ。唯一重傷の折った高原は、今は落ち着いた様子で寝ている。見るのも躊躇われるほどの傷の部分は、ほとんど皮が塞がりつつあった。実織と新宮も、

立ち上がれるほどには回復していた。

しかし、決していい状況とは言えない。それはヨルシカ達も十分に理解しているようだ。

「随分と楽しい状況だな、え？ 足手まといが八人、頼れる前衛もいない」

「黙った方がいい。徒に周りを煽りたてるな」

「八人の中には、俺も含まれてるんだ。もつと気遣ってくれ」

付き合いきれないと、カルラは溜息をつき、下田達を見回した。

「まだ、余力はあるか」

全員がそれぞれの顔を伺う。イリーナのおかげで、高原以外はかなりましな状態になった。しかし、エルドリツチ陣営の者達に歯が立たないという事実は依然として残っている。彼女たちが来なければ、何かも終わっていた。下田も言葉が出ない。

そんな感情を理解しているようで、カルラは自然に頭に手を置いた。きた。

「気にすることはない。いずれ追い付く。まだ、相応の経験を積む段階にあるというだけだ」

度々、修練の最中でも疑問に思うことがあったが、彼女の自分に対する妙な優しさは何なのだろうか。そうやって慰めてきている時の彼女の瞳は、どこか遠くへ向けられている。

「無闇に灰の方達を面に立たせるわけにはいきません。これ以上、エルドリツチに取り込まれる数が増えてしまうのは、避けたい事態です」

イリーナが奇跡の円を消すと、高原の方へと寄った。お腹の傷をみると、表情をさらに引き締める。

「ちとせは、大丈夫ですか」

久慈の不安そうな問いに、しつかりとした答えを返す。

「大丈夫ですよ。山は越えました。傷が残らないようにするのは、難しいかもしれませんが」

「治ってくれるなら、しょうがないと思います」

自分達の状態は一旦落ち着いた。もちろん、いつまでも敵が攻めて

こない保証はない。エルドリッチ達の打倒は、状況を動かすために絶対に満たさなければならぬ条件だ。それに加えて、飲み込まれてしまった生徒達も救出しなければならぬ。

「あの邪悪な膿を切り開くことは可能です。奇跡を使えば」

イリーナの言葉に、ヨルシカが続ける。

「霧の中を、この結界に入ってさえいれば移動することはできます。エルドリッチの元へと到達すること自体は難しくありません。問題は、相手がそれをさせるはずがないことです。イリーナの奇跡で膿を退け、灰達を救出する時間も稼ぐ必要があります」

そこが、最も難しい点だった。相手の注意を引きつけてくれる、強力な前衛の存在が欠けている。草野と国広でも、ゾリグ一人にまるとかなわぬ状況だ。ホークウッドもそんな大きな存在になれるとは思えない。

必要なのは、時間。生徒達や貴樹、火守女を救い出すための隙を作らなければならない。何か手はないかと考えた時、下田はようやくひらめいた。

「なにか、思いついたんだね」

国広がその様子に気がつき、言ってくる。そして全員が下田の方を見た。

「う、うん。そう、なんだけど」

話しだすのには少し戸惑いがあった。それに、今までそのことを忘れていた自分を、責めたい気持ちで一杯になっていた。もっと早く実行していれば、こんな事態になるのを防げていたかもしれないのに。

下田は、できるだけ固有能力のことをよく知らないヨルシカ達にもわかるように、説明をした。自分の、篝火に触れている間は時間が止まるという能力。そしてそれは、エルドリッチの膿に包まれてしまった今でも通用するのではないかということ。

「お前、そんな力持ってたのかよ」

草野が一番に信じられないという顔をした。下田は納得できない思いで実織と新宮に顔を向ける。彼女達も、まるで初めて聞いたかのように驚いていた。おかしい。三人には、前に教えたことがあるは

ず。

それを訊く前に、ヨルシカが確認を入れてきた。

「敵側だけではなく、私達も止まってしまうのですね。灰は、常識を超えた力を持っていると聞きます。疑うことはしません。ですが、貴方一人が行動できても、他の灰達を救うのは難しいのではありませんか」

「あ、た、確かに」

案を取り下げかけて、下田は思いとどまった。

「でも僕達の能力は、ソウルを消費することで強化できるんです。僕の場合、周りが止まっている中動けるのが僕だけじゃなく、僕に触れている人も含まれるようになります」

「なるほど。そんな仕組みがあつたのか。それならば希望は見えるが。一体どれほどのソウルが必要になるんだ？」

下田は絶望した。今持っているソウルでは到底強化には足りていないのだ。

「かなりの量が、必要です。僕の分じゃ…」

「俺達の分を、足しても？」

国広の考えも、助けにはならない。八千以上のソウルが必要だと答えると、草野、国広、久慈、芳野、高原の残っているソウルを全部足しても届かない事実だけが重くのしかかった。

「私のソウルも、使えないのか？」

カルラの言葉で、下田は顔を上げた。

「イリーナ。貴公の力でソウルの受け渡しができるはずだろう。火守女は、扱いに長けていると聞く」

「ええ。できますよ。ですが…。いえ、非常時です。私のソウルも使ってください」

ヨルシカも、膜の維持に気を配りながらこつちを見てきた。

「貴方に託します。私達も、灰ほどではないにせよ、ソウルを蓄えることはできますから。この場を乗り切るために、力を合わせましょう」

ソウルの受け渡しは、迅速に行われた。イリーナが一心に祈るような動作をし、全員の体から白い霧状のものが出てくる。それらは一つ

に集まると、下田の体の中に入っていた。安心するような温もりが、ほんの少しだけ湧いてくる。

インベントリの欄を見て、およそ九千ものソウルが溜まっていることを確認した。イリーナ、カルラ、ヨルシカの分け与えてくれた分が、どれだけ大きいかを物語っている。

固有能力の説明の横にある、強化の文字を二度押し、ソウルの消費の承諾をして、彼は自信の能力強化を完了させた。不安はある。しかし、成功してくれなければ困るのだ。

下田とアンドレイ、侍女の周りに、他の皆が囲むようにして立つ。高原は、アンドレイに背負われていた。

「このまま、エルドリツチの元まで進みます。常に気を張っていてください」

国広、草野、久慈、芳野。それぞれが、下田の顔を見て、何も言わずに前を向いた。その表情は張り詰めていたものの、恐怖は薄かった。皆凄い、と、下田は心の中で称賛する。自分だったら、耐えられないだろう。だからこそ、彼らと同じ隊になれてよかつたと思えた。

周りは黒い霧のせいで、ほとんど視界が効かない。反対に、相手にしたらただヨルシカの張っている防壁の方を狙えばいいだけだ。と、普通なら考えるかもしれない。

「二人、カルラさんの方に向かってきます。あと、矢が上から」

霧から、カークが飛び出してくる。事前に知らされていたカルラは、当時にソウルの玉を放って牽制した。彼は後退し、再び闇に紛れる。直後にソウルの矢が降ってきたが、それもヨルシカによつて撃ち落とされた。

「エルドリツチの方向はあつちです。近づいてきてます」

こんな状況で一番効力を発揮するのが、芳野の能力だ。たとえ視界がふさがれていようと、彼女の感覚は全てを把握することができる。

「読まれちゃってるわ。へえ、まだまだ楽しめそうね」

「関係ないな。無理やり押しきればいいだけの話だ」

芳野が、はっとして男子達の方へ叫んだ。

「そつちにあいつが来る。よけて！」

ゾリグの特大剣が、振り下ろされる。草野と国広が左右に分かれてかわし、その刃は空を切った。かに、思えた。

「ちく、しょう」

草野がふらつく。彼は腕を押さえて。膝をついた。手から上腕の部分ひしゃげ、関節からあり得ない方向に曲がっている。下田は今すぐにも走り出して彼を治療しようと思きかけた。しかし、草野本人が、無事な方の手を伸ばし、拒絶するように振った。

「行け」

「何を、」

「彰浩、お前が辿り着きさえすればいいんだ。誰か、こいつらを足止めしなくちゃいけねえ。大丈夫さ。だってお前が後で助けてくれるんだろ」

納得しかねて言い返そうとするも、カルラに止められる。彼女は黙って首を振った。

「走るしかない」

優先すべきことは何なのか、下田は今一度考える必要があった。考えて、理解し、踵を返した。何度も振り返りたくてたまらない瞬間があったが、足は進み続ける。何かが潰される音が聞こえたような気がした。それでも、唇を噛みしめながら走った。

「もう、近い。すぐそこ。待って。一人反応が消えた。気をつけ——」

警告しようとした芳野の声が、突然途切れる。彼女が走っていたはずの斜め後ろを見ると、魔術師の赤毛の女がいた。

「この子ね。なかなか便利な力を持っているじゃない」

芳野は口を震わせるだけで、何も答えない。いや、答えないと言った方が正しい。女の放ったソウルの矢で、首に大穴を開けられていた。魂を吸い取られているかのように、あつとう間に顔から生気がなくなっていく。

「恵美——」

久慈が叫んで、女に向かって突っ込んでいく。しかし、横に浮かんでいた青白い光球が彼女の間近で炸裂し、血が辺りに飛び散った。

「迫られるのは、男がいいわ」

「クリムエルヒルト…」

カルラの声に、妖しく唇を舐める。

「貴方、お師様の真似でもしているつもり？　虚しいわね、すぐに一緒の所へ送ってあげる」

倒れた久慈の体が、跡形もなく霧散した。カルラの方へと完全に注意が向かっている魔術師へ、分身ではない本物の久慈が飛びついた。

「あら、あれは偽物だったの」

「草野と同じことするなんて、思ってもなかったけど。行って！　カルラさんは、下田を守ってください。下田、ちとせを」

最後まで聞こうとする彼を、カルラが無理やり引っ張る。わかっているが、悔しくてたまらなかった。絶対に救い出すと、心に決める。

少し前を走っていた国広が、突進してきたカークの一撃を受け止める。鎧にびっしりと生えている棘が頬をかすめ、血の筋を作った。

「物足りないんだ。弱者をいくら殺してもな。お前は、満足させてくれるのか」

国広は、下田の方へと視線を合わせてきた。彼は、何かを伝えたいがっているようにも見える。だが、その言葉は出ないまま目で先へ行くと合図をしてきた。

下田は走るしかなかった。

「誰か、」

自分の隊の仲間たちの、助けとなってくれる存在を欲した。だが、ヨルシカは防壁を張り続けていることに集中し、イリーナはエルドリッチの膿を切り開くのに必要だ。カルラとホークウッドも、視界外から飛んでくる呪術の炎の対策に追われている。実織と新宮は、下田に向かう攻撃を止めてくれている。

「もつと、前を走ってください。篝火が」

イリーナの言葉で、ついにエルドリッチの姿が見えてきた。主教の三人の姿は、いない。まさに絶好の機会だった。

下田は身を低くして、脇目もふらずに前へと進んだ。顔のすぐ側を、呪術の炎や矢が通り過ぎていく。後ろを追ってくる足音が、誰の

ものなのか確認する余裕もない。多くの生徒達が飲み込まれている
膿の中で、炎が漏れ出している部分を発見した。篝火の、炎だ。

「おや、何をするつもりかな。ただ突っ込んでくるばかりでは」
「皆、僕の体に触れてください！」

エルドリツチが何か行動を仕掛ける前に、下田は飛び込んだ。気持
ちの悪い感触の膿を踏みつけ、炎の部分へと指先が触れる。同時に、
自分の肩に触れてくる誰かの手の存在も感じた。

瞬間、耳の中であふれていた喧騒が、嘘のように消失した。不意に
取り残されたような気がして、下田は後ろを見る。

「これは」

「本当に、止まっていますね」

カルラとイリーナが、停止した周りの状況を興味深そうに見回して
いる。彼の指示に反応することができたのは、この二人だけのよう
だった。他は全員、人形のように固まってしまっている。

かと思えば、急に人の気配を新たに感じ、下田はエルドリツチの体
のすぐ横を見た。白い、一度見たら忘れられないほどの美しさを持つ
た女性がいる。手首や頬のあたりが鱗のようなもので覆われていて、
顔のパーツも整ってはいながら、どこか人間とはかけ離れた雰囲気
が伝わってくる。その印象は、誰かに似ていた。下田はすぐに思い出
す。 そうだ、ヨルシカを初めて見た時と同じだ。

彼女は下田を見ると、笑っているような悲しんでいるようなどちら
ともとれる微妙な表情を浮かべた。一歩足を踏み出そうとしている
ものの、そうすることが許されていない。そんなことを感じさせる佇
まいだ。

「そこに、何かあるのか？」

肩に触れているカルラが尋ねてくる。下田は彼女の方を向いた後、
女性のいる方向を指差そうとして、もう一度見た。しかし、もうそこ
には誰にもいない。

「灰の方たちを、救い出します。シモダさん、その炎に触れ続けてくだ
さい」

本来の目的を果たすべく、下田はもうそのことを気にするのはやめ

た。篝火の方へさらに近づき、両手で炎を包み込む。仄かな温もりが体の中にまで浸透してくる。

イリーナが、持っている聖鈴を二度鳴らし、先ほどと同じくらいの大きさの奇跡の円を作り出す。発せられる光にエルドリツチの膿は大きな反応を示した。奇跡を嫌悪しているようで、円から逃れようと移動していく。

生徒達を取り出すのは、かなりの時間がかかった。膿をイリーナの奇跡で取り除き、一人一人カルラが引っ張り出す。その繰り返しだ。唯一の男手である下田も協力したかったが、篝火から離れるわけにはいかなかった。

彼らは全員、意識を失っていた。全身に膿がこびりついていて、それを取る作業も必要だった。中には、草野や、芳野、久慈、国広が含まれているのを確認して、胸が痛くなる。結局間に合わなかった。目を覚ましたら、ちゃんと謝らなければならないだろう。

全ての生徒達を外に出し、カルラは大きく息を吐いた。

「不謹慎かもしれないが、こんなに肉体を使ったのは久しぶりだ。腕が上がらない」

彼女もまた下田に触れ続けなければならなかったので、行動をかなり制限された中の作業だった。

「しばらく、私達には休息が必要かもしれませんね。これほどの被害から立ち直るには」

「あ、ああ。確かに」

ぎこちなく頷いた後、カルラは主教達を睨みつけた。

「まだ、仕事が残っている。今のうちに奴らを片付けなければ。まずは、主教の杖を破壊する。それで、霧が晴れていくはずだ」

彼女の魔術で、次々と主教の持つ杖が壊されていった。その光景で、下田は自分の能力がいかに強力かを実感する。本当に、一方的になった。相手は何の抵抗もできない。祭祀場を守るという点においては、この能力は非常に役立つのだ。

カルラの予想通り、辺りに立ち込めていた呪死の霧が薄くなっていく。視界が開けると、全ての敵の位置がわかった。ゾリグとカーク、

そしてクリムエルヒルトという魔術師の女は、こちらに向かおうする状態で止まっていた。

「よし、あとは奴らを」

その時、下田の手の近くにいた膿が、急に動いた。それは表面に棘をいくつも生やして、彼の手の甲に突き刺した。そして、中に入り込もうとしてくる。

突然のことで、思わず手を炎をから離してしまった。なぜ、膿が動いたのか。自分と彼女達以外は、時間が止まっていたはずだ。手に感じる異物感や不快感が、一瞬自分のしてしまった行動の意味を理解させることを遅れさせた。

「おや、一体どういうことだい」

下田は地面にうずくまる。早く炎へ戻らなければならぬのに、なぜか自分の体が意志の通りに動いてくれない。手の激痛のせいで、意識が遠のきかけていた。

「どうしたのですか？ これは…」

ヨルシカがすぐ側にまで走り寄ってくるのがわかった。黒い膿に覆われている右手を息をのんで見つめている。そんなことよりも、下田は叫びたかった。もう、時間は停止していない。早くしないと、また。

エルドリツチが、下田をじつと見下ろしてくる。

「どうやら、まだ面白い力を持っている灰がいるようだ。まさか灰が全て盗られるとは。なるほど、切り札は最後まで取っておくということかな。では、ワタシも負けてはられないねえ」

霧が晴れ、姿を完全に現したエルドリツチは、前とは違っていた。姿が変わっているわけではない。片手に、大きな弓を持っていた。ただし、矢はない。

「あれは、そんな」

一番に感情を表していたのは、ヨルシカだった。色濃い絶望。カララとイリーナもまた、その弓を見て固まっていた。

「これでまとめて、消えてもらえれば嬉しいよ」

弓を構え、糸を引いていく。すると、光の矢が出現した。その神聖

な見た目は、つがえている当人のおぞましきとは正反対だ。下田は朦朧としている中で、ただそれが放たれるのを待っていることしかできなかった。

光が走り、衝撃が全身に伝わってきた。

自分がまだ生きている事に気がついて、目を開けた。誰かの体が密着している。やっとの思いで顔を上げると、ヨルシカの顔がすぐ目の前にあった。

「怪我は、ありませんか？」

どうやら自分は守られたようだ。おぼろげながらに理解し、濃い血の臭いと感触を、すぐに感じた。

「え……」

視界がはつきりしてくると、下田は頭が真っ白になっていくのを自覚した。自分に覆いかぶさっているヨルシカの体は、半分しかない。左半身がもぎ取られたようになっていた。

「ヨルシカ、さん」

ずるずると彼の肩の上を、ヨルシカの体が滑り、地面に落ちていく。肉のたてる音が、やけに耳の中で残り続けた。

「フッフ、酷い光景ね」

イリーナとカルラも余波を受けたのか、倒れている。彼女達も体から血を流していて、到底戦いを続ける状態にはなかった。

エルドリツチはヨルシカの残骸をみると、薄く笑ってつぶやいた。

「恐ろしい血筋だねえ」

その言葉と同時に、彼女の体がピクリと動いた。赤黒い肉が見えてしまっている断面に、変化が訪れる。辺りに散らばっているその左半身を形作っていた肉片がひとりでに動き、元の場所へと戻っていく。下田もようやくやくわかった。今まさに、彼女は自身の体を再生しているのだ。

その、グロテスクでありながら美しさも感じられる光景が終わると、長い間呼吸していなかったかのように、荒くヨルシカは息を吐き出した。

彼女が復活したこと自体にも驚きがあったが、それよりもさらに目

を引きつけるものを、下田は一番近くで見ている。

純白の装飾が丁寧に施されていたドレスが無残に破壊され、彼女の体から布切れ同然になった状態で落ちていく。そうして、彼女はほとんど裸の姿で立ち上がりとしている。本当は目をそらすべきなのに、彼はヨルシカの臀部から生えている、尻尾に釘付けになっていた。「忌わしい竜の血。皮肉だねえ、姿は本当に、母親に似ているよ」

ヨルシカは何も言わない。だが、その時下田は確かに見た。一瞬だけ、彼女の表情が深い憎悪に歪むのを。それは、普段の聖女然としたものからはかけ離れている。

彼女は腰を上げようとした所で、バランスを崩した。下田がそれを受け止める。吸いつく肌の感触が、なんとも言えない感慨を彼に与えた。ヨルシカは目をつむり、乱れた呼吸で額を押さえている。

「大丈夫ですか」

返事をする余裕さえないようだ。ぐったりと下田に全体重を預ける形になっている。

「当然だ。消耗もするだろうさ。さて、もういいだろう。残っている灰と邪魔な者達を殺しなさい」

下田はローブの裾を引かれ、実織が縋りつくような表情ですぐ側にいるのを確認した。ホークウッドがゾリグの剣で吹き飛ばされ、最後に残ったまともな戦力である新宮が、実織と自分を守ろうとして、クリムエルヒルトに倒される。

「下田…」

実織は、戦意を消失していた。自分も、多分そうだろう。たった二人で何ができるといふのだ。頼れる人達も、皆、周りで倒れている。「助けて、誰か助けて…」

下田の肩に顔を押し付け、彼女は震えていた。どちらかといえば、誰かに頼られることが多かった人だ。でも、実はそれほど強い人間ではないことを、下田はわかり始めていた。彼女の恐怖を少しでも紛らわすために、ヨルシカを支えているのとは反対の手で、頭を撫でる。

もちろん、自分も怖くてたまらなかった。敵がこちらに近づいてくるのがわかる。命を奪うのに、何の躊躇もない相手だ。気がつけば、

頬を涙が流れていた。

「哀れな姿。最高に、そそるわ。大丈夫よ、ちゃんと上手く殺してあげるから」

クリムエルヒルトの腕が上がる。

母さん、と呟いて、下田は目をつぶった。

そして。

「んが」

妙に間の抜けた声が、聞こえてきた。

18. 誓約を結ぶ

深い眠りから覚めるような心地で、ほぼ全裸の変態が覚醒する。彼は半身を起こすと、周りの光景に、夢でも見たのかと少しの間勘違いをした。

(どういう?)

自分は、火守女と一緒に部屋の中に居たはずだ。それが、祭祀場の広場にまでいつ間にか移動している。さらには、エルドリッチや、既に倒した記憶のある主教の二人の姿まであった。

そこから視点を変えれば、多くの生徒達が倒れている。それだけではなく、イリーナやカルラ、そしてヨルシカまでもが地に伏していた。起きているのは下田と実織だけで、その二人もおそらく敵と思われる者達に殺されようとしている。

(ノミ、説明しろ)

『いや、すまん。おれも意識がなかった。しかしこれは、明らかにやばいんじゃないか』

意識を失う直前の出来事を思い出す。火守女の目の中にいた膿が原因なのはすぐにわかる。あれのせいで、エルドリッチが復活したのだろう。

(そうだ、ひもりんは)

彼女の無事だけが頭の中を占め、貴樹は立ちあがる。目的の姿はすぐに見つかった。大きな剣を携えた男が、おぎなりに肩に抱えている。

「おい…」

思わず漏れた声で、全員が彼の存在を知った。エルドリッチが、マクダネルに向かって言う。

「おかしいよ。彼は、しばらく目覚めないんじゃないのかい?」

「そのはずでしたが。何重にも術をほどこしました。まさかそれを全て…」

貴樹はそんな会話も気にせず、ゆっくりと進み始めた。途中で目に入る生徒達の姿、祭祀場の者達の姿、それらを見回しながら。

(ガキ共はどーでもいい。だが、調子に乗りすぎだなこいつら)

「丁度良いな」

ゾリグが、火守女を無造作に落とし、近づいてくる。貴樹の目は地面に転がった火守女の姿を追っていた。

「俺と戦え。お前が本当にマクダネルやロイスを殺したっていうんなら、それなりに楽しめるはずだ。待ってやるから、武器と鎧を付けてこいよ。頑張ったら、命だけは助かるかもな」

貴樹は、ゾリグと視線を合わせゆつくりと言った。

「何を」

言い切る前に、特大剣が彼に激突した。ゾリグが大笑いする。

「時間切れだ。頭の方は、そうでもなかったみたいだな」

しかし、その余裕そうな態度は一変することになる。

ゾリグの剣は、貴樹の頭に到達する前に止められていた。片手だけで。

「何だ、お前は」

刃を握る手に、力が入る。ゾリグは動かそうとしたが、そうすることは叶わない。腕力で言えば、はるかに差があった。卑怯なほどに。

今だよく事実を理解できていないゾリグに、貴樹はもう片方の手を構える。

「許されないことをしたな」

頭を掴んで地面に叩きつける。それだけの作業が、ほぼ一瞬で行われた。祭祀場の石床がへこみ、その中心で崩壊したゾリグの顔が血にまみれている。遅れて、握っていた特大剣が倒れ、鈍い音を響かせた。(どの分際でひもりんをモノ扱いしてんだ？ お？ ゴミが。いい加減にしろよ)

自分に向かって疾走してくる気配を、貴樹は既に察知していた。突き出してきた刃をかわし、密着しようとしてくるカークの頭を兜ごと蹴りつける。ごふ、と息の漏れた音と共に、カークの体は崩れ落ちた。首のあたりから、血が流れ出してくる。

倒した相手のことはすぐに忘れ、彼は火守女のもとへと歩き出す。その進路上にいるクリムエルヒルトは、起こったことに処理が追いつ

いていない様子だったが、やがて口を押さえて笑い始めた。

「ウフフフ、死んでしまった。あっさりね、格好悪い」

（いや、どけよ。そこにいるとひもりんが見えないだろうが）

「貴方、凄いのね。ちよつと真面目にしてみようかしら」

クリムエルヒルトは、瞬時にソウルの矢を十本作り出した。そのどれもが、貴樹の記憶にあるものよりも鋭く、大きな矢だ。それらは一つにまとまると、彼に向かって放たれた。その攻撃に対して、彼は何ら危機感を抱かなかった。

指を鳴らしてから、飛んできた矢の塊を殴り飛ばす。半壊した矢は、すぐに消えていった。

「はい、これでおしまい」

だが、それは囿でしかなかった。いつ間にか貴樹の背後に出現した彼女は、青白いソウルで短剣を作り出し、うなじの部分に向かって突き刺そうとしてくる。貴樹は素早く体をひねり、同時に彼女の腹に向かって拳を打ちこんでいた。

どちらが速かったのかは、言うまでもない。

クリムエルヒルトの背中から、貴樹の腕が突き出る。彼女は口から血を吐き出し、彼の体に寄りかかった。その瞳は、なぜか、情熱的に濡れている。

「う……そ……こん、な。こんな、の初めて……」

こぼれた笑みは、今までのような挑発するものではなかった。心からの喜びであふれ、目の前の貴樹を恋人のようじつとりと凝視していた。血が失われていくというのに、頬は興奮で赤く染まっている。

「素敵……素敵、最高よ、貴方。私は……クリムエルヒルトといいます。絶対に、また、会いましょうね……」

（何いきなり発情してんだ？ この女は。いいから死んどけ）

体から腕を抜き、彼女を下に落とす。他のやられた二人と同じように、地面から現れた闇の泥に飲み込まれていった。最後まで貴樹の方を見つめながら。

彼はすぐに倒れている火守女の所へ走った。彼女の脇に手を通し、慎重に抱き上げる。意識はまだ戻っていない。顔を確認すると、ぼつ

かりと空いた眼窩が髪の間から覗いている。もうあの気色悪い膿がないことを知って、ほっと息をついた。

(そうだ。他の皆は。おい、ホークウッドもいるじゃねえか。まさか死んでないよな。アンドレイと、婆さんまで)

倒れている者達の息があることを確かめ、最後に下田達の方まで戻る。

「先生、」

下田は、すっかり気の抜けた顔をしていた。頬に濡れた跡があるのが、何となく気持ち悪い、と思った。

(そういえばいたな、こいつら)

一応安否を確認する言葉をかけた。だが答えは聞き流す。貴樹の注意は、エルドリッチ本人に向けられていた。その周辺には主教の三人が守るようにして立っている。最大限の警戒を彼に向けていた。

「どうしますか。計画は」

「予想外ではあるが、何とかしないとねえ。果たしてこの弓が通用するかどうか」

(ほーん。今度は持つてんのか。ま、それでも無様に死ぬだろうけどな。もういいよお前。しつこいんだよ)

貴樹はうんざりしていた。自分の目的上、ゲームでは敵だった者と協力する可能性も考えていた。しかし、この人食らいに関してはどう手遅れだ。あまりに火守女への害が大き過ぎた。

エルドリッチが弓を構えた時、篝火の近くから複数の人が出現した。中には三メートル近くある巨体も含まれている。本来、ここを守るべき者達がようやく戻ってきたのだ。

「間に合わなかったか…?」

ジークバルドが倒れている面々を見て、剣を下ろす。その心配を、貴樹は否定した。

「全員、まだ生きてます。断言はできませんが」

「タカキ、貴公が守ってくれたのだな」

他にもグンダやフォドリック、シーリスなど不死街の方へ行っていた全員がエルドリッチの前に立ちふさがった。イリーナがわずかに

身を起こして、良かったと呟いている。どうやら彼女が、戦士達の転送を可能にしたようだ。

「人食いよ、この罪は重いぞ。灰の者達、我らが同胞を傷つけた報いを、この場で受けてもらおう」

グンダが唸りながら言うと、エルドリッチは弓を消した。主教達もさらに後ろへと下がり、エルドリッチの方に近付いた。

「頃合いか。最低限の目的は果たした。撤退するよ」

その言葉と共に、主教の三人が膿の中へと飛び込んでいく。

(させるか)

貴樹が追撃を行おうとするが、エルドリッチは俊敏に這って動き、祭祀場の入口へと到達する。瞬きする間に、外へと出ていった。

墓地の間を縫うように逃げ、切り立つ崖の手前で止まると、追跡してくる者達の方を振り向いた。とても追いつめられた者の表情ではない。

「今回も、敗北を認めるとしよう。しかし、アナタ達はすぐにも知るようになるだろうさ。もはや、ワタシとの間に、戦う理由などないということに。そう、むしろ協力できる関係になれるんだよ」

(は?)

「何を、言っている」

ジークバルドが訊くと、エルドリッチは悪戯が成功した時の子供から無邪気さを抜いたような笑みを浮かべた。貴樹を真つすぐ見ている。

「あのコ、今は火守女の彼女を、よく調べてみることだ。フフフ、どうなるか本当に楽しみだねえ」

そう言つて、何の躊躇いもなく深い崖へと身を投げた。誰も止められないほど、流れるように自然な動きだった。

(一体、何がしたいんだこいつは)

貴樹は崖の縁から、落ちていくエルドリッチの姿を眺める。見えなくなるほど小さくなる前に、突如としてその姿は消えた。口ぶりからして、今回の襲撃を計画していた可能性が高い。逃げる方法も、確保していたということだろう。

取り逃した悔しさよりも、最後の発言の意味を、彼は考えていた。悪い予感、その時から既にしていたのかもしれない。



下田は誰かが部屋に入ってきた気配で、目を開けた。視界のぼやけがなくなっていくのに、少しの時間がかかる。重い眠りだった。続けてもう一日寝てもいいと思えるほど、体全体が倦怠感に包まれている。

「シモダさん、お休みのところ失礼します。手を、見せてください」

未だに痛みが残っている右手を、イリーナに向けて差し出した。彼女はそれを両手で包みこんで、労わるように奇跡を使っていく。自然と息を吐き出していた。前の治療から一日も経っていないが、手の甲の黒ずんだ部分が活性化してきたように思えたからだ。

エルドリツチの膿。それはこの世界の中でさえも異質で、どんなに奇跡の回復を使っても、完全に切り除けるものではないのだという。イリーナは、ただ膿が体内へ進行していくのを止めてくれているだけだ。もし、心臓や脳に達したら。そんなことは、考えたくもなかった。ただでさえ、悩みの種は他にもたくさんあるというのに。

「もう少し、早く処置を行っていれば、もっと楽にしてあげられたかもしれない」

昨日も、彼女は同じような言葉を使っていた。役割としての責任感からなのか、元々の性格なのか、少し自分を責め過ぎているような気もする。イリーナも深く傷ついていたのだ。今だって、完全には回復していない様子だ。顔色が悪い。

そんなことはないですよ、と下田なら言ったかもしれない。だが、今の彼は黙っているだけだった。人を気遣って発言するというのは彼の得意とする所ではあるものの、そんな余裕すら消え去っていた。

治療されながら、隣を見る。古い木作りのベッドは空になっていた。普通なら、そこには草野がいるはずだった。

「これでしばらくは問題ありません。ゆっくり体を休めてください」
イリーナは奇跡の光を消すと、立ち上がった。務めを終えて、今にも部屋から出ていってしまうだろう。昨日は一度も言いだせなかったことを、下田は絞り出そうとしていた。

「あの」

彼女は立ち止まり、下田の方を振り返ってきた。

「僕を、皆の所に案内してください。お願い、します」

起きてしまった事と向き合う準備を、しなければならなかった。

祭祀場の裏にある、長く伸びる塔。とても長い間閉鎖していたらしいが、今は一つの用途に使われていた。

「見るのはお勧めしません。貴方の知っている彼らでは、なくなっています」

「そうしなきゃいけないんです。中には、僕の犠牲になった人もいます。見なきゃいけないんだ」

イリーナは、悲しそうに顔を伏せた。そう、彼女と同じように下田も自らを責め続けている。もつと前に、自分の固有能力の有用性を理解していたら。エルドリッチが復活した時に、行動できていれば。不毛だとはわかりつつも、こうはならなかった未来を何度も考える。

前までは固く施錠されていた塔への入口は、解放されている。中に入ると、錆臭さと埃の臭いが混ざり合った空気が流れてきた。本当なら。下田は拳を握りしめる。こんな所に、人を収容していいはずがない。

「階段は崩れやすくなっています。気を付けてください」

すぐ目の前にある螺旋階段を上っていく。所々段が欠け、気を抜けば足を滑らせかねない。彼は自分よりも、壁につきながら進んでいるイリーナのことか心配になった。目が見えないのに、どうやって上っていけるのだろう。手を貸そうかどうか迷っている間に、一番上に到着していた。

再び、鉄格子のはめられた扉がある。下田はその取っ手の所をしばらく眺めてから、手を伸ばした。ほとんど力を入れなくても、開いて

いく。

その先は広い通路になっていて、一番奥に、嚴重に鍵が閉められた部屋が存在した。入口の扉の横にいくつかある格子窓から、中の様子を覗くことができる。彼は格子の縁を掴むと、崩れ落ちそうになる足をどうにかして支えた。

中には、生徒達の体が並べられていた。全員、一度殺されエルドリッチの中に呑み込まれた者達だ。一つの例外なくおぞましい膿が全身を侵食し、一部表皮が肥大してとても人間とは思えないような外見になっている者もいる。中にはしきりに唸り声を上げたり、顔中を掻きむしって傷だらけになっている様子も見受けられた。精神を正常に保っているのは誰一人としていない。下田と同じ隊にいた、国広や草野、久慈、芳野も。

右手だけ膿に覆われた下田でさえ、かなりの苦痛を感じているのだ。体全てをまるごと覆われてしまえば、正気でいられるわけがない。あそこまで深く浸食されてしまうと、奇跡で元に戻すことすら叶わない。問題を難しくしているのは、たとえ彼らが死亡し、篝火で復活したとしても、精神的な傷が治る保証がないことだった。それにあの膿は宿主を害そうとすると攻撃してくる。下手な手出しはかえって逆効果になるだろう。

残ったのは、外で鍛錬をしていた男子三人、下田と高原に、実織、そしてエルドリッチが篝火から離れた後に殺された新宮だけだった。クラスの生徒のおよそ八割が、一度に倒れてしまった事になる。回復する見込みもない。

「貴方のせいでは、決してありません。あの時は、皆ができる限りのことしたんです」

イリーナの慰めも、意識を流れていく。胸を酷く抉られたような感覚がずっと続いていて、頭の中では何かをしようという意思が表れてはすぐに消えていく。何をしたらいいのか、本当にわからなかった。現実に戻る云々どころの話ではなくなってしまった。とりあえず今は、何も考えたくない。

彼女に短く一人で戻ることを告げ、下田は塔から離れた。受け止め

たかない現実から逃げるように。

祭祀場に戻り、自分の部屋に戻ろうとした所で、気まずい相手と出会った。篝火の側に高原が立ち、彼の方を見てきている。

「下田」

体調が幾分良くなっている様子に安堵を覚えたが、それ以上に申し訳なさが先立ち、どう会話すればいいのかわからなくなった。高原の目をまともに見ることもできず、進む足はさらに早くなる。もう一度長く眠れば、全て夢になってくれるかもしれないと淡い期待を抱いていた。

「ちとせ、なんだここにいたのかよ。探したぜ」

宇部が階段の上から下りてくる。彼女のすぐそばにまで近寄ると、馴れ馴れしく腕を掴んだ。

「話の途中だったじゃねえか。照れてんのか？ よく考えてみろよ、お前を守ってやれるのは俺しかないんだ。わかるだろ。今なら、前みたいな仲に戻ることも許してやる。いくらお前でも、ものを考える力くらいはあるだろ」

彼と高原が、過去に付き合っていたという話は有名だった。その結末が、なかなか派手であったことも。噂が流れ始めてわずか一週間後に、宇部が彼女に暴力を振るった。それで一気に冷めて彼女からふつたらしい。

無意識に足を止めていた。確かに、宇部はかなり実力がある。単純でいながら強力な固有能力を持ち、もし襲撃の時にいたら、状況は変わっていたかもしれなかった。

不意に、おかしなことに気がついた。なぜ、宇部と高原の事件のこととははっきりと覚えているのだろう。学校の思い出はほとんど消えてしまっているのに。

高原は面倒臭そうに下田の方から顔を動かし、手を宇部に向けた。そして思いつき彼の頬を平手打ちした。

「ぶざけんな。こんな状況になって、出てくるのがそれ？ 頭おかしんじゃないのあんた。マジで気持ち悪いから。消えて」

宇部の表情が、怒りで歪む。その拳に力が入ったのを、下田はぞつ

としながら見た。今の彼の力で殴られたら、誰だって無事ですまないだろう。傷つけることへの躊躇いが、今の宇部にはあるとは思えなかった。なんとかして止めようと、彼らの間に入り込もうとする。

しかし、その前に高原がロープを二本出現させた。近距離で放たれたそれらは相手にかわす暇すら与えずに、両手足を縛りつけた。バランスを崩した宇部は、なすすべなく倒れ込んだ。

「しばらく寝てろ。そーね、気が向いたら解除してあげるから」

宇部が罵倒の言葉を叫ぶ。高原は耳を塞ぎながら、歩き始める。下田の前に立つと、彼の後ろの方を指で指し示した。

「話、あるから。あたしの部屋で」

変に抑揚を押さえた声。だがその目は間違いなく怒っていた。

「あ、いや、で、でも」

「なら、あんたの部屋でいいよ。決まり。さっさと行こう」

逆らう気も起きなくなつて、半ば彼女に引つ張られるように、部屋へと戻ることになった。

下田の部屋に着くと、すぐに彼女はベッドに座りこんだ。腕組みをして、彼の方をどこか責めるような目つきで睨んでくる。

「何で床に座ろうとしてんの」

「な、なんとなく」

「あんたもここに腰かければいいでしょ」

「うん…」

高原から少し離れた位置で、ベッドに座った。

それからしばらく、彼女は何も話さなかった。しかし視線だけは依然として向いてきているので、居心地が非常に悪い。やっぱりと、下田は思った。隊の中で下田が生き残ってしまったのを、責めているのだろうか。もつといい方法があるはずだと。それは、もつともなことだ。自分でもそう思っているくらいだから。

いつそうやるせなくなつて、口はさらに重くなつていく。俯いている彼を眺めた後、高原は急に言ってきた。

「それで？」

「え？」

「理由を、教えてほしいんだけど」

「何、が？」

彼女は髪の手を指でくるくる回している。

「あたしをずっと避けてたよね。それをどうしてかって訊いてんの」「えつと…」

言い出せずにいると、彼女は溜息を吐いた。

「まさかさ、あんた自分が悪いみたいに思ってるの？ そんなわけないじゃん。他の人から、話を聞いた。むしろ、あんたがいなかったらもつとやばいことになってたんじゃないの？」

自分は頑張った。できることはした。下田も一応、そうは思っている。しかし、その結果、草野達を取り返しにつかない、深刻な状態に陥ってしまった。高原の友達の二人まで。後悔だけは、どうしても拭うことができないでいた。

「ていうか、下田が悪いつていうんなら、あたしはもつと悪い。一番最初に倒れて。もしちゃんと対応できていれば、祐馬君と草野の手助けをできたかもしれない。責められるべきなのは、あたしの方」「そんなことは、」

下田は彼女の方を向くと、言葉を詰まらせた。自分の膝を抱え込み、高原は顔を腕で隠している。鼻をすする音が、小さく聞こえた。

「ちよつと意地悪だった。これじゃ嫌な女みたい」

くぐもつた声で、彼女は続ける。

「でもさ、やっぱり、寂しいよ…。恵美も、朱音も、男子二人もさ、友達だったじゃん。それで、下田とまで気まづくなつちやったら、あたし、どうしていいかわかんなくなる。ちよつと前まで、わけわかんない状況だけどこれもいかなって思い始めてたのに、なんで、こうなつちやつたんだろ…。もうやだよ。帰りたい。普通の生活に、戻りたい……」

彼女を慰める言葉は、見つからなかった。誰かが泣いている場面は、下田にとって一番苦手とするものだった。同時に、深く反省もする。彼女が目を覚ました時にも、罪悪感から立ち会うことができなかった。自分の感情を整理することだけを考えていて、同じくらい不

安になっている人のことを思いやれなかった。

何となく伸ばした手を、高原が掴んでくる。黒い部分を労わるように指で撫でると、

「ごめん、少し…」

腕を手繰り寄せ、下田の首に抱きついてきた。肩に顔をすりつけて、嗚咽を漏らす。不思議と、彼はそれを当たり前のように受け入れていた。変に意識するというより、安心感の方が勝っている。沈んでいた気持ちだが、和らいでいくのがわかった。

体感では十分ほど、二人は互いの悲しみを共有した。目を拭ってから離れると、彼女は自身の涙で濡れた下田の襟部分を手でこすった。

「汚しちゃった」

「渴くから、いいよ」

高原は、憑きものが落ちたような顔をして、天井を見上げる。

「もう、弱音は十分吐いた。あたしは絶対諦めない。皆を元に戻す方法があるって、信じてる。探し当ててみせる」

「うん、僕もそう思うよ」

「一緒に協力して、頑張ろう。きっとこの世界のどこかに、答えはあるかもしれないし。下田も…」

言葉を止めた彼女を、下田は不思議そうに見た。

「どうしたの？」

「あのさ、私達は友達だよね」

正面から言われて、彼は少ししてから頷いた。

「何、その間は」

声を低くして言われて、下田は誤解を解くように慌てて手を振った。

「その、僕はそう思ってるんだけど、本当にいいのかなって」

彼女は笑って、頭を指で突いてくる。

「考え過ぎなんだよ。あれだけ一緒に頑張ってきて、互いの事情も知ってるし、どう考えても友達でしょ。まあ少し違う言い方するなら、戦友みたいなの？ 思うんだけど、そろそろ名前で呼び合ってもいい段階だと思うんだよね」

「あ、うん。そう、なのかも」

「じゃあ、今度から私はちとせって呼んでね。親戚とかはちーちゃんって言ってきたけど、ちよつと子供くさいし。そっちは何て呼んだらいいの？ アキヒロっていうのは長いから、アキでいい？ 女の子にも似合う名前だし、ちょうどいいじゃん」

「僕は、男なんだけど…」

「あはは」

彼女は大きく伸びをして、ベッドから立ち上がった。その姿には、もう暗く沈んだ所はない。下田もまた、前向きに物事を考えることができるようになっていた。結局、一人で抱え込むのが一番駄目なのだろう。彼女の芯の強さも改めて感じた機会だった。

コンコンと、扉が鳴った。誰かが来たようだ。高原が扉を引いて開けると、ヨルシカが立っていた。

「失礼しますね。急で悪いのですが、篝火の周りに集合してください。大事な話があります」

いつもと変わらない様子には見えるが、彼女が一番消耗しているはずだった。自分を守ってくれた時のこと、半身を失った痛ましい姿が頭に浮かんだ。移動している間、下田は心配になってヨルシカに尋ねた。

「大丈夫ですか？ まだ、休んでいた方が」

「氣遣ってくださいるのは、嬉しいですよ。でも、体力は問題ありません。万全とはいえませんが、立って歩くくらいはできますから。それよりも」

立ち止まると、下田の手を取ってくる。今度は、彼もどきまぎした。仕方なかったかもしれないが、その裸を一度見てしまっている身としては、落ち着かない。あの、白い尻尾も未だ強烈に頭の中に残っている。

「イリーナの処置はさすががとしか言いようがありません。ですが、私がかっかりしていれば、もっと被害は少なくできました。本当に、申し訳ありません」

ヨルシカが頭を下げようとすると、高原がそれを遮った。

「悪いのは、全部襲撃してきた奴らです。それに、私達、決めたんですよ。皆を元に戻す方法を、諦めずに探すつて。できれば、ヨルシカさん達も協力してくれるとありがたいんですけど」

「それは、もちろんです。私にとつても灰の皆様は大切な存在。……実は一つだけ、彼らを治す方法があるかもしれない」

「本当ですか？」

ヨルシカは詰め寄ってきた二人に向かって曖昧に頷いた。

「最初の火が持つ強力な浄化の力が、あの膿に対して効果を発揮するかもしれません。確証は、ないのですが」

「最初の火？」

前にも訊いたことがある言葉だ。確か、一番最初の説明でルドレスが言っていた。

「この世界の全てを照らす光です。深淵の闇を退ける、我々にとつてなくてはならないもの。伝承によれば、薪を全て集め、篝火に捧げれば、最初の火への道が開けるとされています。あの聖なる炎があれば、彼らを正常に戻すことができると思います」

それは、下田達に課せられた使命とやらにも一致する。つまり、生徒達を助けることは、現実へと戻ることにもつながるのだ。下田は、自分の中の意志が一つに固まったのを感じた。今までは、勝手に押しつけられた使命には拒絶も大きかったが、それが草野達を助けることになるなら話は別だ。

「でも、私達は、勝てるのかな……」

高原が心配そうに言う。

「そうですね。厳しい道のことであることは確かです。エルドリツチは、予想もしていなかった武器を持っていました。あの弓は、本来あのような存在が扱っていいものではありません。私でも、あれから放たれる矢に正面から対策するのは不可能です。同じく他の薪の王も、劣らず強者ばかりです。壁は、大きいかもしれません。ですが」

ヨルシカは、下田の方を見てきた。彼も答えるように、大きく頷く。今回の襲撃は、奪われたものばかりではない。こちらには、まだ、とても大きな戦力があることを知ったのだ。高原も、話だけは既に訊い

ているだろう。

「タカキ。あの方なら、私達が敵わない相手でも、容易く退けるでしょう。それほどに、その力は群を抜いています。彼の助力があれば、目的を達成することも難しくない」

「そんなに、先生は凄いですか」

下田は、まだ納得が言っていない様子。高原に向かって、いかに彼が活躍したかを移動中に話した。その口調にはいくらか興奮も混ざっている。彼が瞬く間に下田達では歯が立たなかった三人を倒した時は、大きく心が動かされた。あの時の、今までにないほど怒りに満ちた顔。

やられていた生徒達のために感情を乱している姿には、純粋な敬意を覚えた。誰だって、あれは格好良いと強烈に思うだろう。

なぜ、力を今まで隠していたのか、詳しいことはわからない。ただ、決して自分達を騙そうとしていたわけではないのは確かだ。もし最初からあの強さだったならば、グンダと戦った時にもっと抵抗していたはずだった。その時は彼も自分の力に気がついていなかったかもしれない。

希望はまだある。下田はそう、固く信じていた。

広場に近付くと、誰かの叫び声が聞こえる。地面に転がっているその男の周りには、何事かと祭祀場の者達が集まっていた。

「あいつのことすっかり忘れてた」

高原が少しも反省していない顔で、そう言った。

ヨルシカの大事な話というのは、誓約に関するものだった。

「事情が、変わりました。エルドリツチの卑劣な奇襲により、多くの灰が戦いに参加できなくなりました。前は三つの主のうち、どれかと誓約を交わしてもらおうという話でしたが、やむを得ません。残った貴方達八人は、皆暗月の剣に所属してもらいます。そうすればより、私が灰の方達を支え、時には守ることが容易になります。さあ、誓いを示してください」

元より、不満はなかった。術を扱う者は全員、暗月と誓約するつも

りだったし、宇部、丸戸、高坂の三人もそのようだった。

一人一人がヨルシカの前に膝をついて、彼女の手に口づけをする。緊張はしたものの、これは真面目な儀式だと言い聞かせて、粗相のないように気をつけた。ヨルシカは下田が誓いを口にした時だけ、彼と目を合わせ、少しだけ笑った。元気づけてくれていたようだ。腕にある誓約印が光り、ヨルシカのもとに集まっていく。

だが、ただ一人だけ、少し離れた所で立ったままの男がいた。

「なにか、不都合でもありませんか？ もちろん、貴方も灰の一人。その強さなら私の庇護は必要ないでしょう。それでも、誓約をお願いします」

下田もまた、不可解なまま貴樹を見た。彼はどこか落ち着かなげにも思える。端の方で静かに立っている火守女を一瞥して、その口を開いた。

「すみません。誓約をしたくないわけではないんですが。その前に、本題に入ってください。それからでも、遅くはないはずです」

「本題、ですか」

ヨルシカは全員を見回し、最後に火守女に視線を置いた。

「この祭祀場は周りは深い谷で覆われ、敵の襲撃を受ける恐れがない貴重な拠点でした。それにも関わらず、エルドリッチ達の侵入を許してしまった。原因は、既に訊いています。火守女である彼女が、その一端を担っていると」

生徒達も皆、火守女を見た。その中には責めるようなものも含まれている。彼女には、唯一の出入り口である篝火での転送を操作できる力がある。まさか、それを悪用したということなのだろうか。だが、そうする動機があるとは思えない。

貴樹が否定するように首を振った。

「その言い方は、違うと思います。あれは誰にも予想できないことだった。彼女の頭冠の中に、エルドリッチの分身が隠れていたなんて。わかるわけがない」

「ルドレス、そのような事実を把握していましたか」

呼ばれた小男は、目をつむった。

「彼女のことを、火守女になる前から知っているが、そんなようなものはどこにもなかった。私は、タカキの意見に同意するよ。これは敵の計略が成功しただけのことだ。彼女の意志が、介入する余地はない」議論されている本人は、黙ったまま話を聞いていた。少し顔を俯かせて、ひたすら申し訳なさそうにしている。あるいは、自分が話の中心になっていることに、ただただ困惑しているという様子だった。「では、もう一つ。エルドリッチが逃走間際に言ったことです。何か、自分の中で異常があるかどうか、わかりますか？」

火守女は、自らが質問されていることをゆっくりと飲み込んでから、否定した。

「いつもと変わりはありません」

「体調は？ 違和感はありませんか」

「務めに支障が出ることはないと思います」

「そうですね。どちらにしろ、あの人食いの言葉に真実があると思うのは愚かなことです。しかし、念を入れる必要はあるでしょう。イリーナ、彼女の器を調べて」

脇に控えていたイリーナが、火守女に近付く。失礼します、と一言述べてから、相手に向かって手をかざした。下田も初めの方で火守女に器を測ってもらった経験があるためか、今の光景は妙に感じられる。こっそり貴樹を伺うと、一心に火守女だけを見ている様子だった。

イリーナは手を下ろすと、一步後ろによろめいた。

「ごんな、ことが。私には信じられません。ありえませんが。あつていはずが」

これまでにないほど、動揺している。腰が抜けて座りこみそうになる所を、ヨルシカが支えた。

「二体、どうしたのです。何が見えたのですか？」

質問にもしばらく答えずに、彼女は自らの感情を落ち着ける時間を作っていた。やがてヨルシカから離れると、しっかりと立ちあがった。胸を押さえ、火守女を見るその瞳には、なぜか、畏敬の念が込められている。

「大きな、輝きを見ました。あふれんばかりのソウル。あれは間違はなく、王の薪です。私達が求めてやまないものが、彼女に宿っています」

ある意味、祭祀場の者達よりも、生徒達の方がその事実を受け入れるのに抵抗はなかった。つまり、五つある薪のうち、一つがすぐ側で見つかったということだ。これは幸先のいいスタートに違いなかった。

だが、下田達以外には信じがたい事実ではあつたらしい。

「本気で、言っているのか？ 火守女が薪の王だということなんだぞ。冗談でも趣味が悪すぎる。見間違いということは無いのか」

カルラが訊くと、イリーナは強く首を振った。

「いいえ。あれは確信を持って、薪だと言えます。そうとしか思えません」

「だが、そもそもの話、彼女に薪としての資格があるとは思えない。論じるまでもないことだ。火を継ぐための薪には、相応の格が求められる。王としての格だ。それを、火に仕えるはずの者が持っているとも？ ありえるわけがない」

「いや、カルラ。それは違う」

口を出してきたのは、ルドレスだった。彼はぼろ布に包まれている両手を組み合わせ、火守女を見下ろしながら続ける。

「まさか、話す機会が来るとは思っていなかった。これは、おそらく私しか知らないことだろう。彼女は、火守女になる前、エルドリツチに囚われていた。それは既にわかつていると思う。だが、そのさらに前のことは、誰にも話してこなかった」

言葉を切り、言いたくない事実を吐き出すように、口を動かした。

「彼女は、ロスリック家の長女であり、双王子の妹だ。血に関して言えば、薪を持つのに適している。王族の血が流れているのだ」

反応は、劇的だった。その場にいた戦士達はほとんどが火守女から離れるように動き、隠しきれない嫌悪の眼差しを向けた。ロスリック。下田も何度か聞いた名だ。その家の王子が火継ぎを拒んだせいで、過去の薪の王が復活し、自分達が呼ばれるきつかけにもなったと。

ヨルシカが、信じられないように言う。

「彼女が、あの？ 天使ゲルトロードですか？ まさか、本当に…」

天使は、自分達の世界では聖なるものとして扱われている。しかし、ここでは違うようだ。

「確か幼少時に死んだと言われていましたが」

「往々にして、伝承は事実と異なる。何より、あの銀髪は王子ロスリックと瓜二つだ。そして薪を所有できていることが全てを物語っている」

静寂が、辺りを包み込んだ。全員を注目を受けている火守女は、言われたこと一つ一つを理解するのに精一杯のようだった。

「そいつを、殺せ」

獣の姿を模した兜を被った男が、低く呟いた。ほとんど見た事のない者だ。名はイーゴン。ジークバルドやグンダ、イリーナと同じ太陽の戦士に属している。

「今回の件もそうだが、疑われてもおかしくない点が多々ある。あのおぞましい天使の娘だというのなら、尚更だ。我々にとって害が大きい」

ヨルシカがその言葉を遮った。

「言い方を考えてください。この事実は、予想もしていないことではありませんでしたが、むしろよかつたかもしれません。エルドリッチがなぜ己の薪を彼女に移したのかはわかりませんが、対処するのは早い方がいいでしょう。イリーナ、貴方一人で、火守女の務めを行うことはできませんか」

「未熟な私が、全てをつつがなくできると断言できるわけではありません。ですが、そうあれと求められたのならば、全霊で応えてみせます。彼女の分も、補う覚悟はあります」

「その言葉を、信じましょう。では、決断を貴方達にお願いしたいと思います。崩される可能性は残っています。おそらく、エルドリッチは薪を奪おうと何度も狙ってくるでしょう。その懸念を払うために、できる限り早く、彼女を篝火に捧げる必要があります。私としては、明日にも儀

式を行いたい。異論がなければ——」

「ちよつと、待つてくださいよ」

その声は、未だ衝撃から立ち直れていないかのように、震えていた。貴樹が篝火の側にまで歩いていく。それから全員をぐるりと見回すと、肩をすくめてみせた。

「皆、奴の思惑に踊らされているだけです。だから、こんなわけがわからない話の流れになっている」

「そんなことはありません。ことは単純です」

「悪いんですが、さっきのカルラさんの言葉を借りるなら、冗談にもなっていない。どうして、どうして彼女が犠牲になる必要があるんですか」

「薪は、器から取り出し、捧げなければいけません」

「僕が言いたいの、そういうことじゃなくて、何というか」

ここにきて下田も、彼の様子がおかしい事に気がついた。ただ、目の前の事実を否定しようと躍起になっているようにも思える。

ヨルシカが溜息をついて、貴樹を見据えた。

「貴方の気持ちは尊いものです。しかし、使命を果たすことが、貴方達の願いにもつながるのですよ。元いた場所に戻りたいという、当たり前前の願いが」

「わかってはいますが、その、なぜ明日でなければいけないんですか。あまりにも」

「用心のためです。薪が捧げられないままということは、敵に奪う隙を与えるということ。こういう行動は、迅速さが大事なのです。それによってあらゆる危険が軽減される」

貴樹は、呆然と固まっていた。何か反論が出るのを期待するように周りをきよろきよろした。誰も発言する気がないのを理解したのか、ふつと無表情になり、踵を返す。

「すみません。自分の部屋に戻ります。考えたいことができたので」

彼は誰かが声をかける隙を作ることなく、広場から出ていった。意外だったのは、その後すぐに火守女が動いたことだった。

「どうするつもりですか？」

「私から、話をしてみます。言っていなかったお礼もしなくてははいけませんから」

貴樹の、火守女に対する特別な感情は周知の事実だった。積極的に彼女といたがり、誰にもわかるほど表す表情が活き活きとしていた。それだけに、判明した事実は小さくない動揺を彼に与えたのだろう。受け入れ、自分の中で納得できるようにするためにはそれなりの時間がかかるはずだ。

下田はこの時、貴樹が自分達と同じくらい、現実に戻りたい気持ちがあると思っていた。この板挟みにも、ちゃんと正しい決断をしてくれると。

気の毒なほど、的外れな考えだ。



(くそ、くそくそくそくそくそ。ありえねえ。ふつぎけんあああああああああ！)

部屋に戻るとは言ったものの、本当にそうしたいかは自分でもわからなかった。

(なんだこの展開は。舐めてんのか。くそが、あのくそつたれの、変態の化物め。やりやがったな。冒涇だ。ダークソウルに対する全てに謝れ。あああああああああああああ)

『お、落ち着けよ』

(完全に想定外だ。こんなの、誰が予想できる？ 薪が、そんなほいほい人に与えられるものであってたまるか。全くもってふぎけてやがる)

薪というのは、その所有者の体と等号で結ばれる。つまり、薪を捧げるためにはその人を殺さなければいけない。それぞれの薪の王とは、何度も戦ってきた思い出はあるものの、そうすることには何の躊躇いもなかった。しかし、火守女がその対象となると、事情は大いに変わってくる。

(落ち着けつて言うけどな。わかるか？ これで俺の計画は全て台無しだ。ひもりんと楽しく過ごすために、ひもりんを犠牲にしてどうすんだよ。アホかあああああああもうどうすればいいのおおおとおおおとおおおとおおおとおおおとおおお！)

『お、おれもわかんねえけどさ。なんか、後ろから追って来てる奴がいんぞ』

(あ？ 今の俺はどうすつかわかんねえぞ。どいつが知らねえが、邪魔——)

振り向いた彼は、即座に落ち着きを取り繕った。火守女が少し息をきらして、走り寄ってくる。

「申し訳ありません。引き止めてしまつて」

そのいじらしい姿が、貴樹の胸を締め付けてくる。

「こつちこそ、冷静になれなくて。あの、大丈夫？」

「はい？」

「こんなことになつちやつてさ。誰だつて、普通には受け止めきれないと思うよ」

火守女は考えるような間を作つてから、素直に頷いた。

「そう、ですね。確かに今でも信じ難いです。私に、薪が宿っていると
は」

「大丈夫。俺が何とかするから。ひもりんは心配しなくていいよ」

「ありがとうございます。実は、今ここに居るのは、ちゃんとお礼を言いたかつたからなんです」

「お礼？」

貴樹は、段々と気づき始めていた。自分と火守女の会話は微妙に噛み合っていない。それどころか、感情の行き違いも大きいということに。

「貴方が、襲撃してきた者達から私を助けてくれたことは伺つています。不謹慎かもしれませんが、そのおかげで、このような栄誉を賜ることができました。この御恩は絶対に忘れません」

言葉が、しばらく出て来なかつた。嫌な事実を目の前に突きつけられ、彼は口元が引きつっていくのを押さえられない。

「い、いや、ひもりん？ 死んじやうんだよ？ 薪としての使命を全うすることは、自分の命を犠牲にすることなんだ」

「はい、存じています。私のような者が、火継ぎのための重要な役割を担う。分不相応なのではないかと、恐ろしく感じていますが、それでもこれほどの喜びはありません。最期まで、つつがなく果たせれば幸いです」

彼女は、貴樹にとって信じられないことに、笑っていた。あけっぴろげではないにしても口角を控え目に上げて、心からの喜びを表しているのがわかる。初めてだった。初めて見る笑顔が、こんな場面だとは、予想もしていなかった。

(…)

『おい、タカキ』

お互い様だった、ということだろう。火守女が、貴樹の気持ちを全く理解していなかったように、彼も彼女の精神性を、ちゃんとわかっていたいなかった。二人の関係は、初めて出会った時から、少しも変わってはいない。

貴樹は菌を食いしぼりながら、己の迂闊さを反省した。

(ノミ、お前の言う通りだな。確かに、難しい。大事な人と向き合い、理解して、幸せに過ごす。そのために、今までの甘すぎた俺を変えなくちやいけない。人の思考、精神はほとんど周りの環境で決まる。そもそも、彼女自身のことを思いやる奴が一人もいないような、こんな糞みたいな環境に置いておく方が間違いだっただんだ)

『…お前、何をするつもりだ』

彼の手が、火守女の肩に置かれる。不思議そうに、彼女は顔を貴樹の方に向けた。

「いいか、聞いてくれ。死ぬことが幸せなんてあつてはいけないんだ。そんな馬鹿げた考えは、俺が否定する。どんな奴がどんな事を思っているかが関係ない。本当の幸せは、もつと違うことなんだ」

火守女はまた、よくわからない、という顔をする。

貴樹は既に決意が固めていた。何を優先するべきか。それがどれほど無謀であっても、やめるつもりはない。

その夜。ある部屋の扉を、静かに叩く者がいた。

びったり二回、まるで周りに音が漏れるのを防ぐかのように、慎重な手つきだった。ノックから少しの間が空いて、扉がゆつくりと開かれる。出てきたのは、瞼の重そうな火守女だ。彼女は相手を確認すると、乱れている髪を整えたりして、失礼がないようにした。いつも黒衣の上に纏っている掛け布を外し、略装になっている彼女もまた格別だ。

と、貴樹は思う。

「何か、御用でしょうか」

「遅くにごめん。寝てたんだよね」

「大丈夫です。休息は、十分に取れています。大事な明日の儀式の前に、体調を崩してはいけませんから」

「ん、まあ、そうだろうね」

彼は複雑な心境で相槌を打った。それからすぐに真面目な顔になって、火守女に言う。

「これから、不死街に用事があるんだけど。転送してくれないかな？急で悪いのは十分わかってる」

「わかりました。灰の方の頼みならば、断る理由はございません。帰りはいつごろになりますか。それまで、篝火の側で待機しておりますので」

「うーん、特に決めていないかな。ていうより、もう、そんな必要もないと思う」

彼の言葉に、火守女が疑問に思う様子はなかった。立場が上の者に対して、疑う選択肢すらない。その相手の言っていることは絶対だと、無条件に信じているのだ。貴樹は、今の彼女を作り上げた何かが憎らしくてたまらなかった。だが、その感情を表に出すことはない。

二人は歩いて、篝火の広場にまで来た。彼が周囲を細かく確認し、ほとんど人がないことを確認する。静かな夜だった。

「こんな夜分に、用でもあるのかな？」

ただ一人、石の玉座に座っている男を除けば、だが。

貴樹はルドレスに向かつて、自然に笑いかけた。

「ちよつと、個人的な用ができてしまつて。何と言いますか…、僕にとつては、一番優先するべきことですね」

ルドレスは彼と火守女を交互に見てから、どこか諦めたように、宙を仰いだ。

「時間の問題だつたな。嫌味に聞こえるかもしれないが、私は、君を尊敬する。たとえそれが悪だと断ぜられようとも、きつと、誰かにとつての幸福たりえるのだろうか」

「何のことか、わかりません」

「どれだけ厳しい選択か理解しているのなら、何も言うことはないよ」
当然、ばれていることは承知の上だ。あれだけ皆の前で露骨に発言すれば、その後どういう行動に出るのかは、誰にでもわかる。だからこそ、貴樹は頭の中で、今の静寂に対する警戒音が鳴り響いていた。
『タカキ』

（わかつてるよ。力を解放しろ。ちなみに、耐久値はどれくらいだ）
『残り二十九%だ』

（そうか。ま、やれるだろ）

後悔は既に消え去っていた。むしろ清々しい。もともと、この世界にずっと来たかつた理由は、一つしかないのだ。

篝の側にまで行くと、転送の準備をしようとする火守女を遮つた。

「ひもりん。頼みがあるんだけど。俺の体につかまってくれないか」

「あの、」

「えつと、そうだな。こうして腕を上げて、首に回してくれれば、それで」

そのまま彼は、火守女を抱き上げる。

（やばやばやばやばやば、うわ、うわー、死にそう。最高だなあほんとに）

高揚感に包まれる一方で、彼女の体の軽さを感じ、鼓動は落ち着いていった。こうして抱いていると、彼女は紛れもなく弱い存在だと思わされる。自分の価値を知ることなく、世界のためとかいうふざ

けた理由で命を落とすような。

『もう一度訊くぜ。考え直す気はないんだな』

(これが、俺の生きがいだ。邪魔する奴は、全部ぶつとばしてやるよ)
『一蓮托生だ。どこまでも、ついていくぜ』

(正直きもいです)

『ええ……』

火守女は、もちろん当惑している。

「灰様、一体何を」

「俺の名前は、タカキつて言うんだ。今度からはそう呼んでくれると嬉しい。凄く。それから、不死街に移動したら、すぐ上に飛ぶから。しっかりつかまってて」

貴樹は右手を篝火にかざした。彼女が何か言葉を発する前に、二人の姿は祭祀場から消えた。

視界が一瞬暗くなり、明けると同時に両足に力を入れていた。
(うおっ)

勢いよく跳ねると、すぐに小屋の天井が背中に当たる。それでも力は殺されず、屋根を突き破って、外に飛び出していた。現れた瞬間の彼がいた所では、魔術や、妙なロープが放たれていた。もしすぐに行動しなければ、拘束されていただろう。

(はいはい。やっぱりそういうことね。準備しといて良かった)

砕けた木の欠片が火守女の頭についているのを払うと、ふたたび追撃の青白い輪のようなものが向かってきた。屋根に着地するとすぐに前方へ跳躍し、篝火のある小屋から少し離れた地面に降りた。

振り向くと、小屋の中で待ち伏せしていた大勢が出てくる所だった。

「何をしようとしているのか、自分でわかっていますか?」

ヨルシカは残念そうな顔をしていた。

「別に。少し散歩にでも出かけよう」と

「ならば、火守女を置いていくがいい。彼女を連れていく理由はどこにもないはずだ」

ジークバルドが、重大な間違いを犯そうとしている者を諫めるように言った。こちらに向けられてはいないものの、剣が抜かれている。

「先生、冗談ですよ。早く、戻って来てください」

高原や、下田、実織、新宮。あと、貴樹の眼中にもない男子三人。生徒達だけではなく、ほとんどの祭祀場の戦士たちが、彼と相対していた。その中のシーリスが、未だ事態を受け入れられていない様子で、言ってくる。

「タカキさん、あの言葉は、こういう意味だったんですか。自分のことを、これからの行動で判断してほしいと。いいえ、認めません。貴方は、こんな事をする人ではないはずです。考え直して」

グンダも、真摯に言葉を紡いだ。

「タカキ。我輩は、お前と約束をした。灰の者達を守ると。それを、破りたくはないのだ。どうか、思いとどまってくれ」

「そういえば、僕だけまだでしたね」

グンダの言葉を流し、彼は自分の腕を見た。そこには誓約印が刻まれており、鈍く光を放っている。

「最初は、太陽の戦士と誓約を交わしたかったんですよ。でも、よく考えれば、僕が忠誠を尽くすべき人は既に決まっていた」

彼は火守女の手を取った。多くの者が見ている前で堂々と膝をつき、その掌に接吻をする。

「僕はこの人の幸せのために、真の幸福のために、身を捧げます。彼女の命を脅かす者は悉く排除し、彼女の望みのためならどこまでも行きましょう」

腕の印から放たれた光が、火守女の中に入っていく。それは、彼以外の全員が言葉すら出ない瞬間であるとともに、何かが決定的に分け隔てられてしまった瞬間でもあった。

『そういえばよ、名前はどうすんだ』

(ん?)

『他の誓約はどれも暗月の剣とか、名前がついてんだろ』

(おお、確かに。決めないと)

祭祀場の者達、今はもう、対立する関係になってしまった者達に向

かつて、貴樹は言う。初めからこうすればよかったと、なかば開き直る心情になりながら。

「火守女の灰。僕はその一員として、ここに新たな誓約を結びます」
宣戦布告をした。

承：薪の王達

19. 貴樹 対 火継ぎ肯定派

「追いなさい。ただし、接触しても不用意な戦闘は行わないように。説得を試みながら、指定の場所まで誘導してください。無理だけはないで」

ヨルシカの指示を受け、ミレーヌ率いる狼血の騎士達が動き出した。彼女はその後ろ姿を最後まで見送ってから、額を押さえる。苦しそうに口を引き結んで、その場に座りこんだ。

「だ、大丈夫ですか」

ちやうど近くにいた下田が、慌てて近寄り、奇跡を使う。

「ごめんなさいね。さすがに、疲れました。こんな事になるとは」

今でも、信じられなかった。貴樹が火守女と誓約を結んだ時になっても、まだ冗談か何かだと思っていた。彼女を庇うということは、薪が全て集まらないということだ。それはつまり、自分や生徒達が日本に帰ることを拒絶することにつながる。

「あの、馬鹿……」

実織が、唇を噛んだ。誰だって、認めるのは難しいだろう。自分達は、裏切られたということなのだから。よりにもよって、あの先生に。「皆さん、よく聞いてください」

ヨルシカが、決意のこもった口調で言う。

「絶対に、彼を止めなければいけません。今すぐに。私達は、持てる全ての力を使う必要があります。彼の力に関して、情報があるのならこの場で言ってください」

初めに発言したのは、グンダだった。

「膂力は化物じみている。我輩の武器を素手ではじき返された。さらには、一見無防備な格好でいて、鎧を何十枚も重ね合わせたような装甲も持っている。攻守ともに、単独で対抗するのは不可能に近い」
「それに、魔術や呪術も効いていた様子はありませんでした。エルドリッチの術にも、正面から突破できるだけの力はあると思います」

アンリが淡々と言った。ううむ、とジークバルドが唸る。それだけ聞けば、弱点と呼べるものはどこにもない。たとえ追いついたとしても、返り討ちにされてしまうだろう。いや、それよりも説得した方が早いのではないか。彼は、きつと、冷静ではないのだ。

「しかし、それならばおかしい点がいくつかある。ユリアとの模擬戦で、なぜあも簡単に倒されたんだ？ 本当に無敵の防御を持っているなら、木剣の方が折れていたはず」

「私の祖父を助けてくれた時も、彼に大きな力があるとは思えませんでした。正気を失った祖父の一撃で、右腕が折れたのも確認していません」

カルラとシーリスの言葉で、ヨルシカは考え込むように黙った。そして、何かを思いついたのか、言葉を一つ一つ確認するように口を開いた。

「どんな強大な力にも、必ず穴はあります。彼の力には、何かしら制限があるかもしれません。それがはたして時間なのか、さらに細かい条件があるのかはわかりませんが、付け入る隙は必ずある。これから、不死街の中心へと移動します。彼はもはや一人の戦士ではありません。薪の王にも匹敵する相手だと認識を改める必要があります」

そして、下田達の方を向き、申し訳なさそうに頭を下げてきた。

「気は進まないでしょう。ですが、協力をお願いします。彼を連れ戻すために」

宇部達がすぐに、武器を取り出した。下田は彼らほど、割り切れたわけではない。しかし、現実へ戻るためにも、草野達を助けるためにも、やらなければならなかった。貴樹に正気を取り戻させ、本当に大事なのは何なのか、思い出してもらうために。



(要は、受け止め方だよな)

『何がだよ』

(二人つきりでこうしてるってことは、新婚旅行も同然ってことだ) 『これが？ 理解不能なんですが…』

建物の残骸を飛び越え、貴樹はほぼ全力で走っていた。腕の中にいる火守女は、さきほどからずっと黙っている。時々彼の方を見上げては、何かを話そうとして、やめるといふことを繰り返している。一番混乱しているのは、彼女だった。

『で、どうすんだ』

(んー、もはや予定もなくそなくなったからな。とりあえずは、アノールロンドを目指す。どうやらエルドリツチとかいう糞が、よほど俺にぶつ殺されたいらしい。お望み通りにしてやろうかと。それにあいつは、ひもりんから薪を取り出す方法を知っている可能性がある。さつさと捕まえて、その方法を吐かせてから、抹殺してやる)

火守女の瞳も、いつの間にか消えていた。エルドリツチが奪っていったに違いない。それを取り返すためにも、人食いの居城に向かうのが最優先だった。

『先の話もいいが。今、後ろにくつついてきてる奴らはどうすんだよ』(あー、そうだな。面倒くせえ。なかなか機動力があるらしい。確かに巻くのは無理そうだ)

貴樹は今、全速力で足を動かしていた。それでも、遅れることなく追跡されている。いつまでも走り続ければ相手の方が先に体力の限界が来るだろうが、こつちには火守女という存在もいる。彼女の体調のことも考えずに飛ばすのは、良い考えではなかった。

街の部分を抜け、森に入る。植物などが生い茂り、前に進みにくくなった反面、追跡者達の速度はさらに増した。土地勘の差というのは、意外にも大きく響いてくる。そろそろ限界が来たのを感じて、彼は止まった。

「もう、逃げはしません。出てきてください」

ミレーヌが姿を現したのを初めに、続々と狼血の騎士達が貴樹の前に立った。全員が狼の刻印を施された大剣を構えている。貴樹は一且火守女を下ろし、今度は背に抱えた。

「灰様、おやめください…」

やっと言葉を出した彼女に、安心させるように肩を優しく叩く。

「その言う通りよ。貴方は、自分が正しいことをしていると思い込んでいます。もういい加減、目を覚ますべきよ。その行動は、自己陶酔の結果でしかない。誰も得をしないわ」

「自己陶酔、ですか…」

「ええ。貴方はそれに同情しているだけ。そして、自分の行動がよいことだと酔っている。痛々しくて、滑稽だわ」

ミレーヌは、火守女に対して、侮蔑の視線を投げた。

「あの愚かなロスリックの血縁とはね。おまけに、異端の娘ときている。考えてみなさい、それに関わる価値なんて、少しもないわ。薪の器でなければ、相応の扱いをされて、多くの者が望んでいる死を与えられるだけ。道具としての役割を全うするのが一番それにとつて幸せなことなの」

木の一本が、太い幹ごと半分に分れ、草木を巻き込んで倒れた。

「それ以上」

貴樹は殴った手を回し、関節を鳴らす。感情を押さえた顔で、冷やかに騎士達を見回した。

「それ以上彼女を侮辱すれば、容赦はしませんよ。よく口が回っているみたいですが、貴方達は一体何をしに来たんです？ 僕を捕まえるのなら、まだそこに立っているのは不思議ですね」

彼の威嚇にも動じず、ミレーヌは溜息を吐いた。

「説得をしろと言われているの。あるいは交渉。貴方は平静を保てていないようだから、有無を言わず捕えるのはおかしい。そういう、考えを持つのがヨルシカ様よ」

「交渉？」

その言葉で、貴樹は可笑しくなった。同時に、この世界にもくだらない人間はいくらでもいると理解した。

(こいつら、本気で言ってるのなら、随分とまあ)

「交渉っていうのは、対等な者同士で行うものではないんですか？

到底、今の状況に当てはまるとは思えません」

ミレーヌも、冷笑を返した。

「その通り。だから、こちらがかなり譲歩していることは理解して？
状況をよく考えて、真つ当な選択をすることね」

「…わかってないな」

少しだけ、化けの皮を剥がす。ミレーヌ達に向かって手をかぎし、中指を立てた。相手にとつては馴染みのない形だろうが、意味はきつと伝わるだろう。

「貴方達が束になってかかってきたところで、俺には勝てないって言ってるんだ」

ミレーヌの言葉は、それなりに正しい。彼が自分に酔っていない瞬間などありえないのだから。いつだって、自分こそがどの人間よりも価値があると思ひ、自分の望みこそが最も優先されるべきことだと当然のように考えている。人間の業をかき集めたような男である。

「隊長、こいつは駄目だ。まだ頭が混乱している」

騎士の一人、ミレーヌや貴樹よりも頭一つ背が高い男が、呆れたように言う。ミレーヌは頭痛をこらえるような表情になって、剣を握り直した。

「私は、貴方のような男を一人、知っている。個人的な感情に身を任せ、本質を見失い、拳句の果てには周りの全てに泥を塗るような。そんな人は、大嫌いよ。本当ならどこかに消えてくれた方が、よほどためになる。でも、薪を連れて行くことは許されないわ。おとなしく従いなさい。強硬手段に出る前に」

「そうですね…」

（やれやれ。監視者の分際で何言ってるんだか。ここでぶつ殺すのも一興だが、祭祀場と決定的な溝を作るのは嫌だな）

貴樹は思わせぶりに視線をミレーヌ達の後方にやり、指で指し示した。

「だから、脅すなら相応の戦力を持ってきてください。例えばそう、貴方達の後ろにいる彼らくらいなら、相手をしてもいいんですけど」
「な…」

騎士達全員が、指摘された脅威の方へと振り返った。急な新手の登場に、警戒は最大にまで高まる。その俊敏な動作を見る前に、貴樹は

う慣れた。それ以外は単純な近接攻撃しか持っていない。

「またグンダさんと戦うことになるなんて、不思議ですね」

と言いつつどうにかしてだし抜こうという算段を立てていると、グンダは不本意そうに漏らした。

「すまなんだ。我輩も、できれば一対一を望んでいた」

貴樹の背後に、突然二人の戦士が出現した。片方のイーゴンが、巨大な槌を振り下ろす。それを紙一重で避け、すぐ横の瓦礫に滑り込んだ。

「イーゴン！」

「何だ。容赦をする必要はないだろう。こいつは進んで使命から逃げたんだ」

ジークバルドが注意をしたと同時に、次々と祭祀場の者達が姿を現した。

(なるほど。見えない体を使ってたのか)

『おい、こいつは…』

アンリとホレイス、シーリス、フォドリック。太陽の戦士だけではなく、暗月の剣のメンバーも貴樹を取り囲むようにして立っていた。そしてそこにミレーヌ達が追いつき、数の差は大きく開く。

「再度、尋ねる。火守女を我々に渡し、共に祭祀場へと戻ってはくれないか？」

(つまり、とりあえずは俺をどうにかすることにしたわけだ。祭祀場のほとんどの戦力を使って)

『この人数だぞ。勝てんのかよ』

(全く、舐められたもんだな)

『何だって?』

(俺がとんずらしてから、それほど経っちゃいない。限られた時間の中で、俺の力の全てを把握し、完璧な対策を思いつくことはできない。それでもこうしてるってことは、とにかく戦力を注ぎ込めばどうにかなると考えてるってことだ。は、大きな間違いだぜ)

この男の酔いも、随分と回ってきたようである。そんな舐めきった態度を実際に表すことはなく、苦渋の決断をしているという感情を取

り繕った。

「貴方達と、戦いたくはないんです。今は行かせてくれませんか。僕はこれから、エルドリツチを探しに行きます。薪を取り出す方法を見つけて出すために」

「言うだけならば容易だ。しかし、それには多くの危険が付きまとうことを理解しているのか。火守女が、奴らに奪われることだけはあつてはならない」

フォドリツクがシーリスを一瞥してから、続けて言った。

「タカキ。お前は恩人だ。枯れ果てるしかなかった儂を助け、孫娘ともう一度会う機会をくれた。無意味な争いは誰だつて望んではいない。一時の感情で、全てを投げ出すのはやめてくれ。お前にも、守るべき者がたくさんいるだろう」

今までの貴樹の行動の結果なのかもしれないが、彼はフォドリツクを含む周りの意見と実際の自分の思考のあまりのすれ違いに、呆れを通り越して笑いそうになっていた。

（守るべき者、か。それはもしかしてクソガキ共のことを言つてんのかね。仕方がない。ちゃんと皆の前で宣言したのにも関わらず、ひもりんへの気持ちがまやかしだつて言うのなら）

貴樹は火守女を背中から下ろし、瓦礫が段状に積み重なっている所に腰かけさせた。彼女は既に言葉を発することはなく、ただ事の成り行きを不安そうに眺めているだけだった。

「僕の行動が無意味かどうか、試みましょうか。何があつても彼女を守る。それは誰に何を言われようと、変わりません。奪うのなら、力づくでそうすればいい」

自分と火守女がいる廃屋を示すように両手を広げ、

「この中に入ってきたら相応の対処をします。通りたければ、僕を倒してからにしてください」

（はい決まった。これで惚れない奴はいない。さすが俺様。イケメンすぎるううううううう）

『大丈夫かなこれ』

肝心の火守女の反応を確かめるも、望んだものは返つてこなかつ

た。というより、確かめる前に背後にまで迫ってくる気配を感じたからだ。振り返ってすぐさまイーゴンの槌を拳ではじき返した。

「最初から、わかっていた。貴様がくだらない奴なんてことはな。あの女を庇護するという言葉はどこにいった」

「イリーナさんには、もつとふさわしい人がいると思うんですよ。心当たりがあるでしょう」

イーゴンは答えずに、下から槌を振り上げてくる。それを火守女の側まで後ろに飛んで、ぎりぎり避ける。鈍重な武器とは思えないほどの速さだった。耐久値のことを考えても、一撃の重そうな攻撃には気を付けるべきだろう。

貴樹の言葉というよりは、イーゴンの行動が皮切りになったようだった。他の全員が、動き始める。最後までためらっていたシーリスも、エストツクを前に構える。

(さて。できれば傷つけないんだよな。どうしたものか)

『かといって、手加減できる相手でもないだろ』

(こんな状況になったとはいえ、この世界のキャラクターが好きだっという気持ちは変わらない。とにかく、長期戦に持ち込むのが一番だな)

『とうとう?』

(いかに、割りに合わないと感じさせるのが肝だ。俺からは攻撃をせずに、受けに徹する。戦いがってはいないが、引き下がるつもりもない。そんな奴相手に、長時間関わっている余裕は、あっちにないはず。欲張るなら、こいつら全員の武器だけを破壊する。戦意を削ぐのには効果的だろ)

正面から向かってくるイーゴン達を見据えながらも、貴樹は廃屋の裏口へと回った影にももちろん気がついていていた。真つ向勝負だと気を引かせておき、実は目的奪取のために手段を選ばない。そう言ったところだろう。

ほとんど音も立てずに、火守女へと接近する者を、貴樹は前を見ながら掴んで、横の壁へと全力で投げ飛ばした。

「ロツドー」

石の半壊した壁に叩きつけられた狼血の騎士は、意識を失っていた。

(ま、死んじやないだろ)

『あの、タカキさん。言ってることと違うのですが』

(狼血共は例外なんだよ。何の思い入れもねえし、そもそも味方ぶつてるのがおかしいんだよな。普通は敵になってもおかしくない)

『お前が言うのかよ』

色々と策略を練っているつもりでも、彼はその時点での自身の感情を最優先にしているために、最初に考えていた展開からずれていくのは珍しくない。そういう自分を正当化している所もまた、俗物たる所以である。

二番目に廃屋へと入ってきたのは、ジークバルドだった。貴樹に向かって、大剣を構えつつ突進してくる。その刃を掴もうとすると、やや下にずらし、手首の辺りを斬りつけてきた。貴樹はもう一方の手で、右に流れた剣を折ろうとするものの、ジークバルドは瞬時に体を回転させ、喉に剣先を当ててくる。

まさかそれで決着をつけたつもりなのかと思えば、瓦礫を強引に吹き飛ばして、イーゴンが側面から槌を振るってきた。それをかわそうとすると、ジークバルドが剣で首を横に薙いだ。

「硬い」

槌を両手で受け止め、横に流すと同時に、貴樹は思いつきりジークバルドの剣を殴りつけた。刃が壊れはしなかったものの、武器自体は手から離れ、壁に当たる。そして拾いに行こうとするのを妨害する余裕は、貴樹にはなかった。

フォドリックがほとんどなくなっている屋根の部分から降ってきて、火守女の手を掴んだ。彼女の首に向けて、大剣を向けている。イーゴンの再度の攻撃を背中を受け、彼女の危機へと疾走した。

それを読んでいたのか、フォドリックはこちらを振り向き、刃を横に走らせる。掌で受け止め、握ろうとする前に、さらに足払いをかけてきた。小さく跳躍してかわし、拳を防御が一番硬い部分にむけて放つも、空を切った。伸びきった腕をフォドリックは息を短く吐いて、

刃で叩き潰すように打った。金属の音が、鈍く響いた。

「斬れぬな」

貴樹が掴みかかろうとしても、フォドリックは捕まらない。完璧に動きを読まれているようだった。その間に斬撃を何度も入れられる。下手にかわせば、火守女に被害が飛ぶ可能性がある。防戦一方だった。

一人だけを相手にしているわけにもいかない。顔に向かってきた刃を腕で受けると同時に、貴樹はすぐにしゃがんだ。ジークバルドの大剣が頭すれすれを通っていく。それからほとんど間をあげずに、イーゴンが突っ込んできた。迫ってくる槌を殴りつけた直後、がくんと体が後ろに崩れた。フォドリックが、再び足を払ってきたのだ。

できた隙を狙って、三人の武器が振り下ろされる。あえて貴樹は自分から地面に手を突き、逆立ちした状態のまま飛び上がった。両足で刃達を弾き、

空中で体勢を整えようとした所で、ミレーヌが追撃をしてきた。

まともに相手をしている時間はない。攻撃をあえて防ぐことはせず、よく研がれている刃に食らいついた。普通なら頬ごと斬り裂かれるだろうが、歯と歯の間でしっかりと攻撃が止められる。

さすがに予想外だったらしく、彼女の動きが一瞬固まった。その腕を掴み、共に下へと落ちていく。火守女を捕えようとしていたジークバルド達が、後ろに下がった。ちようどのその場所へ、ミレーヌを叩きつける。そのまま締め上げ、脱出できないようにする。

(これでいったん落ち着)

目の前に、ソウルの矢が三本出現した。反射的に火守女の方へと下がり、飛んできた魔術を弾く。しかしこれで、ミレーヌは拘束から抜け出してしまっていた。

ホレイスが、手に持つ斧を突き出してくる。それはただの陽動で、背後からアンリとシールリスが隙を伺っているのはわかっていて、攻撃をかわした後に、動き出した彼女達の方へ、瞬時に振り向く。シールリスの突きを二本の指で掴み、力を込めるも、アンリの攻撃もまた、無視はできなかつた。結局攻めきれずに、火守女の前を死守するしかな

い。

『なあこれ、マジでやば』

(何だ？ おかしい。上に——)

戦士たちが、一斉に廃屋から抜け出していた。今の貴樹と相対している者はいなくなっている。これが退却だとは到底思えずに、ほとんど勘で頭上を見た。

青白い光球が、浮かんでいる。それもかなり大きい。内部が薄く光ったのを理解した瞬間、貴樹は火守女に覆いかぶさっていた。光球からいくつものソウルの雨が降り注ぎ、鋭い先端を持つ粒の一つ一つが、彼の背中に突き刺さってくる。痛みは感じないが、これが相当のダメージであることは自覚していた。

「ひもりん、大丈夫？」

彼女に怪我はないか、すぐに確かめる。肩の布が斬り裂かれ、出血しているの見て、気を失いかけるほど貴樹は動揺した。

「い、痛くない？ ごめん、本当にごめん」

「問題は、ありません」

「ないわけがない。俺が、ちゃんとしてなかったばかりに」

「あの、」

『…いいか、十五%を切ったぞ』

貴樹にも、明らかに今の状況が詰みへと流れかけているのがわかった。このままでは、残り火の効果が終わるのが先だろう。長く深呼吸をして、冷静になろうと努めた。

(今の魔術は、アンリヤシーリスが使えるレベルじゃねえな)

自分の力の穴を、こういう時に思い知らされる。真に脅威なのは今まで戦っていた前衛ではない。貴樹の攻撃の届かない場所から一方的に戦える存在へ、真っ先に対処するべきだった。

「ちよつと、移動するから。掴まってて」

「灰様——」

「心配しなくていいんだ。絶対に、君は殺させない」

彼女を抱え上げ、屋根の上にまで飛ぶ。

『どうすんだよ』

(今、探している所だ。お前は耐久値に注意を向けてろ)

さきほどの魔術は、かなり大がかりなものだ。そう遠く離れた所から操れるものではない。さらには、ジークバルド達と連携が取れるよう、この廃屋がはつきりと見える場所。

目の端で、光るものが移った。ちようどそこから、ソウルの矢が何本も飛んでくる。

(あそこか)

廃屋から離れ、魔術を放った者、あるいは者達がいる場所へ向けて走り出した。当然、それを簡単に見逃してくれるはずもない。戦士達がすぐに追ってきた。

(ち、やっぱ狼血共が速いな。距離を詰められる)

通りがけに瓦礫を拾い、後ろへ投げつける。狙いは全く付けていないので、当たるとは期待していなかった。少しでも牽制できるように、つぎつぎと建物の欠片を放っていく。できるだけ真つすぐ走ることはせず、廃墟の間を飛び越え、あるいはくぐりぬけながら、大きな木の橋を渡った先にある広場のような場所にたどり着いた。

そこには、カルラやヨルシカ、そしてオーベックが待ち構えていた。

「ほら、私の言った通りだ」

祭祀場の奥に閉じこもっていたせいも、全く合う機会のなかった男。オーベックは嫌そうに貴樹を見た。

「下手に手出しをしたら、必ずこちらにやって来る。こんなものは、私の仕事ではない。今からでも、帰らせてくれないか」

全員が、無視をした。

「ちよつと、提案なんです。遠距離攻撃は、やめてくれませんか」

「貴方の力にも、欠点はあるようですね。もう、満足したわけではありませんか？ いかにも強大な能力をもっているようにと、数の差を埋めるのは難しいはず。貴方も、貴重な味方。このような、誰も得をしない、愚かな行動はやめてください」

ヨルシカの言葉のほとんどを、聞いていなかった。

(少しの脅しは通用しねえな。仕方がない。こいつらには、多少無理をしてでも、寝てもらおうしかないようだ)

貴樹が構えたのと同時に、突然槍が飛んできた。速度自体は欠伸が出るほど遅かったので、何の気なしに避ける。

しかし、槍は軌道を変え、彼の胸を狙ってきた。舌打ちをして、それを掴み取り、半分に折って捨てる。

「やつと、化けの皮を剥がしやがったな」

カルラ達の目に、男子三人が出てきた。宇部と丸戸、そして槍を投げてきた高坂だ。宇部が、大きさに指を貴樹に向け、嘲笑ってくる。

「あんたがそんな人間だつてことは、前からわかつてたぜ。それにどうしようもない馬鹿だつてこともな。先生だの、生徒だの、ここでは関係ない。どうやって殺してやろうか」

(誰だこいつら)

貴樹は、自分の生徒を思い出すのに数秒かけた。彼の頭は覚える必要のない人間をすぐに忘れるような構造になっている。最近火守女だけでかなりの容量を使っていたために、宇部達の存在を完全に失念していた。

「宇部…。僕は、お前達と戦うつもりはないんだ」

一応の癖で、生徒との対立に苦しむ自分を演じる。

「なら、抵抗すんなよ？ あんたは許されないことをしているからな、俺が満足するまで痛めつけたら、戻ってくることも認めてやるよ」

さらにまた何かを続けようとしたが、ヨルシカが近づいたことで口は止まった。

「言い過ぎですよ。それは本当に、貴方の本心ですか？ 私と誓いを結んでくださった時の、立派な様子を見せてください」

宇部は、ヨルシカを見て、すぐに顔をそらした。

「あ、ああ。わかってる。別にそっちの顔に泥を塗るつもりはない」
(だつせ。完全に籠絡されてるじゃねえか。気持ちわる。俺に不快なものを見せんじゃねえよ)

話しているうちに、追ってきていた戦士達も合流した。彼らと、ヨルシカ達の間には挟まれる形となる。さらには、ミレーヌの側に、大きな狼がついてきていた。シフィオールスだ。胸の底に沈みこんでくるような静かな声で、語りかけてくる。

「これが、最後の警告だ。我々が今、争うことなどあつてはならない。火守女を渡しなさい。お前は周りがよく見えていない。彼女自身の、気持ちもだ。当の本人が納得して、薪としての役目を全うする意志を固めている。彼女を本当に思いやっているのなら、その望みを尊重するのが一番良いことなのではないか」

貴樹は、鼻で笑いそうになるのを、何とかしてこらえた。

(このわんころは、脳味噌にドックフードでも詰まってるのか?)

さらに強く火守女を抱き寄せる。納得しているのではなく、するしかないと言った方が正しいのだ。それを彼女はさも自分の望みであるかのように錯覚し、何の抵抗もなく死を受け入れている。恐怖すらしないというのは、明らかに歪だ。そこに、彼女の自我はないと、彼は考えていた。

「貴方達が、彼女を狙っている限り、そこに妥協点は一つもない。これ以上話していても、僕は考えを変えたりはしませんよ」

「そのようですね」

ヨルシカは自身の周りに、光球を出現させた。それに続いて周りの全員が武器を上げ、貴樹に向かって構える。

「ならば、仕方がありません。私達は、貴方と火守女を殺さなくてはいけなくなりません。こんな事になってしまうのは、本当に残念です」

そして復活した貴樹が、どれだけ愚かな行動をしたのかと自分で反省してくれるのを、期待しているのだろう。だが、もちろん、ここで終わらせるつもりは毛頭なかった。

(何だか、苛々してきたな)

『言っておくが』

(わかっている。前言は撤回だ。こっちの狙いも見透かされてる。そもそも、圧倒的に不利だっというのに、受けに回る必要がどこにあるってんだ。ムカつくぜ。皆、ひもりんの可愛さがまるでわかってない。彼女を殺すのなら、遠慮はしねえ。初めからそうすべきだった。多少の怪我なら、イリーナとかが治してくれんだろ)

貴樹は、ようやくまともに戦う決心をした。火守女を地面に下ろすと、身を低くしておくように言う。彼女の防衛が最優先だ。残り少な

い耐久値でこの場を切り抜けるには、相手を傷つけることを躊躇う余裕などない。

ヨルシカの光球が、一斉に発射される。全て火守女に直撃するコースだったので、叩き落とすしかなかった。こうするだけでも、耐久値は減っていく。魔術や呪術を、まずどうにかしなければならぬ。

反対側から、グンダが接近してくる。薙ぎ払うように振るわれた斧槍を上にかち上げ、前に前に流れてくるその体を殴打した。後ずさりをするものの、鎧にひびは入らず、ダメージを受けた様子はない。

グンダを追い越し、フォドリツクが向かってきた。拳を何度か放つも、全てかわされる。

「臂力と、速さは驚愕に値する。だが、至極単純だ。素直すぎる」
(教えてくれてありがとな)

先ほどの戦いでやや押されきみだった理由が、もう一つわかった。身体能力に頼って、一発殴りさえすれば相手は死ぬといったような戦闘ばかりだった弊害だ。フォドリツクの言う通り、戦い方がいいかげんになっていた。

さらに一発避けられたところで、今度は蹴りを放った。フォドリツクは体を捻り、目に向かって剣を突き入れようとしてくる。あえてそれを受けた。剣先が眼球に到達し、そこで止まる。がきん、と硬いもの同士が衝突した音が鳴った。

その一瞬で、貴樹は相手の腕と脇に手を回し、重心を崩させながら背中を支点にして投げた。フォドリツクの体が勢いよく回転し、地面に叩きつけられる。気絶させようと拳を構えた直後、彼は素早く振り向いて、迫る刺突剣を掌で受け止めた。シーリスは、苦し紛れにソウルの矢を打ってくる。

(とはいえ、アンリちゃんやシーリスちゃんを殴るのは論外だな)

もう片方の手でそれを弾き、彼女の腕を掴んで軽く放り投げる。浮かんだ体は再び突進しようとしたグンダの体にぶつかった。

そして、起き上がったフォドリツクの攻撃を、予期していたかのようのけぞってかわす。視界の端に、アンリやジークバルドが迫ってくるのも確認していた。フォドリツクを剣ごと突き飛ばし、その二人

へと体を向けた。

自分に差しかかる影に、気がつく。反射的に火守女の体を抱き、横に飛んだ。彼と火守女のいた場所に、鋭い牙が差しこまれる。シフィオールスは唸り声を上げて、飛びかかってきた。

二、三度後ろに下がってから、貴樹はわずかな隙を利用して巨狼の顎を蹴り上げた。殺すつもりではない攻撃だが、シフィオールの口端から血が漏れ出す。

「間を作るな！ 常に複数で押し込め」

狼血の騎士達が姿勢を低くして突っ込んでくる。最初の二人は貴樹の足を狙ってきた。飛び上がると、それを読んでいたかのようにミレーヌを含めた三人が囲んで襲ってくる。下を一瞬見て、二人の騎士とシフィオールスが火守女を狙っているのを理解した。

一人目の騎士を蹴り落とし、二人目の剣を両手で挟み、道具のように体ごと下へと投げる。最後のミレーヌは、地面に着く直前で鎧の部分を肘打ちした。降りた瞬間から火守女を斬ろうとしていた騎士二人を地面に叩きつけ、シフィオールの頬を殴り飛ばす。

貴樹に息つく隙を与えまいと、イーゴンとジークバルド、アンリが同時に斬りかかってきた。

（ジークさん、申し訳ない）

一度剣を狙うフェイントを入れてから、ジークバルドの兜を掌底で吹き飛ばし、

（イーゴン、仕方ねえんだこれは）

轟音と共に迫ってきた槌を避け、イーゴンの胴体を鋭く蹴り、

（アンリちゃん、許してください）

アンリの懐に入り込み、体を抱えて、横へ勢いよく投げ捨てた。

「死ね！」

迫って来ていた宇部に向かって真つすぐ拳を打つ。

（お前がな）

しかし、宇部は剣の腹で受け止めてみせた。貴樹が押し込もうと少し力を入れて見せるも、抵抗できている。

「は、俺の身体能力が、勝っているようだな。お前なんてただの」

(コントやってんじやねえんだぞ。べらべらべらべら喋りやがって)

平手で横顔を張り飛ばした。勢いの付いた宇部の体は素直に飛んでいき、瓦礫の一部に激突する。息を吐き出すように口を大きく開けて呟いた後、ぐったりと顔を落とした。

正面から堂々と、高坂が槍を持つて突っ込んでくる。素早く何度も突いてきた。武器を握ってからの時間を考えると、考えられないほど洗練されている。だが、貴樹にとっては止まって見えていた。

(勝てるわけねえだろ。どういう考えで、馬鹿正直に一人でやろうとしてんだ。ガキの低能さを露呈しているな)

そう見下していると、いきなり首元に衝撃が走った。顔だけ振り向いてみれば、丸戸が短剣を突き立てている。ブヒユっ、と気持ちの悪い呼吸音を漏らして、肉厚の顔を歪めていた。

「なんだよ、なんで、刃が通んないんだ？」

(こいつ、急に気配が現れた。クリムエルヒルトが使ってたやつと似た感じか。あれよりも速い)

先ほどの高坂が投げた槍のこともそうだ。生徒達が持っている固有能力とやらは、今まで気にもしていなかった。改めて、相手にするまでもないことを理解する。使う本人がどうしようもなく弱いのだから、哀れな話だ。

高坂の槍を刃ごと掴むと同時に、丸戸の腕も捕まえて、二人まとめて離れた廃墟の方へと投げ飛ばした。高さも十分ある。死にはしないだろうが、軽くはない怪我はするだろう。できれば、打ちどころを間違えて死んでくれと願った。

いつの間にか、三十を超えるソウルの矢が、貴樹と火守女を取り囲んでいた。カルラ、オーベック、ヨルシカが同時にそれらを発射する。微妙にタイミングをずらし、かわす隙を与えないよう全方向を埋め尽くしている。

貴樹は火守女を抱え上げ、包囲網の一点に突っ込んだ。空いている方の手や、足、口をも使って、飛んでくる矢を防いでいく。掴んで投げ返し、後ろを折ってくる別の矢と相殺させる。飛んでくる攻撃の軌道が、手に取るようにわかった。ただ、処理できる数にも限界はある。

いくつかは顔や背中当たり、消えていった。

追撃の手は緩まない。次々と矢が生み出されていき、貴樹を狙う。彼は廃墟の間を走り回りその全てから逃げ切った。

「ひもりん、疲れてない？」

「いえ…」

答えとは裏腹に、彼女は息を切らしていた。抱えられているだけとはいえ、貴樹の超人的な動きに無理矢理ついていかされているのだ。上下左右のバランス感覚が崩れていてもおかしくはなかった。

急いで瓦礫を積み上げ、囲いのようなものを作った。その中に、そっと火守女を下ろす。

「ここに隠れてて。大丈夫、すぐに終わらせてくるから」

「灰様」

行こうとすると、腕に触れられる。彼女からそういう行動をしてきたのは初めてだったので、思わずどきりとした。

20. 訪れた別れ

火守女は唇を固く引き締め、かすかに震える声で懇願する。

「もう、このようなことはおやめになってください。私のような者のために、他の皆様と戦う必要などありません。使命を遂げることだけが、私に求められていることなのです」

「ひもりんは、死ぬのが怖くないの?」

自らの胸に手を持っていき、彼女は俯いた。

「わかりません。でも、今貴方がなさろうとしているのは、絶対に許されないことだと、思います。この世界のためになりません」

どこかに強がりや、押し殺している何かがある様子は、一見感じられない。本当に自分の死について、正面からとらえることはできていないのだ。しかしそれでいて、使命の是非に関しては、絶対という強い言葉が出てくる。自らに価値が感じられないから、世界のためにと、誰にでもわかる善の価値観に頼る。

貴樹にとつて最大の敵というのは、仕組みそれ自体なのかもしれない。別にそんなことは、初めからわかっていたことだ。最初の火を強奪しようと考えていたのだから。

「じゃあ、こうしよう」

彼女の手を握り、胸に押し抱いた。

「これが終わったら、旅をするんだ。君が見たこともない景色や、場所が、きつとたくさんある。俺にとつてもそうだ。全部一緒に見て回って、色んなことを知った後に、もしも考えが変わらないのなら、その意志は尊重するよ。だから今は、君に生きていてほしい。何があっても守る」

貴樹が手を離すと、火守女はゆつくりとそれを下ろした。それからまるで珍しいものであるかのように、自身の手をじつと見ている。

「灰様の願いならば、受け入れます。私にはまだ、薪としての格が備わっていません。見識を広げるといふことですね。貴方の思慮に、感謝いたします」

まだ、彼女は理解していないようだった。自分が意志を曲げずにい

れさえすれば、使命を果たすことができると、頑なに信じている。

（ごめん、ひもりん。嘘なんだ。どんなことがあるうと、例え君自身がそれを望んでいようと、死なせるわけにはいかない。大丈夫だから。これから、たつぷりと、ひもりんにも生きる価値があるんだって、教えていくからさ。実技で。ぶふふ）

『台無しですね』

桃色の空想に囚われそうになったが、今はそんな時ではないことを思い出す。火守女にこの場から動かないよう何度も言い含めて、彼はヨルシカ達のいる戦場へと戻っていった。

さきほどよりも、数は減っている。負傷者は運び出されて行ったのだろう。この不死街のどこかに、イリーナを含めた奇跡使いがいるのは確実だ。ただ、そこを潰しに行くよりも、目の前の者達全員を処理した方が早い。

「火守女の姿がありませんね」

「さあ。知りたければ、僕を倒して訊けばいいんじゃないんですか。結局、それが一番の近道ですよ」

ヨルシカは、いつの間にか白い杖のようなものを持っていた。

「我々は、貴方を侮っていたのかもしれませんが。本当に皆の全力を出し切らなければ、目的は果たされないと、今ようやく覚悟をしました。お願いします、潔く倒されてください」

ミレーヌを含めた狼血の騎士三名は、大剣ともう一本、先が細くとがったナイフを構えている。アンリやホレイス、シーリスは自分の武器に青黒く符呪をしていた。よく見れば、本来の刃よりも長く伸びている。グンダやジークバルド、イーゴンの武器には赤い液体が塗られていた。おそらく毒の類だろう。

「シフ。先陣を」

最も変わっていたのは、シフィオールスだった。口に大きな剣を咥えている。その刃は碧色に発光していて、どこか実際には有り得ないような存在感を放っていた。その剣自体には、見覚えがある。

（月光の大剣だ）

『やばいのか』

(注意すべき特徴が一つあってな。確か)

シフが顔を動かし、剣を振るう。光る刃が一瞬さらに輝き、半月型の斬撃が実体となって、迫ってきた。事前に予測していた貴樹は、上に飛んでかわす。彼の後ろにあった瓦礫が、綺麗に真つ二つになった。

(こういうことだ)

『受けたらやばいぞこれ』

(狼風情が武器を使うなんてな。生意気だ)

一足で、シフは貴樹へと接近し、剣を器用に振り回してくる。口で扱うことは慣れているようで、ただ噛みついてくる攻撃よりも脅威は感じた。だが、横の軌道ばかりで変化に乏しい。相手もそれを自覚しているのか、前足も混ぜてくる。

当然、残りの者達もただそれを見ているばかりではない。上手く貴樹の死角を突く形で、アンリやホレイス、ジークバルドが斬りかかる。それらを紙一重で掴み、かわし、決定的な一撃を入れられないようにした。符呪された武器の威力は侮れない。

さらには、前衛達の攻撃の合間をちようど狙って、魔術や呪術が飛んでくる。気づかないうちに、大きな火球が二つ、空中に発生していて、そこからいくつもの炎が生み出されているのだ。一呼吸でも動きを止めてしまえば、残り火の耐久値を一気に減らされてしまうだろう。

貴樹は素直に感心していた。見事に練り上げられた連携だ。彼らはきつと、相応の時間共に戦ってきたのだろう。もし自分が残り火を得ていなかったら、火守女を守ることは限りなく不可能だったはずだ。

(やはり、俺は運命に愛された男だな)

『そこはおれへの感謝でよくない?』

シフの大剣を足で押し返したと同時に、グンダの斧槍が放たれた。戦士達の間を抜けて、貴樹を真つすぐ狙ってくる。

(それも、段々飽きてきたな)

伸びきった鎖の部分を掴み、引つ張る。それだけでグンダの体が浮

き、こちらに向かつて飛び出してきた。グンダ本人は一瞬何が起こつたのわからない様子で、体勢を整えることさえしようとしていない。巨体の下を素早く潜り抜け、太い足に両手を回す。貴樹は小さく息を吐き出し、グンダをバットか何かのようにフルスイングした。

(良い道具だ)

反応できたのは比較的遠くにいたシーリスやヨルシカ、カルラ、オ―ベックだけで、後は全員グンダの体に巻き込まれ、吹き飛ばされた。残像ができるほど早く二、三周回して、彼は用済みとばかりに巨体を全力で放り投げる。グンダは綺麗な放物線を描いて、瓦礫の中に落ちていった。

大きなチャンスだった。前衛が崩れたのを利用して、ヨルシカへと走る。次の標的は、彼女だ。それほど好きなキャラクターでもないのに加えて、戦闘における出方が一番わかっている相手でもある。早めに潰しておくに越したことはなかった。

それをさせまいと、シーリスが阻んできた。首を狙った正確な突き。残り火が切れていた状態では苦戦した彼女も、今は容易い相手ではない。エストツクの先を掴むと、造作もなく折った。ヨルシカの方へと再び向き直ろうとする。

その瞬間、貴樹はとっさに後ろへ下がっていた。目の端に高速で迫る刃が見えたからだ。彼の動体視力でさえ、捉えるのが困難なほどの。

「これも、避けるのですね」

それを振るつたのは、ヨルシカで間違いない。ただ、肝心の刃は消えていた。彼女は杖しか持っていない。ファランの速剣という、魔術だろう。彼は自分が記憶している全ての魔術を、彼女が使ってくる可能性も考慮した。

(ん?)

下半身に違和感を感じた。あるべきものがないような、さらけださされているような。

誰も、考えてすらいなことだった。貴樹の体は残り火によって強化され、無敵の防御を誇っている。しかしその力は、身に付けている

物にまで適用されてはいないのだ。時には林の中を駆け抜け、またある時には激しい戦いを共に乗り越えてきた、相棒とも言える存在。彼のモラルの崩壊を最後の最後で食い止めていた存在が今、限界を迎えていた。要は、避けきれてはいなかったのだ。

ぱさりと、布切れ同然になった紺色の下着が足に落ちた。土に汚れ、ヨルシカの一撃でとどめを刺されたそれは、完全に死んでいる。シーリスが、目を飛び出さんばかりに開いて、貴樹の下腹部を見た。それから、両手で顔を押しさえ、真っ赤になった頬を隠しながら、一歩二歩後ずさる。きやつ、と短く悲鳴を上げて、その場にへたり込んでしまった。

(俺のパンツがあああああああああああああああああああああああああああああああ！ うわあああああああああああああ！ そんな、嘘だろおおおおおおおお！)

貴樹は絶望した。安売りしてたものを適当に買った、愛着など持ちようもない物だったが、失った今になって大切さを実感する。

『これは真剣な戦いじゃなかったんすか』

(俺のち〇こを見ていいのはひもりんだけだあああああ！)

『今までのお前の発言の中で、一番きついのがきたな』

まだ間に合うと、片手で股間を隠し、地面にある下着の残骸を拾おうとする。しかし、ちょうどそこに炎が来て、死に体になったそれを燃やしてしまう。

(いやあああああ！)

貴樹は慟哭した。なぜ、世界は自分に残酷なのか。客観的に見れば意味のわからない悲しみに酔っていると、追撃がやってきた。グンダの体に衝突し、倒れていたミレーヌが斬りかかってくる。しかも、露骨に彼のアレを狙っていた。

「いや、ちよ、一回落ち着きましょう」

「そこを潰せば、少しはおとなしくなってくれるのかしら」

(てめえ！) ときに俺の宝刀がどうにかなっていたまるか！)

今までの戦いで欠けてきている彼女の兜を粉碎しようとする、すぐさま後ろへと下がっていく。そして針のようなナイフと剣を両手

に構え、飛び上がった再び接近してきた。

その頭の悪さに、辟易する。彼女が正面から目立った動きをしている間に、背後から二人の騎士が急所を狙ってきているのはわかっていた。あまりにも単純な動きだ。

ミレーヌの方を向きながら、彼は背中から地面に倒れていく。顔の上を通り抜けていく二本の剣を掴み、握り潰した。その勢いのまま後方へと宙返り、騎士二人の後ろへ回ると、同時にそれぞれの頭を押さえ、下に衝突させた。兜が割れ、骨が砕けるような音がした。

前をみると、ミレーヌが剣を振り下ろしてくる所だった。それを腕で受け止めると、もう片方のナイフを顔へと突き出してくる。頬に先が当たる直前で、彼女の手首に腕を回し、瞬時に足を払って、綺麗に投げる。地面に押さえつけた後は、両方の武器をすぐに取り上げ、はるか遠くへ捨てた。

(じゃあな)

起き上がろうとする彼女の胴体に、拳を打つ。苦しそうに顔を歪め、そのまま意識を失った。口の端から血の泡が漏れる。おそらく、肺に肋骨が刺さっているのだろう。この世界の治療技術ならば、どうということはない傷だ。

貴樹の体に、光の輪がいきなり巻きついてきた。

「拘束した！ 今のうちに」

カルラの言葉を最後まで聞かないうちに、彼は全身に力を入れた。知らない魔術だ。前にも、マクダネルがアンリに使っていたのを見たことがある。だが、彼はそれが迫ってくるのを知りながら、あえて受けた。

「無駄だ。腕力でどうにかなるものじゃない。こうなったら最後、私が解くまで放さない」

(ちよつと得意げなカルラさんも、なかなか可愛いな)

少しだけ本気の力を込めると、いとも簡単に輪は割れていく。カルラは、目の前で起こった事実にも、しばらく動けないでいる。

「まだ、やりますか？」

貴樹はここが区切りだと感じていた。手を出しあぐねている者達

に向かつて、堂々と胸を張る。ただ、両手で下腹部を隠しながらなので、全くもって威厳というものがない。しかしそれがかえって、相手に彼の底の知れない不気味さを感じさせることにもつながっていた。「何度も言ったように、今、貴方達と戦うつもりはなかつたんです。当面の目標は、エルドリツチ。あの人食いに必要な情報を聞き出し、それから殺す。だからここは見逃してくれませんか」

「…アンリ、ホレイス、グンダ。彼に攻撃を続けてください。表面上は平気に見えても、確実に損害を与えているはずですよ」

ヨルシカの言葉で、彼らが向かつてきた。貴樹は溜息が付きたくなる気持ちになつて、拳を構える。大きな力を得たからには、手に汗握るような戦いも期待していた。だが、今のこれは全く楽しくない。限りなく無駄だ。そこは、相手方と意見が一致している。

グンダの斧槍を弾き、その体を殴り飛ばそうとすると、アンリとホレイスが止めてくる。二人の攻撃は息が合っている。一人では容易に隙が見つけられても、このように互いにカバーし合うような戦い方だと、貴樹でも攻めづらい。それでも、特にアンリの方が、今までよりも動きに精彩を欠いているように思えた。

「アンリさん、僕は貴方を傷つけたくない」

彼女は黙っている。

「貴方は優しい女性だから、迷っているのもわかります。僕は、この世界がどうなつてもいいだなんて考えてはいません。ただ、あの人に死んでほしくないから、こうするしかないんです」

無反応を貫いていて、顔も兜で隠れているので、どんな表情をしているのかはわからない。しかし、剣筋には如実に表れていた。ホレイスでも底いきれないほどの隙が生まれる。

「すみません」

彼女の懐に潜り込み、中段の蹴りを放つた。鎧の金属に足がめり込み、アンリは受け身すら取らずに転がっていく。

「ホレイスさんも、同じですよ」

突進してきた彼の肩に手をかけ、そこを支点にして側転する。相手が振り向こうとする前に、背中を思いつきり殴り飛ばした。ホレイス

の体は宙を飛び、廃屋の二階部分に突っ込んでいく。

グンダが上から降ってくるのを、貴樹は当然のように理解していた。刃をかわした勢いのままに、その側頭部へ肘を打つ。それから間髪入れずに、顔を連打した。

「ぐ…」

少し後ろへ引くも、グンダは倒れない。さきほどもそうだったが、彼だけは、貴樹の攻撃があまり効いていないようだった。頑丈さだけなら引けを取らないだろう。

どうしたものかと考えていると、何の気なしに打ち出していた拳が掴まれた。そして引き寄せられ、武器さえ捨てたグンダに拘束される。もちろん、貴樹にとつては意味の成さない行動だ。

「もう無駄ですよ」

「遠慮をするな、ジーク！ 我輩ごとやれ」

（何だ——？）

顔だけ後ろを見ると、ジークバルドが剣を構えていた。しかし、おかしいのはその刃が届く範囲よりもずっと遠くに立っていることだ。ヨルシカ達もさらに奥へと引っ込み、まるで何かに巻き込まれないようにしている。

貴樹は既に、強烈な悪寒の原因を、つかみかけていた。ジークバルドの持つ大剣。それはいつも彼が振るっているものとは違っている。刃はぼろぼろで、柄らしい部分が布でまかれただけの素朴な見た目。特徴らしい特徴と言えば、その刀身が白い霧のようなものを纏っているくらいだ。

（おい、まさか、ストームル—）

ジークバルドが大剣を振り下ろす。その瞬間、暴風が発生した。一か所に押し込められた力がさらに凝縮し、鋭い斬撃の刃となって貴樹へと疾走する。



「患部を癒す時は、ゆっくりと、光を抑えてください。骨をつなぎ合わせる時の痛みを和らげるのが、貴方の役目です。もう少し手を近づけて」

イリーナの指示を聞きながら、彼女と共に運ばれてくる負傷者の治療に当たる。今までただ奇跡の光を当てれば傷が治っていくというようなやり方しか知らなかった下田にとっては、学ぶことの多い時間だった。

「イリーナさん、こっちは終わりました。確認してください」

新宮が額の汗をぬぐって申告する。実は彼女も、奇跡が使える。固有能力は詠唱を奪うというものだが、これの利点は相手の術を中断させることだけではなく、習得する際にも大きく役立つということだった。カルラやイリーナが示して見せる術の手本をすぐに真似できる。それによつて、彼女は三術をそつなく扱えるようになっていた。

「たいしたものだ。これで、また戦える」

新宮に治療を受けていたフォドリックが、起き上がろうとする。その前にやんわりと、イリーナが止めた。

「じつとしていてください。ただでさえ、貴方の体はぼろぼろになっています。数日は休まないといけません」

「しかし、シーリスがまだ戦っているのだ。儂が先に倒れてどうする」「どうもしませんよ。自然なことです。ご自分の御歳を考えてください。フォドリックさん、貴方を見ていつでもはらはらしています」「うむ…」

さあ、と彼女が軽く彼の肩を押し、再び敷布の上に寝かせる。フォドリックはそれから、ぎよろりと下田の方を見てきた。口髭を生やしているのもあってか、なかなか迫力がある。年相応の貫録も出ていて、そんなフォドリックに堂々と言い返せるイリーナは凄いと思った。

「あの男は、まだ粘っているぞ。儂が今まで見た中でも、一、二を争う強さだ」

「そう、なんですね」

「我々も、余裕がなくなってきた。あやつを止めるには、一度殺さ

なくてはいけないかもしれん」

「…」

長い、というのは下田も感じていた。初めはすぐに終わると思っていたのだ。たとえ説得が失敗に終わったとしても、祭祀場のほとんどの戦力を相手にして、貴樹が持ちこたえるとは思えなかった。彼は下田では計りきれないほどの力があるだろうが、それはヨルシカ達にも言えることだ。

「おい、女。何度も言ってるがな…」

事前に周囲の亡者達はあらかじめ一掃していたが、完璧ではない。臨時に設けられたこの治療所を守るために、実織とホークウッド、高原がいた。ただし、二人は協力できてはいないようだ。

「何ですか」

「呪術を無闇に飛ばすな。邪魔でしかない」

「そっちの方も、身が入っていないようじゃないですか。イリーナさん達の方に亡者が抜けそうになったのを何度カバーしてあげたと思ってるんです？」

「そりゃあ自分の命が一番大事だからな。仕方がない時もある」

「邪魔なのはどっちだか」

二人を補助している高原が、その言い合いに割り込む。

「議論するのもいいけど。ちゃんと前に集中してよ」

それつきり三人とも黙り込み、なんとも言えない空気になった。下田も治療の方に集中し、何かを話そうという気遣いをする余裕もなくなる。全員が、割り切れない何かを抱えているようだ。それもそうだ。本来なら、今ここでこうしていること自体が、有り得ないはずなのに。

「いつか、こうなるって思ってた」

実織が予想外の言葉をぽつりと漏らした。胸に秘めていたことを告白するような、それでいてどこかすつとするような表情で言う。

「あいつは、ろくでもない人間だから。自分のことしか考えない。他人がどうなったって、気にしない奴なんだ。この世界のことだって、誰よりもよく知ってた。ゲームを相当やりこんでた。それなのに、皆

に黙ってた。あんな兄を持って恥ずかしいよ」

良い気分はしない。例え彼女の言っていることが本当だとしても、実の家族に対する嫌悪を示されるのは、嫌だった。

「先生が知っているってことを、あんたは黙ってたんだ」

高原が鋭く指摘する。

「もつと早く、先生のことを話せたはずじゃん。それでもこうなるまで黙ってたってことは、つまり庇ったんでしょ？ 突き放すような言葉使ってるけど、結局内心は真逆ってわけね」

実織は、高原を睨んだ。

「違う」

「あたしは責めてるわけじゃない。自分の気持ちを裏切ってまで、嫌な言葉を口にするなって言ってるの。確かに先生は悪いよ。でも、あんたにそれを咎める資格はない」

「二人共、そこまでにしてください」

さらに険悪になりかけた所で、イリーナが諫めた。

「今は、彼が戻ってくることを信じましょう。フォドリツクさんの言う通り、あの人を傷つける選択をするかもしれない。殺すことも、やむを得ない場合があります。それでも、復活した彼が本当に大事なものが何なのかを、思い出してくれると信じましょう。私達はここで待っていることしかできませんが、今まさに戦っている人達のためにも、協力しなければいけません」

言っていることは正しかった。運ばれてくる負傷者を見て、貴樹に対する不信が高まっていた下田は、考えを改めた。先生はおそらく、今とても悩んでいるのだろう。彼が去った直後は裏切られたという気持ちが強かったが、よく考えてみればその行動原理はわからなくもない。火守女も、実織達も両方大切に思っているのだ。苦渋の決断だったに違いない。

高原が、こほんと咳払いをした。

「あー、ちよつと言い過ぎた。私が偉そうに言う資格だっけないしね。ごめん、実織」

その謝罪に反応はなかった。妙な間が気になって、下田も実織の顔

を見た。

「殺すって、言いました?」

目は真つすぐイリーナに向けられている。

「はい。彼が固い意志を持っているのなら、単なる話し合いで解決はできないということす」

「ど、どうしたの?」

実織は動揺している自身に、戸惑っているようだった。言うか言わないか迷うように口元に手の甲を当て、小さく話した。

「…ないの」

「えつと?」

「飲んでないの。あの、何て言ったっけ、私達が最初に飲まされたオレンジ色の水みたいなのやつ。あいつ、口に含んだと思っただけに吐き出して。結局、そのまま」

「それは、本当ですか?」

イリーナが信じられたいというような顔をした。その、深刻そうな表情で、下田も思い出す。火守女の説明では、祭祀場の篝火とのつながりを強固にするための液体ということだったはずだ。つまり、灰と呼ばれている自分達が、本当の意味で不死になるためのもの。

ということとは、彼は不死身ではない。もしかしたら、一度死んだらそれまでという可能性もあるのだ。しかもそのことを、ヨルシカ達は知らない。

「知らせ、ないと」

自然に言葉が出ていた。下田の意見に高原も頷く。

「おいおい、ここを離れるのは厳しいだろ。亡者が湧いてこないとも限らない」

ホークウツドの反対をイリーナが遮った。

「いえ。二人ほど残ってくればそれで足りません。貴方と、サナさんがいれば守りは心配ないでしょう」

「…あなたがそれでいいなら、構わんが」

実織はまだ、躊躇っている様子だった。

「行かないの?」

「私は、」

彼女が迷った末、結論を出す前に、下田はこちらに近づいてくる者達に気がついた。そのうちの一つはすぐに誰だかわかった。グンダだ。すぐ横にはシフィオールスとシーリスがついている。

間に合わなかったのかと、絶望的な気分になった。しかし、彼らの様子を見て、すぐに自分の思い描いていた結果とはまるで逆になったことを理解する。

「ミレーヌ」

ホークウツドが淡白につぶやいた。彼女は目をつむり、グンダの肩に抱えられている。兜が半分に分れて、口の端に血の筋がこびりついていた。

意識を失っている様子なのは、ミレーヌだけではない。ジークバルドやヨルシカ、アンリ、ホレイスはシフィオールスが運んでいる。一様に、防具の一部が破壊され、武器も皆どこかに消えていた。唯一、無傷と言ってもいいのはシーリスだけだが、様子がおかしい。忘れたい何かがあるように、しきりに頭を振っていた。

「我々は、負けた」

グンダが重く言う。

「完敗だ。これ以上戦闘を続けるのは限界だと判断した。負傷者はまだいる。広場の方でカルラ達が守っている。タカキは、既に去った。我々が総力を持って挑んだのにも関わらず、彼は最後まで息すら切らしていなかった」

静寂が、のしかかってくる。心配がなくなつたとも言えない。むしろ、問題はさらに困難さを増したのだと、下田にもわかった。



瓦礫を取り除き、その中に火守女が静かに座っているのを目にして、ひとまずは安心した。

「待たせたね」

「他の、方々は」

「大丈夫。全員、死んでない。手加減はしたよ」

貴樹は笑顔で両手を広げる。その姿を、しばらく彼女は見ていた。間が空くと、やや戸惑った様子になる。自分が何かをすべきなのかと中腰になりかけた。

「うーん、まだそういう段階じゃないか」

胸に飛び込んできてくれるのを期待していたが、思い直して彼女を抱き上げる。鼓動が緩やかに高まり、体の芯が暖かくなる心地だった。何だか新鮮な気分だ。仕事に疲れ、沈んだ気分で家に帰ったら、妻が優しく迎えてくれた時のような。未だに緊張は解けないものの、心が癒されるのは事実だった。

そして、移動を始める。

(ふう)

『じゃねええええええええ！ お前、わかってんのか、二%だぞ！』

耐久値がもうそれだけしか残ってないにやあああああああ！』

(まあ、落ちつけよ。きもいぞ。おっばい。こういう時こそ冷静におっばい……ふう)

『お前も頭おかしくなっただけじゃねえか』

まさにギリギリの戦いだった。ジークバルドが持っていたストームラーという剣。それは薪の王である巨人ヨームを倒すのに必要な武器で、この世界に二本しか存在していない。一本はヨームの友だったジークバルドに託され、もう一本は罪の都の玉座に置かれている。

その剣が生み出す嵐の刃は強力で、かすただけで残りのほとんどの耐久を持っていかれてしまった。グンダの拘束を抜け出せていなければ直撃していただろう。そうなれば一巻の終わりだった。

『どうすんだよ。これでこの先いけるのか。もし、敵地の真ん中で残り火が切れたりなんかしたら、お前も火守女も死ぬぞ』

(大丈夫大丈夫。一撃も受けなければいいんだろ。おっばいおっばい)

『いいかげん、火守女の胸から意識を逸らせ』

不死街の端にたどり着き、見慣れた大きな塔が見えてくる。あそこの中にある仕掛け床を使つて下って行けば、生贄の道に入ることができきる。

（今回で、学んだぜ。俺一人だけで生き残るだけなら、簡単だ。敵を殺しさえすればいいからな。だが、ひもりんを守ることも考えると、俺だけじゃ足りない。誰か、後ろ盾になってくれる奴が必要だ。あるいは勢力か）

『考えがあるんだな？』

祭祀場という安全圏を失つた以上、今度は別の集団に目を向ける必要がある。

（候補を挙げるとするなら二つ。サリヴァーンか、ロスリックに味方することだ）

『理由は？』

（大前提として、火継ぎに懐疑的な陣営達なのはわかるな？ ひもりんを薪として利用しようと考える可能性は低い。どちらもそれなりの戦力を持ち、話も一応できる）

サリヴァーンは、イルシールという寒冷国の王だ。かつて、ボルドが騎士として仕えていた国でもある。ただ、王位を得るに至った経緯のせいで、特にヨルシカとは対立が深いだろう。間違つても、祭祀場側と結託する気配のないという点では信頼できる。

しかし、その経緯に絡んで、難点もある。つまり、エルドリツチの助力で彼は目的を果たしたということだ。関係がどれほどのものなのかは推測するしかないが、それを断ち切れる自信はある。

一方で、ロスリックに関して言えば、心情的に言えばこちらを選びたい気持ちが強かった。利害も一致し、都合上必ずその居城に出向くことになる。問題なのは、そもそもたどり着くことすら困難なことだ。ゲームでは篝火による転送で城壁まで直接移動できたが、実際は祭祀場が保有する白いデーモンしか到達手段がない。

『お前の都合って、あれだろ。火守女がロスリックの長女だつてことと関係してんのか。天使ゲルトロードだっけ』

貴樹は彼女を抱え直した。

(お前…、俺があえて考えないでいたことを突っ込んできたな)

『やばいことなのか』

(事実かどうかは置いとくとして、俺にも判断がつかん。確かロスリックの宗教的分断の原因として、挙げられているのは知ってる。それくらいだ。情報が少なすぎる。あんまり本人に詮索しちゃいけないような気もするし、保留だ保留。めんどくさいことは後回し)

『…あのー、もう一つあるんだけど。今まさに俺達が追跡されているのも、後回しにしているんですか?』

(あー)

ジークバルド達を退け、火守女を回収した時からだった。彼女のことも考え全速力で走ってはいないが、ただの亡者が追えるものではない。明らかに熟練した戦士だった。しかもおそらく、複数だ。

祭祀場の、という線は薄い。彼らのほとんどはすぐに走ることができるような状態ではないし、貴樹をここまで執拗に追う意味もない。(いつまでもくっつかれると邪魔だな。殺すか)

塔の前で待ち伏せしようと考えた所で、彼は後ろを一瞬だけ確認した。

黒い炎が、地面を走ってきていた。

驚く間もなく、横へと飛びのく。火守女を庇いながら体勢を整えると、炎は軌道を変えて追いかけてくる。近くにあつた木を蹴り倒して、その進路を塞ぐ。四本ほど倒してようやく、勢いが収まった。

これは知っている。黒蛇という呪術だ。

「ひもりん、なるべく地面に伏せてて」

相手に、会話をする気がないことを感じ取り、貴樹は彼女を下ろした。本当ならば、逃げた方がいいのだろう。しかし、放ってきた呪術から、相手の正体に見当がついていた。考えが正しいのならば、追跡から逃れるのは難しいかもしれない。

木々の間から、まず二人が出てきた。白い装束を着て、微笑んでいる女性の顔が掘られている金の仮面。しかしその下には萎びた亡者の顔があることを、貴樹も知っていた。白い影と呼ばれている者達だ。

最後に、黒のドレスをまとった女性が姿を現した。その顔もまた、仮面で覆われている。嘴を模した見た目で、およそ人間らしい気配が全く伝わってこない。

「ユリアさん、どうしたんですか」

女性は動揺する様子も見せなかった。貴樹にとつては、この姿の方が馴染みがある。ここしばらく、彼はユリアとほとんど話す機会がなかった。というより、彼女が意図的に避けていたと言った方が正しい。嫌われているどころか、殺意を抱かれていたのは知っていたので、こちらから話しかけるのも気が進まなかった。

（くそ、ロンドールか。こいつらの相手もしなきゃいけないのかよ）
祭祀場とエルドリッチ達だけに気を付けていればいいわけではない。この世界では、それぞれの思惑で動いている者達がたくさんいるのだ。

二人の白い影の前に出ると、彼女は平坦に話し始めた。

「ヨエル殿を欺き、殺した罪を償ってもらおう。そのことに関わらずとも、貴様は危険な存在だ。横にいる薪と共に死んでもらおう」

「厳しいですね。僕と貴方の仲じゃないですか」

相手三人の位置関係を観察する。

「見逃してもらおうわけにはいきませんかね。別に僕は、貴方達をどうこうする気なんてないですよ」

言い切ったと同時に、彼は顔を引いた。目の前を白い影の剣が通り過ぎる。側面に回って、仮面を殴りつけた。もう片方の手で首を掴み、締め付ける。皮が裂け、骨が折れ、頭が首ごと胴体から引き抜かれる。

手に持った顔を、迫ってくるもう一人の影に投げつけた。それをかわし、相手はソウルの矢を放ってくる。避けるしかなかった。魔術を掴んだ衝撃だけで、耐久値が減る可能性もあるからだ。

彼がのけぞったのを確認し、白い影が踏み込んでくる。亡者の体とは思えないほど、素早い突き。貴樹はその軌道を正確に目でとらえ、剣先を掴む。が、掌が触れた直後に、相手が剣に指先を当てたのを、見逃してはいなかった。

刺突剣が黒い炎で満ち、嘔き出し始める。既に後ろへ飛んでいた彼は、火守女を流れるように回収すると、塔の扉付近にまで逃げた。木々が黒く燃え始め、常識では考えられないほどの時間で炭化していく。あれに当たったら最後だろう。

炎の中から、ユリア達が出てくる。彼女達には黒蛇が全く効いていないようだった。おまけに、首をもぎとったはずの白い影の一人が体だけの状態で立ちあがっていた。

(まさに本当の不死人だな。体をバラバラにするまで終わらないってか。めんどくせ)

貴樹は周りの音が次第に小さくなっていくのを感じていた。ノミが何かを言っているが、聞くつもりはない。今この状況への対応に全神経を注がなければ、未来はない。彼がここまで集中したのは、中学生の夏、姉に自慰を見られた時以来だった。

足下に落ちている石をいくつか拾い、白い影の二人に向かって投げた。残り火による化物じみた腕力で放たれた石は弾丸並みの速さで、それぞれの胸を貫通する。装束に穴が空き、どす黒い血が漏れ出した。それでも、彼らは止まる様子がない。

ユリアが黒蛇を放った当時に、影の二人が左右に展開しながら迫ってきた。背後にいる火守女の存在を胸に刻み込む。二つの刃が迫る瞬間、彼は息をとめた。

顔を傾け、ギリギリで剣先をかわしていく。頬をかするのにも気にせず、相手の武器を持つ手を捕まえた。すぐさまその場にしゃがみ込み、左右の足を回転しながら払った。腕を引っ張られ、足も崩された影達は、一瞬だけ浮く形になる。わずかな間で、彼は飛び上がり、二つの体をいっぺんに踏みつけていた。地面に叩きつけられた衝撃で胴体が裂ける。その上にいる状態で、目の前にまで来た黒蛇を確認した。

下も見ずに、影の持っていた剣を蹴り上げる。炎はその刃に引きつけられるように移動し、吸収された。読みは正しかったらしい。この刺突剣と黒蛇は同質の物なのだ。そして影達の体を何度も足で踏みつぶし、執拗に破壊した。下半身が血まみれになってしまったが、必

要な処置だ。

「いきなり、斬りかかるのは酷いですよ」

今さら、という言葉だった。ユリアはついに刀を抜く。その様子には、配下が全てやられた焦りも恐怖もなかった。

「貴様の力には、限界があることも知っている。祭祀場の者達との戦いを観察して、理解した。本当に不壊の装甲を持つのなら、攻撃をわざわざ避ける必要はない。鎧と同じだ。劣化は免れない」

(バレてる)

『で、でも、一対一なら何とかなるだろ?』

(…相手が、彼女じゃなければな)

ロンドンール黒教会の三姉妹。彼女らは亡者達の救い手であるとともに、恐ろしく洗練された剣士でもある。その実力は一騎当千に値し、一つの国をも相手取ることができると言われている。つまりその次女にあたるユリアは、数いるキャラクターの中でも最強格だということだ。一撃でもまともにくらえば耐久値が無くなる今の状況において、相手が悪いどころの話ではない。

ユリアが刀を構えると共に、その周囲にソウルの光球が現れる。厄介なのは、彼女は卓越した剣士であるだけでなく、魔術や呪術にも精通していることだ。こうした相手に一番してはいけないのが、安易な接近戦。手数で劣っている彼にとつては、自殺行為に等しい。

だが。

「ちよつと痛いかもしれませんが、許してください。絶対に殺しはしません」

貴樹は自分から悠々と歩き出した。

(正面から圧勝することで、ひもりんがその格好良さに惚れ、ユリアも落ちる。完璧だな)

武器もない、術にも全く適性がない。そんな状態では、選択肢もなかった。己の体一つだけが、利用できる道具なのだ。追いつめられた状況になつてもなお、彼は有頂天のままだった。そこに娯楽さえ、見出していたのである。

(これこそダークソウル。この緊迫こそ、醍醐味だ。たまらないね)

『やっぱりお前はお前だな』

彼は決して戦闘狂などではないが、何もかもが上手くいつていたかつての生活に比べれば、はるかに生を感じていた。悩みもない、緊張することもない。常に七割程の実力さえ出せばどんなことでも乗り越えられた。今は違う。全身全霊をもつても、生き残れるかどうかわからないことの連続だ。楽しいに決まっている。

だから、出方を待っているユリアに対して何の躊躇もなく、自分から向かっていった。

刀が届く範囲にまで足を踏み入れた直後、彼女の手がぶれる。一瞬で鼻先にまで到達した刃を、貴樹は指で捕まえた。力を入れて折ろうとするも、ユリアが強引に距離を詰めてくる。女性とは思えないほどの力だった。それでも刀を離さないでいると、浮かんでいた光球が消えた。

彼は素早くしゃがみ、頭上を通り過ぎていく魔術の弾を確認した。剣も術もできる相手は、これが怖い。武器での攻撃を防ぐのに意識を傾け過ぎれば、至近距離からの魔術に対応できなくなる。それまでの経験で、魔術の錬度は速さにも直結すると理解していた。生徒達のは欠伸が出るほど相手に向かっていく速度が遅いが、一流ともなれば銃弾よりも速い魔術が撃てる。

一度や二度で、攻撃の手が休まるはずがなかった。しゃがんだ勢いそのままに、貴樹は後ろへ転がりながら、追加の光球を避けていく。すぐ側にあった木の裏に回り込み、枝を折って彼女へ投げ飛ばす。ほぼ間髪なく放たれた八の木矢は、全て半分に斬り落とされる。

その間に貴樹は近くの木を幹ごと折り、抱え上げていた。残心し、構えを崩していない彼女に向かって、それを振り下ろす。だが悪寒を感じ、直前に木から手を離していた。幹を刃が突きぬけ、貴樹の眼前で止まる。

(迂闊^{うかつ}だな)

他にも対応策はあるはずなのに、ユリアは選択を誤った。刀が木の繊維に引つ掛かり、抜けなくなっているだろう。早くもチャンスが巡ってきた。彼女も当然それは自覚しているようで、向かってくる貴

樹に、魔術のソウルを連続して放つ。先に来た二本は掴み、それ以外は腕で弾いた。

『お、おい、一%をきつたぞ』

（大丈夫だ。ギリギリでいける。顔を殴るのは気が進まないが——）

刀は木に刺さり、武器を失ったユリアの懐にまで接近する。彼女は再び魔術を展開しようとしているが、貴樹の方が速い。気絶させるために顎を狙おうと拳を上げた所で、目の端に何かが引つ掛かった。

（鞘が二本？）

彼女の腰に下げられている。だが、肝心の二本目の武器はどこにも見当たらない。

貴樹は、瞬間、見落としていた可能性に気がつき、本能的に後ろへ飛んでいた。その動きを追うようにして、ユリアの手が振るわれる。何も、握られてはいなかった。いや、そうであるように見えているだけだ。

首を鋭い何かがかすっていく。依然として刃は見えない。

倒れた木の所まで下がって、貴樹は気を静めようとしていた。

（闇囃やみおぼろ。ユリアの刀か。刀身が不可視なのは知っていたが、まさか柄まで全部透明とはな）

彼女が黒教会の三剣士の一人として君臨しているのは、その武器の特殊性にも要因がある。初めに持っていた武器は普通の刀だった。本命の方は、相手を虚を突くためにずっと隠されていたのだ。

ユリアはそれ以上追撃をしない。手を貴樹の横の方へと向けた。彼も自然にその先を視線で追う。木に刺さっていたダミーの刀が黒く発火する所だった。

（あつぷ）

炎に巻き込まれる寸前でさらに後ろへと転がり、火守女の側まで退避する。濃い煙が蔓延し、辺りの視界が悪くなっていく。

（誘い込まれたな。初めから黒蛇を当てることが目的だったわけか）

『奴の姿を見失ったぞ』

（ああ、厄介だ）

貴樹にとって最も嫌なことは、彼の攻撃が届かない遠くから、魔術で削られることだった。この不明瞭な視界は、そうするのにもってこいの環境だ。ユリアが、彼の力を細かく観察していたのは間違いないようだった。

(俺の、嫌がることを理解して行動してる。次、どうしてくるかだ)
魔術の、ソウルの輝きを見逃さないように、目を凝らす。防ぐ自身もあるが、なぜか胸騒ぎが収まらなかった。まるで自分が、見当違いのことをしているような感覚。

相手の気持ちになつて考える。攻撃を確実に当てるために、今、何をすれば最も効果的か。自分が相手の立場なら、何をするか。突くべき穴が、どこにあるか。

それは、か弱い存在だ。

貴樹がついに思い当たり、火守女へと向いたと同時に、ユリアが煙の中から現れた。透明の刃先は確実に、火守女の首を狙っている。自分は一人で戦っていたわけではない。そのことを、貴樹はほんのわずかな間、忘れさせられていた。

死に物狂いで突っ込み、火守女を抱いてユリアとすれ違う。刃のきらめきが流れていくのを確認するのもそこそこに、受け身をとらずに木々の間を転がった。その勢いですぐに立ち上がり、ユリアからさらに距離を取る。

「ひもりん、怪我は？」

彼女を見下ろした時、戦慄した。頬から細い顎にかけて血液が大量に流れている。落ちていく赤い滴が、黒衣に際立つ花を咲かせていた。

(くそ、やばい。この量はやばい。どうする、どうする)

自分は奇跡など使えない。大きな怪我は、それだけで終わりを意味する。

「灰様…」

だが、彼女の言葉は意外に明瞭だった。恐怖というよりも、むしろこちらを心配するような調子。

よくよく見れば、彼女の顔のどこにも、傷口はなかった。

「はっ。」

火守女の頬を触ろうとして、貴樹は異変をやつと認識する。指の感覚がやけに鈍いと思つたら、地面に全て落ちていた。より正確に言えば、彼の右手が根元から無くなっている。腕の先は綺麗な切り口があり、そこからおびただしい血が流れ出していた。

彼女に付いていたのは、貴樹自身の血液だった。

『タカキ、今すぐ逃げろ！ 畜生、ついに終わった。もう残り火の力は残ってねえ！ 早くあの女から逃げるんだ！』

ノミの叫びの意味を飲み込む前に、左腕が飛んだ。ユリアは貴樹を無感情に見下ろしてくる。本当にそうなのかはわからない。仮面に覆われた顔は今、どんな表情をしているのか。自分の命と全く関係ないことを、なぜか、彼は考えていた。

体が勝手に動き、火守女の前に入る。背中で、彼女の髪の毛の感触を感じていた。

(キスくらい、今した方がいいんじゃない)

貴樹の胸を、ユリアは間髪入れずに刺し貫いた。

21. 姉妹との心理戦

首筋に冷たい何かが当たっている。かすかだが、落ち着かない疼きを感じて、重い瞼を開いた。

(生きてんのか？ どこだここは)

自らに意識があることを確認して、貴樹は周りを見回した。そして、自分の体の状態を知ることになる。

(What the fuck!?) 俺の両手足がないんですけどおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！)

彼には、首から上と胴体部分しか残っていなかった。首は鉄の輪がはめられ、そこから伸びる鎖がすぐ後ろの壁につながっている。手足の切り口は完全に塞がれており、分解された人形のようなある意味滑稽な姿になっていた。胸を刺されたはずだが、その傷もない。だからといって、安心できるような点はどこにもなかった。

『足までやられたか。用心深い』

(おいノミ。何があった。ここはどこだ)

『知るかよ。お前が目覚めて、ようやくおれも周りを認識できるようになったんだ。その間のことは何もわからん』

事実なのは、自分が負けたということ。

(ひもりんは…)

隣で横になっている彼女を発見して、心の底から安堵した。見た所、どこにも傷はなく、息もしている。

何とかして体を転がし、顎を地面に擦りつけながら近づく。

「ひもりん、俺がわかる?」

少し遅れて、彼女は顔を動かした。

「意識が、戻られたのですね」

「痛い所とか、ない?」

「いえ。何も、問題はありません……」

言葉とは裏腹に、声はいつも以上に弱々しい。顔色もいいとは言えない。明らかに衰弱している様子だった。

「その人、ソウルが不足しているんだよ。貴方が目を覚ますまでの四日間、ずっとここで放置されていたから」

声のした方を確認する。鉄格子の扉の向こう側に、同じような牢屋がある。そこに、紺の修道服を着た女性が座っていた。目深に被っているフードの端から、灰色の髪が流れ落ちている。

「誰だ？」

「お兄さん達と同じく、ここに捕まってる人です」

「ひもりんの、状態について知ってるんだな」

女は薄く笑って、火守女を眺めた。

「皆、自分に足りないものを求めている。そして得ても、もつと欲している。特にその人みたいな存在はね。ただそうあるだけで、魂を消費しているんだ」

「で〜」

「フッフ、気が急ぐのはわかるよ。つまり、定期的にソウルを身に宿していないと、死ぬってこと。もしくは亡者に成り果てるのかな。どちらにせよ、生きていないことは確かだな」

(なるほど)

貴樹は自分のやるべきことを理解した。さらに火守女へと密着し、彼女の耳元で話す。

「俺の中にあるソウルを使ってくれ。取り出すことは、できるんだよね？」

「いえ、しかし…」

女が、小さく声を上げて笑った。

「凄いいこと言うなあ、お兄さん。ソウルを分け与えるっていうのは、信頼を示す究極の形だよ。騎士が主に、夫婦が互いに、することだ。もつとその意味を重く考えた方がいいよ」

「何の問題もないな。ひもりん、頼む」

(いちいちうぜえなああの女。どっかに消えてくれ)

意に介することもなく、彼は再度火守女に言った。だが、芳しい反応は返ってこない。彼女にとってみれば恐れ多いどころの話ではないのだろう。未だにそんな距離感なのかもどかしいし、何より今は彼

女自身の命がかかっている。

「じゃあ、言い方を変えよう。君が生きてくれないと、俺が困る。お願いだ、俺のソウルを受け取ってくれ」

十秒ほど、火守女は黙っていた。あまりに静かだったので、意識を失っているのかと勘違いしてしまうくらい、完璧に固まっていた。まるで、物事の判断を下すのが初めてであるかのように、たどたどしく頷く。

「では……、手をお出してください。このような姿勢で申し訳ありませんが、体に力が入らないのです」

今度は貴樹が言いあぐねる番だった。

「えっと、それは別に構わないんですけど。手は、ちょっと難しいかな」
「……！ 怪我を、なされているのですか？」

ユリアにやられた時のことを、さすがに火守女も気づいていた。例え目は見えなくても、濃厚な血の感触は感じられる。

「いや、たいしたことはないんですけど」

ここで意外にも、火守女はゆつくりとはあるが手を伸ばしてきた。ずれることもなくぴったりと貴樹の肩、腕の根元を触る。あるべき部分がないことに気がつくのと、小さく息を吸い込んだ。

「んん、まあ、傷口は塞がってるから」

「他には……」

「大丈夫大丈夫。それくらいだし、ああっ」

思わず変な声が出てしまった。彼女は這いずって、貴樹の下半身の方へ移動してきたのだ。これが彼に異常な興奮をもたらした。

（え……、これ、まさかフェエ）

『お前、実は結構余裕あるだろ』

想像した通りになるわけがなく、ただ足の方も触って確認してきただけだった。見事に欠損した箇所を全て当てられてしまったようだ。彼女の感覚は意外に鋭いのかもしれない。

「そんな、そんな……」

こんな反応を見たくなかったからこそ、彼は何とかごまかそうとしていたのだ。火守女は自分の手と手と握り合わせて、苦しそうに胸に

当てた。

「灰様の体、私、私を庇われて……。どんな償いをすればよろしいのか」
「違う。これは、君のせいじゃない。俺は全部、納得してるよ。単に実力がなかっただけだ。あの場を無傷で乗り越えるのは、困難だった」
「しかし、私がいなければ、そもそも灰様が他の皆様のもとを離れる必要ありませんでした……。薪として以前に、私にはもう、この命しか差し出せるものはありません。ここの方と何とか話し合って、貴方だけでも救われるように……」

（めっちゃ可愛い。これ泣くのかな。いじらしすぎるんですけど。涙出てきたら、飲んでみたい。じゃなくて）

変態的思考を抑え、貴樹は顔で火守女の額を突いた。

「君が死んだら、俺も死ぬ。納得できないかもしれない。わからないかもしれない。まだ。とにかく、自分を責めることなんて、必要ないんだ。ソウルを受け取ってくれ」

愛の告白ともとれる言葉を吐いて、彼はドキドキしながら答えを待っていた。火守女は、頬を赤らめることも、涙を流すこともなく、ただ自失したように貴樹へ顔を向けているだけだった。

向かいの牢屋の女性も、呆気にとられているようだ。

「私は、何を見せられているんだろう」

（黙れ女。空気を読みやがれ）

火守女はしばらく考える様子を見せてから、ようやく手を動かした。結局飢えには逆らえなかった自分への罪悪感からなのか、少しだけ震えている。

「失礼いたします」

彼女が触れたのは、首だった。ちょうど脈の所に指先を添え、口を動かし始める。

（あ、だめ、勃起する）

『お前も空気読めよ……』

火守女の肌の感触や、温度が伝わってくる。彼女は集中しているようで気がついていないようだが、段々と顔が近づいてきている。色素の薄い唇や、さらにその下のさらされている白い鎖骨のへこみが目に

は完全に殺す気だったはずだ。どうして今こうなっているのか、状況の把握がまず先だった。一番初めにやっておけという話である。

周りを見る。壁、床、天井、どれもが古びている。苔の生えている所もあって、衛生的とは言えない。こんな所に火守女を長く居させるわけにはいかなかった。

そもそも、自分達は今、どこにいるのだろうか。

「その女」

「フフ、面白いものが見れた。お兄さんは凄く変わってる。そんなもの、親愛の情を向けられるなんて」

（殺されてえのかこいつは…）

火守女が侮辱された怒りをこらえ、情報収集に努める。

「ここがどこか、知ってるか？」

「牢獄だよ。……冗談。そっか、お兄さん達は運ばれてきた記憶がないだね。ここは王都の地下にある場所。広大な牢だけど、捕まっているのは私達だけみたい」

「王都？」

何だか嫌な言葉のような気がした。

「わからない？ 周りの空気、冷たいでしょ。地上に出れば白銀の大地と美麗な都市群が広がっている。イルシールの端あたりだね。上手くたどって行けば、罪の都も近いかな」

「嘘をつくのは賢い選択じゃない」

「本ただけど。今お兄さんを騙す必要がどこにあるの？」

貴樹は、やつとの思いで、動揺を表に出すことを抑えた。

（おかしいだろおおおおおおおおおお！ 何で不死街からエリア二、三個ふっ飛ばしてんだよ。じゃ、ここイルシールの地下牢か。どう考えても数日で着ける距離じゃねえぞ。それに、結界はどう通ったんだ。色々おかしいんだが）

イルシールは、領土全体が不可視の結界で覆われている。法王の許可が下された者以外は通り抜けれない。さらに、貴樹が全速力で走っても、不死街から生贄の道を通り抜け、清拭の小教会に着くまで一週間近くを要したことを考えると、明らかに不自然な速度だ。ユリ

ア達は何らかの移動手段を持っている可能性がある。

「でも、自分がどこにいるかなんて、お兄さん達にとってはどうでもいいと思うよ」

女性は鉄格子に寄りかかり、淡々と言う。

「どうせもうすぐ、二人共死ぬから」

暗闇から、静かな足音が近づいてくる。壁に付いているかすかな灯りのもとに、ユリアが姿を現した。今度は仮面を外していた。頬と提げている刀には血が滴っている。

「誰を斬ったの？」

「…看守共だ。それよりも、反省はできたのか。相変わらずお前の行動原理はよくわからない」

「そちらも大概では」

ユリアは女性の居る牢を開けた。初めから、鍵などかかっていたいなかったかのよう。

「どうしてこの人をすぐに殺さなかったの？」

「利用できる余地があるだろうと、考えた。この男の出鱈目な力の源が知りたい。そして、火守女が薪を有している理由もだ」

「そんなことを言っつて。本当はとても優しい人ですものね。姉さんは」

「お前から見て、どうだった」

牢から出ると、女性はフードを脱いだ。中から、ユリアと同じ色の瞳が現れる。右目の尻に、黒子が二つ、並んでいた。貴樹達の方を冷ややかに見下ろしてくる。

「面白いのは認めるよ。でも、期待外れかな。もう取り出すんでしよう？ 巡礼者達が、待ちきれないみたいだもの」

言いきると同時に、彼女の後ろに二体の辛うじて人間と呼べそうな代物が現れた。ぼろきれから覗く手足は朽ちかけで見るに堪えないが、身の丈に迫りそうな甲羅を背負うくらい力はあらし。ヨエルと全く同じ姿だった。

貴樹は、非常によく知らない事態の流れを感じ取っていた。

(もしかしてこれは詰んでいるのでは…?)

四肢を切断され、攻撃することはおろか立つことすらままならない。火守女も戦闘能力は皆無に等しい。状況を打開する術がまるで浮かんでこなかった。

『お前が調子こいたからだよ。はあー、ここで終わりか。まだ何も始まっていなかった気がする』

(んんん、慌てるな。おいノミ、ほら、出せよ)

『何を』

(力だよ。ピンチの時はお決まりだろうが。クールタイムとか、本当は嘘なんだろう。さつさとよこしやがれ)

『おお、あと三日後にな』

(…)

『…』

(だから、今冗談を言っている暇はねえんだよおおおおおおおおお！ 三日どころかあと数分の命だろうがああああああああああ！)

『無理だつってんだろおおおおおおお！ 現実逃避してる間があつたら助かる方法を考えろよおおおおおおおおお！ 何でこんな奴に拾われちゃったんだろおおおおお！』

脳内で醜い言い合いが行われている中、彼の牢屋も開けられる。

「お兄さん、自分がこれからどうなるか、わかる？」

首の鉄輪が外される。

「ソウルは、一体どこに宿るのか。興味深い問題だよ。心臓か、脳か。全ての臓器に等しく宿るといふ考えもあるし、精神そのものがソウルの本質だという説も頷けなくはない。お兄さんのソウルは、特に謎なんだよ。とても大きな可能性を秘めている。だからそれを、これからあらゆる手を使って取り出さないといけないの」

彼の体を有用な道具であるかのように撫でてくる。ユリアとは違い、彼女は表情豊かに語る。ただし、それはあまり正常な働きをしていないように思えた。とても楽しそうなのに、見ているとどこか粘つく悪寒が背中から這い上がってくる。

うけど、別に不都合はないね」

いつもの貴樹なら、ここで諦めていた。彼は自分の命をとっても大事に思っている。しかし、それと長く続く苦痛は釣り合わない。抗って苦しい思いをするくらいなら、むしろ自分から命を絶つ。そういう、諦めの良い考え方をしていた。

(駄目だ、ひもりんがいる。ひもりんがいるんだ)

自分が死んだら、火守女も殺される。それだけは、彼にとって、承服できなかった。

だから、生き残るために道を探す。

「お、俺、は、ユリアさんを、嫌いになりたくは、ないんです」

息を吸って、吐くだけでも精一杯だった。何とか、言葉を絞り出していく。

「喋ると、苦しくなるよ」

刀を再び構えている、ユリアだけを見た。相手にもしていないという雰囲気だったが、何かを感じ取ったかのように、貴樹の方を向く。

「でも、それだけは許さない。もし、彼女を傷つけたら、貴方は、報いを受けることになる。考えられる最大限の苦しみを、味わってもらおう。武器を下ろしてください」

声を出さずに、女性が笑う。

「可笑しい。どの口で言っているんだろう。お兄さんも死ぬんだよ」

「そろそろ、鬱陶しくなって、きたな。姉さんみたく静かにしたらどうだ、リリアーネ」

彼女達二人は、同時に彼を睨んできた。貴樹は呼吸を整え、蝕んでくる痛みから意識を逸らした。何もかもを知っているという表情を作り、堂々とした態度を保った。

「お兄さんは、私と会ったことがあるのかな」

「お前は知らないだろうな。俺だけが知っている。色々なことを」

「名前、誰から聞いたの？」

「元からわかってたよ」

黒教会の三女、リリアーネ。作品中一度もはっきりと姿を見せなかった存在。アイテムテキストの上でしか、触れられていない。

貴樹が唯一優位を取れる可能性があるもの。それは知識だ。とにかく、自分はまだ生かしておく価値があるのだと、示さなければならぬ。彼女達が興味を示しそうな情報を握っていると思わせ、少しでも時間を稼ぐ。残り火が復活するまで持ちこたえるのは困難だろうが、延命すればするほど、可能性は開けてくる。

ユリアは刀を鞘におさめた。そのまま無言で近づいてくると、首をわしづかみにしてきた。

「貴様、何者だ。やはり、ただの灰ではないな」

「話を、聞きたいのなら、離して、ください。苦しいですよ」

床に叩きつけられる。傷が揺らされて、目の前が暗くなりかけた。唇の端を噛み、顔だけは上げる。火守女を一瞥した。思考に、全ての余力を注ぐ。

「俺の方だつて、いまいち貴方達の目的がわからない。亡者の国を興すのか、はたまた最初の火を奪い、自分達を虐げてきた者達に復讐をするのか。まあ、どちらも正しいという可能性もある。貴方達が力を求めていることに変わりはない。カアスの遺志を継ぎ、何かを成そうというつもりなら、俺を殺すのは悪手です。当然、火守女を害することも。それを確認した瞬間、俺は舌を噛み切る。奇跡を施そうとしても無駄ですよ。こういう時のために、命を絶つ手段は複数用意されている。慎重に行動するように」

カアスという名前に、一番大きな反応を示したのは観察できた。今この瞬間から、ユリアとリリアーネの注意は全て貴樹に向けられたことも。ここまでは、狙い通りだ。

リリアーネはもう、笑つてはいなかった。

「少し、興味深くなってきたね。姉さま、この人達を殺すのは、もう少し待ってみたほうがいいかもしれない」

「こちらを出し抜こうとしているんだ。この男は、これでいて食わせ者だ。出まかせを並べ立てているにすぎない」

「なら、どうして、カアス様を知っているの？ 彼は確実に関係しているよ。裏切りを償わせる、いい機会が巡ってきたと考えればいい。あの女の居場所を聞き出せる。まだ殺すのは早いと思う」

リリアーネと目を合わせるユリアの様子に、引つかかるものを感じた。その顔は、かすかに怯えているような気がする。

とりあえず彼女達の判断に波を立たせたのは事実だった。貴樹は光明が見えたを言わんばかりに、彼女らに気づかれなないように笑みをこぼした。

(すまん、カアスって誰?)

『お前ってほんと、お前だな』

どうやら追いつめられたままなのは、変わらないらしい。

『明らかにいける流れだったじゃん。なのにどうして本人がこんなんだ』

(やっべ。この先どうしよ)

『何も考えてねえのか…』

貴樹は別に、ダークソウルシリーズの全てを知っているわけではない。彼は最新作のⅢしかやっていないのだ。当然、ⅠとⅡもやる予定ではいたが、その前にこの世界へと来てしまった。火を見出したグウィンや、その一族のことは考察サイトなどでおぼろげながら知ってはいるものの、他の細かいことはこれから理解していくつもりだった。カアスの名も、ゲームにおけるユリアとの会話で知ったにすぎない。つまりは、見切り発車も甚だしいということである。

(考えろ、考えろ、考えろ)

今の会話で、情報の端々はたくさん出てきたような気がする。確かになのは、カアスという者は今生きていないか、彼女達と会える状態にはないこと。そして、おそらくではあるが、その元凶である何者かが、ロンドール勢に大きな恨みを買っているということ。

(女、女…。フリーデのことか? 彼女の場所なら、確かに知ってはいる。だが、言ったところでどうなる。こいつらは、絵画世界のことをちゃんと理解しているのか? 信じてもらえるのか? ゲールが見つからない以上、行き方もわからない。価値のある情報にはならねえ)

「じゃあ、お兄さん。いろいろと質問に答えてもらうから」

「そうするには、条件が色々ある」

れ、さらに酷い仕打ちを受けることになる。

リリアーネが、顔を下ろしてくる。髪が頬にかかる。短剣を持った手が、振るわれる。

「答えてくれないと、わからないよ」

ちょうど鳩尾の部分を、刃先でかき乱される。貴樹はみつともなく叫んだ。今まで体験した事のない痛みだった。臓物をぐちやぐちやにされても、奇跡で治ってしまうのだから、始末に負えない。中途半端にもものを知っているような素振りをしたせいで、状況はさらに酷くなってしまった。

「あの女は今どこにいるの?」

思考すらまとまらない。ただ、リリアーネの燃えるような視線だけを認識していた。彼女は、こちらを傷つけることに躊躇うどころか、嬉々として行っているようだ。次第に、彼女の呼吸が荒くなってきた。ユリアもまた、火守女の制止する声を聞き流し、目を細めて貴樹を見下ろしている。

それ故に、この場に別の誰かが到着したのを、誰も気がつかなかった。

「あらあら、随分と盛り上がっているわね」

直後、ユリアとリリアーネは瞬時に牢屋から脱出していた。彼女達のいた場所に、ソウルの矢が何本も撃ち込まれる。巧妙に貴樹と火守女を避けていた。

いつ間にか、貴樹のすぐ側に女性の手が生えていた。黒い染みのようなものが床に広がり、そこから全身が這い出て来る。鮮やかな赤毛が、この暗い地下牢の中で浮かぶように揺れた。

「約束とは、叶うものですね」

「お前」

彼も辛うじて、その女性を憶えていた。

「だって、また会いましょうと、私は言いましたもの」

クリムエルヒルトが、夢見る顔で言った。

彼女のことは、よく知らない。会話イベントもなく、ただ、闇霊と

いうプレイヤーの世界に侵入してくる敵として戦うか、逆にボス戦前のサポートキャラクターとして召喚できる存在でしかない。祭祀場を襲撃してきた時も、ただの敵として処理した。だから、今こうして彼女が現れたことが、自分にとって良い意味なのかどうか、判断がつかなかった。

「貴方という人は、本当に、私を誘惑するのが上手いですね…」

クリムエルヒルトが貴樹の体、正確には下半身の一部を見た瞬間、どろりと表情が溶けた。下唇をゆっくりと舐め、指で彼の腹筋をつつとなぞる。

「できれば今すぐにでも、応えてあげたいんですよ？ でも、この場所は、全くふさわしくありませんからね。愛し合うのは、ふかふかのベッドの上でないといけません」

(こいつ、何を言ってるのかさっぱりだぞ)

『絵に描いたようなメンヘラ女だな』

リリアーネが、無言で短剣を投げた。クリムエルヒルトは造作もなくその柄を掴む。血がこびりつき、滴っている部分を、紫じみた舌で味わうように撫でる。その光景を見て、貴樹は背中が粟立つのを感じた。火守女以外、ここにはまともな女性がない。

「結晶。何の用だ。我々の邪魔をするな」

クリムエルヒルトは、鼻を押さえる。

「全く、酷い場所ね。暗く、汚れていて、性根ばかりか体まで腐った人達が徘徊してる。ねえ、特に貴方達よ。くさい、くさい。人間ぶった皮の下から、亡者のおぞましい臭いがしてくるわ。生きていて、楽しい?」

「何のつもりかは、知らないけど」

リリアーネはどこから出したのか、短剣を持っていた。ユリアも刀を構え、臨戦態勢に入っている。

「先に死にたいのなら、そう言ってくればいいのに」

リリアーネの脇にいた巡礼者二人が、クリムエルヒルトに向かって飛びついていく。目的の体に到達する前に、二つの頭が弾けた。巡礼者達の体内から、ソウルの光球が飛び出してくる。それらはクリムエ

ルヒルトの杖に吸収された。

「汚物が近づくのを許すと思つて？」

だが、倒れた亡骸が、黒く発火する。できた黒蛇は意志を持って、彼女へと向かつていった。舌打ちをしてから、掌で火球を作ると、彼女はそれをぶつける。赤色と黒色の炎が混じり合い、互いを支配しようと争い始めた。そして最後には、彼女の出した炎が残った。

「話し合いをしましょう」

クリムエルヒルトは、貴樹の体を抱えた。開いた傷口に、奇跡の光が入っていく。それを見て、ユリアが驚いたようにこぼした。

「前は、使えなかったはずだが」

「女は、日々成長していかなければならないの。貴方に言っても、無駄だろうけど」

「それで、結晶さん。私達は一体何を話し合えばいいの？」

リリアーネの問いに、彼女は貴樹へ愛おしそうに頬ずりしてから、答えた。

(気持ち悪っ)

「語り部ちゃんはせっつかちさんね。私は、彼と、薪を回収するように命令されてここへ来たの。そういう、約束だったでしょ？　なのに、ねえ、どうして、こんなことになっているのかしら」

彼女の周囲に光球が浮かぶ。それらは周囲に飛び散り、天井や壁を破壊した。

「余計な損傷は与えないようにと、エルドリツチ様から何度も、言い含められていたでしょう？　この二人は、貴方達だけの物ではないのよ。黒教会の方達は、もう裏切るつもりというわけ？」

「初めから、そちらの同盟に与した憶えはないよ。今、貴方を殺せば尋問を再開できるんだ。それだけでしかない」

「そう。じゃあ私は、ちゃんと逃げないといけないわね」

貴樹は、事態が進行をしていくのを眺めるしかなかった。下手に口を挟めば、命取りになりかねないからだ。

(どっちの方が、ましなんだ?)

『クリムエルヒルトは、お前を殺すつもりはないみたいだぞ。明らか

だろ』

(それもそうなんだが。この女、地雷臭しかしいんだよ)

『どっちもどっちだろ』

最初に動いたのは、ユリアだ。滑るような踏み込みで、クリムエルヒルトへと接近していく。ユリアの突き刺さるような視線で、貴樹は直感的に理解した。どうあっても、自分を殺すつもりらしい。ソウルの矢が何本放たれようとも、刀一本で対応してみせる。怖いのは、闇隴ではないスペアの刀でさえ、魔術を斬り払える程度の耐久力があるということだ。刃こぼれする気配すらない。

クリムエルヒルトは、余裕の笑みを崩さずに、手元に炎の固まりを作った。間近で火の粉が飛んでも、不思議と貴樹は熱を感じない。ただユリアの全身が止まったのを見て、触れればろくなことにならないのは明らかだった。

ユリアは刀を構えたまま、ソウルの光球を放つ。それを片手をかざすだけで、魔女はかき消してしまう。

(これだ。何度か見たことあるが、一体どういう仕組みで、そうなるのかわからん。見えないソウルでもぶつけて相殺してんのか？ これのおかげで、術戦がより高度化されてる)

一歩下がり、ユリアの刀がぎりぎり届かない所で、維持し続けている炎を投げた。この呪術は見憶えがある。目標地点に着弾した後、周囲に火をまき散らす型のものだ。しかし、クリムエルヒルトとほぼ同じ視点にいる貴樹には、これが陽動だとすぐにわかった。本命は、魔術を消した左手から静かにユリアの背後へ回っている、光球だった。

ユリアに警告するかどうか迷ったものの、すぐにその必要はなくなった。

呪術の炎も、ソウルの光球も全て、一瞬で消滅する。クリムエルヒルトは動揺することもなく、続けて何かを唱えようとした。だが、出てくるのは詰まっているような呼吸音だけ。そこで初めて、彼女はリリアーネの方へと視線を向けた。

(やっば)

リリアーネは、いつの間にか杖を取り出し、足下に紫色の魔法陣を

作っている。そしてその陣は、クリムエルヒルトの体にも現れていた。

沈黙の禁則。効果範囲内の者の呪術、奇跡、魔術を封印する。発動にかかる時間のわりに、有効時間は短い。だが、姉妹二人にとっては十分すぎる隙だった。

危険を察知して貴樹を横に放り捨てた直後、魔女の両腕が斬られた。ユリアが完全に筋繊維の一本まで断ち斬った一方で、リリアーネは短剣を手首に刺し、そのまま捻じり回して動脈を滅茶苦茶にする。クリムエルヒルトは壁に背中を当て、ずるずると地面に座りこんだ。『終わったんですが』

(ぎゃああああああああああ何負けてんだあああああああ！)

斬られた本人は、恍惚として目を閉じている。

「酷いわ。もう少し加減を考えてくれてもよかったじゃない。近接で貴方達二人に勝てるわけがないのに」

何も答えずに、リリアーネが短剣を彼女の首に突き立てる。その光景で、貴樹は今度こそ望みが断たれたと思った。ここでクリムエルヒルトが勝たなければならなかったのだ。利用するための道具としてではあるが、彼女に生きてほしいと願っていた。

「そんな顔をしないで。勝敗なんてとつくに決まっていたんですから」

平然と、クリムエルヒルトは口を動かした。喉は斬り裂かれているはず。傷から出てくる黒い血液が、突然蠢き始めた。よく見てみれば、血などではない。黒い膿は意志を持つかのようにあふれ出し、彼女自身と、貴樹、火守女を覆ってきた。

リリアーネとユリアはその膿に触れないよう、牢の外まで下がる。「全く。守り手は皆、そうなのかな。結晶さんも、私達をとやかく言う資格はないね」

顔の半分が膿色になり、青白い頬で、クリムエルヒルトは艶然と唇を吊り上げた。快樂で濡れた目を、いっぱいに開いていく。

「死に最も近づく時が、一番気持ちいいの。楽しい時間をありがとう」

貴樹は己にまわりつく膿をどうにかして剥がそうともがいてるうちに、急に視界が遠ざかっていくのを感じた。光景が四角の枠にはめられて、それ以外の周りは暗闇だ。まるで一人で映画を見ているような心地だった。

そして、一瞬で白い閃光がそれら全てを埋め尽くし、

気が付いた時には、上品な雰囲気飾り付けがなされた天井が映っていた。

(なんだ、どういうことだ?)

実感を持たずに体を動かそうとすると、背中に柔らかい感触があった。首を回し、左右を見ると、どうやら自分は大きなベッドに寝かされているらしい。四隅の柱から全体を囲むように淡い灰色のカーテンが掛けられていて、この部屋が地下牢にある一室ではないことは確かだった。

擦るような金属音で、自分の体とベッドが鎖でつながれているのがわかった。四肢があつた所全てに、鉄輪がはめられている。

「お目覚めですか?」

ベッドのすぐ横の床にクリムエルヒルトが座っていた。膿の欠片もなく、喉の傷も無くなっている一方で、両腕は欠損していた。

「戸惑っているんでしょう。大丈夫。心配はありませんよ。ここは、法王の城内です。あの雌亡者共が追いかけてくることもない。貴方を害する者は誰もいません」

どうやって、と問おうとしたが、貴樹はその前にこの女性の能力を思い出した。能力というよりは、奇跡という方が正しい。イルシールの地下牢から、ここまで瞬間移動したということだろう。ロスリックの王子も使える奇跡だ。ただ、無条件で移動できる距離ではないはず。初めからこうするつもりで準備をしてから、ユリア達の前に姿を現したのだろう。

クリムエルヒルトは枕元に腰を下ろした。

「少しだけ、お待ちください。正直、今すぐにでも、という思いはありません。ですが、フフ、両手がないと不便ですから。別室で治してきませぬ」

言い方に、不穏なものを感じた。言葉以上に彼女の表情が物語っている。貴樹に付いている鉄輪を確認するその視線は、獲物に対するそれである。額には汗が浮かび、今までどこか具合の悪そうだった肌色は、じんわりと赤らんできている。

貴樹はあえてそこに意識を向けないようにした。何よりも、尋ねるべきことがある。

「火守女は、どこに？」

「安心してください。無事ですよ」

彼の顔に目を落としながら答えてくる。

(信じられるわけねえだろ)

「この部屋の近くにいるんですか。彼女には絶対に手出しを…」

ふっと、力が抜けたようにクリムエルヒルトが落ちてくる。貴樹は辛うじて首を動かすことしかできなかった。そんなとっきの反応にも、彼女はついてくる。その目は、悪戯を楽しむように笑っていた。

紫がかった唇が、貴樹の唇と合わさる。呆気にとられている間に、彼女は舌を伸ばして、前歯の裏側を舐めてきた。かすかな鼻息が頬にかかる。首筋に悪寒が走った直後には、彼女は再び顔を上げていた。自身の舌を、見せつけるように口の中へとしまっていく。

「他の女のことなんて、おっしやらないで……」

(ほぎやああああああああああああああああああ！俺のファーストキスがあああああああああああああ汚ねええええええええええええええええええええええええ！この女アアアアアアアアアアア絶対！その口むしりとってやらああああああああ！)

『二十余年、とっておいたのにな(笑)』

発疹が首から胸にかけてできる。唾を吐き捨てたい気分だったが、彼女を下手に刺激することは良くない。必死にただただ驚いているという様子を作った。

クリムエルヒルトは少女のように明るく笑った後、立ち上がった。「ほんの戯れです。戻ってきた時に……続きをいたしましょう」

部屋から出ていくその瞬間まで、彼女は貴樹から目をそらさなかった。

一人になってからしばらく、気を静める時間が必要だった。命の危険は何とか回避できたとはいえ、別の危険が迫っていた。

2.2. 法王の試練

(やばいやばいやばい。あの糞ビッチ、頭おかしいだろ。どうにかして、ここから逃げねえと。俺にとっては死にも等しい屈辱が)

『思っただけだよ。そこには同意しかねるわ。逆にチャンスじゃねえの？ あっちはお前にべた惚れだぜ。上手く懐柔すれば、残り火が復活するまで安全を確保できるかもしれない』

(黙れこの外道め。他人事だと思いやがって)

『まあ、天井の装飾でも分析してろよ。すぐに終わるさ』

(いやだあああああああああ！)

鉄輪には鍵穴らしきものがある。今の腕力が並の人間未満である以上、鍵を探すしか道はない。だが、さすがに彼女は抜け目がない。見える範囲で、鍵はどこにもなかった。十中八九、彼女が持ち歩いているのだろう。

発想を変えることにする。鉄輪を外すのではなくて、鎖自体を破壊できないか。もちろん、多少引つ張った程度ではびくともしない。

ベッドから右手の方にある、部屋の角に棚が並べられている。中には、短刀や長剣、黒い木の杖らしきものが立て掛けられていた。あれら以外に、物らしき物はない。鎖をどうにかするために、何とかして入手する必要がある。

貴樹は体を揺り動かして、ベッドの外へと移動し始めた。短い距離だが、これがなかなか難しい。普段支える両手足がないと、寝がえりをうつことすらも、全身の筋肉を使わなければならない。

首に鎖が絡まるのをほどいたりしながら、時間をかけて端まで来た。床まで落ちて、多少進むくらいには、鎖の長さに余裕はあるだろう。はずみをつけて、ベッドから降りる。ろくな受け身も取れないので鈍い痛みが残った。

棚の方へと少し近づき、顔が長剣に届く手前まで来た。

(上手く外さねえと)

留め金もなく、柄の部分を押しせば取れそうだ。ただし、気を付けないと倒れたはずみで刃が体を傷つけることにもなりかねない。貴樹

れている様子だ。

「怯えているんですか？ 可愛らしい。一緒に寝るだけですよ。緊張することはありません」

貴樹のすぐ側に横たわり、同じ枕に頭を載せてくる。ほどけた赤毛が、白い額縁の上でだらしなく広がっていく。清めるついで、何らかの香水もふりかけたのだろう。本能的に訴えかけてくるような香りが鼻をついた。

「雄々しい…」

クリムエルヒルトの視線が、熱く下の方へと向かう。それがすぐに、怪訝そうな表情に変わった。

「元気がないようですね。それとも私のような体では、相手をするに及ばないということでしょうか」

「そういう、問題ではなくて」

貴樹は何とかあがこうとした。

「ただ、本当に理解できないんです。誰かに命令されてこんな事をしてるのなら、やめてください。僕は決してなびかないし、貴方も自分を偽ることになる。どちらも得をしません。こういうことは、なんというか、軽々しく行うものではない」

言葉を並べているうちに、自分でも失敗していると気がついていった。彼女は貴樹が話せば話すほど、笑みを深くしていく。見てくる目も、潤うばかりだった。

「そんなに真剣に考えていてくれたんですか？ ああ、とても、嬉しい。嬉しいです…」

（ちがあああああああう！）

『何言っても無駄だ。こういう女は、全部都合良く受け止める』

じつと、彼女は視線を合わせてきた。

「余計なことは考えなくていいんです。さあ、私の目を見て。気分も晴れますよ」

口が文言を紡いでいく。その唇の動きには見覚えがあるような気がした。頭の芯がぼやけていく。視界が一瞬赤くなり、確かに体全部が緩んでいく心地になった。そうすると、いつからだろう、目の前の

女性がものすごく魅力的に

(見えるわけねえだろ。アホか)

様子の変わらない貴樹に、彼女は二、三度瞬きをした。

「おかしいわ」

そうしてしばらく、一心に目を合わせるだけの時間が過ぎていった。だが、彼は何も感じない。クリムエルヒルトに対する感情に、何の揺れもなかった。

そんな彼を、彼女はとても珍しいような目つきで眺めている。それから、本当に楽しそうに、くすくすと笑い声をこぼした。

「貴方みたいな人、初めてです。魅了が効かないなんて」

(カルラもやってたやつか。くだらねえ)

ほんの少しでも、クリムエルヒルトの裸体に思う所があれば、そこだけが増幅され、彼女の言うことならば何でも聞いてしまう奴隷になっていただろう。それほど恐ろしい呪術なのだが、貴樹にとっては無意味だった。

『うくん』

(なんだよ)

『お前は同性愛者か何かか?』

(なわけねえだろ)

『だってよ、この女は明らかにやべえ奴だが、見た目は悪くないどころか、むしろ大半の男なら、共通してエロいと思うだろ? あの手をわしてそんな胸に飛び込んでみたくならないのか?』

(はあ——、やれやれ。あのな、好きでもない女の裸とか、グロ画像でしかないんだよ。吐くのこらえるだけで精一杯だわ。こんなものより、ひもりんの腰を眺めてた方がはるかに興奮するぞ) 『ホモじゃなくて精神異常者だったね』

散々に思われている彼女本人は、上半身を持ち上げ、貴樹の胸に飛び込んできた。自らの胸を過剰に押しつけ、耳元に吐息をかけてくる。ここにいるのが、例えば下田だったなら、これだけでもう卒倒していただろう。

貴樹は気持ち悪さで気を失いかけていた。

(うぶ。おええ)

彼女は荒く呼吸しながら、貴樹の肩に頬を擦りつけた。

「でもよかったかもしれません。もし、術にかかっていたら、絶対に殺してしまいましたから。作り物の愛なんて、続けても虚しいだけです」

彼女から仕掛けておいて、この言葉である。貴樹も貴樹でまともではないが、クリームエルヒルトもある意味自身にしか通じない理屈のようなものを持っていた。それに対する嫌悪と、くつつかれてくる不快感でおかしくなりそうになる。

(ほんとなんなのこいつ)

紛らわすために、何とか声を出す。

「へ、変ですよ。第一、貴方と僕はほとんど面識もなかったのに」

「時間ではなく、密度。そうは思いませんか？」

彼女の手が、ゆつくりと動いていく。貴樹の太股を撫で、徐々に根元へと近づいていった。

「あの時。貴方が私を貫いた時、とても深い…情を感じました。圧倒的な力に組みしかれる被支配感。どちらかというと、自分が優位に立っている方が好みだったんです。でも、フフフ。それを貴方が変えてしまいましたね。どうぞ私のことは、クリームとお呼びください。貴方もエルドリツチ様の力を受け入れれば、永遠に一緒にいることができます。ここが不能なもの、これから治していけばいいんです。できる限りのことはいたします。まずは今ここで、いろいろと試してみしましょうか」

(聞き捨てならない部分があったんだが)

『ああ、こいつ、お前を守り手の一員に加えるつもりだぜ』

(俺はイ○ポじゃねえ)

『そっちなよ』

貴樹の胸に手をついて、クリームエルヒルトは起き上がる。下半身をずらして、彼の例の部分握ってくる。はねのけたい気持ちだったが、両手足がない状態ではわずかな抵抗しかできなかった。

「二度、入れてみましょう。ふう、胸が締め付けられるようです。本当に楽しみ…」

彼女は衣装を正すと、貴樹につながっている鎖をソウルの矢で断ち斬った。そして懐から小さな鍵を取り出し、四つの鉄輪も外していく。何をするつもりなのか警戒していると、彼女は自身のローブの一部を破った。黒い布切れを横に広げ、彼の腰に巻き付ける。

(あれ?)

『どうした』

(全然痛くならねえぞ。前は、布をはおっただけで、ビリビリきたんだが)

武器や防具を一切持てないという呪いじみたもの。貴樹の股間を隠すための布ももちろんふくまれているはずだが、なぜか何の反応もしなかった。

「何を?」

「私は、このままでも素敵だとは思いますが、一応の礼節は保たないといけませんから」

だが今はそれよりも、クリムエルヒルトの行動の方が気がかりである。

彼女が扉の方向を向いたと同時に、部屋の中に細身の騎士が入ってきた。イルシールの法王騎士だ。本物を見れたことに少し感動したが、騎士が真つすぐベッドの方へと歩いてきて、軽々と自分を持ち上げた時、再び困惑した。

まだわかっていない貴樹に向かって、彼女は何でもないことのように続けた。

「そろそろ時間です。私と一緒に、王の広間まで移動してもらいます。既にエルドリツチ様を含めた薪の王達の勢力が、会合を行っています」

貴樹は喜んでいいのか、はたまた今の自分の状況を悲観すべきなのか、わからなかった。祭祀場の時、NPC達が集結しているのには素直に感動できた。こうなったらいいなという願望が実現した気持ちだ。しかし、これはどうだろう。ただただありえないという思いで、整理するのもやつとだった。

「どんな化物が出てくるのかと思えば、五体すら揃っていない男か」

一番最初に貴樹へ視線を向けて、侮蔑を口に出したのは、真ん中の玉座に座っている者だ。白い法衣に飾り付けられた様々な装飾品や、木の枝が幾重にも絡まった形を模している王冠。彼がこの城の主。法王サリヴァーンである。

一番豪華な玉座の左右には、多少格の落とした椅子が並べられ、既

にほとんどの席が埋まっている。

「久し振りだねえ。どうやら、とても大変な目に遭ったようだ」

(fuck you)

あとは死ねという言葉しか浮かばなかった。もし次にエルドリツチに会ったら、問答無用で殺すと決めていた。しかし、今の状態では到底叶わない。

サリヴァーンとエルドリツチが共にいるのは予想していたことだ。ただ、クリムエルヒルトの言う会合とやらが、どうやらかなり大きな規模を指しているのだと、貴樹は理解した。

エルドリツチから少し離れた所で座っているのは、仮面の男と、茸を模した被り物をした術士。ものすごく、会った憶えがある。彼らもまた、貴樹が床に転がされているのを、清々した様子で見ている。レオナルドとヘイゼル。五本指の代表として、来たのだろう。

サリヴァーンの右隣りには、清貧を形にしたような老婆が腰かけている。彼女の後ろには、護衛らしき男が立っていて、貴樹よりも周囲の勢力に警戒しているようだ。

(あれは、どう見たってエンマだ。ロスリックの祭儀長が、なんだってこんな所にいる?)

イルシールとロスリックは互いに敵だったはず。人食らいと相容れるとも思えない。

「さて、彼が話した通り、ワタシ達の強力な味方となってくれる男だ。彼は単身で祭祀場の戦士のほとんどを相手取り、完勝してみせた。ひとまずはワタシの配下になるが、この同盟全体のために働いてくれると信じている」

「次から次へと、荒唐無稽な嘘が出てくるものだ」

エルドリツチ以外で、笑っている者は一人もいない。サリヴァーンが特に、自分の庭が汚されていると言わんばかりに、不機嫌な顔になっていた。

「貴様の語っていることと、目の前の光景は、食い違いがある。あれのどこが、我々に利益をもたらす存在に見える？ 無様な敗者、それ以下でしかない」

（あ？ 初見で俺に殺された雑魚ボスが、粹がってんじゃねーぞ）

中指を立てようとしたが、そもそも腕すらないことを思い出した。「消耗は免れなかったということだろうね。彼を回収したクリムエルヒルトによると、黒教会にやられたらしい」

サリヴァーンは空いた二つの席を一瞥した。

「ここにいない理由がはつきりした。蛇の娘達らしい、最低限の約定さえ守れぬ愚物さよ」

火継ぎを成すために結束する者達もいれば、その反対もあり得るだろう。しかし、巨人ヨームや深淵の監視者達が疎外されている所を見るに、エルドリツチの言う同盟とやらは皮だけ繕った空虚な言葉に思える。彼らの利害がどこまで一致しているのか、それによってこの会合の意味を測ることができよう。

だが、今の貴樹にとっては興味もわかない些事だった。

「強大な力には、必ず代償があるものだ。今こうして捕まっている彼も、ボルドの首を腕力のみで潰した彼も、ワタシは知っている。いわば、谷の状態さ。今の彼は。何にせよ力が戻る前に、友好的な感情を示すのは悪くない」

エルドリツチはようやくくまともに貴樹を見た。

「そう悪い話でもないだろう？ 敵の敵は味方とは言い切れないかもしれないが、敵よりは信用できる。今まで色々とすれ違いがあったけど、これからは共に歩んで行こうじゃないか」

（こいつ、俺が受け入れるとでも思ってたのか。てめえの話なんざ聞くだけ無駄だ。今はそれよりも）

貴樹の思考を呼んだかのように、人食らいは唇を吊り上げた。

「アナタの大切な人も、守れるような環境にしてあげよう」

その言葉と同時に、入口の大扉が開かれた。首をもぞもぞと動かし、貴樹は新たに玉座の間に連れて来られた者達を見る。

(は?)

まず、騎士によつて床に座らせられたのは、ずっと安否が気になっていた火守女だ。両手を拘束されてはいるが、何かをされたという形跡は見当たらない。貴樹の感情がただの安堵で終わらなかつたのは、彼女の隣へ同じく連れて来られた、もう一人の存在のせいだった。

その男も、呆然と貴樹を見ていた。その目が色濃く絶望に染まってい。頼りにしていた最後の希望が、崩れ去つたと言わんばかりの表情だった。

「なんで、あんたは、そんな姿で転がっているんだ」

ホークウッドは立ち上がりうとして、騎士に押さえつけられる。抵抗はすぐにやめ、顔を地面に付けたまま、枯れた植物のように全身が萎れていく。明らかに死を目の前にした者の姿だった。

祭祀場にほとんどこもっていたはずのホークウッドがなぜこんな所にいるのか。貴樹との戦いにおいても、彼は前線に全く顔を見せていなかった。使われていたとしてもイリーナ達の護衛ぐらいだろうと思っていたが、別の意図ある行動をしていたのだろうか。

理解するには、時と場所が悪かつた。混乱している貴樹に、さらにエルドリツチが続ける。

「同盟に入ってもらおう上で、アナタには選択をしてもらわなければいけない。彼女か、はたまた狼血の彼か。どちらか生きてほしい方を選びなさい。新しく同盟に入るのは、二人で十分だ」

どちらかは死ぬ。

貴樹は、後ろの方で控えているクリムエルヒルトを一瞥した。彼女は顔の細胞の一つ一つが凍りついたように動かない。彼と、視線すら合わせない。

簡単だ。さつさと火守女とホークウッドを連れて、ここから逃げればいい。追っ手は適当に殺して、ある程度距離を稼げば、相手が労力と対価の釣り合いを考えて、諦めてくれる。残り火状態になつてさえいれば。

「できれば、判断の時間があげたいんだけどねえ。でも、アナタにとってはそう難しくもないだろう？ 何のために祭祀場から離れ、今この場にいるのか。考えるまでもなく、答えは出るはずだ」

火守女と、ホークウツドを見比べる。それから、彼女をじつと観察した。もやもやとした疑念が形を得ていくにつれ、震えるほどの怒りが湧いてくる。

「灰様、お願いします」

火守女が頭を下げる。何もかもを覚悟したような声だった。

「私のようなものには、遠慮をなさらないでください。これ以上助けていただいても、私にはその恩を返す術がありません。どうか、今のうちに、報いさせてください」

「彼女はこう言っているね。さて、不死隊の落伍者。アナタは何か言いたいことはあるかい？」

ホークウツドはうずくまったまま、黙っていた。周りの音が聞こえていないようだ。どちらも自分自身を選べとは言っていない。あまり二択が成立しているとは言えない状況でも、エルドリツチは満足したように、玉座にもたれかかった。

「さあ、言ってもらうかな。自分と共にワタシ達側へ来る者の名を」
「黙れ」

貴樹の低い声が、自身の意図した以上に広間に響く。本音を取り繕っていた建前を突き破り、少しの間表出するという、日本では全くなかったことが、最近はよく起こる。

「どちらかを選べというのなら、俺は、ホークウツドを生かす」

名を呼ばれた本人が、初めて動いた。信じられないと言わんばかりに、火守女を見てから、貴樹へと顔を向けた。

「これは驚いた。ワタシの記憶が正しければ、アナタは彼女を、何よりも大事に考えているはずだ。冷静な判断だと、自身を持って言えるのかい」

火守女は、どこか安心したように、胸を押さえている。

「ありがとうございます。これで私は」

「黙れ」

沈黙が、一瞬この場を支配した。

貴樹は顔が不快な熱さで覆われるのを感じていた。同時に妙な罪悪感も隅にある。これほどの怒りを、最愛の人の姿へ向ける羽目になるのが、本当に腹立たしかった。

「お前に、言ったんだ。口を、開くな。その姿で、その声で、この場に
いることが、ひもりんに対する最大級の腑辱だと、気づかねえのか。
この手で絞め殺してやれないのがもどかしい」

「はい…？」

女は、わからない、という顔をした。

「術を解け。騙されるとでも思ったか？ 下手なんだよ、お前は」

言われていることを理解し始めたのか、女は震え始めた。口を押さえ、今にでも吐きそうな表情の歪ませ方をする。その怯えの目は、貴樹に向けられているではなかった。

「エルドリツチ様、どうか」

「ふふふ。聞こえなかったのかい？ 擬態を解くんだ」

「わ、私は、自分ができる限りの」

「やれやれ」

エルドリツチが頬杖をついた直後、火守女の姿が崩れ始めた。その皮が液状に解け、床に消えていく。見ていてあまり気持ちの良いものではない。中から姿を現したのは、火守女とは全く別人の、痩せた女性だった。目を恐怖で一杯に見開き、貴樹に向かって這いずつてくる。やけに手入れされた黒髪とは対照的に、枯れた両腕が痛々しい。と、彼以外なら思っただろう。

「助けて」

顔の半分が、人らしい形を保てていなかった。黒い膿がぼこぼここと泡立ち始め、女の体に広がっていく。それでも、視線を貴樹から離すことはない。まるで確固たる何かに縋っているような必死さだ。

「助けてよ。あなた、そうなんでしょう？ 私達と」

女の上半身を全て覆い尽くした膿が、変形していく。巨大な蛇のよ
うな異形が生え出してきた。赤い目を開き、黒々とした口を開き、産
声を上げる。

そ、彼は疑うという選択肢を取り、偽物の手首に誓約印がないことを発見できた。王の間へ連行される途中、クリムエルヒルトが思念で伝えてきたのだ。

結晶の娘は彼と目が合うと、微笑んできた。背筋がぞわぞわしたので、すぐに視線をそらす。

「これで、話はまとまったようだし。アナタから承諾の一言を聞くのみだ」

(あ？ こいつ馬鹿か？)

初めから、エルドリツチに協力するつもりなどない。

『でもよ、この場は従った方がいいと思うんだが。お前今、カス以下の強さだってわかってんのか？ 死ぬぞマジで。後で裏切ればいいだけの話だろ』

(わかってねえな。こういうのは強気でいいんだよ。あいつはむしろ喜びそうだぜ)

貴樹は話にならないとばかりに、首を振った。

「本物の火守女がどこにいるのかもわからない。そして、自分達の安全が保障されるわけでもない。そんな状況、同盟などという胡散臭い話に乗ると思いますか？ せめて条件として」

「もうよい」

剣が、貴樹とホークウツドの間に突き立った。騎士が一人ホークウツドに近付き、両手を縛っていた金属の糸を外す。そして、無理やり立たされていった。

サリヴァーンは、先ほどから変わらない冷たい眼差しで、貴樹達を見下ろしている。

「余計な言葉など要らぬ。第一に、私はまだこの者達の有用性を信じてはいない。意見できる立場だと考えているならば、それはくだらぬ思い上がりだと断ずる。今、この場で実力を示し、自らを証明してみせよ。迎え入れるべきかは、こちらが一方的に決めることだ」

貴樹は、またやらかしたことを、自覚した。

『これも、お前の想定内か？』

(によ〜ん)

『人生って、簡単に終わるもんだな』

現実逃避をしている場合ではない。試すという流れになるのが、最も恐れていたことだった。にもかかわらず自分から誘導してしまっただのは、間抜けとしか言いようがない。この男が調子に乗るとろくなことにはならない。

「待つてください」

何とか時間を稼ごうと、貴樹は訴えた。

「こちらとしても、自分の力を見せるのはやぶさかではないのですが、悔しいことにこの体の状態では、満足な結果になるとは思えません」
「では、時間をやろう」

法王は周りをぐるりと見回した。

「誰か、この男を回復できる者は？」

クリムエルヒルトが前に出た。そうして彼女によって、貴樹はこの場で奇跡を施されることになった。サリヴァーンの性根から考えれば、猶予をもらえただけでも幸運だろう。しかし、残り火が復活するにはまだ足りない。どうにかして、自身の素の身体能力のみで乗り切る必要があった。

「大変なことになりましたね」

クリムエルヒルトは、うっとりとした彼の体を撫でまわしてから、右腕の再生に取り掛かる。

「貴女も本当に、火守女がどこにいるか知らないんですね？」

「もう、そのことばかり。一度の口吸いだけじゃ、足りないんですか……？」

(げええ)

これ以上余計な会話をするのはやめて、何か方法はないかと模索する。サリヴァーンの意見に反対する者はいない。五本指の奴らは歓迎しているようだし、エンマ達も動き出す気配がない。というより、彼女は他の何かに囚われている様子だった。エルドリッチも、静観するつもりだ。

頼れるとしたら、目の前の女性しかない。

(俺に惚れてるなら、利用できる。へへへへ、ここで顔の良さが救いに

なったわけだ。この女の瞬間移動なら、逃げやすいだろ。あとはひもりんを見つけて)

「駄目ですよ?」

クリムエルヒルトの瞳が、深く沈んだ。治す部位を見るために屈んだ体勢のまま、ぼそぼそと耳に口を当ててくる。

「私は、エルドリツチ様と誓約を交わしているんです。愛しい人の頼みでも、簡単に協力するわけにはいきません」

(俺の考えを)

「いいえ。私にそんな力はありませんよ。大丈夫でしょう。貴方がちゃんと能力を出し切れれば、問題はないはずです」

(それが無理だから、別の方法を考えているんだろがああああ!)

クリムエルヒルトが回復の手を止める。完了したという意味ではなかった。手足が少しも再生していないのにも関わらず、彼女は奇跡の光を消した。かと思えば、再び行使しようとする。それでも、腕の再生が開始されないのを見て、怪訝そうな顔つきになった。

「奇跡が、効きませんね」

「:..何と?」

「正確には、作用する前に弾かれています。このままでは、誰であつても治せません」

彼女は嘘をついているとしか思えなかった。

これを聞いていたサリヴァーンが、二人の法王騎士を見る。彼らはすぐに剣を抜き、貴樹とホークウツドの方へと歩いてきた。

「ならば仕方がない。その状態で戦ってもらおう」

(は? ふざけんじゃねえぞ。殺されるだけに決まってる)

「お待ちください」

クリムエルヒルトが、懐に手をやった。言いだしたのは彼女なのに、止めたのも彼女だ。ちぐはぐな行動の意味を考えていると、こちらに向けられたその顔が歪んだ笑みを作るのに気が付いた。

「まだ試していないことがあります。実は彼を回収しに行く途中、地下牢で見つけたものなのですが」

彼女が取り出したのは、二本の人間の足だった。ふくらはぎが引き

締まり、ほど良く筋肉がついている。明らかに男のものであるそれを、宝石であるかのように優しく床に置いた。貴樹は、悪寒を感じる。どう考えても、自分の足だったからだ。

「私は、すぐにわかりましたよ。触っただけで伝わってくる、芳醇なソウルの形。本当は愛玩用に持つておきたかったのですが、ここで役立つのが最善でしょう。結合は、再生よりも痛いですけど、我慢してくださいね」

クリムエルヒルトは青白い短剣を形作ると、手早く両腿の断面に刃を入れた。激痛で呻く前に、その部分へ両足を押し付ける。あとは結合部分に奇跡を使っただけで、見る見るうちに足が体の一部分として復活していった。流れた血も多くはない。

「どうですか？ 動かしてみてください」

貴樹は言われた通り、まずは足の指先に力を入れた。一瞬、電気が走り抜けたような感覚があった後、ややぎこちなくはあるが、指を動かすことができた。彼女はにっこりと微笑んで、貴樹の肩に腕を回してくる。彼女に引つ張り上げられる形で、貴樹は立った。多少ぐらついたが、彼女の手が離れても、倒れないでいることができた。

「私が、貴方の両足を持っていなかったら、危なかったですね」

貸し一つです、とほとんどキスするような距離で囁き、クリムエルヒルトは背を向けた。

「待て」

さも、彼女が治療を完了したと言わんばかりの態度には納得できていなかった。

「まだ、両腕が、終わっていないような」

「それは、残念でしたね。私は、足しか見つけられなかったのです。これ以上のことはできません」

（この女）

さらに文句を言いかけた所で、サリヴァーンが両手を打ち鳴らした。それは何かの合図だったようで、直後、火刑の魔女が斧槍から炎を出し、貴樹とホークウッド、そして法王騎士二体の周りを囲んだ。円状の戦場ができたことになる。

「どちらか片方の組が死んだら、終わりとする」

(え、え？ もう始まるの？ あっさりすぎない？)

全てが、貴樹の受け入れやすいように進むわけではない。彼は自分を中心に世界が回っていると思っっているが、その考えに周りが合わせにくるはずがないのだ。両腕がないと言っつて、延期させてもらえるとは思えない。

「くそっ」

ホークウッドが、床に突き立つ剣を取り、構えた。隣に立つ貴樹に恨みがましい視線を向けてくる。

「あんたを追いかけていたら、このぎまだ。ちくしょう、死ぬわけにはいかない」

「えつと…」

色々訊きたいことはあるものの、迫る脅威を前には、後回しにすべきことだった。なあなあでごまかせるような勝負ではない。生き残るためには、相手を殺さないといけないが。

「あれらに、勝てますか？」

「知らないな。昔なら、造作もないと答えただろう」

ホークウッドの細かい事情はともかく、しばらくまともに実戦を経験していないことは貴樹にも容易に想像がついた。ゲームでも、祭礼場からほとんど出なかった。

「一体だけなら？」

「そりゃあ、少しはましになるだろうよ。だがな、どちらにしろこれを乗り越えたつて…」

臨戦態勢になっている騎士達を逐一確認しながら、貴樹はぼそぼそと言った。

「聞いてください。僕は確かに、負けて、この人達に捕まりました。でもそれは、力が切れていたからです。復活するまで、あと…」

『一日つてところだ』

「一日、かかります。それまでに生きてさえいれば、こちらの勝ちです。貴方は一体をできる限り早く倒してください。もう一体は僕が対応します」

「本当か？」

ホークウツドの目に少しだけ光が戻った。

「だがな、今、あんたは戦えるのか？」

「任せてください」

貴樹は胸を張って答える。

「一対一なら、いくらでもやりようはあります」

騎士の一人が、接近してくる。そこへホークウツドが向かっていくのを最後に、注意を別の方へと向けた。もう一人は、貴樹へと近づいてくる気配はない。騎士が持っている武器を確認し、彼は首を回した。

（両手を封じられた上で、相手は得物を持っている。まあまあやさされたシチュエーションだな。思い出したくもないが）

『大丈夫なのか？』

（見てろって。残り火の力が強烈過ぎて忘れているかもしれないが、素の俺も相当やるからな。まずはあれだ。初撃をさらりとかわし、足技で相手の関節を締める。あとは鎧の隙間を適当に潰すなり、炎の壁に投げるなりすればいいだろ）

『ふわっふわだな…』

彼には自信があった。ゲームの中とはいえ法王騎士とは何度も戦ってきている。やってきそうな攻撃の種類にも全て見当がついていた。

（いかに、相手の行動を予測できるかだ。極端な話、俺がこうして一歩引いたとする。そうすればまるで図ったかのように奴の剣が目の前を）

法王騎士は滑らかに一歩踏み込んで、イルシールの曲剣を振るった。その刃にこもった冷気が貴樹の頬をかすめ、一瞬のきらめきとなって消えていく。瞬きの後、既に騎士は二撃目の構えに入っている。

火守女の顔が、鮮明に頭の中で浮かんだ。彼女とのあまり多くはない思い出が電光のように駆け巡り、意識するまでもなく後ろへと飛んでいた。

床を転がり、そのままの勢いで立ち上がる。胸に手を当てると、血で濡れていた。頬も、血が流れ落ちる感触がする。浅く、すぐに止血できるような傷だったのは幸いだ。

なぜ、急に愛しい火守女が出てきたのか、何となく、答えはつかめ
た。

(相馬灯か)

『……』

(まっつっつたく、見えなかったんですけど)

23. 貴樹 対 火継ぎ否定派

心臓が爆音をたて、胸を内側から叩いてくる。恐怖で頭がぐちゃぐちゃになりそうなのを、なんとかこらえた。いくら鍛えていようと、ここでは一兵卒にも劣るということが証明されたわけである。

(おかしいだろ。あんな速さで剣を扱えるのかよ。どんな腕力してんだ。雑魚のくせに)

『駄目みたい、ですな』

(いや。こうなったら予定を変えるだけだ。人は、窮地に陥った時こそ、本来の力を発揮するんだ。ギアを上げるぞ)

深呼吸をして、彼は両足に力を入れる。

(どうにかして、ホークウッドになすりつけよう)

法王騎士は自らの手を口の中へと入れた。その妙な行動には憶えがあったために、すぐさま逃げる。騎士から吐き出された紫色の光弾が、貴樹の体を正確に狙ってきた。

(ホーミング性強すぎ。うおおおおおおお避けろオオオオオオ！)

逃げ回れる範囲には限界がある。すぐ横に炎の壁が迫っているのに気がついて、彼はその場にしゃがんだ。光弾の下をくぐり抜けるようにして滑り、なおも追ってくるそれを背にホークウッドの方へと向かう。まさに拮抗した戦いをしている最中だったが、お構いなしに貴樹は突っ込んだ。

同時に、様々なことが起こった。

接近してくることに気が付いた騎士が、意識を彼に向けた直後、そこに隙を見出したホークウッドが刃を首へ刺し込む。倒れ込んできた騎士の体に貴樹がぶつかり、盛大に転んだ。それでも追ってきた光弾が、彼の上に覆いかぶさる騎士の頭に直撃する。鮮血が散り、そのほぼ全てを被ることになった貴樹は、吐きそうに顔を歪ませた。

(俺が浴びていいのは、ひもりんの膜血だけだあああああああ)

死の危機を乗り越え、ハイになって最悪な思考をした彼は、騎士の体を足で押し出し、ホークウッドの手によって助け起こされた。

「助かりました。でもおかげで、上手くいきませんでしたよ」

「どこが？」

適切な指摘をしたホークウツドは、走ってきた最後の騎士と刃を合わせた。

(必殺！)

貴樹は腰に巻かれていた布を外すと、騎士の顔に向かって投げつける。あつという間に斬り裂かれたが、彼は既に次の攻撃へと移っていた。俊敏に身を低くすると、騎士の足を蹴りつける。バランスを崩すまではいかないが、ホークウツドが攻めるきっかけにはなった。剣を両手で持ち、力で押し込むように斬り込んだ。

一方で、再びすつぽんぽんになった貴樹が騎士の背中にローキックを放つ。しかし、蹴った後の反動を殺しそこね、彼は腰をひねりながら奇妙な体勢で倒れた。

(ホアアアアアアアアッ！　　いっだあああああああああああああああ
ああ！　硬すぎだろ)

足を押さえて転げまわっていると、その間にホークウツドが騎士にとどめをさしていた。炎の壁が消え去り、騎士達の死体もソウルとなって消えていく。

酷い戦いだった。

喜んでいるのは、貴樹の下半身に魅入っているクリムエルヒルトだけだ。

(なんとか、乗り切れたか)

などと、彼が考えるのは間違いでしかなかった。

「どうやら、こちらの用意した相手が悪かったようだ。次は、もう少し力の測りやすいものを出す」

サリヴァーンが納得するはずもなく、続行が宣言される。それと同時に、玉座の斜め後ろにある大扉が開かれ、そこから大きな影がのっそりと入ってきた。

「あまり、この場所を荒らされたくはない。早めに決着をつけよ」

それは例えるなら獣としか言いようがなかった。ただし、赤く燃える三対の目や、腹に大きく開いた鋭い牙が噛み合っている裂け目などが、異形であることを示している。何よりも、グンダやボルドに匹敵

する凶体が、ただならぬ迫力を作っていた。

(げええええええええええええええええええええええ！)

本来なら、イルシールへと続く大橋を守っている存在のはずだった。貴樹は初見で、ボコボコにされた覚えがある。つまり、法王騎士よりもはるかに強力な、サリヴァーンの駒だ。

『急に、化け物みたいなやつが出て来たんですけど』

(お、落ち着け。こつちには元不死隊、ホークさんがいるんだぞ)

振り返れば、頼りのホークウッドが再び拘束されている所だった。

「狼血の方の實力は既に知れた。貴様は一人で戦ってもらうぞ」

頭からすつと血が抜けていき、目の前が一瞬白くなった。既に思考は逃げの一手に染まっており、あらゆる可能性を模索して、この場から逃走する糸口を見つけようとしていた。考え続けなければ、正気を保てそうになかった。

(もおおおおおおお、なんでこんなにピンチが続くのおおおお？ おかぢいよおおおおお！ ぼくなにもわるいこととしてないもおおおおおん)

否、もう彼は手遅れだ。全て周りのせいにする駄々っ子のような精神に陥り、ずるずると後ずさを始めた。みつともなく涙を流すことだけは、彼の最後の理性が許さなかった。戦いに臨む男の顔をしながら、内面はぐずぐずである。

いつまでたっても戦い始めない様子に、エルドリッチがくすくすと笑った。

「そんなに、ワタシ達の前で力を見せたくないのかい？ なかなか上手くないものだねえ。じゃあ、アナタのやる気がちゃんと出るように、助けてあげよう」

エルドリッチが手を床に当てる。そこから円状に黒い靄が広がっていた。そして、何かがそこから引きずり出される。人食いは軽々とその体を持ち上げると、軽く貴樹の前まで放り投げてきた。

貴樹は、少しの間、呼吸を忘れる。先ほどまでの恐怖や狼狽は、全て消え去っていた。一切波が立つことのない、静かな心の平穏が訪れているのが、自分でも不思議だった。

火守女は床に落ちても、身動き一つしない。ただ、生きていることには違いなかった。死んでいるのなら、エルドリツチが今、ここで彼女を出す意味がないからだ。腕に、火守女の灰の誓約主である証も刻まれている。本物だった。

「食らえ」

サリヴァーンが命じると、獣は動き出した。貴樹へ、ではない。その六眼の先には火守女いて、獲物を前にこらえきれなかったのか、涎をこぼした。腹に付いている口も、ざわりと牙を揺らす。

『おい、タカキ』

止める声が脳内に響いてきた時には、彼は既に走っていた。獣も唸り声を上げて駆けだす。

わずかな差だった。

結合されたばかりの足を動かしての結果がそれなら、褒められるべきだった。確実に、彼は限界以上の動きをして、火守女へ向かって跳び込んだ。彼女を背中へかばい、迫ってくる牙に右肩を差し出す形になった。

食い込んだ直後には、肉が引きちぎられるのを感じた。抑えきれない苦痛の叫びが、理性も何もかも振り切って口から飛び出していく。見るな、見るなと、歯を強く食いしばり何度も言い聞かせた。右半身の感覚がない。どんな惨状か見てしまったら、絶対に、気を失ってしまう。

横に傾いた視界の中で、獣が咀嚼を終え、今度は副菜と言わんばかりに火守女へと口を開いた。止められない。意識を保つだけで精一杯だ。

まさに火守女が食べられようとした所で、獣が突然大きく吠えた。無理もない。片方の三眼が斬り裂かれたのだ。上から降ってきた男の剣によつて。

「ゆつくり話し合う必要があるようですね。私は、このようなことは何も聞いていませんでした」

ロスリックの祭議長エンマが、サリヴァーンとエルドリツチを睨みつけていた。

(助け、られたのか)

瞬く間に獣の顎を裂き、喉から胴体にかけて多数の切り傷を与えていく。獣は口から電撃のようなものを吐きかけたが、それも男によって中断させられる。素晴らしい双剣使いだった。彼が、こちらを見下ろしてくる光景を最後に、貴樹は目を閉じた。意識が沈んでいく。その感触が本当に久しぶりな気がして、不思議と、痛みが和らいでいった。

誰かの驚愕するような声がする、貴樹は目を開けた。

「これは……」

クリムエルヒルトの頭が視界に映った。彼女は彼の体を呆然と見ていた。

貴樹も自らの目で体の状態を確認する。サリヴァーンの獣に食われたはずの右半身が、元通りになっていた。

「貴方が？」

尋ねても、彼女はしばらく答えなかった。何かに気を取られていたようで、遅れて首を振る。

「治そうとしても、奇跡が効かないので。別の方法を考えていた時に、勝手に再生が始まりました」

「もう、嘘はつかなくていいですよ」

彼はゆっくりと半身を起こす。最初に寝かされていた部屋と同じ場所のようだった。

「僕は以前、腕の骨を折られたことがありました。その時は奇跡で治った。正直に、答えてください。僕を追い詰めることで、貴方に何の得があるんですか？」

彼女のはっとした顔が見られると思った。自信満々に矛盾を突いたつもりだったが、クリムエルヒルトは困惑したままだ。

「すみません。本当に効かないんです。私の未熟さのせいなのか」

「まだ、とぼけるんですか」

『いや、タカキ』

(あ?)

『前によ、火守女がお前の器を見ようとした時、事故っただろ？ その時と同じなんだよ。こいつが奇跡を使おうとすると、同じ感覚がする。勝手に拒絶しちまうんだ』

(つまり?)

『俺らが悪い』

(お前が、だろ)

全く見当違いな疑いをしたことに、胸をかきむしりたくなるような恥辱を覚える。クリムエルヒルトを一瞥して、咳払いをした後、何でもなかったように続ける。

「火守女は、今どこにいますか」

これもまた、彼女は答えづらそうにしていた。

「玉座の間です。……話し合いは続いています。貴方が治ったら、連れてくるように言われました」

「そうですか」

半身が再生した理由は何となくわかる。これで、目の前の魔女に自分がどれくらい眠っていたのか尋ねる必要はなくなった。行動は、いつでも起こせる。だが貴樹は、今までとこれからのことを考え、臨界点を超えそうになった怒りを冷やすことに努めた。

様子を伺ってきているクリムエルヒルトに向かって、彼は言う。

「協力してほしいことがあるんですが。お願いできますか?」

「……無理です。私は、エルドリツチ様に」

「忠誠を誓っている、か?」

貴樹は近付くと、その分だけ彼女は離れようとする。壁に当たるまで、その動きは続いた。それ以上後ろへ下がれないとわかった彼女は、おずおずと彼を見上げた。

「わかっているんですよね? 今、どういう状況なのか。正直、こうして話してる余裕もないんですよ。クリム、黙って従ってください。悪いようにはしませんから」

名前を呼んだ時の、彼女の瞳の光を見て、貴樹はこの話が片付いたことを確信した。

両足を拘束され、床に投げ出された貴樹に、冷たい視線が集まる。「貴様の使い道は、それほど多くはない」

サリヴァーンは、彼を何の価値もないゴミのように見下ろしている。

「中身のソウルだけ取り出せばいいという意見も出ている。私も概ね賛成だ。貴様自身は、何ら特別性を持たない。しかるべき作業が完了したのちは、黒教会にでもくれてやるとしよう」

「法王よ、その男の話などどうでもいいのです」

エンマが口を挟む。その視線は貴樹の横で無造作に転がされている火守女に向かっている。

貴樹は、必死に、冷静になれと、自分に言い聞かせていた。

火守女の顔も、肩も胸も、体の全てが、深淵の膿に浸食されていた。まるで彼女の生気を吸い取るかのように、膿は嬉々として蠢いている。時折全身が痙攣し、辛うじて見える薄い唇から、苦しそうな吐息が漏れていた。

やはり、無事なんて言葉は嘘だった。彼女は、最悪な方法で汚されていた。

「エルドリッチ、あれの処分は責任を持って行うと言ったはずではありませんか。貴方に捧げる選択は間違っていました。殺すこともなく、両の目を奪うだけで、あまつさえ祭祀場に奪われた揚句、火守女になっただけとは」

サリヴァーンが、貴樹に向ける目とは、また次元が異なっていた。本当に嫌そうに、消えて無くなってしまうばいという思いが、真摯に、火守女へと向けられている。それはエンマだけではない。その横にいる護衛の男や、他全ての者達が、彼女を嫌悪しているようだった。「あれは私達が持ち帰ります。初めからこうしておけばよかったのです。生まれた瞬間に、殺してさえいれば、こんな煩わしいことにはならなかった」

「それは、待っていたらこう」

五本指の代表の一人である、レオナールが初めて発言をした。

「それは、我々が処分する。主も望んでいることだ。構わないだろう

？ どちらにせよ、汚らわしい存在が消えることには変わりない」
サリヴァーンは、くだらないとばかりに目をつぶった。

「私は、天使が視界からいなくなってくれさえすれば、それでよい。争うのなら、今ここで共に手をかければいいのではないか？」

「まあまあ、諸君。落ち着きなよ」

エルドリツチは、不気味な笑みを、貴樹へと向ける。

「さて、状況は理解できたかい？ 大丈夫、ワタシはアナタの力を信じているよ。その身で直接感じたからね。ただ、どうやらワタシ達と協力するのは気が進まないようだから、悲しいよ。本当さ。いいかい、その子は生死の狭間にいる。人間性の膿の性質は、ワタシが一番理解している。取り除いてあげることできるかもしれない。わかるね？」

交換条件を提示されていると、焼けるような思考の中で理解した。

貴樹は、火守女を誰が処分するか、互いに譲らない者達を一人一人観察した。結局、今までの自分の考えは正しくはなかったのだと、反省した。

彼は自分で、スイッチが切り替わるのを感じる。そうすると、湧いてきた激情が嘘のように引いていった。

「結論を、アナタの言葉で聞かせてほしいねえ」

エルドリツチに向かって、平然とした表情を作る余裕すらあった。首を傾げ、少し考える間を置いてから、頷いた。行った自身の決断が、正しいという確信を得る。ぶぎ、と肩の関節をほぐした。

始めよう。

「エルドリツチ」

ほとんど欠損して、痛々しい傷跡ばかり残る腕の根元部分を、人食いへと向ける。

「サリヴァーン」

法王へ。

「エンマ」

祭議長へ。

「ゴットヒルト」

名前を呼ばれた双剣使いの男が、身じろぎする。

「レオナルド、ハイゼル」

五本指へ。

「その他の、有象無象ども」

誰かの、後ろ盾を得ようなどと、考えること自体が間違いだった。祭祀場でも、ここでも火守女が疎まれているのは変わらない。

(どいつもこいつも、本当に反吐が出る)

貴樹は、初めから緩められていた拘束を外し、立ち上がった。目の前の者達を睥睨し、別れを惜しむかのようにその姿を心に焼き付けてから、

肉食獣のような表情を浮かべた。

「お前達全員、ここで死ね」

殺意へと最初に対応したのは、入口の方に控えていた騎士達だった。剣に冷気を纏わせ、貴樹の首を斬り飛ばそうとしてくる。前に彼と相對していた騎士の一撃よりも数段、洗練されていて、彼の様子が今までと違うことを本能的に理解しているようだった。

ぬるりと、音が響いてきそうな動きで、彼は騎士の刃を何でもない事のように避ける。流れる動作で、首の方へ口を近づけると、瞬時に食いちぎった。

(くそまです)

覆っていた装甲まで噛み砕き、既に絶命している騎士の体を蹴り上げる。無残な肢体は天井近くまで舞い上がり、サリヴァーン達の目の前に落下した。それを合図にして、エルドリッチが、溜息をつく。

「火守女の命が、惜しくないのかい？」

「ん？ 大事ですよ。でもお前も殺す」

貴樹の額に青筋が浮かんでいる。

「ふふ……」

壁際にまで後退したエルドリッチに比べ、他はあまり深刻には捉えていないようだった。サリヴァーンは小馬鹿にした様子で、頬杖を突く。

「力をさらけ出す気になったは結構だ。だが、そんな体の状態で何が

できる？ 勝てるだけでも思っているのか」

「殺すと、言ったんですよ」

貴樹は次の瞬間、横に飛んだ。彼のいた場所から、苛烈な炎が噴き上がる。回避した彼への追撃として、火刑の魔女は斧槍から炎を放った。それに正面から突っ込んで、彼は灰になることもなく相手の懐に飛び込んだ。

頭突きで胸の装甲を破壊すると、腰を回転させてローキックを放つ。足が火刑の魔女の体を容赦なく砕いて行くと同時に、横の壁へと吹き飛ばした。

(どんどんやってくぞく)

『タカキ、お前ちゃんと冷静に』

心配する声をよそに、彼はエンマの方へと体を向けた。

「最初に死ぬのは、貴方です」

期待していた分、裏切られた思いも強くなるというわけだ。てつきり火守女を擁護するかと思っていた。だがロスリック側はそういう立場にいるつもりはないらしい。しかも、彼女をエルドリッチへ引き渡したのは彼らなのだ。貴樹にとっては、唾棄すべき不考者達だった。

エンマとの間に、護衛の男が立ちふさがる。

(ゴットヒルトおくく、てめえも同罪だからなあ)

王に仕える特別な狩人である、黒い手。城から遠く離れた所まで、しかも祭議長に付いてくるのは妙だが、とりあえず殺すつもりなので後で考えることにする。

「見損ないましたよ。彼女は、貴方達が仕えるべき王家の一員ではないんですか」

ゴットヒルトが、宙を舞う。貴樹は、相手の刃が振るわれるのに合わせて、中段の蹴りを入れる。相手は器用に片方の剣で受け流すと、もう片方の剣を貴樹の首へ刺し込もうとした。

が、濃い死の気配を感じ取ったのか、ゴットヒルトは身を翻し、貴樹と距離を取った。限りなく正しい判断だったと言える。貴樹はカウンターで相手の胴体を破壊しようとしていたからだ。

「祭議長様。お下がりに」

初めて聞くその声は、ただならぬ緊張を含んでいた。一つの攻防で貴樹の力量を把握したらしい。それもまた、優秀な戦い手である証だった。

貴樹は数歩進んだ所で、足を止めた。

「そういえば」

ゴットヒルトはいつでも攻撃に移れるような体勢に入っている。少しでも隙を見せれば、即座に距離を詰めてくるだろう。彼我の実力差など、考えてはいない様子だった。エンマを守るという一点に集中した男から、意識をそらすなど失礼に当たるだろうか。

「黒い手は、全部で三人いましたよね」

口を開け、頭を振る。そんな妙な動作をした後、彼は何かを啜っていた。青白い、ソウルの矢だ。何もない所から突然現れた魔術を、正確に防いでいた。

落し物を拾うような、何気ない動作でしゃがむ。彼の頭すれすれの所を、実体化した斧が轟音をあげて通り過ぎていく。

(うくむ、便利だな)

不可視化を解き、すぐに離れようとした斧を持つ戦士に、霞むような速度で足を食い込ませる。蹴りの衝撃で、腹に穴が空き、内臓が背中側から飛び散っていく。倒れこんでいく戦士の首を片足で抉り取った。

死体を盾にして、姿を現したもう一人の黒い手の魔術を受けていく。細かい結晶の弾が同時に何個も放たれ、常人の体であれば肉片になっってしまうような猛攻の中、前へと進む。ぼろぼろになった死体を押し出すと、それを避けようとした黒い手の頭上へ飛び、頭へかじりついた。一噛みで半分の脳を潰すと、膝でさらに顔を破壊し、横へと打ち捨てた。

貴樹は口を押さえ、地面に顔を向ける。

(おえええええええ、吐くわこんなんもん。あ——、うがいしてえ)

えずきながらも、玉座から姿を消した存在のことも把握していた。足で、迫ってくる炎の刃を受け止める。拮抗した中、サリヴァーンは

忌々しげに言った。

「まるで、獣のようだな」

貴樹は唇にこびりついた血を、肩で拭う。

「獣？　そうですね、僕は愛の獣……」

自己陶酔でびんびんになっていた。どこがとは言わない。

『アホか……いつ』

空気の震えを、唐突に感じた。直後、まばゆいばかりの光を放ちながら、ソウルの奔流が彼を滅しようとする瞬間に許されない速度で迫る。同時に、サリヴァーンが魔術のソウルを纏った、もう一本の剣をきらめかせる。

床が割れんばかりの勢いで足を踏み込み、彼は後方へ宙返りをした。奔流は避けることができたが、サリヴァーンが抜け目なく追撃してくる。炎の剣の方で胸を斬り裂いたが、その硬い感触に違和感を覚えたのか、二撃目は来ない。

貴樹は危なげもなく着地すると、背後からの攻撃を肩で止めた。驚くべきことに、それはただのつるはしにしかに見えなかった。

「わかりやすい魔術ですね、ヘイゼル」

茸の被り物から覗く目は、必殺の武器が肌に傷すらつけられなかったことに対する、困惑で固まっていた。彼女は左手を赤く発光させ貴樹の胸に突っ込もうとしてくる。浄化の手は、しかし、新たに割り込んできた仮面の男に掴まれた。

そのまま、ヘイゼルとレオナールは貴樹の攻撃が届かない所まで後退する。

「れお……」

「無駄だ。効きはしまい。この男は指全員でかからねば危ない。撤退するぞ」

「そんな許可、出してません」

全力を持って、貴樹は床を蹴っていた。とっさに反応したレオナールをタックルで吹き飛ばし、何重ものソウルの盾を作り出そうとしていたヘイゼルの頭を、踵落として粉碎した。

何が起きたのか理解する暇もなく壁にめり込んでいたレオナール

に歩いていき、手早くとどめを刺した。

首を捻り、息を長く吐きだした。

周りを見てみれば、多くの法王騎士や、火刑の魔女、戦闘奴隷が構えていた。

(温まってきた。ぬくぬく)

貴樹自身は、まだ気が付いていないことだった。祭祀場の者達と戦った時よりも、はるかに動きが洗練されていることに。殺してもいい、という感情は彼に大きな影響を与えるようだった。攻防の中で余計な思考が邪魔をすることもなく、絶妙な調律を保っている。自分自身を俯瞰するような映像が、脳裏にずっと浮かんでいる。

注意を玉座の方へと戻してみれば、エンマがゴットヒルトに連れられて、裏口へ消えていく所だった。残っているのは、エルドリッチと、サリヴァーン。二体は既に、戦闘態勢に入っている。

「この男は、処分した方がいい。持て余す」

「まあ、逃げるのは困難だろうねえ」

エルドリッチは弓を取りだした。同時に五本つがえ、先端を貴樹の方へと向ける。サリヴァーンも、分身を作り出した。

「皆殺しですよ」

(なんてな。頃合いだ)

貴樹は、足を振り上げた。彼らの方へと鋭い殺意の眼差しを向けながら、床を思いつき蹴りつける。ひびのはいった床が、崩壊するのはあつという間だった。

開いた穴から、火守女が転がり落ちようとしているのを、その服の裾を啜えて捕まえる。共に下へと落ちて行きながら、彼は大きく息を吸い込んだ。

「クリーム」

一階の広間では、いつの間にか玉座の間から姿を消していたクリームエルヒルトが、未だ

状況をわかっていない様子のホークウッドを連れて、待ち構えていた。貴樹は火守女を口にぶら下げて着地し、魔女の体にくっつく。

「やれ」

彼女は諦めたように微笑み、奇跡を発動させる。
その瞬間、四人の姿が、法王の城から消えた。

「どういう、ことなんだ」

ホークウツドが、身震いしながら言った。どうやら貴樹以外は、皆同じことを思っているようである。

彼らは、大きな橋の前に出現した。彼にも見覚えのある、カーサスの地下墓へと続く道だ。つまり、ここはイルシールの入り口であり、今頃貴樹達を見失った兵たちが動き始めているだろう。

クリムエルヒルトが、その場にうずくまり、呻いた。顔に膿が浸食しようとしているのを、ギリギリで押さええている。深呼吸しながら胸に手を当てていると、徐々にそれは引いていった。

「大丈夫ですか？」

貴樹は火守女を慎重に寝かせて、見もせずに行った。

「無理をした、結果ですもの。ただ、この行為が意味のあるものかどうかについては、正直疑問を感じます。結局、貴方の一番大事なものは助かっていない」

ホークウツドも、火守女の方を見やる。それから、唾を飲み込んだ。

「生きているのか、それは」

さらに続けようとして、口をつぐむ。火守女に屈みこんでいる貴樹の後ろ姿を、他の二人はただ眺めることしかできなかった。

彼がエルドリッチ達とともに相手をする選択を取らなかったのは、奇跡に近かった。火守女と出会ったばかりの貴樹であったならば、完全に我を忘れていたに違いない。

苦しそうに上下する胸に、手をかざす。膿が絡みついてこようとするが、彼の体内に侵入する術は持っていなかった。

「この膿は、精神に作用する可能性がありますか？」

クリムエルヒルトが、自分に聞かれているのだと理解するような間を開けてから、頷いた。

「受け入れるには、かなりの苦痛が伴います。これは、経験者にしかわ

からないことですが、声を、聞いてしまったら、影響はあるでしょう」
彼女は淡々と続ける。火守女へと顔を向け、目を細める。

「エルドリツチ様に治してもらうしか方法はありません。やはり、今ここでこうしているのは、賢い選択肢ではないはずです。貴方は、この子のことよりも、自分の感情を優先したんですか。それとも」
「黙れよ」

その言葉に、刹那であつても酷く濃密な憤怒が現れる。一步下がったクリムエルヒルトに向かって、貴樹は横顔で笑いかけた。

「すみません。今から作業をするので、静かにしてくれると助かります」

「何を……」

魔女は息を呑んだ。貴樹は、自分から、膿の中へ両手を突っ込んでいく。その、道連れにもなりかねない行為の中でも、彼には躊躇いはほとんどなかった。当然だ。助きたい人を助けるのに、何の障害があるだろう。

変化は、すぐに起きた。膿が悶え苦しむように震えたかと思えば、全体から光が漏れ始め、発火する。輝く炎は順当に広がっていき、彼女に食らいつく穢れの全てを、灰にしていった。

『上手くいって良かった』

（残り火は、本当に万能だ）

繊細な宝石を扱うように、灰を払っていくと、色素の薄い肌が指先に当たった、彼は何度か火守女の頬を感動した様子で揉むと、その胸に耳をつけた。

鼓動がする。落ち着くりズムだ。彼は、これほどまでに美しい音楽は聞いたことがないと、強く思った。この女性の子宮に住みたかった、と気持ちの悪い感想が芽生える。

そして命を確認した後も、なぜか、顔をくつつけ続けた。
クリムエルヒルトとホークウッドは静かに目を見合わせた。

貴樹は頭を振って両方の乳を交互に触れてみたり、鼻を密着させて、味わうように間の匂いを嗅いだりしていた。灰の臭いしかしないが、想像力で補い、フローラルな香りがしていると自分自身を錯覚さ

せる。

「あの、ちよつと……」

次第に、物足りなくなってきた。その原因ははっきりしている。(なんだこのぬのは。じゃまだな。やぶつちやおうかな。あ——、あ——) すいたい。みるくほちいよおお、いや、しようきになれ。これはただのかくにんなんだ。おれはひもりんがしたぎをつけているのか、かくにんするぎむがある。あくくくくやわやわだあく

火守女の黒衣の裾に食いつく寸前で、ホークウッドに引つ張り上げられた。抵抗することは簡単なのだが、今は全身の力が抜けてしまっている。乳飲み子へと退化しかけている貴樹を、二人は無表情で見つめていた。

「いいですか？ 私の驚きを台無しにしないでください」

「う——、おっぱいは？ おっぱいどこお——」

「……ほら、ここにありますよ」

「ちよつと垂れてるからやだもーん」

クリムエルヒルトは、ソウルの結晶槍を作り出すと、貴樹の頬にぶち当たった。常人ならば頭が丸ごと吹き飛んでいたが、もちろん彼には傷一つつかない。涎をすすると、何度も瞬きをし、我に返ったように首を振った。

「追っ手が気になります。早くこの国から出ましょう」

引き締まった男前の顔で言う。

向けられる冷たい視線が全く変わっていないのを受け、貴樹は咳払いをした。本当に帰って来られなくなる所だった。今度から彼女の体に触れる時は、より注意しなければならぬ。というか、もしあんなことやそんなことになったら、自分は死ぬのではないだろうか。将来にやや、危機感を覚える。

「では、ここでお別れですね」

魔女がすつと立ち上がる。貴樹の不思議そうな顔に向かって、肩をすくめてみせた。

「守り手である私は、本来の仕事に戻らなければいけません。貴方に協力したことで、多少立場は悪くなりそうですが、別に後悔はありません。

せんから」

踵を返そうとした彼女は、その途中で動きを止める。その目は静かに、身を起こした貴樹へと向けられていた。

「どうやら、双方で認識にすれ違いがあるようですね」

残り火の譲渡という、重大な秘密を知られた以上、彼にはクリムエルヒルトを帰すつもりなど、毛頭なかった。

彼女にもそれが理解できたようで、先ほどよりも一回り以上大きな、結晶槍を出現させる。

「私を、殺すんですか？」

「殺しても死なないでしょう。貴方達は」

「他にもいくらでもやりようはありますもんね。拘束、洗脳。あるいは死なないぎりぎりまで体の機能を破壊する」

「まあ、似たようなものだ」

「残念ながら、今は愛しい貴方であっても、束縛されるつもりはないので。こちらにも抵抗させていただきます。上手く殺してください」

「そう、慌てないでください」

接近してくる彼に、槍を放てなかったのは、その行為に何ら害意が伝わってこなかったからだろう。あるいは、わかつてはいても歴然とした力量差の中で動けなかったのか。

両腕がなかったので、彼女の体に寄りかかるようなハグになってしまった。

貴樹の体から、熱が、クリムエルヒルトへと移動する。彼女は目を見開き、己の体から、何かが消えていく様子を見ていた。

「あ、あ」

初めて、その余裕ある態度が崩れた。思わず、と言った形で漏れた呟きは、素の彼女を示しているような気がした。

(無理をしている奴を見分けるのは、簡単だな)

口をぱくぱくと何度も開け閉めをしてから、彼女は急に自分のローブを脱ぎ捨てた。ホークウッドがぶつぶつ文句を言いながら背中を向けたが、それを行った張本人として、貴樹はじっとその様を観察した。

ちょうど、彼女の胸から大腿部にかけて、黒い膿が現れた所だった。しかしそれは火守女の時と同じように苦しんでいるようで、徐々に消滅していく。正真正銘綺麗な体になった彼女は、何度も貴樹と自分の腹のあたりで視線を往復させた。

気真面目な者が、理解を超える事態に遭ってついていけない、というような顔だった。彼女は、おそらく、丁寧な言葉で話している時が本来の性格なのだと思う。

たつぷりと間を置いてから、貴樹は何でもない事のように話した。「これで、戻る理由はなくなつた。そうですね？ 神食らいの守り手から解放された貴方は、どこへでも行く自由がある。ですが、それを僕は許さない。道は、三つあります。あの、人食いのカマ野郎の所へ戻り、失った誓約を結び直してもらうか、ここで、新しい誓約を結ぶか。あるいは、もう不死ではなくなつたその体を完全に滅ぼされるか。さっさと選んでください」

「なぜ……、どうして私を？」

(え?)

彼女は、声もあげずに泣いていた。妖艶な魔女の雰囲気は消え去り、今にも崩れ落ちそうな赤毛の女性がそこにいた。

(ん?) 泣くほどのなの? え、そこまで?)

貴樹は後に、この選択をそこそこ後悔することになる。認識が甘かったのだ。彼のした行いがどれほど重い意味を持つかを。それによつて彼女がどれほどの思いを抱くかを。

「貴方は、どこまで私を……」

(まずい。まだわからんが、取り返しをつかないことをした気がする)
『あーあ』
(と、とにかく、フォローしなければ)

クリムエルヒルトのためにやった行いではないと、訂正しようとした、その時だった。

橋の中央から、巨大な生物が出現する。サリヴァーンの獣だ。貴樹の半身を食った個体であるかどうかは定かではないが、初めから本気のように、口の端に電気がほどばしている。イルシールの最初の守

護者であり、彼らにとっては最後の関門だった。

(ち、さつさと)

貴樹が動く前に、自失していた魔女の姿がかき消えた。獣の上空に出現した彼女は、相手の頭蓋よりも大きな光球を形作り、そこから同時に何十本もの光の雨を降らした。獣の全身が穴だらけになり、続く攻撃で見る見るうちに細かい肉片へと変わっていった。

「早く逃げましょう」

彼女は目元をぬぐった後、振り返りもせず走り出した。何となくうやむやになった流れに内心ほっとして、貴樹は火守女を背負ってその後についていった。

長い橋を渡りきった後は、しばらく崖沿いの道が続いた。横目に、イルシールの荘厳な街並みを通り過ぎていく。火守女と一緒にこの景色を共有できないのが残念だった。彼女は生きてはいるが、いつ覚めるともわからない眠りにについている。

やがて枯れ枝ばかりの森に入ると、イルシールの影も形もなくなった。

全員が、足を止める。国からここまで離れてしまえば、追っ手の心配はなかった。サリヴァーンの結界のおかげだ。一度出てしまえば、再び入国するためには法王のお墨付が必要となる。大量の戦力をそんな面倒な状態にするのは悪手だ。それに、数を絞って送り込んで、貴樹の力で粉碎されることがわかりきっている。

肉体的な疲れはないが、ずっと気の抜ける瞬間がなかったことを思い返し、小休止くらいなら取ってもいい気分になった。

「それで」

気がつけば、クリムエルヒルトがこちらに近づいてきていた。

「貴方と、誓約を結べばいいんですか？」

「あ、いや。違います。僕は誓約主じゃありません。彼女とお願ひします」

言われて数瞬の間固まった後、クリムエルヒルトは寝ている火守女に向かって膝をついた。その顔は、何か含みのある様子で、黒衣を見ている。

「彼女に、忠誠を誓えと？」

「嫌なら、それでも」

「誓約名は？」

「はい？」

ほとんど囁くような声音で、少し聞き取りづらかった。

「名は、まだ無いんですか？」

「ありますよ」

貴樹は胸を張って、誓約名を言った。自分でつけたものだから、その愛着も格別だ。その一方で、目の前の魔女に対して、ある疑いが首をもたげていた。

火守女の灰。

その言葉を聞いた彼女は、一瞬だけ、恐怖と憎悪が混じりあったような歪んだ顔をした。それはすぐに残滓すらなく消えていき、貴樹の目を見てきた。

「なぜ、その名に？」

「この人の、この人だけの灰でありたいと思ったからです」

「矛盾してますよ」

今度は微笑んでいた。

「火守女とは、個人を指す言葉ではありません。ただの役割上の呼称です」

「知っています。そうですね、この名を考えた時は、さつき言った思いしかなかったのですが、今は違います。彼女と同じ、火守女であるだけで、生きる価値はある。僕は愛する人と同じ苦しみを味わっている人々も、救いたいと思つています。この誓約名に恥じぬように」

彼女はしばらく、貴樹と目を合わせていた。純粹にわからない、という表情をしていた。何かを見極めるつもりだったのに、余計混乱さを増した、と言いたい様子だ。持て余した感情の行き場を探すように、彼から顔をそらした。

「誓約。火守女の灰。私はその一員として、誓約主を、そして旦那様をあらゆる脅威から守り、生涯仕えることをここに誓います」

(あ?)

彼女の手から光が飛び、火守女の手刻まれる。誓約が結ばれた事の、証明だった。

「これで、満足ですか？」

クリムエルヒルトは挑むように睨んできた。子供が自分の悪戯が成功した時と同じ笑みを浮かべている。

「旦那、とは」

「だって、私まだ旦那様の名前を知らないんですもの」

「あー、貴樹と言います」

「でも呼び方は変えません」

どこか、憑き物の落ちた様子で、貴樹と向かい合う。彼の両肩に手を置き、耳元へと口を近づけた。

「貴方を、独り占めしたくなりました。邪魔な相棒さんはいつか消してあげますね」

『ひいっ』

ノミに向かって死の宣告をしてから、彼女は離れた。浅く雪が降り積もっている倒木に腰かけると、炎で体を温め始めた。途中でその範囲を広げ、火守女にも届くようにする。

『こいつに、貴重な残り火を渡してよかったのか。ヤバい奴でしかないんだけど』

(消えるのは俺じゃないし。他人事なんで)

『おれが消えたら力もなくなるって、わかってる？ ねえ、教えたよな。頭どうなってるの』

貴樹の立てた計画は破綻することが多々ある。彼はいつも自分のことを、冷静であらゆる状況に臨機応変に対応できると、想定しているからだ。過剰評価と言わざるおえない。だが、駄目になったらなつたで、次への切り替えも早かった。

後ろ盾を得られないならば、自分の勢力を広げていけばいいのだ。火守女の灰のメンバーはさっそく一人増えた所である。この調子で、既存の勢力にも負けないような数を従えていけばいい。その実行における細かいあれこれは、後の自分に任せることにした。こういう所が、彼のいい加減さを物語っている。

「これから、どうしますか？」

そこだ。クリムエルヒルトの訊く通り、彼は久し振りに自分の行動を自分で決める状況にある。道はいくつもあるが、どれを選ぶかは悩みどころではあった。

(いや、そういえば)

貴樹は、まだわかっていないことがあるのに気がついた。

ずっと黙っていたホークウッドへと、向き直る。

24. 使命を遂げる

「どうして、ホークさんも捕まっていたんですか？　僕が逃げた後、祭祀場に戻ってるそばかり」

ようやく話が回ってきたのを、うんざりした顔で受け止めた。

「俺は、戦いのあと、あんたを尾けていたんだ。そうしたら、そちらの魔女に見つかって法王の城まで攫われた」

クリムエルヒルトを見ると、舌の先を出して、片目をつぶってきた。鳥肌が立ちそうになった。

「祭祀場に対する手が増えるなら、こんなものでも貴重だと思ったんですよ。まだあの時は、人食いの忠実な配下でしたから」

「言い方に気をつけろよ、結晶」

「貴方こそ今度魔女呼ばわりしたら、八つ裂きにするわよ。落ちこぼれさん」

「ぐ…」

すぐに負けそうになっているのを見て、ホークウッドは尻に敷かれらるタイプだと直感した。その残念さも見ていて何だか安心する。かなりゲームとは様相が変わって来てしまっている中、貴樹にとっては癒される光景だった。

「では、なぜ、僕を追いかけていたんですか？　祭祀場から離反するも同然だったのでは」

少しの間、ホークウッドは黙り込んだ。そこには、衝動的な行動、では済まされないような、深い逡巡がある。

「あんたが、俺と同じだと思ったからだ」

「どういうことですか？」

貴樹は何となく、この先の行動が、続く言葉によって定められる気がした。

「あの狼、シフィオールスを殺すのに協力してほしい」

おぼろげになりつつある記憶を、何とかさすくい上げる。最近は、様々なことが起こりすぎて、大して興味もない存在のことなど頭に留

める余裕がなかったからだ。日本でも人の名前と顔を覚えるのに苦労したが、そこは外面の良さで乗り切っていた。

「狼血の騎士の、誓約主でしたか？」

獣の癖に月光の大剣を振り回していた。貴樹からすれば少しでも脅威ではなかったが。

「ああ、そうだ」

「あれを殺すことで、何の意味が？」

ホークウツドはややこしい説明の組み立てをするかのようになり、視線を宙に泳がせた。

「狼血の騎士なんて大層な名称は後付けだ。元は、深淵の監視者と言った方が正しい」

「はい」

先を促す。

「昔、俺はその一員だったことがある。恐れ多いことに、隊長を務めていた。当時は今とは違い、深淵の侵攻を見張り、表へと這い出てきた欠片を駆除するのが役目だった」

(ほう)

ホークウツドが監視者だったことは知っている。しかし、細かい所は明示されていなかった。プレイヤーの誰も知らないような情報が明かされていくのに、貴樹の興奮は静かに高まった。

「だがある時、何百代目かの薪の王の力が弱まり、火継ぎを行う必要が出てきた。そんな時、選ばれたのが、神代の巨狼から続く血脈だ」

彼の顔が苦い皮肉に染まる。

「監視隊自体が王の器として認められたわけじゃない。だが、俺達は身に余る光栄を前にして、余計な思いなど一切抱かずに、歓喜したのさ。たとえ、その体の中に流れる血にのみ価値があると言われたとしても、救世の大役を断る理由なんてなかった。いや、中には深淵の監視を投げ出すことに、不安や不満を覚える者もいただろうが」

では。

思わず手が震えそうになったが、貴樹は聞くことだけに集中した。つまり、目の前の、二トだなんだと馬鹿にされてきたキャラクター

が、かつて薪の王だったということになる。非常に面白い展開だ。適度に予想を裏切ってくれる。

「つまり貴方は、蘇ったんですね」

理解されていると思っていなかったのか、ホークウッドは驚いた表情をした後、頷いた。ロスリックが火継ぎを拒絶したことにより、非常処置として蘇った薪の王達。その中でも集団で一個の薪を担っている監視者達は、異質だと言えるだろう。

彼はその時のことを思い返すように目をつぶった。眉間に深い皺が寄り、いつもの卑屈そうな雰囲気は消え失せ、積み上がった時間の重みが相応にのしかかっている。

「俺が、何を思ったか、わかるか？」

消えない恐怖で語尾が震えている。

「薪として捧げられる直前までとは、真逆のことだ。火継ぎを、そしてそれを世界のための尊い行為だと最初に考えた奴は、深淵の化物にも劣る畜生だと。…あんな、あんなに、苦しいとは思わなかった。死なないんだ。生身を燃やされる苦しみがずっと続く」

その顔は蒼白になり、絶望を思い出さくなくとばかりに頭を抱える。火継ぎは紛れもなく人柱だ。王の器たる者達を犠牲にして、それ以外が延命されていく。

「だがな、俺達はそれでも耐えることができていた。使命だからだ。自分達が苦しむ理由が確固たるものならば、辛うじて納得はできる。そしてそれさえも欺瞞だとわかった時、俺は、俺達は神とやりに失望したんだ」

延命でしかないのだ。

実際、主人公が全ての薪を継いで、灰に課せられた使命を全うするエンディングでは、世界の光とも言える始まりの火は、グウインが見出した時よりもはるかに弱々しくなっていたという。ホークウッド達も、火継ぎがもはやわずかな延命措置でしかないことを理解した。自らが信じていたものの空虚さも。

「蘇った、かつて共に戦った奴らは全員離反した。あれから今もずっと、本来の仕事を全うしているだろう。深淵狩りを」

「でも、貴方はそうしなかった」

火継ぎ肯定派の監視隊、つまり狼血の騎士は、新たに用意された補充要員ということ。彼らの目的は、裏切ったかつての監視隊を殺し、薪としての資格を固めるといったところだろう。

ホークウッドは、そのどちらの立場にも属していなかった。

「心底、嫌になった。世界がどうか、深淵がどうか。あんなろくでもない方法でしか存続できない世界なら、いつそ、壊れた方がいんじゃないか。色々考えた末に、俺は自分の意志に従うことにした」

それが、誓約主殺しにつながる。

「もう二度と、火継ぎで誰かが苦しんではならない。始まりの火の依り代となるのも、薪の一つとして捧げられるのも変わりはないだろう。俺の、後輩達はそんなものから解放されるべきだ」

彼は自らの腕に目を落とした。

「あいつらは、シフィオールスによる誓約で縛られている。深淵狩りをやってる連中を倒したら、今度は自分達で殺し合いを始めるだろう。薪として捧げられる最後の一人を決めるために。あのくそつたれの獣こそ死ねばいい。だが、俺だけの力じゃ無理なのはわかりきってる」

何度も何度も壁に当たっては打ちのめされてきた男の言葉だった。貴樹に協力を求めるようになるまでに、一体何があったのか。それはわからない。だが、他のあらゆる手を考え、そして不可能だと理解したのだ。

ホークウッドは、貴樹を最後の希望として縋るようには見ていなかった。どんなに追い詰められようが、諦めはしない。仮面をかぶり、耐え忍んできたのだらう。使命から逃げた臆病者として侮蔑される裏で、牙を研いできたのだらう。

それがわかったからこそ、貴樹はもう答えを決めていた。

「無理です」

そうか、とだけホークウッドは言った。元からあまり期待してはいなかったという、様子を繕っている。鞘もない傷付いた剣を持つと、倒木から立ち上がった。

「俺は、地下墓を通ってフアラン城塞に向かう。法王どもから逃がしてくれたのは、恩に着るぜ」

「いいですか、ホークさん」

離れようとする彼の背中を呼び止める。こちらを向いた無精髭の生えた顔に、近くへ座れと足で示してみせる。

「僕とはあまり話したことがないから、本音ばかりの会話とはいかないでしょう。お互いに。ですが、だからこそ、今、腹を割って話すべきです」

「どういうことだ」

貴樹はその顔を真つすぐ見つめた。

「貴方は、僕と同じだと、自分のことを指して言った。そう、同じです。似ている、ではない」

クリムエルヒルトが首を傾げている一方で、ホークウッドは無反応だった。

祭祀場にいた頃、彼のことを観察する機会は多くなかった。だが、その目の中で渦巻いている炎は、雄弁に語っていたのだ。それは、貴樹が火守女のことを考える時の感情と、同一と言ってもよかった。

「ホークさんが助けたいのは、狼血の騎士ではありませんね？ その中の、誰かだ。彼女以外がどうなるうが、どうでもいいと思っっている。違いますか」

彼女、という言葉で、もう諦めたようだった。その場に腰を落とすと、眉間を押さえる。その口は、苦笑っていた。

「すまない。つまらないはぐらかし方だったな。降参だ。どうやら俺は、あんたに利己的だと思われたくなかったらしい」

「話^なるとでも思っただんですか。今、ここでこうしている僕が」

火守女と、貴樹を交互に見比べた後、ホークウッドは首を振った。

「ただ俺の、臆病さがそうさせたただけだ。気を悪くさせたな」
「いいえ」

貴樹は目をキラキラさせていた。彼女、とやらの興味は一切ないが、ホークウッドが信念を持ってやり遂げようとしていることに心を動かされていた。情けなかった雛の巣立ちを見守る気分だ。

(いいぞ。シフイなんたらは雑魚だ。ぱつと行ってささつと殺せば、ホークの信頼を得られる。願ってもない機会だ)

初めから、協力する気だった。

そうした打算的な思いもすっかりと抱いて、

「色々と方策を練るべきでしょうが、共に目的を果たしましょう」

彼は、次に向かうべき場所を確定させたのだった。ファラン方面は、他にも警戒すべきことがあった。ついでに片付けることができる。

「あ、ありがたい。心強いぜ」

ホークウツドは何度か貴樹の両肩をばし叩いてから、放心したように地面へ寝そべった。火が当たりそうだとクリムエルヒルトに苦言を呈されるが、聞こえてもない様子だ。

さすがに男泣きは勘弁、と一瞬その顔を踏みつけそうになりながら、貴樹は一応の流れとして、さらに尋ねた。

「一つだけ、最後に」

「うん？」

「貴方にとつて、彼女は、どういう存在ですか？」

その時、ホークウツドは何かを思い出すような遠い目をした。口が躊躇う様子もなく、すらすらと言葉が出てくる。

「あいつは、ミレーヌは、俺の生きる理由全てだ」

深い情が、その言葉を重くさせていた。

◆
「本当に、どうしようもない男……」

四度目の搜索が無駄に終わった時、小さくもらしたその声は、隠しきれない怒気で震えていた。彼女の表情を確認するのが怖くて、下田は同じく困り果てている巨狼と瞳を合わせた。そのつぶらな瞳は、深い安心感を与えてくれる。

「痕跡が、途中で途絶えている。攫われた可能性がある」

「どこまで泥を塗るつもりなの…」

手甲を木の幹に叩きつける。枝が揺れ、葉同士が打ち合う音が静寂の中響き渡った。あれで殴られたらどうなってしまうんだらう。この女性の矢面だけには立ちたくない、こっさり願った。

「ミレーヌ、わかっていると思うが」

荒れている彼女を気遣うように、シフィオールスが声をかけた。

「はい…。もう無駄なことはしません」

「では祭祀場に帰らう。明日には出発だ」

自分にも責任はあったかもしれないと、下田は振り返る。先生が去ってしまってから、ホークウッドは明らかに様子がおかしかった。もっと彼に注意していれば、姿を消す前に止めることができたかもしれない。

そんな彼の思いを感じ取ったかのように、ミレーヌがこちらを見てきた。思わず体が固まるが、彼女は立ち上がりうろたえている下田の高さに合わせて、かがんできた。

「何か、短剣みたいなものを貸してくれる？ 持っているはずでしょう」

「え、は、はい」

正確には、インベントリのことを指していた。指定の操作をして、すぐに手元に新品のナイフを出現させる。

「やっぱり便利ね」

僕もそう思います、と笑いかけた所で、疑問が湧いた。なぜ今、こんな物が必要としているのだろうか。

答えはすぐにわかった。あ、ともつたいない気持ちで声をこぼす。

ミレーヌは何のためらいもなく、自身の金髪を切り落とした。もともと戦うには不便そうであったのだが、それでも欠かさず手入れを続けているのは、誰が見てもわかっていたのに。肩にかかっていたくらの長さが、耳をほど良く覆う程度になった。

草野だったら、悲鳴でも上げていただらう。流れ落ちていく金糸を見て、わけもなく切なくなった。

「はい、ありがとう」

ナイフを返した彼女は、表情を変えないまま帰路についた。事情はわからないが、何か彼女の中で変わってしまったのだろう。良悪関わらず、それはとても大きなものだ、何となく感じ取れた。

あの戦いの後、幾人かの戦士達が療養を余儀なくされる中、ゆつくりと物事を考える時間はほとんどなかった。イリーナの助手を務める一方で、魔術の修練も欠かさず行う。余計なことを考えてなくてもいい忙しさは、返ってありがたかった。

そしてちょうど今日、下田達に触媒が渡された所だった。

祭祀場に転送されると、ちとせが白い杖のような杖でソウルの矢を浮かせている。前に見た時よりも、数が増えているのを見て、いかに触媒の補正が大きいか改めて理解した。

彼女はかなり集中している様子だったが、下田が側を通るとすぐに目を開ける。

「おつかれー」

「うん。そっちも」

矢を消し、ちとせは額を拭う。

「で、あのおじさんは見つかったの？」

「いや…」

洞穴の奥へ消えていくミレーヌを見てから、首を振る。予想通りだと言わんばかりに、彼女は溜息をついた。

「もう、死んでんじゃないの」

「あんまり、言わない方が」

「冗談冗談。そんなことより、アキもここで練習してこうよ。まだ今日の分終わってないんでしょ」

「そうする」

自身の杖を懐から取り出そうとして、はずみで別の物も転がり出てくる。固い石の地面に落ちようとした、装飾の施された鈴を、慌てて掴み取る。代わりに、魔術触媒の杖がちとせの足元に落ちた。

「慌ただしいね」

「高原さん、ごめん。あ」

下田に杖を渡そうとしたその手を、彼女は止めた。目を細めて、何かを責めるように彼を見つめてくる。反面、口元は楽しそうに緩んでいた。

「ん——？」

「ありがとう、ち、ちとせ」

「噛んじや駄目だよ。もう一回」

「え、ここで……？」

周りを見れば、シフィオールスが地面に腹ばいになって、こちらを眺めている。それからわざとらしく自らの手を舐め始めた。

「ためらったから、三回ね。ちゃんとあたしの目を見て、ほら」
「う、えっと」

ちとせ。心の中ではそう呼ぶようには心がけている。しかし、実際に口に出すととなると、喉の底がむず痒くなる。さらに複数の人の気配が篝火の広場に近付くのを感じて、どうしようもなくなった。

彼女は口を押さえて笑っている。

「照れ過ぎ。もつと気楽にやりなよ。ま、別にいいけど。また今度にしてあげる」

「どういたしまして、ちとせ」

「はいはい」

杖を渡すと、彼女は下田の持っている鈴に視線を向けた。

「それも触媒なの？」

「そうだよ」

「杖で十分でしょ。ていうか、いつの間にそんなのもらってたの」
「私の所有物から、差し上げたんです」

下田とちとせは、篝火の側に立っているヨルシカへと向き直った。炎を影に立っている姿はおとぎ話から抜け出してきたようで、二人共数瞬の間見惚れた。と、同時に、下田は胃の底が押し上げられる心地に襲われる。未だにヨルシカの深く傷ついた姿が拭いきれない。

「支障はないですか？ 良い性能の物を選んだつもりなのですが」

「はい、その、大丈夫です」

「フフ、結構です。イリーナから、働きは聞いていますよ。明日からの

活躍も、期待しています」

「頑張り、ます」

「二人共今日はゆっくりと休んでください」

そう言つて、彼女は歩き出すというわけでもなく、なぜか下田を見つめ続けていた。また、この目だ。ここ数日、似たような視線を感じていた事がある。自身の内部を透かされているようで、落ち着かない。

何か、と尋ねる前に、ヨルシカは再び微笑んでから大扉の中へと入っていった。

「わー、手足細長つ。どんな生活したら、あんなスタイルになるんだろ」

「うん…」

腰と臀部の間から生える、尻尾。

強烈な光景を、下田は何とか振り払った。女性のあられもない姿を思い出すのは、良くないことだ。

「で、いつ仲良くなつたの？」

「ええ？」

驚いてちとせを見ると、彼女は腕を組んでいた。

「他の皆と比べて、アキだけ何か対応が違う気がする」

「どうだろ」

こちらとしては気後れするばかりだ。あの時、身を呈して守つてもらった恩を、まだ少しも返せていない。ただ与えられるという状態から抜け出せていない。だから、明日からの遠征では、何かしらの形で必ず役に立とうと、静かにやる気を出していた。

それから二人で修業を始めようとする、また新たに二人が篝火の側に出現した。よほど動き回ったのか、両方ともローブが土で汚れている。

実織は傷を新宮に治してもらいながら、歩いてくる。

「下田、混ぜてもらってもいい？」

「怪我したの？」

「ううん、大したことないよ。辛くは、あつたけどね」

「容赦ないよねー」

彼女達は、準前衛として機能するための訓練も受けていた。「発火」などの近距離対応に長けた呪術を持つ実織と、魔術と奇跡を幅広く仕える新宮は、攻撃にも支援にも回れる能力を持っている。

新宮が、疲れたように息を吐いた。

「下田君、私の頬の傷、治してもらえる？　もうくたくたで」「うん」

彼女の方へと近づき、遠慮がちのその長い髪をかき分ける。浅い切り傷へ指を添えると、奇跡を発動させた。跡が残らないよう、慎重に傷口を塞いでいく。なるべく集中していたかった。この、妙に気まずい空気に吞まれないように。

ちとせは口を結んで、矢の操作をしていた。その様子を、実織がちらちらと伺う。ちとせ自身もその事に気が付いているようだったが、特に何も言わない。

「何本、浮かせられるようになったの？」

先生の事で言い合いになった時からできていた溝を、実織は乗り越えた。

「…四本、くらいかな」

ちとせは正面を向いたままだ。ふうん、と実織も気のない声を出した。

すぐ側で、可笑しそうに震える肩がある。最近、言われたことなのだが、新宮は知り合いと友達の狭間にあるなんとも言えない距離感を観察するのが好きらしい。目が合うと、片目をつぶってきた。

「訊きたいんだけど」

実織がさらに言う。

「私のこと、嫌いななの？」

「そんなことないけど」

ちとせは、あまりこの話題を深刻に受け取っていないようだった。愛想笑いを一度返してから、自分の作業に戻る。それでも、実織は横顔を見続けていた。

やがて、その視線に耐えかねたのか、矢を全て消し、ちとせは実織

の方へと向き直った。

「わかったって。あの時、言い過ぎたとは思う」

「こっちも。冷静じゃなかった」

「何、謝ってほしいんじゃないの？」

「別に。お互い様だったから。変に気まずい感じが嫌だっただけ」

実織は目をそらさずに続けた。

「合う合わないはしょうがないかもしれないけど、私は仲良くしたいよ。私達は協力しないといけないと思う」

もつともなことだ。明日から、薪の王を狩るための遠征が始まる。第一の目標は、深淵の監視者達だ。本来ならば、二番目になるはずだった。だが火守女の側には、貴樹がいる。今は無闇に追うべきではないと祭祀場は結論付けた。

実織の言うことはもつともものだが。

ちとせは杖を手で弄びながら、再度、溜息をついた。

「いいんだけどさ。それ、あいつらに向けても言える？」

それを聞いた実織が、嫌そうな顔になった。場がなんとも言えない空気になる。

つまり、彼女達二人の溝は、まだましな方だということだ。

「…無理」

三人の男子の顔が思い浮かんだ。彼らは外で、訓練でもしているのだろう。

「でしょ。そっちが性格良いのはわかったけど、綺麗事は勘弁して」

きつい言葉だなど、下田は段々はらはらしてきた。空気が冷えていくのがわかる。ちょうど頬の傷が治った新宮は、そんな時でもインベントリから和菓子を取り出して、見物を始めている。

実織が眉をひそめて、腕を組んだ。

「ふうん。でもさ、学校にいた時は、嫌じゃなかったんでしょ？」

言われたちとせは、怪訝そうな顔になった。

「宇部と、付き合ってたんだよね。あれは気の迷いってこと？」

「はっ」

これ見よがしに、ちとせは舌打ちした。それに対して、実織は挑戦

的に笑う。

溝を埋める流れではなかったのだろうか。見なかったふりをして、この場を離れたくなかったが、さつきしたばかりの決意が彼の足を止めた。

下田は勇気を振り絞って、修正を試みる。

「い、今は関係ないよ」

二人の視線が同時にぶつかってくる。横で、新宮が感嘆したように声を漏らした。他人事みたいに反応していないで、助けてくれればいいのに。

「もう過去のことだし。あまり掘り返すのは」

「下田は、そっちの味方なの？」

実織は無表情だった。そんな彼女の顔は初めて見たので、思わず気圧される。

「アキと私は友達だもん。当たり前だよね」

そんな状況でちとせが追い打ちをかけようとしてくるものだから、下田は何とかして口を開かなければならなかった。

「どっちの立場でもないよ。実織さんは、余計なことを、言ったと思う。でも、た、ちとせも、相手が聞いて嫌になるような言葉を使っちゃ駄目だよ。二人共、仲良くはしたいんだよね？　冷静になって」

それから、耐えられずに俯いた。新宮が背中を叩いてくる。こんがらがった頭の中を、整理する。

「冷静になって、互いに納得いくまで話し合った方が、いいと思う」

できればいい方向に進んでほしい、という下田の願いは、届いたようだった。

最初に動いたのはちとせだ。頬をかいて、実織に向かって手を伸ばす。実織も、おずおずとその手を握った。

「そうだね。何か変な意地張ってた。ごめん」

「私の方こそ。ごめんね」

握手をした後の二人は、未だぎこちなさはあったものの、さきほどまでの刺々しいものはなくなっているようだった。彼女達はどちらも気が強い方だから、とても神経を使った気がする。自分の母親とは

対照的な女性を相手にするのは、慣れていなかった。

「ちよつと待って」

少し失礼なことを考えていたのがわかったのだろうか。実織がこちらを見てきた。

「何で、二人は名前で呼び合ってるの？」

「それはねえ」

解決しかけた話がややこしくなろうとした所で、大扉が開かれた。そこから早足で出てきたのは、鎧を着た男女だ。男の方、ホレイスとはほとんど話したこともなかったが、もう片方のアンリはその親しみやすさで生徒達にずば抜けて人気があった。

「あの、」

言いかけた下田は、いつもと様子が違うことに気がついて、口をつぐんだ。彼女達は下田達の方へと意識を向けることなく、祭祀場の外へと出ていく。

「どうしたんだろう」

ちとせのつぶやきを聞きながら、アンリの様子を反芻する。横顔しか見えなかったが、どこか余裕がないように見えた。少なくとも、下田の声掛けは聞こえていたはずだ。

何があつたのかと不安になった所で、さらに扉からぞろぞろと人が出てきた。会議が開かれていたらしい。ジークバルドやグンダはすぐに灰の墓所へと向かっていったが、カルラやイリーナはその場に残った。

二人はこちらを向き、まず、イリーナが近づいてきた。

「シモダさん、手を見せてください」

「あ、はい」

すぐに右手を差し出す。じくじくと痛み出していたのだが、彼女が奇跡の光を当てる

と、楽になった。

「ありがとうございます」

「何か、異常はありませんか？ 浸食は止まっているようですが、油断はできません」

指と指の間を念入りに撫でられ、下田はむず痒くなったが、本人は真剣なのだ和我慢する。イリーナに診てもらうのはもはや日課になっっているとはいえ、申し訳なきは増すばかりだった。

それに、あまりこの醜い状態の手を、人前に晒し続けたくはない。ちとせ達は何も言わずにいてくれるが、気を使われるのも好きではない。

「あの、そんな毎日処置をするほどではないじゃないですよ。イリーナさんは自分の仕事があるだろうし、もつと頻度を減らしてもいいと思います」

イリーナは奇跡を施しながら、微笑んだ。

「貴方は大切な灰の方の一人です。何も遠慮をすることはありません。これも、私の仕事ですから。それに、この膿は本当に恐ろしいものなのです。今の処置さえ、十分かどうか。完全に取り除く手段を見つけれない以上、不便を強いることになります。力が至らず、申し訳ありません」

「いや、そんなことは」

逆に謝られてしまったので、下田は続く言葉を失くした。これ以上強く言うこともできない。彼女は、本当に、善意でやってくれている。それを受ける身になった自らのふがいなさ、そして、発端となった襲撃の事をまた思い出して、さらに気分が沈んだ。

イリーナが去った後、そんなどんよりとした彼を、カルラは眺めていた。

「随分と、焦っているようだな」

「…」

下田は目も合わせずに、俯いていた。

「それで、もうやるべきことは終わらせたのか？」

「…はい、だいたいは」

ソウルの矢の維持、高速形成の修練、一本一本を別々の軌道で動かすなど、魔術の錬度を上げるための課題がいくつか課されている。

「同時に何本まで出せるようになった？」

「三本です」

「時間は？」

下田は教師の説教を受ける心地になっていた。

「伸びて、ません」

カルラは何も言わない。失望されているように感じて、この場から離れたくなった。

魔術や奇跡には両方とも、連続で使用できる限界がある。修練を重ねていくうちに、増えていくもののだが、下田は少しの伸びがあったのみで、それからいくら経っても変わっていなかった。

奇跡を多く使えば、それだけ味方の継戦能力につながる。新宮は何十回使っても疲れなくなったし、イリーナに関しては毎日毎日働いていても、術の使用をおろそかにした所は一度も見ることがない。

下田は、確かに、この伸び悩みに対して焦りと不安を感じていた。頑張ろうとする気持ちだけが、空回りしている状況だ。

「課題を、僕だけ二倍に増やしてください」

「そんなことはできない」

「でも、今のままじゃ駄目な気がするんです。もつと役に立たないといけないのに」

「アキヒロ」

名前を呼ばれて、顔を上げると、カルラが目を細めて笑っていた。下田には、どこか泣きそうにも見える。

そのまま姿が視界で大きくなったので、あれ、と思った時には、抱きしめられていた。

「気持ちは汲もう。だが、急ぐな。お前はお前がいい。そうだな、もつと私が見ていればよかった。ファランの城塞へ行く間に、色々試してみよう」

下田は両手を広げた体勢で固まったまま、続く言葉を聞いていた。なぜ、彼女は特別自分に優しいのだろうか。腑に落ちない何かがあるものの、慰められたことは事実だった。

とんとんと、子供をあやすように背中を叩かれた後、カルラは離れた。彼女は下田に向かって頷いて見せた後、少しだけ寂しそうに微笑んで、踵を返した。

「あんたって、周りから愛されてるねえ」

ちとせのからかいに、生返事だけ返した。

たった一つだけ、カルラの慰めにはわからない所があった。

最後に一言、付けたされた単語。

ジョックとは、一体誰のことだろう。

一晩休息した後、下田達は薪を得るべく、不死街から出発した。祭祀場に残ったのは、身体上の理由で動けないルドレスと、他侍女や鍛冶屋アンドレイなど、最低限の者だけで、ほとんどの戦士がこの遠征に参加していた。

「監視隊の薪を得た後は、地下墓を経由して、イルシールという、国に向かいます。そこで二手に分かれることになりますが、まずは最初の目標に集中しましょう」

ヨルシカの説明によれば、道中、何回か祭祀場へと戻れる篝火を数か所に設置して行くという。徐々に行動範囲を広げていくつもりらしい。とはいえ、ファランの城塞まではそのための儀式は行わないとのことなので、厳しい行程になりそうだった。

問題は、他にもある。

「何だ、このざまは」

宇部が、気に寄りかかり、女子三人と下田を嘲笑している。彼が言っているのは、何度か起きた遭遇戦での話だ。手ごわい個体は全て他の戦士達が引き受け、下田達は戦闘音に引き寄せられてきた亡者を相手するだけで良かった。

にも関わらず、戦いの内容は酷いものだった。

「は？ こっちの台詞だから。あんたの猪みたいな行動でどれだけこっちが迷惑したと思ってるの？」

「雑魚は見るだけでいいって、言ったよな。丸戸、そうだよな」

「あ、ああ。お前達が、余計な手出したせいで、手こずる羽目になったんだ」

下田は黙って奇跡を施していた。

「違う。あんた達の戦い方が雑過ぎんの。わかる？ 私達を巻き込む

ところだったんだよ」

「よけるよ。それで俺の邪魔したから、怪我する奴が出たんだろ」

宇部が乱暴に弾き飛ばした刃の欠片が、下田の頬を抉ったのだ。出血は激しかったものの、冷静に対処すればすぐに塞がる傷だった。

紗奈に完治の確認をしてもらった下田を見て、宇部は呆れたように肩をすくめた。

「それに、いてもいなくても変わんねえだろそいつ。祭祀場に残してきた方がましだったぜ」

実織が大きく舌打ちする。

「どうしようもない奴」

「だって、そうだろ。結晶のお遊びも、新宮に劣るし、頼みの奇跡は使っても、すぐにばてちまう。どうしようもねえよ。そんな奴はささと死んで、留守番してんのがお似合いだ」

丸戸が、追従して笑った。何も言い返すことができずに、下田は杖を強く握った。自分が、あまり役に立っていないのは事実だ。

「…実織、こいつら二人縛るから、死なない程度に燃やして」

「ま、髪の毛くらいはいいよね」

実織が、ちとせと並んで、宇部と丸戸を睨みつける。彼女達が同調しているのはいいことかもしれないが、共通の敵のための団結と言った感じだ。このような争いの光景を、何度見たことだろう。

協力するしない以前の問題だ。まさか、ここまで溝が深いとは思っていなかった。おまけに、宇部の敵意は、実織でも、ちとせでもなく、下田自身に一番強く向けられている。何が、そんなに彼を掻き立てているのだろうか。

「何をしているの?」

すらりとした影が、下田の横を通る。切られたばかりの金髪が、まだ目に新しい。

ミレーヌは睨み合っている男女を確認して、溜息をついた。

「そんなことに労力を使えるだなんて、大した余裕ね。貴方達のために取っている休憩だったけど、いらなかったみたい」

「関係ないだろ。引っ込んでろよ」

宇部は、祭祀場の戦士達にも、その横柄な態度を崩したことはない。ただ一人、ヨルシカを除いては。

「困るのよ。不毛な会話はやめてくれる？　くだらない。合わないのなら、組まなければいい話でしょう」

「は、それもそうだな。別にこいつらがいなくても、十分に戦えるしな」

「十分？」

下田は、ミレーヌが薄く笑ったのを確かに聞いた。

「んだよ」

「口だけは威勢がいいと思って。シーリス、こっちへ来て」

呼ばれた女性が、祖父と目を交わし合ってから、やってきた。

「なんですか？」

下田達へ丁寧な会釈をした後、きよとんとした顔でミレーヌに向き合う。自分達とほとんど変わらない年齢の彼女の剣には、落ち切っていない血がこびりついている。

「頼みがあるんだけど、この人達と、戦ってみてくれないかしら。多少、本気を出しても大丈夫だから」

「はあ」

シーリスは、周りを見回した。その動作はどこかぎこちない。あの貴樹が勝った戦いの後何日か思い詰めた様子だったが、何か悩んでいることがあるのかもしれない。

「おい、本気で言ってるのか」

「乗るの？　もし、勝てたら、この子好きにしていけど」

結局、参加を表明したのは宇部と丸戸の二人だけで、後は見物することになった。

今までずっと黙っていた高坂も意志を問われたが、首を横に振った。それから彼は槍を収めて、その場から離れて行った。そういえば。下田は気がつく。しばらく、高坂が話すのを聞いていない。

とんでもない条件を出されたはずなのに、シーリスは嫌な顔一つせずにミレーヌの頼みを聞き入れていた。なぜなのは、すぐにわかった。

始まってから間もなく、踏み込みを見抜かれ鳩尾に拳を入れられた宇部と、シーリスの背後を取った直後に綺麗な回し蹴りを食らった丸戸が地面に転がることになった。

少なくとも、身体能力だけなら、宇部は勝っていたのかもしれない。だが、単純な力勝負では計りきれない差が、シーリスとの間にはあったのだ。下田はぞっとするものを覚える。これが、経験の差なのか。彼女は戦士達の中で最年少であるはずなのに。

男子二人は、ミレーヌ達狼血の騎士に連れて行かれ、道中、みつちりと稽古をつけてもらうことになった。下田達は涼しい顔のままのシーリスに合流する。

「すぐ、ほんとに快適——」

ちとせが、シフィオールの背中にしがみついて、その柔らかい毛に頬を擦りつけた。

下田もまた、吹き抜けて行く風の感触を心地よく思っていた。こんなに大きな動物に乗るのは初めてだ。

「あまり揺れないように配慮しているつもりだが、大丈夫かな」

「最高！ ずっとこうしてたいくらい」

「それは良かった」

大狼は喉を鳴らした。

後ろをついてきている、実織と新宮はそれを羨ましそうに見ていた。

「もう少ししたら、交代だからね」

「すまないな。私の体がもつと大きければ、君達も一緒に乗せてあげられたかもしれない」

「でも、それくらいの方が可愛いですよ。あんまり大きいと、ちよつと怖いかも」

新宮の言葉に、シフィオールスは尻尾を一回振ってお礼を示した。

改めて考えても、意志疎通のできる狼というのは、不思議な存在だ。もし日本だったなら、神狼だなんだとあがめられるだろう。しかし、ここでは女子達の関心の的になっている。こんな光景を見て、誓約を交わしている騎士達はどう思うのかと不安になったが、彼らは特に気

にしている様子はない。

下田は、自分とちとせに向かっている視線を感じた。シーリスが、感心したように自分達を眺めている。

「シーリス、君も乗ってみるか？」

「とんでもありません。そこは灰の方々だからこそ、許されている場所です。シフィオールス様の背になど、恐れ多いことです」

彼女が気にしていたのは、狼の乗り心地ではなく、下田達のことだったらしい。実織と新宮と交代し、自分で歩き始めた時、控え目に話しかけてきた。

「先ほどは、貴方達の仲間に申し訳ないことをしました。ミレーヌさんの言葉で、つい、力が入りすぎてしまっって」

「そんなことは、ないですよ」

そうそう、とちとせも頷く。

「むしろすつきりしたしね。本当にすごいと思う。格好良かった」

「ありがとうございます」

大げさに誇ることもなく、また謙遜しすぎもしない姿勢には、確固たる自負が感じられた。それは、今の下田にとってはとてもまばゆいものだ。その根底を知りたくて、気がつけば口が動いていた。

「貴方みたいな強さを得られるには、どうしたらいいですか」

シーリスは、真面目に考える顔になる。

「そうですね、研鑽を今まで積んで来られたのは、祖父のおかげだと思います。あの人には、剣の全てを教わりましたから」

自分の孫娘に不埒な真似をしようと考えていた宇部達を鬼のような形相で睨んでいる、フォドリック。彼の方を見つめて、シーリスは微笑む。家族を労わる表情。それを見て、下田はずきりと胸が痛んだ。定期的にやってくる郷愁だ。日本にいた時、自分はこれほど母親のことを考えていただろうか。

「ですから、その、私はまだ信じているんです」

彼女は笑みを引っ込める。目を伏せて、ここにはいない誰かを思い浮かべているのだろう。

「私の祖父を助けてくれた、タカキさんが、何の意味もなくあんな行動

をしたとは思えません。きつと、どんな状況にいるにせよ。辛い思いをされているに違いありません。私は、何の恩も返せていないので、一刻も早く」

あまり考えてないようにしていた事だった。客観的に見れば、貴樹は現実に戻るといふ

皆の願いを邪魔したことになる。

それでも、下田はシーリスと同じ思いだった。

「つまりさ」

ちとせも、可笑しそうな声が割り込んできた。

「シーリスさんは、先生と一刻も早く会いたってことだよね」

言われた彼女はきよとんとした表情になった。

「会いたい?」

「最後に関わったのは、他の人達と一緒に先生と戦った時なんですよ。それは確かに、嫌だよ。憧れの人と、そんな形で終わりたくないよね」

そして、シーリスは困惑したように笑った。

「いえ、そういう気持ちでは——」

言い切る前に、シーリスは息を呑んだ。何かを思い出したかのように目が泳いだ後、頬が真っ赤に染まった。あまりに劇的な変化だったので、よっぽどのがあつたのかと、下田は心配になった。

「ほら、口ではそう言っても、やっぱりそういうことじゃん」

「違います…」

「いやでも、そんな反応されるとね」

シーリスは大きく目を見開いて、ちとせに詰め寄った。ものすごい勢いだつた。

「私は、決して、あんなものを見て不埒な思いを抱いたわけではありません! 薄暮のため、火継ぎのために仕える騎士として、惑わされるわけにはいかないのです」

「え?」

肩を掴まれたちとせが戸惑っていると、その騒ぎを聞きつけたらしいフオドリツクとカルラが、近づいてきた。

「シーリス、どうしたんだ。最近のお前は少し変だぞ」

「いえ、そのようなことは」

彼女が我に返ったかのようにちとせから離れ、咳払いをした。

それをよそに、カルラが下田に向かって言う。

「アキヒロ、訓練の時間だ」

「あ、はい」

カルラ自身の務めも当然あるだろうに、前に言った通り、下田に魔術をの指導を細かくする時間を取ってくれるようになっていた。彼女の方へと付いて行きながら、気になったことを尋ねた。

「何か、あつたんですか」

「ん？ ああ、シーリスのことか」

そこで、なぜかカルラはおかしそうに笑った。悪戯っぽい目つきになると、シーリスに向かって諭すように言う。

「いいか、それほど深刻に考えることじゃない。あの男の裸を見たくらいで、そううろたえるな。亡者だって、ほとんど服を着ていないよ。うなものだろう」

「カルラさん！」

シーリスが、悲鳴のような声を上げた。

そういえば、貴樹はずっと、下着姿のまままで過ごしていたのだ。途中から見慣れて、特に意識することもなくなっていた。よくよく考えてみれば、当たり前前のことだ。激しい戦闘をしていれば、ただの布でできている下着なんて、すぐに駄目になるだろう。

「それは、本当のことなのか？」

フォドリツクの声は平坦だった。

「ああ。そのせいで、彼女はまともに戦えなくなった。だが責めないでやってほしい。彼女くらの年で、まともに男性の下半身を突然目に入れることになれば、動揺はするだろう」

最初はからかうつもりでいたらしいちとせも、同情するようにシーリスを眺めていた。言われている当の彼女は、耳を塞いで俯いている。そこには自分達と同じ幼さが現れていて、少しだけほっとするよ。うな気分になった。

「あの男には、相応の報いを与えねばなるまい」

フオドリツクは低く唸った。

フアランの城塞への道中は、特に問題もなかった。かつて下田達の班が苦戦したダークレイスも、あつという間に倒されていく。戦士達は個々の力ばかりではなく、互いを補い合うことにも長けていた。

城塞にたどり着き、さらにその奥に進んでいくと、大きく開けた場所に出た。下田は悪臭に思わず鼻を塞ぐ。辺り一面が、沼になっている。えづくような臭いは底から出ているらしい。

触るだけで害のある、毒が含まれているそうで、念入りに奇跡の防護をかけて進まなければならなかった。さらに、ここを超えるためにはあちこちに散らばる四つの灯台に火を灯さなければならず、そうして初めて、奥への扉が開かれるという。

下田は、狼血の騎士達の支援に周り、そのうちの一つへと向かった。彼らは、こちらの地形に慣れているようで、大きな危険もなく、灯すことができた。

他の場所にも火が宿り、深淵の監視隊がいるとされる場所への道が開かれた。

進みながら、下田は緊張を高めていく。初めての、薪の王との戦いだ。自分がどれだけ貢献できるかはわからないが、全力は尽くそうと、思っていた。

「貴方達は、戦う必要はないわよ」

え、と横を向くと、ミレーヌがいた。

「足手まといって意味じゃない。これは、私達狼血の使命だから。私達だけで、決着をつけるべきなの」

ミレーヌのもとに、五人の狼血の騎士達が集まってくる。彼らは、彼女に向かって頭を垂れると、鞘に収まっている剣を地面に落とすた。

下田は、いつの間にか周りが静寂に包まれている事に気がついた。まるで、神聖な儀式を眺めるかのように。

「我らの大願を、遂げたまえ」

彼らは淡々と斉唱する。そして、頭をさらに前へと出した。その伸びきった首に、何か不吉なものを感じた。

「…貴方達の、意志と共に」

ミレーヌは剣をゆっくりと抜く。

そつと、誰かの手が伸びて、下田を後ろへと引つ張った。振り返れば、カルラが首を振って、それから目を閉じていた。

剣が振るわれるのを見て、下田は息を呑んだ。

五つの首が飛んで、すんと地面に落ちる。多少は血なまぐさい事に慣れてきたつもりだったが、彼女の常軌を逸した行動には大きな衝撃を受けた。周りを見るも、戦士達はそれを当たり前のように受け入れている。

死体から、白い靄が立ち昇り、ミレーヌの体へと吸い込まれていく。ソウルだ。

彼女はシフィオールスに向かって剣を掲げた。

「使命を、果たします」

「見届けよう」

その瞬間、彼女の剣から、火の粉が舞ったように見えた。気のせいかどうか確かめる前に、鞆に収まってしまおう。

ミレーヌは下田達の方を見て、何かを言いかけた。それから、祈るように目を閉じ、先の方へと、体を向ける。

「我々は、監視隊との戦闘が始まった後、カーサスの地下墓に向かいま

す」
ヨルシカの言葉で、やはり、自分達は戦わないのだと。割り込んではいけない戦いなのだ、と、下田は理解した。ミレーヌにとって、使命がどれほどの重みを持つのかは推し量れない。しかし、同じ隊の仲間を殺すことが、軽い気持ちで行われるはずがないのだ。改めて、ここは自分の持つ常識とは違う世界なのだと感じた。

大きな建築物が、近づいてくる。最上部には鐘が設置されていて、まるで監視塔のようだった。

ミレーヌが、大扉に手をかける。

その時、確かに聞こえた。

きいん、という剣戟の音。

誰かと誰かが、戦っているという考えは、確かに当たっていた。開いた先は、大広間になっていて、いくつかの死骸が転がっている。それを背景にして、二人が戦っていた。一方は鎧がへこみ、兜も砕かれ、満身創痍だ。当然の帰結で、無傷な方が、もう片方の喉を刺し貫いた。

下田は、徐々に驚愕に襲われる。

生き残ったその男は、闖入者に気がつき、ゆっくりと向き直った。ややくたびれたような表情で、真つすぐミレーヌへと顔を向けた。

「もう全員、殺しちまったぜ」

ホークウッドの剣に、炎の幻影を見たような気がした。

25. 落伍者の追想

どうしようもない男だった。

長くは、戦ってきたつもりだったから、隊長などという大層な役目を貰ってはいるが。とんでもない。

自らの中に流れる狼血の力を振るい、深淵を阻む。最初はそれなりに課せられた責務を全うしようと、使命に燃えていたんだろう。それがいつからか、温度のない、義務感という形に押し込められてしまったんだ。

連綿と受け継がれる狼血に薪の価値が見出され、深淵狩りから薪の王という責務に変わっても、中身が伴っていない俺の中では、歓喜でむせび泣く同胞のような気分にはなれなかった。

意味を、そこに見いだせていなかったのだ。

あの子と出会うまでは。

「娘？ 元奥さんとか、恋人ではなく？」

貴樹は意外な驚きを言葉に出した。ホークウツドの語りでは、まるで、彼女を自分で育てたかのような内容が伝わってきたからだ。

ホークウツドは、首を振る。

「あいつと俺は、そんなんじゃないやねえ。もちろん、血はつながっていない。一時期だけ、あいつの世話をしたことがあるってだけさ」

だがそれにしては、年は離れていないようにも思える。精々、年の近い兄妹程度だ。そこまで考えて、貴樹はあることに思い当たった。

裏付けるかのように、ホークウツドが言う。

「ミレーヌと過ごしたの、俺が火に捧げられる前後だ」

彼が薪の王として燃やされ続けている間にも、時は止まらない。例えば、幼い少女が、女性に変わる程度には。

地下墓に入っただれくらい時間が過ぎたのだろう。貴樹達は、内部の仕掛けや敵の掃除、整理にほとんどの時間を取られていた。記憶にない構造が多々見受けられたのも一因だ。上手く事が運ぶよう、全体を見通して調整をする必要があった。

「いいんですか？」

「何がだ」

「彼女は、望んでいないかもしれない。ホークさんの思いを、正確には受け取ってもらえない可能性があります」

「別にいいんだ。とつくに失望されてるからな」

ホークウッドはまた、遠くを見ていた。

「あいつが、生きてくれさえすればいい。憎まれたって、かまわねえよ」

「なぜ」

呆然とした視線にも構わず、ホークウッドは最後に殺した騎士を地面に転がした。それから乱暴に蹴りつけて、自身の邪魔にならないようにする。そこには、かつて同胞だった者への思いは何も残されていなかった。

ミレーヌは下を向いた後、再び顔を上げた。そこには、無感情を装った何かが隠しきれずに現れている。

「なぜ？ そんなことは、どうでもいいだろ。いいのか？ あとは俺を殺しさえすれば、使命とやらが果たせるんだろ？」

監視者達のソウルを一身に集めてようやく、薪に足るソウルが得られる。本来ならば、ミレーヌが、大義に背いた監視者を刑すること、その依り代となる予定だったのだろう。

「貴方は、自分が何をしているのか、わかっているのですか」

ヨルシカが、訴えかけるように言う。

「黙れ。媚びへつらっている時から思っていたが、お前達のやっていることは、深淵にも劣る行為だ。わかっているんだろう」

ヨルシカを侮辱されたことに反応し、宇部が前に出ようとした。しかし、その体は巨狼に遮られる。シフィオールスは、悲しそうに目を細めて、ミレーヌの横に出た。

「ミレーヌ……」

「はい、わかっています」

彼女は、口元を引き結び、剣を構えた。

「貴方を、殺すわ」

ホークウツドも、無言で長短二剣の刃を擦り合わせた。彼はもう、盾を持つことはしない。自分が最も馴染んだ戦い方で、自らの願いを遂げようとしていた。

シフィオールスは、最後の勧告をした。

「ホークウツドよ、こんな事になって、本当に残念だ。私は――」

「黙れ、と言ったはずだよな、獣」

地面に唾を吐く真似をする。

ああ、と、それから意地の悪い笑みを浮かべた。

「それも酷か。最期の言葉になるんだものな」

シフィオールスのすぐ真上に、赤毛の女性が突如として出現する。彼女は瞬時に結晶矢を作り出すと、狼の首元に打ちこんだ。

しかしそれは、寸前でカルラに防がれる。まるで事前に読まれていたかのような、動きの良さだ。

仕方のないことだろう。監視者の死体の中には、剣だけではなく、何か強力な鈍器で潰されたようなものもあつた。そして、ホークウツドだけでは、この状況を作り出すことはできないという事実。伏兵に気づくことは想定内だ。

それから魔女は次々と攻撃を行ったが、奇襲に気がついた戦士達の守りを崩すには至らない。

カルラが、思わずと言った形で叫んだ。

「クリムエルヒルト！」

降り立った赤毛の魔女は、すぐにこちらに向かって言ってきた。

「お願いします」

彼女に施されていた見えない体を解除して、貴樹はミレーヌと他の戦士達の間を躍り出た。

(ま、これで殺せたら拍子抜けだしな)

どちらにせよ、これだけ大所帯ならば、分断することは必須だった。

貴樹は片足を上げ、地面を思いつきり踏みつけた。衝撃が計画通り、大きなヒビを作り、ミレーヌから後ろの地面が全て陥落した。

素直に落ちて行きながら、ホークウッドと一瞬だけ目を合わせる。彼は頭を少し下げ、感鞘の意を示した。

後は、ホークウッド次第だろう。場所は整えた。彼女と二人きりで、ゆっくりと話し合いでもすればいい。

初めは予想外の出来事で固まっていた他の者達も、地面が近づいてきた時には体勢を整えていた。怪我なく着地できるほど足腰が強くない者も、魔術等を用いて、衝撃を緩和する。

貴樹はすぐに後ろを向いて、寝かせている火守女の姿を確認した。湧いてくる敵を全て処理したとはいえ、無防備な彼女を少しの間でも一人だけにするのは、不安があつた。安全を確認した後、戦士達が畏にかかる所を見た。

彼らも、わかつてはいたはずだ。カーサスの地下墓には所々に仕掛けがあり、貴樹の行動からして、それを警戒しなければならぬことくらいは。しかし、全員がそんな心がけを持っているとは限らない。戦士達の足元に、大きな穴が開いた。と、同時に、貴樹が疾走する。シフィオールスは彼が接近してくることに気がついたようだったが、遅すぎた。

狼の体を蹴り、さらに後ろへと飛ばす。それ以外の者達は皆、さらに下へと落ちて行つた。この場にシフィオールスだけが残される形になれば、計画通りだ。

(ちようどいい感じの高さで作つたし、ジークさん達も大きな怪我はしねえだろ。あ、ガキ共はささっと死んでくれていいぞ)

『おい、よく見ろ。そんなに甘くないみたいだぞ』

穴から、カルラが這い出てくる。それに続いて、彼女の比較的近くにいた生徒達四人が、魔力の床を作りながら上ってきた。

(ち、対応されたか)

下田が、貴樹の体を見ると、驚愕したように口を押さえた。

「先生、腕が」

雑音でしかないので、聞き流した。確かに、両腕は再生しないままだ。奇跡も全く効き目を現さない。結局、切られた腕が必要なのだが、それを持っているであろうロンドール勢の姿は忽然とイルシール

「任せる」

火守女の黒衣の裾を啜えて、彼女を背中に乗せると、閉じようとしている穴に走った。それから何の躊躇いもなく、飛び込んだ。穴の閉じきる音が、しんとした空間の中で響き渡る。

一人取り残されたクリムエルヒルトは、溜息をついてから、掌に炎を生じさせる。



「それは一体何ですか？」

シフィオールスが背中に乗せている何かは、おおよそ少女と呼べるものではなかった。血と灰にまみれ、汚れた妙な色をした髪が素顔を隠している。そこらの亡者の方が、まだ、まともな格好をしていただろう。

監視者の敵は、深淵の先兵ばかりではない。ソウルを貪ろうとする亡者や化け物ども、そしてそれらになりかけている人間。そういった者達の集落の跡で、見つかったのだという。

俺は、その話を聞いて、すぐに嫌な臭いの正体に勘付いた。この少女は、その歳では受け止めきれないほどの、辱めを受けてきたのだ。

だが、そんな奴は今の時代わんさかといえる。死ぬ寸前の子供を拾ってきて、一体何になるのだろうか。

「我らは、救世のために奉仕する。この子が生きていたことは、奇跡に近い。命の火を、絶やしてはならない」

シフィオールスが少女の頬を舐める。無反応だ。

「ホークウッド。君が自身を見失いかけていることは知っている。隊長として、それはあつてはならないことだ。今一度、火継ぎを行う意味をわかって欲しい。いいかな、君が、この子の世話をしなさい」

そう、初めは、忌避感しかなかったのを憶えている。監視隊は、誰とも交わらず、子を持つことはしない。その使命の過酷さゆえだ。だから子供と接する機会は皆無だった上に、自分自身、そんなものに関

わりたいとは露ほども思っていなかった。

髪の間隙から覗く、亡者のような目と視線が合う。

俺は小さく舌打ちをした。

運ばれてきた時の様子から、歩くことすらままならないと思っていたが、少女は黙ってついてきた。ほとんど使われていなかった監視所の一室。ここで過ごしていれば、安全ではある。

何せ神代の一振り、月光の御剣が祭られている場所のすぐ隣だ。

「ここで、寝ろ。勝手に外に出るな。わかったか？」

周りをぼうつと見ている彼女を見下ろして、俺は既にやりきった気分でした。

浄化を施したおかげで、身なりはましになった。意外だったのは、薄い土色だと思っていた髪が、実は黄色よりのものだったということ。珍しい髪だった。古く、繁栄していた国の特権階級の婦女によく見られた色らしい。その時の俺は、ただただ少女の異様さを助長する特徴としか見ていなかったが。

あとはたまに様子を見に来るくらいで十分だろう。死にはしないから、世話してやった範疇に入ると思っていたんだ。

だが、全く彼女のことを理解していなかったのだと、すぐに気がつかされた。

外に出て、ファランの森周辺の見回りをしようとした時、後ろに気配を感じた。振り返ってみれば、監視所の入り口から、少女が覗いている。

「おい。外に出るなと言っただろ」

俺の声が届くと、彼女は早足でやってこようとす。だが、途中で足がもつれ、転んでしまった。飛び跳ねるように起き上がり、少し汚れてしまった姿で近づいてくる。

「聞こえなかったのか？ 部屋にいろ」

じつと見上げてくるばかりで、黙ったままの様子に段々と俺は苛々し始めていた。ただでさえ面倒を抱え込んでいるのに、その原因がさらに手を煩わせようとしてくるのが、本当に嫌だった。

俺は短剣を引き抜いて、少女の鼻先に当てる。

「簡単な指示一つも聞けないようなら、死ぬか？ お前を沼地に捨ててやつてもいい。毒で体が腐りきるか、人外共が食らうまで見てやるぞ」

丁重に扱おうなどとは考えてもいない。むしろ嫌われてくれれば、彼女と離れるいい口実にもなる。俺は初めから、真面目にやるもりなんてなかったんだ。

だが、少女は怯えすら見せずに、ただその短剣を興味深そうに見つめて、そつと手を伸ばしてきた。

予想外の行動に、俺は反射的に手を引つ込めようとする。その時、刃が彼女の指を切ってしまった。指の腹に、一筋の傷ができる。

そしてようやく、自分が酷く動揺していることに気がついた。今まで散々剣を振るってきたのに、たかが無力な子供に刃を向けた程度で、俺は強い罪の意識を感じていたのだ。今思えば、昔から臆病者に過ぎなかったというだけの話だったが、当時の俺は無かったことにしようとした。

少女は自身の指から流れる血の筋を見た。そのまますとん、と、膝から崩れ落ちる。

「おい」

俺は伸ばしかけた自分の手に一瞬呆然となった。死んでも構わない奴を助けようとしてどうする？

「――」

彼女は何かを口にした。小さくてわからなかったが、その何かは彼女の今までずっと張り詰めていた心を崩したのか。俺と目を合わせた後、顔を大きく歪ませた。

かすかなうめき声。それが、初めて聞いた彼女の声だった。人が最初に声を出す時のようなぎこちなさで、嗚咽を漏らす。俺が石細工のように静止している間に、少女は足へとしがみついていた。

「まとわりつくんじゃ――」

俺は、あることに気がつく。彼女の涙交じりの言葉は今まで聞いたこともない音の組み合わせだった。カリム、アストラ、イルシール、そしてロードランの古語。他、俺の知っている言語のどれにも当てはま

らない。

「お前、俺の言葉がわからないのか」

簡単な指示にも従わなかった理由にも納得がいった。はるか遠くの国から、流れてきたか、連れ去られたか。どちらにしろ、訳のわからない言葉を喋る者達の中にいることは、尋常ではない負担だっただろう。

そのまま少女の叫びを聞いていると、時折、同じ音の連なりが混ざることにも気がついた。それを言う度に、しがみつく力を強くする。続けるような言葉の意味を、俺は理解していた。

親だ。両親を、求める子供の声。

親元から離されて、ならず者どもに黽られ、今度は俺なんかの側に置かれている。何のつながりのない自分に、泣きつくことしかできない。状況に流されることしかできない、弱い存在。まるで。

目の前が揺れた気がして、頭を振った。歯ぎしりしながら、少女を睨みつけるが、曖昧な怒りは長く続かなかった。親の顔なんぞ憶えてもいない。俺がこいつに同情をするなんてことは、この先も有り得ないだろう。

だが、少女を見ているだけで、自分の中で落ち着きを失くす部分がある。何かを問いかけてくるような気がする。

畜生。

俺は無意識のうちに、彼女を追いやる選択肢を捨てていた。

だから、子供は嫌いなんだ。

火継ぎの 때가、近づいてきた。

それでもやるべきことは変わらない。日々、異形を狩り、深淵を見張る。疲弊すれば、安全な場所で、身を休める。気の遠くなるほど繰り返されてきたことだったが、最近、少しだけ違っている。

「いつ、奇跡を使えるようになったんだ？」

ミレーヌは俺の腕を治療しながら、勢いよく顔を上げた。こちらがうんざりするほどの笑みになって、答える。

「おぼえがいいって、シフィにもほめられたよ。器がすぐれてるんだって。よくわからなかったけど」

元々、素養があつたということだろうか。彼女の奇跡の使い方は俺の知っているものとは違っているが、傷は塞がりつつある。何だか妙な気持ちになつて、俺は顔を小さくしかめた。笑い飛ばしたいのか、怒りたいのか、よくわからない。そのどちらもしたくない気もして、もはや形を捉えようとする事自体を、諦めた。

「何をしていたんだ」

「たくさん、お話した。シフィのほかにも、きせきをおしえてくれたひとが、もどつてきたの。ほんとうはふるい本もよんでみようとしたけど、やっぱりむずかしかった」

務めの終わりに、彼女の成果を聞く。新たに加わつた、繰り返しだ。少女は、驚くべき速さで俺達の言葉を憶えていった。ミレーヌという、自身の名前を言う所から始まり、今はほとんど不便なく会話ができるようになってる。少なくとも、俺よりもはるかに努力家で、頭のできが優れているというわけだ。

何よりも、彼女には度胸がある。元々、明るい性格なのだろう。俺よりは多少愛想の良い同胞たちにも積極的に話しかけて、言葉の習得を速めていた。

「もういたくない?」

「ああ、大丈夫だ」

初めの頃からは考えられない。大方面倒見の良い大狼様がいたおかげだろう。そんなことを考えていると、彼女が見つめてきている事に気がついた。

「ホーク、つかれてるの?」

「急に何だ」

彼女の視線が下の方へ向かう。

「本当に、きずはこれでぜんぶ?」

「問題ねえよ」

彼女は何かを言いたそうに顔を引いた。さらさらと、その動きに合わせて髪が揺れる。肩を超えた長さになったそれは、窓から差し込む

わずかな光を映している。もう、異質なものだと感じる心は時間とともにどこかへ消えていた。視線が追おうとするのを、瞬きして止める。

「もつと、やくにたちたい」

「立つてるだろ」

「ちがう。ホークの言ってることじゃなくて、うんと」

ミレーヌは真面目に考える顔になる。俺にとっては背伸びをしているようで、ふつと笑いがこぼれそうになる。そしてそういう自分が、よくわからなくなるのだ。

「ホークは、いつも、これでたたかってるんだよね？」

鞘に収まっている大剣を指さす。その柄にはまだ亡者共の薄汚い血がこびりついていた。俺は何となく手をやって、それを隠した。

「何が言いたい？」

「わたしも、つかってみたい」

「駄目だ」

口を上向きに曲げ、青い瞳を横へ逸らす。不満がある時に、よくやるしぐさだ。

「なんで」

「前にも言った通りだ。剣を憶えて、どうする？ まさか俺と同じようなことをしたいとでも思っているのか」

「うん。ホークといっしょに」

我が意を得たとばかりに、元気よく頷く。気楽なものだ。この様子では、おそらく、戦うということがどんなものを己にもたらすのか、まるでわかっていない。わかる必要もない。

「いいか、物事には適性がある」

「てきせい？」

俺はミレーヌの腕をつかむと、彼女の目によく映るよう左右に振った。

「お前の腕と、俺の腕を比べてみる。何が違う？」

「大きさとか、ふとさ」

「そうだ。剣は、重い。金属の塊だ。しかもそれを振るって、敵の肉体

を寸断するには、相応の力が必要になる。お前のその、棒きれのような体でできると思うか？ 一度振っただけで、肩が外れるだろう」

彼女は自分の体を触ってから、頬を膨らませた。

「なにそれ」

「事実だ。新しいことに挑む気概は時に必要だが、無理なことを無理矢理するのは馬鹿でしかない。俺は戦い、お前は学ぶ。それで充分だ」

すぐに、俺は自分を心の中で嘲笑した。何を、そんな偉そうなことを言ってるんだ？ 他人に説教する資格があるとでも思っているのか？ ましてや相手は、術の才能もあり、頭の回転も悪くない、子供だぞ。今のは、本当に虚しく響いたな。

我に返ると、ミレーヌは眉尻を下げて、不安そうに見つめてきていた。

「何だ？」

敷布に腰を下ろし、彼女は膝を抱える。

「なんとなく、わかったよ。いつてること。でもね、わたし、えっと、その、わたしがね、じやまに、なつてないかな。ホークはいいことのためにたたかってるのに、わたしは、ただ、ずっとここにいて、それで……」

俺が、こいつくらいの時、こんな事を考えていたかどうか。俺の腰にも届いていない子供にはそぐわない言葉に、今度こそ笑みがこぼれそうになった。

その瞬間、別の意識が冷や水をかけてくる。自分でも掴みがたい感情の動きに対する鬱憤を、晴らしたいと思ってしまった。

「邪魔だど？ くだらねえ」

彼女がこちらを向いた。

「お前はそもそも俺の手を何も煩わせていない。こつちとしてもありがたいと思ってるぜ。生きてさえいれば、周りにうるさく言われることもないからな。お前は監視者でも、火に仕える神官様でもない。そんなくだらないことを考えて何になる？」

俺は、彼女の悩みの本質を、何一つわかっていなかった。彼女の気

持ちもだ。最初からずっと、自分の物差しで全てを測ってきた弊害だった。

「お前がどうしようと、自由だ。だが、俺にまで害が及ぶような真似だけはよせ」

そもそも、今ここで、こうしていること自体が虚しい行為だ。こいつの事に、俺が関わっても大して意味はないのだ。どうせ、こいつの未来を見ることはできないのだから。

ミレーヌが何かを言いかけた所で、俺はこの場から離れたい一心で、部屋から出て行った。もうこの少女とは関わらないようにしよう。戦っている時よりもずっと疲弊した気持ちで、次の責務に備えて休みを取った。

何もかも俺のせいで、きつとあれは起きたんだろう。

ミレーヌの部屋に行かなくなって少し経った頃、深淵の先兵を相手にする機会があった。火が弱まると必ず湧いて出てくる膿。それが人間に寄生し、異形化したものだ。多少手こずった俺は、それなりの傷を負い、精神的にも余裕がなかった。

だから、監視所周辺の森で、亡者に襲われている彼女を見た時、その身の安全よりも先に、苛立ちが先に来てしまったのだ。

「なぜ、お前がこんな所にいる？」

亡者の首を切り飛ばした後、俺は震える声で尋ねた。彼女は答えず、持っている短剣を、背中に隠そうとした。転がる亡者の首を一瞥してから、俺を真っすぐ見上げてくる。少しだけ得意げに、口を開いた。

「わたし、ぜんぜんこわくなか」

衝動的に彼女の頬を張り飛ばしていた。憎悪などといったものは性質の違うような怒りで、ミレーヌに手を上げた直後には、じくじくとした嫌悪に変わる。肉を斬り落とす感触よりもはるかに気分が悪くなった。

「命が、惜しくないのか？ 一人で外に出るなど、何度も言い聞かせたはずだ！」

そして彼女自身への苛立ちはすぐに消え、後悔だけが残る。

呆然と頬を押さえていたミレーヌは、怒鳴られて、目を大きく開いた。見る見るうちにその瞳が潤んで、目端に涙が溜まる。口元を震わせた後、俯いて、ごめんなさいと呟いた。それから彼女は俺の脇を通り抜け、監視所の中へと戻っていった。

俺は自分の掌を眺めた。散々、今まで血で汚してきたが、今ほど忌わしく感じたことはなかった。彼女は殴られて当然だという弁護の声と、酷く責めてくる声が、自分の中で混ざり合う。こんなに訳のわからない気持ちになるのは、いつもあいつと関わっている時だった。いい加減にしてくれ。俺は、俺をどうしたいんだ？ もう、決着をつけるべきだ。このままでは普段の職務すら全うできない状態になる。

俺は決心した。彼女と話し、それで最後にしよう。あいつの存在を自分の中で否定できれば、きつと、楽になれるだろう。こんな気持ちともおさらばだ。

苦々しさが増すばかりのまま、ミレーヌの部屋へと向かった。

扉を開けると、彼女は寝具から弾かれたように身を起こした。酷い表情だった。泣きじやくった跡を隠そうとしているが、赤くなった目がすぐに元に戻るわけでもない。

「お前」

さらに続けようとして、言葉が詰まった。ここに来るまでは、あつさり言えるつもりでいたのだ。自らの使命のこと。自分はもう少しで火に捧げられる。だから、それに集中するために、もう関わらないことにすると、なぜか、続けられなかった。

「どうして、あんな危ないことをしようとしたんだ」

代わりに出てきたのは、より本心に近い言葉だった。

彼女は叱責の続きだと思っっているのか、近づいてこないまま、おずおずと目を合わせてきた。

「ごめんなさい。いけないことしたって、わかってる。でも、わたし、こわくなって」

「怖い？ ここは外よりもずっと安全だ」

「ちがうの」

語尾が震えた。彼女は何かに耐えるように表情を歪める。涙が頬を伝って、小さな嗚咽を漏らした。俺の、一番苦手な顔だ。まだ言葉も通じなかった頃、情緒が不安定だった彼女を思い出す。

「ほーく、なんで、きてくれなくなったの？ わたしが、へんなこと、いったから？」

「いや——」

「そうなんですよ？ だって、あの時、すぐつらそうなかおしてたから」

辛い？

そんなはずはない。俺はそれほど軟弱じゃない。

ミレーヌは鼻をすすって、ゆっくりと歩いてきた。俺の右腕を握って、奇跡を発動させる。応急措置では治しきれなかった傷が塞がっていく。その様子を黙って眺めることしかできなかった。

「ほかのきずも、みせて」

俺の方が、彼女を直視できなくなっていた。

「それで、全部だ」

「みせて。…むねのほうも」

返事を待たずに、ミレーヌは俺の肌着をめくった。本来ならば、そんな行動をさせはしなかっただろうが、この時だけは痺れたように全身が動かなかった。

ちょうど鳩尾の部分にあるそれを見て、また彼女は泣きそうな表情になった。

「ねえ、いたくないの？」

「昔の傷だ」

「うそだよ」

まるで自分のことのように、胸を押さえた。

深淵の監視は、万人が携わりたいと思う役目ではない。人員を補充するため、身寄りのない子供を拾い、狼血の誓いを結ばせることもある。この胸の傷は、大狼の血を受け入れた時のものだ。拒絶反応が出なかったとしても、しばらく激痛で何も考えられなかったのを覚えている。

「シフィからきいたの。ホークたちが、これからどうなるのか」
俺は、ようやく理解した。

「つらくないの?」

「…そんなことはない」

「また、うそだ」

ミレーヌは腹に額を当ててきた。彼女の震えが伝わってくる。

「ホークね、はじめてあったときから、くるしいってかおしてた。たすけていいいたそうだった。わたしとおなじだったから。すごく、よくわかったの」

腰に手を回してくる。俺はそれを受け入れていた。

「でも、さいしよはこわくて。パパやママにあいたくて、こんなところいやだった。でも、ホークが、なんでもないみたいにながまんしてるのを見てうちに、このひとだけは、わたしをわかってくれるかもしれないって、おもった。いまじゃもう、ホークとはなれるのが、こわくてしようがなくなっちゃった。ひとりになるのは、いやなの。苦しいの」

彼女は非常に焦っていたのだろう。傍から見れば全然そんなことはないのに、自分が荷物になっていると感じていた。その居ても立ってもいられない気持ちだが、足を外へと運ばせたのだ。

だが、そんなことよりも。

気を遣われていたのは、俺の方だったのだ。

目の前が揺れた。壁に手をつき、何とか平静を保とうとする。どんな危険に遭っても感じた事のないような乱れが、俺の全身を巡る。

「…ったのか」

「え……?」

畜生、声まで揺れている気がしやがる。

「じゃあ、俺は、可哀想だったのか? 惨め、なのかよ。そうだよな。そうに、決まってる。歩けもしない時から、深淵に関わり、それ以外特に何の意味も産み出さなまま、最後は好きでもない世界のために死ぬんだ。そうだよなあ、お前から見たら、どうしようもない野郎だ。ちくしょう、なんでこんな、こんななんだ俺は」

「ホーク！」

ミレーヌが背伸びをして、俺の肩を両手で押さえた。

「ちがうよ、そんなことない」

「わかっているような、口をきくんじゃねえ！ お前に、なにがわかる。俺には、これしかなかったんだ。なのに、その使命とやらに、俺は少しも共感していなかった。それでも騙し騙しやってきたんだ。だが、お前と関わってきて、ごまかしが、効かなくなっちゃった。死んだら、何も残らねえ。でも生きていても、全てが空虚だ。こんな思いをするくらいなら、誰かが赤ん坊の頃の俺を殺してくれればよかつたんだ！」

「あるもんー！」

俺の叫びに負けなくらい、ミレーヌは大声を出した。ぐいっと顔を近づけてくる。その目にはさらに大粒の涙が溜まっていた。とても、苦しそうな表情だ。俺には、なぜそんな顔ができるのか、理解できなかった。

「いみなら、あるよ。ホークがいなかったら、わたし、きつと生きてなかった。いままでがんばってこられたのも、ホークのおかげだよ。なんかいいありがとうっていても、たりなくらい」

少女の真つすぐな瞳に射抜かれて、俺は数瞬の間言葉を失った。誰かから、はつきりと、感謝を述べられるのは、今まで一度もなかった。

「お前を、助けたのは、シフィオールス様だ。俺は、なにも」

「ホークのそういうところ、ほんとうにじれったい」

少女は泣きながら微笑んだ。

「いちばん、わたしといたのは、わたしとおはなししてくれたのは、：わたしがいつしよにてあんしんするのは、ホーク。ほかのひともやさしくしてくれるけど、こわくないのは、ホークだけなの。ありがとう、いつしよにいてくれて。わたしを、すくってくれて」

ふぎけるんじゃねえ。お前なんかに。

言い返しているつもりだったのに、声は出ていなかった。形にならない呻きが代わりに漏れる。

知らなかったのだ。誰かに、自分を肯定してもらえることが、これ

ほどとは。彼女の言葉一つ一つが訳のわからない熱を持って、潜り込んでくるようだった。こんなどうしようもない自分が、何かを成し得たと、思わせてくれる何か。

彼女が、俺を求める以上に、俺はミレーヌの存在を、いつしか当たり前のものとして、考えていたのだ。共に過ごすうちに、確かに、ただの義務感以上の情を、抱いていたのだ。

自分の中に生じた感情を理解するには、時間がかかったが、悪くないと思えた。暗闇に覆われていた視界が、晴れていくようだった。

今最もしたいこと、彼女を抱き寄せることも、躊躇いなく行える。

ミレーヌは驚いたように止まった後、胸に顔を預けてきた。この暖かさだ。これこそが、俺が大事にしなければならぬものだった。

「すまねえ、頬は、まだ痛むか？」

「ううん。それよりもね、ホークが死んじゃうほうがずっといたくて、くるしいよ。ねえ、」

ミレーヌは声をひそめた。

「わたしを、おいていかないで。いっしょに、ここからにげよう。わたしね、ほかの国のことばも、おぼえようとおもってるの。どこかとおい国で、かくれてくれば、きつとだいじょうぶ」

「ミレーヌ、聞いてくれ」

俺は、ようやく理解した。自らの使命を。その意味を。

「火が保たれなくなれば、深淵が世界を覆い尽くすだろう。どうなるのかは、わからない。だが、俺もお前も、生きてはいられない。そんなのは駄目だ。お前には、これからも、生きていてほしいんだ」

わかつてみれば単純な事で、それでも、ミレーヌがいなければ永遠にわからなかっただろう。こんな世界は好きでもないが、彼女だけは、自分の命がどうなっても守る価値がある。

彼女は泣きじやくり、時には怒り、時には哀れみを誘って、俺の意志をくじこうとした。だが俺は、そんなミレーヌの優しさを感じ、彼女に尊敬の念すら憶えてもなお、自分の考えが間違っているとは思わなかった。彼女のために、自分のできることが、ちゃんとあるということ、深く感謝していた。火継ぎの儀式に、初めて偉大な何かを感じ

じていたのだ。

……

俺は、救いようのない馬鹿だ。

「シフィオールス様。お願いがあります」

既に同胞の全てが、火に捧げられた。彼らは苦痛もなく、誇らしげだった。今の自分も同じ顔をしているだろうか。

「あいつを、どうか、不自由なく暮らせるようにしてやってください。あいつの望むままに。俺なんかよりも、ずっと、優秀な奴です」

ミレーヌは結局、現れない。儀式の間へ向かう途中、彼女の部屋の扉を叩いてみたが、返事はなかった。それだけが心残りかもしれない。だが、俺は笑う余裕さえあった。こんなに明瞭とした気持ちになつたは初めてだ。

大狼は重々しく頷いた。

「約束する。彼女の意志を尊重しよう」

「ありがとうございます」

俺は剣を首に当てた。介錯は誰かに任せた方が楽だっただろう。だが、俺はこうして、自分で終わらせたかった。素晴らしい使命に殉じることができるといふ、異様な高揚感が、恐怖をほとんど消していた。

シフィオールスが下がった所で、入口の扉が開いた。また、泣き腫らした目をして、ミレーヌはそこに立っていた。

「いや…」

彼女はよろけながら走り寄ろうとし、シフィオールスに止められる。彼の巨体を細い手で何度も叩いて、縋るような声を上げた。

「やだよう、おいていかないで、ホークー！」

せめて、彼女には笑っていてほしかった。

ほんの少しだけ残念に思いながら、俺は刃を己の首に斬り入れた。視界が飛び、やがて全てが炎に覆い尽くされる。痛みはなく、不思議な暖かさに包みこまれる。

大丈夫だ。

この時の俺は全てに満足していた。

彼女ならきつと、一人でも生きていける。だから――、

意識が途切れることはなく、すさまじい激痛が全身を包んできた。

もう体なんてないはずなのに、俺はのたうちまわり、何も考えられな
いまま、絶叫した。

苦痛。

絶望。

憎悪。

奴らに、罰を。最大限の苦しみを与えたまえ。
欺瞞だった。全ては無意味だった。
殺してやる。殺してやるぞ。

憎しみだけで正気を保っていられたのはわずかな間だけだった。
同胞達が、燃えながら、剣を振る動作をしている。虫がもがく、哀れ
な姿にも見えた。皮肉なことに、あれだけ使命感に燃えていた彼ら
が、火継ぎ、そして大王グウィンへあらんかぎりの呪詛を吐いている。
その叫びは亡者の声によく似ていた。

ならば、俺は？

深淵狩りという、本来の務めに縋ろうとした彼らとは違い、何もか
もが取り去られた俺の心の中には、一つだけが確かな光を放ってい
た。

ミレーヌ。

俺は、最後の方、彼女のことだけを、考えていた。

目を開けても、暗闇のままだ。

自分の感覚が、麻痺していると思っていた。もう、焼け焦がされる感触はほとんどない。やっと、楽になれるのだろうか。

瞼を何度も動かすと、徐々に鈍い光を認識できるようになった。脳の奥底に痛みが走り、俺は再び意識を失う。夢の中にいるような、曖昧な覚醒の連続を経てようやく、自分が生きているということを知った。

「お目覚めに、なりましたか」

俺の介護をしている侍女の、小声ですらも耳が痛くなる。口を動かそうとしても、それだけで、じんと痺れるような痛みが走った。

「無理をなさらないでください。自身のお体を第一に」

疑問を言うことすらできない状態がしばらく続いた。知りたいことはたくさんあるのに、喋ることも動くこともできない。火に捧げられている間よりも、気が狂いそうになった。まず何よりも、俺の支えとなってくれた少女に会いたい。そして何度も謝りたい。彼女の言うことが、正しかったと。今度は一緒にどこまでも逃げよう。

だから、状態が回復してきた時、俺が発した第一声は、当然。

「ミレーヌ……」

少女の名前を己に刻み込むように言った。するとなぜか、ずっと俺の側に付いていた侍女が、激しく身じろぎして、顔を覗き込んできた。

一瞬、俺はそれを鬱陶しく思ったが、やがて理解する。相手の顔をはつきりと認識できないが、質素な上着にかかる髪が、光を宿していた。

黄金色、というらしい。薪の王になったことで得た知識。貴重な鉱物の色で、その輝きは炎の明るさとはまた違った美しさだ。唯一、存在を感謝した知識だった。

「お前、なのか？」

侍女は一呼吸黙った後、頷いた。

「はい。憶えていてくださっただけですね」

「当たり前、だ。そうか、お前、お前は」

頭が回らない。その声や、言葉遣いは、成長した、芯のある女性の

ものになっていた。それでも、こちらを気遣う柔らかさが俺の記憶に残っている彼女を確かに表していて、どっと感情があふれ出す。

彼女が慌てたように、そばにあった布を手に取り、俺の頬を拭いた。まだ残っている火傷が、涙で染みないようになしてくれたのだろう。情けない姿を見せてしまっているが、今さらそれを恥ずべきことだとは思わない。

「お、れは、ずっと、ずっと。ちくしょう、舌が、まわらねえ。ミレ―
ヌ、お前に、会いたかったんだ」

布を脇に置いた彼女は、俺の手を握り、自らの額に押し当てた。噛みしめるような間があった後、治っていない視界でもわかるほどの笑顔を送らせて、囁いた。

「私も、同じ思いでした」

26. シフィオールス

視力も完全に回復し、彼女の助けがなくても多少動けるようになった。声も何の不自由もなく出せたはずだが、俺とミレーヌの間に言葉はほとんどない。

「何か、体に異常はありませんか？」

「まあ、なんというか」

「？」

俺は戸惑っていた。もちろん、彼女がミレーヌであることは疑いようもない。面影は確かにある。しかし時間が、あの無邪気な子供の顔を大きく変えていた。鼻目かもしれないが、肖像画で見た、太陽の長女グウィネヴィアの美貌など目ではない。誇らしいことだ。しかしどう接すればいいのか、つかみかねている部分もあった。

「その、仰々しい喋り方はなんというか、おかしく感じるな」

「私はまだ、ものを知らない子供でしたから。そのせいで、たくさん、迷惑をかけてしまいました」

その眉が申し訳なさげに下がるのを見て、俺は言った。

「そんなことはない。むしろ俺の方が、何もわかっていない駄目な奴だった。お前に、手を上げるようなこととして」

「いえ、それは結局私が原因で…」

互いに譲り合えないのがわかって、また、会話が途切れた。

難しい問題ではあるだろう。しかし、この程度の障害など、これからの積み重ねで乗り越えていけばいいのだ。

一方で、気を引き締めなければならないこともある。俺は彼女のことももっと理解しようとしながら、どうやってこの部屋から、監視所から逃げるかを考え続けていた。大狼に報いを受けさせるかどうかなど、どうでもいいことだ。ミレーヌと共に、どこか、安全な場所へ。

彼女が、俺にシフィオールスと会わせると言ったのは、完全に体の状態が回復した頃だった。できる限り内心を悟らせるような態度をとらないよう、心がけたつもりだ。あとはいつ、彼女と話し合い、ここを離れる算段を付けるか。

俺は反吐が出る思いをしながら監視者の鎧と兜を着て、彼女から剣を受け取った。せめて、自分がなぜ生きているのか、確かめてからの方がいいだろう。幸い、武器の所持は許可されている。思ったよりも逃亡は上手くいきそうだ。などと、浅はかに考えていた。

この時、ミレーヌの視線に対して何の違和感も感じなかった。それもまた、俺がまだ思い込みの激しい愚かな男だった証拠だろう。彼女の純粋な熱のこもった羨望を、深く、考えてみることもしなかったのだ。

監視所の外に出ると、シフィオールスが待っていた。周りには、監視者達が並んでいる。その中に見覚えのある者は一人もない。新たに加わった隊員なのだと、疑問も感じずに納得していた。

「よくぞ、戻って来てくれた。ホークウツドよ」

「はい」

俺の感情は冷え切っていた。何の神聖さもない、ただの獣に見えた。

「…なぜ、俺は生きているんですか」

「鐘が、なったのだ。当代の薪、ロスリック王家が使命を拒否した。君達を含め、歴代の薪の王達が蘇り、緊急措置として、代わりに務めることになったのだ」

激情が深い心の底に沈むほど、長い苦痛を体験したことに初めて気がたさを感じた。自分を抑える必要がない。だが、それでもぶつけたくなる言葉はある。

また、あれを味わうのか。つまり一時的に戻されただけで、哀れな犠牲者には変わりないと。

「それは、想像もつかないような事態になりましたね。わかりました。この身を再び救世のため役立てられることを、光栄に思います」

不意をつけば、こいつらの何人かを殺し、シフィオールスにも多少の傷を負わせることくらいはできる。やはり、このままここにいるのは危険だ。俺は逃亡の決意を固くした。

安堵したような空気が流れた。どこか警戒していた監視者達も、手を剣から離していた。シフィオールスは起き上がると、ミレーヌに向

かって頷いてみせる。

「とはいえ、まだ先の話だ。その前に解決しなければならぬ問題があるが、今は休養が優先だ。彼女との積もる話もあるだろう」

ああ、その通りだ。

俺は内心嘲笑い、部屋へと戻った。

ミレーヌは少し遅れて入ってきた。ファランの大剣を持っている。それから俺の方へと視線を向け、何か含みがあるように、目を泳がせた。

「ああ、予備の剣か。重いだろう。貸してくれ」

彼女は剣を胸に抱いたまま、動かない。

「ミレーヌ?」

「お願いしたいことがあるんですが、許してくれますか?」

「もちろんだ」

その他人行儀な話し方をやめてほしいと、こっちからも頼みたかった。俺がまだ、彼女の変化を受け入れきれしていないのも原因だろうが、彼女が遠慮しているのもまた伝わってきて、やりづらい。だから、少しでも紛らわせようと、俺は何でも聞くつもりでいた。

「もちろん、ホークウツド様にはまだ休養が必要だとわかっています。気が向いたらでいいので、私と手合わせをしてくれませんか? 少しでも、貴方に追いつければと、研鑽を積んでまいりました」

俺は、頷こうとした体勢のまま固まった。よく、彼女の言っていることの意味が理解できなかったからだ。いや、わかっただけはいたかもしれない。だがそれを認めるのを、俺は拒否していた。

「どういう、ことだ」

「その棒きれのような体では、一度振っただけで肩が外れるだろう」

彼女は少し声を低くして、素っ気ない口調で言った。俺の真似をしているらしい。

黙っている俺に向かって、笑いかけてくる。

「そう、言ってみましたね。それなりに、気にしていたんですよ? でも、もうそんなことは言わせません」

彼女は大剣を片手で振ってみせた。その顔には、少女の名残があ

る。何か一つできるようになる度に、俺に見せてきた、得意げな表情。だが、それに対して微笑ましい感情を覚えるよりも前に、ふつつつと込み上げてくる何かを感じた。

フアランの大剣は、華奢な女性が扱えるものではない。ミレーヌは確かに体も成長していたが、戦士と言えるほどの筋肉がついているようには到底見えなかった。

見た目にそぐわない力。俺には、心当たりがあった。

嘘だ。そんなはずはない。

認めたくなくても、確かめなければならなかった。

「上を、脱いでくれ」

「はい。…はい？ すみません、何と？」

「上着を脱げ」

言われた彼女は何度も瞬きし、左右に視線をさまよわせた。ホークウッドが近づくと、狼狽したように剣を壁に立てかける。

「確かに鎧を着なければいけません、あの、もう私は自分で着替えられるので」

少し早口で拒否しようとしている彼女の肩を掴んだ。そして、上着の裾をめくる。

俺は深く目をつぶった後、長く息を吐き出した。

彼女の肌は、打撲痕や浅い切り傷で汚されている。馴染みの深いものだった。俺も、厳しい訓練の時の傷が残っている部分がある。彼女が剣を学んだというのは、本当のことなのだろう。

問題なのは、鳩尾と腹筋の間に醜く広がった、円状の傷跡だった。完全に塞がってはいるが、定期的に痛むであろうことは、俺が身にしみてわかっている。

「私も、誓約を交わしたんです」

わからない。

「だから、ああ、本当に、夢のようで。ずっと、夢見てきました。貴方と一緒に、使命を果たすことを。これ以上の喜びはありません」

なぜ彼女は、こんなに褒めてもらいたい顔をしている？

新たな発見だった。怒りは長く続かない。そのことを、俺は火に捧

げられる事で学んだ。そして一度冷めた心は、二度と燃えることがない。そう、思い込んでいた。とんでもない。

俺は再び、激情に支配された。

剣を取り、引き止めるミレーヌを振り払い、再び外に出た。監視所前には相も変わらず、巨狼が座している。その姿を見た途端、目の前が真っ赤に染まっていった。

「約束をたがえたな。シフィオールス」

「何事だ」

俺は剣を抜いた。直後、狼の周りにいた者達も、刃を向けてくる。数は四。正面から挑んでも今の状態では厳しい。だが、俺は冷静ではなくなっていた。

「とぼけるな。彼女を、幸せにしると、俺は頼んだはずだ。それが、どうして、こんな事になっているんだ！」

「そのような口を——」

咎めようとした騎士の一人を、シフィオールスは遮った。

「よい。ホークウツドよ、冷静になりなさい。君は、まだ、混乱しているのだ」

「あいつに、狼血を入れたな？ よくも、よくも、そんなことを」

剣を持つ手が震える。両足に力を入れると、鈍い痛みが走った。万全ではない。だが、それがどうした。

「よく聞いてくれ。私は、君の願いに背いたつもりはない」

「何だど？」

俺は一瞬だけ、自分の考えが違っているのではないかと冷静になった。それほど、彼女が狼血の誓いを立てたことに受け入れがたいものを感じていたからだ。

「彼女の意志を、我々が否定したことは一度もない。全て、ミレーヌが望んだことなのだ。剣を収めてくれ。こんなことで彼女が悲しむのは見たくない」

振り返れば、追いついてきたミレーヌがこちらを見ている。彼女は未だに理解できていない様子で、ただ途方に暮れたように、佇んでいた。

「ミレーヌ、そうなのか？」

「はい。今なら、貴方のなされた行動の尊さも、理解できます。今度は私も共に、ご一緒させてください。紛れもない、私自身の望みです」
俺は地面を見下ろした後、剣を鞘に納める。

自分にも、責任はある。幼い彼女の言葉に従っていれば、こんなことにはならなかった。ずっと、そばにいてやれば、彼女が、こんな取りつかれたような目をしなくてもすんだのだ。火に捧げられることを、さも、自分の願望だと錯覚せずにすんだ。

だが、そうだとしても、やはり。

この、獣が悪い。

俺はシフィオールスは睨みつける。

断じて、ミレーヌは、俺の苦しみを理解した上で、同じ道を歩もうとする奴じやなかった。俺の小さな傷でさえ、まるで自分のことのように辛そうに、治療していた彼女が、戦いへ自分の身を捧げるような思考には決して至らない。

自由意志か。結構なことだ。そうなるように仕向けたのは、お前だろう。

シフィオールスは溜息をついた。

「まだ、納得していないようだな。ふう。これを話すのは気が進まないのだが、仕方がない。君は彼女と深く関わった。知る権利はあるだろう」

間を置いてから、続きを話す。

「初めから、決まっていたことなのだ。彼女は、ソウルの器として非常に優れた素質を持っている。我々とは、その構造も根本的に違う。これは当たり前のことだ。そのため、用意された人材なのだから。君と出会わせたその時から既に、こうなることは決まっていた」

ついにほらを吹きだしたと、思っていた。狼の言葉はあまりに、矛盾をはらんでいるように感じたからだ。

「何を、言っている？ ミレーヌは、お前が拾ってきた、ただの、孤児で」

徐々に理解するうちに、俺の思考はまとまらなくなった。

「それは、真実ではない。彼女の目覚めは、予言によって、知らされていた。私は、示された場所へと赴き、棺の中から、見出したただけだ」
「待て。ただ、眠っていたただけだと？　だが、彼女の状態は」

拾われた来たばかりの少女を思い出し、俺はまだ信じ切れていなかった。しかし、これを訊いた途端、シフィオールスが顔をそらしたのを見て、ぞつとするような思いが背筋を伝った。

「お前らが、やったのか？　お前らが、まだ小さかったあいつを」
「違う。正しい認識ではない。彼女は初め、精神が安定していなかった。根拠のない敵意を、我々に向けていて、とても話ができる状態ではなかったのだ。故に、一度、心を折らなければならなかった」
こいつらの罪は二つある。

一つは、まだ右も左もわからなかった彼女を、考える限り最悪の方法で、矯正したということ。　ホークだけ。そう言った彼女の継るような表情を思い出す。あいつには、監視者の全てが恐ろしく感じただろう。だが、それでも、俺にはそんな素振りを少しも見せたことがなかった。

もう一つは、そんな彼女を利用し、俺を何の意味もない非道な使命に殉じさせ、さらには彼女もまた、それに巻き込もうとしていること。許されることではない。あんな思いを、ミレーヌにさせるのか？　真実に気づく寸前まで、それが善いことだと信じさせて。

俺は過去感じた事のない、最高の怒りに身を任せた。

「死ぬがいい、薄汚い獣め」

剣を引き抜きながら、狼のもとへと走り出す。控えていた騎士達が、その間に立ちふさがってきた。複数の刃が迫る中、初手で同時に全てを受け止め、次で強引に弾き返す。そのまま跳んだ俺は、自分の中に薪の力の名残があるのを感じ取っていた。

隙があつたがあえて殺さず、まずはシフィオールスの首を取ることにだけに集中する。あいつに関して警戒すべき、あの剣は監視所の中で祭られたままだ。立ち上がりとうとしている狼に向かって、俺は剣を振り下ろした。

殺せる。そう思った時、剣が割り込んできた刃によって止められ

る。

俺は、瞬きして、金の髪を、呆然と見た。

「どいてくれ、ミレーヌ」

押しつけようとすると、彼女は動かさない。

「お願いです、正気を取り戻してください」

有り得ない力だった。俺に匹敵するどころか、上回っていると言ってもいい。彼女は俺の剣を押し返すと、首を剣の腹で打とうとしてきた。迷いのない、洗練された軌跡。後ろへ飛びのき、それをかわす。俺には戦う気はまるでなかった。彼女と剣を交わすなど、到底できない。

「ミレーヌ、聞いてくれ。狂っているのはこいつらの方だ。お前の、言っていた事は正しかった。一緒にここから逃げよう。お前となら、この狼を殺して」

「——ふざけないで」

失望と怒りのこもった目で、俺を睨みつけた。そこで、ようやく理解する。俺とミレーヌの間には、大きな隔たりができてしまっていることに。

「貴方もなの？ 貴方も、おかしくなっちゃったのね。ほかの同胞と同じように。奴らは皆、目覚めた途端にここから出ていった。何かに取りつかれたみたいだ」

あいつらは、本当に、深淵狩り以外何も考えられなくなった狂人だ。だが、俺には、そんなことはどうでもいい。

「俺は、違うんだ」

「既に反逆の意志を見せておいて、よく言うわ。今さら、」

彼女は歯を食いしばる。

「今さら、何を言っているの？ 火が継がれなければ、世界が、終わるのよ。貴方も、そう言っつて、使命を全うしたはず。誰も、貴方の破滅願望についていこうとする人なんて、いないわ」

俺は頭を抱えそうになった。どうして、わかってくれないんだ。

「こいつらは、お前を道具としか考えていないんだぞ！ いいか、火継ぎは、ただの延命処置でしかない。気づいているんだろ？ 火は代を

経るごとに弱まっている。どうせそのうち、全てが終わるんだ。だから、俺はせめてその時まで」

これ以上、続けることができなかった。彼女は、俺を得体の知らないものであるかのように、蔑視していた。彼女のそんな視線を浴びるのは、耐えられることではない。

何もかも無駄。火の中で嗤っていた、かの者の声が、聞こえてくる。来るべき時まで、ただ時間を稼ぐだけ。俺達は、その程度の存在。

「そこを、どけ」

俺は悲壮な決意を固めた。虚しい思い込みもしていた。シファイオールスさえ、殺すことができれば、きつとこいつは解放される。正しい考え方に、戻ってくれ。そのためには、彼女に刃を向けることもいとわない。

答えないミレーヌに向かって、俺は疾走する。本気だった。本気の力で、彼女と剣を打ち合い、そして、ほどなく負けた。

剣を手から弾き飛ばされた俺は、彼女に向かって醜い命乞いをした。地に頭をつけ、泣きついた。俺もこいつと同じくらい、自分自身に失望していた。彼女からは、多くのものを受け取った。だが、反対に、俺の方は何もできていない。無力さは変わらなかった。

狼血の誓いを解き、雑務など自分のできることは何でもやるという条件で、命だけは見逃された。もう、あいつの中の俺は、無様な男に成り果てている。初めは戻ってくれるかもしれないと、期待していた眼差しは、時を経て、向けてくれることはなくなった。

諦めはしない。

あいつが、俺の一番大事な人が、無意味に死んで、永遠の苦しみに囚われることは断じて認めはしない。それを防ぐことが、蘇った俺の使命だ。生きる理由の、全てだ。

狼血の騎士達が祭祀場に合流するのは、それから少し後のことになる。

妙な気分だ。

右からの一閃、弾かれた勢いで軌道を変え、今度は上から振り下ろす。一度距離を取り、狼血特有の脚力で一気に詰める。

思わず笑いたくなくなったのは、きつと懐かしさからだ。俺の好んだ型とも言えない流れを含む攻撃を、彼女が使ってくるのは、表現しがたい感慨があつた。そしてそれを全て防がれた時の、ミレーヌの驚くましいところえている表情は、なかなか味わい深かつた。ずっと見ていたほどだ。

だが、気を抜けば、すぐに。

ミレーヌの剣撃が、俺の刃にまともに入った。元から消耗していたのもあり、中ほどから折れてしまう。自分が誓いを交わしていた頃は考えもしなかつたが、狼血の剣技を相手にした時最も厄介なのは、敵の武器を非常に効率よく損耗させる弛まない連撃にある。化け物どもと日々戦う者達の技は、実は同じ剣で戦う奴らにこそ本領を発揮するとうわけだ。

もちろん、そんなことは想定内だつた。予備なら、いくらでもこちらに転がっているのだ。

タカキが一瞬で仕留め、使われることがなかつた同胞の武器を、離れながら拾う。彼女は追撃してきたが、俺もまたそこへと向かつて強く踏み込んだ。

相手の刃の力を、正面から受けてはいけない。こいつの腕力は、もはや全ての加護を失つた俺よりもずっと上だ。だから、剛ではなく柔の技を、ひたすら磨いてきた。

二、三度防がれた後、ミレーヌの足が動いた。蹴りをを籠手で受け止めると、彼女は勢いのまま体を回転させ、遠心力の加わつた剣を滑らせる。顎を即座に引き、かすめた一閃の残像が目端に残る。俺は真上へ飛び、彼女の背後に回つた。

体勢が崩れているのにも関わらず、限りなく早く振り向いて、肩を狙つた攻撃を弾いてきた。もう片方に持った短剣を、突き刺そうとしてくる。鮮やかな反撃を、俺は横つ跳びに避けて、持っていた同じ趣向の短剣を投げつけた。彼女は首を動かし、兜で怪我を防いだ。

攻防に区切りがつき、俺は空になつた手をほぐして大剣の柄に沿え

る。

「危なかつた所だ。こんなのは、片手で振り回すもんじゃねえよな」
彼女は息を吐き出し、俺を見る目を細くする。そこには、警戒と、隠しきれていない疑問が、容易に読み取れる。素直だな。俺は、何となく嬉しくなつた。前とは違うようだ。最高の気分ではないが、苦しくもない。彼女と戦うのに、抵抗は感じなくなつていた。そこに意味が、あるからだろう。

「何を、笑っているの？」

顔に出てしまつていたらしい。この場では失礼に当たることだ。

「すまねえな。ようやく望みが果たせるかと思うと、感無量なんだ」

望み、の部分聞いた時だけ、彼女の顔に何かがよぎつた。俺の洞察が間違つていなければ、それは、恐れだ。怯え、とも言える。

「滅亡を望む者同士徒党を組んで、一生懸命ね」

「そうだな。今頃、あの糞狼の首を取つてくれているだろう。俺はあれの遺体を拝みたくてしようがねえよ」

本物の憎しみを込めて言うと、彼女の様子にわずかな乱れも無くなつた。それでいい、それでこそだ。

「…ほぎけ。そんなこと、させはしない。先に首だけになつているのは、貴方よ」

「ほぎいてんのは、お前だろ」

もはや対等の相手として、刃を交えたからこそ、余計に歯がゆい。

「こんなものなのか？ まさか、今の不死隊の隊長が、この程度だとは思ひもしなかつた。何、加減してんだお前。倒すべき相手を前にして、それはねえだろ」

「黙り、なさい。偉そうに言わないで」

彼女は剣を上に掲げる。何かに祈っているようにも見えた。転がっている同胞の死体が、血の色に燃えていく。あふれ出した炎は全て、ミレーヌへと収束し始めた。やはり、火に愛されているのは彼女の方らしい。

「私は、今まで共に戦つてきた、全ての同胞の思いを、無駄にはしない。貴方を殺し、薪を得る」

刃の輝きが増し、彼女の体全体が燃えている幻影を見た。俺はその姿に一瞬見惚れ、深く心を動かされた。ミレーヌ、お前は優しいままだ。その優しさ故に、戻れない所まで来てしまったんだ。

だが、負けるわけにはいかない。お前だけには。

俺は勝手な奴だ。お前の望みよりもはるかに、お前自身が大事だ。彼女は足を一步前に出した。と思えば、鮮やかな炎の軌跡を描きながら、先ほどとは段違いの速さで、突っ込んでくる。俺は大剣を構え、決着をつけるべく、薪の王を見据えた。



「困ったものね。本当に退屈させてくれないわ」

ねえ？ と魔女は下田達を見回した。追いつめられているのは彼女のはずなのに、それを楽しんでさえいるようだ。

下田は、状況を理解しようとするだけで、精一杯だった。この女性のことは忘れもしない。祭祀場を襲撃して、久慈や芳野を殺した。仇だ。

そんな者がなぜ、先生と一緒にいるのか。一番考えられない組み合わせだった。しかも、それなりに親しかったようにも見える。まさか、先生の腕が無くなってしまっていることと、関係があるのではないのか。彼は、脅されて、やむを得ず協力している可能性もある。

「なぜ、お前が奴と」

カルラが、尋ねる。彼女の方が下田よりも信じられない思いでいるようだ。

「聞こえなかったの？ エルドリツチとの誓約を解いたって」

「ありえない」

「あら、そんなに不思議？ じゃあ、証拠を見せてあげる」

彼女はソウルの短剣を作り出すと、おもむろにローブの前を切り開いた。現れたのは、普通の肌だ。下田は目をそらすべきか悩んだが、そんな場合ではないと思いついた。何かがあるのかと身構えたもの

の、彼女の体は至って正常だ。

「クリムエルヒルト…」

「私は、貴方と違うのよ、カルラ。もう決めたことなの。わかった？」
彼女は、手に持つ炎を空に放った。渦巻きながら、それは一回り大きくなり、地下墓の空間を赤く照らす。

「任せると言われたからには、私の判断で動くわ。目的は無駄にでかい獣を殺すことだけど、邪魔したら、全員、殺すから」

言い終えた直後、彼女の炎は消える。そして、下田達の近くに現れた。下田はとっさに逃げようとするが、炎が一向に動かないのを見て、やっとな気がつく。

「そんなことはさせない。貴方には、償いをさせてもらう」

新宮が炎を霧散させる。

それを見て、クリムエルヒルトはつまらなそうに溜息をついた。

「呆れた。前から少しも、成長していないのね」

魔女へと向かって、ソウルの矢がいくつも飛んでいく。その中には、実織が投げた炎の球も含まれていた。相手の力量は、既に嫌というほど知っている。攻撃の隙を与えるのは、一番避けるべきことだ。

だが、それら全ての術は、彼女の目の前で消えた。崩れた、と言った方が正しいかもしれない。形自体が保てずに、自壊したのだ。

ちとせが続けて、出現させたロープを投げるも、クリムエルヒルトの作った細い矢に射抜かれて、呆気なく地面に落ちる。体に巻きつくまでは、従来のものと変わらない。

新宮が大きなソウルの塊を作り出し、大砲のように打ちだす。魔女へと届く前に多数の針になって散らばり、相手を全方位から射抜いた。

言葉に、惑わされてはいけない。前とは違うのだ。自分達は、戦えるようになってる。新宮の技を見て元気づけられた下田だったが、クリムエルヒルトが涼しい顔で立っているのを見て、唾然となった。「相も変わらず、中身のないお粗末な術なこと。よほど教えた人が悪かったのねえ」

彼女の手と、口がわずかに動いたことだけは見えていた。しかし、

なぜ避ける隙もないほどの猛攻を受けて、無傷でいるのか。

実織が一步踏み出そうとした所で、カルラがそれを止めた。

「待て。接近することだけは、一番避けなければならぬんだ」

「何も無いはずの空間に目を向けて、警戒を促す。」

「奴の魔術は、二種に分かれている。我々が目にしてきたものは、ほんの一部ではない。いいか、感覚を研ぎ澄ませ。奴は待ちの戦術を最も得意としている。なぜならば、不可視の魔術をそこらじゅうに張り巡らせられるからだ」

実織のわずか半歩先に、刺々しいソウルの固まりが現れた。もう少し彼女が進んでいけば、直撃していたのだろう。久慈の分身がやられた時も、似たような術を使っていた記憶がある。下田もようやく、この場所の危険性に気がついた。クリムエルヒルト達は、ずっと地下墓で待ち伏せをしていたのだ。自分達を落とした穴のように、仕掛けはまだ、残されているかもしれない。

カルラは、不安げになった下田達に頷いてくる。

「大丈夫だ。私ならばそれに対応ができる。お前達は、援護に回ってくれ」

杖を構えた彼女を見て、クリムエルヒルトは嘲笑した。

「へえ、本気なの？ 今まで一度も、私に敵わなかった貴方が、やるって？ 私がお師様を殺した時も、何もできなかったくせに」

「ああ、そうだな。お前とは対等だと思えたことは一度もない。だが」

カルラは、余裕の笑みを浮かべた。

「お前は忘れてるぞ」

青い光が、魔女と重なる。瞬間、その左腕が飛んでいた。少しだけよろめいた後、即座に横の壁際へと後退する。

光を放つ月光の大剣を啞えたシファイオールスが、唸り声を上げた。

「容赦はしない。ミレーヌと、一刻も早く合流しなければならぬ」

狼が武器を持つという、滑稽にも思えるかもしれない光景は、この場では、とても頼もしく映った。大剣の神秘さにも、理由があるのだろう。

クリムエルヒルトは欠けた腕に向けて奇跡を施す。元通りにする

のではなく、ただ傷口を塞ぐだけの簡素なものだった。それから、不気味に微笑む。

次の瞬間、シフィオールの周囲を何十本もの矢が囲んでいた。彼女は、この瞬間をねらっていたらしい。下田が声を上げる間もなく、一斉に狼へと収束していく。予想される惨劇に思わず目をつぶったが、その前にカルラと新宮が動いていた。

片方が術を消し、片方が同じソウルの矢をぶつけて相殺させる。そしてこぼれた分は、月光の刃によって断ち切られた。

「殺す優先順位を、考えなきやね」

次の狙いへと、魔女は目を向けた。走りながら、ソウルの塊を異なる軌道で打ち出す。全て、新宮へと向かっている。構えた彼女の前に、カルラが躍り出る。ほとんどの塊を同じものをぶつけて散らし、残った一つは狭く厚い障壁で防いだ。

さらに何かを唱えようとしたクリムエルヒルトは、直前でその場から飛びのいた。読んではいたようだが、シフィオールの剣撃を完全にかわすことはできなかつたらしい。ローブの一部が裂けて、そこから血が流れ出ていた。

彼女の余裕ある笑みの質が、変わった。少しだけ息を切らしている。たとえどんなに強大な術士であっても、際限なく行使できるわけではない。下田から見ても確実に、こちらが有利である状況は変わらなかった。

「参ったわね」

だが、彼女には不安や恐れが全く見られない。過ぎた悪戯をした子供を相手にするかのようになり、薄く笑う。手をゆつくりと顔の上の方まで持っていくと、髪をかき上げた。ただそれだけの動作で、纏う空気が一変したような気がする。

「貴方達、それなりに苦しむことになるけど、許してくれる？」

じゅうううと、何かが焼ける臭いがした。赤い糸。薄く発光したそれが、魔女の手から伸びている。その伸びている先へと振り返れば、新宮が首を抑えて地面をのたうちまわっていた。顔を大きく歪め、巻きついたものを取ろうとしているが、触れた指までもが焦げて、炭化

しかけている。炎の首輪。

実織が、数瞬遅れて呟いた。

「さ、な…」

「全員、その場から離れろー」

反応しきれなかった下田は、カルラに無理やり押されて、横の壁へと激突する。頭が揺れる。痛みにも歯を食いしばっていると、先ほどまでいた場所から、炎が噴き上がっているのが見えた。

女の、甲高い叫びが上がる。炎の柱の中で、実織が倒れていた。その姿を直視しようとして、下田は吐き気に襲われる。焼死した人の体を見るのは、これが初めてだった。口を押さえ下を向こうとすると、カルラに首を掴まれ、立たされた。

「敵から、目をそらすな」

二人の女子の体が、消えていく。ああ、そうだ。祭祀場へと戻されるんだ。下田が、実織と新宮が本当に死んだわけではないことに遅れて気がつくが、それが本当に幸運なことなのかはわからなかった。

「いつだ、いつの間に、仕掛けていた」

カルラが動揺している様子で言うのを見て、自分達の状況を知る。優位に立っているというのは、下田の認識不足だった。

「貴方、まさか…」

クリムエルヒルトは、言葉の途中でくすくすと笑う。

「少し不可視化を強めれば知覚できなくなるくせに、対応できるとかなんだとか、大口を叩いていたの？ 今消えた二人、まるで警戒がなっていないかった。貴方の事信じていたんでしょねえ。可哀想に」
「く…」

カルラが動こうとした所で、魔女はおもむろに地面を指さした。

「確か、下に七つ、中空に五つ、上に八つね」

「何を、言っている？」

「仕掛けた呪術の数。まだわかっていないようだけど、私達は待ち伏せをしていたのよ。万全の準備を整えているのは当然でしょう。始まってからすぐに、戦う場所を変えるか、そもそもほかの戦士達と一緒に落ちるべきだった。半端な戦力を連れてきた結果がこれ」

「ありえない。二十の術を同時展開など、できはしない」

「嘘だと思ふなら、それでいいんじゃない？」

もうすでに彼女の呪術の威力知っている者にとっては、犯すべきではない危険だった。この場所は、さほど狭いというわけでもないが、さきほどの術を考えれば、仕掛けたうちの半分でも発動してしまえば、一帯が全て炎に包まれるだろう。

固まりかけた下田の思考を破ったのは、淡い緑の閃光だった。月光の斬光がクリムエルヒルトへと真つすぐ飛び、その胴体を捉えようとしている。彼女は笑みを消して、上に飛んだ。が、少し間に会わず、足の先が切断される。

「惑わされるな。魔女の言葉だ」

シフィオールスは体勢を崩しているクリムエル昼に向かって追撃の手を加えようとした。しかし、その直後、彼の周囲に火球が出現する。炎の気配を敏感に察知し、大狼は、滑らかな動きで月光の大剣をぐるりと回転させた。切り裂かれた呪術が全て、消滅していく。

魔女の手から伸びる炎の鞭も、身をひるがえしてかわし、伸びきったそれを細かく寸断した。獣とは思えないほど、剣を器用に扱っている。

「道は、私が斬り開こう。奴に考える隙を与えるな。仕掛けの維持だけでも、かなり精神を消耗しているはずだ」

カルラがさらに追撃を加える。その魔術を簡単に打ち消すことはできないようで、クリムエルヒルトはさらに奥へと追いやられた。こうした動きが誘導である可能性も、カルラとシフィオールスは理解しているようだ。片方が出現する呪術に対応し、もう片方が相手を抑えにかかると。今まで彼らが互いに言葉を交わしている場面にはおぼえがなかったが、それでも信頼を預け合っているのがわかる連携だった。

ソウルの矢が魔女の頬を裂き、月光の斬撃がさらにその髪の毛を断ち切る。徐々に彼女が追いつめられているのは、下田にもわかった。わかっているはずなのに、なぜか、胸騒ぎは収まってくれない。

クリムエルヒルトが、わずかに指を動かすのを、確かに見ていた。

だが、それが何を意味するのが、下田にはとっさの判断がつかない。そして、完全に彼らの戦いを眺めるだけになつていったのが、油断というほどにはないにせよ、気の緩みを促していた。

ちとせの顔の周りに、一本のソウルの矢が現れる。真つすぐ首を狙つていた。ちとせの反応は決して悪くはなかつたのだ。ただ、その矢の威力が彼女の防御をはるかに上回つていたというだけで、決着はついた。

下田は、動きだそうとする構えのまま、固まった。頭と胴体が分離したちとせの姿を眺めることしかできない。それぞれの部分がほぼ同時に地面に転がった。

まだ魔術の仕掛けが残されている可能性を、考えてもいなかった。その思いはカルラも同じだったようで、わずかであつてもこちらに注意を向けてしまう。瞬間、魔女の口元が嬉しそうに歪んだ。

即座に放たれた四つの火球の内、三つは辛うじて対応した。しかし、間に合わなかつた最後の一つが、カルラの腕に当たる。彼女は一瞬顔を歪めたが、それでも自分の体より、相手へ牽制を入れることを優先した。

その効果はすぐに現れる。今度は逆に、クリムエルヒルトの方が隙を晒すことになった。シフィオールスが電光のように懐へと駆け、魔法の胸を刺し貫く。やや長引きかけていた攻防が、一つのきつかけだけで終わった。

「カルラさん！」

消えていくちとせの死体に足が止まりかけたが、下田は何とか振り払い、カルラへ奇跡を放った。未だ治癒の光を体外で維持することには慣れていなく、それはあくまで応急処置のさらに前段階としてしか機能しない。

「選択を誤った。卑劣な行いをした報いだ」

シフィオールスは、さらに奥まで剣を差しこんだ。クリムエルヒルトはその刃に寄りかかる姿勢になつて、血を吐く。既に流れ出した血液は尋常ではなく、彼女の顔の蒼白さが、致命傷を負つたという確実な証拠になつている。

カルラの方は、下田が放たった奇跡に触れるとすぐに、地面へ倒れた。慌てて駆け寄るも、手と腕の酷い火傷に、動揺しないような心がけなければならなかった。

下田達と、この世界の者達では、怪我の重みが全く違う。カルラは不死ではないのだ。一度死んでしまえば、それまで。絶対に治さねばならないという重圧で手が震えた。

「落ち着け……。大まかに、傷口を塞ぐだけでいい。今はそれで十分だ」
「はい……」

確かに、塞ぐだけなら、下田でも容易だった。手足をつなぎ合わせるよりはずつと簡単だ。千切れた神経を元に戻すのは、イリーナでさえ失敗することがあると彼女自身が言っていた。カルラの傷は、そこまでではない。それでも、最大限集中して、奇跡を施す。もう戦闘は終わったのだと、思いながら。

「フフ」

長く、クリムエルヒルトは息をついた。顔だけをゆつくりと動かすと、シフィオールスを侮蔑の表情で見据えた。

「卑劣？ 貴方が、私に、そう言うのね」

月光の大剣を引き抜こうとするシフィオールスの動きが止まった。なぜなら、もうその必要がなくなったからだ。刃に腹を貫かれていたはずの魔女の姿が一瞬にして消えていた。何かの危険を感じ取ったらしい狼は、すぐに後ろへ離れようとした。

「駄目——」

外側から全ての動きが見えていた下田は、今度こそ声を出すことができた。だが、それだけだ。あまりにも遅すぎた。

シフィオールスの腹から、赤い手が突き出てきた。薄い炎の膜でおおわれているようだったが、その色は普通の呪術の炎よりも、はるかに濃い血のような赤色をしている。狼の口から剣が落ちる。いつの間にか背後にいたクリムエルヒルトは、相手の長い耳にそつと口を寄せた。

「ぐうう……」

「私ねえ、貴方の一族のこと、ずうううつと嫌いだったの。深淵渡りに

付いて回ることにしかできない愚かな獣。ちゃんと全部の内臓を焼いてあげるから、たくさん苦しんでね」

シフィオールの体が炎に包まれた。じたばたと体を揺らすのが、魔力で抑えられる程度のものでしかない。

がつと、腕を掴まれて、下田は我に返った。カルラが、必死の形相で見ている。

「治してくれ。早く、もう少しで動けるんだ。早く！」

一心不乱に指示に従った。無理やり周りのことを自分から締め出して、ただ奇跡を使うことだけに全神経を使おうとした。

「結晶、の娘。お前は、そう、か…、ア」

息も絶え絶えのシフィオールの言葉が、途中で途切れた。はっとしてその方を見ると、クリムエルヒルトに何本ものソウルの針で八つ裂きにされている所だった。下田は言葉もなく、その光景を前にして何もかもが真っ白になった。

魔女は最後に炎の短剣を作り出すと、狼の首へ斬り入れる。肉が焦げるような音を立てながら、まるで食材を分けるかのようにその首を断ち切って、頭だけになったシフィオールに唾を吐いていた。汚らわしいと言わんばかりに。

27. 代償と逃走

嫌な臭いがする。

地面に投げ出された狼の体はそのままだ。霞のように消えることはなく、祭祀場で再生されることもない。つまり、それで終わりだということだった。

「…太陽……」

ほとんど聞き取れない呟きを、クリムエルヒルトは漏らした。その瞬間、彼女の体が、光に覆われる。下田にとっては何度も見てきた色だった。体を癒す、奇跡の光。その密度は今まで見たこともないほどに濃く、その術の完成度の高さが伺い知れる。

下田の意識はシフィオールの死骸に向いていて、無意識のうちにカルラの治療を完了させたことを自覚できなかった。カルラは立ち上がると、当然のように、彼の前に立ちふさがる。

「なあに？」

傷口を癒し終わったクリムエルヒルトは、カルラを見て首を傾げた。

「なぜ」

「そんなに、大きく口を開けちゃって、どうしたの」

カルラの後ろ姿は、酷く打ちのめされているようにも見えた。

「なぜ、奇跡を、使っている？ お前に、そんなことが」

「カルラ、二つに一つよ」

クリムエルヒルトは、こちらへと一歩進んだ。

「もう、目的は果たしたし、上に戻らないといけないの。貴方達は、黙って、そこにいればいいから。戦う必要もないでしょう？」

「そう、だな」

魔女は頷いてから、上の天井に穴を開けようと、魔術を構える。直後、その矛先を、隙を突こうとしていたカルラに向け、情け容赦なく解き放った。彼女の胸にいくつもの穴が空き、その一つ一つが取り返しつかないものだった。

大量の血がかかるのにもかかわらず、下田は継るようにして倒れ行

く彼女の体へと飛びついた。自分でも意味のわからない呻き声を発しながら、後先考えずに全力で奇跡を発動させる。自分の治癒の光が、これほど心細く感じたことはなかった。

「気持ちが悪い」

クリムエルヒルトの声が、すぐ上から降ってくる。自分もやられるのではないかという心配は、下田の頭にはなかった。もはや全てが吹き飛んでいた。

「貴方、この坊やに尽くせば、償えるとも思っているのね。いない者の影を重ね合わせて、醜いとは、思えないの？」

駄目だ。全然足りない。下田は震える手でヨルシカからもらった聖鈴を取り出した。祈りを込め、三度横に振る。小さい紋章の輪が広がって、カルラの治癒速度がやや早まった。

大きく息を吸い込む音が、聞こえてきた。

「坊や、それを、どこで、手に入れたの…？」

その声に潜む激情に怯みかける。首元に手が伸びてきて、思いつきり引つ張り上げられた。目の前には、全ての感情を消した、ぞつとするような魔女の顔がある。

「あぐ、」

「答えなさい。この鈴をどこで手に入れた」

「はな、して」

下田は必死にカルラを見ていた。どんどん彼女の顔から色が失われていくのがわかる。元々ぎりぎりの見立てだったのに、中断してしまえば一気に望みはなくなる。

なりふり構わず、下田は拙いソウルの矢を作った。それをクリムエルヒルトに向けて発射する。彼自身でさえよけられるような、だらしない速度だった。それ故に、彼女に避けるまでもないという油断を与えることができたのだろう。

彼女の手によって、矢が分解されていく。だが、なぜか先端部分だけは最後まで残った。その時初めて、クリムエルヒルトの注意が揺らぐ。ほとんど原形をとどめていないソウルの矢が彼女の手刺さり、下田は解放された。

「そう。話す気がないのなら、貴方を拷問するわ」

だが、一步も踏み出さない内に、彼女はびくりと下を向いた。信じられないものを何とか飲み込もうとする間が空いた後、苦々しげに舌打ちする。何か、想定外のことが起こったようだった。

彼女は転がるヨルシカの聖鈴を拾い上げると、あつという前に上の方へと向かっていった。

残された下田は、辛うじて呼吸するカルラに這い寄る。もう時間はない。治す前に、あまりに多くの血が流れた。彼女の体力が尽きる前に、傷を治しきることはできない。

「嫌だ、カルラさん、そんな」

忍び寄る死を間近に見る経験は、二度としたくないと思っていたものだ。この人には、何の恩も、返せていない。迷惑ばかりかけていたというのに、こんな終わり方で何がいいのだろうか。

奇跡の光が弱まりつつある自分の手に、いつの前にか女性の白い手が寄り添っている事に気がつく。その腕をたどり、少し上を見ると、人の道を外れた美しい顔が視界一杯に広がった。

その目は、問うように、下田へ向けられている。

彼はもちろん、即座に頷いた。得体が知れなくても、理解できていないとしても、何か方法があるのなら、それにすぎるしかない。

女性は切なそうに眉尻を下げ、小さく口を動かした。直後、まばゆい閃光が、下田の手から広がっていく。その激しくも優しい光に、下田は言いようのない安心感を覚えていた。



最後に残った大剣を、拾い上げる。

もちろん、その行動の代償はそれなりに高くついた。炎の刀身が左肩に食い込んでくる。腕の根元ごと斬り落とされる前に、何とかホークウッドは横へと逃れた。そんなとっさの、苦しい回避へ、ミレーヌは何なくついてくる。

初めからわかっていたことだ。ホークウッドは傷の痛みで朦朧となつている頭で自嘲した。勇んでみた所で、開いた実力を埋められるはずもない。あらゆる準備も付け焼刃でしかなかった。

一撃を耐え抜いた剣は、反撃に転じようとした時点で、既に崩壊していた。苦し紛れに投げつけたそれを、彼女は何なく弾く。

一步下がろうとしたホークウッドは、首に刃を突きつけられ、苦笑した。時間を引き延ばすのも、限界がある。内心では、じりじりと焦りが大きくなってきた。他の者達が落ちて行つた穴を一瞥するも、誰の気配もない。

表面上、潔く降伏した彼を見て、ミレーヌは渋面を作った。

「舐めているのは、どっちよ。手を抜いているのは、貴方の方じゃない」

「なんだって?」

彼女の持つ剣が少し震える。

「前の、あの時の方が、ずっと強かった。ふぎないで。これは遊びじゃないのよ」

「ああ。俺は本気だ」

「どっこが…」

自分の当たり前が、相手にはわからない時もある。ホークウッドは、知らなかつたのかと言わんばかりに、あつけらかんと口を動かした。

「大事な女を傷つけられるわけねえだろ」

言い切ると同時に、彼は懐に手をやった。相手の剣は動いていない。数瞬の中で、彼はさらに苦笑を深める。言葉の一つで揺れるような心を、まだミレーヌは持っているということだ。そもそも、彼の武器を破壊した直後にその首を飛ばせば済む話だったのだ。

取り出したのは、事前にクリムエルヒルトから貰つた短い杖。これには彼女の簡素な魔術が一つだけ込められており、ひとたび振るだけで発動する。その軌道はごく単純で、威力も抑えてある分、速度が増大している。ほとんどの者には捕捉できない、こけおどしのようなもの。

放たれたソウルの弾がミレーヌの手に当たり、大剣を弾き飛ばした。ほぼ同時にホークウツドは反対の手にも蹴りを入れ、短剣も落とさせた。これで、相手も自分も丸腰だ。

落ち着いて話を。そう言おうとした所で、彼女が懐へと飛び込んできた。思わずその体を抱きとめる。突然の奇妙な行動の答えを、腹を貫く金属の感触で理解する。

「嘘をつく所は、変わってない」

彼女の重さに押される形で、ホークウツドはその場に崩れ落ちた。顔をやつとの思いで動かして、体に突き刺さる大剣を見た。己の死の感触を確かめるように、ミレーヌが握っている柄へ、手を合わせる。「なんで、だ」

一瞬前まで、彼女は何の武器も持っていないはずだった。左を見る。狼血の大剣が、確かに地面に転がっている。決して幻ではない。もう一本をどこに隠し持っていたというのか。それを、いつ、構えたのか。限らない一瞬の間に。

彼の疑問が伝わったのか、ミレーヌは少しだけ表情を緩めた。どこか諦めた様子だった。

「別に。たいしたことじゃない。ただ、インベントリから、取り出しただけよ」

訳がわからない。そしてもう限界だ。

ホークウツドは息を吐き出しながら、後ろへ倒れた。その動きに、びったりと、ミレーヌがついてくる。剣をしっかりと握りながら、彼の胸へ顔を落とした。血がたくさん髪に付いてしまっているが、あまり気にしていないようだ。

彼女の吐息が、胸を通して伝わる。ホークウツドに刺さる剣から、力が抜けたように彼女の手が離れて、肩を叩いてきた。苛烈な今までの動きとは程遠い、弱々しい拳だった。

「懂れて、いたのに。貴方のようになりたいと、ずっと、思ってきたのに」

まるで全ての重荷が外れたかのように、ミレーヌの声は幼くなっていた。

自分にそれだけの価値はないと思っている彼は、その言葉を死出の手向けとして受け取っている。だが、一つだけ、否定しなくてはならないことがあった。

「あれは、嘘、じゃねえ」

自分の中で、決して変わらないもの。

「お前は、俺の救いだった。くそつたれな使命なんかよりも、ずっと大事だった」

「もう、いいの」

疲れたように、彼女は漏らした。ずるずると顔を上げて、軋むような微笑みをする。また、いつの間にか短剣を握っていて、その刃を自らの首に当てている。

早く、早く、早く。ホークウッドは、手遅れになりかけている状況の中、ただひたすら待ち望んでいた。

「貴方のソウルを吸収したら、すぐに、私も同じ場所に行くから。それで、いいでしょう？　一緒に薪として、世界を救うの。こうするしかないの」

出血で意識を失いつつある。今ここで自分が死ぬことよりも、その後、彼女が自分の後を追う事の方が嫌だった。一緒かどうかなど、意味はない。あの、燃やされる苦しみの中では、他人を認識する余裕などない。永遠に、孤独の苦痛が続くのだ。

下に行った、仲間ともいえる者達へ文句を吐きかけた所で、ようやくホークウッドは、開いた穴から出てきた人物と目が合った。出てきたのが一人だけなのは計画外だが、彼女はやり遂げたようだ。

ならば自分も、役に立とう。

「それも、いいかもしれねえな」

ホークウッドはミレーヌ以外を完全に捨てきった目をして、彼女の頬に辛うじて手で触れた。

その意識を完全にこちらだけに向けるため、言葉をつないでいく。

「お前と一緒なら、悪くねえ」

それはほとんど本心だった。両者とも無事に生きているという大前提以外は。ミレーヌも、その瞳に疑いを浮かべずに、そつと、目を

閉じる。おそらく、自分の血で染まるであろう彼の顔を見たくはないのだろう。だからこそ、ホークウッドは微妙な気分になっていた。

恨まれるのなら、それでもかまわない。

ミレーヌの首に、魔女の手が触れる。反応は一瞬だけだった。体を痙攣させ、目を大きく開いた後、その瞼の重さに耐えられないかのように、目が閉じていく。彼女の全体重を預けられ、たまらず血を吐いた。

「遅すぎないか……。死ぬ、ところだったんだぞ」

「抜くから。歯でも食いしばりなさい」

何か皮肉めいた返事を返す前に、腹に刺さった大剣が引き抜かれた。内臓を滅茶苦茶にかき乱されるような激痛が襲い、そして瞬時に和らいでいく。おぼつかない視界では、クリムエルヒルトが、奇跡で急速に彼の傷を塞いでいくのが映る。

彼は立ち上がると、重心を安定させてから、長く溜息をついた。それから、倒れるミレーヌを少し不安そうに見る。

「大丈夫なんだろうな?」

それは、ミレーヌへの心配だけではなかった。クリムエルヒルトの方も、亡者のような顔色をしていた。片腕も、なくなってしまうている。なぜ、彼女がそんなに損耗しているのか。貴樹と一緒になら、問題はなかったはず。

「二度しか言わないから、よく聞いて。その子を担いだら、私に触れて。地底湖へ移動するわ。貴方は、そこへ着いたら、何が何でも、戦って、二人を守って、逃げてほしいの。いい? 私は、もう限界だから。戦力になるのは、貴方しかない。二人は、何としてでも」

苦しそうに言うのを、ホークウッドはミレーヌを抱きかかえながら聞いていた。

「それは、どういう?」

聞き間違いだと思っただので、疑問を表した。彼女の言葉には、貴樹の力がまるで考慮されていないのだ。それどころか、彼をあたかも：

「タカキは、一緒にやねえのか」

がっつと、腕を掴まれる。見れば、彼女は必死の形相で、何かを唱え

た。

つまり、質問すら許されないらしい。法王の居城でも経験した、周りが光で塗りつぶされ、自身の体が捻じれていくような感覚に侵される。ホークウッドは、その最中に聞いた、彼女の僅かな返答を、信じられない思いで受け止めた。

「彼とあの子が、殺される」



首を大きく振って、火守女を前方へと放り投げる。直前までは予定もしていなかった行動だ。彼女をあまり自分から離しておきたくはないが、肉片や血で汚さないためには、やむを得ない。

地下墓のさらに下には、広大な空間がある。周りの温度が急激に上昇し、浅い湖がほぼ全ての地表を覆っている。祭祀場から来た者達の内、今回の目的にはほぼ無関係、つまり邪魔な者達を隔離しておくための場所だった。

素直に落ちて行きながら、貴樹は眼下の巨大な芋虫じみた生物を見た。その対処に、ジークバルド達が手こずっている様子も。その怪物は図体に比して生命力が有り余っている上、意外にも俊敏な動きをする。

だが、下に落ちた者達全員にかかれば、それほど苦戦する相手でもなかった。だというのに、貴樹の予想以上に長引いているのは、それに対応しているのが、ジークバルドとグンダしかいないからだ。他は全て、もう一つの脅威にかかりきりだった。

（老王が、何でここまで出てきてるんだ？ バリスタを無理矢理破壊したからまずかったのか）

デーモンの老王は、炎の陣を張って、容易に相手を近づけさせない。戦士達は、慎重に、その守りを削ることに専念しているようだ。そのためか、幸いに、アンリとホレイスもまた特に傷付いている様子もない。

貴樹は一息つくくと、左脚を後ろに曲げ、右脚をさらに突き出し、全体を針のように固めた。加算されていく運動力が、彼を凶器に変えていく。あまり精密な計算をしないままだったのが、ちょうど巨大芋虫の胴体に足の先が当たった。

人の身なら金属に匹敵する外殻の固さで、体のはじけ飛んでいる所だろう。もちろん、貴樹の体はいとも簡単に生物の肉を潰し、衝撃をもって押し裂きながら、湖の地面まで着地した。

ほとんど真ん中から二つに裂かれた怪物は、のたうちまわってから徐々に動かなくなっていく。貴樹は閉口しながら埋まった肉の塊から抜け出し、落ちてくる火守女を衝撃をほとんど吸収するように、上手く全身で受け止めた。

汚れた足や膝などをばしやばしやと湖で洗いながら、デーモンの老王へと進む。途中、ジークバルドと目が合ったが、特に何も言うてはこない。貴樹としては助かる思いだった。もし、火守女をどうこうするつもりなら、今の体の状態だと、手加減が難しかったからだ。

「貴方は、」

ヨルシカが、こちらを振り向いて驚いた様子になる。何やら身構えているが、それも彼は無視をした。

飛んできた火球をいなしたアンリに向かって、貴樹は近付いた。彼女とホレイスはかなり疲労しているようだ。デーモンの攻撃を一番前で対応しているのだから、当然とも言える。どちらかといえば、一見比較的平静に近いホレイスの方が、深刻だ。

「少しの間で、いいんです」

アンリが貴樹へ向いたと同時に、彼は狙ってきたデーモンの槌を蹴り返した。唸りながら、相手は一步下がっていく。

あまり良くわかっていない様子の彼女へ向かって、火守女を優しく近づけた。

「彼女を、お願いします。あれを片付けるまで」

少しだけ戸惑っていたものの、火守女の体をしっかりと受け取った。貴樹をそれを確認した後、デーモンに向かって歩き始める。アンリなら、いきなり殺すようなことはしない。さすがに火守女を抱えた

ままでは、かなりやりづらかった。

『珍しいな。お前が、火守女を誰かに託すなんて』

(アンリちゃんくらいだろ。俺よりも、ひもりんの事情を知ってる。あの時、ひもりんが薪として捧げられなければならないと言われた時、もし、俺が何も言わなかったら。何か反論をしていたのは、多分、彼女だ)

『エルドリツチの子、か』

(ちゃんと、話は聞かないとな)

デーモンの老王の顔を、踵で潰す。さらに、四肢と、鈍重そうな胴体を念入りに破壊した。死にかけとはいえ、急所をいくつか潰したくらいで止まる相手ではない。体外へと漏れ出る炎の気配が完全になくなるまで、一方的な蹂躪は続いた。

ただの亡骸になった老王が、霞へと変わり始める。むき出しになったソウルが全て、貴樹の体へと吸い込まれていった。

『まあまあ量の量だな』

(で、何か新しい力は?)

『何も起きねえな』

(ち、使えない)

ボルドを倒した時に得た、篝火間の移動能力。それに匹敵するものを期待していたのだが、空振りに終わったらしい。質や量が、必ずしも関係しているとは限らないようだ。

貴樹は、周りを囲まれ始めている事に気がついていて。突然手助けをしてきた彼に、驚くことはあっても、結局、目的は食い違っている。これ以上何も起きないのなら、ホークウッド達との合流も視野に入れた方がいいだろう。

小走り、火守女の所へと向かう。期待通り、アンリは彼女を他の者達に引き渡すことも、自分で人質に取ろうともせずにはいた。だが、それは、たんにアンリの意識がほとんど相方へと向かっていたせいかもしれない。

「ホレイス?」

目以外全てを覆う兜を見に付けた、寡黙な戦士は、限界を迎えよう

としていた。アンリの呼び声にも答えず、うずくまり、全身を痙攣させる。その異常な様子に、彼女は慌てて駆け寄った。

「駄目だ！」

アンリの体を、貴樹は足で無理矢理押しやった。後ろへたたらを踏んだ彼女は、信じられないと言わんばかりに、彼を見つめる。

「何を、」

疑問の言葉は途中で途切れた。その瞬間から、周りの者達の注意も、貴樹から逸らされる。視線を一身に集めたホレイスは、胸を掻きむしりながら、上を向いた。苦しげな声が漏れ、変化はあつという間に起こる。

ホレイスの肩から、黒い膿が湧きだしてくる。みるみるうちに上半身全てを覆うと、急激に膨張し、先端の部分が裂けて、大雑把な口を形作る。肥大しきつた胴体に似合わない貧相な両腕が飛び出し、醜い産声を上げた。

「ホレイス、正気に」

戻って、と続きは唇の形だけになる。アンリは、下唇を血が出るほどに噛みしめた。目の前の光景から顔をそらさないよう、必死に耐えているように見える。

かの騎士、ホレイスは寡黙な者として、貴樹と出会った。しかし、その言葉を発しない態度は、彼本来の性格というよりは、狂気の寸前で踏みとどまっているが故の、危うい均衡の上に置かれた苦しみの証左だった。エルドリツチのもとで囚われていた時に、埋め込まれたのだろう。化物の膿を抱えてもなお、今まで進んで来られたのは、アンリとの絆のためか。

ヨルシカ達が、一斉に、ホレイスへ向けて攻撃を構える。膿に吞まれたものは、例外なく破壊の化身となる。もはや、手遅れということだった。

そんな彼らの前に、アンリが進み出る。

「待ってください。どうか、私に」

彼女は自分の手で決着をつけることにしたようだった。何かを固く決心した目で、化物を見つめる。そこには、動揺は一見ないように

思われる。振り払ったというより、そういったもろもろの感情は全て、脇に押しやっているといるという感じがした。

無論、そんなことをさせる貴樹ではない。

アンリの肩を優しく掴むと、後ろに下がらせる。

「何を」

「まだ、諦めちゃいけない。僕に任せてください」

貴樹は異形と化したホレイスへ歩き始める。

思えば、やはり、この地底湖へ落としてしまったのが一因だった。かなりの申し訳なさを感じつつも、これで良かった面もある。放っておけばどの道、いつか決壊していただろう。その時が来るまで、ずっと見張るわけにもいかないのだ。

膿の怪物が、貴樹を食らわんと飛びかかってくる。紙一重でかわし、その流動する胴体へと、手をつ突っ込んだ。既に何度も行っていることだったので、絶対に成功するという確信があった。

彼の突き入れた手から、鮮やかな炎が広がっていく。膿は暴れることを辞め、明らかに激しい苦しみを訴える鳴き声を発した。その炎が全体を覆う時には、膿の収縮が始まっていた。見る見るうちに焼け落ちていき、人らしい形を保ったホレイスだけが無事に残された。

最初はただ見ているだけだったアンリは、はっとしてその倒れゆく体を支えた。確かめるようにしてホレイスの顔を何度も触り、徐々に表情を綻ばせる。

「うそ。信じられない。ああ、ホレイス……」

貴樹は、非常に満足そうに、頷いた。

アンリとホレイスは、報われない運命をたどる。どれだけ分岐を探しても、必ずホレイスが死ぬのだ。その悲劇をアンリが乗り越えたとしても、エルドリッチを殺した後、後を追うようにして、息絶える。非常に納得のいっていなかった二人の物語を、変えることができたのは嬉しかった。誰でもない、この自分が、この手でそうできたのが。

『おい。救うのは結構だが、残り火の数も気にしろよ』

(いいじゃねえかよ。あと十個以上もあんだろ。本当に便利だなあ。思っただが、この残り火をエルドリッチにぶち込んでやれば、簡単

に滅ぼせそうだ)

ふと、喉の奥でむずむずとしたものを感じ、彼は礼儀正しく口を手で覆った。違和感を紛らわせるために、軽く何度か咳をする。

(まあ、これでやるべきことは終わったんだ。さっさとひもりん抱えて上に戻るか。ん?)

何かがおかしいことに気がつき、もやもやとした何かを取り払うように思考する。デーモンは既に倒されているし、ホレイスも気を失ってはいるが無事だ。アンリが何かを言いたげにこちらへ近づいてきているのもわかる。では、この変な違和感は一切何なのだろう。

ごほごほと、また咳をした。

咳。

何の変哲もない当たり前の行為だ。肺に入った細菌を外へ吐き出すためとも言えるし、他人にそれをばらまく行為だとも言える。だが、よく考えてみれば、彼はこの世界に来てから一度たりとも、咳やくしゃみをしたことがなかった。

アンリが、大げさなほどに目を見開いた。

赤い血が、彼の掌にべつとりとくつついている。ちょうど咳をした時、口に当てた部分だ。妙に暖かい。

(…あ?)

思わず一步下がろうとして、大きな壁にぶつかった。やけに水気のある壁だ。自分の近くにそんなものがあっただろうかと、捻じれていく頭の中で考えた。

『タカキ、おいタカキ！ 起きろ！ 畜生、まずい』

壁ではなかった。彼は倒れていた。

両足を辛うじて動かし、水面を波立たせる。眼前の水が、赤色に染まっていく。口からだけではなく、どうやら目からも流血しているようだ。血の色素が滲んでいく様子がまるで、広がっていく炎のように見えた。



ホークウッドは再び視界が明瞭になった時、理解に苦しむような顔をした。直前に言われた、クリムエルヒルトの言葉を飲み込む途中で、その光景を目にすることになった。

手の持った短剣を、投げつける。今まさにアンリの頭を叩き潰そうとしていた男は、器用に大剣の腹で受け止め、悔しそうな顔をしながら、下がっていく。

「おい、また余計なのが湧いたぞ。死——ぐあああああ！」

確か、灰の一人だ。貴樹に次いで体格が良く、その傲慢さを隠そうともしない。ウベと呼ばれている男は、既に炎に包まれていた。やったのはクリムエルヒルトだ。

しかし、彼女は直後、ホークウッドに向かって倒れてきた。片手で抱きとめると、苦しそうに目を閉じて、息を荒げている。明らかな気力切れだった。限界だというのは本当だったらしい。

ミレーヌと彼女を何とか抱えながら、倒れている貴樹に近付いた。目立った外傷はないが、彼もまた、意識を失っている。どういうことだ。ホークウッドは途方に暮れた。何で、また肝心な時に、あんたを頼れないんだ。

「こんな、糞みたいな状況で。」

「二体、どういうことですか。アンリ」

ヨルシカ達が、貴樹や火守女を狙うのは理解できる。しかし、彼女らの前に、アンリとホレイスが立ち塞がっているのは、普通ではなかった。少なくとも、ホークウッドには混乱しか招き寄せない。

二人は、既にかかりの傷を負っている。アンリは兜が取れ、額から血を流していた。ホレイスの鎧の一部には穴が空き、血にまみれた傷が露わになっている。

「使命を、忘れたのですか」

悲しそうなヨルシカの声に、ホークウッドは肝を冷やす。どう鼻屑目に見ても、彼はこの場にいる戦士達よりも力量があるとは言えない。特に、ヨルシカに対しては、どれだけ気持ち奮い立たせようが、相対できる自信がなかった。

だからこそ、どれくらいかはわからないが、彼女達を相手に貴樹と火守女を守っていた二人を、信じることにした。

アンリは、剣を支えにして、立ち上がる。

「彼には、私と、ホレイスを両方救っていただいた。その恩を、踏みに
じることはできません。そして、」

ふっと、力が抜けたように微笑んだ。

「私は、私とホレイスは、使命などよりも、悲願を優先します。この方
と共に行けば、ずっと容易に叶えられる願いのため。貴方達と袂たもとを分
かちましよう。今までのこと、感謝します」

「そうですか」

直後、彼女の背後に、ずんぐりとした男が現れる。あまりに突然の
出現だったために、ホークウッドは警告できずにいた。しかし、その
心配は杞憂に終わる。

アンリとホレイスはほぼ同時に、小太りの男に向かって刃を走らせ
た。まるで、そこに現れるのがわかっていたかのような動きだ。二つ
の剣は男の首と下腹部を貫き、決定的な致命傷を追わせる。マルド、
という名の彼は、何かを言う間もないまま、ソウルになって消えて行
く。

ホレイスが、こちらに気がつく、無言で歩き、クリムエルヒルト
を抱える。相変わらず得体の知れない男だったが、前とは格段に違う
何かを感じた。

「どう、しますか？」

アンリが前を向いたまま尋ねてくる。

「もう、灰を二人もやった。対立は決定的だ。くそ、こういう時のため
に、タカキがいたんだがな」

そこで彼女は横眼だけ向いてきて、表情を沈ませる。

「彼は、私達のせい、いえ、今は、ここから離れることが最優先です
ね。私が、ヨルシカ様の包囲を引きつけます。貴方とホレイスで、反
対側を突破してください」

「いえ、駄目、よ」

弱々しい声が、アンリの自己犠牲を否定した。ホレイスの肩から、

疲労したクリムエルヒルトの顔が起き上がる。ぐつと震えながら腕を突き出して、自分の足で湖面に降り立った。重心が定まっていなかったのか、かすかにふらふらと、体が揺れている。

ホークウッドはその体を支えようとして、彼女の雰囲気の変化に、驚いた。周辺の温度が増しているような気がする。陽炎のように、その赤い髪が視界の中で歪んでいる。

「残るなら、私が最善。いざとなれば、いくらでも、逃げる手段はあるわ」

それが嘘だと、即座にわかった。彼女が言っているのは、あの、口スリツクも使う移動の奇跡だろう。そんな術を使う余裕が、残っているとは思えなかった。

「死ぬ気が、お前。立っているのもやつとなんだろう」

「貴方は、旦那様と、火守女を守ればそれでいいの。それに、狼血の彼女も大事なんでしょう？」

黙ったままの彼に、クリムエルヒルトはこれで十分だと、背を向けた。火の塊を二つ形作り、匣になる準備を完了させようとしている。だが、ホークウッドがその肩をつかんで引っ張った途端、火は危うげに揺れた。

「無理だ。大の恩人を捨て駒にしたら、俺は自分を許せねえ」

その時ようやく、彼女はまともに顔を合わせてきた。こんなときに何を言うんだという表情だった。

「全員で、逃げるぞ」

無理よそんなの、と彼女は声に出さず口の形だけで言った。ホークウッドの発言に呆れたように目を細め、そのまま流れるように意識を失った。倒れるクリムエルヒルトを体で支える。やっぱり、限界だったんじゃないか。

「どうか、賢明な判断を。貴方達は、優秀な戦士です。火継ぎの使命の重みを、理解しているはずですよ」

未だ躊躇っている様子の子ルシカに、ホークウッドは嘲笑を浴びせた。ほとんどやけっぱちの思いだった。どうにでもなれだ。

「お優しいこったな。竜の血が混ざると、慈悲深くなるのか？」

息の詰まるような静寂が突き刺さってきた。

ヨルシカは、こちらを案じる顔のまま、固まっている。

祭祀場にいる者達が全員理解している上で、触れてはならない領域の話だった。彼女に対する最大限の侮辱だ。

「走れ！」

大声で叫び、全力で走り始める。彼に続いて、ホレイスとアンリも、ヨルシカから背を向けた。包囲の中で一番薄い部分へと向かう。それは、最年少の戦士である、シーリスがいる場所だった。

とにかく地下墓まで戻ることができれば、望みはある。まだ作動していない仕掛けがたくさん残っているのだ。利用すれば、振り切ることができるかもしれない。

狙われているのを理解したらしいシーリスは、刺突剣を構え、正確にホークウッドの首へ突きを放ってきた。迷いのない一撃ではある、しかし、受け流し、反撃を入れるだけの隙があった。

横からの異常な圧力を感じ、とっさにシーリスの背後に回った。そのまま彼女を蹴りつけると、フォドリックは寸前でこともなげに刃を止め、彼女の体をつかむ。値踏みするような視線が、ホークウッドの上下を往復した。

「機敏に動く。前までとは、見違えたの」

「おい、お前もタカキに恩があるんだろ。通してくれ」

フォドリックは首を鳴らした。

「貴様を許す道理にはならない。シーリスを狙った事、後悔することだ」

殺すしかない。ホークウッドは頭の中で響き渡る警告を全て無視した。ヨルシカ、グンダ、そしてフォドリック。どうあがいても勝てないと断言できる内の一人だ。だが、ミレーヌのことを思えば、恐れは和らいだ。

目の前の老人が、視界から消える。左の側面に回られたことを数瞬遅れて理解し、辛うじて剣で攻撃を受け止めた。が、無事では済まない。

刃が、ホークウッドの側頭部に一瞬だけ食い込んだ。あまりの衝撃

で、自らの剣を無理やり押し込まされていた。爺の腕力じゃねえと毒つく間に、二撃目が上から降ってくる。回避に転じようとした所で、右から何かがぶつかってきた。

湖面を滑りながら、壁近くにまで転がる。飛んできたものの正体は、ホレイスとアンリだった。折り重なって倒れる彼らを、ヨルシカが平然と見ている。

包囲は、抜け出せた。しかし、到底これ以上逃げられる状態ではない。結局気合いだけでは無謀を乗り越えることはできなかった。

祭礼場の戦士達が近づいてくる。呻きながら、ホークウッドは近くに転がるミレーヌの顔へ、手を伸ばした。まだ、諦めるわけにはいかない。

今にも剣を振るおうとしていたジークバルドが、ふと、上を見た。疑念が確信に変わったように、大きく警告を発する。

「何か降ってくるぞー！」

それは、ミレーヌのすぐ側に、着地した。

大柄な、老人だ。ぼろぼろの鎧に、赤い頭巾。盾と剣も、万全の状態とは程遠い。やや腰が曲がった立ち方で、その様子は実際の体格にしては矮小な印象を受けた。まるで見た事のない戦士だった。

「何者ですか」

頭巾の老人は、ホークウッド達の方に白い髭面を向けてくる。その深い眼光が、少しだけ思案するように揺れた。

「…多いな」

懐から、一片の紙を取り出す。よく見えなかったが、何かの絵が描かれているようだった。誰もその行動の意味を理解する間もなく、彼はミレーヌにその紙片をあてがった。途端、驚くべきことに、彼女の体が動いた。その小さな紙に無理やり押し込まれるような形で、吸い込まれていくのだ。

「ミレーヌー！」

既に彼女の姿はない。そして老人は、貴樹と火守女にも同じことをしていた。一見ただの紙片でしかないものに、二人が飲み込まれる。

ホークウッドはまるで事態を理解できていなかったが、彼女達と離

れることだけは絶対にあつてはならないとわかつていた。力を振り絞り、老人の方へと向かつていく。

既に、老人は止めようとしているジークバルドとグンダから離れていた。方向的にちようど、ホークウッドと正面から相對する形になる。

「返せよ」

「誤解するな。お前達の敵ではない」

振り出された拳が、いなされ、紙片に当てられる。その瞬間、体全に強烈な引力を感じた。抗つてどうにかなる次元の力ではないと、すぐに悟った。紙片の中にある絵の一部が、どんどん大きくなる。芯に響くほどの寒さを、一瞬だけ感じる。

老人は、小さく頭を下げた。

「哀れな者達を、どうか」

音が、次第に遠くなっていく。この感覚は、クリムエルヒルトの奇跡にも似ていた。両肩を、誰かにつかまれる。どうにかして引っ張ろうとしているようだが、無駄な試みだった。一緒に、紙の中へと取り込まれていく。

こうして七名の者達が、この世界から剥離した。

28. 仲間

初めは興味もなかった。その女は、彼が鍛錬をしている時、いつも見てきていた。互いに全く関わりがない上に、これからもそうするつもりがなかった彼は、些事として受け止めていた。

それが頭の隅に滲み出すようになったのは、そうした日々が幾度も重なった時だ。戦いから帰ってきた後も、出迎えの最後列で身を縮めるようにしていた女が、同じ視線を向けてきた時だった。

何も違いがないということに、彼は疑念を感じていた。

槍を下ろし、鍛錬終わりの沈黙。背後の少し離れた窓で、女が去ろうとしている。その姿を、低く通る声で呼び止めた。

「憎いか」

彼が振り返ると同時に、女もまた恐る恐る体を向けてくる所だった。一歩近づくと、まさに声をかけられたのが自分なのだと、彼女は理解したようで、目を見開く。

慌てて膝をつき礼をした女を、冷たく見下ろした。何か含意があるのなら、それを問いただしてやるのも、やぶさかではない。もしまともな考えでないのなら、首を斬ればいい。

「何と、申されましたか？」

「同族を殺す俺を、殺したいか」

「なぜ、そのようなことを訊くのですか？」

「鍛錬を観察するのは、脆弱な部分を見極めるためだろう。長い間、気がつかないままにいるとも思っていたのか」

女は顔を上げる。血の半分が忌わしい存在に呪われているとわかる。だが、彼はその頬で輝いている鱗を、今すぐに貫き、破壊する気にはならなかった。

「私は、既に火の大王様への忠誠を誓う身。敵を討伐する勇敢な騎士様にどうして、邪な翻意など抱けましょう。貴方様の技には、目を引き付けるものがございます。障りがあるのなら、もう二度といたしません。ここにも、来ません」

言葉は滑らかなれど、後の方になると、女の目は挑むように細まっ

た。その、少しも怯んでいない様子に、彼は意識を改めた。籠に囚われた鳥は、存外、芯があるらしい。

「自惚れるな。お前の存在が、邪魔になることはない。好きにするがいい。だが、妙な考えがあるのなら、捨てておけ。は——、くだらねえなあ」

女が、ぎよつと、目を合わせてきた。その細い首を掴み、乱暴に持ち上げる。

「どの許しがあつて、俺に他人の出来事なんぞ見せてんだ？ カスとカスの乳繰り合いなんて興味ねえんだよ。さつさと解放しやがれ」

女の首を潰す。竜の血を満面に浴びた貴樹は、不快そうに唾を吐き捨てた。

「ゴミが」

水が飲みたいと思つたら、目の前が開けていた。

覗きこんでくる、いくつかの顔。

何度も瞬きをして、次第に視界が明瞭になっていく。誰かの手が、労わるように、肩に掛けられているのがわかる。

「目を覚ましたぞ」

「ああ、本当に良かった」

「静かに。まだ無事かどうか、わからないわ」

クリムエルヒルトが、顔を近づけてくる。貴樹の様子を精細に確かめている。

「自分が誰か、私達が誰か、わかりますか？」

貴樹はそれに、欠伸を返した。ふりではなく、本当に長い間眠つたような倦怠感があつた。彼女がやや戸惑いながら体を引くと、彼は半身を起した。自分自身を取り囲んでいる者達を、一人一人見渡す。いくらか増えている。

「……ハハハハ」

彼をじつと見つめていたクリムエルヒルトが、辺りを見回しながら答えた。

「洞窟の中です。貴方が倒れてから、色々とありました」

「ごうごうと、空気が鳴っている。吹雪だ。よくよく見てみれば、地面や壁には凍っている部分がある。イルシールのどこかだろうか。」

（そんなことより）

「彼女は？」

さらに細かく続きを話そうとした彼女を制して、貴樹は火守女の安否を尋ねた。クリムエルヒルトは少し離れた所で壁に寄りかかっている火守女へ視線を向ける。彼女は寒いのか、体を縮こまらせ、手を擦り合わせている。

無事なようだった。

（ひもりんひもりんひもりんひもりんひもりんひもりんひもりん）

どっと、安堵が全身にすみわたる。ついでに危うく絶頂する所だった。動いている火守女を見るのは、久しぶりだ。目を覚まさない可能性だつてあった。ほつとするあまり、他の者達の沈んだ様子までには気が及ばない。

「意識が戻ったんだ。大丈夫？ どこか」

立ち上がり、彼女に近づこうとした所で、何かがおかしい事に気がついた。

まるで貴樹の声を初めて聞いたかのようにびくついて、彼がいる位置とはわずかにずれた方向へと顔を向ける。か細い声で、話し出した。

「神官さま？ ごめんなさい。周りがすごく暗くて…。なにもみえない。今日、わたしはささげられるの？」

自分が倒れた後の話を聞き、貴樹はここがアリアンデル絵画世界の中だと、断定した。

正直、訳のわからないタイミングだ。本来、ゲール爺と会えるのは深みの聖堂だし、彼が自分から何かの目的を持って接触してきたのは

予想外だった。それが窮地を救う要因になったのは、感謝すべきだろう。

「どうして、二人が一緒に」

アンリとホレイスは膝を地面に付け、何かの格式に沿った動きで頭を下げる。その敬意のこもった礼は貴樹の自尊心を大いに満足させた。

「まずは、感謝を。貴方は一度、危機に陥った私を助けてくれたところか、今度はホレイスを、救っていただいた」

「感謝…を」

貴樹は思わず前のめりになった。その勢いに身を引きかけているホレイスへ寄りかからんばかりに近付く。

「声を？　話せるんですか」

ホレイスは何かを話そうとして、アンリに顔を向ける。彼女のはその意を汲んだようで、少し頷いてから、貴樹へ再び礼をした。

「はい。貴方のおかげで、元に戻るどころか、もう治らないと思っていた喉も。私達は、仕えるべき国を失くしましたが、騎士であることには変わりません。貴方から受けた恩義に報いたいと、私達は望んでいます」

これで、沈黙のホレイスは、もういないわけだ。

「祭礼場へ、戻る気はないんですか。僕についていくということは、火継ぎの使命を捨てるも同然ですよ」

「使命を、二つ背負うことはできません」

傍らの剣の鞘に指をかける。

「どちらかを選び、どちらかを捨てなければならぬとしたら、私達は、あの人食いの喉を刃で貫くことを、選択します」

「僕も、エルドリツチには借りを返してもらおうつもりです。少なくとも、最後のとどめを、貴方達に譲ることを誓います」

アンリとホレイスは、兜を外した。アンリは微笑みを向け、ホレイスは傷だらけの顔に何らかの表情を作ろうとして、諦めたようだ。ただ瞳を、しっかりとこちらに合わせてくる。

「使命は一つですが、義務は話が別です。貴方の助けとなり、共に障害

に對すること。そして、あの子の幸せを、共に模索すること。二つの義務を果たすと、誓います。私達を、貴方の誓約下に入れてください」彼女の言葉を認めるつもりだった。二人が無事だったことも、こうして共に来てくれることも非常に嬉しかったが。

貴樹は洞窟の奥の方を、一瞥してから、息をついた。

「腕を見てください。ここには、前まで、誓約印が刻まれていました。今は消えています」

アンリもまた、同じ方向を向いてから、痛ましそうに目をつむった。「彼女が、誓約主です。ですから、今は、誓約を交わすことは難しい。やるべきことはわかっていますが、整理をする時間も必要です。しばらくは、ここに留まりましょう」

入口から、まず十メートルほど真っすぐな通路が続く。それから、明らかに後から掘られたとわかる三つの横穴で、この洞窟は枝分かれしていた。吹雪はしのげるものの、相当奥まで行かなければ、最低限の暖すらとれないらしい。らしい、というのは、貴樹は一切寒さなど感じていなかったからだ。

「もう少し寄った方がいい。かなり体が冷えているみたいだから」

「うん」

「手を伸ばしてみて。あつあつ、そこ」

「ど、どうしたの」

「いや、ほら、手が肌当たるだろ。俺の首だよ。もっと抱え込むくらいくっついてもいい」

『きも』

クリムエルヒルトが咳払いをした。火守女が怯えたように離れる。貴樹の体は、外から触れると火にかざしているくらい暖かいらしい。彼女の体温を維持するための、合理的な行為を邪魔された貴樹は、渋々クリムエルヒルトへ向き直った。

「説明を、してくれるのか？」

「あちらで」

「ここだ。本人も聞いておくべきだと思う」

「わかりました」

上げかけていた腰を下ろし、魔女は火守女を見据えた。その視線を、以前なら感じる事ができていただろう。しかし、今の火守女は何もない中空を不安そうに見つめている。

「正気を、失う可能性もありました。精神力などという曖昧なものは、エルドリツチの膿に逆らうことはできません。彼女にも、後遺症が残ったということでしょう」

火守女の髪に触れかけたが、先に一度怯えられたのを思い出し、腕を引っ込める。

「記憶の退化。今の彼女は、おそらく、人食いに囚われていた時の子供に戻っています。火守女としての力も失われている。非常に不安定な状態です」

「記憶を、戻すには？」

「元凶である膿は、既に取り除かれています。後は時間の経過に任せるか、何かで失った記憶を刺激するしかありません」

「これは、非常に、繊細な問題なんだ。そうなんだろう？ 焦る必要はない。彼女との、今の思い出を重ねていけば、自然と良い方向に行くはずだ」

新たに、洞穴に入ってくる足音がした。

「賛成です。が、彼女の側にいるべきではない者がいます」

振り返れば、アンリが先ほどまでとは違う、張り詰めた雰囲気で、クリムエルヒルトを睨みつけていた。向けられている本人は、妖しく微笑む。

「あら。それはもしかしなくても、私の事かしら」

「もう、守り手は抜けたと、既に聞いている。タカキさんの協力をしていることも。だが、それでお前を信じられると思うか？ この子のことを考えれば、人食いに与していた魔女をここに置くのは間違っている」

クリムエルヒルトは、指先で杖をなぞる。

「もう一度、私を魔女と呼んでごらんなさい。もう二度と、愛しい弟に会えなくなるわよ」

「お前の喉を潰せば、二度とその名で呼ばれなくなる」

二人は数秒視線を交わした。互いに一筋縄ではいかない因縁があるようだが、今ここで致命的なことを起こそうとする気はないと、貴樹にはわかっていた。

先に動いたのはアンリで、よくわからないであろう状況を黙って聞いている火守女のそばに、腰を下ろす。その目線の高さに顔を合わせて、優しく声をかける。

「私を、覚えていますか。銀髪の子」

アンリの手が触れてきても、火守女は萎縮したりはしなかった。その手を自分の両手で包んで、おもむろに頷く。

「うん、アンリ。あなたがいるなら、ここはまだ聖堂なの？」

「いいえ。もう、誰も怯えなくていいんです。誰も、食べられたりはしません。ここは、あの聖堂からはるか遠く離れた所です」

火守女の背中を労わるように撫でた後、アンリは貴樹へ顔を向けてきた。これから口にしようとする言葉を吟味するように、あるいは自身を戒めるような躊躇いの後、言ってくる。

「この子が、大命を得た時、喜び、安堵する自分がいきました。これで、彼女はようやく意義のある生き方ができるのだと。しかし、貴方の行動で、それが間違いだとわかりました。生きてこそです。犠牲になることへ幸福を見出すなど、宗教的な傲慢でしかありません」

それから、クリムエルヒルトへ、目を向けた。

「信用はしない。それでも、目的は一致していると考えていいんだな？ お前は、この子に害を加えないと、約束できるか？」

クリムエルヒルトは、肩をすくめた。杖を懐にしまい、曖昧な笑みを浮かべた。

「約束はできないわ。だって、貴方と私との間にそんなものが成立すると思う？」

「クリム」

舐めるように火守女を観察していた貴樹が、首を鳴らした。

「真面目に答えてくれ」

「…誓約を交わしたもの。裏切るつもりはないわ。貴方と違って、私

はもう火守女の灰だから」

そう言つて、くたびれたように立ち上がった。

「どこへ行く?」

「邪魔なんですよ? 入口の方を回ってくるわ。吹雪に混ざつて、獣の音が聞こえたから」

クリムエルヒルトの姿が見えなくなるまで、アンリは油断なく睨みつけていた。彼女の、敵の表情は新鮮に感じる。貴樹の視線に気がつくこと、申し訳なさに眉尻を下げた。

「見苦しい所を」

「気持ちわかりますよ。でも、彼女は彼女で働いてくれています。もし、何か問題があったとしても、僕が責任をとります」

(寝返りは癖になるって言うしな。それまでは、利用してやるよ)

「やさしい人だよ」

冷たい打算をしていると、火守女がつぶやいた。二人の視線を浴び、その促すような沈黙に、おずおずと続ける。

「わたし、その、ごめんなさい」

「いや、いいんだ」

貴樹は、胸を押さえた、前かがみになり、何かに耐えるように息を吐き出す。

(ふう——、ふう——)

じとりとした視線を、彼女へ向ける。控え目な姿勢は変わっていない。それでも外見は大人の女性であるのに、拙い言葉の運びが、ちぐはぐな幼さを演出し、新たな魅力を得ていた。ひたすらに途方に暮れている様子も、多分に、貴樹の欲情を誘う。

(バックで犯したい)

『童貞が何言つてんだ』

心を落ち着けてから、彼は火守女と向き直った。

「何か、体に異常はないかい」

「大丈夫。でも」

「うん?」

「あなた達は、私のことを、知っているのに。私は、わからない。聖堂

から、助けてくれたんでしょ。なのに…」

返答を、少し考える。まずは、彼女の微妙な認識違いを丁寧に正す必要があるだろう。

『どうすんだ?』

(彼女は、今、不安で仕方がないだろう。説明は慎重にやらないといけない。下手に動揺させたら、可哀想だ)

貴樹は、火守女の隣で、洞窟の壁に寄りかかった。頭の中で言うべきことをまとめしてから、なるべく噛み砕いて話す。

「それは、正しくないんだ。よく聞いてくれ。君が思っているよりも、多くの時間が過ぎた。今ここでこうしている理由を君がわからないのは、記憶がごっそり失われてしまったせいなんだ」

「きおく?」

「そう。君は成長して、大人になっている。視力がなくなった原因も、覚えているかい?」

「ううん」

(エルドリツチに囚われている間、目を奪われたんじゃないのか?)

いや、単に今の彼女の記憶が、それが起こる前ってだけだな)

「実は、君にはとても大きな危険が迫っていて、その状況を強いていた場所から、僕達と一緒に抜け出してきたんだ。僕は、貴樹。今まで君と一緒に旅をしてきた」

「どうして、わたしはそのことを忘れちゃったの?」

「事故があった。不幸な事故が。そのせいだ。でも、大丈夫さ。必ず全部、元に戻るよ」

彼女は、まだどこか腑に落ちていない点があるようだった。

「どうして、わたしを助けてくれたの? わたしなんて、生きててもしょうがないよ」

「そんなことは…」

思わず強く否定しそうになって、貴樹は抑えた。この自らを卑下する態度は染みついていままなのか。思っているよりも深く、それは彼女の根底にあるようだった。

(慎重に、慎重にだ。ありのままを。正直に話すんだ。その方がいい)

声の調子を落として、続ける。

「どう、話したらいいかな。僕には、そうするだけの価値を、君が持っていると思うている。こんなこと言っても、今は困るだけだろうけど。君は僕の、恋人だったんだ。お互い結婚を約束する関係だった」
『この人……』

正直とは何だったのか。

それまで静かに聞いていたアンリが、啞然として彼を見た。その視線から隠すように顔を俯かせ、貴樹はほくそ笑んだ。

(千載一遇の好機……！ もうさあ、そういうことでよくね？ ぶつちやけ、記憶なんて戻らなくていいだろ)

実際に好意がなくても、かつてはあったのだと思ひこますことはできる。そして、それがいつか本物に変わっていくと、貴樹は信じていた。相手の抵抗が弱いとわかりきった上で、洗脳同然の行為に及ぼうとしているゴミがここにいる。

「こいびとって、何？」

「お互いを、深く愛し合っている二人のことをそう言うんだよ。いや、気にしないでくれ。今は違うんだ。気にしないで」

『白々しいなこいつ』

彼女は首を傾げた。

「あいし……？」

「お互いを大事に思い合うことだよ」

「だいじって？」

貴樹は笑みを消した。まじまじと、目の前の火守女を観察した。

囚われていた頃の彼女は、まだ幼い子供だった。それでも普通なら、理解できるような言葉を用いたつもりだ。信じられないことだが、彼女は愛だとか、そういう本能に基づくものを、まるで知らないようだった。

(これは、エルドリツチの、せいじやない)

わからないのは、与えられたことがないからだ。彼女が生まれてきた時から、与えるべきものを、与えていない奴らのせい。

(ロスリック)

祭議長エンマの、発言。火守女をエルドリツチに引き渡したこと。その事実だけを鑑みても、彼らは、ロスリック王家の長女であるはずの彼女に、まるで情を注いでいないは明らかだった。人食いよりも、優先すべき目標があるのを、貴樹は理解した。

(あいつら、根絶やしにしてやる)

かすかな雰囲気の変化を感じ取ったのか、火守女が落ち着かなげに身じろぎした。

「あの、わからないことばかりで。たくさん訊いてごめんなさい」

内の激情をおくびにも出さず、彼は首を振った。

「謝ることじゃない。不安なのは当たり前だよ。落ち着いて、ゆっくり考えていけばいい。その支えはもちろんするし、君の安全は僕が保障する」

(さっさとこの絵画世界でやりたいことやって、脱出すぞ。ひもりの実家へ挨拶しに行かねえとなあ……)

そう考えて、ひもりんという言葉に違和感を覚えた。今の彼女は、もはや火守女ではない。そう呼ぶのは、違うような気がする。そもそも、彼女には本来の名前があるはずだ。それを呼ぶ、いい機会なのではないだろうか。

「あー、変な話だけど、君のことを、何て呼んだらいいかな。僕としては、できれば、ゲルトロードと、呼ぶのを許してくれると嬉しい」

彼女は沈黙の間を置いた。その様子をドキドキしながら見守る。先ほどの言葉をつつかえずに言えてよかったと考えながら。

少しの逡巡があつた後、ゆつくりと頷いた。

「うん、あなたがそう望むのなら」

「よっ……！　ありがとう、嬉しいよ」

(しゃああああああああ)

素直に喜んでいる貴樹に対して、彼女はまた小さく首を傾けた。



小石が飛んでくる。彼女の本気なら無視はできない凶器になっただろうが、そうはならないとホークウッドは確信していた。頬に当たるのをそのままにする。した事を考えれば、多少の痛みは仕方がないと思っていた。

物を投げるのにもくたびれてきたのか、ミレーヌは遠くに座って彼を睨みつけてくるだけになった。

「満足したか」

大した馬鹿力だ。彼は脇腹や、頬を軽く撫でる。武器をあらかじめ取っておいてよかった。そうでなければ、最初一緒に抑えてくれたアンリやホレイスに危害が及ぶ所だった。

声をかけた直後、額に石がぶつかって来た。まだ余っていたらしい。

「大当たりだ」

「なんで、一緒に死んでくれなかったの」

久しぶりの声に、彼女がようやく会話の意志を示したと、解釈した。なんて馬鹿なことを訊くんだと言わんばかりに、ホークウッドは肩をすくめた。

「そりゃあ、死にたくないからだ」

ミレーヌは鼻で笑う。

「火継ぎがなされなかったら、世界は深遠で覆われる。皆死ぬわ」

「まあな。でも、そうなるまで、まだ時間はある。それで十分だ」

「結局死ぬじゃない」

「いや？ 全然違うだろ」

勢いよく、ミレーヌが立ちあがった。肩を怒らせて大きく歩み寄ってくる。また蹴るのかと若干身構えたものの、彼女はただ見下ろしてくるだけだ。歯を食いしばり、彼の何かを責めるような、眼差しをする。

「はつきり言ったらどうなの？」

「なんだ？」

本気でわからなかった。それよりも生きて彼女と、一応は安全と言える場所まで来れたことの実感が今さらやって来ていて、感慨深いも

のを整理するので手一杯だった。

彼女は深く息を吐き出した。憂いのこもった溜息だった。ホークウツドを見る目が、左右にそれる。

「恨んで、いるんでしょう。私を苦しめたから、生き延びさせたの？ 憎いなら憎いつて、そう、はつきり言つてよ」

ホークウツドは瞬きを忘れた。

「おい、おい待てよ。意味がわからない。お前、何言ってるんだ」

「私が、いたから、貴方は使命を捨て切れずに、火へ捧げられた。地獄の苦しみだったんでしよう。誰だつて、大嫌いになるわ」

「だから…」

彼女の思い違いを正そうと、ホークウツドはその手を掴んだ。が、すぐに振り払われる。二三歩後ずさつて、ミレーヌは彼から逃れようとした。

「誰だ？」

さらに追いかけて、壁際まで彼女を追う。なけなしの拳が飛んできたが、腕で払つて、彼女の肩を掴んだ。さらに暴れようとしたので、押さえつけて、諸共地面に崩れ落ちる。

「はなしてー」

子供の癩癩のようなそれを相手に、体を上へ下へ入れ替わりながら、何とか声をかける。彼女の頬を叩き、しつかりと言いつけさせる。

「誰だ？ 妄言を吹き込んだのは。聞け！ そんな嘘を真実みたいにお前を信じさせたのはどこのどいつだ。シフィオールスか？」

沈黙が答えだった。

あの糞狼。くたばつてからも苛々させてくれる。ホークウツドはできるだけはつきりと、大きな声で、彼女を目を合わせて言った。

「俺が……、こんな事をしたのは、憎しみのためか？ 薪の王となつている間、他の奴らのように狂わなかったのは、誰のおかげだと思つてる」

頭で何度も彼の胸を叩いていた彼女の動きが、やっと止まった。涙で濡れた瞳が、ホークウツドの真摯な表情を映した。

「お前だ。何よりもお前の存在が、俺の救いだ。だから、お前が監視者

になった時、怒りで我を忘れた。どんな手を使つてでも、俺と同じ苦しみを背負わせないと心に決めた。どうして、一緒に死ななかつたかつて？ 生きたお前と過ごせる時間の方が、どんなに少なくても、ましだからに決まつてるだろ！」

彼女の頬に透明な筋が伝つていく。その綺麗な光景が急に歪んだ。目から、熱い何かが流れ出てくる。畜生、何で俺は急に、涙もろくなつてるんだ。自分でもわかつていた。これは未練だ。どうにもならない、悔しさだ。

ミレーヌの呼吸が落ち着いた。気まずそうに横を向いて、小さく口を動かす。

「私は、怖い。深淵の一部、ほんの一部だけでもあれだけ凶悪なのに。もし、火継ぎが行われなかつたら」

「そうだ。俺だつて嫌だ。でも、何よりも俺は、自分の感情を優先した。そういう意味なら、お前の方が、俺を憎むべきなのかもしれない。でも、いいか」

頭の隅で、やめておけと声がする。止まらない。このまま話を続けてしまえば、きっと、最後まで自分は言うだろう。

「深淵を止める術を見つけると、タカキが言っていた。火継ぎとは、別の方法でだ」

彼女がまたこちらを向く。

「そんなの無理」

「無謀だな。だが、俺はそんなのどうでもいいと思つてる。関係がないからだ。どっちにしろ」

喉が詰まったような感触がした。最後の最後で、残っていた自制心が働いたようだ。感情の勢いというのは恐ろしい。その時が来るまで、こいつだけには、話すまいと決めていたのに。

だが、もう遅すぎた。

「なに？」

ミレーヌは、聞き逃さなかつた。隠し続けていた秘密の香りが混ざった、言葉の端々を。

「なんなの。どっちにしろって。なんなのよ。言つて。ホークウツ

ド。言いなさい！」

彼女に揺さぶられるままになっていた彼の顔は次第に苦汁に満ちていった。どうにかして追及を逃れる道はないかと鈍くなった頭で考えるが、彼女の視線にはこれ以上耐えられそうになかった。

不運なことに、話そうとする前に、彼女の直感が正解を導き出したらしい。腹の方に、ぴたりと目を止める。

「上を脱いで」

「いや、俺は、くそ。ミレーヌ、頼む」

彼女の手は素早く肌着をめくり上げてきた。それを止めようとする力が全く入らないのを感じて、ホークウッドは悟る。結局自分は、彼女に知ってもらいたかったのだ。そんな卑怯な気持ちがあったのだ。

大きく息を呑む気配がした。

ゆっくりとホークウッドの下から抜け出し、視線は変えないまま、口を押さえる。ミレーヌに見られたと自覚した彼は、笑みを何とか作ろうと努力した。

「まあ、俺とお前の違う所は」

語尾が震える。

「狼血の誓約から、どう解放されたかだ。俺は奴が生きている間に、無理な形で誓約を棄てた。当然、定められた代償が降りかかるってわけだ」

そうして、あまり見ないようになってきた惨状を、上から眺める。狼血を入れられた部分がどす黒く変色し、腹部のほぼ全てに広がっていた。不義者の腐り。呪いとも言えるそれは、体の機能を確実に奪っていた。発作のように激痛がやってくることもある。血を、何度も吐いた。

「別にたいしたことはない。ちよつとした呪いみたいなもんだ。今すぐ死ぬってわけじゃない。大丈夫だ」

ミレーヌの視線に、揺れることがないようにしながら、応える。今度は彼が、離れていく番だった。しかし、すぐに彼女の手が伸びて、腕を掴んでくる。

「嘘つき」

うそつき、ともう一度ミレーヌは口にした。ぼろぼろと涙がこぼれ出てくる。唇を噛みしめ、こらえるように眉間に皺を寄せて、首を左右に振った。そんな表情から目を背けた直後、彼女の姿が視界一杯に広がった。

重くなった、とホークウッドは妙な感動を覚えた。どうしたらいいものか固まっているうちに、首に手が回ってきて、彼女のすすり泣きが耳元で聞こえた。

「本当は？　ねえ、あとどれくらい、生きていられるの？　ホーク、答えて」

「…わからねえ。だが、どんどんこの腐れは広がってる。そんなに、長くないかもしれない」

正直に答えると、彼女は嗚咽を漏らしながら、少しの間黙っていた。彼の肩に顎を擦りつけ、手を腰の位置まで下ろしてきた。この温もりを。彼は痛烈に思った。この温もりをずっと、味わっていたい。

こみあげる何かを紛らわせようとホークウッドは声を出そうとした。だが、その前に、控え目な調子で、穴の入口から誰かが現れた。「盛り上がってる所悪いけど。これ以上黙ってるとしばらく用事も済ませられないようだから、失礼するわ」

大げさな動作でミレーヌは姿勢を戻し、目元を乱暴に拭いた。ホークウッドからつかず離れずの距離まで下がり、それでも手は彼の体に触れたまま。そんな様子を、クリムエルヒルトは、真面目くさった顔で眺めていた。

「やるわね。あんなに手がつけられない状態だったのに、よくそのままでたらしこめたものだわ」

「黙れ」

ミレーヌの剣呑な目つきを意に介することもなく、そのまま中へと入り込んできた。

「簡単な用事よ。二人に見せておくべきものがある」

手を上向けて、横の何もない空間にかざす。途端、苦痛と未練にまみれた、大狼の頭が出現した。舌がだらりと歯の間から垂れ下がり、

目は白濁しているが、明らかにシフィオールスだとわかる。

放られたそれは、ミレーヌのすぐ前まで転がった。

「おい…」

「証明が必要だと思って。大変だったわ。私一人で始末する羽目になった」

少なくとも憎しみを抱いていた彼にとっても、その遺骸は見てて気分の良いものではなかった。今の、不安定なミレーヌに見せていいものかどうかは、疑問が残る。

「それだけよ。どうするかは、ま、好きになさい」

クリムエルヒルトは背を向け、足早に外へと出ていった。色々と言ってきたことがあったが、追いかけるわけにはいかない。ミレーヌへ目を戻せば、静かにシフィオールスの首級を持ち上げる所だった。

「シフ様。最後は、とても、苦しんだのね」

ホークウツドは何も言えず、己の義務であるかのように、遺骸を目に捉え続けた。誓約はもうないとはいえ、古代より続く崇拜の対象がこんな冒流的にさらされているのは、さすがに忍びなかった。殺したいとは思っていたが、もはや何も残っていない骸まで侮辱する気にはなれない。

だが、それは彼だけの話だった。

両手で丁寧に持っていた頭を、ミレーヌは無造作に落とした。それから足で、反対側の壁へぶつかるまで蹴り出した。転がったその側に再び座ると、拳を振り上げた。彼女の膂力で、大狼の目が潰される。「よくも、」

後には、彼女自身にしかわからない小さな呪詛だけが漏れ出る。爪で毛を裂き、両の拳で頭を陥没させていく。狼血が頬に飛び散っても、少しも気にしていないようだった。そこには、ホークウツド以上の憎悪が滲み出ている。

「似合いの、最後よ、お前なんか、お前なんかお前なんかお前なんか」
見ていることに耐えられなくなって、ホークウツドは彼女の腕を押さえた。内心は、彼女の側にずっといてやれなかった自分を、ひたすら責めていた。

「ミレーヌ。もう十分だ。やめてくれ」

ぱつと振り向いた彼女は、さつきよりも強い勢いで、抱きついてくる。その勢いに押されて、尻餅をついた。クリムエルヒルトがいなくなつたせいか、再び彼女は子供のよう泣き始めた。

「辛かつた、苦しかつたの…」

「ああ」

彼女の頭に手を置く。

「狼の血を、入れられた時、とてもいたくて……、何度も、あなたの名前を呼んだ。でも、あなたは来てくれなかつた。さびしくて、たまらなかつた。なんで、たすけにきてくれないだろうって、すごく、かなしかつたの」

「ああ、わかつてる。俺もお前に会えなくて、辛かつた。一緒にいてやれなかつた俺を、許してくれ」

「ちがうよ、ちがう。あなたの方が、よっぽど。わたし、そつ、それなのに、ひどい態度、ずつと、」

頭を撫でながら、ホークウッドは笑つた。

「今ここで、こうしてる。それ以上の幸せなんてねえよ。気にすんな」「ほーく……」

「泣き虫なのは、ちつとも治つてねえな。背だけは、俺よりもでつかくなつちまつて。剣に、近づけさせたくもなかつたつてのに。今は軽々とふるうようになってやがる。望んでいた形じゃなかつたが、お前は立派になつたと思うよ。俺の誇りだ」

背中を、一定の間隔で叩き、泣きじやくる彼女を落ち着かせる。そうして、言葉のない柔らかな時間が過ぎていく。望んでいた時間だ。自分は今、満足している。そう、彼は考えた。後悔なんてないと。

散々ホークウッドの肩を濡らした後、ミレーヌはようやく体を離した。鼻をすすり、顔を真っ赤にして、ぼうつと前を見ている。その視線を受けている彼は、何となく面映ゆい感じがした。

「でも、なんだ。髪は、切つちまつたんだな。今も似合つてると思うが、もつたいないな。綺麗だつたのに」

「長い方が好き？」

「あー、というか、せっかく伸ばしてたからな」

「また伸ばす」

「そうか」

「だから、」

彼女の表情が歪んだ。

「だから、ずっと見ててよ。伸ばしてる間も、その後も、ずっと。勝手に、もう、私の前からいなくならないで」

「ああ、約束する」

言つてから、きりきりと、胸が締め付けられた。

結局、自分は。

俯いて、彼女は嗚咽を漏らした。彼の腹を指先だけで、触れてくる。

「やだよ。ホーク、お願いだから、死なないで。死なないでよお…」

彼女の髪を梳いてやりながら、ホークウツドは笑顔を作ろうとした。そしてそれは引きつり、鼻頭を押さえて、呻いた。結局自分は、こいつに何も、約束はできないのだと、残酷な現実を受け入れるよう、努力した。

「ごめんな」



(尻か胸か?)

『うーん……、胸だろ』

(ぶつぶつ、正解は、ゲルトルードちゃんの脇でしたアアアアああああああああああああああもう無理いいいいいいいいいいいい突っ込みたいよおおおおおおおおおっ！)

『なるほど』

見た目は同じでも、前までの彼女ではない。それがまた違った魅力をここまです感じさせるとは予想していなかった。簡単に言えば段々と勃起を隠すのが困難になってきた。

ゲルトルードの肩が、当たってくる。彼女は寒そうにしていたの

で、暖は必要だった。そんな言い訳を最大限に利用して、彼はその全身をすぐ側で視姦していた。

「名前を？」

「そうだ。僕達は、互いを親しみを込めて、呼び合っていたんだ。君から、こう、あまりよそよそしく呼ばれるのは嫌だし、ほら、やってみてごらん」

滑るように嘘をつき、貴樹は満面の笑みを向けた。二人の様子を見ているアンリは、ずっと苦笑している。

ゲルトロードは口元を小さく開け閉めする。その唇の動きを、彼に入念に観察されていた。一度躊躇うかのように下唇に力を入れた後、ぼそぼそと声を出した。

「タカキ…さま」

「んっ、く、そう、だね。初めはそこからしておくかな」

ついに灰呼ばわりから脱することができた貴樹は、達成感で、悦楽が背中を駆け巡るのを感じた。アンリ達の目がなければ、この場で海老ぞりになつて、打ち上げられた海洋生物のように体を気持ち悪く振動させている所だ。

(んああああああああああ)

『正直な話よお、お前、いつかは彼女とあれこれやりたいんだろ。精神がもつのか？ 裸見ただけで失神しそうなんだが』

(やめっ、ばかおめえ、今そんなこと言ったら想像しちゃうだろおとおおとおおとおおとおお、ん？ そう考えると、邪魔なやつが一匹いるな。ノミ、お前に見られていると思うと、立つものも立たなくなる) 『おれだつて、見たくねえよ。でも視界を塞いでも音はなあ。塞ぐ手がねえし』

(消えればいいだろ)

『それだと、力も失うだろ』

(力は残して、お前だけどっか行けばいいじゃねえか)

『いやいや、ご冗談を』

(は？ 真面目に言ってるんだが)

『え？』

貴樹は 大きな欠伸をした。

(はつきりさせとこうぜ。てめえ、話すべきことを、隠してないよな？
今まで面倒だったからなあなあで済ませてきたが、わかるだろ。残り火を使うのに、クールダウン以上のリスクがあるなんて、聞いてなかったんだがなあ)

『待つてくれ。それは、実際に起こるまで、おれも知らなかったぞ』
(残り火の精なのにか)

『おれもその自信がなくなってきた。なにせ、この力のことをほとんど知らねえ。自分の存在について、疑問は尽きない』

(記憶がないって言ってたな)

『お前といればそのうちとは思ってたが、思い出す気配すらねえ。ただ言えることは、この力を無闇に消費するのはヤバいつてことだ。これから、もつと考えて使わねえと』

(ふーん)

『…信用が、ないようだな』

(いや、信じるも何も)

『ああ、そうだな。お前は元から、誰も信用していない。自分自身だけだ。一応、お前の人生をさらっと見てきた立場として、疑問があるんだが。お前、それで生きていけるのか。誰も信じねえつてことは、誰の側においても安らぐことがないんだ。嫌になんないのか』

貴樹は内心、この下僕を冷笑した。ま、こいつもか。所詮は道具に過ぎなかった。思考の回転が鈍くて、対等とはとても思えない。

(馬鹿か？ お前はきつと他の人類共と、俺が同じ思考回路を持って行動しているだけでも勘違いしてるみたいだが、間違いだ。奴らは、飼われてる豚と変わんねえんだよ。豚といて、楽しい奴なんかいないだろ。なあ、わかるか？ 俺だけが、選ばれた人間なんだ。この世界に來れたことが何よりの証拠だ)

『あのガキ共のことは？』

(やれやれ、あいつらはな、言ってみれば俺の添え物なんだよ。そもそも、同じ人間と考えるのすらアホらしい。家畜だろ、家畜。そのうち適当に進んで、適当に死ぬだろ)

ノミは察した。この男、戸水貴樹は、歪な成長を経ていた。思春期に陥る、自らへの全能感を失わないまま、大人になつたらしい。しかもそれでいて外面を繕うのが上手く、周りから少なくない憧憬や称賛を得てきたのだろう。始末に負えない。

(信用は誰もしないが、信頼してるのは、いる。俺は、彼女がいるだけで、誰よりも幸福な男だ)

『それが一番、謎なんだがな』

(は？ 殺すぞ)

にこにこことゲルトルードを眺めていると、既に全員がこの場に集まっている事に気がついた。最後に来たホークウッドとミレーヌは、前までとは見違えるほどに落ち着いている。話し合いは、いい結果に収まったのだろうか。

ただ、二人の距離感が明らかに縮まっているのを見て、貴樹は内心舌打ちをした。

(はあ、つまんな。ホークさんの一方的な片思いだと思つてのによく、なにちやつかり幸せになつてんだ？ 惨めなままが一番、似合つてんのに)

『手を貸したのは、お前だろ』

(俺はまだゲルトルードちゃんともともに手すら繋げてないんだぞ。はああ——、むかつくわ)

『結局嫉妬じゃねえか』

ゲルトルードの銀髪を凝視して、ささくれだつた心を慰めていると、クリムエルヒルトが、両手で何かを差し出してきた。

「正面の穴の奥で、こんなものが」

長い骨が数本、そして、何かの生物の頭蓋骨。地面に落とされて、それらは空虚な音をたてた。全員の視線が、その特徴をとらえようと集まる。かなりぼろぼろで、長い時間が経っていることは確かだった。「ここに住んでいた、何かです。頭の形からわかるように、鳥に類するものでしょうか」

長いくちばし、そして自分達とは明らかに違う奇妙な骨格。

「にしては、頭が大きいな。これが空を飛ぶには、相当体や翼が大きく

ないと厳しい。他の骨と比べてみても、不釣り合いな感じがする」
「では？」

貴樹は考え込むふりをした。骨をひと目見た時から答えはわかっていたが、こうしていた方が格好がつくと判断している。だが肝心のゲルトルードには見えていないので、よく考えたら無駄な行為だった。

「二足か、四足か。とにかく歩くものだ。もしかしたら、僕達とほとんど変わらない体をしていたのかもかもしれない」

アンリが、一瞬だけ、洞窟の入り口を見やった。

「この世界の、住人ということでしょうか」

「可能性は高いですね」

（鴉人がなんで、こんなところで死んでたんだ？ 一体だけで。はぐれたのか）

しかし、その考えは観察によって否定された。今度は体の方と考えられる骨を近くで見た所、細かい傷がいくつかあるのがわかった。細く鋭いそれは、牙や、爪でつけられたものではない。

「少なくとも、武器を扱う程度の知能を持つ、生き物がいることは確かです。亡者の線ももちろん、考えられますが。気を抜かないようにしましょう」

貴樹はそこで言葉を切ると、周りの者達を見た。皆、自分が目を覚ました時よりも、様々な疲れはとれているようだ。

「吹雪が止むまでは、ここにいきましょう。収まったら、全員で、周りを搜索します。元の世界に戻る手がかりを、見つけなければ」

本当は、ゲルトルードを連れて行くのは最善とは言い難いかもしれない。外は未知の危険があり、ここは、一見安全なように思える。しかし、確証はないのだ。この洞窟を今ほどの広さにしたのは、骨となった鴉人ではない。ここへ彼女を残していくよりは、ましだろう。「いいか？ 少し話をしたい」

ホークウッドが解散しそうな雰囲気の中、声を上げた。その目は真つすぐ貴樹を向いている。

「皆には、本当に感謝してる。アンリとホレイスがいなければ、俺達は

今ここで、こうしていなかっただろう。タカキ、あなたにはどう返したらわからないほどの、借りができた」

(そうだな。もつと褒めろ)

「俺は、これからもあなたについて行って、その目的を助けるつもりだ。彼女も、火守女も守ると誓おう」

「ゲルトロード」

貴樹は彼女を、欠落した腕で示した。

「彼女には、名前があります。これから、そう呼んでください」

当たり前のことを初めて理解できたような顔をして、ホークウッドは頷いた。

「その、あー、ゲルトロードも守るぜ」

彼は、横にいるミレーヌの肩を叩いた。彼女は一度、彼と目を合わせてから、一歩前へと進み出る。

「私は、彼に従うわ。彼と再び、こうして会わせてくれたことに、感謝を。一度、貴方に刃を向けた身だけれど、信用回復の努めは惜しまないつもりよ」

言い終わった直後、クリムエルヒルトがからかうように笑った。ぎよろりと、ミレーヌの視線がそこへ向かう。

「なに？」

「いえ、ごめんなさい。少し…。ねえ、お嬢さん。その話し方、面白いわね。もしかして、フフ、私を真似てるの？」

かちやりと、ミレーヌが鞆に触れた。

「意味のわからないことを言っつて、場を乱すのはやめたらどう？」

「本気にしないでよ。ほんの冗談じゃない。でも、私思うの。貴方、外見はともかく、何というか、そんな言葉づかいは似合わないわ。子供が、無理して大人の言葉を使ってるみたいで、こっちまで恥ずかしくなる。私が聞いた、貴方の素の声は、もつと可愛かったのに」

「おいおい二人共、やめてくれ」

動こうとしたミレーヌを、ホークウッドが腕で止める。それから、クリムエルヒルトを見やった。

「あんたにも、言いたいことがあったんだ」

「そう？」

彼は静かな足取りで魔女の側まで近付くと、膝をついた。その前まで不敵に笑っていた彼女が、怪訝そうに眉をひそめる。さらに彼は頭を深々と地面に擦りつけ、くぐもった声で述べた。

「本来、俺がやるべきことだった。やらなきゃいけないことだった。それを、あんた一人にさせて、申し訳ない。腕を一本失ったつてのに、俺の手助けまでしてくれた」

はあ、と彼女は溜息をつく。

「もう、治ったわよ」

「それでもだ。あんたのしてくれたことは忘れない。でかい恩だ。報いるために、できる限りのことをするつもりだ。あんたの望みの手助けもさせてくれ」

「そんなことを言っているの？」

ホークが顔を上げると、彼女は悪戯っぽく笑った。

「言葉は、取り消せないわよ。それに、もつと周りをよく見てみるからね。そんなことをして、あまり得なんてないと思うけど」

ミレーヌが、二人を交互に睨みつけていた。場の空気は良いとは言えない。アンリとホレイスも、翻意を促すように、ホークウッドを見ていた。

だが、彼は不思議そうに瞬きをした。

「どういうことだ？ これは、俺とあんたのことだ。他に関係ある奴なんているのか？」

「あのね、貴方、鈍いの？ 第一、そんなことを言って、貴方の仲間は喜ばないし、私も、もしそうになったら最大限利用させてもらうつもりよ。よく考えなさい」

「ん？ あんたも仲間だろ。そうじゃないのか？」

クリムエルヒルトは笑みを消した。その顔を少し眺めてから、ホークウッドはようやく場の雰囲気を理解したようだ。周りを見回して、声を大きくする。

「こいつは、そりゃあ、一時期は敵側にいた奴だ。俺だつてこいつに捕まって、法王の城まで連れて来られた。でも、その城から脱出させて

くれたのも彼女だ。火守女の灰の誓約も交わしているし、何より、ここに来る前、こいつは俺達の命を守ろうとした。事情によつては、信じるのは難しいかもしれない。でも、悪い奴じゃねえんだ。俺が保障する」

(望みを成就させると、性根が変わるものなんだな)

『お前より、ヒーローに向いてるぜ』

(はっ)

ホークウッドは賛同する気配がないのも気にすることなく、再び彼女に向き直った。

「貴方って、愚かだわ」

「あ？ それなら、俺も言いたいことがあるぞ」

段々と、彼女は押され気味になりつつあった。ホークウッドが一步詰め寄ると、彼女は身を引いた。

「地底湖で、あんた、自分を犠牲にしようとしただろ。あれはよくねえ。誰も幸せにならないんだ。もう、そういうことはやめてくれ。せめて、恩を返しきるまで生きてもらわないと困る」

二人は数秒、視線を合わせていた。先にそれを切ったのは、クリムエルヒルトの方だ。無言のまま立ち上がると、鼻で笑いながら頷いた。

「くだらない。迷惑なだけよ、わかる？ 誰かの不興なんて、これ以上買いたくないの」

「誰のだよ」

「もういい。これ以上は無駄。旦那様、私、奥に戻ります。出発する時に声をかけてくれれば結構ですから」

貴樹に断つて、彼女は去っていった。その姿が消えると同時に、ミレーヌがホークウッドの腕をつねった。彼は、本当に理解ができていない様子だった。いなくなつた方を一瞥してから、首を傾げてその場に座る。

(うーん、これは、風向きが変わつたかな?)

『あん?』

(そろそろ潮時だと思つてたんだ。クリムだけ浮いてたからな。裏切

る可能性もあるし、事故で死んでもらうことも考えてたんだが。これは、面白くなった)

『お、楽しそうだな』

(そりやあな)

貴樹は周りの人々を一人一人、妙に高揚した気分で眺めた。

(これが、仲間ってことなんだろう)

29. 絵画世界の出会い

三日ほどで、吹雪は収まった。視界が開けても、空は晴れない。薄い雲が全体に広がっていて、どんよりとした模様が風景を薄暗くさせていた。

洞窟から出た貴樹達は、狭い道を抜けた後、広大な雪原に出た。イルシールでも見ることでできない光景だ。ただそれよりも、他の者達は寒さの事に気を取られているようだった。彼と、呪術の火を使えるクリムエルヒルトを中心に集まりながら、進み始める。

「もうちよっと、強く抱きしめてくれるかい。落ちないように」

ゲルトルドの顔が、さらに首へと近づいた。髪が肌に擦れ、彼女の体重をより大きく実感できる。体の凹凸も。

(胸、胸、胸)

足にまとわりついてくる深い雪さえ、気にならないほどだった。ぼうつとなる頭を何度か振って、視界に何か映らないか確かめる。

目指すべき場所は、限られている。鴉人の集落か、アリアンデルの大聖堂だ。どちらも寒さをしのげるという点では同じだが、前者はおそらく、それなりの掃除が必要になる。危険も伴うだろう。

そして場合によっては、さらに危険なのが、後者の大聖堂だった。そこにいると考えられる黒教会の長女、エルフリーデがどう出るかだ。彼女の實力は予想できるし、戦うことになれば、かなり面倒になる。しかし、貴樹のやりたいこととは彼女と会うことで、さらに元の世界へ戻る手掛かりもある可能性が高かった。

(アリアンデルを懐柔できれば、良い関係を築けるだろう。この絵画世界の未来がどうなるうが、俺には関係ない。フリーデの望みを尊重することもできるはずだ)

聖堂へ目的地を決めた彼は、次なる問題に気がついた。

まずはこの雪原。こんな場所があった記憶は持っている。しかし、広さは段違いだ。比較的気候が収まっている今でも、気を付けていないと方向感覚を失う。極めつけは、彼自身、聖堂や鴉村の位置関係がおぼろげであることだった。

(途中の周回から、ここは流してやってたからなあ。そもそも行かない時もあったか。とにかく、進み続けるしかねえな)

しばらく、変わり映えのしない行軍が続いた。暇だったわけではない。背負っている大事な女性の香りを楽しむこともできたし、周りの者達の状態も逐一確認していた。疲労しないからと言って、その手のことに鈍感になってはいけない。

妙な音がしたのは、ようやく遠くに山らしき影が見えてきた時だった。

「止まってください」

全員が、何かと貴樹を見る。彼以外には聞こえていないようだった。それならば、かなり遠距離で発せられたものなのだろう。

その音には、憶えがあった。だが、貴樹はあまり信じたくなかった。もし予想が正しいのなら、決して、この世界にはあるはずのないものだからだ。

他の者達も、今度はもつと近くで鳴った音を聞いて、武器を取り出した。それはさっきのものではなく、単なる何かの吠え声だった。

前方に、こちらへ駆けてくる群れが見える。雪の中に溶け込みそうなほど白い全身に映える、頭部の灰色の毛。それらは貴樹達をはつきりと認識していた。狼の群れだ。

(いたなあ。数が多くてめんどくさかったつけ)

一旦ゲルトロードを下ろし、前に出ようとする、アンリが止めてきた。

「ここは、私達が。彼女を守ることに専念してください」

周りの者達も同じ意見のようだった。全員が貴樹の前に出ると、向かってくる狼達へ走り出す。その姿を見送ってから、ゲルトロードを安心させるように再び背中に掴まらせた。

『気を、遣われてんなあ』

(俺の力が無敵じゃないってことは話したし、良い心がけじゃねえか。こういう時に、役立つんだよな。素晴らしい肉壁だ)

特に、危なげもなさそうな戦いだった。

アンリとホレイスの連携には安定性がある。互いの隙を補い合っ

ているので、多少の数の差をもものともしない。飛びつこうとしてくる狼を正確に切り落としていた。

クリムエルヒルトも、余裕がある。それだけ呪術と魔術の殲滅能力が優秀なのだ。炎の帯を引かれただけで、獣は近づけないでいる。

そして最も真摯に、最も狼の数を減らしていたのが、ホークウッドとミレーヌだった。彼らは共に戦っている喜びを実感し、狼という存在に対して並々ならぬ思いがあるらしい。特にミレーヌの方が容赦なかった。邪魔になった死骸を蹴飛ばし、その上に突き刺した別の狼を投げている。

なかなか優秀な者達だとは思う。しかし、貴樹は惜しいものを感じていた。

(三つに分かれて、それぞれで相手してるだけだな。互いに近すぎてもやりづらいから、距離を取るの正しい。でも、そこに連携は生まれねえ。時々戦線が交わりそうになると、少しだけ動作がぎこちなくなる。信用が足りてない証拠だ)

貴樹が目指す、火守女の灰のコンセプトにはまだ遠いようだった。これからどう近づけていくかが、自分の課題となるだろう。

そろそろ座って見物しようかと考えた時、狼達のおかしな点に気がついた。

まるでかなわないときすがに感じているのか、引き気味になりつつある。その中の数体の動きが、よろけていた。まだ、少しも攻撃を加えられていないはずなのに、どこか負傷している。よく見てみれば、胴体や足から、血を流している個体もいた。

何かで斬られたり、焼かれたりした傷ではない。

理解をした瞬間、貴樹は線のような敵意を感知した。直後、あの音が再び響く。今度は、もつと近くで。

とつさに顔を引く。そして眼前を、小さな弾が横切っていくのがわかった。どう考えても、ライフルの弾丸としか思えないものが。

(ふっか——)

己の頭の中の血管がぶち切れる音を聞いてから、二発目の銃声が

く、掘りも深い。南米系の血が色濃く表れている。

感情が荒れ狂う内心をおくびにも出さずに、貴樹は驚いているふりをした。

「貴方達は、そんな、地球の……。待って。それ以上来ないでください」

「ああ、わかった」

「持っている武器を全て、こちらに見せてください」

褐色の女性が何かを言おうとして、男に諫められている。何度か反論をしているようだったが、渋々と背のライフルを取り出した。

その間に三人目がおおずと話しかけてきた。

「あの、もしかして日本人ですか？ 私もそうなんです！ あ、ごめんなさい、こんなこと初めてで。誰か他の人が来たことなんてなかったから。ファエラ、撃った彼女にも、誤解があったんです」

少女は脱しているが、未だ学生といった感じの女性だった。高校生くらいだろう。人の良さそうな笑みを浮かべているものの、その目は、どこか乾いていた。外見との齟齬を生む要因になっている。

「誤解とは？」

彼女は貴樹の体を見てきた。

「その格好です。てつきり、その、他の人達の、奴隷のようなものかと」腕が欠損していることも、マイナスに働いたらしい。そういった点から、貴樹達の集団の性質を断定し、自分達を脅かすのではないかと恐れたようだ。まずは威嚇として一発撃った後、「奴隷」に抱えられているゲルトロードを一番の地位だと誤認して、狙った。

「ですが、違ったみたいですね。それは彼らのふるまいを見てわかりました」

「全部と、言ったはずですよ」

学生の女が沈黙した。

貴樹は腕で、褐色の女性を示す。

「そのライフルで、あんなに早く連射できるわけがない。どこに隠しているのかはわかりませんが、もう一丁あるのなら、お願いします。こちらはまだ、信用しきれないんだ」

白人の男は躊躇わずに、言われた女性の肩に手をかけた。

「ファエラ、頼む。これは俺達が悪いんだ。出してくれ」

また渋々と、ファエラという女は何にもない空間に手をかざした。そして、突然、背に抱えているものと同じ種類のライフルが現れた。銃身を握り、こちらにはつきり見えるよう、示してくる。

つまり、一発撃った後、すぐにもう一丁の方と交換したのだろう。再装填の隙をなくした。生徒達の力を見ている上では、そんな芸当も想像できる。

(ガキ共と同じ。インベントリってやつか。クソが…)

学生の女が一步前に進み出てきて、深々と頭を下げた。

「今回のことは、本当に、申し訳ありません。ほら、ファエラも」
褐色が顔だけを下げる。

「…こつちのミスだった。ごめんなさい」

「いえ。誤解が解けて何よりですよ」

貴樹は笑いながら、冷静に彼らを観察した。なされた説明には、まるで納得していない。その根拠もあったが、今は泳がすべきだと、何も余計なことは言わずにいた。あまり、彼らのことは考えたくない。精神的にも悪影響がある。

白人の男も、礼をした。

「ウインだ。ただのウイン。この出会いにとっても感謝しているよ」

「僕は、貴樹、戸水貴樹です」

手を差し出そうとしたが、貴樹の姿に思い当って、気まずそうに下げた。ファエラともう一人はそれを少し呆れたように見ている。この、芝居がかった態度は今だけのものではないらしい。

学生の女が苦笑して、言ってきた。

「私は、南空なそら由海ゆみです。南の空、そして理由の由に、大海の海と書きま
す。それで…、貴方達はどこから来たんですか。こここの区域には今
ま、人の気配なんて全くなかったのに」

一応、正直に経緯を話した。こことは違う、別の世界があると知っ
た時の、彼らの驚きようは滑稽だった。その、喜びようも。

「私達も、そうなんです。この世界で目覚めて、どうしてこうなってし
まったのか、まるでわからないまま、過ごしてきました」

「こちらも少々混乱している身なので。できれば、寒さをしのげる場所を知っているなら、ありがたいんですが」

「それなら、」

由海が言う前に、フアエラがそれを遮った。彼女だけはまだ一度も笑っていない。貴樹をじろじろと見つめてくる。

(いやらしい)

「そんな恰好で、寒くはない?」

「あまり」

「それがおかしいの。ワイン、ユミも、見たでしょう? この男は、狙撃を事前に察知した。そればかりか、一発は避け、もう一発は、食べたんだ。あんた…、本当に人間?」

(俺が、そんな下等生物に見えるか?)

それ以下の汚物である。

貴樹は、彼らの知識量をまだ計りかねていた。もつとも、銃などというものを重宝している時点で、底は知れる。ならば、細かく説明してもかえって不審を持たれるだけだろう。

「僕には、色々なことありました。おそらく、貴方達と同じように。長い話になるでしょう。こんな場所で、するものじゃない」

遠くでまた、狼の遠吠えが聞こえる。彼女達も気が付いているようだった。ワインは持っていた大きな革袋を広げると、転がる狼の死体をいくつか入れていく。貴樹達は、彼らの狩りの最中に、乱入したということだ。

「俺達の、家に案内しよう。初めての客だ」

「ありがとうございます」

話は一段落したと、貴樹はずっと何も言ってきた来なかったホークウツド達の方を向いた。彼らは少なからず困惑した様子で、ワイン達をちらちらと眺めていた。

「まあ、大丈夫ですよ。彼らはいわば、僕と故郷を同じくする者達です。危険は少ない。とりあえずは、ついていきましよう」

アンリが、感心したように頷いた。

「そういう、結論に至ったんですね。最初はまるで意志疎通ができた

いのかと危惧していました。でも、タカキさんがいて良かった」
(うん?)

少し引つ掛かるものを感じた。そして、クリムエルヒルトもこちらを称賛するように微笑んでくる。

「聞いたこともない言語です。私達は全く意味がわかりませんでした
が、なるほど。あれが旦那様の本来の話す言葉なんですね」

貴樹は初め、この魔女が彼らを信用していなく、ついていくのも反対なので、遠まわしに駆け引きをしようとしているのだと、無理やり考えようとした。しかし、周りの者も同様の反応を返しているのを見て、徐々に理解をする。

「皆、聞いてください」

クリムエルヒルト達だけではなく、彼ら三人もこちらを注視してきた。自分の声は、全員へ、同時に届いていると最後の確認をする。

「今、僕の話している言葉は、理解できていますか」

それぞれに視線を合わせて、同意を得る。何を言っているのかと、怪訝な雰囲気があった。貴樹は首を回して、この、訳のわからない状態をなんとか受け入れようと、きよとんとしている由海に尋ねた。

「これ、何語に聞こえます?」

彼女は、本当に不思議そうに答えた。

「お上手な英語だと思いますよ」

『考えられるのは、やっぱり、この残り火の力なんじゃないのか』

(同時翻訳機能が? は、なんでもありだな)

彼は日本語を話しているつもりだ。それが相手によって、違う言葉に聞こえているというのは、なんとも、奇妙な感じだった。

異世界の力と言えば、何でも解決できるわけではない。彼は、このことが、何か根本的なものを象徴しているような気がしてならなかった。既に答えの欠片らしきものを掴みかけていたが、貴樹は秒で興味を失くした。どうでもいい、というのが全てだ。ダークソウルの世界を、故郷と定めたのだから。

ウイン達の足取りは、確かだった。もう、何度も行き来しているようだ。彼らについていくだけで、果てしなく続くと思われた雪原の光景は変わり始め、山が周りにそびえるようになる。続いていた吹雪で、足跡などにも頼れないというのに、彼らはまるで、体内に万能な磁石でもはめられているかのように、迷いが無い。

幸い、狼の群れにもそれ以外の脅威にも遭うことはなく、山端の崖にまで、辿り着いた。

遠くを見れば、廃墟と化している集落らしきものが見える。あそこが彼らの家ではないことはすぐにわかった。あれは、鴉村だ。貴樹の記憶の何倍もの規模で、広がっている。もし、あそこを目指していれば、それなりの苦労では済まされなかつただろう。

見える景色以外は何もない。まさに行き止まりだった。

貴樹達の疑問をよそに、ファエラが崖の縁までゆつくりと歩いていく。一か所に屈むと、隠れて垂れ下がっていた縄を持ち上げて見せた。

「崖の、下に？」

ウインが得意そうに笑う。

「獣や、化物に見つかりづらい。それに万が一降りる縄を見つけれなくても、その時の見張り当番がすぐに切って、終わりだ。じゃあ、先に失礼するよ」

彼は縄を握り、付いている金具を、自らの腰にはめこんだ。軽々と空へ飛び、するする縄をつたりながら降りていく。十数メートルほどで、崖の途中で飛び出している大きな段差に着地した。

ファエラが続いてから、残った由海がこちらを促してきた。

「どうぞ、先に。私は命綱を見張りますから」

アンリにホレイス、そしてクリムエルヒルト。ホークウッドとミレーヌの順で、移動作業が行われた。彼らの鎧の重みにも、縄は耐えている。この世界で手に入れられるものでは、決して無理だ。

最後に貴樹とゲルトロードの番になって、由海は難しい顔になった。控え目に、両手を伸ばしてくる。

「その人を抱えて、私が降りましょうか？ 工夫すれば、ええと、腕の

ない貴方一人なら、何とか安全に」

「いえ、その必要はありませんよ」

貴樹は背中にいるゲルトロードへ振り返って、声をかける。

「ちよつと、嫌な浮遊感が来るかもしれない。どんなに怖くても、僕の体から離れないで」

「うん、わかった」

「何を、」

止める間もなく跳躍した貴樹を見て、彼女は息を呑んだ。下にいるウインも同じ反応だ。慌てて前に出てきて、落ちてくる彼を受け止めようとする。

途中で崖を蹴って、位置をずらし、ウインのすぐ前に二人は着地した。足場が壊れることが心配だったが、杞憂に終わる。ゲルトロードに大事なないか尋ねた後、貴樹は足を振って、まとわりつく雪を払った。

「やっぱり、人間じゃない」

ファエラは溜息をつきながら、開いた洞穴へ入っていく。

眼前には、確かに、彼らの拠点らしきものが広がっていた。崖の中へと続く入口にはカンテラが提げられており、風よけの扉が、二重に取り付けられている。周りにはいくつか、ガラス張りの窓があり、そこから、テーブルや椅子など、人間らしい営みの気配が伺える。

中に案内され、暖簾をくぐると、いくつもの銃口が目に入った。

「おいおい、ちよつと皆。落ち着いてくれ。彼らは大丈夫だ」

ウインが慌てて諫めると、待っていた五人は武器を下ろした。

(…)

「いつもの狩りに行ったかと思えば、随分と人数が増えているな」

真ん中にいるのは、厳つい男だ。金の短髪に、ゲルトロードの顔ほどもある太い腕。何かをやっているのはたしかだった。銃の扱い方も一番手慣れていそうだ。十中八九、軍事関係の者だろう。

「こつちが不注意で、撃ってしまった。そのお詫びとして、連れて来たんだ。しかも、驚くなよ。この人、タカキは僕達と同じ境遇にいる」

大男の左右にいるのは、長い黒髪を束ねた穏やかそうな女性と、子

供だ。雰囲気からして、家族なのだろう。彼らを庇うように、男は前に出ている。

もう二人は、揃ってぽかんと口を開けて、貴樹を眺めていた。眼鏡をかけた、日本人らしき男子学生と、茶髪の西洋人女性。女の方は、頬が煤のようなもので汚れていた。

「ほ、本当？ 由海」

眼鏡が尋ねると、彼女は力強く頷いた。

「そうだよ。まだ、詳しい事情はこれからって話だけど。私だって現実感が追いついてない。こんなこと、今まで一度もなかった」

沈黙が流れた。このの住民たちはどこか疑いの残る目で、貴樹を見ている節がある。喉のむかつきを呑みこんでから、彼は考えた。ここは、自分が話すべき場面なのだろう。

「誤解があつたのは確かです。でも、それは無理もないことだった。僕の今の状態を見れば、誰だって想像はする」

「寒くないの？ 裸なのに」

少年が訊いてくる。母親の後ろから顔を出しているが、その目は好奇心にあふれていた。

(クソガキが)

「確かにすーすーするね。脇とか、特に」

彼が肩をすくめてみせると、少しだけ張り詰めた空気が緩和された。もちろん、貴樹の内心は少しも和らいでいない。

「とりあえず、全員、中央の部屋に集まろう。そこで互いの話ができれば、重畳だ」

ウインはフードを脱いだ。白い歯を見せつけるように思い切りのいい笑顔を見せ、揚々と先へ進もうとする。足下に置いてあつた袋につまずいて、前に転んだ。皆の視線を浴びながら、何事もなかったかのように立ち上がると、髪を撫でつけ、早足で進んだ。

そこはいわば、会議室とでも言えそうな場所だった。木製の長テーブルの周りに、丸椅子が並べられている。とりあえず互いの信頼のために、ホークウッド達には装備を外してもらった。ひとまとめにして、部屋の隅に置く。

全員が座った所で、ウインが楽しそうに話し始めた。

「まずは自己紹介だ。さつきも言ったけど、俺はウイン。ファミリーネームもないことはないが、ま、ここでは無意味だろ。では、ユミ？」
由海はうんざりと頬杖をついた。

「はい？」

「俺が何者か、できる限り正確に言ってみなさい」

「…彼は、はあ、現実では俳優だったの」

「ハリウッド、俳優」

「そう、ハリウッド俳優だった。海外に知れ渡るほどではないけど、まあまあ売り出し中の若手だったらしいよ」

「そして、数年したらオスカーに輝くんだよ」

「予定ね」

貴樹は真剣に聞くふりをしながら、全ての音声をシャットダウンするという特技を披露していた。不快な単語が飛び交う場合では仕方がないと思っている。

由海が立ち上がって、礼をした。

「由海です。この出会いは、本当に嬉しく思ってる。奇跡としか思えないね。どうぞよろしく」

「ええ、こちらこそ」

我慢して、握手をした。

「ファエラ。貴方達に迷惑をかけた分の借りは返すつもりだから。でも、私はまだ信用していない。行動には気をつけて」

既に名乗っていた三人が終わると、少しの間が空いた。残った五人は互いに顔見合わせている。そして、大男が、腕を組んでこちらを見してきた。

「ランドンだ。こっちはアリー。妻だ。それで息子の、イアン」

女性が微笑み、イアンという少年はちらちらとクリムエルヒルトを見ていた。特徴的な赤毛が気になっているらしい。彼女に綺麗な笑みを返されて、恥ずかしそうに母親の肩に顔を寄りかからせる。

「右に同じく、急に現れた者達を信じることはできない」

「当然だと思います。ここに迎え入れてくれただけでも、有難いこと

だと思っています」

ランドンは貴樹の体を見て、すぐにそらした。

「ウインが連れて来たんだ。そこは尊重する。お前がどれだけ苦労してきたのかも、察してあまりある。認めるかどうかは、話し合っただらだ」

友好を示そうとする者。懐疑的な者。そのどちらでもない、純粹に観察する態度で、茶髪の女性は端にある貴樹達の装備に顔を向けていた。皆の視線に気がつく、億劫そうに立ち上がる。

「ジアンナよ。ランドンが奇妙な奴らにウイン達が脅されて連れて来られているって決めつけたせいで、不快なもてなしをしてごめんない。彼、神経質なところあるからね。見た目は大雑把なくせに」

彼女は舌を出して、ランドンの凝視を受け流す。それから、傍らに
いる青年の肩に手を置いた。

「私達、仕事の途中だったんだ。貴方達のことには歓迎するけど、退席してもいいよね？ 後で、聞きたいこともたくさんあるけど。その、鎧とか。じっくり、見てみたいな。ほら、ユキナリ。行くよ」

え、とまるで予期していなかった表情で眼鏡が引っ張られる。

「じ、自分は、この人達の話の聞きたくないって」

「時は金なりとあるけど、金が無価値になってる以上、時間は、時間なの。何物にも代えられない。わかる？ キミ、サボるのにちょうどいいイベントが来たとも思ってるでしょ。作業は半分も進んでない。ミスター・サポートが不可欠なの」

「サボりたいなんて、少しも思ってる…」

結局自己紹介が終わった時には、彼らの内二人が欠けるとい、締まらない結果になった。それでも由海は楽しそうだ。二人が消えていった方を、暖かく見ている。それは他の者達にも伝染していた。

どこぞの田舎の村だ。貴樹はそう、結論付けた。コミュニティが完結している。閉じた共同体。そういうのは大抵、余所者を受け入れるのに時間を要する。悪いわけではない。彼らはそれだけ共に濃い時間を過ごし、信頼関係を築いてきたのだろう。

悪いわけではない。

(最悪だ)

貴樹も一応、自己紹介をする。全てを正直に話す必要はないと考えていた。彼が通訳まがいのことをしながら、アンリ達も挨拶をする。しかし、ホークウッドが紹介を終えた時点で、ミレーヌが立ち上がった。作法を真似たわけではないことは、すぐにわかった。

両手で頭を押さえる。そのまま目をつぶると、体がよろめいた。ホークウッドがすぐに支えて、倒れるのを防いだ。

「どうしました？」

ホークウッドに肩を貸してもらいながら、彼女は青ざめた顔で言った。

「ごめんなさい。気分が、悪くなって。休ませてくれると助かる」

そのただならぬ様子で察したのだろう。ほとんど発言をしていなかったアリーが、椅子から立ち上がった。貴樹に言ってくる。

「余った寝室があります。案内しましょう」

「お願いします」

彼女はミレーヌへ近づいた。もう一方の腕を、自らの肩に回す。その後ろを、イアンがついていく。

「おい、」

「あなたは、ここにいて、話を聞いていて。大丈夫よ。この人達を信じる」

ランドンの制止を遮って、それから彼女はイアンを見下ろした。

「ぼくもついてく」

「どうして？」

「何かあったら、ママをまもるのが男なんですよ」

アリーは彼の額を撫でる。

「あら、じゃあお願いね」

彼らが出て行くこうとするのに、さらにクリムエルヒルトも立ち上がった。貴樹へ声をひそめて言ってくる。

「念のために、私も」

「大丈夫か？」

「言葉が通じなくても、何とかかります」

この場からさらに五名が退出することになって、一気に空気が増えた。

『どうしたんだろうなあ』

(何が?)

『ミレーヌの奴、明らかにおかしかっただろ。今だけじゃねえ。この、地球人共に遭ってからずつと変だ』

(お前は、蛆に脳味噌でもほじくられてんのか?)

『あ? 何だよ、お前こそ何か知ってるのか』

(些事だ、些事。どーでもいいわ。わかりきってることなんざに脳の容量割けるか。ちつ、苛々するぜ)

『何だか、機嫌が悪いですねえ』

足を、大きく振り上げる。目の前にあるテーブルを破壊し、欠片を蹴って、ランドンの頭を弾けさせる。血が飛び散った頃には、ウインの後頭部に噛みついていて。そこまで考えて、妄想を断ち切った。入り込み過ぎれば、本当に、実行してしまう。

(こいつら……、不愉快どころの話じゃねえぞ)

確かに貴樹の機嫌は最悪だった。

(俺はなあ、自分で努力して手に入れたわけでもない力で、この、ダークソウルの世界の雰囲気をごち壊し、雑魚相手に調子に乗ってるゴミが、一番害悪だと思うんだ。こいつらに比べたら、まだ、そこらの狼共の方が価値がある。どうしようもない奴らだ)

自らの事を盛大に棚に上げ、曲がりなりにも良くしようとしてくれている者達を嘲る男。こいつに比べたら、そこから腐っている亡者の方が、精神衛生上ましである。

「それじゃあ、まずはこちらから、色々訊いてもいいかい?」

ウインはそんな屑のような内心を知ることもなく、愛想良く色々なことを質問してきた。まず重点的に興味を持たれたのは、アンリ達との関係だ。どのような経緯で共に行動することになったのか、貴樹はかいつまんで答えた。

特に、祭祀場の存在は、彼らにとって衝撃的だったらしい。

「救世を目的に? それはまた、大それた話だな」

「火を信仰している世界のようです。やがて世界は闇に覆われると。それを防ぐために、志を同じくした者達が、行動を起こしている」
「では、なぜお前は、そこから別れた？」

ランドンが訊くと、貴樹は傍らのゲルトロードを見た。

「その、方法について、食い違いがあったためです。僕の決して譲れない部分がないがしろにされそうになり、共に歩むことへ限界を感じました」

ウインがアンリ達を手で示す。

「君の考えに賛同して、この人達も付いて来たんだね」

「そうなります。なので、」

貴樹は言いにくそうに、俯いた。

「申し訳ありませんが、僕も、現実へ帰る方法を知っているわけではありません。ただ、この世界からは脱出したいと考えています。目的があるからです。でも、貴方達はどうなんですか。たとえ共に出たとしても、脅威が増える可能性が高い」

ついてくんなよ、という意味を込めたつもりだったが、思い通りにはいかない。

「望みは、一緒だ」

ウインが、力強く言う。

「少なくともあつちは、厳しい寒さはない。ずっと、何かが変わる糸口がないかと求めてきた。この世界から出るまではせめて、互いに協力できたら嬉しい」

(くそ)

彼らを、絵画世界の外に出し、自分の故郷と決めた場所の土を踏みせると考えただけで、虫唾が走った。

(残るつもりなら、見逃してやることも考えたが、これは駄目だな)

目的の一致が確認できた所で、今度は由海が話し出した。

「話は変わるんですけど、貴樹さんは、日本では何の仕事についていたんですか？」

「仕事、ですか」

「いえ、すみません唐突に。私達の間では、もうそういう現実での話は

散々したんです。だから、新しい人のことも聞いてみたいなって」

貴樹は微笑んだ。

「その気持ちはわかりますよ」

(わかんねえよ馬鹿が)

この男には、郷愁など少しも似合わない。

少し考えるふりをしてから、懐かしむ風を装って話し始める。

「高校の教師をやっていました。二年生のクラスを担当していて。世界史を教えていました」

「世界史…」

その言葉を、由海は曖昧な表情で繰り返した。遠い夢を偲ぶように、口の動きだけで何度か同じ言葉を心に刻み込んでいる。目を閉じ、祈る間があった後、開いた瞳は少しだけ潤んでいた。

「どうして、教師という仕事を選んだんですか」

「昔から、人に何かを教えるということが嫌いじゃなかったんです。それに、子供が好きなんですよ。僕が支えられるのは彼らの長い人生のほんの一部に過ぎませんが、とても、やりがいを感じていました」
由海は彼の話を通して別の思い出を考えているようだ。遠い目で、頷いている。

「似合っていると思います」

「はは、ありがとうございます」

『くつき。お前の口から子供が好きって飛び出すと、鳥肌が立つわ』

(いやいや、嘘じゃねえって)

そう、嘘ではない。大量のそして多岐にわたる仕事、公立に勤めれば安定する。そういった事情を天秤にかけたわけでもなく、彼は自分から純粹に教師という仕事を選んだ。子供が好きというのも事実だ。(だってあいつら、動物みたいで、笑えるだろ。どいつもこいつも俺より劣ってるのに、必死に背伸びしようとしてくる様は滑稽だ。何度、優越感で逝きそうになったことか)

特に、目上へに対する羨望の混じった生徒達の間抜け面が、一番の御馳走だった。そのためなら多少の苦労は何でもなかった。

(ま、それも今となってはごめんだがな。彼女と過ごす方が、何千億倍

も気持ち良いし)

『よかった。お前は期待を裏切らないって、信じてたよ…』

貴樹は椅子に座り直し、どうでもいい、退屈な話がこれ以上続かないことを願った。

「他に、何か聞きたいことは？」

「とりあえず、一段落したよ。アリー達とも共有しないといけないから、あんまりいっぺんにすると、混乱するからね」

(こいつら、後でまた訊くつもりかよ。めんど)

「じゃあ、今度は僕から、質問してもいいですか」

「どうぞどうぞ」

正直何も訊きたいことはなかった。彼には、そもそも日本への未練は少しもない。ウインの達への興味も、ほとんど失せていた。残っているのは、彼らの存在がひたすらに邪魔であるということだけ。腹は既に、決まっている。

「この世界へ来た当初の事を、説明してください」

「タカキとそれほど変わらないよ。俺達は全員、同じ場所で目覚めたんだ。そこは、まるで教会か、聖堂のようだった」

(ん？ おい、フリーデの所じゃねえか)

「目覚める前、つまり、ここへ来る直前のことは、覚えていますか？」
「いいや。そこは曖昧だ。自分が何者で、何をしていたかは覚えている。でも、それ以外がさっぱり思い出せない。ただ、普通に自分の家のベッドで寝たと思ったら、もう、という感じだ」

そこは、貴樹達と同じだった。棺桶の中かどうかという点だけが違っている。

「どこに住んでいたんですか。現実では」

「フロリダのメルボルンって町だよ。何せ、ハリウッド俳優だからね。住む場所は自然と決まってくる」

「他に、アメリカに住んでいた人は？」

「ランドンと、ファエラが領いた。彼らの話によると、ジアンナもそうらしい。」

そこで、疑問が残るのが、由海とユキナリという、学生達だった。

「二人は、同じ学校なんですか？」

「そうです。クラスは、隣でした。でも中学の時からずっと友達なんですよ。それと、あのう、何だか教師の方に敬語使われてると、妙で落ち着かないんです。年上でもあるわけですし」

(知らねえよビッチ)

「わかった。じゃあ遠慮なく。その学校というのは別に、アメリカの学校ではないんだね」

「はい」

「変だな…。縁もないどころか、暮らしている場所すら全く違って、人も混ざっているのはどういことなんだろう。僕は一人だったから、よくわからないけど、そういうのに何か法則性はあるんだろうか」

『さらっと嘘つくなあ』

生徒達の存在は抹消されている。

「いえ、おかしくないのかもかもしれません」

由海は首を振った。

「私達の学校は、研修旅行でアメリカに行くんです。博物館を回ったり、名所でガイドさんの解説を聞いたり。私も幸成も理系だったから、NASAの基地を見学しにフロリダへ向かう予定もあったんです」

「でも、その旅行途中の記憶はないと？」

「はい、全く」

一応の共通点は見つかった。貴樹達は同じクラス、そしてその担任。ウイン達はアメリカにいた。くくりの大きさにはかなりの違いがあるものの、どうやら無作為に選ばれた者達ではないことは、明白だった。

(アメリカ、ハリウッド…)

『どうした』

(ちよっと、嫌な予感がしてな)

『ああ……、い、いやいや。そうだけどさ。ないだろ、流石に。どんな確率だよ。それに、こいつらの中にはいないだろ』

(まあ、そうなんだけどな)

不安を潰すために、貴樹は尋ねた。

「貴方達八人以外に、ここで暮らしている人はいるんですか？」

ウインがこちらと視線を合わせてくる。

「どうして、そんなことを？」

「この場所は、もっと、こう、大人数で住むのに適していると思ったからです。この部屋も、椅子の数とテーブルの広さが噛み合っていないような」

彼らの雰囲気がかすかに変わった。貴樹はその感情を敏感に察知する。少しだけ気分はましになった。どうでもいい人間でも、負の感情だけは、面白い見せものだと感じられるからだ。

切り出したのは、やはり由海だった。

「最初は、四十二人いました。ですか、目覚めた教会から追い出された後、様々な困難があつて。今では、私達しか残っていません」

貴樹は慌てた風を装い、頭を下げる。

「踏み込んだを質問をして、申し訳ない」

(ざまああああああああああああ！)

心の中で、中指を立てる。できれば、どのようにして人々が死んでいったのか、詳しく知りたかった。とても良い話が聞けそうだ。この世界の厳しさと人間共が潰れていくのは、誇らしく、痛快でもあった。

猿のように笑っている内心とは裏腹に、彼はすまなそうに続ける。

「それで、もう少しだけ訊きたいんですが。その、教会とやらを追い出されたのは、なぜですか？ 誰が、一体そんな酷いことを？」

「それは…」

由海が言おうとして、ウインに遮られる。彼女にこれ以上話させるのは辛そうだと考えたようだ。怒りの滲ませた口調で、彼は言う。

「俺達も、迷惑をかけるつもりなんてなかった。でも、その教会の住民が、一方的に追い出したんだ」

「住民、というと？」

「シスターの女性だった。俺達とまともに話そうともせず、まるで道具みたいに観察するだけで、取り合ってくれなかった」

(フリーデ、ナイスだわ。ほんとに)

「でも、なぜ貴方達がこの世界に来たのかを、その人が知っている可能性が高いんですよ。もう一度くらい、交渉してみた方がいいと思いますか？」

「我々も、そうしようと考えたんだ」

ランドンが、テーブルの上で拳を握る。

「だが、奴には、とんでもない化け物がついていた。忠誠を誓っている、化物だ」

言い切った直後、会議室に人が飛びこんでくる。先ほどの茶髪の女性、ジアンナだ。さらに顔を汚して、息を大きく乱している。その後ろには、同じく額に汗している幸成がへたり込んでいた。

それは、疲労のせいだけではないようだ。二人共、怯えている。

ランドンが席を立ち、肩で息をしているジアンナを立たせた。

「どうしたんだ？」

彼が手を何もない場所にかざすと、ガラスのコップが出現する。中に水が入ったそれを彼女に渡し、落ち着かせた。一気に飲みきったジアンナは、血の気の引いた顔で話します。

「やばいよ。私達、遠望鏡の調整をしてただけ。崖上に、あいつが来てるんだ」

ウイン達はそれだけで、誰なのかを理解したらしい。場が一気に張り詰めた。ランドンとウイン、ファエラはすぐに会議室を出て行った。由海はうずくまっている幸成の相手をする。その慌ただしい雰囲気、状況を理解していなくても、危険が迫っていることだけはわかった。

「一体、何が来たんだ？」

由海に尋ねると、彼女は震える声で答えた。

「例の、化物です」

30. ありえない再会

動揺から回復したジアンナと幸成に、遠望鏡とやらの所まで案内してもらった。天井から金属製の管が伸び、貴樹の顔の所でちょうど手前へと曲がっている。覗くと、外の様子のはつきりと視認できた。

一面の白の中に、くつきりと浮かび上がる鎧姿。兜から覗く目は、憎悪で歪んでいる。

「裏口は、確保できてるのか？」

「ああ、安全だ。まずは女性達と、イアンを逃がす。俺達が時間を稼ぐんだ」

「ウイン、待って。私も戦う」

「駄目だ。ジアンナ、君も準備してくれ」

「なんでここがばれたんだか……。ユキナリ？ どうしたの、さっさと逃げるよ」

「僕も、残らないと。ジアンナさん、先に行ってください」

「キミ、まともに銃撃したことないでしょ。馬鹿なこと言わないで！」
ウインとランドンは銃を数丁持って、武装をしていた。懐に手榴弾を入れたのも見えた。どうやら、武器庫らしき場所があるらしい。いつか念入りに潰しておかなければならないと、貴樹は心に決めた。
(どう見てもヴィルヘルムじゃん。なんであいつが、ここまでやってきてんだ?)

黒教会の騎士。葬送者。エルフリーデに忠誠を誓い、本来ならば守らなければならぬ場所があるはずだが。

「どう思います?」

傍らのアンリは、遠望鏡を覗いた後、難しそうな顔で答えた。

「相当な達人です。我々全員でかかれば、問題ないとは思いますが……」
異変の知らせが行ったアリーとイアンに続いて、ホークウッドとクリムエルヒルトも入ってきた。ミレーヌはまだ休んでいるらしい。
貴樹達の集団の方へ、ウインが歩いてきた。

「あれが、化物ですか?」

「そうだ。シスターに食い下がろうとしたら、急にあいつが割り込ん

できた。交渉する余地もなく、その場で……、七人が殺された」

貴樹は感心した。

(やるじゃん、ヴィルヘルム。ストーカーのくせに)

「まだ、ここに来たばかりで、借りも返せていない君達には、すまないと思ってる。でも、どうか、協力してくれないか。奴はおそらく、どこまでも追ってくるだろう。彼女達が逃げる時間を、一緒に稼いで欲しい」

差し出された手に、貴樹は快く触れた。安心したようなウインの顔に向かって、微笑みながら言う。

「いえ。その必要は、ないと思いますよ」

(いい機会だな)

「まずは、僕が上がって、話をしてみます」

貴樹以外の全員が、言葉を失った。何も事情を知らないものから見たら、彼の姿でそのようなことを言うのは、滑稽でしかない。狂人だと思われても仕方がないだろう。

ランドンが、詰め寄ってくる。

「話を、聞いていなかったのか？ 奴は、容赦がない。俺達を殺す気だ。寝ぼけているのか」

貴樹はこの男の腸を引きずり出し、食わせてやりたい衝動を抑える。

「失敗しても、時間稼ぎにはなるでしょう。危険にさらされるのも僕一人だ」

「そんなことを、許すわけには…」

「その男の好きにさせたら？」

ランドンが振り返ると、ファエラは続ける。

「私が見たことが幻じゃなかったなら、そいつも十分化物だよ。ぶつけてみせるのも手かもね」

「決まりということだ」

走り出そうとして、貴樹はゲルトルド達に向き直った。彼らは残り火の力を理解しているものの、絶対的に信頼しているわけではなかった。過去の、貴樹自身の不甲斐ない行動のせいだ。

クリームエルヒルトが、前に出る。

「ついでいきます」

「いいや。その必要はない。皆にばかり働かせるわけにはいかないから。大丈夫、大したことじゃないよ」

彼らはあまり納得しきれていないようだったが、そこが貴樹との温度差だった。彼はもとよりどんなことになっても、一人で何とかするつもりでいる。ヴィルヘルムの実力は、まだ完全に推し量れていないのだ。複数で行った方が確実だとしても、アンリ達が傷付く可能性を作るのはなしだった。

ゲルトルードの頭に腕を触れさせてから、未だ納得していないランドンの脇を抜け、出口へと向かった。

崖下に出ると、足をたわませる。溜まった力を一気に解放すると、体はあつという間に崖を超え、雪の上に降り立った。

沈黙していた鎧の男が、大剣を抜く。

（あれ、欲しいなあ。でも使えないとなると、観賞用にとつくしかないいのか。うーん）

『んん？ なんだか、倒す前提の話に聞こえるんだが』

（話はするよ。交渉はしないけどな）

貴樹は相手を刺激しないよう、ゆつくりと歩いた。

「こんな恰好で失礼を。エルフリーデの騎士、ヴィルヘルムと存じますが。戦う以外の選択肢がないかと、模索したい」

兜の奥の目は、貴樹を捉えて離さない。さらに近づこうとすると。大剣が動き、貴樹の首めがけて振るわれた。

当たる寸前で、刃は止まる。彼もそれをわかっていたので、何も仕掛けずにいた。

「…冒読者共め。聖堂を汚し、あの方の手を煩わせる。話す価値も生かしておく意味もない。貴様が、新たな迷い人であろうと、獣どもの餌にしてくれる」

ヴィルヘルムは取りつく島もない。外見はそう変わらずとも、こちらを対等だとは少しも思っていないのだろう。ただ処理すべき対象として、行動するのみ。

彼がそういう者であることは、貴樹も理解していた。

「その剣、たいしたものだ」

腕で示すと、騎士は誇らしげにそれを掲げた。

「ほう。まだ目が腐りきっていない者もいたらしい。これは、私が忠誠を誓う、尊き方から、いただいたものだ」

「名は、オーニクスブレード」

剣へと注がれていた熱のこもった視線。それが、貴樹へと再び向けられる。

「炎を横し、貴方の主人エルフリーデが授けたもの。でも…、それは饞別であり、決別の証でもあったんですよ。なのに、どうして」

貴樹は小さく笑みを漏らした。普段人に向けることは決してない、侮蔑の表情で、最大限に、相手を煽る。

「どうして、別れを告げられたのに、まだ彼女にしがみついているんですか？」

鋭い、放つような気合いが貴樹の耳の中で響いた。

風を、感じる。うなるような勢いで、大剣が横から迫ってくる。驚くべきことは、相手が片手で、その速度を実現させていることだ。常人の腕力では到底叶わない。

(くくくく)

しかし、憤怒にかられた剣筋は、あまりに単純だった。貴樹は意地汚くにやにやと表情を歪ませながら、目を閉じる。背中を緩やかに曲げ、大剣をすれすれでかわした。

体の、他の部分が既に行動を始めている。すぐさま体勢を整え、と、相手が剣の慣性を殺しきる前に、胴へ蹴りを打ちこんだ。衝撃が鎧の防護を超え、浸透したと確かな手ごたえがあった。

ヴィルヘルムは、大きく体勢を崩し、毬のように吹き飛んだ。オーニクスブレードが宙を舞い、雪の上へ落ちる。体の方は数本の木を割った後、岩壁に激突した。

自分の足を貴樹はまじまじと観察する。ふっとわいたずれた感覚が、いやに頭の中に残っていた。

(ま、終わったし、いいか)

少しの物足りなさを感じながら、彼は踵を返した。ちょうど、ウィンが昇ってくる所だった。驚愕で何も言えないという様子だったが、やがて安堵とは程遠い口調で叫んでくる。

「やっぱり駄目だ。勝てない。死んでいないんだ。逃げろタカキ！」

じゆうううと、焦げる音が聞こえてきた。振り返ると、湯気の中から、割れた鎧の騎士が出てくる。雪を急速に溶かしている大剣を、手に取った。ぼろぼろになった兜が取れて、血まみれのヴィルヘルムの顔が露わになる。

黒炎。黒教会の象徴でもあるそれが剣を覆い、騎士の体にまで広がり始めた。

「貴様を知っているぞ。貴様の悪魔があの方を汚している。浄化してやる。この身が減ぼされるまで」

黒い筋が走った。と、思えば、ヴィルヘルムが目の前まで迫っている。貴樹は大剣に二発、膝を撃ち込んだ。剣撃は逸らされたが、炎を纏った拳が彼の顔にめり込んだ。

尋常ではない衝撃で頭が揺らされる。左足を地面に突き立てて、重心が崩れることはなかった。頭を相手の胸にぶつける。ヴィルヘルムはのけ反ったが、さらに大きな咆哮を上げて、頭突きをやり返してくる。

それを見きり、入れ違いざまに騎士の耳を食いちぎった。それから体を回転させ、重さの乗った中段の蹴りを腰へ炸裂させる。同時に迫ってきていた刃を、歯で受け止めた。

(ふーむ)

顎に力を込め、大剣の刃先を噛み砕く。炎の勢いが少しだけ弱まった。

後ろへ飛び、貴樹は相手との距離を取る。八割の意識を、相手の迅速な処理に使うと決めた。両足を弾けさせ、相手との距離を食いつぶす。

ほぼ完璧に合わせてきた大剣での振り下ろしを、体を捻って回避、そして腰を落とし、ヴィルヘルムの足を鋭く払った。

すぐさま飛び上がり、倒れようとしている相手の顔へ、体重の乗った踵を直撃させた。防具のないまま、残り火の脅力を受け止めた顔は、一瞬で潰れて、果実のように中身を飛び散らせた。

落とされた大剣の余熱が、まだ、雪を水に変えている。

（俺の、勘違いでなければ）

両腕がないというのは、大きな欠陥だ。戦い方を足主体にしなければならぬことの難しさは、そもそも人が二足歩行である事実からしても、当然のことだった。

しかし、貴樹が負っているハンデを鑑みたとしても。

（弱くなってるな。明らかに）

『どういふことだよ』

（一発目で殺すつもりだった。今まで、その計算を誤ったことはねえ。こいつがしのいだのは、単純に、俺の蹴りの威力が小さくなったからだ。こいつがやけに他の奴よりも速く感じたのは、俺が遅くなったからだ）

『つまり…』

（ああ。残り火を他の者に分け与えるのは、力を分けるのと同義だ。六つ消費して、ようやく自覚できるようになったわけだな）

残り火の使い道を、より慎重に考えねばならなくなった。できれば、これ以上使うことはなく、目的を果たせればいい。

オーニクスブレードを拾おうとして、激痛が走る。やはり、不可能だったことに萎えていると、いつの間にかミレーヌとゲルトロード以外の全員が、上に来ていた。

「倒しちゃった…」

由海が未だ実感できていない様子で、つぶやく。相当この騎士に苦しめられたらしい彼女達は、皆、一様に言葉も出ないようだった。

ホークウツドが、遠慮がちに言ってくる。

「大丈夫か？ ひやっとしたぜ。途中で血を吐いて、ぶっ倒れたらどうしようかと、生きた心地がしなかった」

（ノミィ？）

『まあまあ削られたな。耐久値一割減は痛い』

貴樹は、ランドンへと向き直る。

「少し、危なかったですが。何とかなりました」

「少しか」

死体を見て、お手上げだと言わんばかりに、笑った。

「ファエラの言う通りだった。何なんだ、お前は」

「スーパーマンだよ！」

イアンが、きらきらと目を輝かせて、貴樹に走り寄ってくる。小さく何度も飛び跳ねて、興奮が抑えきれないようだった。腹筋を叩いて、真つすぐな憧憬を向けてくる。

「すごいよ、すごい！ かつこいいっ」

「そう？ ありがとう」

少年がきつかけで、彼らは喜びを爆発させた。ランドンは泣いている妻と抱き合い、他の者達も互いに笑い合っている。彼らにとつてみれば、本当に、絶体絶命の危機だったのだろう。

ウインが勢いよくハグをしてくる。

「君が、アベンジャーズの一員だとは、思いもしなかったよ。この世界に来てから、最高の日だ。どんなに感謝しても、しきれない」

（おげええええええええええっ！ きんもちわるううううううううう）

貴樹は吐き気をこらえた。

（せつかくおだてられていい気分になった所をよお）

『それくらい我慢しろよ』

（いやいやいや、こいつだけか知らねえが、異様に気色悪いんだよ。体が拒絶してる）

『お前、どんだけ人類嫌いなんだよ…』

彼らの喜びように騒いでいる虫程度の相手をしていると、自らの内心と同じように、晴れない様子でいる者がいることに気がついた。今まで貴樹をあまり信用していなかったファエラや、不安そうだったアンリも和らいでいる中、クリムエルヒルトだけは笑っていなかった。

ヴェイルヘルムの死体の処理は、ウイン達の強い希望で、崖へ投げ込むことに決定した。火葬も、土葬も、する価値は無いらしい。暗闇の

底で何かに貪られる結末が、お似合いだそうだ。それに反対する者は誰もいなかった。

お礼も兼ねて、それなりの広さの部屋を三つ、使わせてもらうことになった。一つは、既にミレーヌが寝かせられている所で、後はホレイス、貴樹、ホークウツドの男達と、アンリ、ゲルトルド、クリムエルヒルトの女達で分けて使うことになった。もちろん、彼はあまり守るつもりがない。

女性用の部屋に集まり、貴樹は聞いたことを整理して伝える。とにかく目指すべきは聖堂だと、全員に理解してもらおう必要があった。

だいたいは納得してもらえた一方で、二人がまだ何かを言いたげにしている。

まずは、ホークウツドが話し始めた。

「あいつらが、タカキの、つまり灰がやってきた世界の住人で、いいんだな?」

「そうなりますね」

「話している言葉も?」

貴樹がその質問の意図を理解しようとした所で、新たに誰かが中に入ってきた。

「ミレーヌ。大丈夫なのか」

彼女はまだ顔色が良くなかったが、足取りは確かだった。尋ねてきたホークウツドの横に座り、軽く頭を下げる。

「迷惑をかけたわ。ごめんなさい。もう、大丈夫」

体調は回復したにせよ。大丈夫そうにはあまり見えなかった。ノミの言う通り、ウイン達に会ってから、彼女はどこか変だった。

その答えを、どうやらホークウツドも気づきかけているらしい。

「俺は、よく考えると、お前のことをちゃんと知っているとは言えない」

「どう、したの?」

クリムエルヒルトが、ベッドの枕に顔を寄りかからせる。二人に向かって、含み笑いをしてみせた。

「私達、退出した方がいいかしら。大事な話は、二人つきりの方がいい

でしょう」

「いや、いいんだ。これは、俺達全員で共有しておくべきことだと思っ
た」

彼女のからかいにも、ホークウッドは真面目に答える。ミレーヌを
一瞥し、それから貴樹へと顔を向けた。

「アリーって、いったか。全然言っていることはわからなかったが、彼
女はいい奴だ。何者かもわからない俺とミレーヌに、丁寧に対応して
くれた。…でも、ミレーヌ。お前は違うんだろう。お前は、多分、彼
女を知っている」

ミレーヌは言われて、しばらく目を開いたまま固まっていた。それ
から何度も瞬きをしながら、首を振る。

「何を言ってるの?」

「つまり、お前はあいつらやタカキと同じ世界から来た、灰だつてこと
だ。根拠ならある。あいつらが話す言葉はまるで意味がわからんが、
聞いたことがある。お前と、初めて会った時、どの国にも当てはまら
ない妙な言葉を、お前の口から聞いた。それと、全く同じなんだ」

「やめて、ホーク…」

「もう一つ、アリーが、何もない所から、布を取り出したのを見た。そ
れも見憶えがある。あんまりいい思い出とは言えねえが、お前は瞬時
に大剣を出現させて、俺の腹を貫いた。インベントリって、言うんだ
ろ? 祭祀場で、タカキの部下のガキ共が同じ言葉を言っていた」

ミレーヌは立ち上がった、見てくる全員を恐れるように部屋の出口
を一瞬だけ見る。

「違う、違う…。私は、幼い頃に、シフィオールスに拾われて、それで」
「それ以前の、記憶はあるのか? 親は?」

彼女は頭を抱える。

「私は、ホークと同じ世界で生まれたの! そうに決まってる。彼ら
とは違う。私は、ずっと、あの世界で生きてきた。親は、きっと、死
んだのよ。私を守って」

ホークウッドも立ち上がった。

「家族のことを、そんなに軽く言うんじゃない」

「貴方が、家族よ。親の代わりに一緒にいてくれた。それでいいの！だから」

「だから、何だ？」

一歩、ホークウッドが進めば、ミレーヌは一歩下がる。そんなじりじりとした追いかけてつづき、彼女はベッドの前にまで追い詰められた。

彼女の腕を掴み、顔を近づけて、目を合わせる。

「今まで俺に、そんな大事なことを話さなかったのは、怖かったからか？俺が、お前の出身のことを知って、拒絶するとも思ったのか？生まれた世界が違うから、何だつてんだ。俺は自分の全てを、お前に預けると誓った。その思いを疑われるのは、やるせねえよ」

段々と、深刻そうだった雰囲気、気まずいものに変わりつつあった。ホークウッドはもはや、周りのことが意識から消えているようだ。憑かれたように、彼女だけを見つめている。

「そうだ、俺とおまえは家族だ。二度と、離れることはない。できる限り、お前のことを知りたいと思ってるし、その、なんだ、こんなこと、誰かに言うなんて思いもしてなかったが」

ミレーヌは青白い顔から、次第に紅潮しつつあった。ちらちらと貴樹達を気にし始める。アンリは出て行くべきかと出口を伺っていた。生温かい空気が流れ始める。

貴樹というと、傍らのゲルトロードの胸を気にしていた。

(なんで盛大ないちやつきを見せられてるんだ？ くっそ…)

腰が抜けたのか、ミレーヌがすくとんとベッドに腰掛ける。見ている者達のことなど気にもとめずに、ホークウッドは続ける。

「お前がいないと、生きていけないんだ。あれだ、端的に言うと、お前を愛し」

「ち、ちよつと待って」

「あ？ 何——」

ミレーヌは決定的な一言の一部を聞いた途端、跳ねるように立ち上がり、ホークウッドの肩を掴んだ。もう片方の手で自分の口を押さえながら、彼を出口の方へと引っ張っていく。

「ほら、やっぱり二人で話した方がよかったじゃない」
「うるさい」

真つ赤な顔でクリムエルヒルトを睨みつけた後、ホークウッドと共に去っていった。そういう気持ちの整理は既に最初の洞窟で済ましていたと思っていたが、案外、どちらもきつかけがなければ踏み込めない性格らしい。

貴樹はミレーヌの正体に前から勘付いていた。臭いとは思っていたのだ。女の監視隊など、よほど特別な何かを持っていないければ存在していない。彼の嫌う地球人であるのにもかかわらず、ダークソウルの世界の重要な役割を背負っていたということだ。もし、ホークウッドがいなければ、とつくに処理していただろう。

なんとも言えない空気が残る中、クリムエルヒルトがはつきりと声に出して言ってくる。

「状況は理解しました。彼らはいいい人ではあるんでしょう。でも、忠告します。あまり、信じない方がいいかと」

まだ笑みの残っていたアンリが、冷たく彼女を見た。

「タカキさんと同じ出身であるのにもかかわらず、疑えというのか？」
「例えば、とある国が滅びた。その原因は、何だかわかる？ 外の敵ではなく、内の敵に全てを崩された。貴方も心当たりはあるでしょう。同じ故郷、同じ国、同じ世界でも、様々な者がいるわ。善良な者も、邪悪な者も」

「私の故国を愚弄しているのか？」

クリムエルヒルトは肩をすくめる。

「別に。内乱で滅びた国なんて、いくらでもあるでしょう。そういう風に聞こえてしまったのなら、ごめんなさい。アストラの事なんて、気にも留めてなかったわ」

そうして互いを見合う二人の間に、貴樹は割って入った。

「ホークの言う通りです。貴方達はどちらも、大事な仲間だ。お互い相容れない気持ちはわかりますが、もういがみ合うのはやめてください。僕はそんなことを望んでいない」

クリムエルヒルトは微笑んで身を引き、アンリは溜息をついて、ホ

レイスの所まで下がった。彼らがわだかまりをすべて解消し、肩を組んで進んでいけるとは、貴樹も思っていない。だが、不和は穴になる。厳しい戦いになれば、それは必ずどちらの命取りにもなりかねるだろう。

「僕だって、生徒達と別れてから、初めて会った同郷の人達のことを、大事に思っています。でも、クリムの言うことも無視はできない。なるべく彼らを助けたいんですが、ずっと一緒に行動するわけにもいきません。僕らの目標を考えれば、多分、命がいくつあっても足りないでしょう」

(どうなるにせよ、この世界で死ぬんだけどな)

『お前…』

貴樹はクリムエルヒルトの意見の、はるか進んだ所にまで到達していた。

ヴィルヘルムを想う。彼には、感謝してもらいたかった。鉛弾で体を汚されることなく、殺してやったのだから。ウイン達の集団のいくらかを処理してくれた働きがなければ、もつと、無残な最後になっていた。

(奴らの全てが不快だ。もう潮時だろう。最低限の情報は取れた。後は、奴らをいなかっただけだ)

念入りな、殺害計画を考え始める。当然今からこの部屋を出て、全員をなぶり殺しにするのは造作もないことだ。彼らは、弱い。今まで生き残ってきたのが奇跡なほどに。

しかし、それでは意味がない。彼ら自身にはともかく、アンリ達、特にゲルトロードには自分が冷酷な殺人鬼だとは思われたくなかった。優しく、清い精神が偽りであると、誤解されたくはない。

『誤解じゃねえだろ』

故に、貴樹が手を下す所を決して見られないようにする必要があった。できれば、彼ら全員が、喜んで自分から命を絶ってくれるような展開を作ればいい。彼はそれを嘆き悲しむだけで、かつてに周りが評価をしてくれるのだから。

(鍵は、奴らが常に纏ってる、妙な後ろめたさだ。くくくくく、叩けば

ホークウッドは顎をかいだ。

「なんとかな。正直、あんな責めるような口調で言ったのは間違っていたかもしれないねえ。俺も冷静じゃなかった」

「僕も、少なからず驚いていますよ。彼女が僕と同じように世界を渡つたとすると、色々な疑問が湧いてくる」

「どうと？」

耳が敏感になっている。できれば今だけ、あまり会話をしたくなかったが、繕うためには必要なことだ。

「彼女はもう長い間、あの世界で暮らしていた。ほんの少し前にやってきた僕や、生徒達とは明らかに異なっています。その時期のずれが、何かを示しているかもしれません」

「なるほどな」

貴樹は立ち上がって、大きく伸びをした。下半身の激動を悟られないよう、意識して抑制をする。

「どっか行くのか？」

「彼らの仕事を何か手伝えるか、話してきます」
「本当に？」

ホークウッドに向かって、彼は首を傾げてみせる。そういうふりをしてから、参ったように、笑みを作った。

「その、実は。クリムから一応忠告を貰ったんですよ。あまり大きな声では言えませんが、彼らを監視する意味でもあります。僕にとっては、正直、貴方達の方が大事ですから。用心に越したことはないです」

ホークウッドはしっかりと視線を合わせてきた。

「俺も何か役に立てるか？」

「いえ、二人はここをお願いします」

風呂へと続く扉とは反対方向に体を向け、歩き出す。頭ではこの住まいの構造をもう一度確認していた。自らが見たものを逆算し、目標への道筋を思い描く。

数歩歩いた所で、ホレイスが彼の進路を塞ぐように立った。

「…アンリから、お前の……行動原理を、聞いた」

「えつと？」

「何をやりかねないということもだ…。お前には…感謝をしている。だが、今はやめるべきだ」

ホレイスがこれほど多くの言葉を語るのは初めてだったが、そこを気にしている余裕はあまりなかった。理解していない、という表情を作り、首を振る。

「でも、できることは早めにやっておかないと。別に、今じゃなくてもいいですけど、先延ばしも、よくありませんから」

「もう、ごまかすのはいいと思うぜ」

いつの間にか、ホークウッドも側に立っていた。二人に、挟まれる形になる。

「フロとやらに続く扉はここだけじゃない。裏口も当然ある。ホレイスの言う通りだ。タカキ、そういうのは駄目だぞ。最低限の礼儀を、わきまえるべきだ」

彼は二人を交互につぶらな瞳で見た。が、彼らの意志が固い事を知る。完璧に隠し通していたと思っていたが、やはり、普段の行いが災いしたのだろう。

息を長々と吐き、その場に座った。あーあ、と床に寝っ転がる。

「アンリさんと、ミレーヌには指一本触れませんし、視界に入れるつもりもありませんよ」

「いや…、そういう、問題じゃないと思うが」

ホークウッドの言葉に、ホレイスも頷いた。

「まあまあ、そんな本気で答えないでくださいよ。僕だって限度があると思ってます。冗談ですよ。こっちではわかりませんが、僕のいた世界では、そういうことをすると罰があるんです。実際に行動に移すなんて、よほど追いつめられた者くらいですね。元から、そんなことをするつもりはありませんでしたよ」

（ノミ、ギアを…一段階上げろ。百二十%だ。限界を超えるぞ）

『そんなのねえぞ。寝ぼけてんのか？』

貴樹は苦笑しながら、ギリギリと両足に力を込めた。二人が警戒しているのはわかりきった上で、それでも止まるつもりはない。合法的に(?)かかってない極上の映像を脳に刻み込める機会を目の前にして、

アあああああああ嗚呼嗚呼アア嗚呼嗚呼アアああ嗚呼っ！

意識の十割がこの時、一つの目標へと注がれていた。

部屋内は木の床が敷き詰められており、天井から吊り下げられた複数のランタンが、内部をほど良い明るさに保っていた。シャワーなどという大層なものではないが、糸を引けば上から桶に入った湯が体を洗い流してくれる仕組みもある。一体、どれほどの時間と労力がかかっているのかはわからない。それでも、故郷の雰囲気再現しようと相当な努力をした痕跡が随所に見られた。

一番奥には、湯船が二つ。察するに、一つは高温で、思う存分汗を流すためのもの。もう一つのぬるま湯の方に、彼女は浸かっていた。

ここで、貴樹の本能のままに行動してしまったツケが回ってくる。簡単に言えば、それはあまりにも段階を飛ばし過ぎた挑戦だったのだ。手を握ったり、服から少しだけ出る肌さえ結構な興奮をしていた彼が、許容量内で収めるにはあまりにも。

ゲルトルドは湯に全身のほとんどを入れていた。が、そのさらさらと湯に漂う銀髪、濡れた白い肩や鎖骨、湯の中に薄らと透けて見える胸の像を目に入れた瞬間、脳の血管が全て千切れる感覚に陥った。(w f 4 3 2 v 女 d ◆ g v n j f v f c j シ k を 絵 h n f ヴ o d j ヴ o r □ j ふ お え w h ふ お い え w j ふ お い b f @ ヴ い お j ヴ o d B h ヴ お い ▼ d h ヴ い コ お d s じ よ b っ ひ お h (^ | |) | ☆ g ヴ お l m c l x x k l j j n ヴ い % お 中 d シ h の ふ い え h ふ い お コ え ○ w ふ じ え う い お f じ え w)

貴樹の意識はあつという間に暗転した。

「……起きてください」

彼には、もはや睡眠は必要ない。疲労も感じないので、体を横にする時というのは、こういった、外的ショックによる失神くらいしかなかった。しかも今回の場合は残り火の力が牙を向いたわけでもないので、回復は瞬時に終わる。

目を開けると、場所は会議室に移動していた。全員が、その場に集合していた。貴樹はテーブルの上で起き上がると、ほっと息をつく。

「ご心配をかけてすみませんでした。まさか、また、副作用が来るとは予想もしていなくて。ウィンさん達には説明してませんでした。僕はこの力には、少々の危険が伴うんです」

べらべらと口を回す。だが、周りの目は変わらなかった。呼びかけてきたクリムエルヒルトは腕を組んで、彼から一歩下がる。

沈黙の中で横を見ると、自分だけがテーブルの上に晒されているわけでない気がついた。ホークウッドもまたうなだれていて、その頬にはくつきりと手形の跡が残されている。拘束の魔術はまだ解けていないようだった。

貴樹はえへへと、愛想笑いをする。

「ちよつとした事故なんです。僕は、被害者です。その、ホークさんが言い出したことなんです。止めようにも意志が固くて。あ、扉を壊した分はしっかり働くん。そこところはよろしくお願いします」

ぎよつと、隣のホークウッドが見てくる。

「どうしても、ミレーヌさんの裸が見たいって言うから。でも、最低限の礼儀は必要なわけじゃないですか。間違つた道を進むのを辞めさせたかったんですが、それでも仲間なんです。手を出しあぐねているうちに、ああなつてしまつたんです」

「ホレイス？」

なぜか追及を免れている彼は、目を閉じ、首を振つた。アンリは無表情になり、魔女と同じく腕を組んで、こちらを見てくる。

「あの場にいた誰もが、タカキさん。貴方のはりきりようがすさまじかつたと記憶しているのですが。何か、申し聞きはありますか」

ホークウッドが下ろされる。顔が非常に険しくなっているミレーヌに引きずられて、会議室を後にした。

「ぼ、僕はいくら世界が違えど、人としての尊厳を軽んじるべきだとは思っていません。もちろん男ですから、女性のそういった姿には興味があります。でも、規律を乱してまで見るつもりはないんです。それに、ゲルトルードのことはそんな邪な気持ちで捉えてませんし、ただ、純粹に」

だがそういったのはりきりようが露骨だったので、当然貴樹の魂胆は見抜かれている。肩の上にイアンを乗せながら、彼はすつとぼけた。「あれを作るのにどれだけ苦労するかは想像できるよ。君が考えたの？」

「エロタカキ〜」

「がああああ」

「きやー」

（ガキめ。欠陥的存在が俺を馬鹿にしやがって）

『同レベルだろ』

頬をつついてくるイアンに向かって、歯をむき出しにする。少年は嬉しそうに悲鳴を上げ、彼の背中を滑り降りた。待っている母親に抱きついて、にやにやと彼を見てくる。

微笑ましそうに眺めてから、由海は頷いた。

「やりたいって、最初に言ったのは私です。でも設計とか、実際に中心になって作ってくれたのは幸成なんです。ね？」

ジアンナと持っていくべきものをくくだくだ口論している彼は、訊き返してきた。

「なんだって？」

「何でもないよー。邪魔しちやってごめんね」

にこやかに手を振り、こちらへ向き直る。

「まだ、罰は続いでるんですか」

「聖堂へ行って、帰ってきたらいいらしい。そろそろ本当に我慢の限界なんだけどね」

邪魔をするのが、クリムエルヒルトだけならまだ言いくるめる隙があった。しかし、そこにアンリやホレイスに加わるとなると、強引にゲルトルードへ飛びつくのも躊躇われる。もちろん、後悔はしていない。見るものは見れた。

（んぐぐううううううううううううううう！）

鼻を押さえて、上を向く。思い出すたびに、興奮の残滓が一気に駆け昇ってくる。これだと戦闘中に支障が出ること必至なので、彼は惜しみつつも、ゲルトルードの湯姿の記憶を封じ込めることに決めた。

心臓がいくつあっても足りない。

「また気持ちわるいうづきしてる」

「にやああああ」

「や——」

イアンは嬌声を上げながら、母親から離れ、会議室から出ようとする。ちょうどそこへ入ってきたクリムエルヒルトとぶつかった。初めは驚いた彼だったが、相手のことがわかるとさらに嬉しそうになる。

「炎のおねえちゃんだ！ またあれ見せて」

言葉は通じずとも、何をしてほしいのかは理解しているらしい。彼女はイアンの目の高さまで屈むと、指を一本示してみせた。彼の目を引くようにゆらゆらと左右に振ったあと、指先から小さな火球を作る。二つに分裂し、それぞれが異なる軌道で回転を始めた。その輪は大きくなっていき、イアンの周りを高速で回っていく。

やがて二つの火球が合流し、彼の頭上で弾けた。赤い欠片が一気に広がり、綺麗な花を咲かせた後、クリムエルヒルトの手に収まっていた。

「へー、たいしたもんだね。魔法ってやつ？」

大喜びのイアンがもつとと催促する中、ジアンナが話に入ってきた。鎧などを嫌というほど観察していた彼女は、これにも興味を示すようだ。

（呪術だよ。間違えんなアバズレ）

クリムエルヒルトは、表面上、きちんと彼らと交流する気はあるようだった。子供の扱いもわかっている。器用な女だ。

幸成もまた、呪術のことで疑問がたくさんあるらしい。

「無から有を生み出す技術は、フィクションで散々描かれてきたけど、実際に目にする機会があるとは。地球じゃ、有り得ないですよ。やっぱりこの世界は、物理法則が異なってるみたいですね。別の宇宙という線もあるな」

注視されている事に気がつくのと、クリムエルヒルトは幸成に顔を向けた。突然の事でどきまぎした彼は、小さく謝って作業に戻る。その

あまり女慣れしていなさそうな感じは、生徒の下田を思い出させる。なぜ今彼が頭に浮かんだかはわからなかった。

「彼は、一体何を話してたんですか？」

「長いようで、あまり意味のないことだよ」

クリムエルヒルトとの会話を、ジアンナはじつと観察している。

「彼らとは、それなりに長くいたんでしょ？ よく、そんな聞いたこともない言語を身に付けられたもんだわ」

「どちらも同じ日本語に聞こえるので、ややこしいことこの上ない。

「ええ、まあ。ジアンナさん達は、この世界に来てからどれくらい経つんですか」

「あれ、ユミとかが話してないんだ。最近はもう、数えるのはやめたけど。ざっと三十年はここで過ごしてるんじゃない」

「予想外、というよりもなるべく行ってほしくない方向の答えが返ってきた。驚くふりは最小限にしておく。

「三十年ですか」

「そつちも似たようなもんでしょ。見た目の年が変わらないつてのは、最初は慣れなかったけど。よく考えればありがたい話だよね」

(…)

ジアンナが、嘘をついていないことを確認する。てつきり、ミレーヌとの関係があると踏んでいたが、ホークウツドの話によれば、彼女が拾われたのはそのさらに前だ。この時点で、三つの目覚めのずれが起きていることになる。

(こいつら、俺の先輩になったつもりか？ 何十年も早くダークソウルの世界を味わいやがって。その資格もないくせによお)

などと、非常に心の狭い思考に浸っている。だがその感情も、全員の準備が整い、出発する時にはなくなっていた。ウイン達に関することで関心が長く続くものはないのだ。それよりも、ゲルトルードのことで頭は一杯だった。常に。

話によれば、彼らが全員、一度に他の場所へ移動するのは十数年ぶりらしい。前の拠点だった所はここよりも侵入されやすく、鴉人の集団に襲われ、辛く厳しい逃亡だった。

今回は違う。移動の際の護衛がたくさんいた。イアンとアリーを中心に、幸成、ジアンナ、由海、ファエラが第一の防衛線を。そしてランドンとウインがその外側。さらに貴樹達が、一番襲撃に遭いやすい先頭と最後尾を守ることになった。

問題はある。イアンよりも移動に苦勞しそうなゲルトルードの存在だ。彼女の命が貴樹にとって何よりも優先されるために、多少の反対があっても自分が背負っていくと押し通した。これで既に罰はほとんどなかったことになっているが、とうの彼女本人が気にしていないということ、もはや曖昧にされつつある。

貴樹は上機嫌だった。数日ぶりに、彼女と触れ合えたからだ。足取りが軽くなり、他の者達を置いていかないよう気をつけなければならなかった。

「少し、立ち入ったことを訊いても？」

アンリが後ろから話しかけてきた。雪の中で続く行軍の中、ゲルトルードは彼の背で眠っている。それを見計らったようなタイミングだった。

「どうぞ」

彼女はゲルトルードを見てから、言う。

「貴方は、祭祀場に来た当初から、この子に、とても大きな関心を示していました。大事な者のため、一心に戦い抜ける所は、尊敬しています。ですが…、私と違い、貴方は彼女と会った瞬間から、既に決意を固めていたようにも思えます。彼女のどんな所に、それほどの価値を認めているのですか？」

子を心配する、親がしそうな質問だった。今まで似たような問いを何度か向けられてきた。

その誰もが、ゲルトルードのことを侮るような態度ばかりを取り、まともに応対する気にもなれなかったが。アンリは、真面目に貴樹の意見を聞きたいのだろう。

普段抱いている思いをきちんと形にしようと、頭の中で考えをまとめた。

「まずは、顔ですかね」

「顔？」

アンリは予想外そうに訊き返してくる。タカキはゲルトロードの体のずれを直し、もつと密着させる。

「例えば、頬から顎にかけての輪郭が、奇跡的なバランスを保っているんですよ。絶妙に触ってみたくなる縁取りというか。小さめな耳も、色素の薄い唇も、僕の好み合っています。もちろん、髪の毛一本一本も宝石みたいで、たまに手で梳いてやると、なんともまあいい香りがするんですよ。顔をうずめたくありませんね。もちろん、顔だけではありません。世の中には体の凹凸がはつきりしている女性を好きだという男もいます。ですがそれはただ見た目の衝撃を重視した、浅い意見だと言わざるおえない。こう、手を広げて、ちようど収まるくらいのものを、一番愛おしく感じるように本能はできているんですよ。そして、特に腰。彼女の黒衣は、その全貌を薄らと想像させるに任せています。それでもわずかに現れているくびれには、つい、目が引き寄せられるんです。こうして背負っている今も、伝わってくる柔らかな感触が何よりの安らぎと、前へと進む意志を培ってくれています。是非とも、火守女の黒衣だけではなく、もつと色鮮やかなドレスや可憐な装飾付きのワンピースを着せてみたいですね。その観賞会だけで、永遠に過ごしていられるでしょう。僕が外見だけに価値を置く男だとは思われたくないので、彼女の中身の話もします。一見、感情をはつきりと表に出すことをしないんですが、時折見せる戸惑いや控え目な遠慮が、いい味を出しているんですよ。真摯な心で頼めば、決して断れない所も、自分を常に周りから一步引いて考えている所も、保護欲をそられます。彼女に自分の意見を持つてほしいのは常々願っていることですが、従順でおおらかな所も好きですね。話す時の唇の動きも、よく観察すると飽きません。やや低音寄りの細かい声に、鼓膜を振るわせられる度、平静を保つのが難しい。僕のことを灰の方、灰様と呼んでいた時なんて、灰の部分を少し緊張気味に発音しているんですよ。そのわずかな言葉の震えが、気に入ってましたね。もちろん名前で呼んでくれる方がはるかに嬉しいですが。今の彼女は、そうですね、不謹慎かもしれませんが、結構口の動きが丸くなっ

ていて、とても可愛らしいんです。子供の頃も、さぞ愛らしい子だったんでしよう。僕はその時期から一緒にいられなかったことが、悔しくてたまらない。僕は男であることにある程度の誇りを感じています。でも、母親として彼女を産み、育てていくのも悪くないと言えますね。いや、待つてください。あるいは彼女の子になって、養われるのも捨てがたいです。いやいや、姉や妹という関係性にも魅力を感じます。もつとも、一番は対等に愛し合う関係ですけど。結局は愛なんですよ。この子はまだ、愛というものをよく知らないようなので、これからじっくり教えてあげたいと思つてます。ああいえ、そんなにかわしいことをするつもりはありません。ただ、一緒にいてあげればいいと考えています。知ってますか、祭祀場にいた頃の彼女は、あの程度じつと見ていると、最初はちよくちよくこちらを気にしていたのに、やがて慣れてくるんですよ。僕という存在が受け入れられたみたいで、あの時は嬉しかったなあ。普段の彼女は石段に座って、ぼうつとしているか、篝火のそばで祈っているんですが、その時の少しの体の動きだけでも、毎回違つてて楽しいんです。どう違うのかといううと」

「わっ、わかり、わかりました。貴方の思いは、伝わってきました。ありがとうございます、十分です」

いつの間にか、貴樹は全員に囲まれていた。自分の思いを五十分の一ほど吐き出せたので、それなりに満足しているが、他の者は違うらしい。アンリは普段の落ち着きを完全に崩して、話の途中では恥ずかしそうにもしていたのに、最後の方は笑みもなくなつて彼から身を引いていた。

背中のゲルトロードが離される。振り返ると、ホレイスが彼女を背負う所だった。クリムエルヒルトが、額を押さえ、困つたように首を振る。

「やっぱり、もう少し一人で歩いてください」
「ええ〜」

今度は、誰も笑っていなかった。

道中、狼や、鴉人、そして鹿の兜を被つた大柄な亡者の襲撃を受け

た。その全てが、例外なく貴樹を狙ってくるので対処自体は難しくなかった。ゲルトロードに触れず不安たつぷりな彼以外は、誰も怪我することなく、安全に進んでいった。

一番、変わろうと努力していたのはミレーヌだろう。彼女はたどたどしい英語で、彼らとの会話を試みていた。十歳以前の子供相当の語彙だったので、一番話が合ったのはイアンだった。

そこで、ミレーヌもアメリカに住んでいた事や、両親のこともわずかに聞こえた。彼女自身、記憶が曖昧であるが故に、家族がどうなったかもわからないようだ。その会話を見守るホークウツドは嬉しさ半分、寂しさ半分という感じだった。

ウイン達が目指す拠点は、日が暮れる前に見えてきた。今度もまた崖の近くだが、下へしつかりとした木の梯子が下りている。そして、眼下には鴉村があつた。より脅威が近くなつたわけだが、彼らにとつては前よりも条件がいい場所だそうだ。

そして、梯子のすぐ横には、かなり長い吊り橋が掛けられていた。風に揺らされて、決して安全そうとは言えない。その先には、この絵画世界で唯一の、大きな聖堂がそびえていた。

由海が動きを止めて、その建物を静かに見つめた。懐かしさもあるだろう。それに加えてどこか、おぞましいものに対しているような恐怖も、貴樹には見てとれた。彼の方を向いたときには、繕うような笑みになっている。

「何も、変わってません。まるで、ついさつきこの世界にやってきたような気がします」

他の者も目には止めていたが、あまり長くは視界に入れたくないよう、すぐに梯子をの方へと向かっていった。貴樹だけはずっと眺めていた。それほど、思い入れがあるわけでもない。だが、妙な胸騒ぎがしていた。

『ヴィルヘルムの奴、変なこと言ってたな』

(悪魔が、どうかだろ。フリーデに何か危険が迫ってるのか？ だとしたら、なるべく早く、会うべきだな。助けてやったら、恩も着せられる)

そして、あの聖堂には、おそらく元の世界へと戻るための重要な鍵がある。さらに言えば、深淵を乗り越える手がかりも得られるかもしれないのだ。

善は急げということで、下の拠点に落ち着こうとウイン達に、自分が今から聖堂へ向かうということ話を話した。彼らだけではなくクリムエルヒルト達もついていこうと言ってきたが、これはあくまで交渉の前段階的なものだど、自分一人で行くことを押し通した。相手はどう出るかわからない以上、下手をしたら、彼以外の者では太刀打ちできない可能性がある。

ゲルトロードの護衛をしっかりと頼んでおいてから、彼は吊り橋を渡り始めた。一度振り返ると、アンリ達は外で待つつもりのようだ。何かがあつたらすぐにも助けに行くという意味が見え隠れしている。

『実際、戦うなんてことになったら、大丈夫なのか？』

(余裕に決まってるんだろ。ただ、耐久値を無傷に抑えることは難しいかもな。それこそ、俺が本気で殺す気にならねえと、一瞬でけりはつかない。仮にもボス級だから。アリアンデルと組まれたら、面倒になるだろう)

橋は歩いてみると、案外丈夫だった。かなりの年月を経ていそうな見た目をしているものの、男一人分くらいの体重は何なく支えている。次第に遠慮もなくなって、小走り、奥まで渡りきった。

聖堂までの道では鴉人が膝を突き、一心に何かを祈っていた。こちらに気がつく様子もない。まともな思考もできない化物が、一体何に縋りついているのかは気になった。だがそれよりも、フリーデに会うという目的の方がはるかに重要だ。

聖堂の扉は何なく開いた。ゲームであれば、フリーデは入つてすぐの広間で訪れる者を迎えていた。わりと楽しみにしながら、中へと入る。

一見、誰もいないようだった。代わりに、絵の中の顔がいくつも、貴樹へ向かって微笑んでいる。本来彼女が座っているはずの祭壇周辺にも、絵画が雑多に置かれていた。さらに大きく違うのは、祭壇の状

態だ。

蠟燭がいくつも並べられた台の上に 修道女と子供の像がある。それらは貴樹に背を向けていた。台自体が本来あつた場所からより奥へとずれて、地下へと続く階段がむき出しになっている。

別の場所で仕掛けを動かさないと、そうはならないはずだった。フリーデは、訪れた灰に教父アリアンデルの姿を見せる気などなかった。彼がいる地下への道は、本来ならば閉ざされているはずだ。

貴樹は警戒した。何かが起こっている。首を回してから、落ち着いた足取りで、進んでいく。階段に足を踏み入れると、冷えた空気が頬を撫でるのを感じた。

下りた先は、また広間のような場所になっている。石床には浅く雪が積もり、左右の燭台が並べられている所だけが溶けて、水たまりを作っていた。

一番奥には、想像したようなアリアンデルの姿はなく、鎌を持った修道女だけがぽつんと佇んでいた。かつてロンドールの勢力をまとめ上げていた、女剣士が。

彼女が体をこちらに向ける動きだけで、貴樹はその実力を何となく理解した。

（想像以上だな。生身の俺が、五千いても相手にならない。しかし、いきなり臨戦態勢なのは、どういうことだ？）

鎌を構えたまま、フリーデは口を開く。

「ようこそ、灰の方。いつか誰かが、ここへ来るということはわかっていました。ヴィルヘルムを殺したのですね」

貴樹は敵意がないことを示すために、欠けた両腕を上げた。いきなり襲いかかって来ないということは、話す余地がある。

「仕方のないことでした。彼は、憎しみにかられていて、僕としては傷つけたくなかった。貴方に忠誠を誓った者を殺害した罰ならば、受ける覚悟があります。ですがその前に、話し合いの場を設けたいんです」

フリーデの被っているフードがたなびく。

「私は、そのことを責めているわけではありません。あれは既に私に

仕える身ではなくなっていた。それよりも、話し合

彼女は言葉を切る。フードを片方の手で押さえて、顔をこちらからやや右に逸らした。

(ん?)

鎌が下げられ、彼女の口が億劫そうに動く。よく耳を澄ましている
と、どうやら何かをつぶやいているようだった。

「なんなのですか。冷静になれない気持ちは十分に承知しています
が。…はい? 確かに気になりますが、今尋ねると? 不自然では?

……ええ、わかりました。その鬱陶しい話し方はやめてくださ
い」

貴樹は素で困惑していた。

(え? そっち? まさか、フリーデって病んでたの? 俺の知らない
誰かと話してるんですけど)

彼の鋭敏な鼻は、きな臭いものを嗅ぎ取っていた。自分の予想から
ずれた時は、ろくなことにならない。

フリーデは咳払いをすると、鎌を落とした。床に転がる前に、霞が
かるように消えていく。

「その両腕は、どうしたのですか?」

「えっと?」

「なくなってしまうようですが。一体、誰がそのようなことを
?」

今、ここでするような質問だろうか。奇しくも、その答えは、彼女
と無関係ではない。数瞬迷ったが、貴樹は正直に言うことにした。

「多勢に追いつめられた結果です。実際に、この腕を斬ったのは、ユリ
アという女性ですよ。貴方の妹ですね。リリアーネにも、会いました
よ」

彼女の反応を観察する。劇的な変化はない。が、しばらく言葉は出
て来なかった。手が修道服の裾に触れ、また離れる。自分の言葉が、
少くない衝撃を与えているのだとわかった。

再び、ぼそぼそと何かを話し始める。今度は声がさらにこもって、
聞き取れなかった。何か、口論になっている気配は感じ取れる。いよ

いよ、貴樹は可哀想な目で相手を見始めた。アリアンデルがいないのと、何か関係があるのだろうか。肅々とした女性というイメージが、もう、ほとんど消えかかっている。

フリーデが顔を上げる。どこかくたびれた様子だった。

「事情はわかりました。貴方に害を加える意思はありません。：わかってますから。もう少し我慢してください。それで、非常に唐突なのですが。到底、信じられないかもしれません。貴方とても話したがつている者がいます。今から、替わりますので、落ち着いて聞いてください」

（電波か……。ギャップあって可愛いけどなあ。精神がイってる奴は、どう対処したらいいんだ）

冗談半分に聞いている彼に向かって、フリーデはフードを外してみせる。現れたその顔は、成熟した美貌の中、右頬の焼けただれた部分が一番印象を残した。しかし驚くべきことはその次に起こる。冷たい無表情が、一転、花の咲くような満面の笑顔へと変わったのだ。印象が変わるところの話ではない。もはや、別人のように雰囲気異なっていた。

貴樹は背筋に言いよのない寒気を感じた。彼女が変わったことというより、その笑い方が、何となく見覚えがあるものだということに、とてつもなく嫌な予感がした。

彼女が今にも飛びついて来そうな勢いで、言う。

「久しぶり。貴くん。私だよ、わかる？ 本当に会いた」

石の床が大きく割れるほど足を踏み込んで、後ろへと飛ぶ。空中で一回転してから、階段に降り立ち、背を向けて全速力で駆け上がった。入口の扉は閉まり切っている。そんなことはおかまいなしに、頭から突っ込んだ。扉は彼の体の大ききの分だけ穴が空いた。

外に出て、ひとつ飛びで橋に乗る。半分ほど走ってきた所で、橋の基礎部分を完膚なきまでに破壊した。崩れ始める吊り橋を全身全霊の速度で渡る。何事かとアンリ達が近づいてこようとしたが、ぶんぶん首を振って、その必要性を否定する。渡り切ると、今まで橋がかかっていた場所は、ただの深い谷へと変貌していた。

3 1. 姉弟の微笑ましい交流

雪を吹き飛ばしながら、味方達へと走る。

『お、おい、なあ。あれってよ。あれってまさか』

(幻聴だな。そうに決まってる。どんな確率って話だよ。ゲルトル―ドちゃんのおっぱいでも揉めば目が覚めるだろ。そうに決まってるんだ。おっぱいおっぱいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい！)

現実逃避をしながら、ホレイスからゲルトル―ドを受け取る。未だ全く状況が理解していない様子のアンリ達に向かって、懸命に伝えた。

「交渉は決裂しました。かなりまずいです。今すぐに、ここから離れなければいけません。非常に危険です」

「でも、彼らのことは」

アンリの抗議を途中で遮る。

「ウインさん達が標的になることはないでしょう。ですが、僕達は危険だ。聖堂に元の世界へ戻る手掛かりがあると思っていました。それも間違いました。とにかく速く移動します。僕についてきてください」

「え、なんで―？ ちょっと待ってよお」

走り出そうとした所で、頭上から叫び声がしてくる。見れば、フリーデがかなりの高さから落ちてくる所だった。貴樹は思わず固まり、すぐ側に着地するのをただ眺めているだけになる。

(はあああああああああ!! 何でももう追いついてるんだよ。俺並みに足が速いってことじゃねえか。くそがああああああああ!)
アンリ達も抜剣し、突如として振ってきた修道女を囲む。彼女達が戦闘になるのを止めなければならぬ気持ちと、今すぐにゲルトル―ドだけでも連れて逃げ出したい気持ちが拮抗した。

フリーデの姿をした女は、手を叩いて大げさに喜んでいた。

「たくさんいるね。皆、貴くんの友達なの？ ちゃんと挨拶しなきゃ」

「あの、フリーデさん。急にどうしちゃったんですか」

貴樹は最後の抵抗を試みる。本当に、狂人の妄言だという可能性も残されているはずなのだ。むしろ、そういうことに無理矢理持つて行きたかった。

「何か問題があるのなら、相談に乗りますよ。ずっと一人で、この絵画世界に残されているのは、さぞ辛かったでしょう。多少おかしくなつてしまうのも仕方がない」

心外だと言わんばかりに、女は貴樹の肩を叩いた。

「もう、何でそんなこと言うの？ 話してる途中で逃げちゃうしさ。あ、わかった。照れてるんでしょ。私がアメリカに行った時以来だから、二年ぶり？ 相変わらず素直じゃないんだから」

（あ、ああああああああああ）

『う、頭が…』

触られた肩にびつしりと、鳥肌が立つ。もう、逃げることはできない。ごまかすことも無理だ。貴樹は目の前の女性の正体を現実のものとして理解した。

彼があれだけ血相変えて退却してくるほどの脅威として、警戒していたはずなのに、何やら様子がおかしいことに気がつき始めた他の者達。彼らに向かつて完璧な笑顔を振りまき、女は胸を張った。

「どうもどうも。うちの貴くんがお世話になつてるようで。私は、彼の姉、戸水薫とみずかおるです。皆さんにお会いできて、嬉しく思ってますよ」

回想。

戸水家の両親は、近所では有名なおしどり夫婦だった。おまけに美男美女ときては、その華やかさで話題には事欠かない。それでもあまりやっかみを受けなかったのは、彼らが二人揃っていつもぼんやりとされていて、道端の石に躓いてもおかしくないような天然ぶりだったからだ。話題に上るのは、ほとんどが心配事だった。

彼らはやることをやり、合計三人の子供を得た。長男の貴樹、次女

の実織。そして、一番上の、薫である。この長女が、あの両親から生まれてきたとは思えないほど、しっかりした子だと、一週間ほど周りで盛り上がることになった。

「いい？ たかくん。よく聞いてね」

「なに、おねえちゃん」

「今の女の人はね、ビッチか、清楚ぶったビッチか、喪女ぶったビッチしかないんだよ」

「びっちって？」

「とつても悪い女の人を、そう言うの。いろんなことをして、男の人をだめにしようとしてくるから、絶対に近づいちゃいけないよ。たかくん、可愛いから。たくさん寄ってくるだろうけど」

「おねえちゃんも、そうなの？」

「ううん。おねえちゃんと、おかあさん、そしておかあさんのおなかの中にいる、たかくんの妹は、違う。みんなきみのことを大好きだから、たかくんも、だいすきって気持ちをとくさん返してあげないとね」

　　齡五歳の薫は、艶やかに微笑んだ。

「私達だけを、愛して」

　　回想おわり。

　　アンリが、手で、彼とフリーデを示す。

「では、タカキさんと貴方が、姉弟であるか？」
「うん」

　　ゲルトルードを、相手に気取られずに下ろした。整理するのに時間がかかりそうだが、今すべきことだけはわかる。フリーデは特大級の地雷だった。どうにかして彼女から離れ、さらにこの世界からおさげしなくてはならない。その後で、絵画世界ごと全てを封印するところが一番だと、彼の脳は結論付けた。

　　クリムエルヒルトが、信用していない様子で相手を見る。

「黒教会の長女が、くだらない戯言を言うような者だとは知らなかったわ。貴方と、旦那様には何の血のつながりも見受けられないようだけれど」

「旦那様？」

ぐるんつ、と首が貴樹の方へ回る。嬉しそうな表情は陰に潜み、目を細めて彼を見据えてきた。

「ねえ、貴くん。この雌豚は誰かな。また、言い寄られてずるずる流されちゃってるの？ 駄目だよ。こういう人ははつきり拒絶してあげないと」

「これは驚き」

怯むことなく、クリムエルヒルトは嘲笑いながら腕を組んだ。

「彼が魅力的なのはわかるけど、まさか嘘までついて、みつともなく距離を縮めようとするほど、貴方が女だとはね。亡者の長でも、そつちが飢えることはあるのかしら」

「んー、私はいいんだけど。フリーデを悪く言うのは、やめてほしいかなあ。この子の側について、舞い上がるのはわかるけど。彼と私は、家族だから。貴方の知らないことも、たくさんあるんだよ」

「正気は、亡者らしく失ってるみたいね」

「私の言ってること、理解してないな。どうせ貴くんと寝ることしか考えてない尻軽なのに、どうしてそんな彼の女みたいに振るまつてるの？ 本人は、凄く気持ち悪がってると思うよ」

（お前の方がきめーよ）

貴樹にとつて、少しの得にもならない争いが始まっていた。せめてゲルトロードでこの気持ち悪さを緩和したかったが、今思わせぶりな行動をするのは非常に危険だ。薫の矛先がクリムエルヒルトに向かっているのは、むしろ有難い状況だった。

『お前の姉ちゃん、なんかおかしくね。あそこまでひどかったか？』（平常運転だろ。あー不愉快だわ）

フリーデ姿の薫は、値踏みするように他の者も見始めた。アンリやミレーヌにも少しの間何かを観察する。辛うじて、貴樹の影に隠されているゲルトロードだけは逃れていた。

「この中で、貴くんを好きって人はどれくらいいるの？ 手を挙げてみて。ちゃんとそれぞれ何で彼と一緒にいるのか質問するから。正直に答えて。そもそも、貴くんこんな破廉恥な格好させて、何をさせたいの？ こんな…引き締まった体なんて、汚い欲望の的にされるに決まってるもん。ぜ、絶対、興奮している人いるでしょ。そこも細かく訊くからね。いい？ 貴くんの全身を眺めていいのは、この私だけ。…え、なに、ちよつと。限界ってどういうこと。私は大真面目に正しいことを言ってるだけなんだよ。わ、フリーデ、や、無理矢理はだめっ」

自らの体を押しえつけようとして、妙な動きでじたばたした後、彼女の表情は消えていた。いや、正確に言うと、多少の羞恥であり周りの者の目を見れないようで、不本意だと言いたげに視線を伏せている。

彼女自身の中で整理をする時間が空けられたあと、眉間を揉みながら言ってきた。今までよりも落ち着いた声で。

「カオルが、失礼をしました。彼女は、まだ混乱しているようです。それはきつと、貴方達も同じでしょう。どうしてこのようなことになっているのか、聖堂で詳しく説明します。聞きたい人は、ついてきてください」

服から小さな瓶を取り出す。中身の黄色い粉を、崩れた橋の欠片に振りかけた。直後、生き物のように欠片が動き出し、同時に他の部分のひとりでに修復されていく。一息の間で、吊り橋は元の姿に戻っていた。

フリーデが渡り始める。彼女は一度も振り返ろうとはしなかった。貴樹が歩き出したのをきっかけに、アンリ達も戸惑いながらついていく。

再び聖堂の中に入ると、フリーデは祭壇の横に腰かけた。

「どうぞ、好きな位置で聞いてください」

全員が落ち着くのを確認してから、話し始める。

「とはいえ、私は、あまり必要な情報を必要な分だけまとめ、伝えることに長けているとは言えません。貴方達から、訊きたいことを伺い

ましよう。それに応える形で、理解をしてもらうのが一番早い」

「じゃあ、まずはなぜ、姉が貴方の中にいるんですか。他の者達とは明らかに違います。姉の体は、どうなってしまったんですか？」

できればミンチにでもなっただごその醜い獣にでも食られていれば良いと思っていたが、一応家族を心配する体をとる。

「そうですね。最初にそのことから、話しておくべきでしょう。私は、長い間、この世界で過ごしていました。何でもないある日、急に自らの体に違和感を感じました。何か異物が、混ざり込んでいるような。そして、ほどなくカオルの声が聞こえたのです。彼女もまた、酷く混乱していて、まるで己の状況を飲み込めていなかった」

「つまり、姉だけが、肉体を伴わずにこの世界へ飛ばされたと？」

「そのことで色々と質問を試みましたが、どうやら前後の記憶はほとんどないらしく、目が覚めたら私の中にいたと。結局、彼女の肉体の居場所も、どうすれば私から離れてくれるのかもわからないまま、時が過ぎていきました」

「どれくらい？」

「三十年程です。貴方もわかっていると思いますが、それだけあれば、カオルの、おかしな所にも慣れるのに十分でした」

貴樹は苦笑する裏で、ジアンナの発言と矛盾してはいないことを確認した。薫もウイン達と同じアメリカに住んでいるという点で、共通はしている。それだけで疑問が尽きるわけでもない。

精神だけがここに連れて来られ、しかもフリーデと融合している。薫だけがそんな特殊な境遇に陥っているのは、偶然なのだろうか。

今は別の問題から片付けることにした。

「他にも、不思議に思った事があります。フリーデさん自身に訊きたいんですが、教父アリアンデルは一体どうしたんですか？ 一緒にいるものだと、思い込んでいたもので」

その名を知っていることに、彼女はあまり驚いていないようだった。何かを確認が取れたように、納得した表情を見せる。

「カオルの言っていた通りですね。貴方は、それなりの事情が、理解できている。確かに、教父様はかつて私と共にいました。ですが、それ

は昔のことです。今はいません。死んでいますから」

貴樹はここで大きな違和感を感じた。フリーデはこの絵画世界の存続を望んでいた。それはアリアンデルのためだ。彼がいないのならば、なぜ、彼女はここで過ごしているのだろうか。使命はないはずなのに。

「わかりました。では、最後に。僕達は、この世界からの脱出が目的です。何か、役立つようなことを知っていますか」

フリーデは貴樹を見てから、他の者達一人一人と顔を合わせた。

「自分から望んで、この世界に入ってきたわけではないのですね。誰が、貴方達を導いたのですか」

「おそらく、ゲールだと思います」

今度も、予想通りと言った感じだ。

「そうですか。考えられるのは、彼しかいませんね」

ちらりと、二階部分へ続く階段を見やった。

「行き来ができるのは、この絵画世界の欠片を持っていた彼だけでした。しかし、貴方達と一緒に来なかったことを考えると、もうここへは戻るつもりがないかもしれません。私にはこの世界から出る方法など何も思いつきませんが、ゲールに頼んで貴方達を呼び寄せた者なら、心当たりがあります」

(ああ、そういうことか)

アリアンデル絵画世界で、やりたいことは二つあった。まずは感情的に一番会いたい、フリーデを探すこと。そして、貴樹の最終目標に対して大きな役割を果たす可能性のある、少女と話すことだ。

「会うことは、できますか」

「二階の個室にいます。私に許可を求める必要はありません。ですが、その前に」

動きかけていた足が、止まった。見れば、フリーデはこの時初めて、感情らしきものを顔で表していた。それが何なのかは細かくわからなかったものの、誰かを慮っているような必死さが視線に出ている。

「カオルと、話をしてくれませんか。彼女は……、貴方の事をいつも楽しみに話していました。同じくらい、心配もしました。もう落ち

着いているようですから、どうか、お願いします」

(んー、俺はフリーデの方が心配だけだな)

彼女は、貴樹の背後を見る。それだけで察した彼は、アンリ達に拠点へ戻るよう促した。家族の会話をしたいのだと言えば、従ってはくれる。貴樹もそれなりの話をするつもりなので、彼女らに聞かれることは避けたかった。

全員が出て行ったのを確認すると、フリーデはこちらに近づいてきた。

「肩に、触れてください。私達二人と同時に、話ができます」

貴樹は頷いて、腕を彼女の肩に置いた。それだけでは特段、何かが変わったという実感もない。だが、すぐに聞こえてきた声で、触れていることが重要な条件だということは理解した。

『お、聞こえてるみたいだね。貴くん、会いたかったよお』

「口を挟むのはこれっきりですが、慎みも持ってください」

『わかったから。フリーデって、いつもこうなの。細かいったら』

腕の切り口を、彼女の頬に触れさせる。突然の行動に目を瞬かせているフリーデを労わるように眺めた。

「何か、体に異常は？ ヴィルヘルムさんの言っていた通りでした。貴方には、汚らわしい悪魔が混ざってしまったている。さぞ、苦しいことでしょう。その苦痛は、僕にもわかります。取り除くために、できることなら何でもします」

『それって、私のこと？ お姉ちゃんをぞんざいにしてはいけません。うちの弟くんは、思い込みの激しいところあるからなあ』

「黙れ」

フリーデが目を見開く。もう、取り繕うことはしないつもりだった。フリーデにあまり見られたくはなかったが、余裕がないというのが現状だ。それくらい、貴樹は怒っていた。

彼女から顔をそらし、低い声で言う。

「おい、ババア…。よくもフリーデさんを汚してくれたな。肉体がないなら、精神の方もちゃんと消えとけよ。他人の体に入り込むなんて、とんだアバズレだな。いいですか、フリーデさん。この女は、か

ならず俺が処理しますから。安心してください。心に巣食うゴミを排除し、元の正常な状態を取り戻すんです。不安に思うことはない』『あ、また暴言吐いてる。もお、そういうのは家族の前だけにしなさいっ。お姉ちゃん恥ずかしいでしょ。ほんとシスコンなんだから』
(……)

彼は盛大な徒労を感じた。まるで手応えがない。

「あ？ 殺すぞクソアマ。誇大妄想しやがって。自分がどれだけ罪深いことをしたか、わかってんのか？ ただでは死なせねえぞ。最大限の苦しみを味わせながら、ゆつくりと消滅させてやる」

『はあ、はあ、やめてよう……。そんなに私の性癖を射抜くのは反則だよ。焦らすのが好きって、やっぱりばれてたんだ。恥ずかしいなあ。でも、私も貴くんのオナニー見たことあるし、これでおあいこだね』
(うあああああああああああああつ！ やめろおおおおおおお)
おおおおおおおおおおおおおおお

中学二年の夏、貴樹は実の姉に自慰行為を目撃された。普通なら、多少の気まずさと共に、なかったことにされる展開だろう。だが、薫は違った。彼女は居合わせた直後、すぐさま携帯で彼のあられもない姿を撮影したのだ。

その後、その写真をネタに脅される、ということとはなかった。だが、巧妙にちらつかせてはきた。やや疎遠よりになっていた姉弟仲が、無理やり修正されることになる。数々の要求を、貴樹は呑みこまざる負えなかったのだ。そして高校を卒業するまで、彼は姉とお風呂を共にするという義務によって、精神が摩耗した。

妹の実織のように、わかりやすく挑発に乗ってくることもない。さらには、全ての奇行を、彼のためになると本気で思い込んでいるのが、始末におえない。貴樹は学生の身分から既に、周りの人間を見限っていたが、彼女だけは違った。そもそも人間とは別の何かだと思っている。

なんやかんやで薫が仕事の関係でアメリカに移住することになり、それからの二年間は貴樹にとってましな方になったのだが。今こころで、仮にも彼の大好きな世界で、最悪な再会をすることになった。フ

リーデが立ち合うという、何とも言えない虚しさで。

「調子に、乗ってんのも今のうちだからな。既に三つほど、お前を排除する方法を考えてる。物事には必ず原理があるからな。それを逆にたどってやればいい。震えやがれ」

『あはは』

ぶち、と貴樹は脳の血管が切れたのを感じた。

「大丈夫か？ お？ そんな余裕ぶっこいて、後で命乞いしても聞いてやらねえぞ」

『だつてえ。本気なら、なんで、顔を見て話さないの？ 変な所見えてさ、それじゃあ、全然本気に見えないよ。それで照れ隠しのつもりなの？ かーわいっ』

「ぶつ殺」

しかしフリーデと目を合わせた瞬間、敵意は萎えていく。思いつきり、歯がみをした。薫は、強力な防護を得ているも同然なのだ。貴樹がいくら姉を殺したい衝動にかられても、まさかフリーデの体ごとやるわけにもいかない。それに、面と向かって罵倒すれば、その言葉はフリーデにも向けてしまったような罪悪感にかられるので、やりづらいことこの上なかった。

『ふふふ、耐えてる耐えてる。いいなあ、この感じ。久し振り。だいすき、愛してるよ』

(ぐうぐうぐうぐうぐう、おげえええええええええええ)

今まで少々圧倒されていた様子の、フリーデが、ここでようやく声を出した。

「想像と、違いました。こう、普通に仲の良い家族を思い描いていました」

『うん？ 仲良しじゃん』

「貴方の主観による部分が大きかったということですね。まあいいでしょう。ところで、カオルの弟様のことは、名前で呼んでもよろしいですか」

貴樹は一転してにっこり頷いた。

「ええ、もちろん。僕もフリーデと呼ぶのを許していただけたら」

その笑顔を、呆れたように見つめてくる。もしや惚れられたのかと思っただが、どうやら変わり身の早さに驚いているようだった。

『ほら、言った通りでしょ。私よりも演技の才能あるって』

『黙れって、さっきも言ったよな売女』

フリーデが、溜息をつく。

「二人共、落ち着いてください。話が進みません。それと、タカキ。貴方の提案は、必要のないことです。カオルは確かに、鬱陶しい時もあります。消えてほしくありません。いいですか、仮にも家族ならば、そんなことを言うてはいけないと思います」

「でも、フリーデさんの方が圧倒的に大事ですよ！」

「…ならば、私からもお願いです。これはあくまで、彼女と私の問題です。どうか、どうするのは、私たちで決めます」

『ひゅーっ、さすがフリーデ。わかってくれてるね』

「おい、なんだその感謝の仕方は。馴れ馴れしいぞ。五体投地でもして、泣き叫べよ」

『へへー、フリーデ様々』

「……貴方達を理解するのは、まだ少し時間がかかりそうですね」

話が一区切りついたようなので、貴樹は二階へ向かう気満々だった。あまり楽しい会話とは言えなかった。薫が、それなりにフリーデから認められているのが、不快で仕方がない。まさに、自分の好きな物が汚されている気分だった。

だが、薫はまだ話があるようだった。

『待って。貴くん。そういえば、みおちゃんはどうしたの？ 一緒にじゃないの？』

一瞬、本気で、誰のことかわからなかった。やがてぼんやりと、自分に妹がいたことを思い出し、面倒そうに答える。

「途中で別れた。あっちはあっちで安全だろ」

『どーいうこと？』

ウィン達に対してと同じように、多少ぼかして、これまでの経緯を説明した。貴樹の行動の根底にある、ゲルトルードの存在は特に言及を避ける。

『そうなんだ、でも、祭祀場って、ダークソウルの拠点でしょ。貴くんなら、絶対に離れたくないと思うはずだけど』

「考え方の違いってやつだよ。俺だって進んでこうなったわけじゃない」

『ふーん』

姉が、自分の頭の隅々まで見通しているような錯覚に陥る。その言葉の端々に、薄い笑いが張り付いているように思えた。

『それってさあ、あの盲目の子と関係あるんだね』

(落ち着け。冷静になれ。平常心だ。気取られるな)

しっかりと、薫はゲルトロードのことも認識していた。こと貴樹の女性関係に対して、勘が外れたことは全くない。

「どういうことだ。彼女は一緒についてきてくれた仲間の一人だ。お前が何を言いたいのか、さっぱりわからん」

『あは、当たり前なんだ。わっかりやすい。へえ、気になるなあ。あの女が、貴くんにとって、どういう存在なのか。じっくりと、話をしてみたい』

「好きにしるよ」

この女には、絶対に近づかせないと心に決めた。後で、アンリ達と上手く口裏を合わせる必要があるだろう。

脅威の再認識をして、彼は階段を上りはじめた。本来は、二階へ続く道は閉ざされているのだが、どうやらフリーデは、例の少女を監禁しているわけではないらしい。その見張りをしていたヴィルヘルムが比較的自由に動いていた理由も、これでわかった。フリーデの口ぶりからして、互いの行動を常に把握しているわけではないが、対立もしていない関係というわけだ。

二階には三つの部屋があった。目的の者がいる場所は、すぐにわかる。階段から一番遠い位置にある部屋の前に、絵画がたくさん積み重ねていた。その扉へ向かい、少しの間を置いてから、押し開く。

『もう、喋ってもいいのか』

(おう。ちゃんと黙ってたな)

『おれとしても、お前の姉ちゃんとはあんま関わりたくねえからな』

中もまた、作品の残骸がいたるところに置かれていた。その全てがはつきりとしたものを描いていない。黒い円が無数に並んでいたり、一面の黒の中に、小さな赤が紛れこんでいるといった、抽象的なものだ。

染料の鼻をつくような臭いが、必死に読んでいたダークソウルの資料集を思い出させる。火守女、もといゲルトロードのページは、何度利用したかわからない。ファンアートよりも耽美さにあふれ出ていて、妄想も捗ったものだ。

(二、三回買い換える羽目になったけどな)

『そりゃあお前、鼻を擦りつけてはあはあ言ってたら、よれよれにもなるだろ。おれの見た記憶の中で、一番しようもないやつだったわ…』
良い気分になっていると、部屋の奥、広いテーブルの上から、誰かが見てきていることに気がついた。

貴樹は何度目かになる、手の届かないと思っていた有名人に会えたような高揚感を覚えた。相手は、腰まで届く長い白髪が特徴的な、少女だ。イアンよりも年上だろうが、子供であることには変わらない。

「貴方は誰？」

見知らぬほぼ全裸の男が入ってきてても、あまり警戒している様子はない。ただ不思議そうに、少女は尋ねた。

「僕は貴樹。フリーデの話によると、君がゲールに頼んで、僕達をこの世界へ連れてこさせたらしいんだけど」

「そう」

肯定も否定もせず、絵画描きの少女は何も続けようとはしなかった。こちらを向いていても、手はキャンパスに向かって動いている。考えごとをしているような曖昧な視線が、貴樹の全身をなぞった。

「お爺ちゃんは、貴方の方を連れて来たんだ」

言い方に、引っかけりを感じる。どこか諦めるような調子が含まれていた。まるで失望されているようで、気分は良くない。

「あの人が通したってことは、わたしを殺しにきたの？」

淡々と、言ってくる。

(あ？ なんだこいつ)

「えつと、どうやら大きな誤解があるみたいだね。僕は、頼みがあつてここに来たんだ。君が、僕達をここへ呼び寄せたんだろ。なら、帰り方も教えてほしい。あつちで、まだまだやることがたくさんあるんだ」

絵描きは答えずに、じつと彼を観察していた。今度は真つすぐと自分に向けられていて、体の内部まで透かされている気がした。

「貴方の、名前を教えてください」

「貴樹だけど」

「本当に？」

「ああ」

はつきりとした疑いに向けられ、本来の絵描きの少女との差異を強く感じた。彼女は、誰かに負の方向の感情を向けるような者ではなかった。貴樹自身、なぜ警戒されているのかもわからない。

(もしかして、俺の上半身に興奮してるのか？ それで緊張してると。

乳首も規制なしだからなあ)

『何言ってるの』

絵描きはしばらく思考にふけていた。そして何かに気がついたのか、わずかに表情を動かした。それは驚愕といつてもいい顔だ。まさか、自分の乳首に黒子でも見つかったのかと首を曲げて確認した。いつも通りだったので、よくわからないまま顔を上げると、絵描きの少女は涙を流していた。

(ええ……、どういうこと?)

小さな手が初めて絵筆から離れ、自らの頬に触れる。自分でも意識していない内の涙だったらしい。拭いとった滴をまじまじと見てから、それをキャンパスに擦りつけた。塗られていた白い絵の具が、薄く滲んでいく。

「お母さんの言ってたこと、やつとわかったよ」

つぶやいてから、テーブルを下りる。貴樹の元まで歩いてくると、見上げてきた。何かのつつかえが取れたような、清々しい表情をしている。

「頼みというのは、この世界から出るということ、いいんだね？」

「そうだけど」

(なんなん。情緒不安定の子供とか、一番のお荷物なんだが。大丈夫か、この先)

絵描きは貴樹の腰に巻いてある布を一瞥する。

「お爺ちゃんから、何か預かってない?」

「いや。僕は、その時意識を失っていたから。他の、僕の仲間が、何かもっているかもしれない」

「仲間?」

どういうわけか、彼女はその言葉に強く反応を示した。

「貴方が一人で、来たわけではない?」

「まあ。僕合わせて七名だよ」

「多い…」

考えごとをしている時、彼女の手は空をかいていた。指の動きで、何となくわかる。筆を握っているのだ。何を描いているのかはわからない。動いている手が止まり、目を開けると、再び貴樹に訊いてきた。

「貴方達の中に、守護者はいる?」

訊きなれない言葉を耳にして、貴樹は答えに詰まった。ああ、とその雰囲気を感じたのか、絵描きは続ける。

「つまり、火守女のこと。その存在が、貴方の望みに大きく関わってくる」

肯定すると、続く話は全員にしたいと要求してきた。貴樹の仲間とやらに会ってみたいのだという。彼は承諾し、聖堂の外に舞っていたアンリ達を連れてきた。その際、フリーデの視線が、ゲルトロードに集中していた。

待っている間、絵描きはまた何かの絵を描いていたらしい。貴樹達が入ってくると、手を止め、テーブルから下りた。

「なぜ、こんな所に子供が」

アンリの疑問の声をよそに、少女は歩く。視線と足を進める方向は一点へ向けられている。そのままクリムエルヒルトの所に着くと、両

手を目一杯に広げた。そのよくわからない行動に、魔女は一步後ずさる。しかし、完全に離れる前に、絵描きは彼女に勢いよく抱きついた。「二人は、知り合いで？」

貴樹がそう尋ねると、クリムエルヒルトの耳に口を寄せていた少女は小さく首を振った。その直後にゆっくりと離れ、彼女の顔にじっと目を注ぐ。挙動がおかしいのは、クリムエルヒルトも同じだった。絵描きの視線から逃れるように、貴樹に顔を向けてくる。

「いいえ。私は知りません。何というか、変わった子ですね」

（はい嘘。触れてほしくはないんだな。今は放っておく）

絵描きは、クリムエルヒルトの胸を指さした。

「懐かしいにおいがする。何か持っているのなら、それを見せて」

「確かに、杖は持っているけど。貴方に見せてどうするの？」

「奪った物は、人目にさらしたくないのもわかるよ」

クリムエルヒルトは、少女を睨みつけようとした。しかし、途中で目は逸らされ、自身を注目している周りの者達をなぞる。促されているのだと、理解したようだ。大きく息を吐き出し、懐から何かを取り出した。

白い、鈴だ。上品な装飾が取り付けられている。取り出す時の揺れで、かすかに音が鳴った。その瞬間、白い光が舞ったような錯覚がした。

絵描きがそつと手を伸ばす、その鈴に触れようとした所で、クリムエルヒルトが弾けたように引っ込めた。鈴を胸に抱き。だれにも渡さないと言わんばかりに身を縮こまらせる。普段の彼女らしくない、子供のような仕草だった。

「ごめんね。多分、わたしよりも、貴方が持つべきだとは思う。でも、少しだけでもいいから。一度だけ、触らせてくれる？」

いくらか逡巡の時間を置いた後、鈴を少女に手渡した。彼女は指先で鈴をつつき、澄んだ音を、目をつぶりながら聞く。十秒も経たないうちに満足したようで、クリムエルヒルトに返した。

「前までなら、絵画世界を出る方法はあった。それを使って、お爺ちゃんや貴方達を迎えに行つたの。でも、最後の一つだった。それも、片

道分。今は新たな道を作らなければいけない」

つまり、作品を。

彼女はそう結んだ。ゲールがアリアンデル絵画世界を描いた紙片で、貴樹達を送り込んだように、今度はあつちの世界の情景を絵画として描くのだという。その完成のためには、膨大なソウルが必要だ。その収集を貴樹達に頼みたいらしい。

「もう一つ必要なのが、そのソウルの器を把握し、扱いに長けていて、わたしの作業に問題なくついていける補助的な存在。わたしにはない技能を持つている人。火守女と、そっちでは呼ばれているね」

「すみません、今は、私達の中にその役割を担える者はいません」

アンリが答える。ゲルトルードがかつてそうだったが、記憶の喪失のせいで全うできる状態ではないことを説明した。絵描きはたいして失望もしていない様子で頷く。

「じゃあ、その子の回復も優先だね。そんなに焦ることはないよ」

「ありがとうございます」

場がまとまりかけた所で、貴樹は皆が見過ごしていることを指摘しようとして、前に出た。もちろんゲルトルードのことは大事だが、もし記憶が戻ったとしても、火守女という枠には入れなくなかった。ただ一人の女性として、扱いたいのだ。

「待つ必要は、ないと思います」

はつきりと言ってから、腕で横のクリムエルヒルトを示す。

「火守女なら、もう一人いますから。彼女が、そうです」

一部の者達は驚いているようだった。ただ、絵描きや当の本人は、まるで貴樹がそう発言してくるのを予期していたかのように、落ち着いている。

「本当なのか？」

尋ねてくるホレイスにも、説明をする。

「クリムは、少なくともソウルの器を視認できます。火守女の灰の誓約下に入る時も、何か、特別な思いを抱いている様子でした」

クリムエルヒルトは、挑戦的に微笑んだ。

「否定は、できませんね。確かに、私はかつて、そういった責務を担っ

ていた時期があります。旦那様には早々に見抜かれていたようすが」

へえ、とホレイスは彼女を眺めた。

「何か、言いたいことでもあるの？」

「意外ですよ。だって今、お前は目が見えているんだろ。瞳の動きにおかしな所もない。一度潰した後、治したってことか？」

「そういうことになるわね」

「それが、おそらく問題になるだろうね」

絵描きの少女は言いきつて、再び、彼女と視線を合わせる。

「完全な火守女ではないってこと。タカキは代用できると考えたようだけど、彼女一人だけでは、不十分だと思うよ。結局、そっちの子の力も必要になる」

クリムエルヒルトがこめかみに指を当てる。

「私が今ここで、両目を潰せば解決するんじゃない？」

「そんな簡単なものではないって、貴方もよくわかっているはず。それに、失礼かもしれないけど、きつと、もう貴方は闇には勝てない」
彼女の笑みが消えた。その目が一瞬、遠くへと飛ぶ。その中には、確実に、恐れが含まれていた。

「火守女のことについては、努力することとして。もう一つの、膨大なソウルっていうのは、どれだけ必要になるのかな？」

貴樹は妥協した。記憶を戻すという名目で、ゲルトロードと一緒に過ごせるのを見越したからだ。

「それなりに大きなキャンパスを使うことになりそうだから、相当だね。今、この世界で動いている、ほとんどの生物から回収しないと間に合わないと思う」

えらく時間がかかることになりそうだった。

「僕達も、含まれると？」

「ううん、そこまで余裕がないわけじゃない。特にタカキのソウルは、作品と相性が悪い。主張は大事なんだけど、強すぎれば他の色を殺してしまう」

「回収の方は、僕がやっても？」

「それは問題ないよ」

絵画世界の生物というと、まず思いつくのが狼だ。群れで行動していることが多いし、統率しているリーダーなどは特に、旨みがあるだろう。数なら、鴉人もそれなりだ。鴉村に行けば、狩り放題。他にも、鹿の角を横した兜を被った騎士亡者や、木に擬態している化物もいる。それらが全て束になってかかって来ようとも、対応するのは簡単だ。そして、残った絞るかすのようなものだが、八匹の地球人もいる。(う〜ん)

未だに邪魔だとは感じていた。だが、仲間達に不審に思われないうな消し方が思い浮かばない。何か一つ、きっかけが足りない気がしていた。

ともあれ、当面はソウル集めと、ゲルトルードの記憶を取り戻すことを目的に行動すべきだろう。その二つを同時に達成できる案を、貴樹は思いついていた。元より、ずっと、彼女としてみたいことだったのだ。

絵描きの部屋から出た後、アンリと手をつないでいるゲルトルードの横に並んだ。

「訊いても良いかい?」

肩に触れる。それだけで、実の姉と再会したという事実を遠くに追いやることができた。彼女の耳に近づき、はつきりと声に出す。

「旅を、したことはある?」

「たび、つて?」

「自分の知らない国、知らない場所に行つて、知らないことを体験する。僕と君は、二人でそれをたくさんしようつて、約束していたんだ。今がいい機会だと思う。この世界を見て回るんだ」

彼女はその言葉を呑みこむように間を置いてから、火守女の頭冠に触った。最近の、彼女の癖だ。視界が暗く塗りつぶされているということに、慣れていないのだろう。紛らわすために、あるいは感覚の有無を確かめるために、一見意味のないことをしている。

階段を降り切った所で、ゲルトルードは口を開こうとした。その返答をわくわくして待っていた貴樹の気持ちは、邪魔をされることにな

る。

「駄目だよ。貴くんは、ここで過ぐすんだから」

フリーデが腰に手を当てて、こちらの進路を遮るように立っている。その表情の緩み方で、今は薫の方が主導権を握っているのだと確定できる。

「まず、今日はずっと一緒に寝てもらおうからね。話したいことたくさんあるし。それと、三十二年間のブランクが空いちちゃったけど、日課もちやんとするよ。髪とか、髭は伸びてないようだけど、陰」

「姉さん。僕だつて積もる話はあるよ。でも、それは後だ。今はやることがある。終わってからなら、いくらでも付き合うよ」

(こいつほんま…)

踵で顔面をぐしゃぐしゃにしたかったが、相手はフリーデの姿なのでやめる。ゲルトルードの前で中高の地雷エピソードをつまびらかにしたくない。

えー、と薫は頬を膨らませた。静粛な修道女と子供のような振る舞いの組み合わせはなかなか新鮮で、フリーデの新たな可能性を予感させる。だが中身があれなので何もかもが台無しだった。

「じゃあ、お友達も一緒にここを使ってくれないよ。フリーデの許可も取ってるし。……うん、今取った。ね？」

ほら、とばかりに両手を広げる。貴樹にはわかっていた。相手の関心はほぼ、ゲルトルードに注がれている。時折その目がぬちゃりと、彼女へまとわりつくのがわかった。姉がこういう粘着質な視線を向ける時は、ろくなことがない。

「遠慮しとく。本当にフリーデさんが歓迎してるのか、わからないからね。じゃ、そういうことで」

大事な人と、この薄気味の悪い女を同じ空間に居させるわけにはいかない。話をさっさと切り上げて、もつと話した方がいいのではないかと聞いたげな他の者の先導をする。

「何かしたいことがあるなら、お姉ちゃんも手伝うよ」

「いいや。必要ないけど」

「…その人と、関係あるんでしょ」

薫はゲルトルードを指さした。

(うぜえ)

貴樹は振り返り。堂々と、ゲルトルードに寄り添った。

「あるね。これは、二人でやりたい事だから、大丈夫」

「はあ、ねえ貴くん」

聞き分けのない子供を相手にするような態度で、溜息をつく。フリーデの顔ではあるものの。眉のひそめ方、口の動きが記憶の姉と酷似している。非常に悪感情を煽りたててくるものだった。

「皆の前だと、優しくなりたいたいのもわかるよ。でもさ、同情はあまりしない方がいい。どっちのためにも、ならないから」

冷たく言い切った。妙に実感のこもった調子だ。

「同情」

貴樹も同じように、無機質に繰り返す。その言葉も、何度か聞いた。なぜ、誰も一目見ただけでは、彼自身の本当の感情を理解しないのだろう。視力のない彼女と、五体満足ではないものの俊敏に動いている彼を見て、外面だけで、関係の性質を断定するのだ。

しかもそれを、自分を理解していると思いついてる女に言われるのは、尚更不愉快だった。

「何人かいたよ。そうやって、余計な勘違いをしてきたのが。姉さん、納得がいかないのなら、これから理解すればいい。いいか、俺は」

腰を曲げ、ゲルトルードに顔を近づける。勢いのままに、彼女の頬に唇を押し当てた。

「この人を愛しているんだ」

相手の反応を確かめはしなかった。ふわふわしている体を持って余しながら、踵を返す。足運びがやや慌ただしくなりかけたが、アンリ達もついてきているのはわかった。一度も振り返ることはなく、聖堂から出た。



「許せない…」

『カオル』

「あいつ、よくも、よくも……」

姉は指を噛む。どろどろとした目をして。

「あつ、逃げたわよ！」

「おい、なんでそうなるんだ」

「はぐれるのは駄目です。タカキさん！」

「……」

「恥ずかしがるのも、限度があるでしょう」

しばらくして、貴樹は多少整理をつけ、ウイン達の新拠点に戻った。なかなかゲルトロードの顔をまともに見ることができない。そのくせ、彼女の側からは離れたがらなかった。自分のした行動についての感想を是非とも訊きたかったが、度胸が追いつかない。

報告は、簡潔に終わった。何かがこじれたわけでもなく、さらには貴樹の姉がフリーデに寄生しているというややこしい事情も、ウイン達には話す必要がない。彼らは、この世界から出られるという可能性を示してあげるだけで、他のことは何一つ気にならなくなったようだ。

「ソウルを集めるというのは、つまりどういうこと？」

普段インベントリを扱っているのにもかかわらず、ウインはその基が何なのかをよく理解していないらしい。

「生物を殺すと、こう、白い靄のようなものが出るじゃないですか。それのことですよ」

「んん？ 見たことないぞそんなもの」

他の者達も同じようだった。嘘をついている様子はない。有り得ないはずだった。彼らだって、狼を殺している。そのソウルを吸収してないのだろうか。

「とにかく、ほとんどの生物を処理しないと、脱出の道は作れないようです。僕が中心に行っていきたいと思いますが、協力をしてくれるなら、ありがたいです」

どちらにせよ全員に関係があることなのだから、当然、彼らも乗り気だろうと思っていた。しかし、予想に反して、その反応は鈍い。

「ランドンが難しい顔で、言ってくる。」

「つまり、殺すということか？」

「そうなります」

「狼も、鳥頭の人型も？」

「鴉人の拠点があるのは、知ってますよね。そこを最初に潰したいと考えてます」

貴樹は敏感に空気を察知する。意外なことに、それに好意的な反応を返すのは、一人もいなかった。ウイン達は互いに目配せをして、何かを共有した。ランドンが重い口調で、反対の意を述べてくる。

「悪いが、協力はできない」

「大丈夫です。危険ではありませんからね。僕達だけでも、大丈夫ですよ」

「お前達が、その行動をするのも、容認できない」

腕を回して、骨を鳴らす。貴樹は口を開け閉めしてから、椅子に腰かけた。

（この木偶は、何様のつもりだ？）

「それだと、えっと、困りましたね。どうしてです？」

「まず、その画家というのが、本当に信用に足るか、怪しい。具体的な方法とやらも、聞くだけでは荒唐無稽と言わざるおえん。絵に入ればいいというのは、あまりに空想的だ」

「でも、貴方達も今までたくさん、そういった物を見てきたはずですよ。地球とはまるで違うということも当然わかっているはず」

「もう一つは、獣や化物は我々にとつて脅威であるとともに、欠かせない存在でもあるんだ。今まで、それらの数が極端に減りすぎないように、調整をしてきた。成功するかどうかもわからない、あやふやな方法に、全てを賭けることはできない」

「欠かせない存在？」

貴樹は、違和感のある言葉を繰り返した。同時に、彼らの狩りの光景を思い浮かべる。

「必要だということとは、今までの行動でわかっています。だからこそ、今が、天秤にかける時です。あつちの世界も、楽園というわけじゃない。それでも、ここよりはずっとましなんです。留まる選択肢は一番、貴方達のためにならない。」

ランドンはなおも首を振った。

「俺達だつてそうしたいんだ。ただ、交渉をしてもらつた身で申し訳ないが、他の方法を考えてもらいたい」

今までの貴樹だったならば、ランドン達をいよいよ邪魔な存在だと断定し、多少強引な方法であっても排除しようとしただろう。それくらい、納得のできない言い分だった。しかし、怒りの前に、疑念が先に来た。

この世界から脱出する方法があるのなら、たとえ不確定であつても、飛びつくだらうと思つていた。それくらい、彼らは苦難を味わつてきたのだと察することはできる。だが、脅威であるはずの存在を根絶やしにするのに、納得していないのはなぜか。

己の勘が、その答えこそ、彼らのどこか暗い雰囲気を作り上げている要因だと言っている。

しばらく考える間を作り、相手の不安を煽る。行動の指針を決めると、貴樹は柔らかに微笑んだ。

「そうですね。僕も気が急いでいたところがありました。より良い方法を、こつちでも模索してみます」

ランドンは組んでいた腕をほどいた。

「…何も訊かないのか？」

「貴方達全員の意思なら、もちろん尊重します。まあ気長にやりまですよ。それよりも、実は、僕にとつての本題はまだこれからなんです」
わずかに警戒を強めた彼らに向かって、頭を下げた。

「なるべく働くんて、女性用の手袋と、カメラをインベントリから出してくれませんか。カメラのほうは、すぐ現像できるやつでお願いします」

雪が冷たいことには変わりない。洞窟内でも、外に出ても、ゲルトロードが寒そうに手をこすり合わせていたのがずっと気になっていた。

「大丈夫、気にしないでいいよ。自然体が一番だからね。あ、その角度いいね。できれば、手をもうちよつと、顔から離してくれない？」

ああ、うんうん。可愛いよ」

股間に押し付けたい衝動が止まらない。銀髪に鼻をうずめることで、何とかこらえた。

しばらく考えて、何か分かったらしい。顔を上げて、彼のほうに向き直ってきた。

「寒いせい?」

「せいなあああああい!　すごいねっ、君は天才だよ。ご褒美にチュウしてあげる」

「ちゅうって?」

「さつき、ほっぺたに僕がしたこと。い、嫌だった?」

彼女は自らの頬に手を当てる。その麗しい御手と間接接吻をしているようで、段々と高揚感で訳が分からなくなってきた。

「わかんない。ちよつとくすぐったかった」

「何回もすれば慣れるよ。ね、いいよね。大丈夫、さきつちよだけだからっ」

「うん」

最初は、鼻の先を頬に擦り付けてみた。柔らかく返してくる肌の感触で、彼のタガが外れる。右頬、左頬と一回ずつ口をつけた後は、もつと大胆になった。大胆になろうとして、顔がそつと誰かの手によって抑えられる。

「これからどうすべきか、話し合う必要がありませんか?」

風呂の一件から、たまに淡々とした態度をとるようになったアンリが、見下ろしてくる。

「もう少しだけお願いできます?」

「貴方は、合意の上だと思っっているかもしれませんが、間違っています。その行為の意味をきちんとこの子が理解して、その上で彼女が望むのなら、止めません。いいですか?」

「はい…」

このまま順当にいけば、ある程度の人目があるこの場でも、良俗に反する行為へと発展していただろう。貴樹としても、ただ彼に従うというよりは、やはり自らの意思で、喜びを持って、彼女が甘えてくるのが一番だった。

会議の内容は、すでにあらかた伝え終えている。皆、彼があっさり
と引き下がったことに疑問を感じているようだった。他に脱出する
方法があるのかと訊いてきたが、もちろん貴樹も思いついてはいな
い。

それでも自分に任せるよう、彼は自信たっぷりと言った。たった一
度の話し合いで諦める意味はない。次からは、もっと相手が話を飲み
込みやすくなるような工夫を凝らせばいい。

なので、弱みを握ることにした。

ある程度良好な関係をウイン達と築けてはいるが、彼らの居住区に
長時間居ることを許されている感じはしない。直接言葉に出しては
こないものの、その点だけは確固たる壁がある。

そして、もろもろの怪しい点を鑑みて、彼らが寝静まると予想される
時間帯に、居住区へ忍び込むことにした。侵入を正直にアンリ達に
断ってから、行動を開始した。

この世界でも、昼夜の概念はある。実際に時計などで計ったことは
ないが、その間隔は地球とそれほど変わらないように思える。太陽ら
しきものの外見はかなり差異があるとはいえ、沈めばあたりは暗くな
る。

会議室の前を抜け、腰を落としながら、自分達の寢床とは反対側の
区域へ侵入する。一つ一つの部屋を見て回ったが、彼らが眠っている
姿は見当たらなかった。さらに進むと、一番奥の部屋の明かりが灯さ
れているのが見えた。小さな話し声も聞こえる。

その部屋の前まで近寄ると、耳をそばだてた。何かを咀嚼する音、
ぼそぼそとした喋り声、そして、濃い血の臭い。

「やっぱ、死んでから時間がたつと駄目だね。もう残ってない」

と、ジアンナの声。

「ママ、気持ち悪い……」

「我慢するの。主よ、恵みに感謝を。我等をお許してください……」

「ここはもう違う世界だ。神なんてものは存在しない。いても、別の
何かだろう」

ランドンはそう吐き捨てて、何かに食らいつく。

「で、どうするんだ。ウイン、あいつらに事情を話すか？」

「慎重になった方がいいね。彼らは、俺達とは違う。もう確定だ」

「特にタカキだ。あいつのバイタリティは無尽蔵に思える。我々とは違った方向で、人間を逸脱しているんだろう」

獣の唸り声が混ざった。非常に敵意がこもっていて、不安定にか細くなっていた。金属音とともに、息の詰まるような断末魔を発して、静かになる。同時に、ランドン達の間で重い沈黙が漂う。

聴覚だけでは状況を完璧に判断できないので、貴樹は岩肌に頬をつけながら、中を盗み見た。

(これはこれは…)

彼らは、狼を食べていた。首を切り、皮を剥ぎ、腹を裂いて内臓を取り出してから、胴や足部分の肉を中心に生のまま口に入れて、ろくに血抜きもしていないようで、口の周りや歯を真っ赤に染めて食事している様は、原始にたち還ったも同然だ。

さらに異様なのは、その行程が非常に素早くなぞられていることだった。まだ狼の痙攣や硬直が続いている間に、貪っている。まるで鮮度が大事だと言わんばかりに。

普通に考えて、彼らが狼を食べることも、ましてや狩りをする事自体、必要がないのに、わざわざそうすることを選んでるのは、奇妙だった。

彼らが、貴樹達に風呂を勧めた一方で、食事の方に關して何も言っていないのは、これを隠すためだったのだろうか。確かに動物染みたその光景は面白い見世物だが、これだけでは今一つ足りない気がする。

観察していてもそれ以上何も出てくることはなく、彼らの食事は終わろうとしていた。こそこそする意味も見出せなくなった貴樹は、洞窟の壁に掛けられているランプを見た。偶然を装い、ランプに肩を当てて落とす。地面に衝突し、ガラスの割れる音が十分に響きわたった。

「誰だ！」

ランドンが鋭く叫ぶ。全員の立ち上がる物音が聞こえてきた。

貴樹はゆつくりと、両腕を上げ、戸口から姿を見せた。銃を構えていたランドンが、微妙な表情になって、銃口を下げる。

「こんな時間に、何の用だ」

「もう一度、話し合いたいことがあったので。でも、今は邪魔だったみたいですね。失礼しました」

曖昧な笑みを浮かべつつ、彼は空いている丸椅子に座った。他の者達は動かないままだ。

「別にどうとも思ってませんよ」

全員の顔と、一つ一つ目を合わせる。そらさなかったのはウインだけだった。

「もつと異様な光景を見たこともありますから。ただ、不思議ではありません。貴方達のインベントリというのは、食べ物も出せるんじゃないんですか？ どうして、わざわざそんなものを」

「逆に訊きたい」

ウインが狼の遺骸を撫でる。

「タカキは、食べないで生きていられるのか？ 俺達からすれば、君の方が異常なんだ。インベントリかい？ もちろん試したさ。でも、いくら取り出して、食べてみても俺達の空腹は収まらなかった。味は感じるのに、満たされない」

水の入ったコップを出現させ、口をゆすいだ。遺骸も消失する。それでも、血の臭いは残っていた。

「最初五十人を超えていた仲間達が、ここまで減った一番大きな要因は、栄養失調と低体温症だ。食べ物が目の前にあって、口に入れることもできるのに、俺達は飢えていった。どんなものにもすがりたかったんだ。それである時、襲われたばかりの狼の死体を食べた。血と臓物の最低な味しかなかったけど、体中に力が戻っていくのがわかった」

思い出したくない記憶から逃げるように、全員が俯いていた。それとも、それぞれの反応を貴樹に気取られないようにするカモフラージュだろうか。

彼は笑みをこらえた。非常に出来の悪いフィクションを無理やり聞かされたせいで、一周回って目の前の者達が滑稽に思えてきた。

「つまり、インベントリ以外のものを直接摂取すると、飢えは収まるんですね。一日にどれくらい食べなければいけないんですか」

ランドンが答える。

「個人差があるが、狼なら二匹の成体があれば、我々全員を一日分は賄える」

貴樹は、ウインの発言の矛盾点と照らし合わせ、彼らの後ろめたい空気の原因を確定することができた。実に、お似合いだ。

確証を得るために、ずっと後ろをついてきていた人物に声をかける。

「クリム、入ってきてくれ」

赤毛の魔女が出現した。貴樹が入ってきた時ほど、ウイン達は驚かない。それだけ、彼は信頼されていたのだろう。決してこそこそと、自分たちの秘密を覗きに来ようとはしないと。

「誰でもいいから器を見てくれ」

彼女はウインに目を止めた後、その隣にいた由海を指差した。貴樹とクリムエルヒルトの二人で、相手へと近づく。何をされるのか多少不安がっていたようだが、ただ手を出すように貴樹が優しく言うのと、訳が分からないなりにおずおずと従った。

クリムエルヒルトが、彼女の手を包み込む。目をつぶり、何かに集中した。傍目からは、何の変化も見られない。

やがて、彼女の眉間に皺が寄った。目を開け、由海を含むような視線でなぞる。手をゆっくりさすった後、放した。

「どうだった？」

彼女の反応で、あまり結果が良くない方へと転がったのはわかった。

「こうして、形を保って正常に会話できているのが、不思議なほどです。器を見ましたが、ほとんど機能していません。壊れていると表現してもいい。あの有様では、ソウルをごく少量しか貯めておけませんし、取得にも、工夫が必要になります」

つまり、対象を殺すだけでは駄目で、直接体内に取り込まなければならぬということだ。

「まるで…」

クリムエルヒルトは、躊躇ったのち、言い切る。

「まるで、亡者です。ソウルを求め、貪る者」

何を言っているのか理解できなかったにしろ、自らの体内の異常を悟ったのだろう。由海は口を押えた。

「何が、わかったんだ」

ランドンが訊いてくる。それにも答えず、貴樹はこみ上げそうになる嘲笑を押さえていた。

(くくく、こいつら…)

クリムヒルトの例えは少しずれている。亡者でさえ、相手を殺せばそれで満足する。ソウルを得られるからだ。何も残っていない遺骸を貪ることまではしない。ましてや生きたまま食らおうとする意志も、もちろん持っていない。

彼らは、亡者以下の畜生だった。その嘘の裏にある事実を考えれば。

「答えろ」

剣呑の雰囲気の中、動こうとするクリムエルヒルトを制する。

「貴方達の身に起きたことが、わかりました。その上で、もう一つだけ訊きたいことがあります」

貴樹はテーブルに肘をつき、腕の切り口に頬を寄せた。

「今まで、人間はどれくらい食べてきたんですか？」

テーブルに乗っていた皿が落ちて割れた。アリーが悲鳴を上げる。他の者達は突然の事にまともな反応を返せていなかった。だが十分だ。事実かどうかは、勝手に彼らが示してくれた。

ランドンが、激しい怒りの表情で詰め寄ってきた。

「それは、たちの悪い冗談か？ 我々を侮辱しているぞ。根拠もない憶測を話して、一体何がしたいんだ」

「根拠がない、ですか」

(いちいち説明してやらないといけねえのか)

「最初におかしいと思ったのは、初めて貴方達と遭遇した時です。フェアラが撃ってきた弾丸に食らいついた時、妙な味がしました。記憶に間違いがなければ、医療行為に使われる麻酔薬と酷似していた」
彼女は、ゲルトロードを殺すために撃つたと嘘をついていたが、実際は麻酔弾を撃ち込んでいた。

「僕達を殺すつもりはなかったんだ。そうですね？ 貴方達にとっては、あの時、追っている獣と僕達が同じに見えていた。両方共生け捕るつもりだった」

由海が何かを言いたげに前に出てきたが、かまわず続ける。

「ウインさんがさっき言っていたこともおかしいんです。インベントリから食べ物を取り出すのにも、ソウルが必要になる。ソウルです。貴方達は先ほど、まるでそれを知らないかのように振舞っていた。でもありえないはずなんです。インベントリを利用したなら、絶対に、その言葉は目に入る」

念のために、生徒達から詳しく聞いておいてよかったと思った。

「初めはインベントリの食べ物で紛らわそうとし、そしてこの世界の生物を食べれば満たされることに気がついた。でも、それはおかしいんですよ。貴方達の器は壊れている。初め、ほとんどソウルを持っていなかったはずだ。ちよつとした食べ物さえ、出せなかった。そして外敵を狩り、食べるための道具も用意できなかった」

ウインが、首を振る。

「言っただろ。狼の死体を偶然見つけたんだ」

「ですから、それも変なんですよ。時間の経過に関係なく、死体にはソウルは全く残らない。先ほどジアンナさんも言ってたじゃないですか。ソウルを補給できる機会はなく、仲間たちはどんどん死んでいく。なのに、貴方達は今こうしてそれなりの数の武器を得て、ルーチンをこなし、生きています。なぜか。理由は簡単です」

亡者の貪欲さを思い浮かべる。奴らは飢えている。そしてみさか
いがない。

「五十人以上いた者達が数を減らしたのは飢えのせいでも、寒さのせいでも、外敵のせいでもなく、飢餓感に耐えられなくなった者同士が

「命を永らえるのに、何のタブーがあるんですか？ 僕も一緒に連れてこられた生徒達を、自らの願いのために裏切りました。軽蔑も同情もしません。ただ信じます」

ここで、彼も自分の嘘を一つ明かした。誰も彼もが皆同じだと、印象付けるために。その効果は上々だった。一人で来たのではないと知った彼らは、貴樹への見方を少し変えただろう。同郷の客人から、同じ後ろめたさを抱える対等な人間へと。

彼は堂々とした態度を止め、深々と頭を下げる。

「ですが、言い方を僕も考えるべきでした。冷静になっていなかった。貴方達を過剰に混乱させてしまった。申し訳ありません」

ファエラとランドンが、銃を懐にしまった。

「一つ訊きたい」

「どうぞ」

「その生徒というのは、お前のクラスか？」

「そうです」

「後悔をしているか？」

ランドンの問いに、貴樹は考えるふりをした。さもまだ多少の迷いがあるかのように見せる。

「していません。譲れないものがあつたから」

答えはどうやら正解のようだった。ランドン達の雰囲気は多少落ち着く。彼らは互いに、目の前の男に対する印象を、無言で交換し合った。

ウインが一步前に出て、言ってくる。

「こちらこそ、君達に武器を向けるような真似をしてすまなかつた。最初にしようとしたことも、信用を失うのに十分だっただろう。君は、強い。俺達のことなんて、無理やり排除する選択肢もあつたはずだ。こうして対話してくれる道を選んでもくれたのは、とても感謝しているよ」

手を差し出して来る。握手をしたいのだと察して、嫌な気分になつた。表面上はにっこりと笑い、それに応える。他の者達はまだ、何か思うところがあるようだった。ありがたいことだ。うつとうしかつ

た距離感を、上手い具合に調節することができた。

帰り際、クリムエルヒルトに話の着地点を報告する。彼女は難しい顔になった。

「器を、治す…」

「それが可能なら、一番手っ取り早いんだ。何か、心当たりはあるか？」

「聞いたことはありません。できるとも思えません。旦那様、私は他にも方法があると思います。彼らの事情はわかりましたが、正直、どうでもいい。私たちには、優先すべき使命があります」

「言いたいことはわかる」

彼女の前を歩きながら、声を潜めた。

「でもそれはあくまでクリムの視点でしかない。あの人達を、放つてはおけない。助けたいんだ」

「ですが…」

「もう少し、考えてみてくれ。彼らは、つまり器の状態だけを見れば、亡者と大差ないんだろ。亡者を、生者に戻す方法を探せばいい」

「ですがそれは、尋常の領域を超えています。どんな奇跡をもってしても、不可能です」

貴樹は立ち止まり、クリムエルヒルトを振り返った。彼の行き着いた答えに、彼女もまた同時に気が付いたようだった。彼と目を合わせ、ゆっくりと首を振る。

「駄目です」

「思いついたんだな？」

「確かに、可能かもしれませんが」

「そうだな」

「本気ですか？」

「いや、全く」

彼女は、わからない、という顔になる。

「俺だって、命は惜しいよ。まだ、他の方法があるかもしれない。最初は、この世界からさっさと出て、目的に向かうつもりだった。けど、こういう事態になったからには、気長にやるよ」

「私もやめることには賛成ですが。問題を先延ばしにするのは…」
貴樹は答えずに歩き続けた。はたして、欺くのはどちらになるのかと、計算をしながら。

思えば、停滞を選んだのは初めてかもしれないなかった。

もちろん、進む道もある。自分か、ウイン達のどちらかを犠牲にすれば、問題は解決するだろう。だがそのどちらも、貴樹にとっては容認できなかった。自分を犠牲にするのは論外。そして、彼らを殺したとしても、代償は大きい。何より、あんな者達に小さくない恩を作るのは、一番避けたいことだった。

当面は、もう一つしなければならぬこと、ゲルトルードの記憶を戻すのに集中する。ウイン達と必要以上にかかわる必要がなくなつた今、彼女と存分にいちやつくことだけを考えていた。

コミュニケーションにおいて、視覚と聴覚が大事なのは言うまでもない。目で見て、口で言葉を交し合う。視覚が機能していないゲルトルドに関しては、さらにもう一つ大事な感覚を与えてあげなくてはいけない。

それは、触覚だ。触れ合い。親が子を抱き上げるように、恋人同士が親密さを示すために身を寄せ合うように、ボディタッチは重要な意思伝達の一つである。

貴樹は、常に彼女のそばにいるよう心掛けた。少ない彼女の言葉から何とかして欲求を汲み取り、より強く感情を共有するため、肩や腕、頭をなでたり、膝の上に座らせたり、何度か抱き着いたりして、近い距離で会話を続けた。

幸せな時間だった。最初、彼女はもうしたらいいかかわからない。自らに向けられている強烈な好意を受け止めきれない。だから、時には引くこともした。一日、彼女と話すことを止めたら、その辛さと引き換えに、少しの進展を見ることができた。

彼女が、自分から話しかけてきたのだ。

「タカキさま」

部屋の戸口から現れた彼女を見て、貴樹は寢床から飛び上がり、早足で近づいた。両腕で彼女の頬に触れてから、肩に回した。

「どうしたの?」

「アンリから、ここにいて聞いて。急にじやまして、ごめんなさい」

一日ぶりに聞いた彼女の声は、どこか不安でかすれていた。庇護欲が沸々とこみ上げてきて、貴樹はにやけが止まらなくなる。

「いいよいいよ。全然。そうだ、今日は外に出て、ちよつと遠くに行ってみようか」

「ううん。ここで話をしたいの」

(ひよつとして、俺を誘ってるのか?)

彼女を案内し、寢床に腰を下ろさせた。多少皺の寄った布団の上に彼女がいる光景は、はつとするような生活感を感じさせ、股間が怪しくなる。どこか悩んでいる様子の彼女を見て、興奮は次第に収まっていった。

まるでそれがいけないことのように、彼女はたどたどしく話し始めた。

「前のわたしはどんな人だったの?」

「今と同じくらい、素晴らしい女性だよ。慎み深く、思いやりにあふれていて、恋人の僕をいつも想ってくれていた」

ゲルトロードは困ったように手を布団から自分の膝元に移した。

「こいびとって、何をするの?」

ああ、こうするんだよと貴樹は優しく言う。後ろから包み込むように抱きしめ、彼女の首筋に何度か口先をつけた。くすぐったそうに顔を動かす彼女に覆いかぶさり、服の隙間に顔を突っ込んだ。頬に当たる膨らみを愛でながら、自分の

という、妄想をして、貴樹は我に返った。口に手を当てて、大きく深呼吸する。目はじつとりと、ゲルトロードの唇に注がれていた。

「僕達は、愛し合う生き物なんだ。男と女が対になって、子孫を残すことができる。本能であり、一番重要な使命とも言えるね」

「子どもを、残す」

「ゲルトルード？」

彼が声を再度かけると、彼女は身を縮こまらせた。やけに慣れた動作だ。そうすることが、一種の癖になっていた時期があったような。そんな様子を見て、さすがに貴樹も冷静になった。頭に冷水をかけられた気分だった。

何かがずれていると、確信を持つ。

「落ち着いて。君に酷いことなんてしないよ」

「でも、タカキさまは子をつくるんでしょ。わたしの父さまもそうだった。こんどは、何をもってくるんだろって。なんども、されたことある。へんな生き物を、わたしとくっつけさせるの。おなかの下からはいつてきて、すぐくいたいの。でもひつようだって言ってた。だから、がまんできる。そうしないといけないから。子をつくるのは大事って」

相手には見えずとも、貴樹は精一杯優しい表情を保った。まだ何かを続けようとする彼女の口に腕で触れてから、脇の下に入れ体を持ち上げる。彼女が少しだけ身じろぎしたのにも構わず、膝の上のせて、頬で彼女の髪を撫でた。

「違うんだ。よく聞いて。君の父親がしたことは、恋人がするようなことじゃない。本当のはもっと暖かくて、心地いいんだ。君が少しでも痛い思いをすることを、僕は絶対にしない。君がどんなことをしようと、置いていったりはしない」

声色は何とか保てても、表情がこわばれるのは止められなかった。

異形支配。

ロスリックの王家が、王の薪にふさわしい格を維持するため、継り付いた禁忌。人智を超える化け物たちの血を取り入れることで、器を昇華させようとした。だがその代償は大きく、王家の者達のほとんどはまともな体を失った。

ゲルトルードが、真つ当な女性として育つにはあまりに欠陥が多すぎる環境だった。

(オスロエス……、てめえ、覚悟しろよ)

今一度、ロスリックを滅ぼすことを決意した。彼らが生き残ってい

る限り、ゲルトルードの幸せは遠い。いつまでもやってはこないだろう。

ゲルトルードはわずかに貴樹へ体重を預け、見上げてくる。

「ほんと…?」

「ずっと、そばにいるよ。何が来ても、君を傷つけさせはしない」

彼女は自失しているようだった。その言葉の意味を飲み込むまで、時間がかかっている。

「そんなこと、言ってくれたひと、はじめて……」

後は、とりとめのない呻きが残った。銀の頭冠を触ろうとした手が止まって、貴樹の腕を探り当てる。さらに身を預けてきて、安心しきったように、全身の力を抜いた。受け止めながら、彼女が眠ったことを確認する。

不思議と、この時だけは邪な思いが湧いてこなかった、ただ、彼女を慈しむ気持ちがあふれてきて、新鮮な感覚を理解するだけで一杯だった。

(やっと聞けた)

初めて、彼女の本音らしい本音が漏れ出た。それはきつと、火守女となった後でも消えずに抱えていたものだろう。彼女を理解するうえで、とても大きな前進をしたのは確かだった。

ゲルトルードをそつと寢床に置き、その寝姿をずっと見ていた。決して飽きの来ない光景だ。このまま永遠に、二人の時間を過ごしたいと痛烈に思う。

そして、彼女が目覚めることはなかった。

33. 脱出と代償

二日が過ぎてから、これが異常であると、貴樹は認識した。

呼吸はしている。鼓動も聞こえる。だが、彼女は時折苦しみ、蒼白な顔を歪ませていた。終わりのない悪夢を見続けているようだ。

同じ苦しみ方を、前にも見たことがある。イルシールの地下牢で、彼女はソウルの不足により死にかけて。今度も同じ原因なら、解決は容易だと考えたが。前とは、まるで状況が違うということ、すぐに理解した。

貴樹が、自分のソウルを分け与えようにも、その方法がない。地下牢の時は、ゲルトロードが彼からソウルを取り出すことで成立していた。今の彼女は意識もなく、そして火守女の技も失われている。故に、仲介をする者が必要だった。

「これは、繊細な作業になります。自信はありません」
「やってくれ」

クリムエルヒルトが、皆の見守る中、貴樹とゲルトロードの手を握る。そして浅く呼吸しながら、目をつぶった。が、数秒もしないうちに二人の手を放し、ひどく疲れた様子で首を振った。

「どうしたんだ」

「できません。旦那様のソウルを移そうとしても、この子の器が受け止めようとしないんです。いえ、正確にはすり抜けています。今の彼女の器は、まるで幻です」

「そんなはずはない。前は成功したんだ。そんなわけが…」

貴樹は、言葉を失った。ゲルトロードの姿が消えた気がしたからだ。それも一瞬でそうなるのではなく、霞がかかるように、徐々に存在が曖昧になった。何度も瞬きをしていると、再び元の状態に戻る。

「どうか、しましたか？」

アンリが心配そうに訊いてきた。彼女を含めた、他の者達の反応を見てみても、さきほどの光景に気がついた様子はない。

(ノミ、気がついたか)

『ああ、クリムエルヒルトは何かを隠してる。嘘は言っただねえ。ただ、

全部を説明していない。そこを追求するか?』

(別にいい。最優先は彼女だ)

自分の意識だけが目撃したことを、できれば忘れてしまいたかった。彼女の器がおかしいことも、ずっと無視をしてきた事実の裏付けになってしまっている。

ロスリックの長女は、生まれ出てきた時から、光を失ったと言われている。彼女の母もまた、王家のおぞましい所業の犠牲者だった。正常な子を産めるはずもない。

だが、目の前で倒れている彼女は、暗闇に全く慣れていない様子だった。赤子のころから盲目ならば、それが当たり前のように受け入れられるはずなのに。

この子は、ゲルトロードではない。

その事実が成り立つとしたら、一体、目の前の彼女は何者なのだろうか。

「クリーム、彼女は、あとどれくらい生きられる?」

貴樹が訊くと、間もなく答えが返ってきた。

「それほど長くはないとしか。今までに、見たこともない例です」

「治す方法はある」

彼は考え直す。今、彼女の存在に疑問を持ってでも仕方がない。たとえ誰であろうとも、自分の気持ちが変わるわけではない。

「奴らが、ロスリックの者達が、絶対に知っているはずだ。一刻も早く、城へ行つて、聞き出さなければ」

本当ならば、もっと確実に、全員が納得できるように事を運びたかった。計画していることが全部上手くいっていたら、ワイン達がちゃんと仲間内で殺し合ってくれたというのに。

「どこへ行くんです」

「彼らの所だ。器を治す。ほぼほぼ成功するだろ」

クリームエルヒルトは、出口に立ち、そこから離れようとしなない。

「駄目です。貴方に多大な危険が及ぶ可能性があります。許すわけにはいきません」

「おい、二人で話を進めるなよ」

ホークウッドが割り込んできた。

「あいつらの事情は聞いたが。どうにかする方法があるなんて初耳だぞ。タカキ、頼むから説明をしてくれ」

じりじりした焦燥感を抑え、貴樹は手短にこれからしようとすることを話した。

亡者を生者に戻した経験なら、ある。フォドリツクの件だ。正気を失っていた老人の体に残り火を分け与えると、彼は見事復活を果たした。同じ理屈が、ウイン達にも通じるかもしれない。

しかし、問題なのは、彼ら八人に与えてしまうと、貴樹の内に宿る残り火は六個になってしまうことだ。どんな反動が来るのかわからなかった。おまけに、戦闘能力がどれだけ衰えるかも想像がつかない。これからの戦いを考えると、避けたい道であることは確かだった。

そしてホークウッド達は、貴樹の体自体も心配をしていた。残り火を消費していくことで、彼の内にある守りのようなものが薄れていくのではないかと。地底湖での失神が、より説得力を持たせている。

案の定、彼らは難色を示した。

「賛成はできません。私たちは、貴方の身も案じています」

アンリが考え直すよう言ってくる。

「でも、このままじゃ彼女が死んでしまう。僕達は、火守女の灰だ。最も優先すべき命が何なのか、皆わかってるはずだろ」

「よく、考えてください」

クリムエルヒルトが目を合わせてくる。

「旦那様の身を犠牲にせずとも、先へは進めます。優先すべき命があるのなら、当然切り捨てなければならぬ命もあるはずです。幸い、今はそれなりに彼らと信頼が築けています。その隙をつき、排除すれば」

「それは、あの人達を殺すってこと？」

ミレーヌが憤慨するように言った。

「どうかしてる。小さな子供だっているのよ。目的のために手段を選ばないのなら、私達が今まで侮蔑してきた奴らと同じになる」

「奴らは、人食いなの」

クリムエルヒルトは、おぞましそうに顔をしかめた。

「貴方が、綺麗ごとを並べてまで庇う価値あるとでも?」

ミレーヌも負けじと睨み返した。

「つくづく、見下げ果てた奴」

「自己紹介? お疲れさま」

貴樹は、壁を蹴った。それほど威力はなかったが、音で全員の注目を集めるのに十分だった。

「皆の意見は分かった。でももう決めたことなんだ。クリム、どいてくれ」

それでも従おうとしない彼女を無理やり押ししのけ、自分の部屋を出た。制止の声がいくつか上がるが、貴樹は進んだ。時間はあまり残されていらない。自分達で言い争いをして、無意味なだけだった。

会議室の前を通り抜け、彼らの居住区へ向かう。着いても、誰の気配もなかった。一つ一つの部屋を覗いていったが、誰も見つからない。

外にでも向かったのかと考え、彼は洞窟の出口へ走った。崖に出ると、上へと伸びている梯子を素早く駆け上がる。

外にいたのは、たった一人だけだった。

「そんなに急いで、どうしたの?」

「フリ、姉さん」

薫が、何食わぬ顔をして立っている。彼女がこっちの区域まで来るのは久しぶりだった。貴樹へ会いに行くこともせず、不気味な沈黙を保っていたかと思えば、今、こんな所で思わせぶりに笑っている。

貴樹は己の勘が正しいと信じた。

「ウイン達を、どこへやった?」

相手は笑みを消した。

「わかりやすすぎたかな。ま、隠す気はなかったんだけどね」

彼を追いかけて、アンリ達が上がってきた。表情をすぐに元に戻して、少し穏やかにもう一度詰問する。

「彼らがいる場所を、教えてくれ」

薫は持っている鎌で足元の雪を掻きまわした。

「聖堂の中だよ。安心して、眠ってもらってるだけだから。貴くんは、どうしてあの人達を探しているの？」

貴樹は自身に危険が及ぶ部分はぼかして、今の状況を説明した。嘘を並べるばかりだと、姉はすぐに看破してくる。今まで貴樹の望みを尊重する時もあったので、これで何とかかなると思っていた。

しかし薫は、話の途中で笑い始める。

「ごめんね。もう知ってるんだ。駄目だよ。そんな方法は認められない」

「もう一度、考え直してください」

クリムエルヒルトが、彼女の横に並んだ。それで全てを察する。この二人は絶対に相いれないと思っていたが、貴樹の身を案じているという点では一致している。いつの間にか情報の共有をしていたらしい。

さらにそこへ、アンリとホレイスが加わった。彼らもまた、自らの意思をはつきりと示している。貴樹は少し考えた。自分を心配してくれるのは悪くない気分だ。事実、彼もこの方法が良いとは思っていない。

だが、良し悪しなど、あの子の命の前では塵同然だ。

貴樹は、溜息をついた。

「納得してはくれなさそうだ」

「あんな女の、どこがいいの？」

フリーデの姿でなければ、言い終わる前に首を飛ばしている。「全部かな」

腰をひねり、首を回し、筋肉をほぐす。残り火の力からすればたいして意味のない動作だった。彼もまた、自分の意志を示すためにそうしていた。

「僕は、別に皆のリーダーになったつもりはありません。従えと、命令する権利はない。だからお願いをします。そこを通してください」

誰一人として、動かなかった。

互いに譲れない以上、言葉ではもう先へは進めない。

(ち、めんどくせえ)

貴樹は苦笑して、はつきりと言った。

「じゃ、普通に通りますね」

前方へと飛び上がる。クリムエルヒルトの頭上を越えようとした瞬間、彼はとても固い壁にぶつかつたような感覚を覚えた。地面に降り立つと、彼女の上には割れたソウルの盾が散乱している。

「止められるとでも?」

クリムエルヒルトは答えずに、左右の者達へ素早く情報を伝達した。

「いくらか攻撃を加えれば、彼の力は機能しなくなるわ。それまでは、絶対に、容赦をしては駄目。押し切られる」

「申し訳ありません、タカキさん」

「……残念だ」

アンリとホレイスも、武器を構えた。

そして、貴樹の横には、ミレーヌが付いた。

「あの人達を救いたい。貴方には、申し訳ないと思う」

「構いませんよ。助かります」

ホークウツド一人だけが、どちらに行くこともなく、ただ途方に暮れた様子で事の成り行きを見守っていた。

(怪我はさせちや駄目だな。上手く手加減しねえと)

どう攻めるべきか考えている途中、目の前にいきなり鎌の刃が迫ってきた。後ろへ下がってかわすと、相手もこちらから離れ、雪が舞い上がると共に姿を消す。

「今は、フリーデさんみたいです」

「薫と貴方を、戦わせるわけにはいきません」

背後に現れた彼女の攻撃を、蹴りで反らす。貴樹はそのまま相手へ突っ込もうとしたが、存外に素早い動きで、フリーデは距離をとった。接近戦を避けられている感じた。こちらの実力は正確に知られているらしい。

ソウルの矢が、直後、彼をぐるりと囲むように現れる。ほぼ逃れる隙間のない攻勢で、一斉に向かってきた。彼は飛び上がり、体を回転

させ、ほぼすべてを足で叩き落とす。逃れた何本かは、ミレーヌが処理した。

ホレイスとアンリが左右を挟むようにして走ってくる。さらに頭上から、出現したフリーデが降ってくるのもわかっていた。

首めがけて振るわれる鎌に噛みつき、そのまま顎の力だけでフリーデの体を横に揺さぶった。ちょうど向かってきたアンリにぶつけ、彼女たちは諸共雪の地面に転がる。ホレイスの攻撃をかわし、背後に回り、彼を鎧の上から踵で吹き飛ばした。

一連の流れを、ミレーヌは剣をしまいながら見ていた。貴樹と目が合うと、肩をすくめてみせる。

地面から噴き出した炎の柱が、貴樹を飲み込んだ。動じることもなく、そこから出ると、足元でソウルの塊が爆散する。察知して飛び上がった彼は、うなじを狙ってソウルの短剣を振りかざすクリムエルヒルトへ、振り向いた。

頭突きで、青白い刃を砕き降り、彼女の体ごと地面へ落とした。背中を強く打った魔女は口を目いっぱい開けて、苦し気に何かを唱える。

着地した貴樹の周りに、アンリ、ホレイス、そしてフリーデが同時に出現した。アンリの剣を肩で受け止め、ホレイスの斧槍を足で絡めとり、折る。転がる刃の部分を蹴り上げて、フリーデの鎌にぶつけた。一息で後ろへ宙返り、アンリの足を払って、手にある武器を蹴り飛ばした。彼女が次の行動を起こす前に、その剣を踏みつけて破壊する。

フリーデは一瞬固まったが、すぐに一步踏み込んできた。そして鎌を思いつきりに放り投げる。

(あ? 何してんだ)

思いのほか鋭い掌底が飛んできて、貴樹は顔を横に傾けて避けた。が、顎を直後に蹴り上げられる。それだけで彼女が止まることはなく、両肩に組み付いてくると、そこを支点に手について、彼の背後へ宙返った。降ってきた鎌を足で受け取り、素早く両手に移すと、彼の側面へと振るう。

貴樹はとっさにしやがんでかわし、回し蹴りを放った。が、その時にはすでに、彼女は攻撃が届かない位置まで下がっている。

「大した曲芸ですね。でも、嘘をつくとは思いませんでした」

フリーデの身体能力の高さはわかっていて。だが、今の一連の動きはまるで、別の誰かが操っているかのようだった。癖が、非常に覚えのあるものなのだ。

彼女は、悪戯を咎められた子供の表情をした。舌を出し、くるくると鎌を弄ぶ。

「フリーデとは、それなりに長いからね。わかるんだよ。貴くんとは、相性が悪いって。その点お姉ちゃんはきちんと、君がどう動くか理解してるもん」

確かに厄介だ。想像していたフリーデの動きとは随分異なっている。そしてそれ以上に、姉の精神が彼女の体を動かしている状態が、我慢ならなかった。気持ち悪いの一言に尽きる。

「本当に、今の俺を理解してるのか？」

「力が凄く強くなっただけで、結局型は同じ。降参するなら、今の内だよ。だって貴くん、私に勝ったことないでしょ」

日本での話なら、そうだった。柔道も空手も剣道もシステムも、全て姉の薫が先輩だった。子供のころから彼女に無理やり引つ張られる形で、稽古を受けさせられたのだ。まともな試合形式では、男女の体格差を考えても、勝利したことはない。

貴樹は内心嘲笑しながら、軽く加速した。姉の、驚いたような顔が間近に迫る。一度フェイントを入れた後、鎌を振るってきた彼女の腹を一瞬で二度蹴った。息を吐きだしながら、薫は離れた所にある木の幹に激突する。

(で、それがどうした)

フリーデの方には心の中で何度も謝った。調子に乗った姉の、目を覚まさせるためだ。許してくれるだろう。すっきりした心地で、彼は前へと進んだ。

その進路を、クリムエルヒルトが立ち塞がる。

「行かせません」

アンリとホレイスも立ち上がり、距離を詰めてきていた。ほとんど使える武器もない状態で、それでもまだ続けようとしている。

「もう、決着はついたんだ」

クリムエルヒルトは、ソウルの矢を出現させた。

「まだです。私達は、少しも諦めてはいません」

どうしたものか、と貴樹はさすがに困った。時間は限られている。あちらの意志が固い以上、もう少し手荒にするしかないのだろうか。

ミレーヌが再び剣を抜く。貴樹の前に出た。

「私が止めておく。その間に聖堂へ行つて」

(お、地球人のくせに役立つじゃねえか)

彼女は、クリムエルヒルトの放った魔術を全て切り落とし、その喉元に刃を向ける。魔女は挑発するように笑みを浮かべた。

「お嬢さんは、これだから。その狭い視野で、台無しにするものを考えてみたら?」

「正直、悪くない気分。お前のことは、ずっと気に入らなかった。人食いに与していた分際で、何を偉そうに語っているの? 貴方達みたいな、こういう世界に元からいる人達にはわからないでしょうね。急にまるで違う環境で生きていくことを強いられる、彼らの気持ちだ」

「いいわね、貴方は」

クリムエルヒルトは、目を細める。

「依存してる男についていくだけでいいもの。結局ホークウツドの前でいい顔できれば満足なんですよ。獣に汚された自分の身体と、共食いに手を染めたあの人達を重ねて、可哀そうになっちゃった?」

これはまずいと、貴樹は橋を急いで逆戻りした。クリムエルヒルトは相手の冷静さを奪おうとしているようだが、いき過ぎている。ミレーヌの雰囲気が一変し、大剣を握る手に力がこもった。刃で魔女の喉を貫こうとする。

だが、貴樹がそれを止めようとする前に、ミレーヌの剣を弾いた者がいた。

「もう、勘弁してくれ」

ホークウツドは、貴樹と、他の者達を交互に見た。クリムエルヒル

トの身体を無理矢理引っ張り、ミレーヌから距離を空ける。

「何を、」

「いいから、黙っとけ。それから、二度とミレーヌを侮辱するな」

彼の荒い語気に、クリムエルヒルトは口を閉ざす。おとなしくなったのを確認してから、ホークウッドは全員を一人ずつ見回した。

「お前達は、一体、何をしてるんだ？　なんで、戦わなくちゃいけない？　俺はもううんざりなんだ。同胞同士で争いなんて。馬鹿げてる」
アンリが口を開く。

「ですが、タカキさんは危険な方法を使おうとしています」

「わかっている。俺だって、タカキの考えに賛同してるわけじゃない。止めたい気持ちはある。だが、それ以外に方法があるのか？　今ここでこうしている間にもゲルトロードが死ぬかもしれないんだ」

彼は、クリムエルヒルトの方を見た。

「お前の言いたいこともわかる。手っ取り早いのはそれだ。だが、いか、あいつらは敵じゃない。お前は、地底湖で、自分の身を犠牲にしようとした。同じことを、他者にも強要するのか？　殺しの線引きを間違えたら、もう戻れなくなる。殺していいのは、敵だけだ」

「随分と、都合の良いことを並べたてるわね」

「都合の良い？」

ホークウッドは、彼女に詰め寄る。負けじと睨みつけてくるその顔へ指を突きつけた。

「どうだかな。お前、奴らを排除して、それで綺麗に全部片付くとも思ってるのか？　必ず、遺恨は残るぞ。俺たちの中にも。ゲルトロードに後で訊かれたら、なんて説明するつもりだ。都合良く物事を考えてんのは一体どっちだろうな」

貴樹は、二人の話を冷めた気分で眺めていた。どちらも、正しい部分はある。ただ、ホークウッドの勢いにクリムエルヒルトがなぜか甘んじている。そのせいで、彼が優勢のように見えるのだ。

（てか、こいつら。本当に気がついてないのか？）

最善の方法をすでに貴樹は思いついていた。それを皆に話すつもりはない。

「俺は、タカキを信じるぜ。こんなこと言って、何かあったらどうすんだって話だが。それも含めて、覚悟を決めるのが仲間の義務ってことじゃねえのか？ 俺達には、こいつの邪魔をする権利はない。他にいい方法も示せない以上、見守るしかないんだ」

ホークウッドはそう言い切ると、貴樹に向かって顎を振った。もう行ってもいいという意味らしい。事実、貴樹が歩き出しても止める者はいなかった。アンリとホレイスは沈黙し、フリーデは静かに木に寄りかかっている。クリムエルヒルトはまだ何かを言いたげだったが、ホークウッドとの睨み合いに根負けしたようで、溜息をついた。

「お前には、感謝してる。誰もが思いついて、言い出せなかった案を出してくれた。それで話し合いが曲がりなりにも前に進んだんだ。でも、もう憎まれ役はしなくていいぞ。お前がそんな奴じゃないってことはわかってる」

つぶっていた眼を開いて、クリムエルヒルトは訳が分からないと言いたげに眉をひそめた。

「何それ。慰めてるつもりなの？ ねえ、常々思ってたんだけど、貴方」

ミレーヌへ意味ありげに流し目を送る。ホークウッドにずいど迫り、両手を彼の胸にかけて、耳元ではつきりと言う。

「私と寝たいの？ そうしたいなら、直接言えばいいのに」

別の方向で、雲行きが怪しくなってきた。それを聞いたミレーヌがパクパクと口を動かし、剣を持ち上げる。

ホークウッドが、さらに怪訝そうな顔になって、クリムエルヒルトから離れた。

「あ？ 何言ってるんだ。子供じゃあるまいし。お前と寝ても、安心はしないぞ」

「照れてるの？ はぐらかそうとしても無駄よ」
「お前、本当に何を言ってるんだ？ 寒いのか？ 呪術の火で暖をとればいいじゃねえか」

彼女はしばらくホークウッドの顔を眺めて、徐々に理解をしていく。悪戯っぽい笑みが崩れていった。

「貴方……、知らないの？」

「何がだ」

「子供の作り方を」

「いや、知ってるぞ。獣は交尾をするんだろ。でも俺達は違う。ソウルの交換でできるんだ。昔、本で読んだことがある。それ用の儀式がちゃんとあるらしい」

話を聞いている途中で、クリムエルヒルトは手で口を覆った。体をくの字に折り、彼が言い切った後は耐えきれなくなったように笑い始めた。他の者達はどう反応したのか、困惑している様子だ。

ホークウッドもまた、戸惑ったように尋ねた。

「何か間違っているか？」

「本……儀式って……」

彼の言葉を繰り返し、最後にはついに吹き出した。目尻に涙を溜めながら、ミレーヌの肩を軽く叩く。

「フッフ、良かったわね」

ミレーヌは無然とした表情を返す。剣を収めると、咳払いをした。皆の反応から、何かが違うということを理解したホークウッドは、後ろを振り向いた。

「なあタカキ、俺変なこと言ったか？」

が、既に貴樹は聖堂近くまで辿り着いていた。ホークウッドのおかげで何とか丸く収まってくれた。優先すべきことがあるので、興味深い会話に最後まで参加できないのは残念だった。

聖堂の扉は閉ざされていたが、彼の腕力で訳なくこじ開けられた。人の気配を辿り、晒されたままになっている地下への階段に踏み入れる。

地下の空間には、ウイン達が全員途方に暮れたように座り込んでいた。

「大丈夫ですか？」

見た所何かで拘束されている様子はない。危害を加えられたというわけでもなさそうだ。

ウインが、彼を見て安心したように歩み寄ってくる。

「急に、シスターがやって来てね。無理やり連れてこられたんだ。君の仕業かと、少しでも疑った俺を許してくれ」

「とりあえず、彼女との話し合いは一段落したので、安全です。それよりも、皆さんに伝えたいことがあります」

貴樹は彼らの器を治す方法について説明をした。言葉だけで訊くと突拍子もないことなので、疑いも彼らの様子からは見て取れた。しかし、それ以上に自らの状態を改善できることへの期待が勝っているようだった。

「早速始めましょう。誰から、最初にしますか？」

「ちよつと待ってください。今ここで、できるんですか？ 私達にも心の準備が…」

由海がさらに何かを続けようとしたが、貴樹は途中で遮った。

「すぐに終わることです。すみませんが、こちらも急がなければならぬ事情ができました。今ここで、貴方達の器を治します」

彼らにとつても、重大な決断を迫られることだとは分かっていた。こういうふうには多少急かされる形なのは酷だろう。お互いに、戸惑うような沈黙がしばらく続いた。

最初に覚悟を決めて前に出たのは、ランドンだった。

「我々の事情を知り、それでも信じてと言ってくれたんだ。今度はこちらにも、お前の考えを受け入れよう。何をすればいいんだ」

「腕を出してください」

筋肉のぎっしり詰まった腕を、吐きそうになりながら触る。男の腕に自分から触らないといけないとは。もしこれが彼女のためでなかったなら拒絶しているところだ。

貴樹は、治す方法をさも確定しているかのように説明したが、彼自身ではなく相手にもリスクはある。ヨエルの時の現象が再び起こるかもしれない。彼らは、亡者も同然の状態だ。残り火で浄化される可能性もある。

そんな彼の期待とは裏腹に、ランドンへと残り火を移した時、何かが起こることはなかった。ただ、それは表面上だけだったらしい。ランドンは茫然として自らの胸を押さえ、膝をついた。アリーが駆け

寄った時には、その目から涙が流れていた。

「乾きが収まった…」

「あなた」

「信じられない。生まれ変わった気分だ。何もかも正常だ」

ランドンは妻を抱きしめる。その光景をくっせえなと思いつつながら貴樹は眺めていた。どうやら成功したらしい。

それで、他の者達も心を決めたようだ。次に貴樹の前に来たのはイアンだった。同じようにして残り火を移すと、確かな変化を自覚したらしい。感動というよりも純粋な喜びを表情で目一杯表し、貴樹の方に抱き着いてきた。

彼らを治していく中で、貴樹は前に起きた異常を特に感じずにいた。力の放出を感じるだけだ。それよりも、彼らの喜びようを見ているのが苦痛だった。特に、ジアンナの治療が終わった瞬間、彼女が幸成に飛びついて情熱的なキスをした時は、辟易した。リスクを負ってまで、なぜ他人が歓喜し、いちやついている光景を見せられなければならないのだろう。しかし、同時に滑稽であることも確かだった。後の事を考えれば。

貴樹は、残ったワインへと触れた。これで終わる。彼に移すと同時に、クリムエルヒルト達もやってきた。しかし、フリーデだけはいない。

「ありがとう。君には、返しきれないほどの借りを作ってしまった」

残り火を得たワインが札を言った後、すぐに不思議そうな顔をした。

「タカキ？」

注目を浴びる。来るとわかっている、抑えることはできなかった。

貴樹は何度も激しく咳き込む。前のものとは比較にならないほどの苦痛がやってきた。口を押さえる余裕もなく、床に血を吐き出す。体全体が炎であぶられているかのように熱かった。足の重心が崩れて、一度大きくふらつく。

仲間達が慌てて駆け寄ってくる。アンリが体を支えようとするが、

彼はそれを首を振って止めさせた。口元の血を拭い、足を大きくその場で踏み込んだ。

(こういうことか)

全身が訴えてくる警告を尻目に、彼自身は冷静だった。これは、体の異常ではない。むしろ自分の精神の方に、干渉しようとしてくる。大きな炎で飲み込もうとしてくるのだ。

痛み自体は、前回で慣れていった。手段であって目的ではない。気をそらすための仕掛けといったところだろう。本質がわかってしまえば、戦い方も決まってくる。

(おこがましい)

怒りを糧にして、彼は自分の精神を肥大化させた。囲んでいる炎を逆に覆うようにして食う。なぜか両親や姉妹の姿が映りこんできたが、それは彼の感情を増大させる燃料にしかならなかった。

ほとんどもを飲み込むと、急激に苦痛は和らいでいった。咳も止まり、鬱陶しかった熱も嘘のように引いていく。最後まで瞼の裏に残っていた両親の残像は、生きたまま焼かれている無残な有様だった。それに向けて心の中で中指を立てる。自分を産んだことくらいしか功績のないゴミ共は、よく燃えるらしい。まあまあセンスがある。

現実に返ると、目の前にはフリーデの顔があった。涙で濡れていて、鼻がくつつきそうな距離まで迫っていた。

貴樹は無言で離れる。段々と雰囲気でわかるようになっていた。それくらい、薫とフリーデはそぐわない。

「貴くん？」

周りを見るも、皆が同じような不安を表していた。それに向けて大きく微笑んで見せる。

「ごめん、心配をかけた。もう大丈夫だよ」

それでも、彼らの顔が晴れることはなかった。ここへきて、貴樹も違和感に気がつく。皆の視線は、自分の上の方へと向かっている。

「あー、何か変な所でもありませんか？」

ウインが、すつとインベントリから手鏡を渡してくる。それに自分の顔を映した貴樹は、小さくない衝撃を受けた。

黒かった髪が、真っ白になっている。眉毛も同様に変色していた。これではまるで老人だ。この世界に来てからも多少なりとも見た目を氣遣ってきた身としては、かなりのダメージだった。

(ん？ 待てよ)

髪に手を入れる。今まで上げていた前髪を、下ろしてみた。するとヴィジュアル系のバンドマンとも言えるような雰囲気が出来上がる。生まれてこの方髪を染めたことがなかったが、新たな自分を発見できた気がする。

(ありだな)

満足した貴樹はお礼を言っ、ウインに鏡を返した。言われた彼は酷く困惑しているようだった。そしてそれは、周りの者も同じようだった。

「あの、大丈夫なんですか？ 私達、知らなくて。本当に、ごめんなさい。貴方に危険が及ぶ行為だったなんて」

由海が謝ってくるの、にこやかに応対する。

「いえ、平気ですよ。それにまだ終わったわけではありません。この世界から出るにはもう少し作業をする必要があります。でも、皆さんにそれを強いるつもりはないですよ。今すぐに、僕が終わらせてきますから」

「でも、安静にしたほうが…」

貴樹は地面を蹴って地下室から出た。止めようとする皆の気持ちもわかるが、ソウルを集めるのも大事だ。今の体の状態の確認もできる。

外に出た彼は、片っ端からこの世界の生物を殺していった。何しろ時間が限られているので、全力で動き回る。初めに鴉村を手早く壊滅させ、狼の巣で明らかにボス級の個体もあつという間に片付けた。ウイン達も手伝おうとはしてくれなかったようだが、彼らの先回りを常に貴樹がしていたので、無駄に終わる。

こうして一日未満で、彼は見つけうる全ての生物からソウルを回収することに成功した。本当はもっとじっくり色んな所を探検してみたかったのだが、今となっては仕方がない。ゲームでも出てきたボス

を途中でさっくり倒した気もする。だが貴樹にとっては雑魚と大差なかった。

「終わった」

血まみれになった体を洗ってから、絵描きの部屋で報告をする。ここまで早く終わるとは思っていなかったのだろう。絵描きの少女は驚きながら近づいてきた。

「…本当だ。よくこんな短い間で、集まったね」

「急かすようで悪いけど、時間がない。早速描いてくれないか？」

「まだ、大きな問題が解決してないよ」

佇んでいるクリムエルヒルトを見てから、視線を貴樹に戻す。

「火守女が一人だけだと、成功はしない。言ったはずだよ。あの子が必要になる」

だが、肝心の彼女は、記憶を戻す以前の問題だ。とても、何かを任せられる状況にはない。ソウル集めが終わったとしても、絵を描けないのなら意味はないだろう。

もちろん、貴樹も問題は理解していた。

「いや、もうそれは無理なんだ。彼女は、今意識がない。代わりを用意してる」

他の者達は初耳だと言わんばかりに、貴樹へ注目した。

「代わり？ でも、一体誰が？」

「目の前にいるだろ？」

彼は自分を指差した。少女は冗談でも聞いているような顔になる。

「要は、絵の具のチューブの役割を果たせばいいってことだ。集めたソウルを、君に渡す。僕にも、ソウルを操作した経験がいくつかある」
クリムエルヒルトが、首を振る。

「そのような、簡単な話ではありません」

「その通り」

絵描きの少女が目を示して見せる。

「貴方が今までどれくらいの実験をしてきたのかわからないけど、ただ他人にソウルを移すこととはまるで違う。独立している二つの世界を繋げるためには、膨大なソウルの奔流を制御する必要がある。火

少女としての経験を何一つ修めていない貴方がそれをやれば、絶対に体がもたないよ。死んでしまう」

「危険は、誰だって冒してる」

自分の語気が鋭いものになるのを止められなかった。じれったさでどうにかなつてしまっただけだ。今さら、長々とした説明を聞く余裕などないというのに。

「僕の心配をしてくれるのはありがたい。でも、彼女の命が危ないんだ。危険なんて知ったことか。やるんだ。今すぐに始めないと、手遅れになる」

彼が自らを省みない発言をしても、それを咎めようとする者はいなかった。冷静に、丁寧に物事を進めていた彼の過去からすれば、信じがたい光景だろう。それだけゲルトロードの身を案じているのだと全員に伝わっているようだった。だから、その思いを無下にしようとは誰も考えられない。

彼の勢いに押されて、結局絵描きの準備が進められることになった。といつてもキャンパスを置き、少女がその前に座る程度のことだ。貴樹とクリムエルヒルトがそのすぐ横に待機して、少女の準備が整うまで最後の確認をしていた。

「いいんですね？ あの子が知ったら、どう思うか…」

「残り火を移した時も耐えきれたんだ。今度も乗り越えられる。信じてください」

「精一杯、協力はします」

少女が筆を持った。二人に目配せをしてくる。貴樹は頷いて、クリムエルヒルトの肩に手を置いた。彼の中にあるソウルを、彼女へと移す。残り火を扱った経験から、何となくではあるがソウルの扱いを心得ていた。

「目をつぶっていてください。気休めにはなります」

クリムエルヒルトがそう言うてきて、同じく目を閉じた。確かに感じる。渡したソウルが、彼女を經由し、絵描きのパレットに注がれていくのが。

少女が、そこへ筆を入れ、淡い白色に染めたのを確認してから、貴

樹も目をつぶった。そして、筆がキャンパスに触れる音を細かく知覚した瞬間、暗闇だったはずの視界が奔流に包まれた。

(こ、れは…)

少女やクリムエルヒルトの警告の意味を理解した。残り火を分け与えた時の発作の比ではない。あれを御するのは造作もないことだった。だがこれは、無茶苦茶だ。意識だけが取り出され、酷い荒波で揉まれているようだった。

方向感覚がなくなり、今自分が立っているのかそれとも横に倒れているのか、それすらもわからなくなった。誰の声も聞こえず、耳鳴りが徐々に大きくなっていく。もはや、目を開けようとしてもそれはかなわない。胸が詰まり、呼吸のリズムが完全に乱された。

もう、十年は過ぎたのではないか。本当はどれくらい経っているのかわからない。時間の感覚さえ、引き伸ばされ、あるいは細かく寸断されたりして、認識が曖昧になった。

だが、いつ狂気に落ちてかわからないほどの混沌の中でも、貴樹は既に飽きを感じ始めていた。慣れたと言つてもいい。五感の大部分を切つてしまえば、徒に乱される心配はない。無駄なものはなくし、ただ一つの事だけを考える。

専心。彼はひたすらに、愛しい彼女の事を考えていた。己の中の炎が猛り、どんな苦痛でさえはねのけることができた。

「もう少し…」

絵描きの少女の声が、わずかに聞こえた。意外と呆気ないと彼は冷静に考え、さらに自分の中の妄想を激しくした。彼女の裸体を思い浮かべる。

胸の奥に沸いた熱が、徐々に上へと上がってくる。え、普通下の方に来るんじゃないのと適当に考えていると、熱は一気に顔へ到達した。ここで初めて、それが自分の意志で動いているわけではないと気がついた。

かつと、貴樹は目を見開く。久しぶりに感じた光は、赤い色を持っていた。

「ぐあ……っ…」

何か焼ける臭いがする。脳の奥まで突き刺すような激痛が襲った。歯を食いしばり、体を無暗に動かすことだけは我慢する。

目の前を炎が揺らめいた。間違いない。今、自分の右目が燃えている。視界が食い破られて黒になっていく。少し遅れて、左目も燃え始めた。

「中止してください！　これ以上は彼が…」

クリムエルヒルトがこちらの治療に回ろうとするが、貴樹はその体を無理矢理押さえつけた。両目が焼けているが、彼女を留まらせるくらい力はあった。唇を血が出るまで噛み、ソウルの操作を安定させるために全力を出す。

騒然としている中でも少女は絵を描き続けていた。貴樹からは何の情景なのかはわからない。それでも、端の方に筆を走らせ、放した時、全て終わったのだと理解できた。

少女が椅子から降りたと同時に、貴樹は倒れた。すぐさまクリムエルヒルトが手をかざし、奇跡を発動させる。が、その光は彼の眼に当たった途端消え去った。

「どうして…」

さらに強い奇跡の光が瞬き、すぐに散ってしまう。今までと、同じだった。貴樹に奇跡の作用が反映されていない。

薫が、茫然とするクリムエルヒルトに詰め寄った。

「何を、してるの？」

「奇跡が効かない」

「言い訳なんて聞いてない。早く、治しなさい。貴くんの目を……治せ！」

彼女は鎌を取り出し、魔女へ突きつける。それは脅しではなかった。役に立たない道具を切り捨てるようにして、刃が首元へ振るわれる。

決定的な一撃が入る前に、貴樹の顔が水浸しになった。彼を挟んで睨み合っていた二人は、

バケツを持つ由海を無言で見つめる。

「氷も用意しました。とにかく、冷やさないで。どいてください」

氷を包んだタオルが、彼の目に巻かれる。それだけでもだいぶ楽にはなった。痛みとともに強烈な痒みも来たが、両手もない状態では黙って耐えるしかない。意識の狭間をさまよいながら、彼は誰かの懺悔を聞いていた。

『すまねえ』

(あのなあ)

『わかるぜ。残り火の暴走は、おれが止めるべきだった。だが、これが精一杯だった。お前を、死なせないようにするのが』

ノミの声は極度の疲労で乱れていた。言葉の端々が、荒い呼吸でぐらついている。

(しゃあねえな。これ、貸しだぞ)

呆れたような溜息が漏れる。

『しゃあなくはない。お前の今の状態は』

(わかってるよ)

貴樹は起き上がった。それほど時間は経っていないだろう。それでも痛みはほとんど引いている。クリムエルヒルトの奇跡とは別の力が、働いたのだ。出血も収まっていた。

重苦しい空気が、場を包み込んでいる。

「成功しましたか？」

彼の問いに、一番近くの人の像が答えた。

「はい。ですが、申し訳ありません。これは、私のせいです。もっと全力で貴方を止めていれば…」

クリムエルヒルトの声に、首を振る。

「危険は、予想できたことだ。それを知っていながら、僕はそうした。納得はしているよ」

「納得？」

地の底から響くような声が、した。フリーデの声帯から出されたそれが、涙で濡れている。もう随分と薫の意識が表に出ているが、そこはフリーデが譲っているのだろう。その悲しんでいる顔をもう細かく認識できないのと思うと、少しだけ残念に感じた。ゲームでは、フリーデの情緒が詳しくわからなかったから。

「僕の両目は、どうなってますか」

気づまりな間がしばらく空いた後、クリムエルヒルトが答えた。

「右目は、火傷の跡がかなり残っています。それで…、眼球が潰れて真っ白に凝固しています。私の奇跡では、戻すことはできません」

一瞬触つてみると、確かにいつもの皮膚の感触はなかった。右の瞼を開けようとしても、激痛が走り動かすこともできない。当然、視界も真っ暗だった。

「でも、左目はまだ見える」

「確かに傷はましです。それでも正常な視力は望めません」

深く集中してようやく、知っている者の顔を見分けることができ。ただ、細かな表情の機微や、動いている物体を正確に追うことは難しそうだった。

（駄目だな。これからは視力を頼りにはできない）

傍から見れば絶望的でも、貴樹はどこか嬉しきを感じている自分を認識していた。それが表面にも出ていたのだろう。薫が訊いてくる。

「どうして、貴くんは、そんなに平然としてられるの？」

姉にしては珍しく、良い質問をすと思った。

彼は暗く沈んだ雰囲気を和らげるように、微笑んだ。

「これで、少しはあの子の気持ちがわかる」

絵画世界からの脱出は、これ以上何の波乱もなく、成功した。アンリ達の話によると、ゲールによって絵画世界に連れてこられた時と、感覚は同じらしい。一見ただのキャンパスに体が吸い込まれていくというのは、今まで感じたことのない気持ち悪さがあった。貴樹は、あまり好きではないという感想を抱いた。

左目を凝らし、周りを確認する。雪景色なのは変わらない。遠目に法王の城がそびえているのがわかる。再び、イルシールに戻ってきたらしい。

「ここに、来たことが？」

「わからない。ただ、わたしの描いた絵とここが、一番繋がりがやすかつ

ただけ。こつちも訊きたいことがある」

絵描きの少女は、貴樹を見上げた。

「どうして、わたしまで連れて来たの？ わたしは、別にあの世界で終わっても良かった。やりたいことをやれたから」

少女は屈んで雪を手ですくい上げる。それに鼻を少しうずめさせてから、空を見上げ、深く呼吸をした。

「こつちは、やっぱり何もかも違うよ。同じ雪でさえも。もうわたしの役目は終わったんでしょ。貴方達の荷物にしかないのに」

「君の役目は、まだ終わっていないかもしれない。僕達には、まだ解決すべき問題があるんだ。少しでも方法の幅は広げておきたかった。もちろん、君の意思は尊重する。僕達についていくのが嫌なら、それでもいい」

少女は無言でクリムエルヒルトをちらりと見た。それから目を閉じて思考にふける。

「ううん。嫌じゃないよ。貴方達は、悪い人たちじゃないってわかっている。それに、旅をするのは初めてだから。興味はある。でも、」

そこで初めて薄い彼女の表情に翳りがさした。

「お爺ちゃんも一緒にいてくれればよかったな」

貴樹達はその後、法王の城には向かわずイルシールの地下牢へ進むことに決めた。クリムエルヒルトによれば、ロスリックの城壁へと繋がる道があるらしい。転移の道。これを使って会談の時祭議長エンマ達がやってきたそうだ。彼女がその案内役を務めていたそうで、手順は理解していると保証した。

だが当然、全員がそこへ向かうわけではない。さらに障害が手強くなる恐れもある。ここがウイン達との別れ道だった。彼らは、この世界の命運よりもまず、自分達の安全を優先している。

貴樹は彼らに、不死街までのルートを教えた。カーサスの地下墓は以前だったら鬼門だっただろうが、貴樹達が罫などを取り除いてからはそれほど脅威でなくなった。彼らの戦力でも余裕をもって突破できると説明した。

また、祭祀場の者達との接触は慎重を期すべきだと忠告もした。

彼らでは言葉が通じない以上、安定した交渉は難しい。生徒達とまず先に会った方がいいと彼らに伝える。

「僕はもう、あの子達と合わせる顔はありませんが。貴方達の助けにはなってくれるはずですよ」

ウインが涙ぐんで、ハグをしてくる。

「君のしてくれたことを、俺達は絶対に忘れない。また、巡り合うことができたなら、ちゃんと恩を返させてくれ」

「ええ。僕達も目的を果たしたら、不死街まで戻ってくるつもりです。そこで合流したら、地球に戻る方法を一緒に考えましょう」

「ああ、約束だ」

彼ら皆が、それぞれ貴樹に感謝を示し、別れを告げた。前までは一番こちらを警戒していたフェアエラも、彼の腕を強く握って互いの無事を祈る言葉を口にしていった。イアンはミレーヌと二言三言交わしてから、クリムエルヒルトに頭を撫でてもらっていた。

「最後に少しだけ、いいですか？」

互いに出発する準備ができたところで、由海がおずおずと話しかけてきた。

「貴樹さんは、高校の教師をやっていたんですよね」

「うん、そうだけど」

彼女は数瞬迷ってから、意を決したように尋ねた。

「あの、国広祐馬という高校生を知っていますか？」

貴樹は瞬きしてから、首を傾げる。

「いや、ごめん。聞いたことがない名前だ。僕のクラスにはいないな」「そうですか」

そういう答えだと予想していたようで、気落ちしたような、安心したような曖昧な笑みを由海は浮かべる。長く吐いた息が憂鬱そうに漂った。

「探してるの？」

「はい」

彼女は遠くを見た。

「私の、恋人です」

彼らの姿が見えなくなるまで、貴樹はその後ろ姿を目で追っていた。

『あんなこと言つて、いいのか?』

(あん?)

『クニヒロユウマつて、確かいただろ。お前の生徒じゃねえか』

(今はもう、まともな人間じゃねえだろ。生きてるつて言つて希望を持たせてもしようがないし。エルドリツチの膿まみれの彼氏見たら、余計な因縁ができる恐れがある。知らない方が身のためだな)

『…おい、何適当なこと言つてんだ。お前が、そんな思いやりをあの女に向けるわけがないだろ』

(くくく)

こらえきれず、貴樹は心の中で笑つた。本当は、彼らとの別れの最中ずっと、吹き出しそうになつていたのだ。

(だつてよお、恋人のことなんざどうだつていいだろ。どうせあいつらは、もうすぐ死ぬつてのに)

彼は、見えない体の魔術を解いたフリーデに向き直つた。今は、薫が表に出ていない。むしろ今までが、多すぎるほどだったのだろう。元々は、フリーデ自身の身体なのだから当たり前だ。

「貴方も、僕達についてきてくれるということでもいいんですね」

「そうですね」

「それは、姉が望んでいるからですか」

静かな瞳を貴樹の顔に合わせ、ゆつくりと首を振る。

「私も、望んでいることだからです。前へと進むきつかけを待っていました。当面は、貴方の目的に協力するつもりです」

「心強い戦力が増えて、こちらとしてもありがたいです」

今のフリーデの言葉に嘘がないことを確認する。薫と彼女はある程度の意志統一ができていているらしい。てっきり、フリーデはこちらの世界に来ることを拒むと思つていた。彼女にとって、あの絵画世界は大事な場所であるはずなのだ。アリアンデルが既にいなかったこと

と関係があるのだろうか。

十分に時間が経ったことを確認して、貴樹は背負っていたゲルト
ルードをアンリとホレイスに預けた。

「少し、彼女をお願いします」

「どうかしましたか」

「急がなければならないのは確かですが、地下牢へ向かう前に少しだけ、自分の身体の状態を確かめておきたいんです。ここらを少し回ってきます。皆はここにいてください」

クリムエルヒルトが、目を見開いた。

「一人で、行動するつもりですか？」

「今の僕でも、危険を感じるほどの相手はここらにはいないよ」

「ですが、万が一があつては」

「頼む」

貴樹は意図して、無理をしている風の笑みを装った。こういった類の表情は、彼らには見せたことがない。弱気になった自分をさらけ出しているという設定だった。

「一人になりたいんだ。さすがに……、今回は堪えたよ」

無事、誰からも不信感を抱かれることなく、貴樹は単独行動を開始できた。城の方面へと全速力で走ってから、大きく回り道をする。アンリ達が待機している場所を遠目に迂回して、ウイン達が去つていった方向へ走り続けた。

『お前…まさか』

(いやさ、そもそもどうして、あんな奴らに貴重な残り火をくれてやらなきやいけないんだ？ 馬鹿げてるだろ)

貴樹の思いついた最善の方法というのは、結局は彼らを殺すことだった。絵画世界内では機会に恵まれなかった。たとえ秘密裏に全員排除したとしても、クリムエルヒルト達が確実に勘づくからだ。

しかし、今はどうだろう。まさか貴樹が、一度彼らの命を救つたうえで、それをなかったことにしようとしているとは誰も考えない。

『残り火のソウルを回収するのか』

(正直今の俺は全盛期の十分の一つとてとこだが、それでもあの雑魚共

に負ける道理はない)

『でも、おそらく残り火は奴らの器そのものになってる。普通のソウルと同じように、取り戻せるとは限らないぞ』

(答えは、奴ら自身が教えてくれたぞ)

『あ?』

気配を感じる。それほど遠くないところで、集団の足音がしている。人数からしても、標的であることは間違いない。

(食つちまえばいいんだ。あいつらの器ごとな。そしたら、成功する可能性は高くなるだろ)

『おい、お前、そういうのだけは忌避してただろ』

(ああ、気は進まねえな。誰が、絶対にまずいって決まりきってるものを食べたいと思う? だが必要なら、やるしかない)

『い、いや。マジで言ってるのか。そういうことじゃ…』

人食いのような、他人がすれば唾棄すべきものだと思える行動も、自分がする分には当たり前のように受け入れる。貴樹は、これはを共食いだとは少しも考えていなかった。出会った当初から、彼らの事など少しも対等に考えたことはなかったからだ。同じ人間だと、捉えてはいなかった。

(まずはガキから狙うか。それで集団の動揺が誘える。いくらか作業も楽になるだろ)

両足に力を入れたところで、背後に誰かの気配が現れたのを理解した。

「良くないと思うな」

あつけらかんとした声。

フリーデの姿をした薫が、にこにここと笑っていた。貴樹の肩にそつと、手をかける。

「ばれてないけども、思ったの。貴くんがどういう思考をするか、お姉ちゃんはきちんとわかってるんだから。駄目だよ。そんなことはさせられない」

貴樹は、首を回して筋肉を解した。

「させられない? どの立場でもの言ってるんだ? 止められるとで

も、思ってたのか？」

「そうだね。私は、貴くんに勝てない。でも、前よりは善戦すると思うよ。今の貴くんには」

薫はウイン達を一瞥する。

「そして、大声を出してあの人達に知らせる猶予はあるし、今きつと私がないことに貴くんの仲間達も気がついてる。探し始めるだろうね。皆に対して、どう説明するつもりなのかな」

(ち…)

この計画は、誰かに感づかれた時点で機能しなくなる。薫にはともかく、アンリ達にばれた時のことを考えると、これ以上の続行は厳しかった。

「わからないな」

止めてくるとしたら、ミレーヌだと思っていた。明らかに彼らよりも貴樹を重んじていたはずの薫が、その役目をこなしているのは疑問だ。

「さっきまでむしろあいつらを救おうとすることに反対してたのに、一体どういう心変わりだ？ 情でもわいたのか」

薫は進んでいくウイン達を眺めた。笑みを消して思考に深く沈んだ表情になる。どこか疲れたような様子だった。彼女というよりは、フリーデの方に似合いそうな顔だ。

「償いかな。同じ人としての」

今度は彼らの姿が完全に見えなくなるまで、視線をそらさずにいた。

34. 再遠征

おかえりと言えば、疲れた顔を緩めて、ただいまと返してくれる。学校どうだったとか、宿題やったとか。そんな他愛のない会話をし、沸かしておいたお風呂に入る。温度設定を誤って、少し熱めのお湯に入ることになっても、この時間が好きだった。

お風呂から上がればいつも、母が料理をする物音や香りがするからだ。それで、今日の献立が何かを推測する。特に自分の好きな物が出るとわかった時には、それだけで一日が素晴らしかったと感じられる。

リビングのテレビを点けて、自分は食卓に座る。出された箸を弄びながら、彼女の背中をわくわくしながら見守る。時折母は視線に気がついたかのように振り返って、目を細めながら微笑んだ。

「わかる?」

「ひき肉がみえた。ハンバーグだ!」

「さあて、どうでしょう」

包丁がサクサクと野菜を切っていく。

「チーズハンバーグ?」

「ぶー」

やがて料理ができる。振り返った母は、湯気の漏れ出す小鍋を食卓の上に置き、蓋を取った。確か自分は、椅子に膝立ちになり、身を乗り出したような気がする。

「ロールキャベツ! やった」

「多めに作ったから。明日の朝も食べようね。お母さん、早番ないから」

「うん」

大好物を、あと数年で食べられなくなると知っていたら、この時無理をしても全部食べ切ろうとしていただろうか。無駄な考えだろう。未来の事なんて、誰一人としてわかりようもないのだ。

紡がれていく言葉の意味は、わからない。それでもこれが非常に重要な儀式であることは理解していた。

イリーナが組み立てられた篝火に触れる。火の粉が円状に綺麗に散って、火の勢いが増した。そしてすぐに安定し、彼女はやり切ったように立ち上がる。

これで、祭祀場との転移線が繋がった。イリーナの立ち合いがあれば、いつでも行き来することができる。

「ようやくちゃんとしたベッドで寝れるな」

宇宙のつぶやきには誰も反応しなかった。楽観的な物言いができる雰囲気ではなかったからだ。ほとんどの人にとって重要なのは、この後に控えていた。

重苦しい視線を浴びながら、グンダが大きな獣の胴体を運ぶ。痛ましいことに、それには首から上がなかった。目を逸らしたくなかったが、最後まで見続けることが自分達の義務だった。特に、目の前にいながら何もできなかった自分の。

「アキ」

そんな様子が、外から見ても丸わかりだったのだろう。ちとせが小さく声をかけてきた。腕にさつと触れてきて、下田の考えを否定するように目を合わせてきた。彼女は、涙がこぼれそうになっている。

痛かったんだろうな、とわずかな声でつぶやいた。目尻を拭い、鼻をすする。悲しみにくれている彼女を見て、シフィオールの最期を知らないのは幸運だと思った。憎悪のこもった殺され方をした顔がどうなるか。下田は、何度か夢に見た。

狼の遺骸が、篝火に放られる。火の勢いが少しだけ弱まった後、毛に燃え移った。肉の焼ける臭いが気分をさらに落ち込ませてくる。全員が黙って、狼血の主のために祈る静寂を作った。

クリムエルヒルト。下田は、もうはつきりとその名を認識した。彼女がどんな思いで動いているにせよ、許されないことをした。報いを受けるべきだという考えに、彼も意義はなかった。

しかし、そのことに対する心情は複雑だった。なぜよりもよつて、先生が一緒にいたのだろう。しかも、シフィオールスを殺す意思

を初めから示していた。彼が一体何を考えているのかわからない。両腕を失ったことで、何かを彼を変えたのか。少なくとも、もはや引けないところまで来てしまっていた。既に二度薪を奪われている。決定的に、先生と自分達は対立したのだ。すべてが灰になるまで、祈りは続いた。

祭祀場に戻った後は、しばらく休養の期間をとると知らされた。正直自分達の身体に限界が来ているわけではなかったが、精神を休めることもまた重要だ。

自分の部屋に戻ると、ローブを着た女性がベッドに腰かけていた。「疲れているか？」

下田は鈍りそうになる頭に、活を入れる。気まずそうに間を作った後、カルラの傍にある丸椅子に腰かけた。

「大丈夫です。えっと、どうかしたんですか？」

「いいや。私はただの使いだ。まだ休まないのなら、篝火の広場に行ってくれ。ヨルシカ様が呼んでいる」

う、と思わず息が詰まった。できれば自分から話しかけに行こうと思っていたのだが、なかなか踏ん張れずにいた。きつと失望されるであろう報告をしなければいけないのは、さすがに今の状態では辛かった。

カルラは枕を一瞥し、下田に顔を近づけてきた。

「無理はしなくていい。都合が悪ければ日を改めるとあの方も言っている」

「い、いえ。行きます。僕も用があるので」
「そうか」

カルラから顔を逸らして、息を吸い込んでから、立ち上がった。彼女の視線を感じながら入り口まで歩く。

「私は、助からないはずだった」

下田は立ち止まる。

「あの傷と出血では、相当な奇跡の技術がなければ助からない。アキヒ口、お前にそんな腕前がないことはわかっている。一体、私に何を

した？」

詰問するような口調だったが、声音は優しいままだった。立ち上がる気配を背後に感じて、そのままだった。カルラの手が、下田の身体を自身の方へと向けさせてくる。

「跡も残っていないんだ。普通、いくら奇跡でも度が過ぎた重傷を処置すれば、治療痕が残る。これは、きつと治療じゃない。再生だ」

あの白い女性に助けられたということは、下田もわかっていた。でも、あの直後彼は意識を失ったので、詳細はまるでわかっていない。カルラの疑問に思う気持ちには応じたい。それでも、答えられないのが現状だった。

視線に耐えきれず俯くと、彼女は肩を震わせながら言ってきた。

「お前は、竜の力を、行使するのか」

意味が分からず顔を上げると、手が背中に回ってきた。抱きしめられたのだと理解した瞬間、潤んだカルラの瞳が目の前で瞬いた。

「すまない。責めているんじゃないんだ。ただ：お礼を言いたかった。不甲斐ないばかりの私を、見捨てて逃げればよかったのに」

下田でも、こういう時何を言うべきかわかっていた。カルラと視線をしっかりと合わせて、首を振る。

「そんなことは、できません。カルラさんは、僕の師匠ですから。死なせたくなかったんです」

「こんな私を、師と認めてくれるのか？」

「十分すぎるほどのものをいただきました」

そうか、とだけ言って、彼女はしばらく下田の鼻先を見つめていた。再びきまざるくなるくらい時間が過ぎた時、一度ぼんと彼の肩を叩いたから、体を離れた。なぜか、あまり表情は晴れていない。

「よく聞いてくれ。このことは、誰にも話すな」

「え？」

下田は思わず訊き返した。途端、カルラの顔が青くなる。

「まさか、誰かに話したのか？」

「いえ、僕自身もよくわかっていないので、誰にも話してはいません」
その動揺ぶりに困惑しながらも答えた。彼女はそれを聞くと安堵

したように溜息を漏らす。

「何か、いけないことなんですか」

尋ねると、さりげなく周囲を気にした。誰かに聞かれることを恐れているようだ。そして、言いづらそうに答えてくる。

「太古、この世界を竜が支配していたことは、習っただろう。我々の先祖は酷く虐げられていた。竜が絶滅した今になっても、恨みが残っている。だから竜の血を引く者や、竜の力を扱える者は、それを秘匿するんだ。余計な厄介事を招き寄せないように」

これを聞いて、真つ先に思ったのがヨルシカの事だった。よくないと思いつつ、彼女の裸体を思い出す。鱗や、臀部から生える尻尾。そして、エルドリツチの発言。竜の血を引く者とは、まさに彼女の事だ。「いいな、どんなに相手が信用できると思っても、言わないほうがいい。気をつけてくれ」

下田は、何となく違和感を感じた。誰にも、というのは大げさなような気もする。事実、ヨルシカはそんなハンデを負っても、祭祀場をまとめ上げているのだ。こここの者なら、そういった偏見は持たなそうなのに。

カルラは、何か別の事を心配しているような気がした。

篝火の広場までの道のりは、じりじりとした緊張が絶えず彼を悩ませていた。やっと忘れかけてきたヨルシカのあられのない姿が浮かんだせいで、その本人に会うのが余計に気詰まりになった。

深呼吸して、洞穴から出る。覚悟していたものの、ヨルシカの姿はなかった。代わりに、ジークバルトとグンダが、一人の老人に厳しい表情を向けていた。

ジークバルトはこちらに気がつくくと、すぐに顔を和らげた。

「おお、シモダか。その大扉から、ヨルシカ様の部屋に向かってくれ。仕掛けは止めておいたから、安心して通るといい」

下田は頷き、そつと手足を縛られている老人に目を向けた。ぼろぼろの赤い頭巾を被り、来ている鎧も万全とは言えない。それでも歳に似合わぬ体格と、やけに落ち着いた雰囲気か凄みを持たせていた。

ゲールというの名の老人は、地下墓のさらに下で、突然ヨルシカ達の前に現れたらしい。そして、先生と他数名を逃がした。その後囲まれた時も、抵抗することはなかったそうだ。

彼はずつと、下田を眺めていた。尋問の時も決して開くことのない口が、意味ありげに薄く吊り上がっている。気味が悪いとは思わなかった。その瞳は静かで、全く害意が感じられないからだ。

大扉を両手で押し、やつと空いた隙間へ体を押し込むようにして、中へと入る。会議室へと続く道を歩く。ヨルシカの部屋は、そのさらに奥にある。今まで行ったことはないが、構造の説明を受けたことがあるので、場所はわかっていた。

簡素な部屋への扉の前に立った時、先ほどよりも深く呼吸をした。どくどくと心臓が動いている。一度目をつぶって、気分を落ち着かせた後、思い切って中に入った。

足が、床に縫い付けられたかのように固まる。

「こちらから呼びつける形になってすみません。どうぞ、この椅子に座ってください」

ヨルシカは櫛を置き、穏やかに微笑んだ。普段まとめ上げられている髪が、まっすぐ肩まで下りている。服装もいつもの白いドレスではなく、淡い赤色の寝間着だ。裾から出た細い足が、ベッドの端で小さく折り畳まれていた。

現実味がなさ過ぎて、目に変な圧力がかかっているみたいだった。とにかく言われた通りに、傍の椅子に腰かける。もはやここまで来ると正視するのが恥ずかしいという次元ではない。むしろ勝手に視線が吸い寄せられた。

「気分は、どうですか？ 貴方達の方にも、危険が及んだと聞きました。大事なのですか？」

「はい、大丈夫です。大事ありません」

自分の声が一拍遅れて聞こえる。

ヨルシカはきよんとした。

「シモダさん？」

「なん、何でしょうか」

「私、どこか変な所がありますか？　こんな姿でお迎えするのは失礼だと思えますが」

彼は大げさに手を振った。

「いや、そういうことではなく。その、赤、赤が好きなんですか？」

自分は何を言ってるんだろう。いくら何でも動揺が過ぎる。

ずれた質問でも、彼女は怪訝そうにすることもなく自らの寝間着を見下ろした。それから少し気恥ずかし気に笑って、頷いた。

「ええ、そうですね。赤は、炎を連想させます。休む時は、なるべく安心できるような環境を心がけていますから」

「炎が、安心？」

「苦難の時であっても、私達を照らしてくれる力強い存在です」

わずかに表情が陰ったのを、下田は確かに認識した。この人には一度身を挺して守ってもらっている。何か助けになることがあるのなら、進んでやりたいと思った。

彼女は居住まいを正す。その動作で、これから本題に入ることを読んだ。そしてその様子から、あまり良い方のものではないということも。

「もう少し寄ってください」

言われて、下田は椅子をずらした。顔を戻すと、思わずぎよつとする。ヨルシカの方も、彼に近づいてきていた。膝と膝が触れ合いそうな距離になる。瞳のきらめきが、頭をくらくらさせた。

さらに彼女は、腰を曲げて顔をぐいっと一気に寄せてきた。その長い睫毛がはつきりと見えて、呼吸が止まる。薄い唇が耳元にまで到達して、静かな吐息をかけてくる。

「こちら側に、内通者がいます」

緊張が、別の種類のものに変わった。一瞬何を言われたのかわからず、下田は至近距離で彼女の顔を見返した。その目は真摯だった。到底、信じられないことを口にしたのにも関わらず。

「え、あ、あの、それは、一体」

みつともなく動揺する下田とは対照的に、ヨルシカは冷静に説明をする。さらに声を潜めて。

「エルドリツチに私達の情報を流した者がいる、ということですよ。その誰かが意図を持って行っているのか、あるいは何かしらの脅しを受けているにしろ、これは非常に由々しき事態です」

彼女は言葉を選んでいいるが、要は裏切り者だ。祭祀場の面々を思い浮かべる。どう考えても、あんな人食いに与しようとする者がいるなど考えられなかった。

「待ってください。そんな」

「根拠はありません。中指のカーク。棘を生やした鎧の男を覚えていいますね。そして深みの主教の一人、ロイス。彼らは、灰のほとんどを虐殺した。今でもその現場に間に合わなかったことを悔やんでいます。ですが、よくよく考えてみると、おかしいのです。やけに手際が良すぎた。いくつかの部屋に分かれて休んでいた灰達をあんな短い時間で……。事前にどこに誰が、どれだけいるのか。それをわかっていなければ成し得ません」

その男達は、下田の記憶にも強くこびりついていて。特にカークは、国広を殺した相手。言われてみれば、確かに変だった。生徒達も、抵抗をしたはずだ。実力がなくても、それぞれの固有能力は侮れない。

ぞつとした。つまり祭祀場の構造だけではなく、皆の能力にも対策を立てられていたということだ。先生によつて倒されたカークの姿を見ても、不測の事態にも対応できる圧倒的な戦力という印象はない。ロイスもそうだ。

一つの根拠だけで、事実が確定するわけではない。しかし、彼の中でも無視できないほど疑念が大きくなっていった。

理解をした様子の下田を見て、ヨルシカは息を吐いた。辛そうに目を伏せ、眉間を揉む。隠しきれない心労が現れていた。

下田には、どうしてもわからなかった。

「こんな大事なことを、どうして僕に話したんですか？ すみません、そんなことを言われても、正直どうしたらいいのか」

彼女は弱弱しく笑みを浮かべた。

「気を、悪くしないでくださいね。貴方が一番、そういったことから関

わりのない位置にいると思ったのです。一度自分の感情を考えず、全員を疑ってみました。それでも、貴方だけは裏切る想像が浮かばなかった。巻き込んでしまつて、ごめんなさい。もはや私一人では、抱えきれませんでした」

下田の手の甲に触れてくる。感謝するように頭を下げてきた。

本当なら、喜ぶ所だろう。信用はされているということなのだから。しかし問題が深刻なせいで、これからどうするべきか、不安な気持ちで勝っていた。

「それで、僕は何をすれば？」

「無駄に気負う必要はありません。できればいつも通り過ごしてくれるのが一番です。ただ、何か不審に思うことがあったら、迷わず報告してください。些細なことでも結構です。もちろん、何もなければそのまま大丈夫です。私の他に、事情を知ってくれている者がいる。そう思うだけで、かなり楽になります」

そして、何かを思いついたように両手を鳴らした。

「何か、伝達の手段を設けるべきですね。音送りの処置がきちんと施されているものにならないと。そうですね、私が貴方に渡した白い鈴はありますか」

不意打ちに、下田は固まった。ヨルシカが不思議そうにするまでたつぷり十秒は黙つた後、勢いよく体を曲げ、頭を膝につけた。

「本当に、すみません。その、あの鈴は奪われてしまつて。ヨルシカさんがくれたのものなのに。僕、そういうところがほんとに駄目で……」
「シモダさん、落ち着いてください」

見ると、彼女は少しも怒つてはいないようだった。こちらを安心させるように頷くと、彼から離れて、膝立ちになる。枕元の引き出しを開け、装飾の施された鈴を取り出した。

「では、こちらを使つてください。強く振つても、音は出ません。横に三回、縦に四回振つてください。その瞬間、私の持っている触媒と連絡ができるようになっていきます。報告だけではなくて、何か緊急の助けがいる時にもぜひ使ってくださいね」

託されて、思わず見返した。

「いいんですか？」

「むしろ、貴方が無事で安心しました。誰かの命に比べたら、触媒の一つや二つ、天秤にもかける必要はありません。ですが、それも失くしてしまつたらもう、代わりはあげられませんよ。大切に扱ってください」

少し悪戯っぽく目を細めた。

下田は、はつきりと頷いてみせる。

「はい、わかりました」

ヨルシカは、下田の手に収まつた鈴を一瞥してから、立ち上がった。ベッドの端に寄つた皺を直すと、彼へと振り返ってくる。

「話は終わりになります。今日はゆっくり体を休めてください。再び薪を求める旅を、しななければいけませんから」

下田は椅子から離れ、鈴を懐にそつとしまふ。彼女に会釈してから、出口へと歩き始めた。今は衝撃と不安で、現実味があまりしない。でも、あとから嫌でも認識することになるだろう。何とか彼女と協力して、危機的状況を脱しなければならぬ。

「待つてください。一つ、訊き忘れていました」

ヨルシカは離れた所から、申し訳なきそうに言ってきた。

「奪われたと言っていました、一体誰に？」

「えっと、赤毛の、クリムエルヒルトです。あの人は鈴をかなり気にしていました」

「そうですか。ありがとうございます」

彼は、わずかにヨルシカへ違和感を持った。お礼を言った時の笑みが、いつもと違うような気がする。どこか、鳥肌の立つような艶が含まれていた。それでいよいよ顔が真っ赤になりそうで、急いで退散した。彼女は優しいし安心できる面もあるが、一緒にいると心臓が悪い。

正直、この魔術はあまり好きではなかった。集中していると、次第に本当に自分の存在が消えていくような感覚に陥るからだ。

「もういい。解いてくれ」

下田は、自らを覆う膜を剥した。実際にはそんなものはないのだが、感覚的にはそう表現するのが一番近い。現れた彼を見て、ちとせが拍手をした。

「全然わかんなかった。マジで透明になるんだね」

カルラも満足気だ。

「問題なく術が発動している。筋がいい。これはクセがあるんだがな。お前の才能に合っているらしい」

見えない体。

名称通り、自らの身体を不可視化させる魔術だ。ただ、気配や音までは消せない。それらには音送りというまた別の魔術で対応できるのだが、まだ併用できる段階には至っていない。それでも、下田はほぼ一発で、見えない体を発動させることに成功していた。

「本当に凄いね。これ、すごく難しいのに」

うつすらと霞がかかった女子生徒が、下田に目を向けてくる。長い黒髪で辛うじて新宮だと判別ができた。見えない体を中途半端に成功させてしまうと、彼女のような状態になる。

下田は、曖昧に笑って新宮が術を解くのを眺めていた。褒められること自体は嬉しい。今までずっと感じていた無力感が、薄まっていた。ただ、なぜ自分がこんな簡単に術を成功させたのか、正直不可解だった。まるで、自分の力ではないような気がする。

次は、基礎的な修練に移った。ソウルの光球を、複数同時に浮かせる。彼は、三つまでなら問題なく維持できるようになっていた。今は四つ目を作り出すことが課題だ。

「指の数、という魔術的法則がある。体の機能を超えた空間把握は、困難を極めるということだ。五つと、十。光球の操れる数には、その二つの大きな壁がある」

カルラの視線の先で、新宮が九つのソウルの光球を動かしていた。下田が見るたびに成長をしていた彼女だったが、十個目を作り出すところでかなり苦戦をしているようだ。彼にはいまだ理解しえない、難しきがあるのだろう。

そうして出発前の修練は終わり、下田は準備をしに部屋へと戻った。いくつかの必需品をインベントリにしまい、外へと出る。

彼は思わず足を止めた。壁に寄りかかるようにして、宇部が立っていたからだ。こちらを見てくる目に、嫌なものを感じた。

「お前、あの人と何を話した?」

「えっ…?」

宇部の目が、細められる。

「ヨルシカのことだ。ん? 最近調子に乗ってるだろ。足手まといの癖に、目をかけられているとでも思ってるのか。部屋に、呼ばれたんだろ? 何を話した。言え」

いつもの、からかってくるような笑みは鳴りを潜めていた。憎しみさえこもる表情で、ずんずんと下田へ歩み寄ってくる。

何を話したのかと訊かれても、答えるわけにはいかなかった。内通者の件は、ヨルシカにも固く口留めされているのだ。いくら同じ生徒でも、伝えられない。

黙っていると、宇部は舌打ちしてから下田の胸元をつかんだ。いとも簡単に体を持ち上げられる。苦しくて息を吸い込もうとすると、壁に押し付けられた。

「女どもに媚び売って、さぞ楽しいだろうな。だがな、真実を言ってやる。ヨルシカは、お前なんかどうだっていいんだ。優しくしてるのも哀れみさ。どうしようもなく愚図のお前を哀れんでるんだ。いいから、教えろよ。何を話したんだ?」

「宇部」

拳が腹に食い込み、息ができなくなってきたところで、突然声がかかった、宇部の力が緩んで、下田は床に尻もちをついた。何度か浅く呼吸をする。

立っていたのは、槍を携えた高坂だった。

「何してるんだ。ヨルシカが呼んでるぞ。話があるってよ」

「ああ、わりい。ちよっと話をしたところなんだ。すぐ行く」

宇部は最後にきつく睨みつけてきてから、高坂の横を通り、篝火の広場へと向かっていった。あとに残された下田は、深呼吸をしながら

立ち上がる。それから、気まずそうに高坂へ顔を向けた。

「災難だな。あんな屑に目をつけられるなんて」

「うん。ありがとう」

高坂は興味なさげに踵を返した。

「宇部とはもう関わらないほうがいい。気を付けろよ」

去っていく背中を見て、下田は考える。

高坂徹しおる。学校でもほとんど話したことはない。だが、彼の変化には気がついた。もつと彼は明るい雰囲気だったはずだ。口数も多く、友達と大声で話している場面をよく覚えていて。それが今や、ほとんど感情の起伏を感じられない。どちらにせよ、助けてくれたのは確かだった。

篝火から、フアランの城塞へ移動し、そこでヨルシカからこの先の道中について説明を受けた。まず、カーサスの地下墓を抜けて、イルシールという国に入る。れっきとした敵地であり、その国の王、サリヴァーンとは深い対立関係にあるそうだ。

ヨルシカは説明をしながら、懐から小さな人形を取り出した。銀色の騎士が彫られていて、一見何もおかしな所はない。

「イルシールの国全体には、結界が張られています。侵入者を妨げるためのものです。この人形を持つ者しか入ることは叶いません。しかし全員分はないのです。そこで、私達を少人数の部隊と他の集団の二つに分けることにします。部隊の方は人形を持ち、正面から入国。その時点で位置と人数は知られますから、その後迅速に王城まで到達し、サリヴァーンを討ちます。残りの者達は別の道で結界を潜り抜け、地下牢へと入ります。そこから巨人ヨームの住む都へと向かってもらうことになるでしょう」

人形の数は、四つだった。ヨルシカはユリア、そして宇部と丸戸を指名し、サリヴァーン討伐の部隊を結成した。満足気な宇部を尻目に、下田は少しだけ不思議に思っていた。

狼血の騎士たちが全ていなくなった今、祭祀場の戦力は多いとは言えない、それをさらに分割して、片方をかなり危険であろう任務にかせるというのは、リスクが大きい気がした。止めようとする者もい

ない。皆、それほどヨルシカの力を信用しているということだろうか。

ヨルシカは、下田に向かって一度だけ何気なく目配せをした。わかつているつもりだ。調査の都合上、自分と彼女は同じ所に固まらないうほうがいい。

つまり。下田は気づいた。ヨルシカは同行させると決めた、ユリアを疑っているということなのか。確かに最近ずっと姿を現してはいなかった。彼からしても、静かでもことなく話しかけづらい女性としかわかっていない。

怜悯なユリアの顔がこちらに向けられそうになって、慌てて平静を装った。普段通りでいいと言われている。あからさまな態度を表に出さないように努めなければ。

差し当たっては地下墓の攻略が先だったが、これは拍子抜けするほどすぐに終わった。前に下田達を襲った仕掛けや敵は影もなく、ただ決められた道を通って進んでいくだけで、イルシールへと出る登り階段に辿り着いた。

上がっている途中から、すでに外気を肌で感じられるようになる。ローブを着込んでも寒さが体の芯まで伝わってくる。

実際に外に出てみると、寒さとは打って変わって驚きの方が勝った。深い谷、雪の積もる地面、そして遠目に見える白い城。地下墓を歩いた時間は、それほど多くはなかった。なのに、ここまで環境が変わるとは。

「見えますか？」

日本では絶対に目にする事のない風景に見とれていると、いきなり傍でヨルシカの声が出た。びっくりして彼女の方を見る。ただ下田に話しかけているというより、全員に向かって話しているようだった。

指差す先にはそびえたつ城がある。よく見てみると、うっすらと霧のようなものがかかっていた。

「あれが結界です。私とユリア、ウベさんにマルドさんはあそこへ直接向かいます。残りの方々はここで待っていてください。この場所

を待ち合わせにしていますから。では、お互いに幸福を願っています」

それだけ言うと、四人は王城へと続く大橋に向かって下りて行った。本当に正面から向かうつもりらしい。

一方で自分たちはどうしたらいいのか、下田には理解しきれていない部分があった。事前に教えられた情報だと、イルシールの地下牢も境界内にあるのだ。鍵となる人形を持たずに、どうやって辿り着けばいいのだろうか。

そんな疑問を打ち消すように、カルラがやや呆れた調子でつぶやいた。

「もう来ているな」

発言の真意を問おうとしたところで、突然目の前に誰かが出現した。

「わっ！」

見えない体だ、と頭で理解しても、叫び声が無意識のうちに出ていた。下田は飛び上がり、二、三步後ろへとたたらを踏んだ。さらに雪の地面で足が滑り、そのまま背中から転びかける。バランスを崩した彼の身体を、ジークバルトがしっかりと捕まえた。

「大丈夫か？」

「は、はい。すみません…」

体勢を整えると、自分を驚かしてきた女性は会心の笑みを浮かべていた。

「フフ、やった。当たりだ。君が一番、良い反応を返してくれると思うたんだよ」

修道服のフードを脱いで、彼女は素顔をさらした。ややくすんだ白髪に、目元の特徴的な黒子。自分たちと同じ歳にも見えるし、一回り年上にも思えた。今の表情は、まるで悪戯好きな子供だ。

背中の袋を抱え直して、相手は下田に歩み寄ってきた。

「ごめんね。お手本みたいな驚き方だったから面白かったけど。怪我はない？」

「いえ、大丈夫です」

「もつと改善が必要かな？」

「どう、なんでしよう」

どうして仕掛けた本人に尋ねるのだろうか。相手の態度に面食らっている、カルラが下田の前に出てきた。

「久しぶりだな。リリアーネ」

そこで初めて下田も気がついた。カルラやジークバルト達は、明らかに警戒をしている。ヨルシカの話と照らし合わせれば、このリリアーネという女性が案内人ということだろうが、どうやら純粹な味方というわけではなさそうだ。

リリアーネは、感情の読み取れない笑みで頷いた。

「そうだね。姉さんは元気にしてる？」

「ここで、待ち伏せていたんだろう。見ての通りだ。それに、こまめに会っているんだから、必要のない質問だと思うが」

「ふーん、そういう考え方もあるのか」

未だに事情が呑み込めていない下田達に向かって、ジークバルトが言う。

「彼女は、ユリアの妹だ」

予想外の情報に、下田はまじまじとリリアーネを見た。言われてみれば、面影が重ならなくもない気がする。だが持っている雰囲気の違い過ぎて、とても血のつながっている間柄には見えなかった。

「正解だよ。私と姉さんは、誓約上での義姉妹だから。私の方が、ちゃんと可愛げがあるでしょ？」

自分の内心を読み取られて、答えに詰まった。本当に、義理だとしてもユリアとつながりがあるとは思えない。二人が会話をする場面を想像するのは困難だった。

カルラが腕を組んだまま、確かめるように言う。

「それで？ 地下牢まで案内してくれるんだな」

「もちろん。頼まれたからね」

「不可解なのは、」

不信感の残る口調で、カルラは続ける。

「一度はこちらと袂を分かったお前が、ヨルシカ様の許しを得られた

ことだ。どういう、取引をしたんだ？ 何か手土産でも持ってきたのか？」

まるで、望んでいた質問であるかのように、リリアーネは深く微笑んだ。その笑みが自分達に向けられていると、下田は感じた。妙に得意げになって、彼女は袋から何かを取り出す。細長い形状のそれがな

りであるかわかった時、背筋が凍りついた。人間の両腕だ。筋肉のしっかりついた、男性のものであることがわかる。

「祭祀場に反逆した、灰の欠片だよ。私だけで保存しておくには不安が残るし、貴方達に譲ることにしたんだ」

嫌な感覚だけが先に来て、後から事実を理解するというのは、最近では珍しくなかった。リリアーネが持っているのは、どう考えても、先生の腕だ。

「勘違いしないでね。私がやったわけじゃない。貴方達と戦った後、あの男は法王に捕まったんだ。そこで、色々されたんじゃないかな。私が手に入れたのは、些細な偶然ってところ」

カルラたちが警戒している理由が、少しだけわかった気がする。この人は、あまり信用してはいけないタイプだ。言葉の一つ一つがどこかひっかかる。

先生は、こちら側を恨んでいるんだろうか。下田は気になった。きつと酷い拷問をされたに違いない。だから、シフィオールスも殺した。生徒達を殺したクリムエルヒルトと協力して。

もやもやとした気分が晴れないまま、リリアーネの後についていくことになった。崖の端にまで着くと、彼女は立ち止まる。その場で何やら呪文めいた言葉を発すると、その足元に変化が生じた。

黒い円が、二人分ほどの大きさに広がる。淵がわずかに波打っていて、中は暗闇で包まれている。彼女はそれを指差した。

「これに入って。地下牢の奥につながってる。大丈夫、私も何度も利用してるから。安全だよ」

その、見るからに禍々しいものに一番ためらいを見せたのは、イリーナだった。だが、

他のみんなが渋々入っていくのを見て、恐る恐る続いていく。順番は、なぜかリリアーネが指定していた。

「うえ、ほんとやだ…」

ちとせが目と鼻を抑えながら、飛び込んだ。そして、残るのは下田とリリアーネの二人だけになる。彼女はじつと見てくるばかりで、動こうとはしない。自分の番だと思った下田は、思い切って一歩足を踏み出した。

素早く左腕をつかまれる。ぎよつとして振り返ると、思いのほか近くにリリアーネの顔があった。目が、大きめに開かれている。

「やっぱり君、おかしいな。ちよつと左腕を見せられない？」

理由を聞くとか、ましてや逆らう気にはなれなかった。彼女の瞳は無機質なのに、溢れんばかりの興味が灯っている。はつきり言って不気味だった。

ローブの袖をめくり、腕を彼女にさらす。何を見たいのかは薄々感づいていた。

「へええ、これは」

肌の、黒ずんだ部分を舐め回すように観察してくる。

「君さ、よく正気を保ってられるね。エルドリツチに目を付けられたのか。わからないなあ。どうしてこんな普通の…」

声音が、変わっていた。低く平坦なものに。独り言のようだったが、視線を合わせたまま言われると圧迫感があった。

何も言えずに固まっていると、リリアーネは我に返ったようで、下田の腕を離した。

「まいつか。とりあえず入っちゃっていいよ。私は、姉さんの方に行くからさ。また、会えるといいね。シモダ」

結局何の説明もせず、彼女は去っていった。一人取り残された下田は、急に心細くなってきた。ここに残っても何もいいことはなさそうなので、転移の穴へと飛び込んだ。名字を教えたはずがないのに、なぜ知っているのだろう。何となくもう関わりたくないような、彼にしては珍しい気分になっていた。

35. 罪の都

実はリリアーネが罾を仕掛けていて、下田だけ別の場所に飛ばされるなんてことはなかった。彼を最後に全員集まったのが確認されると、固まって移動を開始した。

地下牢は不気味な場所だった。それでも、不安は最小限に抑えられている。それは、心強い味方が周りにいるからだろう。事実、ジークバルド達はほとんど緊張している様子を見せず、それでいて油断することなく周囲を警戒していた。

一方で、それでもぬぐい切れない不安があるのは確かだった。もしかしたら。下田は前を行く者達の背中を見る。この中に、いるかもしれない。

「意外なだけどさ」

ぼつりと、ちとせが言う。その視線の先には高坂が慥然と歩いていた。話しかけられているのに気がつく、彼は前を向いたまま口だけ動かした。

「何だよ」

「あっちの方についていなくてよかったの？　いつも間抜けトリオでつるんでたじゃん」

「あいつらと一緒にすんなよ。いいじゃねえか。気分だ」

「ヨルシカさんにデレデレしなくていいの?」

「だから、一緒にすんな」

下田は少しだけ身を固くした。まるで自分に言われている気がしたからだ。自意識過剰かもしれないが。

確かに、宇部と丸戸は何か特別な感情をヨルシカに抱いている節があるものの、高坂だけは一步引いているところがあつた。

「元々、仲良くもなかったしな」

「学校だと祐馬君とかと一緒にいたもんね。あんたの声が一番でかくてさあ、結構女子達の評判悪かった」

「うるせえ」

なんだから、二人は機嫌が悪いようだった。お互いがそれぞれ気に入

らないところがあるらしく、会話を聞いているこちらとしても気にはなつた。気まずい空気を避けようと、とりあえず下田は間に入ろうとする。

「二人は、高校の前から知り合いだったりするの？」

ちとせは眉をひそめてみせる。

「小学校からずっと同じクラス。こいつさ、執念深いんだよね。ずーっと引っ付いてくるんだもん」

「うるせえって」

高坂のやや強くなつた口調を気にすることなく、彼女は続ける。

「片思いも十年超えると、笑えなくなるよね」

「え」

さりと当たり前の事のように口にされた。下田は口を開け閉めしながら二人を交互に見る。彼の反応を、ちとせは真面目腐った顔で眺めていた。

高坂が、溜息をついた。

「下田、絶対に誤解してるだろ。主語を省略するな」

「えっと、つまり？」

答えはなかった。高坂は黙り込み、めんどくさそうに前を向いた。ちとせが可笑しそうに、下田の肩を叩く。

「あいつ、朱音のことずっと好きなんだよ。中学の時も同じバスケット部に入ろうとしたんだけど、男女分かれてんのに後で気がついてさ。ばっかだよなー、普通わかるでしょ」

「あ、そうだったんだ」

久慈朱音は、部活の事も楽しそうに話していた。ただ、彼女と高坂が関わっているのは、学校の時でも記憶にない。こちらに来てから、話題に出てきたこともない。断言はできないが、確かに思いが一方通行なのは領けた。

「まさか、あたしのことだと思った？ ないない。こいつ表面は取り繕ってるけど、性根はほんとになよっちいからね」

「俺だって、お前みたいな性悪女なんてごめんだっつもの」

下田は素直に感心していた。前までは暗かった高坂の様子が、多少

和らいでいる。幼いころから知り合っているからこそ、絶妙な距離感というべきか。小中と転校を繰り返していた彼にとっては、羨ましい思いもあった。

「てかき、やっぱりそういうことなんだよね」

ちとせが何かを納得した様子で話す。

「最近、高坂がじめっとしてるのって、要は寂しいからでしょ。そりやあ私とアキも通った道だけど、もう腹くくりなよ。悲しんでも、皆が戻ってくるわけじゃないし」

だからこそ、この彼女の言葉を聞いた途端、高坂の雰囲気が一変したのには下田も驚いた。まるでちとせを親の仇かのように睨み付け、彼女の方へと詰め寄った。

「何、馬鹿なことを言ってるんだ。他の奴らを忘れてもいいのかよ。このまま、現実に戻れたとしても、朱音がいないんじゃないだろうもねえ。もう、終わってんだよ。俺にはわからねえ。お前らが何で、平気でいられんのか」

後半の方の言葉は苦痛交じりのたどたどしい調子だった。ずっと溜めこんできたものを、吐き出しているようだ。

ちとせは少しも怯まなかった。逆に高坂を睨み返して、さらに声を張り上げる。

「あ、そういうこと。酷いね。あんたの中では、もう皆死んでるってこと？ だから諦めて、自棄になって全部どうでもよくなってんだ」
「だって、そうだろ！ あんな、あんな姿になって、全員が元に戻るなんて考えがどこから湧くっていうんだ？ 無理に決まってるだろ…」

その気持ちは、下田にもよくわかった。一度見た後は、あの祭祀場の横の塔に行つて、生徒達の現状を再び確認する気にはなれなかった。

「戻るよ」

ちとせはすぐに否定をした。

「無理だ」

「あの黒い膿は、特別な炎で消えるんだって。私と下田は、ヨルシカさんにそれを聞いた。だから、前に進むしかない。もうとつくに十分泣

いたし、自分とそれ以外を哀れんだ。あとやるべきことは一つだけ。行動するの」

高坂は顔を上げ、それから納得しがたいとでも言いたげに歯を食いしばった。

「そんなのに、確証なんかあるのか？ 失敗したらどうすんだよ」

「また、別の方法を見つけなければいいでしょ」

まるで簡単なことのように言った彼女に対して、高坂も言葉を失った。それから、下田の方へと顔を向ける。

「お前もか？」

「うん。僕だって、友達を助けたいから」

ちとせと決めたことだ。どんな困難で意志が揺らぐようと、根本のこれだけは変えるつもりはない。全員がそろって、日本に戻る。下田も強くそれを望んでいた。

「なんだよ、その自信は。どっからでてくんのか、わかんねえ」

高坂は頭を抱えて、下田達から離れていく。集団の後方で、何かを考えるかのように俯いていた。

「ね、言ったでしょ」

ちとせがにやりと笑う。

「あいつ、女々しいから。うじうじうじ悩むの。誰かと同じだね」
「…うん」

下田は、先ほどの話が高坂にだけ向けられたものではないと薄々気がついた。もしかしたら、自分の悩みが様子に出てしまっていて、それを指摘しているのかもしれない。ちとせに話すべきかどうか、少しだけ迷った。

だが、果たしてそれがいい方向へと転がるのか、判断がつかない。彼女を危険に巻き込む可能性もあるからだ。それに、今ここで話すのには都合が悪かった。

前方と後方について、周りを確認しているジークバルド達を、一人一人見る。未だ大きさのつかめない不安を紛らわすために、大きく深呼吸をした。その様子をちとせが見ていたが、何も言ってはこなかった。

何度か交戦が起きたものの、危なげもなく処理された。焼きごての様なものを持ったローブの人らしき何かが無用で襲い掛かってくるのは、すぐに倒されるにしても肝が冷える光景だった。薄暗い中で、朽ちかかっている壁を横に歩いていく。どんなお化け屋敷よりも、怖い雰囲気だと思った。作り物ではない、本物。

階段を使つて下の階層に降りるのをしばらく繰り返した後、地下牢内の空気が少し変わった。淀んでいたものが、わずかな風で流されていく。

「一息つくとするか」

てつきりこのまま進んでいくかと思つたが、先頭のジークバルドは休息を選択した。とはいえ、疲れている者はいない。疑問に思う各々の様子を見て、彼は意味ありげに笑つた。

「実は、いくつか特製の酒を持ってきてな。今ここで開けてしまおう。この先、休める所はないぞ。体の調子を万全にしようではないか」

反対する者はいなかった。意外なのは、カルラが真つ先に腰を下ろしたことだ。彼女はどこか疲れている様子だった。気が張つていて、言うべきか。

下田も、おずおずと従つた。正直、休憩に適しているような場所ではなかったが、カルラが焚火を作ると、多少陰鬱な雰囲気緩和が和らいだ。事前にインベントリに入れてきていた敷物を取り出し、その上に座る。

「シモダも、どうだ？ 温まるぞ」

差しだされた杯には、薄茶色の液体が湯気を立てている。体が冷えているのは自覚していたので、躊躇いを抑えて受け取つた。ちとせ達にも配られている。

両手で杯を持ち、上手そうに酒を飲んでいくジークバルドをさりげなく観察した。

陽気な人だと思う。下田達にも積極的に話しかけてきて、祭祀場の中では特に親しみやすい相手だ。

不安が表に出ないようにしながら、渡された酒をすする。香りは甘かった。舌に届くのは甘味とわずかなアルコール。想像していたよ

りも、はるかに飲みやすい。

口に入れた後で、自分が未成年だったことを思い出した。だが、この世界では日本の法律など関係ないだろう。そこまで考えて、体のどこにも異常が現れないことを確認した。もしかしたら毒が入っているかもしれないなんて、神経質になり過ぎだろうか。

周りで座り、各々の形で休みを取っている者達を観察する。

シーリスとフォドリック。

彼女とその祖父は、実織達と話をしている。内容は専ら先生のことのようだ。彼と関係が深い実織と新宮は日本にいた時の先生の様子を語っている。

カルラとジークバルドは、まさに今下田に話しかけてきていた。カルラの教え方が不足ないか、確かめてきている。ジークバルドがこちらを気遣うと、カルラが不平そうに割り込んでくる。二人は、互いに気兼ねがない様子だった。

イリーナは、焚火の傍で目をつぶっている。眠っているのではなく、何かを唱えているようだった。彼女の横で、同じくグンダが火に当たっていた、

こうして改めて見てみると、誰かがエルドリッチに情報を流しているとはとても思えない。ただ、この中で強いて疑うのならば。下田は、集団から一番離れた所で見張りをしている、大槌を持った男を一瞥した。

イーゴン。太陽の戦士の一人。イリーナとともに祭祀場に戻ってきてから、彼が何かを話すのを、一度も聞いたことがない。厳つい鎧姿も相まって、近づきがたい様相をしていた。何を考えているかわからない彼が、今のところ怪しいというべきか。

「何か、気になることでもあるのか？」

カルラに指摘され、なるべく平静を装った。

「その、あそこにいる人の事を、まだよく知らないなって」

「ああ、イーゴンか」

カルラは微妙な顔をした。

「あまり気にしないほうがいいぞ。あの男は気難しい。話しても、楽

しい男でもないしな」

「だが、誉れ高き太陽の戦士の一員だ」

やや顔を赤くしたジークバルドの声に、カルラは呆れたように息をついた。一方でその顔は緩んでいる、どこか楽しげだ。

「そうか？ 奴が信心深い所など、想像できない」

「信仰の仕方にも種類がある。神官やらは精神的高潔さを敬う傾向にあるが、我々戦士は武をもって崇める。イーゴンも、かの四騎士を蔑ろには絶対にしまい。そういうものだ」

ちとせが、小さく手を挙げた。

「四騎士って何ですか？」

求めていた質問だったのだろう。ジークバルドは満面の笑みを浮かべた。杯を音を立てながら地面に置くと、しっかりと座り直した。大きく咳払いをして、高揚した口調で説明を始める。

「かの大王、グウィン様直属の騎士だ。まだ竜との戦争が続いていたころから、類まれな武功を上げた者達。アルトリウス、キアラン、オーンスタイン、ゴー。彼らの戦いはまさに神話の領域であったとされている。戦士ならば、誰もが憧れる」

「へえ…」

素直に感心しているちとせに合わせて、下田も驚いた。内心では、微妙な気持ちだ。この世界における偉人の話は興味深い。だが、竜関係の話とあつては、色々と考えるものがあつた。竜を殺した者達が讃えられている。遺恨は根深いということだ。

下田も、疑問に思ったことを口にした。

「それで、今はもう、その人たちはいないんですよね」

「ああ。何千年も前の話だ。最後の大战で散ったとも、長き眠りについて目覚めの時を待っているとも言われている。私としては、少しでもいいからその御姿を拝見したいものだ」

宗教の様なものだろうか。下田は、自分達との感覚の違いを認めた。普通、そんな昔に生きていた人々のことを、深く考えたりはしない。実在するかどうかもわからない、所謂神様みたいな存在だ。

「だから、構わなくていいって言ってるじゃないですか！」

突然そんな叫び声が聞こえて、下田達は全員その方向へと振り返った。

狼狽えるグンダに向かって、新宮が睨みつけている。はつきりと怒りをにじませているその表情は、彼女の性格から考えて非常に珍しいものだった。実織も、困惑した様子でそれを眺めている。

周りの注目に気がつき、新宮はグンダから視線を切った。

「済まぬ。何か不快にさせたのなら」

「やめてください。そういうところですよ」

そう吐き捨てて、焚火から離れていく。彼女の後を実織がついていった。その言い争いの間に挟まれていたイリーナは、グンダに気遣うような視線を向けた。

何があつたのかはわからない。ただ、新宮は初めからグンダとの折り合いが悪いように感じた。当たり前と言えば当たり前だ。下田も、あの巨体を前にすると身がすくむ。何せ、一度殺されているのだから。悪い者ではないのは、もうわかっているのだが。

結局最後はすつきりしない気分で、休息は終わった。今まで歩いてきた時と変わらない隊列で、地下牢を進む。

間もなく、かなり開けた場所に出た。上下に広い空洞のようで、一番下は沼地になっている。決して心地よいとは言えない臭いが、あたりに充満していた。

「ここからが、罪の都だ」

イルシールにほぼ隣接している、巨人ヨームが治める国。治めていたと言ったほうが正しい。この住民はほとんどが死に絶え、正気を失った神官や化け物しかいないという。

中央にある党の部分に向かって、まずは崖を降りていくところから始まった。比較的軽いロープ姿の下田でもかなりの苦勞をするのに、鎧を着たジークバルドやグンダ達はなんて事のないようにこなしていく。

やつとの思いで下まで辿り着けば、今度は石造りの悪魔が襲ってきた。ガーゴイルだ。飛び回り、高所から炎を吐いてくる厄介な敵だったが、これもすぐに処理された。はつきり言って、この十倍の数が

襲ってきたとしても、ジークバルド達が負けるとは思えなかった。

決して難しくはない戦いの中で、生徒達も自分の仕事をしようとした。新宮や実織は敵の動きをうまく妨害していたし、ちとせは同時に出せるロープが四本に増え、ガーゴイルの手足の機能を完全に奪っていた。

中でも、高坂の動きには注目をした。彼は三本の槍を背負っていた。そのうちの、中くらいの長さの槍を手にとると、空から飛んでくる一匹に対して投げる。かなり勢いがついていたが、ガーゴイルはこともなげに避ける。

高坂の力が発揮されるのは、ここからだ。空を貫いていた槍が急旋回すると、飛んでいる相手の石の身体に突き刺さる。そのまま止まらずに、高坂の手へとぴったり収まった。

自分の投げた物を、自由に操作できる。高坂は、そういう固有能力を持っているようだった。槍を主に使っているのは、本人の好みなのだろう。前に適当な石を操っていたのを見たことがある。

いったん戦闘が終わり、移動し始めると、高坂が近寄ってきた。「ちよつといいか」

先ほどまでの悩んでいる様子とは変わり、何かが吹っ切れたような顔をしていた。

「新宮と実織も、聞いてくれ」

少し離れた所で歩いていた彼女達も、近寄ってきた。

先ほどの話の続きだろうかと思っていると、いきなり彼は頭を下げた。

「俺が自分のことばかり考えてたせいで、もつと早くに言うべきことを言えてなかった。エルドリッチが祭祀場に現れた時、助けにも行かなかったことを、謝りたい。言い訳をするつもりはない。俺は、ただ怖かっただけだ。我が身可愛さに好きな女も見捨てた。お前らには、恨まれても仕方がないと思ってる」

長くはない戦闘の間に、高坂は様々なことを見つめ直したようだった。沈んだ負の感情はもう消えていて、ただ真摯に言葉をつないだ。「自暴自棄になって、諦めるのは簡単なことだけど、高原に言われてわ

かった。上手くいくって信じないと、何もかも始まらねえ。邪魔になるかもしれねえけど、皆に協力させてくれ」

もう一度深く、頭を下げる。

立ち止まるわけにもいかないので、進みながら妙な間が空く。ジークバルド達は何も言ってはこなかった、これが生徒達だけで話すべきことだと、わかってくれているのだろう。

「とりあえずさ、」

新宮が手を挙げる。

「高坂君の好きな人って誰？」

ちとせが代わりにさつと答える。

「朱音。こいつ十年以上片思いしてんの。しかもこいつ中学の時——」

あとは先ほど下田にも話したことが繰り返された。真面目に謝っていた高坂は、微妙な表情になる。下田は少しだけ笑った。高坂が思っていたよりも物事を真剣に捉えていたのと、新宮たちの気遣いは見えて悪くない気分だった。

それから何度か急な崖を降りることが続いて、何かと戦うよりも、移動の時間が多くを占めるようになった。加えて毒沼の臭気とこもった霧囲気が、体力の消耗を促進させる。下田には、ここがかつて都だったとは到底信じられない。それくらい、生の気配というものがなかった。

やがて崖の間隔が狭くなり、襲ってくる敵の数もまばらになると、ようやく大きな建物の中に入ることができた。

とはいえ、中も霧囲気は変わらなかった。設備はほとんどぼろぼろで、今も使われている蹴咳はない。壁際には金メツキの食器や置物が山のように積み重ねられていた。捨てられた場所。下田は、そんな印象を強く抱いた。

敵の種類も変わる。白い法衣を纏った、神官達が対話の意思すら見せずに向かってきた。全員が、下田の二倍近くの身長なので、より不気味さが増す。ここで初めて、怪我人が出た。相手の使ってきた呪術の炎が、下田の左手を掠めたのだ。

彼は焦りを何とか抑え込んだ。もつと酷い怪我をしたこともある、その時は何もできずに殺されたが、今回は奇跡を発動させることに成功した。火傷の部分へ光が到達し、痛みを和らげていく。

とりあえず気持ちを落ち着けようと深呼吸をした瞬間、さらなる痛みが襲ってきた。今までの火傷とは種類の違う、手の芯にまで響くような不快な痛みだった。彼はたまたらずその場に崩れ落ちた。

異変に気付いたイリーナが、即座に駆け寄ってくる。彼女は、下田の手で蠢いている膿を認識すると、息を飲んだ。

彼女の行動は素早かった。白い光の塊を作り出すと、下田の手を包み込ませた。放つ回復。さらにその上に、直接奇跡を施していく。

「すみません、急に……」

痛みが和らいだことで声を出せるようになった。自分だけが足を引つ張っているという情けなさで、謝ることしかできない。

「いいえ、貴方のせいではありません。浸食の活性化頻度が、高まっています。これからも、何か異常があったら、すぐに言ってください。私も、できる限り貴方の傍にいますようにします。こちらこそ、申し訳ありません……。何か、もつと……。楽になるような方法を……」

気を遣われているのがわかり、尚更やるせなくなつた。イリーナは、治療役の要だ。元々重い彼女の負担をさらに増やすわけにはいかない。そこまですなくていいと言おうとした時、彼女の身体が倒れかかってきた。

突然の事で、受け止めきれなかつた。全員の見ている前で、イリーナは地面に転がる。

「イリーナ！」

ジークバルドが血相を変えて駆け寄つた。下田もすぐに彼女の状態を確認する。額に汗をかき、目を閉じて、明らかに苦しんでいた。先ほどまでの戦闘で、何か怪我を負つたのだろうか。探してみても傷は何もない。

とにかく奇跡の光を当てようとしたところで、大きな手が割り込んできた。

「無駄なことをするな」

見上げれば、獅子兜の威容。イーゴンは、呻いているイリーナを冷たく見下ろした。

「奇跡なんぞ効きはしない。ただの、精神的な発作だ。この女の未熟さが招いた」

どうしてそんなことを言うのかと、下田は反論しようとした。しかし、周りのジークバルド達が黙っているのを見て、その事実が正しいことを確認する。

見れば、イリーナは片手で目を覆っている。そしてもう一方の手で、まわりついてくる何かを払うように振っていた。

「どけ」

太い腕が、下田を無理やり押しよける。イーゴンはイリーナの修道服をつかむと、その体ごと持ち上げた。イリーナはやんわりと抵抗するが、空中でもがく以上のことはできない。

「あの火守女が、薪になるとわかった時、お前は言った。一人で勤めを果たすと。それが、この体たらくか。亡者どもに与えてやれば、まだ少しは役に立つだろうな」

「そんな、ことは……」

「使命を果たせないなら死ぬ。カリムの恥晒しが」

彼女の首を絞めようとする手を、グンダがつかんだ。

「イーゴン、抑えるがいい。弱る女性を痛めつけることが、貴様の矜持か?」

舌打ちをして、イーゴンは彼女を放した。大槌を抱え直し、一行から離れていく。

「どこへ行く気だ」

「その女が回復するのをここで待つつもりはない」

建物の外へと出ていく。

下田は、不安になってジークバルドに尋ねた。

「あの、追わなくて大丈夫なんですか」

「単独で巨人ヨームに挑むほど、彼は自惚れてはいない。今は、一人にさせるべきだろう」

下田は少しだけ、イーゴンという男がわかったような気がした。彼

は常に、何かに怒っている。それも燃え上がるような激情ではない。長い間積み重なったものが淡々とくべられているような、静かな炎がその奥底にある。

目標は目の前というところで、イリーナの状態が落ち着くのを待つことになった。下田達がインベントリから毛布を取り出し、彼女の下に敷く。汗も出ているので、濡れたタオルも数枚必要だった。

「見ているちとせ達の様子を見てから、下田はカルラに向き直った。イリーナさんは、一体どうしたんですか？」

「奴の言っていた通り、精神的な、ものだ」

それから、カルラは少し迷った後、話を続けた。

「彼女が、火守女になる時何をしたか。聞いているか？」

「いえ…」

「自分で両の目を潰したんだ。それも奇跡を使つて。二度と再生できないように」

イリーナが盲目であることはすぐにわかる。しかし、目自体に何の外傷もないのは不思議に思っていた。つまり術で内部から施したということなのか。

「火守女には、あるものが必要とされる。終わることのない、闇に耐え得る精神だ。闇は深淵を産み、深淵は闇を産む。その恐怖は尋常なものではない。イリーナは、そういったものを受け入れるには少し、優しすぎた」

その時、カルラが彼の左手を一瞥したのに、気がついた。下田は思いつく。自分の腕の膿を処置する度、イリーナが消耗していたのかもしれない。もしかしたら、この膿も、彼女の精神に影響を与えていたのかもしれない。だとしたら。

「僕の、これを治したから、今イリーナさんは苦しんでいるんですか？」

カルラは目を見開く。

「そんなことはない。どうしてそんな考えになる」

言葉とは裏腹に、彼女は目を合わせてこなかった。自分にも責任の一端があると知った下田は、イリーナの方に向かおうと心に決める。

「待て、何をやる気だ」

「無駄なことは、ないと思うんです。少しでも苦痛が和らぐのなら、やってみる価値はあります」

タオルを替えているちとせの横に座り、下田は奇跡を発動させた。どこにすべきか逡巡したのち、光を閉じられている両目に当てる。強くなり過ぎないように気を付けた。彼女を苛む、闇を紛らわす程度でいい。

ほとんど藁にも縋る気持ちだったが、イリーナの呼吸が落ち着いたので見て安心した。傷を治すのが奇跡の本分とはいえ、やはり心にも多少作用はするようだ。これをずっと続ければ。下田はさっと額をぬぐった。彼女の回復も、早まるだろう。

「…モダ、さん。すみま…せん…」

「こういう時こそ、力にならせてください。イリーナさんには、助けられていますから。他に何か、僕にできることはありませんか」

沈黙が長く続いた。奇跡に集中しながら、ゆっくりと待つ。ジークバルド達は離れた所で、見張りをしてくれていた。敵地ともいえる場所で、静かな時間が流れていた。

イリーナの口が、わずかに動く。

「手を、握ってくれませんか…？　それで少しは…楽になると、思います…」

「もちろんです」

下田は膿のない右手で、彼女が伸ばしてきた手を握った。震えているのがわかる。優しくずらして、奇跡の光の範囲に入るようにした。彼女は深く呼吸をする。その苦しみを少しでも和らげるように、全力を尽くしたいと思った。

しばらく続けていると、今度は別の問題が出てきた。

頭の芯が痛んでくる。額を伝う汗をぬぐう余裕すらなくなってきていた。光が時折明滅した。術の発動が不安定になっている証拠だ。

それほど時間が経っていないのに、気力が限界に迫っている。自分自身の能力の低さに驚いた。初めから、術を持続できる力はほとんど成長していない。このままでは間もなく奇跡が保てなくな

るだろう。休憩は、十分とっていたはずなのに。

思わず弱音が漏れそうになったところで、横から手が添えられた。そして下田のものよりも輝きの強い光が広がっていく。

見れば、新宮が傍に座っていた。

「私も手伝うよ」

「ごめん。ありがとう」

彼女は、魔術も奇跡も彼よりはるかに高い技術を持っていた。頼りになるし、こういう時は本当に助かるのだが、下田は少しだけ悔しかった。

それからは、交代でイリーナを見た。休んでいる間も、彼女の様子に注意を払う必要があった。苦しみ方には波があるようで、酷い時には体が勝手に動いて、奇跡の範囲から外れてしまうこともあった。

そして状態が少し回復すると、イリーナは涙を流して何度もこちらに謝ってくる。

「すみません……」

うわごとのように繰り返されるそれを、聞く方もやるせなかつた。そんなことはないかと否定すると、もつと辛そうに表情を歪めて、嗚咽を漏らした。

「私は……貴方達に……。許してください……。ごめんなさい、ごめんなさい……」

その懺悔に下田は妙なものを感じた。細かくは説明できないが、彼女は夢想の世界に居るようだった。どこか別の誰かに謝っているような。

新宮はイリーナの涙をぬぐった。

「大丈夫ですよ。ちゃんとわかっています。安心して眠ってください」

慰めている彼女もまた涙目になっているのを見て、下田は自分の仕事に集中しようと気持ちを切り替えた。弱っているイリーナの姿は、病院にいた母の事を思い出させた。

イリーナが回復したのは、それから二日たった頃だった。途中多く

休める時間はあったものの、これほど長く奇跡を断続的に使うのは初めてだったので、後半の方はあまり覚えていない。ただ同じく疲労した様子の新宮と一緒に、抱きしめられたことは覚えている。

さらにもう一日で全員の体調が整った後、巨人ヨームがいるという玉座へと向かうことになった。巨人とだけ訊くと、何やら無謀な戦いの様な気もする。もしかしたら、自分も頑張らなければならなくなるかもしれないと、杖を抱え直した。

「そんなに気張る必要はないぞ」

カルラが言ってくる。彼女は前を見ていた。正確には一番先を行くジークバルドを。

「私たちが全員戦う必要はない。そして、すぐに終わるだろう」

玉座の間は、案外近かった。中に入ると今までよりも装飾の濃い空間が広がる。その一番奥で、天井に届きそうなほどの体軀の男が佇んでいた。グンダよりもはるかに身長が高い。下田の身体の何倍もありそうな大きさの鉈を持ち、こちらを見てきた。

その威圧感で、腰を抜かしそうになった。初めて、グンダと対峙した時よりも、嫌な感じが全身を駆け巡る。逃げて、何をしても、あつという間に殺されそうな気がしかなかった。

巨人は、突然大きな唸り声をあげる。とても正気を保っているとは言えない声だった。体の奥底まで揺れているようで、下田は一步後ずさる。

一方で、ジークバルドとグンダは前に歩いていった。ヨームが床を踏み鳴らし、迫ってくる。ジークバルドが剣を抜いた。いつも使っているものとは違う。ぼろぼろの布切れが柄に巻かれていて、刃も傷だらけだ。

ヨームが鉈を振り下ろす。二人は違う方向へと飛びのいた。グンダは巨人のすぐそばをかくぐり、玉座の方へと疾走した。

戦うのは、二人だけなのか。彼ら以外誰も動かないのを見て、不安になった。あの二人は確かに強いが、あんな怪物に勝てるのだろうか。

そんな疑問は、すぐに杞憂に終わることになる。ヨームの攻撃をか

わしながら、ジークバルドが構えに入っていた。剣先を相手に向け、自分の顔の右上に掲げている。まるで何かを打ち出すようなしぐさだった。

そして反対側で、グンダも剣を引き抜いた。玉座に突き刺さっていたものだ。見た目は、ジークバルドの持っているものと全く同じだった。

二人は同時に、剣から何かを打ち出す。それは、風の塊のようだった。渦を巻きながら、目に見えるほどの激しさで、ヨームに向かっていく。意志を持った嵐。下田は、そんな印象を抱いた。

体に炸裂すると、巨人は明らかに苦しみと取れる声で、叫んだ。鉈を下ろし、その場で膝をついた。

「まだだ。下がっている」

カルラの警告が正しかったことを、すぐに知る。

ヨームはすぐに立ち上がり、鉈を構えた。それだけではなく、全身が赤く燃え始めた。見た目以上に、そのうちにある何かが変わったのだと、下田も理解する。

「グンダとジークバルドを守れ」

それからの攻防は、参加をしなかった下田から見ても、圧巻としか言いようがなかった。相手の注意を反らすため、カルラとシーリスが魔術を使う。彼女たちに攻撃がいかないよう、イーゴンとフォドリックが巨人の動きを妨害していた。

その強さよりも、あんなに大きい相手へ立ち向かう精神が、信じられなかった。下田も含めた生徒たちは、動くことすらできないというのに。

やがて再び嵐が放たれて、受けたヨームはその場に倒れた。今度のは、もう二度と立ち上がる気配はない。誰一人として大きな怪我を負うこともなく、薪の一つが手に入った瞬間だった。

終えた戦士たちがこちらに戻ってくるが、ジークバルドだけは残っていた。

「移動します。篝火を灯さなければ」

イリーナがそう言ったのに対して、下田は疑問を返した。

「ジークバルトさんは…」

「一人にしてやれ」

カルラが首を振る。ヨームの死体のそばにいる彼を一瞥した。

「かつて、彼とヨームは友だった。お別れをさせてやるんだ」

そこには、下田の知らない領域の事情があった。知りたくはあるが、不用意に踏み込む話でもない。ただ、いつも明るいジークバルドの意外な一面を見たのは確かだった。薪を得るということは所持者を殺すこと。初めから友を殺さなければいけないことを、覚悟していたのだろうか。

もはや敵のいない広間で、イリーナの儀式が始まる。内容はフアラの城壁でしたものと変わらなかった。祭祀場へとつなぐ道を作る。今回の旅も色々あったが、下田は多少の慣れを感じていた。

儀式が終わった直後、自分の身体から微かな音が聞こえてきた。鈴の音だ。不思議に思って白い鈴を取り出してみると、それはひとりで揺れていた。手に取ると、いきなり耳元で声がしてくる。

『周りに誰かいるのなら、移動をしてください。一人になるよう、お願いします』

下田は慌てて周囲を見たが、この声が聞こえている者はいないようだった。これが、音送りという魔術の効果なのだろう。重要な話をする時に有用というわけだ。

作られたばかりの篝火から祭祀場へと戻った彼は、すぐさま自分の部屋に向かった。その行動の早さに、ちとせが疑いの目を向けていたが、弁明をする余裕はない。ヨルシカとの話は、それだけ重いのだ。

「一人になりました。大丈夫です」

鈴から、わずかに呼吸が聞こえる。乱れているというほどでもないが、明らかに疲労のこもったものだった。

『そうですね、まずはシモダさんの方に訊きましようか。巨人ヨームの薪は手に入れられましたか?』

「はい。正直、僕はもつと苦勞するかと思っただんですが。ジークさん達があつという間に」

『彼らは、入念な準備をしていました。つつがなく成功して、良かった

です。それで…、他に何か、ありましたか?』

詳しく説明されずとも、何を訊かれているのかはわかった。道中の全員の様子を思い返しながらか、なるべく憶測が混ざらないように話す。

「この人が怪しいだとか、そういうのはまだわかりません。でも、イリーナさんが倒れました。その時に、えっと、イーゴンさんがちよつと行き過ぎた行動をして…」

『カリムにおいては、聖職者にならず定められた騎士が一人就くという決まりがあります。イーゴンは、その自らの責務にのつとつて、イリーナにもしかるべき行いを求めているのでしょう。それで、何もかもが許されるというわけではありませんが。彼らの事については、私も踏み込みあぐねています』

祭祀場の者達同士でさえも、理解の及ばないところがあるのは確かだった。聞いた話限りでは、彼らの出身はばらばらだ。同じ目的の下に集まっているとしても、互いに遠慮は必ずあるのだろう。

「ヨルシカさんの方は、どうでしたか。法王の城に少数で行って。大丈夫、だったんですか?」

『こちらも目的は達成しました。ただサリヴァーンを追い込みはしたものの、最後の最後で逃げられてしまいました。ですがもう、彼に王としての価値はありません。イルシールの制圧は完了したと言ってもいいでしょう』

下田には、そのサリヴァーンという名の法王も、イルシールという国がどれだけ難攻であるかもわからないが、それでもヨルシカが自らの能力をいかに発揮したということにはわかった。

「そちらも、異常はあったんですか? 例えばその、仲間内になにか」
『いえ、特には。皆それぞれ私を全力で支えてくれました。正直、謎は深まるばかりです。人食いに通じている者がいるとはとても、思えません』

下田も同感だった。今回、得られたことはほとんどない。もちろん薪の一つが手に入ったのは大きな前進だ。しかし、これからその内通者がいつ行動を起こすかを心配しながら、先へ進んでいくというのは

危険が大きすぎる気もする。

『一度、会って話しましょう。どうするべきか、共に考えなければ』
「そうですね。僕も、なるべくヨルシカさんの負担を減らせるように、頑張ります」

心の底からそう思い、言い切った。鈴の向こうは少しの間静まり返り、やがてわずかな笑い声が漏れ出してきた。

下田は心配になり、おずおずと尋ねる。

「えっと、何かおかしなこと言いました…?」

『いえ、すみません。何もおかしくはありませんよ。ただ、やはり誰かと共有するのは大事ですね。貴方のおかげで、こちらもだいぶ楽をしています』

素直な感謝に、言葉が詰まる。

それからしばらく沈黙が続き、もしやもう接続が切れているのかと思ひ始めた。その時、あ、とヨルシカは何かを思いついたように声を出した。

「最後に訊きたいことがあります。それなりに、個人的な質問になりますが」

後半の方は、やや尻すぼみになった。何だろうと思い、下田はすぐに答える。

「大丈夫ですよ。どうぞ」

『では…』

深く呼吸するのが聞こえた後、言葉を発した。

『エルドリッチが祭礼場を襲った時、私は大きな怪我を負いました。その時、記憶している限りにおいてですが、貴方は、私の身体を見ましたね? あれを見てどう、思いましたか?』

彼女にしては珍しく、所々つまらせながら訪ねてきた。この質問をするのに、かなりの勇気があることはうかがえる。

だがそれ以上に、下田の動揺も大きかった。まさか、本人からそのことを言われるとは思ひもなかった。一度頭が真っ白になった後、とにかく何かを答えなければという思いだけが頭に浮かぶ。

「あ、あれってというのは、えっと、つまり」

『私が……竜の血を引いているということは知っていますね。その特徴が、表われている部分です』

つまり、尻尾だ。あの白く細い形状を思い返す。ヨルシカの気まずそうな息遣いが伝わってきた。

どう答えるのが、正解なのだろう。回りきらない頭で必死に考える。ヨルシカは、おそらく裸を見られたという羞恥の意味で訊いているわけではない。だから、正直に、心の中で思ったことをそのまま答えても問題はないはずだ。

唾を飲み込んでから、思い切つて下田は言った。

「綺麗でした。僕は、ああいうのを見るのは初めてでしたが、その、ヨルシカさんにとってもよく似合っているなって、そう、思いました」

『綺麗……ですか？ 貴方はあの姿を見て、嫌悪を感じないのですか？』
信じられないという口調だった。その伝わってくる考えに少し悲しいものを感じて、彼はなるべくはつきりと言葉を返した。

「少しも、感じませんでした。それは多分、ヨルシカさん自身のことを知っていたからだだと思います。偏見なんかでその人の性質を決めるのは、良くないことですから」

今度こそ、長い沈黙が永遠に続くかと思われた。時間が空いてくると、下田は自分の発言に何か失礼はなかったかと考え始める。もしかしたら、軽蔑されたかもしれない。そんな恐れまで抱き始めた時、ヨルシカの声に戻った。

『そんなことを……、言ってくれたのはあなたが初めてです。ありがとうございます』

何かを抑えつけるように、語尾が震えていた。やはり彼女も、血のせいで差別を受けた過去があるのだろうか。今の地位につくのだから、きつと並々ならぬ苦労があったんだろう。

『こんな質問をして、困らせてしまったでしょうね。この話は、忘れてください。……とりあえず、私がそちらに戻ったら、前と同じ場所で話し合います。次の目的地、ロスリック城についても伝えたいことがあります。集まる時は鈴で知らせるので、よろしくお願いしますね』

「はい」

これで話が終わったと、下田は鈴を置こうとした。

『シモダさん』

まだあるのかと慌てて持ち直す。勢いよく鈴に耳を近づけたものだから、彼女の声が、より身近で聞こえてきた。

『貴方とお話は、励みになっています。直接会えるのを楽しみにしていますね。とても』

こちらが何かを返す前に、向こうから何も音がしなくなった。鈴をベッドの上に置いた下田は、頭を抱えると、床に転がる。首筋がそわそわしているような感覚で落ち着かなかった。今誰かが入ってきたらとても困るだろう。真っ赤になっている耳や頬を見られて、何を思われるのかもわからない。

余韻がやっと収まってきたころ、彼は別の心配に囚われた。こうして、薪を集めていくということは、最後には避けられない戦いがやってくるだろう。つまり、先生を相手にしなければならぬのだ。

そうなった時、自分は何を考え、相手に何を言えればいいのか。終わりのない思考をしながら、天井を見つめていた。

36. 実家訪問

頬に違和感を感じたのは、戦闘が終わった直後のことだった。液体が皮膚を伝い、垂れ落ちていく感覚は、一つの事実を示している。

「タカキさん、血が…」

アンリに指摘されて、彼は自らが怪我をしたことを、ようやく自覚した。鋭い痛みもやってくる。久しぶりの感覚だった。全く、歓迎する気にはなれないが。

ロスリック城壁に侵入すること自体は、容易だった。クリムエルヒルトの転移網が一瞬で彼らを運んだ。だがそこで、待ち伏せに遭うことになる。転移した先は中規模の個室になっていたが、ロスリックの騎士達が待機していたのだ。

それで不意をつかれることはなかった。事前にクリムエルヒルトが警告していたからだ。この「道」は本来ロスリック側が使うもので、敵に利用されることも想定されているのだと。

騎士たちとの戦闘で、危ない場面はなかった。今まで戦ってきた雑兵よりも手強いが、今の貴樹達に適う道理はない。ただ敵は追いつめられると、全員自分の武器に雷を付与してきた。これは切れ味が増すというだけではなく、予測しづらい斬撃をも生み出していたのだろう。完璧にかわしたと思ったら、頬をかすめていたようだ。

(これは…どういうことだ？ おいノミ、残り火が切れたのか?)

『そうじゃねえ。お前の首から上の防御だけが、普通に戻っちまってる。残り火を大量に消費した代償だ。力が、全体に行きわたらなくなってる』

(ふざけてんじゃねえぞ。じゃあ、首飛ばされたら俺死ぬだろ。戻せ)

『無理だ。穴を埋めようとするれば、また別のどこかが無防備になる』
(それでいいだろ。なんでよりもよって急所が集まってる場所ががら空きになるんだよ。もつとどうでもいい部分があるだろ。馬鹿か?)

『あのな、それじゃあ訊くが。他にどうしろっていうんだ？ 例えば、足の防御をそつちに回したとする。いいか、まともに戦えなくなる

ぞ。今のお前の武器は足だ。相手の鎧を蹴り砕く力はあっても、足自体に相応の耐久がなければ、一発で肉も骨もぼろぼろになるぞ。胴体の部分だって、一番刃が向かう場所だ。ないがしろにはできない。それなら、一撃でも入れられたら終わる部分を晒した方がました。足と頭は離れているから、攻撃への影響も少ない』

(ち、使えねえ)

頬の切り傷は大したものではない。ただ、奇跡で治すこともできない。今の貴樹は一度大きな負傷を負っただけで命はないのだ。以降は頭を最優先で守る戦い方をしなければならぬだろう。

攻撃の方にも明らかな衰えを感じていた。たまに、相手を一発で仕留めることができないう時がある。前よりも自分が遅くなっている感覚。代わりに敵の動きは速くなっているようにも思える。

意識を失っているゲルトロード以外全員が、貴樹を見ていた。内心の動揺を気取られないように、彼は表情を作る。何も、倒せる敵が倒せなくなったわけではない。今、祭祀場の戦士たちを全員相手するようになってしまった。もう、彼らなるべく傷つけないようにするという方針は捨て去る必要があるが。

扉から外に出ると、すぐに魔術が飛んできた。壁の上で杖を持った騎士達が左右に展開している。貴樹たちは一か所に固まらないように散開して、敵の攻撃をかわした。待ち伏せが一度だけとは限らない。早く処理しなければ、結局ロスリック中の騎士達を相手にしなければならぬだろう。

あらかた倒し終えると、今自分たちがいる場所がどこなのか、確認を始める。場内ではないことは確かだ。木や草が生えていて、かなり開けた場所になっている。

「庭か」

「その通りです。先代の王が作らせた場所だと言われています」

クリムエルヒルトの言葉で、ここが妖王の庭であることを理解した。おそらくエンマがいると考えられる本城まではかなりの距離があるだろう。ならば、先にここで済ましておくべきことに対処した方がいい。

貴樹は後ろへ振り返った。遠目に、大きな聖堂らしき建物がある。

「あそこへ行くこう」

「城とは、反対の方向ですが」

皆の方を向く。ぼやけた視界の中で、ほぼ全員がやや顔をそらしたのに気がついていていた。今の自分の両目がどんな状態になっているのかは想像できる。何か覆いでも必要だろうかと考えながら、自分の目的を口にした。

「挨拶しにいかないと。お義父さんに」

聖堂内に入ると、中の異様さがすぐ目に入ってきた。酷い有様だ。床や壁はまったく手入れされていないようで、かつては持ち主の威厳を保っていたであろう装飾もほとんどが剥がれ落ちている。そしてあたりに漂う異臭が、ここをおぞましい場所に変えていた。

貴樹は聖堂の一番奥でうずくまっている異形に、始めから注視していた。もう少し近づこうとしたところで、フリーデが制止してくる。「様子を見た方がいいのでは？」

「いや、大丈夫ですよ。皆さんは、ここで待っていてください。何かが起きたととしても、僕一人で何とかします」

何よりも自分自身がそうしたいのだと強い意志をこめて言うと、フリーデは下がった。他の者たちも止めたがっているようだったが、実際に行動に移すことはない。

相手の形がよくわかるまで接近すると、貴樹は呼びかけを始めた。「いきなり踏み込んできて、すみません。今回僕が伺ったのは、礼を通すためです。この度、貴方の娘を娶めとることになったので、挨拶をしに来ました」

距離からして、確実に聞こえているはずだった。しかし竜の頭と尻尾を持ったかつての王は、手に抱える肉塊に頬をすり寄せているだけだった。

貴樹は下唇をすぼめてから、もっと大きな声で言った。

「先王オスロエス。受け入れがたい提案なのは分かっています。自分の子ですもんね。どこの出身かもわからない若輩者に託すのは心配

でしょう。ですが、安心してください。僕は貴方みたいな層のような親よりも、はるかに多い愛を彼女へと注ぐ気概でいます」

足元に転がっている小石を蹴り上げる。天井に当たり落ちてきたそれを前へと再び蹴った。オスロエスの手ごと肉塊を貫通し、黒い血が飛び散る。

その時初めて、相手は反応を示した。破壊された肉塊を見て、全身を震わせる。直後で得てきた叫びは、こちらの耳に突き刺さるほどの悲痛と狂気を備えていた。傍らにあった杖を異形の手で取るとゆっくりと立ち上がる。

「それはオセロットじゃないですよ」

(ただのゴミだ)

キヒイイイイイイと吠えて、オスロエスは飛び上がった。自分の息子の名前を叫びながら、貴樹めがけて降ってくる。そこには見る者と戦慄させるような強い憎悪が滲み出ていた。

(俺が憎いのか)

彼も同じ気持ちだった。オスロエスは、ロスリック王家の異種交配の被害者だとも、竜崇拝の末あのような姿になったとも言われている。彼も火継ぎの狂気の被害者というわけだ。しかし同時に、ゲルトロードの記憶の中では異種交配を行った加害者でもある。

半歩左に体をずらしてから、貴樹は小さく飛び、相手が降ってくるタイミングに合わせて、足をふるった。両者が衝突し、オスロエスの胴体から左足が突き出る。

「僕、子供持ったことないからわからないんですけど」

肉を大きくえぐりながら、足を引き抜く。血を吐きながら、相手は翼をはためかせた。逃げようとしている魂胆を見抜き、すぐさま両翼をもぎ取る。先ほどとは性質の違う、苦痛にまみれた叫びがこだました。

「自分の子を幸せにできない時点で、親に生きる資格なんてないと思うんですよね。彼女、子供のころはさぞ愛らしかったんでしょう。羨ましいなあ。お前じゃなくて、僕が育てれば良かった。そう思いませんか?」

すでにオスロエスは虫の息だった。それでも貴樹はとどめを刺すことなく、両手足と尻尾を順番に潰していった。薄い呼吸をしている顔を足で無理やり持ち上げると、ゲルトルードの方へと曲げた。

「何か、自分の娘に言い残すことはありますか？」

「…オセ」

足に力を入れて、首を飛ばす。落ちてきたそれを、もう片方の足で踏みつぶした。伝わってくる肉の感触は、ただただ気持ち悪い。もう動かない胴体部分に唾を吐きかけて、貴樹は踵を返した。

（お義父さんの許しももらえなし、あとは本人の合意を取るだけだな）

『容赦ねえな』

（相応の報いだ）

すつきりはしたが、妙な気分が残っていた。今まで何かを憎いと思ったことはある。むしろ、日本にいたことは毎日そんな感情があった。だが、今のこれはそれらとは何かが違う。彼女に関わることになると、感情のコントロールがやりづらくなるようだ。

もつと余裕があつたのなら、聖堂からいける無縁墓地の探索もしたかった。おそらくではあるが、あの場所はかつて薪の王たちの遺体を祭っていた可能性がある。火継ぎを理解する上で、大きな手掛かりが見つかるかもしれない。

城内へと向かう道中、貴樹は時折さりげない気遣いを、周りの者達から受けた。オスロエスの時は例外として、なるべく彼に戦闘をさせないようにする動きがある。

ロスリック城周辺は敵の周辺に備えて、城壁を回っていかなければ中へと侵入できない作りになっている。途中、何度も襲撃を受けた。そのたびに今までとは事情が変わっていることを感じた。絵画世界の時よりも、皆の連携が強固になっている。貴樹を支えるという共通の目的があるからだろうか。新しく加わったフリーデがうまく立ち回っているおかげでもある。そこは意外だった。彼女が集団戦に慣れているとは思っていなかったからだ。

そして、書庫へと続く大橋へとたどり着いた。本城部分へは、大書庫を通る必要がある。

橋を渡りながら、貴樹は怪訝に思っていた。

(竜狩りの鎧が来ねえぞ。つまんね。あいつと戦うの楽しみにしてたのになあ)

『ありがたいと思うべきだろ。今、強敵と戦闘してる時間なんてないんだし』

(わかってねえな。お楽しみは必要だろ)

『楽しみ? お前、今の状況でよくそんなこと考えられるな。他の奴らは真剣だぞ』

(え、じゃあ訊くけど、お前は楽しくないの?)

『は?』

(俺はずっと楽しいぜ。この世界に来てからずっと)

貴樹は向かう先の扉をいとおしげに眺めた。

(地球なんかより、よっぽどました。あれに住んでるゴミに比べれば、オスロエスの方が可愛いとも言える)

『つくづく思うが、お前を理解するのは難しい』

(もつと余裕持てよ)

書庫内にも、敵はいた。頭がろうそくの蠟で固められている術師たちがいた。彼らがどのようなにして正気を失ったのかは知らないし興味もないが、彼らにさえ貴樹は楽しみを見出していた。

城壁を巡っていた時ほどは、警戒網が薄いようだった。比較的短い時間で、周囲に危険はほぼなくなった。もとより、ここは書庫だ。本城への重要な侵入口ではあるが、戦闘の雰囲気にはそぐわない。

さつさと駆け抜けようと思った所で、背中にゲルトロードの手が触れた。顔だけ後ろに向けると、彼女は動き出し、きよろきよろと左右を見ている。意識が、完全に戻っているようだった。

「大丈夫かい?」

歓喜で声が震えかけた。何か手を施さなければ、ずっと眠ったままの可能性もあったのだ。彼女は貴樹の方を向くと、不安そうに手をずらした。

「わたし、おかあさまのところに行ったのに。だれ? くらくて、こわいよ」

◆

書庫内に、とどまることになった。ゲルトルードの状態が落ち着くまで、休む必要がある。貴樹の意見に、反対する気は起こらなかった。「くそ……」

ただ待つというだけではもったいないと、書庫内の探索を手分けすることになったのは、自分にとってはありがたかった。さすがにもう、抑えるのが難しくなってきたからだ。

ホークウツドは近くに誰もいないことを確認して。書棚に体を寄りかかせた。口を両手で抑え、低く咳き込む。収まった後の手を見れば、血の塊がべったりとついていた。

足音が近づいてきたので、慌てて手を拭い、書棚から離れた。

「何か、めぼしいものでも見つかった？」

ミレーヌが数冊の本を持ってきた。どれも年季の入ったものだ。その上表紙に書かれている文字は理解できるものではなかった。古のものだろう。

彼女はパラパラと適当にめくりながら、ホークウツドの隣に座った。

「まるで理解できない。読めないものを置いておく意味なんてあるのかな」

「この王家は、歴史を重んじてるんだろうな」

平静を装って答えたつもりだったが、彼女を欺くことはできなかつたらしい。発言の途中から、怪訝そうに視線を向けてきた。小さく鼻で呼吸をすると、目を見開く。

「血のにおいがする」

何かごまかしを言う前に、手をつかまれた。無理やり裏返される。薄く血のこびりついた部分を見て、ミレーヌは睨んできた。

「血を吐いたの？ 隠してるつもりだったかもしれないけど、貴方の体が限界なくらい、一緒に戦っててすぐにわかった。もう、意地を張

るのはやめましょう。皆に、タカキに相談しないと。何か、治す方法を見つけようよ」

言葉の後半からは、表情を心配そうに曇らせて、こちらの身を真摯に案じてきているのが分かった。

「だから、言っただろ。これは、治せるものじゃない。受け入れるべき代償だ」

「でも、それでホークが死んじゃうのは、嫌だよ…。私は、諦めない」「タカキにだけは、言うな」

ミレーヌが驚く。

「どうして。あの人なら、ちゃんと考えてくれるかもしれないのに」「それでまた、あいつに何かを背負わせるのか？」

ホークウツドは思い返す。今の貴樹は、正直動いているだけでも奇跡だ。両腕が失われ、視力もほとんどない。信じられないのは、戦闘においては弱くなるどころか、変わらず自分達の中から率先して動いていることだった。動きに無駄がなくなったのか、前よりも強くなっていることと錯覚しかねない。脱帽するほかなかった。

「あいつは、もう十分すぎるほどよくやってくれている。これ以上、心配事を増やさせたくねえ。今優先すべきなのは、ゲルトロードだ。それでいい」

「じゃあ、私が何とかする」

「駄目だ」

「私は、ホークが最優先なの！」

「それでも、駄目だ」

ホークウツドは手を彼女の肩に置いた。興奮して立ち上がろうとしていたが、彼の顔が近づくとおとなしくなった。

「もう、いいんだ。頼む、そばにいてくれ。俺にはそれだけでいいんだよ。十分なんだ」

彼女が苦しんでいるのを見るのは、嫌だった。それなら、残された時間をずっと楽しく過ごした方がいい。そんな思いを込めて言うのと、彼女は手を握ってきた。また、目に涙をにじませている。からかおうとも思ったが、そういう雰囲気でもない。

それに、第三者が見ているのに、気がついていた。

「ゲルトルードの調子はどうか？」

ぼっとミレーヌがホークウッドと同じ方向を見た。そこには、クリムエルヒルトがにやにやしなから立っていた。

「異常なしよ。断言はできないけどね」

「いつから、そこに」

「貴方が彼のことを最優先なのって、情熱的に言ったところからよ」

ミレーヌが嫌そうに顔をしかめる。

「何しに来たの。私たちに用でも？」

「別に。様子を見に来ただけ。もう行くわ」

つまりは、からかうためだけに来たということだろうか。しかし、ホークウッドは何となく不思議に思った。いつもと、彼女の様子が違う気がしていたからだ。ロスリックに来てから、ずっと何かに気をとられているようだった。

去ろうとしている彼女に向かって、疑問をぶつける。

「お前、大丈夫か？」

足を止めて、クリムエルヒルトは顔だけ振り返ってくる。

「なに？」

「なんでそんなに緊張してんだ？ 最近変だぞ」

彼女は鼻を鳴らした。

「意味が分からないわ。私の気を引きたいなら、もっと上手くやることね。それに、人のこと言えないんじゃない。貴方、もうすぐ死ぬんでしょ？ 誓約破りの副作用って、そんなに重いよね」

やはり、途中からではなく、始めから自分たちの話を聞いていたらしい。いや、彼女のことだ。絵画世界での話も実は知っていた可能性がある。そう冷静に受け止めたホークウッドとは違い、ミレーヌは勢いよく立ち上がった。

「知ってたの？」

「偶然よ。だって貴方たち結構大きな声で話すものだから。安心して、誰にも言うつもりはないから」

「そういう、ことじゃなくて」

そこから先に続けるのを、ミレーヌは躊躇っているようだった。クリムエルヒルトがまた去ろうとしているのを見て、覚悟が決まったように言う。

「ホークを、助ける方法はない？ 貴方は、魔術や呪術に相当詳しい。なにか、解決できる術を知っているんじゃないの？」

クリムエルヒルトの目が、子供を相手しているようなものに変わった。

「驚いたわ。嫌われていると思っていたんだけど。助けを求められるとは」

「聞いてたんでしょ。私はホークの命が一番大事なの。そのためなら、何でも利用するつもり」

「生憎だったわね。私は、誓約に干渉できる術なんて知らない。その男の傷は奇跡で治せる性質でもないし。役には立てない」

きっぱりと言い切ると、彼女は今度こそ離れようとした。が、階段を下りていく手前で立ち止まる。

「誓約の問題を解決できるのは、誓約主だけ。私には無理」

その言葉にはからかいの調子は少しも含まれていない。ホークウッドには、それが謝罪にも聞こえた。力が及ばず、申し訳ないと。

「シフィオールの死骸に許しを請えつつか？」

「あの狼じゃなくてもいい。狼血の誓約を扱えれば、誰でも」

それ以上続ける事なく、クリムエルヒルトとは階段を下りて行った。彼はミレーヌと顔を合わせる。彼女も、理解をするのに時間がかかっているようだった。狼血の騎士をまとめているのは太古の神狼の血を引く存在だ。シフィオールのほかに、そんな狼がいるというのだろうか。

少なくとも、ホークウッドは知らない。

もつとクリムエルヒルトに細かく尋ねる必要があるだろうか考えた時、隣のミレーヌがこちらを見ていることに気がついた。

「どうした？」

彼女は視線をさまよわせ、自分の中の記憶を探っているようだった。

「私、会っているかもしれない。あれは、シフィオールスじゃなかった」

そうして彼女が話し出した事實は、到底信じられないものだった。



貴樹は、子供が好きではなかった。正確には、小学生以下の子供が。彼らには知性が欠損していて、獣のほうがよほど理性的だと考えていた。自分がそのくらい頃は、今とそう変わらない思考能力を持っていたと思っているので、なおさら嫌だった。

しかし、ゲルトルードをあやしているうちに、彼女に関してだけは、例外になっていた。

「おかあさまは、きてくれないの?」

「そうだね。とりあえず今は、ここで遊んでよう。僕は君のお母さんから、君のことを任されたんだ。タカキと呼んでくれ」

「タ…?」

「そう、僕はただ。それでいい」

呂律の回らない口に、自分の一物をぶち込みたい衝動がやってきた。声帯や体は成熟しているが、精神がその状態にまるで追いついていない。貴樹はまともに会話をできるようになるまで、三度ほど彼女の泣き声を聞くことになった。興奮したので、良しとはしている。

どうやら、彼女は前よりも幼い頃の記憶で動いているようだった。エルドリツチのところへ行く前、ロスリックで暮らしていた時だろう。口ぶりでは王妃との仲はかなり良好だったらしい。

しかし、彼女が依然として暗闇に慣れていない点には疑問を感じていた。ゲルトルードの伝承と食い違っている。もしかしたら、彼女は王家の別の者である可能性もあった。ゲームでは存在していない、ロスリックの次女。貴樹としては、できればその説が当たっていてほしかった。

とにかく、今の彼女に正確な状況を判断する思考はない。彼は説明

を諦めて、自分を王家関係の者だと信じさせることにした。

じつと、ゲルトロードを観察する。今は、何もおかしなところはないようだ。前に見たものは幻だった。そうだとしたら、どんなにいいか。貴樹は油断をしていなかった。もう少し休んだら、すぐにここを出るべきだろう。

彼女のそばにつきながら、書庫を見て回る。数冊手に取って読もうとしたが、文字を理解することはできなかった。タイトルをまじまじと見ていると、静かな声が聞こえてくる。

「魔術書も読むの？」

画家の少女は純粋に不思議がっているようだった。近づいてくると、少し背伸びをして、貴樹の持つている本を覗き込んでくる。

「というより、何かわからないから見てるんだ。ここに書いてある文字が読めるんだね」

「うん。たくさん教えてもらったから」

使えるな、と打算的思考を始める。ここにある本を全て調べれば、深淵に関することもわかるかもしれない。用事を済ませてから、ここに再び滞在するのもいいだろう。

本をしまってから、いつの間にかゲルトロードがいなくなっていることに気がついた。周りを見ると、彼女の姿が戸棚の陰に消えていくのがわかった。彼は追いかけてながら、妙に思う。足取りがどこかおかしかったのだ。まるで、何かに吸い寄せられていくような。

大きな物音がするのも構わず、彼は素早く後を追いかけた。今は、彼女を一人にするのは危険だ。ここには、ただ本だけが並んでいるわけではないのだから。

三階に上がり、彼女が立ち止まっているのを見つけた。声をかけながら近づこうとした貴樹は、彼女の視線の先にあるものを認識する。

それはほとんど干からびた死体だった。服装と、残っている長い毛髪でかろうじて女性だとわかる。体格からして、幼い少女のものだ。長い銀髪が床に散って、かすかな光を反射していた。光は体の回りに広がり、何かの形を表していた。

羽だ、と思い当たった瞬間、貴樹はゲルトロードの前に躍り出た。

「見るな！」

彼女は頭を抱えた。その場で膝をつき、甲高い叫び声をあげる。普段の声からは想像もつかない、聞く者をぞっとさせる声色だった。とにかく距離を取らせようと、ゲルトルードの服の裾を啜える。

直後、じゅ、と耳元で音が鳴った。光が通り過ぎたような気がしたが、あまりに一瞬のことだった。

手があつたなら、やってきた耳の強烈な熱さの原因を無意識に確かめていただろう。だが、そんなことをするまでもなく、攻撃を受けたということはわかつていた。床に血がぼとぼと滴り落ちる。

ゲルトルードはもう苦しんではいなかった。まっすぐ立ち上がり、その場で静止している。背中から薄い光の羽が生えているのを、貴樹の目は確かに捉えていた。

激痛に襲われながらも、彼女に向かって一歩踏み出す。ここで引けば、彼女が二度と手の届かない場所へと言ってしまふような気がしていた。しかしあと少しで触れられるというところで、腰を叩かれる。

「触れちゃだめ」

後をついてきていた画家の少女が、ゲルトルードを見ながら言った。その落ち着きようは、何が起こっているのかを正確に理解しているようだった。

「じゃあ、どうすれば——」

事態はそう長くは待つてくれないことを、すぐに理解した。ゲルトルードの背後から突然淡い光の塊が出現する。それはあつという間に彼女の全身を包み込んだ。貴樹はその光に見覚えがあるような気がした。そして何が起きようとしているのか分かった瞬間、迷いもせずその光へと飛び込んだ。

「待つて」

少女が腰に縋り付いてくるのを感じたが、構わず先へと進む。光が視界一杯に広がると、周りの光景は一気に変化した。

(外?)

城壁の上のようだ。先ほどの光は、クリムエルヒトが転移の軌跡を使うときのものと酷似していた。つまり自分たちは誰かによつて

書庫から移動させられたらしい。

長い城壁の道の先には大きな塔があった。ロスリック城を遠くから眺めていた時に見えていた、三つの塔のうちの一つ。

「王家の庭を踏み荒らす者達よ」

視力の問題か、貴樹は囲まれていることに遅れて気が付いた。ロスリックの騎士や術士が並んでいる中、明らかに実力の桁が違う者たちが紛れている。

こちらに向かって宣告をしているのはゴットヒルトだ。その周囲に覚えのある者たちがいる。仮面の男に茸の被り物をした術士。そして刺々しい鎧の男。レオナルド、ヘイゼル、カーク。いづれも、貴樹が一度殺した者達だ。

「ここが貴様らの死に場所となるだろう」

片耳に激痛が走っている。感触的に、ほとんど欠損してしまっているのだろう。深く抉られたのか、音が全く拾えない。

「下がってて」

倒れているゲルトロードのそばへ、画家の少女を移動させる。普段は感情の起伏が薄い彼女も、青い顔をして貴樹を見返してきていた。彼ら以外の仲間達は誰もいない。この場を切り抜けるためには、貴樹の力だけで全員を相手する必要がある。

(五本指も、協力してんのか。思いもしなかったな)

自然と笑みがわいてくる。どうやら自分たちは敵の罠にはまっただらしいが、そんなことはどうでもよかった。邪魔な者たちが目の前で勢ぞろいしているのだから、むしろ都合だと彼は考えていた。

レオナルドとカーク、そしてゴットヒルトを前にして、騎士達が迫ってくる。もちろん、彼らだけに注意を取られてはいけない。後方では術士達がすでに魔術を発動させていた。

ソウルの弾の数は、優に三十を超えていた。これは相手の数にしては少ない。一人二、三個しか作り出していない計算になる。しかし、量より質をとったようだ。大きさ、鋭さ、そして速度が並の術よりも数段階上がっている。

しかもそのほとんどは貴樹を狙っていなかった。彼はすぐさま後

ろへ下がり、二人を狙う魔術を足で蹴り落とした。その中でそれた数発が、体に当たる。完全に潰れている右目の死角に入られると、非常に対応が難しくなる。

さらにその隙を狙って、前衛達が突っ込んできた。貴樹は息を短く吸い、騎士たちの攻撃をいなしていく。足技を習っていたのは比較的短い時期だったが、残り火の力のおかげで形にはなっていた。

足に一際大きな衝撃がぶつかった。レオナルドとカークが二人がかりで止めてきている。貴樹は冷静に、もう一段階全力を出すことにした。

カークの盾を、生えている棘ごと蹴る。直後に宙返り、後ろに迫っていたロスリック騎士の頭を踏み潰した。鎧を足場にして、数体を巻き込みながら城壁外へと吹き飛ばす。

直後、貴樹もまた大きなソウルの塊によって体ごと飛ばされていた。思わず舌打ちをする。まるで術の接近に気づけなかった。片耳が聞こえなくなっているせいだ。音の死角にも、気を配らなければならぬ。

ヘイズルの魔術が、ゲルトルードの首に向けられている。貴樹は全力で地面を蹴り、彼女の前に飛び出した。

レオナルドの手元が青白く光る。ぞわりと予感が走り、貴樹はほとんど無意識に身を後ろへよじっていた。あごの先を、ソウルの剣が横切っていく。ファランの速剣。レオナルドが使えるということを知覚しておいてよかったと、心のそこから思う。

その対応をしたせいで、結局ヘイズル^⑧の攻撃は体で受けざる負えなくなった。レオナルドの追撃をいなしながら、横やりを入れてくる騎士へとカウンターを入れる。

(八割切った)

多少、まずい状況であることを認めざる負えなかった。意識がやや混濁し始めてきている。出血のせいだろう。あまり長期戦になると、こちらが不利になっていくのは明らかだった。

厄介なのは、相手側が貴樹との戦い方を学び始めている点だ。決してレオナルド達は深追いをしてこない。追撃の最後は必ず遠くの術

士達が入れてくる。彼としてもまずは先にそちらを処理したいところだが、ゲルトロードと画家のそばを離れるわけにはいかない。

前衛の数も侮れない。着実に減らしてはいる。しかし、さまざまな制限の中で、向かってくる全ての攻撃をかわすのは無理があった。攻めきれずに、徐々に耐久値が減らされていく。

そして、綻びは突然やってきた。一瞬間の中が酷く揺らされているような感覚がして、自分の体勢が崩れたのが分かった。血が、足りなくなってきた。その隙を見逃すほど、相手も無能ではなかった。

レオナールが貴樹の脇を通り抜けると、画家の少女へと疾走する。その後を追おうとするが、カークと騎士たちに阻まれた。そしてさらに、多くの魔術がゲルトロードへと向かっているのもわかった。

彼自身も意識を切り替え、邪魔をしてくる者達から離れようとする。防御をおぎなりにしてでも。後ろへと下がった。

向かう中で、選択を迫られていることを理解する。二人のうちどちらかを助ければ、もう片方には間に合わなくなる。片方を生かし、片方を殺す。もちろん、どちらを選ぶのかは貴樹の中で初めから決まっていた。

それでも彼は、選ぶことをしない。三つ目の選択肢があるからだ。

地面に転がっている剣を、レオナールに向かって蹴り出す。その結果がどうなるか見ることもせず、彼は中途半端な姿勢のままゲルトロードの前へ飛び込んだ。ソウルの塊が、全身に衝突する。

鼻の折れる音が、はつきりと頭の中で響いてきた。何の防護もない顔に当たったのは一つの塊だけだったようだが、それでも金属バッドで殴られたような衝撃がやってきた。

めまいを覚えながらも、貴樹は倒れなかった。朦朧とした意識のまま、自らを鼓舞するかのようにつえて、再び少女を切ろうとしていたレオナールへ突っ込む。

相手はそれを見切っていたようで、振り向きざまに斬撃を放ってくる。彼はとっさにしゃがんだものの、間に合わない。額の上を刃が滑り、目の上に血が流れ落ちてきた。

貴樹はひるまずに、レオナールの体を蹴りこむ。まともに当たった

わけではないが、下がらせることには成功した。

荒くなっている、自分の呼吸が聞こえる。額の切り傷からの血も止まらない。拭う手すらないので、左目の視界はほとんど真っ赤に染まっていた。

『…五割』

ノミの声が二重になっている。明らかに良くない兆候であることは自覚していた。すべての感覚が鈍くなっている。このままでは失神するまでそう長くはないだろう。

貴樹の思考は、不思議とはつきりしていた。顔を覆っている痛みを客観視する。死ぬほどの傷ではない。放っておかなければ。

ゴットヒルトが何かを言っている。大方、勝敗は喫したとでも思っているのだろう。その通りだ、と貴樹も心の中で同意をした。

城壁の端にかかっている、松明を足で持ち上げる。器用に顔を近づけると、彼は自分の傷跡に炎を押し当てた。暴れまわる激痛の中、彼は一言も発しない。ただ己の中に生まれつつある感覚を掴もうと集中していた。

傷口が焼けただけ、血が止まる。片耳と額。その二つの部分に大きな火傷ができてしまった自分の顔がどうなっているのか、想像したくもなかった。

(たぐよお、何でこう、上手いかねえんだ？ 俺は、彼女と幸せになればそれでいいんだよ。出会って、お互いに一目惚れして、完結でいいじゃねえか。フィクションじゃねえんだから、こんな紆余曲折なんていいんだよ。……やってやる。くそが)

彼の行動の異様さに、何かを警戒して動いていなかった相手が、再び攻撃を始める。左右に前衛が展開を始めた。死角のほうへとより多くの数が回っている。かといって、見える方の注意を蔑ろにしていわけではない。

無事な方の耳が、術士達の囁きを拾った。本当は最初から聞こえていたのだが、意味が分からなかったので、気にしないようにしていた。しかし、今はもう、なんとなくわかる。放ってくる術の種類と紡がれる言葉は連動しているのだ。

集団で一人を囲むとき、気をつけねばならないことは何か。それはおそらく、味方同士で切りあわないようにすることだろう。幾重もの刃が入り乱れる中では、お互いの位置関係を把握し、役割を綿密に分担する必要がある。

見えている方の目が、迫る斬撃をとらえる。持っている手を蹴つて、剣を上へと飛ばした。すぐさま二撃目で、騎士の頭を蹴り潰した。一体を殺す時間があれば、もう一方の集団が死角へ回りきることができる。貴樹はすぐさま振り返り、レオナルドの速剣を弾いた。その勢いのまま飛び上がり、降ってきた騎士の剣を足の指で捕まえた。

体をひねり、無理矢理真下の騎士の首へと突き刺す。その瞬間、他の者達の緊張が少し緩むのがわかった。

完璧なタイミングで、ろくに逃げられない上空にいる貴樹の首元にソウルの矢が到達しようとしていた。音も、視界からも外れたその一本は、確実に彼への致命傷になる。

だが、貴樹は倒れた騎士の方に降り立つと、その矢に向かって正確に足を当てた。軌道を直角にずらされた魔術は、騎士の一人に直撃して碎ける。

決まるはずだった一撃が失敗に終わっても、彼らは隙を作らなかった。かわす隙間などない密集した陣形を作り、貴樹を八つ裂きにしようとする。

直後には半分の数が倒されていた。

貴樹は、全ての攻撃をかわし、あるいは足で横にいなしていた。見える方からくる攻撃も、見えない方からくる攻撃も、等しく。これまでは格段に違う動きで、相手の集団を圧倒していた。

術士達の魔術が光る。彼は死体を盾にして受け、そのうちの何本かを打ち返し、さらに前衛を削った。ゲルトロードと少女を狙ったものは、さらに彼が蹴り飛ばした魔術によって相殺された。

その動きは、到底視力と聴力が半分以下になった男のできるものはなかった。

彼の黒く塗りつぶされた右側の視界は、蘇ったわけではない。しかし、もはや暗闇だけではなくなっていた。

最初に見えたのは、線だ。さまざまな色の線が、無造作にそれぞれの軌道をなぞっていた。それが、意味ある動きをしているのだとわかったとき、彼にはもう視界の問題などなくなっていた。

突撃してきたカークの首に両足をかけ、きれいに折る。そのまま首を根元ごと捻じりとると、砲弾としてレオナルドにぶつける。体制が崩れた隙に左側面へ回り、フアランの速剣をしゃがんでかわし、相手の胴体を鎧ごと砕いた。

前衛がほとんど死んだことに、ヘイゼルはまだ飲みこめていないようだ。次の魔術を発動させる前に、貴樹の踵落としが脳天に突き刺さっていた。

魔術の流れが膨れ上がっているのを、背中で感じる。彼は術士達の集団に突っ込みながら、降り注ぐ矢の雨を避けた。青白い光と飛び散るおびただしい血がお互いに主張し合い、その場を非現実じみた舞台に変えていた。

殺し切った貴樹は迫る二本の刃を、足の指で受け止めた。

「お前、一体。お前は、何なんだ」

ゴットヒルトは貴樹の変化に危険を感じて下がっていた。だから最後まで生き残ることができたのだろう。それは貴樹にとっても都合だった。

「こう、悟りに入ったというか。見えないものが見えるようになると、楽ですね。感謝します。ところで、エンマ祭儀長はどちらにいますか」

二刀を貴樹の足から引き抜き、後ろへ素早く下がる。構えながら、少しも衰えていない戦意のこもった声で答えてきた。

「黒の手として、王家を荒らす者は一人残らず生かさん」

貴樹は、ゴットヒルトの頭を即座に潰した。尋問したところで、無駄になるのはわかりきっていた。忠誠を誓っているというのは、そういうことだろう。まだじたばたと四肢を痙攣させているその死体を城壁外へと捨てた。無残に獣にでも食い荒らされればいいと願いがら。

「別にいいですよ。自分で探しますから」

貴樹は深呼吸をしてから、言葉を失っている画家の少女のもとへ歩いて行った。意識の混濁は、既におさまっていた。

37. 翻弄される下田

おぞましい音が聞こえてきたのは突然だった。それまで思考の渦に沈んでいたホークウッドは、瞬時に我に返る。

立ち上がり、ミレーヌとともに書庫の広場まで出ると、ちょうどアンリとホレイスも飛び出してきたところだった。彼らと視線をかわし、声が聞こえた方へと階段を上がっていく。

予想に反して、そこには誰もいなかった。血痕。それだけが何か不吉なことが起こったのを示していた。

「ここに、タカキさんと画家が入っていくのが見えました」

最後にやってきたのは、フリーデだ。既に鎌を取り出している。ホークウッドはその姿に少し圧倒されながら、疑問を口にした。

「だが、もう誰もいない。一体、何があつたっていうんだ？」

アンリが周りを見回す。

「先ほどの叫び声は、あきらかに異常でした。何か、二人にあつたことは確かです」

「二人では、ありません」

フリーデは、床に落ちている白い羽のようなものを一瞥した。

「彼女、ゲルトルードもここにいたはずです。彼はそれを追っていた様子でしたから。つまり、三人の姿が、急に消えたということですよ」

こんな状況を作れる術があるのだろうか。ホークウッドは考える。そして一つだけ可能性があるものを思いついた。もし、一瞬で三人がどこか別の場所へ飛ばされたのなら、あり得るかもしれない。転移の奇跡も存在しているのは確かだ。

そこまで考えた時、あることに気が付いた。

「おい、待て」

ホークウッドはこの場にいる者達一人一人を見た。

「クリムエルヒルトはどこだ？」

ここから離れるべきかどうかは、議論する必要もなかった。全員が捜索に出るべきだと考えていた。しかし、どこへ行くべきかで、意見

が分かれることになった。

「先へ、進むべきです。タカキさんを狙った罠なら、相手は転移先に相
当の戦力をそろえているはず。玉座に近い場所ならば、王の護衛と合
わせて対応できるでしょう。一刻も早く、彼らを助けに行かなけれ
ば」

アンリとホレイス、ミレーヌはそういう考えだった。彼らの言いた
いことはわかる。ホークウッドとしても、今の貴樹の状態は心配だっ
た。あの状態でも自分たちよりずっと強いとはいえ、数で押されれば
わからない。

「いや、俺たちが転移した場所まで戻るべきだ。今まで来た場所を探
してみるのもいいかもしれない。俺たちだけでこの先へ行くのは不
安が残る」

ミレーヌが、疑いの目を向けてくる。

「戻るにしたって、何が起るのかはわからないでしょ。それに、どう
して最初の部屋に戻るってことになるの？ 私はアンリの意見に賛
成。貴方、何か別のことをしようとしてるでしょ。転移の所にいる可
能性が高いのは、何か後ろめたいことをして、逃げようとしてる誰か
とか。あの女を、先に見つけたいの？」

「まだ、わかんないだろ。クリムエルヒルトにだって、何か不測のこと
が起きたのかもしれない。あいつだっただって戦力になる」

「タカキさん達よりも、優先するんですか？」

アンリが信じられないという目で見てきた。

「そういうことじゃない。ただ、決めつけるのは危険だっただことだ。
二人があいつを疑う気持ちはわかる。でも、今までの行動で、あいつ
が何か俺たちの害になるようなことをしてきたか？ 俺が見た上で
は、あいつもタカキに貢献しようとして頑張っていたはずだ」

「それでも、過去は変えられません」

アンリとホレイスは、未だ否定的な態度を崩さない。

「貴方や、タカキさんが彼女を信用するのは構いません。ですが、私た
ちは彼女が人食いの陣営にいた時のことを忘れていません。貴方の
意見を尊重はしますが、受け入れるかどうかは自分たちで決めます」

ホークウッド自身も、おかしなことを言っているとわかっていた。しかし、どうにも気になる。先ほど話した時、明らかにクリムエルヒルトはいつもと様子が違っていた。何か、とても大きな問題を抱えているのではないか。自分と同じように。

「新参の身で、口を挟むのは申し訳ないのですが」

フリーデが静かに言った。

「意見を衝突させている間にも、周りの事態は進行しています。まずは書庫全体を詳しく探してみるのはどうですか。それから、どこに行くべきかを決めましょう」

彼女の言うことはもつともだった。ホークウッドは、自分の意見を通そうとしていたことを恥じた。確かに、今ここで議論をしてもあまり意味はない。それは全員同じ意見だったようで、広い書庫の搜索が始まった。

周辺国において最大級の規模を誇るロスリックの大書庫は、幾重もの層と部屋に分かれている。書物が所狭しと積まれた小部屋もあれば、大規模な広場もある。一応敵の気配はないとはいえ、まだどこかに隠れている可能性はあった。

そして、ホークウッドの意見は無駄に終わる。

かなり奥へ進んだ所で、誰かの話し声が聞こえた。近づけば近づくほど、その声の特徴がわかっていった。明らかにクリムエルヒルトの声だ。かなり、怒りを露わにしているようで、自分たちは聞こえた方へと向かっていくだけで、すぐに彼女を発見することができた。

激しい戦闘があったようだ。広場は、所々が破壊されていた。誰かに向かって話している彼女の傍に、大柄なローブ姿の術士らしき者が倒れている。

死体から離れた所で、若い男が口を押えながらうずくまっていた。クリムエルヒルトが話しているのは、彼のようだ。

ホークウッドは、その男がここにいるのは明らかにおかしいと思った。対して関わりはなかったが、顔は覚えている。確か、名前はシモダと言ったはずだ。なぜ、彼とクリムエルヒルトが一緒にいるのか。

このまま立ち止まっているわけにもいかず、一行は広場の中へと足

を踏み入れた。



自分は確か、皆と城壁の外まで来ていたはずだった。

最後の薪を所有するロスリック。前回の遠征から十分休みを取った上で、ロスリック城への侵入が開始された。

一番驚いたのは、白い悪魔のような怪物に運ばれて、空を飛ぶ羽目になったことだ。命綱も何もない状況で、落ちたらどうなるか考えながらの道中は、お世辞にも快適とは言えなかった。

城壁内に着いた後、しばらく待機の時間があつた。全員が一度に移動できるわけではないのだ。下田は一番先の集団に入っていて、カラと共に周囲の安全を確認して回っていた。

異変が起きたのは、その時だ。突然、何かに引つ張られる感触がしたかと思えば、一気に周りの景色が変わっていた。外にいたはずなのに、どこかの部屋の中に立っている自分を、しばらく目の前の鏡で呆然と眺めていた。

周りを見ても、誰もいない。声を上げかけたが、寸前でこらえた。埃のたまっている書棚を漫然と見ていくうちに、訳のわからない恐怖が込み上げてきた。少なくとも、こんな場所は知らない。一瞬、日本に戻ったのかと錯覚をした。しかし、本の表題が見たこともない文字で書かれているのがわかり、そんな幻想も破られた。

そのまま、しばらく固まっていた。やがて、ここで待っていても何の助けも来ないと理解した彼は、恐る恐る出口の扉を開ける。

下田は少しの間だけ、恐怖を忘れた。外は吹き抜けの広場になっており、中央を跨ぐ大階段の先には、沢山の本棚が並んでいた。

素直にすごいと思った。これほどの規模の図書館は、今まで見たことがない。一体何千、何万冊あるのだろう。

静かな雰囲気背中を押されて進むうとした時、前に小さな何か落ちてきた。それは黒い頭巾をかぶった小人のようで、手に持ってい

る短剣を構えると、下田に向かって笑い声を浴びせてくる。

それが明らかに良くないものであるのは、彼にも理解できた。一步
思わず後ずさったところで、小人は飛びかかってくる。

下田はすぐに背を向けて逃げ出した。今はとにかく、脅威から離れ
ることしか頭にはなかった。階段へ向かい、二階に上がるうとした。

しかし、さらにその行く手を、もう一匹が阻んでくる。前後を挟ま
れた彼は、おぼつかない手で杖を取り出した。周囲に三つのソウルの
矢を出現させ、一本を残して相手に射出する。が、二匹とも横に飛び
のいて、かわされてしまった。

「わ、わ」

正面の小人が迫ってくる。その短剣の刃を、かろうじてソウルの矢
で相殺した。しかし魔術がはじけた衝撃と恐怖で、尻餅をつく。ま
だ、少しも状況を呑み込めていないまま、彼は迫る刃をなすすべなく
見ていた。

二匹の敵は、ほぼ同時に床へ落ちる。彼が瞬きをする間に、どちら
の頭も吹き飛ばされていた。青白い光の線と共に。

初め、何が起きたのかわからなかった。転がる二つの死骸を交互に
見てから、答えを求めするように周囲を忙しなく見回す。

笑い声が聞こえてきたのは、その時だった。

「まるで、戦場に迷い込んだ子供ね」

階段の上から、女性が下りてくる。下田の前まで来ると、死骸を魔
術で遠くへとどかした。赤い髪、からかうような口調、冷たい瞳。忘
れもしない。

慌てて、彼女から離れようとした。が、腰が抜けてしまっているせ
いで、立ち上がるできない。

「落ち着けば？」

「クリム、エルヒルト」

「自己紹介する手間が省けて助かるわ。ほら、掴みなさい。こんなと
ころで座ってちゃ、すぐに服が汚れるわよ」

伸ばされた手を、数舜迷ってから、掴んだ。思いのほか強い力で
引っ張られ、下田は立ち上がる。直後、首に刃が押し当てられている

ことに気が付き、血の気が引いた。

「なぜ、信用もしていない相手の手を取るの？　今まで殺されなかったのが不思議なくらい。あ、不死だったわね。一度や二度死んだくらいじゃ、何も学べない無能ということ」

ソウルの短剣を消すと、彼女は鼻で笑って、下田の杖を拾った。ぞんざいに投げってくる。何とか受け止めた彼は、相手を油断なく睨んで言った。

「どうして、こんな所にいるんですか」

「そのままそっくり貴方に返すわ。私からすれば、一人じゃ何もできない子供が、こんな敵地の奥にいる方が異常なもの」

「敵地…」

不吉な言葉を聞いて、下田は青くなった。

「ここはもう、ロスリックの王宮の一步手前よ。祭祀場は一体何をしているのかしらね。貴方なんかを先行に回すなんて」

下田は、事前にヨルシカから聞いた情報を思い出していた。ロスリック城は、いくつかの層に分かれている。城壁の周囲には兵士の訓練場や離れの宮があり、そしてその内側にはとても巨大な書庫がある。そこからしか、玉座の間には行けないと、注意されていた。

それではあの一瞬で、城壁からはるか内部へと移動したことになる。どうして自分がそんなことになったのか、まるでわからなかった。

ふと、視線を感じて顔を上げると、クリムエルヒルトと目が合った。彼女はじろじろと、下田を観察していた。まるで自分の理解できないものを何とか自身の枠組みに捉えようとしているかのように、その表情は複雑そうだった。

「とりあえず、行くわよ」

「え？」

「どうせ貴方一人でここにもいても、助けが来る前に殺されるわ。ついてきなさい」

「なんで」

彼女はため息をついた。

「鈍い子ね。別に、今、貴方を殺す気なんてないわ。いい？ 私と行動した方が、貴方にとつても得だったことよ」

もし、彼女が本気で言っているのだとしたら、それはもう、永遠に分かり合えないのも同然だと考えた。

「一体、何が得なんですか。ぼ、僕は貴方を信用していません。言ってることも信じようとは思いません。当たり前じゃないですか。貴方は、僕達の友達を殺した。シフも殺したんだ。それは絶対に許されないことです」

「悪かったとは思ってるわよ」

相手はあくまで余裕そうな態度を崩さない。

「で？ 代わりにここで私が死んでみせた所で、一体何が解決するの？ 目の前のことが何も見えていないのね。それじゃ駄目なの、意味がないわ」

この人はやっぱり、自分のしたことには後悔などしていないのだろう。口ぶりで、そうはつきりとわかった。

「先生が、どうして貴方と行動しているのか、わかりません。もし、あの人を脅したりとかして、無理矢理苦しめているのなら、やめてください」

彼女は笑みを消した。組んでいた腕をほどき、真面目な表情で見返してくる。

「へえ、貴方にはそう見えているの？ 私が無理矢理、望まないことを彼にさせてるって？」

低くなった声に多少怯んだものの、下田は頑張つて彼女から目をそらさなかった。

「先生は、あんな、酷いことに協力するような人じゃない。きつと、周りの誰かがそれを變えてしまったんだと思います。だから、もう、やめてください。僕達は、ちゃんと先生と一緒に現実へ戻りたいんです」

下田は、精一杯自分の気持ちを込めて、相手にぶつけたつもりだった。だが、話している途中から、クリムエルヒルトは何かをこらえるように肩を震わせた。そして話し終わると同時に、大きな声で笑い始

めた。

自らの言葉をおざなりにされたことに、怒りが沸く。

「ぼ、僕は真面目に言ってるんです。先生を」

彼女の顔が間近にまで迫った。思わず息が詰まる。相手は冷たい無表情で、下田の目を覗き込んでくる。先ほどまでの笑みはまるで嘘のようだった。

「私よりも、彼との付き合いが長いくせに、何もわかっていないのね」
彼女が一步近づくと、それに押されて下田は一步下がる。はつきりと、彼は相手の憤りを感じていた。

「あの人がどんな思いで、どれほど苦しみながら進んでいるのか、わかってもない。それなのに、あの人を理解したふりをして、的外れなことばかり言っている。貴方みたいな人を、無能と言うのよ。わかったら、余計な口は慎みなさい。殺すわよ」

言い返す口はうごかない。ただ気圧されて何もできなかっただけではない。貴樹のことを言っている彼女の表情は、本当に苦しそうだった。彼のことを真摯に思いやっていなければ、出すことのできない顔だ。

クリムエルヒルトに対する印象がぶれて、下田には迷いが生じた。背を向け、歩いていく彼女を見て、少し躊躇ったのち、足が動く。結局彼女の言う通り、今の状況を乗り越えるためにはついていくしかなかった。

「自殺して、祭祀場に戻ろうとしても無駄よ。私がそうさせないし、どうせ、貴方にそんなことできる気概なんてないでしょう」

ちくちくと様々な嫌味を言われながら、書庫を進んだ。途中いくつか戦闘が発生したが、彼女はものもしなかった。下田は完全にその背中についていくだけの存在だ。それでも我慢をしていた。そうするしかなかったからだ。

段々と疑問がわいてきたのは、少しずつこの状況に慣れてきた時だった。彼女は、どうして一人で行動をしていたのだろうか。貴樹や、他の者達と合流を目指しているのか。彼女は何かを探しながら進んでいる様子だった。このロスリック城に、貴樹達もいる。そう考え

るだけで、落ち着かない気分になった。カルラ達は自分の搜索をしているのだろうか。

クリムエルヒルトが立ち止まったのを見て、下田はようやく前方に何者かが現れたことに気がついた。見た所すぐに、術士だとわかる。かなり大柄な男で、三角帽子を目深にかぶっていた。口回りの白鬚と皺で、かなりの高齢であることが伺えた。

驚いたのは、彼女がその男に向かって、礼をしたことだった。だが、その動作はどこかおぎなりで、本気でやっているわけではないことはすぐにわかる。

「お久しぶりです。お師匠様。驚きました。まさか、王家の犬に成り下がっているなんて。私に一度殺されて、何か心境の変化でもございましたか？」

老人は答えずに、真つすぐ下田を見つめてきた。無言で懐から杖を取り出すと、青白い光が広がった。

そして、いきなり目の前で光がはじける。一瞬のことで、一体何が起きたのか訳が分からなかった。

「あら、狙いはそっちなんですね。寂しいですわ」

クリムエルヒルトは、いつの間にか五つのソウルを漂わせていた。下田は遅れて気がつく。今、自分は守ってもらったのではないか。

光の舞踏が始まる。相手と彼女のソウルの矢がぶつかっては消え、そこら中に青い火花を咲かせていた。双方ともに全く引けを取っていない。彼らにはお互いの魔術の軌道が見えているのだろうか。下田にとってはあまりに速すぎて、理解がまるで追いつかなかった。

先に変化を加え始めたのは、彼女の方だった。一定本数の矢を一つの部隊として編成し、それぞれが異なる軌道をなぞるように操作した。その難易度の高さは、三つの塊をどうにか動かせる段階にしか至っていない下田にはよくわかる。

そして、老人の頬に傷がつけられた。それをきっかけとして、彼も戦い方を変える。杖を地面につけると、そのまま下へと沈み込んでいった。

ぱつと、クリムエルヒルトが下田の方へと振り返ってくる。思わず

身構えたが、彼女の放ってきた光をかわす余裕はなかった。瞬間、周りの光景が捻じれていき、視界が暗転する。

そして彼は、クリムエルヒルトたちを見下ろしていた。

自分が今どこにいるのか、少しの間理解を要した。そして書庫の一段上の階層まで一瞬で飛ばされたのだとわかったとき、既に勝負が決しているのを目で認識した。

老人は、おそらく何かしらの転移の術を持っていたのだろう。それで、下田を狙おうとした。人質にとって彼女の動きを鈍らせようとしたのかはわからない。どんな試みにせよ、それを読んでいた彼女によって、失敗に終わっていた。

相手の四肢にソウルの塊をぶつけ、潰した。老人は地に伏せ、そのそばで彼女はつまらなそうにその姿を見下ろしていた。

「下りてきなさい」

戦いを振り返っていて、自分へ言ってきたのだと遅れて理解した。階段を下り、緊張を強めながら彼女のもとまで歩いた。やはりこの人は強い。勇気を出して死による脱出を図ろうとしても、絶対に止められるだろう。

彼女は顎で、虫の息の老人を示して見せる。

「とどめを刺しなさい」

下田はゆっくりと瞬きを二回した。彼女の顔を確かめるように見た。

「あの…」

「難しくないわ。頭を狙えば、どんなに軟弱な魔術でも殺せる。わかったら、さっさとやりなさい。時間がないの」

「ど、どうして僕がやるんですか。最後まで、あ、貴方がやればいいじゃないですか。そんなこと言われても、急にはできません」

「やりなさい。貴方がやらなければ、意味がないの。こいつのソウルを取るの。貴方だって、望んでいることでしょう」

相手の言葉の意味が、理解できなかつた。ただ、先ほど使われた彼女の転移の術が、頭の中でぐるぐると回っている。

何とか理解できるのは、彼女が自分にこの老人を殺させたがついてい

る、ということだった。それは別に嫌がらせでも何でもなく、本気で下田自身がそうしたいのだと考えているのがその言葉の調子から伝わってきた。

ソウルと聞いて、少しだけ思い当たるものがある。

「この人は、一体、誰なんですか」

クリムエルヒルトは苛々しながら答えてくる。

「ただの老いぼれよ。魔術の真髄を見たと周囲に勘違いさせて、結晶の古老と呼ばれていた。実物は、ただ年を無駄に食った弱者」

結晶の古老。

その言葉は、下田も知っていた。何度か自分の視界に入る機会があったからだ。

衝撃で、言葉が震える。

「どうして、貴方が、進化のことを知ってるんですか？」

「何？」

「とぼけないでください！ 僕は、貴方のことがわからない。固有能力の進化に、この人のソウルが必要だって、どうやって知ったんですか？」

クリムエルヒルトは、眉を寄せる。

「だから、何なの？ そんなもの知らないわ」

下田には、相手が嘘をついているかどうかなど、判断できない。

「じゃあ、僕にこんなことをさせようとするのはどうしてなんですか」
彼女の目が、遠くを見る。

「そうしなければならぬからよ。私は、そうするように命じられた。もう話は十分でしょう。いい加減、覚悟を決めなさい。亡者は殺せるんでしよう？ それと同じと思えばいいの」

詳細を話すつもりは無いようだった。それでも、彼女がこのことを事前に計画していたという事実は確かだ。下田とここで会ったのも、偶然ではないとしたら。

下田は、確信を持って言った。

「僕を、この書庫まで転移させたのは、貴方ですね？」

彼女なら、それが可能だ。何を企んでいるのかはわからないが、下

田を初めから待ち伏せしていたのだろう。彼をあの小人達から救ったのも、疑われないようにするためのカモフラージュだ。そう考えれば、もはや彼女の言葉に従う気はなくなった。

「貴方の計画していることに協力なんてしません。何の説明もせずには、信じろっという方がおかしいです」

「…一度くらいなら、聞かなかったことにしてあげる」

「や、やりません。僕は、何もしません」

できれば、今すぐにここから逃げたい気分だった。彼女を怒らせるのは、最善とは言えないかもしれない。でも、殺されることにはならないはずだった。それが下田の唯一の逃走手段であることを、相手もよく理解している。

クリムエルヒルトは目を細めて、少しの間下田を見ていた。そして息を吐き、冷酷な笑みを浮かべる。

「そう。後悔はしないでね」

胸のあたりに、衝撃を感じた。

少し顔を下げれば、胸から青白い刃が突き出ている。そこでようやく痛みがやってきて、下田は床に倒れこんだ。

背後から、刺された。呼吸ができないほどの激痛の中で、下田は見下ろしてくるローブ姿の老人を認識した。結晶の古老だ。おかしい。彼は大きな負傷をして、今も倒れているはずなのに。

「古老は、一体いるの。説明が遅れて、ごめんなさいね」

下田を刺した古老は、もう生きてはいなかった。首に大穴をあけられて、血を吐き出しながら倒れていく。クリムエルヒルトは、下田が狙われていたことに気づいていた。それでもあえて手出しをするとはなく、泳がせた。

下田もまた口の端から血の泡を吹きながら、もがいていた。背中では大量の血が広がっていくのを感じる。ダークレイスの時と同じ、濃厚な死の気配がやってくる。

クリムエルヒルトが、歩いてくるのがわかる。彼女はかがむと、下田の胸に向かって手をかざした。奇跡の光が発せられる。痛みが一気に和らいでいくのを感じて、無意識のうちに安心をしていた。

しかし、奇跡は途中で止められる。血はほとんど止まったものの、傷口は開いたままだった。激痛がまだ残っていて、下田は思わず彼女と目を合わせる。

「誓いなさい」

彼女は指先を胸に押し当ててくる。内臓をかき乱されるような痛みと嫌悪感で、頭がおかしくなりそうだった。苦痛の叫びを上げたが、彼女は表情一つ動かさない。

「私の指示に、従うと。疑問を持つことも、反抗することも禁止。あそこにいる古老のとどめを刺すの。わかった？」

返事をする余裕もない。まともな思考すらできなかった。ただ、この痛みがなくなってくれるのを一心に願いつける。

彼女の顔が鼻先にまで近づいた。

「わかった？」

何とか、顎を引くくらいの動作はできた。彼女が微動だにしないのを見て、泣きながら何度も頷く。もう、反抗しようとする気持ちは失せていた。彼は完全に、自分の心が屈服しているのを自覚する。それを情けないと思う心さえ、痛みで消えていた。

胸を治された後、下田は吐き気を覚えながら、魔術を発動させる。矢の狙いを定めると、虫の息の古老へ向かって放った。

目を背けようとしたら、彼女の手が顎を掴んでくる。無理矢理固定されて、相手の頭に穴が開く様子を見せられた。

「痛みに、まるで慣れていないのね。他人を殺すことへの抵抗も強すぎる。克服しなさい。貴方は、これから、もつと理不尽と向き合うことになる。果たすべき使命のために、全力を尽くすの。いい？」

頭が混乱していて、彼女の言っている意味もわからない。いや、正常な状態だったとしても、その言動を理解することは不可能だっただろう。気がおかしくなっているとしか思えなかった。前の、地下墓で会った時は、気にも留められていなかったはずだ。あの後、一体彼女に何があったというのか。

荒い呼吸のまま、下田はうずくまる。脳の飛び散る様子が、何度も脳裏に浮かび上がってきた。全身に鳥肌が立っている。何度も吐き

そうになっっているのに、できないでいるもどかしさと苦しさで、また涙を流した。

男の声がしたのは、その時だった。

「何を、しているんだ。クリムエルヒルト」

横を見ると、複数人の男女が書庫の広場に入り込んできていた。クリムエルヒルトは下田にだけ聞こえる大ききで舌打ちをした。

声をかけてきた男には、覚えがある。名前は、ホークウッド。祭祀場では怠けている姿しか見なかった。それから脱走をして、貴樹と一緒に行動をしていた。

その横にいる女性も知っていた。ホークウッド達に連れ去られたと、祭祀場では言われていたが、そのような様子ではない。ミレーヌは、下田を見て純粋に驚きを示した。

アンリとホレイスも、祭祀場を抜けて貴樹の方へ付いた者達だ。つまり、彼の仲間達がそろったということだろうか。ただ、肝心の貴樹本人の姿はなかった。そして、全く知らない女性が一人、増えている。「説明をしてくれ」

下田が落ち着いてから、話が始まった。彼は囲まれて、観察されている。せつかく気分が整ってきたのに、心の底から休まることができないでいた。

「彼を発見したのは、書庫のもう少し外側の所よ。彼の話を聞いてみたけど、本人も状況をよくわかっていないみたい。ほっとくわけにもいかないし、一緒に行動してたの」

何か、口を挟む勇氣は持てなかった。嘘を指摘したとして、その返しにどんな目にあわされるのか、想像したくもない。

「嘘だな」

しかし、下田の葛藤など何でもないかのように、ホークウッドが言った。

「何が？」

「こいつが祭祀場の奴らの付き添いもなく、一人でいた理由はどうでもいい。それよりも、お前がああ声を聞いても、戻ってこなかった方がおかしいんだ」

クリムエルヒルトは口を閉じた。

「異常を認識していたのにもかかわらず、俺達と合流しなかったのはなぜだ？ 戻る時間は十分にあった。それなのにお前はさらに奥へと書庫を進んで、こいつを助けたっていいのか？ 偶然で片づけるのは難しいな」

「それで？」

彼女は挑戦的に笑う。ただそれは下田に向けていたものとは性質が違うような気がした。どこか、楽しんでるようにも思える。そんな顔をするなんて、今までとは想像もつかなかった。

「私を疑って、何がしたいの？ 誓約から抜けろって？」

「いや、別にどうでもいい」

きよとんとした顔も、彼女にしては珍しく思った。

「お前はお前で、自分のやりたいことがあるんだろ。やればいいじゃないか。とやかく言う権利もないしな。ただ、タカキや俺達へ害の及ぶようなことはするなよ」

ホークウツドは変わった、と下田は強く思った。彼にはどこか、余裕が生まれている。祭祀場にいた頃とは大違いだ。

他の者達はあまり納得をしていないようだったが。彼女を糾弾する以上に優先すべきことがあるらしい。下田は未だ浮いている自覚を持ちながら、彼らについていった。

話によれば、貴樹は今危険にさらされているらしい。敵の罠によって、分断されたそうだ。それを今、助けに向かっている途中だという。「お久しぶりですね」

遠慮がちに、アンリが話しかけてくる。どう話したらいいのかわからないのは、こちらと同じだった。今ここで、どうして先生についていったのかを訪ねても、仕方がないだろう。彼女達自身が納得している時点で、下田の言葉など意味はない。

「彼らは、どうしてますか？」

アンリは、複雑そうな表情になっている。

「もうロスリックまで来ているということは、問題なく進んでいるんですね」

下田は答えない。その奥にある警戒を察したのだろう。アンリは苦笑をした。

「ごめんなさい。そちらのことを探る意図もありました。話したくありませんよね。でも、これだけは教えてください。貴方を含めた灰達は、ちゃんとした扱いを受けていますか？」

「それは、どういう意味ですか？」

思いのほか自分の声が大きくなったことに、驚く。祭祀場を、引いてはヨルシカを疑われたことに、自分でも意外なほど抵抗を感じている。

「いえ、ただ、私達が離れてからも、色々な困難があったと思うので。私の身で言うのもおこがましいですが、心配していました」

「特に、問題はないです。皆、優しいです」

「そうですか」

アンリは何かを繕うように微笑んで、周囲の警戒に戻っていった。見た所、彼らは玉座の方を目指しているようだった。貴樹がそっちにいると考えているらしい。このまま先へ進むことへの不安はもちろんあったが、祭祀場の者達と合流することはしばらく望めないのだ、ついていくしかない。

何か、情報を得ておくべきだろうか。この人達は、二つの薪を持っている。いずれ、戦うかもしれない相手なのだ。ここで、自分が役に立てることがないか、下田はしばらく考えていた。

彼らは、お互いのことをある程度は信頼し合っているようだった。戦いになれば、連携をして、あつという間に片つけてしまう。常に和気あいあいというわけではない。それでも、共通の目的をもって進んでいるという連帯感が彼らの根底にあるのが感じ取れた。

ただ、その中においても、一人だけ異質な存在がいた。下田は、一見してか弱い修道女のように思える相手をちらりと見た。

彼女だけは、今まで一度も会ったことがない。一体、どのような経緯で、ここにいるのだろうか。

いきなり、彼女が横を見てくる。そして、穏やかな笑みを浮かべた。下田は少し戸惑った。それまでの彼女の雰囲気とは、かなりかけ離れ

た表情だったからだ。

鎌をしまうと、こちらに向かって近づいてくる。

「訊きたいことがあるんだけど、いい?」

「え、あ、はい」

顔に似合わない軽い話し方で、彼女は続ける。

「みおちゃんのこと、知ってる?」

「えつと?」

「戸水美織。あの子も、祭祀場にいるんでしょう? 元気?」

答えるのにも、なぜ相手が彼女のことを知っているのか、不思議だった。

「どうして、」

質問をする途中で、腕を掴まれる。そのまま引き寄せられると、首に腕が回ってきた。横抱きにされるような形で、一気に歩きづらくなる。そしてそんなことよりも、全く知らない女性に密着されているという事実が、焦りを生ませた。

「ま、いいじゃないの。細かいこと気にしないで。教えてくれると、助かるんだけどなあ」

離してほしい一心で、下田は答えた。

「げ、元気ですよ」

「君は、あの子と話すの?」

「え? ええ、まあ」

「ふうん。好き?」

話の進みが速すぎて、下田は困惑しか示せなかった。

「な、なにが、ですか?」

「大抵の男の子なら、嫌いになることはないと思うんだ。あの子、私が言うのもあれだけど、結構可愛いし。ね、どう思ってるの?」

「や、その、わかりません」

「じゃあ、下田くんは別に好きな子がいるとか」

訳が分からなかった。どうして、よく知らない人とこんな話をしなければならぬのか。離れようと腕を動かそうとしたが、まるで拘束は解けない。見た目に反して、相手の力はかなり強いようだった。軽

く、恐怖を覚える。

「全員、止まって」

助け舟を出してくれたのは、クリムエルヒルトだった。彼女の声で、全員が警戒を露わにする。しかしどこにも目に見える脅威がないので、不審の目が集まった。

「周りに敵もいないようだし、ちようどいいと思って」

クリムエルヒルトは、こちらを見つめてきた。

「貴方が何をできるのか、まだよく知らないの。魔術でも何でもいいから、全部見せなさい。今、ここで」

なぜ、自分がそんなことしないといけないのか、不満が出かかった。しかし、その前に脳の奥から、声が聞こえてきた。

『返事はしなくていい。動揺するのも駄目。さつき貴方の胸を治した時、毒も入れたわ。致死性ではないけど、死ぬほど苦しむことになる毒。状況がわかったら、瞬きを一回しなさい』

周りには、クリムエルヒルトの声が聞こえていないようだった。音送りの魔術だ。その指向性を強めて、下田にだけ届くようにしている。彼は、呼吸を何とか落ち着かせながら、瞬きを大きくした。

『私の言うことは全て聞くこと。求めるのは、それだけよ。わかったら、自分の技をすべて示してみなさい』

ほかに選択肢はなかったので、下田は魔術のいくつかから始めた。カルラから教えてもらったことを一つ一つやっていく。とはいえ、大した数ではなかった。それぞれの精度もそう高くないことは自覚してたものの、それでも見物する者達の微妙な表情を見て、顔が熱くなった。もはや、辱めだ。

しかし、最後にやった見えない体の魔術だけは、自信があった。発動させ、それが終わると、クリムエルヒルトは大きく頷く。

「これは、使えるわね。大体決まった」

「なあおい」

ホークウッドが、不思議そうに尋ねる。

「お前はこいつを使って、何かするつもりなのか？」

「そうよ」

彼女は何かを決意するかのように、目を閉じた。

「ロスリックの二人の王子を、殺してもらおう」

『絶対よね』

聞こえてきた彼女の声で、下田はそれが逃れられないことだとすぐに理解をした。そして確信もする。二人の王子とはつまり、双王子。そのソウルと、古老のソウルは、彼の固有能力を進化させるのに必要なものだった。

彼女は自分の助けになるつもりなのか。その行動の真の意味は、いくら考えてもわからなかった。

38. 天使とゲルトロド

予想よりも早く対象が見つかって、貴樹は少々機嫌を治した。

ロスリックにおいては、三柱と呼ばれる王家を支える役職がある。騎士、祭儀長、賢者。その権力は、城にそびえる三つの塔に象徴されている。ならば、エンマはそのうちの一つにいてるのではないかと考えたのが、当たったようだった。

塔内の扉は固く閉ざされていたが、貴樹にとっては障害ですらない。ただ、あまり物音を立てすぎるともよくなかった。あまり、ゲルトロドを刺激したくはないからだ。

「階段上がるから、しっかり掴まって。大丈夫、ゆっくり行くから、怖くないよ」

混乱と不安で一杯の彼女の顔を撫でて、進み始める。再び目を覚ましてから、全くしゃべる気配がない。貴樹が味方なのだと理解させるのも一苦勞で、書庫でのことは完全に忘れていたようだった。

だが、貴樹につかまって歩くことで精いっぱいの様子を見て、彼は考えを改める。今の彼女は、まるで赤子のようだ。移動中、何度泣かれたかわからない。それはそれで可愛かったのだが、彼女の記憶がどんだん過去へとさかのぼっている点には、不吉なものを覚えた。このまま放っておけば、どうなるのか。

「大丈夫？」

後ろをついてきている画家の少女が、言ってくる。

「うん。今は比較的落ち着いてるし。このまま進もう」

「その子のことも、あるけど」

相手の視線が、自分の顔をなぞるのがわかった。

「……そうだね。自分で自分の顔を見れないからわからないけど、やっぱり酷い？」

「今、こうして歩いて話せているのが、不思議なくらい」

痛みは感じなかった。状態が落ち着いたのか、それとも感覚が麻痺しているのか。どちらにせよ。貴樹には休むという選択肢はない。今はこの塔の最上階を目指す。それだけを考えることにした。

一番上には、個室が一つだけある。その扉には鍵がかかっていた。それを蹴り壊して、中に入る。

本当なら三つの塔全てを回るつもりだったが、一番最初に当たりを引くことができた。

「彼らは、敗北したのですね」

木の丸椅子に、小柄な老婆が座っている。来ている法衣は、ある程度の権威を示している。祭儀長エンマは、一見冷静でいるように思えた。

「勘違いしないでいただきたいのは」

貴樹はベッドに、ゲルトルードを座らせる。そしてもう一つの椅子に座ると、エンマと向かい合う形になった。

「僕は、貴方をどうこうするつもりはないんです。ロスリックへ来たのも、彼女の話を聞くためです」

そうして、ゲルトルードを示して見せる。

「貴方の言葉には、何も信憑性がないと、自覚していますか？ オスロエス様を殺し、兵士たちも殺し……。今日、貴方一人によつて、ロスリックは滅ぼされるのでしょうか」

「はぐらかささないでください。オスロエスに関しては、貴方達も扱いに困っていたはず。処理されて、むしろありがたいと思つているのでは？ 他の者達、ゴットヒルトなどは、正当な防衛をしたまです。相手が殺す気なら、こちらも覚悟を決めるしかない」

(こいつ、何を怖がつている?)

エンマの様子に疑問を覚える。彼女の額には汗がはつきりと見えた。しかもその恐怖はおそらく貴樹に対してではない。あえてそこへ視線を全く向けていないのが、逆に過剰に意識をしていることへと証拠になっていた。

貴樹は俯いた。大きく溜息をついて、身体的にも精神的にも疲労しているということ、相手に印象付ける。

「本来なら、彼女の縁者である貴方たちを、誰も殺したくはなかった。僕は、ロスリック側と手を結ぶことさえ考えていました。共に、火継ぎに対抗するため、協力することだつてできたはず。正直、今からで

も遅くはないと思っています」

「戯言を」

エンマはここで初めて、感情の平衡を崩した。顔を上げれば、はつきりとした憎悪の目を、貴樹に向けてきている。

「愚かな言葉を、そうとわかっていて口に出す貴方は、始末に負えませんか。今更、私達の間にかしらの関係を結ぶ余地があるとしても？ それに、酷い勘違いもしています。縁者などではありません。それはただの、化け物です」

ゲルトルードを見るエンマの表情は侮蔑と恐怖に染まっていた。

「そこなんです」

貴樹は語尾の震えを自覚した。小さく深呼吸をして、己に自制を呼びかける。

(我慢しろ我慢しろ我慢しろ…)

頷いて、相手の意見に理解を示すふりをする。

「結局、彼女という存在において、貴方と僕で決定的なすれ違いが生じてしまっている。僕には、分からないんです。貴方達がこの子を恐れる理由は何ですか。もし、彼女がゲルトルードでないのでしたら、一体、何者なんですか？ 教えてくれるだけでいいんです。それがここへ来た目的ですから」

椅子から立ち上がり、貴樹は膝をついた。作法が日本と違うのかはわからないが、こちらの気持ちに最大限に伝わるように、頭を下げる。

ここでそんな行動に出るとは思ってもしいなかったのだろう。エンマは戸惑うように声をかけてきた。

「やめなさい。貴方にそうされたところで、憎らしさが増すだけです。…そこまで言うのなら、一つ約束をしてください。彼女のことを理解したら、すぐにここを離れ、二度と戻ってこないで。私達とは関係のない、どこか遠くで生きるのなら、こちらでも干渉はしません」

貴樹は微笑んでみせる。

「ありがとうございます。もちろん、従います。話してくれるだけで、満足ですから」

エンマは頷き、考えをまとめるように目を閉じた。十秒ほど待つ

と、ゆつくりと話を始める。忌まわしい思い出を振り返っているような、低い声の調子で。

「貴方も薄々わかっていると思います。それは、王家の長女、ゲルトールドではありません。言わば、幻です」

ロスリックは、火継ぎのために王家を存続させていると言っても過言ではなかった。代々ふさわしい薪の器となるために、あらゆる方法が選ばれた。

だが、呪われた血の営みの結果か、オスロエスと王女との間に生まれた子は、悉くが体に異常を持っていた。

長男ロスリックは、歩みと体の頑丈さを。ローリアンは歩みと声を。二人には到底、王としての役割を全うできるとは誰も考えてはいなかった。故に、ただ薪の器として生きていくことが、彼らの使命になった。

「女王陛下が、新たに子を身ごもり、お産みになった時、たとえそれが女の子であったとしても、我々は大いに喜びました。その子は、何の障害も持っていないかったからです。産まれた時に泣き叫び、母親に抱かれた時には安堵の表情を浮かべる。そんな当たり前のことをしただけで、その子の存在は大きくなっていました」

だが結局、血の呪いというのは逃れられないものなのだろう。ゲルトールドが大きくなり、営みのある程度始めると、徐々に異常が現れ始めた。

彼女はそれまでよく笑う子供だった。母親によく懐き、使用人などに対して甘えてくる。それが急に、よく泣くようになった。事情を聴いてみれば、たどたどしい言葉で、何度も同じ答えが返ってきた。友達がおかしいと。

彼女はその時、ほとんど外には出ていなかった。城内ですべてが完結していた。使用人や家族がいるものの、友達ができる機会はあるはずがない。

そしてさらに時間が過ぎると、事態は悪化した。

彼女を世話する使用人が次々と死体で見つかった。どれもがほとんど体の形を保っていないく、全身のいたるところに穴を空けられて息

絶えていた。次第に世話をしようとする者はいなくなり、彼女は書庫の奥に引きこもるようになった。

「それでも、王女様は定期的に会いに行きました。危険だと我々が止めるのにも関わらず。あの方だけは、攻撃を受けることもなく。無事でいられた。：ですが、その状態も長くは続きませんでした」

ある時突然、王女は血相を変えて書庫から出てきた。いわく、ゲルトルードの声と光が失われたと。

危険を覚悟で数名が検査したところ、彼女は確かに視力と声を失っているようだった。治療しようと試みた所で、彼らはその存在を目撃することとなる。

ゲルトルードと瓜二つの少女が、苦しむ本人の傍に立っていたという。その背中からは白い光の翼が生えていた。そして次の瞬間には、書庫内の全ての者が殺された。光の線によつて、全身を貫かれて。

「我々は、彼女に近づくことすらできなくなりました。書庫の扉を封鎖して、あれが外に出ないようにするのが最優先だと、オスロエス様が判断したのです。：そして、おかしなことが起き始めたのは、その頃からでした」

空から光が降つてくると、使用人の一人が言い始めた。その言葉はやがて他の者にも伝染していき、城の三分の一ほどが、光を幻視するようになった。彼らは時間が過ぎていくほどに摂り付かれたような行動をとり始める。夜の決まった時間になると、書庫の前に集まり出し、祈りを捧げるようになったのだ。

新たな信仰を得た彼らは、ある存在に焦がれていたようだった。天からの使い。口をそろえて、天使という言葉がさも高尚なものであるかのように言っていた。

王家は、すぐにこの天使信仰を異端だとして排除しようとした。が、その判断を巡って城内は分裂。三柱のお互いに対する牽制も相まって、国は一時期大いに荒れた。王家の力に陰りが見えていたのも、内乱を助長していたのかもしれない。

王族にも悉く不幸が襲った。オスロエスは次第に正気を失っていき、竜信仰に傾倒するようになった。王女は娘の惨状を憂いたのか、

姿を消した。そして、ロスリックとローリアンは、王家の使命であった、火継ぎを拒否したのだ。

「少し、訊きたいことが」

貴樹は長い話を整理しながら、尋ねた。

「オセロットという、名前に覚えは？ 王家の末子だと記憶しているんですが」

エンマは驚きを表した後、溜息をついた。

「いもしない末子です。オスロエス様が狂気に落ちた後、愛でるようになった幻。あの方にはもはや、現実を認識するの力はありませんでした」

嘘をついているわけではないことは、確認できた。オセロットは、王女が失踪する前に産んだとゲームにはあったが。この女が認知していないはずがない。だとしたら本当に、幻の存在ということになる。

彼女の話は続いた。

「このままでは王家は没落していくと、我々は考え、ついに元凶を取り除くことにしました。あるだけの戦力をそろえ、考えうる対策をし、書庫内に突入しました。そこで、ゲルトロード様が死んでいるのを発見しました」

衰弱死だろう。誰も来ない書庫内では、世話をしてくれる人も、食事を作ってくれる人もいない。

そしてそのそばに倒れていた少女。ゲルトロードとそっくりの彼女の処理に困っていたところ、エルドリッチが接触してきたという。祭祀場に対する対抗策として、同盟を結ぶための取引材料にもなった。

「死体は？」

「はい？」

「書庫になぜ、ゲルトロードの死体を残しているんですか。埋葬するべきでは？ それとも、動かせない事情でもあるんですか」

エンマは何を言っているのかわからない、という顔をした。

「もちろん、死体は埋めました。安らかに眠れるよう、何十もの術の仕

掛けを施して。貴方は、一体何を言っているんですか？」

貴樹はしばらく沈黙した。ベッドに静かに座っている、ゲルトロドではない女性を眺める。彼の視線を追ってから、エンマは顔をやや青くした。

「貴方が何を考えているにせよ、それを傍に置いておくことは、お勧めしません。私の話を聞いて、理解したでしょう。今まで、一度もそれに牙をむかれたことはないのですか？」

エンマの目が、貴樹のいくつかの傷の上を滑っていく。なるほど、と、確信を得た。書庫内で片耳を奪った光線は、やはり天使の術なのだろう。視界が悪くなっていたとはいえ、残り火の動体視力でも捉えることはできなかつた。

エンマの話に、虚偽の部分はない。起こったことは、確かに起こったのだし、彼女が危険な存在になり得るとい話も、参考にはなつた。しかし、貴樹は途中から、相手に対する侮蔑を抑えていた。

これはあくまで、彼女の主観の話でしかない。

「ロスリックにおいて、火継ぎのためにおぞましいことが行われているのは知っています。それがゲルトロド本人にも施されていたことも。貴方がたはさも、自らを被害者であるかのように語りますが、当然の報いを受けたという考えは、ないんですか？」

「何を…」

「貴方達は、彼女をエルドリツチに引き渡し、その後受けるであろう苦痛も容認したばかりか、法王の城でも、扱いを変えようとしなかつた。よくもまあ、そんなに彼女に対して、非道になれますね」

エンマは、完全に狂人を見る目つきになっていた。彼女は憤激した様子で椅子から立ち上がり、貴樹を睨みつけてくる。

「話を聞いていたんですか？ それはもう、ロスリックの長女ではありません！ あらゆる物に災いをもたらす、異端の化物です。存在の末梢を望むのは、正常な者として当然のことでしょう」

「罪悪感はないと？」

「答える意味もありません」

「見てください」

貴樹は、顎で、彼女を示した。エンマもまた彼女を見るが、よくわからない様子で視線を戻してくる。彼は足の指をゆつくりとほぐした。

「どう思いますか？」

「…」

「彼女の姿形を見て、何か感じませんか」

「…何も」

ぐいっと、自分の顔を相手へ近づける。相手は思わずといった形で身を引いた。

「貴方の目は、何のためについているんですか？　彼女を、ちゃんと見てください。これほど、愛らしい生き物は、他にいない。見ているだけで、あらゆる人を幸せにするでしょう。そんな彼女を、貴方達は残酷に扱った。自らがどうしようもない屑だと、理解していますか？　それとも老いぼれて、そんなこともわからなくなりましたか？」

エンマは一瞬言葉を失ったようだったが、負けじと言い返してくる。

「貴方は、どうかしています。おかしい。嫌悪こそすれど、それに情を移す余地など微塵もありません！」

「それ？」

貴樹はエンマへ歩み寄る。その迫力に押され、彼女は窓際にまで後退した。彼はさらに近づき、彼女を見下ろす。

「つくづく、癪な婆さんだな。どうして、彼女をもの扱いなんてできるんだ？　今までの自分の言葉全てが、寿命を縮めていると、理解していたのか？　猶予は与える。彼女に、謝罪をしろ。自分の間違いを認め、頭を下げて、彼女に許しを請え」

「狂人め…」

渾身の力で、貴樹はエンマの体を蹴った。窓へと吹き飛び、騒々しい音で硝子が割れる。欠片が全身に突き刺さる前から、彼女は悲惨な状態になっていた。彼の本気の蹴りの衝撃で胴体が破裂していた。

ほとんど息絶えているであろうエンマは、城壁へと落ちていく。その体が地面に衝突し、原形もとどめなくなるまで、貴樹は見物してい

た。初めから、殺すつもりではあった。必要な情報を引き出すまで我慢をしていたのだが、結局失敗に終わった。今のところ、天使をどうすれば元の火守女へ戻せるかが、わかっていない。本当ならば抑えるべきだったが、これ以上彼女への侮辱を吐かせることは許せなかった。

彼女自体は、再び眠っている。間隔がどんどん短くなっているのはわかっていた。今の彼女は幻。それが本当ならば、消えることだってあり得る。

(残されているのは、あいつらだけか。もう、玉座に向かうしかない) ロスリックとローリアン。彼らならば、彼女の事情もわかっていいる。そのはずだ。解決策を得るとしたら、彼らからしかない。

「貴方のことが、少しだけわかった。貴方には、二つの面がある。精神の拮抗。それが、正気を保っている要因なんだね」

貴樹が火守女を抱えるのを手伝いながら、画家は言う。

「そうかな。僕はできるだけ、素直に生きてきたつもりだよ。表も裏もない人間だと思っている」

『嘘つけ』

「うん。素直ではあると思う。貴方はどこまでも純粹だから、選ばれたんだ」

(こいつ、意味深な発言ばかりして、何なんだ？ 俺の気でも引きたいのか?)

いい加減、彼女の知っていることを全て聞き出しておくべきだろうか。自分の知らないことを、他人が思わせぶりに隠し持っているというのは、気に食わない。

少女のへの尋問を計画している間、彼は部屋の出口へと向かおうとした。が、すぐに体を反転させ、画家の少女の体を軽く足で持ち上げる。

急な行動に目を丸くした彼女の下に、斧が突き立った。割れた窓から、飛んできたのだ。まだ何かいるのかとうんざりして、その方を見れば、外を大柄な騎士が飛んでいた。

金の重厚な鎧に身を包み、巨大な斧を持って、空中に留まっている。

それを可能にしているのは、背に生えている翼だ。白い翼をばたつかせる騎士が、三体。その内の真ん中が、祈るように手を額に当てた。貴樹は即座に判断をして、部屋の壁に大穴を開ける。背に火守女を、肩に少女を捕まらせ、壁の外へと飛び出した。

何本もの光柱が、塔に降り注いだ。一本一本が十分な破壊力で、彼らが先ほどいた部屋も含めたすべての階層が、一瞬でただの瓦礫と化した。

(そういえば)

彼は城壁に着地すると、少女に離れておくよう指示する。

(あのババア、天使信仰にはまった奴らがどうなったか、何も言っていなかったな)

三体の羽騎士は、一様に狙いを火守女へと向けていた。崇拜の対象であるがゆえに、殺意はない。しかし、その身をさらおうとしているのは確かで、邪魔をする貴樹に対しては容赦がなかった。

偶然かどうかは、分からない。ただこの時、彼にはあまり余裕がないことは確かだった。火守女が集中的に狙われている状況で、その守りに集中しなければならぬこと。そして体の状態が悪くなっていることも、原因の一つだっただろう。

三体目のとどめを刺したところで、画家の少女が捕らわれていることに気がついた。急に出現した聖職者らしき男が、彼女の体を拘束している。

「マクダネル……」

坊主の男は何も言わず、そのまま膿の底へと沈んでいった。その直後、貴樹の足がそこを踏みつぶす。何の手ごたえも感じられず、舌打ちをした。

(やられた。ち、なんで守り手の奴が、こんなところまで来てんだ?)

後でもつけられていたのか? あいつは大事だ。助けに行かねえと)だが、火守女を拾った所で、その考えはなくなった。彼女の姿が、再びぶれだしたからだ。それはすぐに収まったものの、今優先すべきことが何なのかを決断するには十分だった。

奴らが、どうして画家を狙ったのかは後で考えよう。おそらく殺す

だけのためではないはずだ。少なくとも、命に危険が迫るのは随分先になるだろう。

彼は火守女の髪に鼻先を触れさせてから、先へと進んだ。

道中、騎士の数は少なかった。さきほど貴樹がかなりの数を減らしたのもあるだろうが、それにしたところで玉座付近の守りは薄い。どこか別の所へも、動員されているようだ。仲間と合流する手もある。それでも、彼は一人で進むことを選んだ。

大階段を上がり、閉ざされている大扉をこじ開ける。中は静寂に包まれていた。ただ静かなだけというわけではなく、緩やかな滅びを受け入れているような感じが、内装に表れている。貴樹は内心とは違い、急がずにゆっくりと歩いた。玉座にいる相手に、余計な刺激を与えるのは良くないと思っていた。

仕えるものが誰もいない間の奥で、彼らは侵入者を眺めていた。

貴樹は玉座の前まで来ると、一応の礼だけはしておいた。

「初めて、お目にかかります。今日は、お聞きしたいことがあって、参上いたしました」

横のローリアンに目を向けてから、ロスリックは頷いた。

「知っている。外が騒がしいのは、貴公のせいでもあるのだろう」

「それでも、書庫から転移させたのは貴方ですから。こうなることも、わかっていたんでしよう。できれば、戦いにはしたくない」

大方エンマにでも頼まれて、転移の術を仕掛けたのだろう。自分を追いつめた張本人ならば、手加減をするつもりはなかったが。彼らとは会話を続けるべきだと理解していた。

「すまない。こんな城も、王家にも未練はないのだ。しかし、貴公という存在には、興味があつた。その子を持ってきた経緯にも。一度、会ってみたいと思った」

ちょうど火守女へ注目が行ったので、本題に入ることにした。

「彼女の今の状態にも察しがついていることと思います。正直、貴方がたの薪にも、火継ぎという儀式に対しても、関心はあまりありません。今、彼女は苦しみ、存在ごと消えかけています。僕は救いたい。何か、方法を知っているのなら、教えてください」

ロスリックはしばらく彼女を観察し、長く息を吐いた。言いづらいことを言う前特有の、躊躇うような間があった後、話し始める。

「我々は、あの子と全く関わりがなかった。意図的に隔離されていたのだ。故に人伝に聞いた話でよければ、教えよう」

ロスリックの話は、ゲルトロードがエルドリツチに引き渡されるまでの経緯が含まれていた。自分たちでは手に負えないと判断した王家は、天使の少女を人食いに譲渡することに決めた。そこは、エンマとほぼ同じような話だった。

ゲルトロードの声と、光を奪った存在には、例えそれがゲルトロードの生き写しだとしても、容赦をされなかったのだと。

貴樹の聞きたいことは、そんなものではなかった。今の彼女の状態をどうするべきか、解決策を求めているのだ。

その旨を言うと、相手は少し考える表情になった。

「天使という存在は、まだ理解の及ばないところが大きい。ゲルトロードにとっては、昔から視えていたものだった。彼女の、生まれ持った力によって、それが顕現した。幻が、誰にでも見える現実になったというわけだ。今、その存在が危うくなっているのは、様々な要因が重なった結果だろう」

「要因、ですか」

「その子が王家から追放されて長い年月が経つ。ただの術ならば、とつくに効力を失っているほどの長さだ。それでもなお今まで存在してこれたのは、おそらくゲルトロードの瞳がその子自身に移されたからだろう。天使を視る力。それが宿った瞳があるうちは、その子も存在していられた」

だが、彼女が目を持っていた時期など、最初の方だけだ。

「ですが、その瞳は、途中でエルドリツチに奪われた」

「それが、最初の危機だったのだろう。あのまま人食いの傍にいれば、消え失せていた。それを救ったのが、祭祀場だと聞いている。ルドレスが、その子を火守女にしたそうだな。完全な憶測でしかないが、篝火の力というのは、大きい。彼女をそこへ結び付けることで、存在できるだけの余裕を持たせていた。だが…」

貴樹を見てくる。

「今の状況を見れば、貴公が祭祀場からその子連れ出したことくらいはわかる。どんな事情があったにせよ、再び彼女へ危険が迫った」薄々考えていたことだった。イルシールの地下牢から始まって、時折彼女が苦しんでいるのを見た。貴樹のソウルを与えれば収まったが、やがてそれさえも効果がなくなっていったということだろう。ソウルの寄与さえ受け付けなくなったのは、彼女の存在が危うくなっているのと関係がある。

貴樹は、自らの行動を後悔してはいなかった。どうにかしなければ、彼女は今ここにいなかったのだ。だが、後悔していないからといって、責任をとるつもりがないわけではない。

「では、瞳を取り戻せば、まだ彼女には希望があるということですね。一刻も早くエルドリツチを探し出さないと」

ロスリックはその考えに対して、何か言いたいことがあるようだった。しかし、その前に彼の視線は、貴樹の後ろへと向けられる。そして、目が思いつきり開かれた。

貴樹もまたそれを追って見ると、火守女が立ち上がっているのが分かった。しかし、その様子は異常だ。顔が病的なまで青白くなっており、その立ち姿は酷く不安定だ。意識がないまま、無理やり体だけが動かされているようだった。

彼女は、また、あの叫び声をあげる。聞く者全てを拒絶する声だ。自分が光に包まれることが分かってても、貴樹は抵抗しなかった。視界が一瞬で入れ替わり、再び鮮明になった時には、ロスリックの隣まで移動していた。

先ほどまで彼がいた床には、穴が開いている。小さなものだが、その貫通力は驚異的だった。

「ありがとうございます」
「ここも危険だ。もう、手遅れらしい」

貴樹はまだ諦めてなどいない。だが、目の前の異様には、今まで感じたことがないほど動揺させられた。

火守女が宙に浮かんでいる。背中に光の翼を生やし、貴樹たちを見

下ろしてきていた。その顔には感情がなかったが、おぞましい憎悪の叫びが全てを物語っている。はつきり言って、この空間には少しもいたくないと思つた。

だが、気になることもある。飛んでいる火守女の真下で、誰かがひざまづいていた。幼い少女のようだが、顔の特徴はよくわからない。全身が干からびていて、とても生きている存在とは思えなかったからだ。書庫にあつた死体が、動いている。

叫び声が一層大きくなると、貴樹たちへ向かつて、何本もの光線が向かつてきた。貴樹は上へと飛び、天井を突き抜けた。光線の速度はまさに脅威だが、追尾してくるわけではないらしい。王宮の屋根にまで上り、一息ついた。

「あれは、ロスリックのなにかもを滅ぼすつもりだ」

二人の王子もまた、同じ場所まで避難していた。動けないローリアンも、転移によって運んできたのだろう。ロスリックはややくたびれている様子だった。

「放つておいても、戻るわけではありませんよね」

「それどころか、このままでは彼女自体が危ない。自身の力を使いきれば、あとは、滅びるのみだろう」

「本当に、そうですか？」

彼は王子と視線を合わせる。エンマの話聞いた時から膨らんでいた疑問が、ある仮説にまで行き着いていた。

「天使という存在には、まだ謎が多い。例えば、祈り子のようなものがいれば、消えるまで相当の時間がかかる可能性もあります」

「祈り子だと？ そんなもの、どこにもいなかった」

「見えて、なかったんですか？」

「まただ、と思つた。彼女に関して、貴樹しか知覚できない現象が重なつていた。」

死体のことを話す。特徴を聞いていくと、ロスリックは信じられないと言わんばかりの表情になった。

「それは明らかにゲルトロードだ。つまり、彼女自身が、奪われた相手であるはずの天使に利用されているということか」

「とにかく、止めるためにはその死体をどうにかする必要がありそうです。何とか接近するしかありません」

「それでどうなる。祈る者を消せば、天使もまた消える可能性が高い。結局後には何も残らなくなるぞ」

貴樹もそこで思考が詰まっていた。エンマの話が実は逆なのだということは察しがついている。今、助ける相手はゲルトロードではなく、天使なのだということも理解している。そこから先がわからなかった。今からエルドリツチを見つけ出し、瞳を返してもらう時間はない。

考えていると、ロスリックが見つめてきているのに気がついた。

「あの子以外に何かが見えると、それは確かだな？」

「はい」

「…貴公の視覚は、特殊なのかもしれない。どうしてなのかはわからないが、あの子と非常に親和性を持っているようだ。そうでなければ我々でも認識できない祈り子を見られるわけがない。もしかすれば……、貴公の瞳はすでに感染しているのかもしれない」

感染。ここにきて、引つかかる言葉出てきた。

「天使というものが王家にとって恐れられたのは、二つの伝染力があつたからだとされている。一つは信仰。彼女は誰かに幻を見せて、それを信じさせていた。天使信仰の広がりには、あつという間だった。三柱達がまるで止められないほどに。もう一つは幻自体だ。彼女に影響を受けたものは、彼女の存在を確信する。それがさらに、存在の強化につながっていた」

屋根を光が突き破ってきた。居場所がほとんどばれている。

「つまり？」

「彼女の祈り子とやらが消えても、存在を保つためには、瞳が必要だ。たとえばそれがゲルトロードの瞳ではなかったとしても、少しは代用が効く可能性がある」

ここにきて、貴樹もようやくわかってきた。

「僕が、祈り子の代わりをすればいいということですか？」

「いや、駄目だろう。今までも、貴公はあの子を実際に存在しているの

だと信じ、そう扱ってきたはずだ。それでもああなっているということとは、ただ貴公が祈るだけでは意味がない」

ロスリックは、貴樹の顔を指差してくる。

「貴公の目を、あの子へと移植すればいい。そうすれば、根本的な解決にはならないだろうが、おそらくしばらくは落ち着かせることができるだろう。しかし、それはあまりに貴公にとって重い選択なのではないか？　今ここで、決断する時間はないだろう。ならば、別の方法を考えなくてはならなくなる」

貴樹は腰を折り曲げ、足を上げる。足の中指を無事な方の左目に突っ込んだ。器用に瞳の周囲を穿ると、もう片方の足で落ちてきた目を受け止める。それをロスリックがいると思われる方向へと差し出した。

「二応傷つけずに取り出せました。これでいいですか？」

いとも簡単に行われた行為に、ロスリックは反応が遅れているようだった。少しして、瞳をとる手の感触がした。

簡単にはいかないか、と、貴樹は冷静に受け入れていた。もともとつぶれている右の方は、おぼろげに世界が認識できている。目を形どる線が、白い、おそらく奇跡と思われる線でおおわれるのが分かった。これは、ソウルの流れなのだ。自分が何を感じ取り始めているのか、正確に理解をした。

しかし、左の方の視界は真っ暗だ。視えるようになるまで、もうしばらくかかるだろう。

「その目を持って、彼女へ近づけばいいんですね？」

「そうだ。だが、貴公が運ぶには困難が伴うだろう。私とローリアンで、どうにかしてみせる」

「いえ。貴方の弟にまで手を煩わせるわけにはいきません。僕が行きます。目を運ぶ役割は、貴方に任せます」

貴樹がそう強く言うと、ロスリックは沈黙した。再び天使の叫び声が響いてくる。貴樹のすぐそばの天井が、崩落した。王宮は確実に破壊されている。

「最後に訊きたい。貴公がそれほど躊躇わずに決断をできるのは、な

ぜだ？ 一体、あの子の何に、価値を見出している？ 力がほしいのか」

痛みを紛らわせように、貴樹は満面の笑みを浮かべた。
「彼女を何よりも、愛しているからですよ」

ローリアンは彼らが飛び降りる寸前まで、何かを言いたげだった。急に来たよく知らない男に、兄を預けるのは不安だったのだろう。だが、ロスリックは貴樹を、多少なりとも信用することに決めたようだった。

「しつかり掴まってください」
「ああ」

ロスリックは貴樹の首にしがみついた。彼を背負う形で、貴樹は天井に開いた穴から飛び降りる。予想通り、天使は迎撃をしてきた。

光線が狙いをつけて、向かってくる。空中では受けるしか手がかかった。貴樹一人だけだったならば。

ロスリックは耳元で詠唱する。直後、二人は白い光に包まれ、床の上にもで転移していた。何本かは追ってきたが、貴樹は走って避ける。ロスリックの術があれば負担はかなり減るようだった。

「そう、何回も使えるわけではない。時間をかけない方がいい」
「わかりました」

叫び声とともに、十を超える光線が向かってきた。そのうちの半分ほどはロスリックが光弾で軌道をずらし、残りは貴樹自身がかわしなから、どうしてもよけきれないものだけ、足で蹴り落とした。

『一割削られた。残り四割』

速さだけではなくその威力も桁違いだ。貴樹は受けた足の痺れを自覚する。今までそんなことはなかった。それだけ、目の前の存在はこの世界から逸脱しているということなのだ。

だが、貴樹はすでに光線の速度に慣れ始めていた。目で追って把握することの無謀さを噛みしめている。ソウルの流れを視れば、それぞれの光線の軌道や、位置を正確に理解することができた。そこには、速さはあまり意味をなさない。

自分の体の動きが次第に洗練されていくのが分かる。ゴットヒルト達との戦いで得たものが、強化されている感覚だった。それでもなお、何もかもがギリギリだ。どうしようもない場面がいくつもあった。そういうときは、ロスリックが転移をさせてくれる。二人の力が合わさって、徐々に天使の真下へと近づいていた。

相手も、学習をし始めているようだった。敵の柱が何なのかを。

光線の軌道が変化を始める。貴樹を直接狙わなくなっていた。たとえば彼へと向かってきたとしても、その狙いは彼の背中にいるロスリックへと向かっていた。転移先を、読まれることも多くなってきた。

貴樹はそのたびに自分が対応する必要に迫られる。ただかわすだけでは間に合わなくなり、光線を弾いたりしていると、残り火の耐久力は二割にまで削られた。

どれだけミスをせずにいられるか。集中力の戦い。それは貴樹にとって、得意とするものだ。今は特に、怒りの感情が目の前の敵へ到達することしか見えなくさせている。天使へ向かって祈っている死体へ近づくほどに、自身の憎悪は膨れ上がった。

そしてついに、目標の目の前に到達することができた。

貴樹は足で、ゲルトロードの死体の姿勢を崩す。それは気遣いも含まれているかのような優しい蹴りだったが、天使の動きが止まるのに十分だった。光の翼が弱まり、ゆっくりと床へと落ちてくる。ロスリックが魔術でその体を受け止めた。

「ゲルトロード」

死体の顔もまた、燃えるような憎悪でゆがんでいた。そこにはかつて可憐だった少女の面影などどこにもない。

「君は、苦しかったんだね。王家の血の営みに、君は耐えられなかった。だから、昔から視えている友達の方に縋ったんだ」

エンマの話で一番おかしかったのは、ゲルトロードが幼少期において、あたかも幸せに毎日を過ごしていたかのように語っていた点だ。王家の内情を見れば、そんなわけがないことはすぐにわかる。

ロスリックとローリアンが王家のおぞましい行為に絶望し、反発を

抱きながらも耐え忍ぼうとした。未来の火継ぎを否定しようという意思を隠しながら。

だが、もし、ゲルトロードは違つたとしたら。彼らのように先を考えて我慢するのではなく、もはや爆発するのが抑えられないほど、憎悪が強まっていたとしたら。その時自分の元にとても大きな力があつたとしたら。行使の誘惑に耐えられる者がどれだけいるだろう。「僕が同情を口にしても、意味はないだろう。それでも、君の苦しみを忘れない。できれば君の怨念を救いたいと、その気持ちだけでも伝わってくれると嬉しい。僕は、君を幸せにしたかった。……とでも、言うと思つたか？」

貴樹も彼女に負けないくらい、憎しみをこめて睨みつける。

ゲルトロードの声と光を奪い、王家に多大な損害を与えた。それが、天使の所業だとエンマは語っていた。だが、それはおそらく、間違っていたのだろう。ゲルトロードは、自分から天使に全てを捧げたのだ。彼女の祈り子となるために。彼女を使って、復讐をするために。

これまでにないほどの激情に支配され、相手へと言葉を投げつける。

「彼女を顕現させたのは感謝する。でもわかつているのか？ 彼女の苦しみの元凶は、お前だ。お前が、彼女の存在を、おぞましいものとして周囲に認識させた。どれほど時が経っても、彼女に憑りつき、自身の苦痛の記憶すらも共有させた。そして今こうして、彼女自身が望まぬことを、無理やりさせている。ふざけるな！ 俺のひもりんを使うんじゃねえ！ いいか、よく聞け。彼女にふさわしいのはゲルトロード、お前じゃない。俺だ。俺が、お前みたいな糞の代わりに、彼女を幸せにする。わかつたら、死ね」

貴樹は、死体を散々に踏みつぶした。

同時にロスリックが、倒れる天使の顔へ手を近づける。貴樹の瞳を奇跡の光で包むと、彼女の眼窩へと近づけた。



長い夢を、見ているような感覚でした。

現在というものが曖昧になり、様々な記憶がばらばらに流れていきます。自分と、自分ではないあの子の記憶。網目のように重なり、絡まり合い…。そんな混乱した状況の中でも、はつきりと、その声は聞こえてきました。

守ると。誰にも、傷つけはしないと。そんな力強い声がまるで昔から当たり前であつたかのように、馴染みを伴って染み込んできます。

よく、わからない人。ずっと私みたいな化け物に話しかけてくる人。怒るのも悲しむのも、全部私のためにしてくれる人。私の代わりに、そうしてくれるひと。

その人の言葉が、あの子から伝わってくる苦しみの記憶の中で一層、際立って見えるのは、自然な事なのかもしれません。生まれた時から一緒で、どうかにかけて助けていたいと思っていたのに、結局何もできなかった。私という存在が、私という実体を得てからも滲んでいた苦悩が、その声を聞く時だけは、弱まっているような気がしました。

なのに、この胸を締め付けてくる痛みは、何なのでしょう。あの人とよく一緒にいるようになってから、私は自分でも制御できない感情に何度も戸惑いました。それはあの人を傷つけていく度に強まっていった。私の意識が不安定になってからも、彼の行いを見て、存在しないはずの心が、縮んでいく感覚に陥りました。

誰にも傷つけさせないと言われても。小さな少女は叫びました。その子はあるの可哀そうなゲルトロードではなく、彼女と共に全てを過ぎてきた私の代弁者のようでした。

貴方自身がどんどん傷ついていく。耐えられないのは、それがほとんど、私のせいでそうだったということ。

祭祀場の方々と戦っていた時も。

絵画世界から脱出する時も。

私がいなければ、きつと、もつと楽な形で彼は進んで行けたはず。今回のことだって、彼が平静さを失いその代償を支払わせられたのは

いつだって、私が原因でした。

そして、よりにもよって。

私は私の力を何も制御することができず、あの人へ直接攻撃を加えてしまった。その時ほど、自らの情けなさを感じたことはありません。どんな償いをしようとも、たとえあの人がいつものように何でもないという顔で許したとしても。私は、私を許せません。決して許しては、いけないのだと思います。

体が、軽くなつていきます。あの子の憎悪が、王家に対する全てのわだかまりが自分の体から離れていきます。しかしそれで解放された気分にはなりませんでした。代わりに、もつと重く苦しいものが入り込んできました。

倒れそうになった体が、誰かに支えられたのが分かりました。

「大丈夫かい」

いつもの声。一番謝りたくて、一番どう顔を合わせたらいいのかわからない人の声。

片方の視界が、鋭い何かで覆われます。少しだけ痛みを伴うものでした。最初は緑色で、それから徐々に、様々な色に細かく分かれていきます。

「どこか、苦しいの？ 僕がわかる？」

彼の声は不安げに揺れました。どうしてそうなつてしまっているのかは、自分の頬が濡れる感触で、おぼろげに理解できました。どうやら、私は、泣いているようでした。それは、悲しみなのか。それとも、彼の顔、表情がぼやけていながらも、視覚で認識できていることに対して、思う所があるからなのか。

それとも、右に宿る瞳が、彼の暖かいソウルで満たされていて。またも彼が自分を犠牲にしてしまったことを、理解したからなのでしようか。

とにかく、相手の苦しみを少しでも和らげたくて、私は返事をしました。その語尾がどうしようもなく震えてしまうのには、困りました。

「はい……、大丈夫です。灰の方」

これまでとは、決定的に変わった何かを感じながら、それでもまだ変わらないものにしがみついていたという気持ちと共に、私は、少しだけ、光を取り戻したのです。



宗教というものに、貴樹は一度も縋ったことはない。そんなものよりも自分の能力を信じていたからだ。

(神よ…)

だが、今だけは違った。意識が戻った彼女の姿は、何かに祈らずにはいられないほど神秘的なもののように思えた。涙を流し、貴樹の呼びかけに答えてきた様子に対して、彼は大きく心を動かされていた。(彼女の液体も、全部俺のものだ)

貴樹は頬を彼女の顔にくっつけて、不器用に涙をぬぐった。そのままキスしてしまいそうになったが、今ここでそうしてしまえば何もかもが歯止めが効かなくなるとわかっていた。そして、彼女自体も驚いたように顔を引いたのも、躊躇わせる一因になっていた。

「どこか、おかしいところはない？」

「いえ、大丈夫です。私よりも、貴方の方が…」

どうやら、記憶が全て戻っているようだった。ゲルトロードと彼女のことを考えれば、解放されたと表現した方が正しいかもしれない。

「久しぶりだ」

彼女は身じろぎする。

「あの…」

「君とちゃんと話すのは、すごく、久しぶりな気がするんだ。今までのこと、憶えているかな」

「今まで…、わかり、わかりません。あ、いえ、違います。私、なんてことを。貴方のしてきたことを、憶えていると、思います。すみません、ずっと…」

うーん、と貴樹は彼女を形作るソウルを観察した。顔を、直接見る

ことができないのは残念だ。彼女は今ひどく混乱している。その様子を表情としてちゃんと認識できないのはとてももったいないことだ。きつと、もの凄く可愛いに違いない。

「落ち着いて。大丈夫。ゆっくりでいいから。まずは、片目が見えてるかどうか、訊いてもいいかい？ 拒絶反応は起きてないみたいだけど、ちゃんと機能しているのか、確かめたいんだ」

少しの間があつた後、彼女は答えてきた。

「大丈夫だと、思います」

「じゃあ、僕の頬を触ってみて」

どこか遠慮するような手つきで、指示に従っている。彼女の動作にはそれでも迷いはなく、彼の顔を触ることができた。

「次は顎、首、うん。よし。肩と胸も、なるほど。お腹、太腿も触ってみて。ん、ちゃんと見えてるみたいだね」

そのまま流れでちんこと言いそうになったが、今はそういう時ではないと思ひ直す。

「僕の顔がわかる？」

「はい…」

「髪の色は？」

「白、ですか」

「染めたんだ。オシヤレってやつ。君はどう思う？ 似合ってるかなこれ」

「わかり、ません。私には、あまり…」

「僕の顔の作りってどう思う？ 自分ではバランスが取れてると思うんだ。褒められることも、多かつたし」

「すみません。あまり、見えなくて。ぼやけていて、わからないんです」

「ごめんね。傷ついた瞳を移しちやつたから。いい奇跡使いの人に頼んでみるよ」

「ただ、」

「ただ？」

「所々に傷があるのは、わかります。灰の方がこれまでどれだけ、困難

を乗り越えてきたのかは、私にもわかりません。耳も、額も、両目も、全部私のせいでそうなったことくらいは、わかっています。わた、私は、貴方にどう、何をどう、謝ればいいのか。今こうして、話をする資格すら、私にはないと思います」

「まあ、大変だったよ。それは確かだ。君が何か気後れしているのなら、二つだけ、頼みを聞いてくれないか？」

少しだけ、彼女が安心したのはその動きで分かった。貴樹へとわずかに身を乗り出し、答える声は直前よりも安定している。

「はい。何でも申し付けてください」

「まず、僕のことには名前前で呼んでくれると嬉しい。でも君は今まで何度か呼んでくれたから、そんなに難しくもないよね。もう一つ、君の今着ている服から、ちよつとだけ布を取るから、それを僕の顔に巻いてほしい。さすがに目の部分は隠したいから」

できれば火守女がつけていた頭冠を身に着けたかったが、さすがにサイズが合わないのでやめた。彼女は貴樹が足で黒衣の裾をちぎるのに身を任せ、それから近づいて貴樹の目の周りを布で覆い頭の後ろで縛ってくれた。下の丈が短くなって、彼女の足や脛の部分がよく見えるようになってきているだろう。だが今の視界では、肌色というのも認識できなかった。

その代わり巻く時に近づく彼女の感触を存分に味わった。耳に銀の髪がさらさらと当たり、香水や汚れなどでは決して出せない彼女自身の香りを楽しんだ。貴樹の吐息が火守女の首筋を撫でた時、彼女は落ち着かなげに手の動きを早くした。

何かが違うな、と、そこへきて貴樹も思った。祭祀場にいたころの彼女よりも、今までの彼女よりも情緒が安定していない。ゲルトロードを引きはがしたことで、何か関係があるのだろう。これは一層、傍でよく見ていなければならぬと決意を新たにされた。

まだまだしたい話はたくさんあったが、玉座にいる者とも話をしなければならなかった。

立ち上がった貴樹は、ロスリックたちへと向き直る。

「協力、ありがとうございます」

「成功して何よりだ。正直、分の悪い賭けだと思っていた」

「そうですね。こちらにも安堵しています。僕達はもうこの城に用はなくなつたので、次の目的地へ向かおうと思います。貴方たちは、どうしますか？」

言っている言葉の意味がわからないと、ロスリックは首を傾げた。

「どう、とは？」

「僕達の利害は、ある程度一致していると思います。このままここにおいても、薪として狩られる。貴方たちに異論がないのなら、一緒に来ませんか？ 僕としても、貴方たちが仲間に入ってくれれば、とてもありがたいです」

「気持ちは嬉しいが」

ロスリックはすでに決断をしているようだった。また、言つた貴樹も断られることはとづくに予想がついていた。

「私と弟はこのような体だ。旅をするのも難しい。それに、もう疲れだ。ここに残り、やってくる祭祀場の者達に少しでも抵抗できれば、それでいい。唯一の心残りが、なくなつたからな」

ロスリックは火守女を一瞥して、初めて微笑んだ。

「私達も、貴公のような者がいてくれたら、何かが変わつたのかもしれない。さらばだ」

「わかりました。貴方の意思を尊重します。では」

(さっさと殺すか)

今、感覚が非常に冴えわたっているのは、追い風だと思っていた。連戦が続いている状況ではあるものの、目の前の王子達を処理するくらいは容易いだろう。あまり火守女の前で野蛮なことはしたくないが、ロスリックの血筋は根絶やしにすると始めから決めていたので、仕方がない。

彼らを生かしておくメリットは何もないのだ。薪を祭祀場に多く与えすぎると、これからの計画に影響が出る。こちらが確保した方が、何かと都合がいい。それに、少しどころかかなり天使とゲルトロードの事情を理解していたようなのに、何の行動もしなかつたロスリック達へは、失望しなかつた。やはり、彼女を苦しめた王家は全

員層以下だと再認識した。

ローリアンの首に、大穴が開く。声のないうめきをあげ、血を吐き出しながらその場に倒れ伏した。ロスリックと貴樹はあまりに突然の出来事で、その体が床に転がった音で、ようやく異常に気がついた。(あ?)

自らの弟へ奇跡をかけようとしたロスリックが、自分の胸を見下ろす。そこからは、蒼白い矢が突き出ている。直後、さらに追加で何本かが彼の全身を串刺しにした。ちゃんと急所をとらえているようで、すでにその目には生気が残っていないかった。

双王子の背後から、高校生くらいの男が現れる。もしかしなくても、貴樹の生徒だった。彼はしばらく思い出すのに苦勞する。

下田は青い顔で、二つの死体を眺めていた。彼へ太いソウルの流れが向かっていく。双王子のソウルを吸収したとたん、彼は地面にうずくまり、吐きそうな顔で口を押さえた。

「無事でしたか」

クリムエルヒルトが、入り口から入ってくる。貴樹の方を見て、しだけはつとした後近づいてきた。

「ここから離れましょう。祭祀場の者たちが近づいています。今遭遇するのはまずいはずですよ」

「あいつは?」

「どうやらずっと、狙いをつけていたようです。問題はないかと、泳がせていました。とにかく今は、移動しましょう」

すでに、続いてホークウッドたちも中へと入ってきていた。

貴樹は歩きながら、少しの間振り返る。明らかにここへ、下田一人だけが来ているのはおかしかった。彼の貧弱さを考えれば、そもそもたどり着けないはず。

貴樹は傍らのクリムエルヒルトを見やった。彼の視線に気づかないふりをしている。さりげなく、結んだ唇を震わせているのがわかった。下田を手引きした誰かについては、確信を得た。問題は、なぜそんなことをする必要があったのかということだ。

彼女の様子がおかしいことは、前から勘付いていた。時折、貴樹達

の目の届かないところで、白い鈴に話しかけていたことも。誰から奪ったのかもわからないそれは、明らかにヨルシカの聖鈴だった。形や装飾で、そうと判断できる。

問い詰めるだけなら、簡単だ。こちらの情報を祭祀場へ流しているのではないか。だが、貴樹は好都合だと考える。もしそれが本当だとしても、たいして支障はないからだ。

何も指摘することはなく、彼は火守女の傍について王宮を出た。

残ったのは、翻弄された下田の呻く声だけだった。

39. 崩壊、降臨

画家の少女がさらわれたことを話し、次の目的地はアノールロンドに決まった。火守女の瞳をエルドリツチが持っていることもある。そろそろ、あの人食いの年貢の納め時が来たということだろう。

ただ、その前に、貴樹はほぼ全員から説教じみたものを聞かされることになった。どうして、自分たちとの合流を考えなかったのか。火守女を助けるためとは言え、どうしてさらに自身が傷つく選択肢を選び続けるのか。

特にアンリとフリーデは、イルシールに戻ってからもまだ言い足りない様子だった。貴樹としても今回はかなり無茶をしたと思っっている。絵画世界の時と連続してこれなのだから、言い訳のしようもない。彼がどこへ行くのも、一人ではなくなった。皆は、全体に彼を単独行動させないと決めたらしい。

反対に、完全に記憶が戻った火守女は歓迎されているようだった。一部を除いて。

「初めましてで、いいのかな」

道中、薫が話しかける。その目は興味津々といった様子で、何かしら嫌な予感を貴樹に抱かせた。

「いえ、貴方のことは存じ上げています。灰様のご家族とか」

「よろしくね。思ったんだけど、どこか具合でも悪いの?」
「?」

薫は火守女に宿る貴樹の瞳を一瞥する。

「いやね、なんか元気ないなって。私が貴方の立場だったら、ずっと舞い上がりっぱなしになると思うんだけどな。自覚がないようだから、言っておくけど。貴方は、誰にもできなかつたことを、成し遂げただよ。前代未聞だよ。貴くんが誰かに執着するなんて、今まで一度もみたことがない」

火守女はどう答えればいいのか、わからない様子だった。薫から目を離したり、逆に薫の真意を確かめようとじつと見てみたり。貴樹はちゃんと足元に気をつけるよう言いたかったが、姉はさらに畳みかけ

た。

「私……この先を考えてみたんだ。貴方がはつきりとした態度も示さな
いまま、私の弟と一緒にいて、どうなるんだろうって。貴くんは、自
分が傷つくような行動を絶対にしない子だった。そのためなら、どん
な手段でも厭わないの。でも今は貴方を助けるためなら、どんな方法
も取るようになってる。正直、怖い。きつと、大げさでもなんでもな
くて、貴方はいつか、貴くんを殺す。たちが悪いのは、彼がそれを苦
にもしないし、後悔もしないだろうってこと」

彼女がフリーデの体の中になければ、とつくに殺している所だっ
た。薫の意見に、皆どこか思う所があるようだ。それでも直接言葉に
出して反論しようとする者はいない。貴樹としては余計なお世話と
いう意見以外は何もなかった。

だが、彼が何かを言った所で、雰囲気改善されるわけでもないだ
ろう。火守女は言われてからずっと俯いて、必死に考え事をしている
ようだった。彼女の思考を邪魔したくなくて、貴樹は側で歩き続ける
だけしかしなかった。

アノールロンドまでの道は、貴樹にとってはあつという間に感じ
た。今の彼らを足止めできる敵など進む先には存在しなかったし、彼
を何となく避け始めた火守女のことを考えるので、時間は矢のように
過ぎ去っていった。

エルドリツチの居城へと向かう間、その守り手による襲撃を警戒は
していた。しかし、そういった類の戦闘は全くなかった。それはアノ
ールロンドの城内に入ってから同じで、さすがに何かがおかしいこ
とを全員と共有した。

かつて、グウインの一族が根城とした場所。今では栄華の名残すら
なく、ひどく荒廃してしまっている。そしてエルドリツチが座してい
るであろう玉座の間までやってきて、彼らは目的の達成がそう容易で
はないということを知った。

エルドリツチも、その側近の者たちも、姿を消していた。多少の時
間をかけて城内の全てを見回ったが、気配すらつかめない。完全に、
無人と化していた城内は、貴樹達の思惑を嘲笑っているかのようだっ

た。

「どこに、行ったと思いますか？」

アンリも腕を組んで考えていた。

「深みの聖堂でしょうか。あそこも、人食いの馴染みは深いはずですが」
「俺たちが来ることを見越してたつていうのか。逃げるのが目的なら、聖堂に行くのはおかしいな。あそこも結局ここと変わらない。俺たちを止められないのは、相手もわかっているだろう」

「そのどちらでもないとしたら、あれは一体どこに潜んでいるのかしらね」

貴樹は質問した手前ではあるものの、何となく答えはわかっていた。それはきつと、アンリたちも同じだろう。それでも信じたくないという気持ちだが、会話の中で現れていた。

どちらにせよ、彼らは次にやるべきことを決めなければならない。全員の目が、貴樹へと向かった。

「とりあえず、エルドリツチのことは一旦忘れましょう。あれにも何か企みがある。いずれ、相對することになる。僕たちが次にすべきなのは、話し合いです」

「誰と、何を話し合うっていうんだ？」

ホークウツドの疑問に対して、貴樹は少し溜めてから答えた。

「既に薪は全て、僕達か、祭祀場に所有されています。彼らは今、僕達の居場所を探しているでしょう。火継ぎの使命のために最後の戦いを仕掛けようとしている。しかし、生憎僕には彼らと戦うつもりなどありません。だから、話し合つて、相手を納得させて、和解します」
しばらく皆は無言になった。彼が本気で言っていると理解するのに時間をかけているようだった。特に一度離反した者たちは信じられない様子で貴樹を眺めていた。

アンリが一番に反論をしてきた。

「どう、話し合うというんですか。正直妥協点が全く見つかりません。タカキさんにも話したはずですが、どう考えても、和解が成立するとは思えません」

「彼らは、いわば間違つた道を進み続けているんです。少なくとも、正

しくはない道を。皆、この世界に生きる人なら全てが、乗り越えなければならぬ問題が存在しています。火が陰り、深淵の時代がやってくる。火継ぎでは決して解決策にならないことを、相手にわからせないといけません。そして彼らと協力しなければ、おそらく何もかもが終わります」

貴樹は火守女と過ごしていくうちに、考えが変化していた。自分の力にも限界はあるのだと。彼女との暮らしを永遠に続けていくためには、もはや、借りられる力を全て利用するくらいではないと、駄目なのだと。

ゲームでは、薪を集めることが主題だ。だが、そのエンディングの後も、貴樹たちは生きていかなければならない。むしろ今ここからが、本番だと言つてもよかった。

「まずは不死街にまで戻つて、動向を確かめましょう。それに、ウインさん達とも合流したい。彼らも鍵になるはずですよ。祭祀場にいる僕の生徒たちとも、話し合わなければならぬ」

こうして彼らは、アノールロンドを後にした。貴樹のした話を、全員飲み込んでくれたようだ。もちろん、苦労はするだろう。祭祀場に対して並々ならぬ感情を抱いている者がほとんどだ。彼自身としても、一度格好良く別れたつもりではあるので、次に彼らに会った時、どんな言葉をかければいいのか考えていた。

火守女が貴樹のした話の途中、何かを確信するようにその瞳を曇らせたのを、彼は気づくことができなかった。両目を失った弊害だった。

アノールロンドからイルシール、そしてカーサスの地下墓を過ぎてフアラン城塞。不死街までの道のりは、時間こそかかったが、もう何度か通っているルートなので、危険はほとんどなかった。

ただ、貴樹の気分は優れない。不死街に到達しても、ほとんど火守女と話せていなかったからだ。彼はなんの気まずさも感じていないが、相手は違うらしい。彼女はずっと何かを考えていて、歩くにしても、アノールの傍によくいた。彼が話しかければ答えはする。それでも

一言二言くらいで、ほとんどまともに彼の顔を見ることはなかった。これは、意識されている？ ついに、彼女にも自分の気持ち伝わったのかと、そこまでは貴樹も前向きには考えていなかった。どちらにせよ、ちゃんと会話をしないと何もわからない。

不死街でウイン達を探す途中、休憩を挟むことになった。貴樹は家の残骸を見ている火守女に近づいていき、あ、と気の抜けた声を出す。足がもつれたふりをして、正確に彼女の胸元へと優しく倒れ込んだ。顔全体で胸の感触を感じて、大いに満足する。彼女の方は慌てた様子で彼の顔を支えてきた。手の感触もまた、いいものだと思えてきた。

「大丈夫、ですか？」

「ごめん、ちよつと躓いたみたいだ。まだ感覚に慣れていないのかな。もうちよつと支えてくれると助かる」

これだ、と思った。事故を装ってスキンシップを増やしていけば、そのうち相手にも慣れができる。そうすれば、さらに次の段階へ行っても戸惑われる可能性は少なくなる。会話のきっかけも増えて、妙に広がっていた溝をなくすことも容易だろう。天才か、と溶けかけた脳みそで自画自賛した。

火守女は答えることなく、そつと貴樹から離れた。おや、と変な体勢で固まった彼の前で、手ごろな岩の上に腰かけたのが、ソウルの流れで分かった。

「少しだけ、時間を私に頂けますか？ 貴方と、話をしなければいけないと思って」

真面目な声に、貴樹もまたふざけた思考を消した。彼女の正面で同じようにゆっくりと地面に座る。話をするのは、彼も望むところだった。

「私は、灰様にとっても感謝をしています。今までずっと助けてもらってばかりでした。どうお返しをすればいいのか、まだわかりません」「いいんだよ。気にしなくていい。僕が好きでやったことだから」

貴樹がそう言って笑うと、彼女はなおいつそう辛そうに顔を歪めた。彼はそういった様子を汲み取ることができなかった。それ故に、

考えのすれ違いが起きかけていることも、遅れて気がつくことになる。

「…いいえ。私は、決して許されないことをしました。貴方がしてくれたことに、礼をするどころか、危害を加えました。どうか、罰をお与えください」

「罰？ とんでもない。君が天使になって攻撃したことは、君自身が止められることじゃなかった。事故だった。それに、君が死ぬことに比べたら、僕の傷なんてたいしたことないよ」

「そんなことはありません。貴方は、そんなに傷つく必要はなかったと思います。私のことなど、見捨てていれば、こんなことにはならなかったはずです」

「いやいや。僕には無理だよ。君を放っておく選択肢なんてなかった。全部、自分で納得してるからだから、気にしなくていいよ」

「ですが、貴方は四肢を斬られ、両目を失くし、反対に私は貴方の目を奪ってしまいました。このままでは、貴方に多大な迷惑しかかけません。…もう、私のことなんて、気にしなくていいんです」

ここへきて、貴樹は話の内容がまるで進展していないことによく気がついた。彼女と出会った時から今までに、彼女の意識をまるで変えられていないことを、理解した。

自分の言葉がまだ足りていないのではと考え、火守女の方へと近づく。

「僕は、こんなことへでもないんだよ。君のためなら、何だってできるんだ。君のことが好きだから。正直、生まれてこの方そんな感情を抱いたことなんて今までなかった。同性はゴミだし、異性はもつとゴミだった。だから、今、この瞬間一つ一つが、楽しくてたまらないよ。幸せなんだ。だから、君がそんなに心配する必要はない」

会話を聞いて他の者たちが集まってきた気配がしたが、割り込んでほこなかった。

しばらく、沈黙が続く。火守女の動きは少しだけ忙しなかった。ソウルの流動性が強くなっているとも言える。まるで理解できないものを目の前にした子供のようだった。

「どうして……、好きなんですか。私は天使です。得体の知れないもので、存在してはいけなかった。そう、周りからも言われてきました」
「だって、ものすごくあり得なくらい、可愛いし。君の行動全てが、愛しいんだ。守りたいって、死なせたくなくなって考えるのは、当たり前じゃないかな。それに君は天使を悪くとらえてるみたいだけど、僕のいた世界では違う。あつちでは天、空が神聖なものだと考えられていて、天使は神様の使いとして崇められてる。崇められるからには相応の美しさを備えているだろうってことで、形容表現にも使われたりするね。そういう意味では、君は天使みたいな女性だ。僕にとってこれ以上もなく」

彼女が小さく、首を横に振る動作をした。

「…申し訳ありません。少し真面目に答えてくれませんか」

「大真面目だけど。愛する人には幸せになってほしいんだ」
「幸せ」

彼女は不安定な声で繰り返した。

「幸せとは、何なのでしょう」

「難しくないよ。命があつて、自分が望んでいることがちゃんと叶えられている状態を言うんだと思う」

「望んで、いること」

今度ははつきりとした言葉を口の中で転がしている。

「そう、君自身がやりたいこと。僕はその手助けをしたいと思ってる。君の喜びが、僕の喜びだ」

「私がやりたいこと…。わかりません。何も、思いつきません」

それは自分自身に言い聞かせているようだった。否定の仕方には、どこか焦燥が表れている。よくないと思った。自らを騙している者が、幸せだとは到底思えない。

「本当にそうかい？ 何なら、それを見つげるために僕も協力するよ。何だっつする」

また、沈黙。

この時、貴樹は自身の言葉がどう受け止められているかを、客観的にとらえられていなかった。ただひたすら、彼女との間にある壁を壊

したい一心で、気持ちをもそのまま言葉にしていた。それが次第に、相手を追いつめていくとは知らずに。

間をあけて、彼女は喋りだした。何かを決心したような、彼女には珍しい毅然とした声だった。

「やりたいことは、わかりません。ですが、何をしなければならぬのかは、わかっています。私は、火守女です。そして、薪を保有しています。この身はずっと、火継ぎのために捧げられることが決まっています」

貴樹は少し面食らって、まだ続きそうな彼女の言葉を遮る。

「それは、他者から押し付けられた幻想なんだ。君は、他の誰にも、命令される必要はない。自分の事、自分の幸せのためだけを考える権利があるんだ。それを使命だとか、そういうもつともな言葉で侵害されるのは、とても悲しいことなんだよ」

「私は、わかりません」

彼女の口調で、何やら会話が良くない方向に進んでいることがわかりかけてきた。それでも、ここで止めるわけにも、妥協するわけにもいかない。貴樹としても、これは非常に重要なことだとわかっていた。今まで自身の事情や周りの事情で避けてきたものと、相對しているのだから。

「この身に薪が宿っているとわかった時、何かに選ばれたような、許されたような、心と体が浮き上がる感触を覚えました。これを、幸せと言うのではないですか？　こんな私にもこの世界のためになるのだと。それは確かに、私にとって嬉しいことではないのですか？」

「違うんだ。幸せっていうのは、自分自身の命を犠牲にして、得るものじゃない。もつと…、なんていうか、前向きなもので、楽しいことで」

「それは、貴方の幸せではないのですか？」

貴樹も、その概念について語る言葉を多くは持っていない。この世界に来る前、日本の高校で教師をしていた頃は、知らなかったのだ。嬉しいとか楽しいとか、心の底から感じられるようになったのは、彼女と会ってからだった。だから、これが幸せなのだとすぐに断定した。人によって、形は様々なのだ但未だに理解していなかった。

火守女は今や立ち上がり、声の大きさも普段からは考えられないものになっていた。視えなくとも、どんな表情をしているのかは貴樹もわかっている。ただそれを即座に受け入れられるほど、彼の経験は深くなかった。誰かと、真剣に向き合った経験は。

「私が生きるといふのは、貴方の望みではないのですか？ 幸せ、幸せと何度も口にはしていますが、それは、全て私から離れているように聞こえます。それに…灰の方は確かに言いました。約束をしました。私が色々なものを見て、色々なことを知った後でも意志が変わらないのなら、それは尊重すると。ですが、灰の方は火継ぎをなくそうとされています。さきほど、わかりました。私は…、嘘をつかれていたんですね。始めから、私の意志など、気にしていなかった。どうするかは、とつくに貴方が自分の中で決めていた」

指摘されても、彼は平然とした表情を繕った。なぜ、彼女の前でも感情を偽らなくてはならないのか、段々とわからなくなってきた。いる。

「いや、違う。よく考えるんだ。君は本当に今でも、自分を犠牲にしたか？ 自分と引き換えに、自分を忌み嫌っていた者達も救いたいと考えているのか？ それで自分自身が幸せになれるとでも？」

「すみません。二人とも、少し落ち着いた方が……」

初めての経験だった。話せば話すほど、喉が締め付けられるように苦しくなっていた。みかねたアンリが止めに入ってきたもの、もはや両者はお互いに引けないところまで来ていた。お互いの、決定的な価値観の違いを擦り合わせようとしている。

「それを決めるのは、貴方なのですか？ 私の幸せを、私が決めるのは駄目なことなんですか？」

「でもさつきから、君はわからないって言ってるじゃないか。わからないまま断定することは、危険だと思うんだ。だから、もつと良く考えてほしい。少なくとも、周りの皆は君が犠牲になることを望んでいない。もちろん僕だって。君が傷ついて、苦しむのはとても辛いんだ。死ぬことはもつと嫌なんだ。わかってくれ」

「私、私にだって、辛いことはありません」

涙というのはつくづく不思議だと思った。ホークウッドが感謝の涙を流していた時も、クリムエルヒルトが守り手から解放されて泣いていた時も、画家の少女の時も、貴樹はまるで何も感じられなかった。だが、彼女の、火守女の涙だけは、彼に甚大な影響をおよぼした。見えずとも声が涙まじりになっていて、それだけでもう、全身が落ち着かなくなる。

「貴方の言う幸せが、嬉しいとか楽しいとか、そういったものなら、今私は多分、幸せではないんです。ずっと、苦しいんです。ずっと、自分を責めずにはいられないんです。私のためだと言って、灰の方がどんだん傷を負っていく。私にはわからない私の幸せなどのために、身を削っていく。そんな状況で、どう喜べばいいんですか。何をどう、楽しいと感じればいいんですか。私には、自分の幸せなんてわかりません。でも、私なんていない方が、貴方が幸せになれることはわかりました。だから、もう、やめてください。私を守るために、無理をするのはやめてください」

「ちよつと、ちよつと待ってくれ」

そもそもなぜこんなことになっているのか、貴樹は誰かに説明してもらいたい気分だった。だが、わかっている。これはツケなのだ。今まで自分と彼女の、彼女に対する思いの温度差を深く考えてはこなかったツケがきた。

貴樹もまた声を大きくした。普段感じる怒りとは違う、もどかしさがほとんどを占めている激しい何かが、彼の口から漏れ出ていた。それだけではなく、全身を嫌な悪寒が駆けめぐっている。

「言ってるだろ。無理なんかしてない。君を愛しているんだ。こんな気持ち、初めてなんだ。だから、そんなこと言わないでくれ」

「わからないんです。どうして、私なんかを好きになつたんですか」

堂々巡りだ。頭痛が段々酷くなってきた。

「好きだからだ。好きだから、愛しているんだ。えっと、体も好きだし。足とか、顔とか、頬とか、指先とか、とにかく、全部がいいんだ」
彼女のソウルがさらに激しくなった気がした。間違いない、信じら

れなかったが、今、彼女は怒っているようだ。

「有り得ません。私は、貴方に何もできていないのに、好意を向けるのは、おかしいと思います。先ほど貴方は天使信仰に興味あるような話をしました。私は：気がついていないだけで、貴方にも力を使ってしまっているかもしれません。昔はゲルトルードがそれを使って、城の皆をおかしくさせました。私を、信仰するようになりました。貴方もその影響で、私に魅力のようなものを感じているだけです」

「頼む。それ以上は、言わないでくれ」

貴樹は立ち上がり、彼女へ一歩近づいた。

「たとえ君だろうとも、僕の君に対する気持ちだけは、侮辱されたくない。僕は、強いんだ。君が天使だから愛したことなんてないし、天使自体には何も特別性を見てない」

「かつて、洗脳されていた人はある時を除いて皆正常でした。自覚できないう呪いというのは、いくらでもあるんだと思います」

「呪い…」

無意識に洗脳を受けているのは、火守女の方だと声を大にして言いたかった。だが、それを実行したとして、今までの会話の流れから、何が大きく動く可能性は低い。言葉よりも、行動を。彼自体も既に冷静ではなくなっている。彼女が後ずさるのも構わず、思いつきり抱き着いた。

だが、予想外の力で腕を突き出される。そんなもので動かせるほど貴樹は弱くなかったが、はつきりと拒絶されたという事実が少なくともい衝撃を与えた。今まで彼女から明確に敵意を向けられたことはなかった。こんな初体験など、ありがたくも何でもない。

「お願いします。私のことは気にせずに、貴方自身の幸せを考えてください…」

そう消え入りそうな声で言うと、火守女は離れていった。周りの皆からも距離を取りたいようだった。数人が追いかけてようとするのを、貴樹は止める。ここらの敵は掃除し終わっている。それに彼女だって、たまには一人で考える時間も必要だった。

貴樹は全身の力が抜けた気がして、その場に座り込んだ。いつの間

にか荒くなっていた呼吸を整えていると、アンの気づかし気な声が降ってくる。

「大丈夫ですか？」

そして彼女は驚いたように息を呑んだ。

「タカキさん」

「いや、これは、違うんだ。ちよつと自分でも、うわ、かつこ悪い」

全員が押し黙る中、彼は自分が泣いていることを自覚した。瞳がなくても、涙というのは流れてくるらしい。ただ、貴樹には自分の経験として、正常な時との比較はほぼ不可能だった。なぜなら、自分の記憶にある限り、人生において初めてのことだからだ。生まれた時を除いて、彼は泣いたことがなかった。

それも、これは悲しみや不安から来るものではなかった。彼女との溝が埋まらないどころか広がったような気すらするのに、次から次へと喜びがあふれてきた。さらに言えば、危うく絶頂するところだった。

「初めてなんだ。彼女は、ちゃんと、自分自身のことと怒った。それはつまり、自分自身のことを考えてる証拠だから。だから、嬉しいんだ。これは凄いことなんだ……」

誰かが声をかけてきたが雑音に終わった。それは貴樹自身が自らの感情に整理をつけていないだけでなく、ただ単純に意識が遠のき始めているせいでもある。火守女との会話の途中から、すでに体の限界は来ていた。

貴樹の傷はほとんどまともな処置がされていない。奇跡も効かない状況では、打てる手はほとんどなかった。痛みはとつくに慣れていたが、心と体は別物だということだろう。いくら精神が元気でも、やってくる重さには勝てなかった。彼はそのまま幸せそうに失神することになった。

誰かの焦るような声が聞こえた。防御を固くしろ、だとかなんとか。剣戟、何かの唸り声。始め貴樹はそれを遠くで聞いている気分

だった。耳が厚い膜で覆われているようだった。それがやがて、はつきりとし始める。意識が浮上し、額のあたりがひりひりした。

目を開けると、ミレーヌとクリムエルヒルトが難しい顔をしている。白い布や、液体を手にも口論していた。ガーゼや消毒液はおそらくミレーヌのインベントリから取り出したものなのだろう。奇跡では治療できないから、医療の方に頼ることにしたわけだ。それでもミレーヌは記憶が定かではないようで、処置をされている身としてはあまり快適ではなかった。

とりあえず半身を起こすと、二人はまだ寝ているように言ってきた。ただ、そうするわけにもいかないということを、周りの状況で理解する。

他の者達は、貴樹を中心にして、陣を作っていた。お互いの隙をかばい合い、迫りくる亡者の集団を退けている。

どれくらい経ったと、彼は自分の感覚がおぼろげになった。かなりの数の亡者だ。それも囲まれている。どこから湧いたのか、見当もつかない。さつきまで、ほとんど処理されていたはずだというのに。ホークウッド、アンリ、ホレイス、フリーデ。戦っている彼らを確認して、最も肝心な彼女がいなかったことを遅れて理解する。

体のだるさは、一時的に消え失せた。一息で立ち上がると、前線の方へと走る。

「彼女は？」

「タカキさん？ 目を覚ましたんですね。まだ、休んでいてください」「ひもりんは、どこですか？」

アンリは、今気づいたと言わんばかりに、はつと顔を青ざめさせた。「貴方が倒れたと同時に、襲撃してきましたんです。ですので、あの子を気にする余裕が……。申し訳ありません」

「もう、彼女はここにいないよ」

亡者の群れの中に、突然、人影が現れた。その両目は爛々と光っている。短剣を両手に持ちながら、一番前まで出てきた。

リリアーネは、嫌な微笑みを浮かべている。

「迂闊だよ。駄目だよ、あれを孤立させちゃ。もう祭祀場に着いて

いるんじゃないかな」

「あ？」

「びっくりしたのはねえ、あれが何の抵抗も見せなかったところ。だって、自分から連れていってくださって頼んだんだよ。笑えるよね。お兄さん達は、見限られたのかな」

前に立つ亡者をなぎ倒しながら、リリアーネの顔面に向けて足をふる。鈍い音がして、短剣で蹴りが受け流されたのが分かった。その刃はほぼ壊滅状態だが、一撃をしのいだけども、彼女の技量が伺える。短剣だけではなく、持つ手もへし折られていたが。

「あれ。おかしいな。お兄さんぼろぼろなのに、強くなつてない？」

それが最後の言葉でいいのかと思った。呑気に話している彼女の顔に向かって、上段蹴りを放つ。かわされたが、もう一手でとらえることは確実だった。やや体勢が崩れている。

リリアーネは亡者の群れに紛れて、さらに後ろへと移動した。

「ま、落ち着こうよ。私なんかを相手にしていいの？ 早くいかないと、間に合わないかもよ。薪にするのは、別に首だけでも十分なんだから」

そう言っても、貴樹たちを邪魔する気にいるのは確かだった。リリアーネの周囲には白い仮面を被った軽装備の亡者が固まっている。白い影。

向かってくる一体の首をもぎ取ったが、それでも武器をふるってきた。前に戦った時と変わらず、異常なほどにしつこい。

彼の背後を突こうとした亡者が、鎌によって真つ二つにされた。

「キリがないよ。お姉ちゃん、提案があるんだけど」

フリーデの姿をした薫を見て、リリアーネは獰猛な笑みを浮かべた。長年求めたものが目の前にあるかのような喜びと、隠しきれない憎悪が表れている。

「やっと会えた。フリーデ姉さま。待っててね、すぐに憑りついていてる女を殺して解放してあげるからね。もとに戻してあげるからね。我慢してて」

亡者の一団が貴樹と薫に向かってとびかかってくる。それをさば

きながら、会話をした。

「何をしたんだ。随分好かれてるみたいだけど」

「ちよつとね。嫉妬つてやつかな。それより、このまま馬鹿正直に付き合つてちゃ、間に合わないよ。ここは私たちで何とかするから。貴くんは先に行つて」

他の者達も、同意見のようだった。クリムエルヒルトが、緊張した顔で言ってくる。

「あの子を助けたら、またすぐに合流しましょう。いいですか、今日那樣一人で祭祀場の者たち全員と戦う必要はありません。目的を達成したら、すぐに戻つてきてください」

「わかった」

とりあえず全員が問題なく戦っているのを確認してから、貴樹は包囲の突破を始めた。数は多いが、しよせん雑魚の寄せ集めだ。リリアーネの妨害もあつさり乗り越え、先へ進むことができるようになった。

「待つて」

薫が叫んでいる。

「私、なんていうか、ごめんね。彼女に言いすぎた所もあつた。責任は感じてる。あの子それで、気に病んだのかも。ごめんなさい」

貴樹は足を止めずに走り続ける。不死街から祭祀場まで、どれくらい離れているのかはわからない。二つの位置関係さえほとんど把握しきれしていない。だが、別にそんなものは必要なかった。転移の道がつながっているからだ。

出会う敵の相手もほとんどせずに、まっすぐ篝火のある廃屋を目指した。そこから祭祀場の広場まで一瞬で行ける。そう、時間はかからないはずだ。

向かう途中、貴樹は己の言葉の足りなさを自覚していた。思うに、火守女は一種の罪悪感にとらわれている。彼が自分のために傷つくことが、耐えられないのだ。そこまで心配してくれるのはもちろん嬉しいが、このままでは駄目なのもわかつていた。

もう少し、落ち着いてじっくりと会話をすればいい。自分もまだま

だだと思つた。まだ、彼女は自身の価値について考えることを避けている。自身の気持ちから目をそらしているといつてもいい。

貴樹としても、今まで払った犠牲をさらに重ねるのは、さすがにやりすぎだと思つていた。彼女と同じくらい、自分自身も大事にしているのだと、ちやんと伝えるべきだろう。ただ自分の気持ちを押し付けるだけでは駄目だったのだ。

それでも、彼女が自分自身の命を進んで危険にさらすことは、注意しなければならぬ。その点には貴樹も少し怒つていた。厳しく言うのは気が進まないが、彼女との関わりにおいて、妥協はなしにした

い。
本気でそうできるのかと自問自答しつつ、全速力で廃屋にたどり着いた。中にある篝火は変わらぬ燃えている。

腕の欠けた根元をかざし、彼は篝火の力を発動させる。ただ、前は当たり前のようにできていたものが、意識しなければならなくなったのは変わった点だろう。自身の体が曖昧になる感覚に包まれて、周りの雰囲気が一瞬で変わった。

足が冷たい石床の上に立つのがわかる。ぱちぱちと近くで篝火の音が聞こえていた。

貴樹の耳は、すぐに火守女の声をとらえる。酷く弱弱しく、そしてそれは下から聞こえてくるようだった。

他の方角からも、驚いたような声がしてくる。

「誰…?」

「先生だ」

取るに足らない、聞き覚えのある声。一度周りを見渡せば祭祀場の戦士たちがほとんど全てそろつていることを理解しただろうが、貴樹はただ一点だけを見ていた。

暗闇の中で、火守女の形がソウルとして認識される。彼女はどうか、床に倒れているようだった。

血の臭い。

貴樹は一步踏み込む、広がった血だまりの上に来た。危険な量だ。

ほとんど失血死してもおかしくないほど。

彼女の体を形作るソウルは、頭から膝上までで途絶えていた。つまり、貴樹は時が制止したような空間で考える。彼女の両足は既に失われている。斬られたのだろう。少し離れたところに、無造作に転がっていた。そう感じた。

『タカキ』

彼は彼女の言葉をかがんで聞き取った。ノミの警告もほとんど気にならない

「灰様…もうしわけ、ありません。私はまた、貴方に迷惑を……」

火守女はまた泣いているようだった。嫌だな、と素直に思う。また、悲しませてしまった。そうしたくないのに、繰り返してしまった。

だが、今の貴樹は自己中心のだった。彼女の痛みに同情する前に、何やら非常に不愉快な存在があちこちにいると考えている。

「誰だ？」

対して大きく声を出したつもりはないのに、広場に響き渡ったような気がした。

『タカキ、よく聞け。今すぐに彼女を連れて戻るんだ』

「足を、やったのは誰だ？」

二度の呼びかけで、相手も反応する余裕が出てきたようだった。ずっとにやにやしていた宇部が喜々として進み出てくる。

「俺だよ。先生。いい気味だな。そんなになっちまって。でも俺たちを裏切ったんだから、当然の報いだよな？ そいつも最初は我慢してたんだが、途中から泣き始めたんだぜ」

正直、貴樹には誰なのか思い出せなかった。ただ相手の発言だけで全てが完結していた。貴樹は火守女から離れると、声のした方へと歩き出す。

相手も身構えたようだった。

「はは、くんのかよ。馬鹿だな。いいか、前の俺とは違うんだ。聞けよ。俺の身体能力は十五倍になってる。あんたも似たような能力持ってるんだろ。残念だな、格上がすぐそばにいて」

宇部はすとんと、自分の体がいっの間にか倒れることに驚いてい

るようだった。そして、自分の足が潰され骨があちこちから飛び出しているのを見て、絶叫を始めた。

貴樹はただ教えたいだけだった。足をどうにかされるといふのは、それだけ辛く痛いものなのだ。宇部が十分にそれを感じ取ったと思つた所で、彼の頭を踏みつぶした。血とぐちゃぐちゃの脳漿しか残らないほどにまで何度も繰り返した。

悲鳴が上がる。

(なるほど。そつちに固まってんのか)

正直、うんざりだった。火守女の何億分の一の価値にも満たない砂利達が、この世界にいること自体がおかしかったのだ。いい機会だと思ふ。彼は生徒達を処理することを今ここで決断した。不死身なのはわかつている。だが、精神まではそうではないだろう。上手い殺し方をすれば、すぐに再起不能になるはずだ。

『タカキ、頼む、聞いてくれ。落ち着いてくれ。奴らはこのことを計画してたに違いない。お前を向かうつ準備を万端にしているはずだ。今すぐ、火守女を連れて逃げるんだ』

頭の芯は冷えているのに、それ以外は灼熱のようだった。

「タカキ、吾輩たちはこれ以上、無駄な争いをしたくない」

大きな体が進行方向を遮ってくる。グンダだろう。彼は本気でそう思いながら話しているようだった。

「本来の目的を思い出してくれないか。お前の感情もよくわかる。だが、それ以上に大事な存在のことを忘れてはいけない」

「どいてください」

「自分の部下たちと、元の世界に戻る。それこそが、一番の望みではないのか」

「どけ」

グンダが動き出すよりも前に、貴樹は彼の股下に潜り込んだ。それから渾身の力で相手を蹴り上げる。何かを破壊した手ごたえはなかったが、グンダの体は吹っ飛んだ。あつという間に天井へと到達すると、それすらも突き破り、全身が外に出ていつて見えなくなった。

周りの動きがにわかに慌ただしくなる。その中でも、ちゃんと、生

徒達の気配は感じ取っていた。どうやら逃げようとしているらしい。まるで被害者のような動きように思わず嘲笑がもれた。

一体何を勘違いしているのだろう。傍観していた奴らも同罪だというのに。

『おい、止まれ！ 思い出せ、お前が一番今しなきやいけないことは…』

(黙って、俺に、力をよこせ)

ずんずんと頭に声が響いてくる。意味までは取れない。ノミのやかましい声とは違って、静かだった。だが、無視できないほどに大きくなっていった。

ジークバルトと、フォドリックが、剣をふるって来た。片方を弾いて、もう片方に当てる。二人のバランスが崩れた所で、足を回転させて吹き飛ばした。

魔術の線が見えたので、最小限の動きで避ける。撃ってきた方角と位置は分かっている。ヨルシカは、遠距離を捨てて、一気に接近してきた。が、彼女が何かをする前に、貴樹は攻撃を終えている。効いたのかはわからないが、先へと進む隙ができた。

動かない者もいる。あまり関係はないと、貴樹は思っていた。生徒ほどではないが、祭祀場の戦士たちにも失望していた。彼女を傷つけた報いを受けるべきだ。例外なく、全員が。

目の前に生徒しかいなくなった時点で、頭の痛みは最高潮に達した。熱っぽい感じだ。もしかすると、放置していた傷口のせいかもしれない。体にいい影響を与えるはずがないのだ。

気がつけば目の前が床になっていた。一瞬何が起きたのかもわからなくて、自分が血を吐いていることにも遅れて自覚する。胸の奥が異常なほど熱かった。何かを開放するかのように燃え上がっているようだ。意識の混濁が始まった。

誰かが叫んだ後、足に何かが巻き付いた。拘束の魔術かと思いい、引きちぎろうとする。が、それは一向に叶わない。よくよく感じてみれば、普通の縄のようだった。そうだというのに、残り火の膂力をもつてしても、千切れる気配がない。

(こいつら、全員、ぶっ殺してやる)

遠くから何度も攻撃されながら、貴樹は思う。

「加減を考えてください。もう少しのはずです。首から上は狙わないでください。あと一割……、やめてください」

祭祀場に静寂が戻った。

どこかで泣いている気配もしたが、痛いほどの静けさだった。

貴樹は自分が倒れていることを理解している。だが、何を意味しているのかはまだ考えたくもなかった。

今まで感じていた湧き上がる力が、消えている。これは久しぶりの感覚だ。何の加護もない状態。残り火が効力を切らした時のもの。

「イリーナ、そろそろのようです。篝火のそばへ」

横を、女性が足早に通り過ぎていく。

自分が、ミスをしたことは認めよう。冷静になるべきだったと。しかし、まだ手はあるはずだった。あっちのホークウッドたちが気付いてくれれば、この状況を脱することもできる。

イリーナは篝火に向かって何かを唱える。途端弾けるような音がして、誰かが出現した。その人は手に持っていた荷物を下へと放る。少しの間でも持つていたくないと言わんばかりに。

ヨルシカが、ため息をついた。

「際どいところでしたね。随分と時間がかかったようですが」

フリーデは、薫は淡々と答える。

「勘弁して。こつちだつて苦労したんだから。二人生け捕りにしなきゃいけないなんて、無茶にもほどがある」

ホレイスは既にほとんど虫の息のようだった。彼は転がっているアンの首に手を伸ばそうとしているが、到底届かない。彼の体はすぐに別の場所へと運ばれていった。

「裏切った……、とことん、見下げ果てた、奴……。臆病者……」

クリムエルヒルトも同じくらいひどい状態だ。四肢を切断されて、喉も傷つけられている。おかげで、声は潰れて聞き取るのに苦労を要した。

薫は冷たく彼女を一瞥してから、ヨルシカへ礼をした。フリーデの

体もまたかなり傷ついているようだ。

「首三つと、必要な二人。これで十分ですか？ 私、休ませてもらいます。かなり疲れましたから」

「構いませんよ。ご苦労様でした」

貴樹は寄り添うように放置されている、ホークウッドとミレーヌの首を見た。ここで全ての思考を放棄するほど、精神的に弱くはなかった。それはある意味、より気の毒なのかもしれない。

体を折り曲げ、足の拘束を解こうともがく、どれだけ力を入れても無理だった。縄が食い込んで血が出てきても、貴樹は止めなかった。

「やめて」

薫が近づいてきた。彼女へ向けて、それだけで殺せそうなくらい鋭い表情を向けた。実際にもう少し距離が縮まれば、飛びついてその首もとを噛み切るつもりでいた。

「てめえ…、このババア」

「ごめんね。そういうことだから。でも、安心して。全部、貴くんのためなの。私、私は、後悔してないよ。ごめんね。わかってくれたらいいな」

フリーデの顔が泣きそうに歪んでも、殴りやすくなったとしか考えられなかった。正直、始めから薫のことなど信用してはいなかった。だが、フリーデの方はこんなことを容認しないと思っていた。どうやら、思い違いだったようだ。今まで疑っていたのはクリムエルヒルトの方だった。それもまた、間違いだったのだ。

貴樹は暴れたが、すぐに意識を飛ばされた。最後まで、火守女の方へ顔を向けながら。

目を覚ますと、そこは部屋の一室のようだった。しかし、扉や壁が嚴重に補強されている。牢屋の一種なのだろう。それにしても内部の装飾は凝っているように思われた。

貴樹は、ひたすら思考する。顔を一点に定めて、これまでのことを考えていた。

『…どうするんだ』

(…)

『正直、絶望的だ。お前の姉の思惑にも気付かなかったのは、すまなかつた』

(少し、考えてみたんだ)

体の熱は既に引いている。それでも、それはいつでもやってくるのだと、貴樹は分かっていた。そう、遠くない時期であることも。

(結局、一番の失敗は何だったのか。原因は何なのか。一番、許せない奴は誰なのか)

『タカキ…』

(あの糞姉じゃないことは確かだ。殺すのは確定だが。俺は当然、自分自身にも怒っている。思考が足りなかったことも、今の状況を作った要因だからな。だが、わかるか。俺が、一番、ぶち殺してやりたい相手が誰か、わかるか?)

『……』

(元々、妙に感じていたんだ。俺はずっと、その感じがこびりついて離れなかつた。誰かの手の上で転がっている気がどつかでしていた。俺は自分で考えて、自分の意思で行動していたつもりだが、そうじゃない部分もあつたんだ)

『それは、どうなんだろうな。お前は…、今は冷静じゃない。そういう妄想にとらわれるのも仕方がないぜ』

(妄想、妄想…ね)

扉が開かれる。入ってきたのはヨルシカ一人だけだつた。正確には、一人と一つの死体が目の前にやってきた。彼女はそれを丁重に扱い、床に転がす。

見たところ、それは老人だつた。痩せ衰え、筋肉の名残はうかがえる。貴樹はその者が誰なのかわからなくても、その立場はよくわかつた。わかるような気がした。

ヨルシカは神妙な面持ちで、膝をつき、礼をした。それは死体にも貴樹の方へも向けたものようだつた。

「機は熟しました。我らに薪は全て揃いました。お目覚めください」

同時に、貴樹は体内に異常を感じた。何の痛みもなかったが、一瞬、もの凄く熱っぽくなった。それから、大きな虚脱感。おのれの内部から多くが引きはがされていくような、喪失感に襲われた。

それは、視ることもできる。貴樹の体から、炎のようなソウルが流れ出ている。それは奔流のように激しく老人の死体に注がれていく。死体、だったものに。

貴樹は耐えられずにベッドの木枠によりかかった。全身が鉛のように重い。今は、おそらく立ち上がることすら困難だろう。だが、そんな体の異常よりも目の前で起こっている異常の方が、ずっと気にするべきだった。

老人の目に鈍い光が戻る。体が動き出す。明らかに長時間経っていて、ぼろぼろで瘦せこけてもいるのに、老人は腰を起こし、真つすぐ立ち上がった。

決定的だったのは、先ほどの戦闘の時だろう。貴樹は、なぜか、首から上の防御がない部分だけは攻撃されなかった。そして、残り火の耐久値がどれほど残っているのかも、正確に把握されていた。その事実、ほとんど彼自身しか知らないはずだった。例外を除いて。

彼は喘ぎながら、老人を睨みつける。相手は静かに、こちらを見下ろしてきていた。

「ノミ…、てめえ…。」

「儂は、そんな名ではない」

太陽の神。火の大王。そう称されている老人は、既に興味を失ったかのように、彼から視線を外した。

グウインの復活を、この場ではヨルシカだけが讚えていた。

転：下田の一週間

40. 取るに足らない六日間

(1)

下田は、今まで慌ただしかったせいで忘れていたことを、思い出した。

目の前では篝火が揺れている。心なしか、今までよりも明るい色になっっている気がした。勢いも、強くなっている感じがする。

炎の輝きを見てみると、少しだけ時間を忘れる。色々な事から、解放される。

「なんか、嘘みたいだよね。もう少しで、現実に戻れるなんて」

隣で、ちとせもぼうつと前を見つめていた。彼女もまた複雑そうだ。喜ばいいのか、それとも。下田も同じだ。草野達を救える可能性が間近に迫っているというのに、それを素直に喜べる気分ではなかった。

広場には、できればいたくない。それでもこうして生徒達がほとんど集まっているのは、召集がかけられたからだだった。ヨルシカから、重要な話があるらしい。

下田は石の玉座を見やった。薪の王が安置される場所。計五つある玉座を、順番に眺めていく。

唯一生きているルドレスは、目を閉じて過ごしている。眠っているわけではなさそうだった。これまでほとんど、彼が眠っている所を見たことがない。

そこから左右に同じ玉座が広がっていく。巨人ヨームの首。それはあまりに巨大で、逆におぞましいとは思わなかった。死骸となってもなお、今にも目を開き何かを喋り出しそうな雰囲気があった。

ただ、その他はあまり下田にとって気持ちの良いものではない。一つの玉座に二つの首。ロスリックとローリアンだ。気分が悪くなってきた。彼はしっかりと目にいれた。自分はそうする義務があると

思っていた。

クリムエルヒルトに脅されて、下田は彼らを殺した。魔術で行ったとか、そういうのは関係ない。問題なのは、彼らが果たして自分が命を奪っていい相手だったのか、わからない点だった。見えない体を使つて潜んでいる間、ロスリックと貴樹の会話を聞いていた。その時はとても、悪い人には見えなかったのだ。

そして、事を終えた瞬間、クリムエルヒルトから毒のことは嘘だと知らされた。彼女への怒りよりもずっと、何も疑うことをせずに翻弄された自分自身の事が嫌だった。祭祀場の者たちに薪の王を屠った功績を褒められても、その気持ちがなくなることはない。

そして、四つ目の玉座にはミレーヌとホークウツドの首。

特にミレーヌの顔は苦しそうだった。何よりもその目が、最後まで誰かへ向けられていたかのように必死なのが、何とも言えない切なさを感じさせる。彼女とそう関わりが多かったわけではないが、彼女も含めたロスリック城で行動を共にした者達のほとんどが死んだことに、何も感じないわけではない。彼らが互いを曲がりなりにも仲間として、一緒に行動していたことを思い出すと、たとえ下田達と対立していたとしても、複雑な思いは消えなかった。

最後に彼は、一番右端の玉座を見た。同時に、あれからのことを振り返る。

貴樹の、先生のことは考えるのを避けていた。あの時、彼が祭祀場に來た時、宇部を殺した。その瞬間、彼のことを別人に思えた。そしてその憎悪が自分たちにも向けられているとわかった時、胸が張り裂けそうになった。

彼が捕らえられ、しばらくすると、最後の薪を得る作業が再開された。ルドレスと同じように、生きてままでいさせることもできた。しかし、彼女はルドレスとは違って、静かに受け入れることをしなかったのだ。

「あの人は、無事ですか」

火守女は両足を失ってもまだ、自身のことを気にかけていないようだった。別室へ運ばれた貴樹を心配しているようだった。

「大丈夫ですよ。命に別状はありません」

ヨルシカがそう答えると、彼女は安堵したように息を吐いた。その時点ですでに、下田は違和感を感じていた。あの人はそんなに素直に感情を表すような人だったかと。少なくとも、貴樹が祭祀場から連れ出す前は、全ての情動が人形めいていて、少し苦手だったのだ。それが今は少し違う。片方だけに宿る瞳が、彼女の印象を大きく変えていた。

「貴方の行動は称賛に値するでしょう。外からの誘惑に惑わされることなく、己の使命を最後まで貫いた。誰にでもできることではありません」

「はい…、ありがとうございます」

彼女は礼を言いながらも、どこか上の空な様子だった。胸を押さえながら、少しの間だけ別の方向を向く。貴樹が運ばれていった方向を。

「彼は、どうなりますか」

「どう、とは？」

「彼には、罪はありません。全て、流されてしまった私の責任です。どうか、彼には厳しい処罰は与えないでください。お願い、します」

ヨルシカは虚を突かれたような表情をしてから、頷いた。

「我々としても、初めからあの方と対立しなければならなかったのに、は嘆いていました。貴方の願いは、果たされるでしょう」

「感謝いたします…」

ユリアが進み出る。火守女を石の玉座まで運ぶ役割なのだろう。だが、ユリアがすぐ傍にまで近づいたところで、火守女は再び話し始めた。

「すみません、彼に、言伝をお願いできますか。私は、あの人にたくさんの迷惑をかけてしまいました。感謝と、謝罪を伝えてください」

「わかりました」

火守女はほっとしたように頭を下げる。だが、表情が緩んだのは少しの間だけだった。胸をさらに抑えて、まるで自分の事が理解できないかのように困惑気に口元を結んでいた。

ユリアが優しく手を差し伸べる。それに答えようとして、途中で動きを止めた。火守女は、氷漬けされたかのように、全身を固めていた。「どうか、しましたか？」

ヨルシカの呼びかけにも答えず、彼女は何度か瞬きをした。自分の長い髪に触れて、もう片方の手で口を押さえた。

その指の隙間から、震える声が漏れてくる。

「できれば、できればいいのですが。やはり、その、直接言葉を彼とかわすことはできるでしょうか。人づてに伝えるのは、失礼なのではないかと」

「残念ながら、それは難しいでしょう」

「少しの間、一言だけでもいいのです。私は……あの人がしてくださいましたことに何のお返しもできていないのです。ですから、せめて、言葉だけでも自分の口で伝えなければ」

もはや、火守女の顔色は白を通り越して青くなっていた。自分自身でもどうしてこんな事を言っているのか、理解できていない様子だった。

「今の彼は、安全とは言えません。特に貴方を会わせたら、どんな行動に出るか。最悪、彼自身を傷つける可能性があります。それほど、不安定な状態なんです」

ヨルシカの答えに、火守女はしばらく俯いていた。

「はい。承知いたしました。我儘を口にして、申し訳ありません」

「いいですよ。さあ、貴方には薪としての役割があります。玉座に移動してください」

火守女の体は、全身の力が抜けているようだった。もう一度顔を上げる。その顔は一見、平静を取り戻しているかのように見えた。

ユリアが立たせようと、彼女の腕を掴む。その時だった。

火守女はいきなり全身をこわばらせると、ユリアの手を弾いた。さらに這いずって、少しだけ距離を取った。それは明らかに拒絶の意思を示していた。

この時初めて、場の空気に緊張が含み始める。

「ゲルトロード？」

「私、は」

篝火の傍へ、火守女はずりずりと近づく。それから周りを見回した。何もかもに怯えているような表情をする。

「私、私は、ゲルトルードでは、ありません」

「…では、火守女。これは、一体、どういうつもりですか？」

「どうい…？」

その行動をした本人が、不思議そうに首を傾げた。それから、段々と表情を歪ませていく。何か、おぞましい事実に気がついてしまったかのような、恐怖が浮かんでいた。

「あの人に会わせてください」

「落ち着いて。さきほども言ったでしょう。それは難しいのです」

「会わせてください…」

「ユリア、彼女を玉座へ」

命じられた者の手が近づいてくると、火守女はさらに這いずり始めた。必死に遠ざかろうとしている。だがそんなものに意味はなく、ユリアによつて行く手を阻まれる。両腕を強くつかまされると、もがき始めた。

「どうしたというのですか。落ち着いてください」

「…：たくありません」

もはや、彼女はすすり泣いていた。ユリアに無理やり持ち上げられ、頭を大きく振って、逃れようとしている。その姿は、使命に準じる火守女ではなくなっていた。ただ一人の怯える女性がいるだけだった。

「わたし、わたし、私は、死にたくありません！　お願いします。彼と会わせてください、話させてください。このままお礼を言うことも謝ることもできずに、死にたくない！　気づいたのです。私はわかつたんです。最も愚かだったのは誰なのか。ようやくわかつたんです！　だから、それを、確かめるまで、こんな、火継ぎの使命などに関わつてはいられません！　離してっ！　私を、彼と会わせてください。私が愚かでした。何もわかつてなごいなかかった…」

彼女の体が地面に落ちる。抱え上げようとする相手の動きに反抗

して、床にべつたりとお腹を密着させた。それから亀のように丸まって、その場から動かない意思をはつきりと示す。だが、その守りは徐々に崩されていった。

下田は、途中から耐え切れずに目をそらしていた。何か非常に残酷な事が、行われている気がしたからだ。彼女は劇的な変化を遂げていた。それが良い方なのか悪い方なのかはわからないが、そうさせたのは先生であることは確かだった。今の彼女にとって、それはとても残酷な事に思えた。

何度も捕まえられそうになりながら、火守女は這いずっていく。向かう先は、貴樹が運ばれていった方向だった。

「申し訳ありません、申し訳ありません。タカキ様、助けてください。私が、間違っていました。貴方を、恨みます。貴方がいなければこんな、こんなことに気がつかなかった。何も知らずに死んでいけた。恨みます。こんな苦しいものを教えた貴方を忘れません。助けて、助けてください……。死にたくない、死にたくありません。タカキ様、タカキ様。お願いします……。すみません、私が全部」

言葉は唐突に途切れた。

下田はようやく顔を合わせて、何が起こったのかを直視する。いつの間にか復活していた宇部が、彼女へと剣をふるったのだ。その刃は正確に当たり、彼女の首を綺麗に断っていた。泣きはらした目から光が消えていく。最期にパクパクと動いていた口は、まるで誰かの名を形作っているようだった。

「別に薪としてなら、首だけでもいいんだろ」

宇部は残った体の方を乱暴に蹴ってから、鼻で笑った。

その後、火守女の首は玉座へと置かれた。

部屋へと戻る途中、宇部以外の生徒たちは誰も喋らなかった。下田もまた何も話す気になれず、その日はずっと横になっていたのを覚えている。胸の中に、吐き気がずっと留まっていたような感覚は、今でもわずかに残っていた。

例え、現実に戻ったとしても、全てが元通りとはいかないのだろう。先に裏切ったのは貴樹ではあるが、下田にとっては、もう、彼に合わ

せる顔がない。向けられた憎悪の表情が頭にこびりついて離れなかった。

火の粉が、目の前を横切る。それで我に返った下田は、まだ片付けていない作業で気を紛らせようと考えた。何もしていないと、嫌な事ばかりが浮かんでくる。

固有能力の欄を開く。篝火に触れている間、周りの時間が止まる。そしてその効果は、下田が触れている別の人間にも適用される。強化された能力は条件さえそろえば、非常に強力なものとなるだろう。

それが、さらに進化するとするなら、どうなるのか。

まだ下田には躊躇いがあった。クリムエルヒルトが進化に必要なソウルを得る手助けをしてきたというのが、引つかかっているのだ。どう考えても彼女にそうする理由はないはずだった。下田を強化したところで、得があるとは思えない。

何か、計画が進んでいるのではないかと疑っていた。自分がこの能力を進化させてしまうことで、何か、致命的なものが確定してしまうのではないかと。

だが、そのクリムエルヒルトは、もう何もできる状態ではないことは確かだった。こんなことになったのは彼女にとっても予想外で、多分、もはや計画なんてものはとっくに瓦解しているのだと。そう、下田は信じることにした。

自分の能力が強くなることで、この先の戦いで役に立つ可能性を捨てきれなかった。できることは、何でもすべきだ。そう考えて、進化を承諾した。

取得していた結晶の古老のソウル、そして双王子のソウルが消費されていく。予想とは違って、全く何の変化も感じられない。体が軽くなったとか、力があふれてくるだとか。そんなものはやってこず、ただ目の前の文字列だけが進化の結果を表していた。

『描き人』

・ 貴方は、竜の娘の庇護下にある。

「…?」

これは、どう、考えたらいいのだろう。

それはあまりに、進化前の固有能力とかけ離れているように思える。名称も、その内容も、抽象的過ぎて、何ができるのか全くわからない。ただ一つ、竜の娘という言葉には推測できる余地があった。そのまま受け止めるのなら、ヨルシカの事を指しているのではないか。しかし、篝火の横を見て、もう一つ選択肢があることに気がついた。下田からそう離れていない場所で、白い女性が立っている。明らかに異質な存在なのに、周りの誰も気づいている様子はなかった。

今まで何度か見たことのある、その輝く頬は、鱗で一部覆われている。臀部から伸びる尻尾も、彼女が人間ではないことを示している。ヨルシカと同じ、竜の血を引いているような姿をしていた。

女性は、口を堅く引き結び、何かに耐えている様子だった。その視線は下田に真っすぐ向いている。とても悲しんでいるようで、下田は思わず話しかけようとした。

「アキ、どうしたの?」

その前にちとせが声をかけてくる。直後、女性の姿は消えていた。ちとせにも、その存在は知覚できていないようだ。何かしら落ち着かない気分になって、何でもないと答えた。なぜか両腕が、疼いている気がした。

大扉が、開かれる。

そこで下田も、意識を正した。時間だ。ヨルシカからどんな話があるのか、ちゃんと聞かなければならない。

しかし、そこから現れたのは、彼女だけではなかった。

粗末な甲冑を着た老人が、ヨルシカの前を歩いている。目元に深く皺が刻まれ、頬は痩せこけている。そして密集している白い髭だけ見れば、今にも倒れそうな年寄りにも思えた。しかし、目だけは違う。そこには、燃えるような光があるような気がした。

さらに変なのは、後についているヨルシカだ。彼女は老人へ直接顔を向けることなく、やや俯き気味に歩いている。そこには隠しきれない畏れがあった。

祭祀場の戦士たちが、全員膝をついていることに遅れて気がつく。下田達はその揃った動作に戸惑った。まるで王を迎える臣下だ。それほど出てきた老人は偉いのかと思ひ、彼も恐る恐る、彼らに続こうとした。

「よい」

老人は、下田達に向けて手を向ける。ふるふると、その腕は震えていた。何だか、別の意味で心配になってきた。

皆を見回した後、低く咳払いをする。杖を不安定ながらも床につくと、柔らかく微笑んだ。そして出てきた声は少しだけ苦しそうだつたものの、聞く者を安心させるような深さがあつた。

「このような古いぼれがいきなり出てきて、困惑しとるだろう。無理もない。今まで儂はずっと眠っておつた。火継ぎの使命が果たされようとしている今、こうして目覚め、君たちに会えたことを嬉しく思う。儂の名前はグゴほつ、がはげえあつ！」

途中で体をくの字に曲げ、激しく咳き込み始めた。ヨルシカが慌てた様子で駆け寄る。体を彼女によって支えられながら、老人は真っ赤な顔になって、呼吸を落ち着けようとしていた。

下田はちとせと目を合わせる。この人は、もつと眠っていた方がよかったのではないだろうか。

イリーナもはらはらした表情で走ってきて、奇跡を施し始める。にわかには雰囲気は慌ただしくなりかけたが、老人は助けはいらないとばかりにすつと立ち上がり、目元の皺をさらに寄せながら続けた。足がややおぼつかなくなっているのが、見ている側を不安にさせる。

「問題ない、問題ない。参つたの。一番大事なところをとちるとは。やり直させてくれ。儂の名前は、グウイン。今までの皆の働きに、深く感謝をしている。こんな身で言うのも恐縮じゃが、一応祭祀場の全てをまとめる立場にある。よろしく頼もう」

にこにここと、下田達一人一人を見る。そこには、何かを期待するものが含まれていた。だが、彼らが何も喋らないのを見て、少しだけがっかりした表情になる。

皺だらけの指を、いきなり下田に向けてきた。

「その君」

「はい？」

「なにか、あるかね」

「えっと…」

「何か儂に質問したいことがあるかと、訊いておる。何かはあるだろう。ほれ、言ってみい」

「どうやら質問されたい様子だったので、下田は一生懸命考えた。確かに、不思議なところはたくさんある。」

「あの、それじゃあどうして、今まで眠っていたんですか。体が弱かったから、とか？」

「良い疑問だ」

グウインは、満足そうに頷いた。

「眠っていたというのは、少し意味合いがずれておる。正確には、儂は数千年前に一度死んだ。そしてまさに昨日、復活を果たしたということだ。すべては火継ぎの完遂のため、舞い戻ってきたわけよ」

一瞬、この老人はぼけているのかと思つた。しかし、ジークバルド達は少しも笑っていない。周りの者達の反応で、相手の言っていることが事実なのだとわかりかけてきた。それに、下田にはグウインという名前に聞き覚えがあつた。

玉座に座っているルドレスへと目線を向ける。確か彼が、一番最初に言っていたような気がする。

下田の視線を察して、ルドレスは話し始めた。

「このお方こそ、最初の火を見出した、伝説の大王だ。火継ぎという儀式を作り出したのも、祭祀場を創設したのも、グウイン様のお力だ」
「その通り」

嬉しそうに同意して、また咳き込んでいた。それだけを見れば、到底そんな凄い相手には見えない。何千年も前の人物で、さらには死からも戻ってきた。それではまるで、地球で言う、キリストだ。祭祀場の者達の態度によく納得がいった。つまり自分たちは神様を目の前にしているということなのだ。

その後容体が悪化したので、グウインは運ばれながら去っていつ

た。見えなくなるまで、自分は大丈夫だと何の根拠もない自信を口にしていた。あのまままたぼっくりと逝ってしまわないことを祈る。

グウインの紹介も大事なことだったらしいが、ヨルシカの本題はここからだ。薪が全て揃ったといっても、まだやるべきことがあるらしい。火継ぎの儀式のためには、大量のソウルが必要とのことだった。これから六日ほど、その収集に当てることになった。

さらには、儀式がたとえ終わったとしても、それで全てが終わるわけではないという。最初の火へと到達するための道が開けるだけで、その先にはまだ試練が残っているそう。そのための準備や訓練も欠かさずに行っていく必要がある。

下田はようやく意識が切り替わり始めた気がした。どんな形であるにせよ、自分達はここまでやってきたのだ。まだ、エルドリツチなどの敵の動きが読めない部分もある。最後まで油断せずに、自分のベスト尽くそうと決心した。

鬱屈した気分が晴れた所で、ヨルシカの話も終わった。彼女もまたやることがあるようで、自室の方へと戻っていく。

解散ということになって、雑談交じりの喧騒が戻ってきた。下田も皆とこれからのことについて色々話そうとした。しかし、またその動作は中断させられることになる。

大扉が、再び開かれた。今度はやや乱暴な感じだ。中から飛び出してきたのは、修道女のような見た目をした者だった。彼女は下田達を見つけると、早足で近づいてくる。

「あの人、確か…」

ちとせが怯えるような顔になる。それも当然だろう。貴樹が捕まった時、あの女性はいくつかの生首を抱えて祭祀場に現れたのだ。怖がるなどという方が難しい。ただ、下田はその前にも会っていて会話もかわしたことがあるので、多少は平静でいられた。

修道女はただ一点を見つめながら近づいてくる。それは下田でもちとせでもなく、その横にいる実織へと向けられていた。

「みおちゃん」

「だ、誰、え…」

飛びついたといつてもいいくらいの勢いで、彼女は実織へ抱き着いた。身長差のせいとか、修道女の方が首を曲げて、実織の顔と目線の高さを合わせる。そしてむしゃぶりつくように、顔のあらゆる所に口づけを始めた。

おお、と高坂が感嘆の声を上げる。彼ほど素直になれない下田は、思わず目をそらした。

もはや実織の顔はゆでだこのようになっていいる。もがもが言いながら相手を突き放そうとしているが、修道女はさらに抱きしめる力を強めた。前髪を上げておでこに三回ほどキスをした後、自分の頬を相手の顔へと擦りつける。実織が愛おしくてたまらないといった様子だった。

「なに、一体、何なんですか！ は、はなれてください」

「もうちよつと。久しぶりだから。……え、やりすぎ？ いいじゃない。これくらい、許してよ」

「勝手に、一人で、会話しないでください！」

実織が両手で修道女の頬を引っ張る、大人の女性の顔が変な風に歪むのは、下田はあまり見たことがなかった。ちとせがさも面白い光景を見たといわんばかりに興味深そうに眺めていたが、彼はそこまで他人の気分でいられなかった。実織の羞恥がこちらにまで伝わってくるようだ。

結局落ち着いたのは、散々彼女がいじられた後だった。乱れた髪を直しながら、今なおじつと視線を送ってきている修道女を、やや怯えた顔で見つめ返している。

「ごめんね。アメリカに行った後も電話では話したけど、直接会うのは久しぶりだったから……。ちよつと、想像してた形とは違う再会になっちゃった」

「貴方が何を言ってるのか、まるでわから……」

驚いたのは下田も同じだった。現実での国の名前を、この女性から聞くことになるとは思いもしていなかった。

ただ実織はそれ以上に状況を受け止め切れていないようで、耳にかかる髪が跳ねているのも放置して、相手を呆然と見た。

「なんで…」

「信じられないかもしれないけど、私だよ」

「お姉ちゃん？」

「そう。君のお姉ちゃん」

それから修道女が話し出したことは、到底、信じられるものではなかった。

戸水薫という、姉が実織にすることは知っていた。クラスどころか、学校中の者達がその事実を理解していた。日本でスカウトされた後、女優としての活動を始め、すぐにアメリカに活動拠点を移した。そして有名なハリウッドの大作映画に出演したということで、日本でもニュースになったことを覚えている。

その彼女が、フリーデという今の女性の体に精神だけくつついていくという状況説明は、さすがに今までたくさんの超常的なものを見てきた身としても、受け入れがたい。

ただ、肝心の実織が彼女と何やら小声で話した後、信じることに決めたらしい。どうやら実の姉しか知りえないことを言ってきたからのようだった。下田には周期だの、二十七だのという、よくわからない単語しか聞こえてこなかったが。ただちとせは理解したようで、にやにやしながら二人を見ていた。

その後、さらに実織へ触れようとした薫は、急に動きを止めた。表情も雰囲気も大きく変化し、まるで別人のような口調で説明を続けた。

今度ははフリーデ自身が喋っているらしい。彼女曰く、薫の体を探し終えるまで、協力し合う関係なのだという。言葉では嫌そうな感じだったが、ときおり薫との会話しきき独り言を聞いていると、なかなか気心の知れた間柄のようだった。

この祭祀場でしばらく休むと言った後、再び薫が表に出てきた。ずっと苦笑しながら黙っていた新宮の方へ行き、実織と同じように抱きしめていた。新宮家と戸水家はかなり昔から付き合いがあるようなので、この二人も再会を喜ぶのは当然なのだろう。ただ、新宮の方はかなり感極まっているようで、涙も流していた。

一日目は、そうして、あらゆることが重なった慌ただしさの中過ぎていった。どのような形にせよ、終わりが近づいているのだということとは、下田もわかっていた。

二日目から五日目にかけては、ひたすらソウルを集める作業をした。不死街で定期的に出現する亡者を狩ればいいのだが、もちろん不測の事態も起こる。祭祀場の戦士たちと協力して、皆が一つの目標に向かつて進んでいた。

さらに待ち受ける戦いのために、下田も魔術や奇跡の鍛錬を怠らなかつた。しかし、いつものようにとはいかない。彼がロスリック城から戻ってきた頃から、カルラはほとんど表に出てくることがなかつた。彼女は、療養をしなければならぬ状態になっていたのだ。

下田も、初めて見舞いに行つた時は言葉を失つた。彼女は明らかに弱っていて、前までの様子とはすっかり変わっていたからだ。顔色も悪く、ベッドからほとんど出ることができなくなっていた。その原因は、ほとんど足にあるのだという。

「大丈夫、なんですか？」

「すまないな。最後まで、お前達に関わつてやれなくて。それほど酷くはない、そんな心配そうな顔をするな」

彼女の足は、黒い不定形の物質に侵食されていた。まるでエルドリツチの膿のようだったが、それとは別のものだという。しかし、同じ深遠で生まれたものであることは確かだと語つた。そして、これは自分が受けるべき当然の罰だとも。

罰。

その言葉は、次の見舞いでも聞くことになる。下田はカルラが寝ている部屋に入ろうとして、既に先客がいることがわかつた。声からして、ジークバルドのようだ。

「わかっている。わかっているんだ…」

「本当に？　今までも、今も、正直見ていられなかつた。シモダは、あの子じゃない。結局辛い思いをすることになる」

あまり、自分が聞いていい会話ではないとわかつていた。

「ああ…」

「君が未だに忘れられないのは理解している。だが、自分を罰するのはやめろ。ジョックはもういない。シモダを気休めにするな。我らは、もう何もできない」

「わかっている。すまない、ジーク。少し、私も弱っているみたいだ。ここまで来たというのに。今さらだな」

「二人の個人的な話は、二人だけのものにとどめておくべきだと思いませんか」

このままいけば下田はもつと先の話まで聞けただろうが、それは途中で終わる。いつの間にかヨルシカが後ろに来ていたからだ。彼はすぐに謝った。

「いいですよ。そうですね、今はみな冷静ではいられないでしょう。それぞれの使命に向き合う時が近づいています。貴方も、自分が納得できるような選択をしてください」

自分が納得できること。したいこと。目的。それははつきりと決まっていた。エルドリッチによって精神を侵された生徒達皆を救い、現実に戻る。そして、家族に、母に会うのだ。そのために、今まで戦ってきたのだから。

「どんな人なの?」

「え?」

「アキのお母さん。ちよつと気になって」

ソウル集めの合間の休憩。穏やかな時間が流れる中で、ちとせは尋ねてきた。彼女はその日、珍しく口数が少なかった。下田にもその気持ちは理解できる。奇妙な緊張が、徐々に大きくなってきていた。この世界に来てからおそらく半年も経っていない。だが、今までにないほど濃い期間だった。

その中で元の生活が恋しくなることは何度もあった。それはちとせも同じだろう。しかし、彼女は父親や、病気で亡くした母親の記憶がないのだ。その不安は、母親のことを何とか覚えている下田よりも大きいだろう。

自分の母の事を話すことで、彼女の気が楽になるのならいいことだと思つた。

「僕が生まれる前に、離婚したらしいんだ。だから、お母さんは一人で、僕を育ててくれた。本当に、一人で。お母さんは、僕を産んだ時、一回心臓が止まったんだって。元々体が弱かったらしいから、難しい出産だったんだ。それからもしばらく、色々苦労したみたいで。親と仲が悪くなっちゃったって。親戚付き合いもほとんどしなかったらしいから、最初はうんと苦労したらしい」

ただ、母自体はそういった話を全くしなかった。下田が中学生になってから、よく面倒を見てくれた近所の人に教えてもらった事実だ。彼が意識して家事などの手伝いをするようになったのも、その頃だった。

「すごいんだね、アキのお母さん」

「うん。尊敬してる。だから、少しでも楽になったらいいなって思っ
て、高校を卒業したら働くつもりだった。でも、それを言ったら逆に怒られてさ。いつの間にか大学の費用も貯めててくれたみたいで、絶対に行きなさいって。お母さん、これからもたくさん働くからって」
「そうなんだ」

だが、そう上手くいきはしなかった。母は、その後末期の乳がんだと診断された。もっと体に無理を強いなければ。もっと、人間ドックに通う余裕があったら。下田は、母が入院しなければならなくなったのは自分のせいでもあると考えていた。

「心配だね」

「手術の成功率は、半々らしいんだ。だから、早く帰って、お母さんが生きている姿を見たい」

ちとせはぽんぽんと優しく肩を叩いてきた。少しだけ、涙目になっている。

「成功してるよ。絶対に。ね、私日本に戻ったら、お見舞いに行っ
ていい？ アキのお母さんに会ってみたい」

「うん、もちろん」

自分と同じくらい、ちとせも気分が落ち着いたのが分かった。たとえ何度も考えたことだとしても、改めて目標を見据えるのはいいことなのだろう。

家族に会いたいというのは、ほとんどの生徒たちが望んでいることだった。家族の記憶がなくなっているのはちとせだけではない。高坂も、実織も、新宮も、尋ねてみると覚えていないという答えが返ってきた。

あつちに戻ったら、全部思い出せるのだろうか。そうに決まっていると下田は信じることにした。今それを考えても、堂々巡りにはまるだけだ。

「実際、どうなんだ？」

集め終わった帰り、高坂がこそこそと話しかけてきた。

「え？」

「だから、高原のことだよ。お前って、実織が好きじゃなかったっけ」
息が止まりそうになって、離れて歩いている女子達の様子をうかがった。ちとせが、実織をからかかって遊んでいるようだ。その間に挟まれた新宮は、楽しそうに笑っている。

「どういう、こと？」

高坂はにやにやしていた。

「あいつって、ああ見えてガードが堅いんだよ。俺の記憶だと、男子に名前を呼ばせたこともないし、逆に呼んだこともないと思う。お前が、その前例を覆してるわけだ」

下田は、その話につっかかりを感じた。彼自身の記憶と食い違いがあるような気がしたからだ。

「でも、そんなことはないと思うけど。だって、ちとせって、っ、付き合ってたんだよね。学校でも噂になってた。その、宇部と」

高坂はきよとんとした後、腹を抱えて爆笑し始めた。その騒ぎで、女子達も足を止める。息を何とか整えながら、彼は可笑しそうに言った。

「ああ、あれね。くく、ただの噂だよ。宇部の方が目立ったアプローチかけて、それに嫉妬した女子が行動起こして、どんどん話がかわって、なぜか真実と真逆のことが周りに流れたわけだ」

下田は、ちとせの視線を感じながら聞いていた。さらに声を小さくする。

「そうなの？」

「見てる側は面白かったけどな。朱音達もいいネタができたって言った。だってお前、あいつが必死で断ってるのに、食い下がる宇部の無様さといったら…」

「二人とも、何の話をしてるの」

ちとせが女子達の輪から抜けてきて、目の前に立っていた。

高坂は平然と返す。

「お前の彼氏の話だけど？」

「またその話？　ほんとうざいわ。なんでそんな今更の話してたの」

「下田が聞きたいって言ったんだよ」

「え、ちが」

「ふーん、気になってたの？」

ちとせは意味深な笑みを向けてくる。高坂に助けを求めようとしたが、彼も同じような表情を返してきて、ようやく悟った。からかわれているのはちとせではなく、自分なのだ。そしてこの後、二人に散々いじられた。対してありがたくはなかったが、こういう会話をするのは久しぶりな気がしたので、気分は紛れた。

そして、六日目。ついに準備が完了した。あとは儀式を行うだけだ。その時間も、それなりに迫ってきていた。

「シモダさん」

待機しようとして広場に向かって歩いている途中、後ろから声をかけられた。振り向けば、予想よりも近くにヨルシカの顔がある。思わず一歩下がろうとしたが、その前に腕を彼女がつかんできた。

その、やや焦ったような動作に違和感を覚える。

「どうしたんですか？」

「お話ししたいことがあります。もうあまり時間がありませんが、私の部屋に行きましょう。とても、大事なことです」

そこで下田も、背筋を引き締めた。何の話なのかは想像がつく。何かがわかったということなのだろうか。

彼女と移動している間、前にヨルシカと会った時の事を考えた。口スリツク城へ向かう前、彼女は一つの疑念を表していた。内通者の存

在について、下田が考えてもいなかった可能性を示したのだ。

それは生徒達の中に、エルドリツチに協力している者がいるという可能性だった。宇部と丸戸。その二人をヨルシカは疑っているらしい。だから、法王討伐の際にもあえて同行させたのだという。

下田は、盲点を突かれた思いだった。普通なら、有り得ないことだ。そもそも、メリットがない。結局現実に戻るのに、あんな人食いに与ることへ、何の得があるというのか。しかし、可能性自体は捨てきれなかった。あの二人はそう思われても仕方がないくらいは普段の行いに目が余るものがあるのだ。

ヨルシカの手が、やや強く二の腕に食い込んでいる。痛みを感じるほどではないが、今までの彼女の雰囲気からすれば、尋常ではないのは確かだった。下田も早足でついていきながら、緊張を強める。何か事実が分かったのなら、それを受け入れる覚悟をしなければならぬ。

「こんなところで、何をしているのかね」

横穴から、グウィンが現れた。しばらく見ていなかったが、今の老人は状態が安定しているようだ。静かな目が、ヨルシカを真つすぐとらえている。

「少し、話を。すぐに終わります」

「難しいの。こんなことをする必要はないはずだ。今すぐに、篝火へ戻りなさい」

「ですが、グウィン様…」

彼女は懇願するように頭を下げた。

「駄目じゃ。必要のないことをするでない」

「私達にとっては、とても重要で」

「ヨルシカ」

目の奥の炎が、強まった気がした。

「もう、儀式が始まる。彼らも、己の目的を果たす時が、近づいているのだ。余計な事はするでない。それが一番、彼らにとっても良いことなのだ」

下田はよくわからずに、会話を聞いていた。ヨルシカは唇を噛んだ

後、下田の腕を離す。このままでは駄目だということにはわかっていたが、何も言えなかった。グウインの迫力に押されて、言葉を失っていた。

ヨルシカは戻る途中、しばらく黙っていた。下田の方はその沈黙に落ち着かないものを感じて、意を決して話しかける。

「今ここで、話せないんですか？」

「重要な事なので。残念ですが…、儀式が終わってからにしましょうか。それからでも間に合うでしょう」

淡々と答えてくる。彼女の背中が実際の距離よりもどんどん離れていくようで、下田は頭を振り絞って何を言うべきか考えた。が、思考よりも先に口が勝手に動き出す。

「あの、なんていうか、今まで、ありがとうございます」

ヨルシカは歩きながら、顔だけ振り返ってきた。下田はもう、自分の気持ちを正直に話すことにした。

「最初は、こんなよくわからないことに巻き込まれて、嫌だったんですけど、ヨルシカさん達が手助けしてくれたおかげで、ここまで来れました。もう少しで、お別れになっちゃいますけど、あつちに戻ってからも忘れません。本当に、ありがとうございます」

そう言つて礼をし、頭を上げると、ヨルシカは立ち止まって体もこちらに向けてきていた。表情は柔らかくなっている。

「いいえ。私達は、当然のことをしているだけです。それでも、そうですね、貴方の感謝はとても嬉しいです。私も、忘れません。灰の方たちのことは」

再び、腕を掴んでくる。彼女の手はつつと肌を滑り、下田の手に到達すると、固く握りしめた。視線を合わせながら、顔をぐいと近づけてくる。

「特に、貴方のことは。楽しかったです。とても」

下田は、広場に来た後も、自分の顔をこそそと触っていた、変に熱くなっていないか、心配だったからだ。離れた所で待機し始めたヨルシカをちらりと見ると、彼女は笑顔を返してきた。こそばゆくなくなっ

て、すぐに顔をそらす。

「また、二人でデート？」

ちとせが座りながらからかってくる。

「そんなんじゃないよ」

「でも、あの人の顔、ちゃんとよく見た？ あんたに夢中みたい。見てるこっちが恥ずかしくなるんだけど」

「ええ、そうなのかな。全然、普通だと思う」

ちとせは、呆れた顔になった。

「あなたの将来が心配になってきた」

広場の入り口では、実織と薫が話していた。

薫は、どうやら下田達と一緒にタイミングで現実へ戻るわけではないらしい。祭祀場の者達と協力して、自分の体を取り戻してから、すぐに同じ所へ帰ると、自分の妹の頭をなでながら言っていた。

「下田くん」

薫は実織と一緒に傍へとやってくる。

「皆も。みおちゃんと、仲良くしてくれてありがとね。この子、めんどくさい部分もあるから、ちよつとん？ って思っても、許してあげて」

「お姉ちゃん、やめてって…」

実織に押しつけられて、薫は笑いながら離れていった。彼女も、寂しいのだろうか。下田は、薫がどこか無理をしているような感じを受けた。心配していた妹とやっと会えたのに、また離れ離れになるのは辛いだろう。彼女の問題が解決することを祈った。

生徒たちは篝火の周囲に、円になって座った。内側へ一番近づいているのは、宇部だった。彼に、自分たちが集めたソウルを送り出すことになっている。その重要な役目は、彼自身の立候補によって、決まった。対抗しようとする者は、誰もいなかった。

円の中心には、イリーナが立っている。彼女も緊張している様子だ。この場には、祭祀場のほとんどの者がそろっている。ずっと姿を見ていなかったオーベックという術師まで、顔を出していた。しかし、グウインの姿はない。さつき出会った下田にとっては、あの老人

が今どこにいるのか不思議だった。大事な儀式と言っていたが、自分
は出ないのだろうか。

徐々に、静寂があたりを包む。

灯されていた明かりが、すべて消えていく。

イリーナが跪いている宇部に近づいたのが、始まりの合図だった。

彼女は手を篝火へかざすと、玉座の方へ体を向ける。

「偉大なる薪の王たちよ

今や火は陰り

王たちに玉座なし

貴方たちの炎を

継ぐ者へ預けたまえ」

静かな、それでいてはつきりとした宣言がなされた時、玉座で変化
が起こった。薪たちが、燃え始めている。首も、生きているルドレス
も等しく、薄暗い広場の中で光を放っていた。

五つの玉座から、炎が動き始める。それらは中央へと集まってき
て、イリーナの手元に全て収束していった。

炎の塊。しかしそれは呪術のものとは違うような気がした。それ
はイリーナの肌に触れていても、害をなさない。激しい印象を感じさ
せるのに、その炎へ対する恐れはまるでわいてこなかった。

彼女はそれを、宇部へとふりかける。おそらく、彼の中に集まった
大量のソウルに反応しているのだろう。宇部の体が、一瞬、赤くなっ
た。

最初の火への道が開けると、言っていた。つまりこれからその場所
へと転移するのだろうか。いよいよ差し迫った瞬間を前に、下田は胸
の中に熱いものを感じた。涙が出そうになるのを、こらえた。気が早
い自分に呆れてしまう。まだ、全て終わったわけではないのに。

熱い感動は、胸から広がり始める。そして、全身に行きわたったの
を自覚すると、下田は、自分の腕が燃えていることにも気がついた。

声を出そうとするも、途中で途切れた。いくら意識しても、喉が正
常に動いてくれないようだった。そして、やがて気が狂いそうになる
ほどの激痛が全身をかけめぐり、自分の体がその場に倒れたことも気

にする余裕がなかった。

熱い、熱いと、その言葉だけが脳内を埋め尽くす。すでに、目が焼けただれ、何も見えなくなっていた。暗闇の中では、痛みがさらに強くなってくる。

耐え切れなくなつて、無我夢中で転がりまわつた。誰かの体とぶつかる。その誰かも、暴れまわっているようだ。だが、下田にはもう、他人を気にする意識などなくなっていた。炎に対する恐怖だけが、膨れ上がっていくばかりだった。

永遠にも思われる時間が過ぎた後、下田はようやく安らぎを得た。何もかもが曖昧になつて、上下左右の認識もできなくなり、何も感じられなくなつた。母親の姿が大きくなり、最後に笑っているのを見た記憶が、延々と再生される。

唐突にそれは途切れてしまい、自分の悲鳴や誰かの悲鳴が、幻聴として聞こえてきた。

そして、暗黒が下りてくる。

(2)

『描き人』

・ 貴方は、竜の娘の庇護下にある。

「は……え……」

ぱちぱちと、目の前の篝火が鳴いていた。

41. あがく

視界が、徐々に明瞭になっていく。

篝火のすぐ横には、白い竜の女性が立っている。

彼女は口を押さえながら、嗚咽を漏らしていた。その綺麗な瞳から、涙が零れ落ちようとしている。下田の方を見て、何かを言葉にした。

「アキ、どうしたの？」

体が、まるで自分のものではないみたいだった。それでも声に反応して、ちとせの方を見た。

彼女は、普通に、存在している。

下田は数度瞬きして、急に吐き気が込み上げてきた。

「うそ、ちよつと、アキ！」

両腕が、疼く。

ちとせの叫びを聞いて、ようやく自分の両腕がなくなっていることに気がついた。指の先から腕の根元まで、ぼろぼろと崩れ落ちていく。落ちた腕は、粉状の見た目になって床に広がった。まるで、灰のような。

下田は尻餅をついた。いつの間にか、自分の口から悲鳴が飛び出していた。あの、痛みが。痛いほどの熱が両腕から広がり、彼は恐怖に慄いた。それが全身に広がっていけば、あれの再来だ。もう二度と、味わいたくない激痛。

幸いなことに、その心配は杞憂に終わった。何かが進行する前に、下田は意識を失った。まるでわけのわからない事態に対して、完全に許容できる量を超えた脳が、拒絶反応を起こしたようだった。

目を開けると、質素な天井が視界に広がる。

口を大きく開けて、喘ぐように呼吸をした。体を動かすと、どうやら自分はベッドに寝かされていることが分かった。

額の汗を拭う。そうして初めて、自分の両腕が戻っていることに気

が ついた。

「目覚めたか」

隣のベッドで、カルラが横になっている。枕に片耳をつけて、彼の方に笑いかけてきていた。

ここは、病室のようだ。下田も、何度か行ったことがある。カルラの見舞いで。

そこまで考えて、ずきりと頭痛がした。

自分は、どうして。

「ここは…」

頭が、働かない。今まで起きたことを、現実として受け止め切れなかつた。

「今は、いつ、ですか。僕は、僕は」

「落ち着け。お前の体はイリーナが完治させたが、まだ安静にしていた方がいい。六日も眠っていたんだ。起き上がるのも苦しいだろう」

六日。

その言葉を、前にも聞いたことがある気がする。ただ、今の下田は必死に気持ちを落ち着けることで精一杯だった。自分だけが、目の前のあらゆることから切り出されたような、非現実感が拭いきれない。動揺している下田を見て、カルラは落ち着かせようとしたのか。ゆつくりと半身を起こすと、ずりずりと下田のベッドに移ってきた。二人分の体重を支えることになり、さらにベッドのへこみが大きくなる。

「ぎりぎり、だったな。もう少しで、儀式が始まる。お前は広場に行けないが、大丈夫だ。ここにいても、道は開かれる」

混乱した思考の中で、だんだんとはっきりとした一つの意思が芽生えていく。儀式が行われるという事実が、非常に大きな焦燥感を下田に与えた。

「行かないと…」

「アキヒロ？」

「駄目だ、知らせないと。皆が」

起き上がろうとしたところで、カルラに優しく押さえられる。今の

下田にとっては、弱っている彼女の力にさえ抗えない。

「どうしたんだ。急に」

「行かないと！ 僕、僕だけじゃない、皆、畏に気がついていないんだ。カルラさん、聞いてください。あれはきつと、エルドリツチの、仕業です！ このまま儀式を、続けさせちゃ駄目なんです！」

あれは、下田だけに起きたことではないと、彼自身もわかりかけてきていた。敵側は、まさにあの瞬間を狙っていたのかもしれない。彼は少しも、自分に起きている現象を理解していなかったが、それでもやらなければならぬことを考えられる程度には回復していた。

だが、カルラは離さない。

彼女は下田と同じ枕に顔を預けると、彼を横抱きにした。強く、抱きしめてくる。彼女の鼻が頬に擦りつけられて、下田の呼吸は落ち着いていった。

「もう、いいんだ」

見れば、彼女は辛そうに泣いていた。下田の頬にキスをして、それでもなお苦しそうに涙を流していた。その異常な様子に、彼の方もがこうとする動きを止める。

胸の中から、熱が生まれる。その熱は全身に広がり始めた。

あれだ。あれが、また来る。

だが、その恐怖は初めよりもましになっていた。それはカルラが、優しく触れてくれているおかげなのかもしれないなかった。

「もういい。お前は、お前たちは頑張った。頑張ったんだ。ごめんな。全部我々の罪だ。側にいる、最後までそばにいるから。どうか、苦しまずに……」

腕が燃え始める。その炎は近くににいるカルラに害を少しも及ぼさなかった。下田だけが、燃えていた。下田だけが、苦痛を強いられていた。

彼女の胸の中で、悲鳴を上げる。わかっていたとしても、全身を焦がされる激痛には少しも慣れなかった。

自分の叫びに交じって、カルラの泣き声が聞こえる。それは意識が完全に途切れるまで、ずっと続いていた。

「愚かな母親を許してくれ、ジヨック」

(6)

「…」

下田は、ベッドの上で天井を眺めていた。

初めは、理解することを拒否した。逃げていた。ただ、やってくる痛みに対する怯えだけが、しばらく頭の中を占めていた。

だが、繰り返しした後、次第に現状がわかりかけてくる。間違いない。自分は、同じ日々を過ごしている。過去に戻っているだとか、そういう表現をしてもいいかもしれない。そんなSFでしか起こらないことが、自分の身に起きているのだと、ようやく受け入れた。

「目覚めたか」

カルラが横のベッドで言ってくる。もう、数回聞いた言葉だ。始まりはいつもあの篝火の前で、固有能力の欄を開いている。それから腕が両方ともなくなつて、気絶する。そして目覚めれば、病室で。自分の体が燃え始めるまでカルラと会話をする。

彼は手で、目頭を押さえた。ベッドの淵では、白い竜の女性が立っている。彼女は無言で、下田を見下ろしてきていた。

(11)

どうにか、しなければ。

下田は一つ、逃げることをやめることにした。このまま何も事態が進行せず、ただ痛みだけが積み重なっていく。いい加減、現状を変えなかった。

「目覚めたか」

声をかけてきたカルラへと顔を合わせる。

「カルラさん」

「どうした？」

「教えてほしいことが、あるんです」

下田は言葉を切る。彼女が、下田が燃え尽きる前に言っていたことが、ずっと頭の中でしこりとして残り続けていた。そう、難しいことではない。だが、それを確認するのというのは非常に固い勇気がいることだった。

「火継ぎの儀式が、もう少しで始まります。カルラさんは、一体、何を知ってるんですか」

彼女が動揺したのが、見なくてもわかった。

「儀式で、想定外のことが起こります。貴方は、何か、知っているんですよね」

「何を、言ってるんだ？ アキヒロ、急にどうした。まだ、眠っていた方がいい。お前は、何日も目を覚まさなかつた。落ち着いてくれ」

「答えてください！」

下田は半身を起こし、カルラのベッドに飛び込んだ。思ったよりも体は動く。ただ、カルラは違うようで、詰め寄られても全く抵抗を見せなかつた。

「僕は、僕たちは、そこで、苦しむことになる。苦しみながら、死んでいくことになる。答えてください。貴方は、何か、知っているんですね？僕は、貴方がそう言うのを、確かに聞いた。何度も聞いた。だから、そうに決まってるんだ。教えてください」

「アキヒロ…、アキヒロ、駄目だ」

「何が、駄目なんですか。知っているのなら、言ってください！」

カルラは決して下田と目を合わせようとしなかつた。それが、ほとんど答えを言っているようなものだ。彼は絶対に逃すつもりはなかつた。今までの苦痛を全て無駄にするなど、到底許されることではない。

彼女と鼻がくっつきそうになるまで詰め寄り、繰り返し叫んだ。ローブの襟をつかみ、何度もゆすつた。彼女が苦しそうにしても、やめなかつた。それくらい、下田は必死になっていた。

「許してくれ……。私は、言えない。無理なんだ。できない」

「そんなの、知りません。僕はもう、嫌なんだ。何もわからずに消えていくのは、いいから、全部、話してください！」

「何事ですか」

いつの間にか、病室の扉が開かれていた。下田の声は、彼自身の予想以上に響いていたのだろう。ヨルシカが早足で部屋内に入ってきて、下田とカルラを引き離れた。

「シモダさん。回復したのは嬉しいのですが、もう少し安静にしてください。お願い。一体、どうしたというのですか……」

ヨルシカの視線が向けられると、カルラはびくりと肩を震わせる。それは明らかに恐怖の反応だった。

「カルラ、何があったのですか」

「それは……、申し訳ありません。少し、会話に熱が入って、何でもありません。私は、何もしていません。申し訳ありません」

ずっと俯きながら、そう答える彼女に対しては、ヨルシカはしばらくじつと観察していた。やがて深くため息をつくとき、下田へと顔を向けてくる。

「貴方達二人の問題には立ち入るべきではありませんね。ちゃんと、話し合うのですよ。ところで、シモダさん。急ですみませんが、もう普通に歩くことはできますか？」

本当は、もつと追求したかった。だが、ヨルシカが来てからのカルラはさらに頑なになったようで、これ以上の話が聞きだせるとは思えなかった。

さらには、ヨルシカ自身の事も気になる。彼女も、どこか、いつも通りではなかった。何かに焦っているようで、妙にたたずまいに落ち着きがない。

「とても重要なお話があります。例の件にも関係しています。一緒に、私の部屋に来てくれませんか？」

カルラを少し気にしながら、頼んできた。下田は、思い出す。前も、ヨルシカは儀式的の前に話があると言ってきた。もしかすれば、何かが変わってくれるのかもしれない。

下田は頷いて、ベッドから降りた。少しよろけそうになったものの、すぐにヨルシカが支えてくれる。

「行きましょう」

彼女の手に引かれるようにして、病室を出た。出る直前、カルラの怯えた顔と一瞬だけ目があつたような気がした。

部屋に向かう途中のことも、知っている。

「こんなところで、何をしているのかね」

グウィンが現れて、結局ヨルシカの話は聞けなかったのだ。今回もそうなるのだろう。だが、下田は決意していた。今度は自分も話そうと。何が起きているのか、何が起こったのか。それを知るために。

ヨルシカは心なしか下田の方へ身を寄せ、グウィンを見据えた。そこには、決然とした光がこもっているように思えた。

「わかつておられるはずです」

あれ、と思った。前と、明らかに違っている。ヨルシカの態度も、ずっと強気になっている。

老人は下田の方を見て、目を閉じた。何かを考えるような間が数秒続いた後、ゆっくりと体を移動させ、二人の道を開ける。

「行きなさい。もう、時間はあまりないだろう」

「感謝いたします」

わけのわからない気持ちで、下田も頭を下げる。どうして今回はこうもあっさりに進んだのか、わからなかった。事態についていけない心地で、彼女についていく。

ヨルシカの部屋に入ると、下田はついに我慢できなくなった。慌ただしい彼女の背中に向かって、話し始める。

「もしかして、内通者が誰か、わかったんですか。だから、今このタイミングで」

「そうですね。その通りです。私は、確信を得ました」

もしかしたら。下田ははっとした。その内通者が、何か儀式に仕掛けをしたのかもしれない。そして自分達を消し去ろうとした。筋は通っていると、彼は考えた。カルラが、その内通者だという可能性もある。段々と、その想像が事実であるように思えてきた。

ヨルシカはどこかに腰を下ろすこともなく、奥の壁へと歩いていった。そして壁の一部に触れながら、何かを唱える。すると、触れた部分から穴が徐々に広がり始めた。まるで幻のように消えていき、人が十分に通れる道ができる。

「これは…?」

「万が一のためのものです。行きましょう」

彼女はまた、腕を掴んでくる。それに半ば引つ張られるようにして、下田は先へと進んだ。

部屋の隠し穴から先は、さらにもう一つの小さな部屋が広がっていた。そこへ入った直後、彼は言葉を失う。

わずかな異臭が、鼻をついた。

その元は部屋のあちこちにある。白く、細長いものが、何本も大きな壺の中に詰め込まれていた。そこだけではなく、壁一面にも短剣で無理やり止められていたり、隅の床に無造作に積まれていたりしている。中には、腐っているものもあった。

それらは、明らかに、尻尾だった。

「醜いでしょう?」

ヨルシカは、一瞬だけ下田の耳に口を近づけた。それから、転がっている尻尾を無表情で眺める。

「何度切り落としても、生えてくるんです。剣でも、魔術でも、呪術でも、斬っても焼き潰しても。私の体から離れても、再生は続いていきます。だから、本当に邪魔で…」

下田は、何と言つていいのか、わからなかった。そもそも、相手が自分の言葉を待たずに歩きだしていた。この部屋からさらに、横穴が開いている。漠然とした不安が、下田の中で芽生え始めた。なにかが、食い違っているような。自分は、何かとんでもない、間違いをしているのではないか。

穴を進んでいくと、途中で坂になった。大した勾配はない。ヨルシカについていくことは簡単だった。

穴の中の道は、すぐに終わる。出口らしき部分を通り過ぎると、少しだけ広い空間に出た。さらに近くにある螺旋階段を昇っていく。

そのかなり荒廃した見た目で、ここに前にも来たことがあるのを思い出した。祭祀場のすぐ横にある、塔だ。下田にとつては、あまり気持ちの良い場所ではない。草野など、膿の犠牲者が隔離されている場所だからだ。

階段を登りきると、手前から二番目の部屋を目指した。そこは、生徒達が隔離されている部屋の隣だ。横の開いている窓で、隣の生徒たちの様子を見ることが出来る。一度、イリーナと一緒に来たところだ。

ヨルシカは部屋の扉をノックする。それから、少し上ずった声で呼びかけを始めた。

「失礼します。一人お客を連れてきました。入ります、お兄様」

扉が開かれる。もはやヨルシカの手は痛いほどに下田の腕へと食い込み、まるで彼をももののように、無理やり中へと引つ張り込んできた。一番よくわからないのは、ヨルシカはなぜかとても楽しそうな様子であることだ。

だが、そんな疑問はすぐに消えてなくなる。中にいるものが、一瞬理解できなかつた。いや、何なのかは知っている。しかし、それを事実だと認めることが、あまりにも滑稽で、下田はただただ立ちつくしていた。

「ああ。見ない顔だね。ヨルシカ、どうして連れてきたんだい？」

エルドリツチは首をかしげている。対する下田は、もはや腰が抜けて、その場に座り込んでしまった。

ありえない。なぜ。どうして、こんなことが。

ヨルシカは嬉しそうに答える。

「これは、何かを知ってるようだったので。余計な事をする前に、お兄様に合わせようと思っただけです」

「そうか。偉いね。自分で判断することは、とても大事な事だ」

「フッフ、お褒めに預かり、光栄です」

「ひ……」

ついに、自分の頭は狂ってしまったのかと思った。だって、ヨルシカは言っていた。内通者は確定したのだと。だから、それが誰なのか

と、下田と共有するために、ここまで連れてきたはずなのだ。こんなはずはない。有り得るわけがない。まさか、内通者というのが、彼女自身だなんて。

「シモダさん、どうしたのですか？ お兄様の前で、失礼ですよ」

「いいんだ。無理もないだろう。この子は、きつと、勘違いをしているんだ。この姿でいきなり会えば、驚くのも当然だ」

エルドリッチは、彼に笑いかけてきた。その笑みは、あの人食いは少し違うような気がする。違うようだと、下田は逃避のために自らに言い聞かせていた。

「私はグウインドリッ。かつてはアノールロンドを守護していたのだが、この小賢しい膿に乗っ取られてしまつてね。このように、自我を取り返すことには成功したのだが、いかんせん、まだ不安定で……」

「お兄様！」

それは、頭を押さえて倒れようとする、すぐにヨルシカが近寄って、体を支えた。それは彼女の首に腕を回し、二人は抱きしめ合う形になる。

「すまない、まだ長く話せはしないようだ」

「いいのです。確実に、お兄様でいる時間が増えています。大丈夫です、これならすぐに、あの人食いは消え去るでしょう」

「ありがとう。私は、君のような妹を持って幸せだ」

彼女への愛を囁きながら。

それはヨルシカの肩に頭を乗せる。そして、下田と目を合わせていた。

唇を吊り上げ、歯をむき出しにし、獰猛でおぞましい笑みを、エルドリッチは浮かべている。それは目の前の下田と、ヨルシカ両方をあざ笑うかのようなだった。人食いの話には真実などどこにもないことが、下田にはわかった。

騙されている、と彼女に伝えねばならなかった。家族の情をエルドリッチによって利用されているのだと。

しかし、その前に胸の中に熱が生じる。反射的な恐怖で、下田は何もすることができなくなっていた。全身が焼かれるという確定的な

未来に、ただただ怯えることしかできない。

「ヨルシカが、近づいてくる。その顔はひどく残念そうだ。もう、時間なのですね。やはりもっと早くここに連れてくればよかった」

その言葉は、下田が今まで訳も分からずやられていた儀式の最中のことを、確信しているようで。あれがもはや、ただの事故や、エルドリッチだけの仕業だけではないことを、明確に示していた。

目の前が、暗闇に落ちていく錯覚を覚える。

「なんで…どうして…」

彼女の足が、お腹に思いつきり食い込んだ。蹴られたのだと気がついた瞬間、息が詰まるような感覚に襲われる。呼吸ができない。どうやら、胸の骨が折れているようだった。

「げえっ、ぐ、うう」

「どうして？…ここまで見せても、まだ理解できていないのですか？ 貴方のその、何も詰まっていない脳を最大限動かしても、たかがしれていますね」

ヨルシカは深呼吸をする。彼女の顔は、やや赤みが差していた。下田を侮蔑するかのように見下ろし、頭を蹴る。その顔は、笑みで歪んでいた。いつもの彼女が見せるものとは、決定的に異なっていた。

「嘘だ、嘘だ…」

下田は燃え始めた手を、床に擦りつけた。

本当は、わかっていたのかもしれない。あまりにもタイミングが良すぎた。儀式そのものが、元々下田達がこうなることを見越したものであるという考えの方が、辻妻が合うのだ。始めから、自分たちの犠牲は定められていたのだと。

「ああ、その顔。良いですよ。もっと私に見せてください。そうすれば、最後くらい、何も役に立たない道具風情でも、多少は価値が上がりますよ。フフフ。気持ち悪い。本当に、不愉快な子供。そのまま苦しんで苦しんで…死になさい」

視界が焼き潰されていく。全身の感覚が炎で覆われていく。

今は少しだけ、その激痛があった。それは何もない消失の

前触れでもあるからだ。意識を失っている間だけは、何の危険もない。消えている間だけは、何も考えずにすむ。

もう何も、見たくはなかった。何にも向き合いたくはなかった。

(14)

どうして、どうして、どうして…

(28)

…

(42)

逃避するのにも、飽きが来ていた。うんざりしたという方が、正しいのかもしれない。このままでは何も変わらないという恐れが、下田を無理やり我に返らせた。

逃げなければ。現実からではない。祭祀場からだ。行くあてなど、知ったことではない。とにかく、少しでも遠くへ。

まずは、問題として、時間があまりにも足りない。下田が篝火の前で腕を失い、気絶した段階で、次に目覚めるのは儀式の直前になってしまう。ちとせ達と話し、一緒に隙を伺って逃げるのには、足りなさ過ぎる。

そう、まずはそこからだ。「戻って」来た時、意識を失わないようにしなければならぬ。腕自体は、すぐ治るのだと思う。イリーナの技術は確かだ。あとは自分の精神をもう少しだけ強く保てれば、シヨックで失神することはない。

カルラが、ちらちらと気にしてきている。何も話さない下田に、気

を遣っているのだろうか。それとも、ずっと何も無いはずの空間をじつと見つめている彼に対して、何か不安でもあるのか。

下田は、ベッドの傍に立っている女性と顔を合わせていた。白い彼女は、ほろほろと涙をこぼして、彼に何かを言っている。しかし声が聞こえたのは最初の方だけだった。一単語も喋らないうちに、頭痛がやってきて、彼女の声が聞こえなくなったのだ。それを相手も知ると、さらに辛そうに顔を歪めた。それからは何度も同じ言葉を言っているようだった。聞こえなくても、必死に謝っていることくらいは分かる。

なぜ、泣くのだろう。

下田は唇の端を、震わせた。

泣きたいのは、こっちの方なのに。

(43)

意識が戻った瞬間、歯を食いしばる。ちとせの悲鳴。腕が灰となって崩れていく。

倒れまいと頑張ってみても、脳天を貫くような痛みで全てが決壊した。下田の空しい抵抗を嘲笑い、意識が失われていく。

失敗した。

(46)

失敗。

(53)

失敗。

明らかに無駄な努力をしていると、わかりかけてきた。人間にはどうやら痛み の許容量みたいなものがあるらしく、それを超えるような激しいものがやってくると、強制的に意識を断絶させて、本人を守る機能があるようだ。本人の精神を。

今はそれもありがたくはなかった。何か、打開策を考える必要がある。単純に考えれば、痛みを許容できる範囲にまで小さくすればいいわけだ。下田には、その方法に一つ心当たりがあった。

奇跡。それを使えば、ましになるのではないか。自分のできることをしていかなければ、きつとこの先も続かない。戻ったら、すぐに奇跡を行使する。それだけを目標にして、下田は炎に包まれていった。

今まで、意識したこともなかった。

結論から言えば、失敗した。

今まで奇跡を使う時どうしていたか。聖鈴。それは別に必要ない。あくまで補助をする役割だからだ。それよりももっと根本的なものが、戻った瞬間のタイミングでは欠けていた。

両腕がないということ、両手もない。下田は奇跡の行使を、治したい傷部分に手をかざすことで完遂していた。いわば、手を、術の起点として扱っていたのだ。故に、そもそも奇跡を発動することすらできずにいた。

どうすればいいのかは、わかっている。起点の意識をもう少し柔軟にすることだ。手から奇跡を放つのではなく、治したい部分から直接奇跡を発現させればいい。少しだけ習った放つ回復の応用とも考えればいいのだろうか。

それをどうにか成功させれば、意識を保つことができる。

(75)

奇跡は出ない。

失敗だ。

(82)

失敗。

(86)

何となく、感覚がつかめてきたような気がする。同時に、これの難しさも理解する。奇跡においても、イメージの重要さは大きい。今ままでずっとしてきたやり方を変えるのは、わかっけていても難しかった。イメージの中では常に成功していた。あとは、現実が追いつくだけだ。

下田は何か躍起になっている自分を、遅れて自覚した。何かに一瞬だけ、光ったような気がした。余計な事を考えずにすむのだろう。けっして、楽しいだなんて言えるものではなかったが。

(92)

一瞬だけ、光ったような気がした。

それは、結局幻だった。

「うそ、ちよつと、アキー！」

ちとせの叫びが、合図だ。彼女の切羽詰まった声は、いい具合にこちらの意識を切り替えてくれる。下田は集中をした。己の腕が、光に包まれる想像。それによって、腕が再生されていくイメージ。

ぐぐと、ないはずの腕に手ごたえがあった。それで慢心することはなく、さらに、奇跡の行使を続けていく。歯を食いしばった。尻餅をついても、他のことに気をとられないようにした。

治れ。

治れ。

「なおれ！」

思わず叫んでいた。声に出すこと。それがもしかすれば、良い方向に働いたのかもしれない。イメージを強固なものにさせたのだ。

イリーナが駆けよってくるのを見て、自分がまだ意識を保っていることに気がついた。腕の方を見ると、しかし何も無い。てつきりとうくに再生されているのかと思っただが、それはまよかしの感覚のようだった。根元の傷口が、ややふさがっているに過ぎなかった。

下田の雑な治療の上に、イリーナが手をかざす。彼女の光は、徐々にはあるが確実に、下田の腕を再生し始めた。結局技術の差は絶対ということだ。

これでも、上出来だろう。

ふう、と息を吐いて、それから達成感に浸りかけている自分に唾然とした。何一つとして事態は改善されていないというのに、気が緩みかけている。むしろ、頑張らなければならないのはここからだというのに。

大扉が、開かれる。

その音が、下田にはやけに大きく聞こえた。

「何事ですか？」

グウインの後ろをついてきているヨルシカは、下田の現状に気がつ

くと、心配そうな顔になった。それは本心から思っているような表情で、そこに何か裏があるなど、到底考えようもなかった。

だが、もう知っている。こうやって振る舞っている彼女の姿は、ただの一面に過ぎないのだと。残酷で非道な側面もあるのだと、下田はもうわかっていた。

自分の口から、言葉にならない呻きが漏れる。ヨルシカを目にするだけで、あの時の情景が浮かび、恐怖が蘇ってくる。蹴られた腹と頭の痛みが、戻ってくるような気がした。

結局下田は、治療の負担も相まって、直後に意識を失うことになる。一度決意したはずなのに、またくじけそうになっている自分の心の弱さが、心底嫌だった。

ただ、同じことは繰り返さなかった。眠り続けていたのは一日ほどで、今までよりも明らかに早く回復することができた。目覚めた場所も、自分の部屋だった。

「大丈夫？」

イリーナが出ていったあと、ちとせは心配そうに尋ねてきた。

下田は半身を起こしながら、彼女と視線を合わせる。思えば、誰かとまともに会話をするのは、久しぶりな気がした。最近はずっと、ベッドの上か篝火の前で立っている記憶しかなかった。回数など数えていないが、少なくとも二年は経っているのだろう。頭の奥で、疲労がたまっている。

「アキ、あのさ」

ちとせは丸椅子に座りなおす、彼を気づかわしげに見つめてきた。「何か、悩みがあるなら相談しなよ。あんた起きてから、ずっと変だよ。どうしたの？ 何か、あったの？」

下田は俯きながら、自分の限界を感じていた。正直、もう解放されたいと思っている。この、理解しがたい状況から抜け出したかった。全部、自分の都合が良い事実だけを信じていたかった。

だが、それも限界なのだ。彼は顔を上げる。

「実はちよつと、追いつめられてて。聞いてくれる？」

「うん。どんとこい」

自信ありげに胸を叩いた彼女を見て、少しだけ気分が和らいだ。

下田は声を潜めながら、全てを話した。ヨルシカが、エルドリツチと通じていること。このまま儀式を始めさせてしまえば、自分たちは死ぬこと。そしてなぜそれを知ることができたのか。自分の固有能力のことも、全部話した。

不可解だったのは、ちとせが進化のことをまるで初耳であるかのように反応したことだ。それはおかしかった。以前も話したことがあるはずなのだ。そこで何となく、嫌な予感がした。

彼女は、初め驚きで声も出ない様子だった。

「何それ…。そんなのって」

「僕も信じたくないよ。でも、本当のことなんだ。全部この目で見た。何度も見たんだ。僕たちは、ずっと騙されてた。だから、逃げないといけない」

「どこに」

「わからない、でも、できるだけ遠くへ行かないと。ここにいちや、殺される」

ちとせが動揺しているのが、その息遣いで分かった。どんな顔をしているのかは、怖くて見られない。もし、疑われたら。くだらない嘘だと、切り捨てられたら。そう考えると、彼女が黙っている間でも、異様な緊張が全身を支配した。

沈黙は、しばらく続いた。下田はずっと返答が来るのを待っていた。しかし、段々と異変を感じ始める。あまりにも、反応が返ってこない。長すぎる。

思い切って顔を上げる。彼女の様子を確かめた。

ちとせは、妙な表情をしていた。瞬きを何度もして、少し気の抜けた顔をしている。きよろきよろと辺りを見回し、下田を見ると、一気に喜びの色を強くした。

「良かった！ 目が覚めたんだ。あんた、一日ずっと眠ってたんだよ。大丈夫？ 気分悪くない」

これが冗談であるのなら、ちとせの意外な才能を見たと思うこともできる。それほど、彼女の様子はただの演技とはかけ離れていた。そ

の反応は少し前に下田が目覚めた時のものほとんど同じだった。

「いや、ちとせ、さっきの話は…」

「さっき？ 何言ってるの？ あんた今まで寝てたでしょ」

「だから、その、祭祀場の話」

「落ち着きなよ。寝ぼけてるの？ やっぱり、もう少し休んだ方がいいよ」

下田は一瞬、自分が巻き戻ったのかと思った。何らかの形で能力が暴発したのだと。しかし、それは違うようだった。本当に戻ったのなら、イリーナもいるはずだ。目覚めたとき、ちとせとイリーナがそばにいたのだから。

部屋の隅に、白い女性が立っている。彼女は首を横に振っていた。

下田は思い返す。今までも似たようなことがあった。草野や実織も、下田の固有能力を忘れている素振りをみせたことがある。篝火に触れてさえいれば周りの時間が止まる能力なんて、普通は忘れようがない。つまり、これは意図的なものだ。誰かの、仕業なのだ。

「白い女性はまた首を振った。それを睨みつける。」

貴方が、やったのか。

瞳でそう問いかけても、悲しそうにされるだけだった。

結局わかったのは、能力を説明しようとしても意味はないということだけ。何度か違う方法で試すこともできたのだが、繰り返すのは危険な気がした。ちとせの、誰かの記憶を改ざんするなんて、そう何度もやっていいことではない。

それでも、下田は諦めていなかった。

次の日から、彼は復帰した。不死街での、ソウル集めを他の皆と一緒にやり始めた。最初はまだ安静にした方がいいと止められたが、受け入れなかった。唯一、祭祀場から出られる機会なのだ。無駄にしない手はない。

ともに手伝ってくれていたジークバルド達が別の場所へと向かうのを見計らって、下田は生徒たち全員を集めた。

「なんだよ、お前のことなんか時間に与えられるの、うざいんだが」

下田は周りを油断なく確認しながら、宇部の言葉を無視した。周囲

に音送り、消音の魔術をかけて、話の準備をする。正直効果のほどは信用していない。習得してからまだ、それほど経っていないからだ。

太い木の幹を背にして、集まっている全員の顔を一つ一つ見た。果たしてこのうちの何人が信じてくれるのだろうか。

「ごめん。急に。でも、重要な事なんだ。皆にとっても。これから話すことは、多分、皆驚くと思う。それでも、冷静に聞いてくれないかな」

自分の部屋でちとせに話したことと全く同じ内容を、話していく。しかし、能力のおかげで知った部分の変更せざるおえない。必死に考えた結果、偶然ヨルシカの会話を耳にしたということにした。我ながらかなり苦しいが、他に思いつかなかった。

ほとんどが、少なくない驚きを示した。二人を除いて。

宇部は、面白くもない冗談を聞いたとばかりに苦笑した。

「おいおい。何だって？ お前、病気だろ。どうやったらそんな、突拍子もない妄想を抱けるんだ」

「本当なんだ。僕は、この目で…」

「くだらねえ。やっぱり時間の無駄だった。行くぞ丸戸。こんな変な奴と関わってられねえ」

「そ、そうだな」

丸戸もまた、鼻で笑ってくる。

「下田。お前、無能なくせに、さらに俺らの足まで引つ張るのかよ。どうしようもないな」

二人が去っていくのを、もつと強引に止めることもできた。しかし、下田にはできない。たとえ自分が聞く側だったとしても、受け入れるかどうか自信がなかった。それくらい信じられないことを言っている、自覚はしていた。

残った者達も、しばらく言葉を発しない。その顔には異常はなかった。やはり固有能力がらみの会話だけは、影響があるようだ。

最初に話し出したのは、実織だった。

「下田。それは、本当なの？」

「うん」

「でも、それは、勘違いじゃなく？ 本気で、言ってるの？」

「そうだよ。僕たちはここにいちやいけなない」

実織ははつきりと疑念を表していた。

「ちよつと変な話を耳にしただけで？ 考えすぎとかは」

「それはない。ヨルシカは、僕達を騙してた」

はつきり言い切ると、彼女は微妙な顔になった。

「でも…逃げて、どうするっていうの。私にはちよつと、無理だよ。だって、お姉ちゃんを置いてはいけなないし。その、馬鹿兄も。お姉ちゃんは、祭祀場の指示ですつと動いていたつて。だから、そんなに気にしなくていいんじゃない？ 考えすぎだよ」

「違うー。この目で見たんだ！」

思わず声を荒げている自分に気がついて、下田ははつとした。今までの鬱屈を、彼女へぶつけるのは間違っている。自分が嫌になって歯を食いしばっていると、実織は立ち上がっていた。

その顔は、申し訳なさそうになっている。

「下田、おかしいよ。どっちにしても、ごめん。私は、どこかに行く気なんてない」

「ここにいと、死ぬんだ」

「私はそうじゃないって信じたい。お姉ちゃんまで疑いたくない。本当にごめん。そういうことだから」

彼女が去ろうとすると、さらに新宮も腰を上げた。彼女も少なくとも動揺を感じているようだったが、既に決意を固めている目をしていてた。

「実織が残るなら、わたしもそうする。このことは誰にも言わないから。ごめんね」

すでに四人が去って、わかっていたとしても気分が沈んだ。ため息をついて、木によりかかる。これは、自分の責任だ。もつと説得力のある説明とか、決定的な証拠を用意できなかった。こうなるのは、当然かもしれない。

「びっ」

すぐ横で声がかして、思わず飛び上がった。ちとせが、優しく肩を叩

いてくる。

「しつかりしなよ。で、どこに行くの？ とにかくここから遠ければいいんでしょ」

「え…」

「なに？ ぼうつとしちゃって」

ちとせは平然としていた。下田の話の衝撃からは立ち直っているようで、すでにしつかりとした視線を向けてきていた。その真摯な光に、なぜか、直視できない感情を覚える。

「どうして」

「ちよつと、しつかりしてよ。あんた自分が言ったことちゃんと把握してる？ 逃げなきやいけないんでしょ。宇部と丸戸のバカ二人がチクってるかもしれないじゃない。さつさと行動しないと」

「でも、信じるの？ 疑ってるんじゃない？」

「まあ、正直信じたくないけど」

彼から視線を外し、頬を指で搔いた。口元には照れるような笑みが浮かんでる。

「アキって、そういう嘘はつかないでしょ。何の得もないもん。それに、私達戦友だから。信じないでどうすんの」

「高原のくせに、いいこと言うなあ」

高坂は既に槍を取り出していた。周りを油断なく観察している。下田と顔を合わせると、肩をすくめて見せた。

「ま、俺は別にお前とすんごく親しいわけじゃないけど。あいつらが怪しいっていう意見には賛成だな。前々から思ってたんだ。どっか胡散臭いんだよな」

「俺は知ってたみたいなお態度、ださいからやめなよ」

「はあ？ じゃ、お前は残れよ」

「男二人だと見栄え悪いじゃん。私が華をそえてやるから」

「自分が華の役割できるとでも思ってるのか？」

「決めた。高坂は囷に使う」

「やつぱり、寝返っちゃおっかな」

「あんたそれシャレに…」

二人は、下田の笑い声で会話を中断した。それから、彼が泣いているのを見て、さらに微妙な表情をした。下田にとってはそのシンクロした動作が可笑しくて、泣き笑いが止まらなかった。何だか久しぶりに、気分が安らいだ気がした。

逃げ始めるタイミングは、意外と簡単だった。戦闘になれば、さすがに祭祀場の者達もこちらの全ての動きを気にすることはなくなる。誰の目もなくなったと判断できれば、下田が見えない体の魔術を使えばよかった。これは自分ではなく、他者にもかけることができる。本来ならかなり困難らしいが、下田にはこの術への適性があった。

離脱してしばらくしても、誰かが追ってくる気配はない。

「歩きづれえな…」

「ちよつと、速度合わせてよ」

「二人とも、あまり離れないようにして」

適性があったとしても、下田は遠隔での術を維持することが苦手だった。そのため、二人に直接触れ続けなければならない。三人はほとんどくつつきあって、前へと進んでいた。亡者などの敵に出会う度に、息をひそめてゆつくりと通り過ぎなければならぬ。足音などは相手に聞こえているのだ。見えない体と音送りの併用は、まだ下田には不可能だった。

かなり緊張しながら不死街を過ぎていく。予想とは違って、未だ何の障害もなかった。さすがにそろそろ自分たちが戻ってこないことを祭祀場の者達は気がついていよう。追手も放たれているはずだ。

ただ、やはり、透明になれるというのは強いアドバンテージだった。このまま距離を稼いでいけば、おそらく完全に彼らの搜索を逃れることができるに違いない。

逃げられたとしても、この先どうするのか。

残された生徒たちの事を考えると、目の前が暗くなる。そして現実に戻るのかも、わからなくなった。このまま、自分たちはこの世界で死ぬのだろうか。

下田は、今だけは未来のことを考えないようにした。他の二人も、同じ不安を抱えているはずだ。事情を話し、ここまで連れてきた自分の責任として、絶対に弱気なところは見せてはいけないのだ。術の維持にも集中力がある。ただ進み続けることだけを意識した。

不死街もだんだんと終わりが近づいてくる。遠くの方で、小さな塔が見えてきた。あそこの中にエレベーターがある。そこを下りてさらに進めば、生贄の道だ。せめてファランの城塞までには、一気に到達したかった。

建物が近づいてくると、皆の足が早くなる。互いに離れないようにしながら、できる限り早く塔内へと向かった。三人の中では一番高坂の身体能力が高いので、必然的に彼が一番前に出ることになる。

高坂は、塔の前に来ると、扉の前に立った。二人に向かって頷いて見せてから、木の扉を押し開いていく。

地面から、突然火柱が噴き出てきた。下田はその風圧に飛ばされ、地面を転がる。びつくりした衝撃で、術は解けてしまっていた。

背中を打った痛みで呻きながら、何とか体を上げる。いつの間にか、下田達の前に二人の男が出現していた。

「すげえな。本当に来た。竜女の言ったとおりだ」

「そのような言葉は控えることです。彼女が癩癩を起こしたら、すぐに殺されますよ」

「それも楽しそうだな」

高坂が、足を押さえてもがいている。酷い火傷だ。今も燃えている防具を何度も地面に擦りつけている。彼が自分で歩ける状態でなくなったことは、一目でわかった。

坊主頭の法衣を着た男と、巨大な剣を肩に抱えた男が、下田達に近づいてくる。

その二人は、見たことがある。

忘れもしない。エルドリッチの配下だ。大剣の男は、ゾリグ。草野を殺した男。もう一人の方は、名前はわからなかった。ただ、三人いる坊主頭の内の一人だ。実織の呪術よりもはるかに大きな炎を作っていたことを憶えている。

もはや不思議でもなんでもなかった。エルドリツチ側とヨルシカが通じているとわかった以上、こうなることもわかつていたはずだった。

「逃げる…」

高坂が、槍を構えた。負傷している身とは思えないほど素早く三本を続けざまに放った。しかし、それらは相手とは全く違う方向へと飛んでいく。

ゾリグが笑い声をあげた。

「んん？ どうした。焦りすぎだぞ」

油断している彼の背後に、軌道を大きく変えた槍が迫る。ゾリグの大剣が、別々の方向から来た二本の槍をこともなげに切り落とした。

「なるほど。曲芸だな」

残りの一本は、法衣の男によって無力化されていた。

「逃げるー！」

下田ははつとして、まだ立ち上がれていないちとせを引っ張り上げる。そして、すぐに見えない体を発動させた。足が、自分のものではないようだった。どれだけ走っても、前に進んでいる気がしない。それでも、走り続けなければならなかった。捕まったらどうなるかなんて、想像したくもない。

しかし、すぐに行く手を塞がれる。黄色い茸の帽子をかぶった妙な術師と、仮面の男がすでに魔術を放っている。下田には、ただ蒼白い光が一瞬だけ見えたとしか思えなかった。自分たちは透明であるはずなのに、位置をはつきりと捕捉されているのもわけがわからなかった。

直後、頭に強い衝撃を感じる。脳が大きく揺らされて、なすすべなく足がもつれた。背中がちとせがいるのを感じる。彼女も痛みに呻いて、一緒に倒れ込んだ。自身の荒い呼吸が聞こえる。鼻から血が垂れていくのがわかった。

立ち上がろうとしても、まるで力が入らない。そばにちとせの存在を強く感じながら、段々と目の前が暗くなってきた。彼の思いとは裏腹に、意識はどこまでも深く落ちていく。彼に、深い絶望を残して。

4.2. 憎悪

「起きなさい」

頬を、叩かれる。

その衝撃で、下田は目を覚ました。大きく息を吸い込む。埃の臭いが、一気に鼻の中へと入り込んできた。

ぼやけていた視界が徐々に鮮明になっていく。ヨルシカは、冷たい瞳で、彼の回復を観察していた。

隣を見ると、ちとせもちょうど気がついたところだった。両手を鎖で縛られている。そこまで見て、自分も同じ状態であることが分かった。それに、喉のあたりに妙な感じがする。普通に声は出せそうなのだが、別の何か詰まっているような気がしていた。

「不思議でなりませんね。どうして、こんなことをしたのか。貴方達だけで行動するのは危険なのです。心配していたのですよ」

そんなことは微塵も思っていないことは、表情で分かった。それにエルドリッチを横にして喋っていても、まったく説得力がない。自分はまだ、この部屋に連れてこられたのだとわかった。だが、今度は一人ではない。

「大方、カルラあたりが口を滑らせたのでしょうか。わかりませんね。貴方達などに情を移すなんて」

「なんで、こんなこと…。どうして、なんですか」

ちとせが、ヨルシカを睨みつける。まだ、彼女には抗う意思が残されているようだった。

「別に。初めから決まっていたことです。私は全てを計画したわけではありません。いくらでも考えてください。どうせ、大した時間は残されていませんが」

彼女は、めんどくさそうに言うと、部屋を出ていった。

その後しばらく、エルドリッチと共に残される。彼は、何も言っていなかった。ただ、下田の方を舐めるように観察してくるだけだ。そこには純粹な興味以上のものが表れている気がして、ただただ気持ちが悪かった。

逃げるために、色々試した。すぐそばには当然刃物の類もない。ならば魔術で鎖を破壊しようと思いついたが、なぜかこの場では何も発動させることができなかった。どうやら、術を封じる類の何かがかかっているようだ。喉の奇妙な詰まりは、おそらくそれが原因だろう。

インベントリを利用するのにも、結局手が使えなければほとんど意味をなさない。もちろん道具を選べば強引に拘束から脱する方法もあっただろう。爆弾などを使えば。しかし、そういったものを取り出すためのソウルが、二人分合わせてもまるで足りていなかった。

「アキ、アキ……」

ちとせが肩を触れさせてくる。みれば、彼女は唇を噛みしめて、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「ごめんね」

「どう、したの？ 謝るのはこっちの方だよ。僕は、何もできなかった。もっと、うまくやれたはずなのに」

「違うの。私あんなこと言っておいて、実はね、ちよつと疑ってたの。ロスリック城でさらわれてから、誰かに洗脳されたんじゃないかって。少し付き合っただけで、治るかもしれないって。ごめんね。私、本当に嫌な性格してる」

「そんなことない。僕は、ちとせと高坂が付いてきてくれるってわかった時、すごく嬉しかった。だから、謝ることなんてないんだ」

彼女は鼻をすすった。頭を振って涙を払う。それから、いつもの強気な笑みが戻ってきた。それに今まで何度か、下田は助けられたことがある。

「あんたが正しかった。このままじゃ、駄目。私は、諦めない。アキは危険を承知で私たちに警告してくれた。私も、頑張るから」

しかし、今だけはどこか、不安だった。彼女は何かの決意を固めたようだが、それがいい方向に働くとはとても思えない。二人の小さな会話を、エルドリッチは不気味な笑みで眺めていた。その視線は、下田の方ではなく、段々とちとせの方に向くようになっていた。

ヨルシカが戻ってきたのは、かなり時間がたつてからだった。今は

何日目なのだろう。少なくとも、儀式はまだ先のはずだった。彼女の様子が、たいして急いではいないようだったからだ。

「遅かったじゃないか。退屈だったよ」

「ああ。今は、人食いの方ですか。忌々しい」

「ウフフ、いい加減彼らも疲れてきているようだよ。可哀そうじゃないか」

ヨルシカは鼻を鳴らして、下田達を見つめてきた。そこには思いやりの心など少しもこもっていない。

「貴方達に見せたいものがあります。自分たちの行動がどれだけ無駄か。よく理解することですね」

ヨルシカは窓の方へと向かう。そこは確か、隣の部屋がのぞける部分のはずだった。

「見なさい」

彼女は下田とちとせの両方とも持ち上げる。そして、無理やり窓の方へと押し付けてきた。苦しみながら、中の様子を理解する。そこには、前と同じく膿に侵された生徒達が寝かせられていた。

「真実を」

ヨルシカが、何かを唱える。すると、窓の表面が移り変わっていくような気がした。変化の線のようなものが、左から移動していく。それが視界の全てをなぞり終えたとき、目の前の光景は大きく変わっていた。

寝ていた生徒たちは、活発に動き回っていた。お互いに飛びかかり、貪り合っていた。頭も体も、干からびた姿で。それは明らかに亡者の姿と酷似していた。かろうじて男女の違いが分かるくらいで、誰が誰なのかは判別できない。しかも全員が残っているわけではなく、手足や頭の残骸らしきものが、あちこちで積み上がっていた。

「う…」

両手が不自由でなければ、口を押さえている所だった。顔をそらすうとして、ヨルシカに無理やり固定される。もはや彼女は、笑っていた。下田達が苦しんでいるのを楽しんでいるようだった。

「もうとつくに、彼らは手遅れでしたよ。貴方達が少しでも誠実に、こ

こへ通い詰めていけば、違和感にも気づけたかもしれません。哀れです
すね」

「ふざけんなー！」

ちとせが身をよじる、と同時に空中に縄が出現した。それらは真つ
すぐヨルシカの手足を拘束しようと放たれる。固有能力だけは、ま
もに使えるようだった。

しかし、縄たちは全て、紫色の光球によって吹き飛ばされる。エル
ドリツチはち、ちと舌を鳴らした。

「詰めが甘いね。遅いよ」

ちとせは髪を掴まれて、壁に叩き付けられる。それからヨルシカは
さらに、彼女のお腹へ魔術を放った。短い悲鳴を上げて、ちとせはう
ずくまった。頭から、血が流れ落ちてくる。

「ちとせ！」

「懲りないのですね。やはり、二匹もいらなかった」

「もう、殺すのかい？」

「馬鹿な事を言わないでください。篝火に転送されたら、もつと面倒
なことになります。死なない程度に拷問をすればいいでしょう」

ちらりと、ヨルシカは下田を見た。まるで何かを期待しているかの
ような表情だった。

エルドリツチが笑みを深くする。

「それなら、良い案があるんだ」

「なんですか？」

人食いは唇をゆつくりと舐めた。

「ちようど、お腹がすいていたんだよ。貴重な若い女性だ。少しつま
んでも支障はないだろう？」

ちとせへと何か向かおうとする動きを止めた。あたりは、彼女の
荒い呼吸だけが響いている。

自身の言葉の余韻を十分に確かめた上で、エルドリツチは動き始め
た。

ヨルシカは、つまらなそうにため息をつく。

「それでも構いません」

不定形の膿の下半身が、ずりずりとちとせへ近づいていく。対する彼女は怪我のせいでまともに動けなかった。ただ、人食いの化け物が来るのを待っていることしかできなかつた。

「ま、待って」

下田はたまらずに声を上げた。これ以上、誰かが傷つくの見ていただけなのは、嫌だつた。

「僕が、代わりにになります。だから、彼女に手を出すのはやめてください」

「んー」

エルドリッチは人差し指を口元に当てた。多少は、迷ってくれているようだ。視線が彼とちとせの間を忙しなく行き来している。それはまるで、子供のようにな无邪気なしぐさだつた。好物を選べと言われて、迷っているみたいだつた。

「駄目ですよ」

ヨルシカもまた、なかなかいい娯楽を見ているような声音だつた。

「シモダさんは、大事な祭祀場の仲間なんです。そんな酷いことは、させられません」

ついに、この女の頭はおかしくなったのかと思つた。今までの行動で、そんな発言ができるとは思ひもしなかつた。いや、わかっている。彼女はちゃんと理解していて、楽しんでいるのだ。下田は、見物をさせる方なのだと思つている。

「そうだねえ。どっちも魅力的なんだけど、やっぱり女の肉がいいねえ。ごめんねえ、また機会があつたら、アナタの方も味わつてあげるから」

エルドリッチは手を伸ばし、うずくまっているちとせを持ち上げた。かなりの細腕なのに、腕力は相当あるようだ。

下田はあらん限りの力を振り絞つて叫んだ。間に割つて入ろうともしたが、ヨルシカの抑えからは抜け出すことができない。

「やめろー！」

「…あき」

ちとせの目は、朦朧としている。頭を強く打ち付けたせいだろう。

それでも強い意思の光を、下田に向けてくる。

「あたしは、大丈夫、だから。あの、お願い、します。アキだけは、彼だけでも見逃してください。あたし、抵抗しませんから」

「フフフ、考えてやってもいいんじゃないかい？」

「前向きに検討します」

ヨルシカもエルドリツチも、吹き出しそうな顔をしていた。

今、もしこの手にナイフがあったら。下田は感じたことのない、強烈な感情に支配されつつあった。あいつらの首両方を、掻き切つてやるのに。何もかも、助け出せるのに。そういつた、根拠のない妄想が、下田の限界も示していた。

「じゃあ、こうしよう」

エルドリツチが妙案を思いついたとばかりに指を立てた。肩で息をするちとせに向かって、微笑んで見せる。

「アナタが食事の最中でも静かでいられたら、彼には何もしないと誓うよ。どうだい？」

「はい。お願い、します」

「やめろ、やめろ、やめろ…」

ちとせは、まだ、笑っていた。

「大丈夫。殺されは、しないだもん。あたしなんかより、あんた自分の心配をしなよ。あたしに、すつごく大きな借りを、作るんだから。覚悟、してよね」

「ぐうううう、うう、う」

下田はまた暴れる。もはや何もちゃんとした言葉にはならなかった。どれだけ渾身の力を込めても、ヨルシカの拘束は逃れられない。自分がひたすら情けなかった。目の前の視界が歪んでいく。彼女は泣いていないというのに、自分ときたらこれだ。

助けは、こなかった。漫画やドラマのように、絶体絶命の時に都合よくヒーローが来てはくれなかった。そこには、敵と弱者しかいなかった。下田は何一つできることもなく、目の前で起こることを見続けなければならなかった。

結果を先に言えば、指を三本ほど食われたところで、ちとせは決壊

した。

彼女の強がりなど、結局は無に等しかったのだと、下田にもわかった。最初は、嘆願をし始めた。片手を貪られながら、先ほどの自分の言葉は取り消すと、泣き叫びながら言った。とにかくもうやめてほしいということだけを、頼んでいた。

エルドリツチの口は、普通の人間と変わらない。一度に開ける大きさにも限界がある。肉食の大型動物などとは違い、人間の部位を一噛みでもっていくことなどできない。故に、ちとせは長い時間をかけて、非常に遅々とした速度で、食べられた。下田はヨルシカに顔を押しさえつけられて、瞼を無理やり開けさせられて、それを最後まで見させられた。

下田も泣き叫んだ。何度も何度も懇願した。喉が潰れて血の味しかりなくなるまで、叫び続けた。激しく暴れてヨルシカに何度も殴られたせいで、顔中に痣ができた。

両腕を全て貪られたところで、ちとせはあまりしやべらなくなつた。全身にべつたりと汗をかき、気絶しているのかわからない様子で頭を揺らしていた。

ただ、意識の狭間で休むことを、エルドリツチは許さない。彼は、どうすれば相手の痛覚を的確に刺激し、悲鳴をあげさせ続けることができるかを知り尽くしていた。彼は奇跡を使って止血し、決して死なないように注意を払っていた。

それからは、だんだんとちとせは憑かれたような目でエルドリツチを見るようになった。涙まみれの顔面は、人食いにとつて非常に良いスパイスになっていようだ。段々と食べ方に遠慮がなくなつてきた。ちとせの口の端から、血がこぼれる。悲鳴の上げすぎで、喉が裂けているようだった。

下田は、何度も吐こうとした。だが、胃の中のものはいくつも出てこない。胃液が少し漏れ出るだけで、脱水症状で死ぬこともできない。

ちとせは、おぞましい視線の向きを変え始めた。もはや自分ではどこにも行くことのできない、手足が失われた状態で、下田を見据えていた。その目はどこまでも暗く、耐えられないほどに、憎悪があふれ

たものだった。

「全部、貴方のせいですよ」

ヨルシカが、耳に口を近づける。興奮した吐息がかかってきた。楽しくてたまらないといった様子だ。

「貴方がくだらない妄想を言わなければ、彼女は逃げることもしなかった。捕まって、ここへ連れてこられることもなかった。今、あそこでこうして苦しみ続けているのも、貴方のせいです。可哀そうですね。貴方がいたばかりに」

本当は違う部分もある。そもそも、彼女たちが全ての元凶だ。しかし、ちとせの視線を受け続けている下田は、ヨルシカの意見をほとんど受け入れていた。何もかもが自分のせいだと、考え始めていた。

ちとせの耐えられない視線は、じきになくなる。エルドリッチが、彼女の両目をくりぬいたからだ。舌を出しながら大きく口を開けて、二つ同時に飲み込んだ。そこから、ちとせは誰にも意味の分からない、恨み言のようなものを言い始めた。喉が駄目になっているので、普段の彼女の快活な声とはかけ離れていた。老婆のような、醜い声だった。

エルドリッチは両方の耳を食いちぎってから、もののようにちとせを横に放り投げた。満足げに口元を緩め、お腹をさする。

「ごちそうさま。やっぱり、いいね。悲鳴を聞きながら貪るのは最高だよ。こんなところかな。これ以上やると死んじゃうね。内臓も食べてみたかったけど」

それからしばらく、下田達は放っておかれた。期間は数日ほどだったが、永遠のようにも思えた。エルドリッチに観察されながら、下田はちとせだったものを見ていた。正確には、何も見ていなかったかもしれない。目を閉じなくても、どこか別の世界へと飛んでいける気がしていた。実際に何度か、それが成功したこともある。そこでは、皆がいるのだ。母さんもちとせも、友達の皆も、全てが笑顔だった。お母さんがいつでも好物のロールキャベツを作ってくれる。痛いことも苦しいこともない世界。

「わかりますか?」

それは多分、ほとんど反応を示さなくなった下田に、退屈を感じたからなのだろう。ヨルシカは部屋の中に入ってくると、再び無理やり彼を持ち上げた。顔同士がほとんどくつつく距離で、話しかけてくる。

「あのまま泳がせて逃がすこともできませんでした。貴方に全てを話すことなんて、そもそも必要のないことでした。お互いに何も余計な干渉をしない方が、火継ぎも滞りなく進んだでしょう。それでも、こうして、わざわざ貴方に見せているのはなぜだか、わかりますか？」

「母さん、母さん、母さん、母さん、母さん、母さん、母さん」
「私が貴方を、憎んでいるからです。この手で殺してやりたいほどに、憎悪しているからです。たくさん、たくさん苦しんでほしかったんです。：お前を見るたびに、あの女の影がちらつく。貴方とのあらゆる瞬間が、拷問のようでした。どれだけ、殺してやりたくなかったか。特に、貴方が私の姿のことくだらないお世辞を言ってきた時は、危なかったです。何も知らないくせに、聞き触りのいい言葉だけ並べたて。本当に、不愉快な男。でも、フフフ。そういう、無様な顔は好きですよ。ずっとそうしていてください。最後まで」

ヨルシカの瞳もまた、昏い輝きで満ちていた。下田の視界一杯に、深淵が広がっていた。それでも、彼は別の何かを見ていた。必死に逃避をしようとしていた。

「母さん、母さん、母さん…」

ふう、と相手はため息をつく。それから、唇を吊り上げて、とても楽しそうな笑みを浮かべた。

「本当に愚かですね。そうやって、何も知らないで。このまま消えていくのを待つだけ。自分の母親がとつくに死んでいることも思い出せずに」

楽しい世界の想像が、唐突にぶつ切りになった。異様なほどの頭痛に襲われて、下田は顔をしかめる。

なんだか今、とても、有り得ないことを聞いた気がする。

「母さん、かあさ」

「シモダミサ。私も、名を憶えていますよ」

下田のとめどない思考は、一瞬でバラバラになり、静止した。目の前の視界が明瞭になっていき、ヨルシカの愉悦に満ちた笑みだけが広がっていく。

下田美紗。

それはたしかに、自分の母親の名前だった。

ヨルシカの背中が波打っている。正確には、ドレスの布が。どうやら、尻尾が激しく振られているようだった。彼女が異常なほどに感情を高ぶらせている。彼女にとっての最大の喜びが、下田の苦しみであることはもはや明確だった。

「なん、で」

「ですから、貴方の母親は死んだと言っているんです。私が殺しました。この手で胸を貫き、内臓を引きずり出して。温かい血の感触は、今でも感じられます。そうでしたね、貴方は憶えていなかった」

「うそだ」

頭痛が酷くなってきた。

「いえいえ、本当ですよ。だって、ちゃんと札を見て確認しましたから。ビョウインと、言うのでしたっけ。よくわかりませんが」

「うそだ！」

叫ぶと同時に、胸の中に熱が生まれた。熱と共に痛みも。そこと頭痛が合わさって、目の前が不安定になり始める。熱が徐々に全体へと広がっていく。

「あああ、もう、おわり、ですか。もったいない」

ヨルシカは深く、艶の乗った吐息を流した。下田を嬉し気に見つめながら、彼を地面へと無造作に投げ捨てる。地面についた瞬間、彼の体は燃え始めた。

「うそだ、うそだ、うそだ…」

「うそだ」

彼女はぼん、と両手を打ち合わせる。

「貴方の母親に関する記憶ですものね。消える前に、ちゃんと戻してあげます。ええと、確かこうして」

「やめろ、やめて」

「やめませんっ。フッフ」

長い指が、額に当てられる。そこから、勢いの激しい何かの流れ込んでくる。それが、頭の中にある、ずっと詰まっていたものを、少し破壊したような感じがした。

途端、ある光景が強烈に浮かんでくる。

下田は、意識が消失する最後まで、ずっと悲鳴を上げていた。ヨルシカはずっと、指を噛みながら、その様子を満足げに眺めていた。意識が消失している間の、暗黒だけが、彼にとっての救いだった。

(115)

最初、自分が立っていることを知覚できなかった。それでも倒れなかったのは、もう何度も経験していることだからだろうか。

現実感が返ってきたのは、誰かの悲鳴を聞いてからだだった。ずっと聞いていた人の声。これは、誰だったか。

そうだ。ちとせだ。

下田は両手がなくなっていることが、少しも気にならなかった。それに伴う激痛も、今は無視していられた。なぜなら、すぐ横に彼女がいたからだ。目を大きく開けて、とても焦った声で、こちらを心配し

ているちとせが、そばにいたからだ。

「アキ、だいじょう——」

がむしやらに、彼女へと抱き着いていた。腕がほとんど欠けているのが本当にもどかしかった。もしちゃんとおいたら、しっかりと掴まっけていられるのに。ちとせの存在をもっと強く感じる事ができるのに。

「ちよ、ちよつと、あんた、急にどうしたの」

下田は無言で彼女の首元に鼻をうずめた。いつもうつすらと感じていた彼女の香りがした。

ひゆうつ、と高坂が口笛を吹く。実織が、顔を赤くしながら、二人が重なっている姿を眺めていた。新宮は苦笑いをする。宇部は舌打ちをする。丸戸は、横の宇部の機嫌が悪くなったことを感じて、冷や汗をかく。

「はな、離れてって。もう、ほんとに、わかんないから！ 落ち着け！ 何してんの。わかる？ あんた今、やばいんだって！ やばい怪我してんの！」

腕で突き放された。下田は、少し離れてからまじまじとちとせの顔を見つめる。その視線に対して、彼女は怒っているのか焦っているのかよくわからない目をしていた。

「あれ、なんで」

「は？」

「なんで、ちとせ、普通なの。だって、だって。ちとせ、なんで」

彼女は本気で心配そうな顔になった。

「え、あんた、正気？ もしかして、寝ぼけてんの？ 夢から覚めたみたい。イリーナさん！ 来てください。ちよつとこいつおかしいです」

「夢」

さすがは、ちとせだと思った。

これまでの全てのこと、解決したからだ。

おかしいとは思っていた。こんなのはあり得ない。自分が過去に戻って、ヨルシカの裏切りを知るなんて、どんなシナリオだ。あまり

に荒唐無稽が過ぎる。夢。そう、これは全て夢なのだろう。自分のネガティブ傾向にある思考が生み出した、幻だった。

いや、そもそも。下田はさらに可笑しくなった。自分の考えが傑作すぎて、世界中の人と共有したくなかった。

そもそも、この世界自体が、空想の産物なのではないか。下田自体、学校生活に不満を持ったことはない。しかし、それはあくまで表面的なもので、知れずに溜まっていた鬱屈が、こんなできの悪い妄想を作った。今まで話したこともなかった高原ちとせと仲良くしているのも、そういう願望が産んだものなのだ。

そうに決まっている。要は、祭祀場もヨルシカも、この世界も本当ではなく、自分は夢を見ている最中なのだ。

ならば、さつさと終わってほしかった。ちよつと、これはやりすぎな気もするのだ。ここまで追いつめられるのは、彼自身も望んでいない。それに、もうとつくに疲れ果てていた。さつさと目覚めて、制服を着て、草野と学校の前で合流したかった。たわいのない授業を聞きながら、たまに寝入ってしまったかった。病院の個室で、本を読んでいる母の横顔を眺めて、一日の終わりを感じたかった。

「はは、は、ひ、ひ」

この時、下田は狂気に落ちかけていた。むしろ、遅すぎるくらいだったのだろう。全ての痛みと恐怖が、堰を切つてあふれだそうとしていた。自分の体が、どこまでも軽くなっていくのがわかる。暴発の前兆。

だが。皮肉にもそうはならなかった。

大扉は、既に開かれている。

「何事、ですか」

やってきた声を聞いて、下田は止まった。その瞬間から、あらゆる音と周りの者達が消え去り、出てきたたった一人の、美しい女性だけが目に映っていた。その長い睫毛に彩られた瞳を向けられると、胸が異様に苦しくなった。

ひりつくような笑い声。侮蔑の表情。

高坂の叫び。足の火傷。エルドリツチと彼女の歪んだ微笑み。

ちとせの悲鳴。食られていく体。

ヨルシカの、全てが飲み込まれるような昏い目。

「……………う、う」

頭に強烈な光景が浮かぶ。

そこは、たくさんの瓦礫が積まれていた。あらゆるところで、煙が上がつっていた。

下田は、頭を抱え、すぐにやめた。片方の手が、なぜか、自分の知らないうちに発動されていた自分の奇跡で、再生されていくのが分かる。その速度は、今までの彼の経験から言っても、異常とも言えるほどだった。

「……………る」

瓦礫の上で、一人の華奢な女性が立っている。入院用の薄い服を着て、頭は抗がん剤のせいで髪の毛がほとんど抜け落ちている。

彼女は、下田に向けて必死に呼びかけていた。何を言っているのかわからない。しかし、こちらを本当に心配してくれているのだとわかった。母はどんな時でも、息子のことを優先する。それでどれだけ彼女自身が傷つこうとも。

彼女の背後に、誰かが迫っている。

インベントリを開いて、一番ソウル消費の少ない、小型のナイフを選んだ。そこへほとんど目を向けていないのに、指の感覚だけで、操作が全て完了していた。完全に再生された片手でそれを握る。血がにじむほどに、強く握る。

「……………してやる」

彼の目の前で、母は胸に穴を空けられた。飛び出すのは、意外に小さな子供の手。しかしそれはしつかりと相手を傷つけるように獰猛な動きをしていた。抜き取られると、母の体から大量に出血が始まる。

彼女が倒れると、そこには少女が立っていた。母の体を乱暴に蹴りながら、下田に近づいてくる。全身血で染まっていなければ、将来に大きな期待が持てるほどの、可憐な少女だ。

ただ、普通ではない部分がある。顔のバランスの良さも人間離れし

43. 下田 対……。

全身が焼けるように熱い。それは、あの焦がされるような痛みとは違っている。ただただ自分の全てが沸騰しているようで、意識と体がばらばらに引き裂かれている気分だった。意識だけは、はるか先に行っている。あの女の体にナイフを突き立てている。

殺す、殺す、殺す、殺す、殺す。

頭の中で、別の自分が声を出していた。やるべきこと、しなければならぬことだけを考えられるように、今だけは、他のどんな余計なこととも思い出さないように。下田は、これまでになく集中していた。

ヨルシカの姿が、大きくなってくる。彼女がどんな反応をしているのかは、気にならなかつた。どうせ、殺すのだから。死人が何を叫ぼうが、意味はない。まずは、顔だ。あの憎たらしい顔を切り裂いてやったら、どんなに素晴らしいだろう。

これが終わったら、今度はエルドリツチだ。あの化け物にも、報いを受けさせねばならない。ちとせの受けた全ての痛みを何倍にもして、返さなくてはならない。

ひたすらすら猛進している意識が引き戻されたのは、自分の体が止まっていることに気がついた時だった。

下田は、肩を掴んできている。老人を睨みつけた。相手の目は静かだ。周りはほとんど下田の突然の行動に動けなかつたのに対して、グウィンだけは冷静に対応していた。

「そんなものを振り回すと、危ないぞ」

「は、な、せえええええええ」

邪魔する奴はどうするべきか。当然、同じように排除するだけだ。下田は決めつけていた。見るからにか弱そうな老人へと、ためらいもなくナイフを振るつた。正確に、相手の首を狙うことができた。

「もはや、正気ではないようだ。すまない」

グウィンは既にショートソードを鞘に納めていた。

下田は振るつたはずの腕がなくなっていることにやっと気がつく。斬られた腕は、宙を飛んで横の床に落ちた。ナイフが転がり、やけに

顔を上げれば、グウィンが壇上に腰かけていた。その横にはヨルシカがいる。

椅子を倒して、どうにか脱出できないかと暴れた。しかし、その椅子にも何か仕掛けがしてあるようで、びくともしない。ほとんど頭しか動けない状況では、ただ睨みつけることしかできなかった。

「君の、突然の行動については皆が戸惑っている。それ自体に対しては、不問にしよう。聞くところによると、ロスリックで色々であったようじゃな。王子達を殺したのは、君だとも聞いている。できれば、その時の状況を詳しく教えてくれるかの」

ここは、たくさんの椅子が並べられている。会議室みたいだ。最初に、自分たちの使命について説明があった場所だ。下田は、真ん中の列の席に座っていた記憶がある。そこで、それまで理解できていなかった自分たちの状況が、何とか呑みこめるようになったのだ。

だが、それは間違いだった。今まで、自分は、何もわかってなどいなかった。

この場には、ほとんどの祭祀場の者達がそろっている。ジークバルドも、イリーナも、グンダもいる。全員が、下田とあまり顔を合わせようとしていなかった。そこには、単なる警戒以上の何かがあった。

下田は、不安定になっていく自分の呼吸を、何とか落ち着けようとした。俯いて、頭の芯がねじれそうになる最悪な感覚を和らげようとしていた。こんな状態では、自分で死んで逃げようとしてもできない。ここには、一秒でもいたくないというのに。

未だ熱が残っている喉を、震わせた。

「だました…」

ヨルシカは、睨みつけられても平然としている。グウィンの横だからかもしれないが、露骨に内心を表情に出したりはしない。

「何か言ったか？」

「全部、嘘だったんだ」

下田はグウィンの質問などに答える気は少しもなかった。自分でもコントロールできない感情が、山のように積み重なっている。ただ相手を糾弾することでしか逃れられないどうしようもなさを、何とか

解消しようとする。

頬の濡れる感触。ここへきて、怒りよりも悲しさや虚しさの方が大きくなっていた。彼らの前で涙など見せたくないというのに、体は言うことを聞かなかった。だが、それもヨルシカを目にすれば、再び激しい怒りが蘇ってくる。

「この女は、エルドリッチと通じてる」

ここにたくさんの人が集まっているのは、好都合だと思った。今こそ、事実を皆に広めるべきだと思った。たとえそれが、自分でもわかってる欺瞞だとしても。気休めにすら、ならないとしても。

「そばの塔で匿ってる。裏切ったんだ。ずっと、だましてたんだ……」
「そうか」

グウインは神妙に頷いた。

彼の返事と同時に、下田は全員の様子を確認した。薄々、わかつてはいた。こんなことをしても、意味はないことくらい。それでも、認めたくはなかった。この世界には、初めから味方など誰一人としていなかった。認めるのは、勇気のいることだ。

誰も驚いてはいなかった。むしろ、下田が知っているということにたいして、意外だという空気が漂っていた。

「知ってたんですか」

何人かが目をそらす。

その、さも罪悪感があるような動作に、下田の心はさらに乱される。「初めから、僕達が犠牲になることも。人食いと協力していたことも。全部わかった上で、僕達をだましていたんですか。イリーナさん、僕を、見てください。逃げるな！ 質問に答えてください」

びくりと肩を震わせて、イリーナはそれでも無言だった。泣きそうなほどに顔を歪めているが、その悲しそうな表情は一体どういう心境で作っているのか。彼には不思議でならなかった。彼らが、まるで、被害者みたいな態度でいることに、形容しがたい憤りを感じた。

グウインは、ゆっくりと首を振った。

「君は、まだ冷静じゃない。落ち着くといい」

「あ、貴方達は、僕達を家畜みたいに、考えていたんだ。適当に良い顔

でもしておいて、信じさせてから、最後に殺す。こんな、こんな人のやることじゃない。僕達をこんな世界に呼んでおいて、最後には消えたとわかっていて、どうして平然としてこられたんですか。悪魔だ。貴方たち全員、文句なしの糞野郎だ！」

「知らなかったのだ」

今度は、ジークバルドが喋り出した。

「灰というのは、屈強な戦士で、己の使命もすべて理解し、覚悟も決まっている。そう、聞いていた」

彼は拳を握っている。下田と同じくらい、やるせなさを感じているようだった。

「ところがどうだ。いざ来てみれば、こんな…、こんな年端もゆかぬ若者たちとは。戦い方も満足に知らない。それでも、やるしかなかったのだ。我らは、使命から逃げてはいけない。どれだけ恨まれようとも、成し遂げるしかない。仕方がなかった」

下田は椅子を大きく揺らそうとした。あまりにも動かないので、怒りでどうにかなつてしまっそうだった。

「だから、なんで、そんな顔をするんですか！　なんで加害者側が、苦しんでるんですか？　ふざけるな！　悪いのは全部、お前らだ！　お前らが何もしなければ、僕達に何もしなければ、こんなに苦しむことはなかった。ちとせが食われることもなかった。ずっと現実で、暮らしていけたんだ！　悲しむふりはやめてください」

「それ以上暴れると、舌を噛むぞ」

グウインは、手を動かした。途端、下田の拘束が強まる。体が占められて息苦しくなり、簡単に暴れられなくなった。

老人を憎悪をこめて睨みつける。どれだけの悪感情を向けられようとも、相手は少しも動じない気がした。

「何もするなというが。儂らは、そうしなければ滅びの道を辿っておった。これもすべて世界のためじゃ」

下田はあらん限りの力で、叫んだ。

「お前達の世界だろ！　勝手に、僕達を巻き込むな！　お前達がどうなるかなんて、知ったことじゃない。勝手にしろ。勝手に死ねばいい

！　なんで、僕達を呼んだんだ。お前達の世界の問題は、お前達だけで解決しろよ！　こっちの意思を無視して、勝手に巻き込むしないでよ……」

　周りは静寂に包まれた。

　下田の泣く声だけが、しばらくこだましていた。

「頼むから……、本当に、もう、疲れたから。僕達を、帰して。現実に戻らせてよ。僕は、帰りたいたいだけなんだ。ただ、いつもの生活をしたくないだけなんだ……」

　嘲るような笑いが、遠慮もなく響き渡った。

　聞こえると、下田は我に返る。涙で歪んでいた視界が徐々に明瞭になっていくと、ヨルシカがこちらを見て微笑んでいるのが分かった。

　グウインが咎めるように言う。

「ヨルシカ」

「あら、すみません。駄目だとはわかっているのですが、その。耐え切れなくて。とても面白い見世物だったので。無知とは、滑稽なのですね」

「黙れ」

　下田は、歯をむき出しにする。

「お前、お前の声を聞くだけで、吐きそうになる。その繕った仮面の下で、何を考えてるのか知ってる。くたばれ」

　ヨルシカは、挑戦的に視線を返してくる。

「奇遇ですね。私も、貴方に死んでほしいと思っっていますよ」

　魔術を使おうとしても、何も起こらなかった。前にもあった、喉の詰まるような感覚。ずっと興味深そうに見物していたリリアーネが、にやりと笑った。

「何もできないでしょ？　良かった。君たち灰にも効くかどうかかわからなかったけど、上手くいったみたい」

「うううう」

「あはは。怖い怖い」

　グウインが、手を上げる。もう十分だという意味らしい。彼がそうするだけで、誰も口を開かなくなった。

彼は少しも笑ったり、逆に悲しそうにしてはいない。自分のしていることを、当然のように受け入れているようだった。だから、余裕がある。下田に対しても、素直な憐れみを向けてくるだけの余裕が。

「君たちには、最後まで何も知らずにいてほしかった。その方が、幸せだっただろう。しかし、そこまでわかっている以上、説明をする義務がある」

いい予感はしなかった。ヨルシカが、楽しそうな表情になったからだ。それに、こんなことをした事情がどうであろうと、関係ない。許せるわけがなかった。

「簡単に言うと、君は既に望みを叶えている」

予想もしなかった言葉を聞いて、下田は一瞬怒りを忘れた。グウインが何を言っているのか、理解するので精一杯だった。

「何を…」

「帰りたいと言ったな。そんな願望はもはや意味がない。そもそも、君達は一度たりとも自らの故郷から離れてはいないからだ」

今度こそ、相手も自分も何もかもがおかしくなってしまったのだと、下田は戦慄した。相手の言っていることの意味がわかってても。それが事実だと認識することはあまりにも滑稽に感じた。今度は怒りが強くなってきた。この老人は、適当な事を言っただけの思いを踏みにじろうとしている。

グウインは、遠い目をする。

「儂は、数千年前、君達の世界へ侵攻した。ヨルシカ以外のここにいる者は、まだ生まれてもない頃じゃ。そこには、衰えることのない光と、まばゆいばかりの…太陽があった。認めよう。儂は君たちにとって、大罪人だろう。自らの世界とそこに住む者のために、君達の種族のほとんどを滅ぼした。生き残りは、この祭祀場にしかない」

喉が、からからに乾いてきた。

いい加減、夢なら覚めてほしかった。

「ふぎ…」

「決して、冗談などではない。君の怒りも正当性がある。だが、考えてほしい。他に方法がなかった。火継ぎに限界があることなど、初めか

らわかっていた。ならば、他の方法で世界を永らえさせなければならぬ。本当なら、君達も死んでいたはずだった。何千年も、棺の中で眠ることはなかったのだ。こんなことを知らなくてよかった」

「やめろ……」

耳をふさぎたくても、拘束されていて不可能だ。たくさん叫んで妨害しようとしても、リリアーネが何かを唱えて、声すら出せなくなつた。

「もう、理解しただろう。ここは地球だ。様々なものが入り交じり、もはや面影もないだろうが。君たちの、故郷なのだ」

声は出せないのに、荒い呼吸だけは自分の中で響いている。下田は固く、目をつぶっていた。再び開ければ、何もかもが幻だったというようにしてほしかった。

騙されるな、と自分に言い聞かせる。相手の言葉をどうして、信じる必要がある。これまでたくさん嘘をついてきたのに。この話が真実だと、どうして断定できる？ ありえない。ありえるはずがない。これは、自分を動揺させるための方便なのだ。

「すまない」

目の前が、段々と暗くなってくる。内心とは反対に、体の方は衝撃をまともに受けているようだった。意識だけがまた、体を置いてけぼりにしている。相手が途方もない大嘘つきだと、糾弾している。

結局儀式の日がやってきても、下田は目を覚まさなかつた。儀式が終わるまで、暗闇の底で都合のいい夢を見ていた。

(116)

これまでのことで、癖がついてしまったのだろうか。やる気になかつたのに、それでも下田は欠け落ちた腕に奇跡を発動させていた。

ちとせが、イリーナを呼ぶ。それも気にせず、ひたすら己の両腕を治すことに集中していた。集中していないと、頭がおかしくなりそうだった。

「シモダさん！ 見せてください」

彼が自分で治すという意思をはっきり示しても、イリーナは近づいてきた。傍目から見ても、彼の技術では完治が困難だと思えるのだろう。彼の奇跡の上から、さらに彼女は重ねてかけてこようとした。

その瞬間だけ下田は奇跡を解除し、イリーナの手を弾いた。呆然とした彼女に向かって、吐き捨てるように言う。

「触るな」

奇跡を行使しながら、自分の部屋の方向へと早足で行く。とにかく、今は一人になりたかった。あまりに重なりすぎた物事を、整理する時間が欲しかった。

大扉が開かれても、そこへは意識的に目を向けないようにした。また暴走してしまったら、無駄になる。

誰かが呼び止めてきた気もしたが、下田は無視した。頭の中では思考がぐるぐると回っていて、周りの音も聞こえていない。

そのせいで、自分の体のことにも気付けていなかった。生徒達の部屋がある横穴へ入ろうとした瞬間、彼はいつの間にか床に倒れている自分に遅れて気がついた。糸の切れた人形のように、まるで力が入らなかった。

結局、治療を受ける羽目になった。イリーナは自分自身が避けられていることに気が付いていながらも、自分の仕事を気まずそうに全うしようとしていた。下田にとつては嫌な時間だった。顔も見たくない人たちと、一緒の空間で過ごすのは苦痛だ。

だが、休息をとったおかげで、気分を落ち着けることはできた。

どんな妄想をしても、仕方がない。要は、確定していることだけを、気にしていればいいのだ。このままでは、祭祀場の奴らの思い通りになってしまうこと。下田達だけでは、ここから逃げ出すなど不可能であること。

ここが地球だということは、突拍子もない嘘だと思うことにした。

母親のことも。ヨルシカの話も、全く信用できない。

ちとせ達に事情を話すのは、もはや良い方法ではなかった。彼女たちを巻き込めば、また、あれの再来になる。悪夢のような時間を、繰り返したくはない。

他に、ないのか。下田は必死で考えた。ここは、敵ばかりだ。自分の愚かさを呪う。どうして、こんな者達を信じてしまったのだろう。よくよく考えれば、おかしいことばかりだった。全部から目を背けて、自分はただ安心していたかったのかもしれない。こんな世界に来て、しがみつける組織に身を預けたかっただけなのだ。

選択を間違えたのだ。信じるべきは、同じ人間だった。

下田ははつとする。もしかすれば、先生が、火守女を連れてここから逃げたのも、ある程度事情を知ったからなのかもしれない。火継ぎの儀式が始まってしまえば、何が起こるのかを知っていた。自分たちにそれを話さなかったのは、危険が及ぶのを防ぐため。

思わず、齒を食いしぼる。もしそうだとしたら、自分たちは敵の策略にはまり、ずっと味方の邪魔をしていたということになる。先生があんなになるのも当然だ。

まだ、間に合うだろうか。下田は貴樹が戦ってきた場面を思い返す。あの人は強い。もし何とか協力してくれば、十分に祭祀場への対抗手段になるだろう。これしかない、と思った。とにかく、先生と会わなければ。下田はようやく自分の部屋から出る決心をした。

広場に出ると、何人かが視線を向けてきた。その中でちとせが真っ先に話しかけてくる。

「もう歩けるの?」

「うん。大丈夫。ありがとう」

下田の顔を見て、彼女は妙な表情になった。

「あんまり、大丈夫そうに見えないけど」

彼はなるべく自然に見えるように苦笑した。

「まあ、あんなことあったから。でも、とりあえずは回復したよ」

「ふうん」

「僕、ちよつと用事があるから、行くね」

「何するの」

「あそこにいるジークさんに話があつてさ」

本当は嫌だった。祭祀場の者達を目にするだけで、ささくれ立つ心はごまかせない。それでも、下田は我慢してジークバルドに近づいた。

「もう、問題はないのか」

「はい」

「よかった。ん、どうした。顔色が悪いぞ。こういう時は、酒でも飲むのが一番だろう」

「頼みがあるんですけど」

気持ち悪さを抑えて、本題に入る。

「先生と、会うことはできますか」

「ん？ タカキのことか？」

「はい。色々その、謝らないといけないこともあるので」

ジークバルドは気遣わしげな表情になる。

「協力してやりたいのは山々だが、私には何もできない。彼は今、非常に不安定な状態だ。無理もないが。だから、制限も大きい」

下田は、最初の六日間の記憶をたどった。それでも、例外があつたはずだ。

「でも全く会えないわけではありませんよね」

「そうだな。昨日も、ミオリと：カオルが会いに行っていたな。だが、彼女たちは特別だ。家族として、話さなければならぬことがたくさんある。例外的に許可が下りた」

「なら、二人と一緒に行くという形をとれば、僕も会える可能性があるということですね」

ここで、ジークバルドは怪訝な顔つきになる。

「かもしれない。だが、そこまでしても、満足な結果は得られまい。彼女たちに訊けばわかることだが…」

「ありがとうございます」

相手の口から、家族という言葉出てくると、不快感が増した。一体、どの口でジークバルドは言っているのだろう。

家族、家族。下田は、どうしてそのことを今まで考えてこなかったのだろうと、自分に呆れた。と、同時に激しい怒りの感情が、内できろろを巻き始める。祭祀場の者達は当然、擁護しようもない。しかし、もつと大きな罪を犯している者がいることに、気がついたのだ。

彼女たちは、すぐに見つかった。広場で待っているだけでよかった。毎日のように実織と薫は広場で食事をとっていた。その習慣を知っていたので、会うこと自体は簡単だ。

「何？ 話って」

「大胆だね。こんなところで告白？」

「ちよつとお姉ちゃん……」

二人の様子を、観察する。初め実織は自身の姉のことを受け止めるのに苦勞しているようだった。だが、やはり姿が違っても家族同士は通じ合うらしい。今では、常に行動を共にするほど打ち解け合っていた。

それ故に、下田の感情は尚更乱される。

「下田？」

「あ、うん。話ね。ごめん、家族の時間を邪魔して」

「いいけどさ。大丈夫？ 腕はもう平気なの？」

「心配してくれてありがとう。元気にはなったよ」

実織もまた、下田の様子にいつもと違う何かを感じているようだった。

「うーん、ほんとに？ 顔色酷いよ」

「ちよつと、寝不足かもしれない。緊張しちゃって」

「わかるよ。私も」

薫がからかうような笑みを作る。

「なら、寝る場所を変えてもいいかもね。私達の部屋に来ればいいじゃない」

できれば、あまり喋らないでほしかった。その声を聴くだけで、下田は冷静でなくなっていく自分を感じる。今でさえほとんどいつも通りを繕えていないのに、これ以上刺激されればどうなるのかわから

ない。

「頼みがあつて。二人は一度、先生に会つたんだよね。今度は、僕も一緒に行きたいんだ。僕だけだと許可が下りづらいみたいで」

二人の様子から、前の面会がどのような形で終わったのか想像できた。

「それは構わないんだけど、あまりお勧めはできないかな。貴くんは、誰かと話せる状態じゃない。私達にも全く聞き耳を持たないの。だから、難しいと思うよ」

「何も話はできなかつたんですか？」

「んー、そういうわけじゃないけど。やっぱり、彼は冷静じゃないから。まともなことは何にも」

実織がその時を思い出しているのだろうか。沈んだ顔になった。どういうことを言われたのかは、想像ができる。きつと今下田がヨルシカ達に対して思っていることと大差ないだろう。先生も、被害者だ。ここの者達の。

「一回だけでいいですから。何とかありませんか」

「ごめんね。無理だと思う。私達はもう行けない」

「…そうですか。すみません、こんなこと頼んで」

「いいのいいの」

薫は微笑むと、実織にインベントリから出してもらつた甘菓子を口に入れた。

段々と、下田は己の抑制が崩れかかつてきているのを自覚した。心の中ではどんどん醜く黒いものがあふれてきて、吐き出す衝動が大きくなつていた。

大した意味はないのだと思いつつも、我慢することができなかつた。

「食べられるんですね」

「うん？ ああ、もちろん味は感じるよ。このフリーデの身体が特別なのか、すごくお腹が減るってことはないんだけどね。食べる？」

「いや、そうじゃなくて」

わかつていても止められない。むしろ我慢する必要があるのが不

思議だった。これは、正当な怒りだ。自分には言葉をぶつける権利がある。

下田は心底相手を軽蔑しながら言った。

「実の弟を裏切っておいて、よくもまあ食べ物が喉を通りますね。僕だったら、もっと、深刻に考えますけど」

場の空気が、冷えた気がした。今広場には、生徒達くらいしか集まっていない。他の話をしていた者も、下田の声を聞いて彼へと注目しだした。

言葉が、どんどんあふれてくる。

「先生と一緒にいた人達も、殺したんですよ。僕も少しですが、行動を共にしたからわかります。皆、貴方がまさかこんなことをするなんて思いもしなかったでしょう。どういう、気分なんですか。皆は殺される前、どんな言葉を貴方に浴びせたんですか。彼らの思いを全て踏みにじった感想はどうですか。自分が嫌にならないんですか」

頬に衝撃がやってきた。実織が動いたのは分かっていたが、あえて何もしなかった。

横に振りぬいた手を下ろして、彼女は涙目になっている。自分の姉がけなされた怒りからか、頬が赤くなっていた。

「やめて。なんで、そんなこと言うの？ 下田、酷いよ。お姉ちゃんだって、すぐく後悔してるんだよ。でも、しょうがなかった。悪いのは、あいつの方でしょ。私達を裏切ったんだよ」

「後悔か」

涙ながらに、彼女へ語ったとでも言うことか。その場面を想像して、滑稽さに我慢ができなくなつた。よりにもよつてこの女は、実織にそんなことを言ったというのか。

下田が笑うと、実織はさらに赤くなつた。

「あのさ、いい加減に」

「実織」

見もせずに、彼は乱暴に吐き捨てた。

「僕は、君の姉と話してるんだ。お願いだから、黙つてろ」

彼女がさらに何かを言おうとしたが、薫に止められた。未だ、余裕

そんな態度を崩していない。それがさらに下田を煽っていた。どうして実織と平気な顔をして一緒に過ごせるのか、理解に苦しむ。

「よっぽど、貴くんのことを慕ってくれていたみたいだね。それは嬉しいことだけど、みおちゃんに乱暴な言葉を使わないで」

「質問に、答えてください。どうしたら、今そんなに平気そうな顔でいられるんですか?」

「平気なんかじゃないよ。でも、皆が現実に戻るためには、貴くんの行動は止めざるおえなかった。後悔はしてるけど、これ以外に選択肢があるとは思ってない」

「とぼけるな!」

下田は叫んだ。目の前の女が憎くて仕方がなかった。

「貴方は、わかっているはずだ。全部わかっているんだ! 貴方が裏切ったのは、先生だけじゃない。わかっているんだろ! 後悔したかどうかなんて関係ない。そうした時点で、許されないことなんだ」

ようやく、薫は笑みを引っ込めた。

「落ち着いて。何を言ってるの?」

「ここで言いづらいのなら、どこかに行きましょう。二人で話すことがたくさんあります。付いてきてください」

ちとせ達の視線も感じたが、今は気にする余裕がなかった。薫が後から付いてきているのがわかる。彼女も、ここだと都合が悪いのは一緒だろう。あるいは、自分を誰もいないところで口封じする気だろうか。望むところだと、下田は歯を食いしばった。

下田の部屋まで、彼女は素直に付いてきた。中に入り完全に二人つきりになっても、何も行動を起こそうとはしない。

「もしかして、狙いは私の方だったり? でも、この体はフリーデのものだからね」

「貴女は知っていた。僕たちは、儀式で生贄にされる」

薫は表情を変えない。変えないよう、努力しているようだった。

「それは、攻めた想像だね。ナーバスになるのはわかるけど、あんまり悪いことばっか考えても始まらないよ」

「いい加減にしてください」

下田は魔術を起動した。ソウルの塊が浮かぶと、その狙いを相手へ向ける。

「もう、うんざりなんだ。だまされるのも、話をはぐらかされるのも」
「…確かに、これは洒落になってない」

それでも、薫は何も構えなかった。それが自分との力量差をはつきり示されているようで、下田は本気で魔術をぶつけてやろうかと思つた。しかし、そんなことをしても話は進まない。何とか呼吸を落ち着けて、魔術を消した。

「エルドリツチと、祭祀場が裏でつながっているのも、わかっています。僕には、わからない。実織さんの姉である貴方が、こんなことに加担しているなんて。貴方が裏切ったのは先生だけじゃない、実織さんも、僕達も死ぬことがわかっていて、それを黙って見ていたんだ。本当は、貴方は戸水薫ではないんじゃないんですか。ただ彼女の真似をしているだけ。そうでなきゃ、こんな酷いこと、できるはずがない。へらへら笑って、実織さんの傍にいられるわけがない。同じ人間の僕達を、見殺しにできるわけがない」

「もう、我慢なりません」

見ると、彼女の雰囲気が変わっていた。下がっていた目尻が上がリ、怜悯な印象が強くなった。

「ほら、また別人が出てきた」

「カオル、いいから言わせてください。私は、貴方の名誉を守る義務があります。いいですか、シモダアキヒロ。彼女が今までどれだけ苦しんできたかもわからず、よくもそんな言葉を吐けますね。彼女が、これを望んでいたとでも？」

嫌悪で、どうにかなりそうだった。この女も、被害者の顔をしている。フリーデに守られて、自分は傷つかないところでぬくぬくと。

「そつちだつて、僕が、これまでどれだけ苦労してきたか知らないくせに。本当は、嫌だった。こんな世界になんて一秒でもいたくなくかつた。それでもやってこられたのは、仲間のみんなと、いつかは現実に帰るっていう目標があったからだ！ 望んでない？ そんなの関係ないでしょう。貴方達がどんな事情を抱えてようが、自分の家族を見

捨てた最低の屑だつてことには変わりない」

「それで？」

今度は薫が戻ってきた。目を細めて、下田を正面から見つめている。

「どうやって知ったのかはわからないけど、何をする気なの？ 私を責めるのは好きにしていけど、それ以外で貴方にできることがあるの？」

下田は、一縷の希望を持って頭を下げた。気に入らないものの、まだ話し合う余地があると思っていた。彼だつて、貴樹だけで全てが解決できるとは思っていない。もつと助けが必要だつた。

「今なら、まだ間に合います。僕に、協力してください。一緒に、ここから皆を逃がすんです」

「無理だよ」

「なんでですか。貴方も、強いんですよ。そもそもどうして、戦わないんですか。本当に家族はどうでもいいっていうわけですね」

「そんなわけではない」

ようやく、彼女は感情を露わにした。声に力がこもり、そんな自分に驚いたかのように固まって、深く息を吐いた。

「でも、しょうがないの。そうするしかなかった」

「それを諦めと言うんじゃないんですか。何もしないうちから、決めつけてどうするんですか」

「私は、諦めたんじゃない。選択をしたの。助けられる方を、助けるしかなかった」

それを聞いて、助けられる方が誰なのかを、臆気ながら理解する。結局、この人は自分の命が大事だというわけだ。口ではそうしかなかったという風を装っていても、家族を犠牲にしたという事実は変わらない。どうしようもなかった。下田にとつても、これ以上話し合う必要を感じなかった。もう、彼女の立場は確定したのだ。

この女も、敵だ。報いを受けるべき者の一人だ。

下田が視線を鋭くすると、薫は薄く笑った。

「仮に、私が下田くんに協力したとする。確かに私は強いよ。フリー

デも。かなり無理をすれば、祭祀場のほとんどの相手には勝てる。ヨルシカにも、おそらく」

「じゃあ…」

薫は、そこで初めての顔ををした。明確な恐怖の表情だった。虚しそうに目を伏せて、自嘲の笑みを浮かべる。

「それでも、意味はないでしょうね。なぜなら、グウィンがいるから。彼とその直属の騎士達には勝てない。誰も、勝てないの」

やけに実感のこもった口調だった。

下田はグウィンに殺された時の事を思い出す。どのように剣が振るわれたのか、まるで理解できなかった。確かに、あの老人は見た目だけで判断してはいけない。

どうやら彼女はすっかり戦意を失っているようだった。抵抗することを止め、実織が死んでいくのを何もせずに見ている。もはや、これ以上説得する意味を感じなかった。自分の命を危険にさらしてまで、家族を助ける意思が彼女にはないのだ。何度も自分の身を削って、下田達を助けようとしてくれた先生とは、大違いだ。

下田は溜息をついた後、薫から視線を逸らした。

「わかりました。もういいです。とにかく、先生と会わせてください。それだけでいいです。でなければ、僕が知った全てのことを、実織さん達にも話します。全て、滅茶苦茶にします」

「それを、私がさせると思うの？」

暗い視線を、彼は薫へと向ける。

「別に。たとえばここで殺されるなりされても、次はもっと上手く立ち回るだけです。やるなら、やってもいいですよ」

その調子に異常なものを感じたのか、薫は少しの間黙っていた。やがて眉間を揉むと、渋々下田に行ってくる。

「努力はする。でも、あまり期待しないでね。多分貴方は彼に会えるとは思うけど。期待している結果が返ってくるとは限らない」

「…ありがとうございます」

形だけの感謝を述べると、下田は自分のベッドに腰かけた。薫が出ていくまで、何もない壁の方をただ見つめていた。

確かに、話自体は簡単に通った。祭祀場の地下にある一室へと、下田は案内された。薫と実織も一緒だ。彼女達とは必要最低限の言葉しか交わさなかった。気まずいのもあるが、何より下田自身に話をする余裕がない。先生がいる場所へと近づいていくほどに、自分の中の罪の意識が体を伝ってくるようだった。

部屋の前に立つと、二人はあまり入りたがらない素振りを見せた。彼女達の不安は無意味だ。元々、二人を連れて来たのは口実のためではない。これからする話の内容も考えると、二人には外で待っていてもらう方がよかった。

下田はそんなようなことを淡々と説明してから、部屋の中に入った。彼女達はどちらも彼を止めようとはしなかった。

ベッドに寄りかかっている貴樹を見て、下田は口を固く結んだ。口スリツクで見た時もあったが、酷い状態だ。以前の彼とはほとんど別人になってしまっている。髪の色が落ちてしまったとかそういう外面の変化以上に、彼の内で何かが大きく失われているのが、雰囲気 でわかった。

貴樹は、下田が入ってきてきても全く反応しない。目が見えていなくても、気配はわかるはずだ。そこにすでに拒絶の意味が含まれている気がして、下田は覚悟を決めた。こちらから積極的にいかなければならない。

「先生、僕がわかりますか」

そう呼ぶ資格がないことくらいは、わかっている。それでも、彼は下田にとっての先生だった。

しばらく沈黙があった後、貴樹の口から言葉が漏れ出てきた。

「誰だ」

「下田です。今日は、まず、謝りたいと思ってきました。僕達は何も、わかっていなかった。先生の事を誤解していました。申し訳ありません。全部、先生が正しかった。祭祀場を信用するのは、愚かでした」
これは、怒るだろうなど、自分の言葉を客観視する。これだけ並べ立てても、都合の良い言い訳としか考えられない。散々今まで信じて

こなかったのに、どうして今更下田達を許す気になるだろうか。

貴樹は特に感情を乱す様子はなかった。目隠しがされていて、表情はわかりづらかった。口元の動きもない。

急に、彼は独り言をつぶやき始めた。声はかすれていて、内容がほとんどわからない。その調子から言って、穏やかではないのは確かだった。まるで、誰かと口論しているみたいだ。

下田は思わず目を伏せた。貴樹の様子は、明らかに精神に異常をきたしている人のものだった。下田もそうなりかけたからわかる。いない誰かと話すのは、現実から逃避する行動の一つだ。

本当は、もうここから出たほうがいいのではないか。逃げ出したい気分になるが、そうすれば無駄になるものも多くなる。自分は何のために来たのか、それをしっかりと考え、意を決して本題に入った。

「先生を、どうにかしてここから出します。代わりに、お願いがあるんです。皆を助けてください。僕だけじゃ、無理なんです。限界なんです。だから、お願いします。協力してくれませんか」

く、く、という、喉から息が漏れ出すような音が途中から聞こえていた。その笑いが、貴樹から出たということ、下田はできる限り無視した。だが、彼の口元が動き、はつきりと笑みの形を作るのを見て、一歩下がりがける。

「何を、どうすればいいんだ？」

「生徒達と、ここから逃げるんです」

「そんな必要があるのか？　ここの人達が裏切ったなんて、確証がどこにある」

彼には、下手なごまかしは効かないだろう。下田は全ての事実を、話すことにした。自分の固有能力の事だ。その途中で、周囲を確認する。あの白い女性の姿はない。それでも油断はできなかった。ちとせの時のように、記憶をいじつてくる可能性がある。

説明を終えてしばらくしても、貴樹の様子に変化が見られなかった。何を考えこんでいるようだったが、記憶に影響を受けたわけではないらしい。先ほどよりもすっかりとした声で、言ってきた。

「下田。君が過去に戻れるというのは、本当なんだね？」

「はい。もう何回もそうしてきました。これが、夢ではないことは確信しています」

「…それなら、こっちが出す条件を満たせたら、協力できるかもしれない」

本当ですかと、勢いよく答えようとして、ある想像に行き当たった。途端、芽生えかけていた希望がしぼんでいくのを感じる。貴樹が出す条件というのは、おそらく。

「火守女を、助けてくれ。過去に戻れるんだろ。彼女は、使命になんか殉じる必要はなかった。この先も、生きていくべき女性だったんだ。彼女を救う確約ができるのなら、君の頼みも受け入れる」

ここで、嘘を言うこともできた。とにかく下田は今の状況を打開する方法を求めていた。貴樹に助けられると嘘をついて、協力してもらおうという選択肢も頭をよぎった。しかし、それは決して許されないことだ。もし、全てが何とかなった後であればとしたら、彼は下田達を一生恨み続けるだろう。下田も、自分を決して信用することはできなくなる。人として、最低限のラインを超えるわけにはいかなかった。「すみません、できません」

「なぜ？」

「僕の、この能力は、戻れる期間に限界があります。能力が進化した瞬間、つまり数日前まで。だから、その、彼女が殺される後までにしか戻れません」

貴樹は再び黙っていた。そこには、失望も怒りも見取れない。その静けさがより、下田を責めたてているように感じた。

「それじゃあ、無理だ」

「都合の良い頼みだとはわかっています。でも、僕は、貴方の思いを忘れていません。僕達を助けようとしてくれていたのは知っています。それに対して何も返せるものがないのは、言い訳のしようがありません。それでも、お願いします。一緒に現実へ帰る方法を探しましょう。だから…」

自分のありのままの気持ちを話したつもりだったが、それが愚かな間違이었다ことはすぐにわかった。貴樹の様子が目に見えて変

わったからだ。はつきりと顔を上げ、下田に向かって、嘲笑を浴びせてくる。

「俺が、誰を、助けたいって?」

「その、だ、だから、今まで祭祀場から離れていたのは、事実を知って、彼らの企みを防ごうと」

「さつき、彼女が殺されると言ったな」

彼の雰囲気はすっかり剣呑なものになっていた。

「下田、お前は、その場面を見ていたんだろ。何もしなかったんだろ。誰がやっただとか、誰のせいであんなったとか、そんなのはどうでもいい。お前たち全員が同罪だからだ。こういう頭をしたら、そんな都合の良い思考ができるんだ? 今更わかったようなふりをして、どうして被害者みたいな顔で頼みに来れるんだ?」

特に後半は、下田へ大きなショックを与えた。そして自分がいかに馬鹿だったかを思い知らされた。貴樹は傍目から見ても露骨なほど、火守女を愛していた。彼女が死ぬのを傍観していた自分が、どうして彼と交渉できると思ったのだろう。

「ま、別にお前らが彼女を見殺しにしようがしまいが、関係ない」

「え……」

貴樹は笑みを深めた。なぜか胸の突っかかりが取れたような、すつきりとした様子だった。

「初めから、お前達なんかどうでもよかったからだ。俺がどれだけ、お前らを邪魔に思っていたかわかるか? こんな素晴らしい世界で、唯一の穢れがお前達だ。祭祀場から離れたのも、全部彼女のためだ。お前らなんぞ、さつきと死ねばいいと思ってたよ。そしてその考えは正しかった。お前らのせいで、こんなくそつたれな状況になったわけだ。覚えてろよ。絶対に、その報いは受けさせてやる」

それは、今までの下田と全く同じだった。その憎悪は、下田がヨルシカ達へ向けるものほとんど同じだった。それが自分へ向けられているという事実は、もはや貴樹との交渉が失敗に終わったことの、何よりの証拠だった。

初めから? そんなはずはない。先生は、学校にいた時から、皆の

事を思いやっつけていてくれていたはずだ。こうなったのも全部、自分たちのせいなのだろう。もう元の日々には戻れない。変わってしまった。先生も、下田も。

「それにな。一つ言っておくことがある。俺にはもう、何の力も宿っちゃいない。全部あの糞ジジイに取られたからだ。無駄足だったな」
そうして、本当に可笑しそうに笑い始めた。全力で下田を嘲っていた。

それなら、最初にその事実を言うこともできたはずだ。それでもこの人は、下田と会話を続けた。彼を責めるために。

盛大な徒労感と共に、やりきれない怒りが湧いてきた。

「お願いします。本当に、追いつめられているんです」

「知るか。死ね。勝手にしろ」

「：僕は、先生が、もつと、しつかりした人だと」

「お前らみたいなゴミよりはましだろ。エルドリッチによろしく言っ
といてくれ。俺の生徒達くらいなら、いくらでも食べさせてやるつ
な。俺も見物させてくれって」

たとえ正気を失った発言でも、下田には看過できなかった。

貴樹へと近づき、鋭く睨みつける。

「そんなことを言うのは、やめてください！」

「なるほどな。その反応からすると、お前はもう見たんだな。誰が食
われたんだ？ それともお前意外全員か？」

「黙って、ください」

「お前の好きな女子でも食われたか？」

「黙れ！」

下田は、自分でも止められない衝動に襲われて、貴樹へと飛び掛
かった。あの、ちとせが食われた記憶だけは、誰にもほじくり返され
たくなかった。相手が今冷静ではないのは分かっている。だが、下田
の方も情緒が安定していなかった。何かで発散しなければ、もう限界
だった。

貴樹の顔へ拳を向ける前に、誰かに抑えつけられる。後ろを見れ
ば、薫が無言で首を振っていた。あれだけ騒げば、外にも聞こえるだ

ろう。彼女から離れた所で、実織が悲しそうに眺めていた。

「離せ」

「言ったでしょ。無駄だって。冷静になりなさい」

「触るな！ お前が、どの口で、言ってるんだ」

「…ごめんなさい」

下田の身体が大きく回転する。天井が回り始めたと思ったたら、全身が床に叩きつけられた。背中痛みで、一瞬思考が止まる。投げられたのだと理解した時には、再び薫に抱えあげられる。軽い荷物でも扱っているような調子だった。

「これを仕組んだのは、お前か」

去ろうとしている薫に向かって、貴樹が言ってきた。彼女の動きが止まる。下田は、その表情が何かを耐えるもの変わったのを、確かに見た。

「薫姉、覚えとけよ。お前を一番先に殺してやる。どこまでも追いかけて、ひもりんや、他の奴らの苦しみを何十倍にもして返してやる。どれだけかかってもな」

薫は答えずに、下田を運びながら外へと出た。彼をゆつくりと下ろすと、すぐに駆け寄ってきた実織と抱き合う。実織は、苦しそうに涙を流していた。

「皆、最近おかしいよ…。私達、日本に戻っても、ちゃんといつも通りになれるのかな。あいつがあんなになっているところなんて、初めて見る」

「大丈夫。お姉ちゃんに任せて。全部、上手くいくから」

下田は、彼女の嘘を黙って聞いていた。薫への憎しみや、貴樹への失望も、段々どうでもよくなってきた。ただただ、虚しさがあった。これ以上、どうすればいいのか。一体誰に助けを求めればいいのか。完全に、手詰まりを感じた。

儀式までの数日間、下田は部屋に閉じこもっていた。もはや問題は、自分の手には負えない。だからと言って、ちとせ達に協力を求め

ても、結末はより酷いものになるだけだ。

敵と自分の、戦力差はあまりにも大きい。

それでもまだ、諦めてはいなかった。下田に有利な点もあるのだ。相手が知らないと思いついていられることを、下田は知っている。相手は皆、自分が抵抗することなど夢にも思っていない。それだけの力があるということも。事実、今は彼の力に何の希望もない。

だが、重要なのは機会がいくらでも残されているということだった。限界は、あるのかもしれない。ただ下田は今のところ何度でもやり直すことができる。あらゆる角度から試行錯誤し、全てを試すだけの時間がある。

彼は既に覚悟を決めていた。決して自分にとって楽な道を選ぶことはしないと。ヨルシカ達の思惑通りに、黙って燃やされるだけの存在には、ならないと誓った。

儀式の日、下田は普段通りの様子を装いながら、広場へと向かった。既に全ての者が集まっているようだ。彼は祭礼場の広場をぐるりと見まわした。己の心に刻みつけるまで、注意深く。これから何度も見ることになる戦場と、相対した。

薫と実織が、話しているのが見える。まずはそこへ、歩いて行った。「ちよつと、いいですか」

二人は下田の姿を見て身構えたようだった。実織の方は、さらに気まずそうに顔を逸らした。

下田は彼女に向かって、深く頭を下げる。

「ごめん。実織さんのお姉さんにひどいこと言つて。言い訳のしようもない。あの後話してみてもわかった。全部誤解だったんだ。実織さんにも、八つ当たりみたいなのをした。もう二度としないって、誓うよ」

顔を上げると、実織はぽかんと口を開けていた。それが少しおかしくて、下田は笑みを浮かべた。

「ああ、うん。私も。ビンタしちゃつてごめん」

「全然痛くなかったよ。上手かった」

それから、薫へと向き直る。彼女は、下田が何をしようとしている

のかよくわからないと言いたげな顔をしていた。

「薫さんも。すみませんでした。全部、納得しましたから。僕はもう、決めました」

彼女の目が、少しだけ悲し気になる。

「そう。ごめんなさいね」

「もう、疲れたんです。ただ僕は、現実に帰りた。それでいいです」
「私は…」

「多分、貴方も色々あったんですよね。仕方がないと思います。では」
下田は自分の行動に意味などないことを、十分に自覚していた。例えなかったことになるとしても、通過儀礼の様なものが必要だと考えていた。いったんこちらのわだかまりを真っ白にして、次へと行く心構えを作りたかった。

だから、思ってもいないことを言う。下田には、貴樹が言っていることで一つだけ心から賛成できるものがあつた。報いを受けるべき者は、既に決まっている。そこから例外的に外されることなど、薫にはありえない。

篝火へ近づき、ちとせの横に座つた。彼女はさきほどから下田の行動を見ていたようだったが、何も尋ねてはこない。ただ、いつも通りにこつちをからかうような笑みを向けてきていた。

「ちゃんと、回復したみたいだね」
「ん？」

「顔色がましになってる。緊張はとれた？」

ましになつている風に見えるのなら、それはきつと、目標がちゃんどできたからなのだろう。

「ううん、少しも。まだちょっと、怖いかな」

「私もだけどね」
「ちとせ」

イリーナが、篝火へと近づく。そろそろだ。

「何？」

「手をこつちに伸ばしてくれないかな。お願い」

「いいけど」

伸ばされた手を、自分の両手でしっかりと包み込んだ。彼女はその行動に多少面食らったようだが、周りを少し気にしてから、好きなようにさせてくれた。

下田は俯いて、相手の手の感触にすぎる。歯の根が震えそうになるのを何とかして抑える。目の奥がかつと熱くなって、熱い雫が少しだけ目の端から零れる。

どうか、意思を。なにものにも曲げられない、決意を。

「アキ、泣いてるの?」

「泣いてないよ」

指で目を拭い、震える声で答えた。鼻をすすってから、後ろで見物していた高坂へと顔を向ける。

「あのさ、ハイタッチしてくれる?」

「あ?」

「僕って臆病だからさ、これからの戦いにすごく緊張してるんだ。勢いよくやってくれれば、ましになると思うんだ」

「いいけどよ。高原にやってもらったほうがいいんじゃないか」

「高坂の方がいい音が出そうだから」

高坂は、口元を緩めた。

「お前って、やっぱり変な奴だよな」

ぱあんと、小気味いい音が鳴った。正直、ちよつと手が痛かった。さすがは運動部の人間だ。予想したよりもすごい。それでも、少しは前へと進む決心が固くなった気がした。これからも、何とか進んでいける気がした。

二人の不思議そうな視線を受けながら、儀式が始まるのを待った。宇部が膝をつき、そこへとイリーナが近づいていく。彼女の口が開く寸前で、下田は立ち上がった。

「あの、すみません」

全員の注目が、下田に向かった。そのほとんどが超えるべき敵であるということ、何度も自分に言い聞かせた。

そのまま歩いて、イリーナの傍にまで近づく。そして、正面へと向き直った。

ヨルシカが、怪訝そうに尋ねてくる。

「どうかしましたか？」

「多分、これから落ち着いて話ができる機会が少なくなると思ったので、ここで、僕に時間をくれませんか。色々感謝を、述べたいんです」

薫と、さりげなく目が合った。彼女だけは、下田が何をしようとしているのか臆気ながら理解しているようだった。それでも止めようとはしてこない。その様子に、感情が再び再燃するのがわかった。そうすることで、自分が許されるとでも思っているのだろうか。

「いいでしょう。ですが、あまり時間はかけないようお願いします」

下田は頭の中で言葉をまとめながら、息を深く吸った。それでも震えそうになる膝を、ぐつと足を踏みしめて留めさせる。

「全く知らない世界に来た僕達を、助けてくれたのは本当に感謝しています。貴方達がいなかったら、どうなっていたか。想像したくもありません。このままちゃんと恩も返せずに、別れることになるかもしれません」

母さん。

心の中で、母の姿を思い浮かべる。

「思えば、この世界はとても残酷で、本当ならきつと、誰かの助けなんて期待できるものではなかったんでしよう。だから、貴方達の行動がどれだけありがたかったが、言葉だけでは表せません。それで…」

母さん、待ってて。

すぐに行くから。

こいつら全部やつつけて、この世界から脱出して、

すぐに、会いに行くから。

だから、待ってて。

左手で、何かが蠢いた。エルドリツチに植え付けられた膿がまるで喜んでいるかのように何かを語りかけてきていた。下田には、その言葉はわからない。それでも、今の自分の内心に、とても惹かれているのだけはわかった。

繕った表情を、崩し始める。

「……こういう話を、どういう気分で聞いているのか、気になります。自分達の行いの醜さをわかって、そういう顔を作れるのなら、擁護のしようがない。わかっているのか。たとえ貴方達が忘れても、僕は憶えています。ずっと、続けます。お前達に、最大限の報いを与えるまで」

すでにインベントリから取り出していたナイフを、イリーナの首にあてがった。生徒たちの方は、もう見なかった。ただ心の中では繰り返し謝る。これから、おそらく何度も苦しませることになるだろう。そればかりは、自分の不甲斐なさのせいだ。

何かが、決定的に変わってしまった。自分の中で彼らとの間が完全に分かたれてしまった感覚と共に。

「動かないでください。従わなければ、イリーナさんを殺します」

宣戦布告をした。

44. 勝利条件

(117)

篝火の前で自らの腕を治しながら、下田は唇を噛んでいた。

あの後、自分がどうやって死んだのか、わからなかった。気がつけばこの時間に戻っていた。とにかくイリーナを人質に取った瞬間、誰かに殺されたことは確かだろう。死んでから篝火で復活しても、意識が戻るには少しかかる。その間に、儀式が終わったということ。

イリーナが慌てて近寄ってくるのを、観察した。まさか、彼女に反撃を受けたということだろうか。今まで、イリーナが何らかの攻撃手段を用いた場面は、一度も見ることがない。

焦るな。下田は言い聞かせる。少しずつでもいい。わかるまで、繰り返すだけだ。

(129)

今まででわかったことを、整理したいと思う。

いくつか、試したことがあった。下田は誰にも言わず、見えない体を使って、一度不死街の端まで逃げてみた。前に捕まった場所とは違うところへ向かったのにもかかわらず、すぐに位置が補足され、エルドリツチの配下に捕らわれた。

このことから考えるに、常に自分たちの場所が知られているのは確実だ。これが何かの術の一種だとしたら、どうにか無効化しなければ非常に不利になる。

仮説はあった。ゾリグの言葉が主な根拠だ。あの男は、ヨルシカに言われて下田達を待ち伏せしたというようなことを言っていた。つまり、下田達の位置を補足できるのは、彼女だけである可能性がある。

誰かの位置が無条件でわかる術など、今まで教えられたことも聞いたこともない。何か、ヨルシカとの間につながりがあるせいなのでは

ないかと、下田は推測した。そのつながりのせいで、こちらの情報が筒抜けになっている。

心当たりがあった。

それは、誓約だ。生徒達は全員、ヨルシカと暗月の誓約を結んだ。今思えば、その時の展開はやや強引だったような気もする。初めから、誓約を選ばせるつもりはなかったのではないか。太陽の戦士や、狼血の騎士の誓約もあるという選択肢は、ただのカモフラージュ。

これで、この戦いの最低限の勝利条件がわかった。それは二つある。

まずは、イリーナを自由にさせてはならないということ。彼女の存在が儀式の要だ。放っておけば、どこにいようと、下田達は贄にされる。かといって、安易に殺してしまえば、そもそも祭祀場から出られなくなってしまう。篝火を使つての移動は、彼女が担っているからだ。

もう一つは、ヨルシカの排除。彼女がいる限り、永遠に追手がやってくる。誓約を解けばそれでいいのだが、相手が応じるとは思えない。ならば残るは彼女を殺して、誓約そのものを破壊するしかなかった。下田自身、そうしたいという気持ちもあるが。

イリーナを確保できる機会はかなり多い。彼女は普段、広場で祈っていることがほとんどだからだ。問題は、ヨルシカが下田の目につくところへ出てくる機会が、かなり限られているということだった。

最初は、下田が篝火の傍で意識を取り戻してすぐだ。ただし、その時、彼女の傍にはグウィンがいる。とてもじゃないが、突破できる自信がない。

次に姿を見せるのは、儀式の直前。一見これが最大のチャンスのように思える。彼女から二人きりで話したいと言ってくるからだ。彼女の部屋に入ったあたりで、行動を起こせばいい。ただ、下田も彼女を殺すのはそう簡単にいくとは思っていなかった。あまりに時間をかければ、儀式が始まってしまう。できれば、ヨルシカとイリーナを同時に把握できるような場面が欲しい。

その希望に合っているのが、最後の機会だった。儀式の最中。イ

リーナとヨルシカが同じ広場にいるので、条件を満たすことにおいて、一番ましに思える。生徒達も皆集まっているので、逃げるのに都合がいい。そして、そこにはグウィンもない。最初の機会よりも、かなり簡単であることは確かだった。

簡単。

下田は、その言葉のあまりの説得力のなさに自嘲した。グウィンがいなくても、祭祀場のほぼ全ての戦士たちがそろっている。ヨルシカは篝火から一番遠い玉座付近にいるのだ。彼女を殺そうとすれば、全員がそれを阻もうとしてくるだろう。彼ら全てを同時に相手するのは、馬鹿げていると思った。一人一人にも、歯が立たないというのに。

だが、それ以外にチャンスがないことも確かだった。大体は、ヨルシカは自分の部屋にこもっているらしい。そこへ忍び込もうとしても、まずは大扉の先の短い道を通らなければならない。そしてその道には、「外敵」用の罠が仕掛けられている。

一度引っ掛かって、彼のその恐ろしさを理解した。落とし穴が開くわけでも、横の壁が迫ってくるわけでも、上から無数の鉄球が降ってくるわけでもない。全ての戦士達へ、侵入の信号が送られるらしい。全て、というのはジークバルド達だけではない。裏でつながっているエルドリツチャ、さらには一度下田とちとせに魔術を当てた仮面の男が率いている謎の集団にもばれる。彼らが駆けつけてくる中で、下田は幾重もの拘束魔術にやられて、待つことしかできなかつた。

つまり、儀式を阻止できて、かつ相手にする敵の総力が一番少ないのが、儀式の最中に行動を起こすことだった。篝火の傍でイリーナを行動不能にさせ、そこからヨルシカを殺しに行く。やることと言えばそれだけだが、今の下田にとっては無謀という言葉では片付けられないほどの無茶苦茶な難題だった。

それでも、やるしかない。彼は戦いを続けた。

イリーナを人質にとつて、すぐに後ろを向く。ソウルの矢が迫つて来ていた。下田はこれに首を刺されて、死んでいたのだ。何とか横へかわすと、イリーナから離れてしまう形になる。

直後、自分の頭が潰れる音を聞いた。何かを振り下ろされたのは分かったが、誰が、何をしたのかはまるで理解できなかった。

(167)

正体はわかった。

大槌だ。それが、明らかな怒りを伴つて、下田へと振るわれていた。誰がやったのかも、見えた。イーゴンだ。生徒達とイリーナを除いて一番近くで儀式を見ていた彼が、何十回も下田を殺したということだった。

最初の、相手。獅子の兜をかぶった僧兵。

まず、その攻撃の迫力に慣れるのに、時間がかかった。常人では持ち上げることもしかないような武器を、恐ろしいほどの速度でぶつけてくるのだ。下田は、何度も一撃目で殺された。死ぬことは避けられなくても、ほとんど致命傷に終わった。

(205)

初めは、大体縦の振り下ろしだ。軌道さえわかっただけならば、事前にずらしておくことはできる。下田はソウルの矢をかわした後、すぐに全力で横っ飛びに避けた。怖気づくことはなく、スムーズに動くことができた。肩のすぐそばを、轟音が通り過ぎていく。

続く横の流れるような薙ぎ払いで、彼は壁へと叩きつけられて、潰れた肉の塊になった。

多少、むきになっていたことは否めない。

そもそも、真つ向から相手と同じ土俵に立って戦うのは、おかしい。下田は自分のできることを考えた。相手にはなくて、自分にあるもの。それは能力だ。固有能力だけを指すのではない。つまり、インベントリにも利用できるところがたくさんあるのだとようやく気がついた。

そこからは、動物以外ならほとんど何でも取り出せる。下田が特に注目したのは、銃器類の存在だった。銃というのは、大した力も必要とせずに、高い殺傷能力を持っている武器だ。わざわざ標的へ近づく必要もないというのも、長所だった。

それでヨルシカを初めから狙えば。下田は初めこの考えが最良だと思ひ込んでいた。余計な戦いをせずにいられるかもしれない。

問題は、強力な武器を取り出すのは相応の対価がいるということだった。一番安い拳銃でも、二万ソウルはかかる。おまけにたちが悪いのは、弾の方もソウルが必要だということだ。一発あたり、三百五十ソウル。百発取り出せば、三万五千かかる。

下田は六日間の間のソウル集めの期間で、最大でも七千ソウルしか得られなかった。どう考えても足りないが、手は残されている。

「それでは、誰にソウルを集めますか？」

儀式の二日前、イリーナから話がされる。儀式のために、灰の中から一人、ソウルを全て所持する者を選ぶ必要があるというのだ。そこにはおそらく管理のためという事情もあっただろうが、下田にとつてはありがたかった。生徒達のソウルを合計すれば、優に六万は超える。武器の調達にはもってこいだ。

同時に、二人が名乗りでる。下田と、宇部だ。

イリーナが、困った顔になった。

「ごめん、譲ってくれと助かる」

「は？ 何言ってるんだてめえ。こういう役目は一番強いやつがやるって決まってるんだろ」

前までは、宇部が当然という顔で引き受けていた。そこに下田が割り込めば、当然こういう展開になるのは決まり切っているだろう。何とか、話し合いだけで事が進んでくれないかと、下田は思っていた。

「そういう理論もわかるけど、今回だけは僕に任せてほしい。今まであまり役に立てなかったから、こういう時こそ頑張りたいたいんだ」

「知るかよ。足手まといなのはお前の勝手だろ。いい顔しようとするんじゃないよ」

「頼むよ」

宇部は下田の言葉をもう聞いてはいない。イリーナへと作業を始めるように命令をした。その行為には、誰も言葉を挟んではこない。この場合、おかしいのはおそらく下田の方なのだろう。最近はずっと部屋で考え事ばかりしていたし、ちとせ達ともほとんど話してはいない。その上さらに宇部と無用な争いを起こそうとするのは、確かに褒められる行動ではなかった。

だが、下田はもう何かを躊躇うことはやめにしようと考えていた。

「一番強い奴か」

彼の呟きに、宇部はしつかりと反応した。視線が向いてくるのを待ってから、意識的に挑発するような表情を浮かべる。

「だったら、まだ、わかんないと思うけど。宇部って、自分が無条件で偉いと思ってるどころあるよね」

「あ?」

睨みつけてくるが、怖いとは思わなかった。学校のにいた頃の自分なら、絶対に避けていたであろう視線。それが今は、遠く感じた。

宇部は周りの制止も聞かずに、下田の胸ぐらをつかんでくる。

「調子に乗ってるんのか?」

「なんでそんなにいつつも、周囲を威嚇してるの。そうしてないと、生きていけないから?」

「くだらねえ。お前の安い挑発に、乗るとでも思ってるのか」

ローブの襟を引っ張られながら、下田は思った。もう乗っているよなものだ。しかし、宇部にはまだ余裕がある。それは予想外だった。

た。多分、相当に下に見られているからか。下田の発言自体そのものが、軽く受け止められている。

それでは、駄目だった。宇部に譲る気がないことがわかった以上、別の方向からソウルを得る手段を考えなくてはならない。

「どっちが役目を担うのにふさわしいか、まだわからないってこと」

「俺がふさわしい。これで終わりだろ」

「勝負しよう。どっちが強いか」

宇部はきよとんとした。それから、大げさに笑い始める。

「どの口で、言ってるんだ？ 馬鹿だろ」

やっぱり本気にはしてくれないらしい。下田は、人をけしかける経験に乏しい。こういう時相手が真面目に受け取ってもらえるようになるためには、どうすればいいのか。彼には、一つしか思い浮かばなかった。

あまり他の人を巻き込みたくないが、仕方がない。

「じゃ、僕が勝ったら役目の他にも、要求することがある」

「何だ、言ってみろよ」

「二度と、ちとせに近づくな」

思いのほか、沈黙が続いた。少し気になってちとせの方を見ると、口を半開きにしていた。余計なお世話だと、思っただろうか。どちらにしても、相手を挑発する材料に使ったことには、罪悪感がある。そんな自分の気持ちとは裏腹に、高坂が感心したように手を叩いていた。

宇部の手が、下田から離れる。そして、固く握りしめられた。

「なんで、お前が口出ししてくるんだ？」

「本人が、嫌がってるみたいだから」

「どうするかは、俺の勝手だろ」

「でも、皆に笑われてるよ。脈もないのに食い下がるみつともない奴だって」

下田はこの時殴られると思って身構えていた。だが、予想した拳はやってこない。宇部は、無表情のままではばらく固まっていた。それが本気で怒っているときの彼だと、親しくない下田でもわかった。

「上等だ。乗ってやるよ。今から、ちゃんとした場所でやるぞ」

二人がソウルをめぐるって戦うということは、すぐに祭祀場の者達にも知らされた。墓地近くの訓練場を使って、行われることになった。結構な騒ぎになったので、ほとんどの者達が見物に来ていた。

意外にも、下田はたいして緊張していなかった。既に勝敗などわかり切っている勝負だからだ。

始まってからすぐに、素手で完膚なきまでに打ちのめされた。宇部が目の前に来たと思ったら、既に意識が飛んでいた。

まあ、こうなるだろうな。と、冷静に受け止めた。

(245)

宇部にぼこぼこにされてから、イーゴンに叩きのめされる。

正直、少し楽観視していたところはある。祭祀場の者達に比べれば、宇部の相手は大したことがないと。

実際、その通りではあった。イーゴンの攻撃に比べれば、宇部のは取るに足らない。技術的にも、含まれている気迫も、次元が違った。下田が、その両方に対してまるで対応できないだけで、その違いはつきりしている。

草野と、腕相撲をした時の事を思い出す。学校にいた頃は、彼は下田よりも弱かった。クラス最弱とまで言われていた。だが、この世界に来てからは、今度は下田の方が齒が立たなくなった。

思うに、生徒たちは戦士と、術師に分けられた時点で、その身体能力にも影響が及んだのだろう。補正というものだろうか。それに加え、宇部は固有能力のおかげでさらに馬鹿力になっている。まともに戦おうとすれば、苦勞するのは当たり前だった。

(278)

宇部が開幕、一気に距離を詰めてくるのには離れた。イーゴンとは違って、こちらのかわし方によって、微妙に軌道を変えてくることもない。ちゃんと後退して、魔術によるカウンターを狙った。ソウルの塊を相手の頬にぶつけると、妙な感じがした。直接攻撃したわけでもないのに、気持ち悪い感触が残っているような気がした。

それを何とかなくそうとしてしていると、宇部に腹を刺された。とりあえず、彼に武器を抜かせるところまでは行けたらしい。

イーゴンと戦う。

二撃目で、半身を潰されて死んだ。

(354)

宇部の動きを、ようやく目で追えるようになってきた。本当に身体能力が十五倍になっていくかどうかはわかりようがないが、人間離れしているのは確実だ。近づかれたらほぼ終わりだというのに、詰めてくる速度もおかしい。

一撃は入れられる。そこまでは完全に舐められているからだ。だがそこからは彼も本気になる。そうなれば、今の下田の感覚ではほとんど隙を見出せない。

その一撃を、未だに本気でやれない自分に、下田は失望していた。人を傷つける決心がつかない。やらないといけないのはわかっているのに、直前で少しの躊躇いが出る。ヨルシカの際は、本気だった。本気で殺そうと思った。だが、宇部に対してはそこまで強い感情を抱けない。

そんなことを言ってもらえないのも確かだ。どうにかして、抵抗を払拭する必要がある。

イーゴンとの戦闘は数秒くらいでいつも終わる。

宇部を普段から観察することにした。

ずっと亡者などの戦いを見てみると、段々と彼の癖の様なものが見えてきた。彼の戦いには、型などない。その時自分がいいと思った攻撃をそのまま繰り出しているだけだ。それが綺麗に決まる時もある。連撃が拙くなつて、隙ができる時もある。だが、単純に膂力があるので、大抵の敵には無理やり押し切る形で勝利していた。

つまり、彼の調子を常に崩してやれば、こちらのペースを維持できるといふわけだ。下田は自分なりに対策を練り、既に何回も試行を重ねていた。

突進してきた宇部の顔に、思いっきりソウルの塊を当てる。何度も戦っていると、最初の方は本当に作業になつてきていた。そしてこれを作業だと思えば、躊躇いもある程度なくせるのだと、最近わかった。彼が怯んだ隙に、下田は五つのソウルの矢を作る。これが、彼の同時に操れる限界だ。一週間のほとんどを、魔術の修練に当てた。三つから五つまでは意外と簡単に上達した。しかし、六つ目からの壁が異様に厚い。これ以上数を増やすよりも、今の状態でより細かい動作ができるようにした方がいいと下田は判断した。

宇部は宙に浮かぶ矢を見て、警戒を始めた。大剣を構え、飛んでくるそれらを切り落とそうとする。

ここで何回も、全て落とされてやられる展開が続いていた。単に同時にぶついたり、少しの工夫を凝らすだけでは一つも当たらないのだ。それはおそらく、下田の魔術を放つ速度が遅いことも大きく関係していた。達人なら音速並みの矢を撃ってくるが、彼のはいいとこ高校球児が投げたボールくらいだ。だから、五つそれぞれを違う軌道で動かすくらいのことはいないと通用しない。

三本は相手の視界内に、もう二本は背後を狙った。全部速度を同じにはせず、わざと全部が違うタイミングで相手に届くようにした。こ

れができるようになるまで、相当の時間がかかった。

前二本を斬った後、宇部は振り返って、うなじを狙った矢を破壊した。後ろに目でもついているのだろうか。技術はともかく、彼に戦闘の才能があるのは確かだった。羨ましいと、下田は心から思っていた。

次に到達するであろう残った前の一本を、宇部はこともなげに捉えた。が、その直前で下田がその矢の軌道を変える。事前に相手はどういう動きをするかわかり切っていたので、簡単だった。

宇部はそこで少し驚いたようだったが、止まらずに、後ろの矢を剣の腹で受け止めようとした。が、矢は剣をすり抜けて、彼の顔に到達した。

傷つくことも、穴が開くこともなかった。それは当然だ。背後の一本だけ、極端にソウルの密度を薄くした矢を混ぜていた。威力は殺されている。ほとんど霞の様なものだ。衝撃に身構えていた相手にとっては、不意を突かれた形になるだろう。

その一瞬の隙が、残った一本を当てる好機になった。

宇部の肩に、ソウルの矢が突き刺さる。うめき声をあげて、彼は地面に転がった。もちろん、これくらいの事で下田は油断したりなどしない。相手の両手に向けて、ソウルの矢をさらに放った。大剣が、音を立てて落ちる。

勝負の決着は、どちらかが戦闘不能になるまで。宇部が自分から言ったことだった。その基準で考えるならば、まだ彼は動ける。なぜなら、足や頭がまだ無傷だからだ。まだ、食らいついてくる可能性がある。

下田がさらに魔術を発動させようとしたところで、声がかかった。

「そこまでだ」

ジークバルドが宇部との間に割り込んできた。

「誰が見ても、決着は付いている。シモダの勝ちだ」

そう言われても、あまり実感は湧いてこない。何かを勝ち取ったという気はまるでしなかった。まだまだ超えるべき壁が多すぎて、達成感を感じる余裕がない。

一步進んだことは確かだと、自分を鼓舞して、下田は背を向けた。頭の隅が痛い。術を使った量は大了たこともないが、集中する場面が多かった。

「ふざけんな…、お前、卑怯だぞ」

宇部の言葉で、足が止まった。

「そんな魔法まで使えたら、勝てるにきまつてるだろ。正々堂々と、勝負しろ」

ただの言いがかりだとはわかっていた。お互いに、自分のできるところをぶつけ合った結果がこれだ。負け惜しみだと、下田は既に無視を決め込んでいた。そうできると、思っていた。

だが、自分の身体は勝手に、宇部へと走り寄っていた。その途中でジークバルドに止められるが、この次から次へと湧き出てくる衝動はなくならなかった。

「卑怯…？ 何が、正々堂々だ。お前を倒すのに、どれだけかかったと思ってるんだ！ お前が余計な意地張らなかつたら、あんなに…時間を無駄にすることもなかった。おかしいのは、お前だろ。そんな恵まれた力を持って、なんで僕なんかに負けるんだよ！ もっと工夫しろ！ 最後まで戦えよ！」

自己欺瞞だと、十分に理解していた。一番強力な能力を持っているのは、下田自身だ。これがなければ、そもそも何も知らないまま死んでいた。どれだけ失敗してもやり直せる力の方が、恵まれているに違いない。

だが、本当に、そうだろうか。能力を進化させて、本当によかったのだろうか。前のままだったら、色々なことを背負わずに済んだのかもしれない。何も知らずに、いられた。

あまり、そのことは考えないようにした。底知れない沼にはまっていく予感がしたからだ。

約束通り、その後イリーナによって生徒たち全員のソウルが下田に集められた。これを儀式の日に解放するので、それまでは待機しているようにと言われた。

そわそわとした気分で祭祀場内へ戻ろうとすると、いきなり高坂が

肩を叩いてきた。

「本当に、やっちゃまったな」

その隣では、ちとせが呆れたように見ている。

「別に頼んではなかったんだけど、ま、せいせいしたから良しとするか。ありがとね、アキ」

「何が？」

相手が困っているのを見て、下田も戸惑いを浮かべた。何か、自分が変なことでもしたのだろうか。

「いや、だからさ。その、私にあいつを近づけさせないようにするって約束」

「ああ、うん」

すっかり失念していた。もう何回も宇部を挑発するのに使ってきたので、最近ほとんど無意識で言っていたのだろう。そういえばそんな内容だったと、下田も思い出した。そして当たり前のように忘れていた自分が少し怖くなった。

「ごめん、ちよつと今は疲れたから。部屋に戻る」

今はそれよりも、インベントリの確認が先だった。既にソウルが山のように貯まっている。上手くいけば、今回で切り抜けられるかもしれないのだ。

呼び止める声も聞こえたが、下田は逸る気持ちと共に早足で自分の部屋に向かった。

(497)

「くそ…」

イリーナに両腕を治してもらい、部屋に戻ってすぐ、下田は自分の足で壁を勢い良く蹴った。一度だけでは収まらず、何度か足の方に痛みを感じるまで繰り返し続けた。

結果は、大失敗だ。

「くそ、くそ、くそ！」

貯まったソウルは七万を超えた。これくらいあれば、かなりの威力が見込めるライフルと十分な量の弾丸を得ることができる。それを使つて早速儀式の途中で行動を起こしたが、予想もしなかったことが起きた。

ヨルシカへ向けて撃った弾が、一発も届かないのだ。彼女に防がれたのではなく、そもそも撃ち出した瞬間に、消え失せているようだった。そして弾倉を使い切らないうちに、銃本体に不具合が起る。弾詰まり程度なら優しいレベルだ。酷いときは粉々に部品が飛び散つたこともあった。

インベントリという機能の、由来を理解していなかった。この力を使えるようになったきっかけは、祭祀場から渡された妙なオレンジ色の飲み物を口に入れたことだ。あれを飲んでから、インベントリだけの固有能力だの、そういう文字が見えるようになった。

祭祀場側の仕込みだとしたら、安全装置をつけておくのも当然だろう。国広が、ダーククレイスに向けて拳銃を使った時は、正常に動作していた。ヨルシカ達に向けた時だけ、まるで使いものにならなくなる。

つまり、宇部を倒すための努力が、ほとんど無駄になったということだった。

銃以外にも、試してはみたのだ。手榴弾も閃光手榴弾も、ガスグレネードも。投擲武器の類は、そもそも下田の腕力が扱うまでに達していなかった。銃の扱いや手榴弾の投げ方も、わざわざソウルを消費して取った説明書で、最低限のことを覚えて。それらがすべて無駄に終わったダメージは、かなり大きかった。

結局下田が利用できるのは、魔術と奇跡、そしてこの世界で作られた武器しかなかった。要は、敵と同じ土俵で、戦わなくてはならないということだ。それしか、残されてはいなかった。あらゆる点で勝っている相手を、どうにかして倒さなければならなかった。

「大丈夫だ……。やれる、やってやる。こんなことで諦めない。母さん、

大丈夫。僕が何とかするから。全部、全部……」

がりがりと、下田は爪を噛んでいた。自分では合理的な行為だと思っていた。最近、爪の部分が広くなってきた気がするのだ。指先がどこか白くなり始めているような。それは右手の方だけで、反対に左手は黒の部分が多くなっていた。エルドリツチに植え付けられている膿が、その浸食範囲を広げているようだった。

(687)

イーゴンとの戦いは、少しも気が抜けなかった。宇部と違い、魔術の小細工程度では、話にならない。相手も、下田の魔術の状態をしっかりと把握しているようだった。そもそも、宇部の思考が狭すぎるのだ。術師を相手にする時は、とにかく距離を詰める。それを徹底していれば、よほどの格上でない限り負けることはない。

さらには、イーゴンの鎧には防護の術が施されているようだ。まともにも当てたとしても、傷一つつくことはなかった。下田の魔術の威力が弱いせいでもあるのだろう。

彼を倒すことに注力するよりも、その包囲から抜けきることを優先した方がいい。イーゴンが、最終目的ではないのだ。ヨルシカのところまで何とか到達すれば、きっとその先の希望も見えてくる。

抜ける隙を作るには、おそらく相手の攻撃を何度かしのぐ必要がある。イーゴンの二撃目で殺され続けて、段々とわかってきた。いつべんに攻撃を続けられる時間には限りがある。彼が呼吸をして動いている以上、必ず止まる瞬間があるはずだ。それがやってくるまで、ひたすらすらかわすことに専念しなければならぬ。

(902)

宇部との戦いで学んだことは、ちゃんとある。時間を無駄に使って

はいけないということだ。下田には六日間という、定められた期間が与えられている。この範囲内でできることは、何でもするべきだった。

確定しているのは、時間が戻れば、下田の身体の状態も相応に巻き戻るといふことだ。つまり、いくら体を鍛えたり、走ったりしても、彼の身体能力は結局元に戻ってしまう。蓄積されるものがあるとすれば、それは経験だろう。

相手は、ほとんど毎日同じ行動をしていた。墓地で一人で鍛錬をして、イリーナの祈りを少しの間監視した後、休む時は大扉の奥へともる。

話しかけるとしたら、鍛錬の途中だった。

「何だ」

獅子兜の男は、下田の接近に気がつき、大槌を下ろした。邪魔をされて、不機嫌なのは明らかだった。今まで、何かを話してこようとする者はいなかったのだろう。彼の迫力からすれば、近づきたいのも当たり前かもしれない。

下田は、大槌をぼうつと見た。自分の血液やら肉の破片やらがこびり付いているような気がした。

「邪魔をして、すみません。お願いがあるんですけど、ちよつと戦ってくれませんか」

「他に頼め」

適当に拒絶されるのにも、もう慣れた。

イーゴンが去ろうとしている先に、回り込んだ。

「冗談ではないんです。ちゃんとしたやつです。僕は、貴方を殺す気でやりますから、貴方も、そうしてください。多少の鍛錬にはなるんじゃないんですか」

「気でも狂ったか。お前なんぞに時間を取りたくはない」

イーゴンは下田を無理やり押しのとけると、大槌を肩に抱えながら、祭祀場の方向へと戻っていった。

下田は腕を組みながらその姿を眺めて、ソウルの矢を二本発現させる。二本とも相手の首に定めると、今出せる全力の速度で打ち出し

た。正直、相手が拒絶しようがしまいが、どうでもよかった。どちらにしろ、練習相手になつてもらうつもりだった。

イーゴンが矢を叩き落とした直後下田は接近した、そして、数秒粘つてから、大槌に殴り飛ばされて、意識を失った。

儀式の時とは違い、死なない程度に加減してきたようだ。どうりで、速度が少し遅いと思つた。それでは駄目だと、下田は繰り返すことに決めた。

治つた次の日も、イーゴンに頼み込んだ。そして不意打ちをしようとして返り討ちにあつても毎日続けた。儀式の日まであの僧兵の事だけ考えた。そしてどれだけ連続で立ち向かつて、相手の態度はほとんど変わらなかった。ただ後半の方になると、あちら側から、下田を少し避けるようになっていた。

(1025)

パターンは、何となくわかつてきた。

イリーナを人質に取つた直後、飛んでくるソウルの矢は、必ず首を狙っている。だから、あらかじめその部分に魔術の盾を作つておけば、わざわざ動いてかわす必要性はなくなる。ただ、その矢の威力は、盾を三重ほど重ねてようやく防げるくらい強力だった。それでも、次への攻撃へ対応しやすくなるというメリットは大きい。

最初の大槌の振り下ろしを、最低限の体のずらしで避ける。ここで気を付けるのは、決して大槌の動きだけを追つてはいけないということだ。イーゴンの体の動き、筋肉の方向性を見定めて、次の軌道を読む。簡単ではないが、散々彼自身と戦つていれば、無意識のうちに読めてくるようになる。

横の薙ぎ払いをしゃがんでかわした。この次は、大体、イーゴンはさらに接近してくる。大槌を短く持ち替えて、浅く突いてくる。

当たりだ。

突きはさらに速い。しかし、欠点がある。攻撃範囲の狭さだ。下田

が的確に体の軸をずらせば、当たることはなくなる。

そこまで来て、イーゴンはようやく下田の動きがまぐれではなく、経験に裏付けされたものだど理解したようだ。そこで、彼の油断や侮りはなくなつた。同時に、思考が生まれる。次の攻撃をかわされないようにするためには、どう工夫すればいいか。考える間ができる。

今だ、と思つた。これが攻撃の切れ目だつた。予測していた下田は、相手の目の前でソウルを肉薄させる。ぶつけるためではない。ぶつけてくると相手に思わせるための布石だつた。防御行動で、イーゴンの動作が遅れたのがわかる。

姿勢を低くしながら、イーゴンの脇を抜ける。相手の追撃はこない。

切り抜けた。突破してやった。

途端、視界が一気に広がつた気がした。石の玉座の近くでヨルシカが立ち上がっているのが見えた。

そして、その前に立ちふさがっている者達も。

直後、轟音が背後で鳴つた。白い光がはじけ、下田は全身が粉々にちぎれているのを自覚した。何が起きたのかはわからなかつたが、この戦いがそう甘くはないことを、改めて思い知らされた気がした。

(1367)

何をされたのか、わかつた。

それはイーゴンの術のようだ。彼が大槌の柄を地面に付き、何かを唱える。すると、その体から球体状の光が広がり、その衝撃で下田の身体を粉碎していた。

これは、避けようがない。その範囲は一瞬で逃げられる距離の何倍も広く、離れたとしても威力が弱くなるわけではない。多少周りを犠牲にする覚悟の上での、攻撃だつた。イーゴンの、切り札とも言えるだろう。

魔術で即座に盾を作ろうとしても、その直前まで必死に大槌の攻撃

をかわしていたので、集中する状態を作り出すのは非常に苦労した。おまけに、たとえ盾が作れたとしても、範囲が小さすぎて、必ず下田の体のほとんどが崩壊した。範囲だけではない、作り出す脆弱な盾だけでは、まるで衝撃を殺しきれなかった。

下田は、ずるい、と叫びたくなかった。

こんなの、今まで一度も、出したことなかったじゃないか。

(1490)

光の衝撃で、ばらばらになる。

(1687)

攻撃の切れ目で、術の発動を阻止しようと下田は、妨害を試みた。だが、その隙に体勢を立て直され、大槌で潰される。

(1824)

光に殺される。

(2455)

今日も元気にばらばらだ。調子が良い。

下田は光に包まれる瞬間、歓喜の叫びをあげた。なんだかとても気持ちがよくっていた。

(3138)

病は気から、とも言う。

なので、思いつきり笑ってみることにした。少しも楽しい気分ではなかったが、口を精一杯釣り上げて、人生で一番面白かった場面を思い返して、大声で笑った。

それを三十分ほど続けてみると、喉から血の味がし始めた。いigo、と下田は段々本当に可笑しくなってきたのを感じた。この調子だ。

二時間を過ぎると、異常を知った誰かが扉を叩き始めた。それが何かのリズムになっている気がして、さらに爆笑した。声が枯れてきたので、適当に奇跡で和らげていく。

扉が破られて、誰かが下田の身体を抑えつけてくる。妙にくすぐつたくて、下田は勘弁してくれと思った。ただでさえ可笑しくてたまらないのに、そんなに口を押えてきたら、こそばゆくて耐えられない。

魔術によって気絶させられたが、それでも自分の笑い声がずっと頭の中で響いていた。再び起きてからも、また笑った。所謂、ツボにはまったというやつだ。こんなに可笑しいのが続くのは、人生初だろう。初体験だ。

下田は、泣きながら笑い続けた。

(4789)

たのしい。

たのしい。

…むりに、きまつてる。

だから、もういいあきらめよう。たのしいことだけかんがえよう。

(7
8
9
0)

(5
6
1
2)

(1万6012)

『うくん、これはちよつと、さすがに』
「∴」

45. 数的不利

下田は俯いた。

『わかるけどねえ、でも、はっちやけすぎかなあ』

「わかってるよ。もう、突っ込まないで」

ここしばらくの記憶がない。だが、どういう状態だったのかはわかっていた。逃避にだけ専念した結果がこれだ。自分のことだからこそ、より一層恥ずかしかった。

『もういいの?』

「僕だって、好きでやってたわけじゃないよ。だいぶ落ち着いたし。冷静にイーゴン突破の方法を考えよう」

『笑いながら?』

「うるさいって」

右手で、左手の膿を殴った。それは黒い体を震わせながら、しゅんとする。本気でやってはいないはずだから、これもくだらない演技だろう。ただ、少しだけ可愛らしくて、思わず微笑みが漏れた。

『あ、笑ったじゃん』

「いや、これは」

『そっちの方がいいよ。まともって感じがする』

「まあ、そうだね」

諦めないと決めたはずだった。

その決意だけは、続けなければならぬ。まともなままで、乗り越えていこう。

部屋を出ると、目の前にちとせがいた。なぜかすごく驚いている様子だったので、下田は首を傾げた。

「どうしたの?」

ちとせは何か言いつらそんなことを抱えているかのようになり、しばらくもじもじしていた。そして、覚悟を決めたように息を吐いて、下田の両肩をつかんできた。

「私は、あんたにどんな事情があるのかわからない。それでも、ちやんと相談して」

「どうして」

「あんたずっと独り言ばかり言ってるから、その、ちよつと、異常だよ」

『ウフフフ、異常だつて』

「お前は黙ってる」

ちとせの指摘で、少し我に返った。そういえばいつから自分は、この膿と話せるようになったのだろう。どう考えてもおかしかった。怪しい予感しかなかった。

だが、下田の言葉を自分に向けられたと思ったちとせは、視線を鋭くした。

「あ、違う。これは、君に言ったんじゃない。うーんと」

相手の手が、自分の腕に移動する。やや強くつかまされると、引つ張られ始めた。

「ちとせ?」

「イリーナさんの所に行こう。あんたを、戻してもらえるかもしれない」

さすがは、ちとせだと思った。

下田は足で思いつきり踏ん張った。前を行こうとする彼女を、強引に止まらせる。

そう、イリーナ。イリーナだ。彼女が、イーゴンと何かしらの関係があることは確かだった。

どうして、今まで試そうとしてみなかつたんだろう。

彼はちとせを思いつきり抱きしめた。

思えば、今まで目の前の事を片付けるのに必死で、誰かと落ち着いて関わることがなかった。大事な友達の、ちとせとの時間も大切だ。

既に広場近くまで来ていたので、周りの人通りもそれなりにあった。下田は見せつけるように抱きしめる腕を強くした。どうだ、これが彼女だ。自分の友人の、高原ちとせだ。

「ちよつと…」

戦いの面だけを知ろうとするのは間違いだった、イーゴンの事情を

ちゃんと知れば、そのルーツもきつと理解できる。理解できれば、ちゃんとした敵として、殺せる。

そう、殺さなければならぬ。殺すとまではいなくても、それ以上戦えないようになるまでダメージを負わせる必要がある。なぜなら、ただ正面からの戦いを避けて突破しても、結局は無意味だからだ。イーゴンを超えても、ヨルシカに辿り着けるわけではない。それまでに、おそらく何度も壁にぶつかることになる。イーゴンを放っておけば、邪魔になるのは確実だ。

ちとせが腕を突っ張って、下田の体から離れた。髪が少し乱れて、かなり焦っているようだった。

「アキ、いい加減にして。あんたさすがに、落ち着いた方が」
「ありがとう」

彼女の頬に口を付ける。昔小さかったころ母がよくしていた仕事だ。下田が何かためになることをすると、褒める言葉と一緒にキスしてくれた。今回彼は本当に感動したので、母のやり方に従って示すことにした。

よく見れば、儀式の直前だったらしい。

全員の視線が二人に向いていた。何とも言えない空気が漂っていた。

真つ赤な顔になっているちとせが、頬のあたりを手で触れている。それを目に焼き付けてから、イリーナの方へ走り出した。彼女は状況についていけない様子だったので、好都合だと思った。物は試しだと、彼女にナイフを突きつける。

「全員、動かないでください。従わなければ、イリーナさんを殺します」

間を置かずに、下田はナイフをイリーナの首に刺しこんだ。血が飛び散っていく。本当に気持ちの悪い感触がしたが、彼女達はそうされて当然だという思いもあったので、吐き気がやってくることはない。

『フッフ…、いいねえ。アナタ、最高だよ』

下田の手の膿が、身もだえした。

(1万8433)

怒りは、確実に枷になる。下田も、それで我を忘れて、グウインをも殺そうとした。熟達した者なら、上手く感情を制御する術を身に付けているのだろうか、それでも限界はある。

厳密には、イリーナを殺したわけではなかった。彼女の首を掻き切った直後、そこに放つ回復を素早く刺し込んだ。完治するほどではないが、出血を抑えるくらいの働きはする。ちゃんと合理的な行動だった。彼女の篝火の移動能力は、別に声を出せなくても使えるのだ。事前に調べておいて、良かったと思った。

イーゴンの攻撃は、一見苛烈さを増したようにも感じる。だがその思考の方向性は異なっているようだった。下田を殺すというよりも、より苦しめるための軌道。だから、甘くなる。頭に血が上っているから、攻撃の切れ目がすぐにやってくる。

二撃目をかわしたところで、その隙がやってきた。だが、実はそれが隙ではないのも知っている。ただの準備だ。あの光の衝撃を放つための。

下田は、盾を自分の身体全体に即座に展開し、それを五つ重ねた。成功率は半々程度だったが、今回は上手くいったらしい。範囲も強度も、初めの方とは段違いだった。

それでも、軽々と衝撃が防御を破壊していく。吹っ飛ばされて壁に叩きつけられながら、彼は結論付けた。やはり、自分の魔術だけの防護では、無理らしい。同時に展開できる魔術は、五つが限界だ。これ以上、魔術の盾を強化する術はない。

(2万4578)

「訊きたいことは、何ですか？」

イリーナは下田が呼び出した理由を、未だ計りかねているようだっ

た。

ずっと、気になってはいたのだ。

「イーゴンさんと貴方は、何か因縁があるんですか？」

彼女はしばらく固まっていた。本当に予想外の質問だったらしい。それから、さりげなく別の方向へと視線をやった。誰かが聞いているのかもしれないと、気にしているようだ。

「どうして、シモダさんがそのようなことを」

「すみません。踏み込んだことを訊いて。もし差支えがなければ、教えてくださいませんか」

二人は、まったく関わりがなかった。言葉をかわしているのは、罪の都でのことしか記憶がない。単純に判断するなら、他人以下の関係性だとしてもおかしくはなかった。

ただ、イーゴンとの戦いを経て、その考えは誤りではないのかと考えるようになっていた。イリーナを人質にしたり、傷つけたりすると、必ず真つ先に彼は向かってくる。その時の感情は、本物の感じがした。全霊で、怒りをあらわにしていた。

解せないのは、どう考えても彼がイリーナの事を深く思っているのは確かなのに、彼女と話すどころか、冷たく突き放そうとしていることだった。

そういう違和感の答えを、彼女も知っているらしい。

「あまり、気持ちの良い話ではありません。それでも、構いませんか？」

「お願いします」

彼女が話し出したことは、まず彼と故郷を同じくしているということだった。

宗教国カリム。

そこに住む聖職者の女性は聖女と呼ばれ、火継ぎのための巡礼を義務としていた。その護衛のために、騎士を一人就けるのが決まりだそうだ。イリーナもほとんどの者の例にもれず、自分の使命を火継ぎにすがっていた。

問題だったのは、火守女としての責務を背負うのに、彼女が少し臆

病が過ぎたことだった。

闇に慣れずに苦しむ彼女を、初めイーゴンは何度も助けてくれたらしい。彼は己の騎士としての任務に従順だった。そして、それ以上に彼女を助ける理由があった。

「私が、いけないのです。あの方は、イーゴンは昔から言っています。私の様な者が火守女になるべきではないと。他の大多数の女性と同じように、国の中で働くか、誰か：夫を見つけて、その人のために尽くすべきだと。全ては、自分の使命を貫こうとした、私の責任です」

任務に私情が挟むとろくなことにならないのは、どこでも共通のようだった。

イーゴンとイリーナは、子供のころからお互いを知っていたという。代々続く騎士の家系であるイーゴンの親の元へ、奉公としてやってきたのが彼女だった。二人とも敬虔な信徒だったので、子供ながらのつたない語彙で使命の素晴らしさを語り合っていたらしい。

そういう思い出を話すときのイリーナは、大切な宝物に触れているような顔だった。それでいて、二度と戻らない何かを惜しんでいる様子だった。

話を聞くに、イーゴンは、徐々に己の中の天秤が使命とは反対の方向に傾き始めたようだ。目の前の女性が苦しまないことの方が、大事になってきたらしい。それは、巡礼中の様子を知るほどよくわかる。何度も、彼女に戻るよう言った。時には強い言葉も使って、イリーナが使命にはふさわしくないと伝えていた。

それが変わったのは、カリムが亡国の憂き目にあってからだ。それから彼は、逆に彼女に使命へもつと向き合うように言うようになった。彼女が弱音を吐くところを怒鳴りつける以外は、まったく関わらないようになった。

自暴自棄になっていく過程は、下田にもわかる気がした。自分にも彼女にも、希望を見出せなくなったということだろう。何も変わっていない現状に耐えられる者が、一体どれだけいるだろうか。

「ありがとうございます。関係ない僕に話してくれて」

話をしながら、イリーナは下田の左手に奇跡を施していた。そういえば定期的に膿を静めるためにそうしていたと、思い出した。今思えば、この行為に意味はないのだろう。どうせ灰として消えていくのに、この治療に何の意味があるのだろうか。

彼女は、おそらく学ぶことをしない女性なのだと考えた。自分の使命のために男の思いから目を背け、そして自分の罪悪感を消すために、意味のない行為をしている。それが悪いとは言えなかった。普通だからだ。己も苦しむことになる使命を背負うには決して値しない、普通の女性だからだ。

もったいないなと思う。お互いに言葉がもう少し足りていれば、少し違う未来もあったのだろう。二人の事は、今までよりもよくわかった気がした。彼らは血も涙もない悪魔ではない。苦しみながら進もうとしている、下田と同じ存在なのだ。

だが、心底どうでもよかった。イリーナの話に心が動かされるものは何もなかった。ただ理解をするためだけに、我慢をしていた。それで下田達を騙し、犠牲にすることが正当化されるとは、少しも思えなかった。

(2万5431)

赤黒い肌の巨体の男が、槌を振るっている。色が変わるほど熱せられた刃に打ち付けられる度、大きな音が鳴り響いた。火の粉が飛んで、その白い髪や髭を照らした。

鍛冶師アンドレイ。ほとんど、喋ったことはない。一度草野と一緒に武器を修理してもらいに行った時くらいだ。その時も、草野が一方的に話しているだけで、相手側から何かを言うことは、ほとんどなかった。

そもそも奥の工房にいつもこもっているので、会う機会すらなかった。それが今や。下田はアンドレイを目の前にして思った。もう、この男の顔を何度見たことだろう。

下田の頼みが聞こえていないはずはなかった。それにしばらく答えることなく、剣を打ち据えている。無視をされているわけではないのはわかっていた。彼がまともにこちらを見るのには、もう少しだけ待つ必要がある。

「…盾だ？」

かすれた声が返ってくる。その開いているのかよくわからない瞳は、下田をまっすぐ見据えていた。

「そうです。別に、作ってもらいたいわけじゃありません。何か、こう、術に対して耐性のある盾が欲しいんです。できる限り大きいもので」

アンドレイは槌を置くと、両手を自分の膝につけた。

「そういう大盾なら、いくつかある。だが、お前なんぞがどう扱うつもりだ？ 動かすことさえままならないだろう」

「勝てない相手がいるので、その人を殺したいんです」

とんとんと、膝を叩いていた手が止まった。気の抜けたような空気が漂った後、アンドレイは低く呻くように笑い始めた。

ここで情に訴えても無駄だ。もつともらしい嘘をつくことも、意味はない。事実をそのまま言うことで、この鍛冶師の印象に残ることができるのを、試行錯誤を重ねて知った。

「一度来たな。やかましい坊主にくつついて。随分と様変わりした。で、そんなになるまで殺したい相手は誰だ？」

「殺したいのは、ヨルシカです。でも今殺さないといけないのはイーゴンですね。知ってます？」

「あいつの兜は、俺がいつも直してる」

アンドレイは楽しそうな笑顔だった。それはきつと、彼が自分の職務にしか重きを置いていないからだ。下田が真実に気付いていようが、祭祀場に反逆しようが、たいして気にしてはいない。ただ無謀なことを淡々と話す彼に対して、滑稽さを感じているだけだ。

椅子から立ち上がり、アンドレイは奥から下田の丈を優に超える巨大な盾を抱えて出てきた。十字を少し崩した、赤い紋章が印象的だ。その構成している金属は、下田には種類が特定できない。常に青白いきらめきが、近くで舞っているように見えた。

「ただでやってもいい。使う者がいなくて、腐っていた。だが、お前に渡すのは条件がある。この盾を自分だけで動かすことができたら、くれてやる」

「やってみます」

下田は地面に突き立てられた大盾に触った。地面に少しめり込んでいる。数十キロは最低でもあるだろう。少し指を当てて動かそうとしたが、当然びくともしなかった。その重さもまた、対策になりうる。

最後の確認をしたら、後は条件を満たすだけだ。

彼の手が少し動く、その瞬間、大盾は消失した。

アンドレイが立ち上がる。その反応にも、飽き飽きしていた。

「おい、何を」

下田はそのまま二、三步下がると、地面に向けて手をかざした。インベントリの、保管庫の欄を見て、そこにあるものを取り出す操作をする。

先ほど消えた盾が、再び出現した。かなり大きな音をたてて地面に転がる。一度それに巻き込まれて足の指を潰したことがあったので、しっかりと離れておいた。

まだ呑み込めていない様子のアンドレイに向けて、言う。

「動かしませんでしたよ。これ、ください」

この、インベントリの能力を利用することは、まだ諦めてはいなかった。ソウルを消費して出現させたものでは、祭祀場の者達に害を与えることはできない。だが、この世界に元からあるものを、インベントリのもう一つの力である保管庫にしまうことができれば、それはいつでも取り出せる防護になる。

再び盾をインベントリにしまい、工房を出る途中で、考え事を続けた。

できれば本番までに出さないのが正解だ。誰かに見られでもしたら、やろうとしていることが看破される恐れがある。それでも、練習に使わなければならなかった。

何度も、この盾を自分の前に出現させて、イーゴンの術を防ごうと

した。だが、この大層な盾でも、駄目だったのだ。最初の方は耐えることができたのだが、やがてひびが入り、抑えられていた衝撃がまたいつものように下田を襲った。

だが、手はまだ残されている。

符呪系統の魔術を、今までも何度か見たことがあった。

例えば、シーリスが自分の刺突剣に青紫色の光を纏わせて、戦っていた。後で訊いてみると、それをすれば威力は段違いになるらしい。例え術にほとんど適性がない剣士でも、符呪だけは覚えておいて損のない術だと教えてもらった。

それが鎧や盾にも使えるものだど、カルラが言っていた。物理にも術にも対抗できる強力な防護を作れると。そこから、下田は思いついた。彼の魔術でも、大盾でも防げない。だが、その二つを合わせたら、どうだろうか。

これからも、カルラともたくさん話すことになりそうだと、彼は歩き続けた。

(2万5634)

ただ、それだけを練習し続けた。魔力の盾。そう呼ばれている防御の符呪は何かを作るというイメージよりも、何かを覆うイメージを強くする必要があった。ソウルで大盾を覆うことは、比較的早くに成功していた。だが、それを実戦でも通用するほど、正確にそして素早く盾全体をカバーするには、相当の鍛錬が必要だった。

今回は下半分の防護が甘くなっていて、横に真つ二つに割れてしまった。ついでに下田の下半身も上半身から離れてしまった。

(2万6293)

速さは合格だ。問題は全ての衝撃を受けきるように全体に過不足

なく符呪を行きわたらせるのが、未だに成功していないことだった。どこかが甘ければ、全体が崩壊する。それほど、イーゴンの切り札は容赦がないということだ。

(2万8995)

その術は、神の怒りと称されているらしい。イリーナから訊いた。意外に思ったのが、それが奇跡に分類される術だということだ。下田は治療以外の奇跡があることを、今まで知らなかった。

いかにも、あの僧兵が使いそうな術の名前だ。もし自分があれを乗り越えれば、神を超えたということになるのだろうか。ならないだろう。それに、この世界で神と呼ばれている存在は、もう実際に会っている。

グウインの事を思い返すと、到底信じられないあの事実までくっついてきて、これ以上考えるのを止めた。とりあえずは目の前のことに集中しよう。

(3万1433)

ほとんど、衝撃を殺しきることに成功していた。

だが、それだけでは足りない。こちらの立て直しが遅ければ、相手の行動を許してしまう。それでも今までの連撃よりも、たやすいのは確かだった。どうやら神の怒りを使うと、一時的にかなり消耗するらしい。そして、再び動き出すまでもそれなりの隙ができる。

受けた後の攻撃も考えねばならなかった。魔術では駄目だろう。相手の鎧の防護に弾かれる。かといって、闇雲にナイフで切りつけようとしても、同じ結果になる。

彼の堅牢な鎧にも、弱点はあった。下田と同じ人間の構造をしている以上、手足や首の関節部分は、ある程度自由を効かせていないとい

けない。つまり、防御も薄くなる。

そこへピンポイントに攻撃するには、突きが一番だろう。アンドレイの工房を眺めていて、これはと思うものを見つけた。ステイレットと呼ばれるている刃渡りの短い刺突剣だ。鎧の隙間から肉へ刺し込むのに適している。

これを首の関節部分に刺したとしても、相手が戦闘不能になる保証はない。何せ、相手は厳密には人間ではないのだ。人なら動けなくなる怪我でも、通用しない可能性がある。

そこで、刃に細工をすることにした。工房の奥まで見えない体で忍び込んで見つけた、毒だ。自分で試したから間違いない。微量でも、全身が痺れて、すぐに意識を失うほど強力だ。他にも種類があったようだったが、できればこれで通用してほしかった。毒を自分から飲むことは、何度やっても慣れないからだ。

毒を塗り込んだステイレットをインベントリにしまえば、完璧な暗器の出来上がりだ。任意のタイミングで、取り出すことができる。

あとは、術後の隙について、何とか相手の体に接近できればいい。

(3万1822)

少しでも遅れると、首元へ飛び掛かっても、大槌を抱えていない方の腕で殴り飛ばされるだけだ。この男、体術にも熟達しているらしい。とにかく、相手の術が終わった瞬間には、盾をしまい、代わりにステイレットを取り出して、接近を始めていなければならぬ。少しでも気が逸れば、術の効果が残っている内に飛び出してしまうことになる。

タイミング。あとはタイミングだけ。

(3万2300)

遅い。まるで間に合っていない。

(3万3423)

遅い。

(3万5647)

少し、合ってきた。だが、首を狙ってきているのは相手もわかっている。あんなに重そうな兜や鎧を着けていても、下田の一撃はぎりぎりでかわされた。

工夫が、必要だ。相手の逃げる先を予測しろ。

(3万8932)

いや、誘導する。

(4万1476)

焦りは、禁物。

雑念は混ぜるな。標的を仕留めることだけを、考えろ。

(4万5632)

タイミング。

タイミングを。

(4万6767)

やれる。

やってやる。

できるんだ。

乗り越えろ。

(5万9836)

イリーナの首を刺して、背後を狙うソウルの矢を同じ術で相殺する。

イーゴンの大槌が目の前に迫ってくる。

今ならわかる、彼の技量は、敵である下田にとっても、尊敬に値するものだ。一体、これだけの得物を軽々と扱えるようになるまで、どれほど努力したのだらう。どれほど、傷ついてきたのだらう。

少なくとも、下田よりは苦勞していないだろう。はつきりと実感した。自分は、戦いの才能がない。まるでない。反対に、イーゴンは、天才だ。自分とは次元が違う存在だ。

だが勝つ。

三撃目を体をひねって避けると、相手は準備態勢に入った。その術が炸裂する直前に、インベントリの操作を終える。手元に大盾を出現させて、その重さを利用して地面に突き立てた。やや斜めにして、自分の身体を潜り込ませる。

炸裂。

ほぼ同時に、符呪が盾全体に行きわたっていた。光の奔流がやってくる。防護の中にも、その震えが伝わってくる。魔力の盾の一部が、崩壊を始めた。彼は歯を食いしばる。もう少し、もう少しだ。カウントを始める。衝撃が終わるまで、あと一秒。

光が消える。

ほとんど同時に粉々になった盾を消して、下田は地面を蹴った。利き手にはステイレット。そしてもう片方の手で、ソウルの矢を操作した。

矢を相手の首に向ける。イーゴンはその軌道を正確に読んでいた。読んでいたからこそ、下田の次の手を避けることができなかった。

彼のステイレットは、初め空を切る予定だった。だが、ちょうどその先に、ソウルの矢を回避したイーゴンの首がやってくる。それはまるで吸い込まれているかのようなだった。多数の試行に裏付けされた。完璧な動きだった。

刃の先が、兜の下の隙間に入り込んでいく。肉を裂いていく感触がある。下田は、確かに相手の呼吸が乱れるのを聞いた。止まらずに、奥まで差し込む。

イーゴンの体はすぐに固まり、床へと倒れた。そこに覆いかぶさるようにして、ステイレットを引き抜く。

思った通り、相手は身動きが取れないようだった。だが、まだ生きている。首から血を流しながらもがいている。それでも、もう立ち上がれはしない。じきに死ぬだろう。

出血のショックで意識を失っているイリーナへ、イーゴンは這ってこうとしている。下田を止めるのではなく、その反対の方向へ向かっている時点で、彼にはもう戦意がないことは確実だった。そもそも初めから、その男は自分の望みを、使命とは別の所に置いていたのかもしれない。

イーゴンの結末を、最後まで見る必要性を感じなかった。

下田は叫びたい気持ちを抑えて、ヨルシカの方向へと向き直った。そして走り始める。

彼の行く手を、三人が阻んだ。

彼らを認識した瞬間、下田は胸に穴をあけられていることに気がついた。太く青白い矢が、体を貫通している。

なすすべなくその場に倒れ、彼は自嘲した。

…わかってる。

気を緩めたらいけないなんてことは。

何かに勝利したわけではないのだ。いくつかある点の一つを通過しただけ。イーゴンは、ただの通過点。初めの関門。

死ぬ間際、次の相手を見定めた。

ジークバルド、シーリス、フォドリック。

彼らは、あり得ないものを見る目で、下田の最期を見届けていた。

(5万9879)

その魔術は、何かで相殺するとか、盾で受けるといふ選択肢を全て無駄にさせた。単純に、威力が強すぎる。五重の魔力の盾でも、容易

く貫通してきた。五本の矢を同時にぶつけても、一ミリも軌道がずれることはない。

避けるしか、選択肢がなかった。おそらく、最初の矢は侮りも含まれていた。今回ののは違う。イーゴンを倒したことで、下田に対する評価が変わったのだろう。本気で殺す攻撃をしてきた。

そして、今まで二回にわたってソウルの矢を放ってきた者が誰なのか、もうわかってはいた。ヨルシカだ。下田を仕留めた時の、愉悅に満ちた表情が物語っていた。

そんなに、焦らなくてもいいのと思った。あつちが憎んでいるのと同じくらい、こちらでも殺したいと思っているのだ。もう少し待ってくれば、直接戦ってやるのに。一番苦しむ方法で、葬ってやる。

矢を乗り越えると、下田の前にいる三人は、既に気持ちを切り替えているようだった。どくつもりはないらしい。戦うしかないようだ。

下田はそこで、思考が止まった。

どう、戦えばいいんだ？

そのまま間抜けな形で突っ込み、ジークバルドの大剣が彼の首を飛ばした。

(6万2343)

今まで、どうしていたか。

下田の経験上、数の不利をよしとしたまま戦いを続けたことはなかった。そういう時は逃げていたか、他の誰かに助けを求めていたのだ。そもそも、彼は前線に立つ役割ではなかった。他の皆の支援をしていればそれでよかった。

ジークバルドの攻撃を気にしていれば、シリーズにやられる。

シリーズとジークバルドを同時に目に入れようとしたら、いつの間にか死角に回っていたフォドリックにやられる。

その困難さを、理解し始めた。

三対一だ。

イーゴンの時の、三倍は難しい。
どころの、話ではない。

あの三人は、お互いの隙をなくすような連携をしてくる。だから、少なくとも十倍以上は難易度が跳ね上がっていると考えるとよかった。思考と行動のどちらも、まるで追いつかない。今までの経験が、ほとんど役に立たない。大体、一人一人に勝つのも難しいのに、数でも負けているというのは、何というか。

「無理ゲー」

そう呟いて、ぽん、と頭の中で何かが落ちた。

宇部や丸戸が言っていたことだ。この世界は、あるゲームと酷似しているという。下田はあまりそういうものをしたことがなかったが、確かに今の状況は、少し似ている。一応何度もやり直しはできているし、敵もいる。たくさんいる。ヨルシカを倒せばクリアーというわけだ。

そう考えると、多少は気が楽になった。

課題のレベルが上がっているのなら、自分のレベルも上げればいい。今までしてきたことに加えて、何か、新しい風が必要なかもしれない。

(6万7565)

有利な点も、ちゃんと探すことにした。

彼らは連携ができているが、それはお互いの存在も気にすることだ。上手くはまらなければ、事故も起こるだろう。現に、下田へは三人同時に攻撃してくるということとはなかった。同士討ちの危険があるからだろう。基本的に一人が陽動で、残った二人が別々の方向から攻撃をするという形だった。

一方、下田の方は単純でいて複雑だ。どれも敵なのだから、遠慮をせずに行動できる。ただ、それで考えることが相手よりも少なくなるというわけではなかった。むしろ、絶望的に多い。三つの脳、三つの

体を同時に動かせて、それらを監督する四つ目の脳と体があるくらいでなければ、到底突破は無理だと感じる。

穴があるとすれば、シーリスだ。おそらく、この三人の中で一番技量が下田と近い。とは言え、その考えは気休めでしかなかった。

「模擬戦、ですか？」

シーリスは大体いつも、自分の祖父であるフォドリックと共に鍛錬を行っている。これまでと同じく、下田は敵と過ごす時間をなるべく多くしようと考えていた。

「ですが、シモダさんは、そういうことをする必要はないと思いますよ。私達に、今でも十分役立ってくれています」

あまり関わりたくないというのが本音なのだろう。儀式の日が近づいてくるにつれて、彼女も含めたほとんどの祭祀場の者達は、さりげなく下田達から距離を取ろうとしていた。シーリスは特に、その傾向が顕著だ。残酷な事実を知っていて、それを相手に黙っている罪悪感。彼女は、まだ、優しい方なのかもしれない。

「できることは何でもしたいんです。まだ、戦いは残っていますから」そして、下田がちゃんと頼めば、それを無下にすることはない。

シーリスはフォドリックと少しの間目を合わせた後、頷いた。

「では、お互いにちゃんとした決まりを設けましょう。それを決着の目安とします」

「決まり？」

下田は、インベントリから、ステイレットを取り出した。

「別に要らないんじゃないんですか。ここには優秀な奇跡使いもいますし。決着は、僕が死ぬか、シーリスさんがこれ以上続けられなくなるほど負傷した時でいいと思います」

シーリスは茫然としていた。何を言われているのかを理解すると、大きな勢いで首を振る。目だけは下田からそらされていた。

「そのようなことは…」

「模擬戦とは言っても、実戦に沿わないと意味ないですよ。やってみましょう。大丈夫です、どうせそっちが勝ちますから。僕が死んでもすぐに蘇りますし。大したことないですよ」

「私は、貴方を手にかけるようなことは、したくありません」

「なんで、嘘をつくんですか」

下田は苛々し始めた。空気が変わったのが周りにも伝わったのか、静まり返っている。

シーリスは確かに本心で言っているのだろう。彼女は理由もなしに誰かを殺すことのできる女性ではない。

でも、あの時は違った。今のシーリスは知る由もないだろうが、彼女の持つ刺突剣は、もう呆れるほど下田の頭蓋を貫いている。理由があれば、下田を殺せるだけの覚悟を、ちゃんと持っているということだ。

「そのようなことは認められない」

黙って聞いていたフォドリックが、割り込んできた。孫が責められているのだ。何とか止めようとしてくるのは当然だろう。

「ここは、鍛錬の場だ。殺し合いをするために、皆励んでいるわけではない」

だが、卑怯な嘘を、ついている場でもあるわけだ。

下田は自分の狙い通りになったことを、内心喜んだ。

今度はフォドリックへと口先を向ける。

「なら、貴方でもいいです。貴方が負けたら、シーリスさんとも戦います。決まりは、ちゃんと作りましょう。ただ、武器はありにしてください。素手で殴り合っても、大した意味はありません」

フォドリックは、話している下田をじつと観察していた。彼の企みを、全て見透かそうとしているかのような、鋭い視線だった。下田としては、あまり隠しているつもりはない。そのままだ。彼ら二人との、経験が欲しい。

結局フォドリックは了承して、一秒で下田は負けた。

今までシーリスとも何度も模擬戦をしてきたが、全敗だ。彼女は歳だけなら、下田とはそう変わらないらしい。そこでも才能の違いを痛感した。自分が今までどれだけの時間繰り返してきたかは、もう数えてはいない。だが、もう人生が何回も終わりを迎えているくらいだとは、感覚としてあった。きつと、これからもたくさん時間を消費して

いくのだろうか。

(7万9283)

順番を、決めるべきだ。

とにかく一刻も早く、少しでも数を減らせば、それだけどんどん負担は軽くなる。ならば、誰を一番最初に処理するべきか。

シーリスは駄目だ。たとえ彼女の隙を見出せたとしても、フードリックが完璧にカバーをしてくるだろう。それに彼女にはまだ利用できる余地がある。二番目か、最後に殺した方がいい。

下田は、ジークバルドからもらった酒を、一気に飲んだ。やや甘口で、とても飲みやすい。

「美味しい」

「そうだろう。今回はなかなかの自信作だ。他の者の評判もいい」
相手は口ひげを同じ酒で濡らして、快活な笑みを浮かべている。

冷酷なのか、はたまた、度を越えて優しいのか。

ジークバルドは、下田達と積極的に関わろうとしていた。騙しているという負い目を決して表には出さずに、こちらへの気遣いを忘れない。多分、本気だ。上手く感情の折り合いをつけて、矛盾した行動を当たり前のようにできる。

「ジークさんは…」

「何だ？」

「カルラさんの足の事について、何か知っているんですか」

杯をおいて、ジークバルドは、こちらを推し量るように見てきた。

「フム。どうしてそんなことを訊いてくる？」

「実は、二人がそんなような話をしてるのを聞いちゃって」

「そうか…」

少し考えるように、頭をかいた。

「彼女の足が深淵に浸食されているのは、ヨームの都での所業のせいだ。私が、カルラをあそこから助け出してからの縁だな」

「所業？」

「最初の火を作りだそうとした。神に唾を吐くような行為だ。当然報いを受けた。国民のほとんどが死に絶え、直接かかわった術師たちは正気を失った。カルラだけが残った」

下田はパズルのピースを一つ一つ当てはめてるように考えた。

「つまり、ジョックもそこで死んだんですね」

今度のもつと反応が大きかった。ジークバルトはこちらを目を見開いて見た後、額を抑えた。深く溜息をつき、頭を下げてくる。

「あいつは、かなり、疲れているんだ。すまない。シモダのことを侮辱しているも同然だ」

「似ているんですか？」

「いや：姿は違う。だが、あの子も、奇跡を一番得意としていた。多分、そこを重ねてしまっているんだろう」

やめてくれ、と思った。自分の母親は、ただ一人だけだ。残された大切な部分までを、彼らは奪っていかうとする。自分は、カルラの息子でも、この世界の住人でもない。かなり不愉快だった。

「いいんです。それよりも：、どうしてジークさんは何もしないんですか？」

相手は、何を言われたのかわからないという顔をした。

「カルラさんが弱ってきているのは明らかです。どうして、何か手を施さないんですか？」

「いや、私は」

「傍目で見ている僕でも、わかります。彼女は、貴方を頼っている。ただの恩人以上の何かを、抱いているはずだ。貴方もそれをわかってい。なのに、助けようとはしない」

ジークバルドは、首を振る。

「手の施しようがないのだ。先に限りがあるとしても、祭祀場に協力すると言ってくれた。彼女の使命に対する思いを、無下にするわけにはいかない」

「使命なんて、投げ出せばいいじゃないですか。一緒に逃げればいい」
「それは駄目だ」

はつきりとした声で否定する。

「私の使命もある。火継ぎから目を背けることは、私を信じてくれた者達を全て裏切ることになる。死んだ者達もだ」

「家族、とか？」

彼はさらにもう一杯、酒をあおった。かなり口が進んでいる。この人たちも酔うことがあるのだろうか。下田は冷静に観察をした。

「ああ。私にも…妻と子供がいた。だから、先へ進まなければならぬ」

そこで初めて、ジークバルドの中で揺れるものがあるのを感じた。今までないものとして扱おうとしていた矛盾が目の前にまで迫ってきているのだろうか。

ジークバルドは、今、妻子の事を口にした。使命を果たさなければ、彼らに顔向けができないと。だが、果たしてそれは正しい認識なのだろうか。彼の子供は、一体何歳くらいで死んだのだろうか。自分達と同じくらいだろうか。

火継ぎのために何も知らない子供達を騙し、贖にすることは、使命に背くこととどれくらいの違いがあるのだろうか。それをして使命を叶え、自分の家族と正面から向き合えるとしても、本気で思っているのだろうか。

疑念はあるに違いない。だが、ジークバルドは選んだ。その矛盾を押し通し、先へ進むことを決めた。下田達を捨てる方を選んだ。

酒を酌み交わしながら、一番最初に処理する相手を決めた。

(8万5424)

位置取りが、最も重要だ。

馬鹿正直に真つすぐ向かえば、囲まれて終わる。どれだけ繰り返そうとも、自分の身体の構造を変えることはできない。同時に三人を、視界に入れることは不可能だ。

だから、絶対に囲まれないよう、下田もまた常に移動をする必要が

ある。できれば、一人だけを相手にできるような位置。だが、相手の方も狙いはわかっている。そうならないように、動いてくるだろう。つまり残る二人の動きも、何とかして妨害する必要があるわけだ。その間に、目標の一人をできる限り早く倒す。

最初の道筋としては、そういう感じだ。

下田は思わず笑った。

ふざけんな。

46. 自己分裂

(9万6732)

段々と不足している技術がわかってきた。

三つ。

三つの事ができるようになれば、とりあえず先の段階へと進めるようになることがわかった。

まず一つ目は、近接戦闘だ。イーゴンの時は、かわし続けてさえいればチャンスがやってきた。だが、今回は違う。攻撃の密度が劇的に増した以上、どうしても受けなければならぬ瞬間がやってくることは避けられない。

この時点で、ステイレットはもう使えないことがわかった。あの武器は、正面からの戦闘にはまるで向いていない。あくまで相手の背後を突いたり、とどめの一撃のために取っておくものだ。刃は強靱とは言えず、気を抜けばすぐに壊される。そして一度イーゴンに使っているために、ステイレットでの動きはおそらくもう相手には通用しないだろう。

二つ目は、魔術。

下田は、自分の術のレベルが、まるで話にならないのを実感していた。正確には、何か大事なものが欠けているといった感じだ。威力はもちろんのこと、防御の方も、どうにかしなればならない。どうにかしなれば、必ずシーリスとヨルシカの魔術で殺される。

三つ目は、魔術、奇跡、近接戦闘を同時に行うということ。

……。

馬鹿げている。

相手は皆、自分が意識を全部集中させなければ勝てない者ばかりだ。少しでも別の事に気を取られれば、やられてしまう。だが、一つの事をただ完璧にこなしているだけでは、無理なのだ。

他二人の行動を、魔術で妨害し、その間にまず、ジークバルドを殺す。だが、彼も片手間で倒せるほど楽な相手ではない。つまり、どち

らも完璧に、全ての意識を注ぐ必要がある。

それこそ、自分が二人いなければ無理だ。

問題は、他にもある。攻撃が避けられない瞬間というのも、どうしてもやってくる。三人の連携が完全にはまった時、下田は逃げ場を失う。犠牲にする部分を、考えなくてはならなかった。一番影響が少ないのは、腕の一本だろう。だが、その傷を放っておけば、すぐに限界がやってくる。

受けた傷を、即座に再生するほどの奇跡も、行う必要があった。奇跡こそ、最も集中力を使う部類のものだ。それでも無防備にならないように、同時に魔術の守り等を発動させておかなければならない。

無謀にもほどがあったが、まだできないうちから絶望していても仕方がない。

まずは一つ一つの事を、できるようにしていこう。

(9万8796)

剣の技というのは、教える人によってかなり違う。

ジークバルドも、シーリスも、フォドリックも、初め教えを請うと、皆必要のないことだと断ってきた。下田がそれを学ぼうとする意味を、理解できていないようだった。それでも、根気よく頼めば、受け入れてはくれた。

だが、三人の教えはそれぞれ異なっている。それも当然だ。扱う武器が違うのだから。フォドリックとジークバルドはどちらも大剣の類を使っていたが、それでも、最初の入りから別物だった。同じ武器でも国ごとの流派があるらしい。

形は違えど、共通していることはある。剣術というのは、その武器を効率良く振るうための技でしかない。まだまだ未熟な身で断定するのもおこがましいが、彼らがそれぞれの技に誇りを持っている理由がわからなかった。

結局は、殺すための技術だろう。

魔術。これもまた、あらゆる課題が目白押しだ。威力も速度も精度も、通用するレベルにはなっていない。カルラの教えを完璧にしようとしても、その途中でいつも妙な壁にぶつかる。まるで、自分がひどく遠回りしているような。

杖を使えば、ましにはなる。だが、それでは駄目だと感じた。あくまで力の方向性を補正してくれるだけで、自分の力を劇的に伸ばしてくれるものではない。それに武器を持っていると、杖を振るう余裕などほとんどなくなる。

ここでもまた、観察することが大事だった。自分よりも技量がはるかに優れている者達は、周りにいくらでもいる。彼らが魔術を扱うところを見ていて、一つ、明らかに自分とは違うところを発見した。むしろなぜ、今まで気がつかなかったのだろうか。

術を使う時、彼らの口もまた動いている。何かの言葉を発しているのだ。何度も、その場面を見てきたはずだった、にもかかわらず、それを不思議に思わなかったのは、はつきりとした理由がある。

それは、下田がただ思考するだけで術を使っていたからだ。イメージ。それが重要だと、何度も教わった。だから、それだけを意識していればいいと、刷り込まれていたのかもしれない。それが全てではないと、考えようともしなかった。

祭礼場の欺瞞の一つ。黙っていたのは、灰達に余計な力を与えないためではないのか。

そもそもが、おかしな話だった。この世界におそらく古くから根付いているであろう技術が、イメージなどという曖昧で、人によって大きく変わるものだけに依っているのは、有り得ないことだったのだ。そこには、絶対に、確固とした体系が組み込まれているはず。それを取り込むことができれば、道が開けるかもしれない。

しかし、カルラには頼れなかった。彼女は常に、私情を挟んでこよ

うとした。特に辟易したのが、自分の母親であるかのように振舞おうとする点だ。もつと冷静な者が必要だった。知識だけを与えてくれる相手が。

祭祀場の中で魔術を使える者は、もちろん大体知っている。シーリスとユリアは駄目だ。どんなごまかしをしても、開き直って正直に頼んでも、おそらく教えてはくれない。ヨルシカは、論外だった。彼女に何かを教わるくらいなら、何もしない方がまだ。相手も同意見だろう。

下田には、一人だけ当てがあつた。

よくわからない相手だが、話をしてみる価値はある。

(11万4845)

一番進歩を今の所見せているのが、奇跡だった。

元々の適正もあるのだろう。ただそれだけではなく、散々両腕を治している経験も助けとなっている。戻った瞬間、奇跡を傷口部分から発動させるのは、もう無意識でできるようになっていた。時間さえかければ、ほとんど腕を再生することもできる。

そう、時間さえかければ、だ。戦いでは、治療の時間を相手が作ってくれるわけがない。より速く、より正確に。完治した瞬間にはもう酷使できるようにしなければならない。

イリーナの治療を観察していても、彼女が時折何かを言葉にしているのは聞こえた。魔術と、同じだ。この、詠唱の様なものをちゃんと理解できれば、奇跡の技術も向上するだろう。

しかし、やってみてわかつたのは、奇跡の方が、個人のイメージに頼る部分が大きいだろうということだ。傷を治す時、普通は元の状態になることを意識している。だから奇跡の作用も、それに準じようとして働いている。誤差がどれだけ埋まるかは、さらに過程の想像が必要だとわかつてきた。

過程というのは、いわば構造だ。肉体がどのような要素で構成され

ているか。腕を再生していく途中で、一体何本の骨や神経をを、いくつの筋肉を戻していかなければならないのか。把握すればするほど、精度が高まっていく気がする。

最も、経験が必要なのが、奇跡だと言われている。イリーナにも、彼女が治してきた者達の数を訊くと、わからないと答えてきた。わからないほど、多くの者達を癒してきたということだ。下田もひたすら経験を積む必要があった。今までと、同じように。

(12万8368)

六日間のスケジュールは既に固まっている。

まずは一日目、自分の両腕が完治したら、すぐに祭祀場内の訓練場に向かう。そこでひたすら魔術を使う。的に当てるのでも、ただ維持するだけでもいい。とにかく少しでも気力を鍛えておきたかった。

ジークバルド達と戦う時は、万全の状態ではない。既にイーゴンでいくらか消耗した上で挑まなければならない。その中でも万全に扱えるように、訓練をした。限界が来ても発動を続け、意識が混濁し始めても、やめない。一日目はいつも、失神で終わりが来た。

二日目から儀式の前日までは、ソウル集めに参加する。ここで大事なのは、決してちとせ達と一緒に行動してはならないということだ。まるで意味がないから。一人で戦う勘が鈍ってしまう恐れがある。

生まればすぐに下田は皆と別れ、一人で不死街の掃除をやっている。彼女たちは探そうとするが、見えない体を看破できない時点で無理だ。祭祀場の戦士たちは、全員が見破ってくる。つまり、本番での利用は望めない。

亡者はちょうどいい材料だ。集団で行動していることが多いので、常に数の不利を抱えた鍛錬ができる。それに上手く倒さずに無力化すれば、奇跡の練習台にもなってくれる。亡者の手足を切断してから、奇跡で治す。それをしばらく繰り返し返してから、何食わぬ顔で、ちとせ達と合流する。色々と訊かれるが、適当に流しておけばよかつ

た。ソウルはちゃんと集めている。文句を言われる筋合いはない。

祭祀場に戻れば、今度は剣を教えてもらう。今回はフォドリックに頼んだ。と言っても、彼は実践派らしく、ひたすら戦うだけだった。それは下田にとつてもありがたかったが。

使う武器は、ショートソードに決めた。かなり軽い部類とは言え、それでも二キロ近くはある。その重さに振り回されないことが、まず先決だった。満足に振るえない段階からでも、相手と何度も戦って、打ちのめされた。

ここまでで一日の体力はほとんど使い果たされるのだが、これで行うべきことが全て終わったわけではない。

祭祀場には、本が沢山保存されている場所がある。あのロスリックの書庫ほどではないが、良い点もある。それは、根城にしている者の好みが多分に出ているということだ。下田の求めている知識と合致していれば、これ以上ない効率的な学び場になる。

「何の用だ？」

あれこれと人伝いにこの場所を見つけ、中に入る。すると、ゆつたりと椅子に座っていた神経質そうな男が本から顔を上げた。

「オーベックさんですか？」

「そうだが。お前は…見覚えがあるな。灰達の一人か。ここは私の部屋だ。話があるのなら、手短かにしてくれ」

「僕に魔術を教えてください」

「カルラに訊け」

オーベックは本に目を戻した。手だけを上げて、適当に振つてくる。

歓迎されていないのは確かだ。興味もないのだろう。それはわかっている。生徒達と最初から全く関わろうともしなかった。典型的な、自分のやりたいことにだけしか興味がない男。

「あの人は、教えてくれないんです。他の人に頼んでも、無理でしょう。僕が知りたいのは、言葉ですから。貴方達が術を使う時に言っているあれです。詠唱みたいな」

再び、相手は目線を合わせてくる。それから、鼻で笑った。

「この奴らは詰めが甘い。いや、わざとそうしている馬鹿もいるんだろう。何がしたいのやら。理解できないな。知識には、格があるというのに」

「格？」

「亡者に本を与えても意味があるまい。君ら灰にとっての詠唱とは、そういうものだ」

「怖いんじゃないんですか？ 僕達に知識を与えれば、それを使って反抗してくる可能性があるから」

オーベックは肩をすくめてみせる。

「知らないな。そういうどうでもいいことを考えているのは、上の奴らだろう」

「竜女と、人食いのことですか？」

古めかしい装飾の本が、開いたまま彼の顔の上に着いた。両手でそれをどけると、表われた顔は、非常に嫌そうになっている。下田の背後の扉をちらりと確認すると、ぼろぼろの丸椅子を指差してきた。

「座れ」

「はい？」

「もう少し寄れと言ってるんだ。お前のその、汚い言葉を誰かに聞かれると面倒になる」

「わかりました」

下田は、腰かけると、少し息を吸った。埃と、紙の匂い。血と腐った体の臭いばかりに囲まれていたので、少しだけ安らげる気がした。よく通っていた書店を思い出す。中高と、かなり小説にはまっていた。最近も、まるで読めていないが。

「つくづく情報管理の甘い奴らだ。面倒臭い」

「僕を、ヨルシカに突き出しますか？」

「そんな暇などない。お前に割く時間もな」

嫌味は無視をした。

「僕に、詠唱のやり方を教えてください。そうしてくれれば、貴方までを標的には含めません」

「脅しか。戦闘などやってられないが、この私でもわかる。お前がど

んな企みをしようと、あの化け物どもには勝てんだろう。無駄な努力こそ、最も忌むべきものだ」

「でも、やってみないとわからないので。結局問題になるのは時間なんですけど、それはもう解決してます。だから、いつか必ずヨルシカ達に報いを受けさせます」

「ほう？」

オーベックは、机の端にあった眼鏡をかけた。そして下田をじっと観察する。だが不思議そうに眉をひそめてから、外した眼鏡を放り投げた。

「良いことを言う。そう、最大の敵は時間だ。どんな難題でも、永遠に関わっていれば必ず解ける。あらゆる存在が、あらゆる存在に勝る可能性も出てくる。不滅は万物の夢だ」

「別に、そんなに良いことでもないですけどね」

「お前が、狂気に支配されているわけではないのなら」

こちらを、目を細めて見つめてくる。

「まるで自分が、不滅の存在になったかのような物言いだな」

「わかりません。まだ…永遠を経験したことがないですから」

相手は、使命よりも探求を選ぶ。自分の好奇心を最も優先する。下田が祭祀場にどう仇なそうと、あまり関係がないと思っている。素直に全てを話さないことが肝心だ。相手の欲を煽らなければならない。

「戯言だ。今はそう聞こえる」
「なるほど」

「自分が、普通ではないということ、わかっているか？ 浅く取り繕っているようだが、目だけはごまかせない。こうして会話が成立するのが不思議だ。正直、一刻も早く出て行ってもらいたいくらいだ。狂人の相手はしたくない」

言葉とは裏腹に、もはやオーベックは下田から視線をずらすことはなかった。少しの変化も見逃さないよう、注意深く観察してくる。

「色々、ありましたからね」

「祭祀場の欺瞞を知ったからか？ それはないな。それだけでは、こうはならないだろう」

「知りたいですか？」

下田もまた、相手との目を覗きこんだ。

「貴方が、僕の言葉を狂人の戯言だと斬り捨てるのも結構ですが。どうして僕が、こうなったのか。色々なこと知ることができたのか。その原因を理解すれば、貴方の見識も広がると思いますが」

オーベックは、鼻を鳴らした。

「これは、大きく出たな」

「僕に詠唱を教えてください、こちらも対価として言いましょう。差し出せるのは、それくらいです。お願い、できませんか」

白い竜の女性が、何かを言いたげに立っている。随分と、久しぶりの登場だ。

オーベックと下田を交互に見てから、首を振る。

わかっている。

どうせ話したところで、彼女がその記憶を相手から消すのだろう。例外は、今のところ貴樹だけだった。このままでは条件をそのものが成り立たないが、たいして影響はなかった。なぜなら、オーベックもどうせ殺すからだ。たとえ看破されて祭祀場に報告されたとしても、その回は捨てるだけだった。次へとつなげられる、経験を得られればそれでいい。

下田の表情をじつと見てから、笑みを浮かべた。

「興味深いが。お前の要求が徒労に終わる可能性がある。術の文言、いわば詠唱は、行使において基本となるものだ。大抵の術師が、物心ついたときには扱えている。お前たちの問題は、詠唱を使わなくてもそこそこの術が発動できるということ。今までの常識を崩し、全く違ったものを取り入れる苦勞がどれほどのものか。数日では、一番初めの言葉すら身に付けられまい」

この男は、誰かに何かを教えるのが好きそうだと思った。下田だったら絶対にこんな取引には応じないのに、既にほとんど要求を呑んでいる。

「そもそも、内容を理解し、発音できなければ意味がない。お前たち灰は、皆できないことだろう。ほら、これを開いてみる。読んでみるが

いい。初歩の魔術について書いてある」

見た目は古そうだが、状態の良い本を渡された。下田も、オーベックの意見に賛成だった。既に、表紙の文字からして訳が分からないからだ。知っている言語のどれにも当てはまらない。

パラパラと適当にめくって、真ん中あたりを開いた。そのまま広げて置く様子を、オーベックはつまらなそうに見ている。文字が理解できていないことは、当然察しているのだろう。

横から、白くて細長い腕が伸びてくる。鱗がちらほらとある指で、視線の先の文字列をゆつくりとなぞっていった。

瞬きの間に、目の前の光景が様変わりする。

「無駄な努力は終わったか」

「何ですかこれ。なんか、王家の話が延々と書いてありますけど。本当に、魔術の本なんですか」

机が揺れて、脇に置いてあった本の山が一部崩れた。オーベックは勢いよく机をまたぎ、下田の側に着地する。強く肩を叩いてきて、一緒に本を覗き込んできた。

「読めるのか？」

「いや、だから」

「理解できるのかと尋ねている。私が今苦勞して解読作業を行っている書物を、読めるのか？」

「できますけど。つまりこれって、魔術の本ではないですよね」

「些細な問題だ」

オーベックはゆつくりと奥へ回り込み、再び自分の椅子に座った。先ほどまでとは様子が一変している。かなり興奮しているようだ。上機嫌なのは確かだ。

下田もまた、彼の意地悪を忘れることにした。もし多少詠唱が理解できている状態でも、この本の解読は不可能だった。相手の話によると、これはかなり昔の文字が使われているらしい。

横目で、女性の様子を確認する。彼女は少しの間オーベックを睨みつけていた。もしかして、馬鹿にされたのが嫌だったのだろうか。彼女のおかげで読めるようになったのだから、ありがたいとは思っていない

る。

「交換条件だ」

「はい」

「できる限りの事は教えてやる。だから、お前も対価を払え。この本を正確に読み上げてくれ。これを理解できれば、時間を大幅に節約できる」

「よろしくお願いします」

自分の繰り返し返しの事を言わなくてもよさそうだとわかって、少しほっとした。

こうして、詠唱についての講義が始まったが、下田は何一つ理解できずに終わった。それは最後の日まで同じだった。

(15万7558)

武器に腕が振り回されるのは、その重心について理解が及んでいないからだ。柄の部分と、刃の部分では重さが違う。それを深く理解して、最も効率良く振るう。形が正しければ、筋肉に余計な負担がかからず、素早く攻撃ができる。

(19万4356)

「何その本。重そうだね」

ちとせが休憩中に尋ねてきた。

こうして見てみると、彼女はやや腰の重心が低めだ。ローブの裾から見える足に、しなやかな筋肉が伺える。

彼女は怪訝そうに目を細めた。

「私、どっか変?」

「別に。可愛いと思うよ。それより、ちとせって、何かスポーツとかやってた?」

「よくわかったね。中学の時バスケットやった。朱音と一緒に」

「やっぱり。バスケットでディフェンスの時腰落とすもんね」

「は？」

「ん？ だから、腰の感じとかがさ、そういう動きしてるんだよ。あと、ちゃんと高校でも走ってはいってるんですよ。そういう足してる」

ちとせは腕を組んで、岩に腰かけた。

「あたし、セクハラされてんの？」

「口説かれてるんだろ」

高坂が槍を木の幹に刺している。

「下田、お前さつきからおかしいぞ。それ、医学関係の本だよな。なんで急に学問に目覚めてるんだ？ こんな意味わからんタイミングで」

「読んでみると、面白いよ」

「ふーん」

特に、体の構造が詳しく書かれているのがいい。いつどこに深い傷を負うかわからない。腕だけではなく、致命傷になりうる頭やお腹のことを知っておくことで、奇跡の効果が高くなる。今は、内臓の種類と役目を確認しているところだ。

思えば、医学と奇跡はかなり相性がいいのかもしれない。理論的な体系をしっかりと思考に含めることで、術の安定さが格段に増す。土台とするものは違うが、目的は同じなのだ。

そして祭祀場に戻れば、下田は自分の部屋で、奇跡の修練を始める。

腕を切り落とし、再生をする。それを五回ほど繰り返す。切った腕を解剖して、構造の確認もした。もちろん楽な作業ではないが、亡者の体を練習台にするよりはるかに効果がある。あまりやり過ぎると血が足りなくなるので、一日でできる回数には限度があるが。

数十秒以内に、完全に完治させることは成功できていた。だが、その時間の短縮も緩やかになりつつある。無詠唱における限界が近づいているということだろう。結局は、そこが一番重要なのだ。

要は、発音が最も重要であり、最大の難関だった。口だけではなく喉も使って、普段出さないような音を形作る必要がある。そして、正確にできなければ、何も発動することができない。

言葉を出すということは、呼吸をするということだ。激しい戦闘中ならば、詠唱はさらに困難さを増す。

応用を考えても仕方がない。自分はまだ、最初の詠唱でさえ成功できていないのだから。

矢を意味する詠唱。

オーベックが示した手本によれば、一瞬で終わる程度の長さではない。それでも下田にとっては、困難さを極めた。今までまったく触れたこともない技術を体得するというのは、それこそ才能がなければ不可能だ。

気が遠くなるほどの年月を修練に当てれば、話は別かもしれないが。

(29万6478)

発音した瞬間、一時的にソウルの矢ができた。だが、一瞬で弾けて消えてしまう。

オーベックは、それでいいと言う、彼はかなり感心している様子だった。まさか、教えて一目でできかけるとは、思ってもいなかったらしい。才能があると、珍しく素直に褒められた。

下田は微妙な顔で練習を続けた。

(36万2989)

矢がすぐに消失する。

原因は、次の命令を与えていないからだそうだ。停滞か、射出の詠

唱をする必要があるらしい。

今までの魔術をオートだとしたら、これはマニュアルだった。全ての動きを、詠唱として組み立てて発しなければならぬ。そこへさらにイメージを強固に組み込まなければならぬので、無詠唱の頃よりも格段に多く意識を割かなければならなかった。

(43万2741)

矢。

停滞。

射出。

方向修正。

オーベックの指定した的に、ソウルの矢が突き刺さった。その防衛をかけられていたが、簡単に貫いた。明らかに、今までの術とは威力が違っている。

「お前は、前代未聞だな」

彼は、下田を珍しい動物であるかのようにじろじろと観察している。

「後天的な天才か。学院でも、お前のような奴はいなかった。基礎から応用に至る者はいくらでもいる。だが、お前の歳で土台を一から作り上げられた例は一つもない。しかも数日だ。灰というのは、やはりどこか特別性があるものなのか……」

ぶつぶつと熱心に独り言を言っているオーベックを尻目に、下田は椅子に背中を預けて天井をぼうつと見上げていた。

難しい、なんて次元ではない。ここまでできるようになるまで、途方もなく時間がかかった。しかもこれはほんの初歩だ。詠唱は、無数にあると聞いた。自分で新しい命令式を作り出している者もいるという。それらを全て把握し、最適の組み合わせを見つけると考えれば、確かに自分の人生を何百と賭けても足りないかわかった。

だが、この威力の跳ね上がりようは希望が持てる。放たれる速度も

かなり上がっていた。この詠唱を、防御の方でも活用できれば。

浮かんだのは何度か見た光景だ。クリムエルヒルトや、グウイン、そしてこの世界の一定以上のレベルの術師は皆、下田や生徒たちの術を、ただ手をかぎしただけで消していた。あれができるようになれば、おそらく最小限の動きで魔術による攻撃を凌げる。

研鑽は終わってなどいなかった。むしろこれからが、本番だと言えた。

(56万5436)

奇跡の詠唱も、オーベックから教わった。こちらはもつと繊細な発音と言葉選びが要求される。彼自身もあまり得意ではないらしい。奇跡に関しては、もつと良い手本を見つける必要がある。

イリーナしか適任がない。彼女に教わるのは複雑なものがあつた。何度も首を刺している相手に、平気で師事を請えたら異常だろう。それでも下田はしつこく頼み込んだ。祭祀場の者達からは、余すところなく技術を盗むつもりでいた。

ただ、彼女はお世辞にも自分の技能を、言葉で説明する能力があまりなかった。だから、下田は彼女が奇跡を行使しているところをひたすら見て、詠唱を聞き取るところから始めた。

(67万2386)

ジークバルドへと疾走する。

息を素早く吸って、迫ってくる大剣を斜めに受けた。まともに受け止めれば、自分の片手剣が飛ばされていくところだ。彼らとは膂力という点においても大きな差がある。まともに斬り合うのではなく、流す。剛よりも柔を。シーリスからよく教わった理念だ。

ジークバルドの二撃目をかわすと同時に、相手の側面へ回る。シー

リスとフオドリツクと自分の間に、ジークバルドを挟む形だ。

下田は詠唱を始めた。三つの矢が飛んでいく。その威力は無視できないものではあったようで、ジークバルド以外の二人はその対応に追われる。

だが、同時に、自分の剣が手から飛ばされていることにも気がついた。ジークバルドの攻撃を半端に受けたせいだ。詠唱の方に意識を向けすぎた。

その焦りのせいで、背後から来た魔術にやられた。

血を吐き出しながら、下田は考える。

詠唱と近接戦闘を同時に行うのは、不可能に近い。だが完璧にこなさなければ、最初の一人を倒せない。当面乗り越えるべき壁は、もう決まっていた。

(78万7812)

意識の分離。

いや、完全な複製か。

初めは冗談半分で考えていたことだったが、いよいよ必須なのではないかと思えてきた。同時に二つの行動をするというのは、意外とありふれたものだ。歌いながら踊ったり、夕食を作りながら、子供と会話したり。

だがそれらはどれも、片手間でできる範囲のものでしかない。難しいテストを解きながら、百人一首を暗唱しろと言われてもほとんどの者が無理だろう。集中というのは一つの物事にこそ有効で、対象が複数になれば散漫になっていくだけだ。

ジークバルドと剣で戦うのも、シールリスとフオドリツクの動きを阻害するために詠唱するのも、それだけのために意識を全て割かなければできないことだった。二つを完璧にやろうとしたら、どちらも中途半端になる。

だから、自分を増やす必要があった。思考が二人分になれば、同時

に二つの事に集中できる。

感覚は、一度つかめたことがあった。

イーゴンの最後の一幕。彼の隙を作るために、ソウルの矢をぶつけると同時に、狙った場所へとステイレットを振るった。その時は、確かに別々の事を完璧にこなせていた。あれをもっと複雑化させた今の状況でも、できるようにすればいい。

思考を、分裂させる。

(89万5371)

詠唱が途切れた。

シーリスとフォドリックがジークバルドと合流し、下田は八つ裂きになる。

今度は、魔術の方がおろそかになった。

(96万6854)

どちらも失敗。

二つの事に集中するという矛盾。

それを突き詰めていくと、段々と脳味噌がねじれていく感じがする。

(113万2364)

詠唱をし、

同時に剣を振るう。

(134万6786)

詠唱。
剣。

(156万9708)

魔術の軌道を修正しながら、
相手の剣筋を見極める。

(189万3465)

詠唱。
剣。

修正と

把握。

(209万6903)

分離。

ねじれていく。

(385万4532)

「声は、ヒントになり得ます」

「うん」

「詠唱の種類を看破されれば、相手も相応の処理を行ってくるでしょう。いかに素早く無駄なく唱えるか。相手の注意を、口元からそらすか」

「疑問なんだけど」

「何ですか？」

「どうして、矢なんだろう。皆が、魔術の攻撃に矢をモチーフとして使っている。もちろん理にかなっている形かもしれない。でも、それだけかな」

「おそらく、この世界の武器事情にも関係があるんでしょうね。亡者が弓を使っていたところを、何度も見たことがあります。この世界においては、投擲物として、矢が最も多く利用されているのでしよう。その常識ともいえる強烈なイメージが、術形成において大いに役立つ」

「ということとはさ、別に僕は矢をイメージする必要がないんじゃないかな。銃の弾丸でもいいわけだ」

「ですが、対応する詠唱はどうします？ 弾丸の詠唱など、存在しませんか」

「作ればいい。矢という詠唱には、飛翔と突起、貫通の音節がある。そこから飛翔と貫通だけを取り出して、後は鉄、円の節を何とかして見つけるか作れば、組み合わせられる」

「銃の作られた経緯を考えてみてください。あの武器は基本的に対人用です。弾をジークバルドラに撃ち込んだところで、通用しますか？」

「弾に工夫を凝らせばいい。例えば、相手の体内に侵入した瞬間爆散するように式を組み立てれば、通用するんじゃないか」

「そこまでするのなら、矢のままの方が楽そうですね」

「相手が見慣れていないというのが、重要なんだと思う。少しでも優位な状況を作りたい」

「オーベックの書斎だけでは、間に合わなくなりそうですね」

「ロスリツクにでも行こうかな。あっちの方が多分年季入ってる」

「往復の手間を考えたら、現実的ではありませんね」

「そうだね。やっぱり自分で考えるしかないか」

「外に誰かいますね」

「うん。多分ちとせ」

「あまり、心配させないほうがいいと思いますよ」

「わかっているけど。君との話し合いも大事だから」

「自問自答は、貴方の得意分野ですからね」

「君の得意分野でもある」

「褒め合っていると気持ち悪いです。虚しくなりませんか」

「君も気持ち悪いつてことだね」

「貴方、自分のことが気持ち悪いつて自覚はあつたんですね」

「そりゃあ、もう」

自分のことを、Aとする。

そして会話している丁寧な物腰の相手は、Bだ。

どちらも下田自身であることには変わらない。だが、Bは魔術的な部分を担当していた。そして自分は、奇跡と戦闘を担当するというわけだ。

Bの存在は様々な面で利点がある。まずは、同時に動かせる魔術の数がほぼ倍になったことだ。最近は十の壁を超すことに成功し、十一まで手が届いている。

そして何よりも、並行的な思考ができるようになったのが一番ありがたかった。結局は下田の側面の一つでしかないのだが、自分が集中しているときに、別の行動を担当してくれる。気がつかなかった点も、知らせてくれる。

二重人格だとか、そういう大げさなものではない。どっちが意識を担当しても、記憶はちゃんと共有されている。どちらがどんな行動をしても、下田の意思が決めたことだ。根っこが同じなのだから、お互いに意見が衝突することはない。擦り合わせを、行うだけ。

戦略を二人で話し合って、洗練させていけば、乗り越えることができるだろう。

いつか、必ず。

(456万9806)

「前はまあまあ進みましたね」

「生きてる時間が一秒伸びた」

「ジークバルドの鎧は、相当の重量があるはず。あの奇抜な姿でよくもまああんなに動けるものです」

「でも、やつと、わかってきた。あの男は、左に弱い。弱いつて程じゃないけど、重心に偏りがわずかにあるせいで、攻撃のテンポがずれることがある」

「癖というより、長年の戦いで無意識に培われた、個性というものでしょうか」

「それを、癖と言うんじゃないの？」

「たいして再現性がないので、定義に当てはまりません。相手も意識をしている時がありますし、偏りを修正してきます」

「つまり、修正の間がないほど早く攻めれば、殺せるな」

「そのためには思考が足りません。貴方が、私からもっと離れる必要があります」

「君ももっと独立を考えなよ」

「貴方もそうするべきです」

「でもさ、どっちにしろ……。いや。わかなくなってきた。だつて君は僕だし」

「貴方は私ですからね」

47・下田 対 ジークバルド、シリーズ、フオドリック

(587万9324)

ジークバルドの攻撃をかわしながら、詠唱を続ける。既に一对一の状況を数秒ほど作り出すことに成功していた。捉えようによっては、一瞬にも感じられる時間だが、戦いにおいては十分すぎるほどの猶予だ。

相手の力を刃で流す。大剣の腹を滑って、手元を斬りつけた。返す刃で、兜をかち上げる。そのまま横に薙ぎ払い、兜と首の間を一閃した。

ジークバルドは血を流しながら、一步下がる。追いつがろうとしたところで、相手は何かを詠唱したのがわかった。反応しきる前に白い光が目の前に広がり、意識が断絶した。

(587万9325)

「あれもまた、奇跡の一種のようです」

「ここに来て、新術か」

「イーゴンと、基とするものは同じでしょう。ただ…」

「射程がある。しかも、発動後の隙が無い」

「かわそうにも、無理ですね。連携を、取られてしまっている。ヨルシカとシリーズの魔術にも同時に対応しなければならぬ」

「せっかく、一撃を入れてやったのに…」

「魔術で相殺を？ あるいは、またアンドレイに頼るか」

「そんなことしたら、フオドリックにやられる。相手はこっちが十分な防御を作るまで待つてはくれないよ」

「ならば…」

「うん。やっぱりあれをやろう」

反詠唱の存在は、随分前から知っていた。

詠唱に、詠唱をぶつける。相手の術に対して逆の性質の言葉、逆の順番で唱えることで、無効化することができる。魔術をぶつけて相殺するよりもはるかに短い手順でできるので、隙をほとんど作らずに防衛できる。それに、確実だ。

だが、この技能は明らかに、熟達した術師にとっても扱いの難しい方であることはわかっていた。反詠唱を成功させるには、相手から向けられた術の構成を正確に把握しなければならぬ。瞬きの間に到達してくるものの属性を見極めて、それに対応する詠唱をするなど、人間の反応能力の限界を大幅に超えている。

クリムエルヒルトなどが容易くできていたように見えたのは、おそらく下田達側の術があまりにもお粗末だったからだろう。詠唱を身に付け始めてようやくわかった。言葉の伴わない魔術は、鎧も着ずに突っ込んでくる戦士よりも御し易い。今まで自分達が、どれだけレベルの低い中でもがいていたのかがわかった。

あらゆる術に臨機応変に対応するのは無理だろう。それこそ、神にならなければ不可能だ。だが、もし、相手の使ってくる術が事前にわかっているとしたら。経験で、理解しているとしたら、かなり難易度は低くなるのではないか。

ただ、ジークバルトのあの奇跡は、尋ねたところで構成を教えるはくれないだろう。本番の中で、彼の口の動きを観察する必要があった。わかるまで、何度も。

(6233万8976)

発音は理解した。

回復の奇跡と方向性は似ているが、微妙にニュアンスが異なっている。初めて聞く種類の詠唱だ。おそらく、これからも新しいものにくさん出会うことになるだろう。

(745万6579)

戦闘中に正しく素早く発音するのは、困難だ。

今回も、放たれた光の玉によって、頭を飛ばされた。

(893万5640)

わずかに分解が成功。

イメージとしては組み合わせさせたパズルを分解する感じだ。

そのためには、深い理解と、正確な詠唱が必要になる。

(989万2300)

約半分の衝撃を殺しきることができた。

これで、致命傷ではなくなる。受けた傷は即座に奇跡で回復して、別の攻撃に対応する方針もありだ。

しかし、そんなに簡単な話ではない。ジークバルドの他に、二方向から魔術が迫っている。シリーズとヨルシカのもの。どちらも、生半可な対応では処理しきれない。だがそこに構っていると、隙をついてくるフォドリツクの攻撃を避けられない。

対複数戦においては、戦いが長引くことこそ最も悪い状況だった。いずれ必ず、物量で追いつめられる。相手の攻撃をチャンスに変えていかなければ、到底切り抜けられないだろう。

ジークバルドの術を完全に消し、そのカウンターで殺す。他の魔術は、あえて受けよう。どちらも頭を狙ったものではない。奇跡を差し込めば、十分に戦闘を続行できるくらいには回復する。

(1067万3424)

ほとんど無効化することに成功。

だがまだ足りない。

ここでも、動き出しの遅さが露呈している。反詠唱と同時に、ジークバルドの首を掻き切るくらいの行動はしなければならない。

だが、イーゴンの時とは違い、術を防いでも相手はほとんど隙を見せないだろう。こういうカウンターは一手で決めないと無意味なので、少しでも対応されたら今度はこちらの危機につながる。

ならば、隙を作り出す必要がある。相手の意表を突く。

(1134万6759)

手応えはあった。

見えない体。

下田は初め、その術の有用性を疑っていた。この術は既に対策されていると思っていた。祭祀場の者達には通用しなかったのだ。

それは、ただ下田の術に欠けていたものがあつたからだど、ようやくわかった。足りないものは、詠唱だ。それによって術を強化することで、相手には看破されづらくなる。見えない体でジークバルドの認識を少しでもずらせれば、それは決定的な隙になる。

問題は、その時他の魔術によつて受けた傷も治療しなければならぬということだった。つまり、回復の奇跡と、見えない体をほぼ同時に行使する必要がある。二つの詠唱を、同時に口にする。

並列詠唱を、今度は身に付ける。

(1252万7892)

無謀というほどのことでもなかった。

二種類の詠唱を行うのは、既に技術的に確立されている。それぞれの発動する魔術の音節を、交互に挟んでいけば、発音に関しては合格できる。

難しいには、イメージの方だった。二つの異なる術を想像し、顕現できるように維持し続けるのは、コツがあるとオーベックが言っていた。そのための特殊な思考法があり、まずはそれを身に付けることが先決だという。

下田にとつては、必要のないことだった。なぜなら、Bがいるからだ。自分とBでそれぞれの術を思考すれば、同時に二つのイメージができる。

並列詠唱は、容易い。

「思ってたんですが」

「うん？」

「こうして考えると、術師として洗練されている者ほど、精神に異常をきたしている割合が多くなりますね。オーベックやヨルシカ、それに貴方の例を見ればわかりやすい」

「それは、どの分野でも変わんないよ。きっと、何かを極められる人つて、別の何かを犠牲にしているんだ」

「…貴方は、随分と多くを犠牲にしましたが、たいして強くなつてませんね」

「え、そういうこと言う？ 周りが異常なだけだよ。皆天才だもん。それに努力も怠らない。そういうのに勝つので、本当に難しいんだから」

「でも、そろそろですネ」

「うん、そろそろだ。やっと、一人」

ジークバルドに一撃を入れる。

そこで、彼の警戒度は跳ね上がった。だから、自分の中で最適手を選ぶ。相手に接近することなく、素早く処理できる術を唱える。

下田はそれと共鳴するように詠唱をした。聞いたジークバルドの顔が驚愕に染まっていくが、既に術は放たれている。

反詠唱を成功させ、白い光が飛び散った。ほぼ同時に、下田の背中与片腕に矢が刺さる。痛みで思考を鈍らせることはなく、並列詠唱を開始した。

下田の姿が消える。傷の再生が始まる。

奇跡の精度はかなり上がっていた。ほぼ一瞬で、傷を完治させることに成功する。怪我をした部分が良かった。背中も腕も、散々自分で自分を解剖して、理解を深めた所だからだ。

だから、段々とわかってきた。

個人によって、血の臭いが違う。下田は自分の臭いを既に理解していたからこそ、相手の血の事も理解できた。ジークバルドのものは、酒が混じっているせいか、やや甘い成分が含まれているような感じがする。

首に刃を差し入れながら、下田は顔一杯にジークバルドの血を浴びていた。相手の顔だけが、震えながらこちらを向いてくる。兜から除く目は、光を失い始めている。どこか、憐憫の情が混じっている。あるいは、家族に会える安堵も。

さようなら、と心の中だけでつぶやいた。

貴方は度を越えて優しいだけだった。そして強かった。己の中に抱える矛盾の苦しみを、決して表には出さなかった。いつも通りを貫くことで、自分達が苦しまないようにしてくれた。

でも、地獄に落ちればいい。この世界にそういう概念があるのかわからない。でも、あつちで家族とは会えないでほしい。死んでもからも永遠に、自分のした行いを後悔し続けてくれれば、少しは気分がすつきりする。ずっと一人で。

彼が倒れると、下田は予備の剣をインベントリから取り出した。そ

して、呆氣に取られているシーリスへと向かう。

「シモダさん、気を…」

祭礼場の中で、最年少なだけはあ。一度こちらを殺そうと心を切り替えたのに、もう揺らいでいる。ジークバルドが死んだことで、本来の彼女に引き戻されたということか。

下田の方も、嫌だなとは思っていた。イリーナは生かしているから、女性を殺すのがこれが初めてになる。それも自分とほぼ同年代の相手だ。さっさと急所を破壊して、痛みも感じさせずに葬ろうと決心した。嘘の、決心だが。

彼女の魔術を消し、向かってくる刺突剣をかわした。

フォドリックが全力で接近してくる。

遅いと思った。あの老兵でも、味方が倒れることに対して動じずにはいられないのだろうか。

ならば、自分の孫がそうならどうだろう。

おそらく、フォドリックがこの三人の中で、一番の難関だ。未だに、攻略の糸口を見つけられていない。次元の違う相手というのは、彼を言うのだろう。だから、こちらの土俵まで引きずり落とすくらいしか、今は思いつかない。

魔術でシーリスの武器を弾き飛ばした。同時に詠唱をして、拘束する。ちょうどいい区切りだった。下田としても、戦いのリズムをいったん落ち着かせるべきだと思っていた。

「動かないでください」

フォドリックは立ち止まった。その目は、下田に鋭く向けられている。

「報いを」

シーリスが体をひねり、拘束の上からでも反撃をしようとしてくる。下田にはそれが異常にゆっくりとしたものに思っていた。いい休憩になったと心の中で彼女に感謝する。そして適当に謝っておいた。

彼女の首、顔、胸へ弾丸が呑み込まれる。下田が言葉を付け加えると、体内の弾が破裂した。衝撃が中で暴れまわり、シーリスは血を吐

き出す。それでも、もがこうとしていた。下田は、彼女に対して剣を向ける。

うなじを刺すと、彼女の拘束を解いた。蹴つて、乱暴に地面へ倒す。死体を冒瀆的に扱うことは、関係者にとつては効果が大きくなる。多少は、動揺を誘えるだろう。憤怒して向かってきてくれれば、一番ありがたい。

フォドリックに視線を戻した瞬間、下田は顔を潰されていた。瞬く間に両手足を切断され、最後に心臓を刺されて死んだ。

(1454万7860)

「これは、少し…」

「苦戦するのはいつもの事だけど、酷いな」

「糸口が見えませんか。こちらの攻撃が通用しないというわけではないようですが」

「強いね。単純に、強い」

フォドリックと、一体一になるまで状況は進んだ。

しかし、ここからが本番だった。相手は、シリーズを殺しても動じない。動じないように振る舞えている。模擬戦を繰り返していた時から、わかってはいた。フォドリックは達人中の達人だ。

まず、その動きを読むのに苦労する。相手の中でパターンはできているのだろうが、おそらくその組み合わせが膨大だ。剣の流れが不規則的で、狙いが読みづらい。下田の片手剣よりも、フォドリックの大剣の方が振るう速度が速い。圧倒的な腕力の差も出ていた。今の時点では、四秒生き残れば上々といったところだ。

「Bが魔術で妨害をすれば、多少は道が開けるかも」

「そうしたら一秒で首を飛ばされますよ。二人の意識を近接戦闘に割いてこれですから。相手も詠唱の隙を与えまいと畳みかけてくるでしょう」

「うーん…」

「そもそも、無傷で勝とうとするのが、いけないかもしれません。これほどのレベルの相手ならば、犠牲を伴う策も選択肢に入れないと」

「肉を裂かせて、骨を断つ」

「あるいは、全く新しい可能性を取り入れるか」

「圧縮詠唱とか？ でもあれは、ある程度質を下げる。通用しなくなるだろうな」

「いえ、そういう方向ではなく。自分自身に何か術を使ってみては」

「呪いのこと？ どうだろう…。 見えない体も無理だろうし。 やっぱ、接近戦は避けた方がいいかも。 正直、剣術はもう限界が来てる気がする。 どれだけやっても、才能がある化物には勝てない」

「距離をとる方針には賛成ですね。 ですが、逃げの一手だけはしては いけません。 短期戦を望んでいるのは、こちらの方なのですから」
「そうだね。 新しい、何かか。 難しい」

(1537万4569)

物量で押す作戦は駄目だ。

下田が今同時に動かせる魔術の数は十五。 それぞれを別の軌道で動かして、相手に避ける隙間をなくせば、通用すると思っていた自分が浅はかだった。

限界の数を動かすということは、かなりの意識を割かれるということだ。 そういう隙をフォドリックは絶対に逃さない。 彼は恐ろしいほどの速さで大剣を正確に振り回し、包囲網に穴をあけ、下田自身へ肉薄してくる。 その速攻に五千回ほど殺されてから、この方針を捨てることに決めた。 十五から一個でも数を減らして余裕を保とうとしても、相手に何のダメージを与えていないことには変わりない。

重要なのは、この戦いが最後ではないということだった。 気力には、必ず限界が来る。 控えている別の相手のためにも、無駄な術を使うわけにはいかなかった。 この作戦では賭けたコストに対するリターンがあまりにも釣り合わなすぎる。

今度は質を重視することにした。

ロスリックにおける、クリムエルヒルトの戦いを思い出す。彼女はソウルの矢をそれぞれの部隊に編成し、その枠組みで論理的な動きをさせていた。相手の逃げ場をなくすような。下田もその真似をして、一発一発の威力をもっと高め、数を減らし、相手の死角を集中的に狙った。

だが、フォドリツクの身体能力は、それまでの想定をはるかに凌駕していた。どんなところを狙っても、的確にかわすか、斬り落としてくる。自分の把握しづらい部分を理解し、しっかりと防御をする。当たり前前のことを完璧にこなされるのが、一番やりづらい。

ここで、認識を変えることにした。

フォドリツクは、人ではない。見た目通りの相手ではない。四肢を持ち、直立して二足歩行をしているとしても、その通りに捉えてはいけない。今まで怪物だの化物だのと形容してきたが、本格的に思うようにした。今までの常識にとらわれていては絶対に勝てない相手だ。そういう敵を、どう殺すか。

こちらにも、常識から逸脱しなければならない。今までは教えられたことを何度も繰り返して、完璧にしてから相手にぶつけていた。つまり、誰かの想像でできる範囲に収まってしまっているということだ。この経験においても才能においても勝っている相手に対しては、それだけでは到底通用しない。新しい戦術を、作り出す。

(1698万4562)

自惚れが過ぎた。

この世界においては、魔術の歴史は相当に長い。その積み重ねられた研鑽の中で、誰もが思いつかなかったものを作り出すなど、思い上がりも甚だしい。そういうことが許されるのは、希代の術師だけだ。自分がそれにふさわしいわけがない。才能ある者が、魔術の全てを愛し、全てを捧げなければ到達できはしない。

下田は、魔術が好きではなかった。大嫌いだった。使う度に、反吐が出そうになる。その非現実的な要素が、帰りたい故郷をじわじわと食いつぶしていくようで、気持ちが悪かった。

だから、作り出すことはできない。全くのゼロから何かを生み出すことは無理だ。既存のものから、組み合わせる方がいい。新しい組み合わせはできずとも、相手の選択肢から外れたものにすることは可能だ。

フォドリックは、化け物だ。多分、今まで戦った相手の中で最強だろう。でも、万能ではない。無敵でもない。なぜなら、一度負けた所を見たことがあるからだ。貴樹に負けた所を。そう考えると、多少は気が楽になった。

(1890万5643)

「二つ？ いや、少ないかな」

「最低でも三つ、四つは欲しいですね」

「しかも連続でしょ。運も絡んできそうだな」

「その誤差をどれだけ埋められるかは、内容に関わってきますね」

強さが、どこに現れるか。一番重要なのは、不意の事態に対応できる力だと考えられる。たとえフォドリックの予想外の行動をしたとしても、すぐに対応される。経験と、ずば抜けた能力のせいで、隙が潰される。

だが、彼が思考をする生き物である以上、間はある。意表を突かれた時、どう対応するか。それが無意識の内だとしても、必ず予測していた動きに対処するよりも遅れが出る。

一度では駄目でも、二度は？ 三度、四度目になっても、まだ余裕を保てるだろうか。その時には、下田にもわかるほどの隙が生まれているのではないだろうか。

ここで役立つのが、情報の優位性だ。こちらは、もうフォドリックの事を嫌になるほど知っている。反対に、あつちは下田の事をたいし

て知らない。もちろん、油断できない相手だとは思っているだろう。既に三人を殺しているのだから。

だが、今までほとんど関わりがなかったがゆえに、フォドリックは直前の戦いで下田を判断するしかない。イーゴン、ジークバルド、シーリスを倒した時のやり方から、次の手を予測している。

つまり、それらとは違うやり方を何重にも畳みかけてやればいい。そうすれば、フォドリックと言えど、苦戦を強いられる。殺す道が見えてくる。

四回だ。四回連続で相手の想像外を突ければ、勝てる。後は、その内容を考えていくだけだった。

(2243万7684)

術と術の融合。

矢と矢を合わせれば、さらに威力は強くなる。単純な掛け算よりも上がり幅は大きくなるだろう。

フォドリック自体は、強靱だ。少しくらいの負傷はものともしなく、膂力もあり、全方位の攻撃をかわせるだけの軽やかさがある。

しかし、彼の持つ武器はどうだろう。あの大剣には特殊な力が宿っている気配はない。質はもちろん良いのだろうが、所詮物だ。いつかは必ず、壊れる。

狙うのは彼自身ではなく、武器にする。大剣で斬り落とさざる負えない場面をいくつも作り出せば、確実に耐久を削っていきける。

彼には、インベントリの能力はない。武器が壊れたとしても、すぐに代わりを出すことはできない。付け込む隙がある。

ただ、融合させた術で破壊を狙うのは、間違った選択のようにも感じた。イメージと言葉によって形成される魔術は、かなり繊細だ。合わせる、普通は拒絶しあってお互いにはじけ飛んでしまう。故に非常に細かい操作が必要になるので、戦闘中に使うことは不可能に近かった。

ただ、武器を壊すこと自体はいい案だと思う。これも一つの方針として考えていこう。

(24467万8792)

思わぬ副産物だ。失敗が財産になることもある。

術の融合は、戦闘の速度を考えると採用は難しい。でも、役に立たないわけではなかった。

ソウルの塊同士を適当に合わせようとすると、お互いに反発する。お互いがお互いへ作用を及ぼした結果、衝撃を発生させて、それぞれ正反対の方向へと弾け飛んでいく。その素直な動きに、下田はピンときた。

自分の足に魔術を纏わせる。ソウルの塊を発生させる座標をそこに合わせれば簡単だ。そして地面にも塊を設置する。

下田は飛び上がり、全体重をかけて、塊を踏んだ。途端、無理矢理接触したことにより、塊同士が拒絶反応を起こす。反発力が働き、爆発の音と共に、下田は顔を天井に打ち付けた。それから地面に落ち、しばらく痛みで転がる。

我に返ってから、手ごたえを改めて実感した。予想以上に強い力だ。自分がただ飛び上がっただけでは、天井に顔をぶつけることなど到底不可能だった。

これだけ見るとただ高く飛べるようになっただけかもしれない。しかし、二つの塊の位置を変えるとどうだろうか。空中と自分の腰あたりに設置すれば、横への迅速な緊急回避が可能になる。

さらには、上手く力が働く方向性を見極めれば、宙に浮いた状態でも移動ができることになる。下田は、今までの反省をした。敵と自分の距離や位置を考えた動きしかできていなかった。祭祀場の広場という空間を、もっと柔軟に利用した方がいい。

フォドリックは空を飛べない。下田がそうできることも夢にも思っていないだろう。そこを突ければ、大きなアドバンテージを得

られる。

欠点は融合させた時の衝撃で体が抉れることだが、それをなくすために奇跡がある。多少の怪我をしてでも、新しい立体的な動きを取り入れるべきだろう。

(2857万1348)

自分の身体の脆さが煩わしかった。

魔術の衝撃で飛び回るなど、下田にとつても未知の領域だ。当然失敗が積み重なっていく。衝撃で足や腹が抉れ、壁に激突して色々な骨が碎ける。

だが、奇跡の練習にもなるので、続けた。何度も、ぼろぼろになった。

(3498万1241)

飛ぶ方向も、考えなくてはならない。

この移動方の良い所は、予備動作がいらぬことだ。足や体の向きを動かせば、相手にも気取られる。その手順を省略できるので、相手の予測を超えることができる。爆発で吹っ飛んでいるようなものなので、その速度も移動できる距離も段違いだ。

あとは、精密性を引き上げるだけだった。自分の狙った場所へ、相手の攻撃が当たらないように飛ばす。それが一番難しかった。

「できたな」

「ええ。四つのずらしを入れられます。これが完璧に通れば、確実にフオドリックを仕留められるでしょう」

「でも…」

「そうですね。これは難しい。非常に難しいことです。もつと温存できる方法もあるかもしれませんが」

「それは、失礼だ。相手にとっても。これを信じて進むしかない。僕達の全てを出し切らなければ、乗り越えられない」
「ならば、頑張りましょう。できるまで」
「うん。今までと同じだ。何度でも、やってやる」

(4576万2314)

失敗。

体がまるでついていけない。戦闘の速度が一段階上がったからだろう。

(5903万987)

失敗。

(7543万7469)

失敗。

(9876万1209)

フォドリック。

(1億2308万3412)

フオドリツク、
貴方は。
貴方が。

(1億7893万4538)

貴方が羨ましい。
気が狂うほどに。

貴方みたいになりたかった。貴方みたいに軽々と剣を振る位
かった。貴方みたいに大切な家族が傍にいたら、もつと強くあれただ
ろうか。

でも、振り返るつもりはない。どんな思いでいようと、貴方は自分
の敵だから。事情がどうであろうと、排除するしかない。
さようなら。

(2億3412万9051)

まともに斬り合えば、六秒で殺される。

逆に言えば、それだけ生き残れるということだ。

そのうちの三秒だけを使って、下田は相手の攻撃を剣で流し続けた。一発一発が、腕の骨の奥底まで響く。かみ合わせた歯の根が震えてくる。

詠唱はしなかった。無言の魔術を、フォドリックの側面へぶつける。彼は防ぐまでもないと判断したようだ。事実、詠唱のない魔術は彼の鎧の防護で簡単に消し去られた。

その間に、下田は距離をとる。倒れているシーリスの死体から、首を切り取った。そして、それをインベントリにしまう。

フォドリックが肉薄する。孫の体の一部を取られたことへの思いは、表面上出てこない。だが、その接近する速度は格段に増していた。それが下田に対する憤怒を示していた。

下田もそれに対して、八個のソウルの弾丸を浮かべて待ち構える。二発をまず発射し、それらが難なく斬り落とされたのを見て、剣を再びインベントリから取り出した。そして本気でフォドリックへと斬りかかる。

ここでわざと手を抜いてはいけなかった。相手もそれを看破してくる。何か別の企みがあるのではないかと疑いが生まれる。どちらにせよ本気になっても、絶対に負けることはわかり切っていたが。

フォドリックの大剣が簡単に下田の右腕を切り裂いた。握られている片手剣が明後日の方向へと飛んで行く。

とどめの一撃が首へと飛んで来ようとしていた。もう数えきれないほど殺されたパターン。地力に差があり過ぎる故の、当然の帰着。

下田の足に纏わりついているソウルの塊が、爆発した。

それによって一瞬で、玉座と同じ高さまで飛び上がった。離脱が成功したとしても、安堵してはいけない。すぐに左右へと詠唱をばらまき、フォドリックの周囲に魔術を四つ展開した。

下田は落ちていきながら、まずは腰のソウルの塊で、魔術とぶつ

かった。そして左の方向へと吹っ飛んでいく。今度は肩の塊で、フォドリックの背後へと飛んでいく。ピンボールのように跳ね回る常識を超えた動きを、相手は確かに目で追ってきていた。

降り立ったところで、すでに腕は再生されている。予備の剣を取り出し、フォドリックのうなじを狙う。だが、そう甘くはいかない。相手はすぐに向きを変えし、対応をしてくる。同時に、大剣を振り下ろしながら。

下田の首が、飛ばされる。

それを確認した直後、フォドリックは硬直した。

首から上の様相が変わっていく。童顔の青年から、同じ年代くらいの女性へと。薄い唇に、苦痛に歪んだ涼やかな目元。自分の孫の顔を、フォドリックが間違えるはずはなかった。

擬態。下田はシーリスの首級に細工を施した。自分の首が飛んだと錯覚させるために。

二つ目の、ずらし。

見えない体を解いて、下田は、フォドリックの側面に回り込んだ。今度は胸を狙う。

しかし、相手も相手だ。動揺は一瞬の事で、すぐに下田よりも早く剣を振るってきた。このままでは、最初に殺されるのは下田の方だ。

そして、短い詠唱を、口ずさんだ。圧縮して。

塊。

停滞。

爆散。

フォドリックの大剣が下田との間に出現したソウルの塊とぶつかり、はじける。大剣の方にも、塊がまとわりついていた。それと反応したのだ。剣の筋が、大きくそれる。

事前に、仕掛けておいた術だった。そもそも全部を正直に相手へぶつける必要はないのだ。ソウルの塊と、見えない体の応用。透明にできるのは、何も武器や自分の身体だけではない。術の隠しにも利用できる。それはクリムエルヒルトがやっていたことでもあった。

三つ目。

ここで手を出してはいけなかった。一撃は入れられるだろう。だが、それだけだ。相手も受ける覚悟をしている。ダメージの少ない部分で受けようとしてくる。

それでは、駄目だった。そこで終わっては、もう下田の攻撃の芽はなくなる。

だから彼は、自らの剣で、自分の左腕を斬り落とした。

その行動はフォドリックにとっても予想外だったようで、わずかに目が見開かれる。

下田の感覚はさえていた。周りの状況を確認し、既に条件がそろったことを確信した。ソウルの塊の位置は、完璧だ。

彼は自分の腕を投げる。それは塊に当たり、暴発する。そして飛んで行った方向にも、塊がある。

自分の左腕にも、いくつか魔術を仕込んでいた。もろもろを合わせれば、同時に展開できる術のぎりぎりだ。その中においても、まともにフォドリックと斬り合えるようになるまでが長かった。一番、苦勞したところだった。

腕は綿密な計算のもと跳ね回り、最後はフォドリックのうなじへと到達した。その瞬間、下田は爆散の詠唱を唱える。それで腕が魔術の爆弾と化す。

さあ、どう対応する。その魔術に対応した瞬間、こちらが動く。同時に二つを処理するのは、不可能だろう。どのような、選択をする。

フォドリックは、未だ冷静だった。後ろに迫るものをちゃんと理解していた。だから、何もしなかった。ただ大剣を突き出して、下田の胸を貫いた。

彼の首で魔術が炸裂する。だが、血は出なかった。なぜなら、ほとんど無傷だったからだ。

「牙を、隠していたな。灰よ」

フォドリックのうなじには、魔術の盾が展開されていた。それが、腕の爆発を全て防いでいた。

「恨みは、理解できる。だが、死ぬがいい。倒れていった者達の怨念と共に」

彼は近接戦闘における達人中の達人だ。だからと言って、術が使えないと判断するには、あまりに浅はか過ぎた。

下田は、思わず笑みを浮かべた。胸に刺さっている大剣に手を添えて、さらに前へと少し進んだ。傷口が広がり、血があふれ出していく。「わかってますよ…。貴方にはなくて、僕にあるものくらいは」「何?」

二人の身体を、ソウルの太い矢が同時に貫いた。

腹だけではなく、肩や首、手足にも。突き刺さった。最初に展開していた八つの魔術の内、六つを変化も織り交ぜて使った。途中から、不可視化も施して。

フォドリックは、口の端から血の泡を漏らした。

下田はさらに自分と相手の頭を両方矢で貫かせた。

二人分の脳漿が飛び散る。意識が混濁する。視界が不明瞭になる。

だが、次の瞬間倒れたのは、フォドリックだけだった。下田の頭は既に完治していた。そこだけではなく、他の全ての傷もふさがっていた。

奇跡こそ、自分の一番強みだと思っている。こうした、犠牲を前提としたとどめも刺すことができるからだ。

フォドリックは使えない。使えないから、負けた。

四つ目のずらしが決まり、既にフォドリックは息絶えている。

自分の計画した通りだった。

下田は全身が沸騰していくのを感じた。言葉にもならない叫びが、口から堰を切ってあふれ出した。

イーゴンを倒した時には抑えられた衝動が、簡単に表に出た。

勝利の雄叫びを上げた。

乗り越えた。乗り越えてやった。

ついに。ついに。

体は欲張りなもので、既に先へと進み始めている。ヨルシカの姿が、今までよりもずっと近くに思えるような気がした。彼女という蜜に誘われる虫のように、彼は接近を始めた。得体のしれない高揚感

が、どこまでも体を軽くしていた。

自らをぐるりと囲むように、ソウルの矢が出現する。

懲りないなと思った。

数は五本。威力も狙っている位置も申し分がない。だが、その構成は単純に過ぎる。目をつぶっていても、全てを消し去れるだろう。反詠唱の圧縮も、並列化もすでに身に付けていた。欠伸をしながら対処をする。

そして、下田は八つ裂きになって殺された。

48. 理不尽ゲーム

(2億5473万1294)

はあ？

(2億8087万5547)

どういう糞だこれ。

無理だろ。

無理無理。

(3億1389万9826)

萎えるんだけど。

こういうことされると。

(5億4066万4231)

「お——い」

下田は篝火の前に戻ってきた瞬間、上を見た。そして手をメガホンのように形作って、呼びかけを続けていた。

ぴよんぴよん跳び上がりながら、天へ猛烈にアピールをする。

「助けてくれませんかあああ？ お——い、誰かああああ。僕に知恵をくださいああああい。無理でえええす。今度ばかりはちよつと、厳しいかなって思うんですよ。あんなの、無理に決まってるじゃないですか。キリストさんはこの世界の神じゃないんだから。ここの使命人に遠慮する必要なんて、どこをどう見ても、有り得ないじゃないですか。どうして中三の時、トイレの中につまらない授業を分別してたんですか？。だいたい、三丁目の山田さんのせいでもあるわけです

し。人食いの中の口で、ホームパーティーをしながら血を掛け合う役所仕事をどう解釈すればいいのでしょうか。B、黙ってた方がいいよ。いえ、A、よく聞きなさい。周りを見なさい。どうして？ 仏教にでも鞍替えしろとでも？ 昔よく読んだ漫画があつたつけなあ。いいですか、醜い逃避はやめなさい。貴方の悪い所です。すぐにそうやって逃げようとする。逃げてなんかかないよ。こうやって経済の事を考えると気持ちがいいんだ。たくさん叫べば、母さんもきつと風呂を早く沸かして、テレビを点けてくれるんだ。A、正気を保ちなさい。ここまで来たのでしよう。今までも、無謀ではあつたはず。今度も必ず、希望が見えてくるはずです。今までの自分を信じてください。自分の目的を、見つめ直したらどうですか。そうしたらきつと、二丁目によくある、珈琲沸かし器の隣で素敵なワルツを聞きながら、ステップの第十五段階の可能性を宇宙の流れのままに、分別できるでしよう。あはは、ちよつとき、Bもヤバくなってんじやん。当たり前じゃないですか。貴方の貴方ですから。影響を受けるのは当然でしょう。二人でワルツを踊ればいいの？ それで、海底の神秘を横目にマンゴーをかぶりつくわけだ。A、周りをよく見てみなさい。うん？ 注目をたくさん浴びています。ほら、その中に、貴方の最高のデザートが鎮座されているのでは？ あ、ほんとだ。えつと、誰だつけ。ええと、確か、動物の名前が混じっていたの様な。時間に関係する言葉もあつたはずですよ。何だつけ、修学旅行？ はあ？ どうしてそんな言葉がいきなり出て来たんですか。いよいよ頭がおかしくなつたみたいですね。付き合いきれません。えええ、今更でしょ。行かないですよ。Bがいたからこそ、家族の親和性を調律段階まで保てたんだから。まあ、そこまで言うなら、最後まで付き合いますが。ありがとう。やっぱりちとせは最高。私以外の女の名前を出すなんて、本当にデリカシーのない男子ですね。あれ、君って、ちとせの妹だつたつけ。エレベーターのコールガールみたいなものですね。はは、全然噛み合っていない。奈良に行ったんでしたつけ。はあ？ ですから、修学旅行。中学は近畿地方をめぐるましたよね。そうだねえ、公園にいた鹿が可愛かつたなあ。夜も男子の部屋に全員集まつて、テレビ見た気がする。

あ！ 私も気がつきました。そうだったそうだった。ヨルシカだ！」
大扉から出てきた彼女は、呆気にとられている。
そこへ向かって、下田は駆け出した。
そして殺そうとして、グウィンに殺された。

(8億4526万899)

「痛み分け、ですね」

「うーん…」

「一生分の恥です」

「五百万生はあると思うけど」

「まだ、ぼけているんですか？　ちとせに公開告白でもしますか？」

「意味ないよ。どうせ皆死ぬのに」

「前向きに行きましよう。課題を再確認するのが一番です」

「再確認ねえ」

とりあえず、次の相手はわかっていた。

四体。

ユリア、リリアーネ、フリーデと、グンダ。

別に数が増えたことに対しては、どうとも思っていない。それに関しては適応するだけだ。諦める要素はない。

この中で、最も先に殺すべき相手もわかっていた。

それは、リリアーネだ。彼女は、フォドリックを殺した直後からある術をかけてくる。今のところ回避にも反詠唱にも成功できていない術だ。

何度か食らったことはある。あの喉の詰まるような感触。名称はわからないが、実際に受けてみて効果はわかっている。

術の封印。

食らった瞬間から、下田は魔術も奇跡も使えなくなった。どんなに強くイメージしても、発動できなくなった。そればかりではなく、声も出すことができなくなった。これが、何を意味するか。詠唱も反詠唱も、並列詠唱も圧縮詠唱も、術の不可視化も何もかもが不可能になったということだ。

つまり、下田の攻撃手段は近接だけになる。

それだけ？　と思うかもしれない。まだ戦えるだけましなのではないかと。

しかし、相手を考えてみてほしい。

グンダは言うまでもない。その体格から考えても、近接戦闘において最強格であることは間違いない。だが、図体のでかさが逆に弱点となることもある。いくらでも、戦いようはあると思っていた。

問題なのは、残りの三人の女性だ。

正直、侮りもあつた。老練の技を持つフォドリックに比べたら、歳も性別に関しても、戦闘では劣っているのではないかと。三人は姉妹だと聞いていたので、その情を利用して崩す手はいくらでも考えられた。容易いと、錯覚していた。

「気色悪いね、君」

下田の胸に短剣を刺しながら、リリアーネは面白そうに笑っていた。既に彼は四肢を斬り取られ、地面に転がされている。

もう決着は付いたも同然なのに、彼女は適当に下田の内臓をかき乱して遊んでいた。

「取るに足らないと思っていた。私の判断は間違っていないかった。でも、君は変わった。変化というより、進化かな。凄まじい成長だね。その、エルドリッチの膿のせいかな。違うな。君の動きは、積み重ねを感じさせるものだ。イーゴンもジークバルドもシーリスもフォドリックも、経験の差で負けたみたい。本当に、気味が悪いよ。解剖してソウルの一つまみまで観察したら、理解できるかな。ね、ヨルシカに直談判してあげようか？　私、君ともつと一緒にいたいな。もつと面白いものを見せて」

実際に戦ったのは彼女ではなかった。

それを守る、ユリアだ。

今のところ、まるで歯が立っていない。それは術が使えないだとか、今までの戦闘で消耗しているだとか、そういう諸々の要素がなかったとしても、同じ結果になるとわかるほどの実力差だった。

ここまで来ると、下田にでも相手の能力を何となく見極めることは

できる。他の二人、リリアーネとフリーデも同じくらいは強い。立ち振る舞いでわかる。

三人とも、フォドリック並か、それ以上の強者だ。そこに加えてグンダも入り込んでくる。

彼らを同時に相手にするために重要な妨害用の魔術も使えず。

絶対に避けきれない攻撃のための回復の奇跡も使えず。

向けられる術用の詠唱も使えず。

一体、どう、戦えというのだろうか。

「早く、殺しなさい。儀式の再開を」

ヨルシカが玉座の傍から離れ、歩いてくる。大した距離ではなかった。下田からでも少し走れば到達できる程度の長さだった。

リリアーネが息を吐いて、顔だけを相手へ向ける。

「わかってますよ。でも、気になりませんか？ もったいないです。彼だけは、贄から外してはどうですか。調べたいことが沢山あるんです」

「殺しなさい。三度は、言いません」

四体を抜ければ、ヨルシカまで辿り着ける。最後の関門だった。もう少して殺せるのに、最後の障害がどこまでも固く高く立ち塞がっていた。

リリアーネが、溜息をつく。下田に向かって、すまなそうに微笑んだ。

「ごめんね。無理みたい。せめて、苦しむように殺してあげるね」

下田は血を吐き出しながら、ただ一点を見つめていた。その憎悪の視線を一心に受けたヨルシカは、鼻で笑う。

怒りや憎しみは、とても消耗する感情だ。長くは続かない。いずれ激することに疲れて、ただそうしなければという義務感だけが残る。

だが、下田の場合は違った。今まで受けてきた、これからも受けるであろう全ての苦痛を。贄として燃やされる苦痛や魔術や剣で体を削られる感触、そして乗り越えられない悔しさを全て、祭祀場の者達、ヨルシカへと注ぎ込んでいた。

「ころじで、やる」

リリアーネはくすくすと笑った。

「沈黙が解けたね。最後の言葉を聞こうか」
どれだけ。

たとえどれだけ、先が長かろうと。

必ず、辿り着いてやる。

お前を。

お前を、殺してやる。

「よる、しかああああああああ」

白い手が伸びる。

顔をつかまれて、いとも簡単に引き上げられた。

「羨ましい。そんなに思われて。ヨルシカ様、良かったですね」

目の前にある竜人の顔は冷たいままだった。

「気持ちの悪い。さっさと死んでください」

ヨルシカの手に入力が入る。

下田の顔がきしんでいく。彼は叫んだ。苦痛と憎悪の入り混じった呪詛を、相手へと浴びせた。頬骨が砕け、眼球が飛び出し、脳が潰れていっても、まだ声を出し続けた。自分の頭が変形していく。陥没し、脳漿が漏れ出してくる。

彼女に顔を握りつぶされて、下田は新たな区切りをした。

逃避はもうやめよう。目的が果たされるまで、戦い続けると。

青ざめた顔で、そこから目を逸らす白い鱗の女性がいた。

(9億3451万9807)

まず、遅い。

武器を振るう速度が。かわすタイミングが。致命的な攻撃に気が

つくまでの時間が。相手の位置を把握することが。こうすると決めてから実際に行動に移すまでの時間が。思考の速度が。相手の動きを目で追う速さが。何もかもが。

人間、人間でしかない。感覚を肌で感じ、その信号を神経系を通じて脳に届かせる。そこから脳が選択し、命令を出して身体へと送る。行動が決定されるまでの手順が、人間の範囲内に留まってしまっていた。選択肢自体も有効なものが何一つとしてない。凡庸に過ぎる。

「獣のようにか？ 四本足で飛び回れとでも？」

動物の動きを参考にする手もある。だがそれらと自分では体の構造や筋肉のつき方が違っている。上手く、人用に落とし込む必要があった。

「女はどうだ？」

一理ある。男と女に限って見ても、構造は異なっている。

ユリアの動きは、フオドリックと同じくらい洗練されているが、女性特有の滑らかさがあるような気がする。もちろんその細腕では考えられないほどの腕力でいつも叩き潰されるのだが、理解を深めることは重要だった。

「ちげえよ。馬鹿。感情的な問題だよ。変化を求めるなら、まずは人間関係に手をつ突っ込んだらどうだ？ 女だよ。今度の敵は女が多いだろ。つまり、その体をもっとよく知ることにも有意義ってわけだ」

「どういう意味ですか？」

「おいA。お前もわかってるんだ。はっきりした方がいい。好きな女とやれば、なんか、こう、変わるんじゃないか？ 道が開けるかもしれないねえ」

「え、でも、誰がそんなことしてくれるの？」

「いいですか、真面目に考えましょう。C、議論を混乱させるのはやめてください」

「さつきからうるせえな。戦闘で相手の肉を裂くことと、肉に挿れることに何の違いがあるんだ。経験は大事だろ。B、いい子ぶるんじゃないよ。もう何人が殺してるんだろ？ 殺しとまぐわいに何の違いがあるっていうんだ？」

「恥ずかしいよ。そんな話題はやめよう」

「いやいやいや、ごまかすな。お前は俺だ。何も興味がなければ、俺がこういう発言するはずもねえ。わかってるんだぞ。わかるぜ、生き死には本能を刺激するからな。子孫を残そうとする欲が増すんだ。何度、ちとせに抱き着いた？　そしてその内どれくらいの割合で、押し倒そうとした？」

「わああああああ、やめて。そんなこと言わないで」

「八割は、やろうとしてましたよ。しかも周りの目がある中で」

「ちよつとお、Bまでいじめてこないでよ」

「だろ？　もういいじゃねえか。告白しようぜ。失敗してもいい。どうせ忘れてくれるしな。いや、待てよ無理やりでもいいか。どうせ皆死ぬしな」

「それだけは、駄目だ。そんなことは、許せない。守るべきラインだ」
「構わねえよ。でも忘れないほうがいいぜ。俺がこれを言ったつてことは、お前の欲の片隅にそういうことがあるつてことだ。いつか、決壊しないといいな」

「別の、発散方法を見つけなければいいでしょう。そういう性欲を全て戦いに向けては？　私も、感じていましたよ。障害を越える度、極上の悦楽が全身を駆け巡ったでしょう。難題に何度も挑んで、乗り越えた時の快感はたまりません。転がる死体という、目に見える勲章もありますし」

「おお、いいじゃねえか。そういう考え方もありだな。頑張ろうぜ。ユリア、リリアーネ、フリーデ、グンダの死骸に向けて唾を吐く所を想像してみろよ。楽しみになってこないか？」

「唾に失礼だよ。そんな時間もないだろうし。そうだね、全部終わったら、亡者にも食らせよう、あいつらの餌にするのが一番ふさわしいと思う」

『全員、直接食べるのはどうだい？　憎い相手の血肉を糧とするんだ』

「おい、一人気の狂った阿保がいるぞ」

「また膿ですか。ちよくちよく出てきますね」

「無視するのが一番だよ。信用できない余所者だし。頭もおかしいか

「嫌いな」

『力を、あげよう。君が欲しくてたまらないものだろうか?』

「思うに、改善点はいくつかあります」

「そうだな。まずは武器だ。片手剣を扱うのはもう限界だろうな。速さが圧倒的に足りていない。別の持ち替えるべきだ」

「あれでも軽い方だと思うけど。もっと素早く振り回せるものと言ったら、短剣? 長さが弱点になるよ。皆、そうそう近づかせてはくれない」

「そこは、先達を参考にすればいい。特にリリアーネだな。これから関わりを深めていくとしたら、彼女だ」

「なるほど。二刀流ですか。確かに魔術等に割く部分がそっくりそのまま空きますからね。リーチが劣っていても、手数を増やしていく方針。試してみる価値はありそうです。リリアーネという、格好の手本もいる」

『つれないねえ…』

「決まりだな。当分はそういう感じだ」

「あの人苦手なんだよなあ。でも、やるしかないか」

「土下座でもすれば大丈夫そうですね。得意でしょう?」

「リリアーネとやればいいんじゃないか?」

「目元の黒子がそりますよね」

「二人とも、真面目にやろうよ…」

「何、見てるの?」

言われてみれば確かに。

向かいに座っている女性の顔を観察した。上に二人の姉がいるだけあって、顔の作り自体は少し幼いようにも感じられる。だが、目元の黒子がそこに妖艶さを加えていた。ちぐはぐ故の魅力というものも、確かにいいものだ。ただ、性格のせいで台無しだ。表情はころころと変わるので、その可愛さを考えても、もったないなく感じた。

「あのさ、君から話があるって言うから待ってたんだけど。じろじろ

見てないで話しなよ」

「リリアーネさんは、火継ぎについてどう思いますか？」

「うん？ どういう意味？」

「その在り方の是非です。欠陥があるとは思いませんか？」

隣に控えているユリアが鋭い視線を向けてきた。それは怒りではなく、警戒の意味合いが強い。そもそも初めから、この二人には下田の雰囲気の変化を気取られているようだった。オーベックにも指摘された目の色や立ち振る舞いなどは繕えているつもりだ。それでも、隠しきれない何かがあるのだろう。

リリアーネは意外そうに目を細めた。

「欠陥ねえ。むしろ、良いことを探す方が難しいね。シモダ、これってヨルシカの差し金なの？ 私を、試してる？」

「別に。僕と同じ意見かどうかを確認したかっただけです。安心しました」

「へえ、君もそんなこと考えてるんだ。ちゃんと報告しておくからね」「やめてくださいいよ。勘弁してくださいい」

「あはは」

彼女の笑い声が空虚に響いた。口では笑みを作っているけど、こちらを見てくる目は油断がない。下田の動きを一つも逃さずに把握しようとしている。

リリアーネは頬杖をついて、こちらの目を覗き込んできた。

「私が何を考えてるか、わかる？」

「いいえ」

「目の前の男の子を、一刻も早く排除しろって、私の一部がずっと言うてくる。隙が、少なくなっただよね。今までは笑っちゃうくらい子供だったのに。はつきり言っつて、まともな会話できてるのが怖いよ。どうしてそんなに内がぐちゃぐちゃなのに、まともを繕えるの？」

「いきなり狂人扱いですか？ 酷過ぎます」

気持ちが悪いのは下田も同じだった。どうしてそんなに当たり前のように、こちらの精神を透かしてくるのだろう。非現実的だ。あつてはならない気がする。不純物だ。取り除くべきだろうか。

「それ、活性化してるけど、いいの？」

指摘されて、下田は自分の左腕を見た。今まで手の甲までしか浸食していなかった膿が、二の腕を覆うほどにまで大きくなっていった。こんな見た目を晒せるはずがなく、擬態で普通の肌を作っていた。それを、リリアーネは看破している。

「ああ、いいんじゃないんですか？ 奇跡を使えば何とかかなりますよ」
「君がいいなら、私は別に何も言わないけど」

彼女の手が、ぶれる。

刃のきらめき。

日常的な習慣のように、短剣が下田の胸を斬り裂いていた。軽装の皮鎧が敗れる。肌が晒されて、傷からわずかな血が漏れていく。

そこへ、リリアーネの指が触れた。じつとりと上から下へとなぞつていき、途中で横に広がった円の形を血で描いた。

「輪も、浮き出ていないね。面白い。姉さん、候補が新しく出てきたかもしれないよ。適応できる可能性がある。タカキは、捨てようかな。あんなになつちやつたし」

「気まぐれも、程々にしろ」

ユリアが首を振る。馬鹿馬鹿しいと言いたげに、下田を見下ろした。

「心に留めておけ。我等に手出しをしたら、報いを受けることになる」

下田は訳が分からないという顔を、作った。

「えっと、話が見えませんが。とりあえずひと段落したのなら、本題に入ってもいいですか」

「フフ、だつてさ。そういうことにしてあげようよ」

ユリアは再び離れた所で、見張りを再開する。その警戒の度合いが、さらに増しているような気がした。

下田は、立ち上がり、膝を地面に付いた。その行動の途中でリリアーネは武器を抜きかけていたが、直後、首を傾げた。

頭を床につけて、平伏している彼に、怪訝そうに声をかける。

「何をしてるの？」

「お願いします。僕に武器の扱い方を教えてください。貴方の戦い方

に感動しました。ご教授いただければ幸いです」

そこで初めて、きよとんとされた。何もかもを知っているという彼女の余裕が、一瞬だけ途切れたような気がした。ゆっくりと瞬きを数回した後、口を押える。

息の漏れる音が聞こえてきた。

どんとと片手で机を叩き、体をくの字に折り曲げた。髪の間から覗く耳がじんわりと赤くなっている。肩が震えていて、その様子は無邪気な少女のようだった。

可愛いと、素直に思った。

「可愛いな」

リリアーネはさらに大声で笑った。

思っただけのつもりが、口に出ていたらしい。いや、これは自分のせいではない。おそらく、Cが勝手に言ったのだろう。正直、やめてほしかった。この人の機嫌を取りたいわけではない。慣れ合うつもりもなかった。

彼女は呼吸を落ち着けてから、悪戯っぽく口の端を吊り上げた。

「で、戦い方を教えろだつて？ どういうつもりかな」

「祭りに貢献したいんです。今のままじゃ、僕は弱くて使い物になりません」

「ふうん」

リリアーネは身を乗り出して、腕や肩を触ってきた。彼女の衣服から鎖骨が見える。一瞬そこへ口をつけて、肉をかじり取りたい衝動にかられた。傷をつけられて、血を流す彼女はどのような顔をするのだろう。そしていざ死ぬとなった時は？ どういう命乞いをしてくれるだろう。

いや、そんなことはしない。彼女はそういう相手ではない。最後まで、余裕を保っているだろうか。

『でも、三分の一ほどを食らってやれば、可愛い鳴き声を上げてくれるかもねえ』

一理ある。

「ないない。頭がおかしいよ」

「自己紹介かな？ あんまり独り言とかしないほうがいいよ。気持ち悪いから」

リリアーネは下田から離れて、腕を組んだ。

「体は確かに貧相だね。術師だとしても、まだ足りない」

「術は、いいんです」

「うん？」

「武器を使った戦い方だけで、強くなりたいたんです。でもそっちの言う通り腕力にも限界があるので、短剣くらい軽いものでないと限界がすぐにききます。だから、リリアーネさんに頼んでるんです。僕の知る限り、短剣使いの最高峰に」

お世辞はたいして効いていないようだった。

相手は笑みを収めて、人差し指を顎に当てる。

「私が戦つてるところ、君に見せたことあつたっけ？」

「あるんじゃないんですか？ 僕もよく知りませんが」

「適当だなあ。言い分もちよつと、あれだよ。舐めてる」

下田は、片手剣をインベントリから即座に引つ張り出した。首筋に向かつてきた刃を弾く。これで終わりではないのはわかっていた。同時に二本目の短剣が胸へと迫る。一音節の詠唱をさらに圧縮。その刃にソウルの矢をぶつめた。軌道がそれて、椅子に刺さる。

リリアーネは口笛を吹いた。感嘆してくれているようだ。

「反応はまあまあじゃん。驚いたよ。ここまでとは思ってなかった」

反対に下田は自分自身に変わらない失望を感じていた。攻撃を受けた剣には、もう何の衝撃も残っていない。本気の彼女の力ならば、流したとしても痺れが長く続くはずだった。手加減されていたのに、ほとんどギリギリで防ぐことしかできなかった。

それに、もつと駄目なのは二本目への対応だ。魔術を使ってやつと間に合った。つまり、術を封印されている状況では殺されていたという。話にならない。下田は自分の握っている片手剣を見下ろす。これでは無理だ。

「楽しそうだね」

ゆつくりと、リリアーネと顔を合わせた。

「はい？」

「ううん。気にしなくていいよ。急に攻撃なんかしてごめんね。面白そうだから、教えてもいいんだけど、時間は限られてるからさ。さすがに赤子に字を教えるみたいな作業はしたくなかった。でも、君は大丈夫っぽい」

「じゃあ…」

「いいよ。弟子なんてとったことないけど、真面目にやるから。ただし、ちゃんと上下関係はわきまえること。私の事は、師匠と呼んで」
「嫌です」

リリアーネは、手から顔を離した。風船がしぼむ時のような息を口から漏らす。

「なんで？」

「もう、師匠はいるので。混乱しちゃいます」

「じゃあ、先生は？」

「それももういます。別の呼び名にできませんか？」

「えー」

腕を組みながら、斜め上を彼女は見た。口を開けたり閉めたりして、たいして真剣でもない思考にふける。その様子を、ユリアが呆れたように見ていた。

数十秒ほどたつてから、リリアーネは我に返った。下田を見据えて、からかうような笑みを作る。

「じゃあ、姉様で。私、そういうえば弟もいたことなかったし。目上を敬うっていう点では、似たようなもんだよね。どうかな」

不思議と、不快感はなかった。多分言葉の違いでしかないのだろう。これがもし母親に関することだったら、この回は無駄になっていたところだった。彼女を殺すしかなかったからだ。

下田は苦笑した。

「貴方も大概ですよね。いいですけど。姉様、これからよろしくお願ひします」

「見て、姉さん。私達に弟ができたよ」

ユリアは首を振りながら溜息をついた。下田はその動作を観察す

る。細胞の一つ一つまで動きを把握するように、じつと見ると見る。そこに、殺すための手がかりがあると信じて。

(10億6749万4395)

ユリアに首を飛ばされる。

(12億5498万2314)

ユリアに首を飛ばされる。

(15億5620万4410)

ユリアに心臓を刺される。

(17億987万8974)

二つの短剣を扱う際のメリットは何か。
単純に、手数が増える。例えば片方で相手の武器を受けて、もう片

方で体へ突き刺す。一本を逆手に持てば、より変化を持たせた攻撃が可能となる。

他にもできることはある。相手の振るつてきた武器を流して軸をずらした後、もう一本の短剣をその武器へ叩きつける。脆い武器種なら破壊を狙えるし、できなくても、相手の手から落とせる可能性がある。

自分と同格かそれ以下の相手ならば。

「何だ？」

初めは無視をしていたが、しつこくついていくと、ユリアはようやく相手をしてくれる気になつたらしい。

「腕相撲って知ってます？ 要は、僕と力比べをしてほしいんです」

「リリアーネに頼め。あっちなら、喜んで対応してくれるだろう」

「貴女がいいです。興味があります」

ユリアは歩いて行った。下田の話を最後まで聞くことすらしない。精一杯愛想良く振舞つたつもりだが、彼女はそういうのを好むタイプではないらしい。

「なんで、怖がつてるんですか？」

たずねると、彼女は止まって振り返ってきた。

下田は愛想笑いをする。

「貴方達って、本当の姉妹ではないですよね。そういう感じがします。だけど、そうだとしても、リリアーネさんをどうして怖がつてるんですか？ あっちの方はちゃんと慕ってくれているみたいなのに」「何の、でたらめを言っている？」

「腕相撲をしてくれたら、姉妹関係の修復に協力しますよ。一番上のフリーデさんのことも調べてあげます」

彼女の特徴的な、冷気を含んだ視線が全身を撫でてきた。

何度も戦っている内に、彼女の達の関係も段々と浮き彫りになってきた。確かに、個々の力はとてつもない。前の関門の三人よりもはるかに強いのだろう。しかし、連携という点に関しては、劣っていた。彼女の達の中に、わだかまりがある証拠だろう。特にリリアーネとフリーデの関係は複雑だ。彼女達がちゃんと話したところをほとんど

見たことがない。それはおそらく、リリアーネが一方的に何かを憎んでいるせいだと考えられた。

そして、そのことにユリアが悩んでいることも、わかっていた。板挟みは苦しいだろう。

ユリアは戻ってきて、下田を見下ろした。

「お前が、何を企んでいるのは知らないが…」

「ただ腕相撲をしたいだけです。お願いします。協力も惜しみません」

こんなことを言われても信用できないのはわかっていたが、彼女の望みも理解をしていた。ユリアは少し考えてから、渋々頷いた。

「私のことは、誰にも言うな」

「わかっています」

色々やり方を教えながら、腕相撲をする。と言っても彼女はあまり真面目ではない様子だったので、考えられる限りの挑発をした。さらに奇跡があるので本気でやってもいいという免罪符も与える。

腕をへし折られて完敗した下田は、考えた。

彼女の攻撃を受けて流そうとしても、全部は無理だろう。はつきり言っただけ以上の膂力と表現してもまだ足りない。避けるか、わざと食らうしか選択肢がない。奇跡が使えないので、絶対にかわす必要がある。

そのために、何をしなければならぬか。

観察だ。

相手の動きを全て把握するまで、繰り返す。経験を蓄積する。対応するために修練をする。

結局、やることは今までと変わらない。できるまでやるだけだ。

「うーん。って言われてもね」

リリアーネはくるくると手先でナイフを弄んでいた。彼女は汗の一つもかいていない。対照的に、下田はぐったりと床に倒れている。奇跡を使っていなかったら、切り傷も大量についていただろう。

呼吸を荒げながら、彼はリリアーネを見上げる。

「どうにも、進んでいない、気がして。才能がないのは、わかって、るんですが」

「まだ二日目で何言ってるの？ 才能云々も皮肉に聞こえるけど」

「僕に足りないものが何か、わかりますか？」

「うーんとね」

リリアーネはナイフを投げた。それは真つすぐ飛んで、下田の顔のすぐ横に刺さる。頬が切れて、血が流れだしてきた。

「お願いします」

「…戦いにはさ、技術なんて対して重要じゃないの。一番優先するべきことは、己を律すること。どんな状況でも心を揺らされない強さ。シモダには、それは備わってるように見えるよ。単に危機感が壊れるだけかもしれないけど」

「でも、勝てません」

「当たり前じゃん。君って奇跡使いでしょ。近接で相手に勝ろうとしても意味ない。って、初日でも散々言ったか。そうだね、ちゃんと答えてあげる。君ってさ、守りがおろそかになりがちなんだよね。意外にも、攻める気が強い。ある意味正しいのかもしれないけど、格上とやる時はもつと慎重になりなよ。私のこと、何度も殺そうとしたでしょ。堂々としてるから、あえて指摘しなかったけどさ」

「駄目でしたか？」

「フフ、責めてるわけじゃないよ。でも、理由は知りたいよね。私、君に何もしてないよ」

「その通りだと思います。姉様の思い違いでは？」

「まあいいや。君にまともを求めても無駄だね。とにかく、奇跡が戦い方に影響を及ぼしてるってことはわかるっ！」

「傷つく前提の戦略を立ててるってことですか」

「無意識のうちだね。駄目だよそんなんじや。そもそも攻撃なんて受けない前提でないといけないんだから。奇跡が一番消耗するからね」
「わかりました。今度から気を付けてみます」
「元気は戻ったみたいだから、再開するよ」

へとへとになりながら、下田は広場へと向かった。体は休むことを訴えていたが、まだやることがある。事前に相手と約束をしていたので、遅れるわけにはいかなかった。

篝火の傍まで行くと、座っていた実織が振り返ってくる。

「下田…」

「なに？」

「ほとんど目開いてないけど、大丈夫？ 休んだ方がいいんじゃない？」

「いいよ。やる」

彼女は立ち上がり、インベントリから水の入ったペットボトルを取り出した。

「ほら、飲みなよ。結構汗かいてるみたいだし」

「ありがとう」

下田はふたを開けて、中身を顔全体にぶちまけた。熱のこもった肌が冷やされていく。

その様子を、実織は口をぽかんと開けて見ていた。

「そういう？」

「ここで教えてくれるの？」

「え、いや、移動するよ。私の部屋に行こう。お姉ちゃんも見物したいって」

「わかった」

実織の後を付いていく。彼女は時折こちらの様子をうかがってきたが、何か言葉を発することはなかった。静かな雰囲気のまま、生徒達の居住スペースを進んでいく。途中高坂とすれ違って、多少の言葉を交わした。彼は二人を意味ありげに見た後、自分の部屋へと戻っていった。そこから、実織はさらに落ち着かない様子になった。

彼女の部屋に入ると、既に先客がいた。ベッドの上に、フリーデが腰かけている。今は薫の部分が表に出てきているようだった。

「私、邪魔だったかな」

「お姉ちゃんから見たいって言ってきたんでしょ。からかわないで。あ、下田、もつと真ん中に寄せて、隙間空いてると危ないから」

二人で分担してインベントリから畳を取り出し、即席の稽古用床を作った。正直必要はないと思っていたが、実織は普通に柔道や空手を教えるつもりでいる。下田の方も興味があるとだけしか言っていないので、特に訂正をすることはしなかった。

彼女は畳の配置を確認した後、下田の方を向いてきた。

「それで、あー、道着に着替えなといけなから。いったん外に出てくれる？」

「道着？」

「このままでするわけにもいかないでしょ」

「うん、そうだね」

頭の中では反対の意思がこだましていたが、素直に部屋から出た。少し待ってから、自分も着替える必要があることに遅れて気がつく。インベントリから白い道着を取り出し、身に付けていた軽鎧を脱いでいく。

下着姿になった彼は、自分の両手を見た。左は、ほとんどが膿に覆われている。腕も浸食されて、そろそろ肩に届きそうだった。だが、今のところ声がうるさい以外は実害もないので、放置している。

右手の部分を見る。こちらは、白い鱗が手の甲を覆っていた。膿よりも広がる速度が遅くはあるのだが、気味の悪さは大差がない。

六日間の最初に戻っても、これらは進行している。まるで時間という枠を飛び越えて、下田の体にこびりついているようだった。放っておけばよくないことになるのは目に見えているのだが、現状どうしようもない。腕ごと斬り落としたとしても、再生した時にはまた戻っている。

「終わったよ。入ってきて…」

実織が道着姿で扉を開けた。ぼうつとしている下田を見ると、すぐ

に目を逸らす。

「まだ途中なら、言って」

「ああ、うん。すぐに行くよ」

両腕に擬態がちゃんとかかっているのを確認してから、彼は道着に袖を通した。

正直、柔道や空手が祭祀場の者達との戦いに直接役立つとは考えられない。ほとんどの者が自分よりも体格があり、密着して投げる隙などどこにもありはしない。だが、参考にできるところもあった。二つとも、間合いの概念がしっかりと備わっている。それに基づいた、体捌きの技は大いに参考になった。

短剣のリーチの短さでは、立ち回りに工夫が求められる。拳足を使う武術を深く知ることは、役に立つのではないか。

実織は、教えるのが上手だった。今まで師事されてきたどの相手よりも、言葉の選び方がわかりやすかった。彼女は黒帯で、小さな頃からずっと続けている。実際に技の流れも綺麗で、速かった。それにいい匂いがする。

空手の組み手をした後、柔道の組み手に入る。お互いの道着の裾をつかむので、より密着した形になる。彼女は真剣にやろうとしてくれているが、下田の方は彼女の後ろにまとめた髪からほつれる一本や、声を出している口元が気になっていた。

彼女に何度か投げられた後、下田は起き上がれなくなった。体全体が床に縫い付けられているようだ。本当の限界が来たことを知って、この時間の終わりを惜しんだ。

「明日もやるの?」

「うん。お願いできる?」

「もちろん。私も久しぶりに稽古できて楽しかった」

実織の方も少し息が上がっている。楽しそうに頬を紅潮させる様子は、下田に忘れてしまったものを思い出す気にさせてくれた。現状を、楽しむことも大事なのだろう。

「下田くん、ちよつと習ってたりした?」

薫がベッドから立ち上がり、尋ねてくる。

「呑み込みも早いし。才能あるんじゃない？ あつちに戻ったら、私達の道場に来なよ。みおちゃんと同年代の人は、全くいないから」
「考えてみます」

実織も、倒れている彼を見下ろしてきた。

「体験会みたいのものもあるし。覗いてみて。私としても、新しい人が増えるのは嬉しい」

「うん。そうする」

「それで…」

薫がにやりと笑う。

「立てなきさうだけど、大丈夫？ 自分の部屋まで戻れそう？」

「厳しいですね」

「ここで寝たら？ 私達もそろそろ休むから、ちようどいいね」

「ちよつとお姉ちゃん」

「ベッドはまあまあ広いし。三人でも寝れるよ」

本人はほとんど冗談のつもりで言っているようだった。実織も呆れている。

下田はすぐに頷いた。

「僕が真ん中でいいですか？」

目を開けると、二人は虚を突かれたような顔をしている。実織の方が動揺が大きいようだった。

その反応を見ただけでも満足したので、下田は笑う。自分の全身に奇跡を発動させて、疲労の軽減を図る。数秒もすれば歩ける程度には回復できた。

「冗談ですよ。おやすみなさい」

部屋を出て、しばらく進む。冷汗が背中を伝っていた。

実織の技は確かに綺麗だが、下田にとっては止まっているようにも思えた。殺す気がないので当たり前なのだが、既に達人の技を何度も見ている彼にとっては、子供の遊びの様な感じだった。

問題なのは、その隙について相手を仕留める方法を、何度も考えたことだった。頭がおかしい。相手は、実織なのだ。殺すどころか、傷つける必要もない。

『でも、味見をするのはいいだろう?』

「黙れ」

吐き捨てた直後、背後で足音がした。薫がついてきているのはわかっていたので、落ち着いて振り返る。今の言葉も聞こえていたようだが、徹底的になかったことにしようと思っていた。

「あれ、僕、何か忘れ物しましたか?」

薫は無言で目の前まで近づいてきた。インベントリの保管庫の構成を思い返す。殺そうとしてくれれば殺せばいい。そう考えるほど、彼女の顔には敵意が含まれていた。

「貴方の部屋にいきましょう。話があるから」

その言葉には素直に従った。こちらにも、望んでいたことだったからだ。

薫は明らかに警戒をしているようだった。部屋に入る時も、下田を前に行かせた。彼としては、苦笑ものだ。どうせこちらは勝つことなのに、そこまで緊張する必要があるだろうか。相手からすれば、得体が知れないのは事実だろうが。

椅子をすすめても、彼女は座ろうとしなかった。壁に寄りかかって、常にこちらを視界に入れるようにしてきた。代わりに、下田が丸椅子に腰かける。

「それで、話というのは?」

「何もなければ、それでいいんだけど。みおちゃんとは、これから会うんでしょ。念のためにね」

「?」

「できれば、あまりみおちゃんに関わらないでほしいの。何を考えてるのは知らないけど、あの子を、巻き込むのはやめて」

下田は肩をすくめた。

「どうして、彼女の事を心配してるんですか? どうせ死ぬのに」

相手の驚きにも飽き飽きしていた。

「大丈夫ですよ。他の生徒達に話す気はありませんから。もちろん実織さん本人にも。可哀そうですね。実の姉に見捨てられたってわかったら」

「誰から、聞いたの」

「貴方が話してくれたってヨルシカに報告したら、まずいことになりそうですね」

「…脅しというわけ」

そういう反応にも、うんざりしていた。

「だから、話す気はないって言ってるじゃないですか。貴方のお願いも受け入れますよ。実織さんには必要以上に関わらないようにします」

真実であり、嘘でもあった。この回ではもうしないが、次からはわからない。相手の四体の内、感情的に付け込む余地があるとしたら、薫だからだ。実織を人質に取ったら少しは戦いでも忖度をしてくれるだろうか。だが、それだけはしたくない。自分の定めた最低限のラインを超えることになる。

下田は相手をじっと見た。あまり納得している様子ではないが、これ以上何かを話そうとする気配はない。話が終わりになりかけている雰囲気の中、彼は口を開いた。

「薫さんの用というのは、これで全部ですか？」

「いいえ。貴方に忠告をしようとも思っていたの。ここ数日の動きが気になる。全てを知っているのなら、今更修練をしたりする意味がないのはわかっているはず。リリアーネに近づいて、一体何をするつもり」

「別に。そっちの想像してる通りなんじゃないですか。暗月の誓約が邪魔なので、ヨルシカを殺そうと思ってます」

「そんなこと…」

「無理ですか？ でも、割と進んではいるんですよ。既に何体かは祭礼場の奴らを殺すことができます。残りは、貴方達三姉妹と、グンダだけです」

彼女は身を引いた。いつ間にか、下田は自分が相手へと近づいていることに気がついていて、ここで戦いをするつもりはない。無意識のうちに体が前に出てしまっていた。

「その目、本当に気持ち悪いよ。だから、みおちゃんとは関わってほし

くない」

「自分が同類なのを、ちゃんと自覚してますか？ 僕の方はもう、薫さんに用はありません。話をしたいのは、フリーデさんの方です。表に出てきてもらえますか？」

「指示に従う必要はない。フリーデ、そのまま置いて」

だが、意見は食い違つたらしい。すぐに相手の様子は変化した。顔つきが険しくなり、目尻が上がる。敵意を向けてきていた薫よりも冷たいものが、宿っているような気がした。

「私も、警告をします。妹に、リリアーネに余計なことをしないでください」

「驚きました。ちゃんとあの人を思いやってはいるんですね。てつきり、仲違いをしてるのかと思つてました」

「貴方の、くだらない想像で物事を判断しないでください」

「でも、彼女の信仰していたカアスを殺したのは、事実なんですよ。憎まれても、しょうがないと思えますが」

相手の手に鎌が現れた。下田に直接向けることはしないが、いつでも首を刈り取れる間合いまで近づけた。

フリーデはさらに声を低くした。

「その話を、リリアーネから直接聞いたのですか？」

「さあ？ 考えてみてくださいよ。あの人がこういう話を僕なんかにすると思います？ 色々調べたんです。 Rondoll について。どうして、そんなことをしたんですか。恨まれるのはわかりきっているのに」

冷たい表情の中に、一瞬疼痛がよぎるのが確かにわかった。なるほど、仕方がなかったというわけだ。そうしなければならなかった事情がある。そしてそれは、リリアーネには説明できないことだ。

「私達を、裏切ったからです。酷い裏切りでした。私は、信仰よりも、妹たちの方が大事でした。だから、仕方がなく」

「そういう事情を、ユリアさんにだけは話したんですね。おっと、鎌は下げていてくださいよ。別に彼女達には何もしてませんって。でも、可哀そうですね。ユリアさん、板挟みになつて辛そうでした。そこ

を何とかするのが長女の役目では?」

「わかっていません。ですが、私にそうする資格はありません。逃げ続けた報いです」

ロンドールははるか昔に滅びたとされている。オーベックの書齋で読んだ。もう何百年も前の話だという。この姉妹たちについても、オーベックは意見をしていた。曰く得体のしれない不気味な女達らしいが、強さだけは本物だと。

当然だと思った。話を総合して考えるに、フリーデ達は普通の人の寿命をはるかに超えて生き続けている。ただでさえ戦いに類まれな才を持っているのに、何百年も経験を積んでいるのだ。

くだらないことで悩んでいた。そう考えると、肩が一気に軽くなる心地がした。こんな自分が、たった数百万年くらい修行して勝てるはずもないのだ。もっともっと、彼女達の動きを知り、経験を積む必要がある。まだ、停滞していることに悩む段階でもなかったのだ。

もっと頑張ろう。もっと研ぎ澄まさなければ。もっと殺意を大きくしよう。

いやそれだけでは駄目だ。ちゃんと敬意も示さなければならぬ。思えば、環境だけは恵まれているような気もする。自分の想像もできないような洗練された戦士たちが周りにはたくさんいる。

散々戦ってきてわかったのは、この祭祀場に集まっている者達は選ばれているということだ。徐々に滅びに向かっている世界で、生き残れる実力と運を持ち合わせた者達。今まで地球で比較的平和に暮らしていた自分が、そうそう乗り越えられる相手ではない。そういう意識が、最近足りていなかった。

フリーデは、さらに後ろへ下がっていた。鎌の刃の先を、下田の首に向けている。

「どうしたんですか?」

初めて、彼女の表情に動きがあった。警戒の表情だ。まるで理解できないものを目の前にしているかのような、動揺がわずかに含まれている。

「その顔を、やめなさい」

「何をですか？」

「貴方が、どうしてそんなに笑っていられるのか、理解に苦しみます。一体何が、そんなに楽しいのですか？」

「別に、楽しくなんてありませんよ」

下田は詠唱を始めた。頭の中が全てふわふわとしていた。

「こんな地獄、早く終われって思ってます」

フリーデのことも、もちろん尊敬していた。だから、三秒ほどで殺されたとしても恨むことはしなかった。

49. 双月光

(26億9804万1276)

二本の短剣を扱う際の、デメリツトは何か。

まずは、片手で武器を扱う性質上、安定さに欠けるということだ。かなり握力を使わないと、すぐに短剣を弾き飛ばされる。攻撃をする時も同じだ。片手の力では相手の首を斬り飛ばすことなど到底できない。故に、小さな力でも傷をつけられる突きがどうしても中心になってくる。それでは単調さが増してしまい、たとえ手数が増えてもあまり意味がなくなってしまう。

現実では、二刀流もとい双剣術はあまり一般的ではなかったという。インベントリの本で調べてみると、日本においては、普通の刀と小太刀という組み合わせがあった。小太刀で相手の攻撃を流し、刀で斬る。あるいはその反対も型として確立されていた。

使い手としては、あの宮本武蔵がいる。だが下田には、彼が二刀流が強いという理由で剣豪と謳われているとは考えられなかった。彼自身が才能にあふれ、強いからこそ、二刀流という特異な要素にも注目が集まったという方が正しいように思えた。

双剣術が盛んだったのは、中国だ。良く調べてみると、そのほとんどは手数の多さを利用した攻めの剣術であることがわかってきた。相手に隙を与えないことこそが、最大の防御だという考えが根底にあるのだろう。

反対に、リリアーネの動きは受けが中心だ。もちろん攻めに徹するときもある。しかし彼女は相手の攻撃の軌道を完璧に把握した上で、隙を手繰り寄せることを重視する。享樂的な性格とは反対に几帳面な戦い方だ。

どちらが正しいという話ではないのはわかっていた。どちらも取り入れるのが一番いい方法だ。あらゆる組み合わせを試行し、相手に効果がある一手を見つけ出す。やること自体は、単純だ。

今までの考えの枠組みを破壊する必要があった。まず、利き手とい

う概念がいらない。どちらの手でも完璧に、攻撃と受け流しをできるようにしなければならぬ。ばらばらの動きを同時にやることは容易い。BやCと分担すればいい。だが、右手でも左手でも同じパフォーマンスを維持することはまだできていなかった。これは日常の動作でも気を付ける必要があるだろう。左手をひたすら使う。使い減らす。

(38億1164万6749)

魔術での妨害ができない以上、同時に四体を相手にしなければならぬ。かわしきるためには常に自分の位置を変え続けて、捉えられぬようにする。

しかし、それは不可能だった。今回の関門を難しくさせているのは、自分の諸々の状態が万全ではないということだ。それまでの戦闘も手を抜けない。感覚では、フォドリックを倒した時点で既に四割は体力を消費している。あまり動き過ぎれば、あっという間に限界が来てしまう。

故に、移動は最小限にすべきだった。その上で、あえて敵に囲まれる状態にさせる。彼女たちの攻撃も利用する。同士討ちを狙えるほど甘くはないが、それぞれの妨害になる程度には持つていける可能性がある。

少しの動きのずれ、相手の攻撃の予測の誤差、一呼吸にも満たない遅れ。全てが殺される要因に成り得た。視界外から振るわれた攻撃にも、完璧に対応しなくてはならない。

(56億1232万9567)

相手の連携にも、隙があることはわかっている。

特に顕著なのは、グンダと三姉妹の間にある溝だ。信用しあっているわけではないのはすぐに理解できた。彼の巨体が時折動きの流れを途切れさせる。狙える穴だった。

振り下ろされた斧槍をかわし、グンダの体を一気に駆け上る。背中の特定の部分を伝っていけば、途中でつかまれることはない。

三姉妹の包囲から逃れられる場所が、グンダの頭の上だとは面白い。げらげら笑いながらそう考えていると、黒い炎で全身を焼かれた。

彼女たちの術にも、気を付けなければならない。

(79億3426万6759)

術の封印を、どうにかしようとは何度も考えた。

オーベックが言うには、沈黙の禁則という、奇跡に属する術だそうだ。ロンドールに古くから伝わっているもので、詠唱などの知識は不世出。彼女達に直接訊いても決して教えてはくれなかった。

戦闘中に見極めようとしても、無駄に終わった。リリアーネはどうやら、詠唱を圧縮した上でさらに偽の音節を何重にも混ぜているようだった。非常に卓越した隠蔽だ。もはや彼女自身を拷問するくらいしか知る方法はない。だが、それができるなら、この関門の突破も可能になっているだろう。

術を、斬り落とす。

いかにもフィクション的だ。だが、やらなければならない。彼女達は近接戦闘だけに長けているわけではない。魔術なども織り交ぜてこられたら、ただかわすだけでは絶対に限界がやってくる。

可能であることはわかっていた。フォドリックが何度もそうしていたのを、何度も見た。だが、ここで問題になってくるのが、武器自体の強度だ。彼も、おそらくではあるが、薄く符呪を施していた。そうでもしないと、刃が割れる。

沈黙の禁則により符呪はできない。だが、武器が元々術的な要素を持つていたら？ 今欲しいのは、高品質の武器だとわかり切っていた。ただの短剣では、途中で必ず壊れてしまう。インベントリから予備を取り出す隙に、殺される。

アンドレイの工房から、いくつも候補を見つけては、失敗を繰り返した。生半可な術のかかった武器では、駄目だ。リリアーネ達の使う術以上に強力な武器が欲しい。何度受けても耐えられるほどの強度も必要だ。

短剣でその基準を満たせるものは全く見つからなかった。アンドレイ本人に尋ねてみても、そもそも全部の武器種に広げたとしても、見つけるのは困難らしい。よほど強力な術、高品質の素材、洗練された精錬技術の結晶こそが、それに値する。

一本だけ、心当たりがあると言われた。工房のさらに奥にある、一室にまで案内される。その部屋には、大剣が嚴重に安置されていた。その、淡く緑色に光る刃を、下田は知っていた。

月光の大剣。

かつては、シフィオールズが使っていた武器だ。彼が殺された後、回収されたのだろう。あの狼についても、今は認識が変わっていた。早めに死んでくれてよかったと思う。大きな障害が一つ減ってくれたから。

確かに、至高の一振りではある。飛ぶ斬撃についても、沈黙の効果

が及ばない可能性がある。だが、大きな欠点があった。とても、下田が振るえるような重さではないということだ。持ち上げるだけでも、一苦勞だった。

「アンドレイさん」

「何だ」

「これ、短剣に打ち直すことはできますか？ 二本分くらいは作れる余裕があると思うんですけど」

初めは冗談だと思ったのか、低い声で笑われた。だが、下田が黙って月光の大剣の刃を見てみると、やがて静かになる。

「本気か？ そんな恐れ多いことを言った奴は、初めてだ」

「無理そうですか？」

あえて挑発的に尋ねると、アンドレイは腕を組んだ。

「できないことはない。だが、時間はかかるぞ。あと八日は要る」

そこで、祭祀場の許可がないことを理由に断らないのは、彼らしいと思った。下田の挑発が効いたというより、単にこの剣に手を加えられることへの好奇心からだろう。

「間に合いませんね」

「少しでも早くしようとするれば、絶対に上手くはいかない。諦めろ」

下田は頷かなかった。インベントリから、鍛冶用の槌を取り出す。

「二人で分担してやるなら、どうですか？ もっと早くなると思いますけど」

初めアンドレイは、馬鹿にされたかと思っっているようだった。さすがに自分の職分を訳も分からない相手に入り込まれるのは嫌だろう。しかし、下田は試しに一本剣を打った。それで相手も、理解をしたようだ。

化け物に戦いで勝つよりも、はるかに楽ではあった。やはり何かを殺す努力よりも、作る努力の方が楽しい。そして才能がなかったとしても、鍛冶というのは職人の技術であることも幸いした。さすがに数万年ほどアンドレイから教われれば、ある程度のレベルまでは身に付けられる。

月光の大剣は、その刃の硬さが一番の特徴のようだった。変形させ

るのが困難だ。だが、二人で槌を打ち続ければ、三日ほどで刃の分割に成功した。そこから短剣と言えるくらいの刃渡りまで調整し、柄をはめ込む。ここまでで丸五日。儀式の前日までかかった。

アンドレイはかなり疲労しているようだったが、下田は久しぶりの興奮でまだ元気があった。完成した短剣を手に取り、明かりの前でかざす。

大剣だった頃はかなり重かったが、今は驚くほど軽かった。まるで刃が丸ごとなくなっているかのようだ。それでも月光の輝きは健在で、下田でも見とれるほど美しかった。

「今までの中で一番背徳的で、骨の折れる打ちだった」

「ありがとうございます。こんな無茶な頼みを聞いてくれて」

「それで、何をするつもりだ。誰かを殺すのか？」

「どう思います？ やっぱり鍛冶師としては、自分の作った武器が味方を殺したら、嫌ですか？」

アンドレイは鼻で笑った。

「この奴らは、味方ではないな。祭祀場という集団に属する気はない。その大義とやらの賛同する気もな。俺は満足するものが作れたらそれでいい」

「そうですか」

直前までは、この男も殺そうと思っていた。言っていることが本心だとしても、下田達の味方を意味するわけではないからだ。だが、アンドレイは直接邪魔をしてきたことは一度もない。散々一緒に鍛冶をやってきたので、情も湧いているかもしれない。それに、ちゃんとした武器を手に入れられたので、機嫌もいい。

下田は短剣を振った。刃が光り、斬撃が飛んで行く。それは真つすぐアンドレイの首へと向かい、容易に肌を斬り裂いた。

床でもがいている相手を眺めてから、手ごたえを感じた。

それはそれとして。

この武器の練習台は必要だった。

黒蛇というらしい。

その黒い炎を放つ呪術は、リリアーネ達しか使っているのを見たことがない。だが、どんな性質を持つにしろ、格が上の術をぶつけてやれば防ぐことは可能のようだった。

ユリアの刀と打ち合っても、その短剣は強靱さを保っている。飛ぶ斬撃が側面からの呪術を相殺している間、下田はひたすら彼女の武器を狙って攻撃していた。刀はそのサイズにしては軽く、切れ味も鋭いが、刀身が脆い。手数で打ち込んでいけば、段々と削れてきているのがわかった。

短剣を斜めにして、相手の武器を刃の上で滑らせる。もう片方の月光の短剣を、刀の中ほどへと叩きつけた。確かな感触が伝わってくる。刀身にひびが入り、ほぼ半分に割れた。

ユリアにはほとんど動揺がなかった。即座に二本目の鞘へ手を伸ばす。

それを見逃すほど、下田も甘くはなかった。ここが決定的な隙だと断定し。相手の首元へ短剣を走らせる。

もう片方で、リリアーネの攻撃を弾く。上手く死角を突いてきたが、彼自身も自分の視界の及ばない領域は把握していた。ユリアの首に刃が入る。

次の瞬間、下田の右腕が斬り落とされた。

刃は見えなかった。

ユリアは、柄だけを振っている。それが顔の目の前を横切った。一見まるでコントの様に思えたが、目から下が全て寸断されるのを自覚して、ようやく理解をした。

不可視の刃だ。

おそらく月光の短剣と同じように、武器自体に特殊な術が施されている。

なるほど。

(116億6758万1231)

ユリアとの関わりを多くして、ほとんどを彼女との模擬戦に費やした。初めは渋々だったものの、下田の実力を知ると受けてはくれるようになった。彼女自身ももつと強くなる必要性を感じているらしい。

だが、どんなに話しても、二本目の刀の事は教えてくれなかった。下田自身も本腰を入れて尋ねなかつたせいでもある。殺されていくうちに、その性質が段々わかつてきたからだ。

刃の長さは、普通の刀と変わらない。特別切れ味が増したという感じもしない。

その特異性は、ただ不可視だというだけではない。その刃の形をある程度変形できることにもあつた。

位置を大まかに予測して対応しようとしても、空を切ることが何度もあつた。そして、返す攻撃でやられる。一時期は実体のない刀だとも考えていたが、試行を重ねていくうちに、そこまで無茶苦茶なものではないとわかってきた。

いくつかの変形のパターンがある。おそらく、事前に詠唱によって、自動的に相手の攻撃に適した形へと成るように組み込まれている。戦闘中、ユリアの口が動いていないことは確認した。いかに彼女でも、斬り合いの中で武器そのものに干渉する術を臨機応変に扱うのは難しいのだろう。

であれば、こちらと同じことをして相手の予測を外せばよかつた。

(137億5647万4437)

不可視の刀が、引き抜かれる。

居合い斬りの速度は、普通に振るうよりも格段に大きくなる。まずはそれを認識できるようにしなければ。

そこで役に立つのが、別の意識達だ。どんな速い攻撃でもあらゆる角度から観察すれば、筋がわかってくる。次にやられても対応ができる。

「見えたぞ」

「本当ですか？」

「もうかー」

「側面から見た方がわかりやすいぞ」

「もう少し、視覚を浮かしてみよう。視野がまだ狭い」

「何かをつかめそうですね」

(178億9937万2348)

時々、天井に付きそうなくらい、上に行くことがある。

自分自身を、見下ろしているような感じだ。そこでは、周りの全てが見える。自分の横や後ろへ回り込もうとしている敵が、認識できる。

その状態になるのは、五十万に一回くらいだ。これでも、かなり間隔が短くなってきた方ではある。

これを常にできるようにすれば、先へと進めるだろう。

(269億5600万5564)

熱い、

熱い、線が、じりじりと体を焦がすことがある。

そこへ短剣を向けると、ちょうど相手の攻撃がぶつかる。

同時に、冷たい点も見えることがある。

それは決まって、ユリアの穴であることが多かった。体が追いついていないので突けたことは一度もないが、隙の点であることは理解していた。

その状態になるのは、七十億に一度くらいだ。熱さと冷たさが同時に重なったことは、今までに一度しかない。視点の浮遊とも全て重なったことはゼロだ。

これを常に感じられるようになれば、おそらく勝てるだろう。

(345億8790万1276)

時間については、ずっと前から試みを続けていた。

引き伸ばすというか、分割するというか。とにかく、自分も相手も、遅く感じられるようにしたかった。

結局、時間を三分割にすることにした。AとBとCで、等分をする。相手と自分の行動も三段階に分けた。相手のどの段階に、自分のどれをぶつければいいのか。徹底的に研究をした。失敗は当たり前だ。組み合わせは果てしない。だが、無限ではない。限りがある限り、全てを検証することができる。

達人が無意識でやっているようなことを、経験だけでこなそうとするのは、途方もなく時間がかかる。

ずれた。

何かがおかしいと思ったたら、右の方だ。左右の手の力のバランスが取れていないせいで、ここ最近はまるで上手くいっていないかった。

右の方の、鱗に浸食されている腕を見る。壁を殴ると、そこが少しへこんだ。本気でやったのに、手の方には全く痛みがやってこない。腕力が増したばかりか、さらに頑丈にもなっているようだ。左手で同じことをやると、あっさりと骨が砕けた。

これが、竜の鱗が浸食してきていることと関係があるのは明らかだ。しかし、白い女性に訊いてみても答えはない。期待していたわけではなかった。エルドリッチの膿と同じく、よくないものであることはわかりきっている。

だが今は、利用できる。

実験をした。

右腕の力ならば、短剣で首を断つことができる。亡者を何体もそうして処理した。ある程度の損傷を気にしないのなら、素手でも顔を潰せる。もちろん、相手が何も防具を付けていない前提ではあるが。

これで、急所へ突き刺す以外にとどめを刺す手段が増えた。大きな前進だ。すぐに相手へ通用するようになるわけではない。ここぞという時が来るまでは、温存した方がいいだろう。確実に仕留められる瞬間に、使う。

「何だ？」

女性はいつものように姿を消さず、下田を見ていた。口をパクパクと動かし、何かを訴えかけているようだったが、声は聞こえない。

正直、やめてほしかった。気分が悪くなるからだ。彼女が話そうとする度、頭痛がする。そのやるせない表情を見るほどに、この場から逃げ出したくなる。

話している内容はわからなくても、自分を止めようとしているのは

わかった。彼女の顔は最初の方よりもやつれている。下田が誰かを殺す度に、まるで自分自身が胸を貫かれたような顔色になる。

下田にとつては、訳の分からない反応だった。そもそも、こういう状況にまでなったのは、彼女のせいだ。彼女が、この繰り返し能力を司っている。なんとなく、わかつていた。今ではもう、そのことに感謝すればいいのか、恨めばいいのか混乱していた。

「何もできないなら、消えろ」

相手がどんな反応を返そうと、もう彼は自分の世界に入り込んでいた。戦いの想像に浸っていた。

(698億1239万6578)

「また、会えたね」

さつきまで一緒にいたでしょ。

「でも嬉しいんだ。君がいない間、寂しかった」

あんたさ、他の子にも同じこと言ってるの？

「そんなわけないよ。君だけだよ」

どうせ、また引き裂くんでしょ。真つ二つにしてこき使うんだ。

「ごめんね。君が大きいままだと、満足に使えないんだ」

痛いんだからね。

「わかっているよちとせ。僕の心も同じくらい痛い。だから、せめてちやんと使うよ。あいつらの肉の中へ刺してあげるから。たくさん、血を吸わせてあげるからね」

あたしがさあ、そういう殺人鬼みたいな言い方はやめてよ。ま、いいよ。ちよつと意地悪言いたかっただけだし。さつきと持ち上げな。「ありがとう。やっぱり大好き」

わ、ちよつと、急にやめて……。

「重症ですね」

「きもちわりい。見ろよ、アンドレイが本気で引いてる」

「キスマでしてますよ」

「由緒ある月光の大剣が、台無しだな」

(890億7459万2134)

右をチトセ。

「よく寝てる？ 隈もできてる。食事も好きな物ばかりじゃなくて、いろんな野菜も取らないと」

「うん…」

下田は、涙を流していた。

左手に持つ短剣を、ミサと名付けた。母親の名前だ。

「牛乳はごまめに買い換えないと駄目。野菜もスーパーじゃなくて、近くの直売店にきなさい。自分一人の分だけを、買った方がいいから」

「うん、母さん」

「お風呂の掃除は週に一回はする。赤カビが広がっちゃう。洗濯機が動かなくなったら、まずは排水ホースを確認しなさい。お母さんが使ってた時も、よく詰まってた」

「そっちは、」

「ん？」

「母さんは、大丈夫？ 病院、辛い？ 食事美味しくない？」

「危ない。今、看護師さんが廊下を通ったよ。彰浩、いい？ 確かに上等とは言えないけど、ちゃんと栄養のバランスを考えてくれてるの。」

「まずいけど」

下田はくすくす笑った。

「こっちは、平気。色んな患者さんと話をすると、楽しいよ。私と同じ癌の人もいて、一緒に頑張ろうって言ってくれる」

「よかったね」

「ところで、学校はどう?」

「楽しいよ」

「草野君にすぐ影響されるんじゃないよ。結局、真面目が一番だから。困らない程度には、勉強はやっておきなさい」

「うん」

「あとは、彼女かな」

「えー」

「彰浩もいつか、好きな人を見つけて、自分の家庭を持つ。この人のためなら頑張れる。そういう相手を見つければ」

「まだ、わかんないよ」

「何言ってるの。もう高校生の真ん中なんだから。好きな女子とかいるでしょ」

「うーん」

「アキ」

「うわ、びつくりした」

「一階で待っててって言ったのに。どうして先に行っちゃったの」

「トイレ長いから」

「は?」

「ごめん、今のは気持ち悪かった」

「あら…」

「初めまして。下田君のクラスメイトの、高原と言います。お見舞いに来ました。家族水入らずのところを、邪魔しちゃってすみません」

「いいのいいの。新鮮で嬉しい。ちとせさんで合ってる?」

「はい、そうですけど…」

「彰浩がよく話してくれてたから。尊敬できる人だって」

「母さん」

「へえ、なるほどね。あんたがあたしを裏でどう思ってるか、もっと知りたいな」

「え、えっと」

(1098億7609万4352)

「彰浩、研ぎ澄ましなさい」

左の短剣を、一閃する。

「まだ遅い。視野を広げて。相手の点を見極めなさい。自分への線も把握するの」

「そろそろ来るよ。どっちにするの？ 月光とより連動できるのはあたしの方だよ。それとも、利き手を選ぶ？」

「どうだろう。」

「その概念は、失くしたはず。私とちとせさんのどちらも同じように扱うと決めたでしょ」

「じゃあ、やっぱリクトセにしよう。母さんは、とどめに使うよ。」

「落ち着いて。いつもみたいにすかした感じで行きなよ。こんなこと、何でもないんだって」

「自分を信じて。私も彰浩を信じているから。何よりも己と、己の技を頼りなさい」

うん。

かちんと、ユリアの鞘が鳴った。

稲妻のような勢いで、刃が引き抜かれていく。

首筋に、熱。

細い熱線が、急所へと向かって伸びている。次第に温度を増している。既に肌が焦げそうだ。攻撃が、到達しかけていることを表している。瞬きすら許されない間隙。

線の真ん中ほどに、チトセを置いた。光を想像する。唱えることが

できないから、空に浮かぶ月の光を精一杯思い浮かべる。

月光の斬撃には、沈黙の禁則が適応されない。術ではあるのだろうが、リリアーネの詠唱に影響されないような構成がなされている。あるいは、格そのものが違うせいか。

二発を、発現させた。片方は背後を狙ってきている魔術へ飛ばす。そしてもう片方は、チトセの内に留まらせた。

不可視の刀が、首へと向かう。そして、チトセとぶつかった。

相手にとっては、予想外の手応えだろう。下田の短剣は、空を切るはずだった。刃が当たる瞬間だけ、刀を変形させ、かわす。ユリアの技は、必殺だった。初めて見るならば。

チトセから、月光の斬撃が伸びている。その先端部分が、ユリアの刀を止めていた。止めているだけではない。刃の部分を確実に、破壊していた。

「あの女の首に、私を入れて。当然の報いだもの。私の息子を、何度も殺した罰」

うるさい。

「なあに？」

ただの道具風情が、僕の母さんの真似をするな。

「その意気。やっと、まともになってくれた。それでいいの。もう、幻なんかには縋らないで」

母親の幻聴は、下田自身の焦りが、表われたものかもしれない。実際、彼はユリアを仕留めることはしなかった。そうしなかったのではない。そうすることが不可能だったからだ。こんなもので殺せるほど、相手は甘くはない。

下田は距離をとった。

上から、グンダの巨体が降ってくる。斧槍が先ほどまで下田がいた場所に突き立てられた。彼もまたリリアーネを守るようにして位置取りをしてくる。ユリアは破壊された武器を捨て、離れていく。既に倒れている死体から、武器を取ろうとしている。

地面を蹴りながら、周りを一瞬確認した。

フリーデの姿がない。直前までは、リリアーネの斜め右方にいたは

ずだ。

何もないはずの所から、線が伸びてくる。

耳元が熱くなった。

見えない体を使いながら、フリーデが接近してくるのはわかっていた。同じ術を使うから、その精度を図るのは容易い。足音も上手く消している。線がなければ、全く位置を補足できなかっただろう。多く殺された要因の一つだ。

上手く姿を隠している。だが、それだけだ。

彼女は強い。三姉妹の長女だけあって、おそらく一番苦戦することになる。だが、この攻撃は粗末だった。躊躇いがある。下田を殺すことに、迷いがある。

吐き気がした。思いつきり侮辱をされた気がした。

「薫さん」

ぎりぎりまで引き付ける。鎌が狙ってきているのは知っている。すぐに対応をすることはしなかった。正面のグンダが長い斧槍を振り回してくる。

刹那の間に足を擦る。いちいち上げて移動をするよりも早い。柔道や空手の基本。体幹を維持して、素早く横へ移動をする。斬撃へとわずかに短剣をかすらせて、体へ当たるのを阻止する。

フリーデの攻撃と、グンダの攻撃が重なった。二つの武器が掠めただけで、空気が震える。だが、本気を出していなかったフリーデの方が、衝撃に押されてやや体勢を崩した。

「薫さん、あーあ」

きつと、フリーデが悪いのではない。共にいる、薫が足を引っ張ってしまっている。肉体的な面ではなく、精神的な面で。

それが不愉快なのだ。同じ人間を殺すことが嫌なのか、それとも変わっていく下田に戸惑っているのか。どんな思いがあるにせよ。素直に殺意を向けてくれる方が良かった。その、まるで上の存在からの慈しみの様なものが、苛々させられた。

フリーデの所々に、点が現れる。点滅を繰り返しているものもあるし、目を凝らさなければ見えないくらいの大きさしかないものもある

視界がぐるぐると回り、自分の下半身が地面に倒れるのを見た。そして、そのすぐ後ろに、斧槍が転がっていた。

グンダは鎖を手繰り寄せ、己の武器を手元まで戻す。

完全に意識から外していた。これは、自分のミスだ。グンダの斧槍のそれは、墓所でもやられたはずなのに。この世界での最初の死が、グンダによるものであることを、忘れていた。

飛んでいる上半身に、黒蛇が到達した。

リリアーネは、ほっとしたような表情をしている。

やはり、駄目だ。

俯瞰をしなければならぬ。

普通の視野を持っているだけでは、複数を相手に押し切ることは不可能だ。

ふわりと、浮いてやろう。

(1697億3245万4476)

鳥になった気分だ。

戦場を見渡すのだ。

足音、術の詠唱、空気の流れ、剣が風を切る音。

何もかもを材料にして、相手の全ての位置を割り出す。それを具体的な映像として頭の中で構成する。その映像と、通常の視界を同時に流す。並列的に処理をする。

自分の間合いの外にいる相手は特に注意だ。全員が常に自分へ攻撃するものとして、警戒をする。いつ、どんな方向から何が飛んできても、臨機応変に対処をする。

熱い線と冷たい点と、浮く面。

同時に使いこなす。完璧に行使をする。

(2983億4536万7843)

同時にできるようにはなってきた。

だが、続かない。全員を倒しきるまでには切れてしまう。

原因は明らかだ。体力の限界が迫っている。ものすごく集中力があるこれらを維持できるだけの余力が、ほとんど残されていない。

つまり、今までの戦いの構成も考えなくてはならないということ。より早く、より効率的に殺す。術をなるべく使わずに最小限の動きで。少し動くだけでも、無駄な力がかからないようにする。

(3564億2316万9870)

リリアーネの顔は次第に余裕がなくなっていく。そして楽しそうに緩んでいった。

下田はせえせえ言いながら、彼女と一緒に踊っていた。刃と刃を合わせ、戦いの舞踏を続けている。お互いに殺さないよう決まりを作っている。戦いとは言えなかった。踊りと形容する方が正しい。

基本的に彼女の動きを真似している。相手がどうしてくるかの想定も容易い。今回はより長く続けることを前提として、ひたすら受けに回っていた。より体力を消費しない動きを模索する。

それでも限界はやって来て、下田は踊りを終わらせた。短剣をインベントリにしまって、床に倒れ込む。

「寝るのは待って。私と、感動を共有しようよ」

「はい…？」

「君より強いのはいる。でも、私は感動したんだ。上手く、実力を隠し

てきたんだね。全く、想像外だよ。君の技を見ていたら、楽しくなつてきちゃって」

相変わらず理解できない相手だと思い、下田はそのまま寝た。リリアーネのこもるような笑いが、耳に残った。

50. 死にゲーの魅力

背中に柔らかい感触を感じた。自分の部屋のベッドと似たようなもの。だが同じではない。材質というよりも、皺のずれやわずかにする別の香りが違いを強調している。少しだけ警戒をしながら、下田は目を開けた。

机に頬杖を突きながら、リリアーネがこちらを見てきている。

「もう少し寝ててもいいよ。遠慮なく」

「姉様の部屋ですか？」

彼女は立ち上がり、歩いてくる。ベッドに腰かけると、下田の体重も合わせたへこみができた。

「まあね。緊張してる？」

「そりゃあ、訳の分からない状況ですから」

「殺意を隠すのが、上手だね。できる自信もある。怖いなあ。私の方が、もっと緊張してるよ」

「休ませてくれて、ありがとうございます。戻っても？」

「だめ」

つんと、下田の鼻を人差し指で突いた。

リリアーネは大きく伸びをしてから、彼の手に触れてきた。最初の印象は、冷たいということだ。彼女には体温というものがあるのだろうか。肌は柔らかく、人間らしい感触だからこそ、尚更ちぐはぐな気がした。

「剣の技を、どこから習ったの？」

「姉様から」

「嘘つき。私が教える前から、完成されていた」

自分の指を、下田は眺める。

「完成？ お世辞はやめてください。まだまだ改善点はあります。未熟もいい所です」

「そこはどうでもいいとして、」

手から腕、肩へと指先がなぞっていく。彼女は五本の指を広げると、下田の肩を軽く押した。抵抗せずに、そのままベッドへ倒れる。

「私の技と同じ。気持ち悪いくらいそっくり。誰から、それを習ったの?」

「姉様から」

「私の戦い方は、私が自分で磨き上げてきた。弟子なんかとつたこともないし、貴方はずっと棺の中にいた。もし、貴方がその技を、私と全く同じものを、自分で作り上げたとしたら」

やや早口でまくし立ててくる。彼女の吐息が、鼻にかかってくる。両手を下田の顔の左右につき、さらにベッドが沈み込んでいく。

なぜ、彼女が興奮しているのか、下田には理解が及ばなかった。それよりも密着してこようとすることをやめてほしかった。ここは彼女の部屋で、彼女のベッドだ。それに目の前には本人がいる。挟まれていると、さすがに思うところがあつた。

「それは、素晴らしいことじゃないかな。私達は、何か強い縁で、結ばれているのかも」

「何を言ってるのか、さっぱり」

「慣れないことを口にしてるのはわかってるよ。私だって、こういうのは初めてだから。頭が回らなくてさ。わかる?」

リリアーネは起き上がり、部屋の中をうろつき始めた。熱そうに、顔を手で煽っている。下田はよく確認してみたが、別に室内の温度はちよūdい範囲だつた。目の前の女性の方がおかしくなっていることは明らかだつた。

今までと様子が違うのはどうしてだろう。やはり、本気でやり過ぎたのがいけなかつたのか。こちらにも調子に乗っていた部分はある。彼女の攻撃に、鏡のような対応をした。それはもはや、真似という段階ではない。彼女の技を、下田は愛していた。嫌だつたが、心から尊敬していた。その感情が相手にも伝わっている。

「エルドリツチが、君に膿を入れたのは、警戒をしたからかな。いや、そんなことはどうでもいいか。今、大事なのはそこじゃないね」

リリアーネは、自らの服の裾に手をかけた。

「提案が、あるんだけど」

「何ですか」

「私と誓約を結ばない？ 黒教会に入れてあげる」

「意味が分かりません」

「気に入ったってこと。君をちゃんと育てていけば、王になれるかもしれない」

こちらを向いて、艶やかに微笑む。

「王？」

「私達が仕えるべき存在。正しい世界の礎になるもの。私達は長い間探していた。それを見つけるのが、使命だったから」

彼女のすぐ横に、何かが現れる。

まず目につくのは巨大な甲羅のようなものだ。それを背負った腰の曲がった老人。一見そう思えるのだが、明らかに見えない部分の構造が人間離れしていないと、説明のつかないような形をしていた。蛇のように曲がった首が、下田の方へと向く。

「間違いありません。この方の器には、何か特別なソウルが宿っております。おそらくその量も膨大」

「ヨエルは、見逃したみたいだけどね」

「大王に惑わされたのでしょうか。あの太陽の輝きに目がくらみ、真の器を見誤った。タカキという男は、あまりに傲慢が過ぎる。我等を導く使命には合わない」

下田は、もうこの二体を殺すべきかどうか思索していた。この回は無駄になってしまいうだろうが、この胡散臭い事態が進行しているのは気味が悪い。

隣に立つ白い女性が、警戒をしているのも印象的だった。特に甲羅の男に向かって、鋭い視線を投げている。下田に向かって大きく首を振ってみせた。

わかっている。相手がどんなことを言っただろうとも、信じてはいけない。

「僕だって、そんなものにふさわしくはないと思いますけど」

「ううん。そんなことないよ。自分をちゃんと見てごらん。もう膿が、顔に届きそう。そんなに浸食されていても、平然を繕えているんだ。君は、深淵に適合している」

「だから、思わせ振りのことばかり言われても、訳が分からないんですよ。適合しているから、どうだって言うんですか？」

「苛々しないですよ。君だって、共感できることだから。火継ぎなんかで、世界が良くなつていくと思う？ あの仕組みは、神々が勝手に決めたもの。無駄な使命。そんなもの、失くしてしまえばいい。火が灯されず、闇がやってきたとしても、それが本来の世界の姿だよ。そこで私達が思うがままに支配をする。亡者の王の下で」

そして、甲羅の男も続ける。

「カアス様の再臨を。かの偉大な世界蛇の悲願を叶えるのです。我らがともに歩んでいけば、新しい世界を創造することすら容易い。シモダアキヒロよ。お嬢様の誓約を受け入れるのです」

線が、伸びていた。真つすぐ急所へと続く。下田はそれを認識してもほつといていた。なぜなら、自分に向けられたものではなかったからだ。

リリアーネは、甲羅の男に何度も短剣を刺した。どす黒い血が床を汚していく。突発的な行動でもなんでもなく、彼女は初めからそうすると決めていたかのように冷静だった。

「寝ぼけたことを、言わないで」

「何、を……」

「ばいばい」

男は、その場に倒れて消えていく。そこから出たソウルは、彼女に回収された。短剣の血を振り払うと、下田に向かった肩をすくめてみせてから、椅子に座る。

欠伸をしてから、彼は尋ねた。

「何してるんですか？」

「この空間に、邪魔者はいらぬ。今は、私と君だけで話したいの」「大丈夫なんですか。後が大変そうですけど」

「いいのいいの。まだ古い考えに縋りついている者もいるってだけだから。要は、君をただの道具にしたくはないってこと。対等な相手として、一緒に歩んでいきたいんだよ」

「まだ、わからないんですけど」

リリアーネは再び立ち上がり、ベッドに近づいた。下田のすぐ横に腰かけて、彼の顔をじつと見つめた。彼女の目は、どこか吸い込まれそうだった。

「祭祀場の思惑から外れるには、相当の苦労が要る。ヨルシカとグウィンをどうにかするのは、難しいからね。でも私達と君が協力すれば、望みは繋がる」

「反逆するんですか？」

「別に元から、奴らの仲間になったつもりなんてないよ。最終的な目的も違ってるしね。相手もそれをわかってるから信用されてない。でも、君は違う。信用というよりは、ただ警戒されていないだけかもしれないけど、付け込める。でも、まあ、そんなことよりも」

自分自身の髪に、手櫛を入れる。それだけで、リリアーネ本人の気配が濃厚になった気がした。下田の方へ、さらに顔を近づけてくる。「言ったよね。気に入ったって。君がどういう経験を得て、そこまで到達したのか、じっくりと話してほしいな。もっと知りたいんだよ。私の欲を満たしてくれるかもしれないから。代わりに、私の事もちゃんと知ってほしい」

手が、首から胸にかけてゆっくりとなぞられていく。彼女は服をつかむと、見せつけるように脱ぎ始めた。下着は身に付けていないらしい。素肌が晒される。

「どう思う？」

「良いんじゃないですか」

「それだけ？」

自分の事を知ってほしいと思った理由は、何となくわかった。彼女の胸からお腹部分にかけて、大きな傷跡が刻まれている。醜くはなかった。それを付けた者の技量のおかげか、真つすぐで余計な力が込められていない。

それよりもさらに特徴的だったのは、その傷跡の上に輪ができていたことだった。淵が濃い黒で、淀んでいる。黒い輪。下田は、何度も見たことがある。亡者を解剖する時に、いつも目に入っていた。

「引き締まっているとは思いますが、やっぱり理解できません。ど

うしてこういう細い体で、あんな馬鹿力出せるんですか」「わざと?」

リリアーネは下田の右手をつかんできた。そのまま優しく引つ張ると、自身の胸元に触れさせる。ちようど輪の真ん中に。

「君はさ、死んだことある?」

「それなりに」

「じゃあ、亡者になったことは?」

指先から伝わってくる弾力の方が気になっていた。離すべきかどうか迷ったが、彼女は真剣みたいだった。抑えてくる手の力も、結構強い。

「そんな経験があったら、今ここにいませんよ」

「私がかつてそうだったと言ったら、軽蔑する? この、ダークリングの事もちゃんと知ってるみたいだし。あえて指摘しなかったのは、わざと? 気遣いかな」

「どうして、貴方なんかを思いやらなきゃいけないんですか」

「でも、素直にはなつた方がいいよ。客観的に見ても、醜いと思うし。だから、どう思うって訊いているんだよ」

下田は頭が痛くなってきた。今の会話が、リリアーネの望みにそぐわないという理由だけで、長引かせられている。これからもたくさんやることがあるというのに、彼女の自己満足のために消費させられるのは、正直嫌だった。

「つまり、そのダークリングとか、傷跡の事を、悪く言っただけですか? 自分が思っていることを肯定されたいんですか? だとしたら、残念でしたね。僕は、そんなこと少しも思っただけから」

今度は、彼からリリアーネの方へと近づいた。

「まず、貴方が目の前で脱いでいるということで、頭が一杯なんですよ。たかだか傷とか、黒い輪ぐらいで、台無しになるわけがない。別に綺麗だと思いますけどね。胸のあたりにも黒子があるのは、魅力的ですよ。言いたいことはわかりましたから、早く服を着てください」

リリアーネは、悪戯っぽい笑みになった。下田の手を放すどころか、肩の方に押し付けてくる。少しだけ前かがみになって、上目遣い

をしながら言ってきた。

「そういうこと言ってくれるの？ 私、口説かれるの初めてかも」

下田は身を引いた。その分だけ、彼女はさらに距離を詰めてくる。二人の移動で、ベッドが軋んだ。

「近いです」

「割と動揺してる。私も緊張してるよ。ほら、聞いてみて」

彼女の動きは俊敏だった。もちろん、かわそうと思えばできただろう。しかし、目の前でわずかに揺れる胸や、伸びてくる腕を見ていると、抵抗する気持ちの中々出なかつた。それに今の状況にあまりついてこれていないのは確かだ。

抱き寄せられて、片耳が彼女の胸の中心に付けられた。ともに訓練をする中でかすかに漂っていた彼女の香りが、今や感覚全てを覆っていた。

「鼓動がしてるでしょ。これからも、たくさん聞くことになるかもね」
「離れてください」

「嫌なら、本気で抵抗しなよ。ま、続けるけど」

諸共、後ろへ倒れていく。彼女の髪が下りてきて、頬にかかった。その隙間から、爛々とした目が下田を射抜いている。深い吐息が、下田の口を撫でた。

「目を逸らしちゃ、駄目」

両の頬に手を添えてくる。もはや、リリアーネの顔と鼻がくっつきそうな距離までになっていた。彼女の唇の動き一つ一つが、はつきりと感じられる。

「どうして、こんな…」

「深い結びつきが、必要なんだよ。誓約がより強まる。私は、君に死んでほしくないし、どこかへ行つてほしくもない。ずっと、私たちの使命のために一緒にいてほしい。初めて？ 大丈夫。きつとそんなに難しくない。協力して、いいものにしていこうよ」

傍らで、白い女性が微妙な顔をしていた。見つけていいのか、迷っているようだ。下田と目が合うと、諫めるように首を振ってくる。だが、リリアーネが彼の下半身へと手を伸ばすと、慌てて姿を消した。

なぜそこは気を遣うのか、下田には可笑しく感じた。

そして、声にも出ていたようだ。

「面白そうだね。その笑いは、何？」

「なんだか、その、自分が情けなくて」

下田は腕を伸ばすと、リリアーネの背中に回した。そして力を入れる。彼女は少し息を漏らしてから、降りてきた。密着する形になり、彼の顔が胸で覆われる。

「わ、積極的」

「やつぱり」

「ん？」

「危なかったです。直前まで、流されそうになりました。貴方の鼓動を聞くまでは。存在を、感じるまでは」

下田は、吐き気をこらえていた。

ゆっくりと腕を突き出して、リリアーネをどかす。ベッドから半身を起こすと、彼は溜息をついた。

「わりと、覚悟のいることだったんだけど。ここまできて、やめるの？」

リリアーネは手で頬に触れてくる。耳にかかっている下田の髪を撫でた。くすぐるような、情を煽るようなしつこい撫で方だった。

「貴方という女性に、不満はないんだと思います」

「じゃあ、どうして？」

彼女は子供のように目を細めた。その人間らしい行為に、下田の中の違和感はどんどん膨れ上がっていった。

「貴方の心拍の音を聞いて、変に感じたんですよ。いや、もちろん人間と同じなんですけど。違うんです。同じこと自体がおかしいというか」

目が、興味深そうに続きを促している。

「だって、僕と貴方達は違うじゃないですか。貴方達は、人間じゃない。相容れない存在なので、こういう行為もおかしいと思います。変です。気持ち悪くないですか？ そもそも、僕なんかとする価値なんてあります？ そういうこと色々考えちゃって。気分が乗らないみ

たいな」

「難しく、考えないほうがいいよ」

手が、首筋にまで下りてくる。

「君の事が気に入った。それで十分でしょ？　これから長い間一緒に進んでいくんだし、もっと仲良くなった方がいいよ」

「何ですか、それ」

リリアーネは、自分の胸に触れた。ダークリングを見せつけるようになぞった。

「火継ぎの解体。それは君達灰の命も、助かるということ。少なくとも利害は一致しているんじゃないかな。私達の使命を叶えれば、何もかもが上手くいく」

「使命」

下田は繰り返した。次第にその言葉が頭の中で鳴り響き、耳障りな雑音を増やしていく。首を回して、その苦しみを紛らわせた。だが、目の前の彼女の事を考えると、さらに不快感は増大していく。

深呼吸をしてから、彼女と顔を合わせる。相手の表情は、意表を突かれたようなものになった。

喉を震わせる度、そこが熱くなっていく。

「使命、使命、使命、使命、つて、鬱陶しいんだよ。皆その言葉を使えば、何をしても許されると思ってる。うんざりなんだ。どうでもいいんだよ。人間でもない化物どもが、一丁前に言葉を飾るな。むかつく。知らないよ。お前達の使命なんて知ったことじゃない。お前達の世界がどうなろうと、関係ない。勝手にすればいい。僕の使命を、教えてやろうか。こんなくそつたれな世界からさっさと脱出することだ。お前たち全員を、ぶっ殺してから」

すでにこの世界の住人の事を、同列には考えられなくなっていた。もう、どれだけ祭祀場の者達を殺しただろう。彼らを同じ人ではなく、ただのものだと思えるようになるまで、そう時間はかからなかった。そうすることで、下田の倫理観は守られていた。

だが、目の前のリリアーネをそうと考えられるのかは、まだわからなかった。一度も、殺したことがないからだ。それでも、どうせ何と

も思わなくなっていくのだろう。

下田がはつきりとした殺意を向けても、彼女は身を引こうとしなかった。それどころか面白い見世物でも見ているような、楽しそうな笑みを向けてくる。

「フフ、でもさ、その言い分はおかしいんじゃない？ 君はまるで、この世界の事を他人事みたいに言うけど。わかってるんでしょ。だ――

――

ずきずきと、頭が痛んだ。ひびが入ったかのようだった。

下田は喘ぐ。何度も呼吸をした。額に拳を叩きつけて、この苦痛を外へと追い出そうとする。惨めなうめき声も上げた。相手の声をかき消すように。

「やめて、ください。何も、聞こえません」

「だから、――

――」

「わかりません。もっとちゃんと話してください」

リリアーネは初めきよとんととしていたが、やがて大声で笑い始めた。今まで一番遠慮のない大きさだった。胸に手を当てながら、目に涙を溜めて声を出している。今までの回と比べてみても断然楽しがっている様子だった。

「うるさいです」

「ごめん、だって、君、クフツ、アハハハハ。酷すぎる。逃避もここまで来ると、滑稽だねえ」

「喋らないでください」

「自分に都合の悪いことは全部消えてくれるんだ。便利ー。ねえ、本当にどんな経験したらそこまでになれるの？ 前に会ったのは、イェルシールの所だよ。そこからどんなことがあったの？ 普通、こんな短い期間でそこまで頭がおかしくはならないよ」

「いい加減にして」

「ますます、欲しくなったなあ。君くらいの方がちよどいいよ。深淵になじむためには、多少たがが外れてないかね。大好きかも、シモダのこと」

「ちかづくな」

もう、我慢ができなかった。

殺してもいいだろうという思考になる。インベントリから、月光の短剣を取り出そうとする。その動きを、リリアーネも認識していただろう。しかし、彼女はまた動かなかった。この部屋に近づく気配を、感じ取っていたからだろうか。

「リリアーネ、何をしている？」

扉を開けて入ってきたのは、ユリアだけではなかった。おそらく、約束の時間を過ぎていたからだろう。心配してくれていたのか、実織もいた。そしてその付き添いなのか、新宮もいる。彼女たち二人にさらについてきていたのか、ちとせもいる。そして明らかに興味本位だけについてきたのか、高坂もいる。

下田は自分の顔を手で覆った。それは別に、羞恥からではなかった。

一瞬間の後、リリアーネがわざとらしく胸を隠した。なのに下田に対してはほとんどくつつくような距離にいる。

「まじかよ」

気の抜けたような声が、高坂の口から洩れる。それを皮切りに、皆がそれぞれ気まずい反応を返してきた。ユリアだけが、平然としている。

「この灰達の対応が面倒だった。あまり時間はかけるな」

「もう終わったから、大丈夫だよ。君、意外と情熱的だね」

頬を人差し指で突かれる。

その指をつかみ、もう片方の手でリリアーネの体を突き放した。彼女は素直にベッドに倒れ込んでいく。それでもくすくす笑いは止まっていなかった。

「何もしてない。この人は、嘘ついてる」

「でも、流されそうになったとは言ってたけど」

例えばここに自分とリリアーネ以外誰もいなければ、既に殺していたはずだった。この回が無駄になったとしても、雑音をこれ以上聞かなくていいはなかった。

ちとせの視線から、自分の顔を手で遮る。殺意の名残がある表情

は、あまり彼女や他の生徒達に向けるものではない。相当、醜いものだろうから。積み重ねの中で研ぎ澄まされてきた憎悪は、敵にだけ見せるべきだ。

ゆっくりと着替えているリリアーネを見る。

何を企んでいるのかは興味がない。

なぜなら、もう少しで、彼女は。

(4783億1219万9847)

もう少しで。

(5316億3256万7864)

これだと思った回では、演技をする。

記憶にある限りでの、最初の週における自分を模倣する。

一人では、亡者の集団にもかなわない、弱い自分を。

もちろん、誰かに戦闘の指南を請うこともない。修練上で、詠唱の反復を行わない。奇跡の実験体を探しに単独行動なんて、もつてのほかだ。宇部に罵られながら、皆の後ろで支援をする。適度に怖がるふりをする。

情報の優位性。

下田は、敵の力量を把握している。反対に、敵は彼の全ては知らない。その差が、最も大事だった。どんな達人でも予想外のことはある。

フォドリックまでは、自分の一番得意な戦い方を温存する。そし

て、術に頼る傾向があるということを、相手に印象付けさせる。魔術がなくては、決め手に欠けるという思い込みをさせる。

フォドリックのとどめを刺し、下田は走る。周囲に五本の矢が出現する。同時に、沈黙の禁則が効力を発揮した。ここから先は、術に頼れない。

片手剣をしならせ、斜めに回転をする。絶対にかかせない位置の魔術だけを斬り落とし、他は体をひねって避けた。

武器が、破壊される。耐久値の限界。所詮は習作だ。数時間で拵えたものに過ぎない。

リアアーンへと接近しながら、インベントリから二本の短剣を取り出した。やはり、これだ。とてもよく手になじむ。家族よりも、多くの時間を共にしてきた。自分だけで打ち直して作ったので、愛着は相当ある。

ユリアが割り込んでくる。一方で、フリーデが下田の死角に回り込もうとしていた。グンダが飛び上がる準備をしている。リアアーンは詠唱を続けている。

やはり。下田は、自分の想像が正しかったことを確認した。

ユリアの刀の一本目を破壊。月光を放ち、ヨルシカの魔術を相殺する。右手と左手を、別々の意識に担当させる。利き手はCに、もう片方はBに。残るAは、足の動きを担当した。必要最低限の動きで、相手の連携にはまらないようにする。

そろそろだ。グンダが、本格的に参加してくる。彼の強みは斧槍のリーチの長さだが、三姉妹がいる中では容易に振り回せない。だから、彼は後回しだ。最後に殺す。

線が交錯した。温度が微妙に異なっている。二人分の攻撃をいなす時は、その線が重なる部分を狙う。斜めに刃を傾け、腕の動きも連動させる。まともに受ければ持つ手ごと粉碎されるであろう攻撃も、受け流すことができる。

前の、ジークバルド、シーリス、フォドリックの組み合わせよりも、劣っている所が一つだけあった。ずっと思っていたことだ。この四体の間には、確固とした信頼がない。だから、一人で戦う時と、複数

と戦う時の差が、それほど大きくはならない。難しさが掛け算されていくことがない。

本当の姉妹ではないということは、もうわかっていた。誓約の上での、家族という意味だろう。だがその意味を何よりも重んじようとしているのがフリーデで、一番軽く考えているのがリリアーネだ。彼女たち二人に挟まれているのが、ユリア。

と、途中までは思っていた。

惜しい。

惜しい、惜しい。

ユリアとフリーデの攻防は、噛み合っていない。どちらも、研ぎ澄まされた技術と、万物に愛されたかのような才能があるというのに、同時に戦うと、そうでもなくなる。

最初、フリーデの事を恨んでいるのはリリアーネだと思っていた。そういう、言動が実際にあったからだ。

しかし、正しい認識ではなかった。リリアーネは、正確にはフリーデに取りついた不純物を忌み嫌っていた。薫という存在を憎み、消したがつっていた。カアスという、心酔の対象を殺したのも、薫なのだ。事実かどうかは関係がない。フリーデが傷ついた時のリリアーネの反応が全てを物語っていた。二人は、血が繋がってなかつたら、姉妹であることは確かだった。

だが、ユリアは、違う。

おそらく、彼女の方が、フリーデ自体を恨んでいる。その根本的なことはわからない。知りたくもないし、興味もない。

大事なものは、それが戦闘にも色濃く表れているということだ。

グンダの動きも、連携を乱す要素になっていた。

もちろん、それは普通の乱れではない。砂の一粒、細胞の一つ分だけ、最善からはみ出している程度の誤差だ。普通なら、乱れと認識すらされない。もし初めて戦うのなら、下田は何もわからずに、殺されていただろう。

それを経験で覆した時の、

「実織さんに、懺悔しながら、死んでください」

不可能を可能にした時の、
解放感といったら。

全能感といったら。

快樂と、いったら。

はつきりと表れた点に向かって、落ち着いて刺す。そこはちょうど、フリーデの首があった。彼女の鎌はギリギリで、下田に届いてはいなかった。

うなじに向かう線が、温くなる。殺意の緩み。斬撃の鈍化。ユリアは、間違はなくほっとしている。やっと死んでくれたという思いが、滲み出ている。

下田は既に、左の短剣を放っている。

ユリアは反応できていない。多少、不意を突かれた様子だったが、十分に短剣を弾ける体勢になっていた。

月光の名を冠した、短剣でなければ。

手から離れていても、つながりを感じる。常に自分の傍にあるような気がする。優れた武器には、意思があるのではないかと、本気で思っていた。長い時間をかけて、ようやく、本当の意味で所有者として認められたのだと、今、わかった。

何様のつもりだ。

下田は、短剣との間にあるつながりを、乱暴に手繰り寄せた。刃が薄く緑色に光る。ユリアの持つ刺突剣が当たる直前で、月光が四方に散乱した。

斬撃を飛ばす時、下田自身の気力をぐっすり使う。いわば彼が燃料で、短剣が放出機関だ。しかし、短剣の方も燃料になり得ることが、今までの試行でわかってきていた。その刃自体に宿る魔力を利用する。

無理やり解放させたことにより、短剣は暴れた。その無茶苦茶な軌道が、ユリアの予想を大きく外れて、彼女の胸に無数の斬撃を浴びせた。刃が放出に耐えられなくなり、爆発した。さらに彼女の体は斬り刻まれた。

「どうしたんですか？」

グンダの斧槍をかわし、リリアーネへと踏み込む。彼女が二本に対し、こちらは一本の武器しかもっていない。手数で押され、下田の方にも傷が増え始めた。

「いつもみたいなのに、へらへら笑ったらどうですか？」

リリアーネは無表情だった。何度もこちらの急所を狙ってくる。わりと怒っているらしい。かけた言葉にも、返事はない。

彼女にとっては、今の彼はほとんど関わりのない者だ。ただの、姉妹二人を殺した仇。

攻撃は苛烈を極めた。

が、足りない。

いつも模擬戦をしていた時のような、遠い感じはしない。

なぜなら、彼女は別のことにも、意識を割かなければならないからだ。下田にずっと、沈黙の禁則をかけ続けなければならぬ。すでにわかっていた。その術は、効果時間が決まっている。常に更新をしなければ、いずれ終わってしまうのだ。

だから、彼女は意識の一つを詠唱に当てなければならなかった。戦っていて、よくわかる。彼女は二つの意識を使い分ける。下田のように、三つを扱うことはできない。

ちやり、と鎖の音がした。耳にした瞬間、頭を低くした。斧槍がすぐ上を通り過ぎる。

その、かわした隙を、リリアーネは見逃さなかった。

下田の右手が、飛ぶ。切断された勢いのまま、地面に転がる。残された一つの短剣が、彼から離れていく。

不思議でならなかった。

彼女は、大きな間違いを犯した。

なぜ、首や他の急所を狙わなかったのだろう。武器を必要以上に警戒してしまった。もちろん、その判断をするのはわかる。安易にとどめを狙わずに、確実性をとったのだろう。まだ沈黙は効いている。武器も失くした下田は、もう何もできない。インベントリから予備を取り出す時間もない。

リリアーネは、正確に首へ向けて短剣を振るった。

一手。

たった一手、彼女はわずかに外れてしまった。

片足を前に出して、構えを作る。摺り足で即座に相手の懐へ入り込んだ。彼女の左手を無事な方の手の甲で弾いた。

彼女の目はあざ笑っていた。だから？ とでもいいかげだ。わかりきっていることだ。彼女は二本の武器を持っている。もう一方の短剣が迫ってきている。防ぐ手立てはないと、相手は考えている。

右手を、下田は構えた。

鋭く息を吐きながら、拳を弾けさせる。散々習った正拳突きを崩さずに、真つすぐリリアーネの顔めがけて放った。同時に、彼女の短剣が首に突き刺さったのを感じた。その痛みや衝撃よりも、痛快な気分の方が勝っていた。

彼女の体が、地面に叩きつけられる。背中を強く打つても、もがこうとはしなかった。既に、動ける状態ではなくなっていたからだ。

手を彼女の潰れた顔から引き抜き、奇跡で浄化する。ついでに、完全ではない再生の助けにもした。いくら竜の力と言えど、斬られた右手を一瞬で完治させるほどには至らない。

左手で、首に刺さった短剣を抜いた。奇跡の光に包まれながら、解放感に浸る。だが、達成感に包まれるのには早かった。叫ぶのは、我慢をした。

グンダが突進をしてくる。そこへ向けて、魔術を展開した。

既に、一対一だ。グンダの動きも、理解が進んでいる。姉妹達ほど素早くはない。体格差を生かして、低めに立ち回れば、倒すのは造作もないことだ。術の封印が全て解けた今では、戦いの選択肢が大幅に増えた。

十数秒ほど経って、下田は限界が来た。そして殺された。

「…」

「静かだな」

「…」

「二人ともなんか話せよ。寂しいだろ」

「考えてるんですよ。貴方は気楽そうでいいですね」

「いや、だから話せよ。俺らで話し合った方が、やりやすいだろうが」

「理に適ってるけど、話すことある？」

「…」

「…」

「…」

「ほら」

「グンダなあ…」

「特には。というか、どうしろっていうんだろう」

「まだ、たいして回数を重ねていませんし。別の方法も調べていきましよう」

(6098億4365万3428)

ぱっと思いつくのは、目を狙うことだ。そこだけは装甲がない。覗く赤い目を潰してやれば、多少は、影響を与えられるだろうか。

失敗。

目をピンポイントに狙い、当てたとしても、グンダにはまるで効果がないようだった。目自体が傷ついている様子もない。ソウルの弾丸が、ただ砕かれるだけに終わった。

ならば、関節部分だ。少しでも破壊することができれば、動きが鈍ってくれるだろう。目を狙うのは早計だったかもしれない。相手だって、自分の弱点を補強するくらいの考えは持っている。だが、複

数ある関節部分の全てを完璧に防護するのは難しいだろう。

失敗。

そもそも魔術がまるで通らない。何本同じところに撃ち込んでも、融合させて派手に暴発させても、傷一つつかない。体の、あらゆる部分を狙っても、下田の攻撃は通用しなかった。グンダの攻撃は避けられるのに、倒せない。倒せないからその内殺される。

その他に様々な角度で試行をした。グンダ自身の武器を使って、傷つけることも考えた。だが、どんな攻撃をしようと、相手には効果がなかった。

下田は思い返す。貴樹が怒り狂って、自分達を殺そうとした時のことを。あの時、グンダが彼と戦っていた。勝敗はほぼ一瞬でついていたはずだ。グンダは、天井まで蹴り飛ばされて、突き刺さった。傍目から見れば間抜けな光景だったが、当人にはかなりの衝撃が来ただろう。

それでも、次の日には平気で動き回っていた。いや、天井から抜け出した直後から、グンダはいつも通りの状態を取り戻していた。

あの貴樹の攻撃でさえも、通らない。下田がいくら試行錯誤しようと、通用しないのは当たり前なかもしれない。その硬さは、異常だ。彼には、急所というものが存在しない。今までの、首などを刺せば殺せていた状況とは、あまりにも違う。

結局粘られて、下田がかわしきれなくなる。既にそれまでの戦いでかなり限界に近付いているので、時間はほとんどかけられなかった。

かといって、避けることも不可能だ。たとえ無視してヨルシカに向かったとしても、グンダという駒は非常に大きく響いてくる。あの長い斧槍を常に警戒しながら戦うというのは、あまり現実的ではない。「グンダの、これまでの戦いを考えてみましょう。この繰り返しではなく、この世界に来てからのことをです」

「かといって、あいつが戦つてるところなんてたいして見てないぞ。それこそ、さっき言った先生とくらいだ。ほとんど参考にならない。後は、罪の都だな。だが、雑魚との戦いは思い返しても無意味だぞ」
「まだ、あるよね」

「あん？」

「もう一つ、グンダの戦闘を間近で目にした時がある」

「確かに」

「あー、墓所か。最初の所だな。今思えば、あの審判は効果的だった。死の恐怖を味あわせることで、エスト瓶を飲ませる口実を作れる。だがあれも酷いもんだったぞ。俺達生徒も雑魚じゃねえか。意味が……」

「あつ」

「なるほど」

「おいおい、俺達は間抜けか？　なんで今まで、思い出せなかった」

唯一。

たった一回だけ、グンダの血を見たことがある。

やったのは、丸戸だ。

初めてグンダを目にした時、彼は動いてはいなかった。墓所の修練場の真ん中で、膝をついていた。その胸のあたりに、剣が刺さっていた記憶がある。それを丸戸が引き抜いて、彼を目覚めさせたのだ。

そう、唯一だ。あの堅牢な体を貫いている刃を見たのは。あの螺旋の刃を持つ剣。あれだけは、通用するのではないか。グンダを殺せるのではないか。

重要なのはその所在だった。下田はあの墓所での戦いの時、最後までできることはできなかった。抜かれたあの剣が一体どうなったのかはわからない。

灰の墓所を隅々まで探してみても、見つからなかった。探している途中、妙な引つ掛かりを覚えたものの、それは螺旋の剣とは関係のないことのような気がして、すぐにかき消した。

とにかく、武器についてわからないことがあれば、あの男に訊くようにしていた。

「お前が言っているのは、火継ぎの大剣のことか？」

アンドレイは意外そうに訊き返してきた。下田がその武器の存在を知っているということ自体が、異常であるかのように。

「何ですか、それ」

「最初の篝火の芯を成すと言われているものだ。選ばれた者にしか握られない。刃が螺旋状になっている武器と言えば、それくらいしか思い浮かばない」

下田は額の汗を拭きながら、腕を振るった。この巨人の鍛冶師の機嫌を取るために、その仕事を手伝っている。代わりに、必要な情報を得ているというわけだ。

だが彼には、アンドレイの口ぶりが気になった。

「なんだか、聞いているとまるでおとぎ話の産物みたいですが。僕が言いたいのは、それとは違うと思います。貴方も、見たことがあるのでは？ 僕達がここに来る前に、グンダさんの体に刺さっていたものです」

とたん、アンドレイは興味を半分ほど失くしたように手元を見始めた。

「ああ、そつちか。あれは武器じゃない。俺の興味からも外れている」
「今どこにあるか、知っていますか？」

「あれは一種の儀式道具だ。楔でもあり、芯でもある。お前たちが散々目にしてきたものの中に、紛れ込んでいるはずだ」

楔、儀式道具。

儀式。

散々目にしてきたもの。

「篝火、ですか」

「その通りだ。お前、まさか取り出そうなんて考えちゃいないな？」

俺は止めんが、周りは違うぞ。火継ぎ自体を否定する行為になりかねん」

下田は薄く笑う。

「そんな大それたことはしませんよ。それに、借りるだけです。使い終わったら、元の場所に戻せばいいんでしょ？」

「どうだろうな。勝手にしろ」

下田には、躊躇いがなかった。なぜならその行動をする時には、既に祭祀場の何もかもを否定するも同然の有様に、なっているからだ。

広場に戻り、篝火の前に立つ。何度も見た光景だ。転移の基、火継ぎの要。重要なものであることはわかっていたが、今まで正面から深く考えたことはなかった。

周りを確認する。今の時間帯は、ほとんど人気が無い。一番篝火の傍にいる時間が長いイリーナも、自室へと戻っている。

視線を上へ向ける。ただ、全くの無人になるというわけではなかった。

ルドレスは石の玉座の上で目をつぶっている。頬杖をつきながら、何か考え事をしているようだった。眠ってはいない。つまり、これから下田がすることを認識する可能性がある。

見えない体を、解除した。そして、篝火へと手を伸ばす。

炎の中に入っても、熱さはなかった。燃えないというわけではない。選ぶことができる炎なのだと、彼には分っていた。薪、犠牲者。それらのみを燃やす。容赦なく。

ルドレスが身じろぎした。

構わず、下田は篝火を探る。芯となっているものだから、かなり奥部にあるのだろう。組み立てられている木々は強固だった。多少無理矢理かき回しても、びくともしない。徐々に破壊衝動が湧いてくるのを感じた。この火継ぎを象徴するものを、滅茶苦茶にしたい。

そういったものを抑えて、ようやく柄らしきものを掴んだ。かなり大きめだ。月光の大剣かそれ以上の刃渡りを持つと推測される。

「やめておいた方がいい」

ゆつくりと、置物のようだった男を見た。

ルドレスは静かに首を振っている。

「洗礼を受けるぞ」

「それは、どういう？」

「君は、選ばれていない。身の丈に合わないものを得ようとする、必ず報いがやってくる」

下田は鼻で笑った。

自分の中の醜い衝動が大きくなる。

「じゃあ、ルドレスさんは選ばれてるんですか？　そこに座ってます

もんね。薪の王の一人であるわけですし」

「何が言いたい？」

「そして、祭祀場の戦士達も、選ばれていると言えるでしょうね。火継ぎの使命を叶えるべく、選ばれた。まさに選りすぐりの戦士達だ。素晴らしい」

柄をさらに強く握る。周りの炎の温度が上がった気がした。

「だから、何だっというんですか？ それでも死んだ。ほとんどが、選ばれていない僕なんかに殺された。何の意味が、あるんでしょうね。たとえこの剣がどれだけ扱いが難しくても、いつか必ず何とかしますよ。今までも、そうやってきましたから」

ルドレスは、はつきりと目を開けた。

「君は、何を…」

歯を食いしばり、一気に引き抜く。

途端、篝火が牙をむいた。炎が一気に吹き上がり、下田へと襲い掛かる。それはもう、無害なものではなかった。全身を包まれて、熱という激痛が駆け巡る。

螺旋の大剣を振るおうとしても、無理だった。その前に、下田の両腕が炭化した。奇跡を使って再生しようと思いついたところで、意識を失った。

(6983億1231万7859)

術の精度は、精神状態に大きく左右される。

正直、燃やされながら奇跡を行使するのは、かなりの難題だった。ただ不可能ではない。他の意識が術を担当すればいい。痛みや苦しみを客観化して、他人のように扱う。

問題は炎の勢いだった。そもそも回復が追い付かない。辛うじて、右腕だけは維持できる。竜の再生力と奇跡を合わせて、ようやくとい

うことだ。意識を保てるようになってきたが、奇跡を大量に使ったせいで、かなり消耗する。ただでさえグンダ戦の前の時点で、疲れ果ているというのに、それも加わるとなれば、ヨルシカまで体力が残るか疑問だった。

ならば、事前に取っておけばいいという考えもあるかもしれない。しかしあの剣を引き抜けば、篝火はほとんどの機能を失う。祭祀場の者達にも、確実に気がつかれるだろう。そういう予想外の事態が起これば、ヨルシカは絶対に姿を現さない。彼女はかなり用心深いのだ。それに、他の問題もあつた。どういうわけか、あの螺旋剣をインベントリにしまうことができない。保管庫に入れても、すぐに弾かれる。この能力が、祭祀場の都合の良いようにできているとするなら、これもまた予防策ということだろう。

「使い勝手が悪すぎますね」

「でも、それだけ強力ということでもある。祭祀場にとっては、絶対に敵に渡してはいけないものなんだ」

「だがあの炎に抗うのはきついぞ。儀式の時ほどじゃねえが、回復がおいつかん」

「どうしたものか…」

左の膿が、もぞもぞと自分をアピールし始めた。

『妙案があるよ』

「はいはい」

「そうだな」

「なるほど」

『もう、ちゃんと聞いてよ。建設的な意見を述べようと思ったのにさ。あんたってほんと、人の話聞かないよね』

「おい」

『ん?』

「ちとせの、真似をするな。反吐が出る」

『フフフ、ごめんねえ。多少は、好きになってくれるかもと思って』

「そういうとこだぞ」

「どうせ、こっちの体に乗っ取ることしか考えてないでしょう」

『アナタ達は勘違いをしてる。ワタシと、エルドリツチを同一視して
いないかい？。とんでもないよ。あんなものと一緒にされるのは困
る。ワタシの主人はアナタだし、忠誠も誓っているんだよ。全部、ア
ナタのためになると思ってるの考えなんだ』

「で、そのありがたい妙案とやらは何だ」

『ワタシの部分なら、炎を抑えられる。膿で剣を覆えば、被害は最小限
になるだろう。ワタシの力と少し向き合ってくればいい。簡単さ』
「怪しいですね」

『もちろんリスクなんてものはないよ。人間性の膿は、本来誰にでも
備わっている。意のままに操るのは難しいけど、今のアナタにとって
は造作もないことだ。やってみればわかる』

「どうする？」

「まあ、今のままだと、厳しいのは確かだね」

「胡散臭いですが、どんなことでもやってみる価値はあります」

『決まりだね。大事なものは、憎しみだ。わかるだろう？。殺したい相
手を強烈に思い浮かべる。そうすれば、精神の安定も容易だ。膿の操
作もしやすくなる』

確かに、簡単だった。下田はたった一回で、炎を乗り越えることに
成功した。

(7098億3265万7865)

引き抜くタイミングは、重要だ。

グンダから距離をとる時には、しっかりと隙を見極める必要があ
る。一瞬とはいえ、完全に背を向ける形になるからだ。

成功したら、最短で螺旋剣の柄を取る。突っ込んだ体の勢いのま
ま、篝火を跨ぐようにして、剣を引き抜く。

炎の嵐。視界が埋め尽くされる。だが、下田の左腕が動いた。

仮説は立証された。自分の選んだ道は、正しかった。

下田は奇跡の行使を止めている。余力が残されているのなら、全身を再生させることもできる。しかし成功したとしても、もう術を使う気力が底をついているだろう。だから、今回は諦めるしかなかった。

徐々に暗くなる視界の中で、こちらを見下ろすヨルシカだけを意識した。

「お前だけだ。もう、お前だけだ！ 次から、存分に、思い知らせてやる。やっとな殺せる。殺してやるからなああああああ！」

死にゆく感触が心地いいと思っただのは、初めてだった。あふれんばかりの達成感で、快樂の頂にまで手をかけていた。

(7098億3265万7866)

さつさと、このゲームを、クリアしよう。

(8968億3214万5472)

……あれ？

(9678億2315万9768)

……。

(1兆6477億2455万8876)

思い、知らされた。

ヨルシカに殺される。

51. ヨルシカの実力

(3兆980億5437万3212)

あの人。

なんて、言ってたっけ。

——ヨルシカにも、おそらく。

はは。

——確かに私は強いよ。フリーデも。かなり無理をすれば、祭
祀場のほとんどの相手には勝てる。ヨルシカにも、おそらく。

なんだあの人。

薫さん。

結局、嘘しかついてないじゃないか。

(5兆6454億3156万31466)

ヨルシカに首を寸断される。

(8兆3154億1285万9879)

首に事前に魔術防護を張った。
瞬く間に腹を裂かれた。

(1 1 兆 6 2 6 6 億 4 2 5 万 1 3 4 2)

ヨルシカに殺される。

(1 6 兆 4 2 5 5 億 3 2 1 4 万 7 6 8 5)

ヨルシカに殺される。

(2 4 兆 5 6 4 3 億 3 1 4 5 万 7 7 3 7)

ヨルシカに殺される。

(3 3 兆 8 7 9 0 億 4 2 5 万 2 3 1 4)

こういう時は、先達の例を模倣してみよう。

先生は、彼女も含めた全ての祭祀場の戦士達を相手にして、圧勝し

た過去がある。彼の真似をすれば、打開できるのではないか。

よくよく考えてみれば、鎧などに意味はない。どうせ何を着いても両断されるのだから、できる限り身軽になった方がいい。ただ下着だけは最低限着よう。別に自分は、変態になりたいわけではない。

返す刃だけが、一瞬見えた。

それは青白かった。その色で光っていた。

(56兆8976億3324万1221)

光の刃が、彼女の手から伸びている。

気がつけば、斬られている。

(68兆4325億1243万6758)

線は、見えていた。とても熱い線が。

ただし、一本ではない。あらゆる体の部分に刺さっていた。もちろん、ヨルシカは観音様でもない。腕がいっぱいあって、同時に無数の攻撃ができるわけではない。これはつまり、乱されているということだった。殺意の方向を気取られないようにしている。

下田と同じ世界を、見ているということ。彼よりも、さらに上の次元から。

そう、次元が違う。格が違う。実力が、隔絶している。

(82兆1189億4324万7869)

「憎らしい」

「ぶつ殺してやる」

「殺す、殺す、殺す、殺す、殺す」

下田は嘔吐しながら、地面にはいつくばっていた。だが、こんなものでは足りない。体力の限界が来ても、立ち上がろうとした。

「あんな女が、どうして、強いのでしょうか」

「くたばれ。あのクズが。何だっというんだ」

「死ね、死ね、死ね」

これまでの関門にかけた全ての時間。

その何十倍を消費しても、ヨルシカの最初の一撃をしのぐことができていなかった。

ファランの速剣。

彼女が使ってくるのは、近接用の魔術だ。ソウルで剣を作り出し、振るう。武器自体の重さはほとんどゼロになるので、素早い斬撃を繰り出せる。たったそれだけだ。

下田は、無用だと考えていた。意味が感じられなかったからだ。数回試して、もう二度と使わないと決めていた。

まず、武器を自分でわざわざ作り出す労力が無駄だ。もつと質のいいものを最初からインベントリに入れておけばそれでいい。

さらに、形の維持も困難だった。例えばソウルの矢を飛ばすのは簡単だ。軌道が単純で、操作もしやすい。だが、ソウルで作り出した剣を手で握り、相手の筋を読みながら振るうとなると、話は違ってくる。気を抜けば、すぐに形が崩れて、剣としての役割を失ってしまう。

さらに、それを素早く動かすのには、相当の制御をしなければならなかった。重さも全くななくなるといわけではない。今まで散々あらゆる者の攻撃を見てきた下田の認識でさえ、捉えられないほど速い剣となると。

ヨルシカは、完全に術師型の相手だと思っていた。
だが、大きな間違いだ。

彼女にとつて、魔術は補助に過ぎない。真の強みは、並外れた身体能力にある。

いや、この表現ですら足りない。

例えばどんな達人が、どれだけ長い時間鍛錬したとしても、手の届かない領域。人である限り、そのふもとすら拝めない、常識外れの存在。

人外だ。ヨルシカは間違いなく、人間の体を持っていては到底倒せない類の相手だ。そこには、大きな理不尽がある。

彼女の体格は、それほど抜けてはいない。もちろん身長は下田よりも高い。百九十センチは超えている。だが、腕の太さであったり、そういう見た目から推測できる筋量には、大差がない。

だがあんな細腕で、有り得ないほどの膂力を持っている。

原因は明らかだった。彼女の中には、竜の血が流れている。見た目にすぐわかない力は、そこから来ているのだ。右手だけ竜の力にあやかっている下田からすれば、納得のいく考えだった。

つまり、対抗できるとしたら、右手しかない。

意識が遠のきそうになる。頭に無理やり奇跡を施して、沈みそうになった体を戻した。

まだ、一万を超えた程度だ。自分の体力のなさに、腸が煮えくり返る。

フアランの速剣の連続発動は、三つが今のところ限界だった。それ以上やろうとすれば、意識が断絶する。倒れるまでにはいかないが、集中が一回途切れてしまう。この魔術操作においては、致命的だ。

相手の魔術を理解するには、自分でやってみるのが一番だった。

最近はずつとこれしかしていない。ヨルシカが眼前まで迫る。青白い刃を振るってくる。そのイメージしかしていない。

下田はまたえづいた。右腕が引きつって、さらにおかしな方向に曲がっていた。骨が割れるのも、何度目だろう。だが、足りない。あまりにも進歩が遅すぎる。まだまだ鍛錬が少なすぎる。

自分が、泣いていることに気がついた。

別に苦しいわけでも、悲しいわけでもないのに、涙を流している。認めざるを得なかった。自分は、心を動かされている、感動している。もの凄いことを見せられて、打ち震えている。全身の血が騒いでいる。ヨルシカ自身のことは大嫌いだが、その技は認めるしかなかった。

彼女と自分で違うのは、才能の有無。

そんな、甘ったれたことを考えるのはやめた。どう考えても、経験の差だ。量だけなら、おそらく下田の方がずっとこなしている。何倍も、何十倍も。

質の差だろう。彼女は、自分の恵まれた血と才能に驕ることなく、鍛錬を重ねてきた。

グウインの言葉にもある。ヨルシカが生きてきた年月は、おおよそ数千年。他の戦士達とは、明らかに違う。何をしてきたのかはわからない。最初からあの技能を持っていたわけではないはずだ。得るために、どれだけ素晴らしい経験をしてきたのだろう。

羨ましい。

妬ましい。

憎たらしい。

その気持ちだけはせめて大事にすることにした。精神と肉体は密接なつながりを持っている。頭の中で、あの女の頭蓋を踏み潰す想像を永遠と繰り返し返せば、実現させることもできるだろう。その達成感こそが、一番の賞品だった。下田が味わいたくて仕方がないものだった。

(107兆6543億3144万7685)

「自分が何してるか、わかってんの？」

隠れて、ゆつくりと息を吐いた。白い煙が手の隙間から漏れ出していく。

ちとせの雰囲気さらに剣呑になったのがわかった。やつぱりばれているのだろう。再びやってきた安心感で、思わず笑ってしまいそうだった。

「煙草くらい許してよ」

「その注射器は何？」

ちとせはベッドに転がっている医療器具を指差す。軽い調子で返したのも、火に油を注いでいるようだ。それはそうだろう。下田には、全く悪びれた所がない。注意している相手としても、やるせなさが大きくなってくる。

彼女は睨みつけてきながらも、戸惑いが隠せていなかった。彼女に対する失望も示している。

「どうしちゃったの。ほんとに」

「色々あって」

「色々で、薬にも手を出したってわけ？ おかしいよ、あんた」

下田としても、ちゃんとした理由がないことはなかった。

一度、精神を崩す必要があったと考えたからだ。酒、煙草、薬。人間を墮落させるものにおぼれてみれば、健常者の時とはまた違った天啓を得られるのではないかと。

あらゆることを試した。粉で鼻から吸引するタイプとか、直接肌に刺して注入するタイプとか。

結論から言えば、期待外れだった。客観的な快楽は、中々なものだと思う。だが、下田はいまいち入り込めなかった。一つの意識がぐちゃぐちゃになったとしても、他がまともなままだ。すぐに効果が切れてしまう。それに彼自身にとっては、浅い気持ちよさとしか考えられなかった。

もっといいものを知っている。もっと夢中になれることがある。

そういう人間には、麻薬も意味がないのではないか。新たな発見をした。中毒から立ち直れない人に、ちゃんと進めてみよう。

何度も殺し合いをすれば、薬の快楽なんてどうでもよくなるって。

手が飛んできた。頬をはたかれて、下田は衝撃に酔う。じんじんとした痺れが頬から下へと広がっていく。

「目を覚ませ」

彼女の声は、震えていた。

「寝ぼけてなんかないよ」

「もう、こんなことはやめて。何か悩みがあるんだったら、相談して。こんなのに逃げたって、どうしようもないでしょ。誰かと共有する方がよっぽど、いいから」

目を閉じて、ちとせの言葉をかみしめていた。

麻薬と言ったら。

彼は幸せな気分になる。

これの方が、ふさわしいかもしれない。

『屈折してるねえ』

「何が？」

『母性を、他人に求めるのかい？ はつきり言って醜悪だよ』

「ちとせはいい人だ。彼女に迷惑が掛かっているわけじゃないのに、ちゃんと叱ってくれる。こつちを思いやってくれるんだ。心地良い」

『本来は、親がすることだね』

「……」

『どうかしたかい？』

「最近、声が思い出せないんだ。もちろん、顔はずっと考えてる。母さんの姿を一度たりとも忘れたことはない。でも、どんな声で、どんな言葉を話していたのか、ぼやけてきてる」

『気の遠くなるような、時間が過ぎたからねえ』

「でもそれって、冒読だね。忘れるわけにはいかない」

『だから、他人と比較するのかい？ ちとせの叱り方と、アナタの母親のそれは違う。その違いで、つなぎとめよう？』

「単純に、はまってるのもあるけど。彼女の怒った声って、凄く、ぞくぞくするんだ。……僕、僕ってさ。Mなのかもしれない」

(126兆4352億2211万6757)

「だらあん」

突然奇行を始めた下田に、周りの視線が集まった。大半は何をしてるんだという呆れの感情だ。今がふざけられる状況ではないのは明らかだった。

周りには相当量の亡者がいる。ソウル集めの最中で、まとめ狩りを行っていた。この場にいる生徒達では、多少気を付ければ無傷で乗り越えられる。足手まといが、一人もいなければの話だが。

何やら隊列等を気にする声が上がっていたが、彼は無視した。全身を脱力させて、正面から集団へと突っ込んでいった。

脱力。

最近思うのは、例えばスポーツや音楽においても、この戦闘にだって、余計な力を加えないというのが大事だということだ。変に力むから、動作が固くなる。固くなれば、初動が遅くなってしまう。

脱力しろ。

自分の身体を、固体だと思わないことにする。骨？ そんなものはない。筋肉？ 母親の体に置いてきた。不定形だ。自分は、どろどろになっている。少しでも動けば、今にも中身が全て流れ落ちていきそうだ。

下田は、倒れそうなほど姿勢を低くした。地面に落ちる前に足を出しさえすれば、維持できる。このやり方だと、足に余計な力を入れてなくていい。落下するように、走り出していける。前へと、落ちていく。

下からすくい上げるようにして、速剣を放った。亡者の首が飛ぶ。動作は続く。切れ間がないように連続していく。既に半分ほどを

屠った。連続発動は、十五まで可能になっていた。この場にいる亡者は十三。余裕で間に合う。

腐った血や臓物にまみれながら、空を眺めた。今の彼に近づく者は、誰一人としていない。それでも、構わなかった。徐々につかみかけてきたという確かな実感が、彼の精神に彩りを与えていた。

ヨルシカの初撃に対応できないのは、下田の構造が人間だからだ。目で見たり、体で線を感じると、その信号が脳へと行く。そして判断を下して、動かせという命令を手へと向かわせる。話にならないほど、遅かった。神経伝達の経路には、改善すべきところがある。

要は、手を動かす必要はない。作り上げた魔術の剣が、自動的に反応すればいい。剣がこう動けという命令を、疑似的な伝達網によって、手へと直接向かわせる。その時にはとつくに、剣の方は行動を開始している。手へと伝わった命令は、脳に届く。ただの事後報告だ。本質的な主は、魔術剣の方になる。

融合する。魔術もまた、体の一部だと認識させる。神経ニューロンの複製は、かなり繊細な作業になるだろう。これを戦闘中に、即座に成功させるまでには、まだまだ時間がかかりそうだった。新しい詠唱をいくつも考えて、組み合わせなければならぬ。加えて、そういった神経学の知識も専門家レベルまで身に付ける。

精進の日々だ。

(145兆3245億5647万)

余計な力を消費しないということは、より長く振るい続けられるということ。

「二万ー」

叫んでから、下田は、その場に崩れ落ちた。奇跡の光で全身を包みながら、ゆつくりと立ち上がる。胃液を何度も吐いた。頭が何かにか

き混ぜられているようで、目を閉じればすぐに意識を失ってしまいうだ。腕だけではなく他の部分も筋肉が裏返し、しばらくは起き上がれないだろう。

魔術を使える限界は、そうそう変わらない。下田の容量は、既にかつつのようなだ。だが、限られた範囲の中で効率よく使うようにすれば、最初の十倍以上はもつようになる。

効率。何事も、要領の良さが大事だ。

「わあ、今日も派手にやってるね」

痛みで地面を転がり回っていると、修練場に誰かが下りてきた。

リリアーネは屈んで、下田を見物している。

「ちよつと、頼みがあるんですけど」

「治してはあげるよ。ただどうしてそんなに頑張ってるのか、話すのが条件ね」

「いや、そうじゃなくて」

下田は詠唱を仕掛けた。

「うん？」

「僕の、そうですね、顔に短剣を投げてくれませんか。死ぬくらいの勢いで。ちゃんと殺すつもりで」

「休んだ方が良いんじゃない？ 君、頭に血が行ってないよ」

「冗談じゃないんですよ。本当に疲れてるので、さっさと、やってくださいませんか」

「うーん、そういう言い方されちゃうと、無視したくなるなあ」

声を低くする。

「胸に黒子があると、捻くれた思考になるんですかね」

彼女の手が、ぴくりと動いたのがわかった。

「…私、君に身体見せたことあるっけ」

「自分から、そうしてきたじゃないですか。不安げで、可愛かったですよ。ダークリングを見られて、気持ち悪がられないかどうか、気にしているところも。意外と女らしい部分もあるんですね。大した問題でもないのに、いちいち心配してる」

「気持ち悪いね、君って」

「貴方みたいな存在が人の皮をかぶって話していることの方が、気持ち悪いと思いますよ。ここで何もしないつもりなら、早くフリーデの胸にでも飛び込んだらどうですか。お姉ちゃあんって、みっともなく甘えたら相手もちゃんと受け入れてくれますよ」

意外と簡単だなと思った。

彼女にとっては不快なゴミを処理する程度の感覚なのだろう。

下田は既に剣を作り上げていた。ソウルで構成された先端部分が、線を感じする。事前に組み立てられていた詠唱が発動し、剣がひとりでに反応した。

「うげ」

相手によって投げられた短剣は、綺麗に下田のこめかみに刺さっていた。

お手本のような失敗だ。

ファランの速剣は攻撃の軌道からわずかにずれた所を通り過ぎている。やはり脳で思考せずに動かそうとすれば、正確さを保つのが難しくなる。制御の難易度は、下田の能力の限界をはるかに超えている。

さらに煮詰めなければ、成功は見込めないだろう。

(178兆5366億2145万8797)

軌道がずれる。

詠唱の最適化ができていない。もっとスムーズに反応できるような音節を考える必要がある。詩的な才能は全くないので、既存の言葉からふさわしいものを参照する。膨大な数になるので、根気のいる作業だ。

(214兆3134億6675万9876)

神経網の形成も、上手くいっていない。もちろん数マイクロミリのずれも許されない繊細な作業であることは確かだ。だがそれを、戦闘中に無意識で行えるようにしなければならぬ。丁寧に、それでいて最大限に速く。妥協などいらぬ。

魔術剣と接続し、神経を完全に通す。どの部分に線が当たってもいいように、満遍なく覆う。発動するタイミングは、グンダの上に飛び上がった直後だ。彼を封印すると同時に、ヨルシカの攻撃に対応する。

(267兆5466億1987万5648)

呼吸を止める。

己の中に響くものに、余計なものは要らない。喉に空気が通り抜けていく感覚でさえ、刹那の攻防においては邪魔になる。

(342兆6453億3213万8997)

感覚を絞る。

思うに、人間は恵まれた種だ。五つの感覚を扱えるという時点で、十分すぎるほどに持っている。

だが持ちすぎている、溢れたものが認識を食いつぶしてしまう。

今回必要なのは、触覚だけだ。

目で認識できる頃には、首を斬られている。

耳で把握できる頃には、死んでいる。

殺意の臭いをかぐ頃には、倒れている。

グンダの血の味を噛みしめる頃には、自分の血も飲むことになる。

神経の痺れを感じられれば、それでいい。それだけに絞つて、どこ

までも研ぎ澄ませていかなければ、到底、対応できはしない。

絞れ。

(546兆2013億4325万6570)

ただ速剣を発動するだけでは、足りない。

絶望的な膂力の差を埋めるためには、どのような形で振るうかも重要になってくる。

自分の作り出すソウルの剣は、わずかな重さしかない。だが、その重さもこの次元の戦いでは大きな障害となる。

居合。

疑似的な鞘を、ソウルで作ることにした。いわばレールのような役割を果たす。ユリアとの戦いでよくわかっていた。自分の武器の重さを利用し、推力に変えることができれば、その攻撃速度は格段に大きくなるのだと。

鞘から引き抜き、その勢いのままに、振るう。そこまでしてようやく、相手の剣の速度に辛うじて追いつくことができる。

必要な手順が増える以上、詠唱のさらなる複雑化は免れない。三つの意識の連携をさらに強めなければならない。ただ力を合わせるだけでは駄目だ。それぞれが完璧なパフォーマンスをした上で、本来ならば三つが一つになってようやくできる類の事を、個々で成功させなければならぬ。

(677兆2134億5646万7865)

知覚し、詠唱が自動で反応し、抜劍する。
もはや、その手順を意識する必要はない。

ただ自分は痺れを認識したなと思えばいい。その時は既に結果が決まっている。知るのは始まりと終わりだけでいい。どうせ過程を見ようと思っても、早すぎて無理だから。ただの人間の感覚器官では、何が起こったのかさえ、理解できないから。

(798兆3214億4454万5536)

考えるな。

(987兆2145億7865万4325)

感じるな。

(1278兆6755億8976万1124)

右手で、螺旋剣を。

左手は、既に鞘を形作っている。

グンダの肩へと落ちていく。剣先が装甲に食い込み始めると同時に、目を閉じた。

暗闇は、良い。

一番情報量が多いのは、視覚だ。細かいものも拾える半面、余計な情報に惑わされる確率も高くなる。だから、蓋をすることにした。温度だけを、感じられればいい。

完成した鞘へ、右手が向かう。竜の力が結集されていく。熱。

脳だけは冷めていた。なぜなら、一連の行動に全く関与していないからだ。全ては手の先と、魔術剣の間だけのやり取り。極限にまで無駄が省かれた、神経の動き。痺れが往復するだけの単純な作業。

殺意の線をなぞる。

自動的に。

反復的に。

無感情に。

無機質的に。

脱力。

憎しみだとか、妬みだとか、戦闘への欲求や快楽も、どうでもよかった。今だけは、その、青白い刃が激突する瞬間だけが、下田の生だった。生きる、目的だった。

無音の刹那が、終わった。

金属音とも違う、空気の震えがぶつかり合ったような音が、耳に入り込んできた。それが最初に認識した、明確な感覚だった。

目を開けると、期待していた通りの光景が、広がっている。

「な……」

ああ、声。

その声が、聞きたかった。

ヨルシカの刃は、下田のそれによって、止められている。フアラン

の速剣が相殺し合い、二人の動きは完全に固まっていた。

それでも、世界が動き出しているのが、彼にはわかった。時間が進み、この先も、一歩ずつ、進んでいく。相手の、白い肉を抉り出すまで。

殺すつもりでの攻撃が、全く同じもので防がれるというのは、かなりの驚きだろう。ヨルシカの動揺は、はつきりとわかった。下田を信じられないと言いたげな顔で、見ている。

下田は首を傾げた。にたにた笑いながら。
遅い。

何を、うかつに声まで漏らしているのだろう。

初撃を止められたから、何だというのだ。

やはり、ろくな女ではない。自負が過剰にあると、ろくなことにはならない。今まで全てを嘘で塗り固めてきたヨルシカには、ふさわしい醜態だ。

ふさわしい、最期でもある。

ソウルの弾丸を作り出す。それら全てを、ヨルシカの急所に向けて放った。かわせる隙間はない。受けて耐えられるほど弱いものでもない。その綺麗な外面をぐちゃぐちゃにされて、苦しみ呻きながら倒れていく様を想像すると、絶頂しそうだった。

望んでいた結末が、もう、手の中にある。

彼女の肌に辿り着く前に、全ての弾が掻き消えた。

代わりに、下田の両手に無数の針が突き刺さっている。

ひと呼吸の間に、ヨルシカは再び速剣を放った。

欠伸でもしそうな表情で。

(1543兆4355億7866万8976)

そんなことだろうと思った。

(2006兆3321億4454万6786)

「あ、ああああ、ああああああああああ」

「部屋中を、駆け回る。」

壁や天井を何度も殴り、ベッドや椅子を破壊した。

たまにあることだ。

自分の中の全てを吐き出さなければ、いずれ破裂してしまう。このような時間も、大事になってくる。特にこういう、行き詰まりが極まった場面では。

「なんでだよなんでだよなんでだよおおおおおおおおおおおおおおお
おとおおとおおとおおとおおとおおおおおおおおおおおおお
ああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああ糞ゲーかよくそがああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ死ね死ね
死ね死ね死ね死ね死ねええええええええええええええええええええ」

下田は大きく伸びをして、ぼろぼろになったベッドに寝転んだ。叫んで酷使をした喉に奇跡を使いながら、天井を眺める。

「考えよう」

「どうするべきか」

「一つ一つ、確認していこうぜ」

「まず、初撃の対応はあれで間違いない。あれ以上の選択肢はない」

「時々、失敗もしますからね。今更別のに変えようとしたら、泥沼にはまる可能性があります」

「今もはまってるけどな。相手の攻撃を受けて、今度はこっちから攻める番になる」

「こういうことは何度もあった。壁に当たったことは。だけど…」

「現状、打てる手は全て出し尽くしましたね。それでも、あの女には届かない」

魔術が、消される。

詠唱を乗せたとしてもだ。一つもヨルシカの体には当たることはなく、分解される。どれだけ複雑な詠唱をしても、どれだけ反詠唱の対策をしても、容易く無効化される。明らかに理不尽な何かが働いていた。

ヨルシカが使ってくる魔術にも、対応に苦勞している。彼女の戦闘場面を思い返してみると、ソウルの矢を多用していた。この世界の術師はそういう傾向にある。下田が彼女に辿り着くまでにも、何度もそれで邪魔をしてきていた。

だが、直接相對することになった瞬間、彼女は魔術の形をがらりと変えてきた。矢よりも細かい針に変えている。おそらく、彼女自身が自分で考えた構成だ。おまけに詠唱を乗せていないので、分解のための情報を得ることができない。

そう、無詠唱だ。普通なら簡単に打ち消せるはずなのに、できない。つまり、縛りがついている状態でも、彼女の魔術は強力だということだった。

それらに苦慮して、ぐずぐずしていれば、ファランの速剣が再びやってくる。下田にとっては最も警戒するべき最悪の攻撃だが、彼女にとってはただの選択肢の一つだ。連発もするし、あえてしないというフェイントもかけられる。

「課題は二つ」

「彼女に魔術が通用するようになること」

「いつ挟んでくるかもわからない最速の攻撃を、反詠唱の困難な魔術をどうにかしながら警戒すること」

「あくまでこれらは、生き延びるための最低条件にすぎません。殺す決め手も考えていかなければ」

「あんまり派手なことは連発できないな。はつきり言って、もうくたくたになつてる。ヨルシカと戦い始める時には、体力はほぼ限界だ。絶え間ない頭痛とも戦わなくちやいけねえ」

「一番コンディションが悪い時に、一番強い相手と戦うのか」

「一番憎い相手でもあります。動機というのは大事ですね。どんな困難も、越えていけそうな気はしています」

「うん」

「うーん」

「と、言ったものの…」

「そもそもなんで俺達は、あの竜女を殺したいと思ってるんだ？」

「誓約を破棄するためでしょ」

「それはあくまで過程だろ。あいつの腸を引きずり出すことこそが目的な感じがしてるんだが。その原動力ってなんだ」

「憎いからでは？」

「あつちが嫌ってきてるから」

「そこだな」

「確かに」

「私達は、彼女に何もしてないはずですよ。虐げられたのはこちらの方。何があつたんでしょうか。過去に」

「結局、あいつとも話してみなきやいけないってことか？」

「うわ、やだなあ。でも、戦闘に集中するには必要だね。動機の明確化か」

「直接媚を売る必要もないでしょう。他人から情報を集めるという手段もありますし」

「気分が乗らない」

「俺もだ」

「私もです」

(2689兆2134億5646万7869)

「ここ、読めないんですけど」

その部分だけ、妙だった。何か文字が書かれているのはわかるのだが、認識できない。そこだけが意味の配列から断絶されていて、いくら指でなぞっても出てこない。

オーベックは見もせずには答えてきた。

「無名の長子だな」

「？」

「太陽の長子とも言うが、誰も使わない。捨てられたものだからな。そんなことより、もう一度議論しよう。お前は詠唱の圧縮について、私と違う意見を持っているようだが」

言葉が止まる。

下田は、人差し指を口に当てる。目で笑いながら首を振った。

「僕の疑問を解消してからです。それからなら、いくらでも、話し合いますしょう」

オーベックは数度瞬きした後、口を歪めた。下田も思わずきよとんとする。そんな気持ちの悪そうな顔をされたら、誰だって不思議に思うだろう。

「まあいい。だがこの話を誰かれ構わず漏らすな。あまり、広めていいものではない」

「わかりました」

「いいか、長子というのは長男ということだ。太陽の長男。あのグウィン大王の息子。だが、今では彼を話題に挙げる者はいない」

「無名」

「そう、グウィンしかりグウイネヴィアしかり、四騎士しかり。どれだけ経っても神代の者達の名は消えない。かの長子も卓越した能力を持っていた。おびただしい数の竜を狩っていたとも言われている」

それでも、彼の名前は伝わっていない。

「許されざる裏切りを犯したからだと言われている。過去の二度の大戦において、敵と通じていた。そのせいで四騎士の全てが死に、グウィンもまた長き眠りにつかざるを得なくなったという。だから、忌まわしき名として捨てられた。長子の名が書かれている文献は未だ一つも見つかっていない」

話している声の調子と、表情の動きを観察した。どう見ても、嘘についている気配はない。少なくともオーベックは、自分の言っていることを事実だと思っているようだ。

文献なら、見つかっている。今まさに下田が示したものがそうだ。その一文には確かに名前が書かれている。しかし、認識できない。

オーベックにはそれがわからないようだった。存在しているのに、存在していないと思わせる。そんな術が、この名前にはかけられている。いや、名前どころではない。長子の姿も伝わっていない。

無数の者達の認識、記憶を歪めるほどの術。これが意志を持って行われたものとしたら、行使をした者の技量は想像を絶する。その効果自体というより、持続期間が異常だ。数千年以上も効果が保たれるなど、どんな気力の持ち主だ。

だが、それよりも気になる言葉があった。

「オーベックさん、今二度の大戦と言いましたよね。過去に起きた竜との戦争は、一回で終わっているはずです。残党がまだ残っていたんですか」

「よく知っているな」

そこまで淡々と事実を話していた彼の様子が、少しだけ変わった。下田の方を見てきている。表情に対して変化がなくても、これまで接してきた経験でわかった。間違いなく、気を遣われている。

「我々の偉大なる神達は、長く竜と戦っていた。因縁深い敵ともいえるだろう。だが、やがてさらなる敵と戦うことになる」

鈍い頭痛が、顔を出し始めていた。

「常陽の民」

オーベックは珍しく周りを気にする素振りを見せた。

「その存在は執拗に歴史から消されている。私が調べた範囲では、まばゆいばかりの太陽を、浴びるように享受していた、別世界の者達。神達は彼らの」

二十五回。

下田は、相手の喉に短剣を突き刺した。ごぼごぼと血があふれ出している様を見ていると、針のような痛みが和らいでいく。視界が真っ赤に染まり、深呼吸した。

あれだ。

やっぱり、この世界の過去を探るのはやめよう。

嘘ばかりで、嫌になってくる。

(3145兆4324億5677万8678)

ヨルシカの感情もどうでもいい。

理解したから、何だというのだ。

ただの狂った竜女でしかない。

殺せば、いなくなる。

首だけで宙を舞いながら、下田は相手を睨みつける。ヨルシカは既に速剣を消していた。息一つ、乱していない。

さらに、速度が上がった。最初の攻撃は、本気ではなかったということ。下田が対応し始めると、それをすぐに上回ってくる。しかもぎりぎりだ。おそらく圧倒できる差がまだあるというのに、彼女はあえてそうしてくる。

上等だ。煽っているつもりなのだろう。

お前をいつか、叩き潰す。そんな余裕も、抱けないようにしてやる。

(3897兆1231億6889万9874)

青白い刃を振るう。

壁に細かい傷がついた。

下田は傍に屈んで、地面に印をつける。

フアランの速剣の間合いは完全に把握できている。要はその範囲に入ってしまったら、いつ首を飛ばされてもおかしくないほど追いつめられるわけだ。はつきり言って、初撃の多少手加減されたものを止めるだけで精一杯だった。次からの加速していく速剣に対応するためには、それ以外の攻撃を全て捨てる必要がある。そんなものでは、勝てはしない。

離れて、魔術だけで戦うことも無理だった。今のところ術戦においても上手を行かれている。彼女の驚異的な反詠唱の前では、糸口が見つからない。

だが、下田は疑問に思う。

ヨルシカの口は、確かに下田の詠唱の逆を正確に出している。どんなに構成を変えてもだ。それはまるで、予知のようだった。臨機応変という次元を超えている。いくら彼女が常識から外れていても、可能なのだろうか。

自分の、右手の甲を見る。鱗に覆われてもなお、誓約印は消えていなかった。

暗月の剣という誓約が、何か不都合なつながりと彼女との間に作っている。自分の位置が常に知られていることその他にも、何か、あるのではないか。例えば臍気でも思考を読まれているとしたら、反詠唱の正確さにも納得がいく。

しかし、その説はないだろう。本当に思考が筒抜けになっているのなら、今まさにこの瞬間、ヨルシカが殺しに来てもおかしくないのだ。

彼女だって、自分の味方が大勢殺されるのは避けたいはず。それに、考えが読まれていたなら速剣の初撃を止めることもできなかったはずだ。

つまり術だけだ。術の詠唱だけが、事前に漏れてしまっている。

下田は、唇を噛んだ。

誓約が本当に邪魔だ。これを消さないと殺すのが難しい。なのに、殺さないと消すことができない。

彼女への攻撃に、魔術を使うことは控えておこう。自分の補助に、全てのリソースを回せばいい。やはり攻め手となるのは、武器だ。彼女の速剣の間合いよりも外から、攻撃できるものがある。それでいて、重すぎないもの。

木の幹へ、正確に飛んで行く。その軌跡を、下田は淡々と眺めていた。

やがて彼の視線に気がついたのか、高坂が振り返ってくる。

「よお、なんか用か？」

答えずに、刺さった槍を眺めていた。高坂が三本同時に軽々と扱っているのを見ると、それほど重さはないのだろう。長いリーチという魅力的な点に大きく惹かれて、その可能性を考え続けていた。

「おい」

手が伸びてくる。下田は素直にデコピンを額で受けた。

「黙ってないで、話せよ。ん？ 高原の話か」

「違うよ。あのさ、槍のことについて、教えてくれない？ 僕も、使ってみたいんだ」

初めは面倒くさがって引き受けてくれなかった。しかし三日ほどずっとそばについて回って頼み込めば、普通に根負けしてくれた。さすがに部屋にまで侵入されて話しかけられれば、断る方が難しいとわかってくれたのだろう。

槍は、かなり扱うのに技術があるとわかった。イメージでは突きを中心に立ち回ればいいというのが一般的だが、強みである長さを生か

した攻撃方法は、他にある。

「要は、何だ、遠心力つてやつだ」

高坂が息を鋭く吐き出しながら、槍を横に薙ぎ払う。立っていた木の棒が、真つ二つになって倒れた。

持つ手の方から離れるほど、加速度は大きくなる。その力を利用して刃で斬ることもできる。高坂の持っている槍は先端の両側部分に鎌がついていた。それで相手の武器を引き落とすこともできるらしい。

剣と同じく、槍にも様々な種類がある。下田は自分に合ったものが見つかるまで、全部を満遍なく使ってみることにした。

(4155兆7765億8868万3133)

鎌槍。

槍の穂先の両側に、鎌状の突起がついている。突くこと以外にも、斬ったり、敵の刃を受け止める機能が備わっている。

だが、相手の武器は実体ではない。それに切れ味も驚異的だ。受け止めることが前提の槍では、あつという間に穂先を斬られて機能しなくなってしまう。

パルチザン。

穂先の金属部分に重心が寄っていて、その重さによる斬撃が主な強みだ。

ただ少し重すぎるのが難点でもある。両手を使ったとしても、素早く動かせない。そして斬ることを中心にしてしまうと、どうしてもリーチの長さを生かしきれない。やはり、極めるべきは突きだ。彼女の速剣の範囲外から、迅速に弱点を穿つ。

管槍。

柄の前方に、手管と呼ばれる移動可変型の把管が付く。手をしごく

ように移動させずとも簡単にスライドさせることができるので、素早く連続で突きを繰り出せる。リーチの変更が容易なため、叩き斬る際にも応用が利く。相手を攪乱しやすくなる。

下田は、しばらく管槍を使っていた。もちろん自作だ。インベントリで得たものでは、相手に危害を加えられない。剣以外のものを作るのは初めてだったので、最初の数回は新鮮な気分で作っていた。

長さは、おおよそ百二十センチほど。気を付けていれば、相手の間合いに入らずに済む。もちろん、素直に相手がその場に留まってくれたらの話だが。

手管を絞る。

亡者の頭に刃が刺さり、すぐに抜けていく。

把管を握るのは、左。柄の後方を持って、突き出す力を加えるのは右手だ。左右の膂力に大きな差があるというのは面倒な反面、役割をきっちり決められる利点もあった。左手の方は、槍全体に符呪をする役割がある。

相手にやられると嫌なことは、二つある。

まず、穂先を斬り落とされること。最も多い追いつめられ方だ。フアランの速剣にかかれれば、木製である柄など簡単に斬れる。一度柄の部分も硬い金属に変えることを考えたが、そうしてしまったら重量が馬鹿にならない。なので、符呪による耐久の増強を代替案とすることにした。

二つ目は、あちらから距離を詰められることだ。槍の長さ故、接近戦を苦手としている。ただでさえ実力に差があるのに、不利な間合いになってしまえばあつという間に負ける。

距離を取ろうとしても、あちらの方が素早い。離れながら戦おうとしても、いつかは必ず捉えられる。

だが。

下田は、ある程度の手ごたえを感じていた。今までには、なかったものだ。

亡者の血を振り払い、残心する。穂先とは反対の方、石突きと呼ばれる部分で、足元でもがいている亡者の頭を潰す。

ほかの武器では、見られなかった光景だ。ヨルシカは明らかに、槍を苦手としているようだった。下田がその武器を持つと、警戒が一気に跳ね上がるのがわかる。動きは変わらないのだが、ある種の畏れを持っている。それは経験から来る感情のようだった。

正しい武器を、選んだことには間違いない。後は工夫をするだけ。常に彼女から離れた位置取りを心がける。詰められないようにする。

(4509兆4312億7654万8786)

魔術の暴発によつて、飛ぶ。
通用しない。

早いことは確かだが、それでもヨルシカの動きが明らかに勝っている。彼女の脚力は、一体どうなっているのだろう。どんなタイミングで下がろうとしても、食らいついてくる。獲物を決して逃さないと言いたげに。これでは、背後を取ることなど夢物語だ。

槍を使って近づけさせないようにするのもいいかもしれない。しかし、この扱いについては他の武器以上に苦労していた。教わるべき相手が、いないからだ。

高坂の技術はとつくに吸収しつくしていた。他に槍使いは、祭祀場にいない。残りは、自分で編み出していく他なかった。それがどれだけ難しいことか、痛感していた。

先人たちの教えにならない、それを応用するのは、道をたどること。自分で最善を考え何度も試行錯誤していくことは、道を作り出すということ。ただ積み上げていくことしか知らない下田には、途方もなく時間がかかる。腕力の限界もあるので、技量に関しては頭打ちになり始めていた。そして、ヨルシカの接近を牽制できるほどの開花は望めないとわかった。

突き詰めるべきは、戦術だ。

下田は、新しい移動方法の必要性を感じていた。それも尋常ではない性能のものだ。一瞬で位置取りを変えられるほどのものでなければ、光明は見えない。

瞬間移動が、欲しい。

ともすれば現実から目を晒した、逃避の様な選択肢だと言えるかもしれない。だが、自分では合理的な考えのつもりだった。なぜなら、既に見たことがあるからだ。ある二人が、そういった術を使っているのを見たことがある。

クリムエルヒルトと、ロスリック。

奇跡に分類されているその術を、身に付けよう。

52. 白光と雷光

(5643兆3214億5335万8967)

移動。

変換。

座標の確定。

うんともすんとも言わない自分の身体を、眺めていた。

成功するしないどころの話ではない。

そもそも心当たりのある詠唱を片っ端から使ってみても、何も起こらなかった。あらゆる組み合わせを試してみても、結果は静寂だった。

眉間を揉みながら、思考を進める。

原因は大体わかっている。イメージの欠如だ。おそらく詠唱はいくつか当たっているものもあつたのだろう。しかし想像力が足りていないせいで、術の発動に至っていない。

それもそうだ。逆にどう、想像しろというのだろう。

自分の存在を、自分はよくわかっている。一番、はつきりと認識している。足を一歩進めるのでもなく、跳び上がって到達するわけでもなく。全く関連性のない場所へと移動するということは、断絶だ。意識の断絶、存在の断絶、連続性の断絶、時間の断絶。ありとあらゆる法則を無視することになる。

一瞬でも、自分の身体がこの世界から消えるのを、実感を持って受け止められるようになるまで、まだまだかかりそうだった。

こういう難術にこそ、師が必要だった。だが聞いて回っても、移動の奇跡を使える者はいなかった。

下田は自分の背筋が震えるのを自覚した。

この術は、おそらく、今までの比ではないほどに難しい。この世界で使える者は、もう一人しか残っていない。クリムエルヒルトを探すことも考えたが、祭祀場をいくら回っても見つからなかった。それに会えたとしても、教えてもらえらると思えない。その意味があるかど

うかもわからない。

言葉で説明されても、さほど変わらないからだ。これは理論などでどうにかなる難易度ではない。今までの破壊してきた枠組みをかき集めて、新たな形に構築する。そんな漠然とした方針だけが、今の全てだった。

(6546兆4322億1221万8976)

消失とは、死。

死の感覚は、今まで何度も味わってきた。だが、理解できたとは言えない。全てを感覚する前に、わからなくなるからだ。脳が認識することを止めてしまえば、どうしても、それで終わりになってしまう。

瞬間移動を成功させるためには、己の存在が、魂が消えていく瞬間をたっぷりと感じる必要があった。やはり実際にこの身で感覚しなければ、イメージも沸かない。

狭間に、留まることにした。生と死の狭間。

死なない程度に、体を傷つける。胸を抉り出せば、あつという間に血がなくなっていく。本当に失血死してしまったら意味がないので、奇跡を使ってぎりぎりのところで踏みとどまる。

この気持ち悪さが、鍵だった。自分の命が失われていく感覚を、大事にしたい。

だが、繰り返し返すことで慣れが出てきてしまう。そればかりは仕方のないことだ。だから、手足も斬り取って、より生きていることが不思議な状態にまでもつていった。

面倒なのは、あまり長いこと検証し続けられない点だった。自分の部屋で静かにやっけていても、いずればれる。出てこないことを疑問に思ったちとせ達がやって来てしまう。そして血だまりに寝そべっている下田を見て、助けようとするのだ。

そういう時は、おとなしく自殺することになっている。

(7352兆4425億5654万1211)

段々と、掴みかけてきた。

自らの存在が希薄になっていくイメージ。

そこには余計な意識は要らない。

透明になっていって、実体も失くなって。

地面へとすり抜け、落ちていくような。

(8943兆4555億7683万1321)

死とは、暗闇。

ついでに両目を潰すと、さらに理解が進んだ。死んだ人は、光も温度も感じない。自分もそれと同じ状況に放り込めばいい。

肌の表面を、全て剥がした。流れ落ちる血の感触でさえ邪魔だ。触觉を失くす。もちろん狂うような痛みがあるのだが、それも続いている。無感覚になる。やはり、慣れとは便利なものだ。

(9678兆3143億6755万7864)

変化がないと思った。

それはおそらく、少しばかりの痛みでは何も感じなくなったせいだろう。

何か違和感を感じて、自分の右手を見た。

人差し指の爪が、剥がれている。どこに行ったのかとあたりを見回してみると、ベッドの端の方にあった。

久しぶりの快感が、全身を震わせる。

その爪が転がっている位置は、詠唱により指定した所だった。つまり、爪だけが下田の思い通りに瞬間移動したということ。

初めての発動で、彼は思わず全身を壁に叩きつけた。叫びも出た。久しぶりに声を出した気がする。喉がじんじんと痛んだ。

足がかりを得てしまえば、後は繰り返すことで効果を強めていけばいい。

(1京5443兆5565億8776万9965)

それなりに苦労があった。

少しでもイメージがずれていると、絶対に成功しない。

腕だけがばらけて、移動したりする。それでも体の一部分が綺麗に分かれてくれるならまだいい方だ。酷いときには、体が縦に裂けて、自分の見たくもない中身がどばどば飛び散ったこともあった。全身にちゃんと作用しなければ、成功とは言えない。

さらに、別の問題もあった。

「う…」

それはまともに全身の移動に成功した時だった。

喜びに浸る間もなく、下田はうずくまる。

「おえ、何だ」

「厳しいですね。これは」

「この術さ、消耗がえげつないね。もし万全の状態だったとしても、二

回が限界だ。ましてや相手の背後を取れるくらいの移動となると、意識を保てるかどうか」

「下手すると一度使っただけで失神するぞ。ヨルシカ戦の時にもう、くたくただだからな」

「なるほど、では、使い方を変える必要がありますね」

「というっ？」

「何も、相手の死角にまで移動するほどではないということです。ヨルシカの攻撃は、速剣も含めほとんどが線状のものです。軸をずらせば、かわせるでしょう。この奇跡を使えるとは夢にも思っていないはず。今の私達なら、その不意を付ければ十分」

「だが、距離も取りたい時はどうする？ 奴に間合いを握られている限り、常に危険が大きくなる」

「考えてみたんだけど、そこはやっぱり、相手に近づけさせないようにした方がいいと思う。要は、手数を増やせばいいんだ」

「槍を二本持つてみるとか？ 現実離れしていますが」

「そんなのは無理だな。だが、あれだろ。つまりAの言いたいことってのは、瞬間移動の対象を変えてもいいってことだろ」

「なるほど、インベントリから取り出す時には、自分の手元にしか出現させられない。ですが、この術も併用すれば、相手の死角に槍を放ることもできますね。魔術ではありませんから、相手も分解はできない。受けるか、避けるしかない」

「ヨルシカ自体を動かすっていう手もあるけど、難しいね。まず、詠唱を分解されるだろうし。それにあの女一人を移動させるだけで、ごっそり持っていかれそう。とりあえず武器にも術をかけてみる方向でいい感じだ」

「希望としては、どれだけの槍を同時に動かせればいい」

「そうですね。やはり限界を攻めなければ意味がないので。魔術の同時展開数と同じ程度には」

「つまり、えっと」

「三十三本」

(1京9087兆4534億5443万7767)

ここで壁となってくるのが、意識の割り当てだ。

多くの武器の所在を同時に把握し、どれをどこに移動させればいいのか。全てを完璧に行うには、三つの意識だけでは到底足りなかった。

だが、四つ目が出てくる気配もない。下田にはわかり切っていることだった。自分の器としての限界は、三つなのだ。どれだけこの先努力したとしても、意識が増えることはない。

『ワタシがいるじゃないか』

「お前は、外様だ。僕の意識じゃない。どれだけ密着しよう、混じり合うことはない」

『やりようはあるよ。少しでいいんだ。アナタの脳味噌に入らせてほしい。そこと繋がれば、本当の意味で、一心同体に成れる。色々、助けになるはずだ』

「ウミはさ、馬鹿なの？ そんなこと言われて、素直に頷くと思う？

見え見えだから。お前みたいなものを、受け入れるわけがない。浸食されて、終わりに決まってる」

『信用ないんだね。別に怖がらなくていいんだよ。少し、変化するかもしれないけど、アナタ自身はちゃんと保たれる。それを受け入れるだけで、劇的な効果が…』

増やす必要はない。

既存の意識達を分割すればいい。

三つそれぞれを、さらに十一ずつに割る。数が増える分、それぞれを部隊として、しっかりと統率しなければならぬ。そのためには、A、B、Cがもつと独立する必要がある。

「では、しばらくお別れですね」

「教育しないとな」

「じゃあ、ヨルシカを殺した時に、乾杯でもしよう。またね」

「ああ」

「と言つても、結局ずっと一緒にいることは変わりませんけど」

(2京6759兆3431億1221万8768)

Aが担当する十の意識は、赤子も同然だった。

隊長の心理的性格に影響されているのか、楽をしたい思いばかりがあふれている。最初は、まるで会話にならなかった。それぞれが好き勝手に言葉を吐き出し、思いを吐露していた。

それでも、辛抱強くまとめ上げる。こういう時にも、共通の敵というの役立った。ヨルシカに負けるたびに、意識達はまともな感性を取り戻していく。皆一様に、彼女への憎しみに染まっていく。

Bは、論理的に部下たちを説いているようだった。

Cは、暴力で締め上げることにしたらしい。

定期的に集まり、飲み明かした。それぞれちゃんと上手くいっていることだけはわかった。あえてお互いに切り離しているの、他の意識が担当している時の記憶がなくなっている。そのために、すれ違いが起きることもあった。

「だから、違うって言ってんだろ」

「Cはかしないよそんなこと。どういうつもりでちとせの服を盗んだりしたの」

「軽蔑します」

「しようがねえだろ。部下共にそのかされたんだよ。大体実際に俺が行動に移せたってことは、お前らも望んだってことだろ。とぼけてんじゃねえぞ」

「はて」

「今はさ、お互いに独立してるんでしょ。他人に責任を押し付けるのはどうかと思うなあ」

「楽しそうだな、お前ら」

(3京5644兆1233億5566万7788)

槍の軌道は、ある程度パターン化せざるを得ない。他のことにも意識を割かなければならないので、そればかりに集中するわけにはいかなかった。

今のところ、十八本を同時に動かしている。やはりこの移動の奇跡は重宝する。汎用性が特に優れている。

(3京9878兆6545億3331万6666)

二十四本。

(4京1221兆7886億8865万3454)

点が、見えた。

奇跡の小さな光があちこちではじけている。

ファランの速剣が縦の軌道でやってくる。

下田は滑らかに圧縮詠唱をした。

体の軸がわずかにずれる。耳のすぐ横を、魔術剣がうなりながら振り下ろされていく。伸びきったヨルシカの腕に向かって、槍の一本が降ってくる。彼女はそれを、ソウルの針で弾き飛ばした。詠唱をし

て。

その音節を完全に聞き取り、下田は己にも向かってくる針を分解した。相手は既に二発目の速剣を準備し終えている。だが、やや注意が散漫だ。それもそうだろう。彼女の周囲を点滅しながら飛び回っている多数の槍を、無視できるわけがない。

「小賢、し」

憎々し気に歪められた彼女の顔。

動き回る槍と連動して、下田は一步踏み込んだ。

点が見えたからだ。

冷たい点。

ヨルシカの、隙。

把管を絞り、完璧な突きを繰り出した。符呪された刃が彼女の肩に刺さり、肉を抉り出す。青みがかつた血が柄にまで散ってきた。さらにかけておいた爆散の詠唱を開放する。彼女の片腕が、根本ごと吹き飛ばされた。

その、確かな感触が、下田のこれまでを労っていた。無駄ではなかったのだと。この道が、戦術が、正しかったのだと。

他の槍はほとんど落とされている。やはり、動きがやや単調だったのがいけなかったのだろう。彼女はすぐにその型を看破してきた。本当に、ぎりぎりの所だった。

本当は、急所を狙うこともできた。だが、そんなもつたいたいなことはしない。下田は、ヨルシカにもっと苦しんでほしいと思っていた。徐々に体を削っていき、命乞いを引き出す。それをあざ笑いながら、とどめを刺すのだ。その瞬間が、待ち遠しかった。

だから彼は、苦々し気に吐き捨てた。

「畜生」

刺さった槍の刃が、押し出される。盛り上がっていく、肉によって。ヨルシカは右腕を軽く動かした。直前までほとんど破壊されていた部分を。

下田も利用しているから、わかる。彼女の再生能力は、ほとんど不死身の様なものだ。前に、エルドリッチの弓によって半身が破壊され

た時よりも、はるかに速い。あの時もまた、欺いていたということだろう。竜の再生力は、下田が必死でつけた傷を一瞬で無にした。

眼前を、紫色の光球が埋め尽くす。

反詠唱——は、すんでの所でやめる。構成も何も知らない術だったからだ。

全方位囲まれている。

魔術の盾を。

無理だ。

奇跡の光を、一瞬で全身に張り巡らせた。自分の存在が消えていくのを、強烈に意識する。死の感覚を何よりも優先する。

紫の光が、収束した。

その光景を、石の玉座の上から見る。

頭に音がガンガン響いている。痛みも最悪で、玉座にうづくまり、えづいた。仕方がなかったとはいえ、全身を移動させるのは辛い。気絶するほどまではいかなかったが、もはや視界は朦朧として、今にも倒れそうだった。

苦しみながら、絶望的な光景を、見る。

「何かがおかしいと思えば……、驚きだねえ」

エルドリツチが横穴が這い出てくる。その目は、下田を油断なく捉えていた。

人食いだけではない。その配下、ゾリグや、坊主頭の三人もいた。

仮面の男、茸頭の術師、そしてカークもいる。

「いつの世も、抵抗する者は現れる。油断をしていた」

下がったヨルシカの前に、グウインが立った。

彼らが今まで何をしてきたのかは、知らない。それでも、時間が切れたことくらいは下田でもわかった。儀式を止めてから、数分ほどしか経っていない。だが、異常を知られるくらいには十分な停滞だったということだ。

遅すぎた。今までの戦闘に、時間をかけすぎた。

つまりはそういうことだった。

下田の耳に、囁き声が届く。

「確かに、油断もあつたね」

リリアーネは既に下田の背中を斬り裂いていた。もうすでにこの回での戦意を消失していたので、攻撃もかわせなかった。

フリーデとユリアは、目を覚ましたイリーナによって治療を受けている。

彼女達三姉妹は、確かに。

「一回死んじやつたよ。君、強いね」

積み上げられていたものが、崩されていく感覚。中々に、堪えるものがあつた。まだ、足りていない。まだ強くならなければならない。より速く、より効率的に。

下田は雄叫びを上げた。背中から血をほどばしらせながら、グウイン達へ飛び込んだ。

(4京1332兆7655億9743万3243)

目覚めてからすぐに、大扉から出てきたヨルシカを殺しに行く。

(4京4356兆332億6677万8977)

目覚めてからすぐに、大扉から出てきたグウインを殺しに行く。

(4京9787兆4455億6655万2333)

ヨルシカを殺しに行く。

(5京33322兆4455億7788万2211)

グウインを殺しに行く。

(6京4534兆6666億7764万2233)

別の機会を、考えてみることにした。

ヨルシカと唯一完璧に、二人きりになれる機会。儀式の直前で彼女に部屋へと呼ばれる。初めは従順なふりをして、部屋に入った瞬間牙をむく。

駄目だった。途中で必ずグウインが合流する。この二体を相手にすることはできない。この火の大王はヨルシカよりもずっと強い。到底、手に負えるわけがない。合流前に殺すことは不可能だった。ま

るで下田の考えを最初から読んでいたように、戦闘開始から十秒以内にグウィンが入ってくる。

ヨルシカ自体のしぶとさも、大きな問題だった。彼女の再生のせい、たとえば急所に一発攻撃できたとしても、終わらない。短い間に四肢の全てを破壊し、頭を潰すくらいはしななければ、殺すことはできないだろう。彼女の实力を考えると、無謀なことのように思えた。

無謀を可能に変えるには、やはり、新しい何かが必要になる。

オーベックの書斎で、下田はひたすら調べていた。

「この、」

「何だ」

「竜の殺し方についての節なんです。鱗を焦がす雷とは、どういうことですか」

「何を必死に調べているのかと思えば、そのことか。竜の不死性を司っているのが、その身を覆う鱗であることは知っているな。それを破壊するには、どんな武器も、魔術も、奇跡も、呪術も足りない。祖なる雷が唯一通用するとされている」

「あんまり、説明になってないんですけど」

「これくらいしか伝わっていないからな。私も、詳しいことはわからない。とうに失われた術なのだ。知っているとしたら、神代の者達くらいだろう。古の竜との大戦を経験した者でなければ、満足に説明もできない」

オーベックの顔は、言葉が進むにつれて生気が満ちていった。未知への欲求。

「これもまた、貴方の研究対象ですか」

「その通りだ。全ての術を明かすのが、私の至上命題だ」

「なら、どうして行動しないんですか？」

下田は、相手と目を合わせた。

「心当たりがあるんでしょう？ 僕もそうです。この祭祀場には、神代に生きていた存在が、二ついる。どうして、彼らに訊こうとしないんですか」

凶星のようだった。彼は本を置いて、下田の顔を見た。そして、顎

を掻きながら、目を逸らした。

「グウィン様に尋ねるのは畏れ多い。さすがに躊躇われる」

「へえ、オーベックさんでも遠慮は持つてるんですね。研究よりも、そういうった、感情を優先すると」

「命あつての物種だ。大王に質問は、禁じられている」

「ヨルシカはどうですか？ 彼女なら別に大丈夫でしょう」

「お前、わかつて言っているのか？」

再び、彼は辺りを見回す。まるで彼女が耳をそばだてているかのよう。今にも、扉から入ってきそうだとも言わんばかりに。

「あの方に、竜の話は禁句だ。わかつているんだらう」

「？ わかりません。教えてくれませんか」

オーベックは顔を歪ませた。だが下田が視線をそらさないでいると。溜息をついた。本を置き、背筋を伸ばした。

今まで詠唱を教えてくれた時もそんな体勢だった。

「竜の血を引いているという事実が、どれだけの重圧になるか、想像はできるだろう。あの方はその中でも、己の実力を示し、祭祀場を任せられるまでになった。だから今では、わざわざ竜の話を持ち出す者などいない。それが彼女への最大の侮辱となるとわかつているからだ。尊敬しているからこそ、触れていけない部分もある」

下田は気に入らなかった。たった数日とは言え、このオーベックとはかなりの言葉を交わしてきた。自分の質問に対して、こんな取り繕った答えを返されるのは、さすがに気持ちも冷えていく。

「全然、本質にかすりもしないじゃないですか」

「何だと？」

「そんな答えじゃ、あの女が竜自体を強烈に憎んでいる理由にならない。知ってるんですね。教えてくださいよ」

今度は、めんどくさそうな顔になった。この男は自身の関係のない話が続くと、すぐに嫌そうな様子になる。

「わかっているのなら、関わろうとする気も失せるはずだが」

「ヨルシカの母親が、関係しているとか？」

彼は瞬きを数回する。

「お前、初めから全部わかっていて、私をからかっていないか？」
「そうなんですか？」

相手は頭をかいた。

「…彼女は、不義の子とされている。その詳しい経緯は、記録されていない。私にもわからない。そうだな、言えることがあるとしたら、おそらくお前の言う、母親のせいだろう」

「不義……。つまり父親の方にも、問題があった？」

オーベックは手を振って、拒絶の意思を示した。

「もういい。この話で私が得るものは何もない。これ以上、推測を重ねていっても意味がないだろう」

「待ってください。じゃあせめて、ヨルシカの母の名前だけでも教えてください」

下田は、別の方向を見ながら、答えを待った。

「……プリシラだ」

なるほど。

佇んでいる白い女性を見る。

貴方の事が、少しずつ分かってきた。

「どうした？」

「いえ。何でもないです。それより、今から早速尋ねに行こうと思ってるんですが、いいですか？」

オーベックは肩をすくめてみせる。

「積極的だな。まあ、お前の骨を拾うことくらいは考えてやろう。さっさと行くがいい」

「何言ってるんですか？」

相手の読もうとした本を、取り上げる。

「貴方も一緒に行くんですよ。僕一人じゃ、簡単に会えないので」

初めはオーベックも受け入れるのに難渋しているようだった。彼の考えだと、まず自分の安全が最優先ということらしい。確かに命あつての物種だ。研究も探求も、まず自分の身体が無事でなければ続

かない。

しかし彼も、未知の術を知りたいという欲求は人一倍ある。そこ刺激するように促してやれば、絶対に無茶なことはしないという条件で、譲歩させることができた。曰く、ヨルシカにはあまり好かれていないらしい。下田も嫌われているので、ちょうどいいと思った。

嫌われ者同士で、大扉の前に立つ。

「ヨルシカ様に会いたい?」

「ああ、そうだ」

オーベックは無然としたまま続ける。

「至急、確認したいことができたんでな。お目通り願えるだろうか」

今日の見張りは、ジークバルドが担当していた。

「オーベック殿が部屋から出るのは貴重な光景だな。よほど大事な用事なのだろう。しかし、どうしてシモダまで?」

下田は困ったように笑った。

「なんかこの人、一人でヨルシカさんに会うのが怖いみたいで。一応オーベックさんがどのような話をするのかは理解しているので、僕が間に立ってほしいと頼まれたんです。彼女、すごく優しいのに。この人ちよつと、臆病が過ぎる面もありますよね」

わざわざこちらを睨みつけてくるようなことを、オーベックはしなかった。割と瀬戸際の所だった。これ以上だしに使うと、途中で放り投げられる恐れがある。

「ふむ。そういうことなら、取り次ぎをしよう。少し待っていてくれ」
そうそう上手くはいかないと思っていたが、あっさりと大扉の先を進めるようになった。道を通り過ぎても、罾が発動することはない。下田は落ち着いていたが、反対にオーベックは緊張の度合いが高まっているようだった。

「足が重そうですね」

「自分の事など簡単に潰せそうな怪物を目の前にとあってはな」

「まあ、竜ですからね」

「絶対に、あの方の前では慎め」

ヨルシカの部屋の前までくると、オーベックは目で促してきた。少

し考えてから、ようやくノックをしてほしいという意味だと気がついた。

下田は演技の準備をしながら戸を叩いた。最初の週の、まだ何もかもを信じていたころの自分を模倣する。

向こうの気配が、近づいてくるのがわかる。下田が一步下がると、扉が開いていく。

戸口に立つ彼女は、やや胡乱気に二人を見つめていた。

「珍しい組み合わせですね。どうぞ、入ってください」

多少の気持ち悪さは否めなかった。こちらに向かつて殺意をむき出しにしていないヨルシカを相手にするのは、本当に久しぶりだ。普段の彼女がどれだけ自分を繕っているか、改めて認識した。

彼女はベッドに腰かけると、こちらに笑いかけてくる。

「ソウル集めは順調ですか？」

「はい。皆、頑張ってくれています」

「もう少しで儀式の準備も整います。貴方達の願いも、叶う瞬間が近づいている」

「ただ、少し寂しさもあります。何とか、この人達と別れることになるのは、やっぱり、嫌だなんて」

「私も、同じ思いです」

オーベックの含みのある視線が邪魔だった。あまり反応をしないでほしい。ヨルシカにまで伝わったら、台無しだ。

彼女は咳ばらいをすると、表情を真面目なものに改めた。

「それで、オーベック。緊急の用とは、何ですか？」

「はい…」

何かを言おうとして前かがみになったつきり、彼は沈黙した。傍目から見ても次の言葉が見つからないのはわかった。まだ、話に切り込む度胸がないらしい。

「彼は、色々な術に興味を持っています。僕はよくわからないんですけど、どうやら、知りたい術があるようです。ヨルシカさんに訊いてみたいと」

「ああ、その通りだ」

下田が助け舟を出すと、オーベックも勢いづいたようだ。さらに続ける。

「雷の術について、知りたいのです。神代の頃に失われたもの。私は、自分の好奇心を満たすために、ここへやってきました。もちろん、答えたくないというお気持ちがあるのなら、それでも構いません。ですが、何か知っておられるのなら、私に知識を分けてくれませんか」「なるほど……」

ヨルシカは頷いてから、下田の方を見た。今までよくあった、透かすような目つきだった。今この場に、彼がいる意味を考えようとしているのだろう。だか、下田は無邪気なふりをした。彼女を殺す糸口を見つけ出そうとしているとは、毛ほども思われないように。

「貴方の探求心にはいつも敬意を払っています。ですが、すみません。期待に応えることができないと思います。私は、確かにそれを見たことがありません。何度か。しかし、私自身が扱えるわけではないのです。あの術は、いえ、術という枠組みにあてはまるかどうかともわからない。あれは、神からの贈り物。本当に選ばれた者しか使えなかった」

「貴方は、選ばれなかったんですか」

言ってから、思わず口を押さえかけた。オーベックもまたぎよつとした目を向けてくる。無意識のうちに、言葉が漏れていた。

ヨルシカの視線の質が、一瞬変わる。その目を見て、下田はさらに挑発したいという衝動を抑えた。普段殺し合っているせいとか、どうにも気が立ってしょうがない。少しでも隙を見つければ、つきたくなってしまう。

彼女は目を伏せて、苦笑をした。

「ええ。そうなんです。あの時代は、まさに神が憑いているとしか思えない、戦士達の時代でした。私は、彼らの後ろをついていくだけで精一杯。かなり苦勞をしたものです」

その顔には、繕った憧れが張り付いていた。間違いない。彼女は、昔を憎んでいる。何が起きたのかはわからないが、決していい思い出ではないことは確かだ。そこに今の彼女を形作った原点がある。

「ならば、グウィン様にお尋ねした方がよいということですか」

ややほつとしている様子のオーベックが言うのと、彼女は首を振った。

「お勧めはしません。あの方は、その術を秘しています。訊いても、はぐらかされるでしょう。私も一度尋ねたことがあるのですが、答えは得られませんでした」

「そういうことならば、仕方ありません」

オーベックはそわそわし出した。下田はその臆病さに少しだけ呆れる。

「お時間を頂き、ありがとうございます。このことはもう、調べないようにしませう」

「それが一番だと思えますよ」

背を向けて、部屋を出ようとするオーベック。その腕をつかんで、無理やり止めた。振り返ってきたその顔を睨みつけた後、はつきりと言う。

「貴方の、悲願のはずでは？」

何を言っているんだと言わんばかりの視線を無視して、下田は続ける。

「これで引き下がっていいんですか。度胸がないのなら、僕が代弁します」

「おい…」

ヨルシカの方に、体を向けた。目に、力を入れる。ヨルシカの瞳の奥まで入り込むようにして、視線を合わせ続けた。彼女は、次の言葉を待っている。奥底では、冷静な観察をしている。

数秒間を開けた後、下田は頭を下げた。

「本当の所を、話してください。何か、ありませんか。憶えていることなら、何でもいいんです。その、戦士の方々が術を扱う上で、何か言っていないませんでしたか」

「シモダさん……？」

ヨルシカは近づいてきた。その長身に見下ろされると、悪寒が背筋を伝った。

「最初から、不思議だったのですが。どうして貴方はそれほど、一生懸命オーベックに協力しているのですか？ 珍しいですね」

下田はあえて考えるふりをした。オーベックを一瞥してから、口を開く。

「それは、彼の思想に共鳴したからです。多分、僕と性根が似ているからなんだと思います。あとは、色々と教えてもらいましたから。その恩を、少しでも返せたいと考えました」

少しは本心も混ざっていたので、ヨルシカの指摘にも動揺はなかった。

彼女としばらく顔を合わせる。胸糞悪かったが、我慢をした。それらせば、付け込まれると思ったからだ。

その決意が功を成したのが、先に視線を外したのは彼女の方だった。

「…少しだけなら」

オーベックもまた、彼女の言葉を聞いて向き直った。

「雷は、全ての術の祖だと聞きました」

「祖なる雷という記述が伝わっていますね」

「はい。つまりは、それから、魔術、呪術、奇跡が枝分かれしていったのです」

ただの電気の塊が、どうやって、矢を作り出したり、傷を治したり、炎を投げつけたりする技術に分かれていったのだろう。下田には、まだわからないことが多かった。

だが、ヨルシカはこれで十分と言わんばかりにベッドに腰かけた。なぜか少し疲れているようだった。

「私の知っていることは以上です。たとえ原理を理解したとしても、王に認められなければ、行使はできません。神聖な術ですから」

「ありがとうございます」

「では、失礼します」

そう言ってオーベックは、下田をやや強引に引っ張りながら、退出した。

下田は最後に見たヨルシカの顔を思い返しながら、なすがままにさ

れている。結局多くの情報は得られなかった。どうすれば雷を生み出すことができるのか。まだ、ほとんどわかっていない。残る当てはグウインだが、彼女と同じく、まともに教えてくれる気はしなかった。企みは、すぐに看破されるだろう。

「あまり、生きた心地がしなかったぞ」

部屋に戻ると、オーベックは下田を見下ろしてきた。今初めて会ったかのような顔つきをしていた。

「すみません。失言をしました。それでも、ほとんど何も得られなかった」

「いいや。それは違う」

その瞳に宿るのは、感心だ。

「お前の行動力には感服する。私が、今まで踏み込めなかった部分を簡単に暴いた。その瞬間、理解をした。私の探求心を超えるものが、お前にはあると。一つ訊きたい。その源泉は何だ。そうしてそこまです、知りたいことを追い求められる？」

下田は苦笑をする。

「そんな大げさな。僕は、あんまりこのしがらみとかに捕らわれていませんから。多少動きやすかっただけです」

「何にせよ、未知の解明が一步進んだことは確かだ。感謝する」

頭を素直に下げた後、オーベックは席に腰かけた。それを頬をかきながら観察する。今までは、違うようだった。こんな殊勝な態度をとられたことはない。よほど、感動しているようだった。

「手がかりといえ、雷は三術の基ということくらいですかね」

「呪術、魔術、奇跡が、もともとは一つだったこと。区別などされていなかったという記述もある。筋は通っているだろう」

「つまり、三つの術を扱えるようにならなければ、雷の基礎もわからないということですね」

思案中で宙に浮いていた視線が、再び下田に戻ってきた。怪訝そうな様子で。

「お前……、まさかとは思いますが、行使をしようとしているのか？」

「はい」

「知るだけでは満足しないのか？ おそらく、お前でも無謀だぞ」
「元々、そういう目的だったの。僕は知識として求めたのではなく、実用性のある手段として、解明しようとしていますから」
「だが、それは…」

そこで言いづらそうに言葉を斬った。

下田は知っている。その先を当てることができない。
時間だ。

オーベックは、下田がその術を解明する時間など残されていないと、言おうとしたのだろう。実際、客観的に見ればその通りだし、無謀という言葉にも頷けた。

今まで、移動の奇跡が最難関だと思っていた。だが、おそらく容易く更新されることになる。

「お前に、提案がある。いや、単なる私の、願いだ」

何の言葉が続けるのかと思えば、かなり弱いものが出てきた。
オーベックは今まで見たこともない表情をしている。

「私も、勇気を出そう。交渉をする。お前を、贄から外すように頼んでみよう」

情の含んだ、顔をしている。下田への情。

「えっと」

「お前との数日間、かなり有意義だった。お前ほどの人材を、ただいたずらに消費するのは、忍びない。私としても、話の合う相手を失くすのは惜しいと思っている」

「やめてください」

「正直今まではどうでもよかった。祭祀場が誰を犠牲にしようとも、どれだけの所業を犯そうとも、私には関係がないと思っていた。だが、今は違う認識を抱いている。お前の研究を続けさせてやりたい。わかるだろう。炎に焼かれるのは、並大抵の苦しみではない。お前をそんな目に遭わせるのは躊躇いがある」

雑音。

下田はこれ以上、オーベックの言葉を聞かなかった。まだ何かを話し続けているようだが、意識を別の方へと飛ばしていた。

雑音でしかない。わかっていた。彼は、別に、悪者ではない。研究一筋かと思えば、同志を思いやる心も持ち合わせている。最近はずつと彼と過ごしていたので、自分の性格とかなり合っているのもわかっていた。

それでも、その口から下田以外の生徒達の名前が出ない時点で、どうしても、対立を消すことはできない。もう決まってしまったことだ。自分は、祭祀場を壊滅させる。完膚なきまでに叩き潰す。

ただ、このことは憶えておくことにした。戦いになってもオーベックだけは下田を攻撃してこない。彼くらいなら、生かしておいてもいい。そう思うふりをして、下田は自分がまだ倫理観のある人間だと信じることにした。

(6京8765兆7754億9655万3231)

雷の詠唱は、存在しない。

音節を独自に作り出そうとしても、失敗に終わる。魔術が適切な形をとつてくれない。しばらく混乱した様子で形を歪ませた後、弾けて消える。

やはり、魔術だけでは無理だ。下田は、今まで一度も触れてこなかった、呪術をまず身に付けることにした。

オーベックは使えないということなので、師匠に頼ることにした。「無理だ」

その言葉は言われ慣れていた。だから、カルラと顔を合わせ続ける。

「どうしてですか？」

「お前には、絶対に身に付けられない。呪術の才がないからだ」

「やってみないと、わからないですよ」

カルラは首を振る。

「素養があるのなら、まずどんなに小さくても、最初に炎を作り出せる。お前に、それができるか」

下田は詠唱をした。ソウルの塊が揺らめく。炎の形をとった。

彼女は、子供に言い聞かせるように、再度首を大きく振った。

「魔術の炎と、呪術の炎は違う。見せかけと、本物。想像でどうこうなる問題じゃない。お前がそれをした時点で、呪術の才能がないのは明らかなんだ。残念だが、私に教えられることはない。そもそも、お前がそうする必要もないだろう。お前は、優秀な奇跡使いだ。あまり矢面に出てほしくは……」

自室に戻り、何度か呪術を発動させようと頑張ってみた。しかし、本当にカルラの言う通りだった。本で調べた呪術を思い浮かべても、全くその通りにならない。炎を無理矢理作ろうとしたら、魔術に切り替わってしまう。

『アナタは、地球にいた頃魔術が使えたかい?』

「いいや」

『それと同じことなんだよ。そもそも、脳の構造からして、絶対に呪術が扱えない。君が母親のお腹にいた頃から、既に決まっていた』

「時間はある。できるまで、やってみる」

『わかっているんだろう。今まで難関を乗り越えられたのは、何かきっかけがあったからだ。何か新しいことを試みて、成功するまで繰り返したからだ。ただがむしやらに同じことをやり続けても、次の段階へは進まない』

「くそ…」

『つまり、脳の構造を少し変化させれば、良いというわけだね』

下田は、前方を見つめた。

「何だって?」

『簡単な話さ。アナタの体には呪術の素養は少しもないけど、ワタシにはある。繰り返し頼むことになるけど、少しでいいよ。少し、アナタの脳を食べさせてほしい。いや、融合と言った方が正しいね。そうすれば呪術を使えるようになるだろう。素養の部分を、ワタシが補えばいい』

頬の下の部分まで浸食している、膿に触れた。

「お前が、何も企んでいないという保証は？」

『ないね。でも、よく考えてみてほしい。宿主が幸せになれば、ワタシはそれでいいんだよ。信じてほしい。この気持ちだけは嘘じゃない。他に方法がないから、提案をしているんだ』

目をつぶって、眉間を指で揉んだ。

「僕が、お前に脳を与えることで生まれる、支障はあるか？」

『あくまで、少し、だから。もちろん、正気を失ったりはしないよ。ただ……』

「何だ」

『深淵由来のものは、精神を腐敗させる。特に負の感情が、強まる可能性があるね』

「憎しみとか」

『そうそう』

「だったら、問題ない」

下田は溜息をついた。正直、他に手が無いからというだけの理由で、回を跨いでも続くリスクを負う気にはあまりなれなかった。だが、打開策が欲しいのも確かだ。彼としても、今までの経験上、このまま続けたところで呪術が扱えるようになるとは思えない。

「ヨルシカ達に向ける感情がさらに激しくなるのなら、もってこいだ。戦意が保たれるのに越したことはない。多少の危険なら、冒せる」

『いいのかい？』

駄目だと、目の前の女性は仕草で訴えかけている。必死に下田の目を見て、考えを改めさせようとしている。

手を伸ばして、竜の女性、プリシラの首を覆った。が、肌に触れることはない。霞のような感覚があっただけで、指先は簡単にすり抜けていった。

「貴方は、ヨルシカの母親なんですね」

彼女の動きが止まる。首も振らず、ただ目だけが逸らされるのを見て、肯定の意味だと受け取った。

胡散臭い異形の膿。

触れられもしない、敵の家族。

どちらを信用するだとか、その問いには意味がなかった。どちらも、疑うべきだからだ。その上で、自分の得になる方を選択する。

「もうやっていい。さっさと終わらせて」

『ああ…』

今更自分が綺麗だとは思っていないなかった。ここまでくれば、どんな手段を使っても、敵を倒さなければならぬ。

プリシラは最後まで止めようとしていた。下田は一度も、その顔を見なかった。

妙な異物感の後、目を開ける。

「たいして、変わってないな」

『あくまで少し、だからね。右脳の一部に根を張っただけさ。でも、試してごらん。効果はすぐにわかると思うよ』

炎をイメージする。

その時、確かに違和感があった。

いつもとは違う回路を、伝っているような感覚。それは今まで欲しくてたまらなかったものだった。

指先が熱くなる。爪のわずか上に、炎が灯った。

『ほらね？』

今は、ウミの得意げな声も聞こえなかった。大はしやぎする段階でもない。下田はすぐに、試行を始めた。己の限界が来るまで、倒れるまで、ずっと炎を出しては消すことを繰り返した。

(7京5643兆4178億8866万4222)

呪術でも、雷を作り出すことはできない。

何か、ずれている気がする。それだけは確信していた。
あらゆる手がかりを再確認する。

カルラの言葉。

魔術の炎は、見せかけだということ。呪術の炎は、実際の炎とは違う。篝火の炎もどこか特殊な性質を持っている。

下田は、ここが、地球とは違うということ、何度も思い返した。一見物理法則は似通っているが、長い歴史ではぐくまれてきた様々な概念は異なっている。

雷だって、そう。こつちに来てから、雷雲は見たことがない。下田の考えている雷と、竜の不死性を破壊する雷は、違いかもしれない。今度も、イメージの問題であることもわかっていった。同時に、理論も構築されていない。

ヨルシカの言葉。

雷は、全ての術の基であるということ。

魔術、奇跡、呪術は、それから枝分かれして発生したことになる。簡素な枝図を描いて、考え続けた。

地球では、雷という名前の物体はない。何もない所で即座に作り出せるわけではない。いわば、ただの化学現象だ。雲の中の氷の粒が成長して、お互いにこすれ合う。その時発生した静電気が溜まっていて、やがて放電する。

つまり雷を発生させるためには、間接的な行程が必要になるということだ。直接雷をイメージしても、意味はない。環境が整っていないから。

この理論をそのままこちらの術にも当てはめるとするなら。

雷から、三術が派生した。

魔術、奇跡、呪術のどれにでも、竜殺しの雷と関連する要素が混じっているということだ。それらから目的の要素だけを取り出して、混ぜ合わせれば、どうだろうか。

いや、違う。そんな抽象的なことではない。もっと単純に考えよう。

派生をさかのぼることはできないのだろうか。

魔術、奇跡、呪術を同時に利用して、雷を作り出す。下田達の言葉で言う、化学反応を起こさせる。

既にそれらしき片鱗は見えていた。

フォドリックとの戦いの時から始まって、利用していること。魔術と魔術を融合する移動方法のことだ。

魔術と魔術を合わせれば、お互いに反発し、暴発する。

魔術と奇跡を合わせれば、お互いに引き合い、混ざり合って相殺する。

魔術と呪術を合わせれば、出力の低い呪術が呑み込まれて、消える。奇跡と呪術を合わせれば、炎が回復し、さらに大きくなる。

では、三つは？

魔術と奇跡と呪術を同時に混ぜ合わせたら、どうなるだろうか。今までそんなことは一度もしたことがなかった。二つの時でも実用性に足る結果をほとんど得られなかった。だから、それ以上は無駄だと思いついていた。

ソウルの矢を発現させる。

放つ回復を、宙に置く。

呪術の炎を、留まらせる。

下田は深呼吸をしてから、一気にそれらを一つに合わせた。

轟音も、全てが吹き飛ばすような爆発もなかった。

だが、気がつけば壁に叩きつけられていた。ぶつかった肩の骨が砕けかけているのを感じる。もの凄い衝撃で、弾け飛んだのはわかった。原因は、明らかだ。三つを混ぜると、あつという間に間に安定が崩れる。配分が間違っていた。

だが、一瞬だけ、確かに感じた。目でも、認識をした。

気を失いそうになるほどの痺れと、雷光。

「よっ」

打開はできた。

(7京9823兆3133億6764万6533)

合わせた途端、弾け飛ぶ。

(8京4331兆5566億2234万7755)

弾け飛ぶ。

(9京4526兆2346億6634万1211)

飛んで行く。

(11京4554兆3332億7665万6666)

全く進行が見られない。

やはり、これは今までの課題とは次元が違う。

雷は、一瞬だけ発生する。だが、定着してくれない。それに下田自身の方が耐え切れずに飛ばされてしまう。これでは、実戦で利用することは無理だ。

発生する雷自体も、弱々しいものだった。作り出せただけでも素晴らしい前進だと考えられる段階はとうに過ぎていく。

「どういう割合だ？」

「今のは、魔術と奇跡が1、呪術が0.4ほどですね」

「これでも駄目だった。次に行こう」

必ず、成功する配分というものはあるはずだ。それを探る段階が続いていた。かなり、繊細な作業になっている。正解から少しでもずれていけば、失敗する。夥しい数の試行を重ねて、徐々に誤差を縮めていく。

おそらく、足を引っ張っているのは呪術だ。未だに、不安定な部分がある。それは一番最後に覚えた術だから、というだけで片付けられることではなかった。

「薄い」

『何がだい？』

「お前のことだよ。もうちよつと、僕達と完璧に繋がれないの？ いまいち出力が足りない気がするんだ」

『改善するためには、アナタの脳の三分の二が必要だと言ったら、どうする？』

「冗談か？」

『まさか。事実だよ。呪術の力を上げるには、ワタシが担当する部分を多くしなきゃ。わかってるんだろう。この雷を確実に成功させるためには、四つ目の意識が必要になる。ワタシがそれにならなければならぬ。アナタの大半と繋がる必要がある』

「一部じゃ、足りないって言いたいのか。そんなことをしたら、僕はどうなる」

『考えられる限り、最悪の事態が待っているだろうね』

「論外だな」

(1 3 京 4 5 3 2 兆 7 7 8 5 億 9 7 2 2 万 6 5 4 4)

三術と向き合う。

真摯な時間を作る。

(1 5 京 7 3 9 8 兆 2 2 2 3 億 8 8 6 7 万 4 3 5 5)

魔術と奇跡の配分はおそらく合っている。

だが、呪術が思うようにいかない。

もう少し、深く入り込む必要がある。

(1 8 京 3 4 5 2 兆 7 7 4 6 億 8 9 6 4 万 3 2 1 2)

弾け飛ぶ。

(2 3 京 5 6 4 3 兆 3 1 5 5 億 7 7 5 3 万 7 7 8 6)

何かが、ぴったりとはまり込むような感覚があった。

混沌の中に、秩序だった何かを見つけた。
一本の光。

自分の中でも具体化できないものの、手応えはある。その感覚を、常に感じられるようにしなければならぬ。

(25京6754兆7754億2323万8986)

掴んだ。

(27京3112兆6644億7875万3234)

新たな課題ができた。

この術は、下手をすれば自分にも害が及びかねない。特に、右手で制御するのは完全に駄目な方法だった。できた雷で右手のほとんどが破壊される。しかも、竜の再生力までが働かなくなってしまふ。まだ痛みがましな左手でやらなければならない。

逆に言えば、今まで正しい道を進んできたということも示している。この雷を使えば、ヨルシカの再生を無効化できる。迅速に、援軍が来るまでに、殺すことができる。

ただし、直接ぶつけるには、威力が少し心許なかった。届く範囲も狭すぎる。彼女にほとんど密着するほど近づかなければ、最低限の効果でさえ見込めないだろう。

ここで思いついたのが、雷を符呪として使うことだった。槍に纏わせることができれば、欠点を補うことができる。

しかし、これができるようになるまではまだまだ時間がある。雷を

作り出して、その場に維持できるようにはなったものの、少しでも動かそうとすればすぐに安定性を失ってしまう。ましてや他の物体に伝導させることなど、未だ夢のまた夢だった。

槍をもっと、自分の身体の一部として意識すればいい。もっと触れる時間を作り、イメージを強固なものにする。自分の身体に雷を伝わせることはできているのだから、同じことをすればいい。

(333京5346兆7654億7644万6432)

橙色の光が、瞳を柔らかく照らしてくる。

バチバチと、激しい反応が起こっている。

下田は額に汗をかきながら、徐々に雷を動かした。

槍の先端部に、やがて触れる。

結果を、淡々と受け止めた。

どれだけの偉業を成し遂げているのか、下田にはよくわからなかった。この世界の技術に、思い入れなどないからだ。ただの道具として、扱う。余計な感情を排するために、徹底していることだった。

それでも、顔は笑っていた。

獲物を前にした、捕食者のような。

(45京3122兆7654億3233万3485)

相手の感情を握るといえるのは、なかなか心地いいものだ。

槍と雷という組み合わせは、ヨルシカに劇的な効果をもたらした。

彼女は、明らかに怯えているようだった。下田がそもそもできている

ことに対しての驚きよりもよっぽど、強く伝わってくる。

背中に無数の針が刺さっても、下田は止めなかった。分解をしたり、奇跡を使うのは後回しだ。今は、攻撃に全てを集中しなければならなかった。

突き出された槍は、ヨルシカの上腕部に刺さった。

三つの詠唱を、並列させる。

術が合わさり、光が生まれる。

橙の雷が、槍の把管から流される。同時に、上方向へと手の力を入れた。

刃が動き、ヨルシカの右腕が切断される。

だが、再生は始まらなかった。

焦げる臭い。肉が破壊されていく薫り。

彼女の傷口が、弾けていた。焼けていく。苦しそうな呻きと共に、竜の鱗が潰されていく。

左腕もまた、そぎ落とす。

もはやヨルシカは、全身を硬直させていた。雷が伝導している。髪の毛が逆立ち、表情は大きく強張っている。

下田は槍を横に薙ぎ払おうとした、狙いは、首だ。

相手もそれはわかっている。激痛が襲っているだろうに、意識はまだ強く持っているようだった。地面を蹴り、距離を取ろうとする。

じんじんとした頭の痺れを感じながら、彼は槍の把管を絞った。根元の方へと。

槍が、伸びる。

刃の先が、ヨルシカの首に食い込んだ。

「ふう……、ふう……」

下田は興奮を抑えられずにいた。

地面に倒れ込んだ彼女は、再生しかけの腕で喉を抑えながらもがいている。呼吸をするたびにこぼこぼと音がして、血が吐き出されている。下田にとっては、褒賞のようなものだった。できれば写真にして、部屋にでも飾っておきたいくらいだ。

「苦しいか？ 今、殺してやる」

いくら竜の血を引いているとはいえ、頭を散々に破壊すれば死ぬ。雷を流し込んでやれば、あつという間だ。それなりに苦しめさせて、葬ることができる。

向かう足が止まる。

両手を広げて、決然と見てくるプリシラの姿が、眼前に広がった。彼女は、今までのように、遠慮がちな様子を見せることはない。下田をまっすぐ見つめて、行為を阻もうとしていた。明らかな意思表示をしている。

下田は、寧猛に口の端を吊り上げた。

知ったことではない。

そもそも、彼女が力を与えなければ、こういうことにはならなかった。それを今更、自分の娘を庇うなんて、どういう思考をしているのだろう。彼には理解できなかった。できないから、相手をする必要性を感じなかった。

ソウルの弾丸を作り、狙いを定める。瀕死とは言え、最期の一噛みをしてくるかもしれない。まずはこれで、さらに抵抗する気力を削ろう。

弾丸が撃たれる。真つすぐ、ヨルシカの頭へと向かっている。到達すれば、内部で脳味噌をずたずたに破壊する予定だった。

が、途中で消える。跡形もなく。

その時、下田には妙な線が見えた。温度のない線。それが弾丸に絡みついて、無理やり引っ張りこんだように感覚した。

ゆっくりと、無表情で振り返る。

「何してる？」

問いかけても、新宮は黙っていた。さらに警戒するような表情になって、一步下田から離れた。その手には、弾丸が浮かんでいる。彼の術だ。奪われたのは、もう確定したと言つてもいいだろう。

沸々と、腹の底で熱が沸き上がってきた。

「質問してるんだ。答えろ。どういうつもりだって、訊いてるんだよ。

おい！」

近づこうとすると、両手足にいきなり縄が巻き付いてきた。バランス

スを取れなくなり、前のめりになってから、転ぶ。

初めは、衝撃の方が大きかった。こんなことをしてくるなんて、想像もしていなかったからだ。予想外にもほどがあった。

「ちとせ……？」

生徒達は、全員、穏やかではない様子だった。ちとせはそこに転がっている死体を見て、青くなった顔を下田から逸らし続けていた。

「ほどこいてよ」

頭の異物感が強くなる。気持ちの良い痛みが脳を覆っていく気がする。代わりに、どこまでも体が沈み込んでいく心地になる。

「ほどこいてよ、ねえ。時間がないんだ。早く殺さない」と

「お前……」

高坂は何かを言いかけて、やめた。

その続きを、実織が引き取る。

「何、してるの」

全身が、冷えた。

我慢をしながら、下田は自分の身体を魔術で斬り刻んだ。夥しい量の血が流れだし、意識が遠のいていく。まだ足りないと言わんばかりに、体を傷つける。それだけ、死に近づいている気がするから。よりその感覚を強められるから。

ちとせの縄は、生きて動くものにしか効果がない。下田が生死の狭間で揺れ動いていると、徐々に緩んでくるのがわかった。あまり時間をかけずに、拘束から抜け出す。

即座に奇跡を使ってから、ヨルシカへと疾走する。

その歩みは簡単に止まった。

既にグウインが、下田の胸に剣を突き刺していたからだ。

頭の痛みが増す。

膿の蠢きが大きくなる。

同時に、力が抜けた部分もあった。何かはまだよくわからないが、今までの積み重ねの中で保たれていた何か、崩れたような気がした。

下田は、考え得る限りの呪詛を周囲に向かって吐き散らした。

53. 悲劇

(45京3122兆7654億3233万3486)

終わっても、熱は未だに消えていなかった。

両腕を再生した後、思いつきり地面を殴った。骨が砕け、肉が露出して、数回繰り返した。これで紛らわせられるのなら、ありがたいと思っていた。

「ちよつと、アキ！」

自分でもおかしいのはわかっていた。頭がおかしくなっている。

だが、それ以上の激情が、渦巻いていた。

心配して近づいてきたちとせの胸ぐらを、掴む。驚いている彼女を、無理やり持ち上げた。そのまま、首を絞める形になる。

彼女は、理解ができないという顔で、苦しむ。

「誰のために、やってきたと思ってる」

「な…に…」

「なんで、邪魔をした？ 殺せたんだ。もう少いで。なんでだよ」

「やめ……」

「信じてたのに、信じてたんだ。裏切った。皆裏切った」

手を離す。彼女はうずくまって、げほげほと咳き込んでいた。

ぐるりと、生徒達を見回した。

彼らの、何の危機感もない、呑気な様子を眺めた。敵がすぐそばにいるというのに、それに気づかないばかりか。

刺々しい感情が、次から次へとあふれ出てくる。

どいつもこいつも。

それから、下田は自分の部屋に閉じこもって、最後まで出なかった。儀式での戦いを放棄したのは、本当に久しぶりのことだった。

発想を転換することにした。

いや、今まで薄々気がついてきたことに、ようやく向き合うといった方が正しい。

下田は、自分が妙なこだわりを捨てずに、無駄に時間を過ごしていたことを後悔した。途中から既に必要はなくなっていたというのに。そもそもヨルシカを殺す意味はなくなっている。彼女に居場所を知られているから、何だというのだ。誓約を破棄しなくても、追っ手は全て殺せばいい。今の下田にはそれができる。たとえヨルシカ本人が来たとしても、退けることは難しくない。

自分一人だけだったら。

目が覚めた気分だった。

今までずっと、無理をしていたのかもしれない。

家族でもない他人まで、助ける道理がどこにあるのだろう。説明をする時間も惜しいのだ。そして信じてくれる保証もない。なぜ、そこまで労力をかける必要があるのか、わからなくなっていた。

これは、逃げではない。

下田は自分に言い聞かせる。

少なくとも儀式は止める。あとは、自分達でどうにかさせればいい。

『いいのかい?』

「何が?」

『いや、何というか。今までのことを否定するのは、虚しいだろう』

「意味がわからないよ。僕は初めからこの世界を脱出して、お母さんに会うことが目的なんだ。足手まといなんてどうでもいい。邪魔をしてくる奴らなんか、勝手に死ねばいいんだ」

『フフフ…』

「何が可笑しい」

『退屈しないなと思ってね。アナタがそう思うのなら、それでいい』

イリーナが、不死街にいる機会はそれなりにある。

ソウル集めの最中、誰かが怪我をしたらすぐに駆け付けられるように、小屋の篝火の前で待機しているのだ。今までは気にしてもいなかった。生徒たち全員で逃げるという目的の上では、手を出してはいけないタイミングだったからだ。ヨルシカの誓約を破棄しなければ、意味がない。

今までは。

「どうかしましたか？」

一人で小屋まで戻ってきた下田を見て、イリーナは尋ねてきた。他の生徒達は、まだ別の場所で亡者を狩っている。

「少し、気分が悪くなったので、休ませてもらってもいいですか？」

彼女は近づいてくる。

「奇跡は消耗しますからね。頭を私に向けてください」

「はい、お願いします」

体を彼女へと向けたと同時に、ファランの速剣を発動させる。首を切断されたイリーナは、何をされたのか全く理解していないようだった。下田への気遣いを含んだ微笑みのまま、絶命している。

護衛の役割だった、シーリスもまた一瞬遅れて事態を把握したようだった。

「シモ……」

事前に仕掛けておいた魔術で、シーリスの胸に穴を空けた。倒れかかる彼女に向かって、隠し持っておいた短剣を突き刺す。

顔についた血を奇跡で浄化する。転がっている彼女たちの死体を呪術で燃やす。迅速に、戦闘の気配を消すことに専念した。

小屋を出て、下田は走り出す。焦りも、緊張も今のところない。ただ冷えた気分だけが、自分の奥底に溜まっていくようだった。

逃げるわけではない。

とにかく機会を作り出すのだ。祭祀場の者達へ報いを受けさせるのは、後でいくらでもできる。だが、結局はそれからどうするかが一番重要なのだ。現実へと戻る方法を探す。それを見つけることがで

できれば、心おきなく戦いができる。

ずきずきと、頭が痛んだ。下田は無視をした。

目的地は、ロスリック城だ。あの大書庫になら、きつと手がかりがある。それなりに長い一人旅になるだろうが、孤独ではない。自分には、話し相手がいる。

「つけられてますね」

「というより、追ってきてるな」

「ばれるのは想定内だよ。誰かな」

『大方、エルドリツチの配下だろうねえ。彼らとまともに戦うのは初めてだ。いけるかい？』

「僕、ウミのそういうところ好きじゃないな」

背後から迫るゾリグの大剣をかわす。

インベントリから、月光の短剣を取り出す。

「わかりきったこと、訊かないですよ」

不死街を抜け、生贄の道に入った。そこからは、やや進行する速度を遅くすることにした。あまり急ぎ過ぎてもいけない。自分の体力とよく相談をして、あまり無理のないペースで先を目指した。

休む時も完全に意識を手放してはいけない。少なくとも一つの意識は覚醒させておく。目もつぶらない。少なくともイルシールに入るまでは、不眠で進むつもりでいた。

ロスリック城への行き方は二つある。白いデーモンに運んでもらう方法は使えない。彼らを使役するための旗は、祭祀場にあるからだ。

だからもう一つの方を使う。クリムエルヒルトと行動していると、彼女から、どうやって先生たちがロスリックに到達したのかを聞いていた。イルシールの地下牢に、彼女の門がある。すでに消えているだろうか、おそらくつながり自体は残っている。下田の移動の奇跡を利用すれば、機能するはずだった。

追っ手は、意外と来なかった。最初のゾリグと、坊主頭の男くらい

で、あとは来る気配がない。ありがたいことではあるのだが、それはそれで妙な不安も感じた。だが、戻ることはできない。今は進むしかないのだ。

不思議な気分だった。前にここを通った時は、周りの支援に奔走した。だからなのか、今は酷く楽に感じる。一人の方が辛いに決まっているのに、下田には周りの風景を眺めながら空想にふける余裕まであった。

二番目に、したいことは何だろう。母に会えた後は、どうするか。彼女の手術が成功したら、一緒に寿司でも食べに行きたい。

「寿司か。いいね」

巨大な蟹の目玉を握りつぶしながら、未来のことを考え続けた。

太陽が、おかしい。

感覚的に、既に儀式が間近に迫っているのはわかっていた。数日経過している。生贄の道は終わり、フアランの城塞の中程当たりまで到達していた。早いとも遅いとも言えない、無理のない速度だ。

だが、漠然とした不安は消えていなかった。何かが大きくずれている。

そんな気分になるのは、空のせいかもしれない。前よりも、暗くなっている気がした。太陽の色もどんよりとしている。この世界で目覚めた頃よりも、悪化しているように感じた。暗闇の部分が増えている。

その感触は進む度に強くなっていた。カーサスの地下墓が酷かった。前から薄暗い場所だったのに、今は常に魔術の光を灯さなければ、まともに進めない。その闇に乗じて襲ってくるスケルトンへの対処も面倒だった。

イルシールの景色が眼前に広がっても、思ったほどの解放感を得られなかった。

橋を渡りながら、太陽を観察する。

「儀式は、もう過ぎている」

『感想は？』

「はあ？」

『どういう思いでいるのか、気になるんだよ。今まで何度挑戦しても乗り越えられなかった六日目を終えたんだ。感動もひとしおだろう』
「お前のそういう所も、虫唾が走るよ」

橋の終わりが見えてくる。何かが襲ってくる気配はない。既に王を失くしているこの国は、ほとんど機能していないのだろう。遠目で見るとは綺麗だと思っていたが、実際に街へと近づくと、所々荒廃している。

踏み込んだ足が、唐突に震えを感じ取った。すぐ前の地面が、崩落し始める。それに巻き込まれる形で、下田は落下していった。

不測の事態でも、彼は冷静だった。橋の高さはかなりある。普通に落ちれば、死ぬだろう。

事前に着地地点に魔術を置いた。そして、両足にもソウルの塊を纏わせる。体を真つすぐにして、余計な抵抗が及ばないようにした。少しでも軌道がずれれば、失敗するからだ。

地面の魔術と、足の魔術が反発し合う。落下の速度は急激に緩和され、余裕を持って下田は降り立った。

随分と下に来てしまった。イルシールの本城には用がないので痛手とまではいかないが、余計な手間を取らされることになるのは確かだ。

上を見る。氷の崖がいくつも並んでいる。直接上がることはかなり難しい。周りはかなり視界が悪く、光はほとんど届いていない。魔術の光で辺りを照らしながら、屈伸を何回か繰り返した。

今の彼にとっては、大した問題ではない。何かにつかまって登る必要はないからだ。また、魔術を使えばいい。暴発の作用を利用して、空に浮かぶこともできる。

来たことがない土地とは言え、下田はそれほど緊張していなかった。もちろん油断をしていたわけではなかったが、ある種の安堵があった。それ故に接近する未知に気がつくことができなかった。

反応できなかったわけではない。ただ彼の動き以上に、その手は俊

敏だったただけだ。

黒い毛むくじやらの手が、下田の全身を掴んだ。有り得ないほど巨大な手。

同時に、周りの地面にひびが入る。彼は何度も抜け出そうともがいたが、拘束から出ることは叶わなかった。魔術を何度もぶつけたが、確かな手応えがない。

そのまま、下田は引つ張り込まれた。

目を開けても、まだ暗闇だった。

何度か瞬きをして、自分がちゃんと意識を取り戻していることを確かめた。全身が倦怠感に包まれている。一日中寝ていて、急に起きた時の感じと似ていた。

両手を広げてみると、右手の指先に硬い感触があった。それに冷たい。氷だ。感じる気温からしても、今いる場所がイルシールからそう離れてはいないことはよくわかった。

光を灯すと、左右が氷の壁に挟まれていることがわかる。上に向けると、どこまでも闇が続くだけだった。

どうやら相当深くまで引きずり込まれたらしい。下田は短剣を取り出し、周囲を何度も確認した。自分を掴んだ何かが、襲ってくる可能性はある。おそらく、かなりの巨躯だ。戦ったことのないタイプ。何らかの術も使う。

しばらく待ってみても、沈黙しかなかった。音も聞こえない。少なくとも、近くに何らかの動物がいる気配はない。

とりあえず、上昇してみることにした。崖を登り切って、どこにいるかを詳細に確かめる必要がある。かなりの高さがあるが、ロープを使うわけでもないの、大丈夫だと考えていた。

実際、そう苦労はしなかった。魔術の暴発を使えば、普通に走るよりも速く登っていくことができる。消耗はするものの、限界が来るまでに上へと到達することができた。

光を、辺りに散らす。橋の残骸が見えた。やはり、イルシールであ

ることには変わりがない。あの手に引っぱり込まれてどこに放り出されたのかと思つたが、そこは気にしなくてもよさそうだった。

だが、ここに来て下田も今の状況の異常性を認識した。

暗すぎる。

崖を登り切つても、視界の悪さは変わらなかつた。自分で明かりを作らなければ、少し先の様子も把握するのが難しい。空を見上げれば、黒い太陽が微かに見えるだけ。

嫌な頭痛がしてきた。

あまり見ていたくはない類の光景なのに、その太陽から目が離せない。妙に既視感がある。過去に、何か強烈な感情と共に、目にしたことがあるような。それには嫌な予感しかしなかつた。

「常陽の民」

ぞつと背筋が粟立ち、下田は振り向いた。声がしたのに、そこには誰もいない。

「お逃げなさい。貴方の半身が呼び寄せています。捕らわれる前に、早く」

耳元で穏やかな女性の声がある。言っている内容に反して、やけに落ち着いている調子だった。下田にとってわからないのは、どれだけ動こうともその姿を捕らえられず、また気配も感じる事ができない点だった。

「早く。……フッフ。早く、ワタシ達と一緒にしましょうね……」

声色が暗く沈んだ瞬間、下田はまた手に掴まれていた。今度は予測していたのにもかかわらず。そのことをさらに読まれた。

引きずり込まれる。前よりもさらに、強い感覚がした。全身が狭い管に無理やり押し込められて、絞られていくような。大きな隔たりを超えた、疲労感が頭の芯を揺らしてきた。未知の感覚に耐え切れず、意識が削られていく。

また、暗闇。

下田は胸ぐらをつかまれる感触で、意識を取り戻した。体が無理やり揺らされている。獣のようなうめき声が、間近で聞こえる。何か切羽詰まった状況になっていることだけは理解して、まずは視界を確保した。

眼前に、肥大した顔が広がる。特に酷いのは頬の部分で、肌が泡立っているかのように蠢き、膨れ上がっていた。崩れた口が、彼の首に噛みつこうとしている。

インベントリから取り出した片手剣で、怪物を斬り裂いた。さらに頭であろう部分を数度刺してようやく、それは地面に崩れ落ちた。

自分の呼吸が、乱れていくのを感じる。

異形に動揺したわけではない。今更、暗闇から急に出てこられたところで、驚くほどのことでもない。しかし、転がる骸を見ていくと、有り得ない事実が否応なく迫ってきた。

服だ。それはチェックのシャツと、淡い色のジーンズを身に付けている。どう考えても、この世界には似合わない見た目だった。地球の人間が着るもの。

血にまみれたでこぼこの顔を観察する。鼻が高い。目の色からしても、欧米系の男であることは確かだった。薄い茶色の髪は、できもののせいではほとんど抜け落ちている。

耳が、同じような呻き声を幾つも聞き取った。同じような怪物が、辺りにうじゃうじゃいる。暗闇の中でも、こちらに向かって駆けてくる足音は聞こえた。

下田は、最悪な気分で狩りを始めた。

出てくるのは、どれも彼と同じ人間の、成れ果てだった。戦いに適した装備をまるで身に付けていなく、たまに弾倉が空の銃を身に付けている者もいた。

これらが、幻ではないことは確かだ。踏みしめる地面の感触もはつきりとしている。少し暖かい程度の、気温も。

今度こそ、イルシールから遠く離れた場所に放り込まれたようだった。周りの地形を把握しようと、とにかく魔術と奇跡の光をそこら中

に飛ばす。

薄々気づいてはいた。だが、下田はずつとその可能性を考えないようにはしていた。もう、ごまかすことはできない。事実を、目の前に突き付けられる。

ある建物が見えてきた。ほとんど廃墟のようになっていて、中に人がいる気配はない。だがそんなことよりも、その建物の外見に目がいった。

明らかにコンクリートだ。地面には、割れたガラスも散乱している。

「これは…」

『見て、わからないのかい?』

「訳が分からない」

『地球の生き物と、地球の建物。それが示していることなんて、わかりきっていると思うんだけどねえ』

「黙れ」

下田は頭を抑えながら、先へ進むことを選んだ。

大きな街にいるようだった。崩れた高い建物が並んでいる。無事なものは何一つとしてなく、荒廃が辺りを覆いつくしていた。瓦礫のせいで入り組んだ地形になっていて、襲ってくる敵を発見するのに遅れたこともあった。

現代のビル。英語の看板。乗り捨てられた車。

建物を丸ごと貫いている、飛行機を見た時、下田もついに認めざるを得なかった。

「アメリカ……?」

『あるいは、ヨーロッパのどこかか』

「こんな幻を見せて、僕をどうしたいんだ」

『逃避するのはやめたらどうだい?』

「いや、だって、本当にわからないよ。一体何がどうなって、こんな」

『今までで一番、危険な状況なのは確かだね』

ウミに聞いただそうとしたところで、下田は妙な音を聞いた。

風の音。何かを、吸い上げているような音。それは誰かの悲鳴にも

似ていた。

光を強めると、いつの間にか囲まれていることに気がつく。すぐに武器を構えることはしなかった。相手の様子が、おかしかったからだ。

黒い靄が、人の形をとっている。目と口の部分だけ、白く塗られているように浮き上がっていた。小さく甲高い音を発しながら、徐々に近づいてきている。

「これは、何だ」

『話している暇があつたら、逃げた方がいいよ』

動き自体は鈍い。完全に包囲される前に、下田は抜け出した。不気味な感じは拭えていない。そして靄の傍を通る時、はつきりとした声が聞こえてきた。

それは、言葉の形をとっていないかった。下田の分からない言語だったとしても、多分、悲鳴交じりの叫びでしかなかった。何かに追われているのか、激しい息遣いだ。それが何重にも聞こえてくる。何十人もの、苦しみが伝わってくる。

いつの間にか、自分が倒れていることに気がつく。立ち上がろうとしても、両足に力が入らず、震えるばかりだった。

自分の身体から、白い靄が出ている。全て、黒い人型の靄に吸い込まれていた。ソウルを、吸われている。わかっていても、動くことができなかった。

この感覚は、わかる。

繰り返しの中で、久しく忘れていたものだ。恐怖。何かを怖いと思ったのは、本当に久しぶりな気がした。魔術の光が安定性を失い、周りが真っ暗になる。どこまでも続く闇。普通の精神状態なら、とっくに壊れているだろう。今の下田でも、まともな思考ができなくなりつつあった。このままでは取り返しのつかないことになるとしても、抗う気力が持てなかった。

轟音が、響く。

それと同時に靄が一斉に散っていった。いくらか気分が楽になるが、何かが羽ばたく大きな音を聞いて、危険は少しも去っていないの

だと理解する。

初め、前に降り立った存在の全容をまるでつかめなかった。徐々に、その原因をわかり始める。広げられた両翼も、爪のついた足も、赤い目を持つ顔も。全てが黒だからだ。暗闇に紛れて、赤く光る瞳だけが、威容の一部を醸し出していた。

全身が、重くなるのを感じる。圧倒的な存在を前にした時、弱者がとる当たり前の行動を、するしかなかった。彼は平伏した。無理やり地面に抑えつけられるようにして、前のめりになるしかなかった。

頭の中では、どうやって逃げるか。それだけしかない。

創作物でいくらでも登場しているそれは、実際に現実のものとして相対すると、まるで違った。倒すという選択肢をあっという間に消し去る。

黒竜は、下田になど注意を向けてなかった。耳が裂けるような咆哮をしたかと思えば、翼をはためかせ、上から降ってくる新たな存在を迎え入れようとしていた。

彼の、後ろ。そう離れていないところに、風が吹く。翼の音がした後、足が地面に付く。下田は勇気を振り絞って、振り返った。

それもまた、竜だった。全身が、紫色の光る鱗で覆われている。黒竜よりも欠ける部分の多い翼で、下田を煽ってきた。いや、この表現は正しくない。相手はただ降り立つための一動作をしたただけだ。それだけでも、彼は必至で地面にうずくまっていなければならなかった。そうしないと、あっという間に吹き飛ばされる。

二匹の竜は、お互いを見やっした後、鼻で息を漏らしながら座った。どうやら、対立しているわけではないようだ。竜たちがお互いの存在に慣れて、周りに目が行くようになるのは、そう遠くない先のことのように思えた。すぐに、塵のように這いつくばっている男を見つけるだろう。

だから下田は、息を乱しながら、上に向かって奇跡を放った。ただ大きさと光だけが強くなるように調節された術が、宙で炸裂する。

竜達の注意がそこに向かったとわかった直後、移動の奇跡を発動させる。先の座標は、正直どうでもよかった。少しでもここから遠くへ

逃げられれば、それで。

吐きそうになる感覚と共に、下田はビルの内部に出現した。

口を押えて、呼吸音が漏れないようにする。胸を何度も叩き、鼓動を抑えられるようにする。その上で、耳をそばだてた。今のところ、何も聞こえない。竜の気配は、かなり遠くにあるようだった。明確に追ってきている様子もない。

何とか精神を落ち着けて、今の状況を整理しようとした。だが、どこから手をつければいいのかわからない。そもそも、何かを解決する必要性はないのかもしれない。とにかく、元のイルシールに戻ればいい。そうすれば、あの規格外の化け物も気にしなくてよくなる。「憐憫を」

途中から、下田は既に行動していた。短剣を声のした方へと走らせる。月光が、喋りかけてきた何者かを照らした。

「カラミットとミディールは、お互いしかもう同族がいらないと思っています。多少いがみあっても、共にいるしかないやるせなさ。哀れんだ方がよろしいのではなくて？」

鳥肌が立つほどの美貌があった。現実離れしすぎていて、同じ人の顔とは思えない。それは整っているからだけではなく、彼女の表情そのものが全て作り物めいているせいでもあった。

「そして、貴方には感謝を」

首を狙う。しかし、不可視の壁によって防がれる。月光が散乱し、相手の金色の髪を輝かせた。それだけだった。刃は決して届かない。

「大王の唾棄すべき計画が遅れたのも、貴方の協力があってこそ。さすがは使徒。蛇や小娘などよりも、よほど我々のために働いてくれる」

「お前の、言っていることが何一つわからない」

下田はやっとそれだけの言葉を吐き出した。近づいてくる女性は、先ほどから一度も瞬きをしていない。眼球が硝子玉のようで、見るだけで不安を煽ってきた。

「何が、使徒だ。僕を、意味のわからない枠組みに入れるな」

「ご自分の姿を、よく見てくださいいな」

女性の手が伸びてくる。暗闇の中で映える白さだった。彼の両腕を示してくる。

「竜の右、深淵の左。我々の時代を司る要素を備えている。主も興味を示しています。だから、呼び寄せた」

「さつきから、言葉が耳を滑る。お前は何だ。何が、したいんだ」
「平等を」

闇が濃くなっている。下田は額に汗をかきながら、ここから逃げ出す算段を立てていた。鬼から逃げて、虎の巣に入った気分だ。この、得体のしれない女性を殺すのが一番直接的な方法だが、何かの予感がそれを止めていた。おそらく、下田にとって最悪の結末が待っている。

それはこのまま待っていても変わらないと言ってもいた。

「世界を、あるべき状態に戻すのです。全ての者の悲願です。神を氣取る大王達を排除し、差分のない時代を作る。身も心も震えることでしょう。貴方は、その中核の一部を担える」

声の調子は、軽やかだった。気分が高揚しているような。だが、彼女自体の様子は、最初から何も変わっていない。それが下田自身の情動と大きくかけ離れていることを、尚更強く意識させた。この女は、人間ではない。ただそうであるかのように振舞っているだけ。

「ふざけるな。お前達の争いに興味はない。勝手にしてる」

移動の奇跡は使えない。もう、体力の限界が近づいている。下田は、インベントリの中から閃光手榴弾を取り出す準備をした。一瞬でも隙を作れば、逃げ出すことはできなくもない。術では、どれも通用しない気がした。だから、地球の武器を使う。

「?84スタンングレード。好い選択です」

女の手に、手榴弾が握られている。下田は驚愕を何とか抑えようとした。直前に彼女は、彼の横の空間に手を突っ込むような素振りをした。そこはちょうど、インベントリの保管庫があるとイメージした所だった。他人に、自分のインベントリを使われた。

下田は魔術の暴発で横へと飛びながら、続けざまにソウルの弾丸と炎を放った。お互いに引き合わせ、軌道をより複雑にする。

「まあ……」

全て、女性に届く前に消失する。不可視化させていた矢を三本、相手の死角にぶち込んだ。それは確かに相手へ刺さったかのように見えた。首の部分に突き立っている。

「どうやら、誤解なさっているようですね」

だが、それは見せかけに過ぎなかった。矢は、湧き出た膿に飲み込まれていく。人形のようななじから悍ましい膿が漏れ出ているのは、より異常性を際立たせた。

月光の短剣を、弾けさせる。確かに見えている点に向かって、容赦なく突き刺した。

「貴方に、危害を加えるつもりはないのです。ただ、名誉なことを、受け入れてもらうだけ」

下田は、歯を食いしばった。

食いちぎられた腕に、奇跡をかけようとする。しかし、発動する気配がない。喉に詰まりを感じた。沈黙の禁則をかけられたのだ。詠唱はなかったはずだ。いつの間に、やられたのだろう。

女性は大きく裂けた口で、彼の部位を咀嚼していた。何かを見定めるときのように、表情がより曖昧になっていく。もごもごと頬を動かしながら、ゆるく言葉を紡ぐ。

「非常に濃厚で…濃厚ですね。貴方が常人ではありえないほどの経験をしてきたのはわかっていますが、これほどのソウル。一緒になった後、じっくりと話してもらいたいものです」

「何、を」

「蓮托生の身になる以上、紹介は必要ですね。わたくしのことは、ウーラシールと呼んでください。姫君でもよろしい」

くすりと、作り物の笑顔を向けてきた。喉が動き、腕全てが嚙下された。

下田の肉片で唇や歯の間が真っ赤になっている。その光景は、エルドリツチを思い出させた。人食いだ。この女も。

「ふぎ…」

「最初は皆同じです。同じになることを怖がる。でも、すぐに心地良

くなりますよ」

ウーラシールは一步下がる。溶け込むような漆黒のドレスをはためかせて、踵を返した。彼女の姿が闇に消えていくまで、下田は最大限の警戒をしていた。だが、同時にどうもしょうのない恐怖がじくじくと背筋を蝕んでいた。

段々と選択肢は一つしかないのではないかと思うようになる。このまま待っているよりも、戦うよりも、リセットした方がいいのではないか。やけっぱちでもなんでもなく、本当に合理的な意味で、そう考え始めていた。

今自殺すれば、祭祀場の篝火に戻れる。きっと、そのはずだ。

すぐに下田は、自分の短剣で喉を刺そうとした。急所を躊躇なく一突きして、一瞬で意識を失う予定だった。

しかし、体が動かない。

足がゆっくりと崩れていく。がくがくと震えて、自分から腰を下ろさなければ、派手に倒れてしまう所だった。背筋に汗が伝い、その気持ちの悪い感触に一瞬でも気を取られてしまえば、何もかもが終わってしまふような気がしていた。

闇から、ウーラシールが出てくる。彼女は横にずれて、膝をついた。これから、何か神聖なことが行われるのだと言わんばかりに。

下田は、今まで感じたことのないほどの悪寒が、全身を走り抜けていくのを感じた。近づいてくる重い足音が聞こえる度に、それは強くなっていく。最初に見えてきた、黒い毛むくじやらの手だけで、意識が失いそうになるほど気持ち悪くなった。

「主よ。捧げ物です」

自分の呼吸が、聴覚の大半を占める。喘ぐように息をした。何か、抵抗をしなければという意味は芽生えるのだが、体の方はまるで動いてはくれない。

それは形容しがたい化け物だった。一番最初に目につくのは、極度に肥大した左腕だ。右の方は人間のものと同じ程度のサイズなせいで、より異常性が際立っている。両腕とも紫色の布が幾重にも巻き付いていて、その隙間から真っ黒な毛がはみ出していた。

地面に突っ伏しながら、下田は胃液を吐いた。見てもいないのに、存在が傍にあるというだけで、押し潰される。みつともなく、涙も流していた。

顔には、四つの赤い目玉。口は大きく裂け、灰色の歯が並んでいる。体躯の半分近くを占めている巨大な角にも、目が沢山開いていた。それらすべてが、下田に向いている。だから、彼は直視できない。直視していないのに、呑み込まれてしまいそうな心地になる。伸びている長い尻尾が地面を擦っている音だけで、全身が強張った。

辛うじて、足の部分だけに目を向けることに成功する。発達した筋肉。逃げる自分にあつという間に追いついて踏み潰す。そんな想像が膨らんだ。

『立つんだ。いいかい、冷静に、恐怖を抑え込むんだ。逃げないといけない。アキヒロ、諦めない方がいいよ』

ウミの緊張した声を聞くのは初めてだった。だから、これがよほど危険が差し迫った状況であることはわかる。

目玉が、左腕の膿に向いた。

「先客がいるようですが、心配しなくても大丈夫ですよ。主は、全てを受け入れると仰っています」

ウーラシールは、代弁をしているようだった。下田としてはその方がありがたい。この化物がもし言葉を話せるとしたら、おそらくその声も耐えられないほど悍ましいものであることに違いないからだ。

「やあ…」

足音がゆっくりと近づいてくる。それに下田は過剰に反応した。胸が張り裂けそうになるほどの焦燥感と共に、震えながら立ち上がった。倒れるなど、何度も自分に言い聞かせる。もう少し距離を空けてから、死ななければ。今ここで自殺しようとしても、絶対に阻止される。そんな予感がはつきりとある。

一步後ずさり、下田は固まった。両の足首を、闇に掴まれている。原理も何もわからない術なので、分解することは叶わなかった。

深呼吸をしてから、彼は瞬時に両足を切断した。魔術で浮き上がった直後には、再生を完了させている。そのまま瓦礫の間を縫うように

して、疾走を始めた。

二匹の竜が近くなってくる。

何とかして。

下田はもう息が切れかけている自分を叱咤した。

何とかして、あの竜達を巻き込めば、必ず完全な隙が作れる。自分がちゃんと、死に杀れるだけの隙が。

後ろから追ってくる気配はなかった。それでも、下田は異様な恐怖を感じていた。かなり走っているのに、少しも前に進めていないような。そんな考えが際限なくあふれてくる。

竜達が、彼に気がつく。一度逃げたせい、今度は正確に向かってきた。彼は自分で考えつく限りの術構成を取捨選択する。攻撃をしてきたとしても、一度だけ凌げればいい。そうすれば、おそらく自分なんかよりもはるかに気配の濃いあれに注意を向けてくれる。いや、そもそも何もしなくていいのだ。竜達に殺してもらえばいい。

だが、その計画は直後に破綻した。右の方から急に黒い手が飛び出してきて、全身を捕まえられたからだ。

瞬間、下田ははつきりと悲鳴を上げた。

「場所を変えた方が良くということですね。我ら同胞全ての前で、行いたい。素晴らしい心遣いです」

竜は、現れた化物とウーラシールを目の前にしても、平然としていた。路傍の石に向けるほどではないが、たいして珍しくもないものに対する関心だけで済ませている。

同胞。

下田は、今まで考えないようにしていた可能性が、正しかったのだと理解した。彼らはお互いを良く知っているかのように振舞っている。事実、その通りなのだろう。共に戦う味方ならば、自然なことなのだ。

魔術や呪術を、拘束してきている手にがむしやらにぶつけた。徐々に化物の体へと近づいている。自分でもよくわからない叫び声を発しながら、それでも最大限の集中をした。

三術を絶妙に融合させ、小さな雷を作り出す。希望を掴みたい一心

で、化け物へとぶつけようとした。が、術も含めて腕が丸ごと膿に飲み込まれる。内部で炸裂させても、相手は身じろぎ一つしなかった。

誰か。

下田はもがいた。既に半身が、化物に取り込まれていた。

「やめろ……。やめて……」

「記念すべき時です」

自分の喉へ、ソウルの矢を発射させる。しかし直前でウーラシールが消してしまった。

黒い方の竜が、鼻を鳴らした。それからたいして興味もなさそうに、涙でぐちゃぐちゃになっている下田の顔を眺めていた。

もう、なりふりなど構っていられなかった。

「誰か、助けて。誰かああああ！ 助けてください！ お願いします、助けてえええええええええ。嫌だ、こんな嫌だ。母さん、母さん母さん母さん母さん、助けてよ。誰か僕を殺してええええ、早く、もう、……」

化物の内部は、声で溢れていた。

下田は聞く。耳が勝手に全てを拾ってくる。

苦しみを、怨嗟を、悲痛を。

「早く逃げろ！」

「いやああああああ」

「何なんだ、ゾンビかこいつら」

「空港が封鎖された。本国に帰れない」

「く、食ってる。数が多すぎる！」

「大丈夫よ。ママもすぐに一緒の所に行くから」

「配給が二日もない。あつちも全滅してるんだろう」

「どうして、どうしてこんな……」

「今見たか。おい！ ふぎけるな！ ゾンビだけ相手にすればいいんじゃないなかったのか。あいつら、銃弾を……」

「化物……」

「午後二時八分、アメリカ政府は非常事態宣言を発令しました。国民の皆様は決して自分の家から出ず、救助を待つてください。繰り返し返します…」

「返して！ その子はまだ八歳なんですよ！」

「暗闇の中にも、希望はあります。我々は神の御許に召されることで、全ての穢れから解放されるでしょう」

「くだらねえな」

「救いがたい」

「こういう時でも、人間同士で争ってやがる」

「いいですか、訊いてください。司法は崩壊しました。よって、我々は自分達の掟を定めなければいけません。罪を犯した者が裁かれないのは、崩壊への始まりです」

「開けろ。早く開けろ！」

「に、人間だと思ったら違った。何なんだあいつら。まるで——」

「あはははははは」

「これは災害ではない。そうですね？」

「大丈夫。私は大丈夫。まだやれる。まともでいられる……」

「どうやって死ぬかを考えてる。一週間連続。記録更新だ」

「頼れるところなんて、あるのか？ 二日前にラジオで聞いた。カナダの政府が崩壊したらしい。国境を超えるしか、ないのか」

「ソフィア！ どこにいるの？」

「殺してくれ。妻も娘も死んだ。これ以上、何の意味があるっていうんだ」

「俺達がクズだと思っているのなら、まだ頭がいかれてない証拠だ。だが、こんなのどこにでもいる。軍隊から規律を失くすと、すぐにこうなる」

「大統領。決断をしてください。選択を。大統領……？」

「あのさ、あつちで高校の奴らが集まってるんだって。行って見ない？」

「泥水も案外いけるもんだな」

「お前を、どこまでも追いかけて、殺してやる」

「どうしても、帰らないといけない。日本を目指す」

「ごめんなさい、こんなことになるのなら、早く死ねばよかった」

「死ね！」

「あいつ、くたばればいいのに」

「貴方が背一杯苦しむことを、願ってますよ」

「殺してやる」

「糞野郎」

「人の形をしていても、考えるな。皮をかぶっているだけの怪物だ。言葉も通じない。囲んで、仕留めてやる」

「お前の腸を引きずり出してやれば、どんなにいいか」

「苦しみを。貴方に何よりも苦しい死が訪れますように」

「産まなければよかった。あんたのせいだ……」

「よくも……。蜂の巣にしてやる」

「くたばれ」

「死ね」

「死ねよ」

「死んで」

「死んでください」

「死ねばいいのに」

「死になさい」

「死んだ方がいい」

「死ぬべきだ」

「何もかも」

ずっと、恐怖の叫びをあげていた。早くこの時間が過ぎ去ってくれることを願いながら、終わってしまうことでさらに事態が進行してしまふのを恐れていた。前後上下が不覚になり、ただ何かに覆われている不快な感覚があった。

自分の核に致命的な侵入を許す直前、体の中で熱が発生した。馴染み深いものだった。今まで何度も味わってきた。憎悪していたはずの炎。

だが、今は何よりもありがたく感じる。下田はその熱さの中へ身を委ねていった。ただ逃げのびたい思いだけで、今までにない行動をした。

(45京3122兆7654億3233万3488)

口を押さえられた。

全身を揺さぶられた。

ようやく、目の前が開けてきた。

喉が痛い。

打ち付けられた、背中が痛い。

「アキ……、アキー！」

眼前にちとせの顔を広がつて、下田は自分がずっと悲鳴を上げ続けていることに気がついた。その場にいる全員が、何事かと近づいている。

わかっていても、自分では止められなかった。だから、強引な手を使うことにする。

ソウルの弾丸を自分の喉ではじけさせた。声帯が一瞬で破壊され、

自分は、巻き戻ったはずだ。なかつたことになったはずだ。

しかし、別の考えもあった。腕の膿は時間を遡っても構わず進行した。おそらく、それ関係のものは、次元を超えてくるのではないか。その仮説が次第に事実の様な気がしてきて、彼は絶望した。だったら、一体どうやって、逃げればいいのかだろう。

終わりが無い。

襲ってくる化物は、最初それほど強くもなかった。拍子抜けするほどだ。多少武器を扱ったりはするものの、その練度は話にならない。下田はほとんど消耗せず、術も使うことなく屠っていくことができた。

だが、徐々に手強くなってきた。七体ほど倒してから、一気にレベルが上がった。それでも下田にとっては普通の範囲内だった。対複数戦の経験は、嫌というほど積んでいる。化物のくせに、お互いを助け合うような動きをされても、何とかなった。

おかしいのは、弱い個体だった。それらはいくら殺しても、湧いてくる。十回ほど繰り返し返すと復活しても動かなくなつたが、気持ちの悪い存在がそこにいるというだけで、下田の恐怖は増していった。

「くるな、くるなああああああああああああ」

後半になると、さすがに辛くなってきた。体力が削られていくにつれて、敵も強くなっていく。

下田はあらゆる技術を総動員して、何とかこの包囲網を抜けようとした。化物共に遠慮する道理はない。苦しみという感情があるようなので、容赦のない選択肢を取り続けた。嫌な叫び声も上げる。

中でも、特に手強い個体があった。決して動きが速いというわけではないのだが、攻撃が当てられない。気色が悪かった。まるで経験の上で自分の攻撃が見切られているかのようで、その普通らしさが不快だった。

二番目に強い個体は、しぶとかった。多少攻撃してもすぐにふさがってしまう。だから、下田は雷に頼ることにした。これは、膿に對してかなり効力を発揮するらしい。それでかなり追い詰めることができた。

が、全滅させる前に体力の限界が訪れる。

倒れた下田は、一体に無理やり持ち上げられた。叫びながらもがくが、その拘束から抜け出すことができない。

はつきりと、恐怖した。また取り込むつもりなのだ。あれは嫌だった。それだけは嫌だった。だが体は動かない。

そして、何かが流れ込んでくる。それは予想に反して、とても熱いものだった。燃え盛らんばかりのソウル。下田は涙を流しながら、段々と受け入れる姿勢になっていった。

「シモダアキヒロ」

声のはつきりとしてきた。ややしわがれた声。

何かがおかしいと気づき始めた時、周りの光景が移り変わっていった。劇的な変化。濃く漂っていた靄が晴れていくかのように、はつきりと視界が開けていった。

「どんなに万全を期したとしても、何が起こるのかわからない。油断をしていた」

下田を捕まえているのは、グウインだった。彼の頬に一筋の切り傷が入っている。今までで一番、消耗しているようだった。

「シモダよ、見事だ。完全に我々を、欺いた」

グウイン以外の者達は、惨憺たる有様だった。祭祀場のほとんどの者達の死体が転がっている。そのどれもが、酷く損傷していた。肉片や血が飛び散っていて、石の玉座も赤く染められている。

その中において、イリーナが胸を抑えながら、あちこちを駆けずり回っていた。彼女自身は無傷だ。まだ、生きている望みのある者達を探そうとしている。しかし、そのほとんどが失敗に終わっている。奇跡の光は虚しく消えていくだけだった。

例外の一人であるヨルシカは、イリーナに少し助けてもらいながら復活しようとしていた。だが、かなり血を流したせいかな、全身が戻っても立ち上がれずにいる。それでも目だけは下田に強く向けられていた。憎悪の目。そして、苦渋も混じっている。

下田は、全身の力が抜けていくのを感じた。徐々に、理解し始める。一体、自分が今まで何を見ていたのかを。何を見ていなかったのか

を。何を、してしまったのかを。

篝火の周辺で、生徒達が転がっていた。一向に起きてくる気配がない。しかし、意識を失っているわけでも、本当に死んでいるわけでもなかった。彼らはうずくまり、すすり泣いたり、口を押えながら震えて苦しんでいた。何の傷も見られないのに、何かを酷く傷つけられたような様子だった。

「あああ」

下田はようやく、全てを理解した。

ちとせは、少しでも顔を上げて、彼と視線を合わせてきた。しかし、すぐに逸らされる。そこには、明らかに強い怯えがあった。そして大きな不信も。酷い裏切りを受けたかのような反応だった。

「僕は、僕は……」

手に蘇る、肉を裂く感触。

何度もした。

自分は、何度も、殺したのだ。

化物の幻を見ながら、ちとせを、同じ地球の生徒達を殺した。彼らが、立ち上がれなくなるまで。精神を破壊するまで。

これだけは守ろうとした。これだけはやってはいけないと思って
いた。

そんな最後の一線を、自分はいとも簡単に踏み越えた。

「違う……。こんな、僕は、こんなことをしたかったわけじゃ」

「じゃあ、何を、したかったんだ？」

「何を、目的にしていたんですか」

二つが、現れる。

彼の意識達。両方とも、涙を流していた。表情を歪めずに、無のまま泣いていた。それは虚無であり、諦めだった。

「地球に、帰って、お母さんに、会うんだ」

「わかっているだろ」

「わかっているんでしょ」

自分自身に哀れみを向けられることが、こんなに辛いとは思って
みなかった。下田は何もかもに対して耳をふさぎたい衝動に駆られ

るが、自分にそんなことをする資格がないことに気がついた。そもそも、世界から何一つとして認められていないような気がしていた。

自衛としてではなく、ただ本心からの望みとして、彼は自分の意識を断絶させた。そしてやってくる暗闇にまた怯えることになる。今までは束の間の休息だった消失の時間が、牙をむいて彼の首筋に食い込んでいた。

(45京3122兆7654億3233万3489)

「アキ？」

癖というものは、どんな状態になっても、抜けないものらしい。彼の両腕が欠けたと全員が認識する前に、一瞬で再生していた。だから、ちとせにとつては、ただぼうつとしている下田だけが映っている。

それでも彼女にとっては、いつもとは違う何かを感じ取っていたのだろう。だから、心配するような声をかけてきた。

だが、彼自身は、それに追い詰められていた。目の前の篝火が、ぱ

ちばちと音をたてながら火の粉を吐き出していた。その光に当てられてみると、全身が温かくなつていくような気がしていた。

「大丈夫？」

肩に触れてきた彼女に向かって、下田は微笑んでみせる。

「うん、平気。ありがとう」

そのまま流れるように、魔術で自殺した。

54. 喜劇

(45京8754兆2213億7755万2322)

下田は、ソウルの矢で自殺した。

(49京3421兆6564億1286万8965)

ソウルの弾丸で自殺する。

(57京3212兆7674億8765万7643)

短剣で自殺する。

(78京3311兆8965億3311万5634)

篝火の温かさに酔いしれながら、自殺する。

(90京2123兆6743億8933万3333)

篝火の光に感謝をしながら、自殺する。

(164京3311兆3546億9366万2445)

自殺する。

(234京6533兆7785億2234万7754)

自殺する。

(342京7343兆6643億7875万8965)

自殺する。

(497京5633兆8987億3244万7745)

自殺する。

(674京5332兆8786億3231万9765)

自殺する。

(897京3143兆7854億8743万2334)

自殺する。

(1067京3312兆1334億7745万7333)

自殺する。

(1563京7457兆4221億6634万7433)

自殺する。

(3 垓 2 3 1 2 京 5 6 4 4 兆 6 7 4 4 億 3 3 2 2 万 7 8 5 4)

気がつけば、膝をつき、祈りを始めていた。ずっと、見逃していたことだった。

自分にとって、一番寄り添いたかったもの。

篝火にむかって、下田は頭を垂れた。ひたすらに縋り付き、救ってくれるものを求めて。事実、その光と熱は闇を遠ざけた。あの恐ろしい化物の存在を、少しでも忘れることができた。

だが、徐々に足りなくなってくる。どうしても、救いには慣れができてしまうものだ。新しい刺激がないと、恐怖が蘇ってくる。

だから、下田は両目を潰した。

常に暗闇を傍においておけば、それだけ篝火の素晴らしさ、炎の神聖さが際立つからだ。それに、自分で作り出した闇は、案外、心地いものだった。常に眠りにについているようで、心が安らいでいく。それはあの、おぞましい深淵由来のものとは違う。

そして、性器も切除した。

自分をとにかく、周りの世界から切り離しておきたかったからだ。

今まで抱いてきたあらゆる欲望を消し去る必要がある。だから、その大本を失くすことにした。男でもなくなった彼は、より自分と炎だけの世界に傾倒していった。

祈りだけが、彼の軸になっていった。

3)

(2 3 1 垓 5 3 2 6 京 7 8 5 4 兆 7 8 7 4 億 3 4 4 4 4 万 3 4 5

彼は祈り続けた。

5)

(9 8 4 垓 2 3 3 1 京 6 7 4 3 兆 8 9 9 7 億 3 4 3 1 万 6 8 4

彼女は祈り続けた。

2)
(5 4 6 3 垓 1 2 5 7 京 4 5 5 3 兆 7 8 8 5 億 7 9 3 3 万 3 3 4

白い流れが、それぞれの軌道を維持しながら、断続している。
やや奔放な傾向。

下田はジークバルドらしいと、緩く笑った。ソウルの流れは、その人の性根を如実に表している。たとえば目が見えずとも、その流れを感

知すれば、相手のほとんどを理解することができた。

飽きないのは、やはり、ちとせのソウルだ。できれば彼女に直接接触して味わってみたいものだが、理由を用意するのが難しい。ただでさえ、心配をされているのだ。こんなこと言えば本当に気が狂ったのだと思われるかもしれない。

だが、ソウル、魂が視えるのは事実だった。いつからか、祈りは自身の核に影響を及ぼしていたようだった。篝火を、炎を一心に崇め続けていたら、こうなっていた。

そして、篝火の構造についても、理解が及んだ。そして、その使い方方も。

くすくすと笑みを漏らしながら、頬杖をつく。

篝火での移動は、イリーナだけしか扱えないものだった。しかし、その本質を理解した今、下田はそれを簡単に行うことができる。彼女と同じ技術を身に付けたということは。彼は妙な感慨に浸っていた。つまり、彼女と同じ存在になったということだ。

これで、いつでも簡単に全員を連れて、祭祀場から脱出することができる。時間的制約に囚われず、いつでも適当にイリーナを殺してから逃げることができる。

「ふふ」

自分のことが可笑しかった。未だに、そんな思考がふつて湧いてくる。薄く口紅を引きながら、自分を見つめてくる生徒達に顔を向けた。

「なに？」

高坂が、我に返ったかのように頭を振った。実際にそう見えているわけではないが。ソウルがそのような形に流れているので、手に取るように分かった。

「言ったじゃん。目は、大丈夫だよ。前にも何回か見せたでしょ。すぐに治せる。だから、心配しなくていい」

「いや、そうじゃなくて。何だ、お前、その、女装に目覚めたのか」「あはは」

下田は自分の修道服に触れた。たしかに、これは女物だ。化粧も少

ししている。

「違うよ。僕、ちゃんと女の人好きだもん。これは、飾りみたいなもの。こうするとき、やりやすくなるんだ。色々よね」

立ち上がり、前へと進み始めた。先にいる高坂とちとせが、びくりとして道を開けてくる。

「どっくの」

下田は、ちとせのソウルに見とれてから、答えた。

「実織のお姉さんと話しに」

薫は、既に部屋で座っていた。

下田が入っていくと、すぐに注意を向けてくる。だがそれは警戒というよりも、困惑の方が大きい。彼女から流れてくるソウルは、微妙に震えていた。

「急に呼び出してしまつてすみません」

彼女は少し無理をして微笑んでいるようだった。

「それはいいんだけど。下田君、どうしちゃったの。皆不思議がつてる」

「いきなり本題に入りますけど、いいですね?」

余計な話をする気はない、という意思表示をすると、相手も背筋を伸ばした。

「……いいよ」

「どうして、実織を生かしたんですか」

質問の効果は、十分理解しているつもりだった。だが、予想以上に相手の驚きは強かったらしい、薫とフリーデの魂が共鳴して、少々目に痛いほどの流れができてしまっている。失敗したな、と、下田は後悔した。もう少しゆっくりと話を進めればよかった。

「何を、言ってるの」

「篝火に捧げられるとき、彼女だけは、無事でした。最初は本当に不思

議だったんですが、貴方の事を思い出して。貴方が、祭祀場と何か取引をして、彼女の命を救おうとしたのではないかと」

ソウルが感じられるようになってから、下田は余裕が生まれた。だから、燃やされる時に、周りの状況を感じることができるようになった。その時、生徒達はほぼ全員魂が破壊されつつあったのだが、例外が一人いた。実織だけは、何の影響もなかった。今までは自分の苦痛だけで精一杯だったために、気がつけなかった事実。

薫は、まるで怪物を見るような顔で下田と相對した。

「否定はしないでいいです。確証は取れているので。僕は嘘をつきませんでした。まだ、本題に入ってないんです。貴方が自分の弟を捨てて、妹を選んだことなんて、どうでもいい。知りたいのは、過去です。貴方が今に至るまでの事情です」

彼女は呼吸を数度してから、顔を押しさえた。

「なんで…」

「訊くまでもないですよ？ 僕たち全員が、関係あることだからです。お願いします。つらいのはわかっています。それでも、全部話してください」

「貴方は、一体…」

「早くしてください」

十秒ほどの沈黙の後、彼女は話し始めた。

大方、予想していた通りのものだった。彼女はアメリカで、最初期の混乱を乗り越えたらしい。侵略の、序盤を。

「初めは、大したことがない事態だと思ってた。政府も事態が收拾したと発表していたから。でも、それは違った。その時にはすでに、国のトップは殺されていた。奴らは、大王の軍勢は既に奥深くまで浸透していた」

きっかけは、わからないらしい。ただ、気がつけば、有り得ない存在が、想像の産物でしかない化物、亡者が、はびこるようになっていた。

最初の一週間ほどで、おおよそ七割の国が行政機能を失ったらしい。綿密な計画の上での、侵攻だった。国同士が連携して、對抗して

こないよう、迅速に行われた。

「相手も一枚岩ではなかった。私は、サンフランシスコで、フリーデと出会った。彼女とは色々あって、協力する間柄になった」

その後も、彼女の一进一退を聞くことになった。下田は、正直あまり興味がなかった。今こうして聞いているのも、最期の確認をするためだ。既に分かっていることを確かめていく作業は、あまり面白くない。

そして、彼女は最後に日本へたどり着いた。

「私は、私以外の全てを終わらせてしまった。でも、それ以外どうしようもなかった。あんなのに、勝てるわけがなかったの。だから、取引をした。彼らを認める代わりに、家族を救ってほしいと。家族だけは、見逃してほしいと」

それならなぜ自分達も残っているのかと疑問だったが、そこはあまり大事ではなかった。知ったとしても、意味がないように思えた。

自分の思い出に浸って悲しんでいる彼女を、一人しておくことしかって、ゆつくりと進んでいった。それから自分の部屋に向かい、辿り着き、扉を開け。ベッドに腰かけた。

「なに？」

プリシラは、憔悴した顔で下田を眺めていた。

「ごめんね。今まで色々。僕は、色々なことから、逃げてた。見たくない現実から、顔をそむけてた」

彼は口を吊り上げる。プリシラが一步後ずさった。

「この繰り返しからも。もつと、大事にすることにしたんだ。これから永遠に付き合っていくわけだから、ちゃんとしないとね。一回一回どう過ごすか、300兆くらいを一グループにして考えていこう」

彼女は、首を振った。そのたびに、涙がぼろぼろと零れていた。

「だからさ、貴方ともちゃんと話したい。声を出してくれるかな。僕は、興味があるんだ」

彼女は何かを話した。しかし、聞こえない。頭痛のせいで、集中が乱れた。

「駄目かあ。ま、いいや。これからたくさん、機会はあるわけだしね。まずはさ、ちとせに告白してこよう。多分ふられるけど。そんな気がする」

立ち上がった下田に向かって、手が伸びてくる。その白い鱗のついた手が顔全体を覆ってきた。何か得体のしれない感触がしたような気がした。

しかし、彼女は実体ではない。そのまま容易にすり抜けて、下田は扉を開けた。

案の定、ふられた。

考えさせて、とのことだったが、多分答えを出すのは現実に帰ってから、という考えがあるのだろう。つまり、実質告白は失敗したも同然だった。

下田はそれでも、ちとせと関わろうとし続けた。

何度も何度も、下田は全員との会話を続けた。どうせ六日間が過ぎ

れば皆忘れてしまうのに、毎回毎回同じような話、同じような展開を続けた。もちろん細かな所で工夫を施すのは怠らない。それがマネリを招かないコツだからだ。あまり仲が良くない宇部や、丸戸のことも知ろうとした。そして、やっぱり彼らとは合わないということを確認した。

インベントリは、やはり便利だ。

下田は手始めに音楽を始めた。楽器の種類が豊富なのはありがたい。全てを極めるまで、それなりに時間をかせぐことができるだろう。それに音楽自体も、やっていると普通に楽しい。高坂がギターを齧っていたので、その方面の話で彼と盛り上がることもできた。

悪くない、と思える自分がいる。

祭祀場の者達もこちらが友好的に接している限り、同じようにしてくれる。彼らも、使命を譲れないという点を除いては、ほとんどが良人たちなのだ。だから、彼ら全員とも会話をした。特にオーベックとはやはり気が合った。彼と談義をかわすことはなかなか楽しい。そしてやはり、ヨルシカと仲良くすることはできなかつた。

何かがおかしいと気がついたのは、いつからだっただろう。

初めはほんの小さな視線の違和感だった。自分に向けられている視線の質が、何か、変化したように思えた。それは全員ではなく、一部の者達だけだった。

宇部が、近づいてくる。

喧嘩を売るためではない。彼の表情は険しくはなかった。何か突っかかって取れないとでも言いたげに、もどかしいような、訳が分からないような不思議な顔をしていた。

「どうしたの？」

彼はまじまじと下田を観察している。その様子に、何か、非常に嫌な予感を覚えた。そのどこか呆けたような顔は、いつか、見たことがあるからだ。

宇部は、周りの者達を確認するように視線を巡らせた後、下田に向かっていった。

「お前、誰だ？　いたかこんな奴」

それが冗談ではないことは、やがて分かった。

下田は、急に捕らえられることになる。それを行ったユリアに訳を聞いたところ、祭祀場に見知らぬ者が侵入していたら、誰だっとう

するといった答えが返ってきた。

もちろん、すぐに解放された。そうした方が良いという意見が、祭場内で上回ったからだ。特にジークバルドが、下田を閉じ込めておくことに反対してくれた。おかしいのは捕まえた方だと。

そして、今度はジークバルドに捕らえられた。
解放に賛成の票は少なくなった。

回数を経る。

既に半分以上の者達に、よく奇異の目を向けられるようになる。そういう相手には警戒されるたび、下田は必死に事情を説明しなければならなかった。自分は、味方なのだと。元からここにいた、存在なのだ。

「僕が、わからないの」

「うんと」

新宮は苦笑して、首を振った。

「ごめん、同じ高校だった？ 私達と同じ状況なのはわかってるけど、ちよつと怖いよ。だつてさ、その、今までどこにいたの？」

「ずっと、一緒に戦ってきたよ。それに、僕は、皆と同じクラスだ。戸水先生の所」

「紗奈、もしかしたらさ」

実織は指を顎に当てた。下田の方を見て、同情するように目を伏せた。

「私達、本当に忘れてるのかもしれない。だつて、こんな世界だよ。何

があるのかも、わからないし」

「でも……」

「とにかく、私達は何とかして思い出す努力をしよう。ごめんね下田、私達、頑張るから」

実織はそう言つて、他人に向けるような笑みをした。

ちとせはかなり憤っているようだった。

「ありえない。なにこれ。冗談にしても酷すぎる！」

「ちとせ……」

「だってそうでしょ、皆アキを忘れてるふりしてる。何のつもりか知らないけど、今すぐに辞めさせないと。小学生のいじめでも、こんなにあからさまにしないよ」

できれば、今すぐに彼女の頬に接吻をしたかった。

「いいよ。本当に忘れてるみたいなんだ。多分、何か、敵の術のせいだと思う。大丈夫だよ、きつと現実に帰ったら全部元通りになるよ」

言いながら、彼は動機を激しくさせていた。

お願いだ、お願いだ、お願いだ。

ちとせは彼の隣に座って、肩を叩いてきた。強く、笑いかけてくる。「そんなに強がんなくてもいいよ。一緒に何とかしよう。もし、何かできなくても、あたしがいる。あたしは、アキをずっと憶えてる。元気出して」

「うん。ありがとう」
お願いだ。

目の前に篝火がある。

両腕が灰となって消えていく。

下田はそれをゆつくりと観察してから、彼女の方を向いた。

ちとせは、今までよりも一秒ほど遅く、こちらに気がついてきた。
どうか。

彼女は、下田の惨状を目にした瞬間、驚きを露わにする。だが、そこには心配と不安だけが含まれているわけではなかった。それには、彼自身の存在に対する驚きもあった。

駆け寄ってくる。それは彼女の生来の性格から来ているのだろう。だから、下田がこうして大怪我をすれば、どうにかしようとしてくれる。

「だ、大丈夫？ イリーナさん、この人大怪我してますー！」

たとえ見知らぬ人に対しても、助けようと動く意思がある。

イリーナに治療されている途中、ちとせはこちらを氣遣ってか、色々と話しかけてきてくれた。

「びっくりした。急に篝火から現れるんだもん。祭祀場の人とか？」

「…」

「でも、日本人っぽい顔してるね。私達と同じってこと？」

「うん」

「今まで、どこにいたの？ よく、生き残ってこられたね」

「頑張った、から。凄く苦労したんだ」

「名前は？」

「下田彰浩」

彼女は手を差し伸べてきた。

「じゃあ、下田。よろしくね。あたし達、現実に戻るから。一緒に行こう」

「うん」

「同い年、だよな。高校はどこ？」

「うん」

下田は自殺をした。

ベッドから半身を起こし、傍に立っている白い女性を見た。

「大丈夫？ アキ」

ちとせは、倒れた自分を運んでくれたらしい。彼女が部屋を訪ねてこなければ、もう少し硬い床で眠り続けることになっただろう。

彼はお礼を言つて、彼女が部屋から出ていくまで普通の表情を保っていた。

それから、胸を押さえる。荒い呼吸をしながら、徐々に俯いていく。途中から、苦しげな呻きが加わった。喘ぐように呼吸をし、できればそのまま窒息して命がなくなればいいのと思いつつながら、回復するのをひたすら待った。

過呼吸が終わった後、下田はじっとプリシラを見つめた。

「頷くか、首を振るだけでいい」

彼女は頷いた。

「あれは、幻だった。夢だ。実際に起きたことじゃない」

彼女は頷いた。

「でも、正しいことだ。お前が見せたのは、この先に待っている未来だ」

彼女は震えながら頷いた。

「この、繰り返し返しの能力には、限界がある。回数制限がある。無限に戻るわけじゃない。限界を超えれば、僕は、剥離していく。この世界から、徐々に消失を始める」

彼女は鼻をすすりながら頷いた。

その瞬間、下田は立ち上がる。その勢いに怯む彼女にも構わず、大きく詰め寄った。相手を鋭く睨みつけながら、両の拳を握る。

「いいか。よく聞け。もうこの回でいい。僕から、固有能力を消せ」

プリシラは首を振った。

「もう、戻れないようにしろ」

首を振る。

「燃やされて、魂を破壊されて、僕は死ぬんだ。初めから、そうすればよかった。それが正しい運命だった。今からでも遅くはない。やれ」
首を振る。

「やれ！」

プリシラの姿が消える。そして、少し離れた所に、再出現した。もちろん、下田はそれを読んでいた。ソウルの流れを把握すれば、造作もないことだ。だから、魔術を縄にして、上手く彼女に巻き付けさせる。実体がなくても、拘束する手段はいくらでもある。そうなるよう、詠唱を組み替えるのも一つだ。

「これから、お前を拷問する。僕の望む言葉が出るまで、苦しめさせる。わかるな？」

彼女は首を振った。そして、必死に、言葉を伝えようとしてきた。声が聞こえないので、下田は最初理解をしないようにした。だが、その言おうとしている言葉が単純で、口の動きがわかりやすい類のものであったので、声がなくても意味を理解することができた。

彼女はずっと、繰り返し返している。

頑張つて。諦めないで。お願い。

下田は竜の右手を、思いつきり、横の壁に叩きつけた。岩が砕かれ、破片があちこちに飛んで行く。そのうちの一つが彼の頬を裂いたが、微動だにしていなかった。

「ふざけるなああああああああああああああー！」

大口を開けて、歯をむき出しにして、プリシラへと言葉をぶつける。それは客観的に見れば、酷く醜い表情だった。激昂した鬼よりも、おぞましい顔だった。

「何を寝ぼけたこと言ってるんだ？ お前は傍で、散々見てきたはずだ。そうしろ！ そうじゃないのか！ ふざけやがって。頑張つてるだろうが。頑張つたんだよ。何もかもを総動員して、何もかもを犠牲にして、やったんだよ！ 気が狂いそうになるほど頭を回して、実際に気狂いになりながらぶつ殺して。散々、やってきたじゃないか。何を見てたんだ。お前の目は節穴か。その顔を潰して、別のに取り換

えてやれば、多少はましになるのか？ どうなんだ、おい。答えろよ」
彼女は唇を固く噛んでいた。そこから血が出るほどに強く。決して下田から顔を逸らそうとしていなかった。今までで一番、決然としていた。

「ずっと自分なんかよりも強い奴ら相手に、必死に食らいついて、全員、殺してきたんだ。どいつこいつもきつかった。もう嫌になりそうだった。それでも、先へ進んでいく度、何とかなるんじゃないかって、乗り越えられるんじゃないかって、思ってたんだ。こんな自分でも、やっていけるんだって」

下田は醜く笑った。それは自分への最大限の侮蔑を示していた。

「その結果、どうだ？ 僕は、戦いにおぼれて、見失った。傍から見れば、僕は異常者だ。いきなり儀式の始まりで行動し、どんどん殺していく。何の説明もなく。ちとせ達からしたら、僕を止めるのは当然だ。なのに僕は。それを裏切りと馬鹿みたいに思い込んで、見捨てた。その結果、どうなった」

耳の奥が、じんじんする。自分の声で、耳鳴りがしてくる。

「結局何もわかつちやいなかった。僕にとって、祭祀場は敵だった。でも、あいつらにとつて僕は？ ただの計画のための駒だ。奴らの本当の敵は、深淵だった。火継ぎを行わなければ、世界は深淵で覆われる。あの化物や、ウーラシール、竜が台頭してくる。勝てっこない。ヨルシカもグウィンも、奴らには一瞬で殺される。だから、皆一生懸命なんだ。使命に全てを注ぎ込んで。僕は、結局、途中参加の外野でしかないんだ。計画の大詰めで消費されるだけの存在。そんなのがいくら頑張ったところで、何かを変えられるわけがないんだ。変えられたとしても、それは僕達にとつても悪い方向なんだ」

火継ぎを止めなければ、自分達は死ぬ。

火継ぎを止めれば、深淵が来る。自分達は、死ぬよりも酷い目に遭う。

「どうすればいいんだ。わからない。いくら考えても、道がないんだ。助かる道がないんだ。教えてよ。お前が僕をこんな目に遭わせてるんだ。何か希望があるから、それを掴み取るためにやってるんだろ

？」

プリシラは首を振った。申し訳なきように。

下田は叫んだ。

「お前もわからないのに、じゃあ、どうすればいいっていうんだよ！無理にきまつてるだろうがあああああああ！自分ができないことを人に押し付けるなあああああああああああああああああああああああああああああ！」

どれだけ近くで怒鳴っても、プリシラは動かなかった。その手応えのなさに、次第に下田は怒りが収まっていくのを感じる。そしてやってきたのは、どこまでも続く虚無感と、悲しみだった。

下田はその場に座り込む。両手で鼻を包んで、涙が出るのをそのままに任せていた。

「これ以上、どう頑張れっていうんだ……。わかってる。わかってるんだよ。ぼく、僕は、今まで、僕がやってきたことは、まるで、無意味だった。目的なんて初めからどこにもなかった。あつたと思いついでいるだけだった」

がりがりと頭をかいて、呻くように言う。

「地球は、滅ぼされた。グウィン達と、深淵の両方によって。決め手は核だった。後半の混乱した状況の中で、核爆弾が三十発発射された。策略なのかただの不信に駆られた行動なのかわからない、でもそれかとどめで、ほとんどの人類が死んだ。残りも人間でいられなくなった。こんな状況で、生きてるわけがないんだ。母さんは、癌の手術をしなきゃいけなかった。もう、死んでるんだろう。ヨルシカに殺されてる。そもそも、地球が滅びてからもう何千年も経ってる。僕は、」

次から次へと涙がこぼれてきた。できればこのまま海になって、自分をおぼれさせてほしかった。二度と覚めない眠りへと導いてほしかった。

「僕は、もう母さんに会えない。この世界から出ることもできない。この世界で生まれたから。もう、嫌なんだ。続ける意味なんてないよ……。大事な人もいなくなった。何を目的に、戦えばいい。どうせ勝ったところで、何もいいことなんてないのに。僕は、母さんがいな

いと、駄目なんだ。無理なんだ。もういい。もういいよ。死なせて。殺してくれ」

顔を上げると、誰もいなかった。拘束は解かれ、プリシラの姿は消えている。彼女に、逃げられたことは確かだった。その事実を確認すると、再び自分の中で感情が激していくのがわかった。

「プリシラ…」

声が虚しく返ってくる。

「プリシラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！ おい、出てこい。どこにいる。逃げるなあああああああああああ！ プリシラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

体力の限界が、やがてやってきた。下田は叫ぶことにも疲れて、ただすすり泣きながら、床にうずくまっていた。

扉が、開かれる。

「尋常ではない様子ですね」

見なくても、わかる。

ヨルシカは下田の傍にまで歩いてくると、腰をかがめてきた。

「初めは、ちとせさんが様子を見ようとしていました。しかし、今の貴方は正気ではありません。誰かに危害を加える可能性がある」

「うう…」

「ですがそれは、私がわざわざ来た理由ではありません。貴方の叫んでいた名前に注意するべきだと思っただけです。貴方が、あの女の息がかかっているのなら、残念ですが、連れていかなければいけません」

冷たい言葉と、顔を見る。

彼女にとって、自分の母親のことは、こうしてすぐに本性を見せるほど嫌なものなのだろう。下田は思った。初めてこの女と気が合ったような気がする。

鼻をすすりながら、目を拭う。

「何を、見ているのですか」

思えば。

下田は妙な可笑しさに襲われた。

あの悪夢のような幻の中で、唯一だった。唯一ヨルシカだけは、下田の存在を忘れてはいなかった。ジークバルド達よりも、ちとせよりも。ずっと長く下田のことを認識し、変わらない憎しみを向け続けてきていた。

実際に笑ってしまふ。彼女の綺麗な眉が不快気にひそめられる。

「気でも狂いましたか？」

「くくく…」

「早く、立ちなさい」

下田は反対の事をした。より深く頭を床に付けた。

「何を…」

そうして、彼は今までにない行動をする。本当は相手にこうさせることを望んでいたはずだった。ヨルシカを地に這いつくばらせ、命乞いをさせる。

だが、今はもう、なぜそんなくだらないことを思っていたのか、不思議なほどだった。

「お願いします。僕を、殺してください」

ずっと憎んでいた相手に、嘆願をした。

連れていかれたのは、予想に反して、地下の方にある部屋だった。てつきりヨルシカの部屋で尋問されると思っていたので、不思議だった。だが、すぐにそんなことはどうでもいいという、投げやりな思考になる。

中に入ると、ここが誰の部屋なのかすぐに理解をした。

あまり、飾り気のない部屋だ。おそらく、持ち主の性格が表れている。何の変哲もない丸椅子に座って、グウインは入ってきた二人を観察していた。

「急に何って申し訳ありません。私だけでは、手に負えないと判断しました」

ヨルシカは下田の体を軽く押す。彼は歩く気にも座る気にもなれなかったが、体は勝手にゆらゆらとベッドの方へと向かっていた。腰を下ろすと、上半身を前に曲げて、下をじっと見つめる。

「顔を、上げなさい。無礼ですよ」

「よい」

グウインは下田へとゆっくり向き直った。その深い瞳は、下田の苦しみ全てを見透かしているようだった。

「君の様子がおかしいのはわかっていた。儂と、初めて会った時からそうだったな。何か困っているのなら、話してみるといい」

下田は、小さくこぼすように言った。

「殺してください……」

「自暴自棄になるのは良くない。君がそこまで追い詰められたのは、何か理由がある」

「殺してください」

「我々は、意味もなく殺戮を行わない。君の頼みを受け入れるのは無理だ」

「殺してよ……」

下田は顔を上げる。引きつった笑みを浮かべていた。涙を流しながら。

「負けた」

「何にだ？」

「僕は、もう、負けました。貴方達にも、他の、全てにも。この世界の何かにも。初めから、挑むべき戦いではなかった。分相応の、行動を弁えていればよかった」

「だからだと、全てを垂れ流していく。今までの事を。自分が、儀式の全てを知っていること。自らがどうなるのか。それを事前に知ったから、抵抗しようと考えたこと。祭祀場の者達に、憎悪と殺意を抱いていたこと。そもそも、そういうことを、どうやって知ったのか。巻き戻りのことも、全て。」

「思えば、初めてだった。この二人に事情を説明するのは。彼らだけは、今まで一番警戒すべき敵だったからだ。だが、屈服した今では、もうどうでもいいことだった。プリシラのこと、偽ることなく、洗いざらいさらけ出した。」

「大体のことを話し終えると、グウインは頭を押さえていた。」

「妙な感じだ。ヨルシカ、異常は？」

「反対に、彼女は平然としている。」

「いえ、特には」

「グウインは下田を見た。」

「どうやら、話は終わったらしいが。儂は何も憶えていない。プリシラの仕業らしいな。だが、ヨルシカが把握しているのなら問題ない。相も変わらず、掴めない相手だ」

「何か明確な基準があるとしたら、それは単純な強さではないことは確かだった。グウインでさえ欺く記憶の操作が、ヨルシカには効いていない。できればこの場でプリシラを再び問い詰めたかったが、もちろん彼女は姿を現していなかった。」

「何度繰り返ししても無駄だろう。これは、そういうものなのだ。シモダ、君がどうして苦しんでいるのか、残念ながら儂は理解をすることができない。だが、孤独ではない。わかるな？ ヨルシカ、事の処理を全て任せる。その反応を見るに、我々の使命にも影響が及ぶほどの大事なのだろう」

「ヨルシカは、何かを言いたげに唇を尖らせた。」

「しかし…」

「君とシモダの間にどのような因縁があろうと、関係ない。どちらにせよ彼をこのまま帰すわけにはいかない、誰かが、監視をしておく必要がある。怠ることは、祭祀場への反逆だと思いなさい」

そう結んで、グウインは目を閉じた。深い思考へと沈んでいった。

これ以上話をする気がないことはわかったので、下田はここにいる意味を感じられなくなった。頼みの綱の一つが消えてしまったのを重い気分で受け止めながら、部屋から出ていく。その後を、舌打ちをしながらヨルシカが付いてきた。

「勝手に移動しないでください」

「……」

彼女は下田の前に出ると、自分についてくるように、ぞんざいに手招きをした。特に抵抗する理由もなかったので、ぼうつとしながら歩き続ける。

「ずっと、やかましかった」

移動中も、彼女はそれなりに饒舌だった。

「子どもみたいに叫んで、泣いて。甘ったれた貴方の愚図な精神がよく表れているようでした。そのまま黙って、儀式までくたばっていればよかったのに。私が、こんな面倒なことをしなくても済んだはず」

下田は中空を見つめていた。

「正直、突拍子もない話です。普通なら、信じられません。ですが、あの女の仕業だというのなら、無理もない。己の目的のためなら、他人をいとも簡単に犠牲にする。気の毒でしたね。まあ、同情なんてしてませんが。貴方にふさわしい、苦しみを受けたと言えるでしょう」

ヨルシカはちらりと振り返ってきた。何の反応もない下田を見てから、つまらなそうに口の端を痙攣させる。

彼女の手がぶれた。その直後には、下田は首を掴まれて、横の壁に押し付けられていた。気道を塞がれる。呼吸ができなくなり、表情を歪ませる。

「死にたいそうですね」

嗜虐的な笑みを浮かべて、彼女はさらに首を絞める手の力を強くし

てきた。

「望み通りにしてあげましょうか？ 復活したとしても、すぐに殺せば。それを何回も繰り返せば、死に切ることができるかもしれない。喜んで、お手伝いしましょう」

「嘘つき」

下田は、彼女の耳に背後から囁いた。

すぐさま振り返ってきた彼女は、青白い刃を走らせる。反歩下がってかわし、下田は彼女の目をじっと見つめた。

「グウインはどうして、お前に監視が務まると思ったんだろう。僕を殺せる確証も持てない、こんな竜女なんか」

相手の眉間に、皺が寄っていく。元々白い肌が、さらに色を失っていく。

「言葉に、気を付けなさい」

「気をつけるのは、お前だろ。話したはずだ。お前なんか、いつでも殺せる。こっちはもう、どうだっていいんだ。この回くらいは滅茶苦茶にしてもいい。次のお前に、忍耐を期待しようかな」

彼女の手には、力が入る。

「試してみますか？ 貴方がどれだけ経験を重ねようとも、越えようのない壁があるということを、思い知らせてあげます」

妄想。

ヨルシカと、永遠に殺し合いをする。彼女は下田のことを忘れない可能性が高い。だから、何回殺しても、憎しみと悔しさを変わず向けてきてくれる。そのあとどうやって逃げるかも、考える必要はない。ただできるだけ長く彼女を苦しめさせる。それだけを考える。

そんなくだらない妄想が、一瞬だけ頭に浮かんだ。行動に移せないのは、もう、下田が疲れているからだ。いい加減、全てを終わりにしたかった。

「嫌だ」

ヨルシカは、瞬きをした。

「何ですか？」

「お前を殺しても、お前に殺されても、終わらない。どうせ、やり直し

になる。もっと、他の方法があるはずだ。例えば無理矢理、僕からプリシラを引き剥がすとか。お前なら、それができるんじゃないか」

彼女は溜息をついた。それから、肩をすくめて、前へと再び歩き始める。

「知りません。歯がゆいことこの上ないのですが、私には手が負えない。ですが、方法は存在しているかもしれない」

予想外の言葉に、思わず下田は顔を上げた。ヨルシカは少しだけこちらを振り返って、妙な顔をする。受け入れがたい何かを思い浮かべているようだった。

「まさか、本当にこうなるとは。気色が悪い。……言伝を、預かっています。貴方がもし、私へ自らの殺害を頼んできたら、会わせてほしいと。そろそろです。おとなしくしててください」

最初は、エルドリツチかと思った。しかし、その可能性は既に初めから消えている。向かっている方向が、違っているのだ。ヨルシカはどンドン地下の方へと歩いていく。あの人食いのいる、塔とはまるで別の方向だ。

彼女は何もない、廊下の途中で立ち止まった。不思議に思いながら眺めていると、何かの詠唱をする。それは間違いない、擬態の魔術に対する反詠唱だった。目の前の壁が透明になっていき、やがてそれなりに大きな穴ができる。

中の道の先には、鉄格子が見えていた。隙間から、わずかな光が漏れている。

「行きなさい。早く」

ヨルシカに押されて、下田は歩き始めた。彼女がついてくる気配はない。ここから先は、自分一人で進むようだった。

有り得ないと思いつつ、次第に心細さが募っていくのを感じた。ここは、暗い。どこに目を向けても、暗闇が存在している。目を逸らすことができない。逃げることができない。狭くて、何かがあったとしても、対応できない。

そんな強迫観念を何とか抑えつげながら、足を一歩ずつ進めていった。あの鉄格子の先に、自分と会いたがっている何かがいる。近づくと

につれて、これはヨルシカの悪質な嫌がらせで、実はとんでもない化け物と戦わせられるのではないかと、思い込むようになってきた。

鉄格子の隙間から、中の様子をうかがうことはできなかつた。なぜなら、さらに木の扉があつたからだ。ゆつくりと中に入り、扉に手をかける。そのまま押し開くことに、躊躇した。未知への恐怖が、全身を固まらせていた。

だが、一方で、わずかに漏れ出ているソウルには、惹かれるものがあった。懐かしいような、目新しいような。掴みがたい暖かな感覚にやがて包まれていき、下田はようやく動き出すことができた。

扉を、開ける。その先は、今までよりも明るかつた。

「プリシラさま……？」

下田は口を開けながら、固まつた。憑かれたような顔をした赤毛の女が継り付いてくれば、誰だつてそうなる。

女は、どう見てもクリムエルヒルトだつた。両足が切断されているせいで、這いずるしかない彼女は、下田の足元に頬をくつつけて、まるで光を見つけたかのように見上げてきていた。

その顔は、滂沱の涙で濡れていた。

「ああ、なんてこと。ようやく、ようやくお会いすることができました。私です。おぼえていらっしゃいますか？」

「お前、」

「私です。アナスタシアです。貴方様の側仕えではなくなった後も、ずっと、お会いしようございました。プリシラ様、もう二度と、どこかへ行かないでください……。アナスタシアめは、貴方様の言う通りにしました。だから、褒めてください。触れてください……。」

「ちよつと、離れて」

横合いから、太い腕が伸びてきた。それは真つすぐクリムエルヒルトの腹へと打ち付けられる。う、と息の詰まる音を出してから、彼女は意識を失つた。赤い頭巾の大男は、倒れた彼女の体を抱えて、奥へと下がっていく。下田をじっと観察しながら。

「大目にみてくれる？」

そして下田は、部屋の真ん中で起き上がろうとしている、相手を見

た。

彼女は、やつれた顔を向けてくる。

「あの人は、かなり疲れてたんだ。だから、抑圧されていたものが出てきてしまった。それよりも、貴方のことが大事。ずっと、待っていた」

白髪の少女は、そう言っで一筋の涙を流した。解放されたような笑みと共に。

「兄さん。会いたかったよ」

55. 火守女の灰

彼女は、自分のことを画家と称した。

「えつと…」

近づいて来るや否や、いきなり抱きしめてくる。だが、それに驚きこそあれど、拒絶をしようとは思えなかった。むしろ、相手のぬくもりを感じれば感じるほど、下田の中の殻に閉じこもっていたものが絆されていくようだった。

この、におい。

「…?」

今度は、少女の方が困惑し始めていた。彼女は既に満足したのか、下田から離れようとする。しかし、彼は少女の腰に腕を回し、さらに強く抱き寄せた。彼女の来ている服に皺が寄り、多少の抵抗を見せ始めても、やめなかった。

このソウル。

扉から漏れていたものと同じだ。下田にとっては、とても落ち着く色と形をしていた。

「そろそろ、話をしたいの。真面目なこと」

「君の…、君からは、いいにおいがする。どうして?」

「わたしに、訊かれても困る」

彼女を放すと、他のことにもようやく目が行き始めた。

この牢屋には、下田を除いて四名の収容者がいる。

クリムエルヒルトと画家。この二人はまだ、わかる気がする。特に少女の方は、ヨルシカが嫌いそうな見た目だ。特に服の裾から覗く鱗なんかは。

しかし、残りの二人の男達は良く知らなかった。

クリムエルヒルトを気絶させた赤い頭巾の男。彼は白い口髭を生やしていて、老人と言ってもいい年ようだった。しかし、体は厳つ、いくつもの戦いを乗り越えてきたと思わせるような立ち振る舞いを見せている。目にするのは二回目だった。地底湖で、貴樹達を逃がした咎で捕まっているというのはわかっていたが、結局どういう存在

なのかわからない。

そして、さらに不明なのが、一番奥で座っている細長い顔の男だった。肌が真っ白で、周りの明かりをよく反射している。色素の薄い顔とは対照的に、その瞳はとても濃い紺色をしていた。

薄汚れた法衣を着ているが、そんな姿であつても、強い存在感は霞んでいなかった。虜囚の身でありながら、まるで屈している気配がない。必ず自分の状況が好転すると、信じてはばからない思考が溢れ出ていた。

下田の視線に少しの間合わせてから、法衣の男は鼻を鳴らした。

「あの女は我々を苦しめて殺すことに決めたのか？　こんな混ざり切った汚物を放り込んでくるとは。ただでさえ陰気のこもった場所だというのに」

「ううん。わたし達を助けてくれる、とても大事な人だよ」

「お前の妄言を聞くのは飽いた。さきほどまでのように、苦しげに寝込んでいた方がよほど可愛げがあつたぞ」

下田は、画家の少女を観察した。確かに、元気があるとはいいいがたい見た目だ。ここで、かなりの時間を過ごしているのだろうか。心配という感情が、久しぶりに湧いてきた。なぜか彼女に対しては、氣遣つてやらねばという意識が芽生える。

「今は、大丈夫なの？」

髪を梳いてやると、彼女はくすぐったそうに首を動かした。インベントリから、一番上等な櫛を取り出す。少女の後ろに回り込み、ぼさぼさになつている髪を整えていく。

「何してるの？」

「え、何だろ。気になつたから？　本当に苦しかったら、寢床も用意するよ。本当に大丈夫？」

「う、うん」

少しだけぼうつとしてから、彼女は立ち上がった。その足取りは、心配するほどでもない。しかし作業の途中だったので、下田も立って相手の頭を追いかけようとした。

「待って」

櫛を構えたまま、彼は固まる。

「時間は限られてる。本題に入りたいの」

「でも、髪がさ。話しながらでも、できると思うけど」

「とりあえず、座って」

「うん」

櫛を消して、下田はその場に腰を下ろした。少女は彼から少し距離を取って、赤い頭巾の老人の傍に座る。そこに何か、もやもやとしたものを感じた。

「貴方にとっては、私達が一体何なのか、訊きたいことはたくさんあるだろうけど。それは未来に取っておいて。まず、貴方にやってもらいたいことがあるの。とても重要なこと。私達も貴方も、救うための大仕事」

下田は興味がなさそうに視線を斜め上に向けた。

「とにかく、わたしたち全員がここから脱出することが大事。だけど、他にも条件があつて……」

「僕は？」

少女と、顔を合わせる。

「なに？」

「だから僕は、どうなればいい」

「私達と一緒に、戦うの」

「うーん」

下田は苦笑する。

「話が、違うよ。僕がここに来たのは、殺されるためなんだ。完璧に。それがどうして、そんな流れになってるの。君が、僕を殺してくれるんじゃないの？ その方法を知っているんじゃないかって、ヨルシカが言ってた」

少女は痛ましげに表情を動かした。

「わたしは、そんなことしない」

「じゃあ、僕、その。もう行つていいかな。癪だけど、またヨルシカと一緒に考えないといけないから。あいつ嫌いなんだけど、それしかないんだ」

「駄目。貴方は…」

「駄目って、何?」

老人が、少女の前に出た。何も帯剣していないというのに、構えてみせる。下田は、考えた。それなりに体格差がある。が、丸腰の相手を排除することは容易だ。だが、その思考は、あくまで怒りの残滓の様なもの、直後には落ち着くことができた。

「なんで、君に決められないといけないんだ? 生きる時も、死ぬ時も、自分の意志でやるべきだろ。僕は死にたいから、死ぬ。君が決めるな。言葉は、考えてから口にしろ。不愉快なんだ。そういうことされる。殺されたいのか?」

あれ。落ち着いていたはずなのに。

言葉は暴れていた。意識が引つ張られてしまう。段々と、少女が憎たらしい存在に思えてくる。自分の邪魔をしてくる存在。どうすればいいか。排除をするしかない。

少女は怯まなかった。老人の背中から出てきて、下田の目の前に立つ。

「酷く浸食されてる。苦しかっただろうね」

「何だ?」

「貴方が死にたいのはよくわかる。でも、ごめんなさい。その意思を汲み取ることにはできない。貴方には、生きて、全員を救ってもらおう」

「お前…」

下田はここへきて、失望と呆れが大きくなってきた。少女の大言は、無知から来るものだ。下田の実力も、周りの実力も、世界がどうなっていくのかも。何も知らないからこそ、救うなどという言葉が出てくる。

だから、彼は嘲笑を相手に向けた。

「こんなところに閉じ込められているから、まるで、状況が理解できてないんだな。確かに、僕はできる。お前達をここから出させて、火継ぎも阻止することくらいは、可能だ」

「気狂いも、ここまで来ると」

奥の細面の男が、笑い声をあげた。

「見事な余興に成り得るものだな。久方ぶりに、笑わせてくれる」
「そこそこかなあ」

下田の眩きに、男は笑みを消した。壁にもたれさせていた体を動かすと、前のめりになる。短い白髪が、何かの風に揺られている。

「どういう意味だ、小僧」

相手に、下田は流し目を送る。挑発するように。

「魔術は使う。多分、武器の扱いも相当慣れてますね。腕の筋肉が均等についている。奇遇ですね、僕と同じ双剣使いだ。でも、そこそこくらいかな。リアーネくらいには勝てるけど、ヨルシカには負けそう。疑問なんですけど、どうしてそれくらいで一番でかい態度取ってるんですか？ 僕に一瞬で殺されるくせに」

前半の方は、ほとんど反応がなかった。下田の安い言葉に乗ってくるほど、幼稚な相手でもない。しかし、ヨルシカの名が出てきた瞬間から、様子が変わった。向かってくる視線にもはつきりした感情がこもるようになり、侮蔑するような薄笑いは小さくなっていった。

「道化も、そこまですると不愉快だな」

温度が、低くなった気がした。

「思い上がりも甚だしい」

「試してみますか？ 今から武器を渡すので、殺しに来てください。僕は素手でやるので。それくらいが、ちょうどいい感じになると思います。五秒くらいはもつかな」

頬を、はたかれる。来るのはわかっていた。だが、殺意のこもったものではないので、今更労力を消費して動くほどのものではないと、彼は考えていた。

最初に涙を見せた所以外、目立った感情の起伏を見せなかった画家の少女が、初めてはつきりと下田を睨みつけていた。老人に持ち上げてもらいながら平手打ちをした後、やや怒ったように、慌ただしく下りる。

「やめて。時間が、ないの」

少女は、法衣の男にも顔を向けた。

「サリヴァーン。彼の狙いは、この場をかき乱すこと。安易に乗らな

いで。私達全員のためにならない」

男は無然としたまま、再び壁に寄りかかった。

その様子を確認した後、少女は下田の側にまで歩いてくる。じれつたいと言わんばかりの表情になっていた。可愛い、と素直に思う。やはり小さな子供は、感情をそのまま出している方がいい。

「自暴自棄になるのも、わかる」

「何がわかるんだ」

下田は引きつった笑みを浮かべた。

「お前は、何もわかってない。ここから出たとして、火継ぎを止めたとして、ヨルシカ達を全員殺したとして、何の意味があるっていうんだ。無駄だ。どうせ、助からない」

「知ってる」

「深淵の化物どもが来る。何もかもが呑み込まれて…、無意味になる。僕の、僕の、故郷も、地球も、この世界もそうだった。あんなのに、勝てない。何千、何万、何億。無限に、永遠に挑んだとしても、かなわない」

「知ってる」

「……そもそも、次なんてないんだ。もし、もう一回ウーラシル達と遭遇すれば、絶対に逃げられない。わかるんだ。そういう予感がする。だから、火継ぎを止めるのは無理だ。奴らから逃げるためには、火が不可欠だから」

「知ってるよ」

「…お前に、何が」

脳の中で、蠢く。膿が活発化するのを感じる。

下田は、ソウルの光球を浮かべた。それで、周りの空気が一気に緊張を孕む。赤い頭巾の老人が眼光を鋭くした。

「お前に僕のできたことの何が、わかるっていうんだ？」

「苦しんだとしても、まだ頑張らないといけない。貴方が本当に辛いことは」

矢を、形作る。

「理解したふりを、するな。言葉に気をつけろって、言ったはずだ。お

前が、僕の何を知ってる？　こんなところで閉じこもっていたくせに、何もかもわかっているみたいなふりしやがって。プリシラと同じくらい、癩に障る女だ。本当は、僕がちゃんと死ぬ方法も知ってるんじゃないか？　それなのに、自分の目的のために、僕を無理矢理生かそうとしている。そんな気がしてきた。話してくれないのなら、話す気になるまで、手段を取るだけだ」

少女は老人の制止も聞かずに、下田へとさらに近づいた。その表情は、下田の脅しに少しも怯えてはいない。むしろより強固な決意の顔をして、彼と相對していた。その顔は、前のプリシラを思い出させる。ソウルの雰囲気似通っているだけに、下田には、段々と両者の違いが判らなくなってきた。それがなぜかより苛立たせた。

「知ってるの」

繰り返される相手の言葉に、下田は耐えられないとばかりに吐き捨てた。

「何も、わからないだろー！」

「知ってるもん！」

予想外の大きな声に、下田は一瞬怒りを忘れて、相手を茫然と見た。今や彼女は頬を紅潮させて、涙目になっている。荒く呼吸を数回すると、少女は震え声で続けた。

「何回も、何千回も、何億回も、何垓回も、貴方は死んだ。殺された。ちとせや、周りのみんなに頼ろうとしても駄目で、貴樹先生に助けを求めても駄目。だから、一人で戦うしかなかった。どいつもこいつも、貴方なんかよりずっと強い人ばかりで、何度も嫌になって、やめようと考えた。姉さんやグウィンに勝てなくて、吐くくらい鍛錬をした。それでも…、結局は自分しか信じられなくなって、どうしようもなくなつて、何もかもが無駄に終わっていく様を眺めた。わたしは… たしかに、貴方がどれだけ苦しんだが、全部を理解することはできない」

下田は、信じられないと言いたげに、首を振った。

「なんで…」

「ずっと、見ていたから。貴方が世界を描き直しても、私だけは、取り

残される。記憶も保持される。何度も絵画世界に飛び込んで…、貴方についていく他なかった。途中で止められはしなかったから。それほどに、貴方と、プリシラのつながりは強固だった」

頭の中で、彼女の言葉が反響していく。音だけが広がっていった、その内容を汲み取ることがほとんどできなかった。何を言っているのか、理解できない。

「何を言ってるんだ？」

「思考から、逃げないで」

彼女が近づくと、思わず下田は一步下がった。彼女の視線からは、どこまで行っても逃げられないような気がした。

「わからないはずはない。たとえ認識できていなくても、予想はしているはず。貴方なら、もう、理解することができる。薄々、わかっている。貴方の固有能力は、過去に戻るわけじゃない」

下田は腰を下ろした。確かに、知ることから逃げるわけにはいかなかった。それで、何かが開けてくれるのではないかと、わずかな期待が湧いてきた。

「じゃあ、一体、何なんだ」

「疑問に思ったことはない？」

少女は、彼の両腕を示した。

「なぜ、いつも最初に、両腕が欠けてしまうのか。能力の代償だけで片付けてしまうには、限定的すぎる。それに、安すぎると思わない？もし過去に戻る能力だとしたら、その代償も相応に重いはず。体の一部、それも奇跡ですぐに治せる所を捧げたくらいで、代償として成り立つわけがない」

「でも、まだある。この能力には、限界があるんだ」

「皆から忘れられるのは、あくまで副作用でしかない。もっと、両腕という部分について考えてみて。代償と考えたとしても、なぜ、腕なのか。正確には、手なのか」

彼は目を細めた。

「使うから？ 手を使って、何かをしてる。もしくは、されてる」
「そう」

「過去に、戻る能力じゃない。でも、儀式の六日前に戻ってるのは事実だ。つまり、時間を飛び越えたのではなく、世界そのものを、越えた？」

「うん」

「並行世界。小説の中だけの話だと思ってた。でも、どうやって？どちらにせよ、手段が必要なはずだ。別の可能性の世界への道を開くためのものが」

少女もまた、腰を下ろした。

「待てよ、君の言ってた、絵画世界。絵画……。そうか、別に道なんて開くまでもないんだ。自分で、別の可能性を作ってしまった方がいい。あるいは、描けばいい」

「うん！」

「じゃあ、僕は……。何なんだ、これは。こんなの、規格外すぎる。自分で、世界を、描いたってことなのか？ この祭壇場も、そこにいる人たちも、全員、作られたってこと？」

「でも、幻じゃない。完璧に模倣された世界ではあるけど、本物と言っている。もし、本当の本物だけしか認めないのなら、もうとつくに、何もかもが失格になっている。はるか昔から」

少女も、下田と同じように周囲をそれとなく探した。そこに、幻の誰かがいるかどうかを確かめるように。

「…プリシラか」

「そう。あの人は、竜と神の間に生まれた。でも備わっていた力は、そのどちらにもはるかに凌駕するほどのものだった」

「世界を、絵画として作り出せる」

「おそらく、数えきれないほど、あの人は作品を仕上げた。最初が、真剣な目的のためなのか、それともただの戯れなのか。わからないけど、とにかく世界は何度も更新されているはず。貴方が、関わる前にも」

「更新？ 変更ではなく？」

「普通の絵を描くのだって、必要なものがある。塗料が必要。世界の塗料、絵の具は、ソウルなの。人の魂、あらゆるものの魂。規模が大

きくなるほど、その量は膨大になっていく。世界全てを描くために、どれだけ消費されると思う？ もちろん、世界の全てのソウルだよ。彼女の塗料に、全てが吸収されて、新たに描かれる世界へと、全て移される。貴方の言う、並行世界とは少し違う。世界が死んで、世界が生まれるの。ただ、それだけ」

頭の奥が痺れている。自分で理解をしながら言葉で確認してくほどこに、現実感が逆に薄れていった。

こんなの。

彼女の、力は、あまりにも強大だ。全ての生命の生殺与奪を握っているようなものだ。神にも等しい。いや、それ以上なのかもしれない。

「じゃあ…」

「そうだよ。時間に、あまり囚われない」

「別の可能性。そもそも、僕達がこの世界に來なかつた可能性を…」
いや。

下田はちゃんと考えることにした。

「グウィン達が、地球を侵略しなかつた、できなかつた可能性の世界を描くことができれば、何もかも、なかつたことになる。僕達は、日本に戻れる…」

しかし、少女は首を振つた。

「できないよ」

「どうして？」

「プリシラが、なぜ、あのタイミングを最初としたのか、考えてみて」
「能力を、進化させた時」

「あの時ようやく、彼女が完全に自分の力を使えるようになった。もちろんそれより前のこともちゃんと認識しているんだろうけど、さすがに彼女でも、数千年前の地球を鮮明に描写することはできない。世界を描くのは想像もできないほど繊細な作業。莫大なイメージ全ての細部まで、完璧にしなきゃいけない」

「でも、僕が、僕達がやれば…」

「私は、あの人の力のほんの一部を受け継いでいる。貴方も、きっと同

じ。でも、それだけでは駄目なの。結局あの人为主体だから。私達が変えられるのは、わずかな部分しかない」

「プリシラに、協力させれば」

「あまり膨大な作業はできない。理由は、わかる？」

下田はしばらく考えて、わからないと答えた。

少女の顔が、引き締まる。

「例外がいる。プリシラの力に干渉されず、自由に世界に入り込み、逃れることのできる存在が。深淵の存在だけは、私や、貴方と同じように、更新されずに飛び越えてくる。ソウルの根本的な法則から、完全に外れているの。だから、狭間でも存在することができ」

「狭間…」

「この世界が、一枚のキャンパスだとしたら、当然、外がある。そこには、何も無い。ただ暗闇だけがある。プリシラは普段、見えない時はそこに居るの。そこで、作業の準備をしている。貴方に、世界を描かせる準備を」

下田も考え続けた。

つまり、意識が消失した後だ。篝火に捧げられた後、自分はその狭間に飛ばされている。そこで、プリシラによって、描かされている。次の世界の絵だ。

両腕が欠ける理由も、そこなのだ。おそらく、描いていく過程で、意識だけだとしても、酷使されている腕が耐えられなくなる。だから、作業が終わった時、つまり最初に戻った時、結果として両腕は無くなってしまう。

「あまりに長くそこに居ると、やがて嗅ぎつけられる。深淵の恐ろしさは、知っているでしょ。もし、狭間で捕まったら、本当の意味で、終わりになる。永遠に捕らわれてしまうの。だから、プリシラが今まで描いていた絵と、大きくずれたものは作れない。できれば、少しでも変化の少ないものがいい。時間のずれも最低限にする」

「だけど、それじゃあ、意味がない。結局、辿る未来は変わらない。見てたのなら、知ってるだろ」

「うん…」

肯定したものの、少女は少しも絶望してはいなかった。むしろより、瞳の輝きは増していった。

「たとえ少しの時間だとしても、救える命があるとしたら？ それを誰かとの交渉材料に使えらしたたら？」

下田も、段々とわかりかけてきた。もし、一日。一日だけでも今までの開始地点より過去に戻れたとしたら。

「火守女、か。だとしたら、先生を……」

「これだけは、覚えておいて」

少女ははつきりと続ける。

「独りだと、考えてはいけない。周りの人を頼るの。一人じゃ乗り越えられないことも、誰かと協力すれば、きつと、解決できる」

「でも、先生がいても、深淵の奴らには勝てないよ。無理だ」

そして、もし力が戻ったとしても、結局負けることには変わりない。

今まで見てきた貴樹の戦いは確かに、期待を持たせるようなものであったが、それはウーラシル達と遭遇するまでの話だ。いくら彼と言えど、竜や化物に勝てるとは思えない。

「そうと、決まったわけじゃない。薪を得た火守女を最後まで守ろうとしていた彼は、当然、深淵がやってきた後のことも考えていたはず。火継ぎを阻止するということは、そういうことだから。彼にはいつも、ある種の余裕があった。この世界のこと、この世界が辿る結末もよく理解している。だから、必ず、糸口を見つけている」

「それが何なのか、わからないから、問題じゃないのか」

「それでも、頼るしかない。今の私達にできることは、彼に協力を仰ぐこと」

下田は、目をつぶりながら、今までの会話を反芻した。まだ、納得できない部分が多い。そして彼にとっては、まだ何かを続けることの意義を、ほとんど見いだせていなかった。

大きく、首を振る。

「まだ、何かできるのはわかった。でも駄目だ。知ってるんだろ。どうせ切り抜けたとしても、もう母さんはいない。……これ以上、何の意味があるっていうんだ」

少女も首を横に振った。

「だから？」

「だからって……。だって、母さんは殺されて。それはもう、何千年も前の話だ。戻れないのなら、結局……大事な人は、残ってないんだ。何のために、生きていけばいいのかわからない」

「うるさい」

下を向いてぶつぶつ言っているのを遮られ、下田はゆっくりと顔を上げた。少女はこちらを一瞥してから、顔を逸らした。

「何だって？」

「そういうのは、聞き飽きた。恥ずかしくないの？ いい年して。もうお爺ちゃんみたいなものなのに。母さん、母さんって。この、ま、まざん」

微妙な空気が流れた。下田としては、この発言を受けて、激する気分にもなれない。だが一方で、少女の方はかなり怒っているようだった。呆れていると言っても正しい。今までとは違い、彼の方を見ることすらせずに、畳みかけてくる。

「そうやって、過去のことばかり気にしているから、ちとせにふられたんでしょ。大事な人が残ってないって、なに。また、肝心なことに気が付いてない。貴方が今まで曲がりなりにも続けられてこられたのは、本当に母親のためだけなの？ もっと周りの、今いる人たちのためにも、頑張ってきたんじゃないの？」

「ちとせは、考えさせてって言ったんだ。だから、まだふられたとは」「やかましい。今一度、よく考えてみて。貴方だけに、全てが任されるわけじゃない。でも、貴方が始めることで、きつと、皆が救われる道が開ける。それを前にして、尻込みをする理由がどこにあるっていうの？ 今いる、大事な人たちを守る。私も、やるから。一緒に始めるよ」

下田は、不思議だった。

つまり母親のことは諦めろと言われているのにも等しいのに、怒りが湧いてこない。未練が沢山あるはずなのに、この時だけは、悲しさは薄まっていた。全ての鬱憤を吐きつくせたわけではない。しかし

少女との会話の中で、確かに、晴れていくものがあった。

子供に、諭されているという気がしない。まるで年上の人に、親に、説得されているようだった。

一理ある。

自分は、もう、取り返しのつかないことをしてしまった。ちとせ達には、いくら謝っても足りないくらいだ。そのことは、たとえ世界が変わったとしても、関係がない。彼女達にしてしまった過ちを取り消さなければ、きつと、

会う資格がない。

すடன்、と胸に落ちた気がした。自分の目的が、明確になった。全身に、力が入る。

「……」

少女が怪訝な顔をした直後、下田は頷いていた。

「やるよ。やってやる。火守女を救おう」

「うん」

「そのために、まず、何したらいい」

少女は座り直して、再び彼と目を合わせてきた。

「時間がない。今すぐに、タカキに会いに行く。私を連れてここを脱出するくらい、兄さんにはできるでしょ」

「わかった」

下田が立ち上がると同時に、少女も腰を上げた。今一度確認するよ
うに、尋ねてくる。

「覚悟は、決まった？」

「ああ。前へ進むしかない。僕には、それが全てだ。今までも、ずっと
そうやってきた」

「知ってる」

少女はふっと笑った後、ずっと長い会話を黙って聞いていた老人
に、顔を向ける。彼は静かに彼女と下田の両方を見つめていた。

「お爺ちゃん、またね」

「お気を付けください」

頭を下げる。

そして下田の背に少女が掴まった瞬間、その体勢のまま言葉を発してきた。

「シモダ、頼む」

両手をつき、懇願を見せる。

「お嬢様が、こんなに生き生きとしているのは、初めて見る。お前が、彼女を守れ。それだけを望む。頼んだ」

「…はい」

下田は重々しくうなずいてから、牢の出口に向かった。最後まで、奥のサリヴァーンだけは、くだらないとばかりに目をつぶっていた。

見えない体を使えば、目的地には簡単にたどり着ける。今や下田は、祭祀場の誰にも看破されないような術構成を編み出すことができた。足音も同時に消して、少女の気配も失くして、記憶にある場所へと迅速に移動した。

一度来て、失望してからは、二度と足を向けなかった場所。

貴樹が捕まっている部屋へと、入り込んだ。

「誰だ」

五感では絶対に感じられないはずの下田達を、貴樹は確かに認識していた。彼の両眼が潰れているのを見て、下田は悟る。見えているのだ。ソウル自体は、どうやっても消すことはできない。その輝きが、貴樹にも感知されている。

少女が背から降りると同時に、見えない体を解除した。既にこの部屋の侵入を防止する全ての術は分解している。後は音送りを全体に広げておくだけで、誰の邪魔も入らない個室が出来上がった。

「先生、僕です。下田です」

「下田…、もう一人いるな」

「わたしだよ、タカキ」

貴樹はようやくく身じろぎした。少しだけ前に進み、ベッドに乗せて

いた頭を動かす。視界が確保されていないにもかかわらず、少女の位置を正確に見通した。

「どういう、ことなんだ」

「貴方を、助けに来ました。もちろん、僕達が貴方にしてしまったことは、取り消せません。それでも、償いをさせてください」

貴樹は息を吐いた。

「何だ、お前の自己満足に、付き合わされるのか？」

「いいえ。信じられないでしょうが、聞いてください。僕達は、火守女を助けます。だから、貴方にも協力してほしいんです」

「どうやって？」

少女を中心にして、やり方を説明していった。貴樹は聞けば聞くほど、笑みを大きくしていった。それはほとんど下田達を馬鹿にしているようで、ほとんど信じていないのは明らかだった。

鼻で笑った後、貴樹は上を向いた。

「そんなことに、頼れって言うのか？ 下田、お前が今までそうしてきたっていう、証拠がどこにある。俺が、騙されるとでも…」

最後まで続かなかった。彼は言い切る前に、めんどくさそうに口を閉じた。そこから、しばらく間が空く。別続ける言葉が思いつかなかったわけではなさそうだった。下田は、気配を感じる。今、貴樹は、一人ではない。誰かと、何かと会話をしているようだ。

しばらくして、貴樹は不服そうに顎で促した。

「来い」

「はい？」

「だから、近づけって言うてんだよ。俺の肩に触れてくれ」

下田はおずおずと歩いていき、彼の体に手を伸ばした。指先が、鍛えられた肩に当たる。

「で、何をしたいんだ。裏切り野郎」

『おれは、何度も、説明したはずだ』

思わず離しそうになった。いきなり知らない男の声が聞こえてくれば、誰だって驚く。それに、頭の中で響く声というものに、あまりいい思い出がなかった。

『おれがノミだ。で、あいつがグウイン』

「はあ？」

『元から二ついたってことだよ。あ、えーと、よう！ 初めまして！

おれは、ノミっていうんだ。このボケをずっとサポートしてきた影の主人公だな』

下田は、とにかく一つ一つを呑み込んでいくことにした。

「誰、なんですか？」

『こいつの馬鹿げた力の源さ。残り火を与えてやってた』

「おい。前置きはまだ続くのか？ 眠くなってきた」

『そうだな。時間がない。タカキ、こいつの話は信用できるかもしれない。俺が、その証拠を伝えられる可能性がある』

「はあ」

貴樹の中に、確かに別のソウルがある。それは少しだけ、下田の方へと近づいてきた。

『これから、お前の記憶を見る。一瞬で終わるから、心配するな。お前の体験を知ることができれば、これ以上の証拠はない。大丈夫か？』

「別に、いいですけど」

『じゃあ、失礼』

何かが入り込んでくる感覚と共に、ノミと呼ばれているソウルは振動し始めた。よく見れば、それは、苦痛の動きのようにも見える。耳を凝らせば、その悲鳴も聞こえてくるような気がした。

確かに、一瞬で終わった。心配になってきたところで、既にノミは貴樹の方に戻っている。

「大丈夫ですか？」

『ありえねえ……』

その声は、震えていた。悲しみも、怒りも、全てが込められている。『お前、お前は。こんなの、正気の沙汰じゃない！ お前が、こうして、目の前で動いていること自体が、奇跡だ。ふざけるな。あいつは、これを……』

「やかましい」

貴樹が、不機嫌そうに呻いた。

「ひっ。」

『…こいつの言ってることは正しい。こいつなら、お前の望みを叶えることができるだろう。これから、お前の方にも記憶を移す。きついだろうが、お前なら、耐えられるだろう』

「え、じゃあやめろよ」

一瞬、間が空いた。

『いや、証拠見せろつったのはお前だろ。見ないで、どうするんだ』
「誰が好き好んで、このガキの思い出なんぞに浸らなきゃいけないだ？ 気色悪い」

『どうしろと？』

「あ？ お前馬鹿か？ ひもりんを助けられるなら、何だって利用してやる。おい、下田。失敗したら、まずお前を殺してやるからな」

『おれが苦しんだ意味は？』

下田はようやく、話が進んだということを理解した。そして、貴樹のこともだんだんわかりかけてきた。今まで、この乱暴な言動は、どうしようもない現状から来るものだと思っていた。しかし、これはまさか元々の性根が素直に表れているだけなのではないか。

そして少女も交えて、どうすべきかを話し合った。問題は、貴樹もまた、世界を飛び越える必要があるということだ。彼も事情を理解したままでなければ、上手くはいかない。下田と少女だけが知っている、合流した時に必ず不具合が生じる。それが、致命的なミスになり得る可能性が高い。

少女曰く、彼も自分達と同じことはできるといふ。常人なら狭間の世界は耐えられないそうだが、貴樹なら可能らしい。

「彼は一度、私の作品の手伝いをしたことがある。ソウルの受け渡しくらいはできるの。だから、助手としても必要。新しい作品を作るためには」

「具体的に、その狭間とやらに行くためには、何をしたらいい」

「私が、道を作る。描くと言ってもいいかな。でも、それだけじゃいけない。あっち側、つまりプリシラからも干渉がないと、無駄になる」
「って、ことは」

「うん。兄さん、貴方はもう一回焼かれる必要がある。儀式に捧げられる瞬間、プリシラが狭間へ引つ張り出そうとしてくる。その時が、一番近いの。その瞬間、兄さんは自分の意志で道を通らないといけない。そうしないと、結局今までと同じになる。私は、兄さんの後を付いていくだけでいい」

意識が消失したまま、腕だけを使われるということだ。プリシラの思い通りに。

「待て」

貴樹は、納得していないようだった。

「俺は？ どうやって行けばいい」

「兄さん、出して」

まさかとは思っていたが、予想は的中したようだった。下田はインベントリから、山吹色の液体が入った瓶を取り出す。ここへ向かう途中、少女に入手するよう指示されたものだ。彼女は、これが保管されている場所を知っていた。

「このエスト瓶は」

ふたを開けて、貴樹へと近づける。

「篝火との、結びつきを得るためのもの。肉体が破壊され、ソウルが失われそうになっても、篝火がひきつけて、回収する。不死になることができるけど、反対に、贄の証でもある。篝火へ自分のソウルを捧げる存在になってしまう」

「よし」

貴樹は瓶の口に食らいついた。歯で瓶を傾けると、中身を全て飲み干していく。しっかりと嚙下されるのを確認した後、少女は溜息をついた。

「まだ途中だったんだけど」

「ようは、ソウルが、体から抜け出ようとする瞬間を狙うんだろ。理屈はわかる。できるだけ狭間に近づくためには、こういう荒療治も必要だってことだ」

「話が早い」

それからは、割と慌ただしかった。ヨルシカが確認をしに来るのを

警戒して、下田は一度戻る必要があった。それから彼女の接近を感知できる術を地下牢に置いて、貴樹の部屋に引き返す。

下田と貴樹は、儀式の直前まで作戦を練った。お互いに何をすべきなのか。おそらく、戻れるのはかなりぎりぎりの範囲だ。迅速に行動し、上手く合流しなければ、火守女を守り切れない可能性がある。その点に関しては、下田に大きな責任が伴っていた。彼が何とかして彼女を守り、時間稼ぎをして、不死街で貴樹達と合流する。それが作戦の趣旨だからだ。

細かいところも決めている間、少女は黙々と絵を描いていた。道を作っていた。

「ヨルシカは、結局最後まで再びやってくることはなかった。」

下田は、自分の体内に熱が発生したのを感じる。時間的にもちょうどいいタイミングだ。儀式が始まった。

「行くよ」

既に腕が燃え出している。奇跡を重ねても意味はない。少女が示した、キャンパスへと走り出した。

「痛すぎるだろ」

「貴樹もよろけながらついてくる。」

正直、一見普通の絵画に見えるものに思いつき飛び込むというのは、勇気が必要だった。だが、既に儀式は進んでいる。急がなければまた最初に戻るといふ焦りが背中を押してくれた。

下田は、キャンパスに飛び込む。抵抗はなく、ついた指先から一瞬で飲み込まれていった。

火に焼かれる痛みが、暗闇に包まれる恐怖を和らげてくれる。

意識が失われることはなく。本当に自然なつながりで、下田は宙に浮いていた。辺り一面が、黒と、白い小さな無数の欠片で構成されている。自分の実体を掴むのに、少し時間がかかった。

「(っ)は…」

まるで、宇宙だ。

「もう少し下」

少女が裾を掴んでくる。彼女に引つ張られる形で移動をした。着いた先には、既に先客がいる。

白く、完璧な長方形のキャンパス。木の丸椅子。整えられた絵筆。それらを眺めていた女性は、やがて下田達に気がついた。

彼は、まだ、複雑な感情を禁じ得ない。だが今は、それら全てに蓋をして、やるべきことをすると心に決めていた。

プリシラもまた、気詰まりがあるような様子で伺ってきている。少女が近づいても、その目はずっと下田に向けられていた。

「わかるでしょ。協力して」

その口が開く。

「そうだよ。そのつもりでこうしたの。だから、今すぐに、始めないと」

「わかっている。そんなに変えるつもりはない。多分、ぎりぎり終わるはず」

少女は、プリシラと会話できているようだった。しかし、下田にとってはちぐはぐなものでしかない。とにかく協力を仰いでいることはわかったので、待つことにした。

しかし、段々と思考が進んでいく。この、まるで無数の星に囲まれたような場所は、ある考えを抱かせた。

地球。

かつては、別々だったはずだ。グウィン達のいた世界と、地球のある世界。だが、グウインはその絶対的な境界線を越えて、侵略をした。自分たちの世界を守るために。そもそも、どうやって、越えることができたのだろう。どんな術をもってしても、そんな芸当ができるとは思えない。

下田は、いつの間にか奥歯を噛みしめていた。

「お前か……？」

その声色に、プリシラが肩を揺らす。下田の視線から、やや顔を逸らした。彼は一步、彼女へと近づく。

「お前の力としか、考えられない。本来は、交わらないはずだったんだ。だけど、お前が、地球への道を、開いた。そうなんだろう？」

苦しそうに歪められた表情が、答えだった。

「兄さん」

少女の声が遠くなっていく。徐々に、収まっていたはずの熱が胸を焦がすほどまでに大きくなっていった。

「元凶。僕達の、故郷が、人間が滅ぼされたのは、お前のせいだったんだ。お前がそんな力を持って生まれてこなければ、母さんは——」

下田は頭に血が上っていて、鋭い蹴りをかわすことができなかった。足が彼の頬に深々と食い込み、遠慮のない勢いで飛ばしていく。衝撃で頬に穴が開き、口内も血と折れた歯で滅茶苦茶になっていた。

舌打ちをしながら、貴樹は首を回した。

「ぐだぐだと。何してんだ？　ぺら回しに来たんじゃねえんだぞ。さっさと働け」

プリシラが、口を少し開けて、目を大きく開いてこの傍若無人な男を見た。

綺麗な顔に戻り、下田は立ち上がった。

「酷くないですか？」

「どうでもいいから、やれ」

「先生って、無茶苦茶だったんですね」

だが、頭を冷やすきっかけになっただのは確かだった。ここでプリシラと問答をしても、意味はない。この狭間に留まっていられる時間には、限りがある。

作業は、ほとんどプリシラが担う形で行われた。下田は、ようやく実感を伴って、世界を描くということの困難さを理解する。もの凄く繊細な手順を幾つも要求された。そしてある程度急がなければならぬという状況も、重圧を感じるのには十分すぎるほどだった。

だが、腕への負担は少ない。それは、三人で分担しているからだろう。話し声はなく、短い手ぶりだけで意思が共有される。同じ技術を持っている者同士の、言葉のない会話。悪くはなかった。むしろある種の感動を覚える。

今までと違うものを作る。行程の進み具合が、やや遅れているのはわかっていた。プリシラの認識が曖昧な所は、下田と少女が補完しなければならぬ。そうする度、作業の進む速度は目に見えて小さくなった。

それでも、確実に絵は完成に向かっていった。貴樹が居眠りをしながらソウルの筒の役割を果たしている。どれほどの時が経っているのか、普通の物差しに当てはめて考えるのは、かなり難しそうだった。やがて、背筋に嫌な悪寒が湧く。

見られているような感覚が、強くなってきた。

少女は息を吐き出した。かなり切羽詰まっている印象を受ける。下田と、ちらりと目を合わせてきた。まずい、とでも言いたげだ。

下田も、手の動きに恐怖が現れないよう気をつけた。この感じは、覚えている。もう二度と、会いたくもない存在が近づいてきている。

二人の焦りの一方で、プリシラは一番冷静だった。彼らがミスをしそうになると、すぐに上から修正をしてくる。そういつた時の姿は頼もしかったが、下田としては今までのこともあり、複雑な感情は拭えなかった。

左手の膿がかなりうずいてきたところで、絵は完成した。

舟をこいでいる貴樹を揺り起こして、すぐに絵へと向かう。

それは、完璧に、祭祀場の広場を描いていた。中央の篝火の出来が特に凄い。待っている火の粉が動いているような錯覚に陥る。

だが、できた作品を眺めている余裕はなかった。

既に、声が聞こえてきているからだ。あの、平坦な囁き。笑みが含まれているものの、ぞっとするほど感情が込められていない。それは一心に、下田を求めているようだった。再会を待ち焦がれているようだった。

」
プリシラが何かを言っているようだったが、気にしている余裕はない。絵に飛び込むべく、疾走を始めた。慌ただしさの中で、これから始まるあらゆることに対して覚悟を決めている時間もなかった。ただ前に進むという焦りだけで、壁を越えようとしていた。

絵に入っていく瞬間、髪が見えたような気がした。

金色の、流れるような髪が。

「すれ違うほどに、情念も高まるというもの」

ウーラシールは含み笑いをした。

「結末は、決まっています。楽しみにしていますね」

(5463 垓1257 京4553 兆7885 億7933 万334
3)

いつもと、変わらない感覚。
何もない。

消失している間に、感じることはできないからだ。いつも、気がつ
けば、目が覚めて。否定しようのない現実が、目の前に広がる。

戸を叩く音で、下田は起き上がった。

周囲を確認する。自分の部屋だ。篝火の広場ではない。

違う、ことは確認できた。後はどれくらいずれたのか。

髪を撫でつけながら、扉を開ける。その先には、ちとせが立っ
た。

「あんだ、まだ寝てたの?」

そのややいつもより気づかわし気な声音だけでは、まだ確定できな
い。下田はとりあえず、寝癖を直そうとする手を止めた。

「うん、ちよつと」

「そろそろだって。皆広場に集まってるよ」

「何のために?」

ちとせは少しの間固まった後、腕を組んだ。

「まだ、寝ぼけてるみたいだね。最後の薪が、来るんだってさ。でも、
わかるでしょ? 先生が、それを許すわけがない。全員で備えるつ
て」

この時だけは、許してほしかった。この、奇妙な達成感に浸るくら
いの時間は許されてもいいだろう。少しだけ上を向いて、彼は大きく
瞬きをした。

はるか遠い記憶。おそらく、ロスリック城から戻ってきて一日が経

過したくらいだ。もう少しすれば、捕らえられた火守女が広場に出現する。ほぼ完璧と言ってもよかった。もしこれ以上前に戻ろうとして、描くことに時間をかけていたら、深淵に捕まっていた。

「アキ？」

目の前で手を振られて、下田は我に返った。

「あんた、本当に大丈夫？　体調悪いなら、休んでもいいよ。あたしが話しておくから」

「いいよ、大丈夫」

下田はゆっくりと深呼吸して、震える指を抑えた。

「先に行つて。ちよつと、やることがあるから。すぐに行くよ」

時間との勝負だった。

まずは少女のいる地下牢に行つて、彼女がちゃんと理解をしているか確認しなくてはならない。その点は、成功していた。画家の少女は完璧に状況を把握していた。それだけ分かれば十分だったので、下田は一作業をした後、すぐに次の目的地へと向かった。

『わかっているね？』

「ああ」

まだ、いづらか顔色がましな、カルラがこちらを見てきていた。修練中に倒れてから少しの間寝込んでいたのだが、小康状態で一旦落ち着いたのがこのタイミングなのは、ありがたい。

「アキヒロ？　どうしたんだ。他の者達はもう」

迅速に、カルラの体を探る。彼女は仰天して弱々しく抵抗してきたが、その前に、彼女の両足にあることを探り当てた。

ローブを魔術で斬り裂き、剥き出しになった足を見る。彼女の両足は、膿に浸食されていた。しかし、おそらくエルドリツチのものではない。彼女はまた別の方法で、深淵に触れてしまったのだろう。

これは、別に、彼女を助ける意思があつて行かうわけではなかった。自分のためだ。資格を得るためには、仕方のないこと。

下田の左の膿が変形し、カルラの足と繋がる。そして、一瞬で搾取

を終えた。

彼女自体は、何も感じていないようだった。ただ理解をしていない顔で、下田の行動を眺めている。

「何を…」

終えた下田は、出ていく直前に、少しの間立ち止まった。

「さようなら」

『どうしたんだい?』

見えない体を駆使しながら、下田は全速力で走っていた。もう、火守女が現れた頃だろう。急がなければ、間に合わない。

ウミは怪訝そうに話しかけてくる。

『広場の方向じゃないよ。どこに行くつもり?』

「回収できる膿は、あれだけじゃない」

『ああ…、なるほど。けど、いいのかい?』

足を止めずに、進み続けた。

やるべきことの多さと、時間の量がまるで噛み合っていない。

武器の調達、事前の仕込み。

万全とは言えないかもしれないが、十分な準備をできたと判断した所で、広場へと足を踏み入れた。

「そんなことを、する必要があるとあるというのですか?」

ヨルシカと、宇部が、議論をしているようだった。周りの者達はそれを黙って聞いている。生徒達はほとんど、あまり気の進まない様子だ。

あとから入ってきた下田に、全員の視線が向けられる。その中には当然、篝火の側で膝をついている火守女のものも含まれていた。髪の際間から覗く片目が、下田を捉えた瞬間、大きく開かれる。イリーナも、同じような反応を返してきていた。

「すみません、遅れました」

彼女達の視覚を欺けないのは当たり前だ。いくら擬態でごまかそうとも、ソウルを見透かされれば容易に看破される。それでも、二人の火守女は何も言っていない。今はそれが、かなりありがたかった。

宇部は、下田を一瞥した後、すぐにヨルシカへと向き直った。

「できることは、何でもやるべきだ。あいつの動揺を誘えば、それでいい」

「しかし、いくら何でも足を切り落とすというのは」

この会話も、知っている。

火守女を傷つけて、それを見た貴樹がどう思うのかは明らかだ。その時の生じた隙を狙う。まるで宇部が全て考え出したような雰囲気だが、今となつてはやや事実と違っているのもわかっていた。

ヨルシカは、さも、気が進まないように振舞っている。しかし、この二人の口論はどこか作り物めいていた。初めから、火守女の足を切断することは決まっていたに違いない。あくまで下田達が納得しやすくなるような回りくどい流れを作るために、そうしているだけだった。

かつての下田は、ただ黙って傍観していた。自分が口を出しても、何も変わらないと思っていたからだ。結局傷つける方向に話が決まっていた。自分の中で生まれる罪悪感の対処で精一杯だった。

先生が、自分達を嫌になる理由もわかるというものだ。

だが、今度は違う。遅れてしまったが、やり直しの機会を得た以上、もう、躊躇いで後悔を残すことはしたくなかった。

うづくまる火守女の下へ、宇部が歩いていく。彼の表情は醜く歪んでいた。少なくとも、彼女を傷つけることに抵抗がないことは確かだった。大振りの剣を構え、細い足に狙いをつける。

宇部の振り下ろした大剣に、正確にソウルの矢をぶつけた。軌道がずれて、刃は彼女の肩のすぐ横を通り過ぎる。

「あ？」

宇部自身は何が起きたのか理解していないようだったが、それ以外の者達は全員、下田が邪魔をしたのだと把握していた。再び多くの視

線にさらされた下田は、意識の切り替えを行う。ここが心休まる安全地帯ではなく、れつきとした戦場なのだ。

ヨルシカが、静かに言う。

「何を、しているのですか？ シモダさん」

取り除かなければならない障害の一つ。

暗月の誓約。

これのせいで、あの竜女との戦闘が非常に面倒になる。今まではヨルシカ自身を殺すことでしか消せないと思っていた。だが、誓約というものの性質を考えていくうちに、まだ、選択肢があるということに気がついた。

要は、乗り換えだ。新しい誓約を結べばいい。これで、ヨルシカとの不都合なつながりは消えていく。

「てめえ、何のつもりだ？」

宇部が大仰に足音を立てながら、近づいてくる。下田も彼に向かって歩いて行った。正確には、篝火の側へ。

相手が胸ぐらをつかもうと手を伸ばしてきた瞬間、下田は握りしめていた右の拳を動かした。多少は手加減したものの、竜の膂力で殴り飛ばされた宇部は、叫ぶ間もなく地面を転がっていく。

こちらを見上げている火守女を見て、彼は一瞬考えた。

一度は見捨てた彼女に、自分がそうする資格はあるのかと。

しかし、一方でこうも考えた。

自分は、灰だ。灰。捧げられ、燃やされた後に残るもの。滅びの後の残留物。自分達は、地球を、同じ人間のほとんどを滅ぼされた中で、残った存在。まさに、灰だ。そう呼ばれるのにふさわしい。

相手の中のソウルを見る。篝火の炎が、今は愛おしく感じる。

今までの繰り返しの中で、一番したことは何か。時間を、費やしたものは何か。

それは祈りだ。

篝火に縋り、守られる一方で、守っていた。そのおかげで、ソウルが見えるようになった。ソウルを、扱えるようになった。

だから、自分は、火守女だ。

火守女であり、灰なのだ。
唱える。

「誓約。火守女の灰。僕は彼女を、守ると誓います。彼女のことを一心に愛する人へ託すまで」

深淵がやってくるまで、七日と少し。

下田は宣言し、己の全てを懸ける、一週間を始めた。

結：暗い魂（ダークソウル）

56. 反逆者達

やや騒がしい音が、耳に入ってきた。

戦闘の物音。

貴樹は、息を吐き出しながら半身を起こした。

「急に起き上がったては…」

クリムエルヒルトが止めてくる。貴樹は、その手に対して、自分の欠けた腕の根元部分を当てた。

「旦那様？」

とんとん、と、彼女の肩を肩で叩く。

「クリム」

それから、彼女と同じくらい不思議そうにしている左のミレーヌへ、顔を向けた。

「ミレーヌ」

勢いよく立ち上がる。既に、それなりの亡者が屠られているようだった。とにかく数を減らそうと奮闘している者達へ向かって、歩き始める。一番近いのは、少し小柄な騎士だ。彼女に向かってくる亡者の一匹を、蹴り飛ばした。

「アンリちゃん」

鎧に向かって寄りかかる。腕を回すことはできないが、しっかりと体を密着させて、ハグをした。ちゃんと、存在がそこにあるということを確認するように。

「タカキさん？ 一体…」

後ろ足で亡者の胴を貫いた後、残る二人にも向かっていった。

「ホレイス、ホークさん、手を」

二人とも、なぜ今、そんなことを言うてくるのかわかっていないようだった。そもそも戦闘中なので、貴樹の指示には従えないと小さく身振りで示してくる。

貴樹は地面を蹴り、彼らの担当している亡者を一瞬で倒した。それ

から、二人の手に無理やり触れて、握手をするような形にする。
「おい、どうしたんだ」

ホークウツドに尋ねられて、貴樹は晴れやかな笑みを返した。
「何となく？」

鎌が、亡者の首を刈り取っていく。その戦闘を、貴樹はあえて見なかった。直視すれば、我慢をするのが難しくなるからだ。できれば、一撃で決めたかったので、平静を保つよう努力をした。

「いいなあ」

だから、その声が聞こえてきた方向へ、顔を向けることもしなかった。

「貴くん、私も抱きしめてほしいんだけど。これが終わった後に」

薫の言葉に対して、数秒待った。足の指を解す。両足に力を入れる。

決着というものも、必要なだろう。生まれてこの方、何度かそうすることは考えた。しかし、日本においては、殺人は大きなリスクを伴う。

貴樹は、解放された気分だった。やはり、この世界は最高だ。時間のことを考えれば、さつさと下田と合流するのがいいのだろう。しかし、その前に邪魔な存在を排除しなければならない。

「迂闊だね」

リリアーネが亡者の群れの中で、笑っている。

「もう、あれはいないよ。今頃、祭祀場に到着してるんじゃないかな」「ふーん」

貴樹は欠伸をしながら、肩もほぐした。その手応えのない反応に、リリアーネは少しだけ怪訝そうな顔をする。

「貴くん、聞いて」

薫が声をかけてくる。

「このまま相手をしていてもきりがない。貴方は、先に祭祀場に向かって。ここは、私達で何とかするから」

貴樹はゆっくりと、微笑んだ。

(酌量の余地なし)

彼女へ顔を向ける。貴樹の表情を見た薫は、鎌を振るう手を止めた。

「わかったよ。姉さん」

地面を蹴る。全力ではない。相手へもあえて、違和感を与えるようにした。危険を察知できるだけの猶予があることで、当然、貴樹の不意打ちは失敗する。彼の足は薫の胸ではなく、亡者の胴体を破壊した。

距離を取った薫は、首を傾げる。

「これは、どういうつもりかな」

「工夫をしたんだよ」

貴樹は亡者の首を蹴り飛ばす。その軌道は真つすぐ薫にまで届いていた。しかし相手も上手くかわし、直撃することはなかった。

「俺に殺されるということを、ちゃんと、噛みしめてほしいんだ。一瞬で終わると、お前は何も苦しまないだろう？」

相手は無理やり笑みを作る。

「急に、どうしたの？ 私、味方じゃん」

「もう喋らなくていいぞ。死ぬ、裏切り者」

貴樹の追撃から逃れ、薫はリリアーネの側にまで来た。しかしその距離においても、二人は戦いを始めない。リリアーネはちらりと、彼女の方を見た。

薫が鎌を強く握りながら指示をする。いや、既にその表情は別人のものになっていた。

「リリアーネ。祭祀場へ戻りなさい。何かがおかしい。念のためです」

「でも、姉さまは？」

「こちらを止めるしかないようです。……薫。覚悟を決めなさい。どうやら、何もかも知られている」

貴樹は、額に青筋を浮かべた。

「しゃべんなつたろ。フリーデもだ。まとめて仕留めてやるから、安心しろよ」

既に、最後のラインも、彼女は超えてしまっていた。火守女が殺さ

れる原因を作ったということは、それだけ重い罪なのだ。だから、薫も、フリーデも、死ぬべきだと考えていた。四肢を潰し、腸を抉り出し、長時間放置してから、頭を踏み潰す。それくらいの想像が一気に頭を駆け巡っていた。

亡者の群れと共に、リリアーネが離れていく。邪魔な雑魚が消えてくれたのはありがたかった。薫を痛めつける際に、余計な茶々を入れられずに済む。

「見たでしょう」

彼は未だ状況を理解していない様子の、ホークウッド達に言った。「祭祀場と内通していた者がいたようです。自分の家族のことなので。俺だけで、けじめをつけます。見ていてください。たいして、時間ばかりませんかから」

「そう？」

薫は、挑戦的な表情になった。

「私達、それなりに頑張るつもりだけど」

貴樹は、まだ、冷静とは言えない状態だった。いかにして目の前の女を殺すかだけを考えている。今度こそ、火守女を助けるという思いが、先走っていないと言えれば嘘だった。だから、まだ考え得る可能性について、すっかり頭から抜け落ちていた。

薫が言い切った瞬間、貴樹は全身が白い光に包まれるのをようやく認識した。そして、目の前の光景が瞬時に移り変わっていく。

移動した先は、崩れた廃墟の中だった。鬱蒼とした森が周りには広がっていて、遠くには沼も広く分布している。

クリムエルヒルトが、胸を抑えて倒れ込んだ。顔色が悪い。とても消耗しているようだった。彼女の術によって、移動させられたのは確かだ。

「早く、して。グウインのソウルを、旦那様から取り除かないと」

彼女が、どういう経緯でこのような行動に出たのかはわからない。しかし、薫と協力していたことは確かだった。ここは、明らかにフアランの城塞だ。祭祀場への道から、さらに離れてしまったことになる。

「良いタイミングだよ。でも、ごめんね。私、約束はあまり守らない方なの」

薫は、フリーデは、鎌を握りしめた。息を短く吐きながら、戦闘態勢に入る。ここで、貴樹とクリムエルヒルトを二人とも殺す。そういう意思が強く感じられた。

貴樹は鼻で笑って、両足に力を入れる。

彼女が本気でそうできると思っているのなら、やはり、今までの愚かな姉と変わらない。そのまま、自分に殺されてくれるのが一番だと、願った。



火守女の脇に腕を回し、優しく立ち上がらせた。

「自分で、歩けます?」

「……ええ、大丈夫です」

彼女は下田がどうしてこのような行動に出たのか、まだわかっていないようだ。それは、周りの者達も同じだった。

イリーナが、殴り飛ばされた宇部に駆け寄り、治療を開始している。ずれた、と下田は思った。何らかの方法で修正する必要がある。イリーナの位置を篝火の側にまで戻さなくてはならない。

ゆっくりと、周囲の反応を待つかのように、彼は歩き始めた。まだ、計りかねる視線がほとんどだ。彼が何をしようとしているのか、何のつもりで行動に出たのか、思考をしている時間。

いいぞ。彼は緊張を抑える。時間は大切だ。自分はここで、ここから出た後でも、時間をできる限り作り出さなければならぬ。火守女と結んだ誓約通り、貴樹と合流するまでの時間を、稼がなくてはならない。

段階を、分けた。進行すればするほど、おそらく、自分にとって有利な状況になると想定した段階だ。今は、一番無防備な段階だった。下田は一人で、守るべきものが大量にいる。

ヨルシカが、階段から降りてくるのを横目でとらえる。彼女はわからないという顔をして、下田を見つめていた。

「何を、しているのですか？」

今は、同じ声で違う言葉が重なって聞こえてくる。私に、理由を与えてくれるのですか？ 貴方を罰する理由を。反逆という罪に対する罰として、すつきりさせてくれるのですか？ それほど愚かだなんて、思いもしていませんでした。

既に回転の速い者は、武器へ手を動かしているようだ。あるいは、下田とそれほど親しくはない、快く思っていない順から、と言うべきか。見ずとも、それくらいは察することができた。

「全員、動かないでください」

下田は、はつきりと言った。周りをたつぷりと睥睨してから、冷徹な表情を作り出す。

「僕は、貴樹先生側につくと決めました。ですので、この瞬間から、貴方達祭祀場の敵になります。そうなった以上、容赦はしません。下手な抵抗をすれば、余計な血を見ることになります」

果たして相手の中に、どれだけいただろうか。呪術は使えず、魔術は未熟。唯一の取柄である奇跡を、攻撃に利用するという頭脳もない。直前までそういう印象だった彼の言葉を、真に受ける者は、どれだけいただろうか。

ヨルシカは困ったように笑った。

「二体、どのような思いで行動に出たのかはわかりません。ですが、理解していますか？ 貴方の行いは、誰の、得にもならない。自分の首を自分で絞めています。もちろん、貴方がタカキさんに同情するのは当然の理屈です。しかし、このようなことをする意味が、どこにあるというのですか？」

「それが、僕の存在意義だからです」

下田はあえて、これ見よがしに魔術を唱えた。ソウルの矢を十二本、己の周囲に出現させる。これだけで、相手側の警戒を引き上げるのには十分だった。展開可能数は、術師としての技量を素直に表す。まだまだ限界ではなかったが、威嚇のためだけにこれ以上消費するの

は無駄だと考えていた。

「残念です」

ヨルシカは溜息をついた。内心では小躍りしていることだろう。「貴方はおそらく、ロスリック城において洗脳をされた。不本意ですが、拘束します。なるべく傷つけることはしません。抵抗をしないでください。貴方は一人では、何も状況を動かすことはできません」「一人？」

下田も笑みを浮かべた。それは幾分か、安堵の感情も含まれている。一つの山場を越えたという実感が、緊張をほぐしてくれていた。「もつと物事をよく見た方が良いと思いますよ」

下田のすぐそばの横穴から、複数人が躍り出た。初めは赤い頭巾の大男。背には、画家の少女を抱えている。そしてもう一人は、気に入らなそうな顔をして、下田に言葉をぶつけてきた。

「これは、つまり、我々を死地に追いやろうとしているのか？」

「違います。法王。イルシールの王よ」

インベントリから、月光の大剣を出す。それを、頭巾の老人、ゲールに投げて渡した。それから次に同じようにして、アンドレイの工房で見繕った二本の片手剣を、サリヴァーンに手渡す。

「僕は、今までになく、頼もしさを感じています。一人ではないから」
相手は、全員、下田が本気で物事を成し遂げようとしていることを理解したようだ。残らず武器を抜き、術を構え、戦闘態勢に入る。どちらともつかずに、ただひたすら困惑しているのは、生徒達だけだった。

ちとせはその中でも、一番訳が分からないという顔をしている。

「あんだ、何してんの」

「ごめん、ちとせ」

彼女が一番近くにいて、良かったと思った。向かう途中で、誰かに邪魔される心配があまりないからだ。張り詰めた空気の中で、彼はちとせの側にまで歩いた。その両肩に手を置き、彼女が戸惑いの顔を浮かべた瞬間、強引に抱きしめた。

祭祀場の空気が、ずれる。誰もが予想していない行動を下田はとつ

た。もちろん彼の普段の感情であったり、ちとせとどれくらい関わっているかを知っていれば、それ自体は不思議でもなんでもない。しかし、今このタイミングで行うにはあまりにもそぐわなかった。

「んう……」

自分としては、どういう割合なのだろう。

相手の唇の感触を感じながら、下田は自問した。

おそらく二割くらいは、これが必要なことだと言いついて聞かせている部分だ。決してそうしたいというだけではなく、仕方がない部分もあるのだと。正直今こうして行動に移すと、強烈なほどの意識が、これをあと三秒は続けるべきだと主張していた。最初の衝撃のせいで、ちとせの柔らかい感触を味わいきれていない。だから、試行時間を増やすべきだ。

だが断固した決意をもって、ほぼすぐに下田は彼女とのキスを止めていた。彼女は一瞬固まってから、わずかな吐息をこぼした。まだ、自身がされたことへの実感がわいていないようだ。だがもう少しで、その顔が何かしらの色に染まっていくことは確かだった。

その前に、彼は再び顔を近づけた。後ずさろうとする彼女の体を抑えて、鼻と鼻とくつつける。

「僕の日を見て」

詠唱。

忙しなげだった相手の視線が、定まった。それは決して安定をしたという意味ではない。むしろ瞳は先ほどよりも明らかに蕩けて、夢見るような視線に代わっていた。

魅了の呪術が成功したことを確認し、下田は素早く指示をした。

「ヨルシカを、三本で拘束してくれ」

はい、と虚ろな返事をもらった直後、下田は一瞬で移動をした。白光を己で包み、目的の座標を思考する。術後の疲労感にも備えた。

下田が背後に出現するということを、ヨルシカは予測してはいなかった。だが、反応はできた。

彼女のファランの速剣に対し、手をかざす。速剣はたとえ詠唱を伴うにしても、とても単純であることが多い。そうでもしなければ、こ

れほどの速度で繰り出せないからだ。だから、下田はいとも簡単に、その青白い刃を素手で分解することができた。

相手の驚愕を利用する。隙をつく。三つの詠唱を並行させ、圧縮する。左手で雷を作り出し、右手に握った短剣に、付与させた。真つすぐ、ヨルシカの喉を狙う。

ヨルシカの体が、硬直した。彼女は血を吐き出しながら、喉をかきむしろうとした。猶予は少ない。彼女の肉が再生をする前に、下田は治療をした。

奇跡の光で、破壊された相手の喉を覆う。組織の配列を、声帯の位置を、出鱈目にして、醜く治療した。さらに一度青みがかった血を吐いた後、彼女は自分自身が、まともに声を出せないことに気がついたらしい。強烈な憎悪の視線を、下田に向けてきた。

そのタイミングで、ちとせから放たれた縄が、ヨルシカの四肢に巻き付く。なすすべなく拘束された彼女は、無様に地面へ転がった。

ソウルの矢を、ユリアが作り出している。それをしっかりと視て、下田は手を伸ばした。自分の実体のもものではなく、透明な、ソウルの手を。それはちゃんと相手の術に絡みつき、分解して、再び下田の側で再構成させた。

こちらへ迫ろうとしたグンダの横っ腹を、ゲールの大剣が直撃した。グンダは少しだけ呻いた後、ジークバルトの側にまで下がる。そこへサリヴァーンがソウルの斬撃を放った。走ってきたフォドリックが、それを斬り落とす。

「全員、動かないでください」

再度の指示をする。

右手でヨルシカの縛られている腕をつかみ、これ見よがしに持ち上げる。

成功した。ほぼ自分の思い描いた通りだ。限りなく迅速に、大きな戦力をそぎ落とすことができた。

「彼女を殺します。指示に逆らえば。貴方達ができることは、何もありません。そこにじっとして、傍観していてください。ちとせ、残り二本で、イリーナを縛って」

イリーナの方は、ゲールが抱え上げた。そうして二人で、篝火の中心にまで戻る。その間、相手側はやはり何もできないようだった。既に下田の実力は十分理解しているのだろう。いたずらに仕掛けても意味がないことは伝わったようだ。

魅了の効力がなくなり、ちとせは我に返った。しかし、今の状況を見ても、ついてこれられないことは確かだ。どうしよう、と下田は一瞬真剣に悩んだ。魅了されている間の記憶がなくなるわけではない。後に引けなくなった。彼女にたくさん怒られるのは確定だ。

だが今は、申し訳ない気持ちを顔には出さなかった。下田は険しい表情を維持し続ける。それは、生徒達を前にしても変わらない。「皆、もうちよつと篝火に集まって」

反応は鈍い。というより、皆無だった。下田の言葉に従おうとする者はいなく、ただ彼を理解不能の相手とするような視線が大半だった。

予想通りだ。だが、説明をしている余裕もない。

ヨルシカの髪を掴んで、顔ごと持ち上げる。伸びた彼女の首の部分に、短剣を押し当てた。

「従わなければ、この女の首を斬り裂く」

一秒待って、刃を動かした。実際に狙ったのは胸の部分で、二度、突き刺す。しかし素の武器で傷つけた所で意味はなく、すぐに治っていった。それでも、下田が本気であることは生徒達に伝わった。

「や、やめて」

実織が最初に声を出す。下田が顔を向けると、彼女はすぐに目線を逸らした。怖がっているのは、他の者達も同じだ。下田の行動に実感が伴ってきたものの、なぜそんなことをしているのかまるでわからないという感情。

もう一秒経ったので、今度は目を潰した。片方だけなので、ヨルシカはさほど堪えていないように思える。竜の再生力は眼球という複雑な器官も関係なく瞬時に直していくので、深刻なことにはならない。だが当然、痛みはやってくる。

ちとせが動こうとした。彼女はおそらく、縄を解除しようとしてい

る。もう一度魅了をするのはさすがに憚られたので。下田は声で警告を発した。

「誰も、余計なことはしないで。お互いに、後味の悪い結果にはしたくないよね」

彼女の頭のすぐそばに、ソウルの矢を浮かべる。

ちとせは、未だに、信じられないという顔で彼を眺めていた。確かに、と彼もまた自嘲する。今の自分は、明らかに良くない。まるで悪役だ。しかし、これは一番手っ取り早い方法だった。恐怖で無理やり進める。話し合いで皆に理解してもらえらるとは到底思えなかった。

ほとんどの生徒が、篝火に集まり始める。彼らの様子を確認していると、腕に誰かが触れてきた。画家の少女は、一瞬だけこちらを気遣う視線を向けてくる。口の端をわずかに緩めて、それに感謝を示した。不本意だが、納得してやっていることなのだ。後悔はしていない。ちとせ達にいくら嫌われても、悔いはないと思っていた。

だが、全員が動いたわけではなかった。丸戸が、今までにないほど引き締まった表情で、下田を睨みつけてくる。

「離せ」

お、と下田は思った。

「どうしたの？」

「その人を、は、離せって言ってるんだ」

どういう風に説得しようか考えていると、篝火が揺れた。イリーナを見ると、彼女の周りのソウルに動きがある。彼女が、何らかの操作をしたことは確かだった。

ヨルシカを離し、地面に転がす。彼女は無詠唱の矢を放ってきたが、下田に当たる前に消えた。一旦彼女に意識を集中するのはやめて、篝火から現れた存在を注視した。

「これ、どういう状況？」

リリアーネは薄笑いを浮かべている。その目は油断なく、下田達と祭祀場の者達との間を往復していた。

貴樹の言っていた通りだ。大体、予想していた範囲の時間で、彼女は現れた。それでも、この場の状況を動かし得るきっかけになるとは

考えていなかった。そこまで、下田は自分に自信がないわけでもない。

「見てわかりませんか？」

下田の言葉は無視される。リリアーネはまだ余裕のある顔で、地面に転がっているヨルシカを見下ろした。

「もしかして、私、試されてますか？ でもちよつと、非現実的すぎる状況だと思っんですけど」

ヨルシカは答えようにも、そうすることができない。相手が完全に今の状況を本気でとらえていないことに、もどかしさを感じているようだ。拘束から逃れようともがく動きを見せた。

下田は無言で、動いている手足を切り落とした。すぐにヨルシカの出血がおさまり、再生もあつという間に終わる。

それでも、リリアーネの認識を変えるのには十分だった。彼女はようやく下田をまともに見て、目を細くする。

「頼みが、あるんですけど」

下田はインベントリから、回収したものの一部を取り出す。相手はそれを認識して、笑みを引つ込めた。

よく見えるよう、貴樹の両腕を掲げる。

「これ、今のところどんな術も受け付けないんですよ。何重にも封印が施されている。貴方が、やったんですよね。解いてくれると助かります」

「なるほど、君かあ」

リリアーネは短剣を握りしめた。

「タカキにばらしたんだ。困るな。どうして急にこういうことしちやうの？ 今まで通り、おとなしくしてればよかったのに」

喉の詰まりを、感じた。彼女の口が動くのは見えていた。何をしてくるのかも。だが、下田はあえて放っておいた。興味があつたからだ。彼女の行動を観察していれば、どう説得すればいいのかもわかってくる。

「確か君、奇跡使いだったよね。もう、何もできないよ」

リリアーネは一步下がる。

「今まで、こういうことをしようっていう意思の欠片も表に出さなかったのは凄いことだけど。呆気なく失敗するってことは、まるで考えなかったのかな」

下田は苦笑する。

「協力してくれると思っただけですけどね」

「私は、確かにここの人達とは合わないよ。でも、わかるでしょ？ 無謀な賭けはしない主義なの」

「動かないでください」

リリアーネに向かおうとする、サリヴァーンとゲールを止めた。彼らには他の者達への牽制をしてもらう方がいい。一度乱戦になってしまえば、不確定要素が多くなる。全員を、把握することができなくなるのは避けたい。

下田はインベントリから片手剣を取り出した。篝火の光で刃を照らし、そこに映る自分の顔を確認する。

その行動を見たりリアーネは、少し意外そうにした。

「えっと。つまり私が言いたいのは、降伏してねってことなんだけど」
「なるほど」

「私、君のことまあまあ気に入ってるからさ。あんまり、痛い思いとか、させたくないんだ」

「同感です」
構える。

今回は、ユリアの構えを参考にした。鞘はないが、何も彼女には居合だけしかないというわけではない。重さを載せることよりも、速度を大事にした構え。

「僕も気が進みません。加減しづらくなるから。貴方には、五体満足でいてほしい」

彼女は一瞬きよとんとしたが、すぐにくすりと笑みを漏らした。そしてさらに下田から離れるようにして、足を動かす。

「めんどくさいから、その二人に任せるね」

空気の流れを感じる。頭上から、大剣が降ってくるのがわかった。横っ飛びにかわす。地面に刃をつきたてた宇部は、下田に向かって

唸り声を上げた。

「やっちまったな、お前」

その後もどうでもいい口上が流れたが、下田は全て無視した。さりげなく背後を取っている丸戸に意識を向けていたせいでもある。そもそも彼らと戦うつもりはないので、今戦闘が始まっているという意識に入りづらかった。

「やめようよ」

言い切る前に横の一振りが飛んでくる。下田は体をひねって避けた。宇部は舌打ちして、追撃の準備に入る。

「僕達が、戦う意味なんてないんだ」

丸戸が投げた短剣を、片手剣の腹で弾く。正面から向かってくる大剣の一撃は、ぎりぎりでかわした。常に二人に挟まれている形になっているので、少々忙しい。会話をしながら進めるのは、それなりに苦労した。

「とにかく聞いて。僕達は団結すべきだ。ちゃんと理由がある」

流れるように体を回転させ、ほぼ同時に来る二方向から攻撃をいなした。特に宇部の驚きが強いようだ。自慢の腕力を受けられて、手が止まっている。彼だって馬鹿力に違いないが、ヨルシカに比べると一般人に近い方になってしまふのは否めない。

「僕達は、騙されてる。祭祀場は、エルドリツチとつながっているんだ。結局この人たちにとって、僕達は敵でしかない。だから、こんなところで争っていてもしょうがないんだ」

「でっ」

宇部は薄笑いを浮かべながら、攻撃を再開した。

「それがどうした？」

下田は、一瞬だけ目をつぶった。どうして、当たってほしくない予想に限って、的中してしまうのだろう。

宇部も丸戸も、下田の放った事実に驚いている様子はなかった。荒唐無稽な出まかせだと、切り捨てているのではない。そこには、明らかかな、優越感があった。重要な事実を、事前に知っていたという、得意げな表情。

少しだけ、虚しくなった。

「知ってたんだ」

「がっかりしたか？ 所詮、お前らなんて使い捨てでしかないんだよ。賢い奴だけが、生き残るんだ」

「自分達だけ、助かるなんて保証はないと思うよ」

「ヨルシカは、俺と丸戸にだけ、約束をした。わかるか？ 俺達は正義だ。反逆者を、排除する」

「皆に、教えることだってできたはずだ。知っておきながら、黙っていたのは、僕達を見殺しにしていたも同然だ」

「うるせえ、死ね」

こうもはつきりと表明してくれたのだから、意識を切り替えるべきだろう。彼らは、たった今、宣言をした。下田達の、地球の側にはつかないと。祭祀場に、ちゃんとした意思を持って、協力しているのだと。

つまり、敵だ。一緒に帰るべき、仲間ではない。

「お前がな」

そう吐き捨てて、相手の攻撃を見極めながら近づいた。大剣の動きにうまく逆らいながら、自分の剣を走らせる。宇部は重い武器を扱っているのに、あまりに動きが雑すぎた。この瞬間も、できた隙を埋めるのに間に合わない。

大剣を握っている手を斬り裂いた。落とされた武器が地面に転がるころには、下田の剣が宇部の喉を貫いている。そのまま上に力を入れて、相手の顔を縦に斬り開いた。

飛んできた血が、唇の端にこびりつく。無意識のうちに、舌で舐め取っていた。下田は思わぬ発見をする。味は悪くなさそうだ。それなりに鍛えているだろうから、きつと、その肉はいい感じに引き締まっていることだろう。

背後から、線を感じる。

丸戸の固有能力は、かなり強力だ。何せ下田があれだけ苦労して習得した移動術を、簡単に扱えるようになるのだから。

振り向いて、剣を振るった。欠点としては、おそらく細かな座標の

調節ができない点だ。だから丸戸は、短絡的に扱う。相手の後ろに移動すればいいのだと。

しかし、それを読んで攻撃をしても、手応えはなかった。

「は、はは」

肩を見れば、短剣が深々と刺さっている。

丸戸は、下田の背後に立っていた。

なるほど。能力強化のことを忘れていた。丸戸は、連続で能力を使えるようになっていたのだ。最初の気配はフェイクだった。彼は下田の対応を予測して、さらにその裏へと飛んだ。

「お前が、悪いんだからな。お、おれが、おれこそが、ヨルシカ様にふさわしいんだ。そのまま、死んじまえ」

まだ何か言いたいことがあったようだが、丸戸は口を止めた。その時になってようやく、自分の腹が斬り裂かれていることに気がついたらしい。痛みがやってきたようで、醜く悲鳴を上げ始めた。下田はさっさとその首を飛ばして、黙らせた。

息を短く吸い、刺さっている短剣を引き抜く。

「君が、まあまあやるのはわかったけど」

リリアーネはどくどくと血があふれ出ている傷口を、指さしてくる。

「死んじやうよ？ 早く降参しないと。血がさ、ほら…」

彼女もまた、途中で黙り込んだ。

下田は白い光を出現させ、肩を覆わせる。一瞬で、傷がふさがっていった。流れ出た血はそれほど多くはない。あまり気力を消費せず、完治させることができた。

リリアーネは呆然としながら、自らの喉を抑えている。何が起きているのか、まだ理解しかねているようだった。

「何で…」

「先生の腕の、封印を解いてくれませんか？ こればかりは、貴方しか分解できないんです」

「沈黙が…」

「あ、すみません。すぐに解きますね」

詠唱は、表面的なものでしかないのだと、下田は理解をしている。本質は、結局目に見える流れなのだ。ソウルの流れ。リリアーネの術の本質は、ただ観察をするだけで掴むことができた。だから、彼女からかけられたそれを自分からはがして、跳ね返すことも容易だ。

彼女は正常に術を使えるようになったもの、すぐに下田へ攻撃してくることはなかった。ただ警戒をする視線を向けてくるだけだ。彼女の中で、下田が決して侮れない相手になったのは確かだった。

「もう一度言います。僕に、協力してください。多分、貴方達姉妹のためになると思います」

「具体的には？」

「貴方達の、王になりましょう」

彼女は警戒も忘れて、口をぽかんと開けた。

「はあ？」

「資格があるという、証拠を見せますね」

今までこの場のほとんどの者を欺いていた、擬態を弱める。少なくとも、リリアーネが看破できる程度には。正直多少なりとも負担が減るので助かった。もちろん、この見た目をさらすことには抵抗があるが。

彼は自分の半身を覆う膿を、右手で示してみせる。

「ね？」

リリアーネは膿の部分を嘗め回すように上から下まで眺めた。それから試案をする表情になる。その視線は下田の真意を測ろうとしているかのようだった。やがて思考が落ち着いたのか、人を食ったような笑みが戻ってくる。

「まさか、大当たりが自分から転がり込んでくるとはね。姉さん、こっちに来て。もうその人達とはお別れだね」

祭祀場の者達は予想通りという顔をしていた。避けるべき事態が起こったと、後悔もしているようだ。リリアーネは元より彼らの味方というわけではなかった。こういうことになるのを、彼らは一番恐れていた。

「よろしくお願いします」

彼女は手を伸ばし、貴樹の腕に触れた。下田の目には、それを覆っていた膜のようなものが消えていくように映った。

「節操を欠けば、身を滅ぼすことになるぞ」

サリヴァーンが言ってくる。彼は篝火の傍によつてきたリリアーネとユリアを、唾棄すべき存在として睨みつけていた。

「蛇の末裔どもめ」

「フフ。仲良くしようよ。法王さま。ヨルシカに無様に負けて、助け出された恩をあの子に返さないかね」

二人の間には、何かしらの因縁があるようだった。だが、今はそれを気にしている場合ではない。実のところ、リリアーネの動きが一番重要だった。彼女が計画していた通りに収まってくれた以上、ここに留まる必要はなくなつた。

下田は予定の人数が篝火の傍にいることを確認した。内心安心しながら、炎に触れようとする。

だが、その直前に、動きを止めた。傍らにいる画家の少女が、見上げてくる。

「どうしたの？」

「伏せてて」

最初は、エルドリツチかと思つた。だが、奥の横穴から向かってくる存在は、普通の人のような動きをしている。その気配を感知した下田は、深く息を吐きだした。

先生。

思つたんですが。

その存在に気がついているのは、初め彼だけのようだった。だが、その穴から姿を現した瞬間、その気配は他の者達にも伝わつたようだ。彼らは皆、それが誰なのか理解すると、一様に畏怖の表情を浮かべた。

もちろん、下田も考えてはいた。簡単に物事が進むはずはないと。気をつけるとは、貴樹の言葉だ。

気をつける。奴らは、この素晴らしい世界に元から住んでいた。地球とかいうごみ生まれのお前が抵抗してみせた所で、必ず、壁にぶち

当たる。

「疑問を挟む、余地もあるまい」

奴らは必ず、自らの計画が失敗した時のことも考えてる。対策をしているはずだ。

下田は唸った。

それでも、先生。

聞いてないです。

あいつは、先生の中にいるんじゃないんですか？

記憶にあるよりも、より枯れた風体で、大王は現れた。落ちくぼんだ目から、下田達へと炎の視線を向ける。

「約定は破られた。もはや、容赦はない」

グウインは手を前に伸ばした。何かを、握るような仕草をする。

瞬間、下田は妙な引力を感じた。己の中の一部分が、引きつけられるような感覚。同時に、自分の中に未だしがみつこうとしている、存在も感覚した。その白い腕を、彼は冷ややかに観察する。

自分で納得をした。なるほど、やろうとしていることがわかった。耐え抜いたのは、下田だけのようなだった。

他の生徒たちはほぼ皆、苦しそうにその場で膝をついている。彼らの周りに、突然いろいろな物が出現し、地面に落ちていた。飲み水や食料、本、服。生徒たちが日常的に使っていたものばかりだ。

インベントリが、その機能を失ったのだ。それだけではない。おそらく、篝火とのつながりも絶たれた。グウインが、生徒たちに宿っていた力を、回収した。元は、彼のものであったソウルを。

辛うじて消失を防げたのは、下田の一番近くにいたちとせの能力だけだった。彼女から出ていくソウルを下田が即座に捕まえて、自分自身の中にいれたのだ。これで、彼女の固有能力を維持することができると。ヨルシカとイリーナの拘束が解かれることはない。下田の意思で、縄を扱える。

「足りぬ」

ぼそりとつぶやき、グウインは次の標的に顔を向けた。視線を受けるフォドリツクは、驚きこそすれど、抗う意思はないようだ。何かを

理解した様子で、平伏をした。

「お爺ちゃん？」

シーリスが未だに理解できていない顔で、祖父に尋ねる。

グウインが剣を取り出して、老兵へと近づく。その首筋に、刃を近づけた。シーリスは一瞬止めに入りかけたが、相手が誰なのかを思い出した様子で、身を縮こまらせる。

フォドリックは彼女を一瞥してから、さらに頭を垂れる。

「身を、捧げます」

彼はかつて、亡者になりかけていた。それを救ったのが、貴樹だ。彼はどのようにして、フォドリックを引き戻したのか。下田は、それもまた教えられていたからこそ、グウインがどのような行動に出るのか予測することができた。

フォドリックの内に宿る、残り火の欠片。それを回収されれば、さらに大王は力を増すだろう。そんなことを許すほど、下田も悠長にはしていなかった。

グウインの腕を掴む。皺まみれの顔が、振り向いてきた。それに合わせて、下田は剣を振るう。

大王は事もなげに自らのショートソードで受け止め、力を逃がした。反撃のにおいを感じ取り、下田は後ろへ下がる。彼とすれ違いうににして、サリヴァーンとゲールが斬りかかった。

いくら古い、弱っているとはいえ、さすが火の大王だった。二人の攻撃を正確に弾き、隙を伺おうとする。数の差を苦にしている様子がない。このまま少し粘れば、形勢が動いたと認識した他の祭祀場の者達も、参戦しただろう。

三度の爆発音。

下田は空中を蹴りながら、宙返り、背後に回っていた。既に剣の魔術符呪は終わっている。あとは無駄なく横に振るうだけだった。

老人の肉と皮は、抵抗が少ない。下田がグウインの首を断つのに、竜の膂力を使うまでもなかった。白く伸びきった髪を掴んで、他の者達によく見えるように、高く掲げて見せる。

それから首級を上投げ、落ちきる前に魔術で八つ裂きにした。誰

の目にも、死んだとわかるように。

下田にとつてはあまり実感のできないことだが。祭祀場の者達に対する効果はかなりのものようだった。誰かが大きく息を吸い込んだ気配がする。場の空気は一気に、重く沈んだものへと変わっていった。イリーナが目を固くつぶり、何かを唱えている。それは術ではなく、すがりつくような祈りだった。

大剣が迫る。

竜の右手に片手剣を持ち替えて、フオドリックの刃を受け止めた。

「酷いな」

刃を合わせながら、老兵は睨みつけてくる。

「貴方を、救ったようなものなのに。どうして感謝してくれないんですか？」

「貴様……」

まあこんなものだろうと、納得もしていた。自分のやったことはそれだけ、彼らにとつては許されない行いなのだ。

弾いて、篝火の側へと下がった下田は、虚を突かれたように停止した。

おかしい。

首を失ったグウインの体は、まだ、倒れてはいなかった。血が止めどなく流れ出ているのに、かがみこむような動作をする。

そして、高く飛び上がった。篝火へと飛び込もうとしている。下田は迎撃することも考えたが、得体の知れない何かを感じて、とにかく離れることを選択した。

大王の死体が地面に転がる。伸ばされた手が、篝火の中に入っていない。

石の玉座に、異変が起こった。薪の王たちが、燃え始める。舞う火の粉が一つの流れとなつて、中央の篝火に集まっていく。

すぐに、下田はグウインの体を蹴った。転がしながら魔術を爆発させ、できるだけ篝火から遠くへと吹き飛ばす。火継ぎの儀式を行おうとしているのはわかっていた。もはや篝火とのつながりがなくなっているちとせ達は大丈夫だが、自分は違う。そして、火守女も。

篝火に、薪から出た火の粉が降りかかる。間に合わないのかと一瞬危惧したが、少し待っても何も異変は起こらなかった。

そして、グウインの体もこれ以上動かないことを確認した下田は、息をつく。どうやら、本当にこれで終わったらしい。予想外のことが起きたが、ここまで簡単に対応できたのは安心した。

本当に？

自分の頭の中で響く声を、無視しようとした。こんなものなのか？
こんなに、上手くことが進んでいいのか。グウイン達は、こんな自分に止められるような、浅い計画しか立てていなかったのだろうか。
それは、答えの出ない自問だった。今ここで、考えても仕方がない。邪魔をする者はいなくなった。もう、ここですべきことはない。

必要な者達が全て篝火の周りにいることを確認してから。両目を閉じた。手を伸ばし、篝火に触れる。

ソウルの流れを意識した。

火の温かさを、己の中に取り込んだ。

それを任意の者達にも覆うようなイメージを作り出し、不死街にある篝火とのつながりを、手繰り寄せる。

火守女としての経験を生かし、彼は自分も含めた集団を、転送させた。

すぐにその行動を、後悔することになる。



「貴方が、生まれた時―――」

失った片腕に、相手は布を巻き付けた。止血をしているつもりなのだろう。

貴樹にとつては、あまり意味の分からない行動だった。

どうせ、すぐに死ぬのに。

「呼吸をするために、泣いたのを憶えている。でも今になって考えると、そんな当たり前の行動も、普通を取り繕うための演技だったのか

もしれないね」

(このババア、気でも狂ったか?)

まだ余裕はあるはずだと、貴樹は肩を鳴らした。薫とフリーデは、まだ、利き腕を残している。もちろん多少の影響はあるだろうが、戦闘は続けられるはずだった。彼としても、それを望んでいる。すぐに諦めるのではなく、最後まであがいてほしい。そうすれば、より、苦しんでくれるから。自分の犯している罪を、もつと自覚してほしいから。

「私は、貴方が怖かった」

「おう、存分にちびりやがれ」

「赤ん坊のころから、得体が知れなかった。その正体を掴むまで、自分の弟に向ける感情じゃないって、悩んだこともあったな」

「お前は、俺の家族じゃない。敵だ」

「だから紛らわすように、愛した。沢山構った。期待もあったから。実は、私の思い違いなんじゃないかって」

「吐き気をする、思い出だ」

「貴くんは…」

足で、内臓を潰す。鎌を振るおうとした手を破壊する。後ずさろうとした両足を折って、顔を太ももの間に挟み、大きくひねった。

「ごきり、と首の骨が折れる。彼女は糸が切れた人形のように、その場に崩れ落ちた。顔だけは、潰すのを避けた。フリーデのものだからだ。姉のしたことは許されないとしても、フリーデのことはまだそこそこ気を遣っていた。だから、死体を痛めつけることまではしない。「精神性の、化物だよ」

彼女の体が、黒い炎に包まれる。

貴樹は即座に距離を取り、構えた。

動揺はない。なぜなら、フリーデは、しつこいことが最大の特徴だからだ。

鎌にまで黒炎を纏わせ、涙を流しながら、相手は身を低くする。

「だから、耐えられる。どんな苦しみにも。でもね、みおちゃんは違うの。あの子は、本当に普通の女の子だから。私がどんな手を使ってで

も、守らないといけないの。お父さんとお母さんに、そう、誓った。そしてこの体は、私だけのものじゃない。ごめんね。これだけは、譲れない」

(めんどくせえ)

時間がかかりすぎてもよくない気がする。今すぐにも火守女を助けに行きたい気持ちもある。だが、今の相手は少し、無視するのは厳しいようだ。

それに、疑問もだんだんと大きくなっていった。これで、いいのかと。自分は、見た目が違うとはいえ、実の姉をこんな所で殺してしまっているのか。何か、別の、もっと良い方法があるのではないか。

思考はすぐに結論へと行き付いた。

最善は、まだ他にある。薫の言葉を聞いて、確信を得た。

これは少々、手間がかかるだろう。単に殺すよりも、ずっと。

だから下田には、もう少しだけ、持ちこたえてもらわなければならぬ。

57. 合流

これは、初めて篝火の転送を行ったからだとか、そういうことではない。

確かに予兆はあった。下田は転送の途中、何かに引つ張られるのを感じた。それは抵抗すら考えられないほど圧倒的なものだ。ただひたすらに、移動が失敗しないように踏ん張ることしかできなかった。

周りには、街らしき光景が広がっていた。ただし、不死街の荒廃したものではない。生きているものの気配がほとんどないことは同じだが、そのスケールは大きく異なっていた。

想定外、二つ目。

ここは、明らかに不死街ではない。

自分たちは、広場に出たようだった。かつての住民にとっては、憩いの場だったのだろう。中央には石像が立っていて、それを囲むようにして、長椅子が並べられている。その一つ一つに、華麗な装飾が施されていた。

そういった部分を見てとつても、ここはかなり繁栄していた都市のようだ。日本の都会のような、無計画な乱雑さというものがない。全体が一つの秩序に沿って構築されており、計画、建築した者の技量を伺わせる。

グウィンが、祭祀場の篝火に何か仕掛けをしたことは確かだった。そのせいで、こんなわけのわからない場所に行き着いてしまった。

下田は動揺を抑えながら、目を閉じる。今まで自分が身につけた中でトップクラスに長い詠唱を、丁寧に紡いでいく。他の者達もまた周りの光景に圧倒されていて、邪魔をしてこようとしなかったのはありがたかった。

術を自らにかけ終えると、下田は皆に向き直った。

画家の少女が、胸を抑えている。

「どうしたの？」

「わからない。でも、とても嫌な感じがする。私達は、偶然、ここに来たわけじゃない」

「ああ」

下田もまた緊張を強めた。グウィンが何の意味もなく、転送先を指定したはずがない。

気をつける、とまた貴樹の声が聞こえてきた。

これも、予備の策ということだろうか。だとしたら、何が来る。あの大王は、もう容赦をしないと聞いていた。

じりじりとした感情を表すかのように、空の色もおかしかった。暗い、黄土色の雲が太陽を覆い始めている。まるで、別世界に来たようだった。祭祀場の外で見る空とは、まるで違っている。

「いい加減にしてくれ」

高坂が、ようやく人心地ついたかのように話し出す。その目は、下田への不信感も含まれていた。

「お前は、一体何をしてるんだ？ 急にどうしちまったんだよ」

「これは、皆のためなんだよ」

手短かに話そうと考える。

「言ったでしょ。祭祀場と僕は敵同士になったんだ。だから、味方の先生とすぐにでも合流しないとイケない」

「何の、説明にもなってない」

実織が口を挟んでくる。下田は彼女というより、その隣で静かにしている、新宮を観察した。彼女は周りを怯えるようにして眺めている。

ちとせは、じつと、下田自身を見てきていた。その視線だけは、正面から対することに躊躇いがある。だから、彼はあちこちを見ながら話をした。

「僕達は騙されてた。このままあそこにいれば殺される。僕は、そんなのを認めない。皆を、死なせるわけにはいかない」

「死ぬ？ 何言ってるんだ。俺たちは、不死身だろ」

「もう、そうじゃない」

指で、空間を叩いて見せる。

「確かめてみなよ。皆は、インベントリも固有能力もなくなっている。そして、篝火とのつながりも。グウィンが奪ってしまったから。つま

り、死んだらそれまでという可能性が高い」

下田の言葉が信じられない者は、すぐに驚愕することになる。

実織はもう、炎をほとんど出せない。呪術に対する適正をこつそり取られたから。そして他の者達も、自分自身がもはや力をなくしていることに、ようやく理解が及んだようだ。少なくとも衝撃で場が騒がしくなった。

「じ、じゃあ、もし、死んだら。どうなるんだ」

「死ぬだろうね」

あるいは。

下田は心の中で付け加えた。

魂だけが抜かれて、器の体は虚無になる。亡者へと、成り下がる。

地球の、ほとんどの人達のように。

「アキは、どうしてこんなことをしたの？」

ちとせは冷静に言ってきた。もちろん内心は穏やかではないだろう。それでも、彼女は何よりも知りたいこととして、それを選んだ。「あんたがこうしたせいで、私達は、追い込まれている。そういう考えもあると思うけど」

「……うるさいな」

「はっ」

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

そんな自分の声を無視する。

仕方がないことだ。彼女に、皆には生きていてほしい。だから、下田はその枠組みから自分を除外しようと思っていた。なぜなら、資格がないから。彼女達と一緒に仲良くする権利は、もうない。

突き放した方が、この先もきつと上手くいく。

だから下田は、ソウルの矢を己の周りに浮かべた。周囲を脅すようにして。

「もう、質問はいいよ。話自体も。ここから移動する。留まるのは危険だ。いいから黙って、ついて来て。無駄な事はしないで」

「アキ」

手を挙げて、続こうとする言葉を遮った。それは単にちとせを黙ら

せたかったわけではなく、目の端に止まったものに集中する必要があったからだ。

そこへと、近づく。石像の台座に刻まれている傷を、指でなぞった。妙な感じだ。魔術が爆発した後でも、何かに斬られたからできたものでもない。強いて言うならば、小さい豆のようなものを、高速でぶつけたような傷だ。

弾痕。

そして、集団の気配を感知した。

「誰だ！」

片手剣を握って、気配を感じた方へ叫ぶ。下田の声とほぼ同時に、建物から続々と男女の集団が出てきた。

「待ってくれ。敵じゃない。いやまさか。本当に驚いた。こういう出会いは、二度目だ」

一番前にいる男は、非常に男前だった。

先生。

下田はまた、空想の中の貴樹へ文句を言った。

黙ってたなんて、ひどいじゃないですか。

「じゃあ、君達がタカキの生徒か！ すごい。こんなところで会えるなんて。いやあ、ここでどれだけ苦労したことか……」

代表の男はウインと名乗った。信じられないことに、地球人だ。彼らはかつて、貴樹に色々と助けてもらったことがあるらしい。そして、後でまた合流することを約束し合って、別れたのだという。

彼は、かつて俳優をしていたらしい。その経歴を細かく語ろうとして、周りの者達に止められていた。彼がまとめているようなのに、どこかぞんざいに扱われている感じがする。それは、ドジをする子供に對するような扱いだった。

彼らはほとんどこちらに對して警戒をしておかなかった。というのも、貴樹と出会った時の事を反省しているからだそうだ。こうして言葉が通じていて、同じ地球の人間なのだから、協力すべきだと、ウイ

ンははつきりと言った。

その集団は、割と多種多様だ。

アメリカ人の夫婦と息子。ランドン、アリー、イアン。

南米の褐色女性、フアエラ。

理系の大学生だという、ジアンナ。

そして。

「うわあ、なんか感動だ」

「新鮮だね。ずっと前までは、当たり前だったのに」

同じ日本の高校生である、幸成と由海。

下田は彼らと握手をして、笑みを作った。情報を引き出すために。彼らの目覚めは、下田達と同じような感じだった。そして、それからのことはかなり言葉を濁して話していた。おそらく、なかなか他人には言えない事情でもあるのだろう。下田にとっては、詮索する気もなかった。

そして、貴樹に助けてもらった時のことは、詳しく聞いた。どうやら、彼は自分のソウルをウィン達に分け与えたいらしい。それで、あんな痛ましい姿になったのだろう。

これで謎は一つ解けた。彼らから、貴樹の匂いがしたのはそういうわけだったのだ。

なるほど。

結局、移動の案はなくなった。下田と画家の少女、ゲール、サリヴァーン、ユリア、リリアーネ以外はここにとどまり、ひとまずお互いの交流を優先したいようだった。彼もそれに従うことにした。もう事情は変わった。あとは、自分のできることを、するしかない。ちとせ達もまた、彼らの存在には歓迎しているようだ。ひとまずは笑顔を見せている。もちろん、それを下田に向けてくることはないが。

「あれ、ていうかなんで言葉通じてるんだろ。ウィンさん達、日本語上手いですね」

「ん？ 何言ってるんだい？ チトセ達こそ、達者な英語だ」
実織が首をかしげる。

高坂が考えるような顔をする。

新宮は、ずっと俯いている。

「…どーゆうこと?」

「つまり、すごいマジックパワーが働いているってことさー!」

「うーん」

会話を耳に入れながら、下田は室内の壁によりかかっていた。自分の手首を抑えている。背中を伝う汗を、奇跡で浄化した。

どうやら高校にいたら一年先輩らしい女性に向かって、尋ねる。

「貴方達は、どうしてここに?」

由海は呆れた様子で、ウインを見た。

「あの調子乗りがやらかして。危ないっていったのに。何か、変な城塞みたいところで、篝火を見つけてき。物は試しだとかで、触っちゃったの。そしたら、もう、ここに来てた。それからずっと探検の毎日だったよ。そっちは?」

イリーナが作り出した篝火だ。そっちの方は、もっと前から細工がなされていたということだろうか。下田は嫌なものを感じる。一応、地球出身の者達がここには集められている。共通点は見つかった。

「僕達は、逃げてきました」

「それって…」

幸成が、眼鏡を掛けなおす。彼は由海と同じ高校だったらしい。中学も一緒だったようだ。その事情を、ちゃんと、自分の経歴として納得している感情はある。

「祭礼場から、ってこと?」

「うん。色々あってね」

「手段が一つ消えたなあ」

ジアンナが、めんどくさそうに頭をかいた。彼女は、幸成とかなり仲がいいようだった。こっちの世界に来てから出会ったというが、そうではない可能性もある。

「一応の、頼みだったのに。シモダは、これからどうするの?」

「どうするって?」

「まず、地球に帰る方法を、考えないといけないでしょ。私達、目的は

「一致しているよね」

「まあ、そうですね」

「あとはタカキかあ。今あの人、どこにいるか知ってる？」

「こっちに、向かっているとは思いますが」

由海がんと、伸びをした。

「しばらくここに留まるしかないね。それとさ…」

「気まずそうに、ちとせ達と下田を見比べる。だが、その口元は少し揶揄するように緩んでいる。」

「あの、何かあったの？ 初対面の私でもわかるくらい、溝がある気がするけど」

下田はそつちの方を見ないように努力した。だが、ちとせの視線が時折向かってくるのは分かる。そういつたことが繰り返されて、由海達にも色々と察せられたのだろう。

「色々あったから」

「手助けしようか？」

彼女はもはやはつきりとにやにやしている。

「ちとせちゃんとの仲直り。任せて。こっちでも色々あったから。経験はあるよ」

「どういうことか、僕には」

「そこでとぼける？ わっかりやすいよ、君ら」

下田はちとせ達に相手をしてもらっている、イアンを見た。子供だ。高校生以上の者しかいなかった環境に慣れていると、ああいう存在が本当に新鮮に思える。

そう、子供なのだ。

頭痛に耐えきれなくなった。胸が苦しい。鼓動が大きくなってきて、いい加減、嫌になってくる。

「それで、質問ばかりであれだけ。あの人達は…」

「ごめん、ちょっと」

これ以上会話をする気力を保てなくなった。由海がまだ何かを訊きたそうにしていたが、下田はその場にいる者達に断りを入れて、家

屋を出た。中に居続けることに尋常ではない労力が必要だった。考えることが次々に出てきて、落ち着いた環境で整理をしたくなる。

少し離れた、小さい建物に入る。そこは、牢屋のような役割も果たしていた。

中に入ると、すぐに少女が駆け寄ってくる。服の袖を掴んでくる。その手が震えているのがわかった。

「顔を、出してみてもいいですか。貴方達、不審がられていますよ」
「ふん」

サリヴァーンはつまらない冗談だと言いたげに鼻を鳴らし、ゲールは黙って少女の肩をさすっていた。

「私、聞いてないんだけど。どうする？ 早めの方がいいと思うけど。姉さんも、そう思うでしょ？」

「…シモダ次第だ」

リリアーネは首を回した。ユリアは、彼を見定めるように観察している。

「ま、しかるべき瞬間でしますよ」

下田はそれから、床に転がされている二人の女性に顔を向ける。

「なんだ？」

屈むと、ヨルシカは少し身じろぎした。魔術をぶつけてくることはなくなつた。下田には効果がないし、やるだけ気力の無駄であるということをやっとなり理解したのだろう。

だが、彼女の目は、嘲りに満ちていた。あるいはもうすでに死んでいる者を見ているかのような、視線。こちらを煽るようにして、唇を吊り上げた。

「そんなに挑発しなくてもいいよ。お前は、ちゃんと、殺してやるから」

「――」
「どういふことを言ってきたのかは、何となくわかった。たとえば喉が潰れていても、表情の動きで言葉を推測することはできる。」

「ふう」

下田は息を吐き出した。その場に腰を下ろし、拳で自らの額を叩い

た。

わずかに、手は汗で濡れる。

「訳が、分からない」

その言葉に、イリーナが反応をする。

「イリーナさん？」

下田はなるべく優しく呼びかけた。

「何をそんなに、怯えているんですか？」

イリーナは額から汗を流しながら、何かを口にしようとした。しかし、直前で思いとどまるかのように、俯く。

その隣で座っている、銀髪の火守女もまた似たような雰囲気だった。

「良かった。やっぱり、そうなんです。これで確信が持てた」

先生。

うるさいと思われるでしょうけど。

彼は引きつった笑いを顔に出した。

不公平です。

これ、僕の負担が大きすぎませんか？

簡単な確認をしてから、全員を連れて外に出た。

ちょうど、ウイン達も広場に集まっている。

下田はさりげなくちとせ達の位置を確かめた。そこへ向かって、真つすぐ歩いていく。ちとせは彼と、その周りについているリリアーネ達に何かを言いたげな顔を向けたが、下田としては話させるつもりはなかった。

「どうしたんですか？」

由海が答える。

「やっぱり、もっとここら辺を見て回ることにしたんだ。これだけ人数が増えたから、行ったことない所にも挑戦できるかなって」

「確かに。見た所、由海さん達もかなりの経験を積んできたみたいですね。どこか、祭祀場以外へ行ける篝火があるかもしれません。協力

しましよう」

下田はちとせとウインの間に立った。由海が含みのある表情をする。だが、彼はそれを気にしないようにした。疑問が、次から次へとわいてくるからだ。はつきり言って、キリがない。

「それで、そちらの方達も紹介してくれるのかい？」

ウインがにこやかに、リリアーネ達へ顔を向けた。

「そうですね。とりあえずは…」

肩に、重みがかかる。

リリアーネがこれ見よがしに腕を乗せてきていた。下田の視線にも臆することはなく、彼の頬に自分の顔を近づける。

「よろしく。私とこちらの姉さんは、彼の臣下だよ。この人の命令しか聞かないから、そこところは、注意してくれると助かるな」

性根は、結局変わっていないなど思った。ちとせが瞬きをして、下田とリリアーネの距離の近さを訝しんでいる。これでは、物事がさらにややこしくなる。話が、一時的に中断されてしまった。

「なるほど。なかなか面白い関係のようだね。そんな綺麗な女性二人も抱えるとなったら、気苦労も多いだろう。察するに余りあるよ。色々。別に変な意味ではなく」

褐色の女性、ファエラがライフルの銃底でウインの後頭部をどついた。彼は頭をさすりながら、肩をすくめる。

下田は、その銃を一瞥した。扱いに慣れてそうな割に、銃自体は新品に近い。おそらく、保存する場所が良いのだろう。彼らも、インベントリを扱う。そのことはきちんと、心の中に書き留めておいた。

リリアーネが耳に息を吹き込んできてから、何もなかったように離れていった。行動自体はあれだが、別に嫌になるほどではない。むしろ、少しだけ感謝していた。これで、気分を落ち着かせることができた。彼女なりの気遣いなのだろう。

「じゃ、行こうか」

ウイン達は先導をするつもりのようなのだ。彼らが背を向けて歩き出し、ある程度の距離が開くまで待っていた。下田の前に出た高坂が、不思議そうに振り返ってくる。

「このくらいだろう。」

「待ってください」

立ち止まり、彼らは振り返ってきた。

「うん？」

「貴方達は、全員地球での記憶がありますか？」

なぜ今、そんなことを訊いてくるのかという疑問が、表情に表れている。

由海が、微妙そうな顔をした。

「あると言われればあるけど、ないと言われればないかな」

「その心は？」

「話したじゃん。君達と同じだよ。間のことが抜けてる。私の場合は、修学旅行でアメリカに行ったのは憶えてるけど、そこからどうしてこの世界で目覚めたのか、全然わからない」

「お互いに、この世界に来る以前は知り合っていたんですか？」

「どうなんだろう。私と幸成はそうだけど。そこも曖昧なんだ。でも、ここに来てから、ずっと一緒にいた。私達はもう、家族みたいなものだよ」

続いて、他の全員も頷く。そこには、お互いへの確固たる信頼と愛情が表れているように見えた。

下田は腕を組む。

「でも、平気だったんですか？」

「うん？ 何が？」

「だって一体化物が混ざってるのに、よく今まで過ごしてこられたね」

冷却されたような沈黙。

既に全身を脱力させていた下田は、標的の腕が動き始めたのを視認した。何かをするつもりだろうが、そんなことは許さない。

前傾姿勢で走り出しながら、ソウルの弾丸を放った。それに対して、相手はかわそうとする動きを見せない。その隙を与えないほどの速さで撃つたのだから、当然だが。

その隣にいた由海は、自分に血が降りかかったのを、遅れて理解し

たようだ。体が倒れ込んだのを見てから、悲鳴のような声を上げた。「ウイン！」

既にほとんど顔が破壊されている彼に対して、下田は飛びかかる。そしてインベントリから取り出した短剣を固く握り、考えられる急所全てへと突き刺した。これで死んでくれればいいと願いながら。

ウインの内臓を引きずり出したところで、線を知覚した。直後発砲音がして、下田は血まみれの体から離れる。

元軍人らしいランドンが、鬼のような形相をしながら撃ってきた。拳銃とはいえ、体に受けて弾が残ってしまったら面倒だ。一発を短剣で弾いた後は、全てソウルの塊で包み込んで、その威力を殺した。

そして、下田の右頬が吹き飛ばされる。散々に血を味わいながら顔を向けると、ファエラが今度は頭に銃口を向けてくるところだった。

むき出しになった歯を擦り合わせ、ライフルを蹴り上げる。そのままの姿勢で、自分の足と地面に魔術を停滞させた。両方が衝突し、反発する。高速で横の方向に移動した彼は、途中で呆気にとられていたイアンを拾い上げた。

「動くな」

戦闘が中断される。

全員が、喉に短剣を突き付けられている少年と、顔が血まみれの青年を見ていた。

「リリアーネさん達も、手出しは無用です」

顔を完全に治した下田は、イアンを無理やり持ち上げた。少しでも余計な事をすれば、子供を殺すと、相手の集団によく示してみせる。やはり、子供が一番だ。漏れなく全員が動揺してくれている。

「貴様……」

ランドンがうなり声を上げた。

「全員、銃を下げてください」

初めに由海が、そしてジアンナ、幸成、ファエラ、最後にランドンが、苦虫を噛みつぶしたような顔で指示に従う。唯一アリーだけが、口を押さえて腰を抜かしていた。

ちとせ達もまた、呆然としている。

イアンの喉を刃でつつきながら、下田は溜息をついた。

「貴様、何を、している？」

「ウイン、ウイン！ 嫌だ、そんな…」

フアエラが一番不安定そうだった。今にも再び攻撃してこないとも限らない。なので、下田はなるべく短い言葉で会話をしようと試みた。

「あんた達、気持ち悪いんだよ」

「何を」

「半分は、先生の美味しそうな感じがするんだ。でも残った方は違う、器がまるで亡者みたいだ。気持ちが悪い。どれだけ、あの人に苦勞をかけたんだ」

「イアンを、離して。私の息子よ！」

「黙れ」

ずきずきと、頭が痛んだ。アリーの母親らしい叫びに心のどこかが呼応している。その感覚は、正直今いらぬものだった。そういったものを全て捨てなければ、この状況を脱することができないとわかっていた。

「質問する。あんた達は、何を企んでいる？」

「気を付ける。」

「お前は、気でも狂ったのか」

「どういう神経をしてたら、あんなごちゃまぜになった化物と一緒に暮らせるんだ？ 正直、最初に会ってからずっと吐き気がしてた。」

ウインの側にいた奴も怪しい。僕達に、何をするつもりだ」

「だから、何を…」

由海ははつきりと怯えを顔に出した。その反応は見せかけではない。ちゃんとした人間らしいものを感じる。他の者も順々に確かめていって、ウイン以外の者は何も知らないということをはつきりと確認した。

下田はイアンを突き飛ばした。少年は一回転んでから、泣きながら母親の胸へと飛び込んでいく。彼女はしっかりと相手をかき抱いて、下田を鋭く睨みつけた。

フアエラが、再びライフルを向けてくる。

「まあ、落ち着いてくださいよ。冗談みたいなもんです。子供は殺しませんよ」

「殺してやる…」

「もう少し周りを気にした方がいいですよ。貴方達のリーダーだったあれ、消えちゃってますけど」

全員、ウインが倒れていたはずの地面を見る。しかし、そこには頭が吹き飛ばされた凄惨な死体はなく、血だまりがあるだけだった。

下田はあえてその場を動かなかった。これからどのような事が起こるか、観察したかったからだ。

そして大方予想通り、自分の腹に衝撃を感じた。

リリアーネ達が走ってこようとしているが、それに手を上げて止まるように促す。

『グウインを殺したのは、君だね』

最近の流行なのだろうか。

ウインだったそれは、下田の胴体に手を突っ込んでいる。首から上がない状態でも、見えない体行使して、それなりの速度で背後に回ってきた。明らかに人間ではない。グウインと同じように、そんな状態で当たり前のように行動している。

『ようやく見つけることができた。今更何ができるのかわからないけど、念のためだ』

下田にとって、かわすことは造作もなかった。それでもなすがままにさせていたのは、伸びてきた線に、温度がなかったからだ。限りなく温いと表現してもいい。殺意というものがまるで感じられなかった。だから、興味があったのだ。

相手が、何をしようとしているのか。

そして、憶えのある引力がやってきた。

グウインが発したのものよりもはるかに強力だ。自分の何が引っ張られているのかを知って、下田は息を吐いた。安堵した。

自分の腰にしがみついている、白い腕。

上下に揺らされて、必死の形相になっている女性を、見下ろした。

相手の腕に呑みこまれまいとしている。

「プリシラ」

彼女は顔を上げて、下田の表情を認識する。その瞬間、腕の力が抜けていくのがわかった。彼女の体が一気に下田から離れていく。

「失せろ」

化物が彼女を完全に取り込むと、下田に刺していた腕を引き抜いた。それからふらふらと後ろに歩いていき、倒れていく。

『反逆者に、裁きを』

てつきり、これと戦うのかと思っていた。内部のソウルの構造のせいで、完全に殺すことが限りなく難しい。だから、面倒な戦いになるかと思っていたが、相手にその気はないようだ。ワインだったものは倒れたまま動かない。

その体から、とてつもない速度で何かのソウルが飛び出していくのがわかった。だが、下田はそれを捕らえることはしない。多少の損害を取ってでも、解放を選んだからだ。

自分の周りには、いくつかの武器と、貴樹の両腕が転がっている。これで、自分のインベントリも崩壊した。

そして。

下田は、肩が軽くなるのを感じた。かつて何度も見ることになった、あの文字列。自分の固有能力が、消失している。

つまり、もうやり直しは効かないということだった。敵はプリシラを取り込んだだけで、彼が吸収したちとせなどの能力はそのままにしてくれたようだ。本来ならば絶望するべきだろうが、別の感動の方が大きかった。

体がとても軽い。呼吸が快適にできる。脳の一部を埋め尽くしていた何かが、切除されたような解放感があった。今まで術を使ってきたことによる疲労が、なくなっていく。

容量が空いたからだろう。それだけ、プリシラが存在と能力が下田の負担になっていた。今なら、使える術の量も跳ね上がっているに違いない。

右手に力を入れて、指の一つ一つを動かす。何かが変わっていると

いう感じはしない。彼女がいなくなっても、竜の力は維持されているようだった。これは僥倖だ。ほぼ元の膂力に戻ることを覚悟していた。

が、直後に響いてきた音によって、多少の余裕はかき消された。

体の奥底まで震わすような、鐘の音。

それは全員が認識できているようで、皆驚いたように辺りを見回していた。

一方で下田は、目を閉じている。少しでも、感覚するのが遅れないように。握る手はじつとりと汗で濡れ始め、つかみどころのない不安が首をもたげていた。

自分の知る限り。

歴史上、「鐘」が鳴ったのは二回だとされている。

一度目は復活を示す。

ロスリックが火継ぎの使命から逃走し、最初の火の勢いを保つことが困難になった。そこで、歴代の薪の王達が復活した。

二度目は緊急措置。

その王達までもが、使命から背を向けた。自らの玉座へと舞い戻り、石の玉座には空虚が残った。故に、王たちに玉座なし。その身が火継ぎのための道具ではないという事実を教えるために、棺から火の無き灰達が這い出てきた。

では、三度目は？

一体、何が起こる。

何が、来る。

「ゲールさん」

下田は地面に転がっている、手ごろな大剣を取った。そして、赤頭巾の老人へと、それを放る。相手はやや怪訝な顔でそれを受け止めた。

「交換です。月光を僕にください。大丈夫です。それもまあまあ良いですよ。ちゃんと戦えます」

それでもまだ、納得をしていないようだった。それもそうだ。下田が大剣を持って、一体何になるのだろう。今まで彼はその種類の武器

をまともに扱ったことがなかった。グンダを封印するための道具として、螺旋剣を利用したくらいだ。

だが、ゲールもまた何かを察知したようだった。無言で、月光の大剣を渡してくる。それから、画家の少女にもつと広場の中心へと寄るように頼んでいた。

慌ただしい動きに、リリアーネも不思議そうにする。

「何をやるの？」

「これから、短剣を作ります」

月光の刃を眺めている下田に向かって、彼女は訳が分からない、と言いたげな視線を向ける。

「はい？」

「だから、リリアーネ、ユリアさん、ゲールさん、サリヴァーン。お願いします。少しの間時間を稼いでください。皆を、守ってください」
彼女ももまた、徐々に理解し始めたようだ。鋭く遠くの建物を一つ一つ眺めていく。

下田は既に把握していた。自分達は、包囲されている。街には、今まで敵の気配などなかった。しかし、あの鐘を合図として状況は一変したようだ。

遅れて、他の者達も視認する。

家屋の間の道から。家の二階部分から。屋根から。地下への階段から。緩やかな坂道から。開け放たれた大扉から。様々な武器を持った騎士が出てきた。彼らに共通しているのは、身に付けている鎧。

その銀色に輝く鎧は、優に六十を超える数で並んでいた。後方にいる大弓兵が、矢をつがえる。斧を持った屈強な騎士が、その刃を地面に突き立てる。槍を持った集団が、先頭で横並びになった。

彼らは、旗も掲げずに、ただ広場にいる反逆者達への殺意だけを供にして、進行を始めた。

58. 死闘

横目で一瞬だけ確認すると、顔に切り傷をつけたリリアーネが叫んでいる所だった。

「まだ?」

「仕上げです。集中するので」

「はあ、しんど」

彼女は振り下ろされた斧を正確にかわした。相手の背後に素早く周り、後ろから組み付いて、首を掻き斬る。それからすぐに倒れていく騎士の体を足場にして、囲もうとしてくる複数の相手から逃れた。

ユリアはそこから少し離れた所で、鎧の胸部分へ刀を突き刺している。彼女の方が、複数への対応能力に優れているようだった。隙が生まれそうになっても、魔術で何とか対応できている。ただ、数の差が大きいので、無傷とはいかない。

ゲールは同時に複数の相手をなぎ倒していた。あの中では、おそろくもつとも腕力がある。体格も良い。ただ、それは逆に的が大きいとも言えた。最も遠距離からの攻撃を受けているのが、彼だった。特に腹の傷が酷い。出血で動けなくなるまで、あまり時間はかからないだろう。

そう、厄介なのは弓兵だった。巨大な矢を放ってくる。その重さは勢いにもつながり、半端な干渉では軌道をずらすことができなかった。だから、サリヴァーンが最も対応していると云ってもいいだろう。彼は分身を作り出して、弓兵を削り始めていた。

だが、相手もそれはわかっているようだ。徐々に兵を下げて、遠距離要員達の護衛にも回すようになっていた。そのせいでサリヴァーンの負担が大きくなる。かの法王であっても、徐々に体力が削られてきている。動きが、少しだけ鈍くなっていた。

下田は成型し終えた刃を、柄にはめた。じゆううと、掌の皮が焼けただれる。呪術を最高出力で利用し、工程もいくつか省略した。多少の怪我には目をつぶる必要がある。

本来、鍛冶というのは繊細さも要求される。急に熱くしたり、冷や

したりすれば、刃が割れてしまう危険もあった。しかし、それはあくまで普通の金属だった場合だ。月光の刃は、特別だった。絶対的な硬さを持ちながら、柔軟性にも富む。まさに、加工するためだけにあるような素材だと言えた。

風切り音が、近くで聞こえた。

下田は、他人へと伸びる線を視認する。遠くの家屋根から放たれた大矢が、広場の中心で縮こまっている母子へと疾走していた。

下田は冷たく考える。

自分は、移動の奇跡にあまり精通していない。クリムエルヒルトのように、他人を簡単に瞬間移動させることはできない。間に合わないだろう。それに、一度は敵対しかけた集団だ。わざわざこの先も必要になるであろう労力を使うまでもない。

全身のバネを使つて飛び込み、下田は吹き飛ばされた。

矢の勢いに押されて、中央の像に激突する。大きく息を吐き出した後、茫然と見てきているアリーとイアンを確認した。母親の方が、下田の体を見て口を押さえる。

「もう少し、身を低くしててください」

神経のつながりを、意識する。弾け飛んだ内臓部分の構造をはつきりと頭の中で思い浮かべる。イメージさえしつかりできれば、たとえ下腹部の右が丸ごと欠損したとしても、奇跡であつという間に治すことが可能だ。

ゲールが、一瞬だけ膝をついたのが見えた。その瞬間の間はギリギリで修正できたようだが、次の動作が遅れてしまっている。ちょうどそこに、長剣を構えた銀騎士が動き始めていた。

前へと、落ちていくような感覚で。

下田は全身の力を抜いていきながら、針のように鋭く前進した。

騎士の背後に迫ると、急に振り向いてくる。

洗練された突きを、事前に読んでいた。体を捻って軸をずらし、すれ違うようにして、相手の胸に刃を出し入れさせた。鎧を容易く貫通した月光が、効率的に相手の内構造を破壊していく。

頬の痛みを自覚する。流れ落ちる血を、舐めた。

中の上の上といった感じだろう。

彼らはおそらく、それなりに格式の高い軍団のようだ。一人一人の練度が侮れないものになっている。他の者達が対応に苦慮するのが理解できた。

首を傾げる。槍がすぐそばを通り過ぎていく。

そして、側頭部に焼けるような感覚が湧いた。よくよく確かめてみると、右の耳が無くなっていることに気がつく。

振り向きざまにソウルの太矢を異なる軌道で三つ放ち、槍を繰り出してきた相手を破壊した。

息を吐き出しながら、奇跡の光で覆う。ついでに、その光を放って、ゲールの腹部にも処置をした。彼は一度こちらを見てから、すぐに別の敵へと向かっていく。

あ、なんか。

下田は自分の中で、かちりと何かがはまったのを感じた。

すぐに他方を見る。

ユリアは既に魔術の展開を止めている。残っている数を見て、極力消耗を抑えることにしたようだ。その選択は悪くないが、対応力が減少したせいで、傷がまた増えている。彼女の額から血が流れているのが、よくわかった。

下田は、二、三体を殺しながら、接近する。ユリアの刀の軌道に合わせて、青白いソウルの塊を流した。それはちょうどいいタイミングで刀へと付与され、騎士の鎧を容易く斬り裂いていく。

「符呪は、あと十五秒維持します。切れたら知らせるなりしてください」

彼女の鼻に深くついた傷を治してから、下田は再び移動を始める。彼に向かつて、ユリアははつきりと感謝を述べることはなかった。しかし、彼の行く先の騎士達を魔術で妨害してくれた。

三人と、リリアーネはほぼ対等に渡り合っている。ほぼというのは、若干彼女が押されているからだ。そして時間をかければさらに追加されていく。

「横に飛んでください！」

リリアーネはすぐに反応してくれた。

中程度の長さの詠唱を圧縮。

放出の音節で結ぶ。

そうして、下田はソウルの奔流を騎士の固まっている所にぶつけた。青白い大きな塊が瞬きの間で到達する。相手の結束が乱れた瞬間に、前へと踏み込む。

彼が騎士の首を斬り刻むと同時に、リリアーネも相手のとどめを刺していた。彼女と位置を回転しながら入れ替わり、迫ってきた武器を弾き返す。

「失礼します」

目の前が渋滞してきたので、下田はリリアーネの肩を借りた。そこを支点にして逆立ちをし、足から呪術の炎を作り出す。跳び上がり、一斉に周囲へとまき散らした。威力にはほとんど期待していない。攪乱が主な目的だからだ。

月光の刃を、光らせる。右手の方は周囲へ散乱させ、左は刃付近にとどめておく。

散った斬撃はいくらか相手の数を晴らすことに貢献したが、当然対応される場合もある。そこで温存しておいた左の短剣を振り回し、かわそうとする相手の動きを読みながら、月光を解放する。それでも逃れた騎士は、リリアーネが対応した。

手になじんでいることは確かだった。何せ短剣は二番目に扱い慣れている。この実力と数の敵相手には、使うことを惜しむわけにもいかなかった。

そして、共に戦うのも、この四人の中では、彼女が一番しつくりきっている。

「私、君に夢中かも」

リリアーネは興奮したように息を吐き出した。

「体の相性も良さそうだね」

「そういう話はあとで」

密度が少なくなったので、最も厄介な集団を殺しに行く。弓を構えている騎士達。

ちょうど、サリヴァーンの分身が八つ裂きになっている所だった。髪を乱している本体の顔へ、回復を行った。

「眩しいぞ」

「思ってたんですけど」

サリヴァーンと同時に、腕を振るう。月光の短剣と片手剣が、別々の騎士の兜を斬った。

下田はしゃがむ。その頭のぎりぎり上を、サリヴァーンの斬撃が走った。迫って来ていた大矢の軌道がそれですらされて、下田の足元に刺さる。

「皆との方が、ずっといいですね」

「貴様は何を言っている?」

サリヴァーンが撃ち込んだ魔術に、ほぼ同じ種類の魔術をぶつける。それぞれが反発しあつて、事前に法王が考えていたであろう軌道とは大きく変化していく。それが逆に有効となり、弓兵の集団が削られた。

「僕、僕って、前衛の中でも、支援する方が性に合ってるみたいです。なんか、凄く、ぴったりはまります」

「死ぬぞ?」

下田は体をずらしながら、短剣を斜めに構えた。火花を散らしながら刃と矢が激突する。その軌道が徐々に移動していき、彼の顔を少し挟り取ってから、サリヴァーンの右上を抜けていった。

少し、気の抜けた自分を叱咤する。左手の方で受けてしまった。案の定、矢の勢いで三本ほど指がへし折れてしまっている。右の方だったら、余計な怪我をせずに済んだだろう。

戦場の流れの変化を感じ取る。主に弓隊の動きに注目をした。彼らは、もはやただ数で押す戦術が通用しなくなってきたのを理解したらしい。前衛が崩れてきている今、下田達に反撃をするためには、何をすればいいのか。既にほとんど、結論は出ているようだ。

「中央に集結! 弓は術で片付けます!」

放たれた矢を追うように、下田は魔術を爆発させた。大きな加速を得た体で、ちとせ達の下へと向かう。彼女達は未だ、進行していく状

況に追い付けていないようだ。まだランドンやファエラなどの方が動いている。

残っている前衛の騎士達も皆、殺しやすい標的へと狙いを定めた。たとえユリアなどに背中を斬られようとも、構わずに走っていく。

微妙な、ずれを感じていた。

経験や、技術は嘘をつかない。いつも通りの手順をなぞっていれば、効果をいかんなく発揮してくれる。しかし、肉体は別だ。今までは与えられた六日間の中で、最大限の効率をもって鍛えていた。休息のタイミングも考えて、儀式時には最高の体でいられるように。

今は違う。この体は相手と直接刃を合わせるのに適した作りをしていない。遠くから術で援護するのには、必要がないから。もっと早くから走り込み等をしていればよかったと、少しだけ反省した。あの六日間よりも前から。

だから、少々の無理が重なっている。予想していたよりも早く、疲労が溜まり始めているのを自覚していた。なるべく術は温存していたが、段々とそうも言っていられなくなっている。

下田は十本の結晶槍を作り出した。意識を分割し、それぞれ編隊を組んで、自律的に軌道を決定させていく。騎士の何人かは、振り向いて魔術を切り落とした。予想通りだ。守ろうとしてくる相手の隙をつくつもりなのだろう。

その一方で、本当にちとせ達を殺そうとしているのもいた。下田は大きく爆発で跳び上がり、空中からソウルの塊を落下させる。それは地面に到達すると、騎士側にだけ無数の針を飛び散らせた。もちろん、鎧を貫通するのはわずかだ。足止め程度にしかならない。

だが、それで十分だった。

彼は降り立つと、目の前の騎士の懐に飛び込んだ。相手が持っているのは大剣だ。ほとんど小回りが利かない。選ぶなら、この個体が一番だった。

鋭く息を吸い込んでから、右手で突きを繰り出す。刃は当然鎧を貫通したが、それで止まりはしなかった。鱗に覆われた手もまた金属の穴を広げ、肉を押し裂き、背中へと出た。血と臓物が勢いよく押し出

される。

良い、盾だ。

即座にその頭をソウルの弾丸で粉碎し、とどめを刺す。もはや動かない騎士を竜の腕力で持ち上げて、周りの敵へと突っ込んだ。無理やり押し込んでいきながら、盾が使い物にならなくなるまでなぎ倒していく。

槍を持つ敵が固まる所まで来ると、下田はぼろぼろになった死体を蹴り飛ばした。そして何本もの槍に突き刺されるのを確認してから、詠唱を結ぶ。

死体の中に仕掛けておいたソウルの針が、皮膚と鎧を突き破って拡散される。同時に地面を蹴り、槍騎士の背後に降り立った。少し遠くの方の個体へと、短剣を投げる。もう一本の方も、自分の背後を狙ってきた相手にぶち込んだ。

月光を散らす操作をしながら、両手を横に伸ばす。最大限の脱力を行い、二本のフアランの速剣を顕現させた。若干統率が崩れかかっている部隊の中へと突進する。

無駄はない。

仕損じることなど、ありえない。

既に、目の前の敵など見ていなかった。上空から、全てを把握していた。普通の視界と、浮き上がる視界。二つの光景を重ねて見ながら、素早く効率的に相手の急所を削いでいく。全て一撃で屠っていく。冷たい点を狂いなく突いていく。

息が切れる前に、彼へと向かおうとする気配は無くなっていた。

倒れている騎士から二本の短剣を回収すると、リリアーネが大きさに拍手をしていた。

そういえば、矢がもう飛んでこない。

確認してみれば、最後の弓兵の首を、サリヴァーンが飛ばすところだった。その隙を狙おうとしていた大剣の騎士が、ゲールによって斬り伏せられる。

一応、中央に集まるよう指示したんだけどな。

こんなもんだ、と下田は面倒そうに血を吐いた。重傷はないが、そ

れなりに攻撃を受けてしまったようだ。やはり、油断はできない戦いだった。冷静に奇跡を使いながら、計算をする。まだ、限界が来たというわけではない。ただ、これで区切りがついたと思いたかった。傷は塞げても、失った血は戻らない。

「想像以上だね」

横を向けば、近くにリリアーネの楽しそうな顔があった。頬に飛び散っている血を、腕で拭っていた。

「君さ、働きすぎ。私達の支援だけでもよかったんだけど」

「危なかったじゃないですか」

「言うねえ。ご褒美ほしい？」

「右、半分崩れかかっている建物の奥、見てください」

歯噛みする。

下田の指摘は既に、意味をなしていなかった。なぜなら、既に標的達は驚くべき速さで向かってきていたからだ。

「中央に集まって！」

迫ってきているのは、騎士であることは確かだった。だが、その様相は今までのものとは大きく異なっている。まず目に入るのが、胸にある穴だ。淵が赤くなっており、それ以外は黒い闇で満たされている。似たようなものを、見たことがあった。亡者に開いている穴。

そして鎧もまた全てが黒かった。破れかけているマントを纏いながら、その内の一体が槍を突き出してくる。

下田の顔を狙っている。わかりやすかったので、こともなげに避けた。

反撃をしようと腕を動かす。

しかし、槍の様子が一変した。刃の部分から炎が漏れ始めて、何かの前兆であるかのように、その身をくねらせた。

瞬時に四つの詠唱を重ねて圧縮し、多重の魔術防護を作った。なるべく後ろにいる全ての人を覆うように広げ、同時に奇跡の準備もする。

槍から炎が爆散した。轟音を立てながら、辺りへと牙をむく。

懐かしい、感覚とも言えた。防護の外に出ている下田は、ほとんど

の炎を受け止める形になる。自分を守ることまで考えていたら、間に合わないところだった。皮膚が焦げていき、熱風を吸い込んだせいで喉と肺が焼けていく。

奇跡で完治させると、ちゃんと皆を守れたことを確認した。

「あ、アキ」

輪の黒騎士は既に二撃目を終えている。地面に落ちた下田の片腕を蹴り飛ばすと、とどめを刺しに突きを放ってきた。その鋭さは、銀騎士よりも数段上になっている。

短剣で弾き、素早く前へと踏み込んで、相手の首を狙った。しかしそれを予期していたのか、黒騎士は地面を蹴って、味方のいる建物まで後退する。

「腕、腕が…」

実織が悲鳴のような声を上げている。彼女へ安心させるように頷いてから、再生を開始した。やられたのが右腕でよかった。奇跡を使うまでもなく、竜の力が働いて治っていく。なるべく彼女達には見えないよう、手で覆い隠した。気持ちの悪いものであることは確かだからだ。

既に、下田の周りには一緒に戦っていた者達が集まっていた。今度は、指示に従ってくれたらしい。サリヴァーン達も、理解をしているようだった。先ほどのように各々がばらばらに戦えば、乗り越えることは困難になると。

「休ませてくれないね」

リリアーネが息を吐いた。

第二陣、といったところだろう。

一番初めに突貫してきた槍の黒騎士の横に、似たような者達が並んでいる。大剣を片手に持ち、もう片方には竜をかたどった盾を構える個体。そして最も目につくのが、ちょうど列の中央にいる、巨大な剣を二本持った黒騎士だった。体格は普通の騎士と変わらないのに、まるで下田の短剣のように、特大剣を両の手に握っていた。

彼ら三人の騎士を挟むようにして、さらに大きな二つの影がある。

下田は、短剣を固く握りしめた。

背丈だけなら、グンダを少し超えている。しかし戦士らしく洗練された体つきをしていた彼とは違い、その二体は胴体部分が大きく膨らんでいた。過剰なほどの筋肉がついていそうな腕が伸び、下田の体くらしいはありそうな曲大剣を持っている。最も奇妙なのは顔の部分だ。あるべきものがなく、そこにはただ黒い球体のような物体が鎮座している。わずかに靄がかかっている、表情などがまるでわからなかった。

「何十から、五に減った。そう前向きに考えよ」

リリアーネの言葉は、正しいとは言えない。

建物の屋根に手について、華奢な巨人が姿を現した。あのヨームほどの大きさではないが、周りの建築物を優に超している。灰色のローブを着ていて、その手足の細さからも前衛向きとは言えない。

彼はちらりと篝火を確認した。もはやそこには、火が灯っていない。どうやら下田達を祭祀場から運んできた時点で、その機能は停止したようだった。せめてちとせ達だけでも祭祀場に戻した方が良い気がした。多分、ここにいるよりは、安全だろうから。

「……あまり突合せずに、守りを優先します。一体に集中して、数を減らすことを最優先に」

「はい」とリリアーネ。

「わかった」ゲール。

「ふん」サリヴァーンは渋々頷いた。

「……」ユリアは、既に自分がやるべきことを考えているようだ。

巨人が、咆哮を上げる。それはまるで、前の鐘の音のようだった。打ち鳴らすような轟音が響いた後、屋根の上に炎が吹き上がる。

それは瞬時に人の形になった。彼らは一様に弓をつがえる。炎の灯った矢を。それは一見、銀騎士のものよりも小さく、さほど脅威にはならないように思えた。

あくまで、放たれる前までの印象だったが。

上空を火矢が埋め尽くしたのを見て、文句を言いたくなった。

あまりに、多すぎる。

相手はどうやら、ただの矢を放っているわけではないようだった。

兵の数よりも明らかに多くのものが飛んできている。一度に三本は同時につがえなければ、計算が合わない。

その時点で、既に最優先で処理すべき対象を確定させた。やはりまずは、遠距離要員を潰すべきだ。

『助けが、必要かい？』

久しぶりに、ウミが話しかけてくる。

下田は無視をした。

右で魔術を。

左で呪術の塊を作る。

魔術の方は大きな球体にする。内部は柔らかくして、かつこちらを向いている方の表面を極限にまで固くする。

呪術の方は扇状にした。炎の扇。かなり古い術だ。古代の女呪術師がよく使っていたという。こちらにも柔軟性を高めて、特によく伸びるようにした。

最初に、ソウルの球体を打ち出す。それはある程度上空にまで来ると、四方向に拡散した。降ってくる矢を捕まえると、その貫通力を殺していく。たとえ抜き出たものがあつたとしても、それはほとんど勢いがなくなり、真下に落ちていった。

左手を、大きく振るう。

炎の扇は煽られながら大きく伸び、迫る矢を絡めとっていく。こちらの呪術の炎の方が、強さは上のようだった。燃えている矢が巻き込まれると、すぐに原型を失っていく。

他にも、術を使える者は次々と撃ち落としていった。だが、もちろんそれで全てを補えるわけではない。対応しきれなかった矢は、下田とユリアが張った防護に刺さっていく。

前の五体が動き始める。真つすぐこちらに突進してくる。

上の中の中？

いや、上の中の下か。

既に矢の雨は収まっている。

肩に刺さる二本を抜いてから。短剣を構えた。

そして、周りに言う。

「死守してください」

自分の身体を、光で覆った。消える直前、リリアーネ達の呆れた顔が目映る。突出しないように言ったのは確かに下田自身だが、彼はその枠組みに自分を含めていなかった。

移動先は、あの巨人だ。

下田は屋根に出現すると、すぐに走った。その時点で相手にも気づかれていない。巨人は向かってくる彼へと顔を向けると、またあの打ち鳴らすような咆哮をした。

人型の炎は、位置を変えている。下田を円状に囲むように出現していた。そして彼がかわす隙間など少しも与えないよう、無数の矢を即座に放つ。二本の短剣や、即席の魔術では到底対応できない。彼が穴だらけになるのは、ほぼ確定だった。

意識を、切り替える。

下田が一番得意なのは、奇跡だ。だが、あくまで傷を治すという点に集中している。使い慣れているものを、いつもとは違う方向性で利用するには、多少の切り替えが必要だった。

内側の圧力を解放していくようなイメージで。

全身から、白い球体状の光を発する。それは確かな衝撃を伴って全方位へと広がり、向かってくる矢を吹き飛ばした。さらにそれで終わるのではなく、撃ってきた炎達にもその光は届いた。

散々この術を見せてくれたイーゴンに内心感謝をして、自分の予想が間違っていなかったことを確認する。やはり、あれらは何かしらの術の一種らしい。実体というものはなく、術者が死ななければいくらでも復活する。

三度目の咆哮。

が、その時既に下田は巨人の足元にまで迫っていた。

大きな手が、降ってくる。巨人の攻撃をかわしてから、その袖に捕まった。相手にほとんど行動する隙を与えない時間で、顔近くまで登っていく。

瞳を狙って短剣をかざしたところで、炎の熱さを感じた。

巨人の頬から、炎が生えている。大剣を持った戦士の形をしてい

た。それは肌を蹴って、真つすぐ下田に向かってきた。

弓兵だけではなかった。どうやら、本当に軍団を出現させられるらしい。こうして近づいても、対策は十分に用意されているということか。本当に厄介だ。

下田は巨人の肩を蹴って、刃から逃れた。

そして、そこを狙われる。

真下を見ると、多くの弓が向けられているのがわかった。一方で先ほどの炎の戦士は、再びこちらへ飛ぼうと身をかがめている。

何をしたいのかは、読めた。

波状攻撃。

弓で神の怒りを使わせてから、その後の隙を戦士が突く。懐かしい気分がした。下田もそういうことを考えていた時期があったからだ。わかっていたからこそ、その術は使わなかった。

空中で身動きは取れない。そういう仮定の下でしか、今は効果がないのに。

自分の足と、空中に、ソウルの塊を設置する。そして爆発後の衝撃にも備えて、さらに奇跡の光も纏わせておく。

足で、塊を踏む。直後の衝撃で飛ぶ。それをいくらか繰り返す。そうするだけで、もう彼は巨人の後頭部にまで移動できていた。

ついてこれているのは戦士だけだ。放たれた矢は、既に全てが先ほども下田がいた場所を通り過ぎている。そして肝心の戦士も、完全に下田を迎撃できる体制には入っていなかった。

月光の刃を光らせる。

留めておき、短剣の先へと設置した。見た目だけなら、柄が短い長剣といった感じになった。右手の筋肉を駆動させ、一息で横に薙ぐ。

やはり、その切れ味は抜群だった。たとえ巨人が自身に何らかの魔術的防護を施していたとしても、軽々と裂いていっただろう。ほとんど何の抵抗も感じることなく、その太く長い首を断つことに成功した。

下田へ向かって飛んできた戦士が、崩れていく。下に鬱陶しいほどいた弓兵も消えていった。空中で巨人の首を蹴り、地面に転がす。

なぜか、妙な感じがした。

これは、自分の身体があまり鍛えられていないことと関係はない。いつもよりも思考からの行動が上手くつなげていないようだった。結果として成功しているのだが、常に綱渡りをしているような感覚がある。手の汗を拭いながら、息を吐いた。前の銀騎士戦でもそうだ。想像したよりも負傷が重なっている。

下田は疑念を脇に置き、すぐさま中央の広場へと戻り始めた。

離脱していたのはわずかだったが、そっちの戦況も随分と変わっている。体躯が膨らんでいる曲大剣の騎士の一体は、既に倒れている。黒騎士の内、槍と大剣の二人もちょうど胸を剣で貫かれた所だった。そしてサリヴァーンの片腕が焼き潰れていくのも見えた。

リリアーネの頬に、長い切り傷がついている。

ゲールの大剣が欠けてきている。

ユリアの動きがぎこちない。どうやら足を、やられているようだった。地面に血が溜まり始めている。

彼女達の包囲を抜け出して、もう一体の黒い球体頭の戦士が突進していた。ちとせ達の、いる方へ。

その頭へと出現した下田は、叫んだ。下にいる戦士に、自分の存在を知らしめる。

立ち止まり、巨躯が悶え始めた。曲大剣を持っていない方の手で、しがみついている彼を引き剥がそうとしている。下田は巧みに移動しながら、黒い球へと何度も短剣を刺した。

ソウルの流れを見て、もう察しは付いている。ここが一番脆い。なぜならただそこにあるだけで、漏れてしまっているのだ。直接破壊すればどうなるか。きつと、たくさんまき散らしてくれるに違いない。

最後の方は無理やり押した。戦士の太い手が何度も叩きつけられて、彼の両足を潰した。そこへ奇跡を使う時間も惜しい。そして球体を完全に破壊するまで、しがみついたままだった。

戦士が地面に倒れる。その遺骸を治した足で蹴った。乱れた感情は後に残らないようにしなければ。

ちとせ達は、その光景を身を縮めながら見ていた。特にイアンの怯

えようは露骨なほどだ。そこでようやく、下田は自分が色々な血にまみれていることに気がついた。ランドン達は銃を向けてくることはないが、下田から少しでも離れたがっているようにも見えない。

そしてそれは、生徒達も似たような感じだった。無理もないだろう。今の下田はもはや別人のようだった。彼らの知る下田とは、もうほとんど乖離している。

ちとせの、得体のしれない何かを見るような視線を最後に、戦場へと振り返った。

戦っているのはリリアーネとゲールだけだ。他の者達は休んでいる。負傷と疲労が重なって、これ以上続ければ命の危険にもつながる。

下田は小走り、残った二本の特大剣を握る黒騎士へと向かった。

正直、出鱈目としか言いようがない。あのゾリグが持っていた剣にも匹敵するほどの質量を、二本。片手づつで運用している。案の定その攻撃の圧は、接近を容易にさせてくれない。

おまけに、その特大剣には呪術が付与されているらしかった。常に炎を纏っている。槍にやられたのと同じように、任意のタイミングで放出できるらしい。それもまた、近接を殺している要因になっていた。

こういう相手には消耗は避けられない。必要なのは、支援役だ。

ゲールへ向かった炎に、反詠唱を行う。分解した後、彼の傷を治療した。そしてリリアーネの方へと向かうと、手で止められる。

「顔の傷なら、いい。君を無駄に消耗させるのは、良くないからね」

「でも、もつたいないですよ。綺麗な肌だったのに」

「へえ。どうも」

確かに、頭の奥の痛みは増してきていた。一番消耗する移動の奇跡を、既に数回使ってしまった。その全てが全身を対象としたものだ。プリシラに容量が割かれている頃だったら、とつくに倒れていた。他にも治療と、魔術や呪術へ相当気力を消費している。

だが、温存できるほど相手も甘くはない。

初め、黒騎士は片方の剣を肩に乗せ、もう片方を振り回しながら、距

離を詰めてきた。やや余裕のある足取り。その間合いに入れば、動きは一変するだろう。

下田は予備動作も見せずに、月光を放った。わざわざ短剣を振るわなくてもそういうことができるように鍛錬はしていた。

相手がそれを弾くのを確認すると、不可視化させておいた呪術を発動する。

炎の鞭が、騎士の手足に絡みついた。

同時に、ゲールが左へ、リリアーネが右へ展開する。彼女達への対応を、騎士は特に焦つてやろうとはしていないようだ。腕力で鞭を引きちぎり、左右へと大剣の突きを入れる。

ゲールは真正面から受け止めて、リリアーネは軽く受け流した。だが、それで終わらないのはわかりきっている。大剣の炎が荒ぶりはじめて、放出の準備に入る。

だが、それは結局起こらなかった。

見えない体を解いた下田は、両の特大剣に紫色の光を流している。沈黙の禁則を符呪として利用していた。今の相手が持っているのは、ただの大きな武器でしかない。

下田が飛ばしたソウルの弾丸を首をひねってかわし、リリアーネの突きを身をよじって避け、ゲールの叩き潰しを受ける。しかし、そこまです。その騎士が卓越した技量を持つのは確かだが、対応できる攻撃にも限界があった。

投げられた月光の短剣が、光を発する。放たれた高速の刃は、器用に味方だけを避けて辺りに飛び散った。

体勢が崩れた黒騎士の胴に、青白い速剣の刃が掠めていく。鎧を見事に裂き、血が飛び散った。さらに追い打ちでゲールが大剣を振り下ろし、騎士の半身を潰した。

リリアーネが首に三度刃を入れて、深呼吸をした。それから大げさに、腰を下ろしている下田へと倒れ込んできた。彼は腕を突き出しながらそれを受け止めて、ゆっくりと横に転がす。

ゲールは大剣を地面に突き立てて、目を閉じた。

下田は一息で立ち上がって、サリヴァーンへと駆け寄る。どくどく

と血が漏れ出ている火傷を覆うようにして、腕を再生させた。そして同じく休んでいるユリアへと向き直り、足が完全な機能を取り戻せるまで治療する。

「恩に着る」

冷静な女性の声に、彼は顔を上げた。ユリアはそれに視線を合わせることなく、すぐに立ち上がってリリアーネに歩いていった。

「ですって」

サリヴァーンへと微笑む。

「何だ？」

「いや、ユリアさんはちゃんとお礼を言えるよくできた女性だなと思っ」

「勘違いをするな。貴様らとは、我がイルシールを奪還するまでの関係だ。本来ならば、王と言葉を交わす権利すら与えられない」

「はいはい」

「だが」

法王は興味深そうに下田の瞳を覗き込んだ。

「貴様の道具としての有用性は認めよう。共に来れば、相応の地位を約束する」

「はいはい」

周りをもう一度確認してから、能力を切った。今のところさらに増援が来る気配はない。少しでも自分の意識を休めておいた方が良さだろう。

状況が落ち着いても、他の生徒達は固まっていた。その気持ちはわかる。整理するので手一杯はずだ。正直、前までなら、どんな危険でも真面目に受け止めることは難しかった。不死でなくなった今は、もう違う。久しく忘れていた真の恐怖が、この戦闘中彼らに何度よぎったことだろう。

「がくん、と視界が動いた。」

「どうしたの？」

リリアーネが訪ねてくる。

下田は、自分の膝を見下ろした。

明らかに震えている。力を入れても、正常に動いてはくれなかった。腰も同じだ。疲労のせいかとも思ったが、段々と自分の中で膨らんでいた感情を把握する。

ちとせ達を、馬鹿にはできない。

自分はどう考えても、怖がっているようだった。何に對してだろう。それは決まっている、戦いの全てにだ。何度もそばを通り過ぎた、死に對してだ。その怯えが、戦いにおける動きにも影響を及ぼしていた。結果は良かったとしても、自分の力があまり発揮できていないのは確かだった。

胸の中が、やけに開けているような気がする。空っぽだ。その開いた穴に、冷たい風が吹き込んでくるような。わかっていても、認めたくはなかった。

死ねばそこで終わりという事実は、下田にも大きな衝撃を与えていた。失敗することができないという重圧が、彼の動きを固くさせていた。プリシラが離れてから、ずっと、万全ではなくなっていたのだ。

そう考えれば、今までの自分の戦いは、本当に、ゲーム感覚でしかなかったことがわかる。当たり前だろう。いくら死んでも、失敗してもやり直せるというのは、それだけ異常なのだ。ならば先ほどの戦いは、まさに死闘と呼べるものだった。相手を犠牲にして自分を生き永らえさせる。そういう、緊張が常にあった。だからこうして乗り切れたことに、想像以上の安堵を感じているのだろう。

息を吐いて、心から言った。

「疲れた」

「そうだね」

リリアーネが傍に座り込む。

「きつかったな。こうしてヨルシカを捕らえて、グウインを君が殺した時は勝ったも同然だと思ってたけど、上手くないかね。まだまだ、邪魔な存在はいるし」

「疑問だったんですけど」

「うん？」

「リリアーネとユリアさんは、闇の時代を求めているんですね。と

いうことは、深淵に迎合するってことですか？」

「シモダの言葉を、」

ユリアが刀の手入れを終えて、鞘に納める。その冷たい瞳が彼に合わせられると、ほんの少しだけその光が和らいだようにも感じられた。

「どう解釈するかにもよる。どちらにせよ、火を強奪する計画はある。だが深淵が来たとしても、最大の障害が残っている」

なるほど、この人達は。

ユリアは表情を引き締めた。

「かの存在がやってくる。私とリリアーネは一度しかお会いしたことはなかったが。それだけでも十分だった。あれは間違いなく邪悪だ。同じ志があるとは思えない。全てを呑み込むことしか考えていない。害になる。我らが望む時代には、そぐわない」

「そちらも、一枚岩ではないんですね」

下田は自分の中の恐怖がさらに酷くなったのを感じた。思い出したくもない。ユリアとリリアーネはあのウーラシル達に抗うつもりだ。それがどれだけ、無謀なことがわかっているのだろうか。わかっていないのだろうか。言葉を聞いた限りでは。

まあいい。そこは考えなくていいのだ。先生に任せる。

篝火を見やる。

遅い。

今どれだけ経ったのかはわからないが、未だに合流できる気配がない。もしかすると、貴樹側にも何か不測の事態が起きたのだろうか。あるいは、ここに辿り着ける手段がない可能性もある。そもそも不死街で合流する計画だった。あちらは今も、そこで下田達を探しているのかもしれない。

火守女は、所在なげに佇んでいた。なんとなく彼女が気になって、下田は近づいた。

「ちよつと、いいですか？」

「は……っ……」

彼女の片目を感じる。貴樹のソウルが残っている。そしてそれ以

上に、含まれる強烈な感情が伝わってくるようだった。それは彼女の中にある薪の気配よりもはるかに大きい。執着とも表現できるほどの情が、込められていた。

その熱さに呑み込まれてしまわないよう、視線から外した。

「えっと、とりあえずは安心してください。先生も、貴樹さんとも合流する予定です。だから、あの、大丈夫ですから」

「これは、」

火守女は少しの間言葉を詰まらせてから、続けた。

「これはあの方が、指示したことなのですか？」

「うん、まあそうですね。ほとんど、僕のおかげみたいなものですけど」

冗談めかして言っても、彼女はより苦しそうに顔を歪めるだけだった。

「また……、あの方は何かを犠牲に」

答えずに、その感情の動きを観察した。

下田は脳が揺れているような錯覚に陥った。

凄いいことだ。貴樹が火守女を愛しているのは十分すぎるほどに知っている。ああいう人が自分を犠牲にしてまでも、守ろうとしてくれるのなら。どんな冷たい心でも、溶かされていくに違いない。

愛情に時間は関係ないという、言葉もあるが。下田にとつてそれは異常に難しいことのように思えた。なぜなら、彼と火守女は違う世界の者同士だからだ。そこにはどうしたって、感情を超えた隔たりがあるはずなのに。それでも真摯に情を向け合う関係性が、とても輝いて見えた。

「で、どうするの?」

リリアーネが戻ってきた下田に向かって言った。

「タカキを待つ?」

「どうでしょうね。ここに留まるのは良くない気がします」

「正直、あの人とは微妙な感じだから、いいけど。君が間に入って取り持ってくれると、助かるなあ」

「努力します」

「だが、どこへ行く？」

サリヴァーンは少し離れた所にいるちとせ達を、嘲るように見た。「あのような荷物を抱えて、移動するの？ 切り捨てるのなら賛成だが、貴様がそうしないことはわかっている」

「まあ、そうですね」

彼女達とは未だにまともな会話をできていなかった。下田の意見に、反発もしてくるかもしれない。そうなった嫌だ。と、疲労の溜まっている頭で考えた。

「もう少し、ここで休みましょう。全員の整理がついてから、行く先を決めます」

「さんせーい」

リリアーネが腕を伸ばした後、意味深に笑いかけてくる。

「じゃ、親交を深める時間にしようか。あそこにいる、チトセとも話したいことがあるし」

「はあ」

めんどくさそうなことになりそうだと、下田は能力を再発動した。

それは、あくまで保険のようなものだった。

鐘と共にやってきた軍勢は既に全滅している。

そういう、都合の良い思い込みを補強するためだけのつもりだった。

近づいてきている存在を感知した瞬間、下田は目の前が揺れるのを感じた。それは先ほどの恐怖や、火守女の情に対する感動とはまた大きく違っていた。ただただ、とてつもなく大きな衝撃を受けた時の混乱が、一瞬状況判断を遅らせた。

「全員、構えてください」

言葉をまともに紡げたのが、自分でも不思議だった。

いや、混乱するな。

下田は気を落ち着けようとする。

今の自分は冷静じゃない。

何せ、今度はたった二体だ。一番怖いのは多勢で押されること。こちらは自分も含めて五人いる。双特大剣の黒騎士だって、人数差には

勝てなかった。緊張しすぎることはない。それでいいのだ。

下田が見ている方向へ、他の者達も視線を向けた。

それに、敵ではない可能性もある。少ないが、もしかしたら先生と彼の仲間かもしれない。その二つの反応は、急いではなかった。余裕のある速度で、下田達へと向かってきていた。

彼の期待は、すぐに裏切られる。

さらに建物が密集している下の階層へと続く階段。そこから、彼らは姿を現した。

まず目に入るのは、落ち着いた暗さを含んでいる金。

そのどちらもが、全身金色の見た目だった。だがそれでいて派手過ぎず、滑稽な印象になることもない。その色が違和感なく似合うような、威容を誇っていた。

片方は、かなり大きい。下腹が膨れた、珍しい形の金鎧を着ている。少し垂れて膨れた乳房の形まで再現されている。そして兜は、微笑をたたえた聖母のような表情を形作っていた。そこまで見ると、それは兜や鎧ではなく、元からそういう形の生き物なのではないかと思えてくる。

そしてもっと異様なのは、それが持っている武器だった。下田は今まで、それなりに大きな得物を目にしてきた。ゾリグしかり、先ほどの黒騎士しかり。しかし、あれはそのどれよりも大きかった。下田を三人分くらいはまとめて潰せそうな金鎚。見ているだけで、その迫力に押し潰されてしまいそうになる。

残るもう一体は、普通の体格だった。とはいえ、下田よりはずっと上背があるだろう。

両肩、そして腕から手甲に至る部分は金属が重なりを見せ、端の部分が刺々しい形になっている。そして獣の顔を模した黄金の兜、頭頂部分から伸びるまるで髪のような赤い房。それらが合わさって、獅子のような印象を与えてきていた。

右腕に、鳥肌が立ったような気がした。

黄金獅子の騎士が持つのは、槍だ。防具と同じく金の十字槍。下田は見ただけで、その武器の質を理解した。その雰囲気は、祭祀場の工

房で祭られていた月光の大剣を見た時と、似ている。それ以上かもしれない。

大きい方の、兜に彫られている口が動いた。

「あれか？」

その目は、真つすぐ下田に向けられている。

「の、ようだ」

獅子の方が、槍を地面についた。すると、やや黄色も混じった橙の閃光が弾けていく。ばちばちと狂暴な音をたてながら、槍の刃に宿った。

意味もないのに、下田はまた篝火を見た。まるで今にもそれが復活して、ここから逃げる道を用意してくれるとでも言わんばかりに。自分達を、あの二体から少しでも遠くへ運んでくれると、期待するかのように。

異常に固くなっている首を動かして、何とか騎士に視線を戻した。

「反逆者に裁きを」

一度でもそれから目を逸らしたことを、後悔する。

数秒にも満たない時間で、既に槍は目の前にあった。

ああ。

下田は単純な感想を抱く。

自分は殺される。

彼の体は、一瞬でそのほとんどを失った。

鮮やかな雷の槍によって。

気がつくど、どこかの空間に立っていた。

下田はできればそのまま倒れたかったが、立ち続けた。

一人ではなかったからだ。目の前に、四人が横並びになっていた。彼らは下田を責める風でも、諦めている感じでもなかった。それぞれがその性格に合った立ち姿と表情で、彼のことを労わるように眺めていた。

下田は、静かに涙を流した。

「ごめん、みんな……」

「ま、よくやったんじゃないやねえの。お前にしては」

草野が真面目腐った仕草で頷いた。

59. 下田 対 オーンスタイン、スモウ

「褒めてやらんこともない」

草野の頭を、隣にいた芳野が叩いた。

「いだっ」

「何偉そうに言ってるの。お前、何もしてないじゃん」

「んだよ。せつかくいい感じな流れになってたのに。空気読めてねえな」

「それは草野じゃん」

久慈も突っ込んでから、下田に笑いかけてくる。

「本当に頑張ったと思うよ。ありがとう。ちとせが寂しくならぬようにしてくれて。やるじゃん。下田になら、任せてもいいね」

「でも、でも」

彼は涙を流すばかりではなく、子供のように嗚咽を漏らした。視界が歪んで、もはや懐かしい仲間達の姿をよく認識することができない。

「僕は、みんなを助けることができなかった。みんなは、僕を信じてくれたのに。何も、できなかつた。いいように騙されて……、結局」

「下田は、自分ができる限りのことを、したんだと思う」

国広は元気づけるように微笑んでくれた。

「俺が抱いた疑念を、ちゃんと事前に話しておけばよかった。祭祀場を信用しちやいけないうつて。でも、怖かつたんだ。もし本当にそうだったら、俺達には希望はなかつた。そんな状況を、下田はひっくり返したんだ。凄いことだよ」

「ひっく、うう……」

ただただみつともなく泣きながら、内心では自身への嫌悪が強くなっていた。本当に、卑怯な奴だ。自分を騙すことばかり上手くなつていく。

「もう、どうしようもないよ。せつかくここまで来たのに。これ以上どうすればいいのか、わからない」

下田は頭を抱える。

そして俯いた視線の先に、手が伸びてきた。顔を上げると、草野が不敵な笑みを浮かべている。非常に郷愁にかられるものだった。授業をさぼる時とか、ちよつとした悪戯を仕掛ける時に見た顔だ。何度も見た、表情だ。

「今までだって、壁はあつた。そうだろう？ それでも彰浩は、乗り越えてきたんだ」

芳野は腕を組んで、大きく頷く。

「普通なら、諦めるのにさ。続けてこられたんでしょ。見直したよ」

久慈は優しく、下田の肩を叩いた。

「でも、前とは違って、今は一人じゃない。私達がいる」

国広は力強い瞳を、下田の顔に向けてくる。

「俺達の力も使ってくれ。託すよ。皆の無念を……、晴らしてくれ」

既に、芳野の探知能力は利用していた。もし他の者達のも使えば、かなり、戦略の幅は広がるだろう。打開の一手になり得るかもしれない。

草野の手を、下田はしばらく眺めた。色々な感情がごちゃごちゃに混ざり合っていた。どうにもならない悲しみと、たとえ生死の狭間の中でも、彼らと会えたことの喜び。そんな皆と協力できるという、懐かしさと嬉しき。

そして。

いつの間にか、短剣を握っていることに気がついた。特に驚きはなかった。ここはそういう、空間なのだ。「外」では、まだ時間はほとんど経っていないのだろう。

そのまま下田は流れるように、短剣を己の片目に突き立てた。

草野達は驚いて、身を引く。

しっかりと刃の先でかき回し、眼球を執拗に破壊していく。血が頬を伝い、顎の先から地面へと落ちていった。

「彰浩……っ？」

戸惑いの声を上げる草野を視た。

どうしようもない笑いが、こみ上げてくる。

「あはは……」

わかつてはいた。

あり得るはずがないのだ。

「凄いよ。本当に、凄い。お前は本当に、誰かを騙すことが得意だな」
「何を、言ってるんだ」

国広が本当に理解できない、という顔をしている。正常な片方の視界でそれを見た。

思わず感心もする。

「もういいよ。上手いなあ。こういう状況で、草野達がこんな形で出てきたら、思わず、言う通りにしちゃうかもね。でもさ、わざとなの？」

下田は、狂暴な笑みを浮かべた。刃で刻まれた片方の目に触れる。

「これ全部、空っぽなんだけど。表面だけ似せて、どういうつもり？ さすがに怒るよ。それは彼らに対する侮辱だ。隠れてないで出て来いよ、ウミ」

短剣を走らせ、素早く全員の首を掻き切った。実体はないはずなのに、草野達だったそれらはちゃんとした形で死んでいく。そして全員の死体が、やがて溶けた。それらは一つに集まっていき、また人間の形を取り始める。

いや、人間ではない。

臀部から、尻尾が生えていた。

「あかさ…」

「まあまあ。そう怒らないでください。シモダさんは本当は優しい方だと、私もわかってますよ」

「その姿だと、勢い余って殺しそうなんだけど」

ウミは、ヨルシカの姿をしていた。

その美貌を綺麗に歪ませて、卑しい笑みを浮かべる。

「へえ。本当に？ 本当に、そういうつもりなのかい？」

「そっちの問答に付き合う気はない。ほんと、油断できないな。結局は僕の体目当てってわけだ。宿主がどうか言ってくれに。成り代わる気満々じゃん」

「ちよつと、そんなこと言わないでよ。あたしは、全部、アキのことを

思って行動してるんだから」

今度は、ちとせだ。

「どこがだ？」

「もう、アナタの手に負える事態ではなくなっている。負けるよ？
確実にね。だから、助けようと思ったんだ。ワタシがもつとアキヒロ
の奥底に入り込めば、力を得られる。器としての限界を超えた、四つ
目の意識が誕生する。それがどれだけ戦いに影響を及ぼすか、わかっ
てるだろうか？」

「またその話か。嫌だつて、何回も言ってるはずだよな」

「でも、彰浩には死んでほしくないの」

「おい」

たちが悪かった。

それは、入院していた頃の姿ではない。

まだ働いていて、家事もたくさんこなしていた頃の母だ。使い古さ
れたエプロンを着て、腰に手を当てている。こちらを心配しながら
も、少しだけ怒っているという表情は、まさに瓜二つだった。

「アナタが生き残るためには、もつと、強くなる必要がある。その助け
をしようと思ってるんだ。悪い話じゃないだろうか？」

「論外だ。消えろ」

相手の企みはとつくにわかっている。自分でも言っていたはずだ。
これ以上脳に膿が浸食すれば、下田は取り返しのつかないことにな
る。おそらく、死んだも同然になる。それだけは、容認できなかった。
母の姿をしたウミは、肩をすくめた。

「大丈夫かい？ アナタつて別に、自殺が好きなのでもないはずだ
けど」

「お前は、ちよつと勘違いをしてる」

下田は自分を鼓舞するように、胸を叩いた。

「別に、勝たなくていいんだ。時間を稼げればいい。先生が来るまで、
持ちこたえるだけでいい」

「ふうん。じゃ、頑張ってみるといい。ワタシはいつでも歓迎するよ」
「待て」

どろどろに崩れたウミに向かって、背中を向けながら言う。

「うん？」

「時間を、作ってくれたのはありがたかった。僕は、偽物だったとしても、皆の前で懺悔することができた。おかげで、色々整理できたよ。ありがとう」

「言葉ではなく、行動で示してくれたらいいんだけどねえ」

「ばいばい」

ウミもまた、手を振ったようだった。

「健闘を祈るよ」

口が辛うじて残っていたのは、僥倖だった。
「太陽……」

特徴的だったのは、その詠唱の一部が、今でも意味の通じる単語だったことだ。大抵の詠唱は、直接単語を言っても効果がない。これはおそらく、術的土台が作られた時代と今では、詠唱に関する言語体

系に大きな差異があるためだ。

だが、その中においても、「太陽」を意味する言葉は、変わっていないようだった。古代より、ただ一つの意味で使い続けられてきた。

太陽の光の癒し。

存在する治療系の奇跡の中でも、最高峰の術をかけていく。

下田の残骸の周りに、山吹色の陣が広がる。転がる全てを覆いつくすようにして、眩しい光が散っていった。

一番治りの遅い右腕から先の部分も、一秒ほどで完治する。そして、半身を起こす。手で目を覆っていたちとせが、ちようど顔を完全にさらすところだった。涙で汚れている、顔を。

「うそ……、アキ……」

「そんな。このようなことが」

イリーナも呆気に取られているようだった。今まさに下田へ奇跡を施そうとした、という体勢のまま固まっている。

当たり前のように自由になっている彼女へ、疑問を抱きかけた。しかし、すぐに答えは出る。自分は一度死んだようなものなのだ。固有能力が効果を切らしても、不思議はない。

彼はこの街に出てから、ある術を最初にかけていた。

惜別の涙という。

これは、瞬間移動の術と並んで、その習得に困難を極めたものだった。もし、即死するような傷を受けたとしても、一度だけ、死を前に踏みとどまることができる。その効果の凄まじさに違わず、気力の消費も膨大だ。

もう、これを使わせられた。

半分ほどの気力が、一気に持つていかれたのを感じる。それに加えて、全身の治療もした。あとどれくらい、術を扱えるか。限界が来るのはそう遠くないように感じる。

立ち上がると、異様なほどの吐き気を覚えた。それはきつと、大術を使った後の反動だけではない。死から辛うじて舞い戻ったという、重い事実が削られただけではない。

「王。我らの王よ」

ユリアが、こちらに向かって頭を垂れていた。右肩はぐっそりと持っていていかれている。骨が剥き出しになっている。また左足も滅茶苦茶に潰されていて、既に戦える状態ではないことは明白だった。

だが彼女はまだ、刀を握りしめている。

「お逃げください。御身以外を全て捨て、少しでも遠くへ。どうか、我らの大願を叶えてください。貴方さえいれば、続きます。どうか……」

画家の少女が泣き叫んでいる。自らをずっと守ってくれていた存在へと走り寄ろうとする。しかしその途中でサリヴァーンに拾われ、乱暴に放り投げられる。

ゲールの首を上に掲げると、獅子は雷を放った。それが貫通した首級は、一瞬で原型も留めない塵へと変わっていく。司令塔を失った元奴隷騎士の体は、既に穴だらけになって捨てられていた。そういう結末が、似合いだと言わんばかりに。

同時に、サリヴァーンの上半身も巨大な槌に潰された所だった。もし法王が何も行動しなければ、そうになっていたのは画家だった。

「あく、もう。やだやだ……」

下田は自分の武器の状態を確認した。片方は無事だ。当たり所がよかったのか、柄部分にしか損害は見当たらない。つまり、あの雷の槍をともに受けたのは、もう片方の短剣だったのだろう。

月光の一振りは、無残に破壊されていた。柔軟性に富み、幾度の衝撃にも耐えていたその刃は、粉々になっていた。

先生。

下田は喘ぐように呼吸する。

お願いします。

早く、来てください。

お願いします。

早く……、はやく。

何とか、食らいつきますから。

全霊をもって、貴方の大切な女性も守りますから。

リリアーネが、こちらを振り返っていた。下田の姿をその瞳に焼き

付けるかのように。大きく目を開いて、じっと見てきていた。その表情は波一つない。ただその口元だけが、少しだけ緩んでいた。わずかに動いて、何かしらの言葉を形作る。

逃げて。

彼女の首が飛んでいく。地面に転がったそれに対して、十字槍を振り切った獅子の騎士は少しも注意を払わなかった。その視線は、立ち上がった下田に向けられている。

出血で倒れたユリアから、透明な刀を拾い上げる。止血も行う。

下田もまた、相手を直視した。そうするよう、努力をした。

「灰というのは、存外、稚児に近いようだ」

金色の巨漢はつまらなそうに槌を担いだ。

「大王様を弑したのは、他にいるかもしれない」

「その」

横にいる獅子は、下田から目を外し、手を地面についているヨルシカに顔を向けた。彼女は視線が向けられたのを理解する間を作つてから、大げさなほどに、肩を震えさせた。下田の距離からでもわかるほどに、全身を恐怖で強張らせていた。

「婢女。貴様の体たらくには失望を通り越し、虚を感じるのみ。だが、相応の罰は受けさせる。その体、忌まわしき血の全てを吐き出させ、清浄なものに替えてやろう」

「は……」

ヨルシカの声も、押し潰されたかのように萎えている。

「も、もうし、もはや、何の、申し開きもございません。で、ですが、どうか御慈悲を。オーンスタイン様……」

下田は、妙な納得をしていた。

彼女が絞り出した名には、憶えがある。

竜狩りオーンスタイン。

グウィン王直属の四騎士。神代の頃、竜との戦争が全盛を迎えていた時、大王の下でその武を遺憾なく発揮した者達。その中において、長を務めた傑物。記録によれば、名も知れぬかの長子よりも多くの竜を屠つたとされている。はるか昔に起きた大戦で死んだという説が

大半だったが、たった今覆されたわけだ。

では、横にいる巨体の素性にも察しがつく。

処刑者スモウ。

神代の後期において、ようやくその名が記され始めた。その残虐さと力で、多くの王家の敵を刑していたとされている。オーンスタインと組み、共に戦うことが多かつたらしい。

彼は、あまり予想をしていなかった。考えないようにしていたというのが、正しいかもしれない。

老いていたとはいえ、神とも称される大王。あの六日間の中で戦ったグウィンよりもはるかに強大な存在が、二体もいるとは。誰だつて、考えたくはない。

詐欺のようなものと、下田も考えていた。普通、王様が一番強いのではないのか。都合の良い考えなのはわかっている。それでも、強かったのだ。あの老グウィンは、最後を飾るにふさわしい実力を持っていた。ラスボスだった。

それなら、目の前の存在は何なのか。

裏ボス？

続編へと辻褄を合わせるための、デウスエクスマキナの舞台装置？
もつと、理不尽な何かだ。

右手でユリアの閻魔を構える。その刀身に沿うようにして、左の月光の短剣を擦らせた。薄い緑の光が一瞬だけ強まり、静寂の中へと溶けていく。自分の精神もまたその状態に合うようにしようと努めた。

状況は、最悪ではない。

自分は生きているし、ユリア以外の戦える者達が死に絶えただけに過ぎない。

いや、正しくはないようだ。下田は短剣で片目をそぎ落とした。あの一瞬のウミとの対話と同じように。そして、リリアーネのソウルがまだ彼女の遺骸に留まっていることを把握した。

彼女もまた、囚われているらしい。完全に死にきることができない。治療すれば、きつと、息を吹き返すのだろう。だが、今それをしたところで意味はなかった。そもそも、相手がそうさせてくれるはず

がない。

ちとせ達が悲鳴を上げた。下田から思わずといった形で身を引く。擬態は既に完全に解いている。半身を膿に包まれた醜い姿がさらけ出されていた。些細な術を使う容量すらも、惜しい。何もかもを捧げなければきつと、一瞬で全てが終わる。

『何もかも？ 嘘つき』

「黙れ」

それはウミに対してだけの声ではなかった。ちとせ達へ。空気をも押しよけるようなスモウの金鎚へ。雷が走っているオーンスタインの槍へ。痛いほど胸を叩いてくる心臓へ。自分が最大限の集中をするために、あらゆる雑音を拒絶した。

オーンスタインはまだ、ヨルシカの方を向いていた。スモウは画家の少女に注目している。彼らにはそれぞれ、優先したいと考えている目標があるようだ。そこには、下田は含まれていない。意識にすら、上っていない。

「決闘を」

発した言葉で、相手の注意が多少向いたのを感じた。

「このような身で、おこがましいとは考えています。ですが、無抵抗の者達を初めに殺すのは、王に仕える者としてはどうなのでしょう。グウィン王に、殺しやすい相手を優先して処理したと、正面から報告できますか？ ま、もうあの爺は死んでますけど」

露骨な挑発には、当然乗ってこない。

「他の者達に対処するのは、僕の後にしてください。貴方達に決闘を申し込みます。僕が負けたら、好きにしてください。ただそれまでは、僕とだけ戦ってくださいませんか」

「凡愚よ」

オーンスタインが、槍を浮かした。それだけで、周りの空気が重く沈んでいくような錯覚がする。兜から伸びる視線は、不思議そうに下田へと向けられていた。

「異人の考えはわからぬ。貴様は、何を言っている？ 深淵に頭を食われたか」

スモウもまた、呻くような笑い声をあげた。

「二度目で死んでいればよかったな。どれ、二度と再生しないよう、潰してやろうか」

「…わかってないな」

下田は刀を肩に乗せ、右手をよく見えるようにかざした。鱗で覆われた中指を、真つすぐ立てる。おそらくその細かい意味は相手に伝わらないだろうが、何を言いたいのかは大まかに理解できるだろう。

追い打ちをするように、思いつきり嘲るような表情を浮かべた。

「どつちも相手してやるから、かかってこいつて言ってるんだ」

弾けるような音が、刹那の間に到達した。

既に三つの詠唱を並列、圧縮も終えている。歯を食いしばりながら、全身全霊をもつて、小さな雷を作り出した。

オーンスタインから放たれた、より大きな雷槍。それが下田の左手と衝突し、簡単に彼の体を破壊していく。下田が作った雷のおかげで、多少は相殺できていた。

復活した時、改めて確認できたことがある。無事に残っていた部分のほとんどは、膿で覆われている所だった。自分で雷を作り出す修練を繰り返していた時も感じていた。どうやらこの膿は、雷に対してかなりの耐性を持っている。

だから、左半身を前にして、彼は受けきった。腕の全ては駄目になり、肩も多少弾け飛んだが、それだけだった。必殺の雷槍を、凌いだ。奇跡を使えば一瞬の内に治せる程度の負傷で、収まっていた。

上へ投げておいた短剣を掴む。前へと倒れていくように、下田は走り始める。闇朧の手触りを確かめながら。

二発目は、考えているよりもわずかに遅れてやってきた。下田が小さいとはいえ雷を作り出したことは、さすがの相手も予想外だったのだろう。

それでも、雷槍はさらに大きくなっていった。確実に仕留める意思が込められている。これを膿で受け止めたとしても、ただではすまない。そして奇跡を使っている間に、畳み込まれる。

だがもう、慣れた。
伸びてくる、熱い線を把握する。
足を擦る。

最小限の動きで、体の軸をずらす。

顔のすぐ横を、雷光が駆け抜けた。かすりもしていない
弱いソウルの塊を利用して、横にかわしたことによる減速を防ぐ。
足の魔術を爆発させてさらに加速した下田は、スモウの姿が前から消
えていることにも、当然気がついていた。

地面を蹴り、後ろへ飛んだ。

直後には、目の前が金で覆われる。轟音を立てながら、先ほどまで
いた場所に槌が振り下ろされる。

しかし地面へ激突する前に、槌の面がぐるりと回転した。

スモウは当たり前のように、巨大な武器の軌道を九十度変化させ
る。下田の方へと向いた面が、常識外れの速度で迫ってきた。風圧が
やってくる。彼自体はまだ、着地もしていなかった。自分が一つ行動
する間に、相手は複数の手を打ってくるようだった。

腰に設置しておいた魔術へ、ソウルの球を衝突させる。

まるで何かに引っ張られたかのように、下田の体は横へと吹き飛ん
だ。腰が抉れて肉が剥き出しになってしまったが、あの大槌が直撃す
るよりはるかにました。

並列詠唱を圧縮する。

腰の治療と、攻撃に割り当てた。

体を傾かせながら、ソウルの太矢を五本、スモウに向かって放つ。
速さよりも威力を重視した。その代わりそれぞれの軌道を工夫して、
絶対に避けられない形をとる。

巨体は動かない。あえてそうしているような余裕があった。

矢が到達する。

スモウには傷一つ付いていない。顔の部分も狙ったが、それすら効
いていないようだった。

下田は確信する。

武器だけではない。相手の防具もまた、尋常の領域から大きく抜け

ている。とてつもなく強力な魔術防護だ。おそらく最大の威力を持つ魔術をぶつけても、意味はない。オーンスタインも同様と考えていだろう。

オーンスタイン。

当然、側面にいるその騎士も把握していた。どちらにもふっかけたのは、自分なのだから。

体を横へと回転させ、下田は月光の短剣と閻魔を入れ替えた。彼にはもう、利き手という概念はない。どちらも同じパフォーマンスで、完璧に扱うことができた。

短剣を振るう。その先にちようど、槍の刃があった。

強く、歯と歯を噛み合わせる。

絶妙な角度に短剣を傾け、向かってくる槍に擦らせていく。徐々に押し込む力を強めていって、その突きの軌道を自分の顔から逸らした。

片側の視界が、消失する。

すぐに自分の顔の半分が削り取られたのだとわかった。短剣ですらさなければ、頭全てが弾け飛んでいた。

重い。

まだ、右腕に痺れが残っている。もし短剣を左に持ったまま受けていたら、へし折られている所だ。いや、丸ごと持っていかれたかもしれない。武器ごと失う危険を防ぐことができた。

こいつ。

限りなく刻まれた時間の中で、オーンスタインを見る。じつとりとした羨望を込めて。

竜よりも、膂力があるんじゃないか。

いいなあ。

白い光で、全身を覆う。二重の光だ。より体に近い方が、顔の再生を担当している。そして、もう一方の光は。

下田はスモウを上から見ていた。

この巨漢自体は、目で追ってきている様子がない。だがそれは、下田の瞬間移動についてこれていないという意味ではないようだった。

鋭い風切り音。

振り下ろそうとしていた闇朧を、停止させる。伸びきった左腕と交差するようにして、右手の月光を光らせた。

当たり前のようについてきているオースタインが、下田の肩に穴をあける。入り組んだ月光の刃を巧みにかわして、確実に突きを入れてきていた。

下田にはわからない。理解できるとも思っていない。その刺突は、大げさでもなんでもなく、神が宿っているかのようだ。その威力も速度も、下田が今まで見た最大を容易く超えてくる。

だが最もおかしいのは、まだ相手がそれでも本気ではないことだった。彼の月光を見てから軌道修正するくらいには、余裕を持たせている。

背筋に、ぞくぞくとしたものが走った。淡い快感。抑えられているのは、今舞い上がってしまったえば、確実に殺されるからだ。本当なら快樂の頂まで突き抜けているはずだった。みつともなく涙も流しているはずだった。

落ちていく彼に合わせて、スモウの槌が振るわれる。

目をつぶった。端から涙が零れ落ちた。

一度その槌をかわした時に付けておいた魔術を、足のソウルの塊とぶつける。その瞬間、周りからはまるで、大槌の上に着地して立ったかのように見えただろう。

魔術の爆発によって、多少スモウの攻撃の勢いは殺された。さらに下田も飛んだので、損害は抑えられたと言っている。それでも、両足の骨が粉碎されたが。

上空から、オースタインが降ってくる。限りなく短い時間で、下田の爆発によって加速された跳躍よりも高く、跳び上がっていた。

既に二体の戦い方は理解している。

オースタインの素早い点と線の攻撃で、選択肢を潰していく。逃げる場所を制限していく。そうして追いつめた所に、スモウの防御不可能な面の一撃を叩き込む。

その逆も、きつと確立されているのだろう。

獅子が、薙ぎ払いの準備に入っている。

魔術による移動で逃げるのは無理だ。容易に追いつかれる。

奇跡による瞬間移動も、使うべき場面ではない。消耗を考えてわずかに体をずらす移動を使ったとしても、オーンスタインは余裕で軌道を合わせてくるだろう。

だから、口を開いた。

舌の先で、呪術の炎を操作する。この状態で詠唱するのは、なかなかコツがあることだった。術を操る部位のこだわりを失くすことは簡単だったが。

相手からは、下田が口から炎を吹き出したように見えただろう。実際は彼の上唇の先を少し焦がしながら、火球が放たれた。

オーンスタインは体を捻る。鎧を着ているとは思えないほど軽快な動きで、下田の呪術を避けた。
だが。

下田はほくそ笑む。

これで、確定した。まだスモウの方はわからない。だが、同じ金色なのだからそうに決まっている。魔術は効かないが、呪術は通用するようだ。でなければ、わざわざ避けるはずがなかった。そのまま槍を振るっていれば、下田を仕留められたというのに。

下にいるスモウは、さらなる追撃を行わなかった。それを仕掛ける寸前に、太い足を動かして離脱する。炎の柱が立ったが、誰にも当たらなかった。

警戒はされているのだろう。呪術が一番苦手だが、仕方がない。軸とするものを変えていく必要がある。

着地し、即座にスモウへと接近した。貴重な瞬間だった。この二体がやや分離されている所を、狙わない手はない。

もちろん相手もそれを読んでいる。下田の動きに完璧に合わせて、大槌が迫ってきた。

それが届くぎりぎりの範囲を見極めて、踏みとどまる。

なかなか良い調子だった。前までの銀騎士、黒騎士戦のように、恐怖が大きくなりすぎているわけでもない。程よい緊張が、視野を広げ

るのに役立つていた。だから、ちょうど足元に転がっている黒騎士の槍を認識できている。

槍は急に動き出し、下田の横に浮かんだ。そして槌を振り切ったスモウへと真つすぐ飛んで行く。

相手はこともなげに籠手部分で弾いた。

それこそが、下田の狙っていた行動だった。

槍との間にある、術的つながりを辿る。一度掴んでしまえば、発動は容易だ。詠唱するまでもなく、槍から炎が湧き出していく。それは直後、炎の奔流へと変わった。

これで少しは損害を与えられると、わずかに期待していた。

しかし、炎が吹き荒れた後、スモウの姿は消えている。地面にしている、逆さまの槌だけを残して。

少し上を見る。

どうやらスモウは、槌を支点にして跳んだようだった。あの一瞬の中で、炎の嵐の範囲から逃れることができている。その図体には決して似合わない、俊敏さだった。

化け物め。

下田は切り替えて、後ろを振り向く。

今度はオーンスタインだ。既に眼前にまで迫っていた。刀で受けるのは駄目だ。ユリアの闇朧であっても、脆いものは脆い。それは実際に戦ってきて散々わかっている。短剣に月光を纏わせ、リーチを伸ばす。それで相手の意表を突くつもりだった。

雷光。

オーンスタインは、槍を動かしていない。刃の先をこちらに向けてすらない。なのに橙色の光が視界に引っ掛かっている。弾ける音が鼓膜を震わせている。

上下が入れ替わる。

空と地面が交互に視界を通り過ぎていく。

下半身が丸ごと破壊されたのを、ようやく理解した。

相手は足を一步前に出しているだけだ。だが、残滓がある。足の先から、雷の塊がまだ留まっていた。回転する視界の中で、舌を巻く。

纏わせることができるのは、槍だけではないらしい。

普通は、体自体に雷を伝わせることは無理だ。自滅することにもつながら。おそらく、オーンスタインの身に付けている防具は、魔術耐性があるだけではないのだろう。だから、雷の柔軟な利用が可能になっている。

体が硬直しきって、吹き飛ばされるがままになっていた。

離脱を。

と、思いかけた所で、風圧が迫る。

下田は同時に五の魔術盾を重ねた。

とつきの判断で、誤った対応をしたことに気がついたのは、金の大槌が全身を打ち据えた直後だった。

青白い光が碎け、重い衝撃が駆け巡る。

呼吸ができない、肺ごと潰された。

下田の半身は勢いよく飛んで行き、遠くの建物に激突した。

即座に、奇跡の光を広げる。

だが、かなりまずい状況であることは確かだった。この状態で追撃をされたら、完全に、とどめを刺される。飛ばされた距離を、相手は簡単に詰めてこられるだろう。

だが五体満足になり、崩壊した壁から出ても、何もやってくることはなかった。広場の方へと目を向けると、スモウが槌を地面につき、腕を組んでいる。巨体の視線の先には、地面にはいつくばっているヨルシカの姿があった。

「何を怠けている？ 再生するがいい。貴様の犯した所業は、少しの苦痛で終わるものではない」

ヨルシカの片腕を削ぎ落したオーンスタインは、さらに彼女の背中へ槍を突き刺した。雷が、伝導していく。白い体が痙攣して、薄い唇から甲高い悲鳴が飛び出した。オーンスタインはさらに突きを繰り返そうとしている。

そういった様子を、スモウがつまらなそうに眺めていた。

「その女にいい、さわるなああああああああ！」

下田の急接近に、オーンスタインは狂いなく対応する。彼の握って

いた短剣を受け止めて、月光の散乱をかわし、返しに槍を横へと振った。

頭の中の血管が全て切れているような気がしていたが、それでも冷静な思考を保っていた。自分で自分のことが一瞬わからなくなる。すぐに理由を作った。こいつらは、もう自分に勝つたと断定していた。舐められている。だから、これはそういう怒りなのだ。

のけ反り、刃をぎりぎり避けていく。後ろに倒れる勢いで一回転し、ヨルシカを蹴り上げながら距離を取る。彼女の体は転がっていき、長椅子の一つにぶつかつた。既に再生が始まっている。その顔は、下田へと向けられていた。

「ほう」

オーンスタインは槍を払った。竜の血が飛び散る。

「やはり、理解するのは難しい。憎むべき女を助けるのか？」

「勘違いするな」

頭の膿が蠢いている。もっとももっとと叫んでいる。

自分でそれを殴りつけて、感情の混乱を抑えた。

「僕が、殺すんだ。誰にも、渡しはしない。お前のもんじゃない。それは、僕のものだ。さわるな。許可しない。資格がいる」

「ふむ、ならば」

スモウが獅子の横に並ぶ。

その大槌に向かって、槍がかざされた。雷が弾けて、槌へと伝わっていく。これで二体とも、その武器が橙の光で満たされることになる。

両方共、踏み込む準備をしていた。足に力が入っていくのが、見ている側にも伝わる。

「貴様を対等の敵として処理し、その資格とやらを得るとしよう」

同時に、突進してきた。

そのわずかな時間で、下田は会話を楽しむ。

「よっ」

「やっていますね」

「まあ、こんな感じだけど」

「Aだけでこれなら、上出来じゃないですか？　時間も、それなりに稼げたようですし」

「そろそろ見せてやるか」

「そうだね。自分の中にある何もかもを、ぶつけてやろう」

『嘘つき』

「そもそもおかしいんだよな。なんで相手が二体なのに、こっちは一人で戦わないといけないんだ？」

「不公平ですよね」

「大した問題でもないよ。だって、こっちも二人になればいいじゃん」

下田達は、左右に展開した。

相手の動きが遅くなる。

今まで、固有能力自体を、深く考えたことはなかった。ゲームの中でもらえる特典のようなものだど、簡単に納得してしまっていた。

だが、よくよく考察してみると、下田以外の固有能力は、別に固有でもなんでもないということがわかる。例えば、久慈の能力。彼女は自分の分身を作り出すことができた。一見凄い力に思えるが、サリヴァーンもほぼ同じ術を使っていた。

片方は、月光の短剣を。

もう一人の下田は、闇朧を握る。

どちらとも、武器の持っていない方の手には呪術を形作っていた。

短剣の下田は、既に放っている。

揺らめいている炎の塊が、スモウへと向かっていった。速度はそれほど大きくもない。巨体へと到達する前に、十字槍がその炎を寸断した。

詠唱が結ばれる。

真つ二つになった炎は、瞬時に拡大した。スモウの全身を覆うようにして、向かっていく。

スモウの槌が、鳴った。

そこから放たれた雷が、炎を破壊する。術にも大きな損害を与えるようだった。薄い膜のような炎が、散らばり消えていく。

オーンスタインの両腕に、鞭が巻き付いていた。

刀を持つ方の下田は、既に術の不可視化を解除している。そしてじっくりと短い間に観察した。確かに炎の鞭は、金色の籠手を溶かし始めていた。

それでも、隙を見せることはない。冷静に剥そうとしている。もちろんそれは想定内だった。別にオーンスタインの方を狙っていたわけではない。

本命は、それでわずかに注意が逸れた、スモウだった。見えない体を解いた短剣下田が、その首元に組み付く。そして月光を多分にその刃へ含ませながら、全力で目に突き刺した。

だが、手応えはやってこない。そもそも刃が当たる前に、彼自身の体が硬直していた。スモウの体から、雷が伝導している。それが短剣下田に牙をむいたのだ。地面へと落ちる前に、彼の体は槌によって粉砕された。すぐに青白い光となって消えていく。

はずれ。

刀下田が、オースタインの懐に入り込む。

本命が一つという決まりはない。

不可視の刀であっても、オーンスタインは正確にその間合いを把握しているようだった。既に鞭を解除しており、刀を破壊しようとしてくる。

刃同士が激突するぎりぎりの瞬間を、見極めた。その直前で刀に意思を込める。刀身がわずかに変形し、槍をかわした。そして元の形に戻り、素早い返しの攻撃で、相手の首の関節部分を狙う。

そしてその行動よりもはるかに速く、オーンスタインの雷が来ることもわかっていた。腰のあたりに、閃光が弾ける。

下田は、三本目の手を、強く意識した。

国広の固有能力。透明な第三の手を生やせる。これは珍しいもののように思える。だが、唯一無二ではないのだ。三本以上の腕を持つ存在などいくらでもこの世界にはいるし、その腕の一本を不可視化させれば出来上がりだ。

これの真骨頂は、術的干渉が生身の手よりも容易になるという点だろう。例えば、相手の魔術を簡単にもぎ取り、自らの制御下に置くこ

とができる。詠唱自体にも干渉できるのだ。それはまさに、反詠唱の結晶とも言えた。

その透明な手で、三術を融合させる。小さな雷を作り出す。それで、オーンスタインのものを乱し、さらに多少分解することができた。先ほどとは違い、腹の一部が抉れるだけで済む。

芳野と、草野の固有能力を組み合わせる。探知で全体を把握してから、細かい攻撃の筋を理解する。汎用性の高い二人の力は、大いに役立つ。

槍を寸前でよけていく。

祭祀場の塔で彼らの残骸からソウルと膿を回収した時、下田には感傷に浸る時間も与えられていなかった。ただ力を取り入れることだけを考えていた。

だから、この時だけは。

この時だけは、いいだろう。

下田は四人を幻視する。本物の仲間達を。

彼らに向けた心からの感謝を。

一撃に託す。

オーンスタインの首に、刃が入る。

閻魔が、兜の下を通っていく。肉を裂く待ちきれない瞬間を期待して、それでいながらも完璧な速度と軌道を保っていた。

が、止まった。

下田は浅く息を吸い込んだ。

刀は、獅子の指に掴まれている。透明である以前に、これ以上ないタイミングで、受けようのない間隙について繰り出されたのにもかかわらず、槍から離された片方の手がびったりと閻魔を包んでいた。

単純なことだ。

「十分だ」

身体能力の差。

地力の差。

まだ相手は、全力など出していない。すぐに崩れる仮初の均衡の上で、踊っていただけだった。

槍が振り下ろされる。

消耗を覚悟で、移動の奇跡を使った。絶妙なずらしをし、ぎりぎりで避けられるだけの移動を行う。

それを予知していたかのように、オースタインは平然と腕を動かした。

下田の右手が落とされる。

左手が弾ける。

腸が焦げ、血さえも雷によって蒸発していく。

喉が潰され、詠唱ができなくなった。

脳が飛び散る。

片目ごと顔のほとんどに穴を開けられる。

潰れていく視界の中で、月光の最後の輝きが眩しかった。

闇朧の刃が、溶けていく。

雷の付与された槍が、連続で放たれる。

同時に放ったのではないかと思うほど、おかしい速度の刺突だった。もちろん、下田には何一つとして見えていない。ただ己の体が穴だらけになっていくのを、眺めていることしかできない。

『アキヒロ』

奇跡は既に発動している。

だが、治りかけの状態で、槍が胸に突き立った。

雷が思考を全て粉々にしていく。

叫びながらも、同時に詠唱は止めなかった。どんな激痛の中でも、どんな恐怖の中でも、術行使はやめない。今までの訓練で散々練習してきた。今はそれが、より苦痛を大きくする原因にもなっていた。

ソウルの矢を何本も向かわせたが、ほとんどが落とされる。当たったものがあっても、それは全く効果を及ぼさなかった。効かないとわかっていても向けてしまうのは、それだけ今の彼に余裕がないことも示している。

参ったな、と分離させておいた意識が冷静に分析をする。

もう、気力がほとんど残っていない。

まともな回復をできるのは、あと四回くらいだ。それを超えてし

まったら、もう、何の術を使うこともできなくなる。このまま雷を受け続けていれば、あまり時間はかからないだろう。

それでも、わからなかった。

どうすればいいのか。どうやって、立ち上がればいいのか。

まるで、思いつかなかった。そもそも、思考がまともにできない。

『アキヒロ、満足したかい？』
うるさい。

誰が、お前なんかを。

何とか、するんだ。

もつと、戦うんだ。

奇跡が行使される。

残り三回。

二回。

動けない。

一回。

「やめて、ください」

雷が止まった。

下田はひゅうひゅう呼吸をする。

徐々に再生されていく視界には、震えている女性の背中があった。

いや、女性達だ。

イリーナが平伏しながらも、ずりずりと下田の前に出る。可哀そうなほどに怯えていたが、何とか上げたその目は、意外にも決然とオーンスタイン達に向けられていた。

「も、もう、十分、彼は、十分苦痛を受けたはずです。罰を受けたはずです」

「火守女」

「い、いえ。そもそも。彼に、罪はあるのでしょうか。最初に取り返しのつかない罪を犯したのは、私達の方ではないのですか？ 彼がその報復を考えることに、一体何の、罪がありましたよう」

「大王様の殺害を、正当なものとするのか？」

「違います。ですが、報復に次ぐ報復では、何も、世界は救われずに…」

残りは、苦しそうなうめき声に変わった。イリーナの体はスモウに持ち上げられている。

「酌量は与える」

そしてその体は、横の方へと投げられた。彼女は何の抵抗もなく飛んで行き、建物の壁に当たる。地面に落ちても、微動だにしていなかった。背中から、血が漏れ出していく。それが口元にまで広がる。わずかな波が立った。まだ、呼吸をしていることは確かだ。

「二度はないと思え」

下田の肩を覆う手が、さらに強く握りしめられた。

「わかっただろう。灰の女よ。貴様は容赦せぬぞ」

ちとせの表情は、わからない。だが、とても怖がっていることは理解できた。それにもかかわらず、まるで下田を励ますかのように、何度も肩に触れてきている。

「私達が、何をしたんですか」

その声も、不安定だった。

「こんな、訳の分からない世界で、生きようとしただけなのに。自分達の命を、守ろうとしただけなのに。どうして、この人がこんな目に遭わないといけないんですか」

「物は言いようだな」

スモウが嘲笑う。

「ならば、我々も問おう。これをどういうものだど理解している？

原因はどうあれ、今の戦いは、それが引き起こしたことだ。だから頭を垂れ、言葉を発することもなく、受け入れろ」

ちとせが、こちらを見てくるのがわかる。彼女の背後には、眩しいほどの閃光が次第に大きくなっている。

下田は、力を振り絞って半身を起こした。治りかけの喉を震わせ、叫んだ。

「やめろー！」

彼女の胸から、雷槍が飛び出した。それは勢いを少しも衰えさせることもなく、下田の下腹部にも到達する。

二人分の血肉が、地面を彩った。ちとせの血を満面に浴びながら、

下田は再び倒れていく。今度は彼一人だけではなかった。

全身で、彼女の体重を感じている。それでも全てではなかった。半分の重さしか、下田にはかかっていない。ちとせの下半身は横に転がっていた。

下田の胸に、ちとせは頬をくつつけていた。その瞳はやや上目遣いで、彼の顔を見てきている。徐々にその焦点は合わなくなってきていた。その細かい表情はわからない。彼の視界も、ほとんどぼやけていた。

彼女はわずかに首を振っているようだった。

その目もまた、否定を込めてきていた。

治さないよ。

でも、あと一回だ。

ちとせが死ぬ。

残された奇跡は、賢く使うべきだ。

彼女を助ける。

それをして、自分は死ぬのか。これで彼女達が抵抗できる手段は無くなり、また殺されるわけだ。先生が来る前に、全滅する。

嫌だ。

ほら、ちとせも賛成してるみたいだし。戦力になる方に、使いなよ。中途半端に分散させてどっちも治そうとしても駄目だよ。結局血が足りない。完全に傷を塞がないと、共倒れになる。そうなるくらいだったら、わかるよね。

「だまれ……」

奇跡の光が弾ける。

ちとせの半身が再生されていく。彼女の顔はかなり白くなっていたが、失血死寸前で完治させることができた。目をつぶった彼女を横に転がし、立ち上がる。

立ち上がろうとして、膝をついた。

少し離れていたオーンスティンが、首を振る。

「十分だろう」

「うる、やい」

下田は血を吐く。下腹部の半分が無くなっている。どんどん血が失われていく。同時に、頭も異常に重たかった。詠唱をしても、何も起こらなかつた。普通なら、気絶してもおかしくない。完全な欠乏状態に陥った今では、戦いの手段は限られていた。

歯を食いしばり、己を鼓舞するような叫びをあげながら、銀騎士の片手剣を取る。そして刃を支点にして、震えながら立ち上がった。それでも相手は向かってこない。黙っていても、下田が死んでいくことは確定しているからだろう。もうじき、彼の意識は失われる。

『提案が、あるんだけど』
無視する。

そして、彼は大口を開けた。舌の先で呪術を作るわけでもなく、あがきの詠唱を行うわけでもなく。

自らの右腕に、噛みついた。

鱗の混じった固い肉を食いちぎり、咀嚼を始める。

周りは、まるで停止したかのように静かだった。

まずいどころの話ではない。血の味しかしないし、硬い骨が邪魔だ。噛めば噛むほど、自分のソウルの味には嫌気がさす。それでも、体内に取り入れることを優先した。竜の部分を、全身に行きわたらせた。

今までは、右腕から上の部分にしか作用しなかった。だが、食べて取り込んだことにより、下腹部が蠢き始める。それですべて再生されるなどという都合の良いことは起こるわけがなく、ほんのわずかに傷口が小さくなり、血の出る量が減っただけだった。

「要は、考えようだよね」

「そうだな」

「別に絶望って感じはしませんね」

『やれやれ』

「まだ、やれることはあるし」

「体は動くからな。戦える」

「分析はできます。もう、相手の速度には慣れましたし」

「次はもっといい動きができるぜ」

「その次はもつともつといい戦いができるね」

「続いていけば、殺せるでしょう」

「持ちこたえられる」

「希望は繋がります」

「乗り越えてやる」

「だから」

『……』

ウミに向かって心の中で続ける。

お前は、必要ない。

下田は歩き始めた。

まだ止まっているオーンスティンとスモウへ。実際はどうなのかわからない。もう接近してきているかもしれない。首を飛ばそうと、武器を振るっているかもしれない。

興味はなかった。

別に、勝てなくてもいいのだ。

もう随分、時間が経ったような気がする。

ほとんど、確信していた。

そろそろだ。そろそろ、先生が来る。あと少し、もう少しだけ、二秒くらい稼げば、何とかなるはずだ。なぜなら芳野の探知能力が、接近する存在を把握していたから。もう大きさも強さも判別できないが、助けが来たのだと確信していた。

そして運の良いことに、オーンスティン達はまだ動いていなかった。下田は笑う。もったいないことをしたな。この隙が、最後だった。自分を侮ったせいで、お前達にはもうチャンスが無くなる。

実際に二秒くらいで、集団が到着した。

まず目に入ったのは、二体の大きな存在だ。

片方は狼。だが、あのシフィオールスとは比べ物にならない。四足で立っているその高さの段階で、グンダの二倍はある。その口からは、鋭い牙が伸びていた。

その背中から、二つの影が下りてくる。

一つは、白磁の仮面で表情がわからないが、おそらく女性だった。

金装飾が施された青の被り物の下から、象牙色の髪が出ている。髪の毛の一部が長く結われ、何かの尻尾であるかのように後ろへと流れている。

ひらひらとした青い装束に、軽装甲の鎧と籠手を身に付けている。両手にはそれぞれ、別種の存在感を放つ曲刀と短剣が握られていた。刀の方は、まるで太陽のように光っている。短剣は銀色に灯り、静かな殺意をたぎらせていた。

もう一つは、女性よりも一回り背が高い。

兜から伸びる房と、背中を覆うマントは、同じ群青色をしていた。右手には身の丈ほどの大剣、左手には大盾を持っている。その身のこなしは少し歩くだけでも洗練されているのがわかる。ここまで運んできてくれた大狼に、少しだけ触れていた。

咆哮が、下田の鼓膜を揺さぶる。

巨軀を持つもう片方の存在は、翼をはためかせて、搭乗者のために体を安定させた。

あまり美しいとは言えない灰色の竜から、二体が下りる。

「再会は、意外と早かったね」

それはウインの声をしてしたが、見た目は違った。ぼろぼろの鎧と兜、そして、炎が伝っている大剣。その体の中は、おそらく尋常ではない。様々なものが混じり合っているのだと、表面から見てもわかった。

最後の一つは、大きな剣槍を持っていた。

金の頭冠から、豊かな白髪が後ろ気味に流れている。顔色は悪く、落ちくぼんだ目も快活な印象を与えなかった。ぼろきれのような覆いとその下の鎧も、状態が良いとは言えない。

だが、内包しているであろうソウルの香りが、グウインと非常に似通っていた。今は別の不純物も感じられるが、その立ち姿はあの大王を想起させる。

オーンスタインが、彼らに向かって言う。

「計画は間もなく修正される。貴様らの遅滞は、不問としよう」

下田は爆笑した。

少しも面白くはないし、楽しくもない気分だったが、大口を開けて笑った。笑うことしかできなかった。血まみれの手で、血まみれの胸を叩き、滑稽な自分をひたすら笑っていた。咳き込んで血を吐き出し、少しの間続けた。

敵全員が、こちらを向いてくる。

下田は目元の涙を拭った。

「…ウミ」

『なあに？』

不思議そうな声には、隠しきれないほどの歡喜が滲み出ている。語尾が微かに震えているのが、彼にもわかった。

「全部やるから。何とかしてくれ」

『愛してるよ、宿主さま』

60. 人間性を捧げよ

頭に重みを感じた。

目の前が一瞬暗くなつたが、すぐに戻る。

異常があるように思えたのはほんの少しの間だけで、むしろ体調に
関しては今までよりもずっと改善されているようだった。

「うーん？」

「どうしたんだい」

「こんなもんなのか。あんまり、変わんないけど」

「アナタは良く適合していたからね。意外とあっさりかもしれない」
「とりあえずは」

片手で、奇跡の光をいくつか作る。二方向に飛ばした。片方は、ただ出血が続いているイリーナへ。そしてもう一つはより光を大きくして、転がっているリリアーネの首と胴体を包むようにした。

両者とも、問題なく再生されていく。時間が経ちすぎているのではないかと心配していたリリアーネも、どうやら息を吹き返したようだった。だが当然、意識が戻るほどまでにはいかない。それでいいと思った。どうせ彼女が復活しても、あまり意味はないだろうから。

今の、戦場においては。

銃声が響く。

相手の全てが、下田に意識を向けているわけではなかった。もう彼に興味は無くなっているのか、オーンスタインが雷をランドン達に飛ばしている。虚しい抵抗をしている彼らは、成すすべなく殺され始めた。

下田は、イアンの前にまで移動した。

左手で、三術を合わせる。奇跡、魔術、呪術。これまでとは違う完璧な配合、狂いのない出力で雷が形成されていく。それは今まで作ることのできた大きさを容易に更新した。自身の胴体を超え、頭を超え、長い槍になった。

それを、向かつてくる雷に投げた。その反動で左手が全て焦げてなくなつたが、瞬時に奇跡で回復する。

炸裂。

オーンスタインの雷も、下田のそれも、同時に消えていった。お互いがお互いを食い合い、たてる音を小さくしていきながら、混ざり合って相殺される。

子供の泣き声が、こだました。

ランドンと、ファエラはもうだめだ。どちらも首と頭を一瞬で破壊された。もう彼らの魂はそこにはない。即死している。

ジアンナが、失った片足を茫然と見下ろしている。彼女に肩を貸そうとして、幸成は嘔吐していた。涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら。由海は腰を抜かして、ただただ周りの状況を見ていることしかできていない。

うん。

下田は自分の精神状態を確認した。

彼らの全員は助けられなかった。だが、仕方がないことだ。直前まで自分も死にそうだった。間に合わないことは確定していた。

それよりも、不思議な安堵があった。

「まともだ」

「フフフ」

「てつきり、血も涙もなくなるのかと思ってた。んぐ。でも、ウミ。ほら見てよ。僕、ちゃんと誰かを助けたいって思ってる。ごくつ。まともな証だ。人間らしいはまだ。ふう。お前の言ってることって、ほんと、あむ、嘘ばっかりなんだな。案外大丈夫じゃん」

イアンは、泣きながら悲鳴を上げた。

ぐちゃぐちゃと、肉の音がする。

あまり心地良いものとはいえなかった。できればやめてほしかったので、下田は近くの誰かに注意をしようとした。だが、そのうち気がつく。

引き締まった軍人らしい腹に顔を突っ込んで、下田は何度も口を動かしていた。もうほとんどランドンの鼓動はない、わずかに震えている気がするのは、死後の何かしらの反応だろう。それを楽しみながら、腸をスムーズにかじり取っていた。

ランドンの腕の肉にも浮気をした後、ファエラの欠けた顔面に膿を向ける。

欠点としては、やはり自分がまだ人間の構造を持っていることだろう。何せ、口は一つしかないのだ。同時に複数を食べられないのは、不便が極まっている。だから多少味は落ちてしまうが、膿の中に出上がった口の方も利用するしかなかった。ファエラの体を適当に片手でつかんで、左半身に開いた口へと放り込む。

初めの印象は、最悪だった。

そもそもどうして自分が人間なんかを食べなくてはいけないのか理解できないし、その気持ち悪さと口に合わない固い食感で吐きそうだった。多少、女性であるファエラの方はましだったが、それでもまずいことには変わらない。

それは味として伝わってくるソウルに関しても同様だった。彼らの器は壊れている。だから内包されているソウルの量は少なく、質も最悪だった。

だが、それはあくまで半分の話だ。もう半分。

残った方は、はつきりとしたソウルが残っている。普通、死は流出を速めていくものなのに、それはまだ全てを残留させていた。

まずい表面を味わいつくすと、あふれんばかりに。

先生の

「美味しい〜〜〜〜〜！」

今までの人生観がひっくり返るほどの衝撃だった。

歓喜と同時に、凄まじいほどの後悔がやってくる。今まで自分はこんなことを知らずに、のうのうと日々を過ごしていたのだ。どうして、気がつかなかったのだろう。どうしてただ倫理から外れているというだけで、忌避してしまったのだろう。

瞬時に満腹になったので、遺骸は捨てた。

だが、欲はどんどん膨らんでいく。

今度は、もっと、新鮮なものがいいかもしれない。まだ、生きている方を。

イアンはしやくりあげながら、下田を睨みつけていた。

彼の背後には虫の息のアリーがいる。そこから出ている血と内臓を、下田は数瞬の間観察していた。

「ばけもの……」

声と同時に、下田は腕を振るっていた。イアンは目をつぶる。しかし次の瞬間には、あふれ出した光に驚いていた。アリーのお腹が治っていく。ジアンナの片足が瞬時に再生されていった。

もう彼らに視線を向けることもなく、人食いは歩き始めた。

「どうしたんですか？」

オーンスタインが、止まってこちらを見ている。

「酷いですよ。僕、言ったじゃないですか。これは決闘だって。僕がまだ死んでないのに、他の人に手を出さないでください。二度は言いませんから。ちゃんとしてくださいね」

青装束の女性が、銀の短剣を真つすぐ構える。輝いている曲刀を前に出した。

群青の騎士は盾を構えながら、大剣を肩に担いだ。

大狼は歯をむき出しにして、唸っている。

灰色の竜は口の端から炎を漏らした。

ウインは腕を組んだまま動かない。

剣槍の男は竜の側で静止している。

スモウは体全体の雷を弾けさせた。

オーンスタインは、槍を地面から浮かせる。

敵全員に向かって、下田は憎悪を向けた。次から次へと湧いて出てくる。それのおかげで、敵への恐怖がほとんど食いつぶされていた。

顔を大きく歪めて、膿を蠢かせて、絞り出すように言う。

「侵略者ども……」

わかっていた。

彼らのほとんどは、グウインと共に地球へとやってきた。

いわば、主犯格。

人間の多くを殺した、虐殺者。

度し難かった。擁護のしようもない。存在するだけで、虫唾が走

る。考え得る限り最大の苦痛を伴う殺し方でなければ、満足できない。そして転がった骸を、全て食らいつくしてやるのだ。憎き敵の血肉を糧とする。

「全員まとめ、かかってこい。ぶっ殺してやる」

と言いながら、下田は姿を消した。

一瞬のうちに、頭の中では吟味をしている。

「どれがいいだろ」

「どれも悪くはないよな」

「竜はあまり美味しくなさそうですけど」

「ワインも駄目だねえ。調味料が混ざり過ぎている。やっぱり、柔らかい肉が良いよ」

「そうだね。じゃ、あれにするか。一番小さいし」

「なんてったって、女だからな」

座標の確定。

出現。

女性の背後に瞬間移動した下田は、既にファランの速剣を放っていた。右腕全体に疑似神経網を構築し、身体の限界を超えた速度になっている。たとえば反撃が来たとしても、魔術が自動的に感知して対処する構造になっていた。

黄金が、視界の中で踊る。

下田には、それが一往復するまでしか見えなかった。

実際は、無数の攻撃が完了されている。

曲刀が、速剣を細かく刻んでいく。瞬きにすら満たない時間でその様を見ていることしかできなかった。

斬撃はやがて腕に到達し、同じように細切れにしながら、彼の肩まで到達した。それは斬られたという感触で理解しているだけで、実際に動く刃が見えているわけではない。オーンスタインの槍よりも速かった。

もう目は、刃が過ぎた後の残光で満たされている。眩しいその影に溶け込み、銀の短剣が迫っていることも認識できなかった。

下田は、喉を抑えようとする。だが、そのまま押し込まれた。血を

吐き出しながら、短剣の刃だけで己を持ち上げている青装束の女性を見下ろした。

「浅はかな闇にふさわしい思考だ。御し易いと、思ったか？」

声は高めだった。若者に思えるが、そうではないことはわかっている。磨かれた攻撃速度とその技は、間違いなく歴戦の四騎士の一員としてふさわしいものだからだ。

王の刃、キアラン。

文献で読んだ通りの、武器を使っている。本来は暗殺に特化しているのだろうが、本人の技量は直接戦闘においても十二分に発揮されていた。

「はやい、なあ……」

下田は素直な感想を吐き出してから、体の軸をずらした。

次の瞬間には、離れた所に再出現している。屋根に立ち、全員の動きを把握しようとした。そのための十分な距離は取ったつもりだ。

一体、いない。

下田は魔術の爆発で後ろに跳んだ。彼の鼻先を削り取っていきながら、大剣が振り下ろされていく。

これでは逃げが甘すぎることもわかっている。まだ飛んでいる下田に向かって、大盾が迫って来ていた。

既に詠唱を終えている。ソウルの奔流を最大出力で放つ。

青白い光線。とても太い線状の塊が、群青の騎士に向かっていく。衝突する。

とてつもない衝撃が襲っているだろうにも関わらず、相手は少しもバランスを崩さずに接近してくる。大盾の表面には全く傷がついていなかった。

下田は手をかざし、そこから大量の炎を吐き出す。

が、すでに目の前から騎士は消えている。

後ろから、刃が入った。一撃目の痛みを感じる頃には、自分が綺麗に三分分されていることにも気がついた。首と胴体と両足。

二重の奇跡をそれぞれの欠片に覆わせる。さらに離れた建物の上に出現した直後には、下田の体は元通りになっている。

あんなに重そうな大剣と盾を同時に扱っているというのに、その動きは羽を得ているかのように軽やかだ。おそらく、あの騎士は身体能力がずば抜けている。神代においてその強さを轟かせた集団の中においても。

王の剣、アルトリウス。

かつて深淵の魔物と契約し、わずかながらそれへの耐性を得ているという。深淵渡り。狼血の騎士達の、始祖ともいえる存在だ。

「これ、さ」

「どうしたんだい？」

「なんか、嫌な予感するんだけど。僕、生き残れるよね？」

「…」

「ウミさん？」

「ワタシが想定していたのは、オーンスタインとスモウだけが相手の場合だったからね。何というか、四騎士全てに加え、その他の化物達を同時に相手するとなると。まあ、頑張るしかないって感じだねえ」

「お前って、やっぱりろくでもないよな。ん？ ちよつと待て」

飛んできた雷を、同じものでいなす。

獅子の騎士が接近してくる前に、下田はさらに遠くへと離脱していた。

王の槍、オーンスタイン。

四騎士の長。竜狩りの名に恥じない戦歴を持っている。

どう考えても、それだけだった。追撃してこようとしているアルトリウスとオーンスタイン。そして、下でそれを観察しているキアラ。文献で読んだ限りの見た目を考えても、それだけしかないはずだった。三体、だけだ。

察知して、芳野の探知をさらに広げる。だがその前に、弓のしなるような音が聞こえてきた。それは遠くで聞こえたようにも、至近距離で鳴ったようにも感じられた。

体を捻り、かわそうとする。

まるでその動きを初めから予測していたかのように、巨大な矢は下田の胴体に到達した。

その勢いに押される形で、吹き飛ばされる。矢は貫通せず、回転しながらあつという間に胸のほとんどを抉り取っていた。

まず、下田は矢の方に手を加えた。奇跡の光で包み、真横に座標をずらす。そして余計なものが無くなった自分の身体に、見えない体を使った。

同時に、移動の奇跡も行使する。段々と転移先を読まれてきているような気がする。工夫をしなければ、出現した瞬間にやられかねない。

「仕留めきれぬか。しぶときは、大したものよ」

屋根の上に、巨人が立っている。肩と腕が露出したシンプルな鎧。それにやや釣り合わない精巧な金属の兜。手には、その身の丈に迫るほどの大弓を持っている。

王の弓、ゴー。

鷹の目とも評されている。オーンスタインと同じく、その弓で多くの竜を狩ったという。言い伝えでは何者かによって両目を潰されたとあつたが、今の彼は爛々とその瞳を輝かせている。下田への、純粹な興味も含まれていた。

何にせよ、これでようやく敵の勢力の全容が把握できたわけだ。彼ら相手に持ちこたえていれば、その内希望が見えてくる。

「持ちこたえる、か」

「なんだかなあ」

「ちよつと、弱腰ですね」

「そうじゃないだろう?」

対多数戦における定石は、いくつかある。

一つは、囲まれるような状況を極力作らないということ。

移動の奇跡で逃げ回り続けても、徒に容量が消費されていくだけ。それに、転移線の流れは相手にも感知されることがある。強力な術である分、その跡も残りやすいということだ。

だから、別の手段を使って動き回る。瞬間移動よりも速度は劣るが、要は相手の想像の外を付けるような動きができればいい。

「何個くらい?」

「キリが良い感じで」

「最大展開数の三分の一くらいでいいですかね」

「いや、半分にしようじゃないか。この場を大きく覆えるくらいでないといと、支配できない」

八十七個。

それだけのソウルの塊を、不可視化させてから飛ばす。それらは等間隔に並んでいき、戦う予定の場所のほとんどへと行き渡った。敵たちは処理してこようとはしない。見えていないのか、そうするまでもないと思っているのか。

翼の音。

少し上を見れば、竜が大きく口を開けて急降下してくるところだった。横に飛んで逃げても、上手く口の向きを変えて炎を吐き出してくる。

かなり範囲が広がった。だから、細かく塊を二個踏んで、より遠くへと迅速に回避する。

体が流れる先に、鋭い牙があった。

普通なら動きようのない空中で、狼の口が迫っている。

斜め上の塊に触れて、地面の方へと吹き飛んだ。

着地しても、キアランの刃が追撃を仕掛けてくる。

下田はそれに対応しようとしたが、側面にアルトリウスがいるのに遅れて気がついた。ひと呼吸の間に、彼は首を飛ばされ、四肢を切り落とされる。

哲学的思考を、する。魂のありかはどこか。意識は何を媒介とするのか。心臓に宿るとする人もいれば、脳の中だと言う学者もいる。だが、実際はどうなのか。もしかしたら、どちらも間違っているのではないか。

あるいは、どちらも合っている可能性もある。

下田は頭から下を再生させた。同時に放った回復の光が、首なしになった胴体を包む。そして徐々に頭が出来上がっていった。

膿まみれの自分の顔と、目を合わせる。

そして、意気揚々とハイタッチをした。

「よ」

「よう、僕」

「分裂は上手くいったね」

「妙な気分だ」

「膿を分けたから、スムーズに行けたみたい」

「やっぱり、魂は全身にあるんだね。だから簡単に自分を増やせる」

実勢に言葉を交わしたわけではない。ただ目線を合わせているだけで、意思の疎通を行うことができた。他人同士なら、そうはいかない。つまり、素晴らしい味方が増えたということになるのだろう。だが、これ以上はやる必要がない。核を増やしすぎても、リスクが大きくなるだけだ。

だから後は、久慈の分身能力で十分だろう。

不可視化を解除させた十五人の下田が、一斉に周りへ火球をまき散らした。

反撃はしばらくやってこない。

炎が吹き荒れた後、同時に下田達は散開した。

意識の分割ができるからこそ、こんなことも行える。

全員が、一つの対象に向けて疾走した。

多数戦の定石二つ目。

とにかく、数を減らすこと。

その時点で一番弱い個体を集中攻撃。

途中で、三体がオーンスタインに首を飛ばされた。

キアランの曲刀が、四体を刻んでいく。

ゴアの矢が二体を団子状に巻き込んだ。

アルトリウスが、三体の胴を寸断する。

いかに彼らとて、取りこぼすことはある。何せ、下田の集団は全員が空中を蹴って爆発的な速度で移動していた。ただ地面を蹴って真つすぐ移動するのではない。張り巡らされた魔術の仕掛けが作用し、下田達をピンボールのように無茶苦茶に跳ねさせていた。

抜け出した三体が、同時に並列詠唱を行う。

一人は足を犠牲にして。

一人は右手を犠牲にして。

最後の一人は、顔全てを代償に。

竜殺しの雷を、叩き込んだ。

彼らは直後、広がった炎に焼かれていく。その内の一人は本物の下田だった。ちなみに先ほど分裂した個体は、オーンスタインによって完璧に殺されている。短い生涯だった。全身を熱さに包まれながら、合掌する。分裂個体と、

落ちていく竜に向けて。

「はい、一匹目〜」

正直、大したことではなかった。いくら竜とは言え、その大きさも、伝わってくる迫力も、比べ物にならない。あの黒竜や紫竜の方がよほど怖かった。あれらと比較すれば、まるで背伸びした子供のようなものだ。騎士たちの集団の中で、明らかに浮いた存在だった。大きな穴だ。

仕掛けておいた呪術で、着地先にいた大狼を牽制した。次はその獣を狙いたかったが、すぐにアルトリウスが立ち塞がってくる。

では、三番目の目標に向かうとしよう。

下田は透明になった後、爆発で加速していきながら、金色の巨軀を
目指した。

「お腹すいたあ」

膿に開いた口がもごもごと喋る。気持ちの悪い声だった。それに口自体の見た目も獣じみていて嫌だ。常によだれを垂らしており、吐き気のような赤黒い口腔を見せつけてくる。

ぼこぼここと、黒い塊が波打った。下田は何かを解放したい衝動に駆られて、見えない体を解除する。

「僕も。もっと気持ちのいい食べ物ほしい！」

笑いながら、首を曲げる。骨を解す。

左肩が異常に盛り上がってから、二本の腕が突き出てきた。それは真っ黒で、どろどろと常に何かがあったり落ちている。

増えた手同士を擦り合わせて、炎を膨らませていく。あつという間に、家屋一つを丸ごと焼けそうな大きさになった。拡散の詠唱もきち

んと織り交ぜて、スモウへと投げつける。下田も一緒にそこへと突っ込んでいく。一緒に踊るような気分です。

爆炎から離れようとしているスモウ。だが、逃げきれないはいないようだった。腕の一部が焼けただれている。

そして全身がぐずぐずになった下田も、炎の中から飛び出した。その目はずっと、相手の首へと向けられている。

その疾走は、容易に止められた。オーンスタインの槍が下田の鳩尾に刺さり、雷が炸裂。彼の上半身はほとんど吹き飛び、首がくるくると回った。

それをボールのように見立てて、スモウが槌を直撃させる。その直前に、下田の下半身から出た膿の手が、奇跡の光を一瞬で広げていた。

スモウの頭上に首だけで出現した下田は、口から剣を伸ばしている。実体のあるものではない。ファランの速剣に似ているようで、違う。その構成は呪術によってなされていた。

赤い一閃が、スモウの後頭部を通り過ぎる。

地面につく前に、下田は下半身を元に戻していた。

そして、自分の攻撃の結果を確認する。

金色の巨体には、確かに、傷がついていた。スモウの頭には一筋の傷が走り、じゅうじゅうと煙を上げている。

下田は口にくわえていた炎の剣を、手に移動させた。

「新発明じゃん」

「ファランの炎剣?」

「ファラン要素どこにもありませんが」

「じゃあ、名前どうするの?」

「シモダの速剣はどうだ」

「だっさ」

「センスが皆無」

「炎の速剣でいいじゃん」

「無難が一番だねえ」

力技のようなものだ。

ファランの速剣は、魔術で構成されている。その剣に、無理やり呪

術の炎を流した。これはかなり繊細な技術が要求される。少しでも計算が狂えば、魔術と呪術が混ざり合ってしまった、どちらも潰れてしまう。二重の呪術をするようなものだった。今の下田にとっては、容易いことだ。

だが、スモウは笑みを深くしただけだった。よく見れば、金装飾の剥がれた中で、彼の素肌らしきものが見えている。灰色に近い、人間とは明らかに異なる肌だ。露出している傷部分が、さらに炎を強めている。それは、下田の呪術の炎ではなかった。その巨体自身が発している、別種のものだ。

「うわ、卑怯だ」

「外装は魔術耐性を持ち、中身は呪術が無効になっている。優秀な生物ですね」

「攻めにくいな」

「でも…」

膿に開いた口が、愉悦で歪んだ。

「ワタシの一部には、耐えられなかったみたい」

スモウは膝をついた。口を押さえて、咳き込んでいる。それだけでは足りずに、地面に向かって血を吐き始めた。徐々に体全体の痙攣が始まり、離された大槌が地面に転がる。

不可視化を解除した膿が、その傷から入り込んでいた。膿の、ほんの一部だ。だがそれだけでも、相手にとっては猛毒になり得るようだった。

「二匹目と」

とはいえ、おそらく殺すまでにはいかない。スモウ自体の生命力が馬鹿げているので、さらに数倍の量を入れる必要があるだろう。だが、彼がもはや戦闘に参加できないのは確かだった。

下田は左手に炎の剣を、右手に魔術剣を顕現させる。どちらにも、透明の膿を流し込んでいた。相手を斬ると同時に、注入できる。

このタイミングかな。

大口を開けて、笑い始める。それは純粹な嘲りだった。こちらを注目する敵達全員に向かって、嘲笑を浴びせる。

膿の口も、同時に笑ってくれていた。こういう所は、なかなか気が利く。下田の声と混ざり合い、不快な和音となつて周囲に響いた。何て、無様だろう。この者達はこれから、どんどん数を減らされていくことになるのだ。こんな子供っぽい高校生なんか。太陽に対して何の信仰心も持っていない、誇りもない、地球人なんか。

アルトリウスの大剣が来る前に、瞬間移動した。

できれば今度こそ狼を狙いたいのだが、やはりどうしても守りが固い。深淵渡りが、どうしても阻んでくる。だから再び妥協した。この時点で、二番目に弱い敵を狙う。

背後からの一撃を、剣槍の男はかわした。が、直後に下田の蹴りが顔に当たる。それでも体勢を崩すことはなかった。

妙なのは、この相手はおそらくグウインの血族だというのに、あまり周りから敬われていないということだった。特にオーンスタインは、初めから一度も視線を向けてはいない。まるで見ることにすら我慢ならないと言わんばかりに。

因縁の相手であるはずの竜が共にいたのは、何か関係していそう。現に灰竜がやられても、誰も動揺は見せなかった。邪魔な道具がいなくなった程度の注意を向けただけだった。

下田は、事前の話し合いの内容と合致したのを確認した。正直ほとんど信じていなかったが、近くでその器を視ると、あながち間違っていない事実に見える。ちぐはぐな感じが、より確信を強めていた。

ならば、狙うのはやめる必要がある。警戒していた攻撃も、剣槍の男は使ってくる心配がなかった。内部の状態を考えれば、領ける話だ。

だがそのまま攻めることはやめない。他方から伸びてくる線が限界まで熱くなるのを、待っていた。ぎりぎりまで、狙いを気取られないようにする。仕留めるための一撃は、間合いに入ってから。

炎の伝う大剣が、鼻先を通り過ぎる。

ソウルの矢が十本、下田の顔に到達しかけている。

同時に全てを分解してから、魔術の塊を踏んだ。

ウインとすれ違う瞬間、左腕を動かす。剣先の膿が、相手の体を求めて伸びていく。

が、その前に、大剣が爆発した。

全身が飛ばされる。大したダメージではないが、距離を取られた。と思つたら、既にウインは眼前にまで迫っている。

彼の右手が青白く光る。

下田もまた右手をぶれさせる。

フアランの速剣同士が、衝突した。

「ひよつとして、俺狙いだつたり？」

「喋るな。吐き気がする」

唯一だった。まともに術を使ってくるのは、ウインだけだ。後は全員容赦のない近接で攻めてくる。下田にとつて一番嫌なのは、武器で押し切られることだった。それにゴーの弓矢も分解できない。相手のほとんどが、対術師の戦い方を心得ている。当たり前、話だが。

離れると、大量の速矢を放ってくる。一度に分解しきれない量だったので、やむなく一部を体で受ける。それが終わると、ウインは少し溜める動作に入った。

その隙をつくなどという愚かな選択はしない。下田は既に、できるだけ離れた場所に再出現していた。だがそれでも、彼を狙った奔流がやってくる。建物のいくつかを貫通し、勢いがほとんど衰えることなく到達した。

こういうことばかりしてくるなら、ありがたかつた。

反詠唱を成功させ、青白い光が散っていくのを見る。

建物の壁の隙間から、

屋根から、

崩れた外壁を破りながら、

アルトリウス、キアラン、オーンスタインが接近する。

許容量を超えている。

整理をするために、遠く離れた屋根に座標を指定した。消失。

再出現。

直後、全力で跳んだ。

それでも、太腿に矢が刺さる。

放たれていた二本目が、腹の臓器をかき乱した。

見えない体を使う。

移動の奇跡を再使用。

「芸がない」

発動は、しなかった。

つぶやいたゴーを見る。彼は杖を取り出していた。そこから、紫色の陣が出ている。

喉の詰まり。

しかし、すぐにその感覚は意味がなくなった。

三本目の矢によって、下田の顔半分が破壊される。

一番に追い付いてきたキアランが、二度、下田の背中を短剣で刺した。

「おぐえ…」

全身が揺らされる。

今度は、上手く分解できなかった。キアランの短剣には、おそらく猛毒がある。最初に喉へ刺された時は対応できたのだが、今は他のことにも意識を回さなければならなかった。

はやく。

はやく、距離を。

膿から出ている手が、雷を作る。それはキアランを狙ったものではなかった。既に到達しかけているオーンスタインの雷槍に対応するためだった。

が、直前でアルトリウスが膿を斬る。

雷の軌道がずれる。防ぐことのできなかつた雷槍が、到達してしまつた。

下田の半身が弾け飛んだ。残つた方も硬直しかけている。当然、その隙を狙わない相手ではなかつた。

アルトリウスは、膿へさらに深く大剣を刺した。

下田は嘲笑した。
狙い通りだ。

膿はすぐにその大剣に纏わりつき、凄まじい速度で移動した。その体から針を生やし、アルトリウスの腕に潜り込もうとする。それは実際に成功し、相手の中へと膿が入り込んだ。

が、直後には吐き出される。アルトリウスから出てきた一部の膿は苦しんでいるかのように震えると、干からびていった。

あ、そうだった。

朦朧とした思考。

深淵に耐性があるんだっけ。

「がああああああ」

血を吐き出しながら、下田は自分を爆発させた。自分の身体の中に仕掛けておいた呪術が荒れ狂う。それを事前に察知していたのか。相手は全員既にある程度の距離まで後退していた。

膿の部分だけ残った肉片を瞬間移動させ、そこからぼこぼここと再生していく。既に、沈黙の禁則は断ち切っている。だが、これからも適当なタイミングで再発動させられたら、面倒だ。それに、遠くから矢で妨害されるのはもう我慢ならない。瞬間移動を一番読んでいるのも、ゴーだった。

その巨人へと標的を定め、背後に出現する。

しようとして、何かに引つ張られるような感覚が強烈にやってきた。

成すすべなく流されていき、気がつけば広場に落とされている。

「シモダの、得意技はよくわかったよ。散々見せてくれたおかげだね」
ウインは笑うような口調だったが、その兜の中の表情はわからない。わかったのは奇跡に干渉されたということだった。特に座標指定の部分が異常に乱されている。彼をどうにかしなければ、まともに発動できなくなったのは確かだった。

「殺す、殺す、殺す」

発想を単純にした。

要は、全員殺せばいい。

そうすれば、何も心配は無くなる。食事もたくさんできるし、一石二鳥というわけだ。

下田は叫んだ。それは怒りでも、絶望でもなく、歓喜だった。どんな楽しいという感情があふれてくる。憎い敵を裂いて、その臓物を口にする瞬間が待ちきれなかった。こういう、期待に胸躍らせている時間も心地いいのだと理解していた。

膿が波打つ。ほどなくして、膿の二本腕の間が、大きく盛り上がり始めた。

赤い目に、獣のような口。

それらを持った顔が、飛び出してくる。人間性の怪物。それは下田のバランスを崩さない程度の大きさと顕現している。

その両手も、魔術剣と呪術剣を作り出した。四本の実体の持たない武器を、相手のそれぞれに向けて構える。

二本の攻撃を、キアランはこともなげに避けた。

透明な手から放たれた火を、アルトリウスは盾で受けきる。

オーンスタインの槍を紙一重でかわし、その勢いを利用して、呪術剣を振るった。

そういうふりをして、下田は飛ぶ、既に周囲には百五十以上の魔術が展開されている。こうしている間にも、同時展開可能な数が増えていくようだった。この調子でいけば、相手は逃げられなくなる。ここは、自分専用の戦場にも変わったも同然だ。

高速で跳ねていきながら、ゴーの狙い撃ちも避けていく。視界が急速に変わっていく中、確かにキアランの背後を取れたのを、確信した。膝を狙った攻撃を、相手は跳ぶことで回避する。そこまでは、予想通りだった。どんな技量の持ち主であろうと、場所と動きを制限していけばやがて捕らえられる。

流れるように、剣を縦に振るった。同時に、他の三本を異なる軌道で弾けさせる。いかなる対応をしても、避けたり、受ける余裕があるとは思えなかった。

相手が、空中で移動できる手段を持たなければ。

キアランが既に自分の背後の空中に立っているということを、一瞬

遅れて把握した。

振り向きながら、他の二本はアルトリウスへの牽制に、残った一本は呪術の扇に変換させて、オーンスタインへと振るった。

だが、全てが空振りに終わった。

相手は全員、宙に浮いている。

「はっ。」

アルトリウスの顔は逆さになっていた。

オーンスタインは下田の側面まで跳ねる。

キアランは片足で、不可視化されたソウルの塊にくっついていてる。

脳内で、一斉に皆が文句を言う。

「こいつら……」

「ドン引きですよ」

「きつも」

「やられたねえ」

「僕のこれ、オリジナルだと思ったんだけど、既に確立された技術なの？」

「あるいは、今この場で真似されたという可能性もあります」

「きしよいなあ」

「これだから天才は……」

しかも、普通魔術同士を近づけたら反発しあうはずだ。それが前提の移動術なのだから。しかし、特にアルトリウスとキアランが反対のことをしているようだった。彼らの足のソウルと、下田の設置した魔術が結合している。どうやるのか、まるで見当がつかない。

三人の攻撃で、下田は肉片になった。

欠片ごと無理やり転移させる。危ない所だった。今ゴーが沈黙の禁則をかけてきたら、本当に詰むところだった。あの巨人が機会を逃してくれて助かった。ウインが転移を邪魔する様子もなかった。

再生を終える。

相手の位置を把握しなければ。

が、理解をする。

そんなことは、もうする意味がないのだと。

オーンスタインの槍が、下田の顔を刺して、もぎ取っていた。下を見る。

既に、アルトリウスとキアランが彼の首から下を破壊しつくしている。

彼らは下田の魔術を利用して、瞬間移動についてきていた。もちろん、転移先を読まれていたのもあるのだろう。だがそれだけでは決して待ち伏せすることはできない。彼らの脚力が異常であることの証だった。

詠唱が、できない。

これ以上ない瞬間で、ゴーが杖を振るっていた。

オーンスタインが槍を振るい、下田の顔が飛んでいく。

体を戻していく途中で、雷槍が炸裂した。

地面に転がる。

「かひゅ」

風前の灯のような呼吸をして、視界に移る者達を把握した。

イリーナが走ってこようとして、直前で足を止めている。

実織達は、動くことができないようだった。

イアンは、目を逸らしている。

由海と幸成は、下田の全身が戻っていくのを、吐きそうな顔で見ていた。

二人の傍には、ちとせが寝ている。

「まだ、希望はある」

「そうだねえ」

「だって、こんなに残っているもん」

「たくさんあるよ」

正直、足りないという気持ちがあふれ出してしまいそうだった。何かを足していかなければならない。取り入れなければならぬ。そうしないと、勝てないからだ。もつともつと容量を増やしていかなければ、これ以上戦えない。

ウミが楽しそうに囁いてくる。

「憎き敵の血肉を糧とし」

「え？」

「憎き敵の血肉を、糧とし？」

「ああ…」

必要なのは、あれだ。

精神なのだ。

気合が足りない。

真剣さが及んでいない。

絶対に負けないのだという決意を、行動で刻み込まなければ、乗り越えることはできないのだろう。それ以上に、したいという欲求がどんどん出てきた。下田には、もう、それを醜悪だと考える思考さえも残されていなかった。

「愛する女の血肉を、楔とする」

やっぱり、一番気になるのは。

ちとせの味だ。

彼女の三分の二くらいを味わったら、負けなくなるだろう。今、彼女は気持ちよさそうに眠っているし、苦痛は感じないはずだ。主菜を初めに取るのは作法からそれているかもしれない。でも、急がなければ。

銀髪の火守女が、抱え上げられていた。

キアランは多少、気を遣っているようだ。それも当たり前なのだろう。捧げるための大切な薪なのだ。自らの王の計画を完遂させるために、なくてはならないものだ。

だから、それをどうにかするためにも、食べなければならぬ。

下田は墮ちきろうとしていた。それまでに経験した繰り返しは何もかもを否定し、深淵の化物にも劣らない畜生へと成り下がろうとしていた。

彼の喉が、待ちきれない瞬間への期待で、ごくりと鳴る。

ぱちぱちと、何かが弾ける音がする。

広場の篝火に、光が戻っていた。

首を動かし、炎の温度を遠くから手繰り寄せる。

裸足が、石の地面に降り立った。

61. 撤退戦

目の前の、ただ一人の女性だけが映っている。

この感覚は、自分では形容が難しかった。

今まで、なかつたからだ。四六時中思考にこびりつくほど、大事に思う存在を持ったことは。それが二度と手の届かない場所に行ってしまう、他全てがどうしてもよくなるほどの喪失感に襲われたことは。

彼女と出会ってからは、何もかもが初体験だった。新鮮な気分です常にいられた。

猛進している意識が我に返ったのは、目の前に腕が放られた時だった。

「せんせえっ！」

叫びと共に、光が出現する。

あらかじめ予想していたことなので、貴樹は冷静にかけた両腕部分を前に出した。その傷口にぴたりと、奇跡の光に包まれた腕から先の部分が密着する。下田による治療は、一瞬で完了された。神経の接続さえも容易に成功した。

貴樹は、右の指先を動かした。そして、左の指先をぶらぶらさせる。確認はそれだけで十分だった。足は変わらずに前へと進み続けている。

もう一つの奇跡の光が、貴樹の右目を覆った。潰れていた視界が明るくなっていく。

『返事はするな。おれが一方的に話す。グウインに聞かれるからな』
内部から聞こえてくる声は、荒くなっていった。

『時間はあまりかけないでくれ。おれは無限にあの爺を抑えてられるわけじゃない。とにかく目的の完遂だけを心掛ける。お前が冷静でなくなると、それだけ失敗の可能性が高くなる。グウインに付け込まれる隙は作るな』

「ぎりと、指の骨を鳴らして返事をした。

頭の血管をぶち切れさせながら、大口を開ける。

「離せやあああああああああああああ！」

『あの、ぼくの言ったこと聞いてました？』

平常心を保てという方が無茶だった。

今の貴樹は、ただ目標に向かって駆けることしか考えていなかった。

橙の閃光が視界を埋める。

進行方向を瞬時に直角に曲げ、恐るべき速度の雷が通り過ぎていった。一瞬だけその術を観察する。かなり、見覚えのある術だ。ゲームとしてこの世界を楽しんでいた時、何度もお世話になった。条件さえ整えれば、ボスをも一瞬で屠る強力な術。

だから、それを使ってくるような相手に対しては、それなりの警戒を持った。

拳を、振りかぶる。

肩甲骨の筋肉が盛り上がる。

放たれた刺突に合わせて、拳を撃ち込んだ。

固いもの同士が激突するような鈍い音と共に、火花が散る。先に逸らされたのは、オーンスタインの槍の方だった。横に宙返りをして、その黄金獅子の腰から弾ける雷を避ける。

二、三度フェイントを入れてから、上段の蹴りを相手の側頭部に直撃させた。オーンスタインは体勢を崩さないが、受けた槍ごと飛ばされる。

後ろの方で興奮したような叫びが聞こえた。

無視する。

左右に反復横跳びをしながら進んでいき、飛んでくる大矢をかわした。その内の数本は、殴り落として完膚なきまでに破壊する。魔術もいくつか飛んできたが、今の研ぎ澄まされている貴樹にとっては、相手にする価値もない攻撃だった。

火守女を抱えているキアランは、彼女を振り落とす。貴樹に向かって戦闘態勢を取る。だが彼にとっては構えた敵よりも、乱暴に扱われた火守女のことと頭が一杯だった。顔がかつと熱くなった後、一気に冷やされていく。

光が走った。

その影に、銀の刃が潜んでいる。
貴樹は両手を滑らかに動かした。

(お、なかなか良い武器じゃねえか)

黄金の残光。

暗銀の残滅。

初代の作品でかなり有名だったらしいその二つの武器を、知識としてだけ知っていた。

両の刃をつまみながら、観察をする。纏っているソウルだけを考えても、素晴らしい意匠の作品だ。どうせ使えはしないが、展示用として確保するのもいいかもしれない。

キアランは身を引こうとした。しかし、貴樹は当然相手の武器を離さない。指先だけで相手の動きを制限している。彼女は予備動作も見せずに、体を回転させた。足の先から出したソウルの刃を、貴樹の喉元へと疾走させる。

そういった動きを全てなぎ倒すようにして、全身を殴り飛ばした。一瞬にも満たない攻撃だったが、キアランはしっかりと受けている。その武器にも、損壊は見られなかった。軽く殴ったくらいではびくともしない程度の耐久はあるようだ。そして上手く後ろへと飛び、衝撃の緩和と離脱を同時にやった。

間隙を狙ってきたソウルの矢を全て破壊し、半身を起こそうとしている火守女を見た。

「手を」

彼女は片側にある貴樹の瞳を揺らしながら、口を数度開け閉めした。喉の先まで声が出かかっているが、最後の段階を超えられないといった感じだ。言われて反射的に伸ばしかけた腕を止め、いけないことであるかのように自身の胸元へと戻した。

が、その動作が完了する前に、貴樹が掴んでいた。

「あ——」

火守女の口が動くが、言葉は途中で切れた。

肌が鳴る。

彼女は何度も瞬きをしながら、自分の頬に触れた。

そして緩く叩いてきた貴樹の手を見る。

彼の表情は何とも言えない罪悪感で歪んでいた。彼女へと、たとえ戒めのためだとしても、衝撃を与えるのは嫌だった。この瞬間だけ、泣きそうになるほど胸が張り裂けた。

「灰様、」

「またも彼女は最後まで言うことができなかった。」

火守女の顔は貴樹の肩に押し付けられている。

「やつと…」

首を曲げて、相手の頬に自分の顔を擦りつける。彼女の吐息が肌の表面を撫でていった。それも含めたあらゆる感触を、心に刻み込む。永遠に忘れないと決めた思い出の一部へと含める。ほとんどキスするようにして、口を白い耳に付けた。

「やつと、君を抱きしめられた。長かった。凄く、遠回りをしてきたよ
うな気がする」

それまで少し抵抗するように動いていた相手の腕が、止まった。力が抜けたように垂れ下がり、貴樹の腰あたりに落ち着く。

「灰様、私は、決めたのです。己の使命を果たすと。ですから、もう…
「認めない」

貴樹は満面の笑みを向けた。

「君が優しいのはわかってる。だから、一生のお願いだ。俺の全てを懸けた頼みだ。ずっとそばにいてくれ。拒否はできない。権利もない」

彼女のソウルが、震え出すのがわかる。きっと今もし自分にも瞳があったのなら、彼女の目と一緒に混ざり合っていただろう。視線が合わさり、一つになり、どこまでも溶けていったのがわかっただろう。どこまでも深く。

「いいか、これは確定事項だ。君は、俺のものよ」

首を前に曲げる。

大剣が、彼の後頭部を狙って突き出されていた。

「あ？」

振り向くと、アルトリウスがさらに刃を動かしたところだった。大

それ別に、貴樹へ向けられたものではない。彼のすぐ横で膝をついている、火守女への言葉だ。彼女は無傷のようだった。それを確認して、貴樹は下田を見る。相手もまた、じっと視線を合わせてきた。

「おい、手を出せ」

「はい？」

「気持ち悪い膿がない方な。さっさとしろ」

下田は不思議そうにしながらも、右手を伸ばしてきた。

間髪入れずに、その手を思いつき叩く。とはいえ、本当に本気でやると普通にへし折ってしまうので、手加減はした。

さらに怪訝そうな目になった下田に対して、真つすぐ言う。

「よくやったー！」

基本的に、地球産の存在に対しては何の価値も抱いていなかった。同じ人間としては全くとらえていない。しかし、下田が今まで持ちこたえていたことに関しては、それなりに驚いていた。相手の力量を考えると、奇跡と表現してもまだ足りないのだ。だから、一応の礼儀として称賛してやることにした。有用な道具に対するものでしかないが。

だが、その言葉は深く下田の心に刺さったようだ。目を大きく開いた後、そこから大粒の涙がこぼれ始めた。口をわなわなと振るわせて、今にも崩れ落ちてしまいそうなほど膝を曲げる。嗚咽を漏らしながら、何度も頷いた。

「僕、僕は、頑張ったんです。だから、こうして……。ううう。今までのことは、ずっと戦ってきたのは、無駄じゃなかった。無駄じゃなかったんです」

（え、よく見たらこいつ、なんで凄く気持ち悪い構造になってんだ？）
貴樹はすぐに先ほどの言葉を撤回したくなった。

「あ、ああ。まあ、間に合ったのは俺が頑張ったおかげだったけどな」
「間に合った？」

下田は動きを止めた。

「ん、そっくだろ？」

その表情を感ずる。

下田の顔はどろりと溶けていた。目は貴樹の全身を満遍なく撫でていき、呼吸もまた荒くなっているようだった。その舐めるような視線は、盲目の貴樹にも嫌というほど感じ取れる。思わず一步下がった。

「そう、ですね。ぎりぎりでした。間に合って、良かった」
(気色悪っ)

背筋がぞわぞわしていくの感じて、貴樹はさらに距離を取った。

「それと、もうわかっているとありますが。ちゃんといいますね」

「あいつを集中的に狙うか？」

「いえ、他を全部殺してからにしましょう。念のためです」

「…そうだな」

体を敵へと向けると、ちょうど火の粉の舞う騎士が手を振ってくるところだった。その見た目は、明らかに王の化身と酷似している。ダークソウルⅢにおける最終ボス。多彩な攻撃をしてくる。

しかも、そのソウルの構造は異様だった。多数の命が無理やり一つに押し固められているような醜悪さ。王の化身というのは、歴代の薪の王の思念が積み重なって誕生したという考察もある。それならば、その構造にも納得がいく。

「やあ、ようやくまともな話ができそうだ」

貴樹はかなり驚いた。あのかつて大苦戦したラスボスが、優男風の声だったとは。

「話せるんですね」

「そりゃあ、恩人の君とはちゃんと言葉を交わさないとね」

「? どういうことですか」

「声で気づかない? 俺だよ。ウインさ」

「は?」

「元ハリウッド俳優。今は、そうだね、救世のために奉仕している感じかな」

貴樹は耳をほじくった。

「誰だよ。そんな奴いたか?」

自分に尋ねてきたのだと、下田は少し遅れて把握したようだ。

「いや…、先生が助けたんじゃないんですか？　絵画世界とかいう場所です」

さらに数秒ほど怪訝そうな顔をした後、ぼん、と手を鳴らした。

「ああ、いたわ。いたいた。どこのゴミかと思えば。でも、おかしくないか。あいつ、見た目変わってるんだけど」

「僕が殺しましたからね」

「死んでねえじゃねえか」

「一応、内臓とかはたくさん引きずり出したんですけど、上手く逃げられましたね。多分、体という概念にあまり固執していないんだと思います。かなり、しぶとそうです」

「おいおい、ちよつと待ってくれよ」

ウインは軽く笑った。兜から覗く目は冷えているままだ。

「まるで、俺を殺す前提みたいな話になってるじゃないか。やめてくれ。俺は、交渉がしたいんだ。君達にとっても、有意義なものになるはずだ。そうだろうか？」

そして、貴樹と下田がいる場所とは別の方向に顔を向ける。

「カオル」

言われた彼女は、ちよつど実織を抱きしめている所だった。ウインの声がかかると、大げさなほどに肩を震わせる。実の妹に再会できた涙が、今度は別の意味に思えてくるような怯え方をしていた。

「酷いな。本当に。君は凄く頑張ったはずなのに、結局全てを無駄にするのかな。俺や仲間たち全員を犠牲にして得た約定を、無下にしてしまうなんて。傷つくよ。正直な所。無力感で一杯だ」

「わた、私は…」

「聡明な君なら、わかっているはずだ。まだ、機会は残されている。一時の気の迷いくらいなら、当然許そう。我等に弓引く行為を、流すこともできる」

「その、声と……」

彼女は、さらに強く実織を引き寄せる。一見知らない修道女に抱き着かれている実織は、今もまだ訳が分からないという顔をしていた。相手の腕力に抑えつけられていなければ、とつくに離れていただろ

う。

「喋り方を、い、今すぐ、やめて。貴方みたいな存在が、ウインを真似ないで。おぞましい。吐き気がする」

「いやはや。全く」

困ったように、王の化身は自分の頭に手を当てた。それだけの動作で、腕から揺らめいている炎が舞った。

「タカキ、君ならわかるだろう？ みんな冷静ではないんだ。俺達は何も、好きでこうしているわけじゃない。できればこれ以上、無辜の命を失いたくはないんだよ。だから、合理的な話し合いをしようと言ってるんだ」

「何のために話し合うっていうんだ？」

「当然、戦わない道を見つけるためさ」

ウインは大剣を下ろし、指を二本立てた。その間、他の騎士達は黙って佇んでいる。大狼の傍で、アルトリウスとキアランが何かを話していた。ウインの方へと、視線を向けながら。

「わかるかい。現状、我々が対立してしまっているのは、二つの譲れない問題があるからだ。使命と、罪。俺が提案するのは、そのどちらもまとめて解決できる道なんだよ」

貴樹は無言で先を促した。

「今、タカキのほとんどの生徒達には、もう薪がない。グウインが回収したからね。だから、火継ぎのために身を捧げてもらう必要はないんだ。これで大体のわだかまりは無くなったと思う」

「は？」

「うんうん。わかるよ。タカキにとっては違うね。そも、君が今ここでこうしている原因は、ほとんどが火守女のためだろう。彼女の中にある薪の存在は、確かに君と我々の対立点になってしまっている。でも、安心してほしい。俺は、薪を別へと移すことができる。そのやり方を十分に心得ているんだ」

そして、下田を指差す。

「二つ目は、ほとんどごちら側にとっての譲れない点だね。我々も和解を望んでいるが、それにしたってけじめというものは必要だ。彼

は、駄目だ。手遅れなんだよ。許しがたい罪を犯した。我々に差し出してほしい。しかるべき処分を与える」

「具体的には？」

「火守女の薪を、シモダに移すんだよ。彼は元から、グウインを殺した時に生徒達の薪の一部を回収している。全て含めれば、最後の薪の王が誕生するというわけだ。生まれて間もなく、捧げられる運命を持つ王が」

貴樹は顎に指を当てて、下田を一瞥した。下田の方は肩をすくめて、口をすぼめる。

「どうだい？ 良い案だと思わないか？ 彼一人の犠牲で、全てが救われる。これ以上の解決策は、ないよ」

少しの間誰も言葉を発しなかった。思考するような時間。ほとんどの視線は、下田に向けられている。注目されている彼は、穏やかな表情をしていた。膿が浸食している外見を含めると、そういう印象はほとんど薄れてしまうが。

貴樹は、呆れたような顔をしている。

「うーん」

「結論は出たかな」

「まずお前、交渉の意味わかってるか？」

「どういうことだい？」

「交渉ってのは、対等な立場の者同士がやって初めて、まともに機能すると思うんだが」

「そうだね。だから、相当に譲歩してるのは理解してくれるかい？」

俺は血も涙もないってわけじゃないから」

「わかってないな」

下田は言って、にやりとした。

貴樹も、さらに邪悪な笑みを浮かべた。手に、力を籠める。

「俺達の方が立場上に決まってるんだろ。雑魚共が」

貴樹は下田の首をもぎ取った。

司令塔を失った体が、ゆっくりと後ろへ倒れていく。返り血をたくさん浴びながら、貴樹は吐きそうな思いでその体を蹴り飛ばした。無

残なそれは勢いよく転がっていき、広場の長椅子に激突する。

そして首を強く握りしめて、ウインの方へと放った。

一連の行動を、生徒達や彼と共に篝火から転移してきたホークウツド達が、衝撃を受けたかのように見ていた。

ウインは足元に転がる下田の首を一瞥し、肩をすくめる。

「これは、どういうことかな」

「別に首だけでも、薪として機能するんだろ？ あとはそれに彼女の薪を移せばいいわけだ。はい、和解成立」

貴樹はおどけて掌をかざした。

「何というか、君の精神性には驚かされる」

「最低限の損得勘定をしたただけだ」

重い静寂が、一瞬この場を支配した。

貴樹の本性を多少なりとも知っている者達は、こういうことになるとほとんど予想しながらも、そうして欲しくはないという思いもあっただろう。それが打ち砕かれ、何とも言えない複雑な顔をしていた。

彼の表面的な優しさを本質だと信じ込んでいた者達の衝撃は、とても大きく大きい。彼を茫然と見つめる目には、裏切られたという思いが多分に含まれているだろう。

「それじゃあ、早速始めよう。火守女をこっちへ」

「わかった」

彼女を立たせる。その瞳は戸惑うように向けられてきていた。彼女に優しく触れ、大丈夫だと安心させるように頷く。彼女の手を握り数度振った後、離れた。

そしてウインの背後に出現した貴樹は、思いつきり拳を振るった。その殴打は正確に相手へと直撃し、体を武器ごと吹き飛ばす。

「なわけねえだろばあああああああああああか！」

ウインが吹き飛んだ先には、既に転移し終えている下田の首がいた。一瞬で全身を回復させて、下田はファランの速剣を振るう。鎧を貫通し、見事に腹に青白い光が刺さった。瞬間、多量の膿を流し込む。スモウが倒れた時の五倍はあった。

が、倒れはしない。

異変が起きたのは下田の方だった。彼の体の方へ、膿を伝って炎が流れていく。危険をすぐに察知して、彼は消失した。

直後、ウインは手を伸ばすと、何かをつかむような仕草をする。そして思いつきり引つ張る動作をすれば、下田が出現し、その足元に転がった。彼の首に向かって、大剣が振り下ろされる。

貴樹がその側面に走り込んでいた。

今度はウインも把握していた。貴樹の拳を後ろへと飛びながらかわす。

下田は立ち上がると、笑いかけてきた。

「うまく合わせてくれて、助かりました」

「楽勝だ」

貴樹は心の中で舌打ちした。

(思ってたのと違う…)

隙について相手に攻撃するところは、彼も考えていた。しかし、ついでに下田を本気で排除しようとしたのも事実だ。気がついたらウインの背後を取っていたので、流れのままに何となく殴ったら、何だか協力する筋道が立てられていた。

下田のような存在が、自分と肩を並べて曲がりなりにも戦えている状況が、不快だった。ゴミは、ゴミのまままでいてほしい。相手の油断を誘う使い捨ての道具にするくらいがちょうどいいのだ。

「結局、どちらもまともじゃなかったってことか」

ウインは悲しそうにつぶやいた。

「タカキ、君はもう少し賢い人だと思ってたよ。彼我の戦力差を、把握できるくらいには」

「してるだろ。死ね」

「…仕方がない」

ウインの横に、騎士達が並んだ。

大狼がうなり始める。

剣槍の男は一番後ろで静かに佇んでいた。

「無理だよ。無理…」

貴樹は振り返る。薫は既に実織から離れて、こちらに近づいてい

た。彼女の顔にははつきりと恐怖が浮かんでいる。

「すぐに殺される。どうにかして、逃げないと」

「おかしいな」

耳にまた指を入れて、ほじくった。

「なぜか、ゴミが喋ってるんだが。そうするだけの脳味噌はあるらしい」

「私は、真面目に言ってるの。いくら貴くんが規格外の力を持っていようと、相手はもつと常識から外れている。私はかつて、それを身をもって思い知らされた。だから」

「おい、アバズレ」

まだ続けようとする彼女の顔を、掴む。少し握る力を強めて、口をふさいだ。本物の姉の体だったら、そんなことはしなかっただろう。気持ち悪くて、直接触れることすら躊躇われるから。

「どの分際で、口出ししてんだ？ 今、殺されないことを幸運に思うんだな。黙ってるカス」

離された後、少しの間息を整える。貴樹の方を処置なしと言いたげに見つめてから、今度は下田の方に視線を向けてきた。

「二度、ロスリック城で会ったよね。君なら、わかるはず。奴らの強さが」

「それは、」

下田は倒れているリリアーネと、ユリアを指差した。

「薫さんだけの意見かもしれません。フリーデさんに訊きます。自身の妹たちを傷つけられても、何も感じないんですか？ 黒教会の三姉妹の繋がりは、その程度のものでしかないんですね」

驚いた顔は、やがてフリーデらしい表情に変わっていった。

「タカキから聞いたのですね。ですが、私もカオルと同じ意見です。抗うと考えることすら、愚かでしょう。今は、私たち全員がこの場を脱する方法を考えなければ」

「駄目ですよ」

下田は自分の肩に生えている顔を撫でた。その口からは涎が滴り落ちている。膿の怪物と同じように、唇の端を吊り上げた。

「殺さないよ。奴らにはそれだけの罪がある。その死体も入念に辱めないといけません。そうするべきだからです。手伝う気がないのなら、下がっててください。邪魔です」

「貴方達は…」

貴樹と下田は前へと進み始めた。一度も振り返ることはせずに。

ウインが、首を傾げる。

「二人だけで向かってくるつもりかい？」

「二人？」

下田が鼻で笑った。

「冗談でも面白くないですよ」

彼らの横に、数人が出てきた。

ウインは肩をすくめる。

「いるだけだろ？」

ホークウツドは、じつと大狼の方を見つめる。それはミレーヌも同じだった。彼らはどちらも相反する感情が混ざったような微妙な表情をしていた。憎むべきなのか、喜ぶべきなのか。

アンリとホレイスは、静かに剣を抜いていた。その顔達は一度貴樹に向けられてから、よどみなく敵へと据えられる。そこには、次元の違う相手に対する戸惑いや怯えはない。貴樹をかなり信じてくれていたようだった。

「やっぱり、あの時殺しておけばよかった」

クリムエルヒルトはウインを睨んでいた。それから下田の方へと顔を向け、妙な顔をしてから、逸らす。

「何ですか？」

「…いえ、何も」

下田は軽く笑ってから、固有能力を発動させる。瞬時に自身の周りに五体の分身を作った。その瞬間だけアンリ達の反応が乱れる。

「慣れてくださいいね？ 貴方達一人一人に付けますから。適当に利用してください」

同時に分身達が思い思いの挨拶をした。それを見て彼らはさらに

複雑そうな表情になった。一番衝撃が大きそうなのは、アンリだ。彼女がまだ祭祀場にいた頃の下田を考えれば、そうなるのも当然だろう。

「皆さんは、あの後列にいる男と、大弓の巨人に対処してください。できれば、狼も抑えてくれると助かります。特に」

下田は一人を指差す。

「クリムエルヒルト。貴方が要です。僕との転移線を上手くつなげるのは貴方だけだ。全体の状況を見て、動いてください」

彼女は挑戦的に笑った。

「太陽の長子と、鷹の目を同時に相手しながら？」

「いや、その必要はない」

貴樹はやや早口で割り込んだ。

「戦うな。クリムは、篝火の復活に集中してもらおう。イリーナさんと、ひもりんの三人で協力してくれ。なるべく早くできるように」

「旦那様、それは」

敵達は既にゆっくりと動き始めている。とはいえ、武器を動かす気配は全くない。貴樹達の行動を待っているかのように。

「俺達が時間を稼ぐ。撤退戦だ」

貴樹は手をさりげなく口に持っていく、誰にも気づかれないようこぼれだした血を拭いた。ノミの荒い息遣いが一瞬だけ聞こえたような気がする。その限界が迫っていることは確かだった。刻限が来れば、耐久値の有無など関係なくなる。

貴樹と下田が、突出して進み始めた。同時にウイン達も歩みを速める。ゴーが弓を引き絞り、相手の集団へと向ける。その矢が放たれた瞬間、既に両方の先頭が激突していた。

アルトリウスの大剣と、貴樹の拳がかち合う。お互いがお互いを弾いた隙に、下田が割り込んだ。両手から速剣を伸ばし、アルトリウスを狙う。

が、その行動を直前で止め、疾走する雷を同じもので相殺した。オーンスタインはすぐに次の手を打ってくる。槍を構えながら、鋭く突進してきた。

貴樹が、その頭を狙う。同時に下田も呪術の発火をかぶせてきていた。

呪術をウインが分解し、貴樹の蹴りはキアランの一撃によって軌道を逸らされる。

ウインの背後へと移動した下田は、その首を狙って膿を放つ。が、アルトリウスが盾でそれを押し出し、地面に落ちた。

声が重なる。

一つは、下田。もう一つはウインのものだ。

そのどちらも、貴樹にとつては聞いても意味がわからないものだった。今までの経験で、術を発動させるための言葉が存在することはわかっている。しかしよほど単純なものではないと、その細かい性質を理解するに至らない。

だから、結ばせる前に突っ込んだ。

オーンスタインの刺突をかわし、キアランの光を避ける。

が、既にウインは詠唱を止めていた。大剣に炎を纏わせ、貴樹の攻撃に合わせようとしてくる。

直後には、そこから離れた場所に立っている自分を自覚した。

首を狙うアルトリウスの剣を殴りつけ、自らと入れ替わった下田と目を合わせる。いつの間にか、彼との間に妙なつながりができているのが感覚できた。白いつながり。奇跡の光とよく似ている。

下田はウインの大剣で腕を飛ばされると、すぐに口を動かした。同時に貴樹は、何もないはずの所に向かって拳を向ける。

再び両者の位置が転移によって交換され、貴樹の放った殴打は正確にウインの側頭部を捉えていた。だが、別に相手の意表をつけたわけではない。

大剣の刃を斜めに傾けて、ウインは攻撃を流していた。拳が滑らさず、振り切った貴樹の体へと複数の刃が迫る。どれも、決して侮ることのできない強さを持っている。

意識を、深く沈みこませていく。流れを感じるように。

向かってくる攻撃は四つ。

難しいことはない。

その内の二つに、対応すればいいだけだから。

オーンスタインの槍を、拳でかち上げる。

キアランの曲刀を蹴る。

一方で、上に出現した下田が、貴樹の頭に手を置いて体を回転させる。足の先に出した呪術の塊と、太腿から伸びるフアランの速剣でウインとアルトリウスを退けた。

貴樹の殴打をかわしたキアランが、着地した下田の肩に短剣を突き刺す。一瞬で抜いて、うなりをあげて迫ってくる回転蹴りから離れた。

血を吐きながら、下田は腕を上げる。そこから輪のように炎が噴き出していく、貴樹と彼自身を覆う防護のような形になった。

それでも構わずに、ウインが切り抜けてくる。彼が手をかざすと炎の輪は呆気なく消えていった。

その大剣を、下田の魔術が相殺した。派手な爆発音を響かせて、その軌道がやや上へと逸らされる。その隙を狙おうと貴樹は地面を蹴ったが、直後に両手で頭を庇わなければいけなかった。

アルトリウスの一撃が、両腕に炸裂する。自分から思いつきりのけ反るような体勢になって、衝撃を最大限に殺した。それでも足が数歩分後ろへと擦れていき、腕の痺れも少しだけ残った。これでも片手で振るわれている武器の一撃だ。

追撃をしようとしたアルトリウスは、何かを察知したかのように自らの後方へ盾を構える。そこへちようど、瞬間移動してきた下田の刃が激突した。群青の騎士の腕に力が籠められる。攻撃が当たった瞬間は引き気味に盾を移動させ、直後に強烈な勢いで押し出した。

体勢の崩れた下田の首がオーンスタインに飛ばされる。

その口は、既に詠唱を終えている。

目の前に出現した首を、貴樹は即座に掴み、全力で投擲した。血をまき散らしながら、下田は瞬きの中に全身を再生させる。さらに魔術の爆発で加速しながら、周囲に膨大なソウルの弾丸を弾けさせた。

貴樹は疾走する。

アルトリウスは盾で完璧に防いだ。

ウインは向かってくる全てを分解し終えている。

オーンスタインはそもそもかわす必要がない。装甲が魔術の悉くを通さない。

だから、最も隙が生まれた相手に向かった。

キアランは一撃目をかわすことができた。左の正拳突きも、曲刀で流した。反撃としての短剣をぎりぎり避けた貴樹は、彼女の懐へと潜り込みながら、腕を掴んだ。強く引き揺さぶってから、足払いをかける。相手の体が浮いたのを確認し、己の体を支点にししながら背負い投げをする。

相手が叩きつけられる予定の地面には、既に下田の呪術が設置されていた。キアランが近づくのを感知し、火柱が立つ。

それがキアランに直撃する前に、大盾が降ってきていた。吹き出す炎と激突し、それでも勢いを失うことなく地面まで押し付けられる。

膝をついたアルトリウスへ、下田の足が向かっていった。そのつま先から、ソウルの剣が飛び出している。正確に相手の喉を狙っていた。

が、ウインの呪術がそれを阻止した。一連の行動の間に、アルトリウスはキアランの腕を掴み、自分側に引いた。貴樹の拳が彼女の顔すれすれを通り過ぎていく。

アルトリウスとキアランは一瞬だけ互いを見合った後、貴樹へと同時に接近した。

黄金の曲刀を、二本の指でつかむ。

貴樹はそのまま横に回転しながら跳び上がり、大剣の薙ぎ払いを避けた。キアランの武器を掴みながら縦横無尽に動き回り、彼女の体勢を崩そうとする。

だが、不動。

キアランは掴まれた曲刀を少しもずらされることはなく、また、体幹を崩してもいなかった。その華奢な体格からは考えられないほどの筋力。

ぐい、と貴樹は何かに引かれる感触を覚える。

気がつけば、キアランの顔が目前にまで迫っていた。彼女に引つ張られたのだと理解した瞬間、大盾が彼の側面にぶつかってくる。

辛うじて防護のない顔は避けたが、それでも生まれた隙をカバーし
きることができなかった。転がりながら体勢を整えようとしたとこ
ろで、オーンスタインに背中を突かれる。固いもの同士がぶつかった
時の、鈍い音が響いた。

「顔か」

オーンスタインは指先から雷を顕現させ、凄まじい速度で放つ。そ
れは明らかに貴樹の顔面に向かっていった。さすがにここまで戦えば、
弱点を看破されるのも当たり前だろう。

獅子と貴樹の間に出現した下田が、一瞬で雷の線を形作った。それ
は見事にオーンスタインのそれと合わせるような軌道になっており、
狂いなく相殺される。

直後、ウインのフアランの速剣が下田の頭を貫通した。

その血が貴樹の顔面にもかかる。

吐きそうな思いになりながら、地面に手をついた。綺麗な逆立ちを
して、足を広げながら回転をする。

受ける選択をしたのは、アルトリウスだけだった。

歯を食いしばる。

踵が大盾に食い込み、それでも勢いが止まらなかった。今までの比
ではない轟音が鳴り、彼の蹴りが盾ごと相手を押し込んでいた。

わずかな変化だった。それでも群青の騎士は、少し意外そうに構え
直す。その盾の装飾に、ひびが入っていた。おそらく、内部にまでは
全く到達していない。表面が剥がれそうになっているだけだ。

もっと変わっていたのは、アルトリウスの腕だった。盾を持ってい
る方の手甲が割れていた。その隙間から血が流れ出している。

他の騎士達も下がって、やや戦闘に間が空いた。

貴樹は拳の骨を鳴らす。

(なんだこいつら。まさか俺が、今まで本気を出してやってるとでも
思ってたのか?)

「最高、ふいふ。これこれ。最高だ……」

隣の下田は不気味に笑っている。ちらりと視線を投げると、晴れや
かな表情になって言ってきた。

「先生は、何個くらい意識を増やしてるんですか。五つはありそうですね。もしかして、六つ目もあるんですか？ ふふ、やっぱり違うや」

（こいつ、何言ってるのかさっぱりだぞ。なんで俺はこんなキチガイと一緒になってるんだ…）

アルトリウスをじつとりと観察する。その鎧を特に入念に見た。形、施されている装飾。懐かしいようでいて、たった今出会ったかのような新鮮さも感じる。その騎士自体のことは、たいして知らない。とても有名なキャラクターらしいが、初代の作品をやっていない彼にとっては思い入れも浅い。

だが、その装備は違った。彼は幾度となく、アルトリウスの一式装備を利用していた。一番気に入っていたと言つてもいい。そしてよくよく見てみれば、オーンスタインの見た目にも非常に馴染みがあった。貴樹としても、相手側の方が外見において圧倒的に勝っているのは肯定できる。

（ただし俺の顔が一番整ってるけどな）

さりげなく後ろを確認する。

三人の火守女が、篝火に明かりを戻そうとしていた。見た所、作業は半分に到達しかけているようだ。ここにやってくる際、無理やり繋がりを辿ったせいで、かなり篝火に負担を強いてしまった。おかげで何とか間に合ったのだが、そのしわ寄せが今やってきている。

ホークウツド達は、全員で剣槍の男を囲んでいた。問題なく戦えているようだが、巨人の放つ弓矢がそれを絶妙に妨害している。下田の分身が対応しているが、その分だけ責める手数も少なくなるので、拮抗した状況が続いていた。

こちらとは、大違いだ。

貴樹は首を曲げて、さっと素早く額の汗を拭った。

（さてと、どうやってひもりんと一緒にバックレよっかな）

その思考は、もう逃げの一手に染まっている。

（強いな。一匹くらいぶっ殺すつもりでいたが。勝てねえ）

本当なら腕どころか全身を粉々に破壊するつもりだった。今まで

はずつとそうなつてきていたのだ。だが今は相手の体も、その盾さえもほとんどダメージを与えられなかった。明らかに違う。これまでに戦つてきた敵とは。

『ぜえ、残り、五%だ。くそ、こっちも限界が近い。答えなくていいが、まじでやばい。やばすぎる』

黙れ下僕、と深層の方で思考する。そんなことは、感覚としてもわかつていた。既に胸の中がずきずきするほど熱くなつてきている。いつ血を吐いてもおかしくはない。

もちろん、追い詰められていることなどおくびにも出さなかった。不敵な笑みを浮かべながら、貴樹は前へと進む。同じくにやにやしている下田には、今の状況が理解できているのだろうか。とち狂っている頭の中など、興味はない。

「怖いのか？」

初め、それがアルトリウスの声だとわからなかった。聞こえてきた方向からして、明らかにその青い房の付いた兜から発せられている。「はっ。」

貴樹は首を傾げてみせる。

続きは、高速で迫る刃だった。

縦の軌道。

それだけを感じし、体を横にずらす。

気がつくくと、音が遠くなっていた。

かつて、ゲルトロードによつてもぎ取られた右耳。それに加えて、もう片方の耳が今まさに地面に落ちていた。頬を血が零れ落ちていく。とっさに手で出血を抑えようとしたが、そういうことをしている場合ではないと気がついた。

アルトリウスは小さく踏み込んできて、大剣を弾けさせた。

今度は横の軌道。

今までと違うのは、速度だ。

アルトリウスは両手で武器を握っている。盾は既に捨てていた。腕一本分の力が新たに加わったくらいで、何かが変わるわけではない。

というのは、常識の範囲内だけだった。

しやがむか、跳び上がった避けるべきなのはわかっていたが、その思考をした時点で既に刃が首に到達しようとしていた。桁違いの剣速。肌食い込み始めるのが、極限にまで引き伸ばされた感覚の中でくつきりと理解できた。

そして大剣を下田が蹴り上げたことは、遅れて認識した。

彼は器用に体を曲げて、もう片方の足をアルトリウス本人へとふる。その足の先から、膿の混じった魔術剣がうなりを上げていた。

相手が離脱したのを確かめてから、下田は振り返ってくる。

「ぼうつとしてたら、殺されますよ」

貴樹は片目で、下田を観察した。

「お前、見えてたのか？」

「はい？」

「あいつの攻撃だよ」

少し照れたように頭をかく。

「かろうじてですけど。さすがに奴らの速さにも慣れてきました」

「死ね」

「え〜」

ぎりぎりと、歯を鳴らす。

あつてはならない。

認めるわけにはいかないのだ。

貴樹は自分を至高の存在だと微塵も疑っていないなかった。外見、性格、そして強さ。全てにおいて最高に位置するのだと認めていた。だから、下田の方がより早く相手に適応しているなどと、考えるのも馬鹿らしい。

両手を動かし、拳同士をぶつけた。

まだまだ自分は本気を出していない。そう言い聞かせた。

その動作の一部始終を見ていたウインが、大剣を地面に向けた。

「頃合いかな」

貴樹は後ろへ飛んだ。矢が風を切る音がしたからだ。

実際、大きな竜狩りの矢が突き立った。間違はなく、ゴーが放ったも

のだ。それは明らかに一つの事実を示していた。
横を見る。

兜が飛んでいる。

腕を抑えながら、顔を晒したミレーヌがホークウツドに引つ張られている。彼女のいた所に、巨狼の牙が通り過ぎた。

ゴーの蹴りをかわし、アンリは自分の刃を伸ばして何とか顔を狙おうとするが、その前に剣槍の男に吹き飛ばされる。ホレイスが彼の背後を取り、攻撃した。振り向いて男は対応し、やや体勢を崩す。

その隙をクリムエルヒルトが突こうとするも、ゴーの弓によって阻止された。彼女の片手が飛ばされたが、すぐに奇跡を発動させる。

そこへ、巨狼が突っ込んだ。が、既にクリムエルヒルトの姿はなく、彼女は貴樹の側に再出現していた。やや息を荒げている。

「手伝わせてください。篝火の方は順調に進んでいますから」

視線は剣槍の男に鋭く向けられてから、四騎士を順々に廻った。そのたびに、瞳にこもっている憎悪の炎が、手に持つ呪術に反映されていくようだった。

「その赤毛、憶えがあるね」

ウインは腕を組んだ。その時だけは、彼自身の雰囲気から少しずれていた。まるで、別の誰かの記憶を身に纏っているかのようだ。

「思い出したぞ。竜の娘に魅入られたイザリスの」

彼女は誰の声を聞くこともなく、前へと飛び出そうとした。

しかし、もうその必要はなくなっている。彼女の目の前まで、オーンスタインが飛んでいた。相手が反応する間もなく、槍が振るわれようとしている。

だが、竜狩りは途中で武器の軌道を変えた。

それが、クリムエルヒルトと位置を交換した下田にとっては、不意を突かれた形となる。彼の放った呪術が見事に避けられて、槍の刺突が彼の喉を潰した。

魔術の爆発で下がった彼は、慌てて近寄ってきた彼女を手で制した。

「治療を…」

「いい」

「だけど、」

下田はかっと目を開き、叫んだ。

「手伝うつもりなら、前を見ろ。集中しろー!」

彼と貴樹が同時に、腕を振るった。

キアランとアルトリウスの一撃とぶつかる。

その間隙に割り込もうとしたクリムエルヒルトは、ウインに殴り飛ばされた。追撃の炎の斬撃は、下田によって分解される。

その隙を狙われて、彼はウインに両腕を斬られた。

飛んだ肉片が、ゴーによって射止められる。

貴樹は目の前のキアランを殴りつけようとしたが、その前にのけぞった。アルトリウスの大剣が顎を削り取っていく。痛みなど、気にも留めていなかった。ただその顎に向けて槍の底が直撃した瞬間だけは、目の前が激痛で眩んだ。

脳もまた、大きく揺らされているのが分かる。誰かの叫び声が聞こえるが、意味を認識することができない。剣の腹がぶつけられ、鼻の骨が粉碎する。既にこの瞬間には貴樹の意識はほとんど飛んでいたが、腕は平常時と変わらない速さで動いていた。

その殴打を、アルトリウスは正確に受け止める。刃が揺れるのを見て、少しだけ頷いた。最後の力を振り絞った強者に感心するかのよう

に。

「旦那さ」

クリムエルヒルトは助けに入ろうとするが、強くオーンスタインに喉を掴まれる。そして地面に叩き付けられると、一度大きく呼吸してから、目を閉じた。

その黄金の鎧へ、大剣が振るわれた。

オーンスタインはこともなげに槍を振り、弾く。

「あな、貴方は、見たことあるわ」

ミレーヌは喘ぎながら、相手を睨みつけていた。

「たくさん、たくさん、人を殺していた。見たの。見てたんだから……」

答えず、竜狩りは指先で雷を操った。その全てを破壊する光は、狂

いなく彼女へと向けられている。ホークウッドは助けに入ろうとして、うなりを上げる矢をかわすのに精いっぱいだった。

決定的な一撃が放たれる前に、オーンスタインの腕を誰かがつかむ。黄金色の兜が、怪訝そうにアルトリウスを見た。

「何だ？」

「待て」

アルトリウスは、ミレーヌを観察しているようだった。特に、顔の部分に注意が向かっている。

「な……に……」

「…」

返答を得る前に、ミレーヌは膝をついた。元々傷ついていた彼女は、そのまま倒れる。ちやうど巨狼の突進で、アンリとホレイスが廃屋に激突したところだった。

「最初の作業を、終えてしまおう」

下田を喉ごと瓦礫に魔術で縫い付けた後、ウインは楽しそうに手を打った。そのまままだ暴れている貴樹に近づくと、腰を下ろす。彼の胸に手を当てると、何かしらの操作を始めた。

瞬間、あの焦がすような苦しみが強烈なほど酷くなった。胸の開いた穴に直接焼き杭を打ちつけられているような感じがする。

たまらず何度も咳き込み、口から大量の血を吐いた。もはや、ノミの声は全く聞こえてきていない。もしもう既に消えているのなら、全てが終わる。ウイン側から、引力を感じた。己の熱い何か、引つ張り出されようとしている。

「俺の時間も、終わりだ。まあまあ楽しめたよ。ありがとう」

ウインは兜の中で笑ってから、がくと首を垂れた。

同時に、貴樹の全身の力も抜けていく。熱の移動は非常に速やかに完了された。

王の化身は静かに顔を上げる。兜を外していく。

出てきた相貌は、初老の男のものになっていた。

ゆつくりと、そして丁寧な周りの騎士達は膝をついていく。その視線は一瞬化身へと向けられた後、すぐに地面に落とされた。

貴樹はごぼごほと咳き込みながら、まだ鼻につくような笑みを維持していた。

「ジジイが…」

「最後まで、退屈をさせてくれない男だ」

グウインもまた笑っていた。こちらは、讚えるような意味合いが込められているようだった。あるいは、貴樹に対する突き抜けた呆れも含まれている。

「常陽の民よ。我らはお前達を忘れないだろう」

「ちく、しょう」

「恐怖することはない。皆、同じところに行ける。罪を犯した者、罪に巻き込まれた者。そこに差分はない。苦しませることもない」

「くそが…」

我慢ならなかった。

だが、認めるしかない。

この時だけは、頼るしかなかった。自分の力だけでは、打開することができない。もともとから練っていた作戦とはいえ、貴樹はほぼ自分で状況を乗り越えるつもりでいた。だから、これは、嫌々やることなのだ。決して本心ではない。利用できる道具の一つとして、この絶好の機会にぶちまけるだけだ。

貴樹は、血の混じった叫びを上げた。

「やれ、下田アアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

復活したグウインの頭上に、肉片が出現した。まだ抵抗してくると思っていなかったのだろう。その場にいる敵は全員、やや反応が遅れた。

下田は片手を優先的に再生させる。伸ばされた腕は、まっすぐグウインの背中に向かっていた。

だが、到達する前に切り落とされる。アルトリウスはさらに追撃を行おうとする。

だが、実体の腕が本命ではなかった。透明な手がすでに、目的のものをつさらっている。

今、このタイミング。貴樹の中にいたグウインが外に出たときでな

62. トリオ

一番前に出てきたのは、オーンスタインだった。
「間違いない」

今までの印象とは、やや違う雰囲気をもとっていた。何か深く感動しているようだ。その声と視線は、はつきりとノミへと向けられている。

「ご帰還を、どれだけ望んでいたか。長子様、まさに我々の使命が、叶えられようとしています」

「はあ？」

ノミは耳をほじくるような動作をした。

「何言ってるんだお前。つーか誰だよ」

「な…」

オーンスタインは槍を置いた。

「何を、おっしゃいますか。貴方に仕えてきたあの日々は、幻などでは」

「お前も」

竜狩りを、ノミは指差す。

そしてその指は、後ろのアルトリウスに向かった。

次は、キアラン、ゴー。

最後に、グウインに向けられた。

「お前らも、知ったこっちゃねえ。どちらさんですか？」

ノミは頭の横で指先をくるくると回した。

グウインは、大剣の柄に手を置いたまま、動かない。

「一体、どうなされたというのですか。その言葉遣いも…」

「知らねえよ。…わかったか？ おれはお前ら側じゃない」

オーンスタインは槍を手取る。震えるほど強く握られていた。

ノミはふんと鼻を鳴らした後、貴樹と下田に顔を向けた。

「おれが最初に突っ込む。適当に続いてくれ」

下田は何度も瞬きをする。

「実体、あったんですね」

腰に手を当てる。ノミは少し、興奮しているようだった。

「まあな。それなりに強いと自負してる。頑張つてついてこいよ。おれの場合は、お前らの常識を超えるぜ…」

両足に雷が鳴ったかと思えば、そこから浮力が生まれていた。嵐の王と呼ばれていた所以。自由自在の機動を生み出す技が容易にノミを高速で運んだ。

真横に。

「あ」

「は？」

「え？」

無名の王の体は爆発的な速度で動き、貴樹と下田を巻き込んで右方の建物へと激突した。その衝撃でまだ損害を免れていた壁が粉々になり、土煙が上がる。そこから浮かび上がる影達は、じたばたと暴れていた。

「おい何してんだああああああああ！ ゴミ糞野郎おおおおお おおお！」

「いだっ、暴れんなって。あれ、おつかしいな」

「ちよつと、どいてくださいよ。重いんですけど」

「わ、わかった。ふんぬっ」

三重の叫びが響いた。

突っ込んだ家屋を貫通し、さらにその勢いは止まらずに、上へと吹き飛んでいく。ノミの動きに押された下田と貴樹は、途中で弾かれて別々の屋根に落ちた。

貴樹は粉碎された屋根の上で腕を組みながら、空中で回転しているノミを眺める。

「だ、だれかあああああ！ ちよつとこれ、止めてくれえええええええええ！ 久しぶりすぎて、制御がわからあああああん！ おえっ、のうが揺れる……」

ひとしきり不安定な軌道で飛び回った後、真つすぐ地面へと加速していく。派手な音をたてて墜落したノミは、呻いてから立ち上がった。

その横顔を、貴樹に殴りつけられる。

よろめいたところを、下田に股間を蹴られた。

無名の王は、少し高くなつた声で文句を叫んだ。

「何すんだあああああああ！ ぶっ」

下田のソウルの弾丸が三発、頬にぶち当たった。

「何が常識を超えるですか。今、ここで、おとぼけする意味がどこにありますか？」

「いや、真面目にやったんだけど」

「だったら尚更ゴミだろ。死ぬ。燃えろカス」

「あ？ 何だその言い草。今までと同じ立場だと思つたら大間違いだぜ？ わかるか。お前らの中で、一番強いのがおれだ。言葉遣いに気をつけろな？」

「なわけねえだろ。ノミの分際で。俺に決まってる」

「でも、先生負けそうだったじゃないですか。僕の方が多分ましですよ」

「はあ？ 何言つてんだガキめ。ママのおっぱいでも吸つてろ」

「精神年齢は余裕で僕が上みたいですわね」

「あーあ、下二人がしょうもない争いしてらあ」

「お前は底辺だ」

「期待させてこれですよ。死んだ方が良くないですか」

「お、お前ら…。そんなに言わなくなつていいじゃねえかよおお。自分で体動かすのどれくらいぶりだと思つてるんだ。ぶっつけ本番とか無理に決まつてんだろ…。ごちゃごちゃ言つてんじゃねえよ、クスとマザコンがああああああああああああ！」

竜狩りの矢が、放たれる。

オーンスタインが雷の槍を躊躇いなく三人へ投擲した。

グウインの片手から、巨大な火球が生み出され、すぐさま標的へと向かっていく。

対する三人は、一斉に動いていた。

ノミは一瞬で雷を回し、弾ける輪を形作つた。その中心へとちようど槍が吸い込まれていき、雷撃に囲まれて消滅する。

下田は膿の口と同時に反詠唱を紡ぎ、グウインの複雑な呪術を分解した。

貴樹は何も考えずに拳を振り抜き、ゴーの矢を殴り落とす。

「あん？ まだ力が残ってるぞ、あのジジイに全部取られたんじゃねえのか」

「そこは、おれの成果だな。お前の中に残り火の一個を残した」

「ま、言いたいことは後で言い合いましよう」

「おれが先陣切るぞ」

「またほざいてるよ」

「見てろ。慣れた」

ぞ、とノミが言い切った瞬間、オーンスタインは身をよじった。しかし、逃れることはできない。一瞬で開いた距離を食い潰して、ノミは黄金の兜に手を伸ばす。横から迫る槍を己の武器で弾き、喉を掴んで押し倒した。

「長子、様…」

「よお、久しぶりに見たら、随分と罔々しくなってるじゃねえか」

ノミは倒れているクリムエルヒルトを一瞥する。

「おれの侍女に手え出してんじゃねえよ。ん？ 同じ痛みをくれてやろうか？」

喉の手に力を入れる直前、彼は宙返りをする。それで振るわれていたアルトリウスの大剣とキアランの曲刀から離れることに成功した。

下がるノミとすれ違うようにして、下田と貴樹が突進する。

彼らが激突した上から、剣槍を構えたノミが降ってきた。刃の先が地面につくと、膨大な量の雷が流される。ほとんどの者は察知して、その場から飛び上がっていた。ただ一人奇跡の存在のせいで意識が遅れていた下田が、体を硬直させる。足のほとんどが破壊されて、一瞬だけ使い物にならなくなった。

「あつ、ごめん…」

「いや、まあ」

未だ連携に不安が残るものの、大きく戦力が増したのは確かだった。四騎士達は、明らかに今までよりも警戒を強めている。それは攻

めの配分をやや減らすほどの変化だった。彼らの中には、まだ、グウインの息子に対する畏れというものがあるのだろうか。特にオーンスタインの動きが鈍ったのはかなり有利に働いていた。と、考えるのはまだ早いかもしれない。

「よい」

向かおうとしていた騎士達に向かつて炎の散る手が振られた。彼らはそれだけの動作で、あらかた理解したようだ。一斉に後ろへと下がっていく。そうして、貴樹達と近い位置にいるのは、グウインだけになった。

「お？ ジジイ一人で相手するつもりか？ 余裕だな」

「囲んでボコリましょう。あれの呪術と魔術は完封できます」

「いや、二人は手を出すな。おれがやる。へへっ、生身じゃ久しぶりだな親父どの。もう絶縁してつから、関係ねえけどなあ！」

ひゃあっ、と小悪党のような気合を上げた直後、ノミは胴体を寸断されていた。

その表情は、ぽかんとしている。お手本のような混乱模様だった。既に下田が反応しきっている。

両手から、繊細な光をほとぼしらせ、後ろへと傾いていく上半身を覆った。

だがそこまでした時点で、グウインの斬撃が下田の両手をも飛ばしている。当然、彼にとってはこのくらいで止まることはないだろう。しかし、その攻撃にはまだ追加があった。彼の切り口が出火し始める。そのせいで、完治の速度に影響が大きく出た。

さらに下田の首を狙うのを防ごうと、貴樹は動いた。が、直後に頬に多大な衝撃を感じる。グウインが大きな得物を振るう途中で静止させながら、強烈な肘打ちを直撃させていた。貴樹の意識は一瞬乱れて、その隙をつかれることになる。

上と下をつないだばかりのノミが、剣槍を振るった。それが貴樹に向かう炎の大剣と激突する。かに思えたが、それはあくまで最初の方だけだった。実際は当たる瞬間グウインは己の武器の軌道をうねるように変化させ、相手の刃をすかしていた。

手ごたえの無い感触に無意識に反応したのか、ノミは雷を顕現させていた。が、不発に終わる。グウィンもまた同じものを生み出し、とつくにぶつけていたからだ。そのまま大剣を伸ばし、ノミの腰を刺し貫く。鈍った体に足をついて、蹴り飛ばした。

懐に入り股間に膝を打ちつけようとした貴樹。彼は顔を掴まれ、持ち上げられる。そのまま勢いよく投げられた。そしてさらに背後をとろうとした下田も、側面に突然現れた結晶槍によって受けに回らざるおえなくなる。

貴樹とノミが転がっている方へ、下田も魔術の連撃を受けて飛ばされてきた。

血を吐いているノミへ、奇跡の光が飛ぶ。彼は少しの間咳き込んだ後、他人事のように淡々と言った。

「こう、あれだ。なんだか、親父の全盛期に近いあれこれを感じる」

貴樹はノミの頬に向かって折れた歯を吐きつけた。

「つまり？」

「こういう時、ぴつたりな慣用句を知ってるか？」

下田は空を眺めている。

「逃げるが勝ち」

「正解。シモダは賢いな」

「死ね」

三人が起き上がると、グウィンと騎士達が並んで向かってきていた。大王の顔には、息子に対する多少の思いすらも感じられない。ただ、使命を阻む敵を排除することだけしか、相手の集団は考えていないようだった。前まで少し動揺していた様子のオーンスタインも、平常をすっかり取り戻している。

「先生」

「ああ、わかってる」

「え、何？ おれはわかんないけど」

「他に、逃げる手段は思いつきますか？」

下田に言われたノミは、周りを少しの間見回した。

「おれの、なんだ、乗り物は使えるかもしれねえ。今も憶えてくれてい

るかどうかわからんが、小柄な竜がいる。呼びかけをすれば、どこからでも駆けつけてくれるはずだ」

「多分、僕が殺したやつですね。あそこに転がってるじゃないですか。だからそれは却下で」

「…は？　かつての相棒みたいな存在だったんですけど」

「襲ってきたので。正当防衛です」

「過ぎたもんはしゃあねえが。なるほど、状況は理解した」

火守女とイリーナは既に手を止めている。どうやら、篝火の機能は完全に戻ったようだった。後は彼女たちでも、下田でも貴樹でも、操作を開始させればいい。だが、そういう状況は当然、相手もわかっているだろう。

短い間だけでもいい。グウィンたちに転移を邪魔させない瞬間が必要だった。少しでも注意をそらすことができれば、離脱は成功するだろう。貴樹には、何も犠牲にせずにそうできる方法が、何もなかった。横二人のどちらかを、それとも両方を囮にしようかと、思考を進めていく。

「お前はそういうことを、平然な顔で考えられる男だよな」

ノミはにやりとする。貴樹の肩を叩いてきた。

「そんな必要はない。おれに任せろ」

「それ、聞くの三度目くらいなんですけど」

「戦わず、気を逸らす方法はある。いいか、おれがこれからあることを叫ぶ。奴らはほぼ確実に、隙を見せるはずだ。お前らはその瞬間に、必要な奴ら全員の転移を完了させてくれ」

ノミは、貴樹に視線を合わせて、感慨深そうな表情になった。

「感謝する」

「あ？」

「お前のおかげだ。お前が、おれに気付かせてくれた。一番大事な事を」

その時だけは、彼は貴樹の影響からほとんど抜け出していた。かつて多くの竜を屠ったとされている伝説の存在にふさわしい風格を備えて、貴樹に軽く頭を下げる。だが、その貴重な姿はすぐにまた変

わかっていき、グウィンたちに向かつて顔を向けた時は、生意気な子供のように不敵な表情を浮かべていた。

「聞け。かつての同胞達」

その言葉で、グウィン達の進行は止まった。

全員の注目が集まる中で、ノミはいつそ清々しそうな様子で大声を上げた。

「おれは、プリシラを愛しているー!」

てつきり声を出すふりをして下半身を露出するのではないかと疑っていた貴樹は、操作をしながらも微妙な思いになった。これの一体どこが、相手の注意を散らす言葉なのだろう。ただ自分の気持ちを表現しているだけだ。

だが、グウィン達への効果は劇的だった。特にオーンスタインなどは槍を取り落とし、そのまま膝から崩れ落ちようとしている。他の騎士達も、明らかな驚愕をノミに向けていた。まるで、世界の真実を突如知らされたかのような混乱ぶりだった。

グウィンもまた、向かおうとする足を止めていた。表情に大きな動きはないが。視線は違う。今まではもう見限っていた感じで断絶していたノミへのそれが、今は一直線に向けられていた。その瞳は、何かを思考するかのように揺れている。

とはいえ、もはやノミ本人がそれを認識することができたのかは不明だろう。もう彼は存在が消えている。他のこちら側の者達も皆、この広場からいなくなっていた。転移はほとんど完了された。

「^{しんがり}殿か。何ができる?」

グウインの言葉に、ただ一人残された貴樹は首を傾げる。

「何か、勘違いしてるみたいですね。俺ももう行きますよ。でもどうせ、追ってくるつもりなんでしょう?」

手を掲げて見せる。そして指を三本、真つすぐ伸ばした。

「俺達は、逃げも隠れもしません。三日後、再びこの場所で決着をつけましょう。まだ、そちらの刻限も余裕があるはずです。お互いに納得のいく結末にするために、万全の準備をしてください」

「理解に窮している」

グウインは口に生えた薄い黒髭を撫でた。

「我々が、みすみすお前達を逃がすと思うのか？」

「別に止める気はありませんけど」

貴樹は肩をすくめる。本当にそう思っているような雰囲気を作り上げた。

「断言します。貴方達はその時、考えを改めることになる。火継ぎなどよりもよほど世界のためになることへ奉仕を希望することになるでしょう。だからそれまで、よく考えていてください。自分たちの道の正しさを」

貴樹は堂々としたまま、自らを転移させた。結局ちゃんと話し終えるまで、相手が襲ってくることはなかった。

周りの空間が認識できるようになると、二つの影がすぐ横を通り過ぎたのがわかった。

下田は膿にまみれている方の腕を伸ばし、篝火の中核にある剣を引き抜く。すぐさま凶暴な炎が彼に襲い掛かったが、肥大化した膿が全てを呑みこんだ。

一方のノミは、あらゆる攻撃をしながら篝火を破壊し始めた。火継ぎの大剣がなくなった状態では、その強度も底が知れている。彼の武器、体によって、組み立てられている木の構造物があつという間に崩れていった。

「そこまで、しなくてもいい」

下田が振り返ってくる。

「ひやひやさせないでください。先生だけいなくて、どうなることかと」

「話があったただけだ。おかげで、三日の猶予を作れた。追手の心配は

ないぞ。多分」

「事前に相談してくれ。全くよ」

ノミは息を大きく吐き出してから、その場に腰を下ろした。

だが、今の状況はあまり休めるものではないことになっている。

すでに祭祀場の者達のほとんどは、武器をこちらに向けてきている。その中のフォドリックが、鋭く貴樹たちを睨みつけてくる。

「大勢引き連れて、ここを乗っ取るつもりか」

正確には、その視線は下田に向けられていた。

「さあ。僕がここを指定したわけじゃないので。できれば、二度と戻ってきたくなかったですけど」

「まあ、とにかく落ち着いてください」

貴樹が立ち上がって両手を広げても、彼らは下がらなかった。

「僕達には、戦闘の意思はありません。ただ休ませてくれればいいんです」

「それは、随分と都合の良い頼みだと思わないか？」

ジークバルドは、珍妙な兜を下田から逸らした。どうやら彼らはほぼ、下田に対して整理できない思いを抱えているようだ。一体、何をやらかしたのだろうか。どうやらはゴミは相変わらずゴミのままらしい。このままジークバルド達に便乗して、下田を排除できるチャンスだと考え始めた。

しかし、貴樹が実際に言葉を発する前に、皆の前に出てきた者がいた。

イリーナは、胸に手を当てながら訴える。

「どうか、彼らの言葉を聞いてくれませんか？ 皆様の所から移動して、様々なことがあります。それに、私達には大きな負い目があるはずです。取り返しのつかないことを、たくさんしてしまっただけです。私は……、もう、どちらが正しいのかわからなくなりました。ですが、傷ついた者達を休ませることには、何の迷いもありません。どうか、お願いします」

大きく、何かが地面に打ち下ろされる音がした。

槌を置いたイーゴンが、腕を組んで彼女を見ている。

「血迷ったか。ついにそこまでおかしくなったというわけだな」

彼女は、自らの騎士に対してあまりしたことのないであろう態度を貫いた。決然と、その厳しい視線にむかって相対した。

「いいえ。これははつきりとした、私の意志です」

「…おい」

「はい？」

イーゴンの指が一点に定まる。

「頬の血は、何だ。そいつらに、やられたのか？」

「あ、ち、違います。その…」

底から響くような声が続く。

「もういいだろう。交渉する価値もない。使命から逃げた者の末路は、決まっている」

彼が向かおうとする前に、イリーナは彼女にしては強く叫んだ。

「この方たちのせいではありません！ これは、私が、今まで使命だと信じていたことにつけられた傷です。ですが、ほとんど私自身のせいで…」

「どういうことだ」

そこからは、貴樹が説明をした。グウインの軍勢のことを、祭祀場の者達は静かに聞いていた。だが、途中からイーゴンはその場からいなくなっていた。自室に戻ったのか、別のどこかへ行ったのかは、よくわからない。だがその歩みにみられる怒りは、貴樹たちに向けられたものではなくっていた。

それでもまだ受け入れない意見の方が多かった。それをひっくり返したのは、ヨルシカだ。

「やむを得ません」

彼女は立って、視線も向けずにノミを指差した。

「要求は呑むしかないでしょう。どちらにせよ、私達の抵抗は無意味です。これを見れば、貴方達でもわかるはず」

ノミが、あの太陽の長子だと全員理解した段階で、既に交渉は終わっているようなものだった。祭祀場の者達の中で迷いが生まれて、やがて賛成の意見が多くなっていく。結局今までは違うぎこちない

雰囲気の中で、受け入れられることが決まった。

「あーっ、疲れた疲れた。やっとな終わったなあ」

下田の声は空しく響いた。誰も、彼のそばにはいない。祭祀場の者達はもちろんのこと、生徒達も近づこうとはしていなかった。唯一画家の少女だけが、何か声をかけようとして、はっとしたように表情を凍らせていた。

貴樹は既に別のことに意識が言っている。何をどうすべきは今後の自分に任せるとして、今はとにかく一息つきたかった。その体は既に火守女へと向かっている。戦闘のせいで先延ばしにしてきたことを、清算するつもりでいた。

「先生」

下田が呼び止めてくる。これ見よがしに舌打ちをしてから、そつちを見た。

「んだよ」

「とりあえずは、安全は確保されたんですよね？」

「まあな。それだけか」

「それと、これからどうするべきかも、わかってるんですよね？」

下田は大きく伸びをしていた。今にでも欠伸をしてから寝っ転がってしまったそうなほど、全身の力が抜けているようだった。

「ああ」

「よかった。これで、アキヒロも満足できたね」

貴樹は瞬きをしてから、鼻で笑って火守女への歩みを再開した。まともじゃない男の相手をするほど、無駄なことはない。安心するように顔を俯かせた後、下田はぶつぶつ何かをつぶやき始めた。

「うるさいうるさい…。でも、大事だよそうだよね。うんうん。最初、最初は大事だ。選択肢はある。いっぱいあるねえ。黙れ、黙れ、黙れ。アナタの方がうるさいよ。うるさい！ あははははは」

下田は、片手を動かし、肩から生えている膿の顔をもぎ取った。ちやうどその時、意識を失っていたちとせが身じろぎをする。

そこへじとりと目を向けながら、彼は膿の塊を貪り始めた。ほぼ全員がぎよつとそれを注目し始めても、続けている。食事の時間はすぐ

に終わり、人間性の怪物はほとんどその体を失っていた。心なしか、蠢く膿の勢いも弱まっているような感じがする。

貴樹は今度こそを無視をして行こうとも考えたが、相手の指がこちらに向けられるのを確認して、注意の半分を下田へと向けた。

「ど、れ、に」

下田は楽しそうに目をつぶっている。興奮で頬を真っ赤に染めている。細かく見れば、その口の端からだらだらとよだれがこぼれているのがわかった。

指は貴樹に向けられた後、言葉に合わせて方向を変えていく。

「し、よ、う、か、な」

ちとせへ。

ヨルシカへ。

クルムエルヒルト。

「か、み、さ、ま、の」

その、法則性は分からない。

とにかく選択に迷っているようだった。だから、何も考えずに決めようとしている。指は貴樹も含めた四人を一巡した後、また最初に戻ってきた。

ノミが、下田へと向かおうとする。その顔は厳しく引き締められていた。

「い、う、と、お、り」

指は結局、貴樹のところまで止まった。

直後、下田は横へと倒れていく。

が、その動作は九十度近くまで傾いた時、一変した。まるで倒れる力をそのまま推力に変えるように、慣れた感じで下田は疾走する。その瞳と、口と、全ての注意は貴樹の体へと向けられていた。どろどろに溶けていた。

ぼこぼここと、半身の膿が波打つ。

「せんせええええええええええ、いただきまあああああすー！」

(お、ちようどいいいな。口実ができた。踏み台おつ)

その精神状態が極限にまで来ているのは、少し前からわかってい

た。その時から立てていた計画とも呼べない思いつきを実行しようとする。ただ、下田はそこそこ強いので、余計な消耗をすることもわかっていた。そこは許容して、目障りな存在を排除する。

だが、貴樹よりも先に、ノミが走っていく。

「皆、手を出すな！ おれが何とかさすぶへえつ」

ノミの拘束をギリギリで避けた下田は、やや崩れた体勢のまま足をその顎にぶち当てた。その勢いのままノミの肩を踏みつけて、一気に飛び上がる。軌道は狂いなく、貴樹へと向かっていた。

今の通り、どうやら理性を失っても平常時と変わらない技術は維持しているらしい。なるべく波風の立たないマイルドな殺し方を考えながら、貴樹は構えた。

彼の左右では、ホークウッド達が武器を抜いていた。だがもちろん、彼らに参加させるつもりはない。例え少しの可能性であっても、彼らが傷つくようなことにはさせたくなかった。その場合、下田の死に方も非常に苦痛の混じったものになるだろう。

貴樹の考えていた戦い方も、下田がどう出てくるかの予測も、全てが無駄になった。相手は貴樹達へ到着する前に、足を止めていた。急に壁にぶつかっただかのような停止だった。

下田は、吐きそうな顔になっている。手を口へと持ってくるのと、揺れる視線を一点へ向けた。どう見ても、何かを非常に怖がっているようだった。

「なんで、お前が……」

怯えの対象となつているミレーヌは、眉をひそめた。

さらに一歩後ずさる。

「ちがう！ ここは現実なんだ！ ウーラシールがいるはずがない。そうに決まつてる。幻だ。これはまぼろし……」

大きな天啓を得た顔で、下田は笑顔になった。そして、ぼろぼろと涙をこぼし始める。嗚咽を漏らしながら笑うという、器用な事をやってのける。

「そっか、そうだったんだ。ぼくは、まだ、抜け出してないんだ。おかしいと思った。こんなに上手くいくはずない。まだ、六日間に捕らわ

れてるんだ」

膿が大きく動く。彼の片手が上がって、魔術の矢が作り出される。同時に呪術の炎も出現する。奇跡の光が、その二つの術に覆いかぶさっていく。

ばちばちと、弾けるような轟音が生まれる。

「食ってやる。ぎげんな。ぶち殺してやる…。ウーラーシール。もうお前なんて怖くない。今なら勝てる。食らってやる。糧にする。このふざけたまやかしを解いて、本当の明日を手に入れるんだ。くたばれ」

いつの間にか、下田の片手には弓が作られていた。雷の弓。そこから五本の同質の矢がつかえられている。彼の頭上には巨大な雷槍がうなりをあげていた。その全てが、ミレーヌを狙っていた。

ここへきて、さすがに貴樹も認識を改めた。どうやら下田は、さらに次の段階へと到達しかけているようだ。雷槍は分離しかけている。もしあれから複数のものに分かれて向かってこられれば、全てを守り切るのは難しくなるかもしれない。

だがまたもや、彼の考慮は杞憂に終わった。

雷の術が消失する。と同時に、下田の体が前のめりに倒れていった。

「もういい」

ノミは何かに耐えるようなまなざしを、転がった彼に投げている。そして苦しんでいる下田に向かって、さらに手を触れた。暴れるが、既にノミの操作は終わっているようだ。

下田は仰向けになりながら、背を弓なりに曲げた。口から、おぞましい悲鳴が漏れ始める。イリーナがすぐさま駆け寄ろうとしたが、ノミが強く遮った。

「近づくなー」

膿が、苦し気に悶えだす。下田の全身から、炎が噴き出してきた。それは、平等に彼の肌を焦がしていった。膿の部分も、普通の人間の部分も。イリーナはノミを押しつけてでも向かおうとしていたが、下田へ接近する前に驚いたような声を上げた。

肩から生えている膿の手が、彼女のすぐそばまで伸びていた。それは、明らかに穏やかなものではない。イリーナを捕らえ、引きずりこもうとしているかのようだった。

ノミは全員に向かつて待つよう指示をした。その間にも、下田は燃やされ続けている。彼の悲鳴が、祭祀場の広場を覆い尽くしていた。

「彼に、何を…」

「中にある残り火の欠片を開放した。膿が落ち着くまで、まだかかる」
貴樹はこの場で一番平然とした様子で尋ねた。

「どういうことだ。どうして、こいつに残り火がある?」

「知らん。取り込む機会があったんだろう」

ほとんどの者は目を背けていた。

やがて、皮脂が焼ける匂いも充満してきた。これには貴樹も辟易する。ゴミが良く燃えるのは道理だが、それで不快な思いをするのは明らかに割が合わないと考えていた。

そして炎が収まったと同時に、膿もまた萎れていた。近づこうをする者を掴もうとしていた腕も、ほとんど焼け落ちてしまっている。肌の表面はほとんど火傷で覆い尽くされて、かすかな呼吸が痙攣する口から漏れるだけだった。

「奇跡を」

イリーナはすぐに光を放った。下田の肌が再生されていく。だが、ある程度のところまで行ったところで、ノミはやめるように言った。

「なぜ」

「完治させたら、また暴れ出す。ここには、地下牢があっただろう。とりあえず、拘束しておく。それで誰か、シモダを牢まで運んでくれる奴はいねえか?」

少しの間が空いて、ノミは誰も進み出ようとしないのを確認した。剣槍を横に放り投げ、まるでくだらない冗談を言ったかのように笑った。

「なんてな。おれがやる」

彼が下田を運んで行っても、誰も喋りだそうとはしなかった。意識を取り戻したちとせは、ずっと考え事をしているようだ。その内容

は、いいものではないらしい。下田が消えていった方を見ては、すぐに目を逸らしていた。

やっと区切りがついたと、うんざりした気分です。貴樹は首の骨を鳴らす。このごたごたのせいで、ゆっくり話す暇がなかった。今こそ、火守女と愛を誓い合う時だと、彼女へ向き直る。

しかし、火守女は心配そうに洞穴を眺めていた。まさに下田が運ばれていった方向。どう見ても、今はいちやいちやできるような空気ではないと、さすがに貴樹も理解した。

では、どうする。

彼はまた舌打ちをしたくなった。

下田をどうにかすれば、皆も落ち着いてくれるだろうか。だが、彼にとつては、下田を助けることなど少しもやりたくはなかった。どうして自分の労力をあんなのに向けなければいけないのかわからないし、そもそも他に適任者がいる中でわざわざ行動を起こす意味もわからなかった。

戻ってきたノミは、話があると、大扉の先の列席場に全員を集めた。

63. 下田彰浩と高原ちとせ

「あん？ 全員じゃねえな」

集団が座る一番前の、一段上がっている場所に、丸椅子を置く。そこにどかりと腰かけたノミは、チンピラのような姿勢で足を地面に打ち付けた。

貴樹もその横に座りながら、欠けている者達を確認する。イーゴンは、この集まりに参加する気がないらしい。十分想像できることだった。ルドレスもいない。あの石の玉座で考え事でもしているのだろう。リリアーネとユリア、クリムエルヒルト、アリーは、そもそもまだ意識を取り戻していなかった。その看護のために、イリーナも席を空けている。

だが、それ以外の全ての者達が、ノミと貴樹に注目をしていた。こうして見てみると、彼らの間にははつきりとした溝ができているのが分かる。座る席の位置で一目瞭然だ。ホークウッド達と祭祀場の者達は、時折互いを確認していた。

「まあいい。そいつらには個別で向かうだけだ。じゃあ、改めて自己紹介をするぜ。おれはノミってんだ。このバカを支えてきた影の主人公ってとこだな」

貴樹は初めから興味なさそうに壁にもたれている。

まず口を動かしたのは、ジークバルドだった。

「未だ、この珍妙な状況が理解できないでいる。我々は、刃を向け合う者同士であつたはずだ」

「さっきタカキが言った通り、事情が色々変わった。火継ぎは糞なので、えー、別の方法で何とかしたいと思ってる。だが、それをグウイン達が黙って見てはいないだろうな。だから、こうして皆と話し合いをしたいと思つた」

「それが、わからないと言っているのです」

フォドリックが、胡乱な視線をノミに投げた。

「貴方が、かの大王の血族だという話は理解できる。言葉はともかく、立ち振る舞いが如実に物語っている。だが、我々に一体どうしろと？」

急に使命を捨てろと言われて、素直に従うとでも？」

「ああ、そこは大げさにとらえなくてもいい」

ノミは、否定するように手を振った。

「あんた達には、何も命令しない。これからここを離れて、親父達の側につくと決めても止めはしない。頼みたいのは、一つだけだ。邪魔をしないほしい。今、おれ達の時間は非常に限られている。留まり、敵ではないという顔で、余計な害を与えることだけはするな」

フォドリックは、考え込むようにして椅子に座り直した。その隣のシーリスは、複雑そうに貴樹をちらちら見ている。彼が微笑むと、すぐに顔を他へと向けた。

「とにかく、これからすべきなのは戦力の補強だ。奴らは強い。少しの妥協も許されない。的確な策も必要になってくるだろう。だから、今大事な戦力が欠けてしまっている状況を、何とかして変えないといけない。下田を、正気に戻す」

静まり返った空間の中で、その落ちくぼんだ目がある集団へと向ける。

「おい。聞いてんのか？ お前らに向けて、話すぞ。不思議でたまらないんだが、苦しんでいるあいつの元へどうして行ってやらない？

クラスメイトなんだろう？ それがどうして、こんなところでぼうっとしてやがるんだ？」

言われても、ちとせ達はさらに押し黙るだけだった。そこへ向けられる他の者達の目は、ほとんど同情的だ。ノミのものとは、大きく違っている。

「で、でも、本当に、わからないんです。どうすれば、いいんですか」

新宮が震える声で言った。

「どうしろ、とは？」

「だって、あんな…。あんなに変わって。あれは、もう、下田君じゃない」

ともすれば、非常に冷たい言葉だった。だが、新宮の表現に対して、反論をする者は現れない。生徒達全員が、すでに認めていることのようにだった。

「あいつは、あいつはどうして、ああなったの？」

ちとせは静かにつぶやいた。顔色が悪いのは、意識が戻ったばかりというだけではないようだ。その目は痛ましそうに閉じられていた。「ばけものだよ」

一番後ろの方で座っていた男女から、幼い声がした。その歳には合わないほどの軽蔑と、憎しみの冷たさが含まれている。

イアンは赤い目で吐き捨てた。

「ばけものは、パパと、ファエラ姉ちゃんを、食べたんだ。ママも食べそうだった！」

「そうです。私達はきつと、あの騎士達よりも先に、あの人によって殺されたと思います」

由海は沈んだ声で賛成した。ジアンナと幸成も暗い顔で頷いている。彼らには例外なく、恐怖が刻み込まれていた。下田への恐怖が。「俺には、あいつがわからねえ」

高坂もまた、指で眉間を揉んだ。

「あつさりだったんだ。そりゃあ、宇部と丸戸はどうしようもなかった。それでも、少しは、躊躇いが出るはずなんだ。でも、下田は違った。あいつは…、楽しんでるみたいだった。奴らの体を斬り裂いた時、笑ってた」

グンダが、重々しく言う。

「彼は、許されざる罪を犯した。大王様を一度殺めた。あまつさえ、その遺骸をさらに傷つけたのだ。我々としても、もはや彼を受け入れることには賛成しない」

「それに、精神を回復させることは不可能だろう」

カルラは、言葉の途中で目を伏せた。

「あれほどまで深淵の膿が侵食している例など、初めて見る。さきほどまでまともさを保っていられたのがおかしいくらいだ。手の施しようはないだろう。取り除ける段階にない」

「ほっとけばいいんだ。あんなの」

イアンがまたつぶやいた。

それに、ほとんどの者達は賛成しているようだった。

振っている。無駄な行為を戒めるように。

くくく、と半ばやけくそな声を出した。

「そうだったそうだった。よく考えれば、お前達だいたい、関係あるじゃねえか。義務があるなあ？ よおし、もう決めたぞ。後悔はしねえ。おれは後でぶつ殺されるだろうが、構わねえ。決めた。お前達には、知る義務がある」

彼の体から、白い靄が出始める。それらは球体の形を取って、分かれています。

「ソウルはどこに宿るか、知ってるか？」

答えは待たない。

「頭に宿ると言う奴もいる。内臓、体全てに均等に分けられているなんて意見もあったらしいな。精神、思考そのものが源だとする説も多い。だが、くそつたれだ。そんなもんは全部、間違いだ。おれはこう考えている」

指を一本、立てた。

「ソウルは、記憶に宿るんだ。今までそいつが歩んできた道のりを、全て反映する。だから亡者はそれを強烈に求めるのさ。奴らには、蓄積されたものがないから。今しかないからだ。過去を、未来を埋めようと渴望し続ける」

ソウルたちは貴樹以外の全ての者達に入り込んだ。避ける暇もないほどの速度だった。ちなみに貴樹は前に一度拒否をしていたので、除外されたのだろう。彼はつまらなそうに天井を眺めていた。これから、何が行われるか、既に理解していたからだ。

「今のは、下田のソウルだ。これからお前らは、あいつの経験を理解してもらおう。膨大なものになる。だが、安心しろ。たいして時間はかからない。超ダイジェストでお送りするんで、心配すんな。……地獄の苦しみを味わってもらうがな」

貴樹は、すぐに耳を塞いだ。

阿鼻叫喚になることは、わかりきっていた。

特に女性たちの叫び声がうるさかった。その中で上手く火守女のものだけを抽出して、脳内に保存するという技術も持ち合わせていな

かった。甲高い悲鳴と、低い呻き声があつという間に空間を支配する。

ノミは、げらげら爆笑していた。転げまわっている者達を指差しては、罵倒を浴びせている。彼はこれを、酷く利己的な目的にも使ったようだ。彼がかなり下田へ肩入れしていることは、明らかだった。

貴樹はその中でも抜け目なく移動し、火守女を抱きかかえた。彼女は唇を噛んで涙を流している。その体の震えを優しく抑えるようにして、床に座り込んだ。何度も頬に口をつけて、彼女の感覚を紛らわせようとする。役得も極まれりと、恍惚な表情でくっついていた。

数十秒が経ったところで、ほう、とノミが息を漏らす。

足を震わせながら、何とかちとせが立ち上がった所だった。彼女は涙で顔を散々に汚しながら、片手で口を押さえている。すでに何度か吐いているようだった。

「も……う……」

「ああん？ 聞こえねえなあ」

「もう、わかった、から。やめて。やめ、てよ！ 見せるのはやめて…… わかった、よ」

「何が、わかったんだ」

ノミは、指の骨を鳴らした。ちとせへ、冷たい視線を投げる。

「おれ達全員、あいつの全てはわかってやれない。でも、少しは努力しようぜ。お前、まだ一回も発狂してないだろ。あいつの何百億分の一の苦しみも理解しないうちに、何がわかったっていうんだ？ おとなしく受け入れろ」

次の瞬間、ノミは殴り飛ばされていた。本人も全く予期していないといった顔で、壁へとめり込む。

拳を振り切った貴樹は、すぐにうずくまっている火守女へと戻った。

岩壁に頬をむにゆりと歪ませたまま、ノミは目だけ彼へと動かす。

「何してんの？」

「よく考えたら、ひもりんが苦しんでるのはお前のせいだなんて思って」「ええ……。 脳破壊されてるよこの人。お前止めなかつたじゃん

…」

悲鳴の渦は、やがて小さくなつていった。記憶に耐えられなかった者は気絶していき、まだ意識がある者も、静かに苦しんでいた。深い悲しみに覆われた静寂。もはや拒否する言葉すら出ず、誰もが無言で下田の軌跡を追っていた。その波に乗れない貴樹にとつては退屈な時間になったかもしれないが、実際は違った。火守女を慰めているだけで、この世の全ての幸せを味わっているような気がしたからだ。

確かに、終わるまでにはそう時間がかからなかった。彼らの全員が、苦しみの表情を緩めていく。気絶してしまった者も、意識を取り戻し始めた。だがその様子を見るに、意識を失っている間も、解放はされなかったようだ。

誰も、しばらく声を出さなかった。平常な様子を保っている者など、一人もいない。中にはただ座っていることにも耐えきれず、体を床に投げ出している者もいた。

強烈な余韻の中、初めて動きがあった。

「ちく、しょう。ちくしょう…、くそ」

高坂は何とか立ち上がることに成功する。震える体を引きずりながら、列席場の出口へと向かい始めた。

それを、ノミは止めようとしな。高坂が何をするつもりなのか、どこへ行くのかわかっているのだろう。

続いて、彼よりも確かな動きで起き上がった者がいた。

「どうするつもりだ？」

今度は、ノミも尋ねた。

言われたちとせは、深呼吸をしながら、赤くなった目を拭う。鼻を数度すすつてから、ノミと視線を合わせた。

「決まって、るでしょ」

「ふーん、で、何か策でもあるのか？」

「知らないよそんなの！」

ちとせはまた涙をこぼしそうになりながらも、叫んだ。

「でも、でも行かないと。早く、早く…」

「おう、じゃ、頑張れよ」

彼女は早足で出口へと向かっていく。途中で高坂の肩を強く叩いてから、一緒に走り始めた。彼らにはもう、ほとんど迷いが無いようだ。扉の閉められる音が、やけにこの場に残り続けた。

それを皮切りにして、続々と他の者達も立ち上がり始めた。まだ体も動かせない様子のイアンを抱きかかえて、由海が出ていく。幸成とジャンナも、憔悴した顔で去っていった。彼らは、まだ、衝撃が少ない方なのだろう。下田の記憶の渦中にはいないから。

一方で祭祀場の者達は全員、未だ思考の渦に沈んでいるようだった。若いシーリスは、フォドリツクの胸に顔をうずめ、泣き続けている。震える口で、何度も謝っているようだった。己の祖父にはない。

「おい、そこ」

ノミの目線は、実織に向かっていた。彼女は膝を抱きかかえながら、ずっと下を向いている。声が駆けられると、ゆっくりと顔をずらした。

「…なに？」

「お節介かもしれないが、いいのか？ ちとせに先を越されても」

実織は、瞬きをした後、苦しそうに笑みを作った。

「あなたはすごく、意地悪だね」

彼女は諦めたように、遠くを見つめた。その目から、薄っすらと雫がこぼれる。それには、ただ悲しみだけが含まれているわけではない。強い羨望と、諦観。それらがちとせ達の去っていった方向に定められている。

「あんな…、あんなのを見せられたら。誰だって。誰だってさ…」

ノミは目をつぶった後、さらに別の方へと視線を向けた。

「おい、何をぼさっとしてる」

壁に寄りかかっていたヨルシカは、一度無視をした。だが、ノミが小さな雷を作り、鳴らしたことで渋々顔を合わせる。

「貴方と、話すことなどありません」

「ああ。おれなんてどうでもいい。でも、わかってるだろ？ 行動しないのか？」

「何を言っているのか、理解ができません」

「わかってるんだろう」

ノミが繰り返し訊くと、彼女はやや表情を強張らせた。少しの間宙を見つめて、何かを振り払うように首を振る。

「…知らない」

「人の心は、愛情だけで満たせない。鍵は、一つじゃないんだ」
「どうでもいいです」

彼女は、足早に出ていった。

ノミは欠伸をしてから、両手を握り合わせる。それは、まるで何か
に祈っているような仕草だった。

そして最初から最後までずっと、貴樹は息を荒くしながら火守女と
の合理的なスキンシップを楽しんでいた。



高原ちとせは、自分の事をあまり高くは評価していなかった。

今まで、本気で夢中になれるものを見つけたことはない。高校生な
らまだまだ普通だという、父親の声もあったし、ただその時その時を
楽しく過ごせればいいと思っていた。

背は並。中学までバスケットをしていたから、足にはまだ筋肉の名残があるが、段々とたるんできているような。少しだけ、気にしていた。また上手く時間を作って、ジョギングでもすれば、引き締まった細さが戻ってくるのではないか。

自分の顔のことも、もの凄く肯定的に見ているわけではなかった。悪くはないのだろう。かつて宇部に散々言い寄られた経験もある。だが、そのことを思い出すと、むしろ自信がなくなってくる。それに、あの実織などと比べたら、完璧だとは思えなかった。

だから、親友の芳野恵美に頼んで、髪を染めた。不思議と、茶色の方が自分に合っている気がしたからだ。毛先の方を軽く丸めて出かけることが習慣になった。少しだけ化粧も始めた。

夢見がちな所があると、よく言われる。何せ、母親がまだ生きていた頃は、何度も自分には王子様がいて、いつか迎えに来てくれると騒いでいたのだ。未だにそれは、なかなか恥ずかしい思い出として残っている。父親もよくネタにしてくる。

担任である貴樹やクラスの人気者の国広を、久慈や芳野と一緒にあって熱を上げていたのも、そういう願望のせいかもしれない。それでいて、いざ実際に男性との関わりを深めようとはしなかった。あまり、勇気を持ってなかった。夢が覚めるのが怖くて。今までそれでも好意を抱けるほどの相手に出会ったことがなかったのも、一因だった。

下田彰浩という男子のことを、最初はあまりよく思っていなかった。

いや、本当の最初、まだ学校にいたころは、意識すら向けていなかったはずだ。彼はそれだけ、印象の薄いクラスメイトだった。うるさい草野の横にいることくらいしか憶えていない。

それが色々あって、同じ隊として関わるようになった。

なんなの、あいつ。

当時はずっと考えていたことだ。気が弱く、いつもどこかびくびくしている。それで時折自分たちを責めるように見る視線が、気に入らなかった。はつきりものを言わないタイプが、一番苦手だった。

だが、そういう印象は正しくはなかった。一緒に戦い、国広のおか

げで互いのことを知ろうと思えた時には、彼女は下田のことを見直すようになっていた。それに、母親をもの凄く大事にしている所も共感できた。からかうとちゃんと面白い反応を返してくれるのも可愛いと思っていたし、まるで弟ができたような気分で、隊の仲間達を失った悲しみを紛らわすことができた。

「あいつ、あいつはよ…」

隣で、高坂はみつともなく涙を流している。ちとせは一瞬それをからかおうとも思ったが、自分も同じ状態なのを思い出して、ただ頷くだけに留めておいた。

「すげえんだよ。ありえねえ。俺、だったら、無理だ。誰にもできることじゃない」

「うん……」

「耐えられるわけがない。なのに、あいつは、さつきまで、守ろうとしてたんだ」

扉の前にまで来て、彼は壁を殴りつける。既に下田が拘束されている牢は目前にまで迫っていた。あのノミというおかしな名前の男が、場所の記憶も含めていたのだ。だからこうして、真つすぐ向かうことができた。

「うたがっちまった。ちくしょう！ 俺は、どう、あいつに謝ればいい。あんな、凄い奴の前で、どんな……」

「それでも、行かないと」

はつきりと言うちとせも、実は未だに足の力が戻っていなかった。気を抜けば、その場に崩れ落ちてしまいそうだ。頭の奥が強く締めつけられている感じがして、顔の体温調整が狂っていた。ずっと熱くてたまらなかった。

扉が開かれる。

何を話そうか、直前までは何も思いついていなかった。

あの、記憶。

おぞましい繰り返しの記憶。

血と肉と憎悪でまみれている戦いの記録。

膨大な、それこそ宇宙が何度も生まれ死んでいくような長さの時間

に囚われる。その、苦しみ。

何もかもが、想像を超えていた。今も理解しているとは思っていない。だから、それに対してよくやったとか、ただ感謝を述べるだけか、そんなものでは何も変わらない気がした。表面を滑る気休めにしかならない。

だが、それでちとせは自分に呆れているわけではなかった。どうしようもない。

彼女は両手を頬に当てて、深く息を吐き出した。心臓の鼓動が喉にまで伝わって、視界までもが揺れている。

たとえどんな苦しみの記憶が続こうと、それらが一番、彼女の心に残っているわけではなかった。どんなに彼自身が呻こうが、他人がその手によって殺されようが、それよりもはるかに強い何か彼女の頭を埋め尽くしている。

自分は、どうしようもなく、嫌な女だ。

下田の記憶の中のちとせは、笑ってしまいうくらい、光を宿していた。重く常に沈んでいるような思い出の中で唯一と言っていいほど、自分と過ごす時間を、彼は大事にしていた。まさに全身全霊で、これ以上もなく深い情を向けてきている。

だめだめ。

ちとせは嗚咽を漏らした。

また泣いちやう。もう泣いてるけど。また、ぐちゃぐちゃになる。

いくら拭っても涙は止まらないので、諦めてそのままにした。胸をかきむしりたくなる衝動に駆られるが、我慢をする。

無理にでも笑顔を作って、座り込んでいる下田と向き合った。

「まただ、まただ、まただ…」

彼は全身を跳ねさせながらそんなことをつぶやいている。

「また、来る。誰かがぼくを斬り裂くんだ。ワタシ達はもう、誰にも慮られることはないんだよ。ずっと一緒にいようね。うるさい、違う。お前も嫌だ。そんなこといってえ。アナタをわかってあげられるのは、ワタシしかないんだよ？　ずっと一緒にいようねえ」

ちとせが一步踏み込むと、膿の手がぴくりと動いた。かなり欠損し

ているが、何かを掴むぐらいの機能は回復していそうだ。それは俊敏な動きで伸びると、ちとせの喉元にまで接近した。高坂が動こうとするが、それを手で遮る。

「誰だ？」

「ねえ、」

もう、最初の言葉は思いついている。

ちとせははらはらと泣きながら、悪戯っぽく微笑んだ。

「あんたさ、どんだけあたしのこと好きなの？」

自分の性根を、嫌悪した。

下田への憐憫よりも、その苦しみに対する情動よりもはるかに。

あふれんばかりの歓喜が、脳を支配していた。

それはもう、ちよつとした自らへのコンプレックスだとか、子供の頃夢見た存在なんて来てはくれないと知った時の、尾を引く虚しさなどを、丸ごと吹き飛ばしてくれるほどのものだった。

下田の感情は、ちとせの全てを肯定していた。何もかもを愛していた。ともすれば、家族から向けられたものよりも強烈な情だった。

こんなのは、今まで味わったことがない。きつとこれからも、他の人からは決して得られはしない。

「勘弁してよね」

さらに近づく。

膿の手が、喉を覆う。

「やめろ、まぼろしを消せ。見せるな、見せるな……」

離れようとする下田の顔を、両手で包み込む。彼の錯乱した瞳を、覗きこんだ。

「おかげで、あたしの将来めちやくちやだよ。どうしてくれるの？」

もう……、無理じゃん。だってまだ高二だよ？　なのに、あんた以外の……」

そこで耐えきれなくなって、ちとせはしゃくりあげた。自分の肌を痛みを感じる。おぞましい膿が侵食を始めている。それでも、前に感じたような恐怖は少しもこみあげてこなかった。これもまた下田の一部なのだと思うと、受け入れられる気がする。

あーあ。

ちとせは責めるように彼の顔を見つめた。
完璧にやられちゃってる。
唇を、彼のそれに近づける。

「責任とつてもらうからね。私の…初めても二回目も、あんただから。
…ねえ、お願い。戻ってきてよ、アキ」
目をつぶり、顔を前に動かした。
口に、柔らかい感触が当たる。

ちとせは少ない衝撃を感じた。
いきなり目の前に下田とは別人の顔が現れた。
から、ではない。

それは少しクセの付けられた、肩に届く程度の茶髪で、勝気そうな
目尻がぴくぴくと痙攣していた。

どう考えても自分と瓜二つの顔が至近距離にいれば、誰だって驚く
だろう。それでも、彼女はみっともなく後ずさるような真似をしな
かった。その顔は、明らかにちとせへの敵意で歪んでいた。

「あんたが、ウミってわけ」

相手は無表情になった。鼻で笑いながら、ちとせから離れる。自分の顔なのに、背筋がぞくりとした。決して自身では持ちえない鳥肌の立つような艶が、相手の顔から伝わってくる。

「あの害虫の仕業か。くだらないね」

「気持ち悪いから、その姿やめてよ。まだ元の姿の方が可愛げあったけど」

「虚しいね」

ちとせの顔で、ちとせの声で、冷たい印象を感じさせる。

「彼の、ほんの上澄みをすくったくらいで、何もかも理解した気になってる。思い上がりも甚だしい。せめて一億年くらいは、彼と一緒に苦しんでから来てよ」

「あつそ。ところでお願いがあるんだけど」

相手の出方は読めている。人の感情を引つ掻き回して、ペースを崩すのが得意なのだ。その挑発に安易に乗ってはならない。丸め込まれれば、ただただ呑みこまれて終わるだけだ。自分の言いたいことだけを伝える。

「アキを、解放して。彼はもう十分すぎるほど苦しんだ」

「だから、見当違いなんだよ」

ウミはいつの間にか短剣を持っていた。それを迷いなく自らの鼻に突き刺す。ちとせに横して作られた顔が切り刻まれていく。少し怯むものを感じたが、さらに歯を食いしばってそれから目を逸らさずにいた。

「ワタシは、別にそうしてもかまわないと思ってる。でもさ、ほら、彼の方が、離してくれないんだよ」

にいと、口が裂けていく。

「アキヒロが、拒絶してるんだ。これ以上、まともに生きることがやめている」

「へえ、いいの?」

彼女もまた笑った。

「いい加減身を引かないと、やばいことになるよ。ウミの部分が全部消えてなくなるまで、燃やされるかもしれない。あんただって、消え

たくはないでしょ」

「脅してるつもりなのかな?」

ウミは、その場に腰を下ろした。

「正直、何の意味もないよ。ただの苦痛は、耐えればいいだけだし。さつき言ったことの意味を、ちゃんと理解してもらう必要があるね。いいかい、ワタシはすでに、アキヒロの脳深くにまで同化している。完全にワタシから解放させようと思ったら、彼の脳まで破壊しないといけないよ」

「それは…」

「わかってきたかい? もちろん、解決策はあるんだ。例え脳味噌のほとんどを焼かれようと、奇跡で再生させればいい。ただ、内部の神経、細かい部位、それらを何の後遺症もなく治せるほどの技術を持つ奇跡使いなんて、いないだろうね。ただ一人以外は」

ちとせは、唇を噛んだ。

「ワタシの知る限り、アキヒロだけだ。彼の奇跡は、他の追随を許さない。つまり彼はその気になれば、ちゃんと自分を助けられるはずなんだよ。でもそうはしていない。そうする気がないから。いかに自分が無駄なことをしているか、わかっただろう」

「で?」

ちとせにはもう、躊躇いなどなかった。止まる選択肢は初めから持っていない。

「あいつが、どうしようもないお馬鹿さんなのはわかった。忘れてるなら、思い出させないと。あいつのせいでいたいけな女の子が一人、離れられなくなっちゃったって、ちゃんとやってあげるの」

「もう、アナタの声なんて届かないよ」

「届かせる」

さらに前へと一歩出る。ウミはその動きに反応して、腰を浮かせた。その下半身がだんだんと崩れ始める。黒く埋め尽くされていく。「ここが、浅い所だったことはわかってる。あんたなら、つなげられるでしょ。もつと、アキがいるくらいまで深く、連れてって」

「…いいのかい?」

「早くして」

「今でも、アナタはぎりぎりだけど。それでも、構わないのかい？」
「御託はいいから。さっさとしろ」

ウミは、確かに、嬉しそうに笑っていた。

だが本当にそうなのかはわからなくなってくる。既に相手の姿はどろどろに崩れていて、かなりの大きさにまで拡散していたからだ。暗い膿が、ちとせの視界を覆い尽くそうとしている。

「交換条件ってことで、どう？」

「ああ…」

「あいつが納得したら、ちゃんと、出て行ってね」

「まさか、こんなに、上手くいくとは」

全く。

ちとせは自分に呆れていた。

ウミが本当に嬉しそうに覆いかぶさってくる。

「念願が叶ったよお。アナタを、味わうことができるなんて…」

なんたらは盲目って、よく言ったものだわ。

思わず自嘲の笑みが漏れる。

こんなことになっても、少しも後悔しないなんて。

ちとせはさらに深く、沈み込んでいった。

◆
左手を、誰かに握られている。
頬に濡れる感触がした。

最初はあまりの体の怠さに負けて、それを無視していた。だが、段々と耐えられない痒さがやってくる。嫌だ嫌だと思いつつも、下田は手を動かそうとした。しかし、その前に涙は誰かによって拭われる。

予想もつかなかった感覚で、思わず目を覚ました。

「あ…」

気の抜けたような声が出た直後、誰かが腕にしがみついてきた。何度も目を開け閉めして、視界を明瞭にさせていく。

目の前で揺れる白髪へ、下田は右手を置いた。

画家の少女はすぐに顔を上げてくる。

「よかった。本当に」

「ここは」

「個室の一つです。あれから…半日ほどが経ちました」

イリーナもまた目を拭っていた。自分が目を覚ましたのを、たいそう喜んでくれているようだ。いや、少しおかしい気もする。彼女に加えて、画家の少女も、ユリアも、リリアーネも、実織も、高坂も。ただ喜んでいるという粹に収めるには、足りない気がする。

そもそも、自分は取り返しのつかないことをしたはずなのだ。ついに正気を失い、貴樹に襲いかかってしまった。その様を、たくさんの人に見られていたはずだ。

好きな人にも。

そこまで考えて、下田は思考が切り替わった。まだ記憶は曖昧だ。しかし、何かがあった気がする。夢の中で、ちとせとたくさん話をしたような。

「あ、の…」

下田は左手を握り直す。柔らかい感触だ。

「ちとせは？ どこにいますか？ なんだかすごく、会いたくて」
今の彼の、朦朧とした意識でも、認識することはできた。彼女たちはさりげなく視線を彼から見て左へと一瞬だけ向かわせた。すぐに取り繕われたが、わかる。特にイリーナの表情が暗くなったのが把握できた。

その視線を追うと同時に、左手の感覚を再認識した。握っているのは、握ってきているのは、誰かの手だ。とても柔らかくて、暖かい。女性肌の感じ。

下田は誰かの制止もかまわずに、左へ目をずらした。

彼の左手を握っていたのは、ちとせだった。彼女は目をつぶり、浅く呼吸をしている。その左半身を、大量の膿に食い潰されながら。

64. 家族喧嘩

貴樹は足をぶらぶらさせながら、隣に座る火守女をちらちら確認していた。

ずっと、彼女は気もそぞろだ。こちらが話しかけても、まともな返事をしてこない。顔を合わせようとしても、すぐに逸らされてしまう。まさか急に訳もわからず嫌われたのかと恐怖したが、どうやら単に避けられているだけのようないきがしてきた。

なぜなら、時折彼女からの視線を感じるからだ。貴樹が見ていない時だけ、火守女は彼を眺めている。だがそれに気づいて動く、すぐに洞穴の方へと視線が戻ってしまうのだ。こればかりは彼も不思議だったが、原因の一部は何となくわかっていった。

「解せないんだが」

佇んでいるノミが、こちらを向いてきた。

「お前、どうして下田にそこまで味方するんだ。奴の経験に同情したからか？」

同情だけなら、他の者も同じく抱いている。今、この篝火の広場では重苦しい空気がずっと漂っていた。皆が、下田のことを考えているに違いない。

貴樹は、異様な危機感を覚えた。気のせいかもしれない。だが、なんだか最近、自分の影が薄いような気がする。

察するに、下田はかなりの苦勞をしてきたようだ。その思いを祭礼場の者達も汲み取って、大いに心を動かされている。急に彼があればほど強くなったのも、そこに関係しているのだろう。貴樹達の助けが来るまで、懸命に強者相手に持ちこたえていた。そして、この無名の王、ノミにどこか気に入られている。

はつとする。

これではまるで、物語の主人公ではないか。

貴樹はぶんぶん首を振った。いや、どう考えてもあらゆるスペックで、自分の方がふさわしいはずだ。中心人物は自分のはず。有り得るわけがない。

「いや、勝手に思考に沈むなよ。質問しといて」

ノミは困ったように相手の奇行を見た後、その場に腰を下ろした。「わかりやすいよな。まあ、否定はできん。はっきり言って、おれはあいつにとことん生きてもらいたいと思ってる。それは別に、あいつの経験を知って、同情したからじゃない。もつと、単純なことだ」
目で、先を促す。

少しの間考えるような沈黙をした後、ノミは口元を緩めた。

「大事な女が育てた子だ。気にするのは当たり前だろ」

貴樹はその意味を飲み込めなかった。回りくどい表現をせず、もつと具体的に話せと言おうとした。

しかし、その前にノミは手を上げる。これ以上、話ができないと意思表示しているようだった。

「よお、元気か？」

全員の視線が、上へと向けられる。一瞬前まで、鮮やかな白光が点滅していた場所だ。奇跡の光。

下田は、出現した後も浮いたままにいる。その視線ははつきりと対象へ向けられていた。

「ノミ野郎……」

憎悪とも呼べる強烈な視線を受けたノミは、特に表情を変えなかった。

「元気みたいだな。よかったじゃねえか」

「質問をする」

下田は降り立った。その顔は依然として、氷漬けされたままだ。だがもう、その肌を侵食する醜い存在は消えている。それだけでも、印象は大きく違った。かなり柔らかくなった。ただそれでも、彼が非常に怒っていることには変わりない。

「僕の、記憶を、皆に見せたのはお前か？」

「そうだ」

「結果、それがどんなことをもたらすか、知った上で？」

「いや、わかるわけねえだろ」

下田はしばらくノミを睨んでいた。

その視線を受け続けているノミは、やがて薄く笑う。

「すまん、嘘だ。誰かがお前に同情をして、犠牲になつてくれることを期待していた。お前は、重要な戦力だからな。多少の代償は構わないだろう」

「…お前の」

その手から、呪術剣が生成されていく。

「四肢を焼き斬って、残った部分を、不死街の底に捨てる。わかるな？」

「へえ。面白い自由研究になりそうだな」

ノミは立ち上がり、剣槍を拾い上げた。くるくると二回転させて、肩の上に担ぐ。その刃からちようど、閃光が弾けた。

「病み上がりには悪いが、手加減はしねえぞ」

軽蔑するような含み笑いが起きた。

それはたいして大きくはない。だが、衝突する寸前の張り詰めた静寂の中では、やけに際立って聞こえてきた。

下田は徐々に炎を消していき、首だけを回して声のした方を見る。

「何だ？」

「いえ……。ただ、おかしくて」

ヨルシカはまだ嘲りを顔に浮かべている。

「貴方は、本当に愚かなままですね。最初から、何も変わってなどない」

「竜女」

下田は首を回した。骨が鳴る。

「今、少し手が離せないんだ。後で構ってやるから、黙ってろ」

「ミサもチトセも、貴方のせいで死んだようなものです。私でも、呆れています。その足りない脳を最大限稼働しても、たかが知れていますね」

彼女は白いドレスの裾を揺らした。

「貴方がどうなろうと勝手ですが、その無様な行動だけはやめてくれませんか？ 目に映るととても、不愉快なので」

「ふう…」

「思えば、前もそうでした。貴方は目の前で母親を殺されたのにもか
かわらず、ただ、腰を抜かして泣いているだけでした。楽しいですか
？ そんな愚図な本性に皮を重ねていって、多少なりとも通用してい
る現状が。滑稽です。私だったら、そんなことには決して耐えられな
いでしよう。早く自害した方が、身のためなのでは？ そうすれば母
親もチトセも、喜んで迎えてくれるはずです。：まあ、チトセの方は
醜いあれがついたままかもしれません」

ヨルシカは、自身が光に包まれていることに遅れて気がついたよう
だった。だが、何も行動することなく挑戦的に下田を睨みつけたま
ま、消失する。同時に下田の方も転移していった。どこに行つたにし
ろ、彼らは同じ場所へ再出現しているのだろう。

「いいのか？」

貴樹はたいして真剣味もなく尋ねた。

「あん？」

「追わなくて。あいつら、十中八九殺し合うつもりだぞ」

ノミは、満足そうに長々と息を吐き出した。剣槍を下ろした彼は、
まるで一瞬だけ何百年も老け込んだように感じた。

「いいんだよ。こういうことは、早めに片付けておかないと。冷や冷
やしたぜ。ま、シモダに一発殴られるくらいは許容してやったんだが
な」

直後、ノミの頬で爆発が起こった。その大柄な体は何の抵抗もなく
転がっていき、石階段に激突する。そこからさらに炎が炸裂した。最
最終的に彼は石の玉座の真下の壁に全身を打ちすえることになる。

ノミはぱちぱちと何度か瞬きして、首を傾げた。

「なんかおれ、こういうこと多くね？」

「お久しゅうございます。旦那様」

にこにこしながら、クリムエルヒルトが彼の前に立った。彼女はつ
いさつきまで眠っていたのだが、もはやそれを感じさせはしない。激
しい熱気が、その赤毛をゆらゆらと際立たせていた。言葉の調子は柔
らかいのだが、細められている目の光は激しい。

その瞳を一瞥してから、ノミはへへへと無理に笑みを作った。

「よ、よう。体調は戻ったのか。アナス…」

今度は、ソウルの塊がその頬に直撃した。剣槍が横に転がっていき、数度ノミの顔が衝撃にさらされた後、仰向けに寝っ転がったその体の上に、クリムエルヒルトは馬乗りになった。

「貴方なんかには、呼ばれたく、ありません。だいたい、その喋り方は何なんですか。気持ちの悪い。本当に、虫唾が、走る…」

やがて彼女は術さえも使わなくなった。黙っているノミに向けて、何度も拳を振るい始める。その手から血が流れ出しても、やめなかった。

貴樹は、気まずそうなホークウッドと顔を合わせた。

「ぶべっ、ちよつとま……、おちつ、はな、はなしを」

「このろくでなし……。プリシラ様をずっと孤独にさせた。どれだけの罪……。絶対に許さない。お前なんか、お前なんか。命で償え」

「ああ」

振るわれる手を、ようやく掴んだ。ノミは静かに、相手の顔を見上げる。

「わかってる。すまなかった。おれが今まで救いようのない馬鹿だったことは、理解できた。だから命を懸けて、お前の願いも叶えてやる。もう、離れはしない」

「うう…」

彼女はさらにもう片方の腕を振り上げたが、それは相手に到達する前に、力なく下ろされていった。それはそのままノミの胸に当てられて、彼女の顔も徐々に下がっていく。

次第に、周りの者達は腰を上げ始めた。今まで心配そうな空気だったのが、やや変わってきている。貴樹は、前にもこんなことがあったと思い返した。その当人であるホークウッドは、徐々に洞穴の方へと体をずらし始めている。

クルムエルヒルトは、全身を震わせながらノミの胸に額を密着させた。

「どれだけ、待たされたか……。ずっと、待つて……。もう生きて帰ってこないのかと。ひっく、死んだものだど、諦めてたのに」

彼女の涙で頬が濡れているノミは、視線だけを動かして貴樹達を見てきた。その顔は、ほとんど思考停止しているように見える。こういう時、どうしていいのかわかっていないようだ。助けを求めるように瞳を揺らしている。

「ちよつと」

唯一ミレーヌだけが、面白そうに声をかけた。どこかすかつとしている様子だ。

「私達、出ていった方がいいわよね。二人つきりでじっくりと話したら？」

「…うるやん」

クリムエルヒルトは少しだけ顔を上げてから、またノミの体にくっついた。その反応だけで満足したのか、ミレーヌは笑いながら離れていく。

全員が空気を読んで広場から出た。火守女のそばを歩きながら、貴樹は再び嫌な気配を感じていた。

やはり、おかしい。自分から、スポットライトが離れていくような気がする。これは明らかに、危険だ。脅威が大きくなりすぎる前に。どうにかして下田とノミを摘んでおかなければならない。

念入りな、殺害計画を立て始める。上手くいけば、この先の戦いの中で二匹を殺させることができるだろう。

火守女がぼうっと前を向きながら歩いていた。そのせいで、彼女は途中、何かに躓いてしまう。貴樹は慌ててその体を支えた。勢い余って、深く抱き寄せる形になる。

「あの、その…」

火守女は小さく謝って、すぐに離れた。

貴樹は、その横顔を一瞬だけ観察する。間違いない。頬の色がやや濃くなっているようだった。照れている。あの火守女が、自分を意識している。

幸せな気分になって、それまで考えていたこと全てを忘れた。



下田は大きく伸びをした。準備運動のようなものだ。
対するヨルシカは、まだ何もしていない。

「どうした？」

言われると、とつさに彼女は手を前に持っていた。しかしその行為自体がまるで恥であるかのように、すぐに下ろす。

「ここは…、どうして、ここを？」

岸壁に囲まれた場所で、二人は向かい合っていた。下田にとってはそれなりなじみ深い場所だ。最初の戦いの場所。初めて、殺された所。繰り返しの中では、おびただしい回数鍛錬をした場所だ。

「ここらへん何て呼ばれてるか、知ってるよな」

「灰の墓所」

「そう」

下田は両足の筋を伸ばし終わった。

「お前の墓にもなるけどな」

ヨルシカの方も、張り詰めた気配が濃くなる。彼女は短い詠唱をすると、五つのソウルの矢を自らの周囲に顕現させた。

「正直…」

下田も呪術の塊を作った。両者の距離は徐々に開いている。動いているのは、ヨルシカだけだった。だがそれは、別に怯えからきたものではない。どうやら彼女には、何か考えがあるようだ。

「お前が生きて、呼吸をしていると思うだけで、何事も心から楽しめなくなる。わかるだろ。お前だってそう思ってるもんな。僕に対して。

両思いだ」

彼は呪術を消した。両手を頭に持っていく、大きな欠伸をする。それに対して、ヨルシカは怪訝そうな目をした。それにも構わず、地面に転がっていた年季の入っているショートソードを拾い上げる。

「何を？」

「ハンデだよ」

少し間をおいてから、付け加える。

「ああ、えっと、つまり縛りみたいなもの。圧倒的な実力差があると、普通にやればすぐ終わっちゃうんだ。だから手加減が必要になる。僕は符呪以外の術を使わない。奇跡も。これくらいなら、まあまあもつだろ？ 二十秒くらい」

「貴方の、」

ヨルシカは言葉を切って、さらに五つ、魔術を追加した。平然を保とうとしているが、その綺麗な眉間に寄っている皺はごまかすことができない。

「安い挑発になど乗りません。どのような条件であろうと、殺すだけです。貴方の首を、貴方に肩入れしている者達に突き付ける瞬間が、待ち遠しい」

「それで、どうするんだ？」

下田はからかうような口調になった。

「誰も味方がいなくなつて、結局は兄様に泣きつくのか。愚図なのはどっちだか。あんな化物を家族だと勘違いしているなんて」

「わかっています」

彼女の拳が強く、握りしめられる。

「人食いは、人食いでしかない。グウインドリン兄様は、もうどこにもいない」

「じゃあお前、何のために生きてるんだ？」

「それは…」

「お前の本質を、教えてやろうか」

下田は自分の剣に青白く符呪をした。

「何かに依存していないと、駄目なんだよ。そうだろ？」

ヨルシカは俯いた。

「大方、親からも捨てられて、まともに愛してもらわなかったんだろう。竜の血を引いているせいで、虐げられていた。オーンスタインの接し方を見ればわかりやすい。でも、グウインドリンだけは違った。彼だけは、お前をまともな相手として認識していた」

「よく、舌が回りますね」

「産んだ母親のことを恨みながら、庇護してくれる相手にくつついて
いることだけを考える。そういう、糞つまらない暮らしをしていたん
だろうな」

「……」

「でも」

下田は口の端を吊り上げる。

相手の顔に嘲りの視線を合わせた。

「本当にそうか？ プリシラを、お前は本当に憎んでいたのか？」

「…シモダ」

「違うんだろ。やっと、わかったよ。お前が僕を嫌っているのは、嫉妬
しているからだ。プリシラを取られたのが、嫌だったんだ。ママは私
を捨てたのに、別の誰かに構っている。そういう思いが、常にあつた
んだろ。可愛いでちゅね〜」

「黙ってくれませんか？」

「それだけじゃない。僕の境遇自体も、羨ましいと思つてたんだよな
？ そりゃあ、お前なんかよりはずっとましだよ。僕の母さんは、最
高だ。最高の家族だ。お前を捨てて、別の誰かを庇護した竜の娘なん
かよりも、ずっといい親だ」

「黙りなさい」

「どうするんだ？ ん？ もう兄様もママもいないぞ。今度は、誰に
依存するんだ？ まさか、僕か？ だったらごめん。受け入れられな
い。アバズレは無理なんだ」

「黙れ…」

今や、ヨルシカの顔は醜く歪んでいた。目の前の男に対して、最大
限の憎しみを向けていた。

「気持ち悪い。そういうのを、ガキつて言うんだよ。わかるか？ 独
りじゃ少しも前に進めない、愚図の窮まったクソ女」

「死んでください」

「命乞いをしなくていいのか？ 今の内だけだぞ」

「死になさい」

「言葉だけは一丁前だな。お前が死ねよ」

「死ね」

「くたばれ」

ヨルシカは、右手から剣を伸ばした。

「シモダアアア、アキヒロオオオオオオオオオオ！」

叫びと共に、両者の距離はほとんどなくなっていた。そのあまりに素直な軌道に、下田は呆れる。結局真つすぐ突っ込んでくるだけだ。

ヨルシカの速剣を、符呪した剣で受け止める。本当は最低限の動きで避けて、上手いこと反撃を狙えるチャンスだった。だが、あえてそうしない。彼女の攻撃をできる限り正面から防いで、焦らせる。彼女が追いつめられて、絶対に勝てないのだと十分に理解させてから、仕留める。

飛んでくる三本の矢に反詠唱を行う。彼女はそれを予期していたようだ。右足を動かし、下田の腹を狙っている。その膂力ならば、容易に貫き、内臓を押し出せるだろう。

下田は斜めに傾いていきながら、刃を振り下ろす。同時に頭を曲げて、迫ってくるフアランの速剣から逃れた。

訓練で使い古されているとはいえ、符呪されているショートソードは簡単にヨルシカの足へ吸い込まれていった。彼女は距離を取ろうとするが、遅い。切断された右足が血を吐き出しながら転がっていく。

「右足」

ヨルシカは体勢をほとんど崩さなかった。ぼこぼここと斬られた部分が波打つ。前へと倒れるようにして、さらに速剣をきらめかせた。

「左腕」

その軌道を、下田は完璧に読んでいた。わざと右耳を斬らせてから、ごくわずかな移動だけで致命傷を避け、反撃を行う。速剣を所持していた彼女の腕が、振り切った勢いそのままに吹っ飛んでいく。

やはり、推測は正しかったようだ。体の再生は、無意識でできるようなものではない。下田の奇跡ほどの治療速度を発揮するためには、ちゃんと集中する必要があるようだ。こうした戦闘中では、それほど

速く完治させることはできない。

ヨルシカの瞳が、目前にまで迫る。それは、苦渋で歪められていた。「右腕」

彼女は半端な姿勢で飛ぼうとした。だが、両腕と片足が欠けた状態で、満足な動きができるはずもない。

「左足」

四肢を全て切断されたヨルシカは、地面に転がった。それに対して冷静な顔で、下田は見下ろす。想像していたものと、何か違った。

「九秒くらいか。脳に雷を流せば、一瞬だ。じゃあな」

符呪の種類を変えようとして、その行動を途中で止めた。

相手の体が、透明になりつつある。

下田は下がって、彼女が見えない体を発動させるのを観察した。

警戒をしたのは、初めての行動だったからだ。過去の戦いにおいては、彼女がその術を行使したことなど一度もない。全くの予想外だとは言わないが、今までとは違う流れを感じずにはいられなかった。

そして、その練度も、予想より高かった。大げさでなく、下田のそれよりも完璧な行使をしていた。もはや半端な視覚では、まるで位置を把握することができない。どうやら、ソウルの流れさえも隠蔽できているようだった。これでは音だけが頼りだ。

と、彼女は思っているのかもしれない。

下田は目をつぶり、半歩下がった。

顔のすぐ前を、不可視化された魔術が通り過ぎる。

腰へと複数の線。

連撃だ。

ちようどその軌道に、剣を合わせた。微妙にそれぞれずれているので、細かく対応していく。手に伝わってくる衝撃から判断して、矢と速剣を不規則に混ぜているようだ。

区切りがつくまで防いでから、一本の矢を分解し、彼女の接近に攻撃を合わせた。実際に目に見えるわけではないが、向かってくる敵意の線から逆算すれば、位置を割り出すことくらいは余裕だ。

が、空振りに終わる。

その時確かに、派手な音を聞いた。
魔術同士がぶつかり、爆発する音を。

ヨルシカの体は、おそらく、急速に横へ移動していた。その加速が、
下田の予測を上回った。

下田はぎりぎりを見極めて、顔を引く。

しかし、間に合っていないなかったようだ。

喉が裂け、呼吸ができなくなる。息の代わりに、大量の血が吐き出
された。

奇跡の光で、傷口を覆う。完治させながら剣を振るい、さらに追撃
を加えようとするヨルシカへ牽制した。

「あら、見間違いだと良いのですが」

姿を現した彼女は、指を口元に持っていていき、あてつけるような笑み
を漏らした。

「貴方がそういう人だと忘れていました。少し前に言ったことも忘れ
る脳しか持っていないませんでしたね」

「…お前相手に、正直でいくと思うか？」

下田がもう片方の手に速剣を出現させると同時に、ヨルシカの姿が
再び消える。

間違いない。もはや確定だ。明らかに彼女は意識をしている。い
つもの戦い方から脱却して、別の道を切り開こうとしている。そのた
めならば彼の技を真似することも厭わない。

加えて、段々とヨルシカの動き自体も変わりつつあった。それは、
記憶にある彼女よりも洗練されている。脅威になるほどの差はまだ
ないが、この短い間で変化できているということ自体が異常だった。

おそらく、下田の記憶を体験したせいだ。ノミが、彼女だけを例外
とするわけがない。そこに刻み込まれた戦いを理解して、下田の動き
を感じた上で、彼への対策を立てようとしている。

彼女の攻撃をかわしながら、素直に嫉妬した。

結局、自分がこれまで膨大な時間積み上げてきたものは、それほど
おおげさなものでもなかったのだ。才能があり、身体の性能にも恵ま
れた者ならば、はるかに短い時間で同じ領域に到達できる。

ヨルシカもまた、その例に十分当てはまっている。

「あと一年くらい戦い続けたら、追い抜かれるなあ」

言い切った時には、既に彼女の喉を貫いている。魔術の爆発で逃げようとする前に、設置されたソウルの塊を分解した。慣れないうちは、不可視化の並列には苦勞するものだ。いくら彼女といえど、まだ粗がたくさんある。

が、予想外のこととしてきた。そのまま怯んで下がってくれれば一番良かったのに、反対に前へと飛び込んできた。剣がさらに食い込み、彼女は血を吐きながら喉に手をやる。その肌から青白い光が大きくなっていき、小さな奔流が放たれようとしていた。

下田はそれを悠々と分解しようとして、頭に鈍痛を感じた。

まずいと思った時には、反詠唱が失敗している。自分が万全の体調ではないことを、少しの間忘れさせられていた。

回避に専念する。

ヨルシカは下田が飛ばしたソウルの弾丸を受けてもひるまずに、さらに懐へと入り込んできた。

彼女の足が、下田の腰にめり込んでいく。骨が粉碎されていくのを、下田ははつきりと感じた。表情を見るに、相手もそれをたっぷりと感じているようだ。

あえて自分から横へと転がり、衝撃を緩和させる。彼女のふり降ろされた拳を断ち切り、返す刃で胸へと差し込んだ。

ヨルシカは頭を振りかぶると、躊躇なくぶち当てに来る。

下がろうとしたが、何かに掴まれて一瞬固まった。

その隙だけで、十分だった。

下田の額に彼女の頭が炸裂する。強烈な頭突きを食らった彼は、目の前の点滅をどうにかすることに気を取られた。

というふりをした。

下田は魔術の爆発で位置を変え、ヨルシカの斜め後ろに瞬時に回る。彼女が反応しきる前に、左肩を斬り裂いた。

同時に、顔のすぐそばでソウルの矢が出現する。その数は、全方位を覆い尽くすほど多かった。分解が間に合わない判断し、渋々奇跡

を使う。

祭礼場への道へと続く入口に出現し、下田はヨルシカを見た。相手もまた、こちらのことを眺めていた。

彼女はとんとんと、指で頭を示してみせる。もう片方の手で、腰を撫でた。

「頭と、腰を破壊しましたよ？ この程度ですか」

下田もまた親指で、肩を指す。

「自分の肩見てみるよ。うえつ、気持ち悪い。自分だとどんな風に見えるんだ？ 竜の再生で肉が醜く蠢く様は」

ヨルシカは口に溜まった血を横に吐いた。

それが地面につく前に、下田が前へと走り出している。

厄介な事に、彼女は理解し始めているようだった。

どういう戦い方を、下田が一番嫌っているのかを。

結局技をどれだけ磨こうと、体の限界が足を引っ張ることになる。下田とヨルシカでは、肉体の性能にかなり差があるのだ。だから、それがあまり作用しない術戦を中心にするのが、彼にとっての最善手だった。

だからこうして接近されて、常に近接での戦いに持っていかれると、めんどくさいことこの上ない。

そして、術が使える余裕もなくなってきた。やはりウミが支援していた部分も大きいのと、ろくに体調がを回復しないままこうして戦っているのが原因だ。既に何度か転移を行使しているのも影響が大きい。

しかしそれで、決定的な敗因になるわけでもなかった。

下田は点を見極めて、線を把握しながら、踏み込んでいく。

何かを操作しようとしているヨルシカの手を寸断した。

彼女の方が、一動作ごとの速さは勝っているのだろう。

しかし、つなげていく段階に関しては、下田の練度にまるで達していないかった。彼の組み立てた攻めの流れに、全て対応することはできない。

さらに、彼女も動きが少し鈍っている。いくら再生するとはいえ、

失った血まで戻るわけではない。その純白だったドレスは、赤く染まりきっている。裂かれた布の部分は戻らないので、徐々に肌の露出が多くなっていた。そこを斬られて、さらに赤い模様が広がっていく。

ヨルシカは、斬撃を受けながらその身を回転させる。

一瞬、完全に背を向ける形になった。

その隙を逃さず、後頭部へ向けて剣を突き出す。

「は？」

だが、その刃は途中で止められた。

柄の部分に、白い何かが巻き付いている。あつという間に力が込められ、下田の剣を握っていた右手が潰された。

そしてそこでは終わらず、もの凄い勢いで横へ引つ張られた。ヨルシカが体をさらに回転させるとともに、巻き付かせた尻尾をたわませる。下田はソウルの矢を飛ばしてすぐにそれを斬り落としたが、その時には自分の体の姿勢が崩れていた。

彼の顔を救い上げるようにして、彼女の足が放たれる。すぐさま体を持ち上げて、のけぞりながらその蹴りを避けようとする。

つま先が、目の前を通った。

と思えば、視界が縦に裂かれている。

なぜ自分の顔が斬られているのか、理解はできた。彼女は足からさらに、速剣を生やしていた。馴染みのある工夫だ。下田も使ったことがある。

奇跡を使わず、前へ進んだ。気配を把握しつつ、顔に向けて剣で突く。

が、手応えはなかった。

かわした後の攻撃が来る前に、魔術の塊を踏んで離脱する。

それに対してヨルシカは追ってこなかった。

戻った視界で、彼女を観察する。

有効な攻撃を与えられたというのに、ヨルシカはほとんど満足していないようだった。それどころかさらに怒りの表情を強めて、下田を睨みつけている。

「おいおい、これは驚きだな」

「このような…」

「それ、そんなに器用に動かせるんだな。いいじゃないか。らしいぞ。すごく、竜みたいだ」

「屈辱を…。貴方は……」

息を乱しながら、下田は突進してくる彼女を見据えた。

本当になりふり構わなくなったようだ。

尻尾は、他の部分よりも硬かった。下田の腕力では、一息で剣で斬ることができない。さらに攻撃の手数が増えたことで、段々とダメージが蓄積しつつあった。

彼女の速剣と衝突した瞬間、ショートソードが折れた。符呪による補強でも間に合わないほど、ぼろぼろになっていた。刃が飛んでいき、下田の頬をかすめる。その傷へ向かって、ヨルシカは指を突き出していた。

下田はそれを掌で受ける。表面では止まらず、皮を裂き骨を貫通して、裏側へと出た。

自分の肉を押し出しているその細い指を、しっかりと捕まえる。

竜の膂力で、無理やり彼女は離れた。その衝撃で、下田の腕が肩から丸ごともしら取られていく。

攻防の中で少しずつ仕掛けていた魔術を、即座に相手の周囲へ展開した。十本を超える弾丸が、ヨルシカに向かって収束していく。

だが、彼女は全てを無視した。

下田がいる方向へと、迷いなく走り出す。ほとんどの弾丸を身に受けながら、彼の首筋へ青白い速剣を振るってくる。

無事な方の手でそれを分解する。

返して手のひらから伸ばした魔術剣を相手の喉に刺した。

それでも、ヨルシカは止まらなかった。

彼女は拳を弾けさせて、下田の肩に直撃させる。はつきりと、骨が折れていく音がした。その衝撃は腕だけに留まらず、脇腹にも伝わっていく。

どうやら、肉弾戦を望んでいるようだった。別の手段を使った方がいい場面でも、彼女は直接殴っている。完全に、その戦い方はかつて

のものから乖離していた。下田の体が破壊される感触を、そんなにはつきりと味わいたいのだろうか。

また、尻尾が来る。

下田はファランの速剣で三つに斬った。そのままヨルシカの顔を蹴って、後ろへと下がっていく。

彼女はその追撃として、魔術を続けざまに放った。その全てに同じものをぶつけていく。彼女の激情をあおるように、狂いなく相殺していく。

下田が作った炎の塊を、彼女は飛び回りながら避けていった。もう、ほとんど魔術での移動法に慣れてきている。体勢を崩すことがなくなった。おまけにその速度は下田のそれを優に凌駕している。脚力の圧倒的な差がそこにあった。

かわす合間に魔術を放っていた彼女だが、やがてその行動はしなくなる。下田の攻撃が止まっても、すぐに向かってこようとはしなかった。呼吸するたびに、肩が大きく上下している。彼女の表情からいって、ほとんど限界が来たのは確かだった。

術を扱える限界が。

下田は胸を抑えながら、右手に力を籠める。

こちらにも、それはほとんど同じだった。

どうということだ。

自分のことが、わからなくなる。

明らかに、勝てる相手だったはずだ。苦戦するわけがなかった。今までどれだけ、戦ってきたと思っている。いくら彼女が浅い知恵を働かせようと、勝敗を左右するほどのものにはならないはずだった。なのにどうして、こんなに長引いてしまっているのだろうか。

残りの気力は全て奇跡に回さなければならぬ。もう、攻撃に使う余裕はない。

嘲笑うような、何かの声が聞こえた気がした。

それはヨルシカの声ではない。

だから、相手にはしない。ただ目の前の、憎い敵だけを考える。不利になるが、何とかなる。上手く流れを感じながら、右手を打ち

込めばいい。こっちの力なら、首をもぎ取ることも可能だ。殺すことができる。

だがその前に、相手の鼻柱を折ってからにしよう。

下田とヨルシカは、同時に叫びながら踏み込んだ。



彼女は、自分の価値を信じていた。

周りのほとんどを見下すことによつて、自分だけが自分の中で際立っていると思ひこむようにしていた。

そうでもしなければ、耐えられなかったからだろう。幼い頃から毎日のように繰り返し返されていた、虐待とも呼べる訓練。彼女は、遠大な目的のためのおびただしい数の駒。その一つとして、責務を全うできるように、殺し方を教わっていた。

だから、槍が嫌いになった。

雷は、もつと恐れるようになった。

その負の感情を、親に向けるようになったのは無理もないことだ。生まれてからすぐに去っていった両者のことを、どう愛せというのだろうか。

唯一グウインドリンだけは、彼女のことをおもんばかってくれた。彼との時間だけは、他のあらゆる憂鬱なことを忘れていられることができた。

だが、そんな幸せな時期は、すぐに過ぎ去っていく。

使命。

責務。

奉仕。

それらを背負い、仮面を被つて、長い年月を過ごしていく。彼女は、火継ぎに対して何の尊敬も抱いていなかった。恨みを持っている大

王の一族が注力をしているというだけで、良い感情は持てなくなる。

鬱屈で押しつぶされそうになる時は、思い出すのだ。

グウインドリンとの時間を。

そして、あの胸がすくような殺人を。

子供の方を殺さなかったのは、別に情からではない。

そして、ほんの気まぐれでもない。

事情はともかくとして、大きな戦争があつてからの数千年、彼女にとつての楽しみは、それが起きてからの行動を夢想することだった。

とにかく、どういう顔をするのかが興味深かった。既に自身の母親が殺されていることを知った時、どんな反応をしてくれるのか。初めはそれを想像するだけでも暇を潰せていたが、やがて足りなくなつた。

もつと、楽しみを増やすべきだと思つた。ただ教えるだけではつまらない。できる限り希望を持たせて、最後の最後で、全てはまやかしだったのだと悟らせる。しかもその事実を、信頼していた女性から聞かされる。なんて、素晴らしい娯楽なのだろう。

事実、それと他の有象無象が目覚めてからは、退屈な時間が少なくなつた。それが何の疑念も抱いていない顔で、ただこちらへの憧憬だけを胸に接してきている時は、殺意を抑えるのに苦労した。早く解放して悦楽に浸りたいという思いと、もつと溜めてから、最高のものを味わうのだという思いがぶつかり合っていた。

だが、結局、計画はまるで上手くいかなかった。

それどころか、あの男は、災難の元になつた。

「はあ、はあ、はあ…」

自分の鼓動が、呼吸がやけに響いている。

下田の殴打を、首を傾けて避ける。耳の端が吹き飛んで、じわりと血がにじみ出していく。頬を伝い、下に落ちていく感覚は、少しも戦いの邪魔にはならなかった。

ヨルシカは素早く指先を動かし、相手の耳をもぎ取つた。

重い吐息が、口から漏れた。

「右耳、なくなりましたね」

喋っている途中で、自分の腕がへし折られるのを感じる。見れば、下田は邪悪な笑みを浮かべながら、口を動かすところだった。

「左腕、無様だな」

今まで、知らなかった。

何もかも予想外のことが進行し、今に至っている。散々だった。もう、全てを放り出したという気持ちに、かられたこともある。

それでもそうしなかったのは、結局、彼女は今まで大したことを知らなかったせいだろう。長く生きてきたのにもかかわらず、経験が欠如していた。

その時、自分が涙を流していたことを、今でも恥じている。一生の汚点だと、自覚している。

あの無責任な男。今はノミと名乗っているらしい存在が起こした行動によつて、ヨルシカもまた知ることになった。

下田がどうして、これほどまで邪魔な存在になったのか。

その、全ての記録を。

初め自分が少なからず衝撃を受けたのは、どんな矮小な存在でも時間を膨大にかければ、あれほどにまで昇華されると、わかったからだと思った。思いこんでいた。可能性の拡大。そのことを自分に当てはめて、それまでしてきた鍛錬を思い返して、心を動かされたのだと思っていた。

だが、さすがに自分をずっとごまかすことはできない。

正直、彼がどんな苦勞をしてきたかなど、興味はない。どうでもいい。そしてどれだけ強くなり、数多くの戦士たちを殺してきたかも、眼中にない。

記憶の旅の中で、最も強烈に残ったのは、

やはり、自分自身への感情だった。

その積み重なった憎悪と殺意は、ヨルシカの中の定義を容易に書き換えた。

結局、グウインドリンの同情は、片手間だったのだと、認めざるおえない。彼もこちらを庇護しようとしてくれたのだろうが、本当に彼女のためだけを思っていたのかは、謎だ。それが本物の、向けられた

感情かといえ、今は疑問が出てくる。

本物は、あれのことを言うのだ。

下田の鼻を折る。

入れ違いで、腹を貫かれた。

血が飛び交う。

自分の臓物が相手にかかる。

再生させながら、足を踏みつぶした。

どんどん削っていかなければ。もうわかってきている。限界は近いのだろう。この調子で下田に奇跡を使わせていけば、やがて切れる。

「内臓垂れ流しやがって、だっせえ」

「足の骨全部砕いてあげます」

だんだんと、視界が狭くなっているような気がする。

体の芯が定まらない瞬間がある。

だが、戦いは問題なく続いていた。

お互い、もう他の手段を持ち合わせていない。術もほとんど使えず、武器は己の体だけ。直接傷つけ合い、むき出しの感情をぶつけ合っている。

それは、断絶だった。

環境の断絶。

切り取られていく。下田の部位を一つもぎ取る度、こちらの体が一回削られる度、その感覚は強まっていった。気配として、こちらに向かってくる集団がいるのはわかっている。だがそんなことを気にする気分になれない。

目の前の男しかいない。

自分たちだけが、この世界に存在している。お互いに唯一の情を向け合っている。

そんな気がする。

息が乱されている。

ただの疲労のせいだけではいような気がした。

ヨルシカは知らなかった。

かなりの時を生きてきた彼女でも、想像もつかない期間。相手はずっと、他の者を殺している間も、彼女のことを見ていた。殺したいと願いつづけていた。その強烈な情念が、本物の感情というものなのだと、理解し、最初の自分へ嫉妬した。楽しみを奪った繰り返しの初期の自分をも憎悪した。記憶を体験した直後は。

頬に、下田の血がべちやりとついた。反射的に、ヨルシカはその液体の一部を舐めとっていく。気色悪いと思いつつながら、お腹の部分がふわりと浮かんでいくような不快ではない感覚の正体を掴もうとしていた。

太古、竜は食べていたという。
無力な存在を。

食べることで、より効率的にソウルを取り込んでいた。

だがその血を引くヨルシカには、そんな思考は今まで浮かんだことがない。そうしたいと思ったことがない。耐えられなかったからだ。ソウルなど、間接的に得られる。わざわざ気持ち悪い肉に口をつけ、体内に取り入れることなど耐えられない。まして、それが憎んでいる相手となればなおさら無理だ。

下田の腕が飛んだ。勢いづいて、ヨルシカの顔に当たった。切り口から肉がこぼれ、彼女の口の端についた。避ける動きでずれていき、不可抗力的に口内へと滑り込んでいった。背筋を、強烈な痺れが伝う。

「はあ、あ……」

かつて、エルドリツチは言っていた。

ソウルとは記憶であり、経験なのだ。故にその濃さは、所持者がそれまでしてきた経験の量、質によって決まる。その点で言えば、この男のそれはまさに。

こんな、の。
こんなもの、が……。

こんなものを、どうして自分は知らなかったのだろう。知ろうとしていなかったのだろう。あまりに無駄だった。これまでの全てが、この瞬間のためのお膳立てに過ぎなかった。あらゆる行動が、これに直

結している。

もはや正気ではない。

下田はヨルシカの喉をえぐり取りながら、一瞬だけ怪訝そうに見た。

「お前…、酔ってんのか？」

答えは、蹴りで返した。爪の先で彼の下腹部を削る。瞬間、ヨルシカはくすくすと笑みをこぼした。

「酔ってません」

お互いに血を浴びる。

お互いの血を掛け合う。

肉を飛び散らせる。

たまに口に入る。

ソウルが、全身へ澄み渡っていく。

それはもう、情交だった。ヨルシカにはわからないが、本能的に強く惹き付けられていた。永遠に続くものだと、すっかり思い込んでいる。終わりはなく、自分も相手もぐるぐる回っている。そして、時折交わる。

だが、もちろんあり得ないことだ。

綻びは明らかに、ヨルシカの方が大きくなっていた。彼女は足元すらおぼつかない。呼吸も不規則になっていて、繰り出す攻撃の精度も落ち続けている。

当然の帰着として、彼女が先に限界を迎えた。

下田の二本の指が、布を破き、胸に突き立った。それで止まることはなく、続く他の手の部分もめり込んでいき、拳ごと背中まで突き抜けた。ヨルシカは、自分の吐き出した血と下田の体から滴り落ちる血で、顔が染められていくのを認識する。認識して、訳が分からなくなっていた。

「死ね、死ね、死ね…」

下田の方も取り憑かれたように周囲をまさぐっている。幸か不幸か、彼の手は欠けたショートソードを探り当てた。おそらく残り僅かであろう彼の気力が、雷を生み出すことに全て消費されていく。

ぼろぼろの刃に、雷光が宿った。それは確実に、彼女の脳を破壊するだろう。命の危機が迫っても、くらくらしている頭のせいで抵抗ができなかった。

生涯最後の光が、視界を埋め尽くしていく。

ヨルシカは息を吐き出しながら目をつぶり、次の瞬間になつてもまだ残っている自らの意識を、不思議に思った。

目を開ける。

顔のすぐ横に、弾ける雷があつた。

「んで、なんで…」

刃は彼女の耳の端を焦がしている。それだけに収まっている。

目線を上に戻すと、下田は苦しそうに顔を歪めていた。

頬に、赤色ではない雫が落ちてきた。

「なんで、できないんだよ！ くそが…、ちくしょう。なんで、ずっと憎んでたのに。殺したかったのに」

ヨルシカは自身の体を跳ね上げた。

彼の顔を横に押し、力の限り地面へと叩きつける。未だ震えている足腰を何とか動かしながら、相手の体を押さえつけた。完全に上下が入れ替わる形になる。それでも下田は、右手に握っていた剣を離していた。

「おろ、か。ばかな男、ばかですね…」

口があまり回ってくれないが、形勢は逆転したとほくそ笑んだ。すぐに喉へと手をやって、最も苦しむ死に方を相手に押し付ける。

「が、か…」

唇を舐めながら、苦痛にあえぐ表情を眺めた。

これで終わる。

この男が死ぬ瞬間を見られる。苦しみ、絶望に沈み、まだ生にしがみついていたという顔を見物しながら、念願を達成することができる。

本当に？

ヨルシカは、自分の頭を殴りつけたくなった。

黙りなさい。

終わらせてしまおうですね。この時間を。これから先、同じものを味わえる保証なんてないのに。気付いているんでしょう？ あの情を、きつと彼だけが向けてくれる。他の誰からも、得ることはできない。

殺さなければ。

あの悦楽を逃がし、この男を殺したせいで大勢に疎まれて。きつと貴方の結末は、ひどくつまらないものになる。

まやかしが。

そつと、血にまみれた腕に小さな手が添えられる。

少女の顔を、ぼうつと見た。

「やめて」

「はい…？」

「もう、やめて。これをけじめだなんて言う男もいるけど、私はいや。兄さんと姉さんが、殺し合うのは見たくない。嫌なの。お願い、離してあげて」

「小娘が…。命令を、私に、するな」

「お願い」

この白髪の少女のことは、排除すべきだとずっと考えていた。だが、グウインは反対していた。彼女の、特異な力に注目していたからだ。出自がどうであれ、利用すべきものは残していた。

だが今は、自分の考えだけで行動しよう。手をただ振るうだけで、この少女の首を飛ばすことができる。

その前に、声が出た。

『結局二兎を得るのが、気持ちいいんだよね』

ヨルシカは、即座に手を引いた。

しかし、下田の頭から飛び出してきた膿は、その白い肌にまとわりついてくる。針を形作り、あつという間に内部へと差し入れてきた。『ちとせもすてがたいけど、ワタシの方はこっちなあ。ま、少数派みたいだったけど』

妙な違和感は、前から感じていた。

下田の記憶からして、彼が呪術を完璧に扱えるようになったのは、

この膿がいたおかげだ。しかし、先ほどの戦闘においても、かなり巨大な火球を操っていた。膿はもういないはずなのに。

つまり、それはちとせとどのような契約を交わしたのかは知らないが、結局守る気もない約定だったということだ。下田の脳には、まだ残っていた。

ヨルシカはうずくまる。竜の血を引いているおかげで、深淵の毒にはまだ耐性があった。それでも、かなりの苦痛であることにはかわりない。もはや、彼にとどめを刺すどころの話ではなくなった。

「早く、イリーナを！ 兄さんが…」

駆けつけてくるノミに向かって、少女が叫ぶ。

かろうじて視線を上げると、下田は意識を失っているようだった。だが、出血は止まらない。頭に開いた穴とそれ以外の諸々の傷が、確実にその命を奪いつつあった。

多すぎる。奇跡使いが駆け付けたとしても、間に合うかどうか。

それに、脳の一部が欠損している。イリーナといえど、完治させることができるかどうか、わからなかった。

鈍った頭でも、結論は浮かびつつあった。

その判断を、一瞬で終わらせる。

表の憎しみと、内なる声が混ざり合い、どちらが本当の感情なのかわからなくなっていた。どちらも本物なのだと、次第に考えるようになってきた。

「ふう…」

ため息をつきながら、ヨルシカは腰を上げた。片手の激痛でもう気絶しそうだが、その前に重要な仕事を終わらせるつもりでいる。

腕を折り、骨をちぎった。

少女が、呆気に取られている。

「何を…」

「血を…」

それだけ理解したようだった。少女はヨルシカの腕をとると、そこから滴る血液の流れを下田の口へと合わせた。

仕方がない。

ヨルシカは言い聞かせる。

血を分け与える。竜の血を。

それは、古くからのしきたりにもあった。もちろん厳密には竜の陣営に属していない彼女には知ったことではなかったが、その行動はある一つのことを意味している。

気にしないようにした。なぜなら、そういうつもりで行動したわけではないからだ。

下田は弱々しく咳き込んだ。口の中に入った血が全て吐き出されていく。

少女は泣きそうな瞳を向けてきた。

「駄目。飲み込んでくれない」

「…なるほど」

こちらも深く傷ついているはずなのに、次の案をすぐに思いつけたのは不思議だった。それは決して、願望が表れているわけではない。少なくともヨルシカ自身は、これを合理的な選択肢だと思っていた。冷静ではない思考能力で。

彼女は歯を食いしばりながら、少女から腕を奪い取る。

「手間の、かかる……」

大口を開けて、食らいついた。

嫌な感触だ。自分の体を食いちぎるなんて、誰だつて忌避するに違いない。

さらに上を向きながら、腕を掲げた。びちゃびちゃと、竜の血が流れ落ちていく。口内に溜まっていく。

ぷくつと、少し頬を膨らませたヨルシカは、妖しい瞳のまま、下田に近づいた。既に周囲が慌ただしくなっているのにも気がつかず、未だ断絶された世界の中で相方の顔を見ていた。

自分の顔を下ろしていく。

さすがに間近にまで迫ると、目を開けていることに躊躇した。瞳を閉ざし、ヨルシカは不本意だと内心文句を言いながら、下田と口を合わせる。

相手の口内へ血を垂らしていく。喉に詰まらない適切な量と勢い

を心掛けた。

一瞬のようであり、永遠にも感じられた。
ぐるぐると回る。循環する。

下田の状態が落ち着いた直後、ヨルシカは膿が与えてくる激痛で失神した。

65. 女関係の整理

「おい、おいつ！　まずはだな。つて聞いてんのか？　話を聞けええええ！　ギヤあああああ！　お前絶対殺る気だろそれええええ！」
わめくノミに構うことなく、下田は炎剣を形成させた。魔術を使わないのは、ある仮説が頭に浮かんだからだ。相手を含めたグウィン達の軍勢は、呪術への耐性がやや低い傾向にある。どんな防護を持つ装甲でも、貫ける可能性が高い攻撃を選択する。

ノミにの片腕を押さえつけている貴樹は、にやにやしながら事の成り行きを眺めていた。彼はおそらくどちらかの味方というわけでもなく、ただ面白そうだからという理由で参加しているのだろう。

「ちよ、ちよつと、アナスタシア。アーシャ！　これほどけよ。しゃれになつてねえぞ」

対するクリムエルヒルトは、かなり真面目にもう片方の腕を魔術で縛り付けている。

彼女は冷たい視線を暴れるノミに投げた。

「罰を受けるべきです。昔と、何も変わってないんですね。何も学ばない」

下田は構える。

さらにノミは騒ぎ立てるが、その場にいる者達は誰も彼を助けようとはしていなかった。

自業自得の面もある。彼のしでかしたことはそれだけのものなのだ。下田としても、今こんな男に関わっている場合ではないのはわかっている。しかし、どうにかこの憤りを鎮めなければ、まともにこれからの方策を立てる余裕もなかった。

炎の刃を、ノミの喉に当てる。後は少し力を入れるだけで、肉を焼き裂いていくことができるだろう。

「待て、キレて失うものを考えろ。いいか、おれはちゃんと考えて行動したんだ。いだだだだだだだ！　焼けてるっ！　聞けよ、彼女達を助けられるんだぞ！」

下田は剣を焼失させた。

右手を相手の喉に添えると、指で軽く締めつける。

「もし、お前が…」

「ぐええ」

「嘘をついてたら、もっと苦しい殺し方に変える」

「おっけおっけ、いいから離せ」

ノミは少し咳き込んだ後、引き締まった顔でついて来いと合図をした。直後、クリムエルヒルトの魔術を腰をひねってかわし、バランスを崩しながら洞穴の方へと向かっていく。

下田は半信半疑で、その背中を追った。

一室に入る。

まだ意識を取り戻したばかりで、記憶が多少混乱していた。ヨルシカと戦い、あと一歩まで追いつめた。そして。

彼は自分の感情が、行動が理解できなかった。前にはできていたことが、無理になる。今までは逆だったのだ。できなかつたことを、何度も繰り返すことで可能にしていた。それが彼の得意分野だった。

部屋では、二つのベッドが埋まっている。

一つには、ちとせが寝かせてられていた。ほとんど、直視することができない。彼女の半身は膿に侵食されている。その苦しみは、十分に想像できた。どう考えても、彼女が耐えられるものではない。命は風前の灯火だ。

自分を助けるために、受け入れたのはわかっていた。今ではもう、直前でもかわした彼女との会話をほとんど思い出せる。改めて、ちとせは凄い女性だと思った。こんな自分のために犠牲になるべき人ではないのだ。

一方で。

下田には訳がわからなかった。

ヨルシカは荒く呼吸をしながら、目を閉じている。そこは前まで下田が寝かせられていたベッドだった。彼女の右手で、膿が蠢いている。侵食の範囲はちとせと比べるまでもないが、その苦しみようは全

く引けを取らない。

もし彼女が話せる状態だったら、無理やりにも口を開かせるつもりだった。そして問いたただすのだ。どういう狂い方をしたら、このような事態に陥るのか。

話は、すでに聞かされている。下田の脳内にまだ残っていたウミの残党が、彼女に憑りついたのだという。そして抜け出された後の瀕死の彼を、ヨルシカは自らの血を与えることで助けたらしい。そうすることで、竜の再生力を強めた。

彼女のそばについていた画家の少女が、入ってきた彼を見て、涙を流した。最近、その少女は泣いてばかりな気もする。まだ、ゲールを死なせてしまった詫びもしていない。

少女は下田に飛びついた後、彼の手を握りながら、ノミを睨みつけた。

「今更、何のつもり？」

「そうか、お前は見たことなかったか」

ノミは付いてきているクリムエルヒルトの額を小突いた。

「何を…」

「お前、人のこと言えねえだろ。おれへの鬱憤ばらしはいいが。もう、わかるだろ。お前は見たことあるはずだ。深淵の膿が取り除かれる瞬間を」

彼女は言い返せずに、顔を逸らした。

下田は、先を促す。

「膿には弱点がある。炎だ。呪術のそれじゃない。大王が見つけた、最初の火。それにまつわるもの全てが、深淵を退ける効力を持っている」

「そんなもの、どこに」

「おれはお前に示したはずだ。そうしないと、お前は完全に正気を失って、取り返しのつかないことを繰り返す所だった」

思い返す。

ノミが言っているのは、あの時だ。自分が錯乱し、貴樹に向かっていった時のこと。確かに、自分は炎に包まれた。それ以降は意識を失

い、まるで憶えていないが。

「おれが何かを与えたわけじゃない。お前の中の炎を解放しただけだ」

「僕の…」

「わかっってきただろう。お前が持つているそれを、彼女達に与えるんだ。そうすれば、膿を滅ぼすことができる」

「でも、危険は大きいんじゃない」

「タカキが、火守女を救った時は大丈夫だった。もちろん事故が起きる可能性はある。そうだとしても、今この場には史上類を見ない卓越した奇跡使いがいる。そうだよな？」

ノミからの視線に、下田は向き合った。

「ああ、でも無理か。お前、自分の命も救おうとしなかったもんな。そんな体たらくで、他人を治療できるわけがねえ」

ちとせを、一瞥する。

「お前に、未来を生きる意思なんてなかった。わかってるぜ。一区切りがついたら、さつさと死ぬつもりだったんだろ？ 自分はここまでできた。後はタカキにでも任せればいい。十分働いたから、死んだ母親に会っても、胸を張れる。…糞くらえだ、マザコン野郎」

強い言葉に対して、苛立ちはいわいてこなかった。全てを当てられたが、不思議な落ち着きがある。

そう、資格を求めている。自分がかつて、ちとせ達を見捨てて逃げようとした。だから、彼女たちを何とか生かして、安全と呼べる段階にまで連れていかなければならなかった。そうしなければ、資格が得られないから。母親に会う資格が。

ほとんど、やけくそのようなものだ。やはり自分は、母親を恋しく思っていた。もう彼女がとくに死んでいるとわかった瞬間から、前向きに生きようとする気はなくなった。心残りを全て片付けてから、自らを終わらせようと考えていた。

だが、今はもう、わからなくなっていた。

「やるよ」

「何がだ？」

「助ける」

「確認する」

ノミは、ヨルシカの方を、指差した。

「お前の中には、二つの残り火が宿っている。両方とも、使うんだな？

片方だけを残せば、それを自分の力に変えることもできる。貴樹の例がわかりやすいだろう。やり方は俺が教えてやれる」

下田は目をつぶり、頷いた。

「使う」

「憎んでいる女も、助けるんだな？」

「うるさい。借りを帳消しにするんだ。どっちにも使う」

ノミは笑った。どこか安心していているような様子だった。

「よし、始めるぞ」

そこからの作業は、予想よりも簡単に進んでいった。

まず下田は自分の中にある残り火を操作する必要があったのだが、それはすぐに習得できた。既にソウルの操作を嫌というほど修練していた彼にとっては、朝飯前だった。そして残り火達を移すことも、火守女としての技能を利用すれば成功した。

ちとせとヨルシカに、炎が灯る。

即座に奇跡を使おうとしたが、ノミに止められた。よく見てみれば、彼女達に傷は何一つついていない。その火が、篝火のものと同質であることはすぐに理解できた。概念的なものなのだ。

そして、こびりついている膿が悶えている。苦しんでいる。徐々にその身が炭化されていき、ちとせの体が表れていくのを、感慨深く見ている。心なしか、彼女の呼吸と顔色も改善されているような気がする。

膿の一部が、弾けて床に落ちた。それはもそもそと下田に近づいてきている。

『自分でも、やりすぎたと思ってるよ』

「そうだな」

『これまでだね。満足したから、もういいよ。消えるのも、悪くない』
下田の顔のすぐ横を、膿は素早く飛んで通り過ぎていく。その体は

ノミの手をぎりぎり避けて、ちょうど戸口に立っている女性を狙っていた。

『なんてね』

少しも懲りていなかったそれは、筋肉質な手によって捕まえらるる。

火守女の前に立った貴樹は、胡乱な目で膿を見つめた。

「んだ？ ゴキブリか？」

ぐちゅ、と潰される。間もなく貴樹の手から出た炎に包まれた。

もしかすれば最も時間を共にしたかもしれない、相棒とも呼べたものの最後を下田は確認した。少しも同情はない。長い付き合いだったが、わかつたのは決して相いれないということだけ。ウミはただ、求めるだけだった。自分の食欲を満たすことしかなかった。

下田はじつくりと、穢れの取れた彼女達を観察した。ヨルシカの方はさっと確認するだけで終わる。とりあえずどちらも、状態は落ち着いたようだ。苦しげだった表情が緩み、安らかな呼吸をしている。

ちとせが、口をむずむずさせた。眉間にしわを寄せた後、薄っすらと目をあける。

「あれ…」

下田は目を拭った。できる限りの笑顔を、彼女へ向けた。

「ちとせ」

枕元についた手に、さっと指が触れる。

彼女は下田の顔を認識すると、彼以上の量の涙を流し始めた。嗚咽を漏らすまいとこらえているその表情は、今まで見たどんなものよりも可愛いと思った。

「アキだ、アキがいる。ほんもの？」

「うん」

「よかつた…。生きてる。戻ってきてくれたんだ。よかつた」

喜ぶ一方で、多くの視線を集めていることに、下田は段々とむず痒さを感じ始めていた。注目されている状況にもかかわらず、ちとせは目を大きく開いて、彼を認識しようとしている。彼しか目に入っていないようだ。握ってきている指の力は強まり、彼のそれに絡まって主

張をしていた。二度と、離しはしないと。

彼女がこれ以上言葉を口にする前に、雰囲気に戻すべきだと直感した。だから下田は、多少の恥も惜しまないことにする。

「あのさ」

既に彼女は身を起こしかけていた。下田の肩にまで、手が上つてきていた。その表情は普段の彼女のはつきりとした芯がなく、夢を見ているかのような様子だ。

「えっと、疑問に思ったことがあるんだけど。あの時言ったことって、どういう意味かな」

ちとせは瞬きをした。涙がそれに伴って頬に落ちていく。

「え?」

「だから、その、あれだよ。あたしがママになってあげるってやつ。僕、わからなくて。だってどう考えてもちとせと僕は同じ年だし。意味がよく…」

回復したばかりにもかかわらず、彼女は俊敏に立ち上がった。ベッドの横にしっかりと足をつけて、下田の目の前で跳ね上がる。

その元気な動作とは対照的に、顔の調子は悪いようだった。顎の先から頬、耳の端に至るまでほとんどの部分を紅潮させている。唇の端をわなわなと震わせた。

下田の両肩に手をつけてくる。

大きく、揺さぶってきた。

「わすれてー!」

二人のそういった様子を、半身を起こしたヨルシカがじつと眺めていた。



見回りは、何の成果もなく終わった。

貴樹とノミで分担をしながら祭祀場の全てを探し回ったが、結局工

ルドリツチ達を見つけることはできなかつた。横の塔も当然確認した。人食いの痕跡は、完全に消し去られている。

ノミの話によれば、五本指の勢力もいた可能性があるらしい。下田の記憶内での認識が正しければ。

彼らが、一体どこへ逃げたのか。

貴樹はあらかじめ予想を終えていた。下田が行動を開始した時点で、祭祀場側の分が悪いと判断したのだろう。彼らは火継ぎに賛成しているわけではない。協力していたのは、共通の敵がいたからだ。地球の人間。その存在に対して、一時的な共同戦線を張っていた。

それに関する用事は後で済ませるとして、今は大事な作業のことで頭が一杯だった。

「大丈夫です。おかしな術がかかっている気配はありません」

下田は、液体で満たされている瓶を、掲げた。その中には二つの瞳が浮かんでいる。虹彩と角膜の色は淡い水色だ。

かつて、深みの聖堂で手に入れて、エルドリツチに奪われたもの。どうやら、祭祀場の一室に、保管されていたようだ。なぜ、あの人食いが逃げるときに持っていかなかったのはわからない。罫の可能性もあったが、下田が否定している。

貴樹は初めからずつと、向かいに座っている火守女を見ていた。彼女の視線は、瓶と貴樹の間を行ったり来たりしている。

「それで、どうするんですか？」

できれば、全て自分が最初から最後までやってあげたかった。だが、奇跡は使えない。ましてや、感覚器官を完全に治すほどの技術を要するとなれば、結局はこの気に入らない子供に頼るしかなかった。

貴樹は熱のこもった目を火守女から外し、下田へと向き直った。

「何が？」

「治すことは難しくありません。ただ、今の状況はちよつと特殊です。火守女さんにはすでに、先生の瞳が一つ入っています。どうしますか？ 彼女からそれを外して先生に移すこともできます。それから彼女へこの二つを移植する。手間は増えますが、できると思いますが」

「いや、そうしない」

貴樹は自分の座っている椅子をずらした。火守女はやや身を引こうとする。だが、その背中が壁に当たる。観念したように彼と視線を合わせた。

「私も、そのようにした方が…」

「本当に、そう思ってるのかい？」

優しく問いかけるよう努力したが、その語尾が震えるのは抑えられない。はつきり言って、下田がこの場にいなければ今すぐにでも彼女を横のベッドに引き倒している所だった。

貴樹は溶けかけている脳で言葉を紡ぐ。

「もつと、良い方法があると思う」

「そう、なんですか？」

「うん」

彼女を見続けながら、下田に向かって指示をした。

最初、下田は行動しようとしなかった。何かに衝撃を受けているようだった。だが、やがて苦笑すると、最後の確認をしてくる。

「いいんですか？」

「拒絶反応があっても、お前なら何とかするだろ。やってくれ」

「止めはしませんけど」

瞳を戻す作業は、特に大きな事故もなく進められた。

粛々とした空気の中、貴樹は素直に感動していた。聞いたことはある。日本にいたころ、テレビの特集などで流し見していた記憶。恋人同士が、同じ種類の物を使ったり、お互いの物を交換し合ったり。その時は豚同士がとち狂っていると馬鹿にしていたが、今はもう違っている。

下田が離れると、左目を何度も開け閉めした。

「ああ…」

左右の視界は、やや異なっている。見える光の加減が、色が微妙に変わっている気がする。しかし、おそらくそのうち気にならなくなるのだろう。いや、慣れるかどうかはわからない。この素晴らしい感覚に、飽きることなどあり得ないのだ。

それは火守女を見ても、実感できた。

彼女の瞳は、水色の右と、黒色の左で分かれていた。ソウルでも感じられる。自分自身の素晴らしいソウルと、彼女のもっと素晴らしいソウルが、宿っている。

下田が戸口から出ていった。貴樹にはその気遣いも気にする余裕がない。

「見える？」

火守女は大きく両目を開いて、貴樹を認識していた。

「大丈夫です」

「どう、思う？」

「あの…」

「俺は、ちゃんと見える。君の姿がちゃんと」

「私、私は、良いのでしょうか」

「何が？」

火守女は俯いた。

「ずっと、何かから逃げてきました。ゲルトロードを救うことから。人食いから。使命から。わからないふりをして、貴方を利用していたのかもしれない。本当は…、ここまでたくさんのことをしてもらえほどの存在だとは、決して…」

「ひもりんはさ」

彼は手を伸ばした。それに対しての抵抗はやってこない。もう後ろが壁で、逃げられないだけかもしれないが、火守女は顔を逸らしてまで拒絶する気はないようだ。貴樹の指が頬を滑っても、くすぐったそうに睫毛を揺らすだけだった。

「死ぬことについて、どう思ってる？」

「わかり…」

すぐに答えようとして、彼女は胸を抑えた。貴樹の瞳を覗いて、氷づけされたかのように、呼吸を一瞬だけ止めた。

「俺は、嫌だ。君が死ぬことを考えるだけで、気が狂いそうになる。その原因になったものを全部飲み込んで、消してしまいたくなる。いいかい、もう二度と」

顎に、人差し指と親指で触れた。彼女の唇が少し動く。

「二度と、自分を危険にさらさないでくれ。俺を思いやってくれるのは嬉しい。でもその考えは間違ってる。君が死んだら、色々巻き込んでから、俺も死ぬ。憶えててくれ。これからずっと」

「灰様」

「もちろん君の話もわかるんだ。安心して。俺は、君のことと同じくらい、俺のことも大事にしている。だから、これからは気をつけるよ。決して、自分を犠牲にすることなんてしない。君と少しでも、長くいたい」

彼女は、大きく息を吐き出した。まるで今までずっと呼吸を止めていたかのように。その吐息が口にかかって、貴樹は頭の芯がぼやけていくのを感じた。今なら、樽五杯分の飯をたいらげられる気がした。

「聞いてくれ」

相手の瞳の中に写っている自分が、よく見えた。そこまで細かく拡大されたかと思えば、彼女の顔全体がよく見えるくらいまで意識が遠目になることもある。彼女の薄い唇しか、目に映らない瞬間もある。合わさって、溶けていく感触だった。視線が合い、深く落ちていく。「君はもう、勝手に傷つくことは許されない。俺のものだからだ。離れることも許可しない。ずっとそばにいてくれ」

顔を歪めることもなく、声すら漏らさずに。

静かな涙を、火守女は流していた。

そのこぼれていく透明な液体を、今まで見たことがないほど綺麗な宝石だと、貴樹は考えていた。

「はい、はい…」

彼女は柔らかく微笑んだ。はつきりとした笑顔を見たのは、これで二回目だった。これが二回目になるなんて、素晴らしい幸運だと彼は考えていた。

火守女は顔を少しだけ動かし始める。

「私は貴方の、タカキ様だけの……、火守女です」

相手の顔が、横にずれた。

あれ、と思った時には頬に何かが触れる。何なのかはすぐにわかったが、頭の中に入りきる前に、視界が揺れた。

彼女はすぐに離れた。そしてやや恥ずかしそうに、人差し指を口元へ持つていく。その先が唇に触れるのを、爆発した脳内ではつきりと認識した。家族からのものよりもはるかに強烈な接吻の感触が、肌から骨にまで響き、心臓まで届くようだった。

貴樹は、もんどりうって気絶した。



ばちん、と頬が叩かれる。

リリアーネとユリアが、既に部屋の隅まで避難していた。

張り詰めた空気をまるで無視して、入り口の扉がぞんざいに開かれる。

「おい、シモダ。シコつてるとこ悪いな。大事な話が……。……あつ、すみません。間違えました〜」

適当に入ってきたノミは、睨み合っているちとせとヨルシカを認識すると、即座に退却していった。何が太陽の長子だと、下田は呆れた。できれば強引にでも自分をここから連れ出してほしかったが、当てるだけ無駄だということだろう。

どうして、こんな状況になっているのか。

初めは単純だった。貴樹から頼まれたことを済ませた後、それなりにいい気分で自室へ戻ろうとした。これからの予定を考えるために。その途中で、ちとせとぼったり会ったのだ。

彼女はもうほとんど体調が回復していた。色々と心の準備をしてから話をしにいろいろを思っていたのに、何の前触れもなく鉢合わせてしまったので、少しの間気づまりな沈黙が続いた。

意を決して話そうとすると、先に彼女の方が口を動かしていた。

「話があるから。あたしの、部屋にいい」

彼女はあえてしっかりと目を合わせてきていた。だが、下田の方はまだ余韻が残っているせいで、まともに直視できない。そのせいで言葉が出ないでいると、彼女は腕を掴んできた。

「あんたの部屋でもいいよ。決めた。さっさと案内して」

少しの間彼女を観察すると、やや目線を斜めに逸らして、髪をいじっているのが分かった。毛先を重点的に手で弄んでいる。下田もよく目につくと思っていた部分だ。髪の毛の先が丸まっているのは、小動物みたいな印象を与えてくる。

下田は頷くと、おずおずと先を歩き始めた。

そして、当たり前のように隣に出現している存在の足を踏みつけた。

「おい、何してんだお前」

「それはこっちの言葉です。殺されたいのですか？」

ヨルシカは鋭い目つきで直視してくる。

彼女の言葉は無視した。見えない体を使って下田の不意を突こうとしてくるのは、今まで二回あった。だが攻撃しようとすれば当然察知できるので、全て失敗に終わっている。下田が反撃に出ないのは、そうする前に相手が去っていくからだ。正直、原理のわからない行動だった。

「邪魔をするな。用があるなら後にしろ」

下田にはなく、ちとせに顔を向けた。

「二人で、どこに行くつもりですか？」

「関係ないだろ」

「アキの部屋に行くの」

振り返ると、ちとせは真つすぐヨルシカを見ていた。

「ちとせ？」

「そうですか。ならちようどいいですね。早く向かいましょう」

「はっ」

「貴方に言われなくても、そうするから」

両者とも、それ以上何も言うことなく、下田を向いてきた。何かを確認するように。はつきり言って、まだ状況を飲み込めていなかった。

た。数秒沈黙を保つてから、どうやらどちらも連れていくのだと理解した。質問は許されない空気だったので、不可解な気持ちになりながら歩きを再開する。

そして部屋に入ると、既に先客がいた。リリアーネは下田のベッドに腰かけていて、ユリアは壁に寄りかかっていた。

振り返ってみても、あまり参考にはならなかった。

これでいきなりちとせがヨルシカの顔を平手打ちした経緯が、わかるはずもない。

本当ならば痛快な気分になるはずだが、今だけは違った。なぜか下田は、息苦しいものを感じている。彼女たちが厳しい表情で睨み合っている時間が続くほどに、なぜかその矛先が自分に向けられている錯覚に陥った。

「私は、絶対に許さないから」

ちとせが静寂を破った。

「アキはちよつと、あれだし。甘いかもしれないけど。私は貴方をずっと許さない。してきたこと全部、彼に償うまでは絶対に」

「シモダ」

ヨルシカの方はまるで相手しないと聞いたげに、鼻を鳴らした。

「殴られました。殺してもいいですか？」

「そうしたら、お前を殺す」

ソウルの矢を突き付けると、さらに可笑しそうな顔になった。

「ふふ、嘘をつくのが下手ですね」

「何だど？」

「だって、殺せなかったじゃないですか。無理なんでしょう？ みつともなく泣いてましたもんね。どうして、どうしてって」

「それ、本当なの？」

ちとせもまた、こちらを向いてきた。

「説明して」

「え、いや……」

「私は彼と、とても濃厚な時間を過ごしました。今までにないような……。忘れることはできません。ですが結局、この男の本性はそういう

ものだった。何一つとして決めたことも貫き通せない」

「何それ。初耳なだけど」

ちとせの顔は下田へ固定されたままだった。

「だからさ……」

「当然、今のままでは納得できません。私達は今一度、殺し合いをするべきだと思います。途中までは上手くいっていたんです。何が駄目なんですか？ 私を殺す気に、どうしたらなっくれますか？」

下田は座りたくなり、椅子を探した。しかし、既に占有されている。

ちとせは、ベッドに腰かけていた。枕の方にどちらかといえば寄っている。対してヨルシカは丸椅子に座っていた。とんとんと、小さな机を指で叩いている。

「なんか、おかしくない？ 流れがさっぱり」

「ですから、どうしたら私への殺意を取り戻せるのかと訊いているのです。繰り返さなければ質問の意味も理解できませんか。脳に深淵を飼っていただけのことはありませんね」

「あのさ」

ちとせは舌打ちをした。

「その、人を食ったような口調どうにかできないの？ これ以上アキを悪く言ったら、もう許す余地なんてなくなるから」

「低俗の思考は、理解できません。どうして貴方の許しを得る必要があるのですか？ ろくにものを知らないせいで、態度も大きくなりがちですね」

「うわ、やっぱり酷い。記憶の中でも考えてたけど、いくら美人でも心が醜いと、顔に表れるんだね。鏡で確認したら？ 自分の新しい一面を見れるかもよ」

「確証が取れました」

ヨルシカは、指先で机の表面に穴を空けた。

どこか現実感の伴っていない瞳が、下田とちとせの間を交互に移動する。

「チトセを殺しましょう。そうすれば、シモダは元に戻ってくれますよね？ 戦ってくれますね。そうすれば、あれをまた……」

「あれ？ あれって何なの。やっぱりおかしい。アキ、隠し事してるの。あたしが寝てる間、何があったのか教えてよ」

「貴方は知る必要のないことです。だって…、関係ないですから」

「あるもん。関係ある！」

「大丈夫ですか？ シモダ、念のためにこの女を殺してみましよう。様子がおかしいです。誰かが擬態で化けている可能性もある」

「ふざけんな」

「不満があるなら、貴方が戦いますか？ すぐ楽になれますよ。首を捻じ切って…」

「ま、まあ、冷静になりなよ。ヨルシカ様。それに、チトセ」

恐る恐ると言った感じで、リリアーネが両手を挙げた。すっかり困り果てている下田の隣に立つと、頬を指で押し込んでくる。

「えっと、つまりこれで争点ははっきりしたわけだね」

二人分の鋭い視線を浴びた彼女は、すぐに下田から離れた。苦笑いしながら、手を大きく打ち合わせる。それを何度か繰り返す。

「ヨルシカ様。いいですか？ 貴女の求めていることは理解できました。私には、考えがあります」

ヨルシカは殺意の方向を変えかけていた。

「何を、わかったというのですか？ 思い上がった黒教会の女。あまり不快な言動をすると、姉共々腸を引きずり出しますよ」

「落ち着いてくださいって。思うに、貴女はかなり興奮なされているんだと思います。今までにない体験をしたから。人であれ、それ以外であれ、生きていく以上未知への耐性を得るのは難しい。ましてそれが快樂を伴うものであるなら、繰り返すことへの欲求に逆らうことも」

「はあ」

「憶測でしかないんですが、ヨルシカ様はそのシモダと戦った時、ソウルを摂取したものと考えられます。彼のソウルを。誰だって、感動はしますよね。私も羨ましいなって思ってますから」

理解できないことを飲み込むのに集中し始めたせい、ヨルシカの雰囲気は落ち着いていった。思考する間が空いてから、怪訝そうな視

線がリリアーネへと向けられる。

「何を言っているのですか？」

「殺し合いというからには、血が飛び交うわけです。貴女とシモダの戦い方からして、肉片もたくさん飛び散る。シモダのソウルを直接取り入れてしまう機会に恵まれているんです」

ヨルシカは、何も口を挟まなかった。

「ですが、冷静になってください。相手のソウルを味わうのに、殺し合いをしたり、食べる必要はないんです。もつと前向きな案がありません」

「それは？」

リリアーネはもったいぶった。その時の顔には、下田は憶えがある。何か場を乱すときの発言を口の中に溜めているような表情。下田をからかう時も、よく同じものを浮かべていた。まるでいい予感はない。

さらに数秒置いた後、彼女はにやにやしながら言い始めた。

「ソウルというのは本来、大事に扱われるべきものです。簡単に移動なんてできません。しかし、例外があります。ソウルの交換。循環と言い換えてもいいですね。二者の間で、それが成立する場合があります。男女の間で合意があった場合に」

理解をしていないのは、もはやヨルシカだけだった。

「ですから、遠回りな表現はやめなさい」

「つまりですね、殺し合いなんかよりもよっぽど健全で、本能に沿っている行為。閨事ねやしこです。房事ぼうじともいいますね。……ええと、要はまぐわいです」

場を静寂が支配した。

リリアーネは特に気にすることもなく、楽しそうに続ける。

「とりあえず、期限まであと二日と少し。一日半くらいは準備と鍛錬に使いたいから、半日かな。それを三分割して……。あ、シモダの体力も考えないとね。適度に休憩も挟んで。私と姉さんの分は一括りでもいいから」

「な、なな、なん……」

ちとせは大きさでもなく熟れたトマトになっていた。片手でぎゅううと、枕が歪められる。そこに寝る予定でいる下田は、皺が寄つたら嫌だなどあえて別のことを考えていた。正面から物事に対しようとしても、結局ついていけなかっただろう。話の展開が、あまりに急に感じられた。

「ば、ばかなこと言わないで！」

「あはは、チトセって可愛いね」

「だいたい、三分割って何なの。ありえない。おかしい！」

「んー？ どこが？」

ちとせは立ち上がる。

「全部よー。だって、そういうことは、ちゃんと、一人の相手と」

「え、じゃあ、どうやって決めるの？ 私は殺し合ってもいいけど。それだったら、チトセが一番不利だね。やっぱりシモダに選んでもらう？」

ぱつと彼を振り返った後、目が合う間もないままりリアーネへ顔を戻す。

その表情は、やはりどこかおかしかった。なぜかここで、勝ち誇るような笑みが浮かんでいる。

「ふ、ふーん。勝負を捨てたってわけ」

「フッフ、その心は？」

「だって、わかりきってるでしょ。あたしはアキが大好きだし、アキもあたしを……」

ちとせは自分の口を押さえて、ベッドに腰を落とした。ぎしぎしと、音が鳴る。彼女はそのまま横に倒れていった。さらにベッドの軋む音が響いた。枕に顔をうずめると、ばたばた足を動かし始める。

「くだらない」

ヨルシカが立ち上がった。彼女はすっかり冷めた顔でいる。

「獣のような行為を、こんな男と？ 頭がおかしい」

「そうですね？ 肉体的快樂と、精神的快樂を同時に得られるんですよ？ きつと前にヨルシカ様が味わったそれよりも、何十倍も強烈なのが来ます」

「そもそも、私がシモダのソウルに執着しているなどという出鱈目が前提になつているのも異常です。やはり、貴方達の意見に頼ろうとしたのは間違いでした。道が開けると思ったのに。…何だか興が冷めました。戻ります」

一度もまともに下田の方を見ず、ヨルシカは出ていった。その足取りはいつもより早いような気がしたが、どうでもいい。

下田は場の空気に押しつぶされそうになりながら、なぜか貴樹に再び会いたくなっていた。

いや、妥協するならノミでもいい。とにかくくだらない話を気楽な気分で見たくなっていた。それどころか、ジークバルドと酒を酌み交わしてもいいと考えている。フォドリックに鍛錬を手伝ってもらうのも手だ。この雰囲気から脱出できるなら、誰だって歓迎する。

ちとせが棒のような姿勢で、立ち上がる。ささっと枕の位置を戻してから、早足で扉に向かい始めた。

「ちと」

「こんなはずじゃなかったのに…。もつと…、ちゃんとした…。最悪…」

真つ赤な顔でつぶやきながら、去っていく。声をかけようとしても、聞き入れられない雰囲気だった。下田はもともと彼女にだけ用があつたので、追いかけることを選択する。

だが、それは阻止された。

リリアーネが肩を掴んで、引いてくる。

「まだ話は途中だよ。退席は禁止」

「引つ掻き回したかっただけじゃ」

「ふーん。君はそういうふうに見えるんだね」

彼女はベッドに座る。ユリアも、空いた木の丸椅子に腰かけた。

不思議に思った。もしかすると、先ほどから全く状況は変わっていないかもしれない。人数は減つたのに、なぜか少しも落ち着く気分にはなれなかった。

リリアーネは枕を手にとると、膝の上に乗せた。縦に向きを変えて、抱きかかえるようにして持つ。

「で、こういう感じになっちゃったから、仕方がないよね。時間の配分はともかくとして、順番は私達が一番最初ってことで」

「だから、意味不明なんですよ」

下田は床に座り込んだ。掌の底で額を何度か叩く。

「おかしいじゃないですか。いくらなんでも。どうしてそういう話になっちゃうんです？ 僕のソウルなんて、べつにどうでもいいと思いますけど」

「そうだね」

彼女のにこにこしている顔を見ると、何だかとらえようのない霧を理解しようとする感じがした。

「だったら……」

「でも、私達は別の事情もあるからね。というか君が言ったことじゃん。私達の、王になってくれるんでしょ？ そろそろ、誓約を結んでくれると思ってたんだけど」

「それがどうして、そっち方面の話につながるんですか」

「君はずるいね」

瞳の雰囲気が変わる。艶の含んだものになる。

「わかってるくせに。つながりが深い方がいい。誓約はそういうものだから」

「いやでも……。あの、ユリアさん？ 妹が狂ったこと言ってますけど。

止めてあげてください」

言われた次女は、リリアーネに呆れた目を向けた。

「そうだな。いつもお前は性急がすぎる」

「えー」

「まずは言うべきことがあるだろう」

ユリアは椅子から立ち上がり、すぐに膝をついた。下げられた頭は下田に向けられている。腰に刺していた刀を置き、綺麗な礼をした。「不出来な我ら臣下を救ってください、真にありがとうございます。あの神代の騎士達にも食らいついてたそのお力、改めて尊敬に値します。どうかこれからも、我らを遠慮なくお使いください。共に願いを果たしましょう」

顔を戻すと、じつと見上げてくる。その目からはもう、怜悯な印象はほとんど拭い去られていた。だが、別の方向で怖い気がした。まわりついてくるような熱が、含まれている。

「もはや、我らの全ては貴方様のもの。遠慮はなさらないでください」「わあ、私よりも、姉さんの方が大胆」

下田は口を開けたまま二、三秒固まった後、ちらりと扉を確認した。「待つてください。事情は変わりました。僕の体を見てください。もう、あの膿は消え去っています。資格がないのでは？ 正直、亡者の国とか…、興味ないですし。別を探せば、きつともつといい候補が」「うーん」

リリアーネが、後ろから手を伸ばしてきた。肩に指をかけると、ゆっくり引いてくる。抵抗しようと思えばできたのだが、重くなっている空気の中では、あまり体の力が入らなかった。ベッドの端に座らせられると、そのすぐ隣まで彼女が腰をずらしてくる。

「なるほどね。君はどうやら、さつきからずっと勘違いしてる。まあ言いたいことはわかるよ。ちよつと前までなら、頷いてたかもね」ユリアが静かに、下田の左を陣取った。彼の腕をそつと握ってくる。

「でもさあ、あのノミって男から、無理やり見せられたんだよね。色々」と

リリアーネの目は固体が溶けかけているような感じだった。どろどろした粘着質な視線を両方から浴びている下田は、背筋に汗をかき始める。

「あんなに…、してくれちゃって。その右手で私の顔を潰したんだよね？ また、姉様って呼んでくれると嬉しいな。行為の最中だったら、もつと嬉しい。君なら私達のダークリングにも臆さない。いっぱい、可愛がつてくれるよね」

「私の技の足りていない所も、教えてくださると助かります。ですが、その前に。感謝を示させてください。上手くできるかは、わかりませんが」

下田はいつそ両手を挙げて、降参をすればいいのかと思った。そう

すれば、この演目が終わってくれるのではないかと夢想した。

「僕は、別にそんな気なんて…」

「人を、墮落させるものだったけ」

リリアーネは人差し指を唇で挟んだ。

「酒、クスリ、タバコ。後ろ二つはよくわからないけど、それらに溺れてみて、新たな視座を得る。いい試みだったと思う。でも、ちよつと、いいかな？ 私にもわかるよ？ どう考えても一つ、抜けてるものがあるよね。良い機会だし、女の味も知りなよ」

唾液のついた指で、彼の側頭部を撫でたあと、息を吹きかけてきた。唇を近づけ、耳に密着させてくる。

「それにさ、あんまり君の気持ちとか、関係ないから。私達、もう君以外なんて考えられないし。逃げられると、思わないでね？ …絶対に、離さない」

その低くなった声にかすかな震えを感じ取った瞬間、下田は転移を始めていた。

自分の部屋の外に出現すると、すぐさま走り始める。背後で扉が吹き飛ばされた音が聞こえたが、止まらなかった。魔術での移動法にも頼り、祭祀場の居住区を駆け抜けていく。

いつの間にか、並走している存在がいた。

「うわっ」

「よお、話は終わったのか」

ノミは走りながら、後ろを一瞥した。

「…終わってないみたいだな」

「もつと早く、助けてくれれば」

「どうだかな。もつとひどくなってもかもしれないぜ。おれには相談すんなよ。むしろおれがしたいくらいだから。ね、たらしのシモダさん」

「好きでこんなことには…」

「まあいい。このまま列席場に向かうぞ。作戦を皆で立てる」

下田は長々と息を吐き出した。

「わかりました」

「それと、最初に言っておくことがある。重要な話になる」
ノミは前を向き続けていた。
「お前の母親に関することだ」

66. 真実とこれから

ノミが屈んで、べちべちと頬を叩く。

「まって…、あと十分……。とりあえずあしやごはんは、昨日の残りでもいいや…」

「きつしよ。こいつ、おれのことお前だと思ってるな」

視線を受けた火守女は、申し訳なさそうに貴樹の顔へ触れた。

「タカキ様、すみません。起きてください」

彼は迅速に再起動した。

正確には、「タ」の音で足が跳ねあがり、「様」で一旦区切りがつくまでに天井近くまで飛び上がった。馬鹿にしたような顔でのぞき込んでいたノミが、その動作に巻き込まれて後ろへ転がっていく。貴樹の頭が激突した顎を、手で押さえていた。

貴樹は着地すると、火守女をぼうつと見つめた。

「あ、おはよう」

「はい…」

「まだ、君の瞳を戻す作業がまだだったね」

「はい？」

周囲を彼は見回す。そして二人の女性に隣を挟まれてげつそりしている下田を発見。ぞんざいに手招きする。

「ちようどよかった。おい早くしろ。ひもりんの瞳を早く」

「えっと、もう終わってますけど」

「はあ？」

「彼女の顔をよく見てください。それでわかると思います」

未だ夢見心地らしい彼は、火守女の顔をじつと見る。そうして、徐々に目が大きく開いていった。ふらりと、後ろに足をずらす。

「え、じゃあ、あれは。都合のいい夢とかじゃなく？」

「あの、そうです。私は、貴方の瞳も分けてもらいました」

「え、え…」

下田は嫌な予感がして、席を立とうとした。しかし、静かに膝へと女性の手が添えられる。横を見ると、リリアーネは無表情で首を振つ

た。もう片方の腕もユリアに捕まえられているので、全く動けない。そしてその状況を、一席分離れた所からちとせが眺めている。さらに離れた壇上から、フリーデが腕を組んで見ていた。

「じ、じゃあ、あれも？ ほ、頬のあれも…」

火守女はそこで不安そうにした。

「はい。タカキ様がよく私になさっていたので。お返しできればと。不快な気分になさってしまったなら、もう二度といたしません」

貴樹はもんどりうって気絶した。

首をほぐし終わったノミが、腕を組みながら歩いてくる。

「今度はぶん殴って起こすぞ」

その後再び火守女の呼びかけによって、彼は目覚めた。察するに、彼女と何かがあったのは確からしい。明らかに雰囲気が変わっている。常に浮っている感じだ。素直に下田が微笑ましい気分にならないのは、自分の事で精一杯だからだ。

貴樹が椅子に座ったのを確認すると、ノミが話し始める。

「まずは、おれから言っておくことがある」

下田や、他の生徒達に向かって、頭を下げた。

「申し訳ない。謝ってもしょうがないだろうが。おれは、数千年前、失敗した。そのせいで、お前達の種族は滅んだんだ。そればかりは、言い訳のしようがねえ。おれとプリシラは、できる限りの抵抗をした。侵略のきっかけを作った償いのつもりでもあった。だが、失敗した」
「ちよつと待って」

実織が話を止める。彼女だけではなく、他の生徒達もほとんどがまだ納得できていないようだ。

「受け入れられてないけど、下田の記憶でわかってきた、とは思う。でも、どうして私達だけ？ 私達のクラスが、残ったの？」

それは、下田もわかかっていないことだった。あの深淵の主の中に取り込まれてから見させられたものの中にも含まれていない。

「それは、わからん」

「はっ…」

下田は思わず声を上げた。

ノミは考えるように上を向く。

「おれは、実際に見てないからだ。どうしてお前達が助かって、棺桶に入れられたのか。詳しく説明はできない。だが、推測の範囲で話すことはできる」

指で、生徒の一人一人を示した。

「そもそもがおかしいと思わないか？ 地球で科学に頼って過ごしていたお前達が、どうして急に術を扱えるようになったのか。ただ何千年も眠らされていただけで、身につくわけがない。だが、それを可能にするものがある」

下田も、結論に行き着いていた。

「王のソウル。薪と言ひ換えてもいい。おそらく、グウィン由来のそれが何分割もされて、お前達全員に宿ったんだ。あれの力は凄まじい。器自体に影響を及ぼす。長い期間体の状態を保全することも容易だろう」

「まだ、答えになっていない」

下田は自分でも考えながら言った。

「どうして僕達だけにそんなものが？ 理由も意味も分からない」

「それは多分」

ノミが、何か含みのある視線を、下田へと向けた。

「お前だ」

「え…」

「お前がいたからだ。多分あいつは、プリシラは、他の全員も見捨てられなかったんだろう。だから、大事なお前と一緒に助けた。いや、結果的に正解だったのかはわからんが」

「何を言ってるんだ」

「シモダミサは死んでいる」

言葉が、耳の中で異様に反響した。

「それは確かだ。動かしようのない事実。だが、お前の認識とはずれている。彼女は、ヨルシカに殺されたんじゃない。もっと前に、死んだ。侵略よりもおよそ十七年前に。お前を、産んだ時にだ」

今だけは、リリアーネの密着も気にならなかった。聞いたことの整

理をつける前に、ノミはさらに話を続けた。

「彼女は体が弱かった。出産に耐えられなかったんだ」

「だって、僕の母さんは、ちゃんと……」

「おれとプリシラだけは、早めに来てたんだ。ちゃんと準備をして、親父達の計画を阻止するつもりだった。でも事情があつてな。どちらもその時は、まともな体を持っていなかった。おれは彼女に助けられる形で、魂だけ地球に飛ばされたんだ」

ノミは頭を手で押さえた。後悔するかのようには。

「しよがなかつた。動くためには、体が必要で。おれは、適当な地球人の男を選んで入った。その時は、必死だったからな。無理矢理乗っ取った。精神を破壊して、成り替わったんだ。だが、プリシラは違った。あいつも余裕がなかったはずなんだが。大きく、心境が変化していたらしい。宿った女と、友好的関係を築いていた」

「嘘だ……」

下田は自分の推測が間違っていることを願った。

「だからあいつは、その女性が死ぬ間際で、願いを聞き取った。子供を、託されたんだ。やがて試練の時が来るとわかっていながら、限られている時間の一部を、親友の息子を育てることに使った。ミサの体と同化してまで」

いつの間にか、自分が立ち上がっていることに気がついた。今度は誰にも止められない。彼は一步ノミへと向かおうとして、思い直した。

「騙そうと、しているのか？」

「おれにそれをするメリットがない」

「でも、お前の、言ってることは、何もかもおかしい」

「何の、心当たりもないのか？ お前は自分の母親がどこか、普通とは違うと一度も思わなかったのか？」

「ない」

「本当に？」

出産してから、母親はどこか変わった。

というのは、近所のおばさんの話だ。

下田を産む時、少しの間、心臓が止まったらしい。その時は、場にした医師達はほとんど諦めていた。だが、やがて鼓動が戻ったという。出産自体もぎりぎり成功した。

それからだ。彼女は親や親戚との折り合いが悪くなっていったという。仕事も変えた。そんな苦勞している時期を支えてくれたのが、そのおばさんだった。最初聞いた時は素直に感動し、もっと母親のためになることをしようと思った。だが、今は。

「想定外のこととは、必ず起こる。最初、あいつは自分で何とかしようと思っただろう。何とかできるだけの能力は持っている。だが、無理だった。要因はいくつもあるだろうが……」

ノミはちらりと、黙っているヨルシカを見た。

「とにかく、あいつはおそらく最も頼りたくなかった手段をとることにした。自分が育てた子を、利用する。仕方がない部分もあったんだろう」

拳を固く、握りしめる。

「だが、最悪なのは確かだ。あいつは、あらゆる苦しみを、お前に背負わせた。状況がくそつたれになってから、お前に丸投げしたんだ。そこだけは、わからねえ。あいつに同情してやることはできない」

静かな雰囲気の中で、下田は視線を左右にさまよわせた。だが別に、何かを探しているというわけでもない。その視界にはまともにものが写っていないかった。考えることはたくさんあったが、今は深く思案できる状態ではない。

今まで様々な事実を聞かされてきた。その度に一度は拒絶したり、話した者に怒りを向けたりした。だが、もうこれ以上繰り返すほど、下田は未熟ではない。受け入れまいとする混乱した思いはすぐに消え去り、落ち着きが戻ってきた。

整理を試みる。

「お前は……」

ヨルシカは、声をかけられても下田の方を向こうとはしなかった。

「知ってたのか？ 知ってて、殺したのか」

少し間をあけてから、片目だけ合わせてくる。

「ええ。そうです。全部わかっていて、あの女を殺しました。全く後悔はしていません。少しも情はありません。…いえ、後悔はしていませんね。もつと、念入りに殺しておけばよかった。あの女がまだ生き残っていたなんて」

最後まで言い切った時には、体全体を下田の方に向けていた。表情は不敵な笑みになっている。挑発するようにして、指先で蒼白いソウルを弾けさせた。

だが、その指が小さな手によって掴まれる。

「そう。だから」

「な…」

画家の少女はヨルシカを引っ張りながら、下田のところまで来た。ヨルシカは、なぜかあまり抵抗していない。いや正確にはしようとしているのだが、ノミが睨みをきかせている。

下田の方へと、少女は空いている手を伸ばした。何をしようとしているのかはまるでわからなかったが、その真摯な目には抗いがたい何かを感じた。

彼が動かないのを見て、少女はさらに近づいてきた。力の抜けている下田の手を握ると、引き寄せる。こうして彼女は、下田とヨルシカの間挟まる形になった。

「お願い。もう戦いはしないで。二人は、たとえ直接血が繋がっていなくても、兄さんと姉さんだから。私達は、同じ母親を持っている。だから、こうした方がいいの」

下田は、ヨルシカと顔を合わせた。

彼女も、呆然としているようだ。少女が二人の指先をちよんと合わせた所で、ようやく振り払った。

「おぞましいことを言わないでください。くだらない…」

下田も同じ気持ちだった。

だが、もう少し時間が経っても、そうだと言える確証はなかった。なぜなら、答えが示されてしまったからだ。墓所でヨルシカを殺せなかった理由。戦いの中で感じたソウルが、似通っていたのだ。なぜか、母親を思い出させた。その原因が解明されたとしても、すつきり

とした気分にはならなかった。

そういう思いもまた、持続していくかはわからなかったが。

「彼の言ってることは、事実かもしれない」

静かに聞いていた修道女が、ぽつりと言った。今は、薫のようだ。

「私も、日本で見た。明らかに普通の女性が、術を使っている所を。多分、下田君のお母さんだったと思う。抗がん剤、使ってたんでしょ」

「ああ、そういうえば」

ここで今までの流れを断ち切るかのように、貴樹が両手を打った。その目は冷たく薫へと定められる。

彼女もまたゆっくりと、向き直った。

「忘れてた」

貴樹は火守女から離れると、めんどくさそうに歩き始めた。何かを確かめるようにして、手の指を何度も開閉させている。

ある程度まで薫へと近づくと、彼女へ指を突き付けた。

「これからの戦いの中で一番排除すべきなのは、信用できない味方です。皆も下田の記憶の中で知ったかもしれないですけど、この女は危険です。一度裏切った奴は、また繰り返し返す。俺は正直、許すつもりはない。早急に殺すべきだと思います。というか、今この場で殺すつもりです」

下田は内心かなり引いていた。不思議には思っていたのだ。貴樹の性格的に、どう考えたって薫の生存を容認するはずがない。なのに見逃して、今まで放っておいた理由が今わかった。

貴樹は厳しい表情をしているが、実際は愉悦に浸っているのだろう。つまり、より彼女が苦しむように工夫をしたということだ。こうして実織に再会させて、一旦安全だとなった段階で、突き落とす。彼はもう戦闘の準備を終えたようだった。拳から、炎を弾けさせる。

薫もまた、それを薄々予期していたらしい。驚く様子はなく、手元に鎌を出現させた。何かを言おうとする実織を止めて、苦笑する。

「いいの？ 私を殺すってことは、フリーデの体も……」

「喋んなくていいつつたろ。じゃあな」

下田の両隣りが、動いた。

貴樹も踏み出そうとする足を止める。

リリアーネとユリアが、薫の前に並んだ。

「なんだ？」

「タカキ、それは認められないかな」

「なるほど」

「我ら黒教会を敵に回すのは、愚かだぞ」

「ユリアさん、それ本気で言ってます？」

彼女は、下田に視線を向けてきた。

まさか、と下田は嫌な感じを覚えつつ、歩き始める。彼らが殺し合うのは、確かに避けたい事態だ。どちらの味方だと、はつきりとは決断できない。だが、自分の発言の責任は取るべきだった。リリアーネ達に与えた影響の責任も。

彼女達の前に立つと、貴樹の表情はさらに鋭くなった。つまり、もっと喜んでいいるということだ。

「まいったな……」

「先生。ちよつと、我慢してくれませんか？」

「これじゃ、俺が悪者みたいじゃないか」

貴樹は両腕の筋を伸ばし始めた。こちらへと向けられる敵意は少しも鈍っていない。つまり、止まるつもりがないということだ。下田の説得にも応じるような相手ではない。思わずノミに助けを求める目を向けたが、彼は黙って座っていた。まるで必要がないと言わんばかりに。

控えめに、貴樹の前へと女性が出てきた。

火守女は、手と手を下で合わせている。

「ひもりん？ 危ないよ、そこにいると」

「タカキ様、あの」

名前を呼ばれただけで、彼の雰囲気が一気に柔らかくなるのが分かる。下田は何やら光明が見えてきたことに気がついた。

「どうか、ここは収めていただけませんか？ カオル様は、貴方の家族です。あまり争うのは、良くないと思います」

「でも、よく考えてごらん。その女は、君が殺される要因を作ったん

だ。一緒に行動しているときからずっと、俺達を騙っていた。許されることじゃない。また、君が傷つくかもしれないと思うと、ちゃんとけじめはつけておきたいんだ」

「そのような考えは嬉しいのですが、やはり、良くないと思います。私は、この方が自分からあのような行動をしたとは考えられません。仕方がない部分もあつたんです」

「いいのかい？ 君は、彼女を恨んでないの？」

「はい」

火守女は振り返つて薫を見た。その答えは明瞭としていた。

「そっか」

貴樹は思案するような動きを見せた。腕から吹き出そうとしている炎の勢いが、徐々に弱まっていっていった。そして落ち着いた様子で椅子に戻っていく。

「わかった。じゃあそうする」

あまりに急の心変わりだったので、下田は彼が嘘を言っているのだと一瞬考えた。しかし、その注意が薫から火守女へと移つたのを確認して、改めて理解する。自分の考えている以上に、彼は火守女を尊重しているということだ。

火守女がさらに何かを言おうと、下田達の方へ向き直つた。だがその言葉が発せられる前に、薫が動く。とても素早い動作だった。

下田も思わず止めかけたが、すぐにその必要はないと判断する。薫は相手に勢いよく抱き着くと、存在を確かめるように顔へと両手を触れさせた。

「あの…？」

薫は、涙を流し始めている。貴樹もまた腰を上げかけていたが、その様子を見て首をひねっていた。

「ずっと、誤解をしていた。貴方と初めて会った時、正直憎んでたの。だって、貴くんが誰かを愛するなんてありえないはずだったから。きつと、中にいたグウィンが自らの都合の良いように操作したんだって。だから、とても嫌だった。貴女を殺したくなった」

薫は自分の頬を、火守女の顔に擦りつける。

「でも、違ったんだね。貴方は…、誰にも成しえないことを、やりとげた。本当に貴くんに愛されているんだ。ごめんなさい。本当に、ごめんなさい。私が、こんなこと言う資格なんてないだろうけど、ありがとう。彼がちゃんとした人間だと証明してくれて。嬉しい、とても、嬉しいの…」

本来ならば湿っぽい空気が続くはずだった。

だが、そういう流れをまるで無視するようにして、貴樹が口を動かす。

「待つて。もう解決したみたいに言ってるけど」

全員の視線を受けても、堂々としていた。

「無条件で許すと言っていない。いいから、さつきとひもりんから離れろ」

薫はすぐに指示に従うと、目を拭った。

「うん、わかってる。どんな罰も受けるつもり」

「いや、お前はもう関係ないから」

おそらく彼以外の全員が、最初話の流れを理解できていなかった。どうやら貴樹は、もう薫への制裁に全く関心を払っていないらしい。視線から、全てがわかった。彼の目は熱をもって、火守女へと縫い付けられている。

「君の言い分はわかった。従うのにも異論はない。でも、条件がある」

「私、ですか？」

「うん。俺は姉さんのことを許す。その代わりだ」

「何でも、申し付けてください」

「じゃあ、あの、あのさ…」

貴樹は照れたように顔を俯かせた。

「さ、さつきのやつ」

「何ですか？」

「さつきの、ほっぺのちゅう、もう一回やって！」

自分で言い終わった後に、わーっと小さく叫んだ。どたどたと足を交互に床へ打ち付ける。言われた火守女は、明らかに今までよりも戸惑っていた。

「今、ですか…？」

「そう」

彼女は多少周りを気にしてから、恥ずかしそうに彼へと近づく。

「おいおい、待て」

ずつと見ているだけだったノミが、周りの言葉を代弁した。

「話が逸れすぎたな。いちやいやは後でやってくれ。まだ本題にも入れてねえじゃねえか」

「あ？ なに邪魔してんだ虫けら。あんまり調子に乗つてるとぶっ殺すぞ」

「いや、なんとというか…」

困ったように腕を組んでから、全員を今一度見回した。

「なあ、わかつてるか？ 状況はあんまり好転してねえぞ。このままだと、おれ達全員死ぬ確率が高いんだ。ほぼ確実に、全滅する」

おそらくノミがしたかった話はこれから始まるのだと、下田も理解をした。

「何言つてんだ。グウィン達に負けるつてか？ は、かの長子様も弱気だな」

「そつちじゃねえよ。タカキ、わかつて話そらしてるな？ 一応、お前の意見が頼りなんだ。わかるだろ？」

もちろん、下田にとつても他人事ではなかった。今までは、そうだったのだが。途中で死ぬつもりでいたから、後は全て貴樹達に丸投げするつもりだったのだ。だが、もう違う。

ノミは笑みを引つ込めて、引き締まった表情になった。

「火継ぎを止めるつもりなら、避けては通れない問題がある。今のままだと、おれ達は深淵に勝てない。いや、勝ち負け以前の問題だ。タカキ、お前は最初の方からずつと、それをどうにかすることを考えていた。おれの知らない範囲で、何か思いついたのなら言ってくれ」

「簡単な事だろ」

貴樹はたいして深刻に考えていないようだった。

「最初の火を奪えばいい。それを使えば、退けられる」

「そんな簡単な話じゃねえ。あれは、薪が全て捧げられた上で、ようや

く機能するんだ。つまり、火守女や生徒達を犠牲にしないといけない」

「薪は移せるんだろ？」

ノミは首を振った。

「そんな方法は、存在しない。いや、意味がないと言った方が正しいか。薪というのは、最初の火の糧になるのにふさわしい、ソウルの量と格をもった存在のことだ。つまり、グウィン達にとっては、今の状態が最善だということ。資格を別の誰かへ移させる気なんてない。もう今の段階では、薪になれる存在なんて限られてるからな。奴らは、自分たちがその役目を担うつもりはないってことだ」

ウインの言葉を思い出す。確かにこれ以上面倒を避けるなら、彼やグウィンが薪になるという選択肢もあった。かつては、そうしていたのだ。だが、下田にその役割を担わせると提案した。

貴樹もまた、理解したように言う。

「つまり、ひもりんから別へ移そうにも、方法だけじゃなく候補もいなくてことか。そりゃああいつらに押し付けばいい話だけど、絶対に納得はしないだろう」

「つまり鍵はそこにあるんですね」

下田が確認をすると、貴樹は怪訝そうな顔になった。

「は？」

「いや、だから。これからグウィン達と戦って、無理やりその要求を呑ませればいいわけですよ。どちらにしろあいつら全員殺さないといけないんですし。薪のあれこれも尋問して聞き出せばいい」

「お前…、何言ってるの？」

「え？」

貴樹は、まるで狂人を見るような目つきで見ってくる。

「どうして、そんな話になるんだ？」

「でも…」

「まず確認したいんだが、深淵っていうのは、明確な何かなのか？ それとも、ただのたちの悪い闇ってだけなのか。それで色々変わってくる」

貴樹以外の全員が、それを思い浮かべたようだ。ある者は恐怖し、ある者は耐え切れず途中で考えるのを止めた。下田はその両方に当てはまっていた。

「おそろく、元締めはいます。僕は、それを実際に見ました。戦おうとも、しました。ですが、そんなのは全くの無駄で…。あれには、勝てません。誰も」

「ちゃんと表現しろよ。具体的にはどんな奴だ？」
「奴らです」

説明をする。本当はあまり思い出しなくなかったが、唯一理解をしていない貴樹に向かって、その脅威を示した。大角の怪物、女、二匹の竜。聞いていても、相手はほとんど表情を変えなかった。少しも、怯えることはなかった。

「ふーん、じゃ、何とかかなりそうだな」
「どこが？」

「そいつらをぶっ潰せば、生き残れるってことだろ。簡単じゃねえか」
下田は首を振る。

「でも、僕らじゃ勝てません」
「確かに、厳しそうではある。でも、心強い戦力がいる」
段々と、貴樹の言いたいことが分かってきた。

下田は信じられないと言いたげに眉をひそめる。
「嘘ですよね？」

「なあ、そもそも俺はノリで戦ったから、ずっとわからなかったんだが。どうして、グウィン達と敵対しなきゃいけないんだ？ もう確信したぜ。あいつらと一緒に深淵を退治すればいい」

貴樹は当たり前のように続けた。
「お前はこれから戦いに行くとか勘違いしてるみたいだが、違う。俺達は話し合いをしに行くんだ。そのための準備期間として、三日を提示した。相手も意見を整理する時間が必要だろうからな」

平然と話している顔が理解できなかった。彼は淡々と説明しながら、色々な事を否定していた。下田達がこれまで抱えてきた思いを。
「何を、言ってるんですか！」

「うるせえな」

「あいつらは、あいつらが、今までどれだけのことをしてきたのか、わかっているんですか？ 地球の人達を大勢殺して…、滅ぼしたんだ。許されるはずがない」

「でっ。」

貴樹は、話している途中から横を向いていた。どうでもいい雑談を聞いていると言わんばかりに。本当に、つまらなそうだ。

「それが、一体なんだっていうんだ？」

彼の性格を考慮しても、受け止め切れない返事だった。他の生徒達もまた、貴樹の正気を疑うように見ている。

「だから…」

「だから、何だ？ 奴らとは手を結べないってか？ お前さ、そろそろ前向いて歩こうぜ。過ぎたことねちねち言うのって、ださいぞ」

「は…」

下田にも、忍耐の限界はある。いくら貴樹とはいえ、そんな発言は容認できなかった。

ノミが、立ち上がって二人の間に入ってくる。

「おい、タカキ。それまでにしとけ」

「ちよつと待て、他の皆も、これくらいしか方法がないってわかってますよね？」

誰も反応は見せなかった。

貴樹は鼻で笑う。

今までとは違うということ、下田は認識していた。もう、学校で被っていた仮面をほとんど彼は脱ぎ捨てている。繕う必要がなくなったと思っているようだった。

「今と、先のが一番大事だろ。まあ正直、交渉がうまくいく可能性は少ないから。ぶん殴って言うことを聞かせる可能性もあるけど」

「先生、本気ですか？」

「あ？ 自分の命にも関わることだろ。どうして、そんなこと訊く？」

「先生は…」

「むしろ、俺は感謝してるけどな」

貴樹は、意地の悪い笑みを浮かべた。それは下田に向けられているように、実は違っているようだ。それは生徒達全員に対してでもあり、またはもっと大きい枠組みに対しての、表情だった。

「あいつらのおかげで、たくさんのゴミが処理されたんだ。より良い世界にしてくれた。さすがは、火の大王だ。これまでにないほどの、偉業を成し遂げた」

「おい」

ノミが、下田の側に立った。

「随分と人前でも吹くようになったな。これ以上は、許せねえぞ」

「お前こそ、羽虫の分際で言うようになったな。おい、下田。てめえ、自分が随分と都合の良いことを吐いてるのに、気がついてるか？」

貴樹は、ヨルシカを指差した。

「報いを受けさせるつもりなら、その女だつて例外じゃないよな。意見を通すつもりなら、今すぐにそいつを殺せ」

言われても、下田は黙っていた。

「どうした。憎いんだろ？ さつさとやればいいじゃないか」

「うるさい…」

「無理だろうな。もう、色々知っちゃまったもんな。そんなもんなんだよ。憎しみなんざ。すぐに変わっていく。いいか、よく考えろ。別に奴らと手を握りながら仲良くしろつて言ってるわけじゃない。状況を理解するんだ。正しい選択肢を取り続けなければいけない」

その違和感に、気づき始める。冷静になって観察すると、貴樹は注意を下田とは別の方向に向けているようだった。

「お前の周りにいる、大事な人考えろ！ 本当はこんなこと言いたくないんだが、気づいてほしいんだ。今、こだわっている感情を捨てるだけで、全部守れる可能性が出てくるんだぞ。俺はもう吹っ切れた。だから、お前もそうしろ」

激しく言う貴樹とは対照的に、下田は段々と内心呆れてきていた。一瞬だけ、その視線が火守女に向かったのが分かる。どうやら途中で、自分が行き過ぎた発言をしていることに気がついたらしい。だからこうしていい感じに締めることで、軌道修正を試みている。印象の

回復も。

ノミも同じことに気がついたようで、腕を組みながらため息をついた。

「まあ…、お前の言ってることには賛成だ」

「旦那様？」

クリムエルヒルトが、驚きの声を上げる。

ノミは力が抜けたように笑っていた。

「わかつてたことだ。俺とプリシラもそうだった。ずっと、そうできればと思っていた。だが、ずっと失敗してきたんだ。おいタカキ、お前には自信があるんだな？ 親父達を説得できるだけの」
「もちろんだ」

貴樹が胸を張ってそう言った時には、下田も完全に落ち着いていた。確かに、言っていることは正しくもある。だがやはり、確実性に欠けていると思った。まだ反論できる余地があるのではないのかと、他にもいい方法があるのではないかと、思考を進める。

その途中で、誰かが控えめに手を挙げた。

「ちよつと、いい？」

下田は、わかつていても、反射的な恐怖を抑えられない。ミレーヌはミレーヌだ。いくら姿が瓜二つとはいえ、あの化物女と同じなわけがない。

彼女の方も、下田の怯えに気が付いているようだった。それに少しだけ微妙な顔をしてから、続きを話し出す。

「私も、タカキに賛成。正直、あいつらを許すつもりはないけど、そうも言ってられない」

今まで他のことに振り回されていたせいも、下田はここで始めて気がついた。彼女の横にいつもいる、ホークウッドの姿がない。

「ホークは今、苦しんでる。治すためには、狼血の誓約を結び直して、ちゃんとした形で破棄しなければならぬ。だから、あの狼と交渉したいの。納得できない人もいるかもしれない。それでも、お願い。彼らと戦う選択肢は選ばないで」

これで下田も反論をする気はなくなった。時間がないのも、確か

だ。まともにグウイン達と戦えば、勝敗はとにかく絶対に大きな被害を受けることになる。それが完全に回復しないまま深淵と対することになったら、最悪だ。

感情以外の全てが、納得すべきだと言っていた。そして貴樹に指摘されたことも鑑みると、これ以上食い下がる気もなくなってくる。

下田は渋々頷いた。

「わかりました。先生の提案に乗ります。ただ、僕には話し合いが成功するような案なんて全く思い浮かばないので、本当にお願ひしますよ」

「大丈夫って言ってんだろ。任せろ」

貴樹が胸を叩いた所で、これからどうするべきなのかは決まった。後は、細かい所を考えていかなければならない。

ノミが、再び椅子に座る。

「でだ。期限が来たらあっちに行かないといけないわけだが。どういうメンバーで行く?」

「戦争を仕掛けに行くわけじゃない。あんまり大勢で行くと、相手を刺激することにもなる。最低限でいい」

「なら、」

ノミは貴樹と下田を手で示した。

「お前らとおれの、三人でいいな?」

クリムエルヒルトが前に出る。

「私も…」

「駄目だ。万が一決裂したら、結局は戦うことになる。誰かを守りながらなんて余裕はない」

「でも、三人じゃ少ない気がします」

下田は既に思考を切り替えていた。感情はどうであれ、試みが上手くいくための道を模索している。

ノミが首を傾げた。正直、その動作は気持ち悪かった。

「って言っても、どうすんだ? 自惚れるわけじゃねえが、おれ達の戦いにまともについてこられる奴が、いるのか?」

「それは、これからの修行次第です」

下田に見られると、ヨルシカは目を見開いた。

「冗談ですよね？」

「そう思えるんだったら、お前のセンスは壊滅的だな」

「私が、貴方達と一緒に行くと思えますか？」

彼女の厳しい顔に、ノミも気が進まなそうに頷いた。

「おれも、なんだ、賛成はできないぜ。シモダ、お前が一番わかっているはずだろ。そいつは、無理だ。確かに期待できる戦力ではある。でも、まだ…」

「少なくとも」

不本意そうな顔で、下田はヨルシカを指差した。

「僕なんかより、よっほど才能がある。比べるのもおこがましいくらいだ。残り二日くらいでも、成長できる余地がいくらでもある」

文句を言おうとしていた彼女は、その途中で固まった。怒っている戸惑っているのかわからない表情で、下田を見ている。

ノミは面白そうに腕を組んで、尋ねてきた。

「言い分は分かかったが、誰が鍛えるんだ？」

「僕がやります。一応、どうするべきかはわかっていますから」

ヨルシカはおぞましいと言いたげに首を振った。

「ふざけないでください。誰がやると言いました？ 貴方なんかの…」

「お前、自分の状況を理解しているのか？」

下田は雷を鳴らした。ヨルシカを睨みつける。

「どつちにしろ、奴らの方に戻ることはできないだろ。処分を受けて、最悪殺される。いいか、お前はもう、反逆者の一員なんだよ。相手はそう認識してる。なら、腹を括って、できることをしろ」

「貴方に、協力なんかしません」

「知るか。お前の意思なんてどうでもいい」

その言葉を聞き終わると同時に、ヨルシカは席を立った。この場にいることに耐えられなくなったらしい。誰にも目を向けることなく、列席場から出ていった。下田は、別にそれを追うこともしない。やり方はいくらでもあると考えていた。

「話は終わったか？俺も戻りたいんだが」

貴樹は何かにうずうずしているようだった。おそらく、火守女との時間を大切にしたいのだろう。先ほどの続きをしたくてたまらないに違いない。

ノミが今気づいたと言わんばかりに、貴樹に話し始めた。

「なあ、ずっと疑問だったんだが。お前、いつまで下着姿を押し通すつもりなんだ？」

「…はあ？」

何を言っているのかわからないという顔をする。下田も良く理解をしていなかった。そもそも、貴樹が常識で言えば異常な格好をしているという意識も、いつの間にか消えていたのだ。もはや彼が服をまともに来ている姿の方が、おかしいような気がしていた。

「何言ってるんだお前」

「だからよ。もう別にいいんだぞ。お前が今まで武器も持てず、鎧も着れなかったのは、中にいたグウインのせいだ。お前に生き延びられると都合が悪かったんだろうな。だが、奴はもう外に出ている。だからもう…」

床が割れる音がして、既に貴樹の姿は消えていた。音を追って見れば、入り口の扉が吹き飛ばされるのがわかる。少しして、ヨルシカの驚いたような声が聞こえてきた。どうやら、貴樹に追い抜かされたようだ。

下田は顔をノミに戻した。

「あの人ほど、変わっている存在には会ったことはありません」

「おれもだ」

話が終わりかけた所で、誰かの手が上がった。

見ると、画家の少女が歩いてくる。壇上にたどり着くと、残っている全員を見回した。

「今のうちに、いい？」

彼女は貴樹が出ていった方を意味ありげに確認していた。話がありそうな素振りだが、まるで今の状況でしかできないような雰囲気だった。

「どうしたの？」

「言っておきたいことがある。多分、大王との交渉にも関係があること。そして、私達全員の未来にも」

少女は少しの間口ぐもってから、続けた。

「ダークソウル。私達には、それが必要になる。全員が生き残るためには」

67. 輪の都会談

貴樹だけが、決められた時間よりも遅れてやってきた。

既に篝火の広場にはほとんどが集まっている。出発する者と、それを見送る者。兜の隙間からでも、その様子のはつきりと理解できた。最後に離れたのが、ちとせだ。下田の手を握って小さく何かを話した後、顔を赤くしながら無事を願う言葉をはつきりと言った。

がしやがしや鳴らしながら広場に踏み込むと、全員の視線が集まってきた。そこには多分に称賛が含まれているのだろうと勝手に想像しながら、篝火にたどり着く。

「すまんすまん。足の部分だけが決まらなくて」

「あ、ああ。ま、時間ねえし。行くぞ」

貴樹は火守女に手を振った。かなりぎこちない動作になってしまふ。

「じゃ、さつと行って帰ってくるから。約束、憶えててね」

「はい、気をつけてください」

唯一貴樹だけが、ほとんど緊張していなかった。彼だけピクニツク気分でおかおうとしている。準備にほぼ全ての時間をかけたのも関係していた。無理矢理付き合わせたアンドレイは、工房の奥で泥のように眠っているだろう。

もちろん、油断はできない。貴樹はもうある程度グウィン達のことを信用していた。地球を滅ぼすという世紀の偉業を成し遂げた者達に、どう悪感情を抱けと言うのだろう。だが、転移し終わった瞬間、何かをしかけてくるとも限らない。

貴樹は、臨戦態勢に入った。息をゆっくりと吸い、腰の両側に収められている得物へと手をかける。

ノミはそれを呆れたように確認してから、声を張り上げた。

「どんな結果になっても、覚悟はしておいてくれ。おれ達は全力を尽くす。皆の未来のために。行くぞ」

篝火の炎が弾け、視界が移り変わる。

輪の都。

貴樹の記憶では、ゲームにおいて最後の舞台となった場所。最初の小人、つまり人間が治めていたというのが、実際はどうなのか。かなり、その権力構造が変わっていることは確かだ。広がる荘厳な都市世界は健在だが、実態はまだわからない。

正直、がっかりしていた。

転移が完了しても、何も起こらなかったからだ。誰も、襲ってくることはなかった。

「なあ、おい」

ノミがこちらを向いて尋ねてくる。

「あ？ なんつった？」

「お前、まさかその格好で向かうつもりか？」

「もつと大きい声で話せよ。聞こえねえ」

「完全にサイズ間違えてるだろ、それ」

下田とヨルシカも、理解しがたい顔で見えてきた。

貴樹はそれらに対して、納得できないと言いたげに鼻を鳴らす。兜を上にならずらし、口を露出させた。

「格好いいだろ」

彼は、自らの鎧姿を誇っていた。一番自分の中でかちりとはまった、騎士の装備を全身に身に着けている。ただ、自分の体格と完全に合っている装備を作ってもらった時間ではなかったので、多少大きめになってしまっている。それでも彼の膂力で無理やり動かされているために、動くたびに大きく金属音が鳴った。歩く騒音と言っても過言ではない。

ずっと、望んでいたことだった。途中から慣れてしまっていたが、拳などではなくちゃんとした「衣装」を着て、この世界を堪能したかったのだ。

「腰ので、戦うつもりか？」

「知ってるだろ？ 剣のたしなみもある」

二本の大剣を握り、自分の考えた見栄えのいい構えをとる。他の者はさらに微妙そうな顔になったが、武器の刃のきらめきに酔っている貴樹にとっては意味もないことだった。何を持っていくのかもた

くさん悩んだが、結局二本持ちを選んだ。

一番外見が変化したのは貴樹だが、他の者達も今までと同じというわけではない。

ノミは、防具を新調していた。さほど見た目自体は前と変わらないが、割れていた部分や粗末な作りのところがすっかりなくなっている。

下田は今までと同じ動きやすそうな衣装を重視しているようだ。というか、ただの運動着だった。大方ミレーヌのインベントリから出してもらったのだろう。ただ、何かを背負っていた。不可視化させているが、かなり長い物であることはわかる。

ヨルシカは、いつものドレス姿ではなくなっていた。布面積が多めで薄い装甲が重ねられた鎧を着ている。腰の鞘には、白い直剣が治められていた。漏れ出ているソウルは、冷気が含まれている。

彼女はずっと、下田の方を睨み続けていた。自分の不本意な思いをわかってくれとでも言いたげだ。いつも背中に流れていた亜麻色の髪は束ねられている。留めているゴム紐もまた、下田が手配したものだ と推測できた。

ずっと工房にこもっていたので、経緯はわからない。だがどうやら、下田はほとんどの時間を、彼女との模擬戦に使っていたようだ。ヨルシカの立ち振る舞いはやや変わっている。より隙の少ないものへと。

対して興味もなかった貴樹は、味方の確認をそこで終わらせた。

そして、広場の像近くで立っている女性と相対する。

「お前は、誰だ？」

ノミが尋ねると、巨大な斧槍を持った女性は頭を下げた。

「お初にお目にかかります。私はシラと申します。この都の王女、フィリアノール様に仕える騎士です。大王の命を受け、案内として参上いたしました。私についてきてください。しかるべき場所で話される、大王様は仰っています」

緑衣のスカートをたなびかせて、彼女は歩き始めた。まず、貴樹が一番先に動く。思った通り、相手方もいきなり戦うつもりはないよう

だ。遅れている者達は罨を警戒しているようだが、馬鹿馬鹿しいと考えていた。そんなことを、グウィン達が仕掛けているはずがない。

貴樹は、シラという女騎士が持っている武器を観察した。狂王の磔。元々は十字槍だったが、錯乱した小人の王の一人を刃に繋ぎ止めてからは、その性質もまた変化したという。括りつけられている遺骸は決して滅びることはない。

今すぐにそれを奪い取って使いたいという欲が湧いてくるが、自制した。ちゃんと後でお願いすれば握らせてくれるかもしれない。自分が贅沢な悩みを持つようになったと、なんだか嬉しくなってきた。「笑ってますよ…。前から思っていたのですが、あの男、狂っているのではないですか？」

「そういう人だから。というか、そんなこと考えてる暇あったら、復習をしろよ。気が抜けてるな」

「黙りなさい。背中に気をつけることですね」

「つくづく、小うるさい女だな」

「お前らさ、こんな時に喧嘩すんなよ」

「うるさい」

「貴方には関係ないでしょう」

他三人の会話も、寛容な心で聞くことができていた。これもまた思いつきの一つと思えば、悪くもない気がしてくる。

シラは開けた道を素早く進んでいった。身の丈を超えている武器を持つていることも考えて、見た目通りの力ではないのだろう。だが、彼女の速さについてこられない程度の者は、この場にいなかった。たとえば初めての場所だとしても、止まることなくついていく。

途中から、坂が多くなってきた。どんどん、上へと向かっている。それにしたがって、建物の外装も豪華になり始めた。ここがかつて繁栄していた都だというのなら、位の高い者が住んでいたのだろう。

やがて、どこに向かっているのかわかりかけてきた。シラの歩みは迷いが無い。最上階から長い塔が伸びている、最も大きな宮殿らしき建物へと真っすぐ進んでいた。

大きな扉が目の前に広がる。シラはそれに手をかけると、力を込め

始めた。重く軋みながら、徐々に扉が開かれていく。やはり、彼女の腕力もまた尋常からかけ離れているようだ。

中に入ると、シラはこちらを振り返ってきた。

(ほう)

その細目から覗く光は、明らかに一つの意思を表している。だが、貴樹にとつてはどうでもいいことだった。自分に向けられたものではないと、わかっていたからだ。

「お会いしていただく前に、準備がございます」

シラは一階部分の奥にある扉を指差した。

「シモダ様、ヨルシカ様。貴方達は僭越ながら、大王様にお会いするのに適した衣装とは言えません。私についてきてください。しかるべき衣装を用意しています」

「武器は、手放すつもりはありません」

ヨルシカが言うと、相手はすぐに頷いた。

「構いません。貴方達全員、許可されています」

危なかつた、と貴樹は息をつく。もし選り抜いたこの二本の武器を手離すことになったら、作戦は失敗していた。まずは試し切りとして、この女性の体を真つ二つにしていただろう。

下田とヨルシカは、一瞬だけお互いを見合った。どちらかといえば、彼女の方が緊張しているようだ。二人の間でどのような意思疎通がなされたのかはわからないが、シラの案内に素直に従う。

「待て」

ノミが、歩き始めたシラに向かって言った。

「おれ達は、どうすればいい。ここで待つてればいいのか？」

「いえ。中央階段を上がって、廊下を進んでください。一番奥の扉を開ければ、別の案内がいるでしょう」

ノミは意味ありげに貴樹を見てくる。おそらく、判断を仰いでいるのだ。こんな所で味方が分断されるのは危険だと考えてもいるのだろう。確かに客観的に考えれば、下田はともかくとして、ヨルシカまでも不適合だと判断されるのはおかしかつた。その軽鎧姿が駄目なら、ノミと貴樹も失格しているはずだ。

だが、ここで指示に逆らうというリスクを取るのも考えものだ。一応、彼ら是对話の意思を示してきている。それに対してこちらから泥を塗るのは愚かだろう。

という表向きの考えを込めて、貴樹は黙って頷いた。そして中央階段へと歩き始める。ノミも納得したようで、後をついてきた。

貴樹は、シラに案内された二人が扉の中に入っていくのを確認した。

(よし、これで二匹処理完了)

足取りに、高揚が表れないようにする。少しは純粹に、この観光を楽しめる気分になってきた。

二階に上がると、確かに長い廊下が続いている。そろそろ視界の狭さが気になってきたので、貴樹は兜を脱いだ。そして顔に当たる部分を無理やり破壊して、再びかぶる。もはや外見は気にしていなかった。自分が兜を身に着けているという事実だけで恍惚な気分になっている。

一番奥の扉を開けると、個室程度の広さの空間に出た。左右には等間隔で灯りが並んでいる。まるで待合室のようだった。さらに続く扉の先が、目的の場所のようだ。

ここに入ってくるのを、群青の騎士は待っていたらしい。

貴樹とノミが近づいても、特に武器を動かす素振りを見せなかった。貴樹の姿をちらりと気にしてから、ノミに顔を向けてくる。

アルトリウスは兜を脱ごうとして、止まった。

「何だ？」

かなりの至近距離で、貴樹は舐めまわすように彼の装備を観察していた。拒絶の声向けられても、しばらくの間やめない。

(はあああああ、欲しいいいい。かけえ。今すぐにこいつぶっ殺して、俺のものにしよっかな。もう着れるんだし。中身の肉はいらんでもだめだ、我慢しなきゃ)

さすがにその殺意を、相手も察知していた。既に武器へと手をかけている。

貴樹は肩をぐいと引かれて、ノミの方を向かされた。

「何してんだ。言い出しつぺはお前だろ。落ち着け」

「わかってるよ」

だが、段々と求めるようになっていた。昨日散々練習した剣の錆になつてくれる存在を。拳で直接肉を殴り潰すのもいいのだが、やはり武器で斬り裂くのも興味深かった。話し合いをしようと言つたのはこの男なのに、手を出しかけている。行き当たりばったりが良く似合う男だった。

ノミもまたその危うさを理解したのか、手を扉へと向けた。視線はアルトリウスに向かっている。

「この先に、いるんだな？」

「はい」

「武器は回収しなくていいのか？」

「必要がありません」

自分たちがいると言いたげに、騎士はきつぱりと結んだ。そして最後に貴樹の方を一瞥してから、扉を開いていく。

続くノミと貴樹は、それぞれ別の緊張をしながら、中へと入った。扉を超えた先から、空気が変わっていくのが分かる。張り詰めたものではないが、密度が増したような感じがする。それはおそらく、先に見える長テーブルの一番奥に座っている存在のせいだった。

グウインは、己の左方を示した。

「座るといい。我らも興味がある。戦う前に、どのような話をかわすのか」

アルトリウスは止まらずに、そのまま王に一番近い席へと腰かけた。彼よりも手前側の席は、既にいくつか埋まっている。ほとんどの騎士達が、入ってきたばかりの貴樹達を観察していた。

貴樹は、ある意味緊張していた。垂涎の物がずらりと並んでいるからだ。特に、キアランの武器は回収すべきだと思つている。自分が曲刀と短剣を華麗に扱っている様を想像すると、それだけで、下半身に血が集まった。

そのせいで、普通一番初めに気がつくことを、遅れて認識した。彼らから見て一番近くに座っている、巨大な緑髪の女性のことを。



なぜその武器を選んだのか、もし今の状況でなければ問いただしている所だった。

ヨルシカは下田の視線に気づいても、無視をしていた。ただ前を向きながら歩いている。下田はその腰に下げられている、冷気の含まれた剣を見た。

顔をしかめる。何度も短剣がいいと進めたのに、彼女は従わなかったようだ。ファランの速剣に沿える二本目としては、軽く刃渡りの短いものが最適なのだ。しかし、彼女は下田の指示を気に入らなかったらしい。

その歩みに、疲労が表れていないことも確認した。休みはちゃんと取ったようだ。一日半ほど通して戦っていたので、いかに彼女といえど響いてくる可能性がないわけではない。それだけ、下田は厳しくしたつもりだった。

「何ですか?」

「うん?」

ヨルシカは視線も向けずに訪ねてきた。シラがいるせいか、その声はかなりひそめられている。

「見ないでください」

「お前、緊張してるのか?」

「何を根拠に」

「ここに入ってからずっとだ。来たことがあるのか?」

「:似ているというだけです。王の一族が住んでいた、ロードランの宮殿に」

「ああ、わかったよ。そりゃあ嫌だよな。良い思い出があるはずない」「口を針で縫い付けてもいいのですよ?」

「いいぞ。その調子だ。話した方がましになる」

ヨルシカは唇を固く結んでから、足を近づけてきた。少し上げて、下田の足を踏みつけようとしてくる。

しかし、その直前でシラが立ち止まった。

「この先で、準備をしてもらいます」

彼女が開けようとしているのは、かなり大きな扉だ。入口のものよりも大きいかもしれない。違うのは、その材質だ。明らかに占めている金属の割合が違っている。これはかなり頑丈そうだ。

重そうでもあるそれを、シラは平然と押し開いていく。

先の空間は、吹き抜けになっていた。上の方に見えるテラスが、差し込む光によって輝いている。誰かの気配があるような気がしたが、はつきりとはわからなかった。

「奥へとお進みください。私もすぐに続きますので」

シラは扉の開閉作業を行っている。一瞬観察してから、下田は前へと進み始めた。

それなりに広い場所だ。明るさもある程度調節されている。普段は、どのような用途に使われている場所なのだろう。

少なくとも、衣装部屋ではない。大王に会うのにふさわしい服とやらが並べられているわけでもない。

下田は深呼吸をしてから、横に手を伸ばした、そこには、ヨルシカの腕がある。彼女は掴んできた彼を怪訝そうに睨んできた。

自分の側へと、引き寄せる。下田は右に飛びながら、ほとんど彼女の腕を抱きかかえていた。

「なん…」

咄めるような声は、途中で遮られる。

先ほどまでヨルシカが立っていた床が、大きくへこむ。一瞬後に、おぞましい見た目の槍が床に叩き付けられているのだとわかった。

下田は自分が持ってきた得物を握る。

「やっぱり」

見えない体を解除したシラは、もはや隠すことなくその細目を悪感情で満たしていた。

「汚らわしい竜の末裔共め」

今からでも、貴樹達と合流すべきか悩んだ。あっちも、騙し討ちをされているかもしれない。自分達を分断して、楽に撃破する。相手が話し合いなど望んでいないと、ほぼ確定したのだ。

だが、わからなくなっていた。

はたして、この場から無事に逃げることができるのか。

テラスの方から、誰かが姿を現した。軽々と柵を飛び越えると、自然な体勢で降ってくる。重い鎧姿なのにもかかわらず、床に着地してもほとんど余計な音を立てなかった。金の手甲を動かし、己の十字槍へと添えた。

下田はそれなりに早くヨルシカの腕を離した。それでも、伝わってはきていた。彼女の震えが、わずかではあっても感覚できた。

「オーンスタイン様、私だけで」

シラの言葉を、槍を振って遮る。

その獅子兜は、下田に向けられていた。

「スモウは」

「…」

「まだ、眠っている。遠くないうちに目覚めるだろう。奴はうわごとを漏らしていた。その望みを叶えてやろうと思っている。貴様の首を、奴の枕元に添えてやろう」

下田は、相手と同じことをした。

自身の槍に、雷を纏わせる。それは合理的な行動でもあり、相手の気迫に負けないようにする一種の儀式でもあった。

シラもまた、閃光を弾けさせた。斧槍を持っていない方の手に、弓を形作る。全て雷で構成された弓を。その矢もまた、同じものでできていた。下田は妙な感動を覚えた。どうやら、ちゃんと術として確立されているようだ。

「ヨルシカ、聞いているか？」

「どう、どうやって…」

「複数戦のやり方は、わかっているだろ」

「逃げるべきです。勝てません。どうしろと」

「やるか、死ぬかだ。散々やったる。楽勝だ」

「貴方という男は」

最初は、シラが仕掛けてきた。

一気に三本の矢を放ってくる。どれも反詠唱で処理できる類のものではない。雷には雷を。下田は即座にヨルシカの前へと回って、線を描いた。

雷光の線。それを上手く変形させて、矢の全てを受け止める。相殺することには成功した。だが、次へとつなげるのは難しい。シラは距離を保っている。既に第二波の準備をしている。つまり、これから先も接近する気はないということだった。

振り向きながら、ヨルシカの顔を蹴り落とす。それから自分もしゃがんだが、ぎりぎり側頭部を削られた。

オーンスタインは、下田への追撃をしようとはしない。初めから、わかっていた。彼はまず掃除をするつもりだ。下田をじっくりと追いつめる前に、邪魔な小石を消そうとしている。

下田は、把管を絞った。

まだ体勢を崩しているヨルシカ。その頭に向かっていている十字槍の刃に向かって、突きを炸裂させる。今までならそれでも成功はしなかっただろうが、条件はそろっていた。下田の槍が、オーンスタインの攻撃を弾く。

その時初めて、完全に獅子の意識が下田に向かったようだった。ヨルシカが離脱すると同時に、連撃を行う。手甲が異様な速度でぶれ、神速の突きが迫ってくる。

最初の三発を、ほぼ完璧に防いだ。

それだけで、オーンスタインが首を動かす。少しだけ、驚いているようだ。

合間に来る薙ぎ払いにも反応し、体を曲げながら下田は把管をずらした。ほとんど抵抗はなく、最速で槍が伸びていく。

オーンスタインはそれを石突の部分で防いでから一歩下がった。それから、興味深そうに下田の握っている武器を見た。

かなり長いその槍を、息を吐き出しながら構え直す。

管槍。

かなりの歴史を持つ武器だ。利き手で握るより先に近い部分に、スライド式の管を設けている。そのおかげで、従来の物よりもはるかにスムーズに刺突を行うことができる。

剣道三倍段という言葉をよく実感してきている。槍などの長柄武器とまともに剣が戦うには、よほどの実力差がないといけないということだ。まして、神のような使い手を相手にするなら、剣や短剣で勝てる道理はない。

それに、下田にとつて管槍は、最も扱いに慣れているものだった。一番得意だと言い換えてもいい。扱っている時間は他よりも短いものの、はつきりとわかっている。自分に合っていると、あらゆる感触が物語っていた。

さらに、下田は己の体の変化も感じていた。オーンスタインの突きを何度か受けたというのに、ほとんど手に痺れが残っていない。どうやら、明らかに身体能力が向上しているようだった。動作が速くなっている。

原因はわかっていた。

未だ集中しきれていないヨルシカに短く言う。

「狙う相手はわかっているな？ やるぞ」

彼女はもつとうまく動けるはずだ。何せ竜の血が濃く、全身を駆け巡っているのだから。血を与えられた下田でさえ、かなりの効果を感じている。その大元なら、もっと素早く戦えるはずだった。

シラの矢をかわしながら、ヨルシカを見る。下を向いて、呆然と床を眺めていた。立ち上がりきれでもない。

こののろま、という意味も込めて、下田は跳躍した。途中でオーンスタインの槍を受けながらも、彼女の横腹に蹴りを叩きこむ。

「戦わないのなら、僕もそうする」

ヨルシカは急に顔を上げた。

「お前を殺してから、黙って殺される。何もせずに」

「く…」

びたん、と白い肉が叩き付けられる。

尻尾を苛立たしげに揺らした後、青白い針を作り出した。それらは彼女の詠唱によって周囲に拡散していく。同時に下田もまた、ソウルの弾丸を飛ばしていた。針と弾が絡み合い、ぶつかり合い、小さな爆発を起こしながらまき散らされる。

シラはその回避に気を取られて、雷矢の軌道を崩した。

一方でオーンスタインは気にも留めずに突っ込んでくる。魔術がたくさん当たっても、その鎧には少しも効果がなかった。

だが、騎士は直後、下がらざるおえなくなる。下田が呪術の扇を伸ばしたからだ。回避の軌道を先読みするかのように、さらに変形する。槍の刃で端を斬り裂き、できた隙間から前進しようとする。

途中で、十字槍を上にも構えた。柄の中央部分に、白い刃がぶつかる。

ヨルシカはイルシールの直剣をさらに押し込もうとする。

しかし、すぐに呻き声を上げた。

オーンスタインが槍から雷を伝導させ、彼女の体に放っていた。できてしまった隙は、致命的だ。その追撃によって、ヨルシカの頭が破壊される、

前に、下田の刺突がオーンスタインの兜に直撃していた。

ヨルシカは即座に離脱、向きを反対に変えて走り出した。狙いは、既に理解しているらしい。

向かってくるオーンスタインの雷を相殺しながら、下田は軽く頷いていた。ようやくヨルシカは、冷静になってきたようだ。

炎を獅子へと飛ばしてから、後ろへ跳躍する。

ヨルシカもまた、シラへの接近を試みていた。

弱い方から殺す。

何度も言い聞かせたことだ。とにかく、数を早めに減らすことが先決だった。

「死ぬ気でかわせー！」

「黙りなさい」

シラは素早く何本もの矢を放ってくる。その全てが、ヨルシカにとっては必殺になりうるものだ。彼女の再生能力が効果を発揮しない。だから、受けることも無意味だ。かわすしかない。

彼女は、おそらく思い出しているのだろう。散々、下田に同じ状況を体験させられた。結局彼女の最も苦手とすることを克服させなければならなかった。初めは全くやる気を見せなかったのだが、過度な挑発に弱い点を利用すれば簡単だった。

持ち前の身体能力を使い、飛んでくる矢を避けていく。空中でも、身動きができないわけではなかった。既に、ヨルシカは魔術と魔術の融合反応に慣れてきている。ソウルの塊を踏んで跳ね回り、回避と同時に急速に前進できていた。

シラは己の斧槍を立たせる。ヨルシカが迫っても、振るう気配がなかった。

下田は知覚する。刃に絡みついている遺骸。趣味の悪い飾りとして最初は思っていなかったが、徐々に膨らみつつあるソウルの躍動を感じた。

叫ぶ間もなく、斧槍から白い光が拡散する。それを浴びても、ヨルシカは怯むことなくシラの胸へ直剣を振るった。

が、刃はあつけなく弾かれる。相手の身に着けている胸当ては固そうだが、それでも彼女の臂力をはねのけるほどではなかった。

シラの全身から、淡い光が立ち上っている。そこで、ようやく気がついた。今のは他者への術ではない。自分へのものだ。防御を強化している。

ヨルシカに、斧の先が炸裂した。吹き飛ばされて、壁の方へと寄っていく。そこへさらに、雷の矢が迫っていた。

下田はその破壊を試みるが、別のことに気を取られる。オーンスタインが追いついてきていた。それから放たれる雷撃にも対応しなくてはならなかった。

意外にも、ヨルシカはすぐに体勢を整えた。

彼女は、真つすぐ見ている。

疾走してくる雷の矢ではない。

その矢のほとんどを自身の雷で消した、下田のことをだ。

彼の首が飛ばされるところまで、走りながら見ていた。

◆
どかりと腰を下ろすと、貴樹は腕を組んだ。両足をがしやがしや鳴らしながら上げて、テーブルの上に乗せる。

その行儀の悪さを直接してくる者はいなかった。そんな行為をする程度の者など眼中にないようで、ほぼ全員が無視をしていた。

ある女性を覗いては。

「怒っていらっしやるのですか？」

高貴というよりは、神秘的な雰囲気をもとった彼女が、純粋な疑問を向けてきていた。貴樹はそれを受けてさらにふんぞり返る。そうでもしないと、相手の大きさに押されてしまいそうだったからだ。

「すみません。僕の方では、これが正しい礼儀なんですよ」

「まあ」

「僕は、代表として来ています。ですので、申し訳ありませんがそちらの流儀全てに従うつもりはありません。譲れないものがあります」

「堂々とした方」

顔をこちらに向けて下ろしてくるが、目は相変わらず閉じたままだった。それでも、鮮烈な印象を与えてくる。片方の目元にはひびわれのような浅いシミができているが、それが逆に良い味わいを感じられるような美貌だった。白く、流れるようなレースのついたドレス。それにゆつたりとかかっている緑の長髪。唯一の欠点といえなくもないのは、その大ききさだろう。座っている姿だけでもグンダの背丈を優に超えている。

(なんで、こいつ起きてんだ?)

王女フィリアノール。王族の末女。

もっとよく観察したいと思ったが、貴樹と彼女の間に手が割り込んでくる。

「近づくな」

キアランは、怜悯な瞳で警告してきた。仮面を外している彼女は、想像と違わず針のような印象を与えてくる。

いいねえ、と内心邪悪に笑った。こうして何となく戦う流れに持つていければ、自分の装備を存分に使用できる。むしろ待つことはせず今すぐに仕掛けた方がいいのではないかと、貴樹は狂い始めた。思考が溶けかけている。

ノミがため息をつきながら、両足を掴んでくる。少し強引に引くと、テーブルの下に降ろさせた。

グウインが、キアランを制止する。

「ここは、刃を合わせる場所ではない。時間が限られている。本題に入る」

(ち)

「こそこそと、ノミが囁いてくる。

「おい、馬鹿てめえ。なんでずっと喧嘩腰なんだ。自分で言ったこと、憶えてるか?」

「でもよお、ちよつと奴らの一部くらい斬ってみてもいいんじゃないか?」

「鏡見ろよ。キマってんぞ」

ばしばしと貴樹の頬を叩いてから、真面目な顔になって正面を向いた。グウインへは一度も視線を向けない。

「よく聞いてくれ。これから話すことは、全員にとって希望の持てる」
残りの言葉は、ふがふがと曖昧になっていった。隣から伸びている大剣の柄が、ノミの口を塞いでいる。その落ちくぼんだ目が我慢ならない様子で歪められ、ノミはテーブルに両手を叩きつけた。

「いい加減にしろやあああああ!」

「うるっせ」

貴樹はおちよくるように耳を手で塞ぐ動作をした。掴みかかろうとしてくるノミをかわし、椅子を蹴りながら後退する。さらに突進してきた相手の方に足をついて、高く跳躍した。ちょうど空いているノミの席へと落ちていき、座る姿勢のまま収まる。

手で口を押さえているフィリアノール以外は、微動だにしていな

かった。

貴樹は微笑みながら、両手を広げる。

「どうやらこちらのアホが、無礼を働いたようで。まずは、謝らせてください。お互いに不幸な行き違いがあったのは確かですが、どちらかといえればこちらの非が多い。申し訳なく思っています」

「そのような言葉を並べるために、やって来たのか？」

グウインは背もたれに寄りかかった。

「もちろん、違います。僕は、建設的な提案をしに参りました。はつきり言いますと、僕には戦う気がない。今の世界の状況と、貴方達の手を理解してなお、争う選択を取るのには愚かというものです」

「では、火継ぎの完遂に協力するのだな」

「違います」

他の黙っている者達からの視線が、より厳しくなった。

「言ったでしょう。より良い道があります。こちらが持っている情報として、深淵の勢力の内実が判明しています。打ち倒せば、生き残ることができないのではないかと考えています」

「なるほど」

グウインは腕組みをしながら数秒思考にふけた。それから、改めて貴樹の方へと顔を向けてくる。

「つまり我々の協力を、望んでいるのか」

「はい」

「夢想と断ずるまでもない」

当然、わかっただけではいた。相手がこの話を最初受け入れるわけがないということとは。

貴樹はたいして動揺もせず、相手へ同調する動きを示した。

「そうですね。足りないのはわかっています。保証がまるで足りていない」

ノミがこちらを見つめながら、倒れた椅子を直し、座る。

「相手の力は未知数です。一応証言はありますが、あくまで一人の尺度からのものでしかない。もしかすると、僕達の誰も敵わないような化物が、混ざっている可能性もある」

「ほとんど間違っている」

指摘にも、表情を動かさなかった。これは誘導だからだ。あえて本質とはずれた説明をすることによって、相手の意識を動かす。会話を、前へと進める。

「我々も知っている。深淵の主のことは。かの存在は、マヌスと呼ばれている」

（お、やっぱり聞いたことあるな。初代のボスだ）

「限りなく願望に近い推測だ。たとえあれを滅ぼしたとしても、意味はない。深淵とは、個を指すのではない。主がいなくなっても、消えることはないだろう。そしてその残りものでさえ、我々を滅ぼす要因になりうる」

貴樹は、手を叩いた。

「仰る通り。さすがは、一度失敗している経験があると違いますね」

しばらく、拍手の音は静寂に響きわたった。グウィンは是非の読み取れない顔で、貴樹の言葉を受け流そうとしている。その様子を面白そうに眺めてから、貴樹は頬杖をついた。声はさらにはつきりと出す。

「貴方がたは、偉業を成した」

大王、騎士達を順々に見ていく。反応を観察する。

「地球に侵略し、新たな土地、ソウル、そして避難場所を作り出そうとした。滅びの闇から、逃れるための。先住民たちと敵対してまでも…、結局無理だったんですよね？」

沈黙が、警戒の意味合いを含むようになっていく。話している男が本当は何者なのか、訝しむような視線も感じられる。

「深淵は世界を飛び越えてきた。そういうものだと、聞いたことがあります。だから、貴方達は偉業を成しましたが、成し切ることはできなかつた。地球の人間を滅ぼしましたが、結局をそれを利用した上で目的の成就是かなわなかつた。そうですね？」

反応がなくても、それが答えだと十分に理解していた。

貴樹は醜い笑いが漏れないよう、自重する。

「最初の火は、徐々に弱まっている。はるか昔から、その兆候はあつ

た。だから貴方達は考えたんです。薪の、燃料の量を膨大にすればいいのではないかと。僕達人間は、良質なソウルの器らしいですね。それが七十億集まれば…、火の復活も容易いでしょう。地球への道が開けた瞬間から、そういう筋ができた。僕でも、そう考えます」

ここでグウインは、初めての顔をした。低く笑いながら、貴樹と目を合わせた。

「トミズ、タカキ…」

「深淵が、マヌス達がついてこなければ、成功してはいたはず。貴方達は新時代を作るつもりだった。新たな土地、新たな火。きつと、素晴らしい幕開けになったことでしょう」

「それが事実だとして、お前は何を言うつもりだ？」

わかつているはずだった。既にグウインは貴樹の考えを理解している。それでも彼の口から言わせようとしているということは、つまり拒絶の意思はないと示しているようなものだった。自分の思い通りに行くことが確定し、貴樹は隠しきれない笑みを浮かべる。

「マヌス達を倒すことで得られるのは、時間です。多少は、深淵の進行も緩和される。その間、何をするか。方法を見つけるんです。時間を超える方法を」

そろそろノミが反応を示すと思っていたが、未だ静かなままだった。

「おそらく、プリシラはまだ生きていますよね？ さつきからずっと、気配がするんですよ。グウイン、貴方の体には誰かがいる。上手いこと利用する術を見つければ、彼女の力を再び利用できる。そういうつもりで、下田から回収したんでしょう？」

「やはり、お前は面白い男だな」

「僕達は、助け合うべきなんです」

（くくく…、千載一遇の好機……！）

貴樹は仕上げと言わんばかりに、立ち上がった。

「今度こそ、共に悲願を達成しましょう。数千年前の失敗を取り返すんです。過去の地球へと舞い戻り、完璧な侵略を行う。できる限りの手助けをします。きつと成功するはずです。もう深淵の主は倒され

ているのですから」

彼にとつての優先順位は、更新されていた。大事な女性の笑顔を、ちやんとした好意を受け取った瞬間から、一位と二位以外の全てがそぎ落とされた。特に生徒達を筆頭とした地球に関する者達の存在は、いるだけで不快に思うようになっていた。

「代わりにお願いがあります。僕と火守女だけは、見逃してくださいませんか。もちろん他の協力は惜しみません。大王の火を宿しているのは、高原ちとせという僕の生徒と、ヨルシカ。そしてフォドリック、ホレイス、クリムエルヒルトです。その全てを貴方へ捧げれば、より力が増すはず。これからの戦いの勝率にも影響するでしょう。そして」

グウインは口を開こうとしたが、貴樹にはその隙を与える気がない。言いたいことはわかつている。それなりに問題は重なっている。「それを阻止しようとする者達の排除にも、協力する所存です。まず、下田彰浩。もう今頃死んでいるかもしれませんが、彼は罪深い。貴方がたにもはつきりと殺意を示した。僕としても遺憾です。あのような存在が、同じ人間として呼吸をしているのも堪え難い」

貴樹は、自らの大剣に炎を流した。

前の二日間、身に着けた技だ。自身の中に残されている最初の火の欠片。それと正面から向き合い、真の力を引き出した。

武器を、そのために協力してくれた相手へと突き付ける。

「この、親不孝のマヌケも処理します。こいつも危険ですからね。いつ裏切るか、わからない。不安要素は全部排除しておきましょう」

「その精神構造を、理解するのは不可能なのだろうか」

グウインは興味深そうに言った。

「同胞の虐殺を、容認するのか？」

「同胞？」

貴樹は身震いする。おぞましい言葉を聞いたかのようにだった。

「やめてください。下等生物と一緒にされたくありません」

ノミは完全に理解しても、あまり動じてはいなかったようだ。焦る様子はなく、貴樹を半目で見てくる。

「お前…、いっそ清々しいよ」

「敵が何か言ってますが、皆さん気にしないでください」

「こんなこととして、火守女がどう思うか。お前に幻滅するぞ」

「どうだかな」

貴樹はそこで表情を崩した。今この場にはいない彼女のことを想像している。これからのことを考えると、我慢が効かなかつた。ぐぐぐ、と息子の部分が盛り上がっていく。気持ちの悪い笑みをこぼした。

「俺と彼女の未来は明るい。これから頑張つて……ひもりんをどろどろに依存させる。俺がないと何もできなくさせる。楽しみだ。俺も彼女も依存するようになる。お互い以外何もいらなくなっちゃうんだ。最高の気分だよ」

ノミは、呆れたように笑っている。

「童貞が何言ってるんだか。…あいつの予測は、正しかったか」

これ以上は耳障りなので、もう話が承認されたと仮定することにした。ノミの首に向かって、剣を走らせる。もちろん抵抗はしてくるだろう。だが、多勢に無勢だ。内心猿のようにけたけた笑いながら、戦闘を開始しようとした。

が、その前に足元に違和感を感じる。

震えが、伝わってきた。

床が破壊されて、できた穴から体が飛んでくる。

それに巻き込まれた貴樹は、吹き飛んで壁に激突した。痛みは全くなかったが、ぶかぶかの鎧が振動して、ぐわんぐわんと金属音が耳元で炸裂する。脳が揺らされているような気分だった。

邪魔に憤りつつ、自分に覆いかぶさっている体をどけた。よく見ると、女性のものであることがわかる。

シラは呻いていた。胸の鎧部分が砕かれている。そして、傷口に妙な冷気が淀んでいた。

続いて、さらに下の穴から二つの影が飛び出した。

彼らは体勢を整える余裕がないらしく、そのまま立ち上がった貴樹とぶつかった。今度は踏ん張って、倒れることを防ぐ。すぐに後悔をした。度重なる衝撃で、自分の鎧にひびが入っていた。避ければよ

かった。

最後に這い出てきたオーンスタインは、体を完治させ終わった下田とヨルシカへ槍を向ける。

「お目汚しを。すぐに終わらせませす」

グウインは少し考えるような顔をしてから、首を振った。

「よい。話を続ける」

（は？ こいつら死んでねえのかよ。おいおいおい。想定外だなこりゃ）

勢いが大事だと、貴樹は分かっていた。このまま状況が変わっていく前に、結論を急がなければならぬ。新しく参入してきた者達の印象に負けないよう、声を張り上げた。

「見てください。この通りです。僕は話し合いを望んでいたのに、この二人は過激な手段を取りました。大王、貴方も理解したでしょう。真に排除すべき敵が誰なのか」

だが、貴樹はまだ気が付いていなかった。視認できなかつた。言葉かけたグウインが、妙な表情をしたことに。ソウルの流れが、変化したことに。その流れは真つすぐ、ふらふらしている竜人の女性に向かつていた。

「もう、やめてください」

体の芯が、定まった。

ヨルシカの顔は今まで戦っていたとは思えないほど、穏やかになっている。もはや今の状況を全て理解したような様子で、下田が抵抗しようとするのを止めていた。貴樹の迷惑をも、阻害していた。

やがて、気づく。同時に下田もまた、まるで初めて会ったかのような表情で彼女を見つめた。

ヨルシカは、目をつぶっている。彼女の傷は塞がっているが、かなりの量の血が流れ出したことは、跡でわかった。倒れていてもおかしくはない。それでもその立ち姿はしっかりしていた。

雰囲気までもが、変わっている。実際彼女が表情を引き締めても、今までのヨルシカのそれとはどこか違っていた。今のヨルシカは、まるでヨルシカではないようだ。

「私達は、争うべきではありません。敵は明らかです。太古より、最初の火が見いだされる前から、深淵を退けることこそが使命でした。ずっと、思っていたことです。皆様、どうか私と彰浩の話を聞いてくれませんか？」

プリシラは、決然と全員を見据えた。

68. 結着、そして婚姻成立

その凜とした瞳はどこか、苦し気に揺れていた。

「本来、このような…、無意味な争いをしている場合ではないのです。我々は立ち向かわなければなりません」

唾然としている下田に顔を向けると、その表情は和らいだ。が、すぐに真面目な顔に戻る。

グウインは警戒のまなざしを彼女へ向けた。

「この機を伺っていたということか」

「大王様」

彼女はそれから立ち上がっているノミへ、最後に貴樹へと視線を定めた。

「他の方達も、落ち着いてください」

まだ座り込んでいる下田の肩に触れた。その白い手はさらに彼の腕へと流れていき、優しくつかむ。引き起こされる途中で、下田は自分の足の力を取り戻したようだった。最後まで彼女の助けに頼ることなく、真つすぐ立った。

下田は少しぼうつとしてから、己のやるべきことを思い出したかのようにはつとした。

武器を下に落とし、周りの者達に向かって頭を下げる。

「本来は、こんな慌ただしい形になるとは思っていませんでした。無礼をお詫びいたします」

オーンスタインが、威嚇するように槍を立てた。

「既に話をいくらか進んでいるようですが、僕もほぼ同じ意見です。これからやってくる深淵を、貴方達と共に討伐する。これが最善だと考えています」

「シモダも、そうなのか？」

グウインは崩れたテーブルの欠片に両手をついた。

「我々に対する恨みを忘れることができるか？」

「無理です」

下田は拳を握りしめた。その顔が少しの間歪められたが、隣のプリ

シラがそばに寄ると、元に戻っていく。

「お前達の、してきたことは消えない。絶対に許さない。でも…、きつとどちらが悪なんてことは、わからないんだ。貴方達は生きるために戦った。僕達も同じです。だからこそ、利害の一致は可能だと思っています」

「して、具体的には？」

今度は、プリシラが話し始める。

「おおよそは、そのの、タカキさんが言っていたことと同じです。ですが、彼の計画には一つ、致命的な欠陥があります」

(はあ?)

一瞬キレそうになったが、貴樹は黙っておいた。流れ的に、これ以上言葉を重ねるのは墓穴を掘っているのと変わらないと直感していた。

「確かに、元の地球へと戻ることは可能です。それを妨害してくる深淵の主達を倒せば。しかし、まだ足りないのです。もはや時の彼方へと追いやられたかつての地球。その世界を作るためには、ソウルが足りません。今のままでは、決して完成に至らないでしょう。私達全員のソウルを消費したとしても」

(え、そうなの？ マジ?)

貴樹の計画のずさんさが露呈する。結局彼は、プリシラ的能力を過信していたということだ。

「ですが、その問題を解決するものがあります」

下田が続けた。

「ダークソウル。暗い魂。それを手に入れられれば、十分すぎるほどの塗料になる。存在は、大王も知っているでしょう」

グウインは否定も肯定もしなかった。

「かつて貴方は、最初の火を見出した。その力は圧倒的で、闇の時代を覆すきっかけになった。ですが、全てではなかった。光のもとに生まれていた影を、貴方達は見逃していたんですね。火が持ち去られた後、そこにはまだ、残っているものがあつた」

「世迷い言だ」

アルトリウスが、割り込んでくる。それにも構わず、下田は全員に向かつて訴えかけた。

「誰に、何に回収されたのかはわかりません。ですがそれは、火のソウル以上の可能性を持っている」

「所在は、ずっと、わかっていませんでした。ですが探し続け、ついに見つけることができました。人類が減んでいく、地球において」

ノミはプリシラをじっと見ていたが、彼女の方はあえて避けているような節がある。

「深淵の主、マヌス。間違いありません。あの怪物の中に、ダークソウルは宿っています。倒し、回収することができれば……。世界を描けま。まだ外部の干渉に晒されていなかった、地球への道を」

「それで、どうする？」

また、同じような言葉をグウインは並べていた。貴樹は油断なく周囲の反応を観察する。もし乗り遅れてしまえば、非常に自分にとって都合の悪いことになるのは確かだからだ。

「再び、戦争を繰り返すのか？ プリシラ。お前が止めようとしてできなかつたことを」

「間違っている」

下田は既に、何かの決意を固めているようだった。そこにはもう、かつての姿はない。膿に侵食されていた頃の、むき出しの憎悪は消えていた。

「貴方達は どうして、別の道を選ばなかったのか。僕達人間のことを、ただの燃料以外の存在として認識していれば、もつと、問題は単純になつたはずです」

その目は逸らされることなく、大王に向かっていった。

「今度は、僕達もいます。もちろん、最初は難しいかもしれませんが。ですが必ず、貴方達別世界の存在を、地球の皆に受け入れさせる。共存です。最初から、選ぶべきだった。貴方達は虚しい遠回りをしていました」

「つまり、そういうことなんです」

貴樹はここだ、となるべく自然な形で言葉を挟んだ。

「すみません。僕は嘘をついていました。大王、貴方達の野望を、最後まで手伝うつもりはなかったんです。本当はもう少し後で説得するつもりだったんですが、下田が早めに言ってくれて、かえって良かったかもしれません」

直前までどのような話がなされていたのか理解していない下田は、そこで不思議そうに見てきた。それに合わせて、親指を立てる。途端胡散臭そうに眉をひそめてきたが、無視した。

（くそ、ダークソウルだど？ 初耳だ。やられたな）

どうやら、お邪魔虫一斉処分作戦は無効になってしまったようだ。おそらく、あの自分が途中で退出した話し合いの時に、誰かが余計な入れ知恵をしたのだろう。この場で話されてしまった以上、軌道修正は不可能だった。

「もちろん、信じられないのはわかります。ですが、どちらにしろマヌスとやらを滅ぼすことに、僕達の中で食い違いはないはず。そちらの中のわだかまりは、重要な戦いが終わった後にくらでも対処すればいい。お願いします。共に戦いましょう」

しばらく、考えるような間が空いた。騎士達の反応は一つにまとまっている。己の王の考え次第だと。

グウインは、黙っているプリシラを見た後、下田に向かって言った。「綺麗な言葉だ。誰もが一度は望む。だが、シモダよ。お前は我々を信じられるのか？ わかっているぞ。経験の中で染み込んだ感情は容易に消えはしない。口では都合の良いことを並べようと、実際に納得しているかどうかはわからない」

「最初はそうでした。嫌だった。でも、もう違う」

下田は迷いが出ないよう、心がけているようだった。それでもややぎこちない動作で、ヨルシカの体に近づく。その肩を抱き寄せ、頬同士を密着させた。かなり背伸びをして。

「僕は…、こいつを憎んでいました。ですが、考えを変えました。許しはしません。それでも、直接血がつながっていないとしても、家族を恨み続けることはできない。これから、証明していきたいと思っます。たとえかけ離れた世界の者同士でも、共存していけると」

プリシラは、近くにある彼の顔に対して、笑いかけた。それは息子に向ける親のような微笑みだった。満足したように目を閉じる。

瞬きを繰り返し、瞳から涙がこぼれていった。再び完全に目を開いた時には、その印象はやや幼くなっている。表情にも、余裕がなくなっていた。

ヨルシカは弾かれたように下田から離れる。彼のことをまるで珍獣のように眺めた後、慌てて目元の涙をぬぐう。だがそれはあまり意味がなかった、次から次へと、溢れているからだ。しばらく止まらなかった。

「落ち着けよ」

「と、とうとう、気が狂ったのですね」

「すっかり憶えてるのか。いや、真面目だ。正直な気持ちを言った」

下田は口を曲げながら、斜め上を向いた。

ヨルシカも鼻を鳴らす。目の縁を赤くさせながら。

「ぞつとします。こちらから願い下げです。貴方のような弟を持つなんて」

「僕も、お前みたいな妹なんて嫌だ」

「…」

「…」

「馬鹿なんですか？ どうやらとつくに目も腐りきっているようです
ね」

「お前は脳が溶けているみたいだな。僕が兄の方に決まってるだろ」

「私が姉です」

「死にたいのか？」

さらに二人は続けようとしたが、すぐに現実に戻ってやめる。貴樹としては完全に白けて、この隙に立て直しを凶ろうとも考えたが、グウインの様子を見て思いとどまった。大王は、シモダとヨルシカを交互に見てから、ゆっくりと首を振る。

「残念ながら、提案を受け入れることはできない。このままお前達を殺し、祭祀場にいる薪を全て得る。その方が確実だからだ。常陽の民を、信じることなど不可能だ。なぜだかわかるか？」

グウインは顔を片手で覆った。その指の隙間から、燃えるような瞳が貴樹達を捉える。王にはそぐわない感情が渦巻いていた。

「我々が、お前達の世界と邂逅したのは、決して偶然ではない。我々は、地球のことも、そこにいる住民のことも、何一つとして知らなかった。だが、お前達は違う。違うのだろうか？」

激しくはない。燃え上がるほどでもない。それでもはつきりとした憎しみが、大王の様子には含まれていた。

「自分が、自分の世界が、まるで見世物のように、大衆に消費されているとわかった時、どのような心情になるかわかるか？ それだけではない。もしかすれば、お前達の種族の誰かによって生み出された存在に過ぎないという可能性を突き付けられた時の気持ちを、理解できるか？ 我々のこれまで味わってきた辛苦、あらゆる不条理があらかじめ仕組まれていたとわかった時、その元凶に報いを与えることに何の罪がある。間違っているかもしれないのだとしても、お前達に止める権利があるというのか？」

貴樹は、初めて男性との会話で泣きそうになった。深い同情がその胸を焦がしている。同時に、地球人の愚かさを改めて知った。

下田は静かに言った。

「だから、貴方達は、最初に日本を襲撃したんですね」

「そうだ」

グウインは既に武器を抜いている。周りの騎士達も同様に。

「我々はゲームの中の存在ではない。戦いを通して、お前達にも理解させるとしよう」

貴樹のコウモリ的思考が、熱を発しながら回っていた。心情的には完全にグウイン側へと傾いている。今自分が味方すれば、戦力的には申し分なくなるだろう。問題は、その後の処理だった。まずノミ、下田、ヨルシカはちゃんと殺さなければならぬ。祭祀場へと持ち帰る。事實は、上手いこと脚色する必要があるだろう。そのためには、プリシラの存在も邪魔になってくる。

とそこまで考えた所で、大きな体が間に割り込んできていた。緑髪がさらさらと流れていく。

フィリアノールは、厳しい表情でグウィンを見下ろしていた。

「もう、ごまかしはたくさんです。うんざりしました」

「王女様！ 危険です、奴らに背中をむけるなど」

「シラ。下がっていなさい」

彼女はずりずりと椅子を引つ張って、グウィンと貴樹達の間には置いた。そして、あまり音を立てることはせず、腰を下ろした。

「大王、偉大なる父上。刃を交わして何とします？ プリシラ様と、シモダ様が語ったことはまさに光明のようなもの。受け入れぬ道理はございません」

「その者達を庇うのか？」

「たとえどのような事情があるにせよ、最初に争いを始めたのは私達です。大王様の語り方には作画的なものがありません。貴方は結局、侵略を選んだでしょう。初めからそれしか考えていなかった。さも、彼らに罪があるような言い方は、あんまりではありませんか。罪を犯したのは、私達です。自らの世界のことを、自らだけで解決できなかった無能の集まり」

言葉は強いが、声は穏やかなままだった。大王も、騎士達も、それに対して怒っている様子はない。ただ、声を聞いていた。

「にもかかわらず、彼らは歩み寄ってくれているのです。私達の世界というのは、この部屋、宮殿、荘厳な街ではありません。私達自身です。どんな場所でも、命をつないでゆけるのなら、十分ではありませんか。私は、賛成します。彼らと手を取り合いたい」

「裏切られれば、全てが無に帰す」

「初めから、裏切っていたのは私達だけです。こちらから信じなければ、同じ道を辿るでしょう。正しい決断を願います」

貴樹は再確認する。

本来、彼女はここにいないはずだった。フィリアノールは高い塔の上で仮初の眠りにについている。そういう、設定だった。違いが出てきたのは、やはり、地球とのつながりのせいだろう。それがあらゆる差異を生み出した。ただ絵画世界に閉じこもるだけだったプリシラが、規格外の存在として様々な影響を与えている。もし彼女が生まれて

こなければ、自分が火守女と出会うこともなかった。永遠に、別々の道を進んでいた。

グウィン達をけしかけることもできたが、そういう思考のせいで遅れた。そのせいで、未来は定まったも同然になる。

「信頼か」

大王は武器を収めた。それから再び席について、下田の方を向いた。

「お前達は、我々を信じるのか？」

「はい」

「タカキ」

「もちろんです」

「我が、不肖の息子よ」

ノミはようやくやく、グウィンと相対した。返答を渋るようになっていたが、やがて考えが固まったのか、迷いのない様子で頷いた。

「あんた達が、プリシラにしてきたことは忘れない。だが、いつまでも引きずるほどおれは愚かじやない。別に縁を戻すつもりはないが、一緒に戦うことを約束する」

「妙な話になったものだ。思惑通りにいった試しがない」

グウインは長々と息を吐き出した後、フィリアノールを見上げる。逡巡するように目をつぶり、やがてはつきりと口に出した。

「末の子の、行動に免じよう。それほど時間は無い。すぐに、策を練る必要があるだろう」

それから、やや驚いたように見ている臣下達に向けて言った。「納得はできないかもしれない。だが、ついてきてくれるか？」

彼らは迷いなどしなかった。動揺を見せたのは一瞬にも満たない時間だけで、すぐに自らの王へとかしづく。オーンスタインはそこで兜を初めて外し、固く握っていた槍を離れた。アルトリウスとキアランは同時に膝をつく。ゴーは、その巨軀を流れるように折り曲げた。最後にシラが、王女の側で頭を下げた。

アルトリウスが、代表して声を出す。

「我らは、大王様に忠誠を誓った身。そのお考えに殉じるのみです。

どのような状況になろうと、最後までお供いたします」

会谈の結論が出された瞬間だった。

その光景を、貴樹は興奮の中で眺めていた。つまりこれで、対抗する戦力がそろったわけだ。敵として戦うのも捨てがたかったが、横に並んで共通の敵に対するのも、素晴らしいと思った。だからなるべく自分への矛先が向かないよう、締め言葉を出す。

短い拍手をして、貴樹は笑顔を維持した。

「素晴らしい。考える限り最高の結果です。未来は、これで保証されたようなもの。まずは祭祀場に戻り、報告をする時間を下さい。それから、僕達全員で集まり、知恵を分け合ひましょう。安心してください。きつと僕達なら、あらゆる困難を乗り越えていけるはずですよ」

(あれれ。おかしいぞ……)

貴樹は純粹な表情を作りながら、感じていた。

自分へと向けられる、全員の視線を。

結局ごまかしきれなかったのだと、そこに含まれる感情で把握した。

「交渉において重要なのは、いかに相手を誘導するかということ。お互いの妥協点を探るだけでは、一生成功しません。要求をそのままぶつけた所で、意味はなかったんです」

べらべら口を回すが、あまり手応えがないのはわかっていた。拘束を破ることくらいは簡単だ。周りの感情を気にしないのなら。

と、貴樹は内心強がってみせるが、実際彼の両腕と胸に巻き付いて

いる縄は、力でどうにかできるものではなかった。下田が出現させたものだ。元はちとせが使っていた能力だった。対象に接触すると、ソウル自体を縛る。つまり、目に見えている縄はまやかして、それを噛みちぎろうとしても意味はない。

「あえて、過激な提案をする。そしてすぐに本命の代替案を提示する。心理学的にも有効とされている方法ですね。相手に、こちら側が妥協をしたと錯覚させ、受け入れやすいように誘導するんです。というわけで、僕は決して、本気であんなことをしたいと思っただけではありません。ひもりん、信じて」

正面に座っている彼女は、困ったように横を見た。助けを求められたノミは、首を振る。

下田が、腕を組んで見下ろしてきた。

「あの、普通に謝ってくれるのが一番なんですけど。一応先生のそういう所はわかっているつもりなので」

（かーっ、ぺっ。なにホモくさいこと言ってるんだ？ 気持ちわるい。ガキの癖に偉そうな態度取りやがって）

「おい、こいつ絶対反省してねえぞ。しまいには深淵に寝返るんじゃないか？」

「うーん、さすがにそこまでは」

ノミから自分がした発言全てを皆に報告され、貴樹はそれなりの窮地に立たされていた。特に、火守女に知られたのが痛い。その前に彼女を依存させるつもりでいたのだ。

貴樹は己の神経に働きかけて、目を潤ませた。実際に涙をこぼすところまで行くとかくさいので、ぎりぎりを見極める。とにかく、全員に同情を向けさせる必要はなかった。泣きそうな目を、火守女へと固定する。

「誤解なんだよ。確かに、今までの行動からしたら、そう思われるのも仕方ないかもしれない。僕は…、責められても仕方がない。でも、限度はわかっているんだ。こんな誤解を受けるなんて、酷すぎる」

「あ、これはわかるかも」

ミレーヌが急に声を上げた。しげしげと貴樹の表情を観察してい

る。

「だって違うわ。前に、火守女と喧嘩した時も泣いていたけど、あれよりも微妙に眉間の皺の寄り方が浅い。つまりあの時は本気で、今は演技ってことね」

ホークウツドも呆れを通り越し感心しているような調子で頷いた。

「すげえな。あれを見てないと騙されていた」

「タカキさん…」

アンリは悲し気に声をかけてきた。

思わぬ指摘に、思考が止まる。なんとか呆然としたふりをして、ゆっくり瞼を開け閉めした。ちょうどその動作によつて涙が零れ落ちるよう、調節する。

「話を、聞いてください…」

「タカキ様」

火守女はすでに考えがまとまっているようだった。最初の方は彼の同情を誘う仕草に動かされかけているようだったが、もうそこには迷いが無い。

「どうして、地球を再び滅ぼそうなどと、考えたのですか？」

逃げ切るには跡を残しすぎたというやく理解した彼は、軌道の修正を図る。

首を振って、頬を流れる涙を周囲に飛び散らせた。

「本気じゃなかった。きっと酔っていたんだ。君という存在に。君以外の全てが無駄に思えてしまっていた。現実が遠くなって、自分の愚かな考えが肥大していった」

（まずは、ひもりんを懐柔できればいい。何とかなるだろ。だって俺だけのひもりんなんだし？）

ノミが剣槍を、貴樹の下半身に向ける。

「何だか苛々してきた。去勢したほうがいいんじゃないか？ 度し難いにもほどがあるぞ」

「粗チン野郎がほざいてんじゃねえぞコラ！ 俺の伝家の宝刀は、ひもりんという至高の鞘に収まるために作られたんだ。虫ごときがどうにかできると思ってたのか？ くだばれ！ あほ！ まぬけ！

「さあああある！」

挑発にまんまと乗せられて、記録を更新するレベルの気色悪い発言をしたことに遅れて気がついた。涙は一瞬で乾いてしまったが、すぐに再生産をする。

「うう……。初めからこれは、仕組まれていたんです！ この男は、最初、僕の体の中に寄生していました。最初は悪魔の囁きに耳を傾けまいた、無視をしていましたが、結局負けてしまった。おかげでこうしてこいつが外に出た後も、精神は汚されたままで。僕の人格を、いともたやすく歪めていくんです。被害者は、僕の方なんです！ どうか助けてください」

「皆、騙されないで」

実織が、すつきりしている顔で言う。まるでこの瞬間を待ちわびていたかのようだった。

「昔から、こいつはああいう感じだったから。家にいた時も。都合が悪くなったら、嘘でうやむやにするのが得意なんだ」

薫もまた、彼女に同調する。

「そうだね。この子、嘘泣き得意だから」

「今すぐその薄汚い口を閉じろ、ババアども！ 家族面しやがってええええええ。さっさとぶつ殺……。あああああ！ くそ、まただ。ノミ、いいか、僕は絶対お前を許さない。元の清らかな僕を返してくれ。また、大事な家族を傷つけてしまった…」

「なあ、疲れないのか？ マジで珍獣だな」

確かに、自分の精神構造の変化を感じていた。今までは本音など決して表に出なかつたのに、ちよつとしたきっかけで漏れるようになってしまっている。感情の歯止めが効かないというより、そうする必要がないと思いきや、こんでいるようだ。愛する火守女の前では取り繕うこともないと、無意識に言動を選択している。

「今も、変わっていませんか？」

火守女は眉を下げながら尋ねてくる。

「タカキ様は、自分と同じ人間を、憎んでおられるのですか？ 家族も…」

「いやいや全然。そんなことないよ」

「私は、嫌です。どうか、考え直してみてください。貴方の苦しみを、なくしたいのです」

「ありがとう。君は本当に、最高の女性だよ。でも、気にしないで。僕は、情の深い人間なんだ。隣人を愛せ。親からもそう言われてきた。今も、胸にしつかりと刻み込んでいるよ」

「……」

顔を合わせようと努力したが、段々と自分の目がずれていった。彼女の真摯な目線に對することができない。額から汗が流れ始めた。

「貴方は、とても優しい方です」

「う、うん」

「ですが、それを他の方に向けることはしない。私のことを思いやっ
てくださるのは、とても嬉しいのですが、お願いします。もっと周り
の方にも目を向けてください。貴方の思いやりを、私が独占するのは
忍びないです」

「どうなんだろう。君の悪い癖だ。むしろ足りないくらいで……。僕は
もっと君を」

「決めました」

彼女は、しつかりと言い切った。そこに、大きな変化を感じる。遠
慮してばかりだったころとは、見違えた。色の違う両目を、分けられ
た銀の前髪から覗かせる。

「貴方を…変えてみせます。貴方が、私にしてくださいましたように。家
族の方達ともちゃんと向き合えるようにします」

他の者達と一緒にあって、彼は火守女に感心していた。まるで他人
事のように。しかし、何を言われているのかを徐々に理解し始めて、
熱が浮き上がってきた。

追いつめられたような顔から一転、その表情に光が宿っていく。

「え…、それは、その」

「はい？」

「プロポーズって、ことかな。うん、わかった！ 永遠に添い遂げよう
ね。きやつ」

感無量になって、貴樹は顔を真っ赤にして悶えた。そのらしからぬ乙女のような仕草に、実織が吐きそうな顔をする。薫もまた、指で十字を切っていた。

「ぶろ…？」

「でも、いいかい？ 夫の考えを諫めるためには、ちゃんとした行動をしなきゃいけない」

「あの」

貴樹は縛られたまま、胸を張った。小物くさがより一層増していく。

「俺を変えるためには、まずするべきことがある。憶えてるよね？ 何か一つ、言うことを聞いてもらうって約束。今ここで使うから」

他の者達は、彼への対処を火守女に任せることにしたようだ。それが一番確実で、効果のある方法なのだ、ほぼ全員が理解し始めていた。ノミはつまらない茶番でも見せられているような顔で、その場から離れた。

まだ興奮している顔色で、貴樹は続ける。

「ちゆうをしなきゃいけない」

「頬に、ですか？」

「いや違う」

（落ちて着け落ちて着け落ちて着け…）

「ここ。口にだよ。口と口を合わせるんだ」

「ですが、私のような」

「やってくれないと、拗ねるよ。はい決定！ お、お願いしますっ」

跳ねる。羞恥を全身で表現していた。

火守女は周りにちらりと目を向けてから、俯く。少し考え事をする時間が空いてから、ゆっくりと頷いた。

「はい、わかりました。そこまでおっしゃるのなら」

彼女は膝立ちのまま、近づいてくる。恥ずかしいというよりも、本当にしているのかという不安の方が大きいようだった。貴樹の顔へ拳一つ分くらいまでの距離になる。しっかりと目は開いていて、彼の瞳に写る自分の姿を確認しているみたいだった。それから小さく息

を吸い込んで、唇を動かす。

貴樹は後ろにでんぐり返った。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと待って！ やっぱりうそ」
荒くなった呼吸を何とか落ち着かせる。気絶まで至らなかつたのは、多少なりとも成長した証だろう。しかし、本当に重なってしまったばどうなるかわからなかつた。

少しだけ目を伏せる火守女に向かって、手をかざす。とつくに下田の拘束は解かれていたが、今の貴樹にはどうでもいいことだった。

「いや、心配しないで。まだ、まだ早いつてだけだから。ちよつと、ね？ 刺激が強すぎるといふか。別のにしよう」

「何が依存させるだよ。どの口で言ってたんだか。無理だなこりゃ」

外野からノミが突っ込んだが、沸騰した頭の中には入ってこない。

貴樹は、顔の熱を落ち着けて、火守女へと向き直った。

「よし、こうしよう。いいかい？」

「はい」

「これから、向かいたい所がある。君も、一緒に来てほしい。つまり…、新婚旅行ということになるんだけど、いい？」

「？」

「挨拶回りも兼ねてるね」

「すみません、一体どこに行くんですか？」

ぼろぼろの兜を横に投げ捨てて、彼は立ち上がった。

「深みの聖堂」

69. 母親

話しかけられた時、下田は未だに体が強張ってしまうのを抑えられなかった。

「本当は、こうして話をする資格もないかもしれない。それでも、聞いてほしいの」

ミレーヌは真摯に語りかけてきている。その耳にかかる金髪のせいで、落ち着かない気分が続いていた。

彼女は下田だけではなく、ちとせや実織、高坂などの生徒達全員にそれぞれ話をして回っているらしい。

「何も、しなかったことを謝りたい。祭祀場にいた時から、全てわかっていたのにも関わらず、貴方達には何の警告もしなかった。あの時は、自分の使命の方が大事だったから。同じ故郷を持っているのに、見捨てたの。許せとは言わないわ。でも、本当にごめんなさい」

彼女が地球人であることは、今更知った。どこか違っているとは思っていたが、今まで確認をする余裕がなかった。

「顔を上げてください」

ちとせが、優しく言った。下田も彼女と同じ気持ちだ。

「仕方がない部分もあったんだと思います。それにどうせ、最初の頃に何を言われても、結局あたし達は信じなかった」

ミレーヌは言われて、ほっとしたような笑顔になる。下田は少し見とれている自分に気がついた。顔の作りこそあのウーラシルと同じだが、まるで違う。だから自分の怯えは不当なものだと、内心反省する。

「ありがとう。償いはもちろん、するつもり。これからは、貴方達を守るために戦うわ」

「はい、よろしくお願いします」

下田は微笑んでから、彼女と握手をした。今日何度目かわからない。アンリやホレイスにも同じような事を言われたし、祭祀場の戦士たちのほぼ全員とも会話をした。その全てが、下田達に対する謝罪と約束だった。

これで、完全にわだかまりが解けたとは言えない。特にフォドリツクは警戒もまだしてきている。シーリスを、彼女の意思に反してあまり近づけさせようとはしない。当然だと思っていた。彼らの死体を何回、踏みつけたかわからない。

下田は椅子に座り直そうとして、いつもと違う香りをかいだ。ここは自分の家でもないが、もはや日本の部屋よりも長い時間使っていると言える。そしてそういう所には自分自身の香りが染みつくのだと、今実感していた。

「それで、どうなんですか？」

ちとせが真面目な顔から一転、好奇心の含まれた表情になった。

「なに？」

「あの人、ホークウッドは、あの後……」

「ええ。心配はいらないわ。ついさつき、目を覚ました。正常よ」

「よかったですね」

ミレーヌは入口の方を見やってから、ベッドに腰かけた。そろそろ話も終わって出ていくのかと思っていたが、まだ何かあるらしい。依然として部屋内の密度は高く、下田は別の緊張を強いられていた。

実際に、鼻が感覚しているわけではないのだろう。ただ自分の脳が、視覚からの情報に惑わされて、そういう錯覚を与えているのだ。

「それで……ちよつと、相談なんだけど。ホークのことで」

「面白そうになってきた」

リリアーネが枕に耳をつけながら、寝返りを打つ。

「貴方は関係ない」

「まあまあ、お互いよく知らないわけだし。判断が早いよ」

「でも、貴方からは、この女と同じにおいがする」

ミレーヌに指を指されたクリムエルヒルトは、意地の悪い笑みを浮かべる。

「心外ね。どうして亡者もどきと一緒にされないといけないの？」

「また、両手を失いたいの？ 姉さんも見張ってるから、いくら声を上げても逃がさないからね」

「残念。別に私は、貴方達ほど暇じゃないの。また今度の機会にね」

ユリアは既に、警戒するように扉の方に佇んでいた。できればそのまま出ていってくれないかと思ったが、下田と視線が合うと、また近くに戻ってきた。

「何か、ありましたか？」

「いや、別に」

「何なりと申し付けください」

「じゃあちよつと、離れた所で座ってて」

「わかりました」

ユリアがベッドの端に腰かけた所で、ミレーヌは洩々話し始めた。

「何というか、あー、彼とね、大事な話をしないといけないの。だけど、問題があつてね」

「あら、とつくに終わつてたそばかり。彼、情熱的に言つてたじゃない。愛してるって」

きつとクリームエルヒルトを睨みつけてから、耳にかかる髪を触つた。

ちとせは、目をきらきらさせている。

「もう、ほとんど解決してるじゃないですか。まだ、何か？」

「私は、そう思つてただけど。どうやら、意識のすれ違いがあるみたいで」

「具体的には？」

ミレーヌは少し恥ずかしそうに俯いた。

「私は、うん。そういう、感じなんだけど。ホークは、まだ、ええと、私のこと小さな子供だと思つてる節があつて」

「えー、全然違いますよ」

「そう思うでしょ。でも、彼は確かにあ、愛してるとは言つてくれたけど。多分それは、きつと、家族とか、親子みたいなもので」

「なるほど」

リリアーネがベッドの上で大きく伸びをした。

「つまり男女として見ているのか不安というわけだね。いや、全然わかんないけど。彼さ、本当は不能なんじゃない？ どうしたら、そういうことになるんだろう」

「多分、よくわからないだけ、なんだと思う。だから、どう伝えたらいいのか」

「簡単よ」

まるで些事だと言わんばかりに、クリムエルヒルトは余裕の笑みを漏らした。

「わからせてあげればいいじゃない。男なんて、欲にうったえかければすぐに変わるんだから」

「つまり？」

「今すぐに部屋へ行つて、行動しなさい。まずは…そうね、自分が先に服を脱いだら？ その方が興奮してくれると思うわ」

「いきなりそんな」

「時間はあまり残されていないからね。後悔のないようにすれば？」

そろそろ本当に、下田はここにいる意味が分からなくなっていた。しかし出ようにも、元々ここは彼の部屋だ。少し眠るつもりだったので、今更どこかへ用事があるわけでもない。それに、彼にそれを許さないような雰囲気があった。

ミレーヌは立ち上がってしばらくうろうろと考え事をしてから、早足で出ていった。しっかりとインベントに衣服をしまつてから。彼女は、ホークウッドと会う際の服装を決める段階から、悩んでいたようだ。

話が一区切りついでから、下田は発言をようやくした。

「僕、ちよつと休みたいんだけど」

「何を言っているのですか？」

隣の椅子に座っているヨルシカが、目を細めている。

尻尾が壁に当たり、それからくるくと丸まった。

「話があると言ったのは、アキヒロでしょう。どうしてそのような勝手な事をしようとするのです」

ちとせが眉を曲げ、今の言葉のおかしな所について追及しようとしたようだが、その前にクリムエルヒルトが声を出した。

魔女の目は、下田とヨルシカに向けられている。やや、きまわずそうだった。

「正直、どう話したらいいのか。ヨルシカ様…」

ヨルシカは、つまらなそうに鼻を鳴らす。

「どうでもいいです。貴方のことなど憶えていません」

「私は、その、ずっと愚かなことを。謝りたくて」

「侍女風情が、何かを変えられると思ったのですか？ それに、貴方は当時、ずっとあの女の背中を追いかけてばかりだった。心底どうでもいいです。謝る必要ありません」

「はい…。償いきれないのは、わかっています。もう何も言いません」
それから、クリムエルヒルトは下田に顔を向けた。直後、彼女はさらに自責の念を深めたのか、苦しそうに目を閉じる。そして、下田の手を持ち上げると、自らの額に当てた。

「前の、無礼をお許してください。まさか、奥様に縁がある子だとは。それに私のせいで、貴方は多くの苦しみを背負うことになりました。私は何も知らなかった。ただ、あの方の役に立つことばかりを…」

「僕も、ヨルシカと同意見です」

下田はゆっくりと彼女の手を解いた。

「謝られても、困ります。本当は、こうして面と向かって話したくもなかったくらいでした。貴方が今まで何をしてきたのか、わかっていますよね。僕は、忘れません」

ちとせもまた、厳しい目を向けていた。

クリムエルヒルトはさらに深く頭を下げる。

「わかっています。言い訳など、できません。貴方達の一人を殺したことです。エルドリツチの思惑に加担したこと。この命一つでは決してあがないきれませんが、どうか、貴方の手で」

少し前までなら、目の前の魔女の喉を裂いていたかもしれない。しかし、隣の気配が否定をしていた。おそらく彼女を殺せば、プリシラは悲しむだろう。

「嫌です。勝手に楽になろうとしないでください。生きて、行動で示せばいい。貴方の力も、この先の戦いで必要です。それでいいですか」

ぱつと顔を上げて、近づいてきた。下田の両手を包み込み、嬉しそ

うに笑みを向けてくる。

「ありがとうございます。私も、お役に立てるように全身全霊で頑張ります」

下田は、間近にあるロープの胸部分のふくらみが気になりはじめた。ともすれば、この中では一番かもしれない。段々とそういうこと考えるようになってるのが、自分の限界を示しているような気がした。

複数の視線が刺さってくる。それが彼の胃をさらに収縮させた。

クリムエルヒルトは当然、下田のそういう念を理解しているように、微笑みがややその性質を変えた。

「困っておられるのなら、解消できるかもしれませんか？」

「はい、終わり。話は以上。出て行って」

ちとせの声に追われながら、彼女はここに来た時よりも幾分か楽しそうに出ていった。ただ、下田の方は逆の気分だ。彼女が最後に少しかき回していったせいで、場の空気はさらに苦しくなっているように思えた。

ちとせはため息をつく、まだ出ていこうともしていない残りの女達をそれぞれ見てから、最後に下田を見据えてきた。口を開こうとする。

「本題に入りましたようか」

だが、直前でヨルシカに遮られた。それだけで、さらに重い雰囲気だ。漂い始める。リリアーネはただ面白がるだけで、何のフォローもしなかった。

「は？ ねえちよつと」

「できれば関係のない方々は出て行ってほしいのですが、仕方ありません。貴方はそれで構いませんか？」

下田は宙を眺めてから、頷いた。

「いいよ…」

「それでは、肩に。妙な真似をしようとしたら、殺しますから」「するわけないだろ」

指先を、ヨルシカの肩に触れさせる。彼女の方が高い位置にあるの

で、やや腕を上げなければいけなかった。だが、すぐにそんな面倒な気持ちには消えてなくなる。

今の段階で、ヨルシカに宿っている存在が、目の前に立っていた。プリシラはどう話したらいいのかわからないように、視線をさまよわせる。

『彰浩、ごめんなさい』

「うん、これでだいたいわかった」

『えつと?』

「ちゃんと、聞こえるってことだ。悪いのは、そつちじゃなかった。僕はずつと、現実から目を逸らしていたんだ」

『…仕方のないことだった』

あの、繰り返し初期、下田はプリシラとの会話が成立しなかった。思えば、あの時はもう、それなりに精神をおかしくしていたのだ。到底受け入れられないことを、感覚から排除するのも朝飯前だっただろう。

その声は、もちろん違っていた。だが、想起させる。無視することはできない。

下田は自分がどういう表情をしたらいいのか、久しぶりに迷っていた。

「貴方は、母さんなの?」

『…』

「違うなら、違うって言ってよ。覚悟はできてる。真実を知りたい」

プリシラは俯きながら、少しの間黙っていた。

次に顔を上げた時には、悲しそうに笑っている。

『夜泣きをやめたのは、一歳を過ぎた時』

下田は目をつぶる。

『初めて近くの公園に連れ出しても、彰浩はずつと砂場で何かを作っているだけだった。周りの子たちに馴染めないんじゃないかって最初は心配したけど、杞憂だった』

後半から、段々と震えが混じるようになる。

『好きな食べ物は、ロールキャベツ。嫌いな食べ物は、ピーマン。トマ

トもそうだったけど、私が工夫したサラダで、大丈夫になった。小学生になる時も、中学生になる時も、本当に、嬉しかったんだけど…。ちよつと、悲しくもあって』

鼻をすするような音がする。

『貴方が成長していく姿を、ミサが見られないのは、やっぱり、辛かった。もしかしたら彼女の幸せを奪ったんじゃないかって』

「でも…、約束、したんでしょ」

『ミサには、たくさん迷惑をかけたから。彼女の思いを無駄にはしたくなかった。それでも、結局、貴方にはとてつもない苦しみを』
「ほんとだよ」

下田は、眉間を手で押さえた。我慢ならないような息遣いが聞こえて、プリシラの体が覆いかぶさってくる。実際の感触はない。彼女はあくまでソウルだけの存在だった。だが、彼には感じる。体温があるのだと思える。懐かしい感覚がする。

「ずっと、会いたかった。何度も思ったんだ」

『ああ、彰浩…』

下へと、雫が落ちていく。視界が濡れて、抱いてくる彼女の腕さえもぼやけていくのが嫌だった。だがそれよりも、相手の声が近くで響いているのが大きな充足感を与えていた。感覚がないとしても、十分すぎるほどだった。

涙交じりの声で、訴えかける。

「死んでるって聞いた時は、ほんとに、消えてしまいたくなった。もう二度と、話ができないだって、そう、思ってた」

『ごめんね、ごめんね』

「僕も、色々酷いこと言って、ごめん」

『いいの。全部私が悪いから』

「でも、母さんは…」

『まだ、そう呼んでくれるの？ 私なんか』

ぼたぼたとこぼれ、ヨルシカの膝が濡れている。それでも彼女は、何も言っただけだった。横から、ちとせがハンカチを差し出してくる。今は照れくさく思うこともなく、受け取って涙をぬぐった。

「うん。わかるから。姿と声は違っても、母さんは、母さんだよ。忘れない」

「そろそろ、いいですか？」

しんみりとした空気を破って、ヨルシカが口を開いていた。彼女はプリシラの方を見ることはなく、下田を睨みつけている。

「十分でしょう。早く、アキヒロの方に移ってください。邪魔ですから」

『ヨルシカ』

かすれた声で名前を呼ばれると、彼女はすぐに身をよじった。プリシラの手が、空を切る。はつきりと拒絶されたことを理解したプリシラは、ただただ申し訳なさそうにしていた。

「従わないのなら…」

『そうね。私が、今更』

「消滅させます。今すぐに、出ていきなさい」

『でも、謝らせて』

涙の跡ががたくさん残っている顔を、ヨルシカに近づける。今度は、動かなかった。まるで逃げたら負けだと思っているかのように、ヨルシカはプリシラを直視していた。

『貴方を、独りにしてごめんなさい。何度も後悔していたわ。でも、無理だった。分かってほしいとは思わない。でも、私は本当に』

「一つだけ、教えてください」

プリシラの懺悔を断ち切り、ヨルシカは視線を鋭くした。だが、下田にはわかっている。彼女の瞳が揺れている。

「私は、生まれてきていい存在だったのですか？」

『…』

「大勢が、言っていました。私は、生まれるべきではなかった。本来なら、すぐに殺されてもおかしくなかった。誰からも、愛されていなかったのだと」

『ヨルシカ、違うわ…』

「何が違うんですか？」

その肩に触れている下田は、感覚した。力が入っている。目に見え

るほどではないが、わずかに震えている。顔を見ても、からかう気分にはなれなかった。下田が泣いた時、ヨルシカは何も言わなかったからだ。

「証明してくれる者は誰もいませんでした。親もいませんでした。すぐに私を、捨てましたからね。それでどう、自分を肯定すればいいのですか？ 貴方の都合などどうでもいい。今すぐに、消えなさい。二度と、視界に入るな」

「母さんに、手を出すな」

下田が止めると、ヨルシカは顔を歪ませた。

「ほら、プリシラ。よく見てください。貴方の子が頑張っています。今度は上手くいったみたいですね。失敗から学んだ。でも、どうせそのうち捨てるんでしょう？ そしてまた、別の子をより愛するようになる。素晴らしい母親ですね。まさに」

『事情があったの』

ここでずっと置物のようだった画家の少女が、歩いてくる。彼女もまたヨルシカの体に触れて、プリシラを認識し始めた。

「お母さんは、戻りたくても戻れなかった。黒竜に体を滅ぼされたせいで。だから…」

「まだ、あの男と子供をこさえていたようですね。満足ですか？ 子供達に庇われるのはさぞ、心地がいいことでしょう」

『違うわ。私は、本当に、貴方を愛してた。今も変わらずに』

「黙りなさい！」

吠える、と表現してもいいくらいの大きさだった。下田はそこで改めて、ヨルシカの口を認識する。小さく尖っている牙が、今やむき出しになっていた。

「たくさんです。聞きたくない。今更、どうしろと？ 私などに、構わないでください！ おぞましい、生まれるべきではなかった捨てられた存在に、情けはいらない。吐き気がします。殺してくれば、良かった。その方がよっぽど…」

「そんなこと、言うなよ」

下田は手を伸ばし、ヨルシカの口を塞いでいた。涙の線が潰され

て、すぐに掌の上を伝い始める。彼女は首を後ろへと動かそうとしたようだったが、もはや壁際まで下がっていることに気がついたらしい。濡れている目で、下田を捉えた。

「僕の記憶を見たなら、わかってるはずだ。母さんは、プリシラはずっと、争うことを諫めていた。僕がいくら憎しみを滾らせようと、絶対に、お前との殺し合いを望まなかった。長い間、側にいたからよくわかる。彼女には後悔と、不安の混ざった愛情しかなかった。わかるだろ」

ヨルシカの手が、上がり始める。

「少なくとも僕は、思ってたなんかいない。お前は、頑張ったんだろ。途中で逃げることもできた。それでも、周りの圧力に屈しきることはなく、課せられたものを全うしようとしたんだ。戦い続けたんだ」

肌が大きく鳴る勢いで、手が払いのけられた。ヨルシカはかなり力を入れたらしい、下田は自分の手首がおかしな方向に曲がっていることに遅れて気がついた。骨が完全に折れている。

空気が、今までとは違う緊張で張り詰める。

ヨルシカは挑戦的に笑った。

「嘘が下手ですね。私のこれまでを、大仰に罵っていたのは誰ですか？ 危うく、忘れかけるところでした。今ここで：始めてもいいのですよ？」

下田は奇跡を発動させる。我慢する必要はなかった。ここにきてより深く、自分の変化を実感していた。

彼が微笑むと、ヨルシカは虚を突かれたように瞬きを細かくした。

「お前、自分の言葉を忘れたのか？ 僕はもう、できない。お前を殺せない。家族にどうして、殺意を抱けるっていうんだ」

「でまかせを…」

「決めたんだ。グウインにも宣言した。共存を目指す。お前も例外じゃない。だけど、許したわけじゃないからな。お前に、楽な逃げ道なんて用意してやらない。ずっと、僕が生きる限り生き続けるんだ。見張っている。僕が死ぬ時、その前にお前を殺してやる。それまで、待ってる」

誰かの息遣いが聞こえた。

下田はそこで、何やら妙な感じを覚える。実際、彼もまた冷静ではなくなっていた。自分がした発言を振り返る間もなく、全員が注目してきているのを今更強く感じた。

たん、たん、たん。

叩くような音が聞こえる。下田の前からだった。

ヨルシカは身じろぎし、手を動かして抑えようとしているが、結局止まらない。

たん、と尻尾が壁を叩き続ける。しばらく揺らされている。早くなったり遅くなったり、そのペースは一定ではなかった。不安定ではあるのだが、ちよつとした法則性はあった。ヨルシカが歯を食いしばる度、急に早くなる。

「この、」

彼女の片手に、青白い光が宿った。何をしようとしているのか理解した下田は、すぐに反詠唱を行う。それでフアランの速剣は跡形もなく消えていった。尻尾へ到達する前に。

「何してるんだ、やめろ！」

リリアーネが、吹き出した。それだけでは止まらず、腹を抱えて笑い始める。下田は一瞬、本気で彼女のことをわからなくなった。やはり狂っている部分もあるのだろうか。先ほど共存を口にしたが、早くも自信がなくなってきた。

下田はさらに何かをしようとするヨルシカの手首をつかんだ。自分側に引き寄せて、言う。

「癖になってるみたいだけどな、良くないぞ。僕が見てるうちは、尻尾を傷つけるな。そこまで、気にすることはない」

言いながら、違和感が大きくなってきていた。リリアーネが異常だと思っていたが、何か違うような気がする。画家の少女はかすかに苦笑いをして、ベッドに戻っている。ちとせは、どこか警戒するような瞳を、ヨルシカにじとりと向けている。プリシラは、困ったように宙を見つめていた。

「どうせ」

ヨルシカは振り向くと、鼻を鳴らした。

「貴方も、これを醜いと思ってるんでしょう？ わかっていました。貴方のお世辞には、うんざりしていましたから」

下田はやや話の流れがおかしいと思ったが、とにかく首を振った。「いや、そんなことはない。前に、言ったとおりだ。本心だった。綺麗、だとは思ってる。普通の人間には出せないような何かがある」
たん、たん。

同時に、リリアーネのこらえるような笑いが重なっていた。

何かがまずい感じがして、彼はすぐに付け加えた。

「中身の酷さを知ったら、尚更だよ。ほんと、お前ってちぐはぐだよな」

「貴方は、どちらも褒められたものではありませんね」

ヨルシカは深く息を吐き出した。それまで逸らしていた目を、下田に合わせる。その光には、今までの揺れが完全になくなっていた。真つすぐ、向かってきている。

『…私のことは、いくら嫌ってもいい』

プリシラが、静かに言う。

『でも、他の子達とは、仲良くしてほしい。それだけが望み』

「指示には従いません」

『ええ、そうね。心配はしてないわ。もう大丈夫』

そう言って、最後に下田と画家の少女に手を触れた後、プリシラは消えていった。結局移動はしていない。まだ、ヨルシカに宿っているままだ。それでも、文句は出なかった。ヨルシカは下田を見つめている。

何だか気まずい気分になって、彼は咳払いをした。一応これで、当面の用事は片付いた。休まなければ、後から始まる色々な事についていけなくなるだろう。

椅子から立ち上がろうとしたところで、腕を掴まれた。

「待ちなさい」

ヨルシカの顔は、固いままだった。だが、変化しているような気がする。ただ具体的にどのようなものはわからなかった。彼女の長

い睫毛が揺れているように見える。

「あは、く…、ヨルシカ様ったらかーわい〜」

リリアーネは言うと同時に腕をぶれさせていた。彼女の短剣と、飛ばされたソウルの矢が衝突する。矢は軌道をずらされ、壁に穴が開いた。

下田は状況を理解できないまま、ヨルシカに向き直る。

「本気ですか?」

「なにが」

「先ほど言ったことは、本心なのかと聞いているのです。ならば、証明してください」

「はあ?」

「触りなさい」

いつもよりも、大きく目を開けている。

「私のここに、触れてみなさい。綺麗だと思っっているのなら、平気でしよう?」

「え、でも」

「無理なら、今までの貴方は全て嘘だったことになります。愚かなままにいるのですか?」

むしろ自分の方が、おかしくなっているのかと思った。あまり論理が理解できなかった。一体彼女はどのような考えで尻尾をかざしているのか、理解に苦しむ。白い尻尾の先は、まだ上下に揺れていた。

「ちよつと」

ちとせが、腕を組みながら言ってきた。

「意味わかんないんだけど。もう、いいんでしょ? アキはちゃんとお母さんとも話せたし、あんたの役目は終わったの」

ヨルシカは、ちとせに顔すら向けなかった。

「アキヒロ、そうなのですか? 私は、これで終わり?」

「お前さ、さつきから何言ってるんだ?」

「気になってただけだ」

ちとせは立ち上がり、ヨルシカと下田の間に割り込んできた。そしてヨルシカの手を強引に下田から離す。

「それ、どういうわけ？」

ヨルシカもまた、ちとせの睨みに同じものを返した。

「はい？」

「だから、名前。なんで呼び捨てになってるの？ いつの間に」

「言っていたではありませんか。耳が腐っているんですね」

下田の腕を、掴み直す。

「この男は、私を家族と言いました。上の名でいつまでもというわけには、いかないでしょう」

なぜかちとせは、下田に顔を近づけてきた。

「やっぱり、おかしい。ねえ、あっちで何があったの？ 何かあったんでしょ」

「貴方には、関係ありません」

「またそういう話？ ならば、はっきり言ったらどう？」

ヨルシカは、眉をひそめた。

「つまり、アキのことどう思ってるのかってこと。最初から、わかってたんだから。今ので確信した」

「一人で勝手に話を進めないでください。意味不明です」

「そう？ 本当にわからない？ ごまかしても、無駄だから。だってあんた、みつともなく喜んでるんだもん。そんなに嬉しかったんだ」

人差し指を、ヨルシカの尻尾に向けた。

「犬みたいに、ぶんぶんしちやってさ。わかりやすいよ？ 感情がそこにはちちゃんと表れてるんだね」

「…口を、裂いて」

「ほら、今にもまた動きそう。竜の尻尾も、好きな男の前では形無しだね」

「醜く、縫い直しましょうか？」

「は、はい。終わり終わり」

リリアーネが手を叩くと同時に、ユリアが画家の少女を持ち上げた。なぜか少女だけが部屋の外に連れ出されていく。ユリアも少し扉から出たが、少女に何かを言い含めた後はすぐに戻ってきた。がちやりと、扉が閉められる。

「じゃあ、場も整ってきたようだし、前の続きをしようか」
「待て」

ここにきて、さすがに下田も気付いていた。いつまでも、受け身でいるというわけではない。度を超えて鈍感でいられるほど、年月を重ねていないわけでもなかった。

下田はしつかりと、一人の女性に体を向ける。本当は、外野がいる状態で話したくはなかった。だが、仕方がない。

「色々言われても、困るんだ。僕は、心に決めている」

正面にいるちとせは、両手を膝の上に置いた。

「ちとせが、好きなんだ。ずっと。だから、リリアーネの考えには従わない」

先ほどまで厳しい顔だったちとせは、息が詰まったような表情になった。それから強がるように口をとんがらせた後、すぐに緩める。

「そう。じゃ、あたし達、両思いつてわけ」

「でも、どうなんだろう」

下田はそこですまなそうにした。

「ちとせはさ、きつと、同情の部分もあるかもしれない。だから、その、もつと冷静に考えても…」

直後には、一人分の体重を膝で感じていた。

抱き着いてきたちとせは、素早く顔を動かすと、下田の口をついばむ。そんな浅い接吻をして、真っ赤になりながら鼻と鼻を合わせてきた。

「これで、わかった？ 安心できるっ？」

「うん、うん…」

「もつとするっ？」

「そうしたい、かも」

「はーい、中断ね」

リリアーネが軽々とちとせを抱え上げ、ベッドに戻す。その衝撃でぎしぎしと土台部分が軋んだ。ちとせは少し体を跳ねさせて、不服そうにリリアーネを見上げる。

「別に、いいんだけどさ。やる前に訂正の必要があるかなって」

「や…」

「チトセも、わかってるでしょ？ シモダは、凄い男なんだよ。そうだよね？ 一人の女性だけを娶って満足できるような器じゃない」

「あんたも、頭おかしいんじゃないの？」

リリアーネは肩をすくめた。

「事実に基づいた提案だよ。薄々気づいてるよね？ チトセ、君だけで彼を支え切れると思う？ 彼の苦しみ全てを、癒してあげることができる？」

「頑張るから」

「でもさ、見たでしょ。シモダって、結構ねじ曲がってるところもあるからさ」

「それは、確かにそうだけど」

「あれをこうしてとか、できる？ 私でもちよつと引いたくらいだけ」

ちとせの顔が熱せられたようになる。

「後ろから云々とか…」

「口に、出さないで」

「妄想の中だからいいけど、全部チトセが相手役だったよね。できるの？ わりと厳しいよな」

途中から、下田は耳を塞いだ。無意識に避けていたことかもしれない。自分の記憶を、彼女達にはほとんど全て知られてしまっているのだ。考えたことも。つまり、何もかもがさらけ出されたということだった。下を向きながら、現実逃避をする。自分の性癖の数々が声に出されるのを耐え忍ぶ。

両腕を、誰かが引つ張ってきた。ユリアは下田の背後に回り、彼の手を下の方にずらしていく。彼女は真面目な顔をしているが、やっていることはただのいじめだった。

「もう言うな！」

「え、無理？ もう耐えられないの？ やっぱりチトセだけじゃ無理ってことじゃん。私は、できるけどね。満足させられる自信はある」

「そういう、問題じゃない。さっきの見たでしよ。私とアキは、そういうことだから」

「もちろん尊重はするよ。初めても譲るから。むしろそれが一番だと思ってる。まぐわいに対してシモダが抵抗を感じなくなったら、私と姉さんも受け入れてくれるだろうし」

ちとせが投げた椅子を、軽々とリリアーネは受け止めた。

「まだ、わかってないの？ あんた達のこと、別にアキはどうとも思っていないの！ でも、あたしとだけなら、その、キスとかもしたし。つまり、格が違うってわけ」

どうやらこの部屋の中で一番冷静ではないのは、ちとせのようだった。彼女はおそらく自分の発言を後で振り返った時、あまり良くない精神状態に陥るだろう。聞いている下田も、段々と脱出を図りたくなってきた。

少し前からつまらなそうに聞き役に回っていたヨルシカが、ここで立ち上がった。はずみで尻尾が椅子へとぶつかり、倒していく。

「私も、しました」

「はっ」

「口吸いをです。かなり長い時間だったと思います。ですので、チトセの言っていることは荒唐無稽な嘘です」

ちとせの視線を、下田は何とか無視しようとした。

「そんなくだらない嘘で…」

「あ、そういうことなら、はい」

リリアーネが狙っていたかのように、手を挙げた。ちとせとヨルシカを挑発するように胸を張る。そして、己の体をゆつくりと手でなぞっていった。

「何なの？」

「接吻くらいでどうこう言ってるけど、私だけだよ？ シモダに裸を見せたの。記憶の中でちゃんと見たよ。しっかり抱きしめてくれた。こう、私の胸の間に顔をうずめてさ」

下田は天井を仰いだ後、扉の前に移動していた。部屋の外に出た彼は、すぐに走り始める。中からはまだちとせの大きな声が響いてい

た。数瞬後には、全員が下田が瞬間移動したことに気がつくだろう。「どうしたの？」

どこかへ向かっていたらしい、画家の少女が足を止めて振り返っていた。そこに追いつくと、彼は深呼吸をする。

「避難してきた」

再び歩き始めると、少女も横に並ぶ。

「ありがとう」

「ん？」

「お母さんと、話をする機会をくれて。必要なことだったから」

「いいよ。それよりも、ごめん」

「？」

頭を下げると、少女は一瞬だけ不思議そうにした。

「ゲールさんを、助けられなかった。もっと、良い方法があったかもしれない」

「お爺ちゃんは、すごく喜んでた」

少女は前を見続けている。

「わたしをちゃんと守ってくれる人が現れたんだって、安心してた。だから、いいの。お爺ちゃんは、満足していた、と思う。兄さんは気にしないで」

「誓うよ」

強がる素振りすら見せない彼女に向かって、下田は宣言する。

「君を守る。これからの戦いで、どんなことがあっても」

「…ありがとう」

一番最初に下田の繰り返しを理解してくれた相手は、彼の指の先を握ってきた。彼もまたしっかりとそれに合わせて、固く握りしめる。

「まだ、するべきことはある」

少女は少しだけ気が進まない様子だった。

「うん」

「わかっていると思うけど、まだ、足りない。地球への帰還には、まだ必要なものがある。地球の人達全員の、協力がある。そしてそのためには、大きな問題が残っている」

「そうだね」

そろそろだと、下田も考えていた。あまり、いい方向には進まないだろう。だが、事実をいつまでも暴かないままではできない。

裏切りはまだ、終わっていない。

「とりあえず、皆に集まってもらおう。広場でいいかな」

早速全員を呼びに行こうと歩きかけた所で、下田は止まらざるおえなくなった。なぜなら、少女はまだ手を離していなかったからだ。

「君も行くの?」

「ううん」

少女はあくまで、静かな瞳のままだった。

下田は信じられないという顔をしてから、俯いた。

「じゃあ、ええと、離してくれない?」

「だめ」

後ろの方の扉が、勢いよく開かれる。前は壊していたが、さすがに多少は気を遣ったのだろう。だが、彼女達は穏やかではないようだった。特に先頭の茶髪の女性が。

少女は目を細める。表情はほとんど変わっていないが、少しは感じ取れるようになっていた。今彼女は間違いなく、笑っている。

「駄目かな」

「逃げちゃだめ。わたしのお父さんはそれでお母さんに嫌われてる。男の人は、ちゃんとしなさいといけないと思う。かいしよう? を持たないと」

「この場合、関係あるんだろうか」

「がんばって」

少女の手を無理やり振り払うわけにもいかず、下田は頭をかいて振り返った。

どうちとせに説明をすればいいか、頭を捻りながら。

「バックスタブ」

ダークレイスの背後に回り、白い刃で突き刺した。傷口がわずかに凍り、どす黒い血が流れ出してくる。それを浴びないようすぐに離れてから、頭を蹴り飛ばした。

何度目かの遭遇戦を終えて、貴樹は火守女と手をつなぎ直す。彼女の方も、あまり不安がつてはいないようだった。事実この周辺に彼を脅かすような存在はいない。

「また、つまらないものを斬ってしまった……」

イルシールの直剣を、鞘に納める。今回の旅で採用した武器だ。ヨルシカから強奪した。その性能は申し分なく、既にそれなりの数を斬り伏せているが、刃こぼれする気配もなかった。

貴樹が両手を広げると、火守女は少しだけ申し訳なさそうにしながら、しがみついてくる。彼女の腰にしっかりと手を回して、移動を始めた。

既に、深みの聖堂が視界に入っている。もし、不死街から向かっていたらかなり時間がかかっていた。だが、篝火はフアランの城塞側にも設置されている。そちらから向かえば、大幅な時間の節約になった。

向かってくる亡者などは全て無視し、聖堂内に入る。それなりに懐かしい気分だった。前は、彼女の瞳を求めていた。今は、別の目的がある。残り物进行处理するようなものだが。

巨人は、相変わらず鎖でつながれていた。彼らを起こさないようにしながら、上に向かう。主教の部屋に行くつもりはない。その集団は、おそらく屋根裏を拠点としているから。

天井の部分を蹴りこわし、火守女が怪我しないよう気をつけて中へと入り込んだ。

すぐに攻撃しようとして来なかったのは、意外だった。

「何の用だ」

五本指の一人、レオナールが武器を抜いている。その横のヘイゼルもまた、魔術を構えていた。

貴樹は鼻で笑う。相手の方もわかっているはずだ。何の意味もない行為だということに。

「安心してください。戦うつもりはありません。貴方達の、誓約主に用があるだけです」

カークは既に横に退いていた。棘の生えた兜からは表情をうかがい知れないが、彼が一番自分達の立場を理解しているらしい。自らの剣に触れようとしてもしていなかった。

屋根裏の空間は、それなりに広い。席もかなりの数が横並びになっていて、集会でも開かれていそうな場所だった。

それらを過ぎて、さらに奥。この部屋にはややそぐわない。大仰な柵が並ぶ。その真ん中が開いていて、その向こう側に、大きなベッドが置かれていた。

彼女は、その上に座っている。

生まれ変わりの母、ロザリア。

その顔は被り物に隠れてよくわからない。だが、その華麗な装飾が施された衣装や、白く照る肌が、どこか気品を感じさせた。ただそういった印象は下半身を見るとすぐに失われていく。規格外の大きさの白い蛆虫のようなものが、彼女の足の代わりとなっていた。まるで何かの代償であるかのように。

火守女の手を握りながら、その前に立った。

「一応、報告をと思いましたが」

彼女の腕を上げてみせた。

「貴方の娘が生み出した素晴らしい存在と、婚姻を結びました。その感動、察するに余りありません。どうぞ、誇りに思っただけでも構いません」

相手は、指を少し動かしたただけだった。

貴樹は笑みを深くした。

ゲルトロードの母、ロスリックの王女は、娘の惨状を苦にして出ていったとされている。だが、どうやら彼女なりに娘を戻す方法を探そ

うとはしていたらしい。不死へとも繋がる、転生の儀を求めたのだ。その結果は、あまり良くなかったらしいが。

「何よりです。さて、挨拶は終わりにして、本題に入ります。僕は、貴方の協力を望んでいる。その力、生まれ変わりを利用したい」

レオナール達は、黙って眺めている。

「僕に、術の素養を授けてほしいんです。中にいた邪魔な存在が去っても、残念ながら、魔術等を使うことができません。もったいないと、思っています。僕のような頭脳の持ち主が、術を使えばどれだけの可能性が開けるか。わくわくしてくるでしょう?」

「主は、不可能だと言っている」

レオナールが代弁をした。

「で?」

「お前の中にある、ソウルが邪魔なのだ。我らに全て捧げるのなら、そうすることも考えると」

「なるほど」

「もう一つ条件がある」

レオナールの剣先と、ロザリアの指が同じ対象を示した。

「化物を渡せ。主はその命を望んでおられる」

「あ、そうだ。僕ももう一つお願いがあつたんですよ」

既に頭の中で結論は出ているが、あえて先延ばしにした。ほんのわずかだが。

「彼女、僕の妻ですが、普通の人間にしてほしい。天使の力をなかったことにすれば、彼女は本当に唯一無二になる。今でも十分、愛らしいですが」

火守女は、ロザリアに固定されていた視線を、貴樹に向け直した。

同時にロザリアの指が、軽く曲げられる。

青白い光が、目の端に入った。

「貴様は、面倒な存在だった」

貴樹は欠伸をする。

レオナールが、刺突剣を構えていた。ヘイゼルはつるはしを肩に抱える。カークは含むような笑いを漏らしてから、足に力を込め始め

た。

「どちらも生かしては帰さないとの命令だ。おぞましい存在を、滅し
てくれる」

こういう状況でなければ、小躍りしている所だった。ようやく自分の頭の中だけのものだったあらゆる剣技を、存分に試すことができるのだ。

それに、前から決めていたことだった。火守女を苦しめた、ロスリックの血筋は絶対に絶やすのだと。逃げて半分怪物になり下がった王女も、もちろん例外ではない。

火守女はわずかに切なそうな目をしてから、その場にしゃがみ込んだ。

篝火への移動中、彼女はずっと黙っていた。

その心情を、細かくは知ることはできない。なるべく配慮したのだが、結局彼女の顔の一部に血がこびりついてしまった。舐めてぬぐい取りたかったが、そういう雰囲気でもないことはさすがに察していた。

城塞の篝火に到着すると、火守女は身じろぎした。ゆっくり降ろされた彼女は、静かに貴樹を見上げてくる。

「これで、良かったのでしょうか」

「俺は、そう思ってるけど」

「彼らに、はつきりと罪があつたわけでは…」

貴樹は思いきって、彼女を抱きしめた。

「君の幸せを脅かしたというだけで、処刑されるべきだったんだよ。君が、悩む必要はないんだ。俺が背負うから。ただ辛くなったら、慰

めてほしい。俺達は支え合うべきだから」

もそもぞと顔を動かしてから、彼女は貴樹の肩に頬をつける。

「できれば、救われてほしかったんです。ゲルトロードも」

「彼らが憎むべきは、歴史だった。大きな仕組みだったんだ。君という存在を蔑ろにした時点で、こうなることは決まっていた。自業自得だよ」

「タカキ様」

彼女は腕を伸ばして、少し体を離れた。彼女の手が両肩を掴み、少しだけ背伸びをしてくる。

「支え合うべきというのなら、私もこれから役に立たないといけません」

「ん？」

「貴方は、私の力を、あまり良いものとは思っていないようですが。これからの戦いで、きつと、使うべき時が来るはず」

「いや、いいんだ」

貴樹は火守女の頬を撫でる。

「あれは、あんまり頼っちゃいけないと思う。大丈夫だよ。そんなに心配しなくても、頼もしい奴らがたくさんいる。勝てるから」

そう言いきっても、彼女の顔は晴れなかった。

その不安を取り除くように、微笑んでみせる。

「じゃあ、一個だけ。俺のためにしてほしいことがある」

「はい」

「全部終わったら、君を抱く」

彼女は言葉を聞き終わってから、目を伏せた。

「それは…」

「意味は、わかるよね」

「本当に、私でいいのか」

「君じゃなきゃ嫌だ。駄目なんだ」

既に想像してしまっている。それだけでもう、卒倒してしまいそうだった。だが、再三彼女の前で情けない姿をさらすわけにもいかない。

「駄目かい？」

何か考え事をしているようだったが、やがて再び視線を上げてきた。その瞳は、いつもよりも輝いているような気がする。

「そう望んでおられるのなら」

「うーん。弱いな。いいかい、君自身は、どう思ってる？」

「私……」

それから彼女は、控えめに口を緩めた。しっかりと、視線を合わせてくる。

「そうしたい、と思っっています。貴方をお慕い申し上げますから……、んむっ」

頭の中で小爆発が起こり、理性が働く前に彼女の口を奪っていた。相手は最初固まっていたが、すぐに力を抜いていく。舌の先が触れあつて、お互いの体温を交換していた。ぐるぐると回るような心地がある。今なら、姉であってもハグできるような気概でいた。

彼女がこちら側に寄りかかってくる。

が、すぐに驚いたような声を漏らした。それはおそらく、あまりに抵抗がなかったからだろう。彼女を上にして、二人はそのまま地面に倒れた。

口を離れた火守女は、慌てて彼の顔を確認する。

「タカキ様？」

貴樹はだらしなく涙を流しながら、気絶していた。

彼にとって本当の天敵は、火守女なのかもしれない。

◆

腹の部分を確認すると、確かに変化を実感できた。傷は残っている。狼の血を入れられたとき、派手に裂かれたのだ。だが、そこから広がるようになっていた蝕みは、綺麗に除去されている。

ベッドの縁に腰かけながら、ホークウッドは振り返っていた。

全ては、ミレーヌのおかげだ。彼女がいなければ、とつくに死んでいただろう。いや、もつと悪い結末になっていたかもしれない。ただひたすら使命から逃げ続けて、生きながらえるだけの存在に成り下がっていた。

だから、彼女の幸せを第一に考えるべきなのはわかっていた。

戻ってきたミレーヌは困惑しきっている。

「見間違えるはずありません」

膝をつき、彼女へ完璧な礼をしている男は、今にも彼女の手へ口づけをしそうだった。はつきり言って、ホークウッドでも見とれそうなほどの顔だ。しかも、その地位、実力も伝説になっているとききている。貴樹達が交渉して同盟のような感じになったとは聞いていたが、それで正解だと今改めて思った。争うことになっていたらと思うと、ぞつとする。

アルトリウスは、ミレーヌをじつと見ていた。大事なものに対する情に溢れた視線だ。

「だから、その、よくわかりません」

「姫君。どれだけ探したことか。私の無能をお許してください。貴方をこの手でお救いすることができなかつた」

人違いなのではないか、と指摘することもできた。だが、それすらもはばかられる空気だ。その一部を担っているのが、部屋の隅で腕を組んでいる女騎士の存在だった。

もし今立ち上がったら、成すすべなく膝から崩れ落ちてしまうかも

しれない。それだけ、アルトリウスと、その女性、キアランが発する威風は凄いものだった。一目で理解できる。彼らはまさに、神のような騎士達だ。

「勘違いです。私は、そんな大それた存在ではありません」

言葉の合間で助けの目を向けてくるが、勘弁してほしかった。どうしろというのだろうか。自分達の偉大なる祖先を相手に、強気で出れるはずがない。

「ですが、そのお顔を、間違えるはずがございません」

「違うって、言ってるでしょう。私は、そのウーラシルとか何とかの国とは関係ありません。私は、アメリカで生まれて、色々あって、この人に助けってもらったんです」

ミレーヌがはつきりとホークウッドを指差すと、少しだけアルトリウスは目を向けてきた。鋭い感情は含まれていないはずなのに、たじろぐ。

「この男が、何かをしたようなら…」

「ふざけないで」

ホークウッドとは違い、彼女はあまり臆していないようだった。きつとアルトリウスを睨みつけて、握ってくる手を強く振り払う。

「彼を、侮辱したら許さない。どう思ってるのか知らないけど、貴方なんて知らない。一度も会ったことなんてない」

「……」

しばらく、ホークウッドにとってはひりひりするような静寂が続いた後、黙っていたキアランが前に出てきた。

「君らしくもない。冷静になるんだな。よく見ろ。あの方とは似ても似つかない。顔の造作だけでは、決して成ることはできない。彼らに、あまり迷惑をかけない方がいい」

と、諫めている割には、ミレーヌへの感情はどこか鋭いようだった。彼女の方も敏感に察知しているのか、負けじと相対している。

さすがに自分も何かを言わなければならないと思いついたとき、アルトリウスが立ち上がった。彼はおいていた兜を身に着けると、戸口の方へ体を向ける。扉の前で立ち止まると、静かに言ってきた。

「邪魔をした。どうやら本当に間違いだっただようだ。すまない」

彼に伴って、キアランも出ていく。ホークウッドは恐る恐るそれについていき、彼らが洞穴の奥へと消えていくまで見ていた。それから、ほっと息をつく。

ミレーヌが憤慨したように鼻息を荒くした。

「何なの。まるで私に気品がないみたい」

「すまん。助けてやれなくて」

ホークウッドが謝ると、彼女は何かを思い出したかのように目を揺らした。手を組み合わせずには離し、足を踏み出そうかと迷っているような感じだ。

「ううん。いいの。災害みたいなものって思うことにする。それよりも、体は大丈夫？」

「ああ。おかげさまで」

隣に、腰を下ろしてくる。鎧を脱いだ彼女は、どこか懐かしさを感じさせた。淡い緑色のひとつなぎの女性服。彼女が言うには、ワンピースと言らしい。印象としては、再会した時のミレーヌを思い出させた。焼かれる苦しみから目覚めて、最初にはつきりと視認したものの。

「よかった。もし治らなかつたら、あの狼を斬ってたわ」

「やめてくれ。あれは、シフィオールスどころの話じゃないぞ」

「大きかったね」

「確かに」

数秒ほど、沈黙が続いた。足をぱたぱたとさせて、彼女は前を向いていた。その横顔を見ていたホークウッドは無意識に声を漏らす。

「何だか…」

「うん？」

「あ、いや。よくわからない」

「変なの」

「気が、抜けてるのかもな。これからだつていうのに。皆準備をしている。だが俺は、腑抜けになっちまってるようだ。行動する気が起きない」

「いいんじゃないの？ ホークはさ、ずっと頑張ってきたんだから。少しくらい、休んでもいいと思う」

言うと同時に、彼女もこちらを向いてきた。その顔はやや固い気もする。

「ねえ」

「どうした？」

「時間はあんまりないけど、しなきゃいけないことはあると思う」

「俺が協力できるなら、嬉しい限りだ。何でも言ってくれ」

「ほんと？」

一瞬だけ、彼女の瞳は子供の頃のような輝きを含んだ。それをじつと眺めていると、いつの間にか視界における彼女の部分が大きくなってきている。

「ホークは…」

「ミレーヌ？」

「ホークは、どう、思ってる？」

「何が？」

「私のこと。私は、好きだって思ってる」

「俺もだよ」

ホークウッドはほとんど、彼女の肩を叩いた。

「家族みたいなもんだ。それはずっと変わらねえ」

「家族かあ」

「おこがましいかもしれないが、娘みたいに思ってる。そうだな。休んでばかりもいられない。先の戦いで、ちゃんとお前を守るようにしないと」

頬に、吐息がかかった。

目の前を、金の髪が通り過ぎていく。わずかな弾力のある音と共に、肌に柔らかい感触がした。

「ちよつとちくちくしてる。髭また伸びたね」

「ミレーヌ…？」

彼女は、かなり恥ずかしげにしていた。耳の方まで赤い色が広がってしまっている。その紅潮を認識して、ホークウッドもまた腰が浮き

上がるような心地を覚えた。

「私の好きっていうのは、こういう好きなんだけど。どう思う?」

「ああ……あ?」

ワンピースの裾に手をかけている。その指を見る。どこか現実感がなかった。彼女は少し呼吸を乱した後、全身を密着させてくる。ホークウッドがその勢いで後ろへと倒れていかなかったのは、まだ思考が停止していない証だった。

「と、止まらないつもりだけど。抵抗するならしてよ」

「いや、ちよつと、待て。わけが…」

「知らないんですよ? 私もないけどさ、頑張つて、成功させるから」
彼女は首筋に唇を当ててきた後、耳元に寄せてきた。

「お願いがあるの。できるつて信じてる」

その声には、いつもとは違う何かがあった。切羽詰まっているような、溶けているような。とにかくそれは正常ではないのだとわかった。

だが、ホークウッドはその暖かさに委ねかけていた。彼女の鼓動と体温は、たとえあともう一回火に捧げられなければいけなかったとしても、その苦しみを代償に味わいたいくらいのものだった。そんな感情に自分でも戸惑う。また、彼女に変えられてしまっているのだと実感した。

「私達で一緒に、こここの皆を殺しましょう?」

艶やかな声の振動が、鼓膜を撫でた。

70. 戦争準備

ホークウツドは、辛うじて冷静さを失わずにすんだ。一致している。声自体はミレーヌと同じだが、その雰囲気は違っていた。色を含んでいるようでいて、伝わってくる感情には冷たさしかない。鳥肌が立つような声だった。

おまけに方向からして、ミレーヌの口から発せられたものではないことは明白だった。

すぐに距離を取って、壁に立てかけてあるファランの大剣を抜く。

「まあ、つれないのね。それとも好みではないのかしら?」

「ミレーヌ、離れろ!」

彼女の横から、手が生えていた。真っ白な手だ。決して戦いには向かない体をしていると、それだけでもわかる。だが、なぜかとても危険な気がしていた。

ミレーヌが驚いたようにベッドへと寄っても、その手は宙に浮かんだままだ。口までが出現しているわけではないのに、声は相変わらずはつきりと聞こえてくる。

「ホーク、そんな顔をしないでください。貴方にそういう感情を向けられると、落ち込んでしまいます。もつと穏やかな顔をお願いします」

ミレーヌの判断は、ホークウツドよりも早かった。彼女はすぐに手を伸ばす。何度か見たことのある予備動作だ。インベントリを使う動作。そして何も無い所から、自分の武器を取り出すのだ。

だが、彼女はすぐに妙な顔をした。

引つ張り出されたのは、大剣ではない。彼女の腕に絡みつくようにして、女性の手、そして腕、肩が出てくる。ミレーヌが異変に気付いて離れた時には、その全身が露わになっていた。

「ああ…、ここは本当に眩しいですね。目が、焼かれてしまいそう」

先ほど感じたものよりもずっと強い感情が、ホークウツドを少しの間支配した。あまりに、似ているのだ。肩を超え背中を流れる綺麗な金髪、こちらへと向けられる穏やかな微笑み。何もかもが、火継ぎか

ら解放された時、初めて会ったミレーヌに酷似していた。

だが、あくまで似ているだけだ。同じではないと、すぐに感じた。それは相手の黒いドレスのせいでも、温度の無い表情のせいでもない。もっと根本的な何かが、食い違っているようだった。本能が、女を忌避している。

「何なの…」

ミレーヌが刃を向けるが、その先は震えている。彼女の衝撃は想像もつかない。

女はドレスの裾を掴むと、丁寧なお辞儀をした。

「改めてこの出会いに感謝を。私は、偉大なる主に仕える者。ウーラシールと、呼んでくださいまし。姫君でもよろしい」

ホークウッドは、警戒を一気に引き上げた。それは、先ほどまでここにいたアルトリウスの話で出てきた名だ。国の名前のはずだった。さらに、その言葉を別の者から聞いたことがある。

下田が漏らしていた名を、確かに憶えていた。あの時はミレーヌに向かつて穏やかではない態度を取っていたので、印象に残っている。彼の説明にもあつたはずだ。深淵の勢力には、女がいると。金の髪の女が。

今すぐにもここから出て、貴樹達を呼びに行こうかと思った。しかし一方で相手の狙いがまだわからない以上、余計な行動をしない方がいいという考えもある。

ウーラシールは、にこにこ言葉を続けた。

「ご安心ください。参上したのは、重要な話があるからです。決して貴方達に害をなそうとしていないわけではありません」

「信用できないわ」

ミレーヌがさらに視線を鋭くする。

「まずどうやって来たのか、教えなさい。この祭祀場に、深淵の侵入を許す隙があるはずがない。貴方が、ただの幻で、私達をよくないことに巻き込もうとしていることも考えられる」

言われた瞬間、ウーラシールは無表情になった。正確には、被っていた皮をはがしたという方が正しいだろう。その無機質な目を向け

られたミレーヌは、一步後ずさった。

「姿形だけではなく、その思考も、まがいものにふさわしい愚鈍さですね」

「なに？」

「穴は、あります。私の目の前に立っているではありませんか」

相手が示しているのは、間違いなくミレーヌのことだった。

彼女は当然、冗談でも聞いたような顔になる。

「訳がわからない。ホーク、私が抑えておくから、皆を呼びに行つて早く」

「貴方のインベントリに接続しただけですよ。簡単なことです」

静まり返つた空間の中で、ウーラシールは首を傾げた。

「あら、まさか……。その能力がどのような仕組みになっているのか、今まで一度も考えたことがないのでですか？ ならば私が今ここに居るといふ事実の原因は、貴方の怠慢ということになります」

「ホーク！」

「おやおや、可愛らしい。そうやって困つたらすぐに彼へとすがるのですね。憎たらしい。わかつているんでしょう？ 奪つた立場に居続ける気分はどうですか？ 本来なら、ホークの隣にいたのは私だったのに」

最後の方は、まるで幼い子供のよ様な調子だった。小さな少女が拗ねているような。

「お前は、何を言っている？」

「どうか、聞いてください。私は、かつて、とてつもない悲劇に遭いました。馴染みのある故郷を滅ぼされただけではなく、この身を闇に囚われたのです。最も、代わりに助かったそれにとっては、喜劇かもしれません」

指が、ミレーヌを示す。まるで断罪をするかのように。向けられた彼女は、明らかに困惑しているようだった。

ウーラシールは、その顔の様相を変える。淑女のそれだった表情は、獣じみた憎悪で歪められていた。直接向けられていないとしても、ホークウッドはぞつとした。

「哀れな姫君。ウーラシールの宵闇よ。罪を認めなさい。ずっと彼を騙し続けた事実を、受け入れなさい」

「貴方、気でも狂っているの？」

「狂っていますとも。嫉妬でどうにかなってしまいそうです。言ったでしょう。本来、シフに保護されるのは私の方だった。ホークと一緒にいるのは私のはずだった。貴方は地球の人々を滅ぼした勢力にいたのにもかかわらず、私のふりをして生き残った。醜い、姫です」

ミレーヌは既に剣先を下げていた。告げられた事実に対して、たじろいでいる。それはホークウッドも同じだった。働かない頭が、数秒遅れてその意味を理解する。

同時に同じことを、ウーラシールは続けて言った。

「私こそがミレーヌです。その女は、ウーラシールという深淵に滅ぼされた国の、住人」

「嘘よ」

「地球に住んでいた事実などない。そう思いこんでいるだけ」

「ふざけないで、騙そうとしているのね」

「ミレーヌ・キャンベル」

息を呑むような音が聞こえた。

「アメリカ合衆国ルイジアナ州の街の一角に住む、キャンベル家の次女として生を受ける。二歳の時に、両親と兄弟が飛行機事故により死去。親戚に引き取りを拒否された私は、孤児院に預けられました。そこで十歳まで育った後、侵略が起きます。私はトミズカオルという新進のハリウッド女優が率いる集団に保護されて、しばらく行動を共にした。ですが途中でさらわれて、大狼により残酷な提案を受けたのです」

彼女は、ドレスの裾を揺らした。

「その高貴な姫君の身代わりとなつて、深淵の主に嫁ぐ。もちろん抵抗はしました。ですが無駄だった。十歳の少女に、自らの運命を否定するだけの力があるわけがない。何千年の間、闇と過ごすことになりました。わかつていただけますか？」

ウーラシールの顔が緩められる。ホークウッドは衝撃を受けてい

ても、最後の視線だけは越えなかった。なぜなら、向けられる笑顔は空っぽだからだ。

「今更どうしろとは言いません。ただ知ってもらいたかっただけです。貴方にだけは、わかってもらいたかったんです。これから戦う相手は、単純な、滅ぼすべき敵ではないと。私は、警告しに参ったのです」

ゆらりと、彼女の影が近づく。ほぼ反射的に後ずさっていた。それに悲しそうな目をしてから、彼女は表情を引き締める。そういうふりをしていようだった。

「このままでは、貴方達全員が殺されます。敗北が決定している」

沈黙から、疑惑を感じ取ったのだろう。分かっているとしても言いたげに彼女は頷いた。

「考えうる限り最高の戦力がそろっているのは確かでしょう。貴方達ができるだけのことをした。ですが、それでも、届きません。主は、あのマヌスは強大です。さらには油断もしていません。謀略を既にめぐらせている」

「何が言いたい?」

ホークウッドは、ミレーヌのそばに寄った。彼女の腕を見せつけるように握る。縋るような目が横から向けられるのがわかったが、今は応えるわけにはいかない。少しでも目の前の存在から目を離せば、何が良くないことが起こると直感していた。

「戦いの途中で、裏切りが起きます。致命的な裏切りが。それによって、貴方達の希望はほとんど潰えるでしょう。どちらの命も消えまです。全員が死にます。ですが、貴方達が協力してくれば、変わる可能性がありますがある」

少しだけ、不服そうな顔になる。

「私の恨みも、今は忘れましょう。警告します。既にトミズタカキは深淵に寝返っている。しかるべき時に、貴方達へ牙をむくでしょう」
「…」

ホークウッドは深呼吸をした。どうなるにせよ、重大な決断を迫られているのは間違いない。冷静になることが先決だ。

「あいつが？」

「ええ」

「ありえない。そんなはずがない」

「本当に、そう思っていますか？」

見られていると、まるで自分の心の奥底まで覗かれている心地になった。それでも、顔を逸らすことはしない。

「今までの、あの男の行動を見てきたでしょう。本当に、裏切らないという保証はありますか？ わかっているはずです。彼は、他人を物のように扱う。己の利益のためならば、他の全てを犠牲にすることも厭わない」

隣のミレーヌは、揺れているようだった。確かに最近、そんな貴樹の一面が出た時があった。ノミの報告でしか知らないが、ミレーヌの中にある薪を、大王に捧げることも提案したらしい。もちろん知った瞬間は嫌な気分になった。彼への不信が全くなかったといえれば、嘘になる。

だが、ホークウッドはさらに彼女を引き寄せて、ウーラシールから庇うようにした。

「嘘だな」

「根拠は？」

「知らん。そんなものはない」

ウーラシールは瞬きをした。

「だが、わかる。あいつはそれだけはしない。できないんだ。火守女がいるから。だから、お前の言っていることは嘘だ」

「信じるのですか？　もしかすれば、彼女の命を条件に寝返った可能性もあります」

「それでも信じる」

ホークウッドは揺るがなかった。

「なぜなら、タカキはちゃんとした男だからだ。そりゃあ、利己的になる部分もあるかもしれない。だが、お前らよりはましだ。誰かを、自分の命と同じくらい大事に思っている時点で、そいつは立派な男だよ。十分すぎるくらいだ」

大剣を、ウーラシールに向ける。彼女は目を見開いたが、そういう反応にはもう惑わされなかった。

「それに、お前がミレーヌだとも思わない。というか、関係がない。俺は、この女を大事にすると決めた。それだけだ。今さら、何も響かないぞ。お前の邪悪さは、シモダを通して知っている。内から乱そうとしても無駄だ。どうせ、助かりたかつたらこうしろと指示でもしてくるんだらう？」 お前の目当ても、よく理解しているぞ」

ミレーヌが、強く手を握り返してくる。そこから伝わる暖かさこそが、本物の証だった。信じるべきものだった。決して、相手の言葉に乗るような心情にはなれない。

ウーラシールは俯いた後、しばらくして顔を上げた。

涙を流しながら、笑っている。ホークウッドにはもうわかっていた。白々しい。薄ら寒い演技でしかないのだと、理解していた。

「フッフ」

ウーラシールは口元に手をやった。

「想像よりも、良い殿方になったのですね。でも…考えなかったのですか？」

「なんだ」

「私の言っていることは全て嘘です。認めましょう。ならば、私が貴方達に害をなさないというのも、偽りだけということになりますね」

おそらく彼女は、前へと飛んだだけだった。足を使って進んだだけ。それでも異常な圧を感じて、ホークウッドは自分の感覚のままに大剣を振るった。確実に、相手の首へと食い込ませるつもりで。

だが、刃は予想よりも遠くへ伸びていた。いや、もはや飛んでいる。少し遅れて、自分の大剣が壁に当たったのに気がついた。そして、自分の右腕が根元ごとなくなっていることにも。

ミレーヌが、自分の名を読んでいる。彼女はすぐにこちらへ駆け寄ろうとしたが、その前に華奢な足によって蹴り飛ばされた。

「中の上といったところでしょうか」

女は口を濡らしていた。他ならぬホークウッドの血で。その大きく裂けた口へと腕が飲み込まれていくのを見て、さらに意識が遠く

なっっていく気がしていた。

「ですが、足りない。まるで達していない。ああ、やはり…」

ウーラシールは焦がれるように息を吐き出した。

同時に、入り口の扉が吹き飛ばされる。

「貴方でなければ。アキヒロ」

彼女は少し首を傾けた。それだけで、短剣の刺突を避けている。

下田は止まることなく、さらに追撃を仕掛けた。体を回転させながら、足の先から青白い刃を発生させる。

動きにくい服装にも関わらず、女は俊敏に飛び上がった。

直後、胴体が斬り裂かれる。

「まあ」

アルトリウスは、壁に着地した。大剣をうならせ、再度ウーラシールへと肉薄する。同時に、下田も突進を始めていた。

彼女は瞬時に二等分されたが、それでも笑っていた。

「こんなものですね。時間が来てしまいました。それでは、三日後。楽しみにしています」

キアランの投擲した銀の短剣が、相手の首に直撃する。しかし、その時にはもう、ウーラシールは消えかけていた。

誰も、その消失を止めることができなかった。ホークウッドは、腕に柔らかい光を視認する。焼けるようだった傷口が、あつという間に再生されていくのがわかった。すぐに駆け寄ってきた下田は、さらに自分の手から奇跡の光を発生させる。

「他に、何かされましたか？」

「いや…」

「間に合って、良かったです。あいつが侵入しているなんて」

ミレーヌが、何かを言いたげだった。だが、ホークウッドの方を見て止める。その判断を責めることはできない。おそらく、彼女自身でもわかっていないのだ。下手に報告をすれば、どんなことになるかわからない。

治療をしている男を、観察する。あのアルトリウスと短く言葉を交わしていたが、最後には小さく舌を出していた。あっちへ行けと言わ

んばかりに、手を振っている。

随分と、凶太くなつたものだ。その過程を散々見させられた側にとっては、複雑な思いがある。

「多分、本体じゃない」

「あ？」

「あれのことです。異常なほど反応が悪かった。本物なら、僕も無事じゃなかった」

「そう、だな」

ホークウツドは、完治した右手を動かした。何の違和感もない。その様子を見て、下田も立ち上がった。

「ミレーヌさん、付いてきてください」

「なに？」

彼女は少し驚いたようだったが、続く言葉で不思議そうにした。

「広場で、大事な話があります。地球の人達にとって」



全員、と強く言い含めておいたのは、それなりに効果があつたようだった。

篝火前の階段に座っている高坂が、腕を組んでいる。

「ここで、結婚式でもやるつもりなのか？」

その声は明らかにからかう調子だった。下田も、そう思われて仕方がないと思っている。結局は自分のせいだと思っているので、受け入れるしかなかった。

ちとせは見せつけるように下田の腕を抱いている。上機嫌な様子

だった。この状態になるまでそれなりの過程があったのだが、下田の努力という言葉で片付けられる。

「式開くとしても、あんたは呼ばないかもね」

「気の早いことで」

実織が、苦笑いをしている。その隣の新宮も、にやにやと下田達を眺めていた。

好意的な反応を返しているのは、ここまでだった。残りの者達は、別のことを気にしているようだ。下田がなぜこの集会を開いたのか、知りたがっている。

ちとせの肩を叩いた後、下田は立ち上がった。声を張ろうとしている自分を客観視する。この場所で、大勢に向けて喋る機会は何度かあった。それらには、共通点がある。決まって終わった後に、戦闘が始まっているのだ。だが今回は違う。おそらく、そういうことにはならない。

この中で一番不安そうなのは、ミレーヌだろう。直前のこともあったか、何か責められる可能性を危惧しているのかもしれない。彼女一人だけを行かせるのは不安だったのか、ホークウッドもいた。そして、どういうわけかアルトリウスとキアランもついてきている。正直出ていってほしかったが、それを強制するため労力を考えるとうんざりした。

「あの、ちよつとごめん」

おずおずと手を挙げたのは、由海だった。

「タカキさんは？ あの人もいた方が」

「声はかけようとしたけど」

下田は微妙な顔になる。

「先生は、今眠ってる。事情はもう聞いてる。まあ、大丈夫だよ。きつと起きてたとしても、来なかっただろうし」

それに、意味もなかっただろう。これからする話の内容を考えるのと、どう転んでも彼にとっては何事だ。聞く価値も憶えておく価値もないと即座に判断するに違いない。ここに来る暇があったら、貴樹には別のことに時間を割いてほしかった。

まだあまり納得をしていない様子の由海。彼女の達の周りにいる集団を見る。彼女達は、今のところ一番こちらに関心を向けていない。そもそもここに来たくはなかったという様子だ。

歩き始めると、アリーがイアンを庇うように体を動かす。もう彼女は完治しているようだ。

下田は彼らの前で、座り込んだ。

本題に入る前に、済ませておくべきことがある。

「こんな後になってしまって、すみません。貴方達の感情は理解できません。僕を、許すことはできないでしょう。ランドンさんとファエラさんに、最低のことをした。報いを受けるべきだと思つてます。ですが」

拳を床について、頭を下げる。

「今だけは、協力してください。全てが終わったら、僕を好きにしても構いません。都合の良い頼みだとはわかっています。それでも、お願いします」

しばらく、頭を上げなかった。下を向いていても、自分に視線が刺さってくるのが分かる。

今はもう、人肉への渴望は全くない。まさにあの膿が引き起こした狂乱だった。だが、そんなのは相手にとって関係がない。犯した罪は、決して消えない。

「こちらを、見てください」

柔らかい女性の声がかげられた。

首を動かすと、アリーが穏やかな表情で視線を合わせてきている。

「確かに、シモダさんのしたことは、許されないことです」

「はい」

「ですが、それは私達も同じ。貴方を責められる立場にはありません」
既に知っている。彼らもまた、禁忌を犯した。

「夫とファエラは、最後まで、私達を守ろうとしてくれました。ですから、償いをしようというのなら、彼らの意志を継いでください」

「わかりました。貴方達を、全力で守ります」

「お願いします」

彼女はそう言いきると、しがみついてくるイアンを撫でた。彼は下田に何とも言えない表情を向けてから、アリーの肩に顔をうずめる。「そっちのことは、凄いと思ってるよ」

少し間をおいてから、ジアンナが喋りかけてきた。彼女はもう悪感情の宿っていない目で、下田を捉えている。「できることがあつたら、何でも言つて。私達、それなりには役に立てると思うから」

幸成も、頷いた。

「ありがとうございます」

内心では、下田は冷静な計算をしていた。彼らにできることはほとんどない。あまりインベントリを使わせてはいけない気がした。杞憂に終わるかもしれないが、念のためだ。

下田は再び立ち上がり、一度周りを見渡した。少しの覚悟をする。これで誰かに嫌われても、いいように。

「僕達の最終的な目標は、一致しているはずです。地球に、帰る。ですが、既にある意味その望みを叶えていると言つてもいいでしょう。そのことについては、既にわかっていると思います。ですが、本当に戻りたいのは、他の人間が、数多く暮らしていた故郷です。けつしてこのような、滅びた残骸のような場所じゃない」

意識的に目に力を込める。

「方法があります。僕がかつて散々利用していた力、それを使って、故郷に戻る。勘違いしなくても構わないのは、過去の地球ではないということです。何の侵略も起きなかった、別の可能性の地球。それを作り出します」

その違いを、彼らのほとんどが理解しているようだ。こういう時は、自分の記憶が共有されていることに感謝を覚える。でなければ、かなり時間がかかっている所だった。

「ダークソウルという、規格外の塗料も利用すれば、可能ではあります。ですが、まだ、足りません。描ききるためには、皆さんの協力が必要です」

「俺達のか?」

高坂が首をひねった。

「そう。作業には、かなりの精度が要求されます。その成功率を少しでも上げるために、皆さんの記憶に頼りたいんです。地球にいたころの記憶。風景の記憶。それも加えれば、より綿密な絵画ができあがる」

薫が、何かを理解したように眉を動かした。

「でもさ」

ちとせが不安そうに言う。

「記憶っていつても、何でもいいの？」

「そういうわけじゃない。できれば、直前のものがいいんです。僕達ですが、この世界で目覚める前の記憶です。侵略される直前まで、どのように過ごしていたのか。はつきりしているほど、齟齬が少なくなります」

「でもそれは、厳しいんじゃないかな」

由海が言ってくる。その意見にほとんどの者が賛成のようだった。下田もだ。

まだ、大きな障害が残っている。彼自身も含めて、ここにいる地球の者達の記憶には、穴があるのだ。ちとせの礼で言うと、死んだ母親のこと、そして生徒達全員に当てはめれば、過ごしていた学校のこと、抜けてしまっている。

下田も、母親のことは憶えていたが、手術の日や直前に交わした会話のことは何も覚えていなかった。それは膨大な繰り返しを経たとしても、おかしいことだ。

「ですので、まずはこれから、僕達の記憶を取り戻します。すぐに終わると思いますよ」

「じゃあ、連れてくんのか？」

「ん？」

高坂もまた、不思議そうな顔を返してきた。

「いやだってよ。つまりそういうことだろ？ 俺達の記憶は誰かによつて操作されてる。明らかだよな。ここ、祭祀場の奴らが細工をしたんだ。俺達に、疑惑を抱かせないように」

「うん」

その理論で行くのなら、中途半端な記憶の欠損にも説明がつく。例えば学校や家族のことを忘れていたとしても、この場にいる者達のことにはちゃんと覚えていて。理解できている。明らかに作為的だった。偶然では決してあり得ない。

「ヨルシカが、全部知ってるだろ。お前が頼めば、すぐに何とかしてくれるんじゃないか？」

「いや、それはないと思う」

「でもお前なら…」

「そこじゃないんだ」

下田は誰とも顔を合わせなかった。否定し、沈黙を作る。できればこの空気で相手がぼろを出してくれればいいと思ったが、その気配はない。

そこで彼も覚悟を決めた。このまま隠し通そうとする腹積もりなのだ。ならば、容赦をするべきではない。

静かに、それでいてはつきりと、彼は説明を始めた。

「多分、意味はない。ヨルシカは一部の鍵を持たされたただけだ。僕に関することだけを。残りはきつと、他の誰かが持っている」

「祭礼場の他の奴らか」

「違うよ」

高坂もそうしてはつきりと否定されたことで、理解したようだった。下田は、もったいぶっているのだと。このまま話を続けるのに乗り気ではないのだと。だからこれ以上疑問を重ねることもなく、高坂は聞く体勢に入った。

「思えば、いくつか手がかりはあったんだ」

下田は徐々に視線を動かす。

「でも、確信できたのは、多分ありがたい偶然のおかげだった。先生のおかげだ。あの人が、墓所で一番最後に目覚めてくれたおかげで、気がつくことができた」

静寂が、先を促している。

本来は、ただの些事として忘れてははずだった。もし、貴樹が途

中で目を覚ましていたら。生徒達全員が棺桶から出て、不安げに担任の目覚めを待っていないかったら、きつと気がつくことができなかつただろう。

だからこそ、多少は印象に残ったのだ。ついに貴樹が出てきて、全員が注目をする。それまで好き勝手に喋っていた者達も、少しは静かになる。下田は憶えている。口数の多かつた草野も、貴樹へと注目しただした。

その状況でなされた発言というのは、普通の会話の中で聞くよりも記憶に残るだろう。

「指示は、祭祀場だと思う。だけど、実際にやったのは、僕達の頭をいじったのは、別の誰かです。推測でしかないですけど、記憶の取捨選択というのは繊細な作業なんだと思います。全く僕達に関係のない誰かがやろうとしても、かなり非効率的になる。地球出身じゃないヨルシカ達には、難しいことだった」

——どこなんですかね、ここ。

指を、突き付ける。大勢の前でさらけ出すことになるのだと、相手にわからせる。

——高校の近くに霊園がありますけど、雰囲気が違う気もします。かなり不気味、ですよね。

対象の彼女は、まだ、平静を保っているかのように見えた。

「新宮。不思議でしょうがない」

言われても、ただ戸惑うように瞬きを早くした。他の者達も一斉に、新宮へと視線を向ける。そのほとんどが、下田の告げたことを信じていないようだった。まだ。

「どういう、気持ちだったんだ？ 初めから全部わかってて、僕達と一緒に過ごすのはどうだった？ 演技の才能があるよ」

「待ってよ」

実織が声を上げる。予想通りだった。

「急に、そんなこと。わからない。冗談だよね」

「どうしたの、下田君」

新宮もまた途方にくれているようだった。その様子にままならな

いものを感じる。こうして説明をしていくことは気が乗らないが、望みは叶えてやらないといけない。

「君は、学校の場所を知ってた。真偽はわからないけど、僕達はそもそもそれすらも忘れていたんだ。多分、新宮だけは記憶を残されたんだろう。祭祀場の駒として、不都合がないように」

「そんなこと言われても…。私には、偶然としか言えないよ。欠落には、個人差があるんだと思う」

彼女は、あえてその言葉を選んでいようだった。ついに気付いた実織が呆然と新宮の横顔を見つめる。

「そっか。でもだったらなんで」

下田は視線を鋭くした。

「前に訊いた時、嘘をついたんだ？ 僕達で一度、話し合う機会があったよね。地球でのことをお互いに確認し合った。その時、新宮は確かに断言したんだ。学校のことは、何一つとして憶えてないって。立地を知ってるのなら、どうして、あの時言わなかった？」

「それは…」

「まだ、あるんだ。実は墓所でのことは一番最後に思い出した。君を疑うきっかけは、別にある」

彼女は目を斜め下に向けて、戻した。下田を、何とか見上げようとしている。未熟な態度だった。既に逃げきれはしないと、薄々理解している。

「何だっけ、君の固有能力。教えてくれない？」

「…」

「思い出した。詠唱を奪う。かなり強力なものだ。でもちよつと、おかしいよね。詠唱。君はその言葉に、ひっかかりを感じなかったの？」

まだその時は、術にとって言葉が重要な要素になっていたなんて知らなかった。もちろん、観察することで予想はできたはずだけど。それならなんで新宮は、僕達に教えてくれなかったんだ？ 祭祀場の人達がわざと隠している事実を、知らせてくれなかったのはなぜ？」

「違う…」

「当然、まだ確定していることじゃない。僕の意見は荒唐無稽な言い

がかりだという可能性もある。もし間違っていたら、ちゃんと償うよ。否定するならしてもいい。ちゃんと、ヨルシカに確かめてから」「やめて」

「何をやめてほしい?」

「もう、これ以上はやめて」

下田は準備をした。

「そうか。じゃあ、手っ取り早い方法にしよう。本当にごめん」

彼は詠唱を紡いだ。右上にソウルの矢を一本出現させる。瞬間、場の雰囲気緊張に包まれた。彼がただの脅しで出現させたわけじゃないのは、明らかだったからだ。

それは、はつきりと新宮に向けられている。

「わかるよね?」

「下田!」

実織が割り込んでくる。懇願するような顔になっていた。

「待ってよ。結論を、急ぎすぎじゃない? それに確かめようたって、ヨルシカは嘘を言うかもしれない。自分の都合の良いように、無実の人に罪をかぶせようと…」

「新宮、聞いてるか?」

実織に庇われている彼女は、蒼白になっていた。呼吸が乱れている。体を動かそうとしているようだが、力が抜けてできないようだった。目が赤くなってきた。

「君は、良い友達を持った。だから、こうしよう」

矢の先を、ずらす。

新宮は息を呑んだ。

標的は変わり、ソウルの矢の狙いは実織に変わっていた。

「やめて!」

無視をして、矢を放った。軌道はほぼ完璧だった。直撃すれば、間違はなく実織の首に穴が開く。殺す攻撃だった。少なくとも、客観的にそう見えるようにはした。

だが、攻撃は完了されなかった。下田の矢は消失している。一度消えてから、移動させられていた。

新宮の、側に。

「見事な反詠唱だと思っよ」

彼女は歯を食いしばってから、術を消した。そして実織に一瞬目を合わせてから、俯く。実織の方は、何を言えればいいのかわからない様子で固まっていた。

「紗奈…」

下田が、祭祀場への反逆を開始した時、グウィンが半端な形で復活した。その時彼は、生徒達的能力を消したはずだった。インベントリも同じく。

「元から、二つあったんだね？」

彼女は否定も肯定もしない。

「グウィンに奪われたのは、別の方だった。詠唱を奪う能力は、今もそうして新宮に残っている。いや、あるいはこうも考えられるね。君はそもそもその技術を習得していた。僕達よりも早い時期に、目覚めさせられたから」

あふれるほどではない。それでも、やるせない思いはあった。

「おそらく祭祀場側は、僕達全員を騙すことはしなかったんだ。誰か一人を、間諜に仕立て上げた。記憶を操作させるといって、罪を犯させて裏切らないようにした。考えそうなことだ。たちが悪い。それでも」

新宮の顔を、下からのぞき込む。

「許せない部分はある。わかっているだろ？ 気持ちにはわかるよ。そうそう、耐えられるものじゃない。どこか、楽になりたいと思っていた。だから、わざわざ言ったんだ。そもそも何も余計な事を喋らなければよかったのに、君はあえて学校のことを最初に話した。皆が注目する中で」

気づいて、という思いがあったのだろう。現に今の新宮は、どこか気が抜けていた。ずっと詰まっていたものがなくなったようだった。下田でも、誰でもいい。とにかく、こうして暴かれることを期待していた節もあったのだ。そのための手がかりを、自分から明かして。

「だったら、初めから全部言えばよかった。結局自分の身が一番可愛

「かつたんだろ？」

「もう、やめてあげて」

いつの間にか、薫が側に立っていた。新宮の横に腰を下ろすと、震える彼女の肩を抱きしめる。

下田は無視して、続けた。

「なるほど、これで確定しました。共犯というわけですね。貴方達は、祭祀場に協力する代わりに、実織の命を助けようとした。他の人達を踏みにじってまで」

「シモダ」

割り込みの多い日だと思った。一応広場にはあまり来ないよう言ったはずだが、篝火の側に大きな体が近づいてくる。

グンダは膝をつくとき、下田に向かって深く頭を垂れた。

「責めないでやってくれ。全てはこちら側の責任だ。サナは、そうするしかなかった。吾輩達が、脅したのだ」

新宮はその時初めて、予想外の表情をした。ただ目を大きく開いて、グンダへと顔を向けている。驚きと、別の複雑な感情が混ざり合っているようだった。

「別に今更、どうしようしようとは思ってませんよ。ただ、できれば二度と僕の視界に入らなければ、それで」

下田は別に、かわそうともしなかった。ただ真つすぐ立って、頭に衝撃が来るのを待つ。実際に叩かれても、痛みはなかった。ただ、自分の中にある勢いはそがれたような気がした。

さらに頬を人差し指でつついてきてから、ちとせはため息をついた。

「あんたって、随分とひねくれたよね。ま、そこも好きだけど」

目を細めて、下田に近づいた。

「つまり今の話を総合すると、公開処刑って感じ？ それも必要のない。紗奈には、二つの固有能力があったと考えていいんだよね。詠唱云々と、記憶の操作をする力。後者が、グウインに回収されたってこと」

彼としては、黙っておくしかできなかった。

「だから、私達の記憶を取り戻すことにおいて、紗奈は関係ない。彼女はもう、力を持つていないから。初めからグウィンに頼みに行けばいい話だった。こうしてわざわざ、事情を細かく皆の前で言う必要もなかった。でしょ？」

少し間を変えてから、両手を挙げた。

「…うん」

「それでもこうしてるのは、あんたが納得できないから。でもさ、ちよつと反省してみて。程度の差はあれど、アキも黙ってたでしょ。祭壇場から出る時、何の説明もなかった。あたし達を脅して動かそうとしていたのは誰？」

「まあ、そうなんだけど」

「なら、単純でしょ」

ちとせは、下田の手を取った。そしてずんずん歩いていくと、座り込んでいる新宮の手も持ち上げる。そして両者のそれを、軽く打ち合わせた。

「どつちも悪い。これで終わり。紗奈、あんたのしたことは駄目なことだったけど、もう気にしない。皆被害者だよ。それだけは確か」

強引な気もしたが、もはやはつきりと反論する気にはなれなかった。元より、そこまでこだわっていたわけではない。ただ戦いを前に、わだかまりを全て消しておきたかったのだ。だが、それも彼女の話を聞いているうちに消えていくのを感じていた。

だが、相手の方は違ったようだ。新宮は急に立ち上がると、洞穴に向けて走っていった。制止の声上がるが、止まる気配はない。一人になりたいという気分はわかる。だが、それを許さないように実織が後を追いかけていった。さらに、グンダもついていこうとしている。

残された下田は、眉間を揉んだ後、再び声を張った。

「とりあえず、移動しましょう。これから、もつと大きな集会が開かれます。全員に、関係することです。輪の都に向かいます」

宮殿内に着くと、周りの者達の緊張はさらに増したようだった。この街自体は初めてではない者もいるだろうが、さらに奥の本拠地となると身構えるのも当然だろう。

ちとせは、ずっと手を握つてきていた。寄りすぎて少し歩くのに不自由しているが、良しとする。

「先生」

「どうした下田くん」

思わずぎよつとする。振り向いてきた貴樹の顔が、緩んでいたからだ。今まで見たことがなかった。正直気持ちが悪い。彼の本質を知った後だからこそ、拭いきれない悪寒がした。

今度の貴樹は、鎧姿ではなかった。薄い赤のローブに、浅めの三角帽子。いかにも術師然とした外見になっていた。

それに関してはまだいい。いちいちその奇行に付き合っていると、身が保たないからだ。おかしいのはその表情と、それに反した状況だった。

彼と火守女は、一定の距離を置いて歩いている。普通なら密着していてもおかしくないのに、そのスペースは驚くべきことに貴樹から開けているようだった。火守女は時折、彼の方を見ている。どこか不思議そうに。そして彼は意識的にその視線から逃れようとしているようだ。

「えつと、場所はちゃんと考えた方がいいかなって。この人数なので。前の場所だと、明らかに狭いと思うので」

「そんなことよりお前、高原とどこまで行ったんだ？」

肩を組みながら尋ねてくるので、数秒呆気にとられた。

「は？」

「どうせ手をつなぐまでだろ。ん？ それくらいが似合いだよ。お前ははまだ、ガキだからな。くく、そこまでにしておけ」

「もしかして、舞い上がってるんですか？」

「あ？」

「そして緊張もしていると。火守女さんとキスしたから、恥ずかしいんですね」

貴樹は大声を上げた。先を進んでいたノミ達が、ぎよっとして立ち止まる。彼はちらちら何度も火守女の方を伺いながら、さらに口を耳元に寄せてきた。

「声がでけえよ馬鹿。聞こえたらどうすんだ」

「ちよっと、過剰じゃないですか？ 彼女、不安そうですけど」

「あえてだよ。慣れの時期も必要なんだ」

こうして恥ずかしげもなく自慢してこようとしてくるくせに、彼女とまともに話すことができないほど照れている。そんな貴樹の様子で、少し張り詰めていたものが緩んでいった。戦いが迫っているというのに、いつも通りの男もいる。

「じゃあ、言っておきますけど。今までの先生の言葉の中で、どうしても納得できないものがあります」

「なんだよ」

相手がその気なら、こちらも攻勢にしよう。

下田は堂々と叫んだ。

「全宇宙一可愛い生き物は、ちとせです」

扉が開かれる。

すぐに反応することができた。地面を蹴り、顔を手で押さえているちとせを抱え上げる。彼女が悲鳴を上げると同時に、横へとさらに飛んだ。

結果、降ってきた大槌をまともに受けたのは、貴樹だけだった。

「小童」

スモウは笑っている。素直に喜んでいるようだった。下田との再会を喜んでいる。

「すぐに地下へ来い。前の続きをする」

「んなわけねえだろうがああああああ！」

貴樹が大槌を殴り返す。受けた衝撃を、スモウは後ろに飛ぶことで上手く殺していた。それに追撃をすることはなく、下田を睨みつけた。

「てめえの目は節穴か？」

「それはちとせへの侮辱ですか？ さすがに怒りますよ」

「ちようど良い。どちらもまとめて潰してくれる」

「お？ じゃあ決めようぜ。勝った方の女が可愛いってことで」

「え、もう認めちゃってるみたいなもんですよそれ。火守女さんが可哀そう」

「今ここで始めた方が良さそうだ。構えろ」

「死ね」

「やめろ」

ノミが腕を組んでいた。既に宮殿内が見えている。中から、シラが厳しい顔で彼らを見つめてきていた。

「遠足かよ。暴れるのは戦いが始まってからにしろ」

前の会議室とは、別の場所に通されるようだった。進んでいる途中、グウィン直属の騎士達も合流する。広間内で、多くの足音が響いていた。確かに、人数だけなら遠足としても成立するだろう。すこしも心は休まらないが。

「貴様の処遇は、まだ決められていない」

諸々を考えると、結局ちとせとは離れなければならなかった。彼女は実織の隣から、こちらを少し心配するように伺っている。

「深淵を退けたのち、再び裁きが下るだろう」

「直接手を下してくれる。待っている」

金色に挟まれて、下田はめんどくさそうに聞き流していた。オーンスタインは下田の背にある槍へと関心を向けてくる。

「それは何だ？ おかしな筒が付いている」

「そろそろ、到着しそうなんじゃないんですか」

騎士達のほとんどが、彼を囲んでいた。どうやら警戒されているらしい。どう考えても貴樹の方が注意すべき存在だと思うのだが、やはり一度殺し合っていると、ままならないものもある。下田としても今戦いを始めて生き残れる可能性がどれだけあるか、計算していないと言えは嘘だった。

集会場所に使われるのは、地下らしい。螺旋階段を下っていき、廊下をさらに進んだところで、かなり開けた空間に出た。

そのほぼ真ん中で、グウインが腰を下ろしていた。大王は集団を認めると、手を伸ばして、己の周囲を示してみせる。

「始めよう」

まずは、片付けておくべきことがあった。話し合うよりも前に、記憶のことだ。

思っていたよりも手早く作業が進んでいった。彼の方も、最初にそうするつもりだったらしい。修正は、すぐに終わった。

聞いた話を頼りにすれば、おそらく前にも同じ状況になったことがある。下田はその場にいなかった。自分の記憶を、ノミが広めた時と同じだそうだ。

確かに、良いものとは言えなかった。今まで不透明だったものが明瞭になっていく。それ自体はいいとしても、結局明かされるものによつては、正解だったかどうか判断がつかない。

日本は、初めに壊滅した。しかし、下田達の高校に関しては違っていた。プリシラによつて、守られていたのだ。だが、グウイン達の襲撃により、その守りも崩されることになる。そして最中にノミが助けに入つて、それでも結局失敗した。彼とグウイン、そして騎士達は殺し合い、最後はほとんど相討ちのような形になった。

下田は、目を開けた。同時に、生徒達全員が顔を向けてきているのを知った。

「僕が…、やったのか」

本来は、プリシラの仕事だった。だが、そうする前にヨルシカが邪魔をしたのだ。ミサとしての生を終わらせられた彼女は、下田に移つ

た。そしてグウィンから一部の王のソウルを奪い取り、全員に分け与えた。

思い出しても、起こったこととして受け入れるのには時間がかかりそうだった。操られていたようなものだったからだ。

「なんで、私達は…ずっと」

由海が一人の女性に駆け寄った。涙で顔を濡らしながら、今までの埋め合わせをするかのように、抱き着いた。

「薫さん。ごめんなさい…」

そしてその場には、由海達もいたのだ。彼女達は、アメリカからはるばる日本にまでやってきていた。滅びが進む世界の中を、進んできた。前に薫から聞いた話と一致している。彼女がいたからこそ、彼らは今ここにいるのだ。

薫は、囲まれて少しだけ困っているようだった。だがそれよりも、嬉しきの方が勝っているらしい。飛びついてくるイアンをしつかりと受け止めた。

それだけではない。彼女は、下田達の生存にも貢献していた。プリシラと一時協力して、守ってくれていた。だが最後まで目的を全うすることができず、グウィンと約定を結ぶことになる。妹を守るために。そしてずっと一緒だった仲間達の命を救うために。

新宮と、目があつた。彼女もまた泣いていた。下田が頷くと、そのまま実織の肩に崩れ落ちる。

確かに辛くはある。滅びたのだという実感がわいてくる。今までだったら、もう自分の家に帰ることができないと絶望するだけだっただろう。

「時間はない。次へ進もう」

グウインの言葉に、下田は頷いた。消えてしまったもの、失ってしまったものを取り戻すために、これから頑張らなければならない。いつまでも悲しみを引きずっているわけにはいかなかった。

重く沈んだ空気の中で、会議が始まった。

「警戒すべき敵は、おそろしく五体」

下田が話し出すと、貴樹がわずかに不満そうにした。どうやら、出

しやばってきているとでも思われているらしい。どうしてこんな時でもそういうことを気にしていられるのか、その精神の凶太さが羨ましいと思つた。

「まずはマヌスとウーラシール。そして、二匹の竜」
「本当か？」

オーンスタインが、疑問の声を上げた。

「残っているとは思えない。脅威になるような成熟した竜は、全て屠つたはずだ」

「いや、実はそうじゃない」

下田に代わり、ノミが説明をする。

「一匹は心当たりがある。黒竜だ。名は、カラミット。そうだろ」

下田は頷く。

「知ってるんですね」

「ああ。それなりに。おれが唯一、負けた竜だ」

オーンスタインが否定を求めるかのようにノミを見ていたが、結局それで言葉は終わっていた。下田もまた脅威の内容を再確認する。印象通りだ。あの竜は、おそらく同族の中でも抜きんでている。そして隠れていられるだけの知能もある。

「もう片方は、ミディールという名前です。ウーラシールの言葉が正しいのなら」

「そいつは知らねえな。オーンスタイン。覚えはあるか？」

「いえ、記憶にはございません」

比較的新しく生まれた個体だということだろうか。しかし下田には油断はなかった。あの時見た姿は、鮮明に憶えている。カラミットに引けを取らない大きさだった。翼の形状にも、気になる点があった。

「そして最後に、エルドリッチです」

「ふむ」

グウインが顔を上げた。

「奴のことは信用していなかったが…」

「貴方達との縁を切つて、あちら側についた可能性が高いでしょう。」

というより、元の鞘に戻ったという方が正しいかもしれません。あの
人食らいもまた、侮れません」

「で、どうするんだ」

敵の予測がついたところで、貴樹が声を出した。先ほどから会話に
加わりたくてたまらないという気持ちが透けて見えていた。

「攻めるのか、守るのか」

「深淵の闇は、こちらのほとんどにとって、致命的な毒です。わざわざ
相手の土俵に踏み込む必要なんてない。迎え撃ちます」

「守りは悪手かもしれん」

グウィンが顎に指を当てた。

「全てが闇に覆われるまで、奴らは何もしてこない。最初の火が消え
る前に、場所を突き止め、攻め入らなければ。戦う前に戦力のほとん
どが消失する」

「それは多分、ないと思います」

「なぜだ？」

思い返す。

「そう考えているのなら、一切僕達との接触をしない方が良かった。
でも、相手はわざわざある程度の危険を冒してまで、祭祀場に侵入し
た。奴らは必要のないことはしない。戦う日を指定までした。何か、
刻限がある。奴らにもある程度急ぐだけの事情がある」

「憶測だけだ」

「ですが、攻める方がはるかに困難なのは確かです。正直、奴らがどこ
にいるのか見当がつかない。もしかすれば、たどり着けない場所かも
しれません」

あの空間を、今までは思い出すことを避けていた場所を頭に浮かべ
る。あそこには、地球の建物の残骸がいくつもあった。推測でしかな
いが、おそらく今の時間軸にはない隔絶された場所だ。おまけに闇も
濃い。全員が引きずり込まれば、それだけで終わる可能性もある。

「防衛戦か。とはいえ、どこを守るんだ？」

貴樹の質問も予想ができていた。

「はいです」

下田は両手を広げて見せる。

「本来は祭祀場の方が安全ですが、狭すぎる。相手の大きさを考えると、この都市に腰を据えた方がいい。あの広場あたりで、篝火を組み直します。あらゆる火を注ぐ。祭祀場にある、三体の薪の王が捧げられた火、ファランの城塞にある篝火。そして、大王。行き方は貴方が知っているでしょう。最初の火が灯っている所から、全て集めます。ここには、複数の火守女がいる。何とか間に合うはずですよ」

「そうしてできた篝火が、おれ達の生命線だな」

ノミが、理解したように言った。かなり、大きな火になるはずだ。それこそ都市のほとんどを照らせるような。これで、中心部までマヌス達が侵入してくることを防げる。

だが、例外もいる。

「エルドリツチの勢力は、止めきれない。中にまで入り込んでくるでしょう」

「竜共も同じだ。奴らは闇の住人だが、炎の光を苦手に行っているわけじゃない。篝火まで容易に接近してくる」

「なるほど、分担の必要があるのだな」

グウインは、下田の考えていることを正確に把握しているようだった。それは、ノミも同じだ。彼らは数秒お互いを見合った後、何事もなかったのようにグウインの方が喋り始めた。

「シラ」

言われた彼女の行動は素早かった。既に用意していたのか、一メートル四方くらいの紙を皆の中心に広げる。

「この円が、篝火の領域だ」

大王の言葉に沿って、シラが描いていく。ちょうど紙の中央に、精巧な円ができた。光がある領域。だが、固定はされていない。時間が経つにつれて、火は弱まる。徐々に狭まっていくことは予想できる。「マヌスとウーラシールは絶対に入り込んでできません。ウーラシールは活動できるのですが、大幅に弱体化します。勝つ気があるのなら、この円の外で状況を観察している」

下田から見て奥の方、円の外側に、点が二つつけられる。

「ごちらも、時間が惜しい。できれば戦力の分散は避けたいのですが、攻める役割も必要です」

「奴らも光の中で行動できる二匹の竜、そしてエルドリツチを指し向けてくるだろう。面倒ではあるが、同時にチャンスだ。マヌス側が手薄になる。奴らは闇の中でさつきと仕留めた方がいい」

「で、誰が行くんのだ？」

貴樹は尋ねてから、注目されていることに気がついた。

「は？」

「いやだつて、そうだろ。この中で最も深淵に強いのは、お前だ。前代未聞だ。お前は大王よりも、火のソウルの力を引き出せている。奴らにとつては天敵みたいなものだ」

「待て待て。俺は防衛側につくぞ」

貴樹の視線ははつきりと火守女に向かっていた。その心情は理解できる。なるべく、彼女とは離れたくないのだろう。

ノミが、懇願するような口調で言う。

「いいか、お前のような戦力を固定させておくのは、惜しいんだ。深淵の主を倒せば、一気に勝ちへと傾く。お前は攻めの要だ。最強のな」

「まあ、俺は確かにそういう役目にふさわしい。やってやらないこともない」

さすが、それなりに長く貴樹の体の中に住んでいた存在だった。おだてられた彼は、すぐに考えを変えていた。

「独りでは足りないだろう」

グウインが面白そうに貴樹を見ていた。

「責任もある。私も行こう。その方が早く終わる」

「俺一人でも楽勝ですが、ありがたいですね」

これで、マヌスとウーラシールの相手は決まった。紙に、大きな点と小さな目に見えないほどの点が矢印で伸ばされて、円の外に向けられる。

「お待ちください」

オーンスタインが声を上げる。彼は少しだけ不安そうに、己の王へ

と目を向けていた。

「我らは、大王様に命を預けると誓った身。おそばにいられないというのは…」

他の騎士達も同じ意見のようだ。彼らは、暗にグウインの統率が必要だとも示してきている。確かに、彼らが下田の指示におとなしく従うことは想像できなかった。

「その必要はねえ」

ノミが、騎士達を見据えた。

「お前達にも、やるべきことがある。タカキとグウインが向かう間、他の敵が邪魔してこないはずがない。特に竜共は手強い。そっちにも対応する」

オーンスタインが、何かに気付いたように目を見開いた。

「では…」

「オーンスタイン、アルトリウス、キアラン、ゴー。お前達はおれの指揮下で動いてもらう。難しいことじゃねえ。前もやっていた。今度も、竜を殺すだけだ」

「は…」

即座に手をついたオーンスタインとは違い、他の騎士は動いていなかった。その視線を受けて、ノミは薄く笑う。

「無理もない。一度は殺し合ったんだからな。だが、固く考えなくていい。おれはたいして命令するつもりもない。協力をするだけだ。竜狩りをまた、この面子で行うだけ。信じられないっていうのなら、別に好きに動いてもいい」

間が空いたのは、数秒だけだった。最初にアルトリウスが動き出し、続いてキアランとゴーが膝をついた。

「従います、長子様」

「わかったわかった」

五つの点が、入り込んできた巨大な影の側につけられた。

ノミはどこか懐かしそうに彼らを眺めてから、下田を見てきた。正確には彼の周りにいる生徒達、そして祭祀場の戦士達にも向けられている。

「わかるな？」

「はい」

「二つの前線がある。だが外の方のは、気にしなくていい。このコン
ビなら、心配はいらない。お前が支援をするべきなのは円内の方だ」
「僕は、篝火の側にいるべきですね」

「いや、お前の奇跡は貴重だ。そして、最も使い勝手がいい。おそらく
お前が一番、動くことになる。お前が倒れば、戦線は崩れかける。
戦う者全員の状態を把握して、助けろ。恐ろしく疲れることになるだ
ろうが、平気だろ？」

「わかりました」

下田は身を引き締めた。つまり守りの要というわけだ。自分が頑
張らなければ、ちとせ達の命はない。

「だから、祭祀場の奴らの指揮は、お前がするんだ」

それは少しだけ、予想外だった。反射的に振り返ると、ジークバル
ドと目が合う。

「文句は言わせない。適任だ。お前は誰よりも、こいつらのことを
知ってる。何度も、戦ってきた。統率するのにふさわしい」

誰も反論はしなかった。だが、内心はわからない。今一度、ジーク
バルド達と話をする必要があった。これから共に戦うのならなおさ
らだ。

「最後の確認をする」

グウインが、立ち上がった。

「我々が、最も守らねばならない存在が、二つある」

「そうですね」

下田は、画家の少女を見た。

「彼女がいなければ、先の目的の達成ができなくなる。絶対に、守りま
す。もちろん、フィリアノールさんのことも」

にわかに、場が静まり返った。言われている彼女は一番奥の方で静
かに座っている。ずっと目を閉じたまま、今までの会話を聞いてい
た。

グウインが目を鋭くして、下田を見下ろした。

「わかるのか？」

「はい。初めから、おかしいと思ってました。大王、貴方はともかくとして、他の騎士達が何千年も力を保ったまま生きていられるはずがない。今、彼らのソウルの流れはほとんど止まっています。つまり、時間を固定したんですね？」

できるとは思っていた。ありえる。下田の、進化する前の固有能力も似たようなものだった。つまり、プリシラだけではないということだ。王の一族には、規格外の力を持った娘がもう一人生まれた。

「フィリアノールさんが殺されれば、おそらく四騎士も終わる。そうですね？ 確かに避けなければいけません」

「この情報を、利用しようとは思わないのか」

「共存を持ちだしたのはこちら側です。無駄にしたくはない」

もちろん、下田の中の優先順位は違っていた。同じ、地球の者達の方が大事に決まっている。しかし、そうとは言い切れない部分もあった。決して見ないようにしていたが、ヨルシカの方はじっと視線を向けてきている。リリアーネとユリアも、全て従うと言いたげな態度で、側に控えていた。

たとえ違う世界の住人だとしても、融和ができると思うのなら。この戦いでも示さなければならぬ。なるべく、全員を生かす。終わつた後のわだかまりを少しでもなくしておきたい。

だが、どこか胸がすつきりしていなかった。

それはその考えを不満に思っているからではない。何か、見落としていることがあるような気がしていたからだ。その考えはそのまま、先の戦いの不安へとも繋がっていた。

確かに、相手は強い。だが勝てるはずだ。

下田は何度か、自分にそう言い聞かせた。

71. 存在を賭けた戦い

「だから、こっちに来いって」

確かに、時間はかかった。ぎりぎりだった。

貴樹はゆつくりと、広場の中央を見上げた。

ずっと直視していると、目に光の残滓が残るようだ。組み上げられた篝火が、煌々と周りを照らしていた。眩しいことは眩しいが、どこか優しい光だ。彼にとつても、どこか安心できるようなものだった。

「おい、もういいだろ。無視するな。何度も謝っただろ」

他の者達は思い思いの形で残りの時間を過ごしているようだ。と言つても、ほとんどが準備をしていた。これから始まるうとしている戦いに備えている。

一番派手にやっていたのが、下田だった。素早く飛び回りながら、ジークバルド達を同時に相手している。祭祀場のほとんどと戦っていた。模擬戦ではあるものの、両方ともそれなりに本気だ。イリーナがはらはらしている様子で控えていた。

少し、皮肉なものを感じた。別にこの世界のことをもとから知らず、好きでもなかった下田が、一番彼らと結びつきを得ている。余計な言葉を交わす前に、自分達の力をぶつけ合って理解し合おうとしているのが、その証だった。だが、羨ましいとは思わない。

「いいかい、車というものがあって」

「それが、あちらでの移動手段なのです。タカキ様も、持っているのですか?」

「許可証のようなものが必要なんだ。もちろん持ってるよ。良い景色が見れる場所を知ってる。今度一緒に乗って行こう」

「はい」

数秒目を合わせると、貴樹の方が耐えられなくなった。にやにやしながら、火守女の手の方へと視線を移す。

「おい、助けてくれ。どうにかしてくれよ」

せつかく彼女との時間を大切にしていたのに、邪魔をされた彼は舌打ちをした。先ほどから騒がしかった。めんどくさそうに、ノミと

ヨルシカの方へ向き直る。

ヨルシカは目をつぶって耐えているようだった。あまり、この時間を気に入っていないらしい。肩に置かれているノミの手を振り払いたくてたまらないと言った様子だった。彼女と同じ側に、クリムエルヒルトが座っている。ノミの方を愉快そうに見ていた。

ノミは、宙を見ながら言う。

「プリシラ。悪かった。全部おれの責任だ。…あ？　なんだよ。それは違うねえか？　なしで。あ、おい！　拗ねるな。こつちを向いてくれ。わかった。認める。おれは間抜けだ」

貴樹はほとんど興味もなかったが、ノミが責められているのは面白かったので、特に邪魔をせずに座っていた。

「でも、わかるだろ。お前も狙われてるんだ。おれの方に移った方がいい。ヨルシカに危険が及ぶのを避けられる。そうだろ？」

しばらく間が空いた。ノミは息を吐き出してから、首を回す。

「元の状態に戻るだけだ。それに、寂しいからな。おれ一人だと」
「出ましたよ」

クリムエルヒルトが即座に割り込んだ。

「プリシラ様、騙されなくてください。前に、私にもそう言っていました。呆れた旦那様です」

「は？　一体どんだけ昔のことを…、いや、違うんだ。そういうつもりで言ったんじゃない。違うって。お前のことだけを愛してる」

さらにぐだぐだと会話が続き、結論は良い方向に進んだようだった。流れがあり、プリシラがノミの方に移ったということを確信した。

彼は、感慨深そうに空を見上げた。

「懐かしい」

「そういえば」

貴樹は、少し期待をこめて尋ねることにした。今まで自分が知ることのできなかつた設定を、拝めるかもしれない。

「お前の元の名前って、何なんだ？　憶えてるのか」

ノミは顔だけを横に向けてきた。

「おお、興味があんのか。光栄だな」

「お前にはねえよ。無名の王という設定に、興味があるんだ」

「意味わからん。別にいいけど。まああるな。忘れてもいいねえ」

「さっさと教えろよ」

「やだね」

鼻で笑う。

「お前に素直に従うのは嫌だ」

「どうせ皆に忘れられてるくらいだし、うつすい名前なんだろう」

「そういうわけじゃねえよ」

ノミは、戦っている下田の動きを目で追っている。そこには、どこか自身の影を重ねているような感じがした。

「言っても理解できないかもしれない。お前は大丈夫かもしれないが」

「どういうことだよ」

「俺の名は、剥離しているからだ。この世界から」

今度は、何も無い空中を眺めている。どうやら、プリシラと目を合わせているようだった。

「地球に来るよりも前の話だ。おれは、巻き込まれる形で、プリシラ的能力を利用することになった。下田と同じだ。何度も失敗した。勝てない敵に挑んでは、死にかけて、戻った。ざっと、二百万くらいかな。今よりもずっと、彼女の能力は未熟だった。だから、限界も早く来たんだ。おれの存在がなくなりかけて、結局諦めることになった。いや、そんな顔をするな。おれはとつくに納得してる」

貴樹は下田の記憶を見ていないので、よくわからない部分もあった。だが、過去に何度も戻れる力のごとは把握している。つまり、運が良ければ下田もそうになっていた可能性があったのだ。惜しい、と真剣に思った。

大きな気配が、近づいてくる。立ち上がると、ちょうどグワインが口を動かそうとしていた。

「時間だ」

空を観察する。周りの明るさとは対照的に、段々と雲が見えなくなってきた。侵食が、かなり進んできているのだ。作戦を立てた

時から、三日が経とうとしている。

腕を、火守女がつかんできた。本当ならここに残るか、彼女を連れていきたいくらいだが、どちらもよくない結果をもたらすだろう。それに貴樹はたいして真剣になっていなかった。さっさと終わらせて、戻ってくればいいと考えている。

「なるべく中央にいて、皆を盾にするんだ」

「タカキ様も、無事を願っています」

「すぐに終わるよ。待ってて」

彼女は抱き着いてくると、頬に口づけをした。それからゆつくりと目を見てきながら、離れていく。ぎりぎり、平静を保つことができていた。まだ唇にされると厳しいが、これには慣れてきていた。

「マジでやれよ。勝利がかかっているからな」

ノミは貴樹に力強く言った後、グウインの方を向いた。

「あんたには、別に言うことはない」

「：他人の言葉など、余計なものだ」

「そうだな。タカキの中で、散々言い合った。もう十分だ」

「己の責務を、全うしろ」

「へいへい」

貴樹は会話が終わる前に歩き出していた。自分だけでも、できると思っている。その自信は大した根拠もないのだが、望みを成就し、これからの幸せを考えると何でも乗り越えられる気がしていた。

彼とグウインは、中央の篝火から離れていく。その歩む先には、狭間があった。光と闇の境界線。先の闇が渦を巻いて歓迎しているようだった。



断続的な水音が、耳の近くで聞こえている。熱のこもった吐息も相

まっつて、下田は何とも言えない気分になっていた。

正面に座っているちとせが、気にしていないふりをしながら時折顔を向けてくるのがわかる。その度に自分がとてつもないろくでなしになっているような気がしたが、強引に押しつけるわけにもいかなかった。

ぢゆうううと、派手に吸われる。それは呼吸が続く限り終わらない。その段階まで来ると、もはやちとせは繕うことをしなかった。頬を赤くしながら、主に下田の方をきつく睨みつけてくる。

「おい」

背中を叩いた。華奢ではあるが、身の丈は下田よりも大きい。こうして正面から掴まれていると、まるで捕らわれているように感じる。そしてそのまま貪られるような。

声をかけても、ヨルシカは動かなかった。正確には、口以外。一度離れた後、下田の肩についた噛み跡を舐め始めた。さすがにそこまでくると、思う所はある。

「おい、もういいだろ。時間がない」

今度は、より首に近い方に牙を立てた。少々の痛みを感じた後、ヨルシカの生暖かい唇、揺れる舌の感触がはつきりと伝わってきた。深く吸いついて、傷口から流れ出る血を一滴も逃さないとばかりに音をたて始める。

「あんたを、殴ればいいのか？ それとも混ぜればいいのか？」

ちとせははつきり下田に向けて言っているようだった。彼としては、納得できない部分もある。自分だけが悪いわけではない。

最後の、模擬戦を終えた時だった。祭祀場の者達全員と同時に戦う。それは何度もやって来たことだが、心構えが違うだけでその内容は一変した。数日で、彼らとの連携に何とか慣れることができた。最初の頃は、気まずい分もあったのだ。それでもましにはなってきた。

その中には当然ヨルシカも混ぜていたわけだが、今回はより彼女へと当たりを強くした。一番期待しているが故だ。多少の怒りは受け止めるつもりだったが、彼女が選んだ行動は予想から外れていた。

急に下田を市街の一角へと連れていき、わけのわからないことを言うてきたのだ。

下田のソウルをもらうには、どうすればいいかと。

思えばその時点で、あまり正気ではないのは察せられた。それに悪乗りする形で、しつかりついてきていたリリアーネが提案をした。最初の案が受け入れられないのなら、代わりの方法があると。

血にも、ある程度のソウルが宿っていることはわかっていた。だがまさか、それを摂取するなどという馬鹿げた案をヨルシカが採用するとは思わなかった。ちとせが憤慨して止めようとしたが、他の女性に腕力で全く敵わないために、押さえつけられた。

もちろん下田も抵抗はした。だが、ヨルシカは受け入れないとこの先戦わないと宣言したのだ。無理矢理従わせることもできたが、彼女の戦力は貴重なので、一応気を遣う必要がある。

「しようがないって、思ってるんでしょ。そういう顔してる。言っとくけどそれ、普通の感覚じゃないから。浮気されるのって、こういう気分なんだね」

ちとせはそんな下田の逃避を正確に見抜いている。

背筋の痺れる感覚がなくなる。

口を完全に離れたヨルシカは、大きく喉仏を上下させた。かなり含んでいたらしい。少し膨らんでいた頬がしぼんでいく様は、なぜか熟れた果物を思い起こさせた。

「何をほうけているのですか、はやくはなれなさい」

先ほどからずっとそうしようとしている。だが、無理だった。言葉とはまるで反対の意思を伴って、彼女の両腕が下田の体を拘束し、さらに引き寄せようとしている。彼女は再び目をつぶり、口を大きく開けた。

「そんなに、良かったんですねえ」

リリアーネの言葉で、その動作は途中で止められた。

「はいっ..」

「言葉、少し溶けてますよ？ すっかり参っちゃったようで。お勧めした側としても喜ばしい限りです」

「ふざけるのも大概にしなさい」

下田は軽く突き飛ばされる。その直前で、見ていた。ヨルシカは自らの口の周りを舐めてから、ごくりと嚙下の音を鳴らす。

「私も試してみたくまりました。シモダ、まだ時間あるよね」

リリアーネが近づこうとしたが、白い手によつて遮られる。

「よしなさい。やめておいた方がいいでしょう。良くない影響があるかもしれません。それに何か勘違いしているようですが、決して良いものとは言えませんでした。不味くてしょうがない」

「あー」

リリアーネは反応に困るようなそぶりを見せてから、引き下がった。口の端はずっと上がっている。下田としても今のヨルシカの言葉に説得力があるとは思えなかった。本当にそう思っているのなら、十秒以上すすろうとはしないからだ。

ちとせは何か吹っ切れたような顔で、言ってきた。

「あつそ。それでも私はいいかな。アキ、がんばるから。私にも舐めさせて」

「頭の足りない、愚かな娘ですね。やめなさいと言ってるのです」

「不味いんでしょう？ それを他人がどうしようがいいじゃない」

また事態が進行しかけた所で、あからさまな咳払いが聞こえてきた。横を見れば、通りの外からノミが覗き込んできている。

「盛るのはいいが。もう来るぞ。全部終わってからにしておけ。…あ？ 良くない？ いいだろ、こいつの選択なんだから。いや、おれは関係ないだろ。ごめんって…」

何やら一人で会話をしている彼について、下田達は広場に戻った。

ほぼ全員が、そろっていた。一部の者達、フィリアノールとシラなどは屋内に入っていた。少しでも危険を減らすためらしい。下田としては、中でも外でも関係がないような気がしていた。相手の規模を考えれば、おそらく辺りは派手に破壊されることになる。建物の中にいる方が危険な可能性もあった。

「一つ、訊きたい」

のそりと、大きな影が下田に近づいてきた。見上げようとすると、

狼はその場に座り込んだ。前足に顔を乗せて、深い瞳を向けてくる。「私の子孫へと伝えられた、御剣はどこにある？ お前から、その残滓を感じる」

ちとせがその毛の中に埋まってみたくて言いたげな顔をしていたが、あまりお勧めはできなかった。あのシファイオールの祖先ならば、ろくな存在ではないことは伺い知れる。

「破壊されました。僕のせいではありません。そちらの騎士の方に訊いてみればいい。彼の方が、よく知ってると思いますよ」

オーンスタインは、言われても顔を向けてはこなかった。シフの視線を受けても、その集中を乱していない。大狼は鼻から息を吹き出し、それから、アルトリウスの側へと戻っていった。

下田は集団の前に出る。

別に、何かを言う気はなかった。ただ、自分を見てくる者達の顔をそれぞれ確認していく。

ジークバルドは、静かに見つめ返してきている。

フォドリックは大剣の柄に触り、シーリスは大きく頷いた。

カルラは、何かを言おうと口を開けたが、結局やめていた。謝罪なら、ここ数日で何回も聞いた。下田としては、共に戦ってくれることだけを望んでいた。彼女は、もう前に進むべきだ。そのためにも、この戦いの勝利は必要なのだろう。

アンリとホレイスは、やや緊張を高めているようだった。事前に打ち合わせていたことだ。彼女達の復讐を成就させる。そのための時間が間近にまで迫っているので、集中している。

ホークウッドとミレーヌは、やや不安げだった。彼女達もまた、あの女の恐ろしさを味わった。気持ちにはわかる。

グンダは、新宮と何かを話しているようだ。だが、その内容までは分からない。彼女の顔からして、グンダが緊張を和らげようとしているのはわかる。

イリーナ、火守女、クリムエルヒルトらは篝火の周辺で座っていた。既に祈りに入っている。なるべく、篝火の勢いを維持するためにだ。もちろん限界はある。いつまでもそれが燃え続けていられるわけで

はない。

そして彼女達を守るように、イーゴンが構えていた。一番内側の守りを、何も言わずにやっている。彼とはほとんど言葉を交わさなかったが、戦いの中でおおよそは理解していた。それだけで、十分だった。「篝火の、側にいて」

ちとせは離れる時も、彼の手を強く握りしめた。その感覚は、戦うべき理由の全てを担っていると言っても過言ではない。実織の隣に座り、深呼吸をしていた。

「認めたわけではありません」

フリーデが、歩いてきていた。下田の側に立っている妹達を見てから、腕を組む。

「私の目には、貴方は女を誑かす存在に思えます」

「違うよ、姉様」

リリアーネが微笑んだ。

「シモダは、私達を誑かしてるの。見境がないわけじゃないよ」

「それが良くないと…」

「もはや姉上には、関係がないとも言えるが」

ユリアとフリーデが視線を合わせると、やや冷えた空気が漂った。

「黒教会を抜けた身に指図されるのは、我慢ならない」

「当然の意見ですね。わかっていきます。私は、貴方とリリアーネが納得しているのなら、それでいい。シモダアキヒロ。かならず、責任を全うしなさい。あれこれと理由をつけて逃げるのであれば…、容赦はしません」

それから表情の質が一変し、薫が表に出てきた。先ほどまでとは違い、素直に苦笑している。

「内心ではすごく喜んでるの。すぐごまかすんだから。フリーデは。下田君、私も全力で頑張るから。君も自分の女達くらいは守りなよ」
そうして彼女が離れていく間の空気を、どう表現していいのかわからなかった。何やら自分の意思とは関係なく、外堀が埋められてきているようだ。勝手に責任とやらがどんどん背に乗せられている。

横に並んだヨルシカは、特に言うこともないようだった。前までの

状態も落ち着いているように見える。

「やるぞ」

「私は、貴方の部下ではありません」

「頑張ろうってことだよ。頭回ってないな」

「今、すこぶる体調がいいです。そんなわけがありません」

「血を、飲んだからな」

「…もし、たくさん働いたら」

「あ？」

「一度、限界まで食ってあげます。光栄に思いなさい」

「お前、やっぱり酔ってるだろ」

下田は、意識を切り替えた。

反応がある。ぎりぎりまで広げた探知の一番外側に、何かが集まってきた。ちょうど、光が届かなくなる境界の部分だ。それほど大きくはない。だが、動きが妙だった。正常な生き物の進み方ではない。

「なあ、おい」

ノミもまた、気づいているようだった。全員の雰囲気張り詰める。既にほとんどが武器を抜いていた。

遠くで、何かの吠える声がある。それほど威圧感があるわけでもない。だが、建物の一部が壊されているのを、確かに知覚した。

そして、さらに聞こえてくる。

「敵は、五体じゃなかったのか？」

最初は、黒い点でしかなかった。しかも途中で止まっている。だが徐々に、それらは進む距離を稼いでいた。一番先頭部分の個体が、全員にもその姿がわかるほど近くなってきていた。

続く点達も段々と大きくなってきている。先に探知で数を正確に把握していた下田は、槍の符呪をした。

「警戒すべき対象が、それだけです。あとののは、なんとかなるんじゃないんですか」

呻き声が、合唱の形になって響いてくる。亡者とは少し違った。干からびてはいない。人間の成れの果てであることは確かだが、全ての

個体のどこかには必ず、膿がこびりついていて、闇の方へ寄っているせいか、こちらに近づくと進行は遅くなっている。中には途中で倒れている個体もいた。

そうだとしても、数は優に二百は超えている。正気を失った人間の群れ。まともだったころの服装が、よりその異常性を際立たせている。

後ろからは、気配はない。全方位を囲まれたわけではないのだろう。

そう思った瞬間、下田は叫んだ。

「でかいのが来ますー！」

羽ばたく音が、響いてきた。

上空の闇から、二つの影が飛び出してくる。それらは別々の屋根に降りていった。が、建物が支えきれず、ほとんど押しつぶすような形で着地する。

下田はすぐに詠唱を始めた。初めが肝心だと思ったからだ。ほとんどの者達が、気圧されている。さすがにグウインの騎士達は慣れたものだが、そばのヨルシカでさえ動揺を隠しきれではないようだった。

「よおし、開戦だ。やれ」

ノミに背中を叩かれて、下田は即座に雷の槍を作り出した。一度、膿に侵食されていた時、感覚はつかめていた。完全に術を成功させるための道筋。それをしっかりと思い描き、実際に形として示している。

結局、四つ目の意識は必要なかったということだろうか。下田は、ウミの声を思い出す。いや、違う。経験が大事なのだ。初めの一回だけは、あれの助けがなければできなかった。

雷に、詠唱を混ぜる。干渉する。留まるよう、強く命令をした。そうすることで、下田の腕が焦げることはなくなる。何一つ犠牲にせず、完璧なものを放てるようになる。

どちらを狙うかは、たいしてこだわらなかった。どうせ、かわされるに決まっているからだ。

投げられた雷槍が、黒い翼へと疾走する。

カラミットは既に飛び上がっていた。閃光が足の部分へと到達したが、効いている様子はない。下田の目は確かに、その黒竜の足の先に黒い靄のようなものが漂っているのを視認していた。

咆哮が、空気を振動させる。もし一人だけだったなら、それだけで戦意をなくしていただろう。体全てが押されているような感覚は、すぐに収まった。

すでに下田は、その竜に背を向けている。相手の注意が向かってきているのは確かだが、すぐに逸らされるだろう。

前の方からも、派手な音がした。牛の頭を持つ、筋骨隆々の化物が打ち上げられている。あんな敵もいるとは思っていなかった。が、既にそれが息絶えていることは確認できる。

どうやら貴樹達も、戦いを始めたようだ。彼とグウインに頼り切ることはできない。彼らの戦場は、もつと先だ。

ノミ達が反対側へと走り出したと同時に、下田も戦闘を始めた。前線は、もつと上げる必要がある。あまり篝火に近いと、取りこぼしがあった時に危険だからだ。ちとせ達に、敵が向かう恐れがある。一番先頭にいた、もはや人間ではなくなった敵の頭を槍でもぎ取る。

嫌な呻き声だった。否が応にも、あの闇の世界のことを思い出させる。それでも、恐怖はなかった。

ヨルシカが、一度に複数の個体の首を狩っている。

リリアーネは確実に相手の急所を潰して回っていた。

ユリアは、背後からの攻撃にも魔術で対応できている。

彼女達を確認してから、下田は浅く息を吸い込んだ。槍を長めに持って、素早く横に薙ぎ払う。遠心力が維持されるよう、足を軸にしながらか回した。

刃先の手応えが、持続している。囲もうとしてくる膿の人間をまんべんなく断ち切っていた。ヨルシカの血によって増幅された力が、切断を容易にしている。

奥の方の一匹が、妙な動きを見せた。体にまわりつく膿が大きく

動いている。

その一番近くにいるシーリスまで、下田は疾走した。

「気をつけてー!」

彼女はすぐ反応してくれた。下田の方を見ながら、身を低くする。ソウルの太矢を、二本放つ。相手の頭と右肩に正確に直撃した。

よろめいたところを、同じく察知していたフォドリツクがとどめを刺す。敵が息絶えるとともに、膿も消失していった。

彼らと言葉を交わす間もなく、次の場所に向かう。見た所、苦戦している者はいないようだった。亡者よりは手強いとはいえ、理性がほとんど失われている相手だ。数を生かした連携も満足にできない。数だけでは覆せない、実力の差があった。

下田は、感覚した。

そろそろだとは思っていた。この戦況を利用しないはずがない。

アンリとホレイスは周りの敵を一掃して、少しの休みを取っていた。彼らへと向かう呪術に、途中で割り込んでいく。対して時間も掛からずに分解すると、前の屋根から這い出てきた者達を視認した。

坊主頭の三人が、最初に出てきた。深みの主教達だ。

続いてさらに膿から戦士達が出てくる。大きな大剣を抱えた男、棘だらけの鎧を着た戦士。

彼ら全員、覚えがあつた。忘れることのできない相手だった。

「半信半疑だったけど、間違えたねえ」

最後に現れたエルドリツチは、既に弓を持っていた。

アンリとホレイスが、身構えた。

ヨルシカが横に並ぶ。

「ワタシの一部が、随分と世話になったね。今度は、アナタを取り込んであげるよ」

「そろそろ、滅びていいぞ。人食らい」

転移した下田は、槍の石突の部分に魔術を纏わせた。

そして、暴発させる。

把管によるスムーズな移動、それに魔術の暴発の勢いが加わり、今自分ができる最高速の刺突を放った。

主教の一人、クリムトの頭がはじけ飛ぶ。

他の者達が一呼吸する間に、下田は雷を放っていた。同時に、不可視化させておいたソウルの弾丸を拡散させる。

マクダネルの胸に穴が開き、ロイスの体が穴だらけになった。

「やるな」

特大剣を持つゾリグが、楽しそうに突進してきた。その攻撃をかわして、反撃で首をかき切るくらいはできる。だが、彼は理解をしていた。

屋根から飛んで、アンリ達の方へと戻っていく。先ほどまで下田がいた場所には、紫色の光球が収束していた。少しでも遅かったら、逃げ場をなくされていた。また、転移を使わざるおえなくなるところだった。

倒れた主教達はすぐにエルドリツチの膿へと飲み込まれる。数秒もしないうちに、完治した彼らが、別の場所から這い出てきた。

「なるほど、エルドリツチ様、理解をしました」

「警戒をなさる理由がこれですね」

「やり方を、変える必要がある。容易な接近は悪手のようだ」

予想通りだった。守り手たちは、ある意味不死身だ。エルドリツチの制約によって、縛られている。魂があるべきところへ帰るのを、捻じ曲げているのだ。つまり、エルドリツチ自体を殺さなければ終わりが無い。当然彼らも、それは理解している。守りを固められれば、多少面倒なことになる。

「周りは、私達が」

アンリが力強く言う。既に彼女も、自らの剣に符呪をし終えていた。

「お前は…、人食らいを狙え。とどめくらいは残してくれると助かる」
ホレイスは斧を構えながら、促した。彼がはつきりと喋るところは初めて見た。やはり、祭祀場にいた時よりもどこか違っている。本人の気質がどうであれ、貴樹が彼らと行動を共にしたこと自体は、悪かったことではないかもしれない。

下田は呪術の炎を広げた。相手の数と同じ分の弾を作り、即座に打

ち出す。それが合図だった。アンリ達も同時に走り始めて、人食らいの勢力へ向かう。

「訳のわからない男だな」

棘鎧の男、カークはこちらを嘲笑っていた。彼は五本指の一員だったはずだが、貴樹から逃れて今ここにいる。最初から、どちらとも誓約を結んでいたのだろう。悪党らしい、身のふり方だと思った。

「その女は、俺やロイスと一緒に、殺して回ったんだ。哀れな、異界の弱者共をな」

想像はできる。祭祀場が襲撃された時、生徒達の居住区は地獄になった。カークやロイスだけでは短時間で殺しきれないと思っていたが、やはりヨルシカも生徒達を虐殺していたのだ。

彼女の方を見ることはしなかった。

「許されないことだ」

相手の剣を流しながら、肩の隙間に刃を滑らせる。

「僕の側でずっと償わせる。そう決めた。お前も、死んで償え」

ヨルシカの短剣が、カークの後頭部に差し込まれる。体勢が崩れた所を、下田は一突きにした。死んでいるかどうかは確認しない。どうせ、蘇るからだ。

他の者達の協力もあつてか、エルドリッチは孤立していた。ヨルシカと一緒に近づく。少しの間お互いに視線を交わして、陽動と本命の決定をした。

先のエルドリッチは、まだ笑っている。

「興味深い。ヨルシカ、新しいお兄様を、見つけたんだね」

「馬鹿言わないでください」

彼女はフアランの速剣を伸ばした。

「この男は、弟です」

「微笑ましい限りだよ」

二人の目の前に、無数の光球が出現した。そのせいで、立ち止まらざるおえなくなる。両者へ均等に狙いが定められ、一斉に向かった。た。

構造は、既にわかっている。その術は魔術の中に、わずかに呪術の

要素が組み込まれている。だから、色が紫になっているのだ。その性質も、単純な魔術よりも固いものになっている。だから、ただ防壁を張った所で容易く貫通される。

下田は、反詠唱を何重にも並列させた。彼にとって、理解のできる術はもはや裸同然だ。向かってくる全ての光球が、分解されていく。軌道や形自体は単純なものなので、今ままでよりもずば抜けて難しいということとはなかった。

ヨルシカの方も、速剣でほとんどを斬り落としている。対応しきれなかった分は彼女の体をえぐっていくが、無問題だった。すぐにできた傷はなくなっていく。

安心はできなかった。

むしろ何かが来るといふ確かな予感がして、下田はヨルシカを突き飛ばす。

彼女の唾然とした顔は、すぐに固まった。

下田の下半身がもぎ取られていく。光の奔流が、彼の体を破壊していた。その形は、矢にも似ている。異常なのは速度だった。下田の目は、まるで追いついていない。

「どちらも、嫌いではないんだけどねえ」

エルドリツチは、弓を上にも構える。

「いい加減、滅んでくれると助かるよ」

連続で、いくつもの矢を放っていく。すぐにその矢達は、できた黒い輪の中に消えていった。その流れを、正確に感知する。奇跡のそれとは違うが、転移の術の一種だ。どこに向かっているのかは、考えるまでもなかった。

下田は即座に詠唱しながら、神の怒りを行使した。

己の周りを飛び交う矢が、全て吹き飛ばされていく。

すぐに視線をずらし、ヨルシカへと奇跡を放った。彼女への攻撃はまだ続けられていたが、治療が始まったことにより、体の再生の方が勝っていく。とはいえ、彼女は既に顔をのほとんどを潰されていた。視界が失われているせいで、もがくだけに終わっている。

下田は走りながら、彼女に転移の光を纏わせた。自分の腕の中に座

標を指定する。

「暴れるな」

抱きかかえながら言うと、彼女はおとなしくなった。両腕と目が完治すると、すぐに離れていく。

転移しても、矢はずつと追ってきた。かなり厄介な攻撃であることは確かだ。速度もさることながら、落とすか、受けないと終わらない。魔術の防壁を七つ重ねて、迫る光の矢を受け止めた。ほぼすべてを貫かれたが、ぎりぎり体で到達するまではいかない。何とか、反応はできるようになっていた。オーンスタインの雷と比べれば、まだ余裕はあるような気がする。

エルドリツチは、常に移動をしていた。こちらに近づく気は毛頭ないようだ。遠くから弓を使っているのが一番嫌がられると理解をしている。

だが、少し理解が足りていないようだ。下田とヨルシカだけが、その首を狙っているわけではない。

見えない体を解除したフオドリツクが、エルドリツチの背中に大剣を突き刺す。加えてジークバルドが、弓を持っている方の腕を斬り落とした。

彼らとはどめを刺そうとしているが、下田が直前で止める。

「離れてくださいー！」

エルドリツチの下半身部分の全てを覆っている、膿が弾けた。ぎりぎりジークバルド達は離脱に成功していた。もし遅れていたら、全身に膿を受けていただろう。彼らにとっては、致命的な毒になる。

だが、エルドリツチはさらなる動きを見せた。膿の部分がさらに蠢き、何かを吐き出すような仕草を見せた。

「な……」

マクダネルの呪術を交わしたアンリが、思わずと言った形で注意を向ける。

エルドリツチは、両の足で立ち上がった。

「ああ、いい気持ち」

声の方は、膿から出ている。グウインドリンの部分と完全に切り離

されても、つながりは残っているようだった。

頭から、膿の一部が飛び出してくる。太陽を模した冠は、黒く汚されていった。どうやら、人の形の方にも、入り込んでいたらしい。見た目は中性的な男だったが、覗く邪悪な表情は人食らいの性質をしっかりと表していた。

蠢く膿の方からは、黒い手が持ち上げる。そして、鎌のようなものを作り出した。

人の方は、再び弓を持ちだす。斬られた腕は、奇跡によって再生されていた。

下田は、驚愕をすぐにひっこめた。そして嘲笑を浮かべる。

「何だい？」

「お前って、馬鹿だな」

放たれた矢は、空気を裂くのみだった。

エルドリツチは背後に数度射る。しかし予測していた下田は魔術の塊を踏んで、もう側面にまで回っていた。

中段の蹴りで、相手の体を飛ばす。すぐに下田は移動をして、ホレイスが相手をしていたカークの首を飛ばした。

ホレイスと、フォドリツクに叫ぶ。

「ついできてくださいー！」

クリムトの飛ばしてきた炎を避けて、膿の塊に近づいた。

誰も、近づけないようだった。それも当然だ、触ればそれだけで終わる可能性もある。全身が、毒のようなものだ。

だが、それは下田以外にとつての話だった。

迫る鎌を弾いて、接近する。飛ばされた膿の一部が腕についたが、それでも止まることはなかった。

「お願いします」

フォドリツクとホレイスが、膿の中に剣を差し入れる。彼らへの攻撃は全て、下田が無効化した。

狙ってはいったことだった。エルドリツチには明確な弱点がある。膿の部分は炎で滅ぼすことができる。今までは人の体の部分が懸念となつて実行できなかったが、相手から分離してくれたので、楽に

なった。

下田は操作し、両者の中にある残り火を開放する。炎が走り、膿全体へとすぐに広がっていった。

「ぐうううう」

ヨルシカとジークバルドが相手をしている人の方も、苦しみだした。その隙を逃すことなく、アンリが首を斬り裂く。

「苦しみながら、死ね」

下田はすばやく三十ほどの矢を作り出し、邪魔をしようとしてくる守り手たちを迎撃した。もはや主教達などは血相を変えて少しでも接近しようとしているが、ユリアとリリアーネによって妨害されている。

徐々に面積を小さくしている膿は、まだ余裕のある声を出していた。

「この戦いを始めたことを、すぐに、悔やむようになる。偉大なる深淵の御方は、アナタ達を滅ぼすだろう」

声の出ている部分を、ホレイスが突き刺した。

同時に、転がり回っているかつてグウインドリンだった体を、アンリが斬り刻んでいた。

下田は、最後まで見ていた。膿が完全に消えるまで。人の方が、動きを止めるまで、まだ、何をしてくるのかわからなかった。

確認をしてから、残りを殺していく。逃げる間も与えなかった。ゾリグは特に戦意を失っていないようだったが、それで何かが変わるわけでもない。下田はその胸に槍を指した後、上に斬り上げて、体を縦に裂いた。

「ありがとうございます」

主教のとどめを刺したアンリが、頭を下げてきた。

「貴方がいなければ、復讐を終えることができませんでした。感謝します」

「まだ、終わったわけじゃない」

下田はすぐに、篝火へと向かおうとしている膿人を数匹仕留めた。「これからです。協力をお願いします」

「もちろんです」

最後まで動かなかったのは、ヨルシカだった。彼女は本当の意味で亡骸になったグウインドリンの体を身下ろしている。

下田が横に來ると、顔を上げた。

「とりあえず今は、放っておく。あとで埋めよう。墓くらいは、作らないと」

「グウインドリンは、とうの昔に死にました。必要ありません」

「いや駄目だ。必要な事だと思う」

ヨルシカは鼻で笑った。じつと、視線を合わせてくる。

「嫉妬しているのですか？」

「はあ？」

「安心してください。もう…、未練などありません」

のぞき込んでくる瞳は、どこか澄んでいた。それだけではない、決して気のせいで済ませることのできないくらいの熱が、含まれている。

彼女の白く細長い指が、下田の肩に触れてくる。

「誰かに塗り替えられましたから。約束しなさい」

「…」

「私が死ぬまで、死ぬことは許されません。責任を、取りなさい。何かに依存しないと何もできない女。そう罵ったのは、貴方でしょう？」

下田は彼女から離れて、無言のまま歩き始めた。呪術を弾けさせ、エルドリツチの体をついでに燃やす。全てが灰になるまで、持続させるつもりだった。

「ノミの方へ向かわないと。ここらで残りを処理をしてくれ」

何やら色々と言ってくるが、聞こえないふりをした。言葉では家族だ何だと表現したものの、未だにどのような対応をすればいいのかわからなかった。通り過ぎる時、ちとせは安堵とは別の何かも向けてきっていた。彼女の気苦労は、わかっているつもりだ。

そして下田は、さらに苛烈な戦場へと向かった。



「我々にとつて、一番の誤算は何だったか、わかるか？」

貴樹は腕の筋を伸ばしながら、薄い闇の中を歩いていった。完全に真っ暗というわけではない。日が沈む直前程度の明るさはまだある。それに、今の彼にとつては、単純な闇が戦闘を妨げる要素にはなりえなかった。

「お前は、選ばれたわけではない。プリシラによって偶然助けられた
その他大勢。それだけの存在のはずだった」

グウインは突進してきた相手の角をむしり取っていた。山羊頭の
デーモンが呻き、手に持つ巨大な包丁のような武器を振り回す。もう
片方の武器は、貴樹に向けられていた。

同時に両腕をへし折られて、デーモンは消失していく。首にかけら
れたいくつもの骸骨だけが、からからと虚しく地面に転がった。その
全てが、人間のものだった。

「だが、それは間違いだったな。タカキ。お前の存在が、いや、お前と
いう存在が祭祀場の中の存在を愛したのが、一番の誤算だ。修正には
多大な苦勞が伴った」

「まあ、一目ぼれみたいなものなんで。しょうがないとしか」

『でも、本当にそうかあ?』

(黙れ)

貴樹は横の顔を殴り飛ばした。だが、実際の感覚はない。貴樹と全
く同じ顔をした何かは、けたけた笑いながら消えていった。

と、思えば、前方に再出現する。

『お前みたいになくでもない奴が、誰かを愛せるわけがない。断言す
るぜ。もうそろそろ、飽きる頃だ。今までよりはもった方だがな。地
球に戻ったら、すぐどうでもよくなって捨てるぞ?』

向かってくる亡者もどきを倒すついでに、その憎たらしい口調の幻
を燃やし尽くした。

現れるようになったのは、残り火の力を開放してからだ。輪の都で会談をする前に、ノミが話があると云ってきた。グウィンより分けられた最初の火のソウルには、まだまだ引き出せていない領域がたくさんあるのだという。貴樹なら、もつと多くを得られるかもしれないと。

実際、それは当たりだった。もつと深く向き合えばいいというノミの言葉の途中で、既に全てを終えていた。

どうやら、精神的な試練が多く課されるらしい。自分とそっくりの男が表れて、それらしいことを言ってきたが、男の話を聞く趣味はないし、自分という存在は一つしか許されていないので、即座に殺した。これが正解だったのかはわからないが、今こうしてかなりの強化にながっている。

だが幻が完全に消えることはなかった。貴樹が少しでも冷静でなくなる、先ほどのように揺さぶりをかけようとしてくる。それでも言っていることはまるで彼の思考とずれているので、相手にする価値すら感じていなかった。

貴樹は額の汗を拭った。そう、今の自分は冷静ではない。

グウインは横にいる男の妙な様子にも当然気が付いているようだったが、指摘してくることはなかった。これまでの戦いで、問題がないことはわかっているのだろう。事実、ここまで来るのにそれなりの数を倒してきたが、何一つとして相手にはならなかった。

「じゃあ、俺が右に」

「そうだな」

グウインも、理解をしている。

予備動作を最小限にして、両者は左右に飛んだ。地面から高速で飛び出してきた手は、空を切っている。

黒い毛で覆われている、肥大した手。

下田の言葉と一致している。

(ふう…ふ、ふ、ふ)

心の中で深く呼吸をして、大角の怪物と相対した。

「いきげんよう」

72. 深淵の主

最初に動いたのは、マヌスだった。少し振りかぶると、大きな方の左手を叩きつけてくる。

事前にかわしながら、貴樹はたいして真剣でもない思考に浸る。要は、さつさと済ませて戻りたかった。だから、とりあえず弱そうな方を潰すことにする。

ウーラシールは接近に気が付いている。それでも何も構えることはなく、貴樹の斬撃を待っていた。

「なるほど」

彼女の首へ食い込む直前で、貴樹は刃を傾けながら引いた。持ち手のすぐ上の部分が、削り取られている。断面の形からして、まるで強靱な牙でかじられたようだった。

相手は、口を押さえながら下がっている。

かなり速いが、探知することは容易い。この女は、体の一部を転移させている。今のは口だけを飛ばして、貴樹の腕を食いちぎろうとした。

不思議なのは、大剣の刃を食い破るほどの力を、どのように出しているかだった。どう見ても、このウーラシールは怪力の持ち主には見えない。

風圧を感じて、貴樹は足を滑らせた。

(妙技)

体を器用に曲げながら、二本の大剣を異なる軌道で流す。迫りくるマヌスの拳とすれ違いながら、両腕を高速で動かした。

(四の太刀、流水)

黒い血が、あたりに飛び散った。反応からして浅い傷ではあるが、怪物の手にははつきりと斬られた跡がついた。彼は止まらずに、いったん距離取って二体の位置を把握する。

既に三十まで技を考えていた。だが、名前だけだ。彼はかなりはりきっていたが、中身が伴っていない。先ほどのものも乱雑に動かしているだけで、他の技も同様であることは簡単に想像がつくだろう。

グウインの刺突を、マヌスは俊敏に避けた。その凶体にしては、かなり動きが早い。普通のサイズの左手に杖を持っているが、必ずしも術師タイプではない。

ウーラシールが、手に何かを持っていた。黒いもの。それが何かを理解した貴樹は、思わず嘲笑をこぼした。

銃声が連続して響く。彼女が両手で持っているのは、アサルトライフルのようだった。どうして地球の武器を使っているのかはわからないが、どうせ大したことはない。貴樹は向けられる銃口を正確に把握して、弾を次々とかわしていった。

グウインに至っては、動いてすらいらない。剣の腹の部分の前にして構えながら、向かってくる鉄の弾丸を全て防いでいる。こぼれたものも、魔術の盾によって捕まえられていた。

銃撃の合間に、ウーラシールは何かを投げる。貴樹達の眼前にまで迫った後、強烈な閃光を発した。

貴樹は目をつぶりながら、前へと走る。閃光手榴弾程度で足止めできると思っているのなら、大いに勉強不足だと思った。

マヌスの殴打を、右の大剣で止める。

その怪物の毛から、黒い霧が湧き出してきた。それは剣の刃を伝って、貴樹の体に到達しかける。

直前で、剣を引き抜いた。

体は守れたが、大剣は違う。刃の根元ごと、闇にもぎ取られていた。刃はすぐにマヌスの体まで引っ張られていき、呑み込まれる。

舌打ちをした。それなりに気に入っていた武器だ。標的を、変えることにした。まずは泥棒を痛めつけなければ。残った女の方は、どうにでもなる。

そういった彼の思考を感じ取ったのか、マヌスが突進してきた。その動きは今までと違う。ようやく本腰を入れてきたようだ。数段速く接近して、巨大な手を振るってくる。

貴樹は左の大剣をそこへぶつけた。

が、予想していた手応えはやってこない。

マヌスは、直前で拳を止めていた。そしてそこから黒い糸のような

ものを逃して、貴樹の腕に巻き付かせている。

(腕力勝負か、いいね)

貴樹はやや退屈していた意識を切り替えて、左腕に力を込めた。マヌスの体ごと持ち上げて、投げるつもりだ。

だが、またも反発するような感覚はやってこなかった。

大剣が、再びマヌスの腹に食べられようとしている。今度は、柄も付いていた。ついでに籠手を装備したやや筋肉質な腕も。

左腕が根元からなくなっていることに、ようやく気がついた。叫びたくなる気持ちを何とかして抑える。

離れながら、落ち着こうとした。耐久値は、まだ残っているはずだ。あらゆる攻撃を無効化するはずではなかったのか。

だが、そういう考えも、笑っているウーラシルを見て改めた。彼女達はどこか、普通を逸脱している。残り火の力を無視して損害を与えることも可能なのかもしれない。

どうにかして血止めをしようとしていると、柔らかい光が傷口を覆った。

「次は助けないぞ」

グウインは、それだけ言うと同へ走ろうとした。

だが、その前に貴樹が引き止める。

「まだ、治ってないんですけど」

大王の奇跡は、貴樹の左腕の半ばまでしか再生していなかった。肘にも届かない所で、別の作用をしている。既にほとんど傷口が塞がりつつあった。

マヌスの拳を斬りつけながら、面倒そうに答えてくる。

「シモダを基準に考えるな。この状況で完治させるのは無理がある」

「はあ、そうなんですか」

貴樹は拳を握る。これで、手に持つ武器は無くなってしまった。着ている鎧もまた、かなりぼろぼろになってしまっている。

グウインが攻防を一区切りつけた所で、指摘をした。

「そっちの剣も、駄目になってますよ」

握る大剣は、明らかに消耗していた。刃の所々が欠けている。相手

の攻撃はかなり強力らしい。特にマヌスの闇の術だ。あれにからめとられれば、どんな力があるうとも負傷は避けられない。

だが、怖がるほどのことでもなかった。全て避けていけばいいだけの話だ。

グウインもまた、余裕を失っていない様子で大剣を横に捨てた。

「備えは大事だな。あとでシモダには感謝をしよう」

「？」

「彼の力の一部を、貰い受けているのでな」

何もない空間に手をかざす。一瞬何をやっているのかと不思議に思ったが、それが見覚えのある動作だとすぐに気がついた。生徒達もしていた。インベントリとやらから、様々なものを取り出すための動きだ。

グウインはどうやら、大剣の予備を保管していたようだ。そういう便利な所を見せられると、多少は羨ましくなる。偶然を装って生徒の一人から能力を何とかして強奪しておけばよかったと、適当に考えた。

「フッフッフ。こんなものですね」

ウーラシールは、笑みを漏らした。既に彼女自体の攻略法は見つけ出していたので、その言葉も負け惜しみにしか聞こえない。

だが、遅れて理解する。彼女の声は、マヌスの隣から聞こえてきていない。

貴樹は声のした方を向いた。

グウインの腹から、女の顔が飛び出している。金髪が揺らめく炎に照らされて、暗い輝きを放っていた。

グウインが血を吐くと同時に、迅速な食事が始められた。ウーラシールは大王の体を内部から押し裂きながら、その肉を次々と食らっていく。淑女の口の大きさにしては明らかにおかしい量が、一度に飲み込まれていった。

低く呻きながら、グウインは蠢く女の顔を掴もうとした。だが、体を開けられた穴が一気に広がる。

「覆う炎は確かに邪魔ですが、内側から攻めればいいだけのこと」

女の上に、マヌスが出現した。グウインの体はその膨張に耐えられず、あつという間に破裂していく。飛び散る肉片を、二体の怪物が生懸命に貪っていた。やがて、徐々に両者の姿が変化し始める。

「蒔いた種が、このように芽吹いてくれるとは」

口を拭ったウーラシールは、全身から火の粉を立ち昇らせる。

彼女以上に印象的なのが、マヌスから発せられる淡い光だった。その毛先から、小さな炎が灯っていく。深淵の闇の中で、火の輝きが際立っている。持っている杖にも、赤い輝きが一瞬大きくなった。

ウーラシールは滂沱の涙を流した。少なくとも、表面上はそう見えている。手を握り合わせて、光がまだある領域へと熱い視線を投げている。

「この瞬間を待っていました。インベントリを与えた甲斐があつたというものです。我らは、光を克服した。アキヒロ、待っていてくださいね。すぐに参ります」

「素晴らしい」

讚えるようにして、拍手をする。

温度のこもっていない瞳が、貴樹を捉えた。

「思い描いていた通りだ。一番邪魔な、大王が消えてくれた。そのお力、素直に感服いたします。深淵の主よ。これで僕も真の目的を果たすことができるでしょう」

貴樹はにこやかに言った。

ウーラシールが、近づいてくる。

「ホークウツドはまるで見当違いのことを言っていた。貴方は、そういう男です」

「とりあえず、さっさと中に戻りましょう。邪魔者は全て消さなければ」

(ジジイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイい
いいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
やられてんだああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！ やべえやべえやべえ。よっしや、かくなる上
は…)

彼は既に、どう生き残るかを模索していた。ノミの懸念が実際に起こってしまったわけだが、違うのは貴樹自身もこれを想定していなかったということだ。楽勝だと考えていた。グウィンと共に戦えば、あつという間に戦闘は終わると。

確かに、すぐに終わった。理想とは真逆の方向で。

「そう、焦らずに」

ウーラシールは道化を見るような顔で笑う。貴樹はさらに何かを話そうとしたが、その前に頭へと闇が動いてきた。

突然のことで反応しきれず、侵入を許してしまう。それは、闇というより膿のようだった。濃い深淵が貴樹の脳内にまで侵食し、一気に制圧しようとしてくる。

「常陽の民と呼ばれる所以、わかりますか？」

貴樹は頭を押さえながら苦しんでいる。

「貴方達の器が、闇に強い耐性を持っているからです。まるで常に己の身に太陽を飼っているかのような。ですが、こうして凝縮させたものを入れてあげれば…、人形に成り果てる」

彼女はゆつたりと歩を進めて、彼の耳元に口を近づけた。マヌスの方はさらに膿を操作し、貴樹の半身を覆わしている。

「中にいる、全てを殺しなさい。貴方の愛する者も。それほど力を入れなくてもよろしい。私達も、すぐに向かいます」

「いや、だ」

「これは命令です。受け入れなさい」

貴樹は既に目の前が見えていなかった。自分の体の内部まで、脳が滑り落ちていくような心地がしている。徐々に女の囁きが大きくなっていき、数もどんどん増えていった。受け入れろという命令が、徐々に染み込んでくるようだった。

「ひもりんには、手を出さない…」

「強情ですね」

ウーラシールが、彼の頭をわしづかみにする。

その瞬間、入り込もうとしてくる力がさらに強まった。

いつか、似たような経験をしたような気がする。

絵画世界にいた時だ。残り火を分け与えすぎたせいで、グウインの侵食を許した。その時も、こんな感じだったのだ。まるで自分の心を覆い尽くそうとするかのように、不可視の何かが周りを囲もうとしてくる。

だから、同じ対応をした。自分という意識をどこまでも肥大させて、内側から侵入者を押しつける。

「いやだっつってんだろぅがあああああああああああああ！」

ウーラシールの頬に、拳を直撃させる。その勢いのまま、彼女の顔を地面に殴り飛ばした。そしてさらに踏みつけようとした所で後ろへと飛び、マヌスの攻撃を避けた。

頭を覆った膿が、地面に落ちていく。その全てが炎に包まれて瞬時に消えていった。

貴樹が身に着けている鎧が、溶けていく。ずっと腰に巻いていた火守女の衣服の欠片も、なくなっていく。

拳を打ち合わせた全裸の変態に対して、ウーラシールはゆっくりと立ち上がった。

「ならば、死になさい」

マヌスが杖を地面に打ち付ける。その頭上に、黒い雲のようなものが渦巻き始めた。

ようやく煩惱から完全に開放された貴樹は、集中をする。目の前の相手は、今すぐに排除すべき敵なのだ、意識を切り替えた。



下田は、潰れている自分の両足を冷静に治した。

「矮小な存在よ。儂の糧となるがいい」

咀嚼音の混じった、体の底まで響くような声だった。口調は落ち着いていながらも、邪悪な笑みは絶やしていない。

カラミットは、オーンスタインの抵抗を読んでいた。彼の腕を食いちぎりながら、翼を大きく動かす。胴体部分の闇が動いて、放たれた雷を飲み込んだ。

かろうじて、移動の奇跡を発動させることができた。オーンスタインの全身を包んでいき、壁に寄りかかっている下田のすぐ横に再出現させる。

槍は遠くに捨てられていたが、すぐに取りに行くような真似はさすがにできなかった。下田の治療を黙って受けている。既に兜は盾に割れて、そこから覗く鋭い目は油断なく竜達の動きを追っていた。

奇跡を消すとともに、下田は立ち上がった。片手から雷を生み出して、走ってくるアルトリウスとキアランの武器に向けて投げる。

再び雷の符呪を終えた両者は、尻尾を揺らしているミディールに向かっていく。

「弱い、弱い…。その程度で、妾を脅かすのか？」

老婆のような声を出しながら、ミディールは爪を振るった。瞬きすら許されない速度で、まとめて薙ぎ払おうとしてくる。

右手の方に、スモウが大槌を激突させた。止めることには成功するが、衝撃でその巨体が吹き飛んでいく。

もう片方の竜の手には、ノミが対応していた。彼が足の先から雷を出すと、ミディールは飛び立つ。この紫竜の方は、闇を纏ってはいなかった。それ故にどこに雷を当てても効果があるわけだが、それをカラミットがさせない。

「散開しろー！」

叫んだ直後、ノミは浮き上がっていた。それは彼自身の力によるものではない。もがきながら、徐々にカラミットの口へと近づいていた。

くくと、黒竜が息を漏らす。

「二度滅ぼしたくらいでは足りぬか？」

両目が、赤く光っている。どのような術なのか未だ理解できていなかった。ノミの膂力でも容易に抜け出せない不可視の拘束が、カラミットによって放たれていた。

上空にいるミディールが、口から大量の炎を吐き出す。周囲の建物を全て覆い尽くしていく。

下田は、周りを着にする余裕がなかった。ノミがどうなったかもわからない。ただひたすら、避難に専念していた。屋根の上に乗って駆け上がり、それでも呼吸が難しくなるほどの熱気を浴びながら、転移の光を飛ばした。

スモウが、目の前に転がる。逃げきれなかった彼は、下半身のほとんどを焼き尽くされていた。炎に耐性があるはずだが、耐えきれなかったらしい。金の装甲もまた溶けていき、灰色のデーモンの肌が露出している。

一瞬で治療を終えた下田は、立ち上がったスモウと共に飛び降りた。

「他はどっへん…」

スモウは鼻を鳴らした。

「心配は不要だ。誰だと思っている？」

瓦礫の隙間からアルトリウスが出てくる。そのすぐ横に、キアランが降り立った。オーンスタインはノミと共に吹き飛ばされてくる。下田はすぐに奇跡を飛ばし、彼らの傷を癒した。

このままでは削り切られる。

降りたミディールを観察しながら、下田は歯を食いしばった。わかってはいたが、規格外の敵だ。多少の攻撃は何の意味もない。さらにカラミットの方は、竜殺しの雷を抑え込む闇を体の一部に纏っている。それは自由自在に移動できるようで、今のところ何一つ有効な一撃を与えられていなかった。

足りない。もう少しのはずだ。あと何かもう一押しがあれば、奴らの翼をどうにかできる。

「隠れておる」

カラミットが口を開ける。下田はすぐに身構えたが、その狙いが自分達にないことがすぐにわかった。吐き出された黒い炎は、遠く離れた建物へと向かっている。

下田は舌打ちをして、自分を奇跡の光で覆った。

次の瞬間には、部屋の中に現れている。

立ち上がったシラと、比較的落ち着いているファイリアノールに向かって詠唱をした。その直後、炎が到達する。

アルトリウス達のところに戻った下田は、よろめいた。

「大丈夫ですか？」

大きな手が、クッションになっってくれる。ファイリアノールの人差し指を支えとして、ぎりぎりで倒れることは防いだ。かなり消耗している。転移をたくさん使った反動だ。

「ナイスだ、下田」

ノミは言いながらも、彼の方を向いてはいなかった。ずっと、敵の方に視線を固定している。

見下ろしてくるファイリアノールに向かって、下田ははつきりと言った。

「篝火の方まで下がってください。今は、外にいた方がましです」

「わかりました」

当たり前のように彼女へついていこうとする、シラの腕を掴んだ。相手は振り向くと、狂人でも見ているような顔つきになる。

「何を？」

「貴方は、残ってください。雷を扱える貴重な戦力だ」

「ファイリアノール様の護衛があります」

「ここから、篝火まで戻るくらいは一人でもできる。今、シラさんの力が必要なんです！」

これ以上言い争っている時間はなかった。

今度は、ミディールが接近してくる。おそらく、体を使つての直接的な戦闘はこの竜の方が強い。凶体の割に、かなり速く動く。彼女が詰めてきて、さらに遠くからカラミットの炎がやってくる。

竜の体の構造については、かつて調べていたことがあった。ヨルシカを殺す材料が少しでもないかと、オーベックの書齋をあさっていたのだ。この二匹にも適応されるかどうかは分からないが、賭けてみるしかない。

体内には、存在していないのだ。炎を生み出しているのは、ただの

呪術によるもの。ただ口内の皮膜もまた炎に対して非常に強い耐性を持つているために、吐き出す形で行使しても無問題になる。手足を動かさずとも扱えるように種族として適応しているようだった。

だから、反詠唱は通用する。その量が異常でなければ。

下田は何とかして、黒炎を全て分解した。代償として両腕が根元から灰になっていく。治すこと自体は造作もないが、相手の一つの攻撃で奇跡を使わせられるのは痛かった。

シラが、雷の矢を放つ。ミディールは横に飛んで、そのすべてをかわした。建物の外壁にしがみついてから、こちらへ向かって飛びかかってくる。

「迎撃するな！ 逃げろー！」

予想していたものと違った。ミディールは爪を振るうことなく、大口を開けている。炎を出すつもりなら、また対応すればいいだけの話だった。むしろ隙を生ませるチャンスになる。

だが、ノミの警告で下田は反射的に魔術で下がっていた。

長後、竜の口から黒い靄のようなものが吐き出される。

炎とは、明らかに違っていた。地面に着弾すると、一気に拡散されていく。触れれば、ろくなことにならないのはわかりきっていた。あの深淵の膿と、同じ感じがする。

全員が下がってこられたのを確認した。

内の一人が、膝をつく。

下田はすぐに、キアランの側にまで走った。

彼女の右肩の部分が、黒く覆われている。ぎりぎりまで、逃げきれなかったらしい。仮面を無理やり外すと、苦しそうな女性の顔が出てきた。

肩へと、奇跡の光を放つ。それで靄の侵食は止まったが、維持し続ける必要がある。光球を固定させてから、彼女を抱え上げる。

「私が運ぶ」

そしてすぐに、アルトリウスが腕を伸ばしてきた。意図はわかっている。今ここで奇跡使いの下田が少しの時間であっても抜けてしまいうのは避けたい。渡すと、彼は素早く建物の間を通りながら走って

いった。

カラミットの尻尾が、うなりを上げて迫ってくる。下田は体を傾けながら、槍を振り下ろした。同時に、オーンスタインも同じ部分を斬り上げる。

黒い肉が切断されて、地面に転がった。だが、カラミットは余裕を崩さない。すぐに再生が始まる。やはり不死の源である鱗を破壊しながら断ち切らなければ、意味がない。

「同時に」

下田が雷の弓を作り上げると共に、シラも同じ行動をしていた。さらにオーンスタインが、大きな雷槍を瞬時に形成させる。

三つが一度に放たれ、ミディールへの距離をあっという間に食い潰していった。だが、既に察知して飛ばれている。全てが空振りに終わった。

だが、下田は操作をする。今ままで温存していた技術だ。通り過ぎた矢の軌道が九十度変わり、飛んでいるミディールの足を狙った。

きいんと、耳が痛くなるような音が鳴る。カラミットの目が光っている。

狙われたノミは即座に術の範囲内から逃れ、捕らわれることなく右手をかざした。雷を黒竜に向けて飛ばす。

そして、カラミットも飛び上がった。二匹の竜とも、別々の性質を持つ炎を口の中で溜めている。二つ同時は、まだ下田も対応しきれない。かわすしなくなる。

だが、シラの矢とオーンスタインの槍がそれを妨害した。彼らの雷もまた軌道を曲げて、空の竜達へと走る。ノミのものも同様だった。それでも、ぎりぎりで届かない。カラミットとミディールは器用に飛び回って、お互いの位置を調節する。そしてミディールが雷の追跡から逃れられない段階まで来ると、カラミットが前に出る。闇を広げて防ごうとする。

重なった。

下田の見極めと完璧に一致したタイミングで、ゴーが二本の矢を放った。見えない体を解除させ、どっしりとした構えで狙っていた。

放たれた矢達は狂いのない軌道で飛んでいき、二匹の翼を同時に貫く。その時はつきりと、竜達の体が揺れた。

下田は、魔術の足場を空へ向かって作っていく。それを次々と踏んでいき、竜達と同じ高さまで上がる。

同じく、ノミも飛び上がった。足から閃光を弾けさせながら、下田よりもはるかに速く目標の高さまで到達している。彼にかまっているオーンスタインは、ノミと目配せをしてから空に飛び出した。

ミディールが、再び闇の吐息を準備している。だが、吐き出される直前で、その顔をシラの雷が貫いた。

下田は叫びながら、槍の符呪をする。ばちばちと雷が武器の全体を覆い尽くし、最も集まっている刃の先が、紫竜の首へと到達する。

正面にいるオーンスタインもまた全身の力を込めて十字槍を振り下ろしていた。下田の刃に直撃し、さらに肉を裂いていく。ミディールの爪が背中に刺さったが、それでも止めなかった。断末魔を聞きながら、首を両断する。

カラミットが、全力の咆哮を上げていた。既に地面にまで降り立っている。ノミはどうしたのかと思えば、黒竜の目に剣槍を刺してしがみついていた。

着地までの時間が、もどかしく感じる。間に合わないかもしれない。黒竜の口から炎が放たれようとしている。そうやってしまえば、ノミが危ない。

が、それは杞憂に終わった。カラミットの喉元に、大剣が突き刺さる。アルトリウスは器用に武器を離して、もがく爪から逃れた。

「くたばれ」

ノミが、片方の手から雷の塊を生み出す。そして短く吐き捨てながら竜の頭の中に全て解放した。カラミットは全身を震わせながらだらりと口を開け、大量の血を漏らしていく。アルトリウスが刺さっている大剣をずらしていき、強引に首筋を斬り裂いた。

魔術で落下の衝撃を抑えた下田は、胸を抑える。頭痛が無視できないほど大きくなっていた。目の前が揺れる心地がして、地面が急接近

してくる。

今度も、誰かによって支えられた。呼吸を落ち着かせながら、腕を掴んでいるオーンスタインを確認する。下田をしつかりと立たせると、ノミの方へと向かっていった。

竜の死体を、少しだけ確認した。体調は良くないが、次から次へと力が湧いてくる。決して勝てないと諦めていた存在を下した。自分の力だけで成し遂げたわけではないが、それでも希望を膨らませるのに十分すぎるほどだった。

篝火の広場へ戻ると、既に全員が戻ってきていた。他の敵も、大体掃討し終えたようだ。広場には一区切りついたような空気が広がっている。

今の所、大きな負傷をしている者もいなかった。一人を除いて。

イリーナが、難しい顔でキアランに手をかざしている。下田の奇跡の上にさらに重ねても、靄を取り除くことができていないようだった。

下田もすぐに駆け寄って、状態を確認した。彼女は起き上がるようにしてはいるようだが、止められている。額に大量の汗が流れていて、かなり苦しそうだ。下田は思い切って靄に直接接触して対処しようとした。何も起きない。下田にとってはほぼ無害だが、地球人ではない彼女には猛毒のようだった。

剣を取り出したアルトリウスを、静止する。

「切除は意味がありません。再生させたときにまたついてくる。そういうものです。これ自体を根本から破壊するしかない」

オーンスタインが、前よりも近づいてきている光の境界線を見やっ

た。
「大王様なら、処置が可能だ。すぐに戻ってこられるはずだ」

「いや、それよりも」

下田は顔を上げる。

ヨルシカとちとせが、ちょうど視界に入った。彼女達も同じく、苦しんでいるキアランに注目している。下田が見ていることに気が付くと、同時に不思議そうな顔をした。

「彼女達か」

そして同じく集まっているフォドリックとホレイスを、指差す。

「その二人でもいい。炎を開放して少し移せば、取り除くことができます」

「今すぐ治せるのなら、その方がいいな」

アルトリウスが同意した所で、派手な物音がした。

全員がその方向を見る。煙の上がっている瓦礫から、何かが咳き込みながら這い出てきた。

それが貴樹だとわかった直後、さらに驚かされた。

どう考えても、彼は満身創痍だ。両腕を失くし、全身を血で染めている。戦いの前に意気揚々と選んでいた防具は見る影もなく、肉が露出している腹を手で押さえていた。

下田は反射的に奇跡を飛ばしていたが、未だに状況を理解しきれていなかった。そろそろ戻ってきてもおかしくはないと思っていた。だが、こんな形でなどは全く予想していない。

戸惑いは、少しの間だけだった。

心配が、生じる。

かつて感じたことのある、押しつぶされそうな威圧感。顔を上げ、その姿を見ることがさえできなかつたほどの重圧が、状況を克明に示していた。

「ままならないものですね。口先ばかりの竜達でした」

それらは屋根から飛び降りて、静かに着地した。

ウーラシールの視線は、固定されている。下田の方だけを見つめている。焦がれ、強く求めているようだった。期待が、作り物の表情として表れていた。

「少し…、痛みますよ?」

全員、離れろと叫ぼうとした。だが、声を出そうと口を開けた直後、手で覆われる。顔を掴まれたと認識した時には、もの凄い勢いで投げられていた。同時に、両手足がもがれていくのがわかる。何をされたのか、わからなかつた。一瞬で抵抗力を失わされていた。

下田は成すすべなく吹き飛ばされていく。いくつもの建物を貫通

しながら、篝火から強制的に離されていった。



何のために生きているのか。

そう、考えてばかりいた。

「アキー！」

隣で、ちとせが立ち上がる。走り出そうとしたが、すぐ前にいたジークバルドに押し倒された。すぐ上を、闇が通り過ぎていく。

「守れ！」

自分の事は、ずっと嫌いだった。前は、わからない。もう覚えていない。ただ今はひたすら嫌悪していた。膝の力が抜けて、立ち上がることすらできない。突如として現れた存在を見ているだけで、体中の震えが止まらなかった。

「まずは」

たった今、下田を遠くへ飛ばした女は、思案するように顎に人差し指を当てた。平坦な声を少し出してから、地面を蹴る。それだけが、辛うじて認識できた。

「回収をしましょうか」

おぞましい化物。巨大な角を持ち、獣とも人間とも言えるような特徴を併せ持つ存在。それが、肥大した左手を振るった。先から爪のような形の闇が飛び出して、まだ呆然としている老兵を斬り裂く。

フォドリツクは、それでも何とか対応していた。致命傷だけは避けている。離れようとしていた。

だが、闇に捕まる。それらは無数の手となって、あつという間に彼の四肢を破壊した。

金髪の女が近づき、風前の灯火であるフォドリツクの顔に手を添える。

変化は、すぐに訪れた。

フォドリツクの全身の力が抜けていくと同時に、その体から炎が噴き出してくる。それは女を害することなく接近していく、全身へと溶け込んでいった。

何が起きたのかは、理解できない。それでも、何か吸収されたのだけは分かった。女と怪物の存在感が増していた。それは恐怖の増大をも意味していた。

「お爺ちゃ……」

我を忘れて駆け寄ろうとしたシーリス。そこに、怪物の手が迫る。

直撃する前に、貴樹とジークバルドが割り込んだ。

先生、と新宮は声を漏らす。だが、彼女は十分に理解していた。こんな自分が、もはや現実にいた時と同じように誰かを呼ぶ資格など存在しない。

拳は防がれていたが、無駄だった。怪物の体から闇の針が歪曲しながら伸びていて、貴樹やジークバルドを器用に避けている。そしてその先端は、シーリスの首を貫通していた。そのまま横に薙ぎ払われて、新宮と同じくらい少女の首が落ちていく。

女の方は、既に別の相手を殺していた。ホレイスは両手をだらりと下げて、脳に侵入してくる膿を受け入れる形になっている。そこから先ほどと同じような炎が流れていき、女に全て呑み込まれていった。

「♪」

何かを、口ずさんでいる。女は無表情だが、楽しそうに歌っていた。そのメロディーは、聞き覚えがある。アメージング・グレイス。綺麗な英語の発音だった。脳をたいして操作されていない新宮は、言語をはっきりと認識できる。

アンリがその背後を取ったが、すぐに血を吐いた。あ、と新宮は思う。今のは助けられた。なぜなら、理解していたからだ。女がソウル

の矢を不可視化させて、自身の周りを漂わせていたのは分かっていた。だが、動かない。口すら機能してくれない。

場には怒号と、歌声だけが響いていた。金髪の女は透き通るような声をしていたが、なぜかずつと腹の底をむしばんでくるような気持ち悪さが拭えない。歌っている曲も優雅なものなのに、吐き気が止まらなかった。

「…死ね」

貴樹が短く言ってから、怪物の角にしがみつくと。そして全身に力を込めて、折ろうとした。だが、最後まではいかない。簡単に怪物の手に拾われると、下田と同じような軌道で思いつきり投げ飛ばされた。その姿は、瞬時に遠くへ消えていく。

大狼が、牙を剥き出しにして怪物に飛びかかる。マヌスはその歪な図体からは考えられないほど綺麗に体を晒し、避けながら巨大な手を振った。シフはその動きについていけず、張り飛ばされた。

同時に、三人が女を斬り刻んだ。

黄金の兜と鎧を持つ獅子の騎士は、怪物の術を器用にかわす。

続く腕の薙ぎ払いは、ノミが対応した。傍目からは、上手く弾いたように見える。

最後、群青の騎士は女の口の中に剣を差し入れていた。

楽しそうに、ウーラシールは血を吐いた。

「大王も喜んでいましょう」

新宮には、炎の輪が広がったとしか思えなかった。それらが彼らに纏わりつき、掴んで、飛ばす。だが、それだけではないのは感覚している。目で閃光を、耳で雷の弾ける音を確かに聞いたからだ。

結果だけはわかりやすかった。放たれた術は大きな衝撃を生み、食らいっこうとしていた者達を簡単に飛ばしていく。屋根の上を通り過ぎていくノミの体は、三分の一ほどが欠けていた。オーンスタインもまた、下田と同じ方向へ転がっていく。

対応できたのは、アルトリウスだけだった。

「逃げろ」

その騎士は自分に言っているのではないと、新宮は直感する。彼の

払うような手は、真つすぐある女性の方へ向けられていた。あるいは、その隣に立つホークウッドも含めた両方か。

彼とミレーヌが呆気に取りられている中で、アルトリウスは数秒間健闘した。

「サナ」

声が、そばでする。降ってくる。

少しだけ、今までのことを思い起こさせるものだった。棺から引つ張り出されて、最初に見た顔。何度も見た顔。

「他の者達を連れて、逃げるのだ。シモダらはまだ生きている。その方へ走れ」

震えている、親友の顔を見る。

実織は昔から、どこか精神的な脆さを見せる時があった。いや、その表現は正しくないかもしれない。戸水家の長男と長女を基準に考えてはいけなかった。彼女は、普通の女の子だ。それだけなのだ。

だから、守らなければならない。

ようやく立ち上がると、グンダと相対した。彼の瞳は静かだった。結局、身に着けている兜の下を見ることはできなかった。

そんなのに、未練はないけど。

新宮は心の中で、唇を尖らせた。強がりのようなものだ。足は未だ震えているし、もう泣いている。恐怖が、思考を鈍らせている。

アルトリウスの片腕が、捻じ曲げられた。その頬に口をつけて、ウーラシールは囁く。

「男は四肢をそいだまま生かしなさい。女の方を、目の前で犯しなさい」

騎士が、吠える。それは今までの理性的なものではなくなっていた。ただの獣だった。闇の泥がアルトリウスの全身に染みわたっていき、その性質を決定的に変えていた。ただの深淵の人形に成り果ている。

怪物が闇の輪を発生させて、アルトリウスだった何かと、ホークウッド達を囲む。ミレーヌがその輪に近づこうとしたが、止められていた。彼らは閉じ込められた。二人へ、大剣を片手に抱える獣が疾走

していく。

スモウの打撃は怪物によって容易に受け止められた。返す闇の濁流が、金の顔を呑み込んでいく。少しの間もがいていたが、すぐに動かなくなる。

急に飛んできた巨大な矢を、ウーラシールは軽々と掴んだ。マヌスの方が、瞬時に腕を伸ばす。新宮にとっては、ほとんど何をしたのかわからなかった。だが、次の瞬間には毛むくじやらの手が戻ってきている。その中には、巨人の首と、その身の丈にふさわしかったであろう弓が握られていた。不可視化を解除したゴーの胴体が、屋根から転がり落ちてくる。

ウーラシールはそれを満足げに見てから、こちらに注意を向けてきた。

「ううん」

新宮はグンダを真つすぐ見た。それだけで、グンダもまた理解をしたようだ。

目覚めた時、周りには閉じられている棺桶しかなかった。数は三十。それがクラスの人達の数と一致していると考えようになったのは、少し後になってからだ。その時は、記憶の整理をすること、で精一杯だった。滅びの記憶。学校が破壊され、化物があふれて。それでも生き抜こうとした記憶。それでも、駄目だった最後の記憶。

貴方は道具。

祭礼場から、そう何度も言われた。自分には、ソウルが二種類混ぜられている。だから、貴重な能力を得られたのだと言われた。

わけもわからないまま、親友の姉とも再会することになった。薫は、全てをわかっていた。ただ従えばいいと、新宮に向けて苦しそうに言っていた。

記憶を、削除する。眠っている同じ地球の人達を統制するために、整理する。当然そんなことは、できるわけがなかった。だが、圧倒的な力を前に従わされる。何度も、結局は自分の命が大事なのだ、痛感させられた。

他の皆が目覚めるまでの間、彼女はいくらかの鍛錬を施されて、後

は部屋に閉じ込められていた。そんな時、度々やって来たのがグンダだった。

イーゴンが光を放つ。だが飲み込まれていく。彼の体もまた、怪物の毛の中に吞まれていった。イリーナが悲鳴を上げる。篝火から離れて、何とか奇跡を使って救い出そうとする。結局それは、彼女も巻き込まれるだけに終わった。

ジークバルドは大剣を折られる。カルラの呪術によって事なきを得たが、結局結末は変わらなかった。ウーラシールとマヌスはゆっくりと進んでくる。

「駄目だ。サナも行け」

ごめんなさい、と答えそうになった。その声は厳しい。今までかわしてきたグンダのそれとは異なっている。

ずっと、そうだった。目の前の戦士は、新宮を慰めようとしていた。今までは罪悪感に駆られた行動だろうと嫌っていたが、今は違う印象を抱くことができる。

「実織」

「いや…」

「実織、行って。早く。時間くらいは稼ぐよ」

離さないとばかりに抱き着いてくる。その体温を少し感じてから、急に相手の存在がなくなった。

クリムエルヒルトが、せえせえ息を荒げながら立ち上がる。周りを見ると、ほとんどの残っていた者達が消えていることに気がついた。転移させたのだ。実織も、ちとせや高坂も。そして、火守女も。

いや、よく見ればちとせは違った。ヨルシカが彼女を抱え上げて、そのまま逃げている。どちらにせよ正しい行動であることは確かだった。

「逃げるんだ」

グンダはまだ、渋っていた。

彼の腰を杖で叩く。

新宮の横に、薫が並んだ。クリムエルヒルトも、決然とウーラシールを見据えた。

「フリーデ、ごめんね」

薫の懺悔を聞きながら、グンダの苦しそうな顔を見上げた。

「駄目だ、サナ。吾輩は、曲がりなりにもタカキと約束したのだ。お前達を守ると」

正確には、貴樹の生徒達を。

その歪な気真面目さには複雑な思いがした。どうせ最後は篝火に捧げるつもりだったのに、そういう約束をして、律儀に守ろうとしているのは、グンダらしいような気がする。この男も、苦しかったのだろうか。同情はしないと、固く思った。

「却下」

新宮は息を吐き出した。それから、グンダの腕に手を触れる。

「その約束、もう忘れてね。いい？」

グンダは斧槍を構える。それでも、ちゃんと新宮と目を合わせてくれている。段々と優しい瞳を向けてくるようになった。

「私だけを守って。一緒に、いて」

新宮は詠唱をした。

己を鼓舞するように、はつきりと大きく。

ままならないものだ、新鮮な気持ち味わっていた。そのじれったさですら、今は愛おしい。

口元の血を舐めとりながら、女は進み続けた。

気配が飛んだ先を正確に把握している。篝火をいじる選択肢もあつたが、結局追うことにした。待ちきれないという気持ちは、初めてなのかもしれない。姫であった時も、もつと素晴らしいものになつてからも、そんな感情は持ち得ていなかった。

泣き声が、感覚できた。

また開けた場所に出る。まだ熱気が残っていた。おそらく、あの役立たずの竜達が戦っていた場所なのだろう。遠くに、大きな死体が二つ見えていた。

そして手前では、女達が固まって座っている。

まだ平気そうなのは、真ん中の火守女だけだった。彼女は真つすぐこちらを睨みつけている。

その顔を血で染めることくらいはしてもいいだろう。主菜までのつなぎだ。

そう思っていたが、予定を変更せざるおえなくなつた。

建物の上から、かつて多くの竜を屠っていた太陽の長子が飛び降りてくる。

同じく、竜狩りの騎士が槍を握って通りから歩いてきた。

女達の前に、焦がれてやまないシモダアキヒロが立つ。左右には、また別の女を従えていた。

それに、何か思う所があつた。

嫉妬ではない。

さらに美味しく彼を味わえる方法を、見つけたから。一つずつ、彼の前で大事な存在を裂いていく。その娯楽を存分に楽しんでから、いただく。ウーラシールは純粋な感謝もしていた。まだ自分に、そういう感情があるとは思ってもしなかったのだ。それを見つけてくれた下田に、感謝をする。

最後に、唯一少し誤算だったかもしれない存在が、拳から炎を弾け

させた。

「ぶっ殺す」

貴樹の殺意を受けながら、ウーラシールは薄く笑った。

少しは余興になってくれればいいと願いながら。

73. クリア

ちよつとずるかったかなど、場違いな回想をする。

本当は、それほど不安ではなかった。あまりにも彼の存在が大きすぎた。だから、もつと構ってもらうための言い訳のようなものだった。

子供の頃から、孤独だった。物心ついた時には、親や兄と妙に考えがずれることが多いと気が付いていた。

事故で家族全てを失くし、孤児院に預けられてからも同じだ。大人は優しくしてくれたが、同じ子供達からは排斥されていた。彼らの意見を総合すると、ミレーヌは何を考えているのかわからない、不気味な相手らしい。

できる、ということ誇らなくなったのはそういう背景も原因かもしれない。頭の構造が、普通の人とどこか違ってある。ギフテッド。彼女は十歳になった時、既に英語、フランス語、ドイツ語、中国語、ラテン語を習得していた。資格を取りつくしていた。

だが、結局そんなものはあまり意味がない。想像もつかないような事態に巻き込まれた時、頭がいいだけの子供なんて流されるだけの存在になる。

少し、不安ではあった。あの女、ウーラシルが並べ立てたもの寸分の狂いもなく一致していたからだ。グウインから記憶を戻してもらった時、ぞつとしなかったと言えば嘘になる。だが、自分のこれまでを疑うような真似はしなかった。

戦いの前夜、ミレーヌはホークウッドの温もりに触れながら、決意していた。彼と一緒になら、どこまで行ける。自分という存在をいつまでも確信してられる。だから、絶対に二人で生き残るのだと。そう、何度も自分に言い聞かせた。

劍戟。

弾かれる。どちらなのかは、言うまでもない。

ホークウツドの片腕が、へし折れる。

「ミレーヌ」

自分の呼吸を感じていた。荒くなったまま、戻らない。焦るほど、状態は酷くなつていく。武器を持つ手に力が入らない。

「ミレーヌ、聞いてくれ」

獣が、飛ぶ。

騎士だった何かが、獣じみた叫びを上げながら突進してくる。

彼女は短く息を吸いながら、刃をきらめかせた。筋はわざわざ意識せずともなぞられていく。何度も修練したからだ。かつて、大切な男が目覚めるのを心待ちにしながら、彼に恥じるどころがないように、吐くほど繰り返し返した。

だが、手応えがない。アルトリウスは大剣を滑らかに動かした。少なくとも、彼女にとってはそう見えていた。もはや全盛期の力ではないのだろうが、そうでなくとも隔絶した実力差のせいで、まともな剣筋だと勝手に認識する。

成すすべなく首に刃が入るのを待っていたミレーヌは、いつまでも最後の瞬間がやってこないことによく気がついた。

「お前なら、抜け出せる。逃げろ」

ホークウツドは叫びながら、アルトリウスを押し返した。さらに追撃で短剣を投げるが、相手は宙返りをしながら華麗にかわしていく。着地した後は、折れた左手をぶらりと下げながら、姿勢を低くした。本当に、動物のようだった。

ミレーヌはその威圧感に押されて、無意識に後ずさっていた。だが、後ろのおぞましい気配を感じ、強引に足を止めさせられる。

自分達を囲むようにして、闇の靄が広がっていた。円形の空白地帯を、作り出している。

確かに、彼女自体は抜けられるかもしれない。さきほど吹き飛ばされて腕がわずかに靄に触れた。それでも、何ともなかった。

ホークウツドは違う。彼の顔の右半分は既に毒に侵されていた。

彼の方は決してこの閉ざされた場所から逃げられない。それはつまり、ミレーヌもまた逃げられないということだった。彼女にとって、見捨てる選択肢は絶対にありえない。

「やだ…」

「お願いだ」

「貴方と、一緒にいる。一緒に死ぬ。私の前からいなくならないでつて、約束したでしょ」

徐々に、視界が暗くなってきたのがわかった。それは、ほとんどが殺されてしまったという絶望に起因しているだけではない。本当に、篝火の明かりが弱くなってきていた。奥に見える闇の境界が、徐々に近づいている気がする。

ミレーヌは深呼吸をしながら、大剣を構えた。刃から、炎が漏れる。お願い。強く望んだ。宿っている薪に、今だけは助けを望んだ。

ホークウッドと目を合わせてから、左右に散る。

ちように真ん中の部分にアルトリウスが着地した。常識から外れた速度だった。武器を振るう速さも、全身全霊で意識しなければ捉えきれない。恐ろしいのは、相手は片手で大剣を振り回している点だった。正気を失ってもなお、驚異的な強さを誇っている。

救いなのは、一体だけだということだった。相手は一見、人の構造を保っている。二方向から同時に攻めれば、必ず対応できない場面が出てくるはずだ。

ホークウッドとの呼吸は、ぴったりと合っていた。アルトリウスは彼の方を向いている。ミレーヌはその背中に向かって、全力で刃を振り下ろした。

腹に、灼熱を感じる。

反射的に下がっていたのが、致命傷を避けた要因だった。

目の端でとらえた限りでは、アルトリウスは体を回転させたらしかった。ほぼ同時に、彼女とホークウッド両方の斬撃へ対応してみせた。それだけではなく、こうして反撃をも加えてきた。

追撃は、ミレーヌの方にやっつてはこなかった。

「だめ！」

ホークウッドはバランスを崩していた。片足を丸ごと斬り取られたのだから、当然だ。倒れ行くその体に向かって、アルトリウスが接近していた。

ミレーヌは悲鳴のような声を出しながら、前へと飛んだ。かわされることなど想定もしてない、ただ自分の体を、剣を割り込ませるだけの動き。

その叫び以上に、獣の声が大きく轟いた。

ホークウッドのもう片方の足を切断した剣が、そのままの勢いでミレーヌに流れていく。それは彼女の急所どころか、体すら狙っていないかった。

両手に、異常な痺れを感じる。少したつてから、自分の武器が飛ばされていることに気がついた。直後、腕を掴まれて、思いつきり投げられる。

受け身すら取れずに、ホークウッドの側に転がった。

「逃げる、逃げてくれ……」

ウーラシールの言葉を、思い出す。

そう、初めから、相手はミレーヌをあまり傷つけようとはしてこなかった。あくまでその攻撃はホークウッドの方に集中している。四肢を斬り落とし、生かす。そして彼の目の前で、ミレーヌを。

彼の目は虚ろになりかけていた。出血がひどい。やはり、アルトリウスは下された命令を守り切ってはいない。ホークウッドは死にかけている。

「ホーク」

這いずりながら、彼の唇に触れた。少し前に剃ってあげた髭の跡がわずかに残っている。少し笑ってから、深く接吻した。

たとえばどうなるにせよ。心だけは留めておくつもりだった。どんなことに惑わされない。ただ嫌なのは、愛する人に見られることだった。

アルトリウスが手を伸ばしてくる。ミレーヌの方に。殺すためではない。同時に、鎧を脱ごうとする動きもあった。

兜が外れかかった瞬間、俊敏な影が飛び込んできた。

迫る手が止まる。ミレーヌは、ゆっくりと顔を上げた。

アルトリウスの首に、曲刀が刺さっていた。反対側の肌には、短剣が浅く食い込んでいる。その刃は銀色に輝いていた。闇に近づきつつある空気の中で、それはとても際立って見えた。

キアランは、相手が倒れても刃を動かし続けた。うなじに深く刺し、いき、かき乱す。アルトリウスが暴れた時間は、わずかだった。こつと切れた群青の騎士の上にまたがって、象牙色の髪の女性は、宙を眺めていた。

だが、その表情はよくわからない。顔のほとんどが闇の霧に侵食されてきたからだ。体も同じだった。キアランは篝火の側で倒れてははずだ。闇の円の外にいた。それなのに無理やり入ってきたので、侵食が進むのは当然だ。

彼女は片手をアルトリウスの頬に添えると、囁くように言った。

「我が友。最愛の…」

霧が晴れていくと同時に、寄り添うようにして転がった。ミレーヌは息を乱しながら、確認する。かつて伝説にも謳われた騎士達の死体は、今はもう親しい男女が並んで眠っているようにしか見えなかった。

俯き、涙がこぼれる。

わずかに呼吸をしているホークウツドの顔に、雫が垂れていく。

「行かないで、一人にしないで……」

のそりと、毛深い前足が近くに立った。

初めそれを幻だと考えていたが、はつきりとした生き物の息遣いが聞こえてきて、ミレーヌはびくりと上を見る。

「血を」

巨大な狼は、自身の頬から血を流していた。静かな瞳を彼女に合わせながら、さらに顔を前に出す。赤い流れが、ホークウツドの側にまできた。

「彼を再び、狼血の誓約へ導く。時間がない」

ミレーヌは継るような気持ちで、狼の血を彼の口へ入れ始めた。途中から、下田に対してヨルシカが使っていた方法を真似ていく。そし

て徐々に、彼の顔色が戻ってきているのが分かった。

彼女は同時に、奇跡も使い始めた。昔少し修めただけものだ。ホークウツドに褒められるための道具みたいなものだった。だが何もないよりはましだ。両足と、肩口にある傷を塞いでいく。止めどなかった血の流れが緩やかになり、やがて止まった。

シフはそこまで見届けると、ゆっくり前足を折る。ミレーヌに向かって、深く頭を下げる格好になった。

「傲慢だった」

深い声は、淡々と言葉を紡ぐ。

「深淵の監視者とは、本来そうあろうと望んだ者、あるいは少なくとも自ら戸口を叩いてきた者に対してのみ、課せられるべき責務だ。だが、我々はお前の外見と素質に吸い寄せられた。手遅れだろうが、謝罪をする。恨まれても仕方がない」

ミレーヌは黙って聞いていた。語っている狼の瞳をずっと観察していた。それが心からのものなのか、疑うように。

それは相手もわかっているようだった。目をつぶってから、顔を別の方へと向ける。

「私は、仇を取るつもりだ。この身が果てるまで、深淵に対する。落ちて着いたら、来るがいい。強制はしない。他にもまだ、戦っている者達がいる」

シフはそう結ぶと、力を振り絞るようにして駆けていった。その姿が完全に見えなくなるまで、彼女はじつと座っていた。

ホークウツドの呼吸が安定したのを確認すると、立ち上がる。これから何をすべきなのか、未来のために何をしなければならぬのか。考えたミレーヌは、まだ抗おうとしている篝火へと向き直った。

その中にある楔を、眺め続けた。

◆
背後に迫りつつある闇を感じる。

前よりも、濃くなっていた。おそらく、まだ先がある。完全に光が失われるまで、侵食は止まらない。

だが、境界線は止まっていた。

額から汗を流しながら、四メートルは優に超えている大きな女性が祈っていた。

「固定しました。ですが、あまり長くは。どうか…」

フィリアノールの前に、シラが立つ。斧槍を立てて、死守する構えを取る。

貴樹は拳の骨を鳴らしながら、まだ余裕そうに笑っている敵達を見た。もっと早くやってくると思っていた。下田から治療を受ける時間が残されているとは思っていなかった。

つまり、時間を稼いでくれた者達がいたのだろう。おかげで、この場にいる者達は戦える状態を取り戻した。

不快感は最悪の段階まで行き着いている。

(調子に乗ってんな。こいつら)

彼には、悲しむ気持ちが存在していなかった。ただ、目の前の敵を捻り潰して、すつきりしようと考えている。自身の作品を外から汚い泥で台無しにされた気分だった。許されない行為だ。

歩いていくと、ノミが横に並んできた。

「訊きたいんだが」

貴樹は中指を立てる。黙れ死ぬ、という意味合いを十分に込めて示したつもりだったが、相手は構わずに続けた。

「親父は、死んだのか?」

「そんな感じだ。奴らの腹の中で元気にやってるだろ」

「つまり、王のソウルも吸収されて、相手は完全体になったわけだ」

たいして変わらないと、貴樹は思っていた。本来は、頃合いを見てマヌス達を光の中に引きずり出す予定だった。そして弱った所を叩

きのめす。それは無効となった今でも、別に叩きのめすこと自体はできるはずだった。であるのなら、変わりはない。

「時間ありません」

下田と一緒に歩き始める。彼は戦えない者達を奥へと下がらせていた。だが、意味はないのかもしれない。もはや、逃げ場はどこにもないのだから。

「情報を共有しましょう。少しは、戦ったんですよ」

「変な術を使うくらいだな。あと、女の方も馬鹿力だ」

「なるほど」

「関係はない」

オーンスタインは、主がいなくなっていることの動揺を上手く抑え込んでいるようだった。あるいは、今はノミをその対象として見定めているのかもしれない。

「敵は、滅ぼすのみ」

騎士が言いきったと同時に、全員が走り出した。

ノミが叫ぶ。

「伏せろ！」

（わかってるよアホ）

マヌスの腕が伸びて、手を目一杯に広げながら薙ぎ払ってきた。貴樹は体勢を低くしながら、その攻撃をかいくぐる。ほとんどの者達は対応できているようだった。自信なのか慢心なのか知らないが、下田だけは片手を持っていかれている。

もちろん、一撃を凌いただけでは安心できなかった。毛むくじやらの腕から闇の霧があふれ出し、ノミとオーンスタインに向かう。一方で、黒い手が高速で伸びていき、下田と貴樹の首を狙っていた。

お互いの位置を交換する。

貴樹は霧を殴りつけた。手応えはまるでないが、晴れていくのが分かる。拳に纏っている炎が、打ち消しているようだった。

オーンスタインが連続で突きを放つ。同時に、ノミは大きく剣槍を振るった。風切り音と共に、複数の手が刻まれていく。

残る下田は、ウーラシールへ接近していた。ファランの速剣を両手

に生やして、彼女の胴体を裂く。

かに思えたが、結局負傷をしたのは彼の方だけだった。

「その調子です。もっと、ください」

もごもご言いながら、女の声が蕩ける。下田の両腕があつという間に喉の奥へと入り込んでいった。その瞬間、下田は嘲笑する。

ウーラシールの腹の中から、ソウルの矢が十本ほど飛び出してきた。斬られた腕の感覚を手繰り寄せて、術を行使した。さらに女の口から炎があふれ出す。

それは下田の呪術のように見えたが、違った。炎を、ウーラシールは自分から吐いている。まるで竜のようにあたりへまき散らした。

その隙間をくぐっていきながら、貴樹はマヌスの顔を殴りつける。ぎよろぎよろと、多くの目が見てきている。二本の巨大な角にびつしりと、瞳が出現していた。気持ち悪いと思いつながら、その一つ一つから形成されていくソウルの弾丸を視界に収める。

下がるうとしてもできなかつた。両足に闇がまとわりついている。貴樹は足に炎を集中させながら、のけぞった。

鼻先を、剣槍が通り過ぎていく。

マヌスへと直撃する直前で、止められた。

ノミは呻く。

ウーラシールは目を細めながら、刃を掴み続けた。そのままノミは引き寄せ、口を大きく開けていく。頬にまで裂けていき、巨大な牙が伸びてくる。

オーンスタインが、その顔に槍を刺した。彼女の動きが止まる。

同時に、下田が無数のソウルの弾丸を消していきながら、マヌスの顔を蹴り飛ばした。意外にもあっけなく、怪物は横に飛ばされていく。

ウーラシールは舌を出しながら、自身の周りに雷を発生させた。その大きさは今まで見た中で段違いに大きい。四つの矢となって、食らいつこうとしている周りの男達へ一斉に放たれた。

貴樹はそれを蹴り上げる。

ノミは同じものでぎりぎり相殺する。

下田は半身をもぎ取られた。

オーンスタインは、かわした所で彼女に殴り飛ばされる。

貴樹もまた、今ので耐久値をぶっすり減らされたのが分かった。そう何発も受けられるものではない。かといって、とっさにかわすことも難しかった。

「タネはわかりました」

血まみれになった下田が、大声で言う。

「おそらく、交換をしています。そいつらは、強固なつながりを持っている。お互いの力を入れ替えられる。マヌスの臂力がウーラシールに移った時が好機です」

実際はその反対を狙うのだとわかりきっていた。でなければ、相手にも理解できるように言うはずがない。嘘だろうが真だろうが、敵はその行動をしづらくなる。狙いを外そうとしてくる。

ウーラシールは、真つすぐ下田へと向かっていく。

だが、到達する前に立ち止まった。

彼女のすぐ前に、剣が振り下ろされている。

「まだ…、とっておきたかったのに」

少し残念そうな顔の先で、ヨルシカは荒い息を吐いていた。既に片腕を根元から闇の手によって引きちぎられている。すぐに再生されていくが、それを許さないかのように二撃目が迫っていた。

「どのように、苦しませてあげましょうか」

背後に潜んでいたリリアーネが、飛んできた魔術を短剣で弾き落とす。側にいるユリアも、刀を術の合間に相手へ刺し込もうとしていた。

だが、成功しない。刀の先は折られていた。ヨルシカの腹に穴を空けてから、ウーラシールはユリア達へと大口を開ける。

上から、下田が槍を向けながら降ってくる。それは正確に相手の喉を貫通し、地面にまで顔を叩きつける。槍の先は地面に刺さり、女の体を縫い付ける形になった。

貴樹は攻撃をギリギリでかわしていきながら、マヌスの角にしがみつく。壊しがいのある大ききだと思っていた。今度こそはという思

いで。折ろうとする。

直前で、上の様子がおかしいことに気がついた。マヌスの左手が揺れ動き、杖が振るわれる。闇の渦が大きくなっていき、そこから無数の塊が落ちてきた。

全員が、離脱を余儀なくされる。それも完璧ではなかった。オーンスタインとノミは少し逃げ遅れ、その身に闇を受ける。取り返しのつかない所までは行かなかったが、明らかに彼らの動きが鈍ったのが分かった。

貴樹は既に、自分の意思が揺らいでいるのがわかった。土下座でもすればいいのかと考えている。

どう考えても、このままだと負けるのはこちら側だった。段々と削られてきている一方で、相手は未だ万全のように思える。前までは、明確な弱点があった。貴樹の攻撃が一番効果があったかもしれない。今は、炎を克服されてしまっている。いくら注ぎ込んでも、こちらが危険になるだけだ。

「タカキ様」

下田達が戦っている中、腕に誰かが触れてきた。

振り返らずともわかっている。声と、肌の感触は絶対に間違えることはない。

火守女は、何かの決意をしたようだった。前に回り込んでくると、色の違う両の瞳を凜と向けてくる。

「お願いします」

「いや…、無理だ」

「可能性があります。惜しむ必要はありません」

「俺は、君をちゃんとした女性として…」

「負ければ、誰も残りません。私は、そんなのは嫌です。どうか」

ノミが地面に叩き付けられる。剣槍が、マヌスの指によって折られていた。さらに指先から雷が発生する。立ち上がろうとしている彼を狙っていた。

オーンスタインはそれを消し去ろうとしたが、予測していたマヌスが杖を直撃させる。そこから闇があふれ出して、獅子の右腕が犠牲に

なった。十字槍が、地面に落ちる。

ウーラシールはリリアーネは掴むと、マヌスの背中に向けて投げた。抵抗する間もなく、毛の間に体が受け止められる。

下田は怒号を発しながら突っ込もうとしたが、首を魔術によって貫かれた。リリアーネはもがいているが、徐々にマヌスの中へと取り込まれていく。

(…くそ)

貴樹は目に力を込めた。それしか方法がなかったのか、最後まで考えていた。

予想していた叫びは聞こえてこなかった。それでも、白い光が凄まじい速度で走っていく。その方向を制御するのはかなりの集中力が必要だった。

マヌスの右肩に、穴が開く。前までのように、膿がそこを覆うことはなかった。

リリアーネが吐き出される。彼女が着地した側に、一本の角が転がった。

敵も下田達も顔を向けた先で、貴樹は空を飛んでいた。正確には翼を生やしている火守女の腰に捕まっている形で、全員を身下ろしている。

前のように、暴走することはなかった。今は、瞳が戻っているから。それにその片方を所持している貴樹が、それを防いでいた。彼女の理性を保たせている。

それでも火守女は、苦しそうに光を形成させた。天使の光線がいくつもその軌道をなぞっていき、マヌスとウーラシールを貫く。

マヌスの方が、おぞましい咆哮を上げた。杖から黒い煙が放出されていき、無数の闇の針を作り出していく。そのほとんどが火守女を狙っていた。今や、一番の脅威になった相手へ向けられていた。

降り立った彼女の前に、貴樹が立ちふさがる。飛んでくる攻撃のほとんどを叩き落とし、炎で呑み込み、それでも取りこぼしたものは下田が落とした。

霞んでいる白い翼を生やした存在の前に、男女が並んだ。

貴樹は少しの間振り返り、微笑む。

「座標は任せる。タイムリングは、俺がなんとかするよ」

「はい、お願いします」

火守女も同じ表情を返していた。戦いの最中にも関わらず、嫌だった力を行使しているのにも関わらず、穏やかだった。貴樹への全幅の信頼が、彼女の状態を維持していた。

もはやウーラシールは、笑みを消していた。下田への得物を見るような視線は一変し、その対象も変わっている。はつきりと、火守女へ憎悪を向けていた。それだけは初めて、作り物ではないのだと感ぜられた。

「無駄な足掻きを…」

マヌスの開いた穴から、どろどろと何かがこぼれていた。それは溶けた金属のような見た目をしている。

貴樹が最初に突っ込んだ。マヌスの振るわれる拳を殴り返して、他の者達の進む道を確保していく。

下田達も、続いてウーラシールの抑え込みにかかった。全員が待っていた。貴樹の一声を。再び光が走るのを。

「離れろー」

彼らは、その声と共に離脱する。敵もまた追いかけようとしたが、その前に数本の光線がその足止めをした。ほとんどが、マヌスに直撃している。張っていた魔術の防壁も、闇の靄も何もかもを貫通して、怪物に深い傷を与えていた。

「もう一度だ」

繰り返せば、勝てる。

そう思った時、顔に固いものが当たった。

何かの障壁のようだ。

それを押しのけようとした所で、真実に気が付く。

「おいー」

ノミが切羽詰まった様子で叫ぶ。だが、貴樹にはそれに答える余裕がなかった。何かが入み上げてくる感じがして、耐え切れずに咳をする。地面が大量の血で染まっていた。

倒れているのは、彼だけではない。下田も同じように苦しんでいた。見た所体のどこにも異常がないのに、気を失いそうになるほどの苦痛が全身を駆け巡っている。まともな思考ができない。何が起こったのか、わからない。

「間に合って、良かった」

ウーラシールは余裕を取り戻していた。そして、溶けている何かの部品らしき金属を愛おしそうに拾い上げる。

「まさか…」

下田は何度も自分に奇跡を使っていた。だが、回復する様子がない。つまりこれがただの術による損害ではないということだった。もっと根本的な何かが攻撃されている。まるで、細胞が続々と死んでいくような。

下田もまた、理解をしたようだった。震えながらも、何とかして立ち上がる。

「それも、食ってたつていうのか？ 核を…」

「貴方達人間が作ったものです」

ウーラシールは鼻歌混じりに闇を動かした。それらはノミやオーンスタインの攻撃を避けていく。目標に向けて走っていく。

「少々、危ない所でした。何十回目かの、半減期が迫っていましたから。貴方達に害をぎりぎり及ぼさないほどまで弱ったら、意味がないでしょう？」

自身は今放射能にさらされているのだと、確信した。火守女やヨルシカ達は平気そうだ。彼女達は、やはりどこか人間とは違っているらしい。細胞を破壊する不可視の毒が、聞いていないのだから。

闇の刃にむけて、シラは武器を動かした。だが、狙いは彼女にない。例えかわしたとしても、闇は彼女を殺すことはしなかった。さらに後ろにいる女性を、狙っていた。

ノミがつかもうとするが、ぎりぎり届かない。

刃はしっかりと、フィリアノールの頭を貫通していた。シラが叫び声を上げる。制止も聞かずに飛び出していき、マヌスの反撃に遭った。

「申し訳、ありません…」

光の境界が、狭まっていく。倒れた彼女は虫の息だった。下田が即座に奇跡を飛ばそうとするが、その光はあっけなく消えてしまう。明らかに、今の彼は術を行使できる状態ではなかった。

「では、存分に」

ウーラシールが歩いてくる。攻撃しようとした火守女がオーンスティンによって拾われる。彼女への攻撃を、貴樹は何とか止めた。だが、次にやってくるマヌスの手には対応できない。

耐久値が、一気に削られる。もうわずかしか残っていないかった。何か小さな針に刺されただけで、最後の残り火が失われる。

発砲音が、いくつも鳴り響いた。

ウーラシールは耳を吹き飛ばされた後、残りの弾丸を魔術で防ぐ。建物間から出てきた由海達が、こちらへ向かって必死の形相で言った。

「今のうちにー」

彼女達も余裕はない。貴樹と下田ほどではないとはいえ、多量の放射能に晒されている。ジアンナと幸成も胸を抑えていた。口の端から、血がこぼれている。

最後にアリーが、拳銃を使った。放たれた弾丸は、マヌスによって呆気なくはたき落とされる。

だが、代わりにやって来た光線が、その手を破壊した。

貴樹は、声を張り上げる。言葉にはなっていないかった。ただ気合を形にして出していた。芯の定まらない体を前へと推し進めながら、胸から上がってくる血を吐き出しながら、拳を振りかぶる。

ウーラシールはまだ余裕を保っていたが、直後に顔をしかめた。

彼女の腹から、螺旋状の剣が突き出ている。その刃はすぐに炎を放出し始めた。

「中から攻めれば、どうかしら？」

ミレーヌは咳き込みながら、さらに武器を押しした。それから離れて、代わりに突っ込んでいくシフとすれ違う。

大狼は、マヌスの顔に噛みついていて。抵抗はされる。その身に大

量の闇を受けながら、獣らしく唸っていた。マヌスのもう片方の角に、牙が食い込んでいく。狼の体から大量に血が出て、それは止まらなかった。

暴れ出そうとするマヌスに向かって、ノミとオーンスタインが突っ込む。彼らは闇にむしばまれながらも、怪物の持つ杖を手ごと破壊した。

ウーラシールには、傷一つない。だが、わかる。彼女の存在が、確かに揺らめいていた。貴樹にも視認することができる。彼女は、マヌスに完全に依存しているのだ。そのつながりによって力も行使できるが、自分だけでは存在を保つことができない。だから、滅ぼすのはマヌスの方だけがいい。それで、終わらせられる。

下田が、動き出そうとするウーラシールの体を雷で吹き飛ばした。貴樹にはつきりと目配せをしてくる。

その動きは気持ち悪いと思ったが、止まることなく走り続けた。吠えるマヌスの顔に向かって、拳をぶつける。一度だけでは済まなかった。相手の体が倒れ込んでも、続けた。連打をした。覗く赤い目を潰し、口の中の牙を折り、蠢く闇を炎で消し飛ばしていきながら、最後に頭を粉碎した。

ウーラシールは、噛み切り声を上げる。もはや女の顔を成していない。ただ口の部分だけがほとんどを占める醜い顔を揺らしながら、走り出した。その進行を、よろめいている下田には止められない。

彼女の企みは明らかだった。その向かう先には、ちとせ達がいる。彼女達を食らおうと、さらに大きく叫んでいた。

その口の中に、槍が投げられる。それほど速くはない投擲だった。普段の彼女であったなら、余裕をもって避けられたはずだった。

だが結局、刺さったものに対応しようと、高坂の前でもがき始める。彼もまた胸を抑えながら、歯を食いしばっていた。下田に向けて、一心に視線を向けていた。

「やれー」

貴樹が足を上げる。

下田は、符呪された槍の把管を絞った。

ウーラシールと、マヌスにそれぞれ到達する。

だが、足りていなかった。マヌスはまだ元気が残っている。ぎりぎりで貴樹の蹴りを避け、闇の刃を彼の喉に向けてきた。

対する貴樹の方は、動けない。再び倒れようとしている。

当たる直前で、マヌスが停止した。少し顔を下に向けたかと思えば、苦し気に震え始める。

怪物の体から、炎が吹き上がった。それは一瞬、老人の姿を形作る。『責任は取ろう。不甲斐ない王を許してくれ』

グウインの炎によって、マヌスは縛られ続ける。

もう少し足掻いた後、火守女による光線が届いて、相手の体のほとんどが弾け飛んだ。



ほとんどが、満身創痍だった。

支えようとちとせが走ってくるが、制止する。もう意味はないかもしれないが、あまり近づかない方がいい。

下田はヨルシカとユリアに支えられて、前へと進んでいた。

その先には、ノミへ礼をし終わったオーンスタインがいる。槍を地面に置くと、静かにその場に座り込んだ。

前に来ると、別の方へ目を向ける。

既に、フィリアノールは息絶えていた。彼女の顔は次第に萎れていつている。それは呪いというより、ただ元に戻っているという感じがした。時間の揺り返し、それがおそらく、目の前の黄金騎士にも作用している。

オーンスタインは兜を外した。出てくる顔は変化の途中であつても、勇壮な印象を失っていない。そこから覗く瞳は、真つすぐ下田を捉えていた。

「槍の…」

「何ですか?」

「その槍は、何という?」

かざしてみせる。

「管槍といます。ここの管を使えば、素早く刺突ができます」

「そうか」

最後にヨルシカを一瞥してから、彼は目をつぶった。全身の力が抜けていくのがわかったが、それでも後ろへ倒れていくことはない。

下田はその顔が干からびていくのを、ちゃんと見ていた。見るべきだと思っていた。彼の同胞も、主もない。ならば、共に戦った自分が見届けるのが道理だ。

手も段々と開いていき、握られていた十字槍が傾いていく。下田はしっかりとそれを掴んで、オーンスタインの横に突き立てた。

立ち上がって、寝ているノミに近づく。

「あまり動くな」

こちらを気遣うように言ってきているが、よっぽどノミの方が酷い状態だった。もう立ち上がれないらしい。下田も、彼も悟つてはいない。

画家の少女は全力を出している。できる限りの速度で描いている。だが、間に合わないようだった。

「おい。タカキも」

下田としては、貴樹が当たり前のように歩いてきていることが異常に感じた。無論彼の顔は吐き出された血にまみれて、見れたものではない。彼は、画家の少女にダークソウルを渡していた。マヌスの体内

から取り出したものだ。

それは、この暗い空間の中では見えなくなってしまうほど黒い魂だった。貴樹はそれを得るためにさらなる汚染に晒されたはずだが、表面上は何とか平常を保っている。まともにノミを身下ろすことができている。

「まあこんなもんだ。満足してる。未来はつながった」

「そんな御託を並べるために、時間を割くのか？」

貴樹がつまらなそうに言うと、ノミは笑った。

「肩に、触れてくれ。知りたかったことを教えてやる」

下田もまた、その指示に従った。触れると、プリシラの姿が見えるようになる。彼女はずつと、ノミの顔を眺めていた。

それに笑いかけてから、ノミは言ってくる。

「おれ、の、名前は」

「ああ」

「はい」

確かに聞こえた。貴樹も理解をしたようだった。ちゃんと認識できている。

だが、貴樹は鼻で笑った。

「なんだそれ。やっぱうつすいな。ノミの方がましだ」

それを聞いて、少しだけノミは大きく目を開いた。そして、くくともるように息を吐き出していく。かなり楽しそうだった。

「そう、だな。その通りだ。良い名前を、付けてくれて、ありがとうよ。

……じゃあな、相棒。楽しかったぜ」

「下僕の間違いだろ。さっさと死ね」

結局湿っぽい顔は何一つとして見せることはなく、ノミは目をつぶった。プリシラが、下田の方に移ってくる。しがみついてくる。下田もまた、目を閉じた。彼女から伝わってくる悲しみを和らげようと、その肩を撫で続けた。

間もなくして、画家の少女がキャンパスから手を離れた。光が小さくなつていく世界の中で、ゆつくりと貴樹達の方へと歩いてくる。闇の中で、白髪がわずかな明かりを受けて輝いていた。

「完成したよ。あとは、入るだけ」

「もう、いいの?」

「うん」

最初に動いたのはミレーヌだった。生死をさまよっているホークウッドを引きずりながら、絵の中に入っていく。早足だった。当然だ。地球に行ければ状態は元に戻るが、今は一刻の猶予も許されない。

続いて、由海達が入っていく。彼女達の中に犠牲が出なかったのは幸いだった。相手を考えれば、奇跡的だ。

下田は立ち上がる。よろめいたが、また支えてくれる者達がいた。ちとせは彼の手を握り、優しく引っ張っていく。彼女の歩みもまた不確かだった。被ばくしている下田の近くにいれば、無事では済まない。

実織と高坂も、無言でそばに付いていた。彼らも、汚染のことは何一つ気にしていないと言った様子だった。ただ下田を讃えるように、時折見てくる。

ユリアとリリアーネが、彼の後ろを静かに付いていった。彼女達を見てから、下田はキャンパスに触れる。

飲み込まれるような心地がして、気が付けば宇宙のような空間に出ていた。

憶えのある場所だ。

戸惑うちとせ達を安心させながら、徐々に下へと向かった。

再び、キャンパスが立っている。だが先ほどのものよりも大きい。画家の少女は、その白地に手を触れる。託された、暗い魂を入れていく。

「地球を、描く。もう少しだから、皆、頑張って」

下田は力を振り絞って近寄った。おそらく、ヨルシカから血を分け与えられていなければ、とっくに死んでいる。竜の血は、放射能の影響も多少は小さくしてくれるようだ。だが、他のちとせ達は違う。急がなければならなかった。

「待てよ」

氷のような声が、ぽつりとこぼされた。

振り向くと、貴樹は見たことのない顔をしている。恐怖とも言えるし、強烈な怒りの感情を含んでいる表情だとも感じた。

「ひもりんは、どこだ？」

画家の少女が、ゆつくりと瞬きをしたのがわかった。下田も確認をする。確かに、彼女の姿はなかった。ここへ来る前、篝火の広場にはいたはずだ。少女の話も聞いていた。遅れることは、ありえないはずだ。

「おい」

貴樹が一步前に出ると、少女は顔を上げる。

「落ち着いて、聞いて」

「そうじゃねえよ。戻れ。何してんだ？」

「これは、貴方のせいでも、彼女のせいでもない。仕方がなかった。マヌスを倒すためには、きつと、必要だったから」

「殺されたいのか？ 戻せ」

「火守女は、来られない」

彼は息を呑んだようだった。表情の全てが消え去り、苦し気な呼吸音だけが響いている。

下田はさりげなく詠唱の準備をした。反射的にそうして、なぜこんなことにならなければならぬのか、虚しい心地がした。

「は？」

「さつき天使の力を使ったことで、彼女のソウルと器が完全に逸脱した。私と、プリシラの力が及ばない領域まで、上がってしまった。だから、はじかれるの。絵画世界を渡れない。こちら側がどんなに寄っても、彼女が望んでも、無理なの」

貴樹は片腕をかすめさせた。

少女の喉元に向かうはずだったそれは、下田によって掴まれる。

「先生、落ち着いてください」

頬に、拳がめり込んでいくのが分かった。まともに反応できず、殴られる。何とか奇跡を行使できたが、次は分からなかった。既に頭の痛みは大きくなってきていて、術にまるで集中できない。

「もう一度、よく考えてみて」

拳を向けられても、少女は怯んでいなかった。

「このまま戻って彼女に会ったとしても、変わらない。貴方も、限界なの。火守女は私に黙っておくように言ってた。絶対にこうなるからって。彼女の思いも、汲んであげて」

「まだあったわけか」

貴樹は首を回して、骨を鳴らした。

全員を、見据えてくる。

「まだ処理しきれしていないクソ共が残ってたな。裏ボス戦ってわけだ」

「先生……」

貴樹の戦意は膨れ上がっていた。それはマヌス達に対するものとはぼ変わっていない。彼は、深淵の化物と、同じ地球の人間たちを同列に捉えていた。初めから、そういう男だった。

「抵抗してもいいぜ。どっちにしろ皆殺しだ。なんで彼女が残されたまま、お前らみたいなのが幸せになるんだ？ ふざけんなよ。誰も行かせねえぞ。俺を戻す気になるまで、死ぬ」

地面を蹴った直後、その姿は消えていた。

目に見えないほどの速度で迫ってくるのかと身構えたが、何もやってこない。

そして、プリシラが困った顔で出現した。

「いいの？」

少女が尋ねると、プリシラは頷いた。どうやら彼女の方は別の考えを持っていたようだ。貴樹を、彼が大切に思っている女性の所へ戻したらしい。

下田は少しだけ気が抜けた。不思議と、悲しみはなかった。実際はわからない。後から、色々とこみあげてくるかもしれない。確かなのは、貴樹はこっちの展開の方が納得するだろうということだ。その精神に少しだけ寄り添う。彼はあのまま地球に戻ったとしても、ろくなことにはならないかもしれない。自分こそが正常と考えて、周りを異常だと蔑みを持ち続ける。

それなら、別の道を選んだ方が、彼にとっては幸せなのかもしれない。

あまり考え続ける時間はなく、すぐに制作に取り掛かった。全員が協力して、描いていく。

それぞれが帰りたい場所、会いたい人を思い浮かべながら、記憶をたどっていく。前にやった時よりも取り掛かる人数が多いので、あつという間に進んでいった。焦りもあつたかもしれない。下田は意識をほとんど保てなくなってきた。一度眠ってしまったら、二度と目が覚めないのはわかりきっている。

何とかぎりぎりまで、完成させることができた。

「じゃあ…」

既に察してはいた。

下田は振り返り、健気に笑顔を作ろうとしているプリシラを見た。

「そうなんだ？」

「…うん」

「どうして？」

彼女は瞬きをする。涙がこぼれる。

「あの方のそばにいないと。もう、これでいいの」

「僕は、寂しいけどな」

「お母さんも、そう」

プリシラは頭を撫でてくる。

「だけど、私みたいな存在は、これ以上そっちに関わらない方がいい。十分よ。ヨルシカと、仲良くね」

「うん。そっか。そろそろ親離れしないとね」

「私も、子離れしないと。…愛してる、ずっと」

「僕も」

今度は、下田の方は泣かなかった。プリシラの笑顔に同じものを返して、離れる。

隣に立つヨルシカは、静かにプリシラを見ていた。それに対して頷いてから、プリシラは飛んでいく。どこへ戻るのかはわかりきっていた。その姿が完全に消えていくまで、目を離さなかった。そして握っ

てくるヨルシカの手も、ずっとそのままにしていた。

「行こう」

少女が、最後に言う。

「側にいたい人と、離れずに。何が起こるのかわからない。覚悟だけはしておいて。全員の記憶が、維持されるとは限らない。お互いを信じて」

「ほら、」

下田が言うと、少女はきよとんとした。

「君も。一緒にいてほしい。触れてくれ」

ミレーヌは固くホークウッドを抱きしめる。

由海達は、お互いの体にしがみついていた。

最後に画家の少女は微笑んでから、下田の足にくっついた。もう、彼の体にはそこしか掴まる部分が残されていないなかった。

多少窮屈な思いをしながら、絵へと進んでいく。

地球の青い絵が、近くなってくる。

触れると、どこまでも落ちていく感覚がした。

それでもそばにいる存在達は離れなかった。

視界が、白く染まっていく。



どうして、と半ば怒るように言ってきたので、同じくらい大きく、勢

いのある声で返した。

「一目惚れだあああああああああ！ げほげほげほっ」

貴樹の叫びに気圧された火守女は、一步下がった。そして篝火の側に膝をつく。

彼女の翼は、消えていなかった。どうやら、画家の少女の言っていたことは事実だったらしい。今も移植された彼女の瞳が疼いている。だから意志を強くもって、彼女の肩に掴まった。

今の彼女も、なかなか綺麗だと思った。輝く翼は、その神秘性をより高めているようだ。だが、結局貴樹にとって一番は、やはり彼女自身だった。特にその顔は、一生写真に収めて保管しておきたいくらいそそのものだった。

二人で、篝火の前に座る。その途中で彼は、火守女の目を拭った。そのまま涙を舐めとりたかったが、指を顔の前まで持つてくる気力があまりわかなかった。

「君の悪い癖だよ」

「タカキ様、タカキ様…」

篝火に照らされた顔は、鮮やかに染められている。火守女は悲しいのか嬉しいのかよくわからない表情をして、彼の体を横にさせた。

「自分の価値を理解してない。もう、俺に隠し事なんてしないでくれ」
「はい…、わかりました」

小さく息を吐き出しながら、何度か頬にキスをしてきた。今の状態だと、興奮は抑えられる。満たされるような思いがどんどん大きくなっていった。

空は、もう何も見えない。暗闇で覆われ尽くしている。それは、下も同じだった。

篝火は弱まっている。それは確かだ。だが、十分だった。火守女の顔を認識することができれば、それでいい。

彼女の膝に頭を乗せていると、今だけは胸の痛みを忘れることができた。既に体は限界に近いはずだが、いくらでも笑えるような気がする。

「ひもりんはさ」

「はい」

「幸せだと思う？ 思えてる？」

「……貴方との、全ての時間が幸せでした。永遠に忘れません。ずっと憶えています」

「そっかあ」

返事は、最高だった。

つまり、この世界に来てからの目標は、達成されたことになる。

朦朧とした意識の中で、今まで味わったことがないほどの多幸感が溢れていた。

「君が幸せなら、俺もそうだよ。嬉しいな」

「そう、ですね」

彼女の声はかすれていた。ぽたぽたと、頬に雫が落ちてくる。

手が、篝火にかざされた。

「最後の火が、消えていきます」

「…」

炎の一部が、掌に宿った。一瞬だけ、光が強くなる。

「すぐに暗闇が訪れるでしょう」

貴樹は目をつぶる。

穏やかな沈黙を楽しむ。

これからすることを思い浮かべていた。まずは、車に乗ってどこかに行く。彼女に紹介できる場所、美味しい食べ物がたくさんある。かつては、そう感じていなかった。だが、火守女と一緒にならばきっと、存分に楽しむことができるだろう。

暗闇が、覆っていく。だが、瞼の裏ではまだわずかな光が残っていた。おそらく、終わりではないのだ。遠い先、おそらく何千年も先の未来になるだろうが、きっと火は紡がれていく。また、新たな時代が幕を開ける。

火守女が、頬を撫でてきた。顔を下ろし、その銀髪がかぶさってくる。かかってくる吐息は、小刻みに震えていた。

光が完全に失われても、彼女の存在はずっと感じていられた。

「タカキ様、まだ私の声が、聞こえていらつしやいますか？」

終。火守女と高校教師

両足が激痛に包まれて。

そこから、空白が続いていた。

ホークウツドは目を覚ます。手を動かしてみた。まだ、満足につながっている。おかしな話だった。アルトリウスは容赦がなかった、既に四肢は失っているとはかり。

目に、痛みを感じた。

視界に光がはじけている。

何度か瞼を開け閉めして、徐々に周りが明瞭になっていった。

思わず、声を漏らした。

舌が、何度も頬を滑ってきたからだ。同時に荒い息と、少しだけ獣くさい臭い。ホークウツドは困惑した。完全に頭がこんがらがった。だから、ミレーヌがどんな乱心をしてこんなことをしてきているのかと、まともではない思考をした。

「やめなさい。行くよ」

若い女性の声がして、身を起こす。

尻尾をぶんぶん振りながら、獣は呼びかけてきた飼い主についていった。狼と似ているが、どこか違う。随分と、雰囲気柔らかくなっている気がする。毛の色も肌色に近く、あのシフの血統からずれている感じがした。

それにもっとおかしなのは主らしき人間だった。今まで見たことがない服装をしている。派手な色で、ふわふわと柔らかそうな生地をつかっているようだ。フードが後ろについているが、一体どこに刃を防ぐ要素があるのか、謎だった。

若い女は耳から妙な管を伸ばし、手元にある小さな箱をいじっていた。まだ立ち上がれずにいるホークウツドを胡乱そうに見た後、早足で去っていく。狼もどきもまた、その後についていった。未だ尻尾を勢い良く振りながら。

立ち上がると、どこかの広場のようだった。それなりの数の者達が歩いている。そのいくつかは、ホークウツドに注意を向けていた。懐

からさっきの女が持っていたような箱を取りだし、裏面を向けてくる。

「すげえ。コスプレじゃん。撮影いいですか」

そして、眩しい。

ホークウッドは無視して、歩き始めた。腕を目の前にかざしながら、直感に従って歩いていく。何が起こったのかはわからないが、とにかく太陽の光が完全に戻っていることだけは確認できた。というより、さらに増大している。元の世界よりも。

自らの状況を呑み込む前に、強烈な衝動が体を進めていた。どうだろうと関係がない。自分にとってはまだ一つだけで十分だった。彼女の姿を確認するだけでよかった。

よくわからないまま、知らない街を少し歩いた。なぜか、方向は決まっている。何かが導いてくれていたようだった。ホークウッドには確信があった。

黒い柵が、横に広がる。

どこかの広い敷地に近づいたことだけはわかった。荘厳ではないが、それでも大きな建物だ。清潔感もある。窓から、子供の集団が席に座って何かをしているのが見えた。ホークウッドは胸騒ぎが大きくなっていくのを感じる。

正面の門にたどり着くと、同時に奥の入り口の扉が乱暴に開かれた。

飛び出してきた少女は、掴もうとしてくる腕を巧みにすり抜ける。その歳からでは考えられないほど洗練された身のこなしだった。明らかに戦闘の訓練を積んでいる。痺れるような頭で、そんな観察をした。

まだ叫んでいる太めの女性が制止するが、金髪の少女は止まらなかった。ホークウッドを目にすると、さらに走る速度を上げた。転びそうになってもうまく踏みとどまり、ほとんど速度を下げることなく門に到着する。

乱暴に蹴って開くと、固まっているホークウッドに抱き着いた。

「ホーク…」

十歳くらいの子供だ。だが、わかる。その姿は出会いの時と一致している。肩を軽く超える長さの金髪が風に吹かれて頬にかかる。

「ミレーヌ」

彼女は顔を真っ赤にしながら、声を上げて泣いていた。だがそれは悲しみから来るものではない。ホークウッドも、同じ感情に支配され、同じ表情を浮かべた。より彼女を固く抱きしめる。

「ずっと一緒だよ。これからも」

「ああ、離さない」

木の棒か何かで、叩かれる。

慌てて彼女を下ろすと、追いかけてきていた女性が非常に憤慨している様子でまたあの箱を取り出した。もう片方の手は、心配するようにミレーヌを抱きとめている。

ミレーヌははつとして、その女性に言った。

「違う！ この人は、そういうのじゃない。警察はやめて！ 呼ばないで！」



「でさあ、俺は言ったわけ。金かけた方が、気持ちがかもる。だから、割れはしない。サイトは知ってるけど、一度もそれでいたしたことはないぜ。知ってるけど」

息が、詰まった。

肌に、懐かしいような新鮮のような感触が吸い付いてくる。少し固い襟の部分。ワイシャツが少しきついと感じたのは、初めてだった。

心地いい騒がしさが、鼓膜を揺らす。心まで揺り動かしてくるようだった。

「は？ おいおい」

隣に座る草野は、ぎよつとした。

「そ、そんなに感動することか？ 俺、格好いい？」

「うん」

下田は適当に答えながら、鼻頭を抑えた。涙を止めることもできなかったが、あえてそのままにした。相手を、抱きしめる気が起きかけたが、やめた。草野だからだ。

「そつか…。じゃあ今度、イチオシの店に連れてってやる。並べ方がいいんだよ」

「また、エロ本の話してんの？」

下田が立ち上がったと同時に、一人の女子生徒が草野の背中をこづいた。茶髪のが少し丸まっている。それを少し揺らして、彼の方を怪訝そうに見てきた。

「下田、どうして泣いてんの？ うける。草野が汚い話してたからでしょ」

「はあ、お前な。いいか高原、こいつはそこまで純情ってわけじゃないぞ。この前だって…」

「知らねえよ。いいからどけ」

「あ、もう半かよ」

草野が離れていく。

席に座ったちとせは、少ししてからこちらを向いてきた。

「なに？」

「いや…」

「そ」

たいして興味もなさそうに自分の鞆に手を突っ込んでいく。そして適当に教科書を取り出していった。下田としては、これ以上情報量を多くされるとパンクしてしまいそうだった。おぼろげな頭で、そういえば自分は日本史が好きだったと思い出す。本当に久しぶりに、そんなことを考えていた。

画家の少女が、言っていたことだ。

下田は前を向き、座ろうとする。

何もかもが正常に戻ってくれるわけではない。地球を作り直すというのは、それだけ難しいことなのだ。だから、どこか失敗してしまいう可能性も十分にあった。全員の記憶が、無事に移動できなかったことも十分あり得た。

最後にちとせを一瞥して、息を吐き出した。

これでいい。

たとえ今までのことを忘れていても、ちとせはちとせだ。彼女もまた、ここに戻ってこられた。それだけで、満足できる。彼女は報われた。下田の願いは、その幸せだ。何も、自分がそれを叶える必要はなかったのだ。

そう言い聞かせて、足の力を抜く。

「アキー！」

好きだった自分の愛称を呼ばれて、直後には重みを感じていた。彼女の体の重み。もう離れることはできない存在の証。

ちとせは顔を大きく歪めながら、既に頬を濡らしていた。

「私、目の前が白くなって……。戻れたの？　ここは、ほんもの？」

下田は抱き着いてくる彼女の首に、手を回した。

怖がらせるなよ、と誰かに文句を言う。時間差があるなんて、聞いてなかった。

「うん。そうだよ。戻ってきたんだ」

既に大体の生徒が席に着き、ホームルームが始まる前の落ち着いた空気になりつつあった。だが、ちとせの行動でかき乱される。少しの静寂があった後、ざわつきが大きくなった。

少し離れた席にいた芳野が、呆気に取られた顔で言う。

「え、ちよつと待って。何してんのあんたら。まさかそういう……きやあああああああああああ！　うっそお」

それは悲鳴というより、嬌声に近かった。

下田も驚いたが、すぐに受け入れていた。数秒二人は唇を合わせた後、もつと密着する。大勢の目にさらされていることは確かだが、そ

れでもこの感動は少しも色あせなかった。

女子達がきやあきやあ騒ぎ始める。中には、スマホで撮影している者もいた。後で上手く回収しなければならないと、ちとせの香りを楽しみながら思った。

「はあああ？　なんですよけどおおおお！　夢かこれは。そうだな、二度寝しよ」

草野のうるさい声でさえ、気にならない。むしろもっと騒いでほしいと思った。それだけ、実感できるから。自分達が成し遂げたのだと、理解できるから。

「下田！」

さらに叫びが上がったかと思えば、高坂が飛びついてきていた。同じく実織も椅子を倒しながら、加わってくる。

二人も同じように泣いていた。それ以上に喜びを爆発させていた。「はあ？　ちよつと二人とも。アキはあたしが独占中なの」

「いいじゃねえか。分かち合おうぜ」
「よかった。ほんとによかった…」

四人で抱き合っていると、いよいよ周りは理解ができなくなってきたようだ。突然今まであまり接点がなかったクラスメイト同士が泣きながらくっついていけば、普通は異常だと思うだろう。少し前まで興奮していた女子達も、不可解な様子で観察をしていた。

高坂は下田と手を打ち合わせた後、我慢できないという様子で別の方向に向かった。

「朱音、ちくしょう、やべえ、本物だ…」

「あ？」

久慈は向かってくる高坂の体を器用にかわして、その腰に蹴りを入れた。攻撃を受けても、高坂はものすごく喜んでる。勢い余って壁に当たり、そのまま地面を転がり回った。

「ああああ、好きだ…」

「きもつ。何なお前。次やったら玉の方を潰すからね」

そうは言ったものの、ちとせの接近に対しては何もしなかった。彼女が抱き着くと、久慈は戸惑いながらもその背中をぽんぽんと叩く。

「あかね、あかね…」

「ど、どうしたん？　なんか今日、おかしいね」

「めぐみ〜！」

ちとせが芳野の方に向かったと同時に、実織もまた親友に飛びついてた。

「ごめんね、ずっと…」

「どうしたの？　ま、まあ、いいけど。えへへ」

新宮はでれでれと顔を緩めている。

クラスの中で起きている珍事を、国広は何とか冷静に受け止めようとしている。だが下田と目が合うと、観念したように肩をすくめた。どうなってるの、と口の動きだけで伝えてくる。それに答えようとしたところで、上のスピーカーから音が鳴った。

「わあ、すげえ、チャイムだぜ！　これだよこれ」

高坂が飛び起きて、下田の肩を叩いてきた。あまり興奮しすぎるとクラス内で変な噂を立てられるかもしれない。だが、彼の喜びには下田も大きく賛同していた。肩を組んで、もはや懐かしい音色を味わう。

前の方のドアが、勢い良く開けられた。

「おーい、何してるんだ？　職員室からも聞こえてきたぞ」

下田達は一気に黙り込んだ。

ようやく望みを叶えて興奮しきっているはずの四人は、一斉に入ってくる男を見る。

芳野が、困ったように言った。

「先生、変なんですこの人達。急に騒ぎ出して。ちとせは下田にキスするし」

「それは…、びっくりだな。とりあえず席に着いてくれ。まずは教頭からクラスの騒ぎで怒られた話でもするか？」

貴樹は人の良い笑みを浮かべた後、俯いた。

ばっちりと、目を開ける。

「よし！ 完璧だ」

すぐに顔を上げると、何かにぶつかる。瞬間、そばにいる女性の体がびくりと跳ね上がったのがわかった。

貴樹は痛みなど感じない、だが、額がぶつかってしまった相手は違うだろう。

「あ、大丈夫？」

「…あの、ええと」

手から、炎をこぼす。そして火守女の顔を照らした。彼女は目を一杯に開き、口も同じくらいぽかんと開けていた。

可愛い。舐めたい。強烈に思う。

「期待通りだよ。げほっ。ばっちり。俺感動しちゃった」

「タカキ様？」

「大丈夫大丈夫。さっさと済ませよう」

まだ何もわからない様子の彼女を、ゆっくりと倒していく。その顔を両側に手をつけて、貴樹は息を乱し始めた。

「結局、あれだな。あいつはガキだったってことだ」

「どういう、ことなんですか？」

「簡単な話さ」

興奮が、かなり高まってくる。本来なら失神しているかもしれない。これからすることを想像するだけで、今までは危なかった。だが

今は、体調が最悪の状態だ。この苦痛のおかげで、少しは抑えることができる。意識を保てる。

「君は天使だ」

「はい。…はい？」

「つまり、そうでなくしてしまえば、一緒に帰れるね」

「あの、」

「こういう、話があるんだけど」

貴樹は服を脱ごうと手を動かす。だが、そもそも元から何も身につけていないことに気が付いた。さすがは自分だと、恍惚な気分になる。どこまでも準備が良かった。最高だ。

「ソウルは、普通簡単に移動できない。ましてや、お互いに影響を及ぼすほどの交換なんて、難しい。だけど例外がある。ちゃんと合意があつた場合に限るけどね。ただ操作をして移すよりもよっぽど効果がある、本能に沿っている行為。つまり、えっちだね」

既に脳は溶けているが、真面目に考えた上での結論だった。貴樹のソウルを火守女に染み込ませる。そうすれば彼女の隔絶した天使という格に不純物ができることになる。彼女の器とソウルを変化させるほどの交わりがあれば、絵画に拒絶されることもなくなるだろう。

火守女は少し遅れて理解したようだった。赤くなつた目を何度もぱちぱちさせながら、ずりずりと後ろに下がろうとする。

「安心して。戻る道も確保してある。そうだよな？ プリシラ」
『…』

下田と別れたらしい彼女は、ノミの体に寄り添いながら呆れていた。だが、すぐに苦笑して、頷く。役に立つ道具だと、貴樹は認めた。多少見られていても、仕方ないと思うこともできるだろう。

「待ってください」

「やだ。俺もう死ぬし。急がないと。それに、約束したよね。全部終わったら、君を抱くって。一緒に頑張ろう」

「その、ここで行うのですか？ もう少し、場所を考えた方が…」

最後まで言わせなかった。目を爛々と輝かせながら、血もついでに吐きながら、貴樹は火守女の体に覆いかぶさった。

額に固いものがぶつかる。

急におっぱいが固くなったと、でろでろになった頭で考えた。

両手に力を込めると、台のようなものがあるとだけはわかった。自分の股間がここまで肥大したのかと、最低な思考をした。

だが、すぐによろける。そこでようやく、自分が立っていることに気がついた。急な姿勢の変化にバランスが崩れて、倒れていく。

「先生ー」

外野がうるせえなと思いながら、駆け寄ってくる誰かに掴まる。少し触っただけで、女性の体だとわかった。

(ひもりん！)

きつく抱きしめる。耳元で大きな呼吸音がして、周りのぎわつきが静かになっていった。

(…ん?)

何かがおかしいことに気が付く。体全体の感覚が変だ。何かで覆われているような。そしてようやく、自分が服を着ていることに気が付く。そして抱いている相手の肩の感じが、何やら求めていたものと違うことにも。

目を開けると、泣き顔が近くにあった。

「お兄ちゃん…」

「何だてめえ」

離すと、実織ははつとして涙をぬぐっていた。自分の行動を酷く恥じているようだった。

貴樹にとつては、悲劇に近かった。

(何だこの豚。は？ どういうこと？ まさか)

最悪の想像が、脳内を駆け巡る。嫌なオチだった。まさか今まで体験してきた素晴らしいものの数々は、夢だったのだろうか。教師の仕事をこなして寝不足になっていたせいで、クラスの者達の前でうたた寝をしていた。

だが、そんな想像もすぐに消えていった。なぜなら、感じたからだ。焦がれてやまない気配の残滓が、遠くから流れてくるのが分かった。その位置を正確に把握した貴樹は、すぐに走り出した。

(おいふざけんなああああああああ！ まだ途中だっただろうがああああああああああ！ プリシラの奴、条件を満たしたらすぐにやりやがったな。ゴミがアアアアアアアアアアアアアアアア！)

「ええ、先生？」

「待つてくださいい！」

「おい、タカセンもおかしいぞ…」

「ホームルームやんないの？ じゃあちとせ、ちよつと詳しく聞かせてもらおうからね」

「アキ！」

誰かが付いてきているような気もする。

だが、どうでもよかった。

階段を飛ぶように降りていきながら、玄関口へと向かう。途中ですれ違った教員らは驚いていたが、貴樹は彼ら全てのことを忘れていたので、もはや道端の生ゴミ程度の存在でしかなかった。

外に出ると、校門を見る。

そして、複数の者達が起き上がるのがわかった。どうやら上手いこと近くに指定されていたらしい。

きよろきよろと不安そうに周りを見ていた火守女は、走ってくる貴樹に気がついた。そしてすぐに駆け出していく。その体が近づいていくにつれて、先ほどまでの光景が一気に頭へと昇ってきた。

脳内麻薬が異常なほど分泌される。その量は、もはや今の正常な彼の精神で許容できる範囲を大幅に超えていた。

火守女の前で、貴樹は地面に転がる。既に、気を失っていた。幸せそうな顔で。

◆
妙に重苦しい空気が漂っていた。

「へえ、アフリカあたりに多いんだねえ。中東もいけるんだー。たくさんカネが必要だけど」

光陰矢の如し。

時間の流れは意外と早いものだ。

下田にとつても、あの世界でのことは今振り返ればあつという間にも思えた。期間としては、おそらく二か月にも満たない。

だが、一方で逆の考えもあった。短いと感ずるのは、あくまで表面的なものをさうだけの話だ。彼は今までで一番長い体験だったと確信していた。おそらくこれからの人生においても、更新されることはないだろう。あの繰り返しを含めれば、どんな長さも意味を持たなくなる。

墓石が並ぶ風景を横目に、下田は視線を何とかして無視していた。既に、戻ってきた時から数週間が経っている。初めは、かなりどた

ばたしていた。周りの環境の整理やら、勉強の勘を取り戻すやらで、今日まで行くことができていなかった。

母親の墓は、ちょうど霊園の真ん中あたりにあった。死亡の日付はおおよそ十七年前になっている。

当然の帰着だった。下田美紗は、もう死んでいる。育ててくれたプリシラも、どこにもいない。下田は、前よりも可哀そうな子供として扱われていたようだった。親戚の家に住まわせてもらってから、高校入学と同時に自分から一人暮らしを申し出ていたらしい。もちろんそんなことは彼にとって知ったことではなかった。だから最初は、勝手の違う生活に戸惑ってばかりだった。

「ユイノウキン？　ねえシモダ、これなに？」

下田のスマホを、リリアーネは見せてきた。当たり前のように他人のものを使っている彼女は、ちとせの刺すような視線も当然流せている。

「ちよつと、うるさい。周りの人の迷惑になるでしょ」

十分注目は浴びていた。ただでさえ人目を引く女性ばかりなのに、その中に下田が混ざっていれば尚更目立つ。バス内の一番奥の多人数席を何度も振り返ってくる人もいた。

「でもさ、チトセのためでもあるんだよ。だって、二ホンだと駄目らしいじゃない？」

「あのね、私がいつ認めたの？　別にこだわらなくたっていいでしょ」
「だが、大事なことだ」

ユリアが窓から手を離して、言い争いの中に入ってくる。彼女は手ごろなブランド物の英字シャツを身に着けていた。ちとせの所有物だ。そしてリリアーネも黒のパーカーのチャックをだらしなく開けながら下田の腕に寄りかかっている。ちとせの私服だ。

「ジュウコンは認められていない。法の中で縛られて生きるのは、全員にとって望むことではないだろう。だから、やりやすい環境の中に身を置くことが肝要だ」

「言うな！　あ、すみませくん。静かにしますから。…いい？　ユリアさんも。もっと常識をわきまえて」

だが、ちとせも段々と絆されてきているのはわかっていた。最初は彼女達の存在が近くにあるだけで微妙な顔をしていたが、今はもうほとんど諦めているようだ。段々とリリアーネ達に言いくるめられることが多くなってきた。

一昨日会った、ちとせの父親を思い出す。もしこんな事情が知られたら、殺されるだけでは済まない。今の所、相手にはあまり良い印象を持たれていないようだった。ちとせは親バカなだけだと気にもしていないが、実際はわからない。下田としても、もし娘ができたら自分のような男に託したいと思えるか、自信がなかった。

バスが、目的地の近くに到着する。降りた下田は時計を確認した。まだ、指定された時間になっていない。五分ほど早かった。

だが、既に他の者達は全員集合しているようだった。

高坂は最初元気に手を振っていたが、段々と苦虫をかみつぶすような顔になってきていた。

「なんかその絵面、むかつくな。漫画の主人公かよ」

「代わってもいいよ」

「いや、遠慮しとく。苦労しそうだから」

ヨルシカの鋭い視線を浴びて、高坂はすぐに退散していく。

「それで、誰が予約したんだっけ？」

「タカキじゃねえのか？」

ホークウツドが指差す。

肝心の本人は、まだ火守女と話をしていた。初めから、こちらへ顔すら向けていない。

いや、と下田は自身の間違いを訂正する。もう彼女は火守女ではない。オセロットという、名前を得ていた。付けたのは貴樹ではない。どうやら彼女の方から提案してきたらしい。生まれるはずだった口スリック王家の末子。そこから、取っているのだという。下田にはあまり女性らしくない名だという気がしていたが、貴樹達が納得しているのなら、何も口出しはしない方がいいと結論付けた。

「いや、絶対水色の方がいい」

「そうなんですか？」

「わかった。じゃあ今度店に直接行こう。一緒に。三時間くらいはこもれるはずだから」

「私は、正直よくわからないので…」

衣服の話をしているらしい彼は、ようやく注目されていることに気がついた。気取った仕草で時計を確認し、店の方へ体を向ける。

「六時ちようどだ。行こう」

本音を言えばどういいう思いで皆の前に立てているのかは不思議だったが、渋々感謝をしなければならぬ部分もあった。こうして関わった全員を集めるのに一番尽力したのが、貴樹だからだ。オセロツトのご機嫌取りが一番にあるのは分かっていたが、それでも全員にとっていい働きをしていた。

団体向けの居酒屋ということにはわかっていたが、中に入ってみると意外と洒落た内装をしている。洋風の飾りつけを丁寧にしていて、流れている音楽もスローテンポのものが多かった。

こういう選ぶセンスだけは良くてむかつく。そう思いながら、下田は先を歩く貴樹を眺めた。

一個の長いテーブルの周りに、全員がぐるりと腰かけた。

下田の隣には、ちとせとヨルシカが陣取る。そしてちようど正面には、画家の少女が座っていた。実は彼女にも名前が必要なのではないかと確信しているが、納得できるものを今まで思いつけていない。

「では、こうして再会を祝して…」

「なに仕切ろうとしてんの？」

実織は、貴樹がコップを上げようとするのを止める。

「んだよ」

「あんた、自分がそういうポジションだって思ってるの？　ぶぶ、だったらアホじゃん。なわけないっての」

彼女は口を押さえてから、下田の方を見てきた。舌打ちをした貴樹以外全員が、その資格は下田にあるのだと目線で伝えてきていた。

ちとせにも促された彼は、首筋をかきながらコップを上げた。

「じゃあ…、乾杯」

高坂がずっこけるような真似をしたあと、楽しそうに笑った。

一緒に苦難を乗り越えた絆というものがあるのなら、こうして会話できていることが目に見える証なのだろう。

アリーとイアンは、どちらがロンドンに構ってもらっているか、可愛らしく言い争っていた。たとえあの期間を共にした夫、父親でなくとも彼らの家族であることには変わりない。

由海と幸成も、下田達と同じ行動をしていたらしい。戻った瞬間、二人とも教室から出て、廊下で抱き合つて喜びを分かち合った。周りの生徒達から、たくさん質問攻めにあつたそうだ。そういう話を、ジアンナは黙つて聞いていた。幸成の肩に手を回しながら。

「駄目だ」

「いいじゃん。ホーク、おねがーい」

「可愛くおねだりをしてても駄目だ。恥ずかしくないのか」
「うるさいなあ」

一番日本へ来るのに苦労したのは、ホークウッドとミレーヌだろう。彼らは一時期それなりの苦労があつたらしい。確かに見た目だけ考えれば、不審がられても無理はない。イアンと同じくらいの少女と気難しそうな大人の男。ミレーヌの孤児院の許可を取るのが、一番難しかったとホークウッドは語っていた。

楽しそうなミレーヌは酒を渡そうとしない彼に抱き着いた。そして、短く顎へ接吻をする。

「これで、いいでしょ？ 私だって心は大人なんだから」

「お前、前にそれやって通報されかけたの忘れたのか？」

と言いながらも、彼はまんざらでもなさそうだった。

下田が思つてもあえて言っていなかったことを、隣のちとせがつぶやく。

「ロリコンだ…」

合法になるまで、彼らの前途に幸あれと願う。

こうして全員と会々と、ダークソウルの力は偉大だと感じる。

まず、言葉の壁が無くなっていることがありがたい。この者達の間だけだが、たとえ人種、母語が違っていても、スムーズに会話が出来る。かつてあの世界に住んでいた者達も、地球の人間達と意志疎通ができている。

もそもそと、足元で誰かが動いている。そして画家の少女は這い出てくると、下田の膝の上に座った。

「美味しい？」

「うん」

彼女の来ている服だけは、新しく買わなければならなかった。ちとせの、母親のお古も大きすぎて着れない。女の子用の服を選ぶのは、ちとせに大いに協力してもらった。多少、他人の目は気になったが。

「こんなに賑やかなの、初めて」

「そうだね」

「ありがとう」

「こつちこそ」

左右から意見のありそうな視線が向かってきていたが、今は彼女との時間を優先した。

三時間ほどお互いの近況を報告し合って、解散することになった。ミレーヌの帰国の期限が迫っていることも関係している。これから、定期的に皆で集まることになった。このつながりを大事にしているかと、下田も考えていた。

「もつと、深く啜えなさい」

もちろん、課題は残されている。

下田や貴樹のような、元から地球にいた人達は簡単だった。自分の体に戻るだけでよかった。築いている立場もある。順応するのに時間はかかったが、もうすっかり元の暮らしに馴染んでいた。

だが、ホークウッド達は違う。彼らは完全に今までいなかった存在

として、地球にたどり着いた。この世界で生きていくのに重要な、戸籍というものを所持していない。だから、ホークウッドの出国はすれすれというか、もはや法を通り越した手段で行わなければならなかった。

下田の移動の奇跡を使うしかなかったのだ。

地球に戻ってからも、術を扱うことができていた。それは、ヨルシカなども同じだ。

彼女は深く息を吐き出した。指についた噛み跡を下田に治してもらっている。そして落ち着くと、今度は下田の肩口に熱い視線を向けてきた。

「では…」

障害がたくさん出てくるのはわかっている。もしこの先彼女達が病気にかかったりしても、保険が適用されない。他にも、就職の問題もある。下田は、正直全員を自分だけで養っていけるとは思っていない。当然リリアーネ達も働く必要があると考えている。バイトをするのにしても、身分を証明するものが必要だった。

その問題に関しては貴樹が奔走している最中だ。どうやら姉の薫とも連絡を取り合って、裏のルートから戸籍を得る手段を探しているらしい。薫は急にできた貴樹の恋人の存在を大いに喜んでいて。あと数日以内にアメリカから会いに来るそうだ。

そして、他にも問題はあある。

「約束、しましたよね？」

ヨルシカは最後に首筋を舐めてから、下田の瞳をじっと見つめた。口の周りが少し赤くなっているが、彼女は気にしていないようだ。

「貴方が死ぬ時に、殺してください」

竜の血を引いていることで、彼女は寿命が長大になっていた。このまま年月を経ていけば、先に老いて死ぬのは下田の方だ。だが、それを彼女は良しとしていない。だから、そんなことを言うってくる。

「どうだろう」

「貴方がいなくなった後なんて、考えたくありません。きっと、恐ろしくつまらない」

「そうだね」

リリアーネが耳に甘く噛みついてくる。ユリアは、彼の頭に膝を貸していた。彼女達も、普通の人間ではない。これからもあまり年を取らずに生きていく。

「その時は、最高のものにしよう。私達も鍛錬を怠らないから。君も、弱くなったりしないよね」

客観的に見れば、狂っているのかもしれない。だが、きっかけは下田自身の行動だった。自分のせいだと、彼はちゃんと理解している。自分が、彼女達を決定的に変えてしまった。その責任は、最後まで忘れないつもりだ。

「あるいは」

ヨルシカは長い睫毛を揺らしながら、下田の唇を眺めていた。

「私の血をもっと、ソウルもさらに分け与えれば、貴方は私と同じになるかもしれません。永遠に近い生を得られる」

「いいですねえ。じゃあ、私と姉さんにもちゃんと分けてくださいよ」
「嫌です」

「えー」

扉が大きな音を立てて開かれる。画家の少女の買物に付き合っていたたちとせは、憤慨しながらベッドを蹴った。リリアーネが笑いながら、下田から離れる。

「ここ、私の部屋なんだけど!」

歪みは、残されている。

画家の少女は、警告をしていた。あり得ないはずの存在が複数地球にやって来たことで、秩序が乱れている可能性がある。この地球は、まだ作り直されたばかりだ。いつどこで、綻びがやってくるかわからない。

さらに、深淵の脅威もあつた。マヌス達は滅ぼされているが、他の闇の残滓はまだ生き残っている可能性がある。世界を飛び越えて、下田達の周りに姿を現すかもしれない。だから、訓練は必要だった。それに警戒も。

下田はちとせに頬をつねられながら、自分の使命を薄っすらと考え

ていた。もし将来そういう綻びができたなら、自分達が修正するべきだ。それが生き残った灰としての、義務なのだと心に決めた。

だがひとまずは、自分の周りにある問題を片づけなければならぬ。もしかすれば、それが一番の難題なのかもしれない。

ぐちぐちと文句を言われている下田を見て、画家の少女は微笑んだ。そして気を遣うようにして、ドアをゆっくりと閉めていった。



改めて、学んだことがあった。もしあの体験の数々がなければ、考えもしなかったこと。

欲望というのは、際限がない。一回満足した所で、また別の望みが出てくる。

貴樹は火守女改め、オセロットと手をつなぎながら家路についていた。今までは実家暮らしだったが、彼女との時間を大切にしたいのもあって、アパートに引っ越していた。

「皆様、元気そうでよかったです」

「そうだね」

彼女は何うようにして顔を傾けてくる。その目に疑いが確かに含まれていて、貴樹は大げさに息を詰まらせた。

「いや、ほんとだよ。再会でできて楽しかった」

「嘘はなしと、タカキ様から言ってきたではないですか」

「勘弁してくれ。君への愛情は本物だから」

あれ、おかしいぞと、彼は心の中で首をひねった。

最初の頃は初々しいものだったが、オセロツトは段々とこちらの心情を常に見透かしてくるようになっていた。完全に思考を把握されてしまっている。それを利用して何かを言い返してくることも多くなってきていた。それに対して負の感情は全くない。彼女が自分の意思をしつかりと持っているのは喜ばしいことだし、尻に敷かれてみるのも悪くなかった。

おそらく、いや確実に、彼女はもっと魅力的になっていくだろう。それこそ、人間の寿命、数十年単位では決して味わいきれないほど。(ふむ。この方向でやってみるか)

欲望が、膨らんでいく。

数百年、数千年でも足りない。そもそも、終わりがあるというのが我慢ならなかった。本当の意味で永遠に、彼女と過ごしていくためにはどうすればいいか。計画を立て始める。

まず、環境の改善が急務だ。住む場所などはどうでもいい。だが、周りの人間の皮を被った畜生達の存在が邪魔で仕方がなかった。その醜さでオセロツトの美しさが際立つのは結構な事だ。しかし、そもそも彼女と自分以外がいらぬのも事実だった。存在価値を、感じない。

永遠の蜜月。

二人きりの環境。あるいは、好きなキャラクターだけがいる世界。地球に戻ってきてから考えるにしては荒唐無稽だという思いもあったが、次第に思考を進めていくにつれて、現実味を帯びてきた。

まだ、細かい所はわからない。それでも手がかりがあるのは確かだ。まずは画家の少女。彼女の力はまだ残っている。世界を移すことも可能だ。

そしてそれは、この世界に異次元の存在を呼び込むこともできるという事。貴樹は小物くさい笑みをこっそりと浮かべた。

歴史を、再現する。もしかしたら、別の世界に、全く同じ存在がい

るかもしれない。別のグウィン達が、同じことを企んでいるかもしれない。上手くそれを手引きして、地球を侵略させる。ダークソウルの世界と、融合させる。

深淵も利用する価値があった。それらも呼び込めれば、よりスムーズに環境の整理が進んでいくだろう。王のソウル。ダークソウル。それらを取り込んで、寿命を消す。または、何度も同じことを繰り返して、永遠にオセロットと出会い、結ばれる循環に身を委ねてもいい。貴樹は非常にやりがいを感じていた。考えることがたくさんだ。常に全力で生きていかなければならない。あの世界にいた時と同じように。

横を歩いていたオセロットが、立ち止まった。そして、何やら含みのある様子で貴樹を見てくる。

「どうしたの?」

「お願いしても、いいですか?」

彼女の指がより強く絡まってくる。頭の芯が捻じれていくような心地がした。

「う、うん」

彼女はしっかりと目を合わせてくる。その瞳が、明らかに潤んでいた。頬の色も鮮やかになってきている。そしていけないことのように、ぼそぼそと言ってきた。

「帰ったら、また、してください。はしたないとは、わかっているのですが…」

それまで考えていた何もかもが、吹き飛んだ。